

鳥取県鳥取市青谷町

AO YA KAMI JI CHI

青谷上寺地遺跡18

第20次発掘調査報告書



2026

鳥取県立青谷かみじち史跡公園



1 第20次発掘調査区と青谷平野(西から)



2 調査完了状況(南東から)



1 平地建物群調査完了状況(北東から)



2 中心域張出部木製構造物出土状況(北西から)



1 SD38-Ca人骨出土状況(竹串部分、北東から)



2 SD38-Ca人骨出土状況(拡大範囲Ga、南東から)

卷頭図版 4



1 SD38-B高杯W75出土状況(北東から)



2 SD38-Ca椀・杯形容器W137出土状況
(北西から)



3 SD38-B出土木器W68



4 玉類

鳥取県鳥取市青谷町

AO YA KAMI JI CHI
青谷上寺地遺跡18

第20次発掘調査報告書

2026

鳥取県立青谷かみじち史跡公園

序

史跡青谷上寺地遺跡は、日本海に面した鳥取県青谷町に所在する、弥生時代を中心とする集落遺跡です。本遺跡は、かつて青谷平野に存在した潟湖を臨む「港湾集落」であり、良好な状態で保存された多種多様な出土遺物からは、高い技術を持つ工人集団の存在や、日本海を取り巻く列島内外の地域との活発な交流の姿が浮かび上がってきます。

鳥取県では、平成28年度から史跡等内容確認調査として、史跡公園整備に反映するために設定した調査課題に即して発掘調査を実施してきました。本報告書は、令和4・5年度に実施した第20次発掘調査の成果をまとめたものです。遺跡中心域東側縁辺部を対象したこの調査では、区画溝が設けられた弥生時代後期から平地建物群が営まれた古墳時代前期に至る集落様相の変遷を明らかにすることができました。また、平成12年度の発掘調査で出土し、当遺跡を一躍世に知らしめた、散乱する弥生人骨の延長部分を検出しました。今回の発掘調査で出土した人骨の研究成果は、人骨群の形成過程のみならず、弥生時代の習俗や社会の解明に寄与するものと考えています。青谷かみじち史跡公園は、これまで行われた発掘調査の成果を今後の研究や史跡整備に活かすとともに、引き続き青谷上寺地遺跡の実態解明に取り組んで参ります。

最後になりましたが、青谷上寺地遺跡の発掘調査につきましては、地元鳥取市青谷町のみなさまをはじめ、関係機関各位の多大なる御指導、御協力を賜りました。心から感謝申し上げますとともに、今後とも青谷上寺地遺跡の調査研究・整備・活用についてより一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和8年3月

鳥取県立青谷かみじち史跡公園 所長 西村 芳将

例 言

- 1 本書は、鳥取県鳥取市青谷町青谷に所在する、青谷上寺地遺跡の第20次発掘調査の調査報告書である。
- 2 青谷上寺地遺跡第20次発掘調査は、令和4年度から令和5年度にかけ、国庫補助金を受けて鳥取県地域づくり推進部文化財局とっとり弥生の王国推進課青谷かみじち史跡公園準備室が実施した。
- 3 青谷上寺地遺跡の調査研究等は、組織改正により令和6年3月1日から鳥取県立青谷かみじち史跡公園の所管となり、本書は同所により刊行した。
- 4 本書の執筆・編集は門脇 隆志（鳥取県立青谷かみじち史跡公園）が行った。遺物の実測・写真撮影、図面の浄書は鳥取県地域づくり推進部文化財局とっとり弥生の王国推進課青谷上寺地遺跡準備室、鳥取県立青谷かみじち史跡公園で行った。なお、第4章については下記の方々に御執筆いただいた。

第2節 佐野 雅規（国立歴史民俗博物館）、濱田 竜彦（鳥取県）

第6節 那須 浩郎（岡山理科大学）、寺井 洋平・大田 竜也（総合研究大学院大学）、濱田 竜彦

- 5 本発掘調査に係る層相解析、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、放射性炭素年代測定、種実同定、炭化米ブロックに係る自然科学分析は業者に委託して行った。これらの結果は、論旨に影響しない範囲で成果報告書の語句を改変したうえで、第4章に掲載した。
- 6 本書に関わる記録類及び出土遺物は、鳥取県立青谷かみじち史跡公園で保管している。
- 7 発掘調査にあたっては、とっとり弥生の王国調査整備活用委員会（調査研究部会：青谷上寺地遺跡担当）の指導のもと実施した。

委員長 和田 晴吾（兵庫県立考古博物館館長 専門：考古学）

副委員長 深澤 芳樹（（独法）国立文化財機構奈良文化財研究所客員研究員 専門：考古学）

副委員長 木下 尚子（熊本大学名誉教授 専門：考古学）

調査研究部会：青谷上寺地遺跡担当

座長 木下 尚子（熊本大学名誉教授 専門：考古学）

副座長 辻 誠一郎（東京大学名誉教授 専門：古環境）

委員 野島 永（広島大学大学院教授 専門：考古学）

委員 長友 朋子（立命館大学教授 専門：考古学）

委員 降幡 順子（京都国立博物館保存科学室長 専門：保存科学）

※委員の所属・職名は令和5年4月1日段階のもの

- 8 発掘調査は株式会社島田組の支援を受けて行った。現場代理人は山本 瞬（令和4年度）、山本 隆広（令和5年度）、調査補助員は樽谷 雅幸である。
- 9 調査にあたっては、下記の機関、個人から御助言、御支援、御協力をいただいた。
国立科学博物館、鳥取市、鳥取市教育委員会、鳥取市青谷町総合支所、青谷上寺地遺跡展示館、青谷町西町町内会、青谷町農事実行組合
- 10 発掘調査に関連する事前工事、復旧工事については鳥取県土整備事務所が実施し、助言、協力を得た。

凡 例

- 1 発掘調査に際しては、世界測地系第V系により、WA 1 (X = - 53,990、Y = - 31,050) を原点とする10 m四方の方眼を設定した。方眼の北東隅をグリッド名として北に向かいWA、WB、WC…を、東に向かい2、3、4…を付している。本報告書での方位は、旧日本測地系の座標軸を基準とし、レベルは海拔標高を示す。
- 2 本報告書に使用した地図類は、国土地理院発行 (1/25,000 地形図)、鳥取市作成の都市計画図 (1/5,000) を縮小、加筆したものである。
- 3 本遺跡の土層に示した土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に基づき、土の色相・明度・彩度を判定し、記載したものである。また、堆積中に混入物が含まれる場合、粒径を基準に2 mm以上を礫、2 mm未満を砂と記した。
- 4 本報告書で用いた人工遺物の略号は以下のとおりである。
Po:土器、CP:土製品、S:石器、J:石製玉類、G:ガラス玉、Bo:骨角器、W:木器、F:鉄器、
Br:青銅器、Ba:編組製品
- 5 遺物実測図のうち縮尺については、土器1/4、土製品1/2、石器1/2と1/3、鉄器・青銅器1/1、木器1/2と1/6、ガラス製品1/1を基本とした。
- 6 木器の実測は表面の木目等は記入せず、加工痕を表現した。また、断面図には概念的な木取りを記入しているが、目視で判断できない場合については木取りを記入していない。
- 7 出土した土器の時期は、以下の文献を参考にしながら、検討を行った。
 - 1) 田辺 昭三 1981『須恵器大成』角川書店
 - 2) 清水 真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生式土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社
 - 3) 松本 岩雄 1992「出雲・隠岐地域」『弥生式土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社
 - 4) 松井 潔 1997「東の土器 南の土器」『古代吉備』第19集 古代吉備研究会
 - 5) 牧本 哲雄 1999「第9章 遺構、遺物の検討 第1節 古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ 園第6遺跡』(財)鳥取県教育文化財団
 - 6) 谷口 恭子 2000「因幡における弥生時代後期から庄内式併行期の土器について」『庄内式土器研究』XXII、庄内式土器研究会
 - 7) 岡田 裕之・八峠 興 2014「鳥取における古代から中世前期の土器編年－須恵器と回転台土師器を基に－」『調査研究紀要5』鳥取県埋蔵文化財センター
 - 8) 松山 智弘 2018「山陰」『前期古墳編年を再考するⅡ－古墳出土土器をめぐって－』中国四国前方後円墳研究会 第18回研究集会実行委員会
 - 9) 高尾 浩司 2020「第2節 妻木晩田遺跡における外来系土器の受容と地域間交流」『史跡妻木晩田遺跡松尾頭墳丘墓群発掘調査報告書－第33・34次発掘調査、墳丘墓群発掘調査報告書－』鳥取県立むきばんだ史跡公園

目 次

巻頭図版、例言、凡例、目次

第1章	青谷上寺地遺跡の概要	
第1節	遺跡の概要	1
第2節	遺跡の位置と環境	3
第1項	遺跡の地理的環境	3
第2項	周辺の遺跡と歴史的環境	4
第2章	第20次発掘調査の目的と経緯	
第1節	青谷上寺地遺跡発掘調査の目的と経緯	7
第1項	既往調査の目的と経緯	7
第2項	第20次発掘調査の目的と経緯	12
第3項	調査体制	12
第2節	第20次発掘調査の方法と経過	15
第1項	発掘調査の方法	15
第2項	調査研究部会（青谷上寺地遺跡担当）の記録	18
第3項	第20次発掘調査の経過	20
第3章	第20次発掘調査の成果	
第1節	基本層序	23
第1項	概要	23
第2項	各大別層の性格と特徴	37
第2節	検出した遺構および出土遺物	39
第1項	Ⅱ～Ⅳ層出土遺物	39
第2項	Ⅳ-1層下面（第1面：中世）までの遺構と遺物	40
第3項	Ⅴ-1層上面（第2面：中世）の遺構と遺物	49
第4項	Ⅴ層出土遺物	50
第5項	Ⅴ層中（第3面：律令期）の遺構と遺物	52
第6項	Ⅵ層出土遺物	53
第7項	Ⅵ層下面-1（第4面：古墳時代中期末葉）の遺構と遺物	62
第8項	Ⅵ層下面-2（第5面：古墳時代前期前葉）の遺構と遺物	67
第9項	Ⅶ層出土遺物	109
第10項	Ⅶ層下面（第6面：弥生時代後期後葉～終末期後半）の遺構と遺物	113
第11項	弥生時代後期前葉から後葉の遺構と出土遺物	191
第12項	SD38出土遺物	203
第13項	調査区内出土遺物	212
第4章	自然科学分析	
第1節	土壌サンプル等自然科学分析	249
第2節	青谷上寺地遺跡出土材の酸素同位体比年輪年代測定	261
第3節	青谷上寺地遺跡第20次発掘調査炭化米ブロックに係る自然科学分析	264
第1項	構造分析	264
第2項	種実同定	266

第3項	付着した葉の植物珪酸体分析	267
第4項	放射性炭素年代測定	268
第4節	青谷上寺地遺跡出土木製品の樹種調査結果	270
第5節	青谷上寺地遺跡出土木製品の塗膜構造調査	273
第6節	青谷上寺地遺跡SD38遺構出土イネ粃殻の古代ゲノム解析(予報)	274
第7節	青谷上寺地遺跡第20次調査で出土した大型植物遺体	279
第8節	動物遺存体	286

第5章 総括

第1節	出土人骨について	287
第1項	記載の基準	287
第2項	出土状況	290
第3項	出土人骨の特徴	316
第4項	考察	333
第2節	調査成果の評価と課題	359
第1項	中心域東側縁辺部の変遷と集落像のなかでの位置づけ	359
第2項	検出遺構および出土遺物	367
第3項	まとめと今後の課題	373

写真図版

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1	第14図	Ⅱ・Ⅲ層出土土器	39
第2図	弥生時代(約1800年前)の青谷平野 (南上空から、復元図)	2	第15図	Ⅳ-1層出土土器	39
第3図	青谷上寺地遺跡周辺の遺跡分布	5	第16図	Ⅳ層出土土製品	40
第4図	青谷上寺地遺跡の範囲と既往の発掘調査地点 (令和5年度時点)	7	第17図	Ⅳ-1層出土金属器	40
第5図	調査、整備に係るエリア区分	10	第18図	1溝	41
第6図	青谷上寺地遺跡調査区地区割図	16	第19図	Ⅳ-1層下面(第1面)平面図	41
第7図	調査区全体図における土層断面位置と グリッド配置	23	第20-1図	4土手(1)	42
第8-1図	調査区南壁土層断面図(1)	24	第20-2図	4土手(2)	43
第8-2図	調査区南壁土層断面図(2)	25	第21図	4土手出土土器	43
第8-3図	調査区南壁土層断面図(3)	26	第22図	田畑地統全図	43
第8-4図	調査区南壁土層断面図(4)	27	第23図	2畦畔	44
第9-1図	調査区東壁土層断面図(1)	28	第24図	2畦畔(古段階)遺物出土状況	45
第9-2図	調査区東壁土層断面図(2)	29	第25図	2畦畔(古段階)および周辺出土金属器	46
第10-1図	調査区北壁土層断面図(1)	30	第26図	2畦畔(新段階)出土木器	47
第10-2図	調査区北壁土層断面図(2)	31	第27図	V層上面平面図	47
第11-1図	調査区西壁土層断面(1)	32	第28図	3畦畔	48
第11-2図	調査区西壁土層断面(2)	33	第29図	5土手	49
第11-3図	調査区西壁土層断面(3)	34	第30図	V層上面出土土器	50
第12-1図	東西ベルト土層断面図(1)	36	第31図	V層出土土器	50
第12-2図	東西ベルト土層断面図(2)	37	第32図	V層出土石器	51
第13図	調査区基本層序模式図	38	第33図	V層出土土製品	51
			第34図	V層出土木器	51
			第35図	V層出土金属器	52
			第36図	V層出土玉類	52

第 37 図	VI 層中平面図	53	第 75 図	24・45・62・63 土坑 平面図・断面図	91
第 38 図	6 流路出土木器	53	第 76 図	24・62 土坑出土土器	92
第 39 図	6 流路	54	第 77 図	42・43 溝 平面図・断面図	93
第 40 図	VI - 1 層上面遺物出土状況	55	第 78 図	42 溝出土土器	93
第 41 図	VI - 1 層出土土器	56	第 79 図	43 溝出土管玉	93
第 42 図	VI - 2 層出土土器 (1)	57	第 80 図	44 溝 平面図・断面図	94
第 43 図	VI - 2 層出土土器 (2)	58	第 81 図	23 溝 平面図・断面図	95
第 44 図	VI 層出土土製品	59	第 82 図	23 溝出土土器	95
第 45 図	VI 層出土玉類	59	第 83 図	16・34 溝 平面図・断面図	96
第 46 図	VI 層出土木器	59	第 84 図	22 溝 平面図・断面図	97
第 47 図	VI 層出土石器	60	第 85 図	22 溝出土土器	97
第 48 図	VI 層出土骨角器	60	第 86 図	14 溝 平面図・断面図	98
第 49 図	VI 層出土金属器	61	第 87 図	14 溝出土土器	98
第 50 図	VI 層下面 - 1 平面図	62	第 88 図	72～79・80・82 ピット 平面図	99
第 51 図	7 土器溜り	62	第 89 図	72～75 ピット	100
第 52 図	7 土器溜り出土土器 (1)	63	第 90 図	76～79 ピット	101
第 53 図	7 土器溜り出土土器 (2)	63	第 91 図	80・82 ピット	102
第 54 図	9 溝	64	第 92 図	82 ピット出土土器	102
第 55 図	9 溝出土土器	65	第 93 図	SD38-A、古墳時代前期造成土	103
第 56 図	9 溝出土溶解物	65	第 94 図	SD38-A 出土土器 (1)	105
第 57 図	9 溝出土木器	65	第 95 図	SD38-A 出土土器 (2)	106
第 58 図	VI 層下面平面図	66	第 96 図	SD38-A 出土石器	107
第 59- 1 図	平地建物 1 (1)	68	第 97 図	SD38-A 出土玉類	107
第 59- 2 図	平地建物 1 (2)	69	第 98 図	SD38-A 出土骨角器	107
第 60- 1 図	平地建物 2 (1)	70	第 99 図	SD38-A 出土金属器	107
第 60- 2 図	平地建物 2 (2)	71	第 100 図	古墳時代前期造成土出土土器	108
第 60- 3 図	平地建物 2 (3)	72	第 101 図	VII 層出土土器	109
第 60- 4 図	平地建物 2 (4)	73	第 102 図	VII 層出土土器	110
第 60- 5 図	平地建物 2 (5)	74	第 103 図	VII 層出土木器	111
第 61 図	平地建物 2 出土土器	75	第 104 図	VII 層出土石器	112
第 62- 1 図	平地建物 3 (1)	76	第 105 図	VII 層出土骨角器	112
第 62- 2 図	平地建物 3 (2)	77	第 106 図	VII 層出土玉類	112
第 62- 3 図	平地建物 3 (3)	78	第 107 図	VII 層出土金属器	112
第 62- 4 図	平地建物 3 (4)	79	第 108 図	VII 層下面検出状況	114
第 62- 5 図	平地建物 3 (5)	80	第 109- 1 図	中心域張出部 (1)	115
第 62- 6 図	平地建物 3 (6)	81	第 109- 2 図	中心域張出部 (2)	116
第 62- 7 図	平地建物 3 (7)	82	第 109- 3 図	中心域張出部 (3)	117
第 63 図	平地建物 3 出土土器 (1)	83	第 109- 4 図	中心域張出部 (4)	118
第 64 図	平地建物 3 出土土器 (2)	84	第 110- 1 図	土留め 1～5 (1)	120
第 65 図	平地建物 3 出土石器	84	第 110- 2 図	土留め 1～5 (2)	121
第 66 図	平地建物 3 出土玉類	84	第 111 図	土留め 1 構成木器	122
第 67 図	平地建物 3 出土骨角器	84	第 112 図	土留め 2 構成木器	122
第 68 図	平地建物 3 出土木器	85	第 113 図	土留め 3 構成木器	123
第 69- 1 図	平地建物 4 (1)	86	第 114 図	W38 拡大	124
第 69- 2 図	平地建物 4 (2)	87	第 115 図	土留め 4 構成木器	125
第 70 図	平地建物 4 出土土器	88	第 116 図	土留め 6	126
第 71 図	平地建物 4 出土金属器	88	第 117 図	土留め 7	127
第 72 図	11・12・15 炉	89	第 118 図	土留め 8	127
第 73 図	11・15 炉出土土器	90	第 119 図	造成土①出土土器	128
第 74 図	15 炉出土石器	90	第 120 図	造成土①出土木器 (1)	129

第 121 図	造成土①出土木器 (2)	130	第 159 図	SD38-D (北側)	170
第 122 図	造成土②出土土器	130	第 160 図	SD38-D 出土土器	171
第 123 図	造成土②出土木器 (1)	131	第 161 図	SD38-D 出土木器 (1)	171
第 124 図	造成土②出土木器 (2)	132	第 162 図	SD38-D 出土木器 (2)	172
第 125 図	造成土③出土土器	132	第 163 図	SD38-E	173
第 126 図	造成土③出土石器	132	第 164 図	SD38-E 出土土器	173
第 127 図	造成土③出土木器	133	第 165 図	SD38-E 出土木器	173
第 128 図	造成土④出土土器	134	第 166 図	Ⅶ層下面 (第 1 段階) 検出状況	174
第 129 図	造成土④出土木器	134	第 167- 1 図	SD38-Ca (1)	175
第 130 図	造成土⑥出土土器	134	第 167- 2 図	SD38-Ca (2)	176
第 131 図	造成土出土土器	135	第 167- 3 図	SD38-Ca (3)	177
第 132 図	造成土出土木器 (1)	135	第 168- 1 図	SD38-Cb (1)	178
第 133 図	造成土出土木器 (2)	136	第 168- 2 図	SD38-Cb (2)	179
第 134 図	造成土出土編組製品	136	第 169 図	SD38-Ca・b 出土土器 (1)	181
第 135 図	造成土遺物出土状況	137	第 170 図	SD38-Ca・b 出土土器 (2)	182
第 136- 1 図	SD38-B 平面図	138	第 171 図	SD38-Ca・b 出土木器 (1)	184
第 136- 2 図	SD38-B 断面図	139	第 172 図	SD38-Ca・b 出土木器 (2)	185
第 137 図	SD38-B 遺物出土状況拡大範囲	140	第 173 図	SD38-Ca・b 出土木器 (3)	185
第 138- 1 図	SD38-B 遺物出土状況図 (1)	141	第 174 図	SD38-Ca・b 出土木器 (4)	186
第 138- 2 図	SD38-B 遺物出土状況図 (2)	142	第 175 図	SD38-Ca・b 出土木器 (5)	186
第 138- 3 図	SD38-B 遺物出土状況図 (3)	143	第 176 図	SD38-Ca・b 出土木器 (6)	186
第 138- 4 図	SD38-B 遺物出土状況図 (4)	144	第 177 図	SD38-Ca・b 出土木器 (7)	187
第 138- 5 図	SD38-B 遺物出土状況図 (5)	145	第 178 図	SD38-Ca・b 出土木器 (8)	188
第 138- 6 図	SD38-B 遺物出土状況図 (6)	146	第 179 図	SD38-Ca・b 出土木器 (9)	189
第 138- 7 図	SD38-B 遺物出土状況図 (7)	147	第 180 図	SD38-Ca 出土骨角器	190
第 138- 8 図	SD38-B 遺物出土状況図 (8)	148	第 181 図	SD38-Cb 出土金属器	190
第 138- 9 図	SD38-B 遺物出土状況図 (9)	149	第 182 図	SD38-Cb 出土玉類	190
第 138-10 図	SD38-B 遺物出土状況図 (10)	150	第 183 図	85・87 土坑	191
第 138-11 図	SD38-B 遺物出土状況図 (11)	151	第 184 図	85・87 土坑出土土器	191
第 138-12 図	SD38-B 遺物出土状況図 (12)	152	第 185 図	88 柱穴 平面図・断面図	192
第 139 図	SD38-B 出土土器	153	第 186 図	88 柱穴出土木器	192
第 140 図	SD38-B 出土木器 (1)	154	第 187 図	88 柱穴出土土器	192
第 141 図	SD38-B 出土木器 (2)	155	第 188 図	弥生後期の区画溝と造成遺構	193
第 142 図	SD38-B 出土木器 (3)	155	第 189 図	SD38-C	194
第 143 図	SD38-B 出土木器 (4)	156	第 190 図	SD38-C 出土土器	196
第 144 図	SD38-B 出土木器 (5)	157	第 191 図	SD38-C 出土木器 (1)	197
第 145 図	SD38-B 出土木器 (6)	158	第 192 図	SD38-C 出土木器 (2)	198
第 146 図	SD38-B 出土木器 (7)	158	第 193 図	SD38-C 出土木器 (3)	199
第 147 図	SD38-B 出土木器 (8)	159	第 194 図	SD38-C 出土石器	199
第 148 図	SD38-B 出土木器 (10)	160	第 195 図	SD38-C 出土骨角器	199
第 149 図	SD38-B 出土木器 (11)	161	第 196 図	SD38-F 護岸	201
第 150 図	SD38-B 出土木器 (12)	162	第 197 図	弥生時代後期前葉の造成遺構	202
第 151 図	SD38-B 出土木器 (13)	163	第 198 図	Ⅷ層・SD38-F 出土土器	203
第 152 図	SD38-B 出土木器 (14)	164	第 199 図	Ⅷ層出土金属器	203
第 153 図	SD38-B 出土木器 (15)	165	第 200 図	SD38 出土土器 (1)	203
第 154 図	SD38-B 編組製品	166	第 201 図	SD38 出土土器 (2)	204
第 155 図	SD38-B 出土骨角器	166	第 202 図	SD38 出土土器 (3)	205
第 156 図	84 柱穴	167	第 203 図	SD38 出土土器 (4)	205
第 157 図	Ⅶ層下面 (第 2 段階) 平面図	168	第 204 図	SD38 出土土器 (5)	206
第 158 図	SD38-D (南側)	169	第 205 図	SD38 出土土器 (6)	207

第 206 図	SD38 出土木器 (1)	208	第 242 図	SD38-Ca・b 以外の人骨出土位置と拡大範囲	291
第 207 図	SD38 出土木器 (2)	209	第 243 図	拡大範囲 A 人骨出土状況	292
第 208 図	SD38 出土木器 (3)	210	第 244 図	拡大範囲 B 人骨出土状況	293
第 209 図	SD38 出土石器	211	第 245 図	拡大範囲 C 人骨出土状況	293
第 210 図	SD38 出土骨角器	212	第 246 図	SD38-Ca・b および検出面の人骨出土位置と 拡大範囲	294
第 211 図	SD38 出土金属器	212	第 247 図	拡大範囲 D 人骨出土状況	296
第 212 図	調査区内出土土器 (1)	213	第 248 図	拡大範囲 E 人骨出土状況	298
第 213 図	調査区内出土土器 (2)	214	第 249 図	拡大範囲 F 人骨出土状況	301
第 214 図	調査区内出土土器 (3)	215	第 250- 1 図	拡大範囲 G 人骨出土状況 (1)	302
第 215 図	調査区内出土土器 (4)	215	第 250- 2 図	拡大範囲 G 人骨出土状況 (2)	303
第 216 図	調査区内出土石器 (1)	215	第 251 図	拡大範囲 G-a 人骨出土状況	304
第 217 図	調査区内出土石器 (2)	216	第 252 図	拡大範囲 H 人骨出土状況	305
第 218 図	調査区内出土石器 (3)	216	第 253 図	拡大範囲 I 人骨出土状況	307
第 219 図	調査区内出土木器 (1)	217	第 254 図	拡大範囲 J 人骨出土状況	308
第 220 図	調査区内出土木器 (2)	218	第 255 図	拡大範囲 K 人骨出土状況	310
第 221 図	調査区内出土木器 (3)	218	第 256 図	拡大範囲 L 人骨出土状況	312
第 222 図	調査区内出土木器 (4)	219	第 257 図	拡大範囲 M 人骨出土状況	315
第 223 図	調査区内出土木器 (5)	220	第 258 図	参考：1 次調査県道 8 区人骨出土状況	317
第 224 図	調査区内出土骨角器	220	第 259 図	部位別出土率の比較	318
第 225 図	調査区内出土玉類	220	第 260 図	ヒトの歯の萌出段階と年齢	319
第 226 図	調査区内出土金属器	220	第 261 図	受傷痕の位置	325
第 227 図	調査区内出土土玉	223	第 262 図	頭蓋骨 HB230 の受傷痕	326
第 228 図	VII 層出土土玉	223	第 263 図	参考：1 次調査区出土人骨の受傷痕位置	331
第 229 図	古墳時代前期遺構群、SD38-A 出土土玉	224	第 264 図	土井ヶ浜遺跡の二次葬	335
第 230 図	SD38 出土土玉	225	第 265 図	弥生時代における「断体儀礼」の類例	338
第 231 図	主要珪藻化石群集	251	第 266 図	SD38 人骨群の形成過程の模式図	339
第 232 図	花粉化石群集	253	第 267- 1 図	SD38 の変遷 (1)	359
第 233 図	植物珪酸体群集	253	第 267- 2 図	SD38 の変遷 (2)	360
第 234 図	暦年較正結果	257	第 268 図	1 次調査県道 8 区の SD38	361
第 235 図	酸素同位体比年輪年代法による 年代照合の結果	263	第 269 図	区画溝の断面	364
第 236 図	暦年較正結果	269	第 270 図	古墳時代前期における中心域周辺の状況	366
第 237 図	古代 DNA に特有のダメージパターン (左： C → T への置換、右：G → A への置換)	276	第 271 図	県道 8 区調査区南壁土層断面	367
第 238 図	暦年較正結果	277	第 272 図	造成遺構	368
第 239 図	人骨各部位の名称	288	第 273 図	平地建物の復元	370
第 240 図	骨格の方向	289	第 274 図	建築材と建物の復元	371
第 241 図	ヒトの歯の名称と略号	289	第 275 図	SD38-B 出土精製木器	372

挿表目次

第 1 表	青谷上寺地遺跡発掘調査一覧	8	第 6- 6 表	土器観察表 (6)	231
第 2 表	平地建物 1 ピット計測表	69	第 6- 7 表	土器観察表 (7)	232
第 3 表	平地建物 2 ピット計測表	75	第 6- 8 表	土器観察表 (8)	233
第 4 表	平地建物 3 ピット計測表	80	第 6- 9 表	土器観察表 (9)	234
第 5 表	ピット計測表	99	第 6-10 表	土器観察表 (10)	235
第 6- 1 表	土器観察表 (1)	226	第 6-11 表	土器観察表 (11)	236
第 6- 2 表	土器観察表 (2)	227	第 6-12 表	土器観察表 (12)	237
第 6- 3 表	土器観察表 (3)	228	第 6-13 表	土器観察表 (13)	238
第 6- 4 表	土器観察表 (4)	229	第 7 表	土製品観察表	239
第 6- 5 表	土器観察表 (5)	230	第 8 表	石器・石製品観察表	240

第9表	石製玉類観察表	240
第10表	ガラス製玉類観察表	241
第11表	鉄器観察表	241
第12表	青銅器(古銭)観察表	241
第13表	青銅器観察表	241
第14-1表	木器観察表(1)	242
第14-2表	木器観察表(2)	243
第14-3表	木器観察表(3)	244
第14-4表	木器観察表(4)	245
第14-5表	木器観察表(5)	246
第14-6表	木器観察表(6)	247
第15表	編組製品観察表	247
第16表	骨角器観察表	248
第17表	植物珪酸体群集	252
第18表	花粉分析結果	254
第19表	植物珪酸体含量	254
第20表	放射性炭素年代測定結果	258
第21表	酸素同位体比による年輪年代照合の結果	262
第22表	X線CT撮影対象試料および撮像条件	264
第23表	分析試料と植物珪酸体の検出状況	267
第24表	測定試料および処理	268
第25表	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	269
第26表	樹種同定の結果	272
第27表	調査資料	273
第28表	断面観察結果	273
第29表	SD38-D 遺構から出土した植物種実一覧	275
第30表	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	277
第31表	青谷上寺地遺跡第20次発掘調査において 出土した大型植物遺体	280

第32表	拡大範囲A 出土人骨	293
第33表	拡大範囲B 出土人骨	293
第34表	拡大範囲C 出土人骨	293
第35表	拡大範囲D 出土人骨	297
第36表	拡大範囲E 出土人骨	299
第37表	拡大範囲F 出土人骨	301
第38表	拡大範囲G 出土人骨	303
第39表	拡大範囲I 出土人骨	307
第40表	拡大範囲J 出土人骨	309
第41表	拡大範囲K 出土人骨	310
第42表	拡大範囲L 出土人骨	313
第43表	拡大範囲M 出土人骨	315
第44表	歯の萌出、咬耗状況	319
第45-1表	出土人骨一覧(1)	345
第45-2表	出土人骨一覧(2)	346
第45-3表	出土人骨一覧(3)	347
第45-4表	出土人骨一覧(4)	348
第45-5表	出土人骨一覧(5)	349
第45-6表	出土人骨一覧(6)	350
第45-7表	出土人骨一覧(7)	351
第45-8表	出土人骨一覧(8)	352
第45-9表	出土人骨一覧(9)	353
第45-10表	出土人骨一覧(10)	354
第45-11表	出土人骨一覧(11)	355
第45-12表	出土人骨一覧(12)	356
第45-13表	出土人骨一覧(13)	357
第45-14表	出土人骨一覧(14)	358
第46表	各調査区におけるSD38の特徴	362

写真目次

写真1	第9回調査研究部会の様子	18
写真2	第10回調査研究部会の様子	18
写真3	第11回調査研究部会の様子(1)	19
写真4	第11回調査研究部会の様子(2)	19
写真5	重機による表土掘削	20
写真6	作業風景(1)	20
写真7	作業風景(2)	21
写真8	国立科学博物館による調査指導	21
写真9	青谷高校の発掘体験	22
写真10	青谷中学校の発掘体験	22
写真11	現地説明会(1)	22
写真12	現地説明会(2)	22
写真13-1	調査区南壁土層断面(西→東)(1)	34
写真13-2	調査区南壁土層断面(西→東)(2)	34
写真13-3	調査区南壁土層断面(西→東)(3)	35
写真13-4	調査区南壁土層断面(西→東)(4)	35
写真13-5	調査区南壁土層断面(西→東)(5)	35
写真14	椎骨による年齢区分	289
写真15	SD38-Ca 人骨出土状況(北東から)	295

写真16	SD38-Cb 人骨出土状況(北西から)	295
写真17	拡大範囲D 人骨出土状況(北西から)	297
写真18	拡大範囲E 人骨出土状況	300
写真19	拡大範囲G 人骨出土状況(南東から)	304
写真20	拡大範囲H 人骨出土状況(東から)	306
写真21	拡大範囲I 人骨出土状況(北東から)	307
写真22	拡大範囲L 人骨出土状況(北西から)	314
写真23	接合した大腿骨	318
写真24	幼児、10代前半以前の上顎骨・下顎骨	320
写真25	10代前半以前・10歳以前の人骨 (主要四肢骨)	321
写真26	病変が認められる人骨	323
写真27	下顎骨HB308の受傷痕	326
写真28	受傷痕の認められる人骨	327
写真29	同一個体の右寛骨・仙骨HB525・523の 受傷痕	328
写真30	親指の切断とその可能性がある受傷人骨	329
写真31	殺傷痕が認められる人骨	330
写真32	焼成痕が認められる人骨	332

写真 33	動物の噛痕等が認められる人骨	333
写真 34	エンマコガネ属上翅が付着した頸椎	333
写真 35	SD38-Cb 出土炭化粟ブロック	336

写真 36	脊椎カリエスの症例	341
写真 37	実験作製したちまきと出土炭化米ブロック断面	373

巻頭図版目次

巻頭図版 1

- 1 第 20 次発掘調査区と青谷平野（西から）
- 2 調査完了状況（南東から）

巻頭図版 2

- 1 平地建物群調査完了状況（北東から）
- 2 中心域張出部木製構造物出土状況（北西から）

巻頭図版 3

- 1 SD38-Ca 人骨出土状況（竹串部分、北東から）

- 2 SD38-Ca 人骨出土状況（拡大範囲 Ga、南東から）

巻頭図版 4

- 1 SD38-B 高杯 W75 出土状況（北東から）
- 2 SD38-Ca 椀・杯形容器 W137 出土状況（北西から）
- 3 SD38-B 出土木器 W68
- 4 玉類

写真図版目次

PL.1

- 1 調査区南壁土層断面（北西から）
- 2 調査区南壁土層断面（北東から）

PL.2

- 1 調査区西壁土層断面（南東から）
- 2 調査区北壁土層断面（南東から）

PL.3

- 1 調査区東壁土層断面（北西から）
- 2 東西ベルト土層断面（南東から）

PL.4

- 1 1 溝調査状況（南東から）
- 2 2 畦畔新段階遺物出土状況（南東から）
- 3 2 畦畔土層断面（南西から）

PL.5

- 1 2 畦畔古段階ウシ頭蓋骨出土状況（下段北半部、東から）
- 2 2 畦畔古段階遺物出土状況（南西から）
- 3 4 土手土層断面（南壁、北から）

PL.6

- 1 IV - 1 層下面調査状況（北東から）
- 2 V 層上面調査状況（北西から）

PL.7

- 1 3 畦畔、5 土手検出状況（北西から）
- 2 5 土手検出状況（南から）
- 3 V - 4 層上面検出状況（西から）

PL.8

- 1 V - 2 層の層相（接写）
- 2 V - 3 層の層相（接写）
- 3 V - 4 層の層相（接写）

PL.9

- 1 6 流路調査状況（西から）
- 2 6 流路人形出土状況（西から）
- 3 VI 層上面遺物出土状況（北東から）

PL.10

- 1 7 土器溜り検出状況（南東から）
- 2 9 溝検出状況（北東から）
- 3 9 溝調査状況（北東から）

PL.11

- 1 VI 層下面検出状況（南西から）
- 2 VI 層下面調査状況（南西から）

PL.12

- 1 平地建物 1 検出状況（北から）
- 2 平地建物 1 土層断面（西壁土層断面、北東から）

PL.13

- 1 平地建物 1 P 7 土層断面（南西から）
- 2 平地建物 1 P 1・2 土層断面（北西から）

- 3 平地建物 1 炉土層断面およびイヌ下顎骨出土状況（北東から）

PL.14

- 1 平地建物 1 SD 3 土層断面（北東から）
- 2 平地建物 1 調査状況（北西から）

PL.15

- 1 平地建物 2 検出状況（北東から）
- 2 平地建物 2 SD 3-2 検出状況（南東から）
- 3 平地建物 2 SD 3-2 土層断面（南東から）

PL.16

- 1 平地建物 2 SD 3-2 土層断面（南から）
- 2 平地建物 2 SD 2-2 土層断面（南から）

PL.17

- 1 平地建物 2 P18 土層断面（南から）
- 2 平地建物 2 P16 土層断面（南から）
- 3 平地建物 2 P15 土層断面（南から）
- 4 平地建物 2 P12 土層断面（南から）
- 5 平地建物 2 P13・14 土層断面（南から）
- 6 平地建物 2 P10 土層断面（南から）

PL.18

- 1 平地建物 2 SD 3-1 土層断面（北から）
- 2 平地建物 2 炉 1 土層断面（北西から）
- 3 平地建物 2 炉 1 土層断面（南東から）

PL.19

- 1 平地建物 2 P 4・5 土層断面（北から）
- 2 平地建物 2 SD 1 土層断面（西から）
- 3 平地建物 2 P21 土層断面（北から）
- 4 平地建物 2 P22 土層断面（南東から）
- 5 平地建物 2 調査状況（北西から）

PL.20

- 1 平地建物 3 検出状況（南東から）
- 2 平地建物 3 調査状況（南東から）

PL.21

- 1 平地建物 3 SD 2 土層断面（南東から）
- 2 平地建物 3 SD 3 調査状況（北から）
- 3 平地建物 3 SD 1・5 調査状況（南東から）

PL.22

- 1 平地建物 2 SD 2 検出状況（南東から）
- 2 平地建物 2 SD 1 検出状況（南東から）
- 3 平地建物 2 P 9 土層断面（南から）
- 4 平地建物 2 P 9 掘削状況（南西から）

PL.23

- 1 平地建物 2 SD 1 壁材出土状況（南東から）
- 2 平地建物 2 SD 5 掘削状況（南東から）
- 3 平地建物 2 SD 6 検出状況（南西から）

- PL.24**
- 1 平地建物3 SD 6 掘削状況 (南西から)
 - 2 平地建物3 P11 掘削状況 (南西から)
 - 3 平地建物3 P 2 掘削状況 (北から)
 - 4 平地建物3 P15 土層断面状況 (南東から)
 - 5 平地建物3 SD 5 木製構造物検出状況 (南東から)
- PL.25**
- 1 平地建物3 SK 2 土層断面 (西から)
 - 2 平地建物3 SK 2 遺物出土状況 (北西から)
 - 3 平地建物3 SK 2 イノシシ下顎骨出土状況 (北西から)
 - 4 平地建物3 SK 2 エイ尾棘出土状況 (北西から)
 - 5 平地建物3 SK 2・P17 検出状況 (南東から)
- PL.26**
- 1 平地建物4 調査状況 (南西から)
 - 2 平地建物4 SD 1 鉄器出土状況 (東から)
 - 3 平地建物4 SD 2 土層断面 (南西から)
- PL.27**
- 1 11 炉土層断面 (南から)
 - 2 12 炉遺物出土状況 (南東から)
 - 3 15 炉土層断面 (南東から)
- PL.28**
- 1 24 土坑遺物出土状況 (北東から)
 - 2 63 土坑掘削状況 (南から)
 - 3 62 土坑土層断面 (東から)
- PL.29**
- 1 42 溝土層断面 (南東から)
 - 2 42・43 溝土層断面 (南東から)
 - 3 22 溝土層断面 (南西から)
 - 4 14 溝土層断面 (南西から)
 - 5 令和4年度深掘箇所木製構造物検出状況 (北東から)
- PL.30**
- 1 SD38-A 掘削状況 (北東から)
 - 2 SD38-A キツネ下顎骨出土状況 (北から)
 - 3 84 柱穴土層断面 (南から)
- PL.31**
- 1 VII層下面検出状況 (南東から)
 - 2 土留め1～4 検出状況 (東から)
- PL.32**
- 1 土留め1～4 検出状況 (北西から)
 - 2 土留め3 検出状況 (北から)
 - 3 土留め5 検出状況 (北から)
- PL.33**
- 1 土留め6・7、SD38-B 北側検出状況 (北東から)
 - 2 土留め6・7、SD38-B 北側検出状況 (東から)
 - 3 土留め8 検出状況 (南西から)
- PL.34**
- 1 中心域張出部土層断面 (北西から)
 - 2 中心域張出部土層断面 (北から)
 - 3 造成土腰かけ W65 出土状況 (北西から)
- PL.35**
- 1 SD38-B 南側遺物出土状況 (北東から)
 - 2 SD38-B 北側遺物出土状況 (北西から)
- PL.36**
- 1 SD38-B かご Ba3 出土状況 (西から)
 - 2 SD38-B 容器 W73・桶 W70 出土状況 (北西から)
 - 3 SD38-B 匙 W94 出土状況 (南東から)
- PL.37**
- 1 SD38-B 杓子 W74 出土状況 (北西から)
 - 2 SD38-B 不明木器 W68 出土状況 (南から)
 - 3 SD38-E 琴 W134 出土状況 (北西から)
- PL.38**
- 1 SD38-D 調査状況 (北東から)
 - 2 SD38-D 北側検出状況 (南西から)
- PL.39**
- 3 SD38-D 北側出土状況 (北東から)
- PL.39**
- 1 SD38-Ca 検出状況 (北東から)
 - 2 SD38-Cb 検出状況 (北東から)
- PL.40**
- 1 SD38-Ca 検出面 (拡大範囲 H) 人骨出土状況 (北から)
 - 2 SD38-Ca 検出面 (拡大範囲 D) 人骨出土状況 (北西から)
- PL.41**
- 1 SD38-Ca 人骨出土状況 (北東から)
- PL.42**
- 1 SD38-Ca 土層断面 (北東から)
 - 2 SD38-Ca (拡大範囲 G) 人骨出土状況 (南東から)
- PL.43**
- 1 SD38-Ca (拡大範囲 E 北側) 人骨出土状況 (東から)
 - 2 SD38-Ca (拡大範囲 E 南側) 人骨出土状況 (北東から)
- PL.44**
- 1 SD38-Cb (拡大範囲 J) 人骨出土状況 (南西から)
 - 2 SD38-Cb (拡大範囲 J) 人骨出土状況 (北西から)
- PL.45**
- 1 SD38-Cb (拡大範囲 L) 人骨出土状況 (北西から)
 - 2 SD38-Cb (拡大範囲 M) 人骨出土状況 (北東から)
- PL.46**
- 1 88 柱穴土層断面 (南西から)
 - 2 SD38-C 護岸 (南側溝) (北東から)
 - 3 SD38-C 護岸 (南側溝) (北西から)
- PL.47**
- 1 調査完了状況 (南西から)
 - 2 調査完了状況 (北東から)
- PL.48**
- 1 I・II層出土土器
 - 2 2 畦畔出土土器
 - 3 2 畦畔周辺出土渡来銭
 - 4 IV層・4 土手出土土器
- PL.49**
- 1 V層上面出土土器
 - 2 V-1層出土土器 (1)
 - 3 V-1層出土土器 (2)
 - 4 V-4層出土土器
 - 5 VI層上面出土土器
- PL.50**
- 1 V層出土土器 (祭祀具)
 - 2 V層出土土器 (椀)
 - 3 V層出土金属器 (銅鈴)
 - 4 6 流路・9 溝出土土器 (祭祀具)
- PL.51**
- 1 VI-1層出土土器 (1)
 - 2 VI-1層出土土器 (2)
 - 3 VI-2層出土土器
- PL.52**
- 1 VI-2層出土土器
 - 2 VI-2層出土土器 (須恵器)
 - 3 VI層出土土器 (建築材)
- PL.53**
- 1 VI-2層出土土器 (須恵器)
 - 2 VI層出土土器
 - 3 7 盛土出土土器 (1)
 - 4 7 盛土出土土器 (2)
 - 5 7 盛土出土土器 (3)
 - 6 9 溝出土土器 (1)
- PL.54**
- 1 9 溝出土土器 (2)
 - 2 9 溝出土土器 (3)

- 3 金属精鍊関連溶解物
- PL.55**
- 1 平地建物2出土土器
2 平地建物3出土土器(1)
3 平地建物3出土土器(2)
- PL.56**
- 1 平地建物3・4出土土器
2 平地建物3出土土器(柱根)
3 平地建物3出土土器(壁板)
- PL.57**
- 1 平地建物3出土土器
2 平地建物2出土土器
3 11・15炉出土土器
4 24土坑出土土器
5 22・23溝出土土器
- PL.58**
- 1 14溝出土土器
2 VII層上面出土土器
3 42溝出土土器(1)
4 42溝出土土器(2)
5 SD38-A出土土器(1)
- PL.59**
- 1 SD38-A出土土器(2)
2 SD38-A出土土器(3)
3 SD38-A出土土器(4)
- PL.60**
- 1 SD38-A出土土器(5)
2 古墳時代前期造成土出土土器
3 VII層出土土器(1)
- PL.61**
- 1 VII層出土土器(2)
2 VII層出土土器(3)
3 VII層出土土器(1)
- PL.62**
- 1 VII層出土土器(2)
2 VII層出土土器(3)
3 土留1・3構成木器(妻壁板)
- PL.63**
- 1 土留2構成木器(1)
2 土留2構成木器(2)
3 土留3構成木器
4 土留4構成木器(1)
- PL.64**
- 1 土留3構成木器(W38)
- PL.65**
- 1 土留4構成木器(2)
2 土留4構成木器(3)
3 中心域張出部出土土器
- PL.66**
- 1 造成土①出土土器
2 造成土②～⑤出土土器
3 造成土出土土器
- PL.67**
- 1 造成土①出土土器(1)
2 造成土①出土土器(2)
3 造成土①出土土器(3)
4 造成土①出土土器(4)
- PL.68**
- 1 造成土①出土土器(5)
2 造成土②出土土器(1)
3 造成土②出土土器(2)
4 造成土②出土土器(3)
5 造成土③出土土器(1)
6 造成土③出土土器(2)
- PL.69**
- 1 造成土④出土土器
- 2 造成土出土土器(1)
3 造成土出土土器(2)
4 造成土出土編組製品
- PL.70**
- 1 造成土出土土器(3)
2 SD38-B出土土器(1)
- PL.71**
- 1 SD38-B出土土器(2)
2 SD38-B出土土器(3)
3 SD38-B出土土器(1)
4 SD38-B出土土器(2)
5 SD38-B出土土器(3)
6 SD38-B出土土器(4)
- PL.72**
- 1 SD38-B出土土器(5)
2 SD38-B出土土器(6)
3 SD38-B出土土器(7)
- PL.73**
- 1 SD38-B出土土器(8)
2 SD38-B出土土器(9)
- PL.74**
- 1 SD38-B出土土器(10)
2 SD38-B出土土器(11)
3 SD38-B出土土器(12)
- PL.75**
- 1 SD38-B出土土器(13)
2 SD38-B出土土器(14)
3 SD38-B出土土器(15)
4 SD38-B出土土器(16)
- PL.76**
- 1 SD38-B出土土器(17)
2 SD38-B出土土器(18)
- PL.77**
- 1 SD38-B出土土器(19)
2 SD38-B出土土器(20)
3 SD38-B出土土器(21)
- PL.78**
- 1 SD38-B出土土器(22)
2 SD38-B出土土器(23)
3 SD38-B出土土器(24)
4 SD38-B出土土器(25)
- PL.79**
- 1 SD38-B出土土器(26)
2 SD38-B出土土器(27)
- PL.80**
- 1 SD38-B出土土器(28)
2 SD38-B出土編組製品(1)
3 SD38-B出土編組製品(2)
- PL.81**
- 1 SD38-B出土編組製品(3)
2 SD38-D出土土器
3 SD38-D出土土器(1)
- PL.82**
- 1 SD38-D・E出土土器
2 SD38-D出土土器(2)
3 SD38-D出土土器(3)
4 SD38-D出土土器(4)
- PL.83**
- 1 SD38-E出土土器
2 88柱穴出土土器
3 85・87土坑出土土器
4 88柱穴出土土器
- PL.84**
- 1 SD38-Ca・b出土土器および人骨共伴土器
2 SD38-Ca・b出土土器(1)
3 SD38-Ca・b出土土器(2)

- PL.85**
 1 SD38-Ca・b 出土土器 (3)
 2 SD38-Ca・b 出土土器 (4)
 3 SD38-Ca・b 出土土器 (5)
 4 SD38-Ca・b 出土土器 (6)
 5 SD38-Ca・b 出土土器 (7)
 6 SD38-Ca・b 出土土器 (8)
- PL.86**
 1 SD38-Ca・b 出土土器および人骨共伴土器
 2 SD38-Ca・b 出土土器 (1)
- PL.87**
 1 SD38-Ca・b 出土土器 (2)
 2 SD38-Ca・b 出土土器 (3)
 3 SD38-Ca・b 出土土器 (4)
- PL.88**
 1 SD38-Ca・b 出土土器 (5)
 2 SD38-Ca・b 出土土器 (6)
 3 SD38-Ca・b 出土土器 (7)
 4 SD38-Ca・b 出土土器 (8)
- PL.89**
 1 SD38-Ca・b 出土土器 (9)
 2 SD38-Ca・b 出土土器 (10)
 3 SD38-Ca・b 出土土器 (11)
 4 SD38-Ca・b 出土土器 (12)
 5 SD38-Ca・b 出土土器 (13)
 6 SD38-Ca・b 出土土器 (14)
- PL.90**
 1 SD38-Ca・b 出土土器 (15)
 2 SD38-Ca・b 出土土器 (16)
 3 SD38-Ca・b 出土土器 (17)
 4 SD38-Ca・b 出土土器 (18)
- PL.91**
 1 SD38-C 中・下層出土土器 (1)
 2 SD38-C 中・下層出土土器 (2)
 3 SD38-C 中・下層出土土器 (3)
 4 SD38-C 中・下層出土土器 (4)
 5 SD38-C 中・下層出土土器 (1)
 6 SD38-C 中・下層出土土器 (2)
- PL.92**
 1 SD38-C 中・下層出土土器 (5)
 2 SD38-C 中・下層出土土器 (3)
- PL.93**
 1 SD38-C 中・下層出土土器 (4)
 2 SD38-C 中・下層出土土器 (5)
 3 SD38-C 中・下層出土土器 (6)
- PL.94**
 1 SD38-C 中・下層出土土器 (7)
 2 SD38-C 中・下層出土土器 (8)
 3 SD38 出土土器 (1)
 4 SD38 出土土器 (2)
- PL.95**
 1 SD38 出土土器 (3)
 2 SD38 出土土器 (4)
- PL.96**
 1 SD38 出土土器 (5)
 2 SD38 出土土器 (6)
 3 SD38 出土土器 (7)
- PL.97**
 1 SD38 出土土器 (8)
 2 SD38 出土土器 (1)
 3 SD38 出土土器 (2)
 4 SD38 出土土器 (3)
- PL.98**
 1 SD38 出土土器 (4)
 2 SD38 出土土器 (5)
 3 SD38 出土土器 (6)
- 4 SD38 出土土器 (7)
- PL.99**
 1 調査区内出土土器 (1)
 2 調査区内出土土器 (2)
 3 調査区内出土土器 (3)
- PL.100**
 1 調査区内出土土器 (4)
 2 調査区内出土土器 (5)
 3 調査区内出土土器 (6)
 4 調査区内出土土器 (7)
 5 調査区内出土土器 (1)
 6 調査区内出土土器 (2)
- PL.101**
 1 調査区内出土土器 (3)
 2 調査区内出土土器 (4)
 3 調査区内出土土器 (5)
- PL.102**
 1 調査区内出土土器 (6)
 2 調査区内出土土器 (7)
 3 調査区内出土土器 (8)
 4 調査区内出土土器 (9)
- PL.103**
 1 調査区内出土土器 (10)
 2 調査区内出土土器 (11)
 3 調査区内出土土器 (12)
 4 銅鏃
- PL.104**
 1 鉄器
 2 鉄器 (X線)
- PL.105**
 1 骨角器 (ヤス、根ばさみ、骨鏃)
 2 骨角器 (ト骨、装身具ほか)
- PL.106**
 1 クジラ類椎骨
 2 石斧、石包丁
 3 砥石
 4 滑石製模造品
 5 石錘
- PL.107**
 1 石器 (玉作関連)
 2 石器 (不明石器)
 3 石器 (敲石、凹石)
- PL.108**
 1 土玉
- PL.109**
 1 層相解析
- PL.110**
 1 珪藻化石
- PL.111**
 1 植物珪酸体・花粉化石
- PL.112**
 1 青谷上寺地遺跡出土の炭化種実塊の X線 CT 画像 (1)
- PL.113**
 1 青谷上寺地遺跡出土の炭化種実塊の X線 CT 画像 (2)
- PL.114**
 1 炭化種実塊と検出された機動細胞珪酸体の写真
- PL.115**
 1 炭化種実塊と検出された機動細胞珪酸体の写真
- PL.116**
 1 樹種同定 (1)
- PL.117**
 1 樹種同定 (2)
- PL.118**
 1 樹種同定 (3)

- PL.119 1 樹種同定 (4)
- PL.120 1 樹種同定 (5)
- PL.121 1 樹種同定 (6)
- PL.122 1 樹種同定 (7)
- PL.123 1 樹種同定 (8)
- PL.124 1 W 137 塗膜構造
2 DNA 分析対象試料
- PL.125 1 大型植物遺体 (1)
- PL.126 1 大型植物遺体 (2)
- PL.127 1 魚骨 (1)
- PL.128 1 魚骨 (2)
- PL.129 1 鳥骨 (1)
- PL.130 1 鳥骨 (2)

- PL.131 1 獣骨
- PL.132 1 人骨 (1) 下顎骨 HB308
2 人骨 (2) 下顎骨 HB318
- PL.133 1 人骨 (3) 成人
- PL.134 1 人骨 (4) 10 歳以前、10 代前半以前
- PL.135 1 人骨 (5) 同一個体の椎骨・寛骨・仙骨・尾骨
- PL.136 1 人骨 (6) 同一個体の椎骨・第 1 肋骨
2 人骨 (7) 同一個体の椎骨
3 人骨 (8) 同一個体の中手骨
- PL.137 1 人骨 (9) 同一個体の中足骨ほか
2 人骨 (10) 拡大範囲 G の最小個体数算定
- PL.138 1 人骨 (11) 病変人骨
- PL.139 1 人骨 (12) 受傷人骨

新旧遺構対応表

旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名
66 ビット	平地建物 1 P 1	54 ビット	平地建物 2 P13	32 溝	平地建物 2 SD 2
65 ビット	平地建物 1 P 2	53 ビット	平地建物 2 P14	18 溝	平地建物 2 SD 3
64 ビット	平地建物 1 P 3	52 ビット	平地建物 2 P15	39 柱穴	平地建物 3 P14
68 ビット	平地建物 1 P 4	51 ビット	平地建物 2 P16	38 ビット	平地建物 3 P15
67 ビット	平地建物 1 P 7	70 ビット	平地建物 2 P17	40 土坑	平地建物 3 P16
37 炉	平地建物 1 炉 1	50 ビット	平地建物 2 P18	61 土坑	平地建物 3 P17
33 溝	平地建物 1 SD 1～3	31 ビット	平地建物 2 P20	41 土坑	平地建物 3 SK 1
58 ビット	平地建物 2 P 2	49 ビット	平地建物 2 P21	35 土坑	平地建物 3 SK 2
59 ビット	平地建物 2 P 7	36 ビット	平地建物 2 P22	28 ビット	平地建物 4 P 1
57 ビット	平地建物 2 P 8	47 ビット	平地建物 2 P23	20 溝	平地建物 4 SD 1
69 ビット	平地建物 2 P10	48 ビット	平地建物 2 P24	19 溝	平地建物 4 SD 2
56 ビット	平地建物 2 P11	13 炉	平地建物 2 炉 1	21 炉	平地建物 4 炉 1
55 ビット	平地建物 2 P12	17 溝	平地建物 2 SD 1		

第1章 青谷上寺地遺跡の概要

第1節 遺跡の概要

青谷上寺地遺跡は鳥取県鳥取市青谷町青谷、吉川に所在する(第1図)。鳥取県の東西に長い県域は、旧国名で東部は因幡国、中・西部は伯耆国と呼称され、因幡国の約半分の範囲を県庁所在地である鳥取市が占める。鳥取市の市域の7割は南側に控える中国山地に連なる丘陵部である一方、日本海に臨む北側の沿岸部には鳥取砂丘に代表される砂丘地が発達する。市域の東寄りには中国山地を源とする一級河川千代川が流れ、その西岸には、縄文期のラグーンの名残である湖山池がある。

青谷上寺地遺跡は、鳥取市の西部、青谷平野の西寄りにあたる、JR青谷駅から南西に約300m、海岸線から南へ約1.1km離れた位置にある。遺跡の面積は約33haに及び、鳥取県埋蔵文化財センター、財団法人鳥取県教育文化財団、鳥取市(青谷町)教育委員会によって、これまでに約21,000㎡が発掘調査されている。縄文時代から古代にかけての遺構、遺物が検出される複合遺跡であり、集落の盛期となるのは弥生時代から古墳時代前期初頭にかけてである。盛期の景観については、発掘調査の成果、ボーリング調査によって得られた古環境に関する膨大なデータに基づいて再現している(第2図)。この時期の本遺跡は、人々の活動の舞台となった「中心域」と、その周辺の低地部にあたる「周辺域」より構成されていた。当時、青谷平野はまだ完全に陸地化しておらず、日本海につながる内湾(潟湖)が広がっていた。この内湾に面した三角州先端の微高地に「中心域」が営まれた。約3haの広がりをもつこのエリアからは、土器、木器、石器、骨角器などをはじめとする多様な生活用具が密に出土するほか、これらの未成品や製作に伴う廃棄物なども多数出土し、豊富な鉄製工具の存在と合わせ、



第1図 遺跡の位置



第2図 弥生時代（約1800年前）の青谷平野（南上空から、復元図）

中心域において活発な「ものづくり」が行われていたことが分かる。なかでも、花卉高杯に代表される秀麗な木製容器は、「弥生の匠」とも呼ぶべき優秀な工人集団の存在を示唆する。

また、内湾や河川、湿地などの水域に囲まれた中心域は、風水害の影響を受けやすい立地環境であったが、護岸施設を伴った区画溝や排水溝、木製の砂防施設や盛土の土留めなど、積極的にインフラ整備を行うことで機能を維持し続けている。

建物跡は、掘立柱建物跡8棟、布掘建物2棟、平地建物2棟、竪穴建物1棟が見つまっている。また、弥生時代最大の残存長である7.24mの柱をはじめ、6,000点を超える多量の建築部材が出土しており、弥生時代の建築を解明するうえで貴重な資料となっている。

周辺域は湿地が広がる低湿な環境にあり、随所で水田遺構が確認されている。また、ヒエやアワ、リョクトウやエゴマ等の植物遺存体出土しており、水田耕作のみならず、畑作が行われた可能性がある。

青谷平野は三方を山で囲まれ、平野の北側に広がる内湾と合わせて山海の資源を入手できる環境にあった。トチノミ、クリ、モモ、クルミなどの植物遺存体、イノシシ、シカを主体とする獣骨、魚骨、貝類などを含む27,000点に及ぶ多種多様な動物遺存体、多量の漁撈具が出土することから、農耕だけでなく狩猟採集による食糧獲得も盛んに行われていたことがわかる。また、建築部材や木製品の原材料であった木材も、遺跡背後の谷奥や丘陵の森林が供給源と考えられ、豊かな山海資源に支えられた生業形態が明らかとなっている。

青谷上寺地遺跡では大陸系の金属器のほか、北陸産碧玉や金山産サヌカイトをはじめ国内各地からの搬入品が出土している。一方、花卉高杯のように青谷上寺地遺跡から各地に供給されたとみられる品もあり、当遺跡が日本海沿岸における交易拠点であった可能性がある。港湾施設は確認されていない。

いものの、天然の良港である内湾に臨む立地であったこと、約50点に及ぶ船の部材が出土していることから、この遺跡が「交易拠点としての港湾集落」であった蓋然性は高いといえる。

さらに、遺物の出土量や多様性のみならず、地中の嫌氣的環境によって、弥生人の脳をはじめ、人骨、木器、骨角器、繊維、動植物の遺存体など有機質遺物の遺存状態が極めて良好であることも、特筆すべき青谷上寺地遺跡の特徴である。このように多種多様な遺物が良好な遺存状態で出土し、弥生時代の様相を具体的に伝えることから、青谷上寺地遺跡は「地下の弥生博物館」と称されている。

以上のとおり、青谷上寺地遺跡は日本海沿岸の潟湖を臨む弥生集落が、環日本海沿岸地域との交流を通じて発展する姿を示す典型的な遺跡として重要であり、また良好な保存状態で出土した多種多様な遺物によって、弥生時代の生活相を具体的に知ることができる極めて貴重な遺跡であることから、平成20年3月28日に国の史跡に指定された。指定面積は約14haである。

一方で、発掘調査された面積は遺跡全体の1割にも満たず、中心域の内部構造の解明や港湾施設、首長墓の確認などの取り組むべき課題がある。また、近年の発掘調査で、古代官道（山陰道）と考えられる道路遺構と、それを基準として設定された条里地割の境界と考えられる盛土を検出しており、古代における青谷平野の様相解明も新たな課題となっている。これらの解決を図るべく、発掘調査、古環境調査、出土品の調査研究を計画的かつ有機的に進めている途上である。

第2節 遺跡の位置と環境

第1項 遺跡の地理的環境

青谷上寺地遺跡が所在する鳥取市青谷町は、鳥取県東部（旧因幡国）の西端に位置し、東西約7.7km、南北約13kmの拡がりを持つ。町域の南部にそびえる飯盛山、鉢伏山などの標高500m以上の山地から日本海側に向かって標高300m前後の溶岩台地が延び、その北端は長尾鼻、尾後鼻といった断崖となって海に突出している。

これらの溶岩台地上には、およそ5万年前に起こった大山の火山活動により降下した火山灰が、1m前後の厚さで堆積する。勝部川、日置川およびそれらの支流がこれらの溶岩台地の間を北流し、沖積平野である青谷平野を形成している。勝部川は河口付近で日置川と合流し、かつての岩島である丸山崎の東を抜けて日本海に注ぐ。青谷上寺地遺跡はこの青谷平野の南西縁、勝部川が形成した標高2～3mの三角州帯に立地する。弥生時代、遺跡の北側には砂州によって外海と遮蔽された浅い内湾（潟湖）が広がっていたが、古代以降に陸化が進み、沼沢地あるいは湿地へと移行したことが推測されている。

勝部川の東西に展開する河口の両海岸には、丸山崎をはさんで東西約1.1kmに渡って砂浜が形成されており、全国有数の「鳴り砂」の浜として知られている。また、砂浜の背後には南北0.5kmの範囲に砂丘が形成され、最高所にあたる青谷高校付近の標高は約25mである。現在は植林がなされ、畑地および宅地化が進んでいるものの、植林前は飛砂が激しく、起伏にとんだ地形であった。一方、海底は水深5m未満の地形が沖合300mまで、水深20m未満の地形が沖合約1.3kmまで広がっているが、長尾鼻周辺では北側に向かって急激に水深が深くなっている。この多様な海底地形が格好の漁場となっており、長尾鼻西側の夏泊地区では中世末から現代に至るまで、海女による潜水漁が営まれている。また、長尾鼻は鳥取県東部（因幡）と鳥取県西部（伯耆）を結んだ伯耆往来のルート上にあたり、

「長尾坂」と呼ばれた丘陵越えの道は、明治期に入って交通整備が進むまで交通の難所となっていた。

このように多様な様相を見せる青谷町の海岸部は、京都府京丹後市から鳥取県鳥取市にまたがる広大な山陰海岸ジオパーク（日本ジオパーク委員会認定）の西端にあたり、平成22年に世界ジオパークネットワークへの加盟が認定されている。

当地域の気候は典型的な日本海岸式気候であり、降雪等によって冬期の降水量が多い。ただし、北を除く三方を山地や台地で囲まれた地域的特性のため、北からの強風が吹けば季節を問わず降水量が増える傾向にある。

第2項 周辺の遺跡と歴史的環境

1 旧石器・縄文時代

青谷上寺地遺跡の周辺では、旧石器時代にさかのぼる遺跡は確認されていない。

青谷平野においては約8,000BP以降の平野の環境史が復元されており、完新世海進、すなわち縄文海進によって古青谷湾を中心とした内湾の景観が形成される。その後、気候の寒冷化による海水準の低下、主に勝部川からの土砂の供給等によって古青谷湾が縮小し、低地や三角州が拡大する。青谷上寺地遺跡周辺では、東西の丘陵上、青谷平野周辺に後晩期を中心とした縄文遺跡が散見される。

丘陵上では小浜ワラ畑遺跡（60：早期）、石脇第3遺跡（61：後期）、蔵内上長谷第2遺跡（24：前期）、蔵内上長谷第4所在遺跡（25：後期）があり、土器片が採集されている。

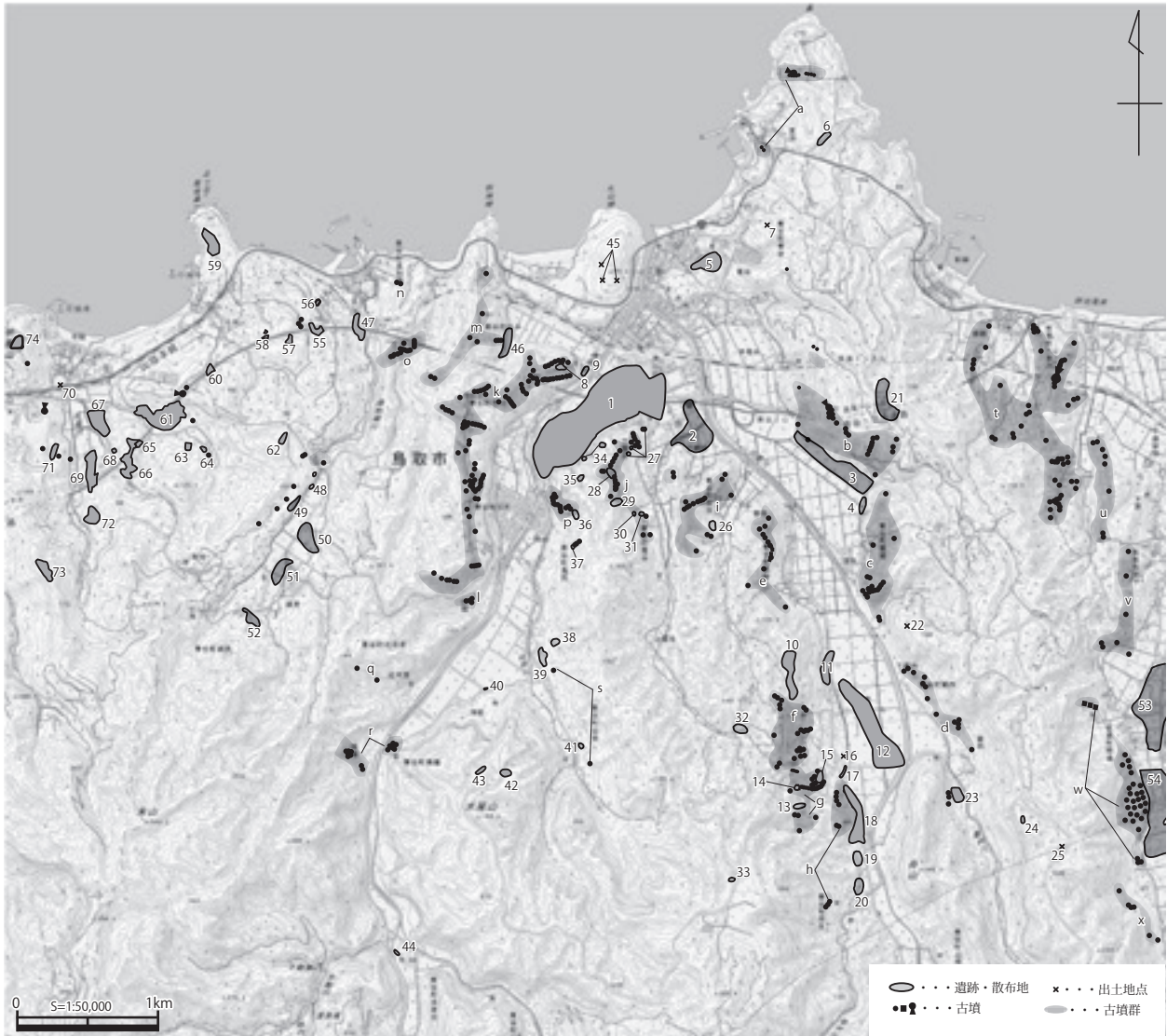
平野部では、古青谷湾の縁辺で、青谷第1遺跡（5：中期）、大坪大縄手遺跡（12：後、晩期）、大坪イカウ松遺跡（11：晩期）があり土器片が採取されている。大坪大縄手遺跡では縄文時代晩期前半（滋賀里Ⅱ～Ⅲa式、篠原式）の土器がまとまって出土しているほか、土偶の頭部片や東日本系土器（大洞BⅠ式、安行Ⅲa式）が出土している。青谷横木遺跡（3）では縄文時代後期から晩期にかけて堆積した貝層や、杭群、丸木舟が出土しており、古青谷湾を利用した生業が窺われる。青谷上寺地遺跡（1）からは後・晩期の粗製深鉢等が出土している。

2 弥生時代

縄文時代晩期から弥生時代前期頃には、青谷上寺地遺跡の周辺は氾濫低地となり、三角州が発達する。青谷上寺地遺跡では弥生時代前期後葉以降、三角州の微高地上に集落が形成され、その西側の低地部に水田域が形成される。その他、青谷平野縁辺では青谷横木遺跡（3）があり、包含層から前期の土器が出土している。青谷第1遺跡（5）は、かつて存在した内湾（潟湖）と日本海とを画する砂丘上に立地し、地表面下6.3mの位置から弥生土器が須恵器等とともに出土している。勝部川左岸の丘陵上に立地する青谷第4遺跡（8）では、中期の壺形土器の完形品が出土している。

日置川流域では、青谷上寺地遺跡の2.5kmほど上流にあたる谷奥部で、集落遺跡が集中している。カヤマ遺跡（18）、蔵内水船遺跡（23）では後期前葉、大口第2遺跡（14）では後期中葉から後葉、大口第3遺跡（15）では後期前葉から後葉の竪穴建物跡が検出されている。

勝部川流域では、青谷上寺地遺跡の2.2kmほど上流にあたる谷奥部に、後期前葉の土器が出土した鳴滝宮ノ前遺跡（40）がある。また、青谷町の西端を流れる長和瀬川の西側にあたる湯梨浜町の池ノ谷第2遺跡（55）では、「泊銅鐸」として知られる外縁付鈕Ⅰ式流水文銅鐸が出土している。



遺跡・散布地・出土地点

- 1 青谷上寺地遺跡 2 善田傍示ヶ崎遺跡 3 青谷横木遺跡 4 養郷岩手遺跡 5 青谷第1遺跡 6 青谷第2遺跡 7 青谷第3遺跡
 8 青谷第4遺跡 9 岩本遺跡 10 岩坪天神第2遺跡 11 大坪イカウ松遺跡 12 大坪大縄手遺跡 13 大口第1遺跡 14 大口第2遺跡
 15 大口第3遺跡 16 大坪岸ノ上遺跡 17 カヤマ遺跡(藤田地区) 18 カヤマ遺跡 19 早牛宝免遺跡 20 早牛中瀬遺跡 21 青谷ガアガ遺跡
 22 養郷田口ノ二出土地点 23 蔵内水船遺跡 24 蔵内上長谷第2遺跡 25 蔵内上長谷第4所在遺跡 26 善田才ノ尾遺跡 27 露谷鳥越遺跡
 28 露谷第1遺跡 29 露谷第2遺跡 30 石畑遺跡 31 露谷上露宮遺跡 32 露谷第3遺跡 33 早牛六原出土地 34 吉川北谷田遺跡
 35 吉川中谷田遺跡 36 亀尻虎尾遺跡 37 亀尻家下ノ前遺跡 38 亀尻上空家遺跡 39 亀尻南谷遺跡 40 鳴滝宮ノ前遺跡
 41 山田保珍場遺跡 42 山田横道遺跡 43 鳴滝宮坂散布地 44 田原谷宮下所在遺跡 45 青谷一本松遺跡 46 井手上遺跡
 47 長和瀬谷田遺跡 48 伏尾第3遺跡 49 伏尾第2遺跡 50 長和瀬稲葉尾遺跡 51 絹見尾崎遺跡 52 絹見大谷所在遺跡
 53 陸逢遺跡 54 山王尻遺跡 55 池ノ谷第2遺跡 56 二ノ池ノ谷遺跡 57 小浜千速遺跡 58 小浜小谷遺跡 59 おご遺跡 60 小浜ワラ畑遺跡
 61 石脇第3遺跡 62 伏尾第1遺跡 63 石脇蔵近第1遺跡 64 石脇蔵近第2遺跡 65 寺戸第1遺跡 66 寺戸第2遺跡 67 宮ノ山遺跡
 68 九塚遺跡 69 石脇第1遺跡 70 前田遺跡 71 横吹遺跡 72 石脇第2遺跡 73 寺屋敷遺跡 74 石脇二ノ甲亀山遺跡

古墳群

- a 長尾鼻古墳群 b 阿古山古墳群 c 養郷古墳群 d 蔵内古墳群 e 奥崎古墳群 f 大坪古墳群 g 大口古墳群 h 早牛古墳群 i 善田古墳群
 j 露谷古墳群 k 吉川古墳群 l 川積古墳群 m 井手古墳群 n 長和瀬古墳群 o 長谷古墳群 p 亀尻古墳群 q 北河原古墳群 r 鳴滝古墳群
 s 山田古墳群 t 八束水古墳群 u 下原古墳群 v 会下古墳群 w 陸逢古墳群 x 山宮古墳群

第3図 青谷上寺地遺跡周辺の遺跡分布

3 古墳時代

古墳時代前期では、日置川の中流左岸の丘陵上にある大口第2遺跡(14)で、尾根上に溝で区画した方墳群が検出され、周溝内から多数の供献土器が出土している。また堅穴建物跡が大口第3遺跡(15)、カヤマ遺跡(18)で確認されている。

中期以降は、青谷平野を取り巻く丘陵部に、奥崎古墳群(e)、吉川古墳群(k)、阿古山古墳群(b)など、尾根筋に円墳を中心とする群集墳が展開する。これらは阿古山22号墳に代表される、1枚の板石で玄室の各壁を構成する扁平板石組の石室が採用されており、地域的な特徴となっている。なお、当該期の集落遺跡の様相は明らかとなっていない。

4 古代以降

青谷町域は律令制下の因幡国気多郡日置郷、勝部郷に相当する。青谷上寺地遺跡では、古代官道(山陰道)と考えられる盛土による道路遺構と、これに直交する帯状の盛土遺構が検出されており、条里遺構と評価される。青谷横木遺跡(3)では、青谷上寺地遺跡と同時期と考えられる道路遺構や10世紀代の条里地割のほか、多量の木簡、木製祭祀具、「女子群像」を描いた板が出土しており、気多郡衙の出先機関の存在が推測されている。青谷上寺地遺跡の南東に位置する善田傍示ヶ崎遺跡(2)からも同期の木製祭祀具が多量に出土している。

青谷町内の丘陵上には、中世に築かれた城館跡が約20ヶ所確認されている。青谷町を含む旧気高郡域は、伯耆の国境寄りにあたり、港などの交通や物流の要衝があり、天正期には毛利、織田の勢力に挟まれ、合戦の舞台となった。郡域の中心となる鹿野城は近世初期に亀井氏により近世城郭として整備され、城下町が形成されており、青谷平野では、青谷横木遺跡の周辺に残る南東から北西に延びる地割の痕跡から亀井氏によって整備された亀井畷の存在が推定されている。青谷は亀井氏の御朱印貿易の港町として重視され、元和3(1617)年に亀井氏が石見国津和野へ転封された後も伯耆街道の宿場として存続し、勝部川の河口にあたる芦崎湊は藩倉が置かれ、北前船の寄港地として栄えた。

註 ()内の数字は第3図の遺跡番号。

第2章 第20次発掘調査の目的と経緯

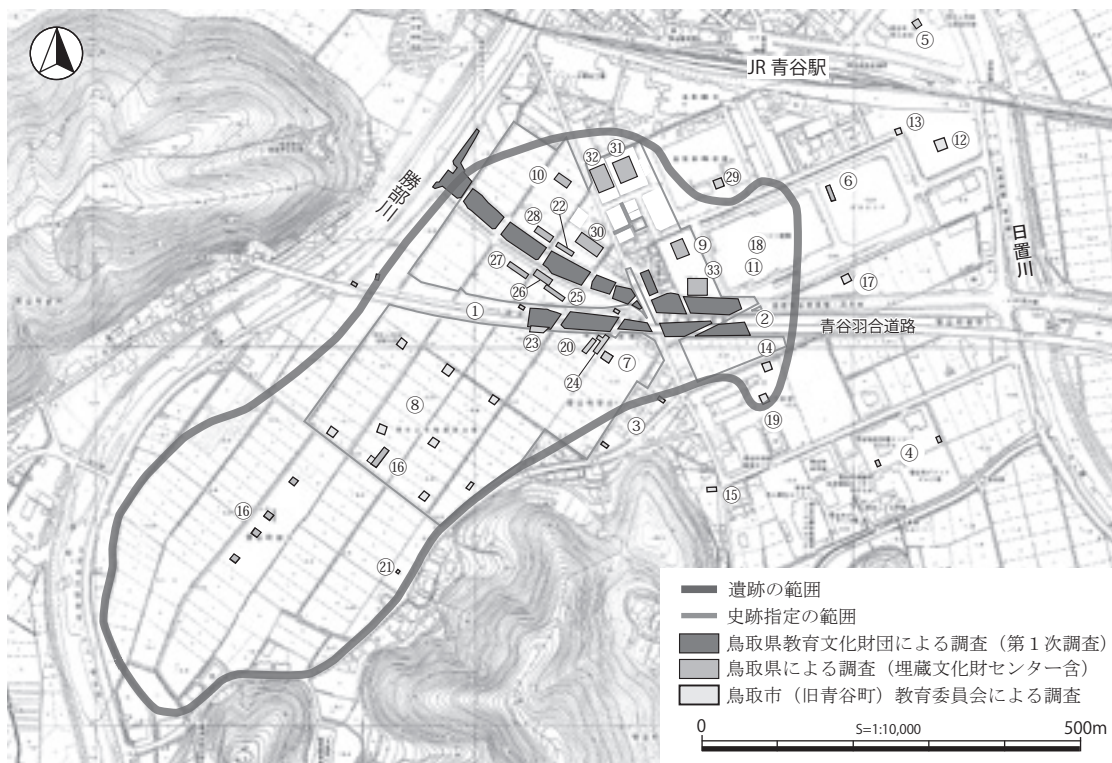
第1節 青谷上寺地遺跡発掘調査の目的と経緯

第1項 既往調査の目的と経緯

青谷上寺地遺跡は、平成3年度に「一般国道9号青谷・羽合道路改築工事」、「一般県道青谷停車場井出線整備工事」に伴い、鳥取県教育委員会によって実施された踏査によって発見された遺跡である。以降、令和5年度に至るまで鳥取県（及び財団法人鳥取県教育文化財団）によって20次に及ぶ発掘調査を実施してきており、鳥取市教育委員会においても、試掘調査を中心とした発掘調査を重ねてきている（第4図、第1表）。鳥取県による調査の目的は時期によって異なり、大きく以下の4つに分けられる。

1 開発事業に伴う発掘調査 第1次（平成10～13年度）

「一般国道9号青谷・羽合道路改築工事」、「一般県道青谷停車場井出線整備工事」に伴う記録保存を目的とした発掘調査で、財団法人鳥取県教育文化財団（当時）により実施された。この調査により、内海に面し重層的に遺構の検出される微高地（中心域）と、それを取り囲む大規模な護岸施設を伴う溝が確認され、そこから全国的にも例をみない良好な保存状態を保った精緻な木製容器、建築部材、鉄器、銅製品、骨角器など様々な遺物が出土した。なかでも微高地東側を区画する溝から出土した大量の人骨には殺傷痕の認められるものがあり、「倭国大乱」を示す可能性が示唆されるとともに、頭蓋骨中に脳が遺存しているものが確認されたことから全国的に大きな注目を浴び、「地下の弥生博物館」と称されるなど、遺跡の重要性が広く認知されることとなった。



第4図 青谷上寺地遺跡の範囲と既往の発掘調査地点（令和5年度時点）

第1表 青谷上寺地遺跡発掘調査一覧

	年度	調査目的	調査面積 (m)	調査主体	調査結果	報告書
①	平成8年 ～10年度	一般国道9号青谷・羽合道路、一般県道青谷停車場井手線整備工事に係る試掘調査	343.50	青谷町教育委員会	土器、木製品、石器、骨角器、杭、矢板等の出土	青谷町内遺跡発掘調査報告書Ⅵ 1997 青谷町内遺跡発掘調査報告書Ⅶ 1998 青谷町内遺跡発掘調査報告書Ⅷ 1999
②	平成10年 ～13年度	(第1次調査) 一般国道9号青谷・羽合道路、 一般県道青谷停車場井手線整備工事に係る発掘調査	14,200.00	(財)鳥取県 教育文化財団	多種多量の遺物、矢板列や木造構造物、人骨多数、脳	青谷上寺地遺跡1 2000 青谷上寺地遺跡2 2000 青谷上寺地遺跡3 2001 青谷上寺地遺跡4 2002
③	平成10年度	町営住宅建設に係る試掘調査	33.04	青谷町教育委員会	遺跡の範囲外	青谷町内遺跡発掘調査報告書Ⅸ 2000
④	平成12年度	特別養護老人ホーム建設に係る試掘調査	32.65	青谷町教育委員会	遺跡の範囲外	青谷町内遺跡発掘調査報告書Ⅹ 2001
⑤	平成13年度	青谷上寺地遺跡展示館建設に係る試掘調査	10.00	鳥取県 埋蔵文化財センター	遺跡の範囲外	青谷上寺地遺跡5 2002
⑥	平成13年度	(第2次調査)(O調査区) 保存目的の発掘調査 中心域の東側範囲確認	95.00	鳥取県 埋蔵文化財センター	古墳時代まで水面下、奈良時代以降に水田	青谷上寺地遺跡5 2002 青谷上寺地遺跡8 2006
⑦	平成14年度	(第3次調査)(D調査区) 保存目的の発掘調査 中心域南側範囲確認	140.00	鳥取県 埋蔵文化財センター	廃棄された木材群の検出。弥生時代後期以降に水田化。	青谷上寺地遺跡6 2003 青谷上寺地遺跡8 2006
⑧	平成14・ 15年度	青谷町統合小学校建設に係る試掘調査	850.00	青谷町教育委員会	水田域であることの確認(溝、畦畔の検出)	青谷町内遺跡発掘調査報告書Ⅺ 2004 青谷町内遺跡発掘調査報告書Ⅻ 2005
⑨	平成15年度	(第4次調査)(C調査区) 保存目的の発掘調査 中心域の内容確認、遺跡初期段階の遺構の有無確認	100.00	鳥取県 埋蔵文化財センター	弥生時代後期後葉までの調査、遺構の継続的かつ集中的な形成を確認	青谷上寺地遺跡7 2004 青谷上寺地遺跡8 2006
⑩	平成15年度	(第5次調査)(A調査区) 保存目的の発掘調査 中心域西側範囲の確認	136.00	鳥取県 埋蔵文化財センター	弥生時代後期後葉から古墳時代に溝が継続して形成された低湿地	青谷上寺地遺跡7 2004 青谷上寺地遺跡8 2006
⑪	平成16年度	(第6次調査)(C調査区) 保存目的の発掘調査 中心域の内容確認、遺跡初期段階の遺構の有無確認	513.00	鳥取県 埋蔵文化財センター	弥生時代中期後葉までの調査、中心域の縁辺部にあたり、周辺に工房跡が存在していた可能性	青谷上寺地遺跡8 2006
⑫	平成16年度	町営住宅建設に係る試掘調査	144.00	鳥取市教育委員会	掘り下げ中止	鳥取市内遺跡発掘調査報告書 2005
⑬	平成16年度	下水道工事に係る試掘調査	4.00	鳥取市教育委員会	遺跡の範囲外	鳥取市内遺跡発掘調査報告書 2005
⑭	平成16年度	青谷中学校校舎改築に係る試掘調査	144.00	鳥取市教育委員会	畦畔の確認	鳥取市内遺跡発掘調査報告書 2005
⑮	平成16年度	個人住宅建設に係る試掘調査	5.00	鳥取市教育委員会	遺跡の範囲外	鳥取市内遺跡発掘調査報告書 2005
⑯	平成17年度	(第7次調査)(F・G調査区) 保存目的の発掘調査 遺跡南西部における内容確認	640.00	鳥取県 埋蔵文化財センター	弥生時代後期までの調査、弥生時代後期以降に水田開発	青谷上寺地遺跡8 2006
⑰	平成17年度	工場取付道路建設に係る試掘調査	55.20	鳥取市教育委員会	掘り下げ中止	鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書 2006
⑱	平成18年度	(第8次調査)(C調査区) 保存目的の発掘調査 中心域の内容確認、遺跡初期段階の遺構の有無確認	100.00	鳥取県 埋蔵文化財センター	中心域高まりのベースとなる洪水堆積層の確認、弥生時代中期後葉の木器溜検出	青谷上寺地遺跡9 2008
⑲	平成18年度	青谷統合小学校建設に係る試掘調査	121.00	鳥取市教育委員会	疑似畦畔を確認、木庖丁出土	鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書 2007
⑳	平成19年度	(第9次調査) 保存目的の発掘調査 中心域南側の区画構造の確認、中心域から周辺水田域に至る境界部分の様相把握	105.00	鳥取県 埋蔵文化財センター	弥生時代後期までの調査、中心域南側区画溝と護岸施設と水田域に至る地形変化を確認	青谷上寺地遺跡10 2009
㉑	平成19年度	個人住宅建設に係る試掘調査	7.41	鳥取市教育委員会	遺構なし	鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書 2008
㉒	平成20年度	(第10次調査) 保存目的の発掘調査 木造構造物の実態説明と中心域から水田域への移行部分の構造解明	150.00	鳥取県 埋蔵文化財センター	弥生時代後期までの調査、木造構造物が区画施設や土留めとして機能していた可能性を確認、古墳時代前期に中心域が拡張されていたことを確認	青谷上寺地遺跡11 2010
㉓	平成21年度	(第11次調査) 保存目的の発掘調査 中心域西側区画溝延長部分の追求・解明、周辺域との境界部分の機能(出入口等)の解明、水田域移行部分の構造解明	225.00	鳥取県 埋蔵文化財センター	中心域西側区画溝が南伸することを確認するとともに、その掘削が弥生時代中期に遡る可能性も確認	青谷上寺地遺跡12 2012
㉔	平成22年度	(第12次調査) 保存目的の発掘調査 中心域南側区画溝と東側区画溝の変遷及び相関関係の検証、中心域から周辺域にかけての地形変化の確認、水田へ移行する景観の確認	300.00	鳥取県 埋蔵文化財センター	中心域南側区画溝と護岸施設の変遷を確認、南側区画溝と東側区画溝の先後関係を確認	青谷上寺地遺跡12 2012
㉕	平成23年度	(第13次調査) 保存目的の発掘調査 中心域西側区画溝の変遷過程の確認、中心域から周辺域にかけての集落様相の確認、湿地へ移行する景観の把握	180.00	鳥取県 埋蔵文化財センター	中心域西側区画溝と護岸施設の変遷を確認	青谷上寺地遺跡13 2014
㉖	平成24年度	(第14次調査) 保存目的の発掘調査 木造構造物、矢板列の性格と機能の解明、湿地における土地の利用法の確認	225.00	鳥取県 埋蔵文化財センター	木造構造物が盛土の土留めとして一体的に構築された可能性を確認、古代「山陰道」と考えられる道路遺構を検出	青谷上寺地遺跡13 2014
㉗	平成25年度	(第15次調査) 保存目的の発掘調査 溝状遺構の走向と機能の解明、湿地における土地の利用法の確認	180.00	鳥取県 埋蔵文化財センター	湿地を流下する溝と護岸施設の変遷を確認、古代道路遺構に直交し「条里地割」と考えられる盛土を検出	青谷上寺地遺跡14 2017
㉘	平成26・ 27年度	(第16次調査) 保存目的の発掘調査 溝状遺構の走向と機能の解明、湿地における土地の利用法の確認	225.00	鳥取県 埋蔵文化財センター	木造構造物を伴う帯状盛土を確認、「条里地割」と考えられる盛土から勝示木簡出土	青谷上寺地遺跡14 2017
㉙	平成28年度	遺跡の範囲確認	135.00	鳥取市教育委員会	土器、木器等遺物出土	平成29(2017)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書
㉚	平成28・ 29年度	(第17次調査) 保存目的の発掘調査 中心域内部における集落機能の確認、西側区画溝の走向・規模の確認	525.00	鳥取県 埋蔵文化財センター	集落内でのガラス玉生産を示す加工途中品出土、古代の造成の痕跡を確認	青谷上寺地遺跡15 2019・2020
㉛	平成30・ 令和元年度	(第18次調査) 保存目的の発掘調査 集落北エリアの実態把握、中心域の北側に推定される海岸線の確認	621.00	鳥取県埋蔵文化財センター	古墳時代前期前葉の木造構造物を伴う造成跡検出、衰退期と考えられていた古墳時代前期まで遺跡が存続することを確認	青谷上寺地遺跡16 2023
㉜	令和2・3 年度	(第19次調査) 保存目的の発掘調査 集落北エリアの実態把握	693.00	とっとり弥生の王国 推進課	弥生時代終末期以降の造成土上で、古墳時代前期前葉の建物跡を中心とする遺構群を確認	青谷上寺地遺跡17 2025
㉝	令和4・5 年度	(第20次調査) 保存目的の発掘調査 集落東エリアの実態把握	594.00	とっとり弥生の王国 推進課	弥生時代後期から古墳時代前期前葉に至る中心域東側の変遷を確認。第1次調査で出土したものと一連の人骨群を検出。	本書
調査面積計			21,831.8			

※表中のアルファベット表記の調査区名は、平成17年度まで使用していた調査区名。

2 遺跡保護を目的とした発掘調査 第2次～第10次（平成13～20年度）

第1次発掘調査によって遺跡の重要性が確認されたことによって、平成13年度、鳥取県教育委員会事務局文化課（当時）に「妻木晩田・青谷上寺地遺跡整備室」が設置され、鳥取県が青谷上寺地遺跡の保存・活用・整備に取り組むこととなった。同年度、これを受けて鳥取県埋蔵文化財センターに「青谷上寺地遺跡調査係」を設置、保存・整備を目的とした発掘調査を実施していくこととなった。調査にあたっては、調査の方法や計画について学術的に検討するため、「青谷上寺地遺跡発掘調査委員会」（委員長：工楽 善通大阪府立狭山池博物館長）を設置し、諸分野の専門的な見地から指導、助言を仰ぐこととした。

この遺跡保存を目的とした調査は、2つの時期に分けられる。前半期（平成13～17年度）は、国指定史跡に向けて遺跡範囲の確定に重点を置いたもので、第2次発掘調査（中心域東側）、第3次発掘調査（中心域南側（1回目））、第4次発掘調査（中心域東部）、第5次発掘調査（中心域西側）、第6次発掘調査（中心域東部（2回目））、第7次発掘調査（遺跡南西部（水田域））と、遺跡縁辺部と目される箇所の発掘調査を実施していった。加えてボーリング調査、地下レーダー探査等、多様な手法を駆使しつつ遺跡範囲の確定を行った。ここまでの国史跡指定を目指した一連の調査成果は、報告書『青谷上寺地遺跡8』としてまとめられ、平成20年3月28日、国史跡に指定される際の基礎資料となった。

後半期（平成18～20年度）は、未解明な部分の多かった遺跡の成り立ちと中心域縁辺の実態解明を目指した調査を行った。第8次発掘調査は第4・6次発掘調査区の同一地点について更に下層を掘り下げることで中心域成立以前の層（縄文時代後～晩期）まで確認し、中心域を構成する微高地の成り立ちの検討に資するデータを得ている。その後、第9次発掘調査（中心域南辺の区画溝（SD33））、第10次発掘調査（中心域西辺の区画溝（SD11））と、中心域縁辺部、特に区画溝の構造及び変遷解明に主眼を置いた調査を実施した。

その結果、遺跡の特性として次の点を示すことができるようになった。

- ① 遺跡は、弥生時代前期から中期前葉にかけて成立し、弥生時代後期にその盛期を迎える。
- ② 遺跡は集落拠点であった「中心域」とこれに連なる水田域を主要エリアとして展開する弥生時代の集落遺跡であり、また潟域と後背湿地に囲まれた水辺の遺跡である。
- ③ 低湿地という被災しやすい立地環境を克服するために人々が護岸施設や溝、砂防施設などの大規模なインフラ整備を積極的に行ってきた。
- ④ 不安定な低湿地を選地し、大規模なインフラ整備を行いながら長く集落を営んだ背景には、可能な限り水域近くに拠点を置いて外洋進出の利便性を図る目的があり、積極的な漁業戦略に留まらず、物流拠点を集落経営の根幹に据えていた可能性がある。
- ⑤ 高い技術の木器製作などの手工業生産を盛んに行っていた集落であった。

3 集落全体像解明を目的とした発掘調査 第11次～第16次（平成21～27年度）

上記したように、第10次までの発掘調査で遺跡の成り立ちや特性などその概略が明らかとなってきた。しかし発掘調査面積が遺跡全体の1割に達していないこともあり、未解明な部分も多く集落の全体像解明に至っていないと考えられた。

そこで鳥取県埋蔵文化財センターでは、中心域が拡大し、生産、交易、祭祀等の拠点として盛期を

迎えたと考えられる弥生時代後期後葉という時期に焦点を絞り、「交易拠点としての港湾集落」として捉えられる青谷上寺地遺跡の特性をより際立たせるための調査に取り組むこととなった。

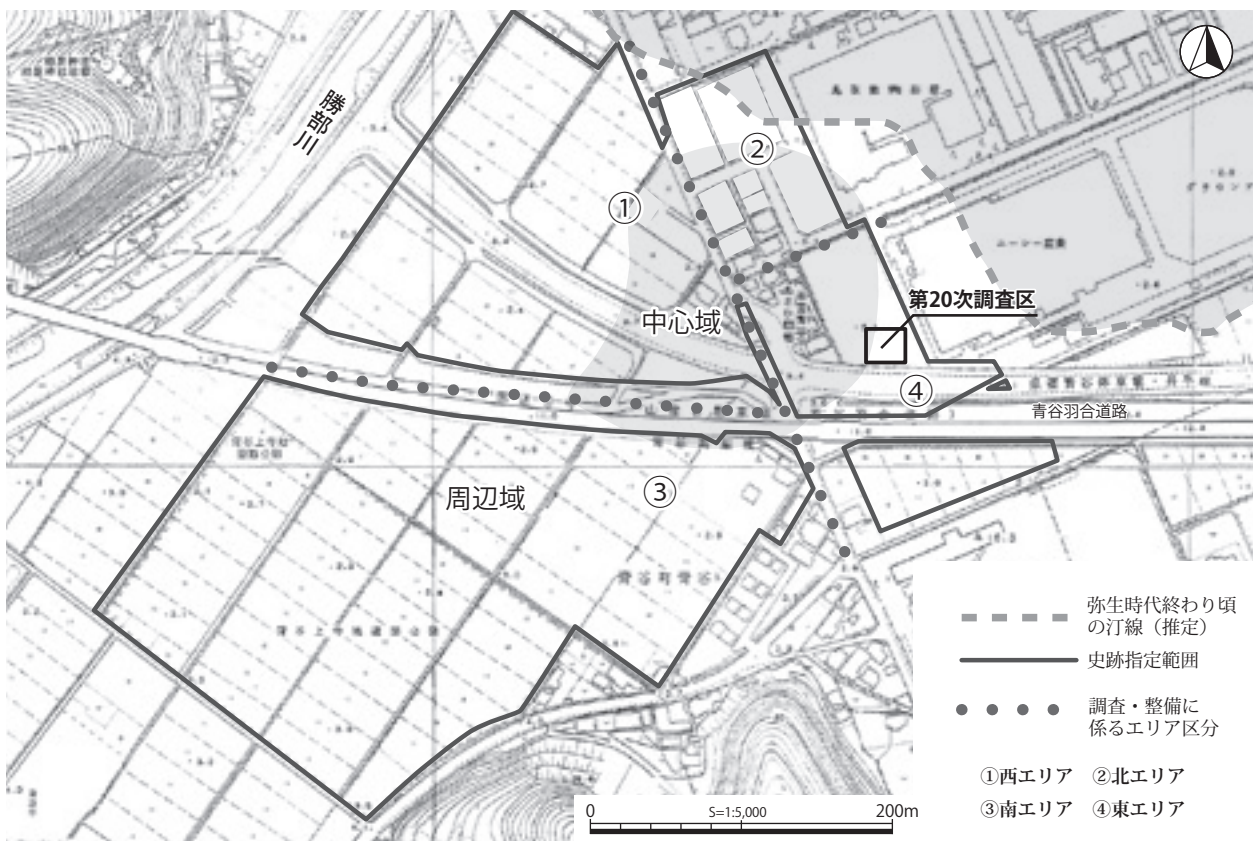
第11・13次発掘調査では中心域西側区画溝（SD11）、第12次発掘調査では調査区南側区画溝（SD33）及び東側区画溝（SD27・38）、第14～16次発掘調査は中心域の西側周辺域に確認されている大型矢板列及び溝状遺構の性格解明及び周辺環境の把握を目指して調査を行っており、それぞれ成果が得られている。

その他の成果として、第13・14次発掘調査において条理地割の盛土（SM 1・2）が接続する道状遺構（SF 1）が確認され、古代山陰道の可能性が指摘された。続く第15・16次発掘調査においてもSM 1・2に並行する古代の盛土遺構（SM 3～5）を検出しており、条理地割が良好な遺存状態で確認されており、弥生時代のみならず、古代においても青谷上寺地遺跡の重要性が確認されることとなった。

4 史跡整備のための発掘調査 第17次～第20次（平成28年～令和5年度）

平成20年国史跡指定後、平成21年度に鳥取県教育委員会により『国史跡青谷上寺地遺跡保存管理計画・整備活用基本計画』が策定され、遺跡の整備、活用へ向けた取り組みが開始された。その後平成28年度に史跡全体を対象とした整備事業に着手（整備基本計画の詳細化及び基本設計）することとなったため、その前年の平成27年度に今後の発掘調査計画の見直しを行い、新たに「東西南北」のエリア（第5図）を設定し南エリアを除いた各エリアに以下のように調査課題を整理した。

- ①西エリア a.中心域内部における集落機能の確認
b.西側区画溝（SD11）の構造解明



第5図 調査、整備に係るエリア区分

- ②北エリア
 - a.中心域と潟湖との境界（汀線）の確認と構造解明
 - b.港湾施設の確認
 - c.中心域内部における集落機能の確認
- ④東エリア
 - a.中心域と潟湖との境界（汀線）の確認と構造解明
 - b.港湾施設の確認
 - c.中心域内部における集落機能の確認

また、同じく県内の弥生時代遺跡として整備・活用を進めている妻木晩田遺跡と連携を図るため、「とっとり弥生の王国」として一体的に活用、情報発信を進める体制を構築するとともに、両遺跡の指導機関の在り方を見直し、整備活用部会と調査研究部会（青谷上寺地遺跡担当と妻木晩田遺跡担当）で構成される「とっとり弥生の王国調査整備活用委員会」を設置し、両遺跡間で情報を共有し、調査研究、整備活用、情報発信に一体的に取り組む体制を整えた。

以上の経緯から、平成28・29年度に実施した第17次発掘調査より史跡整備事業を見据えた「史跡等内容確認調査」を実施している。

第17次発掘調査では、前記調査課題の①-a・bの解明を目的に、調査を実施した。そのうち、①-b「西側区画溝（SD11）の構造解明」については、設定した調査区内では検出されず、より西側に存在していることが想定された。また弥生時代終末期から古墳時代前期の遺物包含層（6a層）下面に、多数の土坑、溝、ピット状遺構が検出され、それら遺構埋土中及び6a層中より多量の石製管玉・ガラス小玉とともに石針・石鋸、被熱し溶着したガラス塊が出土した。遺物と遺構との関連性は不明であるが、中心域西端部で行われた生産活動をうかがうことのできる成果が得られた。

平成30・令和元年度に、前記調査課題の②-a・b・cの解明を目的として実施した第18次発掘調査では、弥生時代終末期の砂層を基盤とする古墳時代前期前葉の造成遺構を確認した。調査の結果、この造成遺構は、DKP（大山倉吉軽石）や白色ロームとみられる本来は丘陵上に堆積する土砂や、海砂とみられる細砂を、木製の土留めや芯材を設置しながら土手状に積み重ねることで構築されるものであることが判明した。従来、集落の衰退期として捉えられていた当該期の様相の一端が示され、集落の変遷についての知見が得られた点は特筆される。ただし、この造成土は調査区全面に広がっており、造成土上で検出した遺構の性格も不明であったため、どのような地形が造成され、そこがどのように利用されていたかについては課題として残された。

この課題を解明するため、令和2年3月の調査研究部会（青谷上寺地遺跡担当）の審議を経て、令和2・3年度に実施することとなった第19次発掘調査は、具体的な調査目的を

- ア 中心域の北側における海際の地形を確認する。
- イ 第18次調査で確認した造成遺構の範囲及び目的に関する情報を得る。
- ウ 古墳時代から古代にかけての土地利用の様相を明らかにする。

とし、特にイの目的を達成するため、第18次発掘調査区の西側に近接する調査区を設定した。2か年の発掘調査の結果、やはり弥生時代終末期の堆積を基盤層とする造成土層を確認しただけでなく、その上面で古墳時代前期前葉に属す布掘建物、竪穴建物、平地建物といった各種建物を中心とする遺構群を検出した。さらに、遺構の保護を最大限図りながら、部分的に造成土中の遺構及び弥生時代終末期層の調査を行った。

第2項 第20次発掘調査の目的と経緯

令和4年3月の調査研究部会の審議を経て、令和4・5年度に東エリアを対象とした第20次発掘調査を実施することとなった。本調査では、前記調査課題の④-a・b・cに加え、第1次調査県道8区で検出された中心域東側区画溝SD38 およびそこから出土した人骨の再評価を目的としたため、調査区をSD38の北側延長部分に設定した。第1次調査の状況から、取扱いに注意を要する人骨や木器等が大量に出土することが想定されたことから、本調査は慎重を期して1か年目を人骨出土地点に近い調査区南辺の幅2.5mの範囲でSD38と人骨の出土状況を確認する予備調査、2か年目をこの成果を踏まえたうえで、調査区全面を対象とする本格調査と位置づけ実施した。

2か年の調査の結果、SD38を基軸とする弥生時代後期～古墳時代前期前葉の中心域東側縁辺部の変遷を確認し、造成が繰り返された中心域東側縁辺部の特徴を捉えることができた。これは、東エリアのみならず中心域全体の変遷と、構造、土地利用の解明に資する成果となった。また、弥生時代後期後葉段階のSD38は、第1次調査県道8区からの延長部分であることを確認し、その埋積の最終段階で埋没した人骨を検出した。これら人骨の出土状況や特徴を精査することで、人骨群全体の形成過程と、その背景にある当時の葬送儀礼に関する情報が得られた点は特筆される。

第3項 調査体制

以下の体制で青谷上寺地遺跡第20次発掘調査を実施した。

とっとり弥生の王国調査整備活用委員会（発掘調査実施時）

調査研究部会 青谷上寺地遺跡担当

座長 木下 尚子（熊本大学名誉教授）

副座長 野島 永（広島大学大学院教授）

委員 辻 誠一郎（東京大学名誉教授）

委員 降幡 順子（京都国立博物館保存科学室長）

委員 長友 朋子（立命館大学文学部教授）

調査指導・協力 文化庁文化財部記念物課、国立科学博物館、鳥取市教育委員会、鳥取市青谷町総合支所

令和4年度

調査主体 とっとり弥生の王国推進課

課長 中森 祥

青谷かみじち史跡公園整備室

室長 原田 雅弘

課長補佐 濱田 竜彦

係長 湯村 功、濱本 利幸（～9月30日）、下江 健太（10月1日～）、
中嶋 孝行、北浦 弘人

文化財主事兼係長 高橋 章司、岡野 雅則

文化財主事 北 浩明、酒井 雅代、門脇 隆志

会計年度任用職員 長谷川 藍子

うち発掘調査担当 高橋 章司、門脇 隆志
発掘調査支援業者 株式会社島田組
現場代理人 山本 瞬
調査補助員 樽谷 雅幸

令和5年度

調査主体 とっとり弥生の王国推進課
課 長 中森 祥
青谷かみじち史跡公園準備室
(組織改変により令和6年3月1日～鳥取県立青谷かみじち史跡公園)
室 長 西村 芳将 (令和6年3月1日～ 所長)
課長補佐 濱田 竜彦
係 長 湯村 功、下江 健太、中嶋 孝行
文化財主事兼係長 高橋 章司、岡野 雅則
文化財主事 北 浩明、門脇 隆志
会計年度任用職員 浅野 充伸
うち発掘調査担当 高橋 章司、門脇 隆志
発掘調査支援業者 株式会社島田組
現場代理人 山本 隆広
調査補助員 前田 一樹

令和6年度

調査主体 鳥取県立青谷かみじち史跡公園
所 長 西村 芳将
課長補佐 濱田 竜彦、北川 泰子
係 長 湯村 功、河合 章行
文化財主事 高橋 章司、家塚 英詞、北 浩明、門脇 隆志
会計年度任用職員 中嶋 孝行

令和7年度

調査主体 鳥取県立青谷かみじち史跡公園
所 長 西村 芳将
課長補佐 小口 英一郎
係 長 湯村 功、河合 章行
文化財主事 家塚 英詞、門脇 隆志、木井 荘太
会計年度任用職員 田中 弓子

【参考文献】

- 君嶋 俊行 2016 「IV 青谷上寺地遺跡の今後の調査計画について」『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報 2015』鳥取県埋蔵文化財センター
- 財団法人鳥取県教育文化財団 2000 『青谷上寺地遺跡 1』鳥取県教育文化財団調査報告書 67
- 財団法人鳥取県教育文化財団 2000 『青谷上寺地遺跡 2』鳥取県教育文化財団調査報告書 68
- 財団法人鳥取県教育文化財団 2001 『青谷上寺地遺跡 3』鳥取県教区文化財団調査報告書 72
- 財団法人鳥取県教育文化財団 2002 『青谷上寺地遺跡 4』鳥取県教区文化財団調査報告書 74
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2002 『青谷上寺地遺跡 5 試掘調査概要報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2003 『青谷上寺地遺跡 6 D 調査区発掘調査概要報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2004 『青谷上寺地遺跡 7 A・C 調査区発掘調査概要報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 7
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2006 『青谷上寺地遺跡 8 第2～7次発掘調査報告書』鳥取県埋蔵文化財センター発掘調査報告 10
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2008 『青谷上寺地遺跡 9 第8次発掘調査報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 21
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2009 『青谷上寺地遺跡 10 第9次発掘調査報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 27
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2010 『青谷上寺地遺跡 11 第10次発掘調査報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 31
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2011 『青谷上寺地遺跡景観復原調査研究報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 40
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2012 『青谷上寺地遺跡 12 第11・12次発掘調査報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 46
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2014 『青谷上寺地遺跡 13 第13・14次発掘調査報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 59
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2017 『青谷上寺地遺跡 14 第15・16次発掘調査報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 63
- 鳥取県 2020 『青谷上寺地遺跡 15 第17次発掘調査報告書』
- 鳥取県 2023 『青谷上寺地遺跡 16 第18次発掘調査報告書』
- 鳥取県立青谷かみじち史跡公園 2025 『青谷上寺地遺跡 17 第19次調査報告書』

第2節 第20次発掘調査の方法と経過

第1項 発掘調査の方法

(1) 地区割の方法と名称

青谷上寺地遺跡の発掘調査では、第1次調査（平成10～13年度実施）と整合性を担保するため、平成26年度に実施した第16次調査までは調査区の位置や遺物の取上げ等に利用する地区割に旧日本測地系第V系に基く測量系を使用していた。その後平成28・29年度に実施した第17次発掘調査以降の青谷上寺地遺跡の発掘調査においては、平面直角座標系の第V系（世界測地系）を使用することとし、第20次発掘調査においても世界測地系を使用している。

地区割については、 $X = -53.990$ 、 $Y = -31.050$ を北東隅とする $10\text{m} \times 10\text{m}$ (100m^2) の区画を WA-1 グリッドとし、10m毎に北へ WB、WC、WD・・・と南北軸の、東へ2、3、4・・・と東西軸の名称を付したグリッドを設定した。なお、グリッド名称頭文字の「W」は世界測地系によるグリッド名称であることを示す（第6図）。

(2) 発掘調査の記録

ア 遺構名称、遺構番号

調査中に検出された遺構には、検出された順に遺構番号を付与することを基本方針とし、遺構名称は遺構番号の後ろに検出された遺構の種別を組み合わせることで1土坑、2溝のように名称を付すが、種別については、調査が進む中で変更されることもある。一方で、一度付与された遺構番号については不変であり、本書においても調査時に付与した遺構番号を用いて報告を行っている。そのため、調査の過程で遺構ではないと認識されたものについては欠番とした。なお、遺構番号は第20次発掘調査で1から番号を付与しており、2か年の調査年度を跨いで連番の遺構番号とした。

平地建物のように複数の個別遺構で構成されるものは、平地建物1のように番号を種別の後ろに付して集合遺構として記載した。平地建物の溝、柱穴などは平地建物1SD1、平地建物1P1のように個別遺構とは別の名称を付した。そのため、集合遺構（本調査では平地建物1～3、平地建物4のみ）に関しては調査時とは異なる遺構名称で記載している。新旧遺構対応表は目次末に示した。

なお、弥生時代後期～古墳時代前期の中心域東側縁辺部の区画溝に関しては、第1次調査県道8区で確認されているものの延長部であるという想定から、確認した段階の順にSD38-A～Fのように後ろにアルファベットを付して記載した。また、造成遺構のうち範囲や構造が明確に捉えられるものについては、集合遺構に準じて記載した（中心域張出部、古墳時代前期造成土、弥生時代後期前葉造成土）。

イ 遺物の取り上げと遺物カード

遺物の取上げには、鳥取県で作成した遺物カードを使用した。取上げ番号は調査区ごとの通し番号とし、遺物カードに記載された項目に基づいて遺物取上台帳を作成し、出土した遺物を取り上げ、管理した。

ウ 図面記録

現地での図面記録作業は、発掘調査支援業者の調査補助員と測量士が発掘調査監理者（県調査担当者）の指示を受けながら行った。図面記録に関しては、平断面図はトータルステーションを用いた測

量と写真測量を、対象遺構や壁面の状況によって使い分けている。作成した図面は、発掘調査監理者の確認後に、現地での一次記録である「素図」として管理し、素図の情報をデジタルデータとして整理・統合し、「編集図」を作成した。「編集図」は編集可能なベクトルデータで構成し、Adobe Illustrator CS6以上での編集が可能な形（ai形式）で保存している。

エ 写真撮影

写真の撮影は、空中写真撮影を除き発掘調査監理者が行った。撮影機材としては、フィルムカメラとして中判（6×7判）一眼レフカメラを、デジタルカメラとしてデジタル一眼レフカメラ（センサーサイズフルサイズ、有効画素数2000万画素以上）、コンパクトデジタルカメラを併用した。フィルムカメラに関しては、黑白フィルム及びリバーサルフィルムを使用して撮影した。デジタル一眼レフカメラによる撮影はRAW・JPEG形式の同時保存により行った。また、デジタル一眼レフカメラによ



※グリッド名は北東隅の杭名に従っている。

第6図 青谷上寺地遺跡調査区地区割図

る撮影は、撮影対象や日付などの撮影内容を記載したメモを併せて撮影するとともに、色補正等現像作業に資するため、適宜グレーカードの写し込みも行った。空中写真撮影については、発掘調査監理者による撮影対象、範囲、アングルについての指示をもとに発掘調査支援業者が行った。

(3) 包含層及び遺構の掘削・検出方法

ア 土層観察用断面の設定

現地における土層観察には、調査区四周に設けた排水溝に伴う断面と遺構検出状況に応じて設定したベルト・サブトレンチによって掘削層位、遺構の確認を行った。

イ 包含層の掘削及び遺構の検出作業

現代造成土及び現代～近代までの耕作土層は重機(バックホー)を使用して掘削した。近世耕作土層(Ⅲ層)から律令期の湿地堆積層(V層)については、状況に応じてスコップ及び移植ゴテ、両刃草削り(小ガリ)を使用して掘削、遺構検出作業を行った。古墳時代後期以前に帰属する層(VI層以下)については、大型の道具は使用せず、移植ゴテ及び両刃草削り(小ガリ)を使用して掘削、遺構検出作業を行った。

ウ 遺構の掘削作業

遺構の掘削は後年の検証作業に資するため、完掘を行わないことを基本とした。ただし、本調査における主要な目的のひとつである人骨の出土状況の確認のため、文化庁の了承を得たうえで、SD38-Cの西肩に伴う矢板列の東側については、上層の遺構とその基盤である造成土を、ベルトを残したうえで面的に掘削し、これに伴う記録を行った。また、これら遺構に伴う木製構造物のうち、取り上げ可能なものについては持ち帰り確実に保存処理をすることとし、それ以外のものについては埋め戻しによって保護を図っている。

(4) 遺構養生、埋め戻し

発掘調査終了後、遺構の保護のため遺構面より20cmまで山砂を充填した。山砂充填作業は主に人力で行い、遺構を壊さないよう注意して実施した。山砂の上に70cm厚で真砂を充填し、表土掘削時に発生した土砂で埋め戻しを行った。

(5) 出土遺物の整理と記録

出土遺物については、現地での取り上げ後、青谷かみじち史跡公園準備室に持ち帰って、以下のような整理作業を行った。

調査終了後に洗浄、注記(マーキング)、接合、復元、実測、写真撮影を行った。

土器・土製品 器種、形状が判明ないし復元でき、調査区ないし遺構の性格を語るうえで必要と判断した個体を実測、写真撮影の対象とした。

**石器・石製品
骨角器** 調査終了後に洗浄、注記(マーキング)、写真撮影、実測を行った。器種の判別できるもの、特徴的な加工が施されているもの、使用痕の明瞭なものを実測、写真撮影の対象とした。

木器・鉄器 調査終了後に洗浄、実測、写真撮影を行った。器種や用途、または特徴的な加工
編組製品 が施されているものを実測、写真撮影の対象とした。

保管 図面、写真の記録類、出土遺物は台帳に登録して収納作業を行った。

第2項 調査研究部会（青谷上寺地遺跡担当）の記録

とっとり弥生の王国調査整備活用委員会（以下、委員会）は、鳥取県附属機関条例（平成25年10月11日鳥取県条例第53条、最終改正令和7年3月26日条例第24条）で定める附属機関である。委員会は、「青谷上寺地遺跡及び妻木晩田遺跡の調査研究及び整備活用に関する事項」を調査審議することを目的に平成28年度に設置された。発掘調査に当たっては、同委員会を構成する調査研究部会（青谷上寺地遺跡担当）（以下、部会）による専門的な見地からの指導、助言を得つつ実施した。

第9回調査研究部会（青谷上寺地遺跡担当）

開催日 令和4年3月9日（水）

場 所 鳥取市青谷町総合支所2階多目的ホール（オンライン開催）

出席者 調査研究部会委員 木下 尚子（座長）、野島 永（副座長）、辻 誠一郎、長友 朋子、
降幡 順子

鳥取市青谷町総合支所 松原 雅彦（主幹）

事務局 とっとり弥生の王国推進課

青谷上寺地遺跡整備室

北浦 弘人（室長）、岡野 雅則（文化財主事兼係長）、高橋 章司（文化財主事兼係長）、
門脇 隆志（文化財主事）

歴史遺産室 高尾 浩司（係長）

鳥取県立むきばんだ史跡公園 玉木 秀幸（係長）、森藤 徳子（文化財主事）

- 議 事
- 1 第19次発掘調査（令和3年度）の成果と課題について
 - 2 第20次発掘調査（令和4年度）の調査計画について



写真1 第9回調査研究部会の様子



写真2 第10回調査研究部会の様子

内 容 SD38 と出土人骨の評価に係る課題を確認し、これを再評価するための情報を得ることを調査目的に加えること、予備調査と本格調査による2か年の調査計画について了承を得た。また、事前に行ったボーリング調査の成果を踏まえた調査区の選定についても審議された（写真1）。

第10回調査研究部会（青谷上寺地遺跡担当）

開催日 令和4年11月18日（金）

場 所 鳥取市青谷町総合支所2階多目的ホール

出席者 調査研究部会委員 木下 尚子（座長）、野島 永（副座長）、辻 誠一郎、降幡 順子

鳥取市教育委員会事務局文化財課 加川 崇（係長）

鳥取市青谷町総合支所 松原 雅彦（主幹）

事務局 とっとり弥生の王国推進課 中森 祥（課長）

青谷かみじち史跡公園準備室

原田 雅弘（室長）、濱田 竜彦（課長補佐）、下江 健太（係長）、

岡野 雅則（文化財主事兼係長）、高橋 章司（文化財主事兼係長）、門脇 隆志（文化財主事）

歴史遺産室 大野 哲二（係長）

鳥取県立むきばんだ史跡公園 玉木 秀幸（係長）

議 事 1 SD38-2における人骨の出土状況と評価について

2 第20次発掘調査（令和4年度）の成果と課題について

内 容 予備調査によって確認したSD38の状況と課題を踏まえ、被覆する造成土の除去、調査区の拡張の可否といった、2か年目の本格調査において確実にSD38の全容を把握するための方針について審議された（写真2）。

第11回調査研究部会（青谷上寺地遺跡担当）

開催日 令和5年8月17日（木）

場 所 第20次発掘調査現場、鳥取市青谷町総合支所2階多目的ホール



写真3 第11回調査研究部会の様子（1）



写真4 第11回調査研究部会の様子（2）

出席者 調査研究部会委員 木下 尚子（座長）、長友 朋子、降幡 順子
鳥取市教育委員会事務局文化財課 加川 崇（係長）
鳥取市青谷町総合支所 松原 雅彦（主幹）

事務局 とっとり弥生の王国推進課
青谷かみじち史跡公園準備室
西村 芳将（室長）、濱田 竜彦（課長補佐）、岡野 雅則（文化財主事兼係長）、
高橋 章司（文化財主事兼係長）、門脇 隆志（文化財主事）
歴史遺産室 大野 哲二（係長）
鳥取県立むきばんだ史跡公園 玉木 秀幸（係長）

議 事 第20次発掘調査（令和5年度）の成果と課題について

内 容 古墳時代前期前葉の平地建物群と弥生時代終末期の方形張出部の調査成果とその下層に
包含されている人骨群の調査方針について審議された。検出した遺構の重要性を考慮し、
当初8月末までの予定であった調査期間を延長することとした。また、調査区南辺に深堀
トレンチを設け、弥生時代後期から古墳時代前期前葉に至るSD38全体の土層断面を記録
する方針が決定した（写真3・4）。

第3項 第20次発掘調査の経過

（1）令和4年度の発掘調査

2か年計画の1年目となる令和4年度の発掘調査は、検出が想定される遺構等の重要性を考慮し、SD38の検出を部分的にとどめる予備調査と位置づけ実施した。令和4年8月3日から8月19日までの表土掘削から着手し、重機によって地表下約2mまで掘り下げた（写真5）。9月1日に基準点測量を行い、調査区の設定、方眼測量を行った。

9月5日から人力による発掘調査に着手し、調査区四周の排水溝掘削後、中世の耕作土下の遺構を調査し、10月7日には13世紀の、さらに10月12日にはこれに先行する11世紀の水田区画を検出した。その後これらの基盤層である律令期の湿地堆積を掘削する中で、10月24日には木製人形の使用状況を留めた自然流路を検出した。続いて、調査区南壁から4mの範囲を掘削し、10月28日には古墳時代中



写真5 重機による表土掘削



写真6 作業風景（1）

期後葉～後期に属す遺物の出土状況を記録した。これ以降は、南壁から2.5mの範囲のみを掘り下げ、11月11日にはSD38の北側延長部分とみられる溝跡（SD38-A）を検出した。これに加え、南側壁面の土層断面の検討によって、中心域東側区画溝であるSD38の変遷を確認した。11月18日には、調査研究部会を実施し、これら調査成果と次年度の調査方針に関する審議を得た。11月28日に空撮を行い、11月29日に養生を含めた現場作業を終了した。

発掘調査稼働中は常時現場公開しており、11月10日に実施したイベント「青谷かみじちフェスタ」にあわせた現場の公開時の110名を含め、合計498名の見学者があった。

（2）令和5年度の発掘調査

続く2年目となる令和5年度は、4月1日から前年度に引き続き図面の修正及び現地での確認作業を実施、5月8日から人力による掘削作業を再開した。当年度の調査は、前年度の予備調査の成果を踏まえた本格調査と位置づけ、調査区全体を調査対象とし、SD38の検出を目指した。古墳時代中期後葉～後期の流入土下で、造成土上に掘り込まれた多数の遺構を確認し、6月21日に3棟の平地建物を中心とする古墳時代前期前葉の遺構群の検出を完了した（写真6）。8月17日に行った調査研究部会では、これら調査期間の延長と調査方法に関する審議を得た。

さらにその基盤層である古墳時代前期の造成土下で、9月2日に中心域側から東側に伸びる弥生時代終末期の方形の張出部を検出した。この張出部には新旧2段階があり、それぞれその東側に溝が伴うことを確認した。新段階のSD38-Bからは、流水文の陽刻された不明木器や高杯はじめ多数の木器が、新段階のSD38-Dからは土留めの一部として転用された長さ6mを超える建築材が出土したことが特筆される。続いて9月6日、SD38-B及び方形の張出部の下で人骨群を包含する範囲を検出した（写真7）。トレンチの土層断面から、これらの人骨が弥生時代後期の区画溝であるSD38-Cが埋積する最終段階（SD38-Ca）において埋没していることを確認し、同様の出土状況を呈す第1次発掘調査出土人骨と一連のものであることを確認した。また、調査区北半部においてこのSD38-Caに直交していたとみられるSD38-Cbからも多数の人骨の出土をみた。検出した人骨の記録および取上げ作業は10月19日をもって終了、発掘調査時に取り上げた人骨は608点であった。人骨の調査にあたっては、8月3日と9月6日に篠田 謙一館長をはじめとする国立科学博物館（写真8）の、9月4日と



写真7 作業風景（2）



写真8 国立科学博物館による調査指導

9月25日に国立科学博物館 坂上 和弘氏の、9月25日に鳥取大学名誉教授 井上 貴央氏の調査指導を得た。

調査区の空撮は10月6日に行い、10月20日に掘削作業を終了した。土層断面の記録と柱状土壌サンプル等の採取を終え、10月26日に現地においての調査を完了した。

調査区の埋め戻しは遺構の保護のため、調査終了面より約20cm厚で人力によって山砂を充填したのち、重機によってその上に約70cm厚で真砂、さらに表土掘削時の土砂を重ねた。

前年度同様、発掘調査稼働中は常時現場公開しており、10月7日に実施した現地説明会（写真11・12）の参加者150名を含め、580名の見学者があった。また、5月24日に青谷中学校（写真10）、5月25日に青谷高校の発掘体験を実施した（写真9）。



写真9 青谷高校の発掘体験



写真10 青谷中学校の発掘体験



写真11 現地説明会（1）



写真12 現地説明会（2）

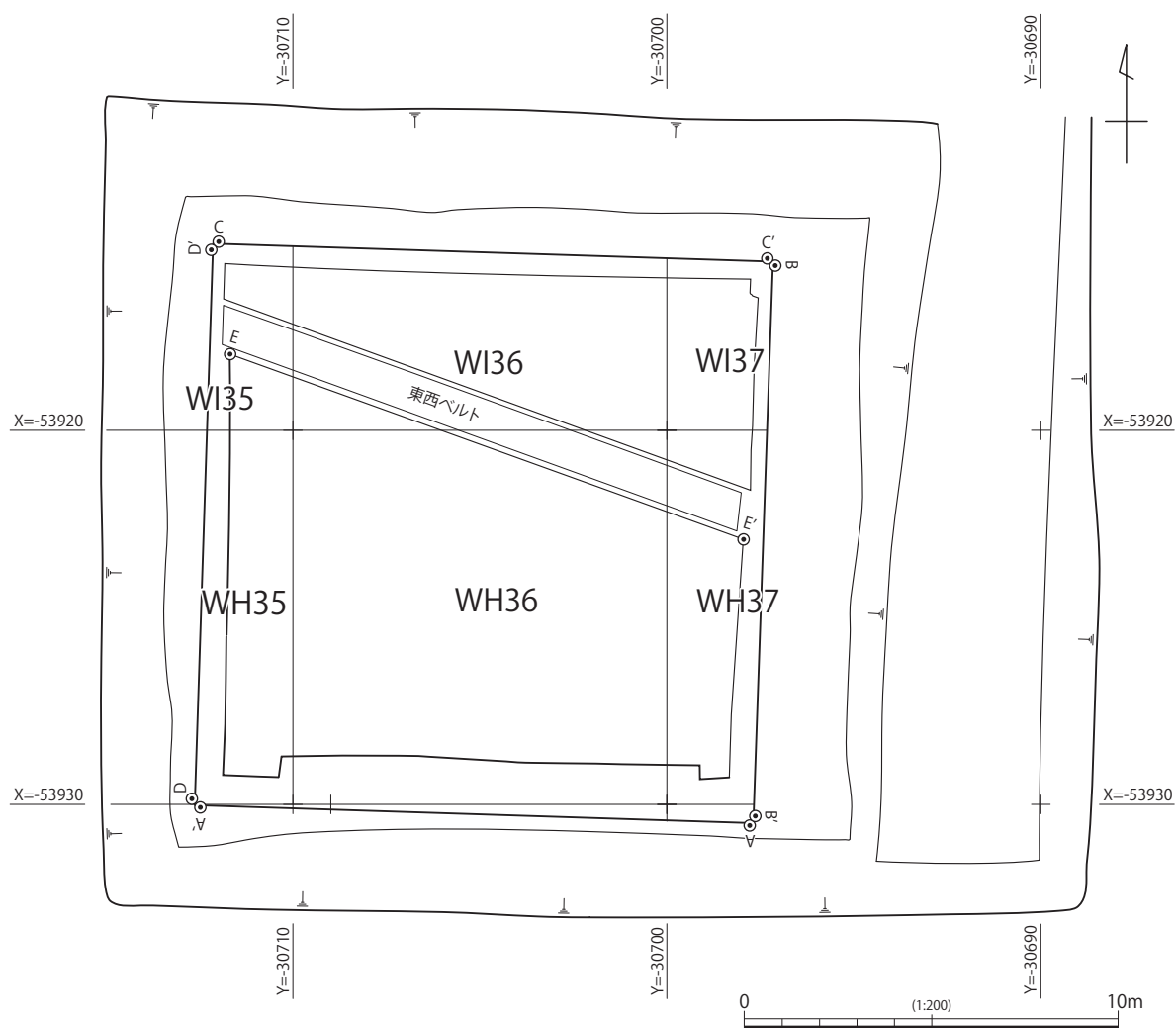
第3章 第20次発掘調査の成果

第1節 基本層序

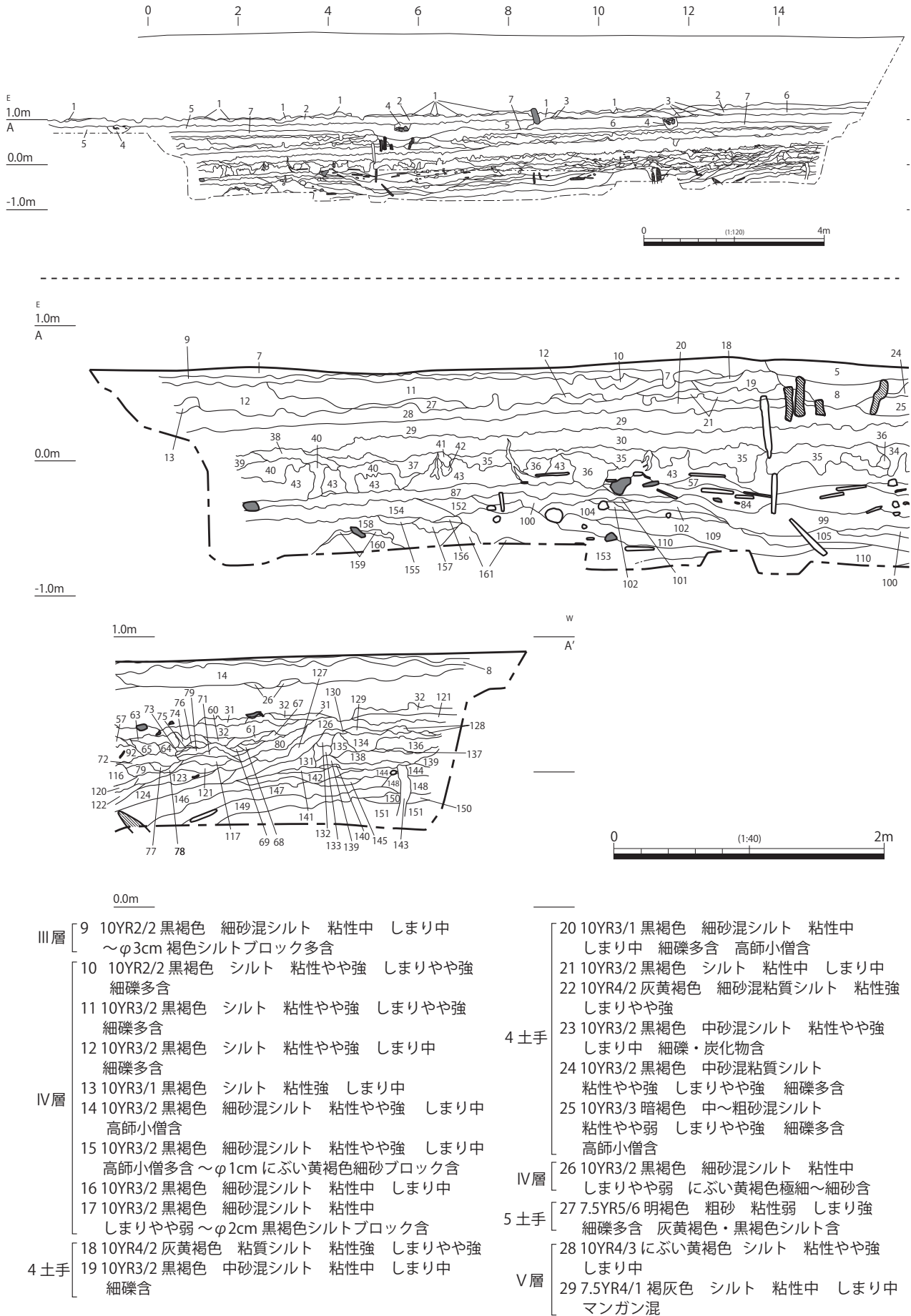
第1項 概要

第20次発掘調査区の現況は宅地であり、地表面は標高約2.7～2.9mを測る。重機による機械掘削は、安全のための勾配を確保し、地表下約1.2mの深度で犬走りを設けながら実施した。現代の客土による造成土と近世末から現代までの耕作土を対象とした地表下約2mまでの機械掘削によって、調査区内の標高は約0.6～0.8mとなった。それ以降は、人力掘削によって調査区四周に排水のための側溝を設けながら各遺構面の調査を行い、終了時の遺構面の標高は最深部で約-0.4mとなった。なお、人力掘削は、想定されるSD38延長部分の走向と直交する方向で、調査区中央やや北よりに設定した土層記録のための畔（東西ベルト）を残しながら行った。

本調査区の基本層序として、第7図に示した調査区四周の壁面と東西ベルトの土層断面を第8～12図に提示する。なお、重機による機械掘削の対象とした深度までの土層断面は南壁の土層断面図(第8図)に示すのみとする。調査区四周の壁面の土層断面は排水溝底面までを、東西ベルトの土層断面

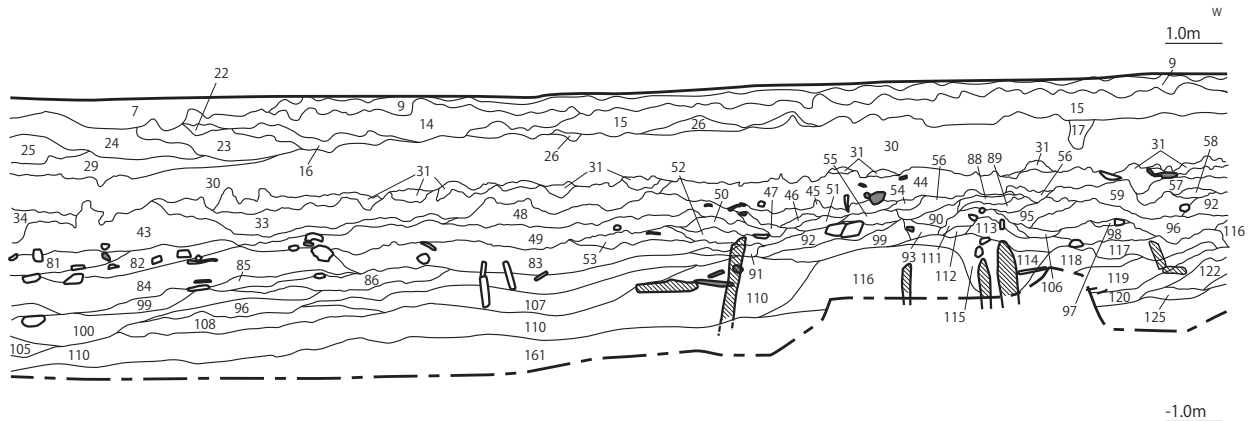


第7図 調査区全体図における土層断面位置とグリッド配置



第8-1図 調査区南壁土層断面図(1)

- I層
 - 1 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや強 しまり中
 - 2 10YR5/3 にぶい黄褐色 極細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 高師小僧含
 - 3 10YR3/3 暗褐色 シルト混細砂 粘性弱 しまり弱 ラミナ構造あり
 - 4 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性やや強 しまり弱 ~φ10cm 礫含 (暗渠)
- II層
 - 5 10YR4/1 褐灰色 シルト 粘性強 しまり中
 - 6 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性強 しまりやや強 高師小僧含
 - 7 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性やや強 しまり中 高師小僧含



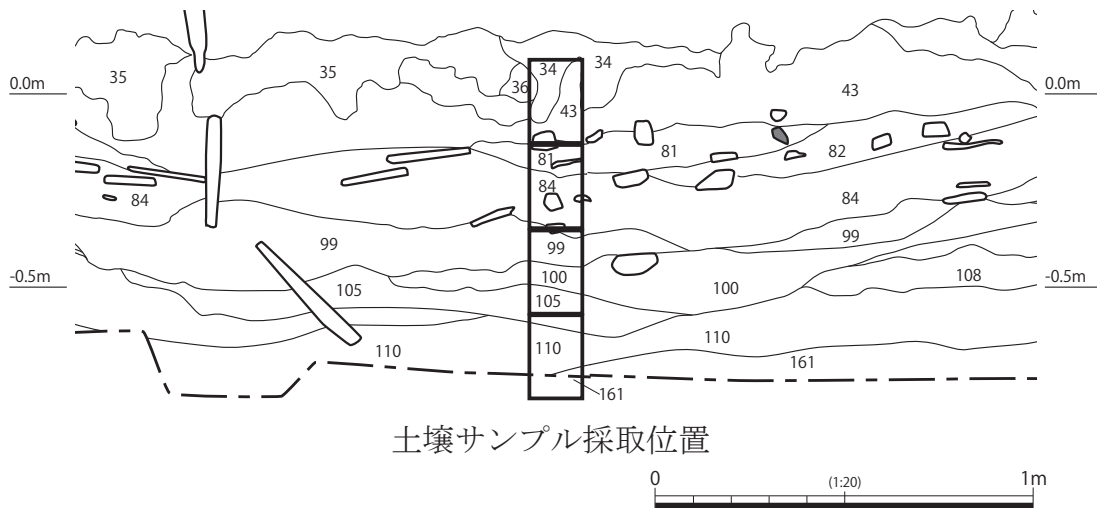
- V層
 - 30 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性やや強 しまり中 植物の葉を面的に含む
- V-4層
 - 31 7.5Y3/1オリーブ黒色 細砂混シルト 粘性中 しまり中
- VI層
 - 32 10YR3/2黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや弱 にぶい黄褐色細砂混 ~1cm炭化物少混
- SD38-A
 - 33 10YR2/2黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中 細礫少混
- 古墳時代前期造成土
 - 34 7.5YR3/1黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中
 - 35 7.5YR3/2黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや強 褐灰色粘質土混 細礫含
 - 36 7.5YR3/1黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや強
 - 37 7.5YR3/2黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや強
 - 38 7.5YR4/1褐灰色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや強
 - 39 7.5YR3/2黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや強
 - 40 7.5YR4/2灰褐色 粘質シルト 粘性中 しまりやや強 黒褐色シルト混
 - 41 7.5YR4/1褐灰色 細砂混シルト 粘性やや強 しまり中
 - 42 7.5YR3/1黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中
 - 43 7.5YR2/2黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中
 - 44 7.5YR3/1黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中
 - 45 10YR3/2黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中
 - 46 10YR3/2黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中
- VII層
 - 47 10YR2/2黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 植物片含
 - 48 7.5YR3/1黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中 マンガン混
 - 49 10YR3/1黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中
 - 50 10YR4/1褐灰色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまり中 ~2cm炭化物少混
 - 51 10YR5/2灰黄褐色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまりやや弱
 - 52 10YR4/2灰黄褐色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 にぶい黄褐色細砂含
 - 53 10YR3/2黒褐色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 ~1cm炭化物少混
 - 54 10YR3/2黒褐色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまり中 にぶい黄褐色細砂混
 - 55 10YR3/2黒褐色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまり中 ~1cm炭化物少混
 - 56 10YR3/1黒褐色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまり中
 - 57 10YR4/1褐灰色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中
 - 58 10YR4/2灰黄褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中
 - 59 10YR5/1褐灰色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 ~5mm炭化物含 細礫少含
 - 60 10YR3/2黒褐色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまり中
 - 61 10YR5/2灰黄褐色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまり中
 - 62 10YR4/2灰黄褐色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまり中 にぶい黄褐色細砂混
 - 63 10YR4/2灰黄褐色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまり中 ~5mmにぶい黄褐色シルトブロック少含
 - 64 10YR5/2灰黄褐色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまり中 にぶい黄褐色細砂混
 - 65 10YR3/2黒褐色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまり中 ~5mmにぶい黄褐色シルトブロック少含

第8-2図 調査区南壁土層断面図(2)

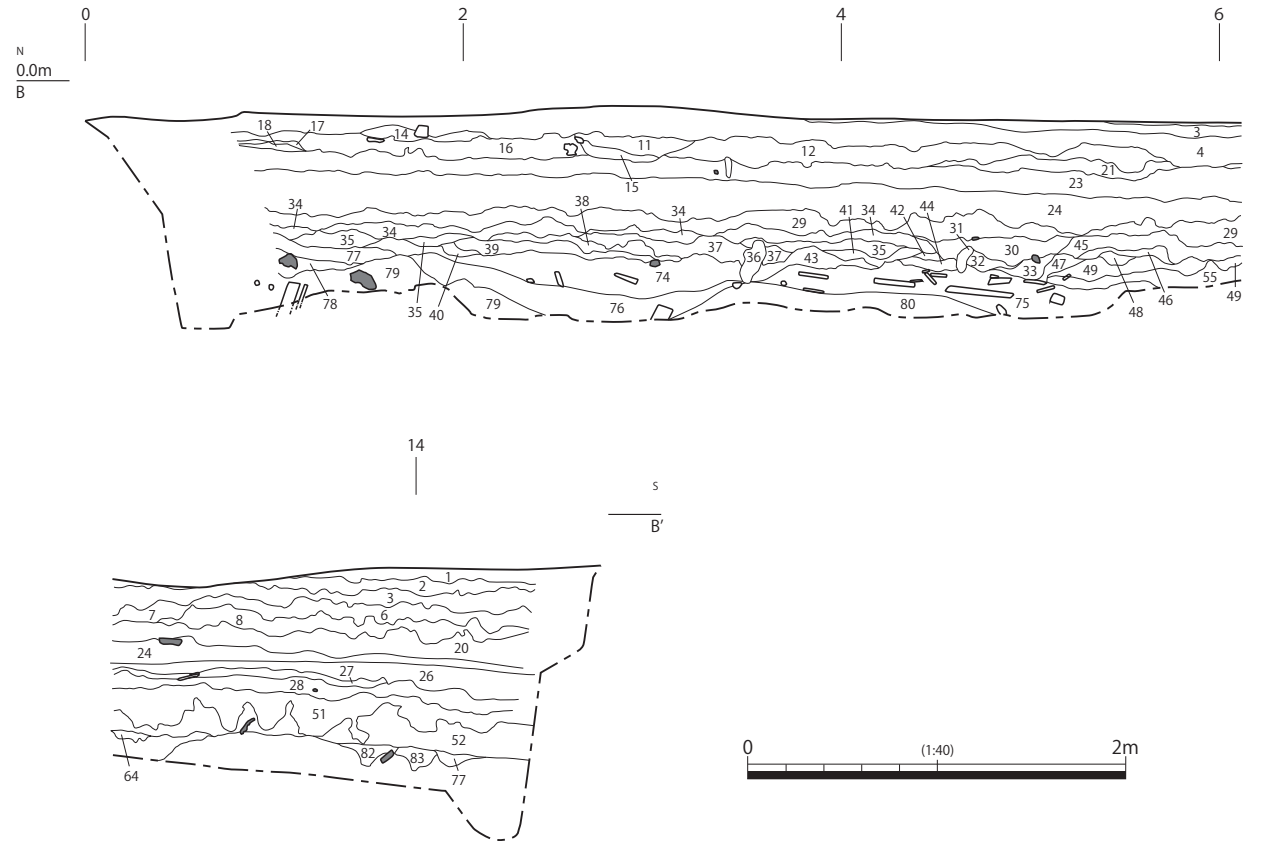
VII層	66	10YR4/2灰黄褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	SD-38Ca	99	2.5Y2/1黒色	シルト混細砂	粘性やや弱	
		しまり中	～5mm炭化物少含					しまりやや弱	細礫・植物片少含	(人骨包含層)
	67	10YR4/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱		100	10YR5/2灰黄褐色	細砂	粘性弱	しまりやや弱
		しまり中						細礫含		
	68	10YR6/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱		101	10YR4/2灰黄褐色	細砂	粘性弱	しまりやや弱
		しまり中	にぶい黄褐色細砂混			102	10YR2/2黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	
	69	10YR4/1褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱			しまりやや弱	～1cm炭化物含		
		しまり中				103	10YR5/1褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱	
	70	10YR3/2黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱			しまりやや弱	貝殻片含		
		しまりやや弱				104	2.5Y3/1黒褐色	細砂	粘性弱	しまりやや弱
	71	10YR3/2黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱		腐植混	ルミナ構造あり			
	しまりやや弱	～1cm炭化物少混		105	10YR5/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱			
	72	10YR4/1褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱	SD38-C	しまりやや弱				
	しまりやや弱			106	10YR4/1褐灰色	細砂	粘性弱	しまりやや弱		
	73	10YR4/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	107	10YR5/1褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱		
	しまりやや弱	木片含			しまりやや弱	貝殻片含				
	74	10YR3/1黒褐色	細砂混シルト	粘性中	しまり中	108	10YR4/1褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱	
	75	10YR3/2黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱		しまりやや弱	貝殻片含			
	しまり中			109	10YR6/2灰黄褐色	細砂	粘性弱	しまりやや弱		
	76	10YR4/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱		～1cm炭化物少混				
	しまり中			110	10YR5/2灰黄褐色	シルト混細砂	粘性やや弱			
	77	10YR4/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱		しまりやや弱				
	78	10YR5/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性弱	SD38-C 護岸	111	10YR3/2黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	
	しまりやや弱					しまりやや弱	～1cm炭化物少含			
	79	10YR4/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱		112	10YR4/1褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱	
	しまりやや弱					しまりやや弱	～5mm炭化物少含			
	80	10YR5/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱		113	10YR3/1黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	
	しまり中					しまりやや弱				
	81	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱		114	7.5YR2/2黒褐色	シルト	粘性やや強	しまり中
	しまりやや弱	木片含				腐植混				
	82	10YR4/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱		115	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性中	
	しまり弱	木片含				しまりやや弱				
SD38-B	83	10YR3/1黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	116	10YR5/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱		
	しまりやや弱	細礫少含			しまりやや弱	細礫少混				
	84	10YR3/2黒褐色	細砂混シルト	粘性やや中	117	10YR4/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱		
	しまりやや弱	木器・木片多混			しまりやや弱					
	85	10YR4/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	118	10YR4/1褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱		
	しまり弱	木片含			しまり中					
	86	10YR4/1褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱	SD38-F	119	10YR5/1褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱	
	しまりやや弱	木片含				しまりやや弱	～1cm炭化物・細礫少含			
	87	10YR4/1褐灰色	シルト混細砂	粘性やや弱	120	10YR4/1褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱		
	しまり中	～1cm炭化物少含				しまりやや弱	～1cm炭化物・貝殻片少含			
88	10YR3/2黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	121	10YR5/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱			
しまり中	にぶい黄褐色細砂混				しまりやや弱	細礫少含				
89	10YR3/2黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	122	10YR5/1褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱			
しまり中					しまりやや弱	細礫少含				
90	10YR3/2黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	123	10YR4/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱			
しまり中	～5mmにぶい黄褐色シルトブロック・炭化物少含				しまりやや弱					
91	10YR3/2黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	124	10YR5/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱			
しまりやや弱					しまりやや弱					
終末期造成土	92	10YR3/1黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	125	10YR4/1褐灰色	シルト混細砂	粘性中		
	しまり中				しまりやや弱	貝殻片含				
	93	10YR4/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	VIII層	126	10YR5/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	
	しまり中	～3cm黄褐色シルトブロック含				しまりやや弱	～2cmにぶい黄褐色シルトブロック少含			
	94	10YR4/1褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱		127	10YR5/1褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱	
	しまり中	～5mm炭化物少含				しまりやや弱				
	95	10YR4/1褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱		128	10YR5/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	
	しまりやや弱	貝殻片含					しまりやや弱	～1cm灰褐色シルトブロック含		
96	10YR5/2灰黄褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	129		10YR4/2灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱		
しまり中						しまりやや弱				
97	10YR6/2灰黄褐色	シルト混細砂	粘性中	130	10YR6/1褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱			
しまりやや弱					しまりやや弱					
98	10YR4/1褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱	131	10YR4/1褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱			
しまりやや弱	～5mm炭化物少含				しまりやや弱	貝殻片含				

第8-3図 調査区南壁土層断面図(3)

VIII層	132	10YR5/1	褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱	IX層	148	10YR2/2	黒褐色	細砂混シルト	粘性中	しまり中	
				しまりやや弱	～2cm灰褐色シルトブロック少含								細礫多含
	133	10YR6/1	褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱		149	10YR3/1	黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまり中	中砂～細礫混
				しまりやや弱			150	10YR3/1	黒褐色	細砂混シルト	粘性やや強	しまり中	褐灰色粘質シルト混
	134	10YR5/1	褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱		151	10YR3/1	黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまりやや弱	細礫少含
				しまりやや弱	～1cmにぶい黄褐色細砂ブロック含		152	10YR5/2	灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや強	しまり中	
	135	10YR4/1	褐灰色	シルト	粘性やや弱		153	10YR6/2	灰黄褐色	シルト混細砂	粘性中	しまりやや弱	
				しまりやや弱			154	10YR4/2	灰黄褐色	細砂混シルト	粘性中	しまり中	
	136	10YR5/2	灰黄褐色	シルト混細砂	粘性やや弱		155	10YR2/2	黒褐色	細砂混シルト	粘性中	しまり中	極粗砂混
				しまりやや弱	～2cm炭化物少混		156	10YR4/1	褐灰色	細砂混シルト	粘性中	しまりやや弱	
			にぶい黄褐色細シルトブロック少含		157	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	粘性中	しまり中			
137	10YR4/1	褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱	158	10YR3/1	黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまりやや弱	細礫含 腐植混		
			しまりやや弱		159	10YR3/1	黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまりやや弱	貝殻片混		
138	10YR5/2	灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	160	10YR3/1	黒褐色	細砂混粘質シルト	粘性強	しまり中			
			しまりやや弱	～1cm灰褐色シルトブロック少含	161	7.5YR3/2	黒褐色	シルト混細～中砂	粘性やや弱	しまりやや弱	植物片含 貝殻片少含		
139	10YR4/1	褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱									
			しまりやや弱										
140	10YR3/1	黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱									
			しまりやや弱										
141	10YR4/1	褐灰色	シルト混細砂	粘性やや弱									
			しまり中	～3cm黄褐色シルトブロック含									
142	10YR4/1	褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱									
			しまりやや弱										
143	10YR3/1	黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱									
			しまり弱										
144	10YR3/2	黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱									
			しまりやや弱										
IX層	145	10YR6/1	褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱								
			しまりやや弱	細礫少含									
	146	10YR4/1	褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱								
			しまりやや弱	貝殻片多含 細礫含									
	147	10YR3/1	黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱								
			しまりやや弱	細礫含									

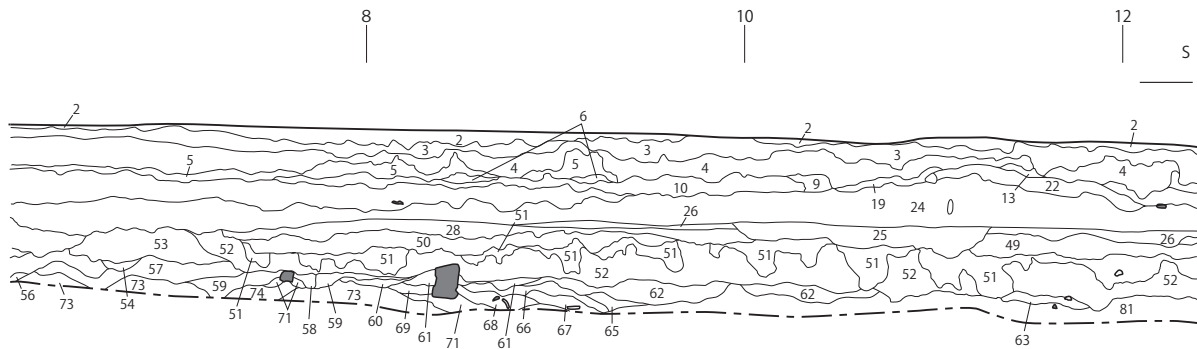


第8-4図 調査区南壁土層断面図(4)



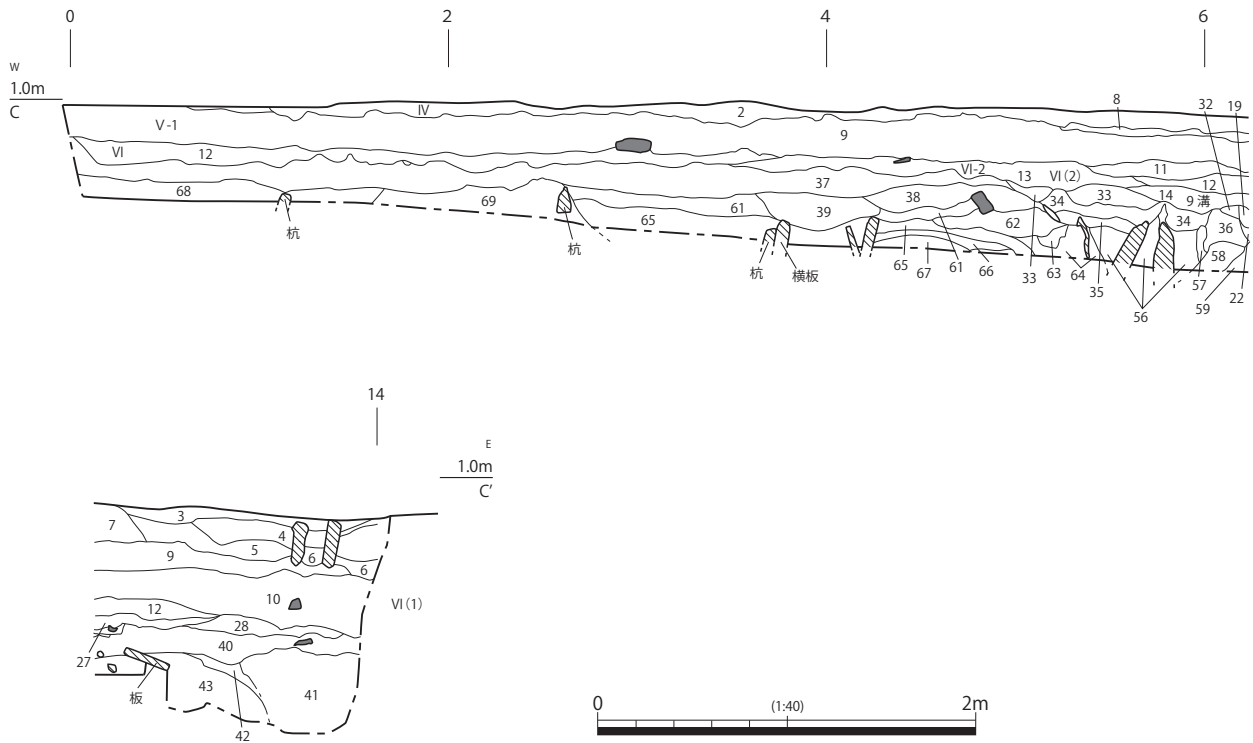
- | | | | |
|--|--|--|--|
| <p>II層</p> <p>III層</p> <p>IV-1層</p> <p>4土手</p> | <p>1 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粘性やや強
しまり中 高師小僧含</p> <p>2 10YR2/2黒褐色 細砂混シルト 粘性中
しまり中 ~3cm褐色シルトブロック含</p> <p>3 2.5Y3/2黒褐色 シルト 粘性やや強
しまりやや強 細礫含</p> <p>4 10YR3/2黒褐色 細砂混シルト 粘性中
しまりやや強</p> <p>5 10YR2/2黒褐色 シルト 粘性中 しまりやや強
高師小僧含</p> <p>6 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粘性やや強
しまり中 細礫含</p> <p>7 10YR3/2黒褐色 シルト 粘性やや強
しまりやや弱</p> <p>8 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粘性やや強
しまりやや弱 高師小僧含</p> <p>9 10YR3/2黒褐色 細砂混シルト 粘性やや弱
しまりやや弱 10より細砂多</p> <p>10 10YR3/2黒褐色 細砂混シルト 粘性中
しまり中</p> <p>11 5YR4/4にぶい赤褐色 シルト混中~粗砂
粘性弱 しまり強 細礫含 黒褐色細砂混</p> <p>12 5YR4/4にぶい赤褐色 シルト混中~粗砂
粘性弱 しまり強 細礫多含</p> <p>13 10YR3/2黒褐色 細砂混シルト 粘性中
しまりやや弱 枝が寝かせた状態に入る</p> <p>14 7.5YR4/2灰褐色 シルト混中~粗砂 粘性弱
しまりやや弱 細礫含</p> <p>15 7.5YR3/1黒褐色 シルト混中~粗砂
粘性やや弱 しまりやや強 細礫含</p> <p>16 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中</p> <p>17 7.5YR3/1黒褐色 シルト混中~粗砂
粘性やや弱 しまりやや弱 細礫含</p> <p>18 7.5YR4/1褐灰色 シルト混中~粗砂
粘性やや弱 しまりやや弱 細礫含</p> | <p>IV-2層</p> <p>5土手</p> <p>3畦畔</p> <p>V-1層</p> <p>6流路</p> <p>V
2
4
層</p> <p>古墳時代
前期
造成土
(VII層)</p> | <p>19 10YR3/2黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや強</p> <p>20 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 粘性やや強
しまり中</p> <p>21 7.5YR4/1褐灰色 シルト混中~粗砂 粘性弱
しまりやや強 細礫含</p> <p>22 10YR3/3暗褐色 シルト混細砂~中砂
粘性やや弱 しまり中 木片・細礫含</p> <p>23 2.5Y3/2黒褐色 シルト混中~粗砂 粘性中
しまり中 ~1cmにぶい黄褐色シルトブロック含</p> <p>24 10YR3/2黒褐色 シルト 粘性やや強
しまりやや強 植物の葉を面的に含む</p> <p>25 10YR3/2黒褐色 シルト 粘性やや強 しまり中
植物片含</p> <p>26 7.5YR4/1褐灰色 シルト 粘性中 しまり中</p> <p>27 10YR2/2黒褐色 シルト 粘性やや強 しまり中
植物の茎多含</p> <p>28 7.5Y3/1オリーブ黒色 細砂混シルト 粘性中
しまり中</p> <p>29 10YR3/2黒褐色 シルト混細砂 粘性中
しまり中 ~5cm褐灰色粘質シルトブロック少含</p> <p>30 10YR3/1黒褐色 シルト混細砂 粘性中
しまり中 細礫含</p> <p>31 10YR3/1黒褐色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまり中</p> <p>32 10YR3/2黒褐色 シルト混細砂 粘性中
しまり中 ~2cmにぶい黄褐色シルトブロック少含</p> <p>33 10YR3/1黒褐色 シルト混細砂 粘性中
しまり中</p> <p>34 10YR3/2黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまり中</p> <p>35 10YR4/1褐灰色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまり中 ~2cmにぶい黄褐色シルトブロック少含</p> |
|--|--|--|--|

第9-1図 調査区東壁土層断面図(1)



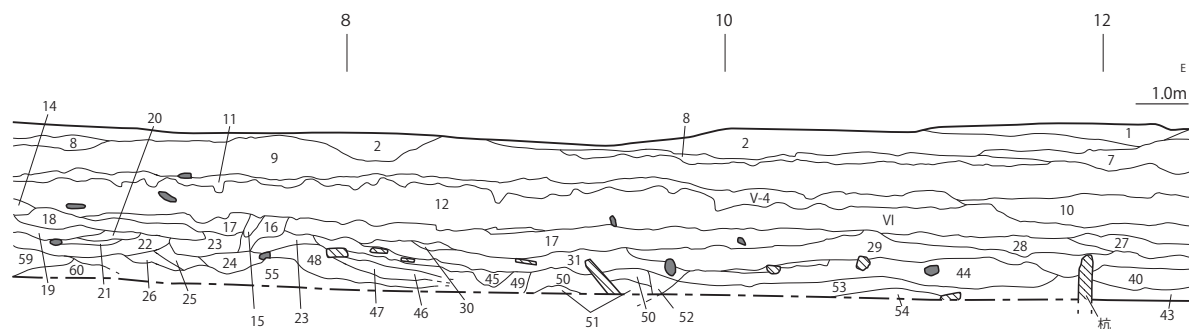
古墳時代前期造成土（Ⅶ層）	36	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～1cmにぶい黄褐色シルトブロック 少含 杭跡か	
	37	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中		
	38	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～3cmにぶい黄褐色シルトブロック含	
	39	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～1cmにぶい黄褐色シルトブロック 少含	
	40	10YR4/1褐灰色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱		
	41	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～2cm炭化物含	
	42	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	細礫含	
	43	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～2cmにぶい黄褐色シルトブロック 少含	
	44	10YR3/3暗褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～2cmにぶい黄褐色シルトブロック含 杭跡か	
	45	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中		
	46	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～1cm炭化物含・細礫含	
	47	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中		
	48	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱		
	49	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	～3cmにぶい黄褐色シルトブロック含	
	50	10YR4/1褐灰色	シルト混細砂	粘性中	しまり中		
	51	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	～2cm褐灰色シルトブロック含	
	52	10YR4/1褐灰色	シルト混細砂	粘性中	しまり中		
	53	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	杭跡か	
	54	2.5YR3/1暗赤灰色	シルト混細砂	粘性中	しまり中		
	55	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまりやや弱		
	56	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中		
	57	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	～5mm黄褐色パミスブロック含	
	58	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまりやや弱	～2cm灰褐色粘質シルトブロック含	
	古墳時代前期造成土（Ⅶ層）	59	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	～1cm灰褐色粘質シルトブロック含
		60	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～1cm黄褐色パミスブロック少含
		61	10YR4/1褐灰色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	～1cm炭化物少含
		62	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	～3cm炭化物含
		63	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	
		64	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	細礫少含
		65	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	～1cm黄褐色パミスブロック少含
		66	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	
		67	2.5YR3/1暗赤灰色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
		68	10YR3/1黒褐色	粘性やや弱	しまりやや弱		
		69	10YR3/1黒褐色	粘性中	しまり中	～1cm炭化物含	
		70	10YR2/2黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	にぶい黄褐色粘質シルト混
		71	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
72		10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中		
73		2.5YR2/1赤黒色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中		
74		10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	～2cm炭化物・木器片含	
75		10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	木器片多含	
76		10YR2/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり弱		
77		10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱		
78		10YR2/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	～1cm炭化物少含	
79		10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中		
80		10YR3/1黒褐色	細砂混シルト	粘性中	しまり中		
81		10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	木器片多含	
82		10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中		
83		10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～1cm炭化物少含	

第9-2図 調査区東壁土層断面図（2）



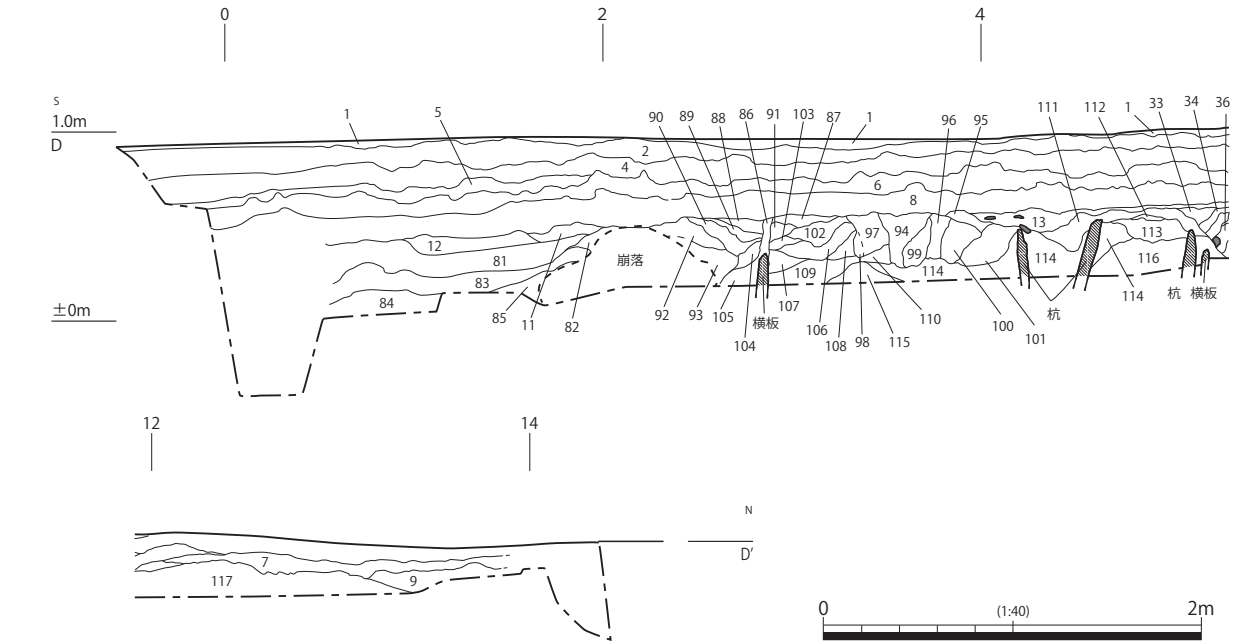
III層	[1 10YR2/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中 ~φ3cm 褐色シルトブロック多含	平地建物3	[21 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト 粘土塊少混 22 2.5y6/2 灰黄色 シルト
IV-1層	[2 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性強 しまり中 3 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中 4 10YR4/1 褐灰色 シルト 粘性強 しまり中 5 10YR2/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中 ~φ3cm 褐色シルトブロック多含	古墳時代	[23 2.5Y4/1 黄灰色 シルト 焼土塊多混 24 2.5Y6/2 黄灰色 砂質土 ローム塊少混 25 2.5Y4/1 黄灰色 砂質土 ローム塊少混 26 2.5Y6/2 灰黄色 砂質土 しまり悪
4土手	[6 10YR3/2 黒褐色 中砂混シルト 粘性やや強 しまり中 細礫・炭化物含 7 10YR3/2 黒褐色 中砂混粘質シルト 粘性やや強 しまりやや強 細礫多含	SD38-A	[27 10YR2/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中 細礫少混
IV-2層	[8 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中	SD38-B	[28 7.5YR4/2 灰褐色 粘質シルト 粘性中 しまりやや強 黒褐色シルト混 29 10YR3/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 木片含
V-1層	[9 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性やや強 しまり中		[30 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまり弱 木片含
V-4層	[10 7.5YR4/1 褐灰色 シルト 粘性中 しまり中 マンガン混		[31 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 細礫少含
VI-1層	[11 7.5Y3/1 オリーブ黒色 細砂混シルト 粘性中 しまり中		[32 10YR3/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中
VI-2層	[12 10YR3/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや弱 にぶい黄褐色細砂混 ~1cm炭化物少混	VII層	[33 7.5YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中 マンガン混 34 10YR4/1 褐灰色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまり中 ~2cm 炭化物少混
9溝	[13 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中		[35 10YR3/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 ~1cm炭化物少混
平地建物3	[14 10YR4/1 褐灰色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 15 2.5Y3/1 黒褐色 粘質土 炭少混 16 7.5Y5/1 灰色 砂質土 ローム塊少混 17 2.5Y4/1 黄灰色 シルト ローム塊少混 しまる 18 2.5Y4/1 黄灰色 シルト ローム塊少混 焼土塊混 しまる 19 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト 粘土塊少混 20 2.5Y4/1 黄灰色 シルト ローム塊少混 しまる	SD-38Cb	[36 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまり中 37 10YR5/1 褐灰色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 ~5mm 炭化物含 細礫少含 38 10YR5/2 灰黄褐色 細砂混シルト 粘性やや弱 しまり中 にぶい黄褐色細砂混
		SD38-C	[39 2.5Y2/1 黒色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 細礫・植物片少含 (人骨包含層) 40 10YR5/2 灰黄褐色 細砂 粘性弱 しまりやや弱 細礫含

第10-1図 調査区北壁土層断面図(1)



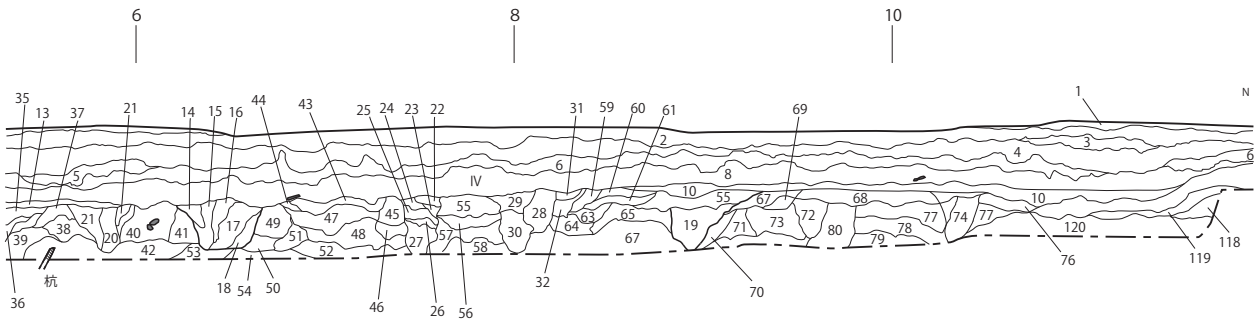
SD38-C	41	10YR2/2 黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	
		しまりやや弱	~1cm炭化物含		
	42	2.5Y3/1 黒褐色	細砂	粘性弱	しまりやや弱
		腐植混ラミナ構造あり			
	43	10YR4/1 褐灰色	細砂	粘性弱	しまりやや弱
	44	10YR3/1 黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまり弱
	45	10YR6/1 褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまりやや弱
		細礫少含			
	46	10YR3/1 黒褐色	細砂混シルト	粘性やや強	しまり中
		褐灰色粘質シルト混			
SD38 or IX層	47	10YR5/2 灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや強	しまり中
	48	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	粘性中	しまり中
	49	10YR2/2 黒褐色	細砂混シルト	粘性中	しまり中
		極粗砂混			
	50	10YR4/1 褐灰色	細砂混シルト	粘性中	しまりやや弱
	51	10YR4/1 褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまりやや弱
	52	10YR3/2 黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまりやや弱
	53	10YR3/1 黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまりやや弱
		細礫含			
	54	10YR2/2 黒褐色	細砂混シルト	粘性中	しまり中
		細礫多含			
	55	10YR3/1 黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまりやや弱
		細礫少含			
	56	10YR3/1 黒褐色	細砂混粘質シルト	粘性強	しまり中
	57	10YR3/1 黒褐色	粘土	粘性強	しまり中
	58	10YR3/1 黒褐色	粘土	粘性強	しまり中
	59	10YR4/1 褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまりやや弱
	貝殻片多含			細礫含	
60	10YR6/1 褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまりやや弱	
61	10YR5/2 灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまりやや弱	
62	10YR5/2 灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまりやや弱	
	細礫少含				
63	10YR4/1 褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまりやや弱	
	貝殻片含				
64	10YR4/1 褐灰色	シルト	粘性やや弱	しまりやや弱	
65	10YR4/1 褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまりやや弱	
66	10YR3/1 黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまりやや弱	
	しまりやや弱				
SD38 or IX層	67	10YR4/1 褐灰色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまりやや弱
	68	10YR5/2 灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまりやや弱
		~1cm灰褐色シルトブロック少含			
	69	10YR4/2 灰黄褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまりやや弱

第10-2図 調査区北壁土層断面図(2)



III層	1	10YR4/2灰黄褐色	シルト	粘性強	しまり中	高師小僧含
IV-1層	2	10YR3/2黒褐色	シルト	粘性強	しまり中	
	3	2.5Y3/2黒褐色	細砂混シルト	粘性やや強	しまり中	
V-1層	4	10YR3/2黒褐色	細砂混シルト	粘性やや強	しまり中	
V-2層	5	10YR4/1褐灰色	シルト	粘性強	しまり中	高師小僧含
V-4層	6	10YR4/1褐灰色	シルト	粘性強	しまりやや強	高師小僧含
VI-1層	7	10YR4/1褐灰色	細砂混シルト	粘性やや強	しまりやや強	
	8	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
VI-2層	9	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
	10	10YR2/1黒色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
9溝	11	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
	12	10YR2/2黒褐色	細砂混シルト	粘性中	しまり中	~2cm褐灰色シルトブロック多含
平地建物	13	10YR4/1褐灰色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
	14	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
の平地	15	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	~2cm黄褐色シルトブロック・褐灰色シルトブロック少含
	16	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	~2cm黄褐色シルトブロック少含
造地	17	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	細礫少含
	18	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
成建	19	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	~3cm褐灰色シルトブロック・~3cm黄褐色シルトブロック少含
	20	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	~1cm黄褐色シルトブロック少含
が物	21	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
	22	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	
平地建物の造成か	23	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	~1cm黄褐色シルトブロック少含
	24	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
	25	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	~5cm黄褐色パミスブロック多含
	26	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
	27	10YR2/2黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまり中	~3cm黄褐色シルトブロック含
	28	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	~1cm黄褐色シルトブロック含
	29	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	~1cm黄褐色シルトブロック少含
	30	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	~5cm黄褐色シルトブロック多含
	31	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	~2cm褐灰色粘質シルトブロック少含
	32	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
	33	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
	34	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり弱	~1cm炭化物少含
	35	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	細礫少含
	36	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり弱	~2cm灰白色細砂ブロック多含
	37	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	~5cm黄褐色シルトブロック多含
	38	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
	39	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり弱	~1cm炭化物少含
	40	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	~1cm黄褐色シルトブロック少含
	41	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	細礫含
	42	10YR2/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	腐植混 礫少混

第11-1図 調査区西壁土層断面（1）



平地建物の造成か	43	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～1cm黄褐色シルトブロック少含
	44	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
	45	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	～3cm黄褐色シルトブロック含 ～1cm炭化物少含
	46	10YR2/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり弱	
	47	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	細礫少混
	48	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～1cm炭化物少含
	49	10YR2/1黒色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	腐植混
	50	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	～3cmにぶい黄褐色シルトブロック含
	51	10YR2/2黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	～3cm黄褐色シルトブロック少含
	52	10YR2/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	～2cm黄褐色シルトブロック多含
	53	10Y2/1黒色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	腐植混
	54	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや強	～2cm褐灰色シルトブロック多含
平地建物の造成か	55	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
	56	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	明黄褐色細砂ブロック含
	57	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり強	～2cm黄褐色シルトブロック多含 ～2mm炭化物含
	58	10YR2/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	灰白色細砂混
	59	10YR2/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	細礫少含
	60	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	
	61	10Y2/1黒色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	腐植混
	62	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや強	～2cm褐灰色シルトブロック多含 ・～3mm炭化物含
	63	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	～3cm黄褐色シルトブロック ・炭化物少含
	64	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
	65	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	植物片少含
	66	10YR2/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
VIII層	67	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～1cm黄褐色シルトブロック・～5mm炭化物少含
	68	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	にぶい黄褐色細砂混
	69	10YR2/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	～3cm黄褐色シルトブロック含
	70	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや強	にぶい黄褐色細砂混
	71	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
	72	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	腐植混
	73	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	～5mm黄褐色シルトブロック少含
	74	10YR2/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	～3mm腐植ブロック含
	75	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	植物片含
	76	10YR2/1黒色	細砂混シルト	粘性中	しまり中	
	77	10YR2/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～3cm明黄褐色シルトブロック含
	78	10YR2/2黒褐色	細砂混シルト	粘性中	しまり中	
VIII層 (土手状盛土)	79	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	
	80	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～2cm明黄褐色シルトブロック・ ～1cm炭化物含
	81	10YR2/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	板混
	82	10YR2/2黒褐色	細砂混シルト	粘性中	しまり中	
	83	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～1cm黄褐色パシスブロック・炭化物含
	84	10YR3/2黒褐色	細砂混シルト	粘性中	しまりやや弱	
	85	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	細礫・～1cm炭化物含
	86	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中	～2cm炭化物少含
	87	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	細礫・灰褐色パシス少含
	88	10YR2/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～1cm黄褐色シルトブロック・炭化物少含
	89	2.5Y3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	細礫 ～2cm黄褐色シルトブロック少含・褐灰色シルトブロック少含
	90	10YR4/1褐灰色	細砂混シルト	粘性中	しまり中	
91	2.5Y3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	～1cm褐灰色シルトブロック少含	
92	2.5Y3/3暗オリーブ褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～2cm黄褐色パシスブロック少含	
93	10YR2/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	細礫少含	
94	2.5Y3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～2cm炭化物・細礫少含	
95	2.5Y3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性中	しまり中		
96	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中		
97	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～1cm炭化物少含	
98	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり弱		

第11-2図 調査区西壁土層断面(2)

VIII層 (土手状盛土)	99	10YR3/2黒褐色 しまり中	シルト混細砂	粘性やや弱	VIII層 (土手状盛土)	110	10YR2/1黒色 しまり中 腐植混	シルト混細砂	粘性やや弱	
	100	10YR2/2黒褐色 しまりやや弱	シルト混細砂	粘性やや弱		111	10YR2/2黒褐色 しまりやや弱	シルト混細砂	粘性やや弱 ~1cm炭化物少含	
	101	10YR3/2黒褐色 しまり中 ~1cm炭化物少含	シルト混細砂	粘性やや弱		112	2.5Y2/1黒色 しまり中	シルト混細砂	粘性やや弱 細礫少含	
	102	10YR2/2黒褐色 しまり中	シルト混細砂	粘性やや弱		113	10YR3/1黒褐色 しまりやや弱	シルト混細砂	粘性やや弱 ~3mm黄褐色シルトブロック少含	
	103	10YR3/1黒褐色 しまり中	シルト混細砂	粘性やや弱		114	10YR3/2黒褐色 粘性やや弱	細砂混シルト	粘性中 にぶい黄褐色細砂混 ~1cm黄褐色シルトブロック含	
	104	10YR2/1黒色 しまりやや弱	シルト混細砂	粘性やや弱 植物片含		115	10YR4/1褐灰色 しまりやや弱	シルト混細砂	粘性やや弱	
	105	10YR2/2黒褐色 しまりやや弱	シルト混細砂	粘性やや弱		116	2.5Y3/1黒褐色 しまり中	シルト混細砂	粘性やや弱	
	106	10YR3/1黒褐色 しまり中 ~1cm炭化物少含	シルト混細砂	粘性やや弱		117	10YR3/2黒褐色 しまり弱	シルト混細砂	粘性やや弱	
	107	10YR3/2黒褐色 しまりやや弱	シルト混細砂	粘性中 ~1cm黄褐色シルトブロック含		IX層か	118	10YR3/1黒褐色 しまり中	シルト混細砂	粘性やや弱 ~1cm炭化物少含
	108	10YR3/1黒褐色 しまり中	シルト混細砂	粘性やや弱 細礫混		119	10YR3/2黒褐色 しまり中	シルト混細砂	粘性やや弱 ~2cm炭化物少含	
109	10YR3/2黒褐色 しまり中 ~1cm炭化物少含	シルト混細砂	粘性やや弱	120		10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱		

第11-3図 調査区西壁土層断面(3)

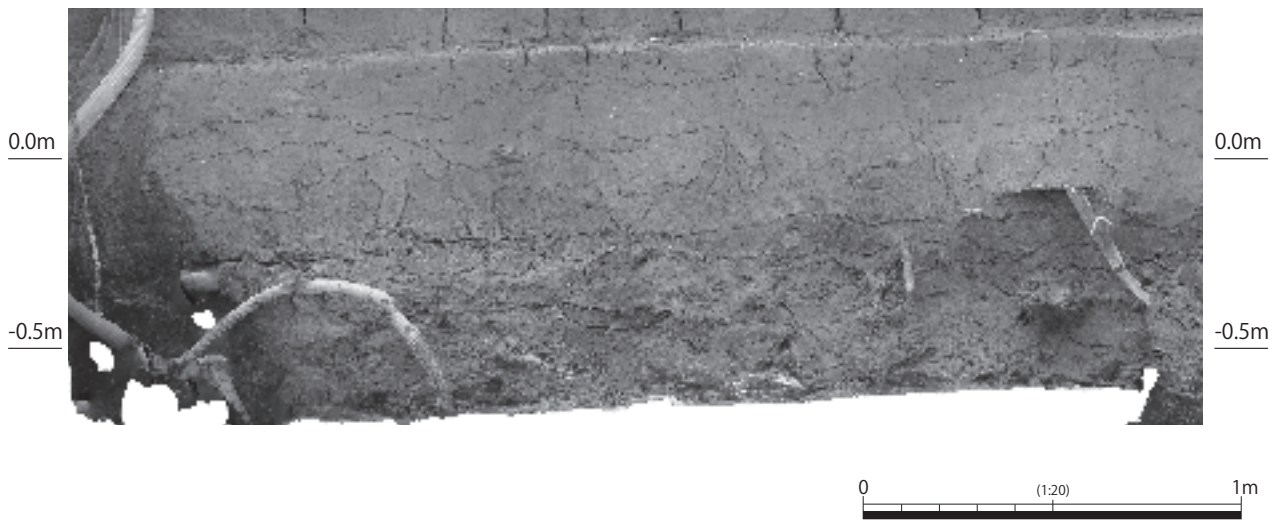


写真13-1 調査区南壁土層断面(西→東)(1)

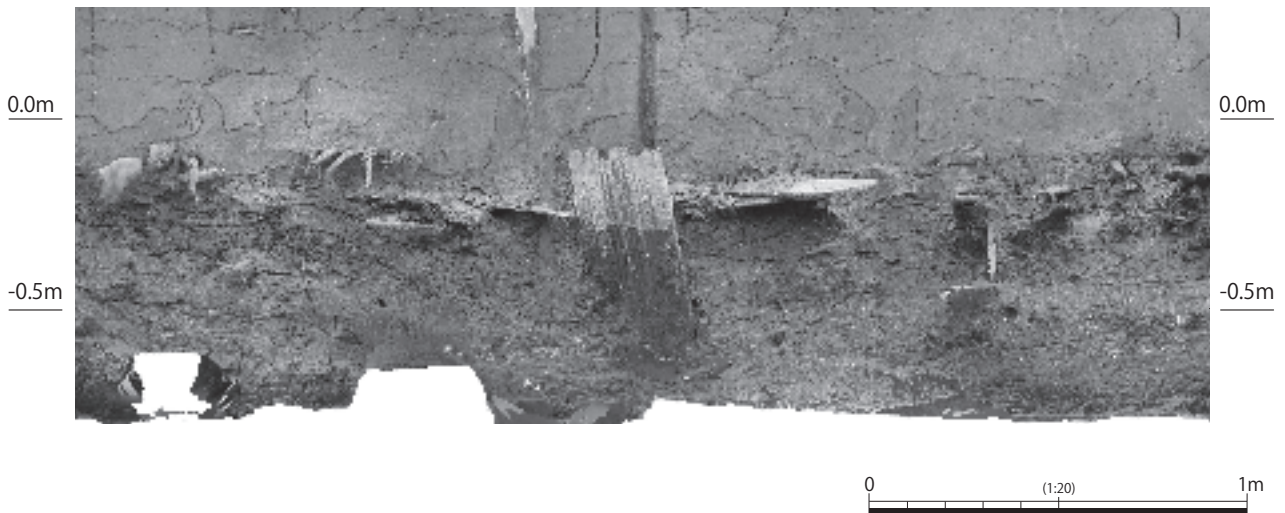


写真13-2 調査区南壁土層断面(西→東)(2)

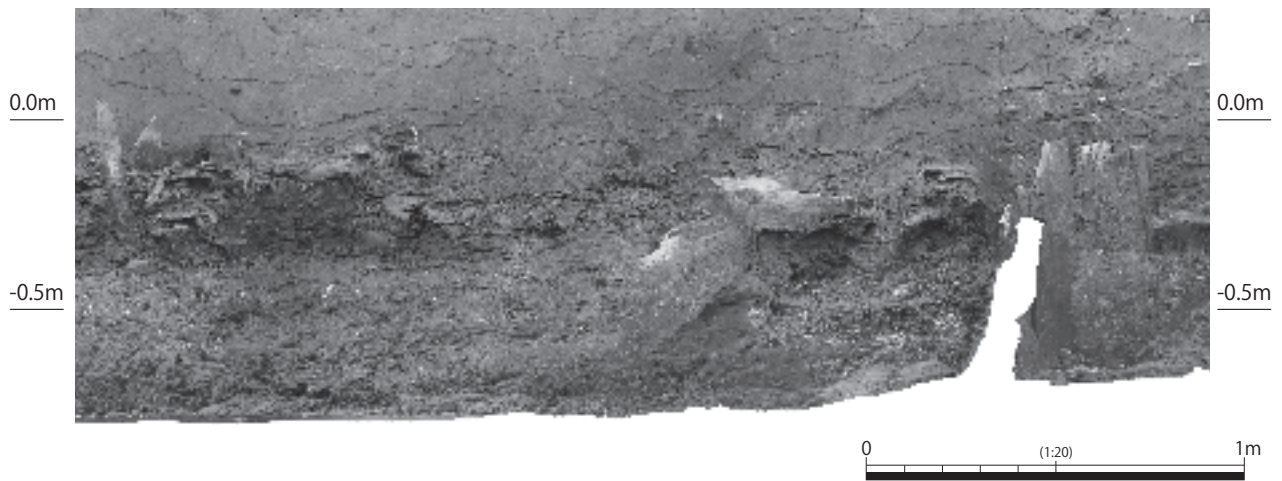


写真 13 - 3 調査区南壁土層断面（西→東）（3）



写真 13 - 4 調査区南壁土層断面（西→東）（4）

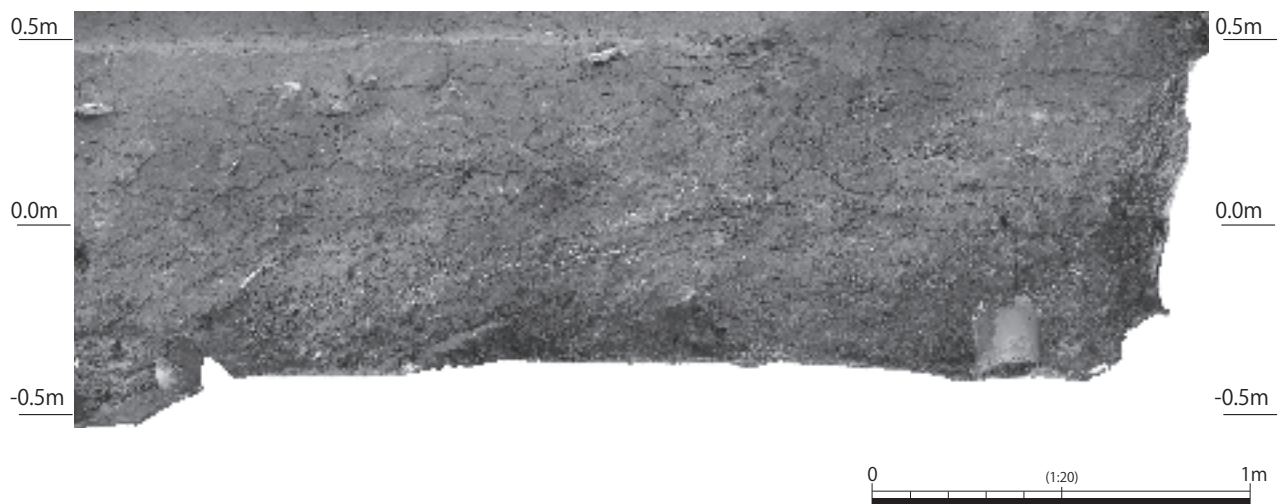
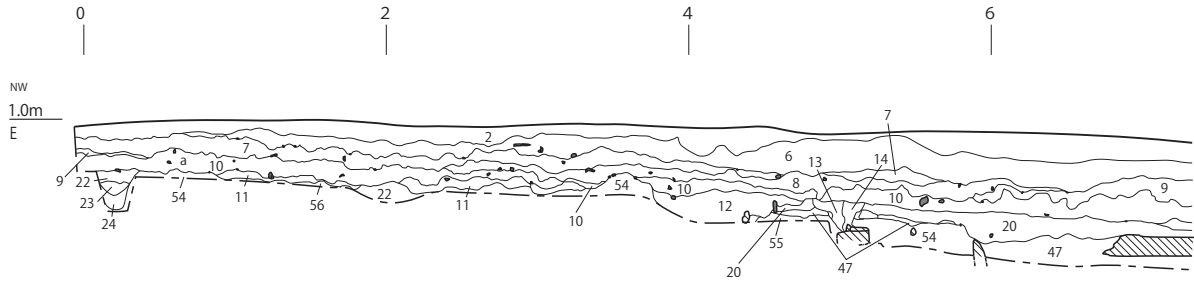
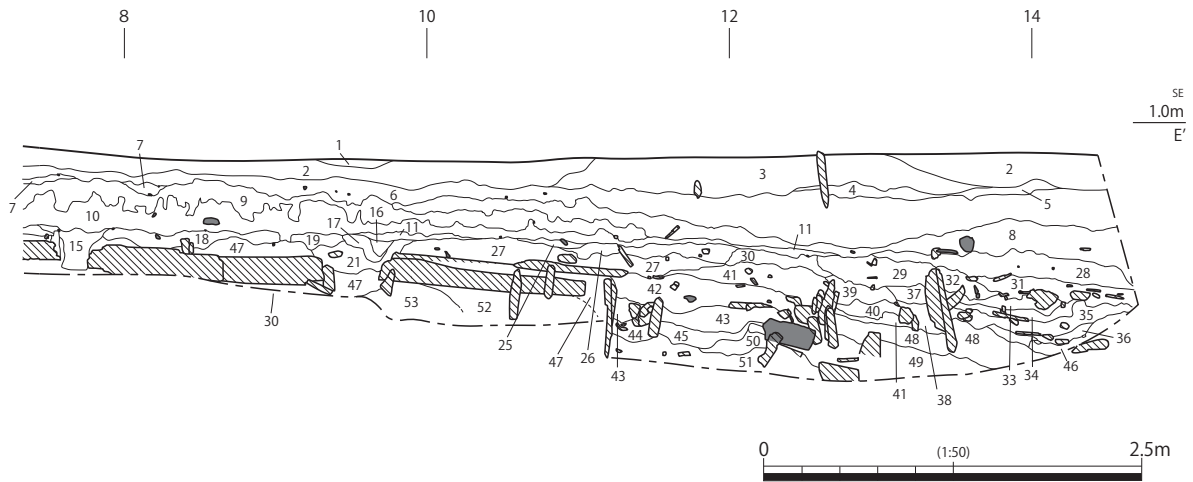


写真 13 - 5 調査区南壁土層断面（西→東）（5）



- | | |
|---|---|
| <p>III層 [1 10YR2/2黒褐色 シルト 細砂混 粘性中
しまり中 褐色シルトブロック含</p> <p>IV-1層 [2 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粘性強 しまり中</p> <p>4 土手 [3 2.5Y3/1黒褐色 粘質土 粗砂混</p> <p>IV-2層 [4 10YR3/1黒褐色 シルト 混細砂</p> <p>5 土手 [5 2.5Y4/2暗灰黄色 土 しまる 雲母少混
(焼砂層)</p> <p>6 10YR3/2黒褐色 シルト 細砂混 粘性強
しまり中 ヨシ葉面的に多混</p> <p>7 10YR4/1褐灰色 シルト 粘性強 しまり中
細砂含</p> <p>V層 [8 10YR4/1褐灰色 シルト 粘性強 しまりやや中
ヨシ茎多混</p> <p>9 10YR4/1褐灰色 シルト 粘性強 しまりやや中
洪水性混濁物質多含</p> <p>VI層 [10 10YR3/1黒褐色 シルト 細砂混 粘性やや弱
しまり中</p> <p>11 10YR3/1黒褐色 シルト 細砂混 粘性やや弱
しまり中</p> <p>9 溝 [12 2.5Y3/1黒褐色 粘質土 炭少混</p> <p>13 2.5Y6/2灰黄色 粘質土</p> <p>14 2.5Y6/2灰黄色 粘質土 しまり悪</p> <p>15 2.5Y4/1 細砂混シルト</p> <p>16 10YR8/4浅黄橙色 粘質土 しまる</p> <p>17 2.5Y4/1黄灰色 土 粘土塊・炭混</p> <p>18 2.5Y4/3オリーブ褐色 土 粘土粒多混</p> <p>19 2.5Y6/2灰黄色 粘質土 (SD3)</p> <p>20 床 2.5Y4/3オリーブ褐色 土 しまる
粘土塊多混</p> <p>21 2.5Y4/2暗灰黄色 土 粘土塊・炭混</p> <p>22 2.5Y4/1黄灰色 粘質土 粘土塊少混</p> <p>23 2.5Y4/1黄灰色</p> <p>24 2.5Y4/1黄灰色 粘性強 炭混</p> <p>25 2.5Y4/3オリーブ褐色 土 しまる 粘土粒少混</p> <p>26 2.5Y4/3オリーブ褐色 土 しまる 粘土塊多混</p> <p>27 10YR2/2黒褐色 細砂混シルト 粘性中
しまり中 細礫少混</p> <p>9 溝 [28 2.5Y4/2暗灰黄色 土 粘土粒多混 炭混</p> <p>29 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 粘質土 炭多混 土器片混</p> <p>VII層 [30 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 粘質土 しまる
炭塊多混 粘土塊混</p> <p>31 2.5Y3/1黒褐色 土 やや粘質 木製品多混</p> <p>32 2.5Y4/2暗灰黄色 粘質土 木質多混</p> <p>33 2.5Y4/2暗灰黄色 粘質土 炭混</p> <p>35 2.5Y4/2暗灰黄色 粘質土 炭混 粘性強 貝片混</p> <p>36 2.5Y4/2暗灰黄色 粘質土 細砂混</p> <p>造成土① [37 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 粘質土 貝片多混</p> <p>38 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 粘質土 しまる 炭少混</p> <p>造成土③ [42 2.5Y4/2暗灰黄色 粘質土 木質多混 細砂混</p> | <p>造成土③ [43 2.5Y4/1黄灰色 粘質土
2.5Y3/2黒褐色細砂多混</p> <p>SD38-D [45 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂と2.5y6/1黄灰色細砂の互層
ラミナ発達 炭混 ドブ貝混</p> <p>SD38-Ca [46 2.5Y3/1黒褐色 シルト 炭混 (人骨包含)</p> <p>造成土⑥ [47 2.5Y4/3オリーブ褐色 土 しまる</p> <p>48 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト 細砂混 腐植物混</p> <p>49 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト 細砂混 腐植物・炭混</p> <p>50 2.5Y4/2暗灰黄色 土 細砂混 粘質</p> <p>51 2.5Y3/2黒褐色 シルト 炭混 粘性強</p> <p>52 2.5Y3/2黒褐色 シルト 粘質</p> <p>53 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト 細砂混 炭少混</p> <p>VIII層 [54 2.5Y3/2黒褐色 粘質土 細砂混 木質混</p> <p>55 2.5Y3/2黒褐色 土 粘土粒混</p> <p>56 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト やや粘質 細砂混</p> |
|---|---|

第12-1図 東西ベルト土層断面図(1)



第12-2図 東西ベルト土層断面図(2)

はこの南に沿って設けたトレンチ底面までを含むものである。これに加え、今回の調査成果を評価する上で重要な調査区南壁土層断面の下層についてはオルソ画像を提示する(写真13)。

第2項 各大別層の性格と特徴

地表下約1.8mまでの現代の客土より下に、以下のI～Ⅷ層までの大別層位を確認した。

- I層 石組みの暗渠より上層の近代～現代の水田耕作土で、当地域で同種の暗渠が用いられる明治20年代以降のものである。にぶい黄褐色極細砂層、灰黄褐色シルトなどを主体とし高師小僧を含む。層厚は最大で25cmを測る。土層断面から耕作段差や畦畔が確認できる。
- II層 石組みの暗渠以下の水田耕作土で近世末～近代初め頃のものである。粘性の強い灰黄褐色～にぶい黄褐色シルトを主体とし高師小僧を含む。層厚は最大で42cmを測る。I層と同様、土層断面から耕作段差や畦畔が確認できる。
- III層 中世後期から近世初頭の水田床土とみられ、黒褐色細砂混シルトを主体とし、黄褐色系の擬礫を多く含む。調査区北西部を除く調査区の大部分に分布し、層厚は最大で12cmを測る。当大別層以下を人力掘削の対象とした。
- IV層 中世の耕作土であるIV-1層と、洪水によって堆積したとみられる砂層のIV-2層に細分される。IV-1層は黒褐色細砂混シルト～シルトを主体としながら、一部に灰黄褐色やにぶい赤褐色のシルト層が混じる。土層断面では土手あるいは溝状の断面を呈す箇所はあるものの、平面的には検出できないため、耕作の単位などによるものとみられる。北西隅を除く調査区全域に堆積しており、層厚は最大で31cmを測る。層序としては捉えられなかったが、複数の微細な砂層を挟む。IV-2層は、黒褐色シルト混細砂を主体とする。調査区東側を中心に分布するが、

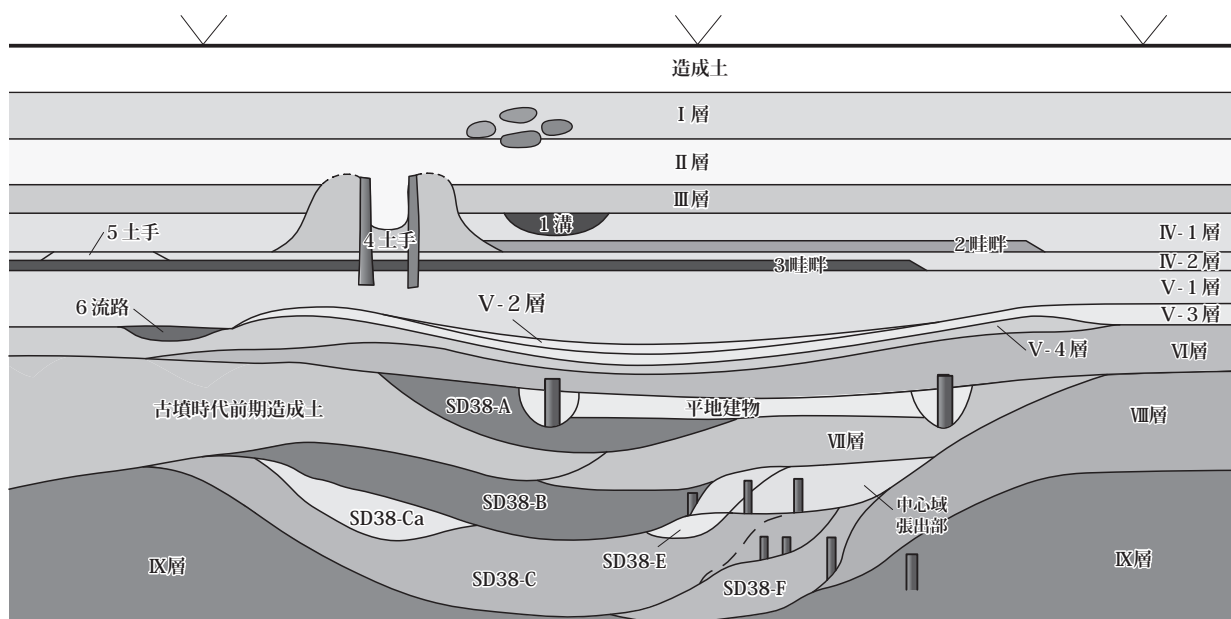
その堆積は部分的である。調査区南東部で層厚 14cmを測る箇所があるほかは、層厚は 3 cm程度である。

V層 古墳時代後期～律令期の湿地堆積である。黒褐色シルトを主体としながら、アシの葉を多く含むV-1層、植物遺体を殆ど含まないV-2層、アシの茎を多く含むV-3層、洪水性懸濁物質由来とみられる褐灰色粘質シルトが混じるV-4層に細分される。V-4層を除き、遺物をあまり含まない。堆積は水平ではないがV層中においては、上層が下層を切る状況は認められない。調査区全域に堆積するが東側でやや堆積が厚く、層厚は最大で 47cmを測る。

VI層 古墳時代中期後葉～後期の遺物を含む中心域側の微高地からの流入土。黒褐色シルト混細砂を主体とするVI-1層と、細砂の含有がより多いVI-2層に細分される。調査区北西側に厚く堆積し層厚は最大で 30cmを測るものの、その堆積は東壁まで達しない。

VII層 古墳時代前期初頭～前葉の造成土である。調査区西側を中心に堆積するが、下層のVIII層が厚く堆積する調査区西壁際にはほとんど分布しない。これは当大別層が、VIII層でかさ上げされた中心域の微高地の裾部を拡張するためのものであったためである。当大別層は黒褐色あるいは灰黄褐色の細砂シルトを中心としながら複雑な堆積状況を呈し、層厚は最大で 28cmを測る。ただし、古墳時代前期初頭～前葉の造成土の造成は、遺構として記載した東側の古墳時代前期造成土、SD38-Aを含めた一連のものであり、VII層はその最初の工程を大別層として捉えたものである。

VIII層 弥生時代後期前葉とみられる造成土である。調査区西側のみに分布することから、中心域の微高地のかさ上げを意図したものとみられる。当大別層中には、褐灰色～灰黄褐色細砂混シル



第 13 図 調査区基本層序模式図

トを中心とした複雑な堆積状況を示しており、西側溝ではこの造成を補強するために設置された木製構造物を確認した。層厚は最大で40cmを測る。

Ⅸ層 Ⅷ層あるいはSD38-C・F下の層を一括したものであり、調査区西側と調査区東側が一連のものかどうかは不明である。西側では土留めを伴う造成土であり、カキを中心とする貝殻片を特徴的に含む。時期を特定できる遺物は出土していない。

調査区南壁土層断面をもとに、当調査区の基本層序を模式的に示したのが第13図である。当調査区の基本層序の特徴として、古墳時代前期初頭～前葉に属すⅦ層以下がすべて造成土であることが挙げられる。中心域東側の区画溝SD38はこの造成に伴って変遷している。

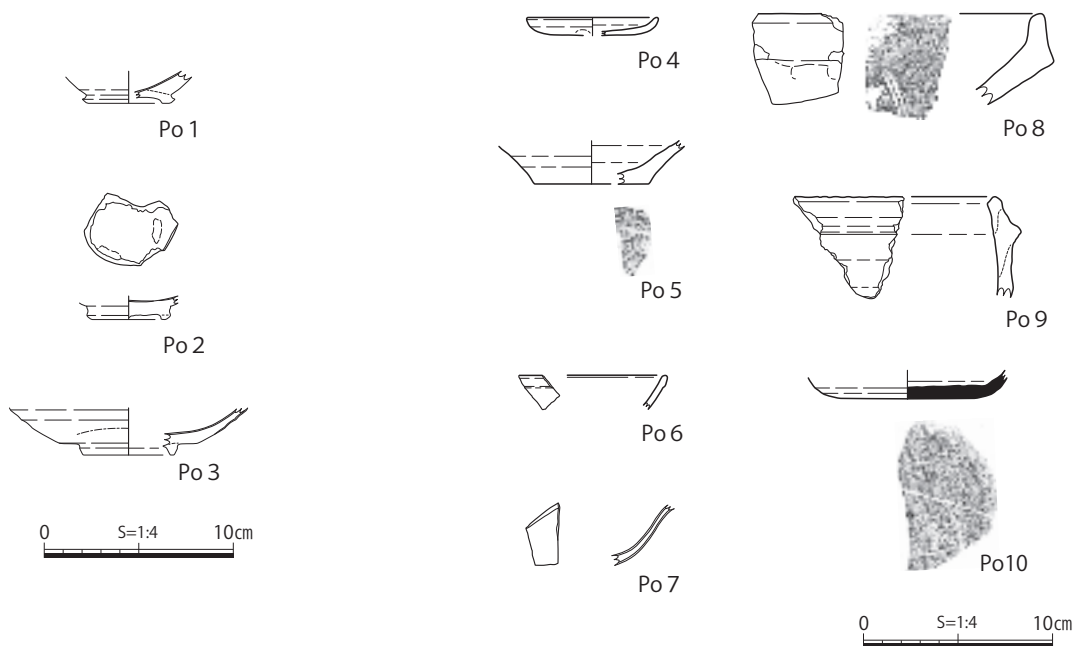
第2節 検出した遺構および出土遺物

第1項 Ⅱ～Ⅳ層出土遺物

Ⅱ・Ⅲ層出土遺物

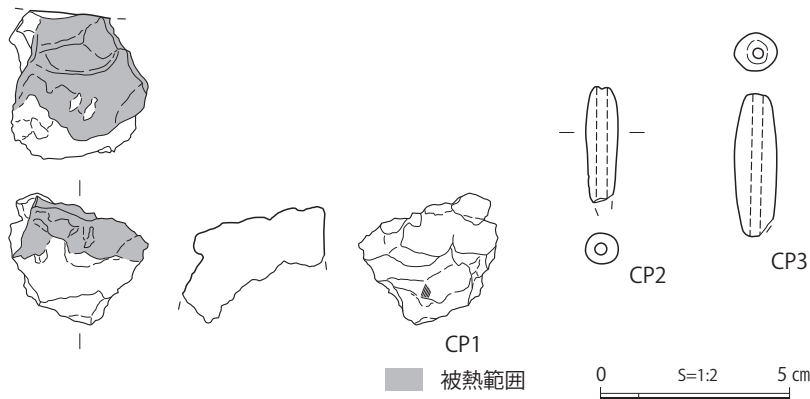
第14図に示したPo 1はⅡ層、Po 2・3はⅢ層から出土した土器である。Po 1・2は陶器の高台付坏である。Po 1の内面は灰オリーブ色の施釉がなされる。高台部の側面には回転ヘラケズリによって稜が形成されている。Po 2の内面はにぶい黄橙色の施釉がなされるが、重ね焼きによって一部胎土が露出している。底部外面には回転糸切の痕跡が残る。Po 3は陶器の皿である。体部は平坦な高台部から強く屈曲して立ち上がり、外面には回転ナデによる明瞭な段を残す。高台部外面を除いて全面に灰オリーブ色の施釉がなされる。これらはいずれも近世に属すものとみられる。

Ⅳ層出土遺物

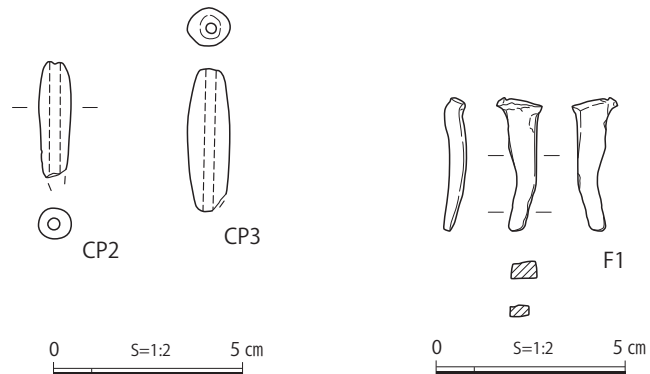


第14図 Ⅱ・Ⅲ層出土土器

第15図 Ⅳ-1層出土土器



第16図 IV層出土土製品



第17図 IV-1層出土金属器

第15図にはIV-1層から出土した土器を示した。Po 4はいわゆる京都系土師皿であり、底部に手づくねの指頭圧痕が残る。Po 5は土師器の坏であり、底部外面に回転糸切の痕跡を残す。Po 6は白磁の碗である。玉縁状の口縁部をもち全面に灰白色の施釉がなされる。Po 7は青磁の碗である。やや外反する口縁部をもつもので、全面にオリブ灰色の施釉がなされる。Po 8は備前焼の播鉢である。やや内傾する口縁部をもち、体部内面に5条の播目が認められる。Po 9は土師器の羽釜である、口縁部下の外面に鈍い突帯をもち、やや内傾する体部から下ぶくれの器形とみられる。Po 6が11世紀後半～12世紀中葉。その他は12世紀後半～14世紀に属するものである。Po10は須恵器の坏である。平坦な底部から内湾した体部が立ち上がるものとみられる。底部外面に回転糸切の痕跡を残す。

第16図には土製品を示した。CP 1はIV-2層から出土した鞆羽口の細片である。外面は被熱により黒変しており、内面にはスサの痕跡が残る。CP 2・3は土錘である。いずれも細長い紡錘形を呈し、円孔が上下に貫通する。

第17図に示したF 1はIV-1層から出土した鉄製の釘である。断面方形で下端に向け幅、厚みとも小さくなる。上端が折れ曲がるのは使用によるものか。

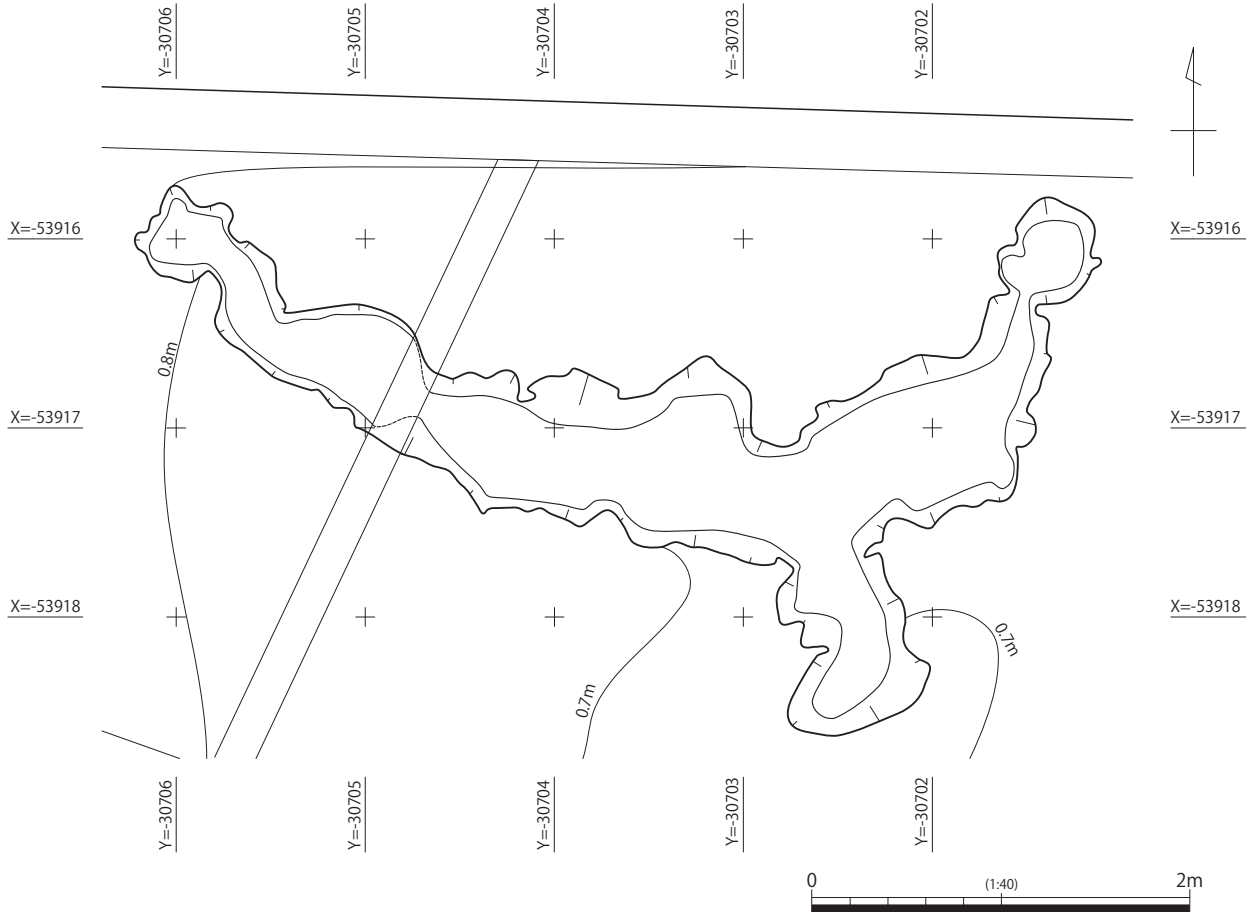
第2項 IV-1層下面（第1面：中世）までの遺構と遺物

Ⅲ層からIV-1層の掘削までの掘削によって、調査区南東側の地形が低くなり、調査区内の標高は機械掘削終了時の約0.6～0.8 mから約0.4～0.8 mとなった。

Ⅲ層中で1溝、IV-1層下面で大畔である4土手と、これにほぼ直行して接続する2畦畔を検出した（第19図）。これらの遺構の検討から、13世紀の水田区画が近世末まで踏襲されたことが判明した。

1溝（第18図）

Ⅲ層掘削中に検出した溝であり、近世の遺構であると判断できる。後述する4土手と2畦畔新段階が形成する北側の水田区画の南東隅に位地し、両遺構に沿って屈曲する。検出長は、4土手に平行する部分（N-25°-E）で3.2 m、2畦畔に平行する部分（N-65°-W）で4.1 mを測る。検出面からの深さは最大で8 cmを測る。位置と方向性からみて、本遺構は4土手と2畦畔を維持する際の土取り溝とみ



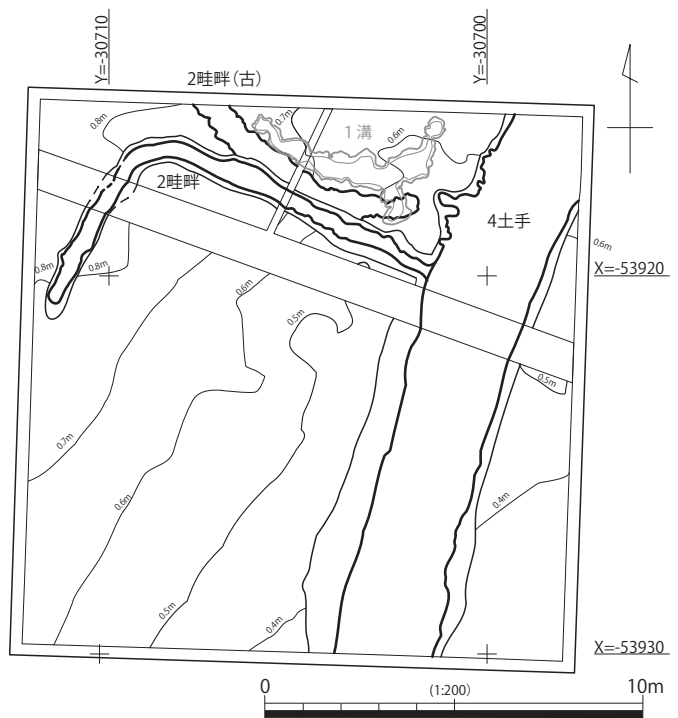
第18図 1溝

られ、この水田区画が近世まで存続していたことを示す。

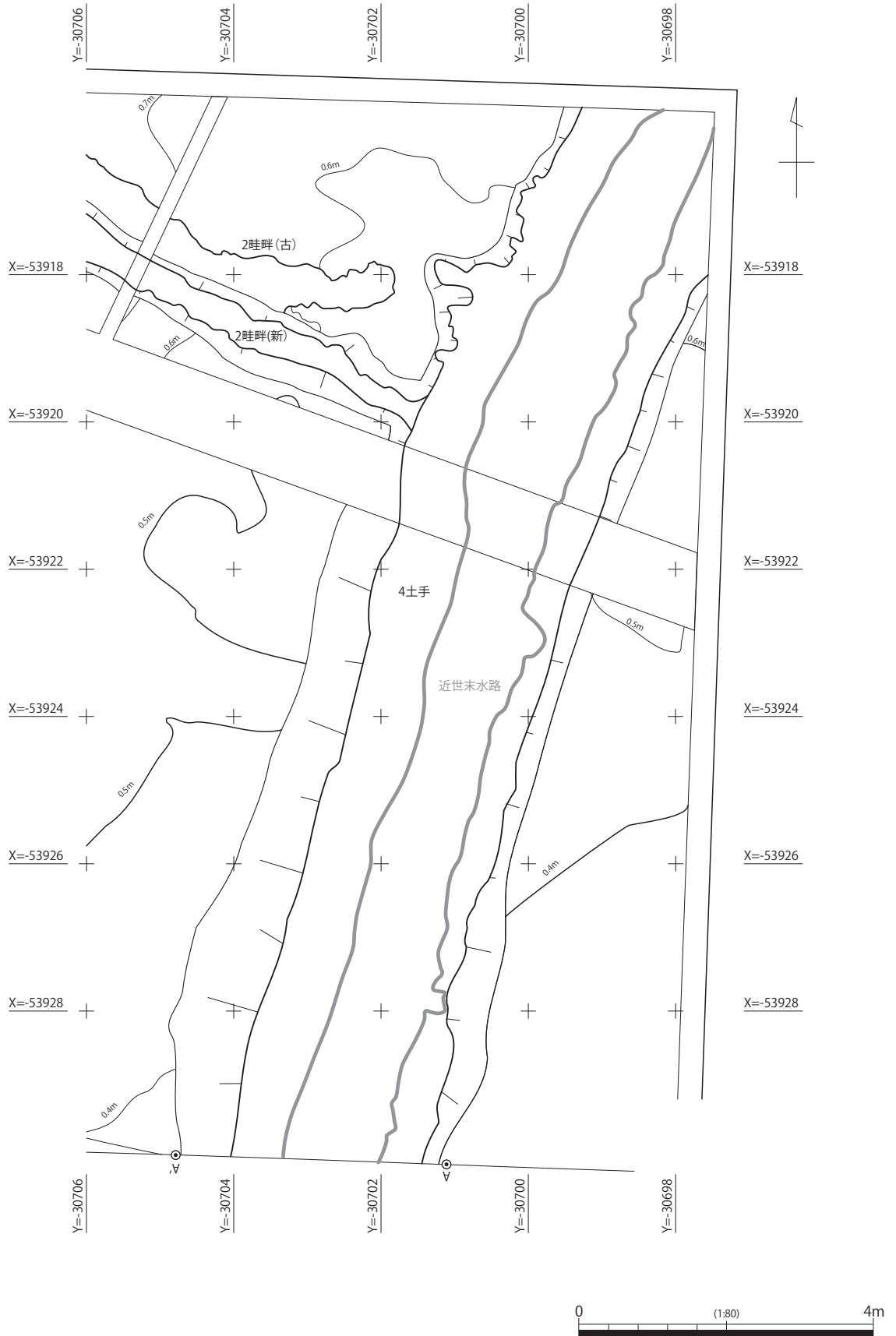
4土手 (第20図)

調査区東側において検出した。規模の大きい凸状遺構であり、頂部はⅢ層上面精査時に、法面はⅣ-1層に含まれる微細な砂層下で検出した。調査区を南北 (N-17°-E) に直線的に貫き、検出長は14.88 mを測る。最大幅は頂部で2.80 m、底部で4.28 m、残存高は22cmを測る。当遺構の構築土はこれを被覆するⅣ-1層と同様、黒褐色細砂混シルトが主体であるが、細礫が多く含まれるのが特徴である。

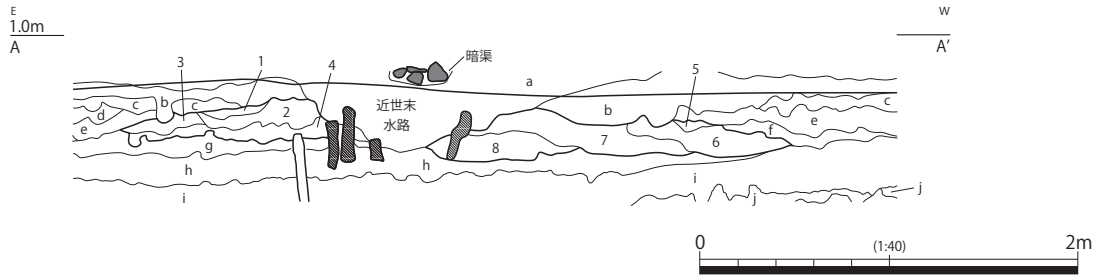
なお、当遺構の頂部には、近世末の陶磁器が出土する、杭と横板で護岸した幅1.4 m、深さ28cmの水路が掘削されている。当調査区周辺を描いた天保年間の田畑地続全図には、当遺構と



第19図 Ⅳ-1層下面 (第1面) 平面図

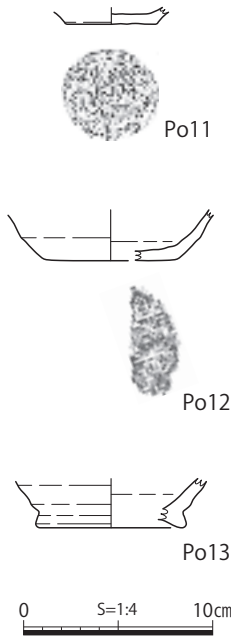


第20-1図 4土手 (1)

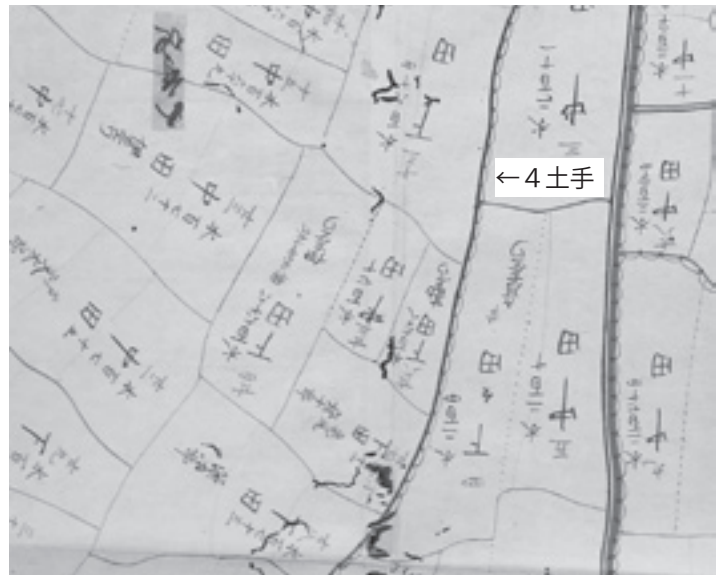


- | | |
|--|---------|
| 1 10YR4/2 灰黄褐色 粘質シルト 粘性強 しまりやや強 | a・b II層 |
| 2 10YR3/2 黒褐色 中砂混シルト 粘性中 しまり中 細礫含 | c III層 |
| 3 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中 細礫多含 高師小僧含 | d～f IV層 |
| 4 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中 | g～i V層 |
| 5 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混粘質シルト 粘性強 しまりやや強 | j VI層 |
| 6 10YR3/2 黒褐色 中砂混シルト 粘性やや強 しまり中 細礫・炭化物含 | |
| 7 10YR3/2 黒褐色 中砂混粘質シルト 粘性やや強 しまりやや強 細礫多含 | |
| 8 10YR3/3 暗褐色 中～粗砂混シルト 粘性やや弱 しまりやや強 細礫多含 高師小僧含 | |

第20-2図 4土手(2)



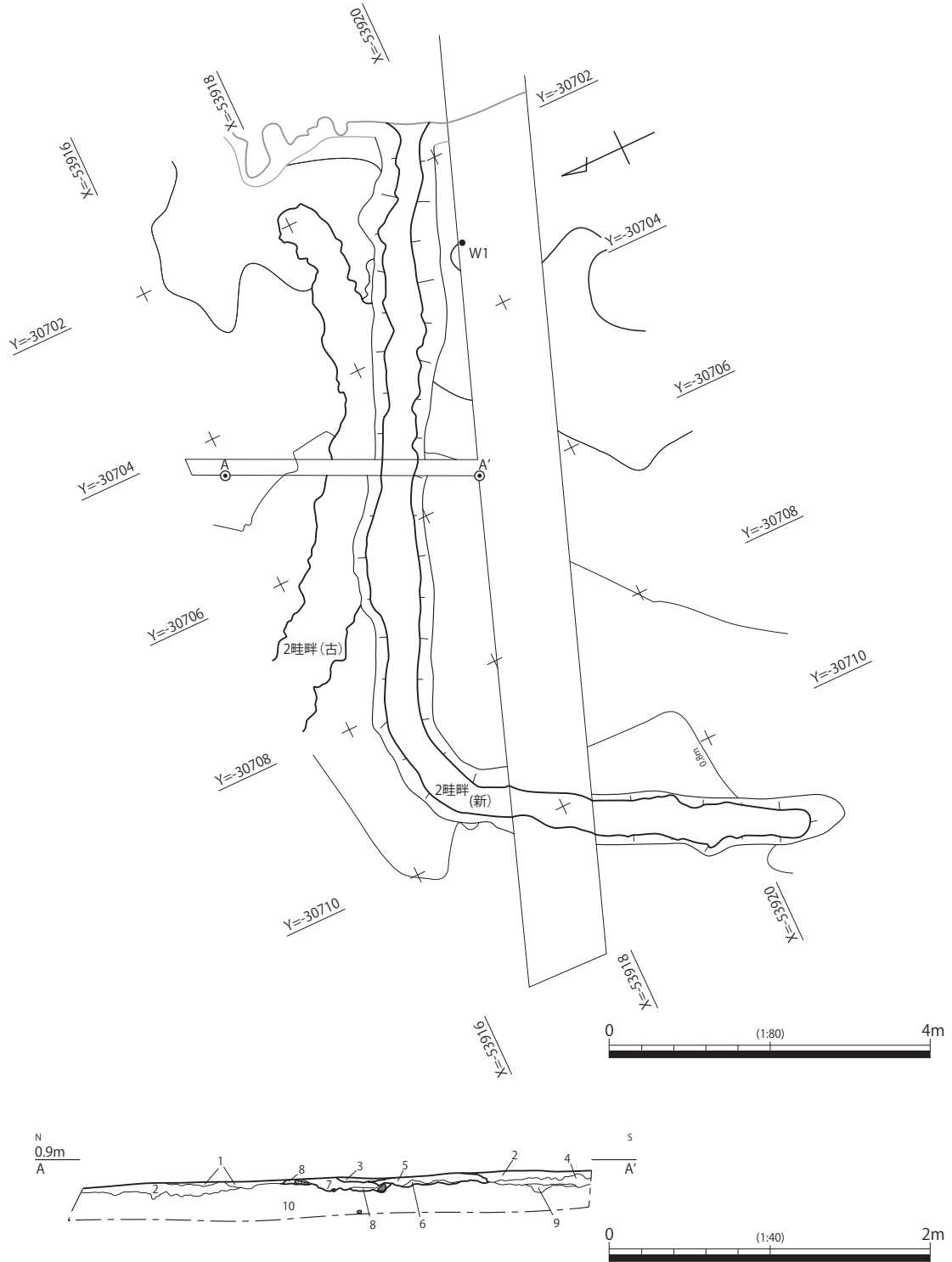
第21図 4土手出土土器



第22図 田畑地続全図

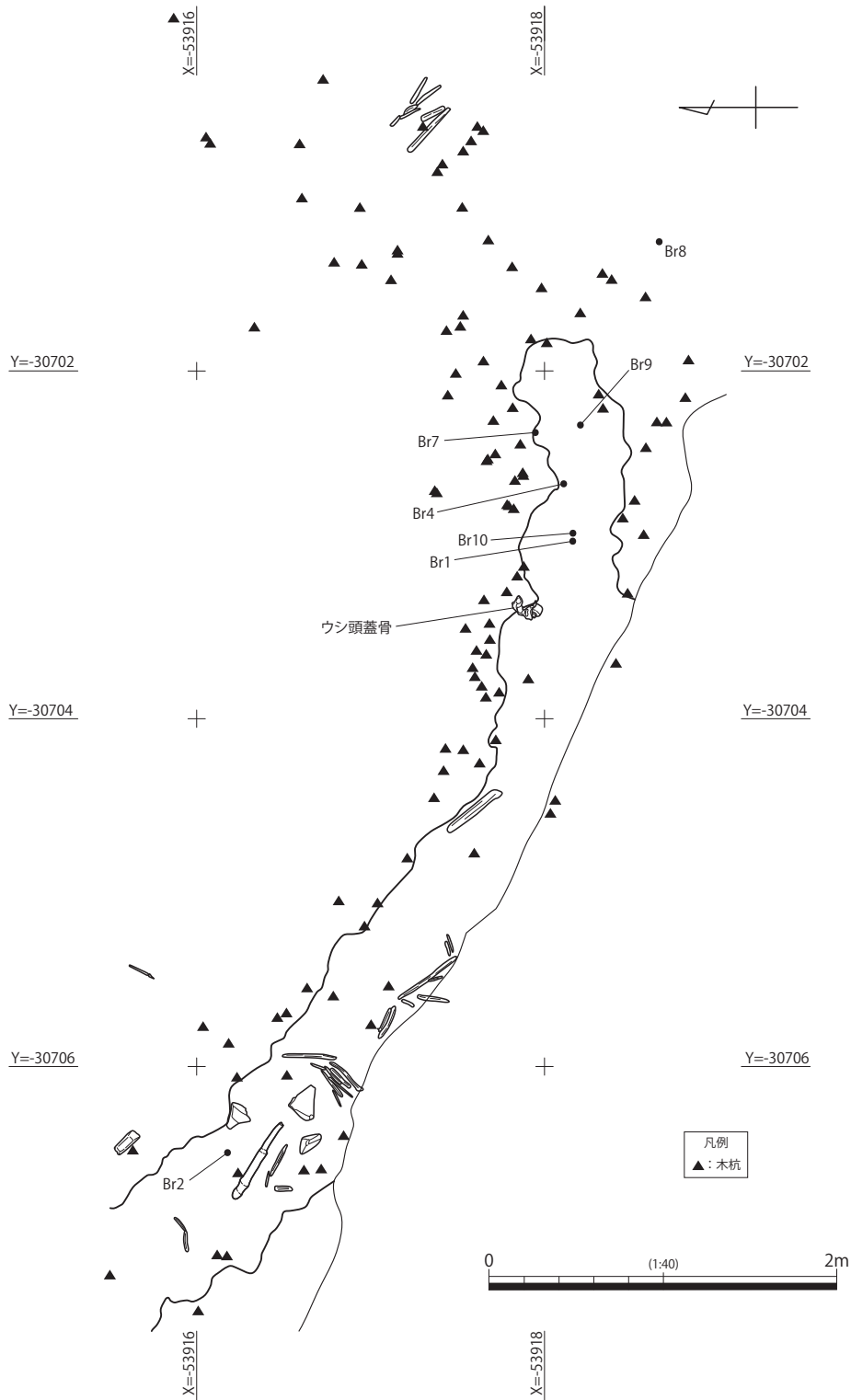
みられる道がこの水路とともに描かれており（第22図）、字境となっていたことが確認できる。したがって、当遺構は13世紀に構築されたのち、近世末まで水田区画の基軸として維持され、機能していたとみることができる。

第21図は4土手から出土した土器である。Po11・12は土師器坏である。Po11は底部外面に回転糸切の痕跡を残す。Po12はやや内湾する体部をもち、底部外面には板目の痕跡を残す。Po13は土師器高台付坏である。短く外側に張り出す高台をもち、体部には回転ナデの痕跡を明瞭に残す。このうちPo12は12世紀後半～13世紀中葉に属するものである。当遺構の構築年代を示すものとみられる。機能時の耕作土であるIV-1層から出土した遺物の年代と照らし合わせても矛盾はない。



- II層 [1 10YR4/1 褐灰色 中～細砂 粘性弱 しまり弱 木の枝を面的に含む
- III層 [2 10YR2/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中 ～φ3cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック多量に含む
- IV-1層 [3 10YR3/2 黒褐色 中～細砂混シルト 粘性中 しまり中 ～1cm 炭化物、細礫含
- [4 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや強 しまりやや弱 高師小僧含
- 2 畦畔(新) [5 10YR2/2 黒褐色 中～細砂混シルト 粘性中 しまり中 ～1cm 炭化物含
- [6 10YR3/3 暗褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱
- 2 畦畔(古) [7 10YR3/2 黒褐色 細～中砂混シルト 粘性中 しまりやや弱 高師小僧含
- [8 10YR4/1 褐灰色 中～粗砂 粘性弱 しまり弱 木の枝を面的に含む
- IV-2層 [9 10YR3/3 暗褐色 シルト混細～中砂 粘性やや弱 しまり中
- V層 [10 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性やや強 しまり中 植物の葉を面的に含む

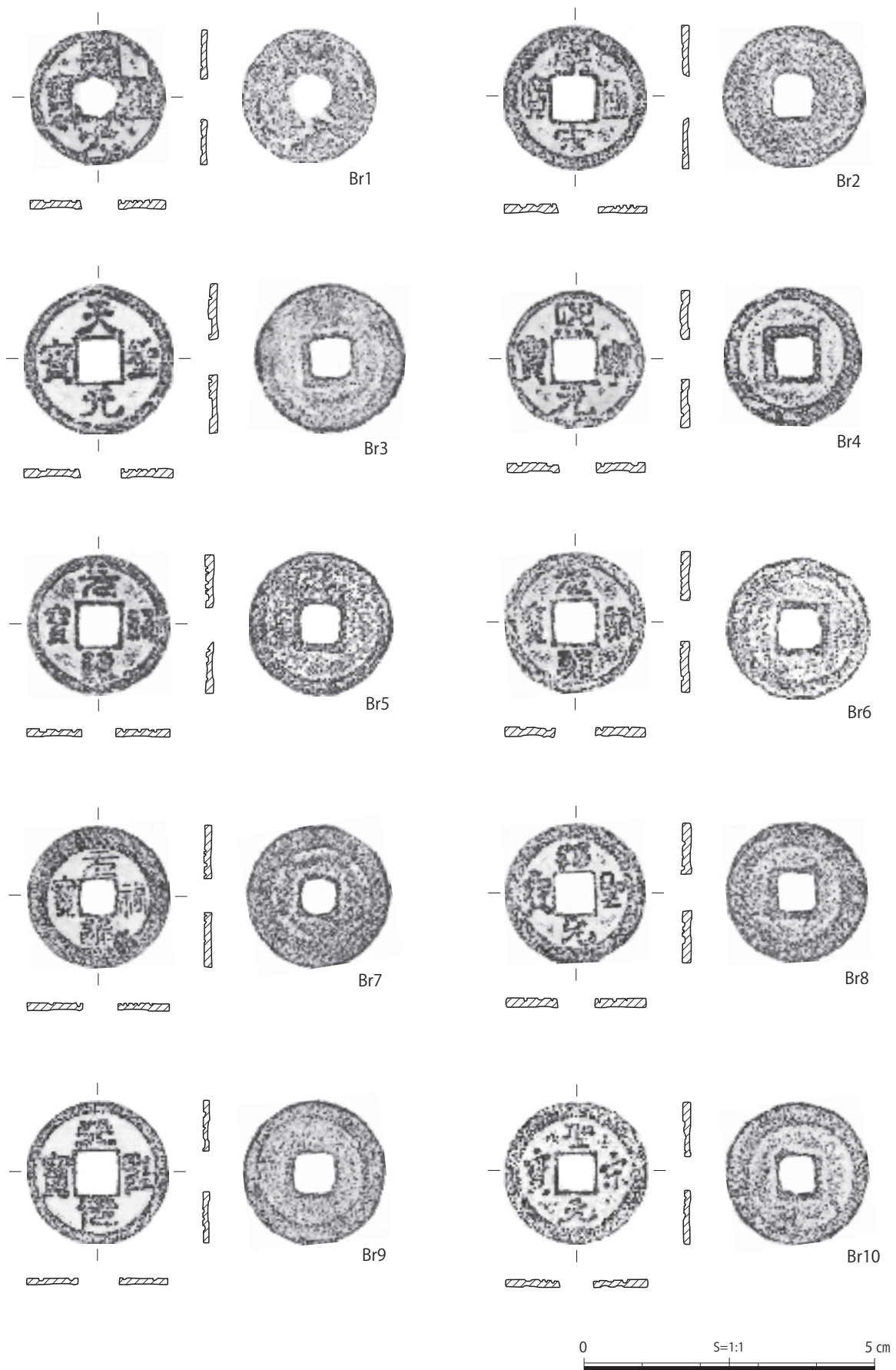
第23図 2 畦畔



第24図 2畦畔（古段階）遺物出土状況

2畦畔（第23～24図）

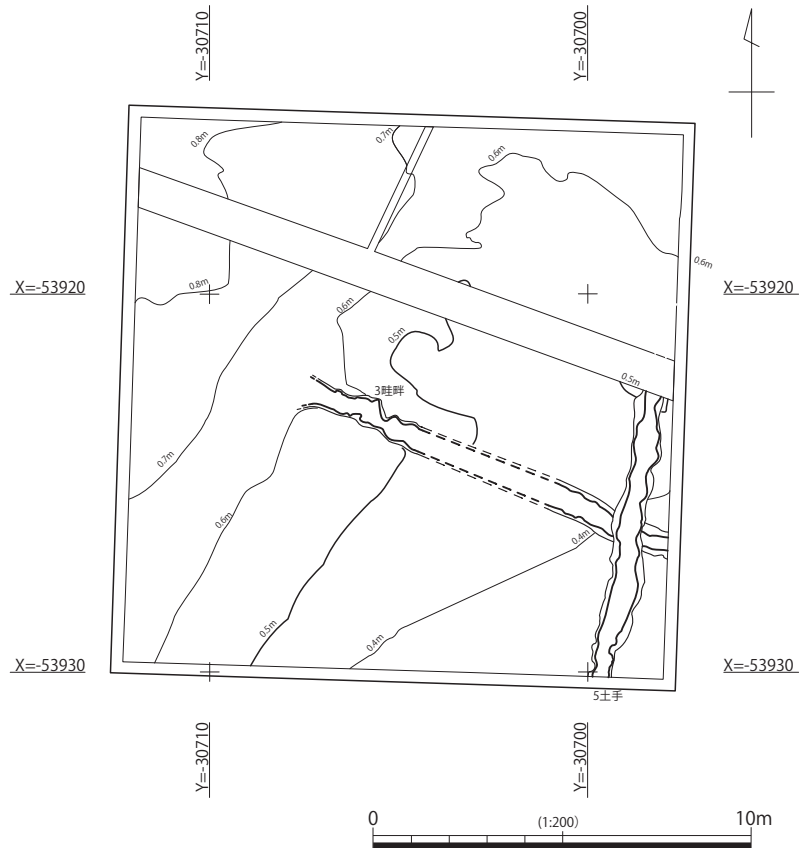
調査区北西部で検出した4土手の西側に伸びる畦畔であり、新旧2段階が認められる。新段階は4土手との接続箇所から東西方向（N-64°-W）に8.4 m付近で、ほぼ直角に曲がり、南北方向（N-27°-E）に2.8 m伸びる。黒褐色中～細砂混シルトを主体として構築されており、最大幅1.00 m、残存高は5 cm測る。



第25図 2哇畔（古段階）および周辺出土金属器



第26図 2畦畔（新段階）
出土木器



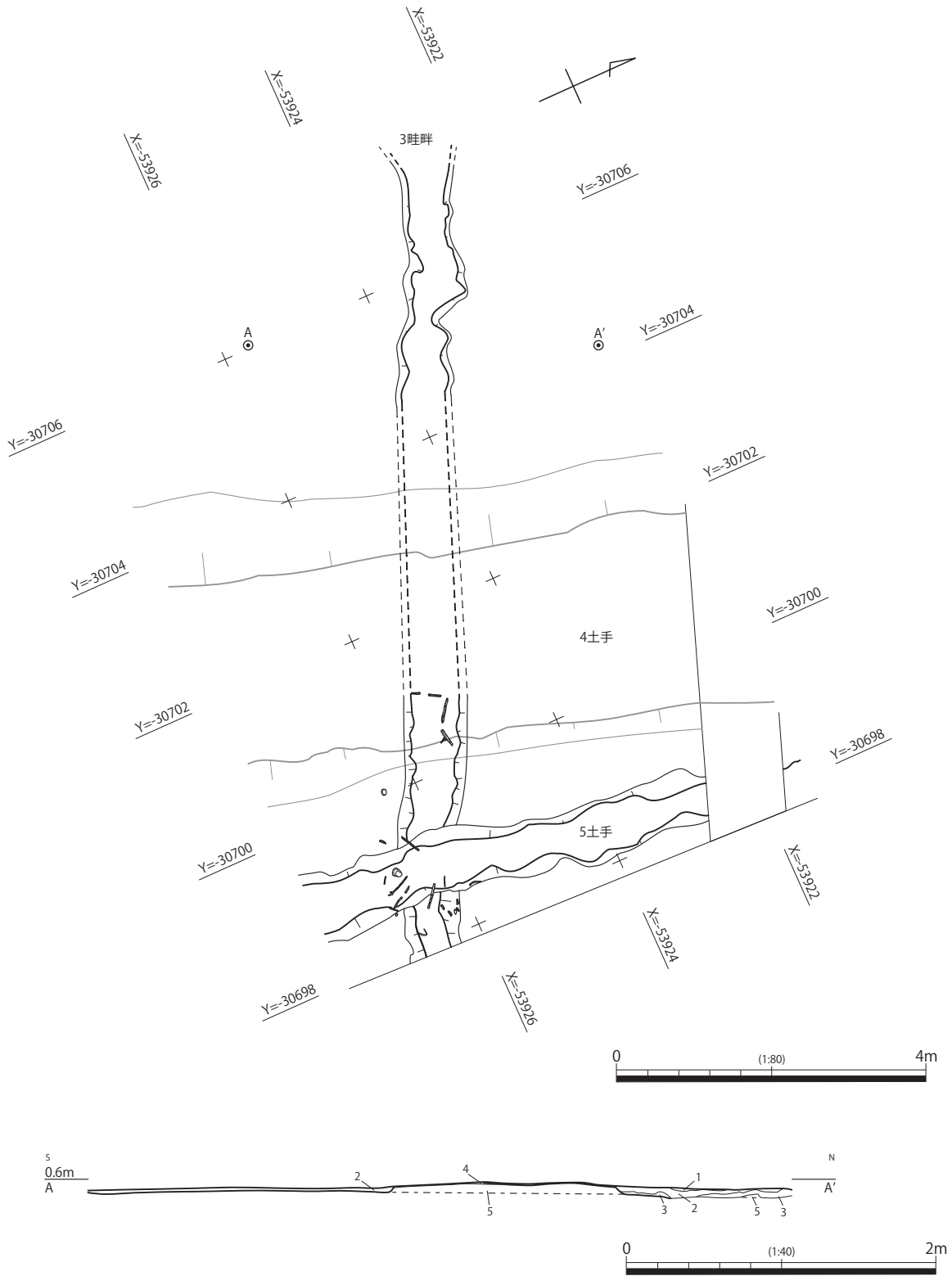
第27図 V層上面平面図

新段階の下で検出した古段階は、新段階の北側を弓なりに湾曲しながら走り、検出長 6.40 m、最大幅 0.80 m を測る。平面的には頂部と裾部の高低差が検出できなかったが、断面では基部を含め 8 cm の残存高が確認できる。木の枝を敷きならした褐灰色中～粗砂層を基部として、高師小僧を含む黒褐色細～中砂混シルトを主体に構築されている。古段階の周辺では、これを補強する目的で打設したとみられる枝材を中心とした微細な杭を多数検出している。これらの杭群は東側の 4 土手の付近まで伸びていることから、古段階もまた 4 土手に接続していたとみられる。

この古段階の東側の屈曲部付近ではウシの頭蓋骨が単独で出土しており、その付近を中心に 10 点の渡来銭を検出した。古段階の構築に際しては、水田に関わる何らかの祭祀が行われたのだろう。ウシの頭蓋骨を祭祀に用いたとみられる例は、当地域では大柵遺跡（鳥取市）において、9 世紀の自然流路で人形をはじめ木製祭祀具を共伴するものが確認されている。この 2 畦畔古段階における、出土例はウシ頭蓋骨を用いた祭祀が 13 世紀に至っても行われていたことを示すものである。

第 26 図に示した W 1 は新段階の南側法面付近で検出した横槌である。握りと身との径の差は小さく、身は径がほぼ一定な円柱状を呈す。身の側面には使用による面的な凹みが確認できる。広葉樹の芯持材を素材とする。

第 25 図は 2 畦畔（古段階）とその周辺から出土した渡来銭である。Br 1～3・7・10 は 2 畦畔古段階から、Br 4・9 は 1 畦畔から、Br 6 は 4 土手から、Br 5・8 は IV - 1 層から出土した。Br 1 は開元通宝（初鑄 621 年）、Br 3 は真書体の、Br 9 は篆書体の天聖元寶（同 1023 年）、Br 2 は真書



- IV-1層 [1 10YR3/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや弱 にぶい黄褐色(10YR4/3)細砂混じる 高師子借入る
- IV-2層 [2 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト～細砂 粘性やや弱 しまりやや弱
- V層? [3 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや弱 細礫僅含
- 3畦畔 [4 10YR3/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性やや強 しまり中 黄褐色(10YR5/6)極細砂ブロック・細礫含
- V層 [5 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性やや強 しまり中 植物片含

第28図 3畦畔

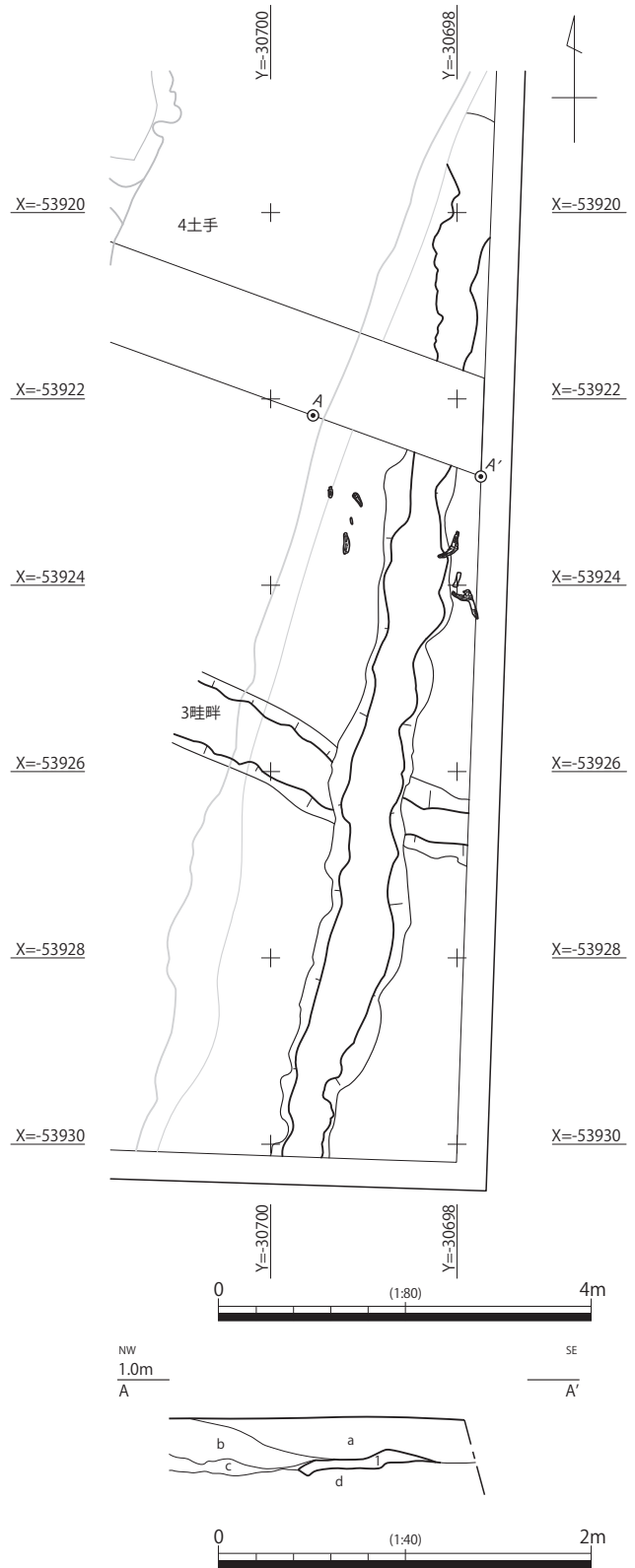
体の皇宋通寶（同1039年）、Br 4は真書体の熙寧元寶（同1068年）、Br 6は篆書体の元祐通寶（初鑄1086年）、Br 5・7は篆書体の元祐通寶（同1086年）、Br 8は紹聖元寶（同1094）、Br10は真書体の聖宋通寶（同1101）である。Br 1を除き、初鑄の年代が11世紀から12世紀初頭の北宋銭であり、遺構の年代と照らし合わせても矛盾はない。

第3項 V - 1層上面（第2面：中世）の遺構と遺物

IV - 2層は、分布が調査区の東側と限定的かつ層厚が薄いため掘削後の調査区内の地形はほぼ同じである。当層の下、すなわちV - 1層上面において、3畦畔とこれにほぼ直行する5土手を検出した（第27図）。いずれの遺構も調査区東側に位置しており、一部に4土手が重複している。両遺構で形成される水田区画は、上面の4土手、2畦畔新段階で形成されるものから、西に2～7°ふれたものとなる。この水田区画の年代は、両遺構交点南東側の水田区画において基盤層であるV - 1層上面から出土した高台付坏Po14（第30図）から10世紀後半～11世紀中葉以降と考える。V - 1層は耕作土ではなく、湿地の堆積とみられるため、当調査区周辺が水田として利用され始めたのは当該期であることが分かる。

3畦畔（第28図）

調査区中央部から東壁にかけて検出した、東西方向（N-66°-W）に直線的に走る畦畔跡である。残存高は最大1cmと低い。4土手下では不明瞭であるが、検出長10.4m、最大幅0.80mを測る。黒褐色細砂混シルトで構築されており、遺構内では、芯材とみられる遺構の軸とほぼ同一の方向に並ぶ複数の枝を検出した。調査区東壁断面では、これら芯材を固定するための幅5cm程度の枝材を用いた杭を確認した。



1 5YR5/8明赤褐色 砂 黒色土混 しまる（焼砂層）
a IV-1層、b 4土手、c IV-2層、d V-1層

第29図 5土手

5土手（第29図）

調査区東壁付近で検出した、3畦畔とほぼ直行する南北方向（N-10°E）に走る土手状遺構である。検出長 11.32 m、最大幅 0.92 m、残存高 7 cmを測る。3畦畔上に構築されているが、間層を挟まないことから同時に機能したものとみられる。ただし、3畦畔とは異なり、焼土由来とみられる赤褐色を呈す硬く締まった粗砂で構築されていることが特徴的であり、道であった可能性が高い。3畦畔との重複箇所から北よりの箇所で見出した立ち木の根も当遺構が畦畔ではなかったことを裏付けるものといえるかもしれない。

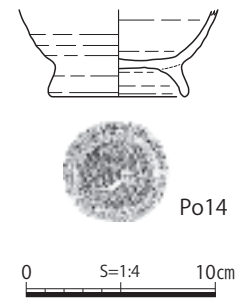
第30図に示したのはV-1層上面から出土した高台付坏である。ハの字状に開く高台をもち、底部外面には回転糸切の痕跡を残す。10世紀後半～11世紀中葉に属す。

第4項 V層出土遺物

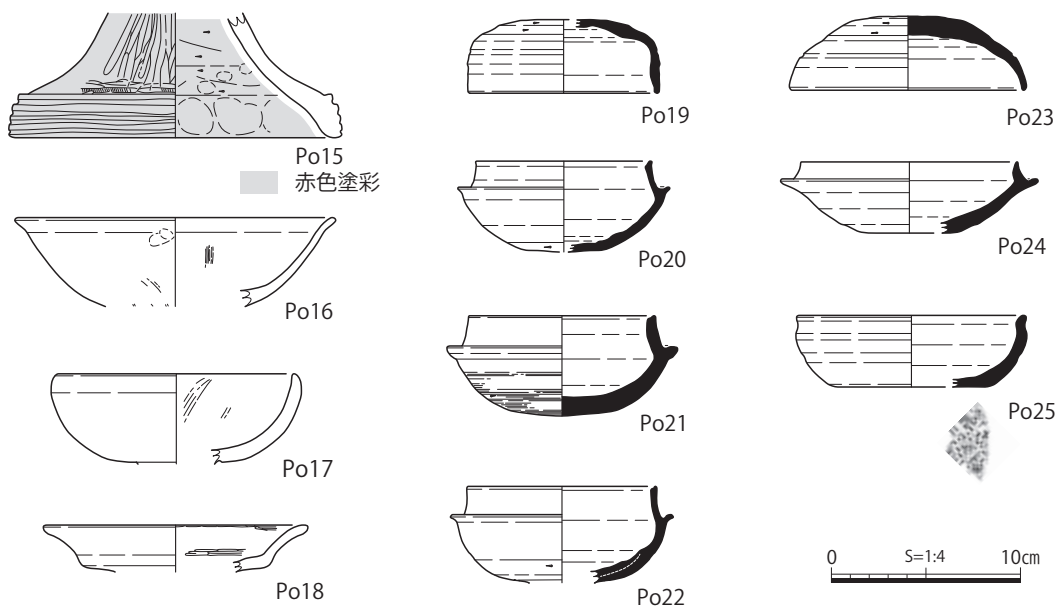
V層の層相から、当調査区周辺は湿地であったと考えられる。少ないながら含まれる以下の出土遺物から、当層は古墳時代後期から律令期にかけて形成されたとみられる。

第31図には土器を示した。Po15は弥生土器の器台であり内外面とも赤彩される。脚裾部外面には4条の平行沈線が施される。弥生時代後期中葉に属す。

Po16～18は土師器である。Po16は高坏である。坏部はやや内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。Po17は脚付椀である。内湾する椀部の内面はミガキで調整される。これらは古墳時代中期末葉～後期前葉の範疇で捉えられるものである。Po18は坏である。下方にわずかに膨らむ底部と外反して短く立ち上がる体部をもつ。内面はミガキで調整される。7世紀末～8世紀前葉に属す。



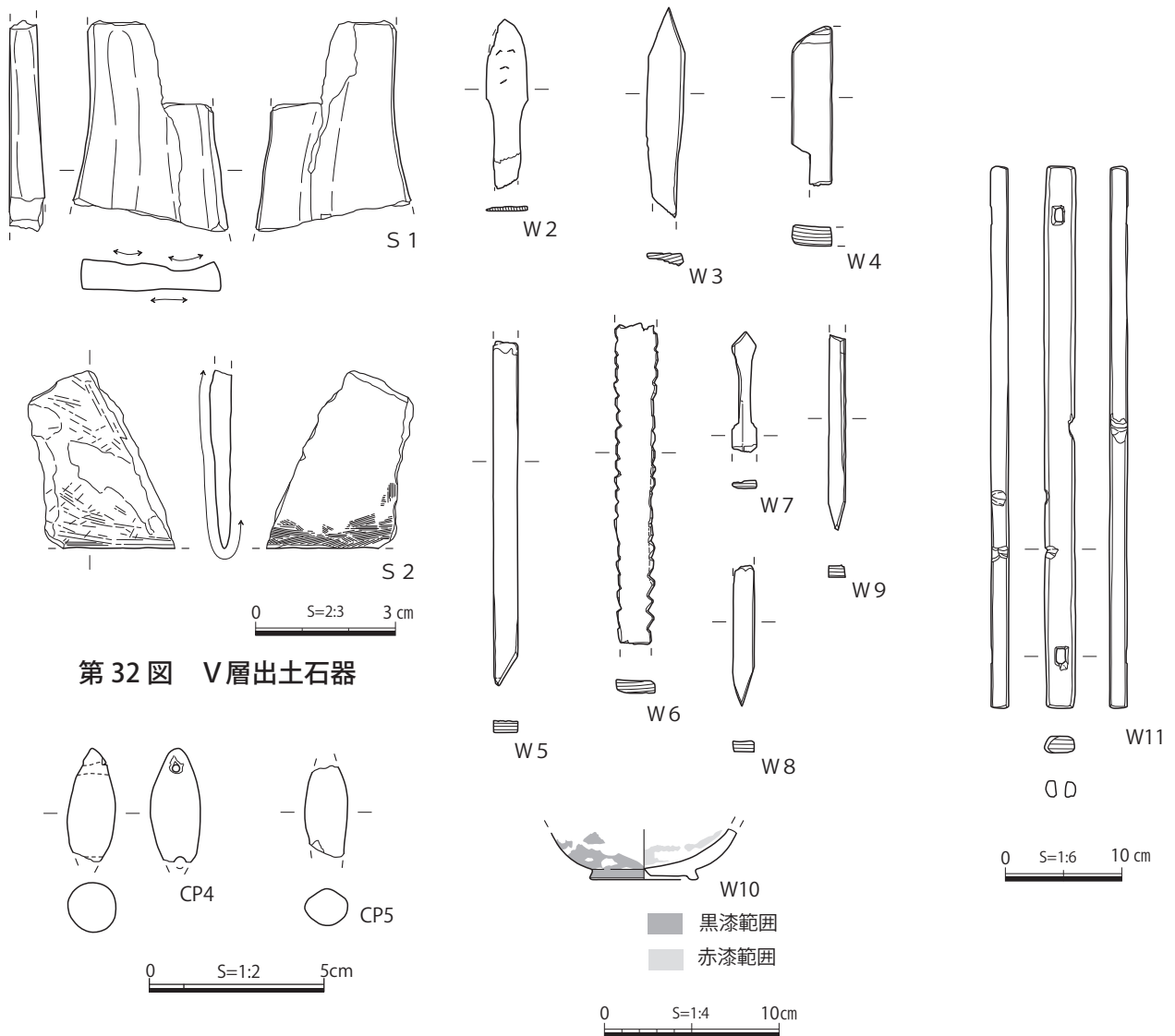
第30図 V層上面出土土器



第31図 V層出土土器

Po19～25は須恵器である。Po19・23は坏蓋である。Po19は平坦な天井部からやや強くカーブし、口縁部へ垂下する。天井部外面には左方向の回転ヘラケズリの痕跡を残す。Po23は、器高は低い外面の2条の沈線によって段を表現する。天井部外面には右方向の回転ヘラケズリの痕跡を残す。Po20・21・24は坏身である。Po20・21は器高が高く底部は丸みを持つ。口縁部は受部から内傾して伸びる。Po20はシャープな作りで、底部外面に右方向の回転ヘラケズリの痕跡を残す。Po21は器壁が厚く、体部下半から底部にカキ目が施される。Po24は底部が平坦で、体部の立ち上がりは直線的である。口縁部は受部から内側に短く立ち上がる。Po22は高坏である。坏部の形状はPo20・21に類似する。Po19～22はTK23・47併行で古墳時代中期末葉、Po23・24はTK10併行で古墳時代後期中葉に属す。Po25は坏である。内湾する体部をもち、口縁部はナデによって僅かに外反する。底部は平坦で、外面に回転糸切の痕跡を残す。7世紀末～8世紀前半のものである。

第32図には石器を示した。S1は紅簾片岩製の砥石である。表面に2条、裏面に1条の浅い溝状に窪んだ研面が認められる。玉砥石の可能性もある。S2は石庖丁である。破折により全体の形状は明らかではないが、表面全体と、裏面刃部付近に使用によるとみられる摩滅が認められる。



第32図 V層出土石器

第33図 V層出土土製品

第34図 V層出土木器

第33図に示したCP 4・5土錘である。CP 4は紡錘形を呈し上下端付近に丸孔をもつ。CP 5も同様の器形とみられる。

第34図には木器を示した。W 2～4は人形である。W 2は両側縁からの緩やかな挟り込みで作出された頭部の表面には微細な線刻により顔が表現される。W 3の頭頂部は山形で、頭部を作出する両側縁からの切り込みは浅く、直線的である。W 4は丸い頭頂部をもち、側縁からの深く直線的な切込みによって頭部を作出する。他のものに比べ厚く、分割前のものとみられる。W 5は細長い板材の下端を斜めに削ぎ落したもので、人形の脚の可能性はある。W 6～9は斎串である。W 6は両側縁に鋸歯状の刻みが施される。W 7は偏菱形の頂部をもつ。W 8・9は両側縁からの切り込みによって下端をとがらせたものである。

W10は高台をもつ椀である。外面は黒色、内面は赤色の漆が塗布される。

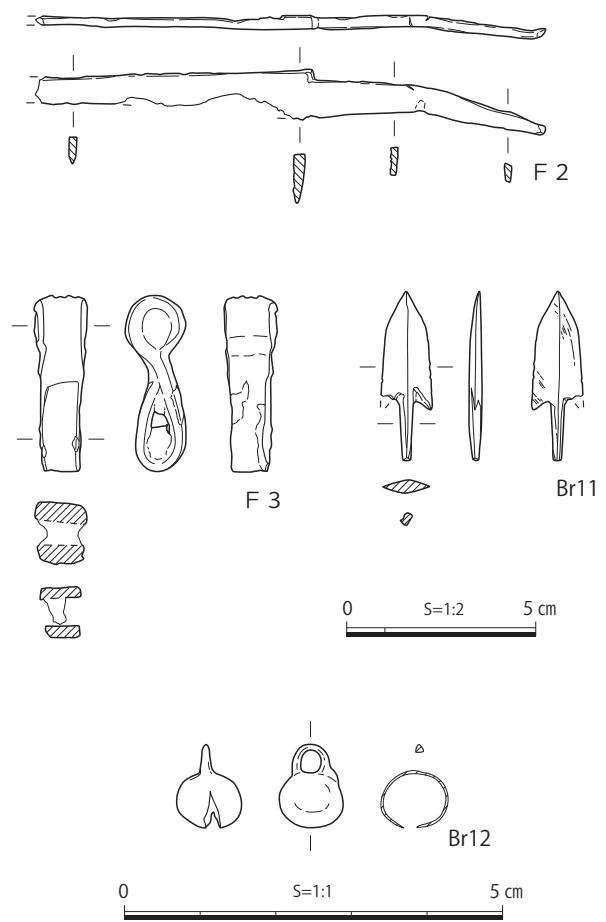
W11は火鑽臼である。左側縁に2か所、右側縁に1か所の切り込みが設けられているが、使用された痕跡はない。上下端付近には転用前の方形穿孔を残す。

第35図は金属器である。F 2は鉄製の刀子である。断面長方形を呈す茎は背に段を設け刃部と区画されている。刃部の断面から両刃であることが分かる。F 3は鉄製のカセとみられ、板状の素材を8字状に曲げ上下2段の孔を作出している。Br11は銅鏃である。逆刺をもつ有茎鏃で矢印形の平面形を呈する。茎は下端に向けややすぼまる。鏃身と茎は一連で整形されており、中央を貫く鑄によって断面は菱形を呈すが、茎には鑄型のずれによって生じた段が認められる。

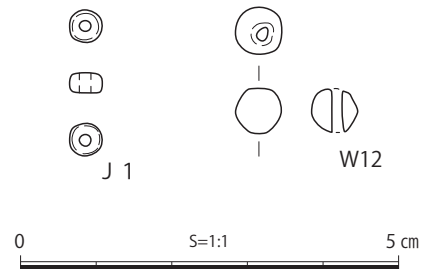
Br12は銅鈴である。身の直径8mmと小型で、上面の紐で形成される孔は2.5mmを測る。球形を呈す身の器壁は薄く、下部が設けられた鈴口はスリット状である。丸は失われている。

第36図はV層から出土した玉類である。J 1は滑石製の白玉である。W12は硬質の材を用いた木製の玉である。やや歪な球形を呈し、上下に円孔が貫通する。

第36図はV層から出土した玉類である。J 1は滑石製の白玉である。W12は硬質の材を用いた木製の玉である。やや歪な球形を呈し、上下に円孔が貫通する。



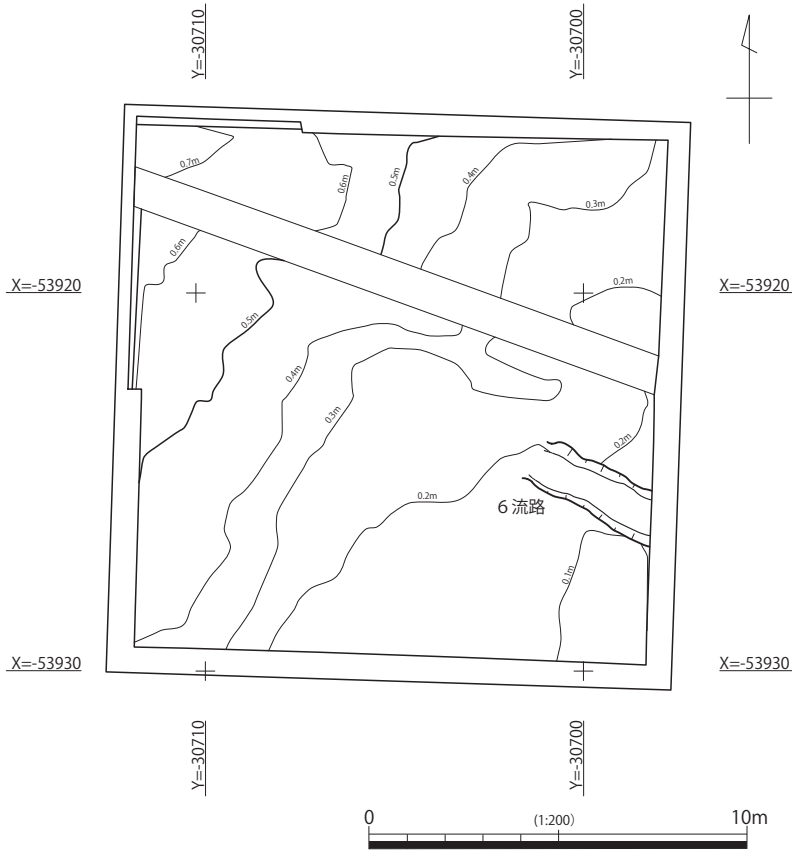
第35図 V層出土金属器



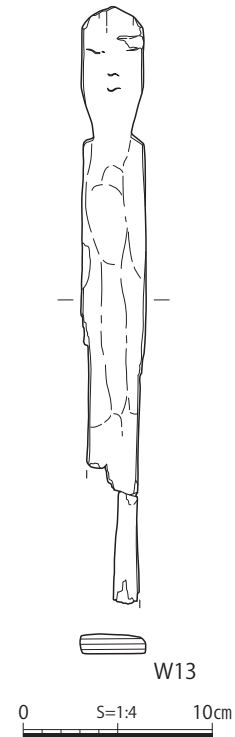
第36図 V層出土玉類

第5項 V層中（第3面：律令期）の遺構と遺物

V層の掘削によって調査区南東部が大きく下がり、調査区内の標高は約0.1～0.7mとなった（第37図）。V層の形成時期である古墳時代後期～律令期には、当調査区周辺の利用は低調であったとみ



第 37 図 VI層中平面図



第 38 図 6 流路出土木器

られ、遺構はV層中において自然流路である6流路を検出したのみである。

6 流路 (第 39 図)

調査区南東部において検出した自然流路である。検出面の標高は0.1～0.2 m付近である。東西方向(N°63-W)に走り、検出長は3.8 m、最大幅1.38 mを測る。概ね皿状の断面形を呈し、最大深12cmを測る。調査区東壁において、V-1層直下の遺構であることが確認できる。埋土は黒褐色シルトの単層でありV-1層と同様、植物片を含む。この層相の類似性からみて、当遺構はV-1層の堆積と一連の自然流路であった可能性が高い。ただし、埋土にラミナ構造が確認できないことからみて、常時水が流れていたわけではなく、湿地中の窪地のようなあり方の自然流路であったとみられる。

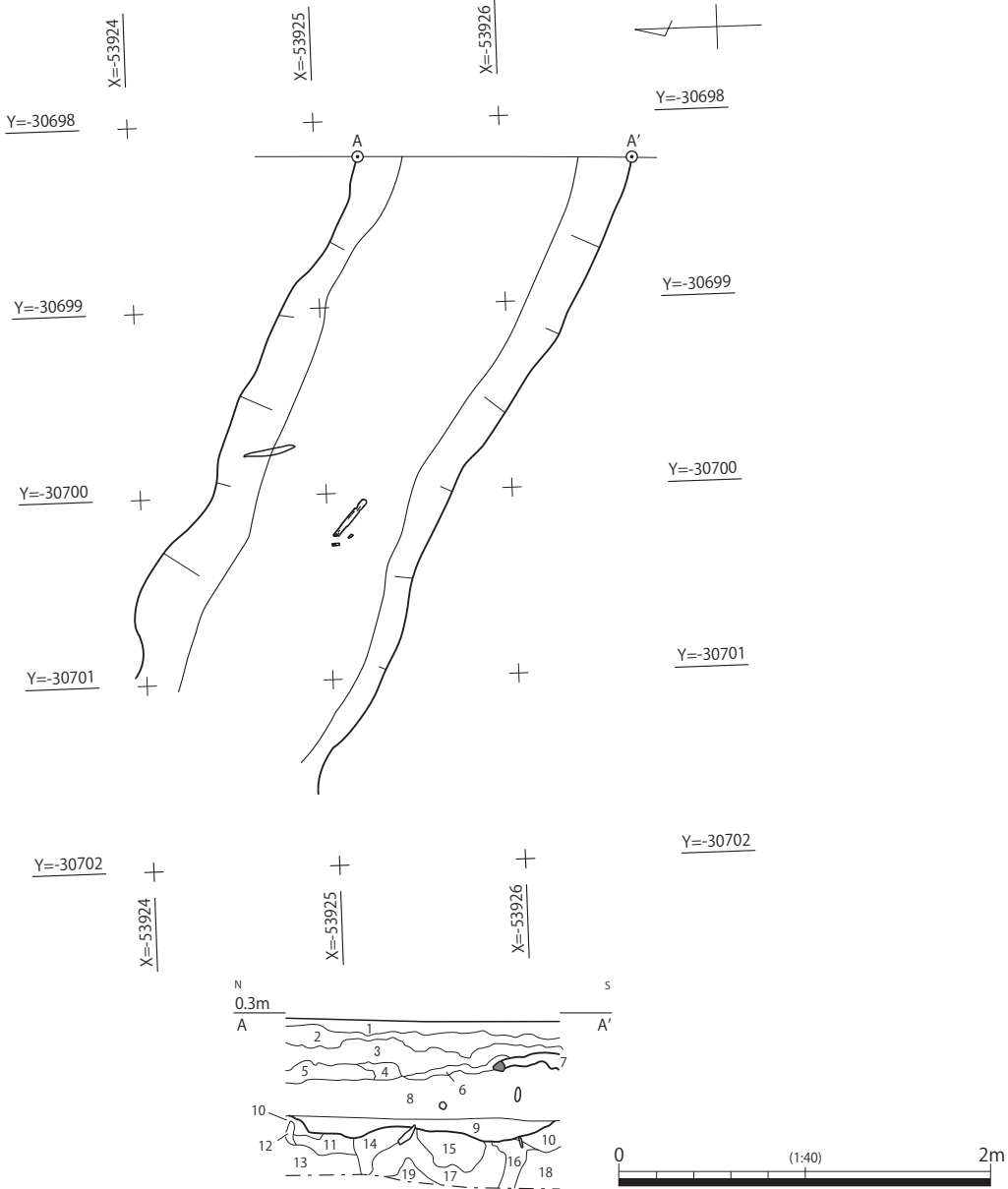
当遺構から出土した人形W13は、折れた脚部が遺構底面に突き立てられた状態を留めて検出されており、使用のされ方を窺うことのできる出土例といえよう。

第38図に示したW13の頭部は楕円形を呈すが頭頂部はやや尖り、表面には線刻により顔が描かれる。上下からの切り込みによって頭部と画される肩部はなで肩である。本来2本の脚をもつものであり、1本が胴部と接合した。

第6項 VI層出土遺物

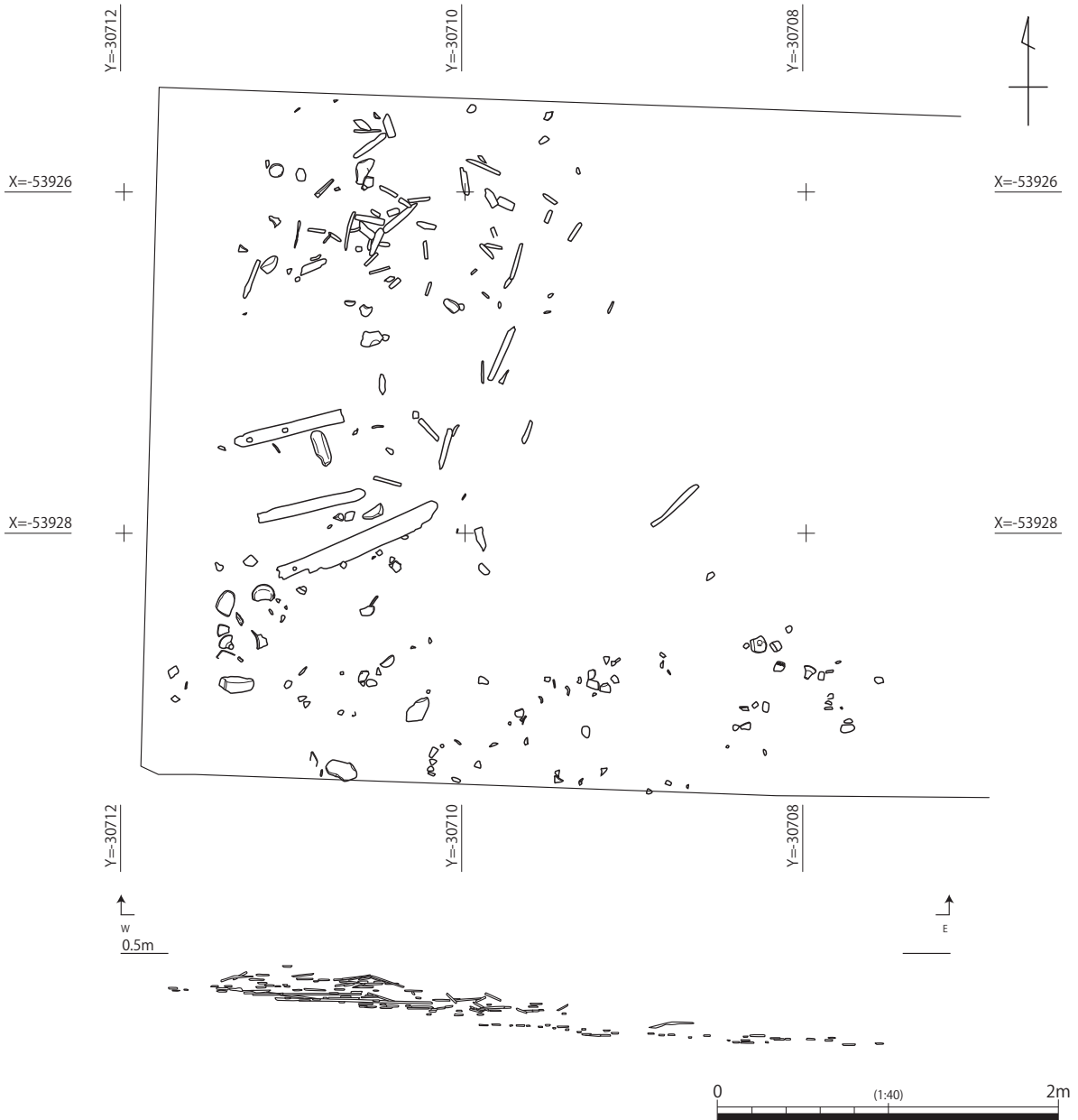
VI層上面の遺物出土状況

調査区南西隅の標高0.2～0.4 mを測るVI-1層上面で、土器や建築材を含む木器など多数の遺物



III層	1	10YR2/2	黒褐色	細砂混シルト	粘性中	しまり中	~φ3cm褐色シルトブロック含
	2	10YR3/2	黒褐色	シルト	粘性やや強	しまりやや強	細礫含
	3	10YR3/2	黒褐色	細砂混シルト	粘性中	しまりやや強	
IV層	4	10YR3/2	黒褐色	細砂混シルト	粘性やや弱	しまりやや弱	10より細砂多
	5	10YR3/2	黒褐色	細砂混シルト	粘性中	しまり中	
3 畦畔	6	10YR3/2	黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや強	
	7	10YR3/3	暗褐色	シルト混細砂~中砂	粘性やや弱	しまり中	木片・細礫含
V層	8	10YR3/2	黒褐色	シルト	粘性やや強	しまり中	植物の葉を面的に含む
6 流路	9	10YR3/2	黒褐色	シルト	粘性やや強	しまり中	植物片含
	10	10YR3/2	黒褐色	細砂混シルト	粘性中	しまりやや弱	
VII層	11	10YR3/2	黒褐色	細砂混シルト	粘性中	しまり中	
	12	7.5YR4/2	灰褐色	粘質シルト	粘性強	しまりやや強	
	13	10YR2/2	黒褐色	細砂混シルト	粘性やや強	しまりやや弱	植物片含
	14	10YR3/2	黒褐色	細砂混シルト	粘性やや強	しまり中	~φ3cm灰黄褐色粘性シルトブロック含
	15	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	粘性やや強	しまりやや弱	黒褐色細砂混シルト混
	16	10YR4/2	灰黄褐色	粘質シルト	粘性やや強	しまり中	
	17	10YR3/1	黒褐色	細砂混シルト	粘性中	しまり中	
	18	10YR2/2	黒褐色	細砂混シルト	粘性中	しまり中	灰黄褐色粘質シルト混、植物片含
	19	10YR2/2	黒褐色	シルト	粘性やや強	しまりやや強	~φ2cm灰黄褐色粘質シルトブロック含

第39図 6 流路



第40図 VI-1層上面遺物出土状況

を検出した（第40図）。遺物の分布は西側ほど濃密で、西側から東側へ向け緩やかに下がる古地形にあわせ面的に分布している。したがって、これらの遺物は中心域側の微高地から流入したものとみられる。出土した土器の特徴から、VI-1層は古墳時代中期後葉～後期に形成されたとみられ、当該期に中心域の微高地が利用されていたことが窺える。

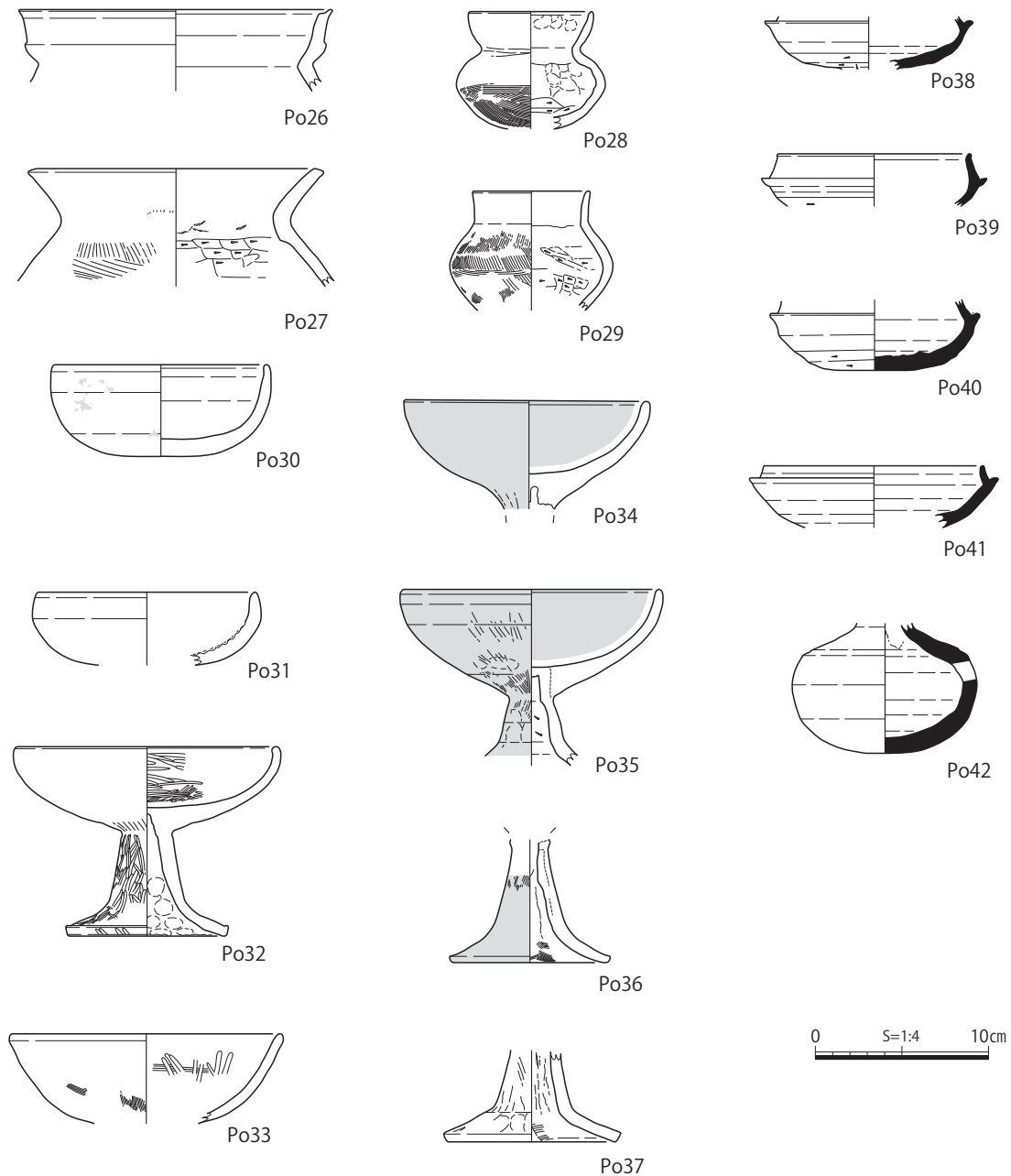
VI層出土遺物（第41～49図）

第41図にはVI-1層から出土した土器を示した。

Po26～37は土師器である。古墳時代後期前葉の特徴を示す。Po26・27は甕である。Po26の短く立ち上がる複合口縁の端部にはナデによる段が形成されている。Po27は単純口縁のものであり、胴部は粗雑なハケメで調整される。内面のケズリは左方向である。Po28・29は単純口縁をもつ小型の壺である。Po28の口縁部はやや内湾して立ち上がる。胴部下半はハケメで調整される。口縁部、胴

部上半内面に指頭圧痕が顕著である。Po29は直立して立ち上がる口縁部をもつ。胴部外面はハケメ、内面は左方向のケズリで調整される。Po28・29は古墳時代前期に属す。Po30・31は埴であり、やや内湾する体部をもつ。Po32～37は高坏である。Po32はやや内湾する坏部をもち、脚裾部はハの字状に開く。脚部外面、坏部内面はミガキで調整される。脚部内面は指頭圧痕が顕著である。Po33は坏部の器高が高く、内面はミガキで調整される。Po34・35は内湾する埴状の坏部をもち、外面全体及び坏部内面が赤褐色を呈す。Po35の外面はハケメの痕跡を多く残す。Po36の脚部は長く、外面下半は赤褐色を呈す。Po36は脚柱部と脚裾部が明瞭な屈曲によって分かれる。Po26・34～36は古墳時代中期末葉～後期前葉の範疇で捉えられるものである。

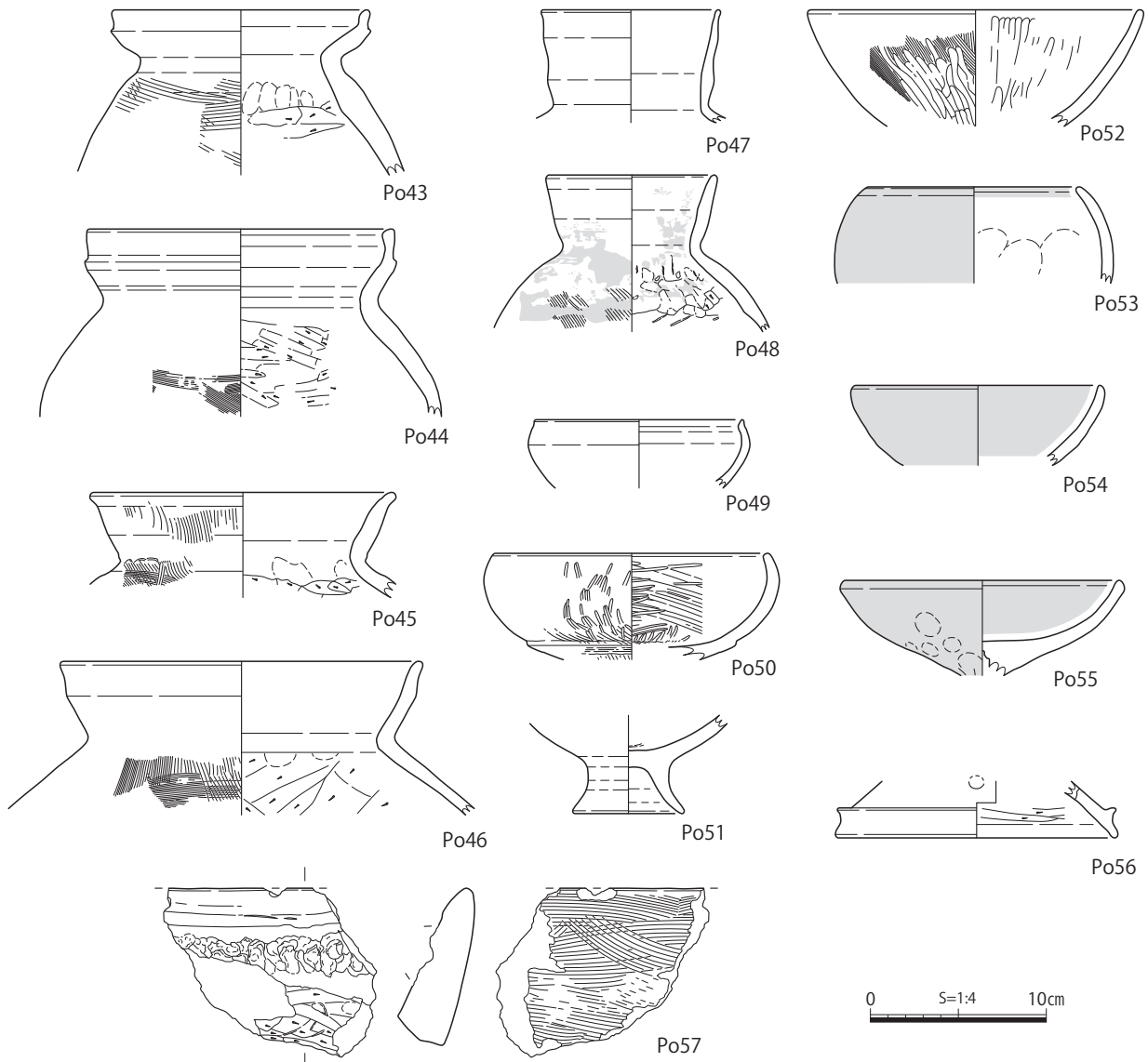
Po38～42は須恵器である。Po38は高坏である。Po39～41は坏身であり、いずれも受部から内傾して立ち上がる口縁部をもつ。Po40は内湾する体部をもつもので、器壁は厚い。Po41は径が大きく、



第41図 VI-1層出土土器

口縁部の立ち上がりは低い。Po39・40はMT15併行で古墳時代後期前葉、Po41はTK10併行で古墳時代後期中葉に属す。Po42は甕である。肩の張った扁球状の胴部で、底部はほぼ丸底である。

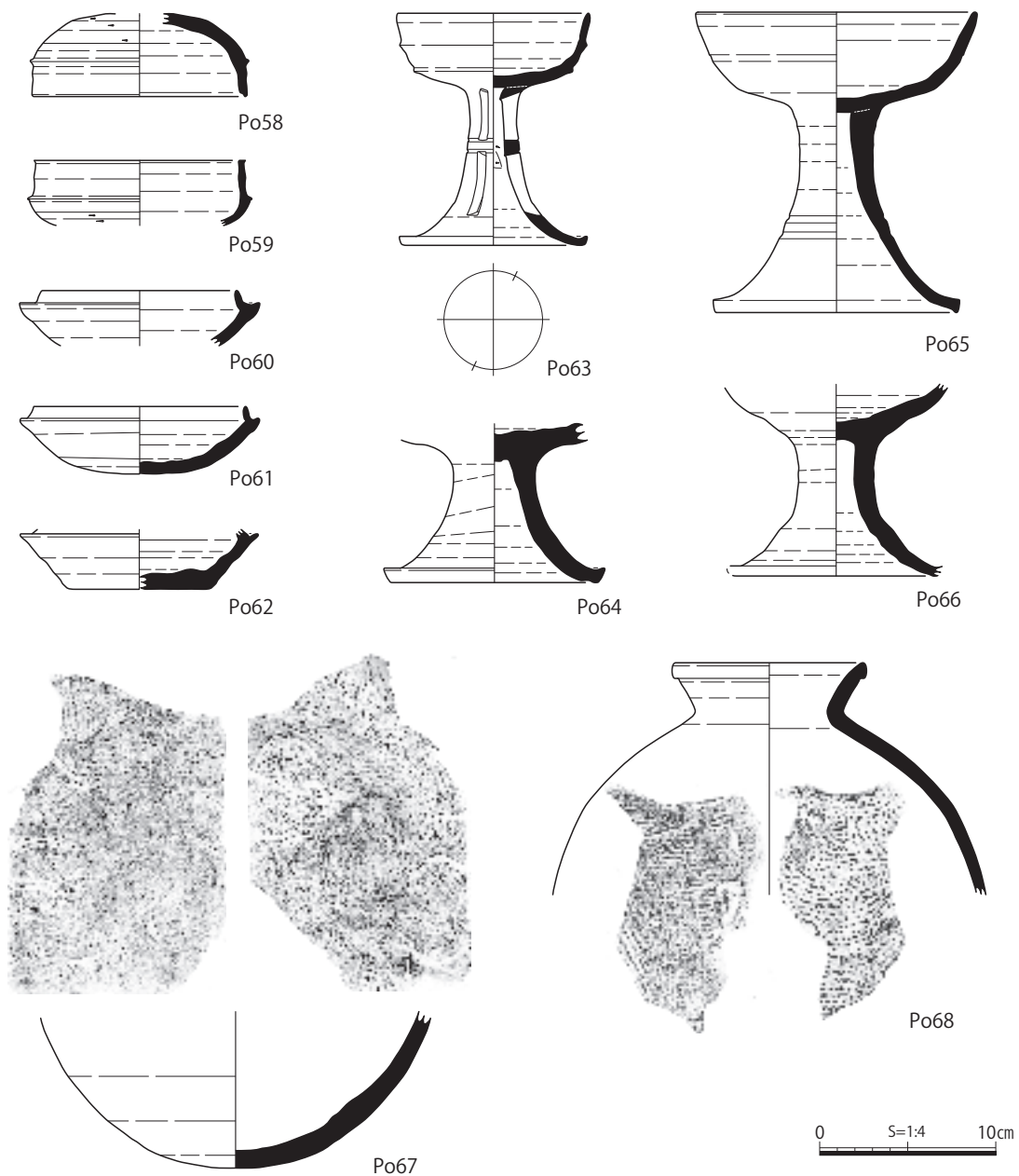
第42図にはVI-2層から出土した土器を示した。Po43～55・57は土師器、Po56は弥生土器である。Po43・44は退化した複合口縁をもつ甕である。Po43は肩部が張らない器形とみられ、胴部外面は粗雑なハケメで調整される。Po44の胴部内面は小さい単位のケズリで調整される。Po43は古墳時代後期中葉の、Po44は古墳時代中期末葉の特徴を示す。Po45・46は単純口縁をもつ甕である。外面はハケメで調整され、胴部内面のケズリはいずれも右方向である。Po45は、口縁端部がナデによってわずかに外側に折れ曲がる。Po46の口縁部は頸部から直線的に立ち上がるが、上半はやや外反する。Po47・48は直口壺である。Po47は器壁が薄くヨコナデによる凹凸が明瞭である。Po48は外面の全体と内面の口縁部から頸部までが赤褐色を呈す。Po49～51は脚付埴である。Po49は内湾する埴部上半に弱い稜をもち、口縁端部は強いナデによって面取りされる。Po50も内湾する埴部をもつが口径15.4cmの大型のもので、埴部底面付近の外面に段を設けている。内外面ともミガキによる調整がなされるが、粗雑なハケメを残す。Po51はハの字状に広がる脚部をもち、埴部立ち上がりはやや



第42図 VI-2層出土土器(1)

直線的である。Po52・53は鉢である。Po52は、やや内湾して立ち上がる体部の内外面が縦方向のミガキで調整されるが、外面の上半はハケメを残す。古墳時代前期に属す。Po53は大きく内湾する体部をもち、外面全体と口縁端部は赤褐色を呈す。内面には指頭圧痕を残す。Po54～56は高坏である。Po54・55の坏部は内外面とも赤褐色を呈す。Po54は碗状の坏部をもつ。Po55の浅い坏部は外面に指頭圧痕を残す。Po56の脚部には円孔が1か所確認できる。Po49～51、54・55は古墳時代中期後葉～後期前葉の範疇で捉えられるものである。Po57は移動式竈の受部であり底が剥落している。焚口付近のケズリ、内面のハケメが顕著である。

第43図にはVI-2層から出土した須恵器を示した。Po58は坏蓋である。天井部からカーブして垂下する器形であり、口縁部は突帯によって体部と区画される。口縁端部には回転ナデによって段が生じている。Po59～62は坏身である。Po59は体部が丸みを帯び、口縁部は受部からやや内傾して



第43図 VI-2層出土土器(2)



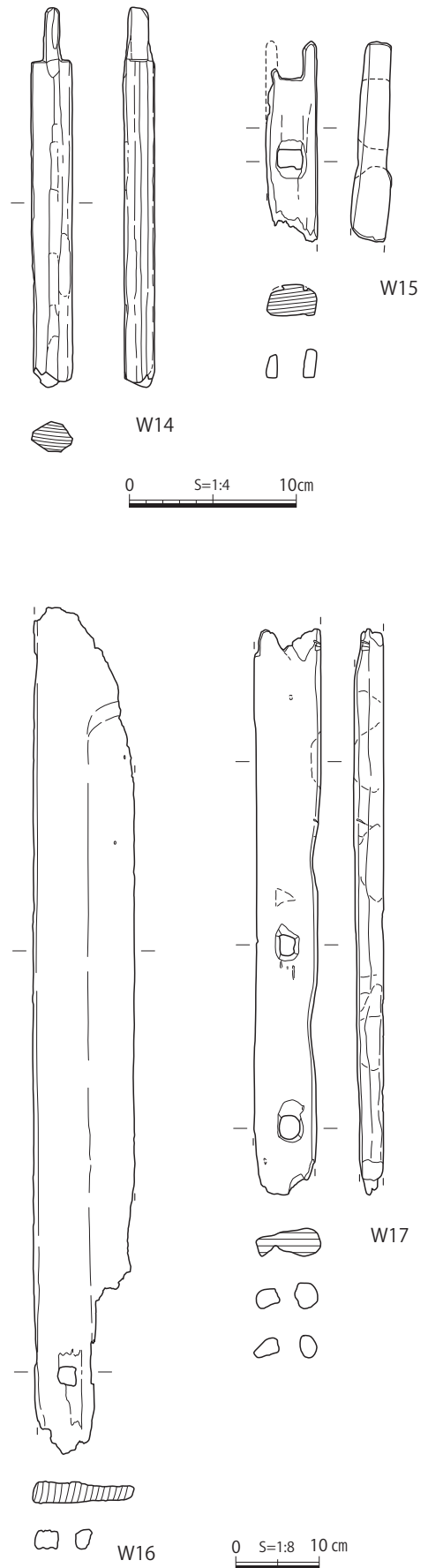
第44図 VI層出土土製品

第45図 VI層出土玉類

直線的に立ち上がる。器壁は薄く、シャープな作りである。Po60・61は内湾して立ち上がる体部をもち、口縁部は受部から内傾して短く立ち上がる。器壁はやや厚い。Po62は平坦な底部から直線的に立ち上がる体部をもち、口縁部は受部から内傾して立ち上がる。Po58・59はTK23・47併行で古墳時代中期末葉、Po60・61はTK10併行で古墳時代後期中葉に属す。Po63～66は高坏でありいずれもハの字状に開く脚部をもつ。Po63は器壁が薄くシャープな作りであり、坏部外面には回転ナデによる稜が2段設けられている。脚部は高く、長方形の2段の透かしが2方向に設けられている。Po64は器壁が厚く、他のものと比べ脚部が低い。Po65は高い脚部をもち、脚部外面には回転ナデによって、凹線状の段が2段設けられている。Po67・68は甕である。Po67は丸底の底部をもち、胴部から底部は内外面とも叩きによる当具痕が残る。Po68は頸部から外傾して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は玉縁状に肥厚する。胴部内外面とも叩きによる当具痕が残る。

第44図に示した土製品CP 6は、径0.9cmのやや歪な球形で穿孔などなく、用途は不明である。

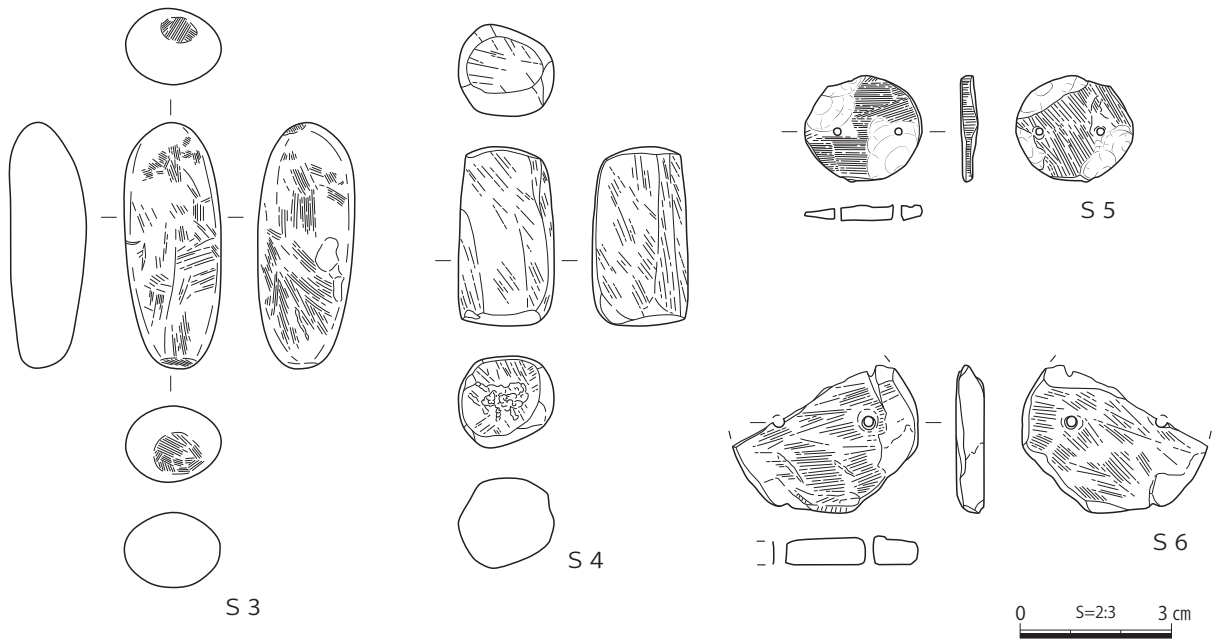
第45図に示した勾玉J 2は、蛇紋岩を素材としており暗緑色を呈す。全面に擦痕が残る。



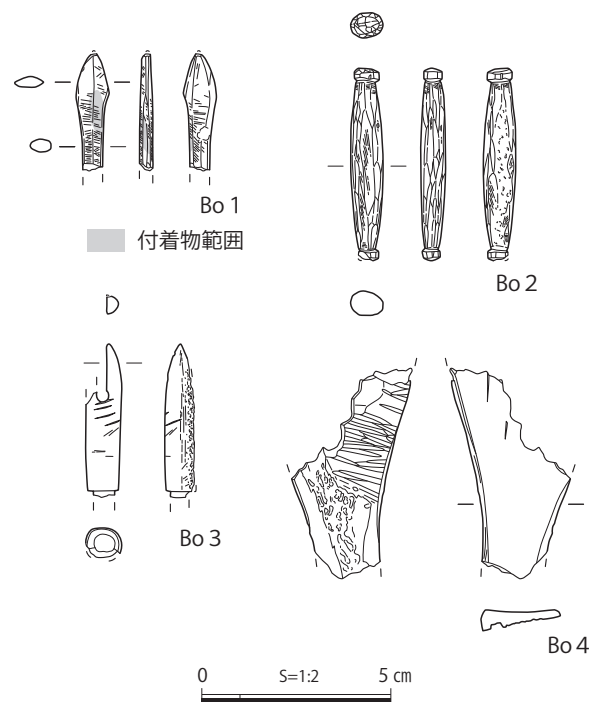
第46図 VI層出土木器

第46図には木器を示した。W14・15は不明木器である。W14は偏八角形の断面形を呈す棒材の上端に突起が切り出されている。W15は上端の方形の抉り込みと、穿孔が並ぶものである。W16・17は建築材とみられる。W16は、方形の穿孔が1か所残存する板材であり、壁板の可能性はある。W17は、2か所の方形穿孔が残存しており、右側辺のそれとずらした位置にわずかな抉り込みが認められる。

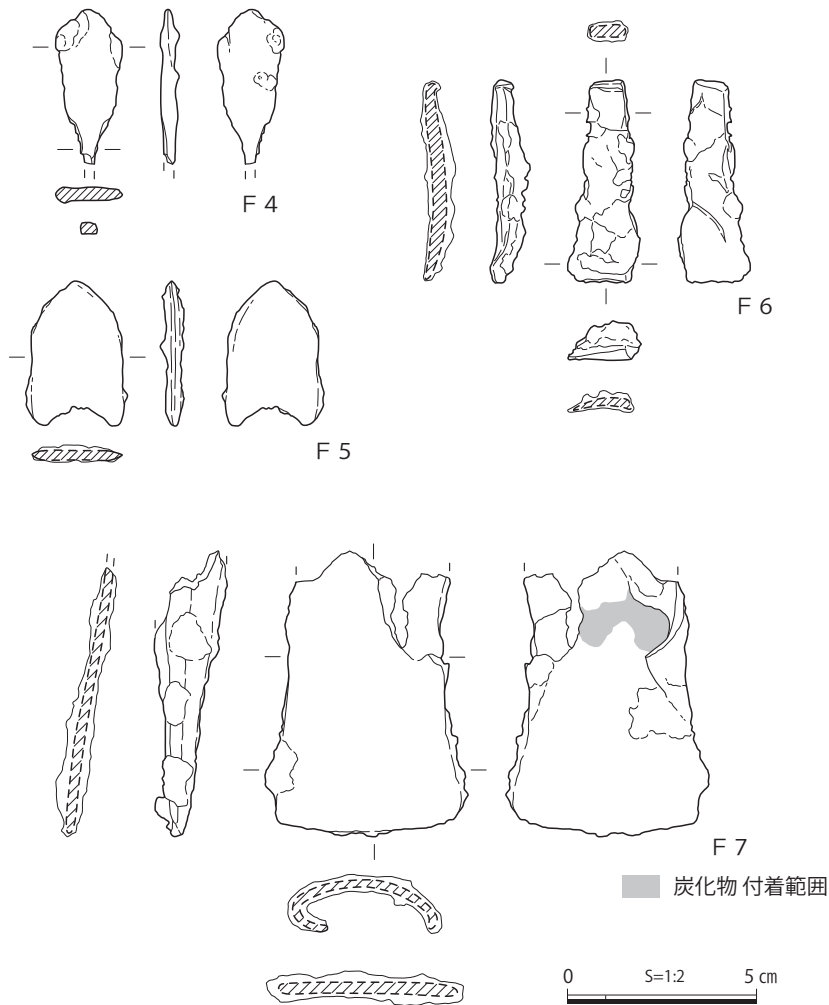
第47図には石器を示した。S3・4は不明石器である。いずれも研削によって整形されており上下端には面を作出している。S4は権に類似するが、成形がやや粗雑である。S5・6は滑石製の有



第47図 VI層出土石器



第48図 VI層出土骨角器



第49図 VI層出土金属器

孔石製円盤である。S5は全面を研削するが、両面に剥離痕を残す。S6はこれより大型であり、同様に2か所の穿孔が確認できる。

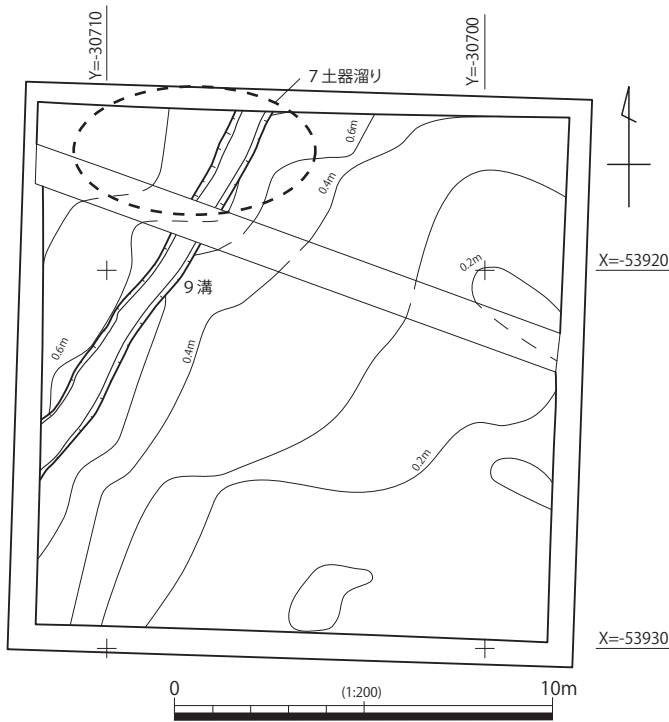
第48図にはVI層から出土した骨角器を示した。Bo1は骨鏃である。研削によって正面には稜を作出している。断面形は先端部で偏五角形、基部で楕円形を呈す。正面には接着剤の痕跡の可能性のある付着物が認められる。Bo3は根挟みである。鹿角を素材としている。Bo2は鹿角を素材とした不明骨角器である。切削によって中央部が膨らんだ形状とし、上下端に瘤状の突起を作出している。Bo4は卜骨である。大型獣の肩甲骨を素材としており、表面には肩甲棘を削りとった痕跡とミガキが認められる。

第49図には鉄器を示した。F4・5は鉄鏃である。F4は有茎鏃である。上端付近に最大幅をもつため、先端の角度は鈍い。鏃身と茎は一連であり、下端に向け緩やかに幅を減じ茎につながる。鏃は確認できず、鏃身両側縁の刃部は明瞭ではない。茎の断面形は方形である。F5は凹基式の無茎鏃であるが、逆刺は鈍く基部との境は明瞭ではない。鏃は確認できないが、両側縁付近で厚みを減じ刃部を作出している。X線画像では基部中央やや上に円形の孔をもつことが確認できる。柄の装着に係るものであろう。F6は板状鉄斧である。基部から刃部に向け緩やかに広がる細長い撥状の平面形を呈す。鍛造によって基部は方形に整形されており、身部は緩やかに湾曲する。片刃であり、加工斧とみられる。F7は袋状鉄斧である。袋部の上端を欠くが、身部分がわずかにくびれ、刃部は撥状に広

がる。袋部の横断面は略楕円形を呈す。遺存状態が悪く、メタルが残存していないが袋部から身部にかけて厚みの変化は見られない。袋部の内面には炭化した木質が残る。

第7項 VI層下面-1（第4面：古墳時代中期末葉）の遺構と遺物

VI層の掘削によって、調査区内は標高約0.2～0.7mを測る、南東方向へ向け下がる地形となった。

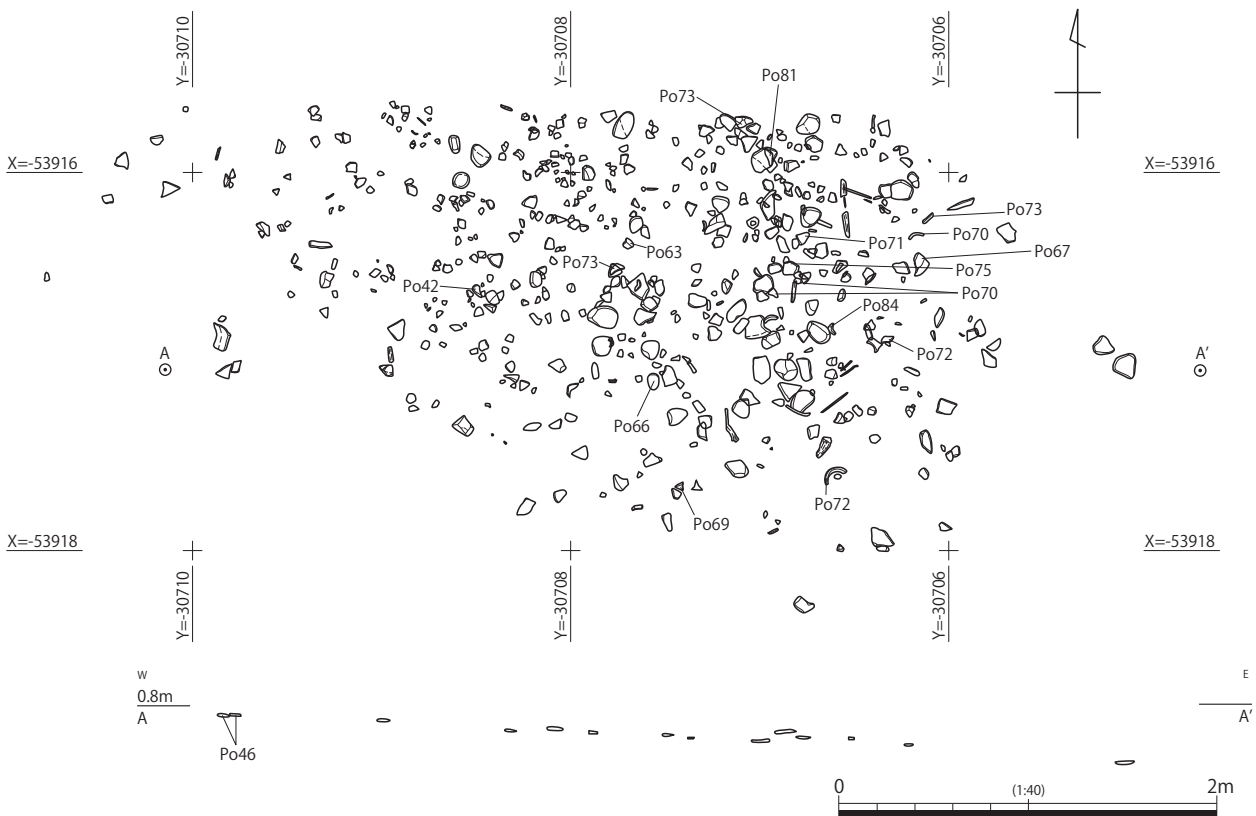


第50図 VI層下面-1平面図

VI層下面では調査区北西部において7土器溜りと9溝を検出した（第50図）。7土器溜りは9溝に重複しているが、出土遺物からいずれも古墳時代中期末葉の遺構と考えられる。VI層出土遺物の出土状況からみて、当該期において利用されていたと考えられる。これらの遺構は微高地縁辺部の補強や区画を意図した造作とみられる。

7土器溜り（第51図）

調査区北西部、標高0.6m付近でおよそ南北2m、東西4mの範囲で多数の土器片を検出した。土器片は長軸5～10cm程度のものを中心としている。これら土器片はほぼ面的に分布しており、明確な掘り込みをもたない。



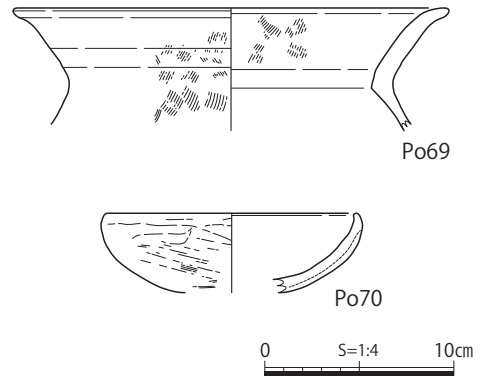
第51図 7土器溜り

地盤を補強するための造作とみられる。

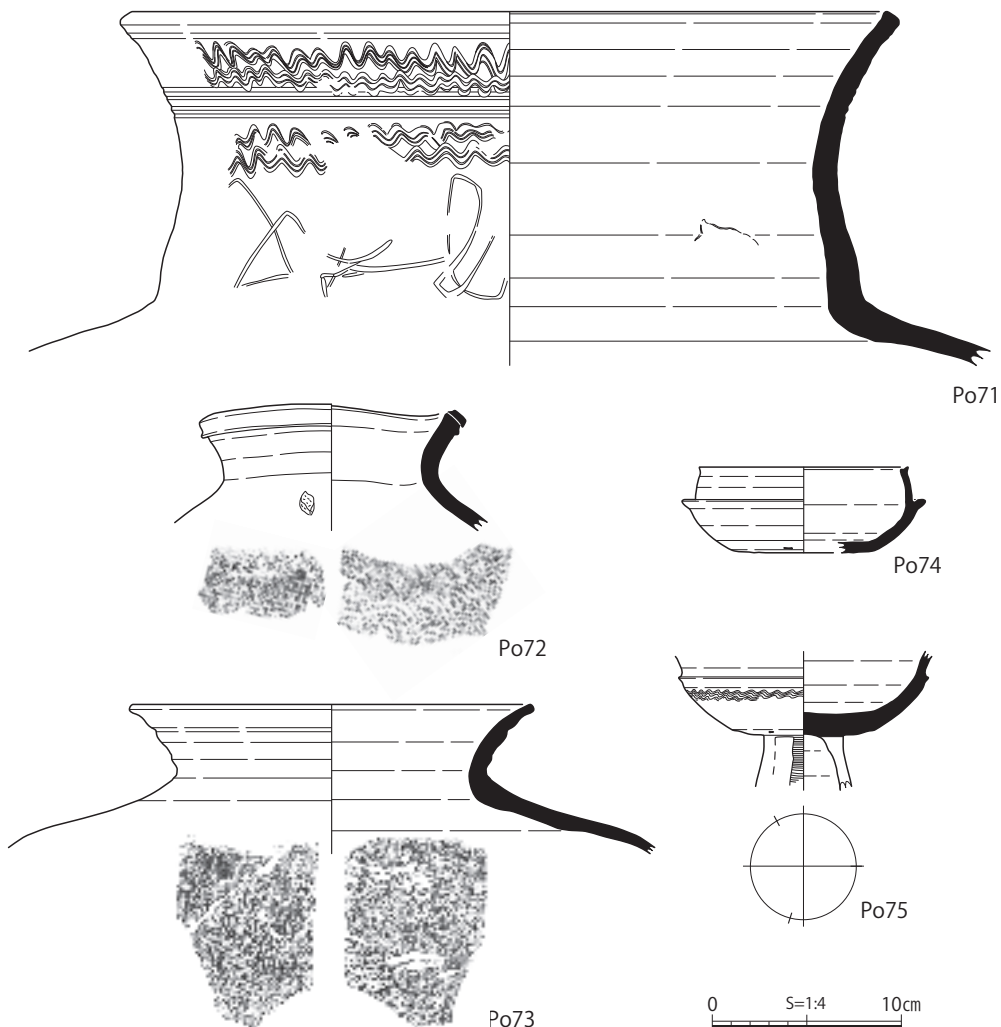
第52図には7土器溜りから出土した土師器を示した。Po69は単純口縁の甕であり、肩の張りが弱い胴部をもつものとみられる。内外面とも不定方向のハケメで調整される。Po70は碗であり、ハケメ、ナデによる外面の調整はやや粗雑である。

第53図には7土器溜りから出土した須恵器を示した。Po71～73は甕である。Po71は大型のものであり、口縁部および頸部上半の外面に波状文と平行沈線が施されるほか、頸部下半の外面には線刻が施される。Po72・73はいずれも胴部内外面にタタキによる当具痕が残る。Po72は玉縁状の口縁端部をもつ。口縁端部と胴部外面には別個体の細片は焼成時に貼り付いたものであろう。Po73は肩が強く張る器形とみられ、胴部外面には自然釉が付着する。

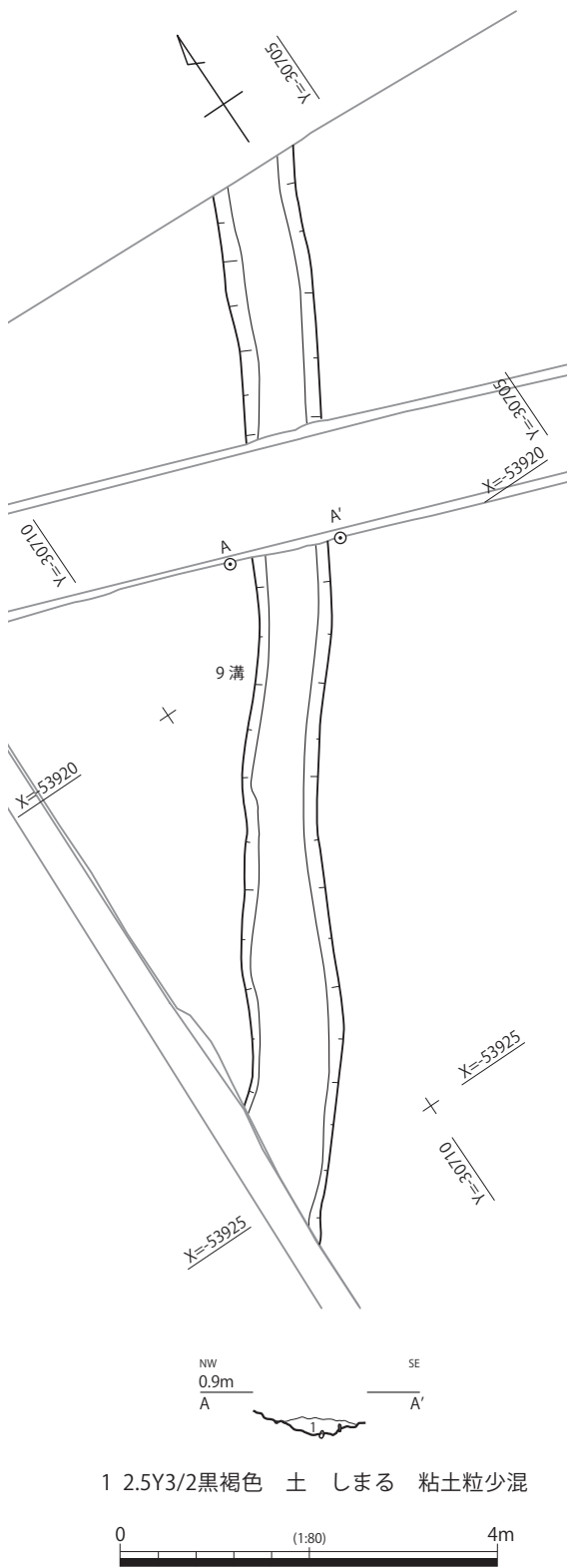
Po74は坏身である。平坦な底部から内湾して立ち上がる体部をもち、口縁部は受部からやや内傾して立ち上がる。器壁は薄く、口縁端部は回転ナデによる面取りでやや外方に張出す。TK23・47併行で古墳時代中期末葉



第52図 7土器溜り出土土器（1）



第53図 7土器溜り出土土器（2）



第54図 9溝

Po81～83は移動式竈である。Po81は内傾する体部から、ほぼ直立して立ち上がる掛口をもつ。外面は斜め方向の、掛口の内面は横方向のハケメで調整される。Po82は底部の破片である。全面がナデによって調整されるが、一部にハケメを残す。Po83は体部片であり底部は剥落している。外面はハケメ、内面はケズリで調整されているが、焚口付近の内面はそののちにナデで成形されている。

に属す。Po75は高坏である。坏部外面には波状文が施され、外面をカキメで調整された脚部には長方形の透かしが3方向に設けられている。

9溝 (第54図)

調査区西側において検出した、調査区西壁から東壁まで北東-南西方向(N-34°-E)に走る溝跡である。東西ベルトより北側は重複する7土器溜り土下で検出した。検出面は標高0.4～0.6m付近であり、検出長11.4m、最大幅0.96mを測る。断面形は椀状を呈し、検出面からの深さは最大で17cmを測る。埋土は黒褐色土の単層である。

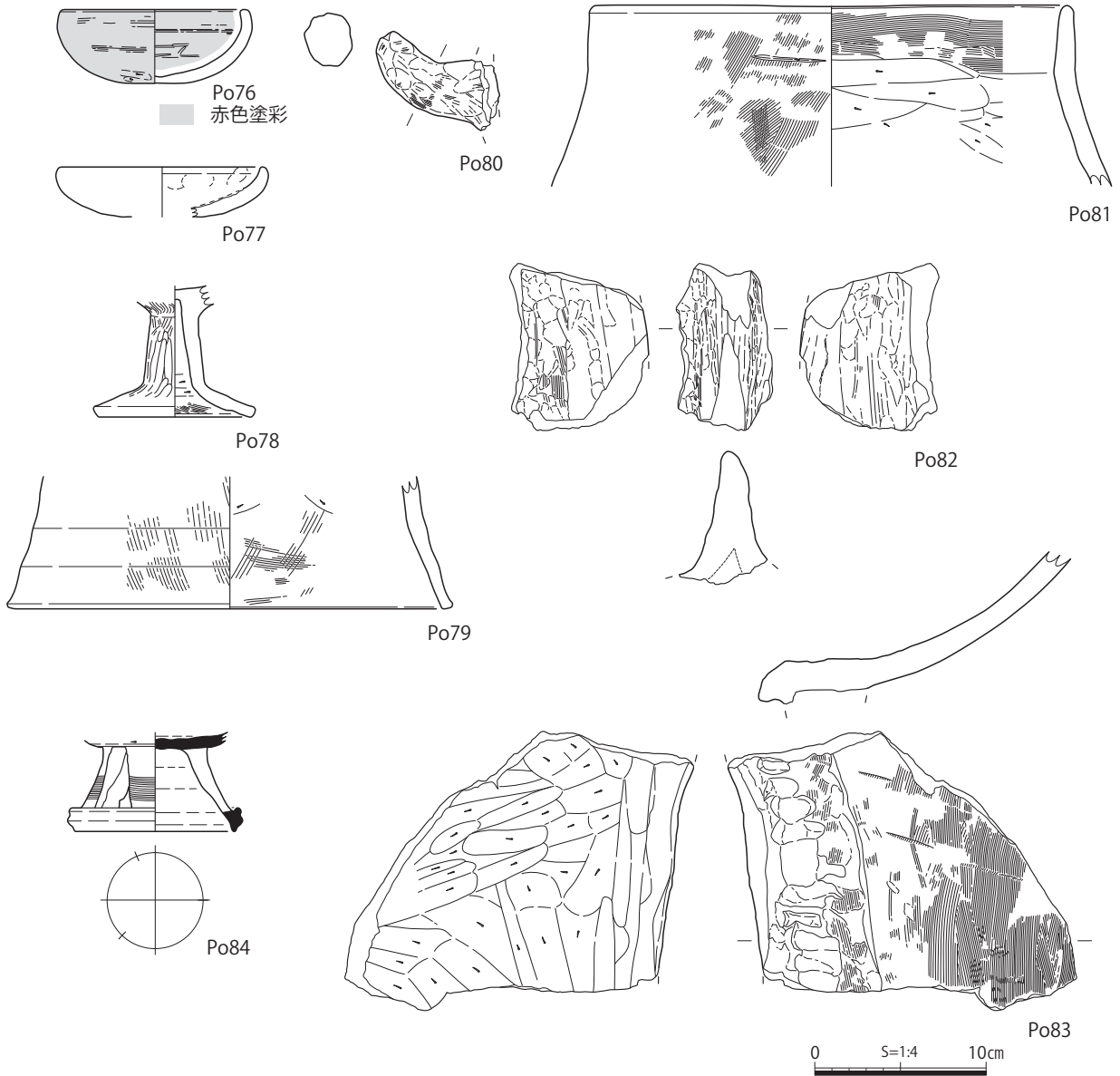
北西方向に向け高くなる当面の地形に沿って掘削された溝であり、微高地裾部の区画溝であったとみられる。出土遺物からは古墳時代中期末葉の遺構とみられ、当該期においても微高地が土地利用のなかで意識されていたことが窺える。ただし、出土土器からは、重複する7土器溜りとの時期差が認められないことから、区画溝としての存続期間は長くなかったことが窺える。

第55図には9溝から出土した土器を示した。Po76～83は土師器である。Po76・77は埴であり、いずれもやや内湾する口縁部をもつ。Po76は内外面ともナデあるいはミガキによって調整されるが、一部ハケメを残す。また、底部外面はケズリで調整されている。内外面とも赤彩される。Po77は器高が低く、内面には指頭圧痕が認められる。

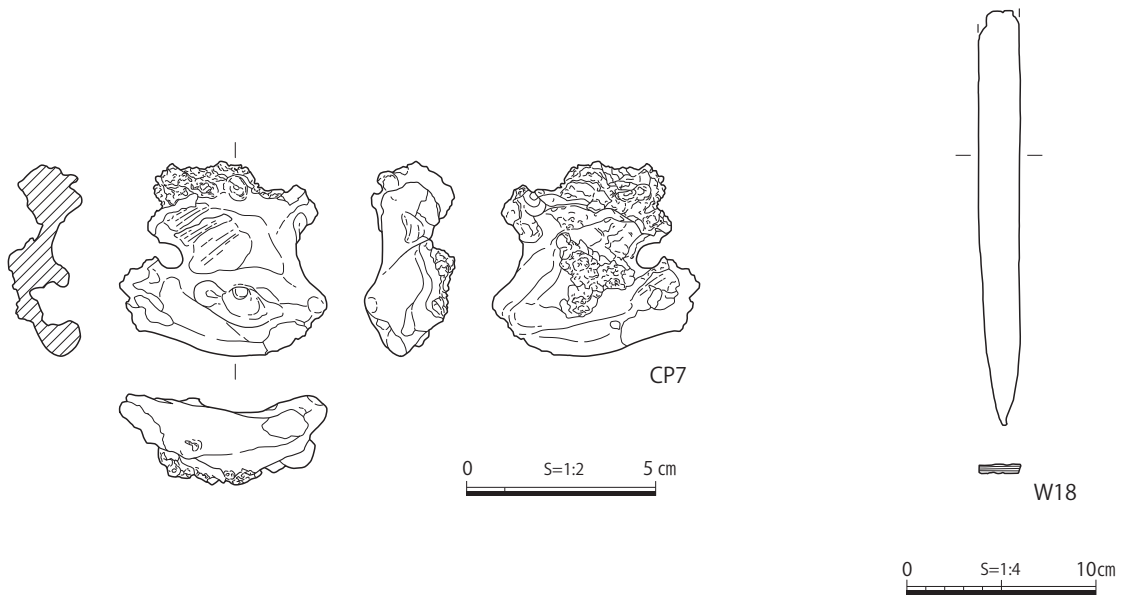
Po78は高坏である。裾部がハの字に開く脚部をもつ。脚柱部内面は太い単位のミガキによって調整される。脚裾部内面にはハケメによる調整が顕著である。

Po79は山陰型甑形土器である。内外面ともハケメで調整されるが、内面はケズリの痕跡を残す。

Po80は甑の把手である。ナデによって成形され、一部ハケメを残す。

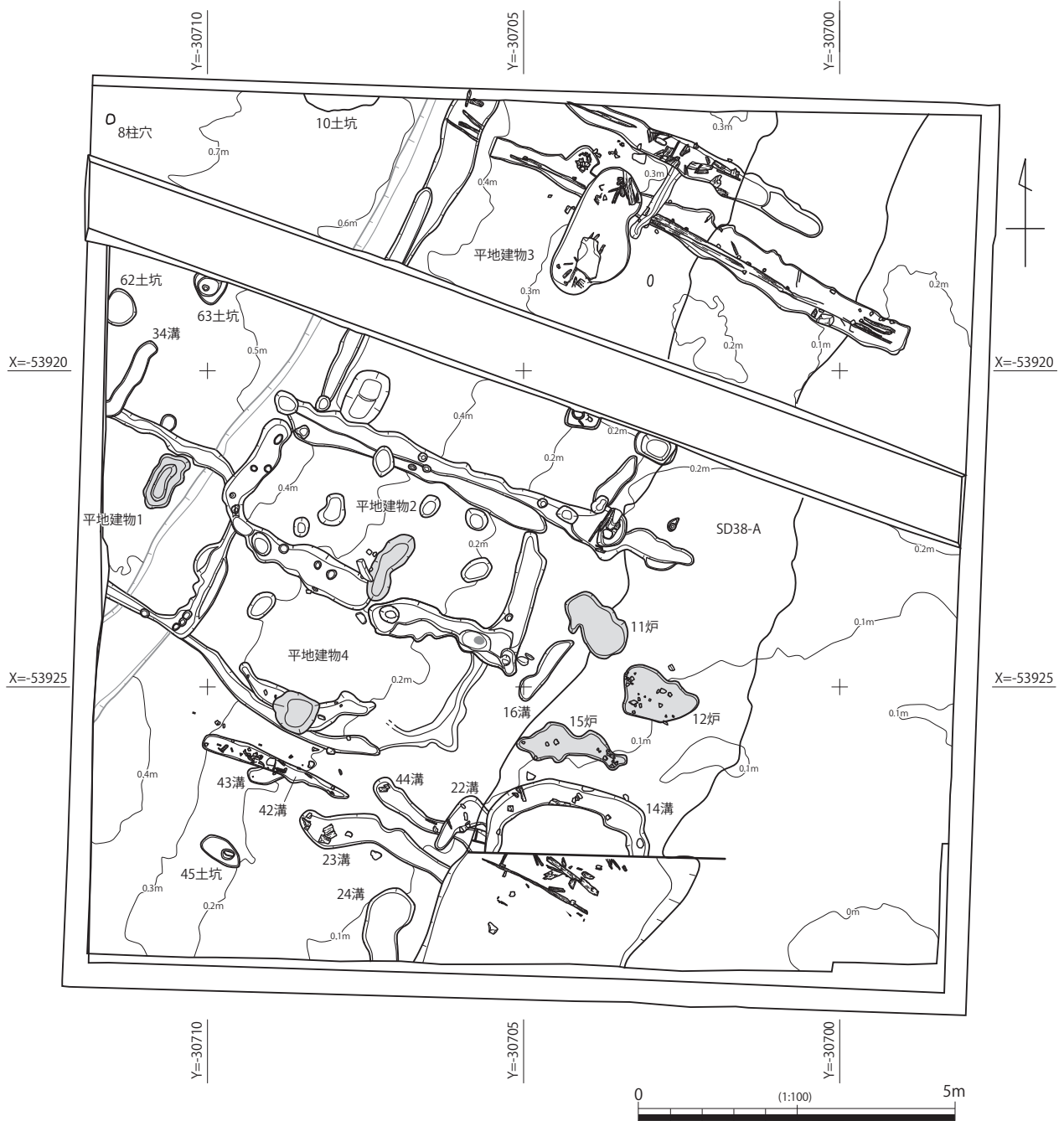


第55図 9溝出土土器



第56図 9溝出土溶解物

第57図 9溝出土木器



第 58 図 VI層下面平面図

Po84 は須恵器高坏である。脚部は長方形の透かしが3方向設けられ、中程に1単位のカキメが施される。脚裾部は玉縁状を呈す。TK23・47 併行で、古墳時代中期末葉に属す。

第56図には9溝から出土した粘土質溶解物を示した。金属の精錬に伴うカラミであるとみられるが、鉄のものではなく銅の精錬に伴うものの可能性がある（広島大学大学院 野島 永 教授の御教示による）。同種の遺物はVI層を中心に複数出土している。

第57図に示したW18は9溝から出土した木器で斎串の可能性はある。両側縁からの切り込みによって下端を尖らせている。

第8項 VI層下面-2（第5面：古墳時代前期前葉）の遺構と遺物

VI層下面では、先に述べた7土器溜り、9溝のほか、平地建物群をはじめとする古墳時代前期前葉の遺構群を確認した（第58図）。しかし、古地形の標高が高くⅧ層はじめ下層が露出した調査区西側を除いて、これらの遺構の検出は難しく、さらに調査区東側を掘り下げることで遺構の平面プランを確認した。調査区内の土層断面では明確にしえなかったが、調査区東側においては、遺構群が当該期の遺物を包含する土層に被覆されていた可能性も考えられる。これら古墳時代前期前葉の遺構群を検出した段階での調査区の標高はおよそ0.0～0.7mとなった（第58図）。検出した平地建物跡に認められる規模や構造の差異は、当遺跡における平地建物の多様性を示すものといえる。

（1）平地建物

検出した4棟の平地建物は、いずれも方形に巡らせた溝内に壁を立てる基本的な構造が共通している。平地建物1・2・4は床面に炉を、平地建物3では複数の土坑を確認しており、いずれも土間床であったことが分かる。平地建物1は平地建物4を、平地建物2は他の3棟を切ることから、これらの平地建物群は少なくとも3段階の変遷があることとなる。ただし、4棟とも東西方向（N-63°-W）の軸が共通しているため、大きな時期差はないと考える。

平地建物1（第59図）

調査区西壁中央付近、標高0.4～0.5mで検出した平地建物跡であり、北東隅を重複する平地建物2に切られる。北辺のSD1、東辺のSD2、南辺のSD3、炉1で構成され、SD1には1基、SD2には6基、SD3には1基のピットが伴う。ピットの計測値は第2表に示す。西側が調査区外であるため、全体の規模は不明であるが、後述する平地建物2～4と同様、東西方向に長軸をもつとみられる。SD1～3の埋土には、DKP（大山倉吉軽石）とみられる黄褐色のブロックを、ピットには粘土塊を特徴的に含む。これは、壁や柱を固定するためのものとみられる。

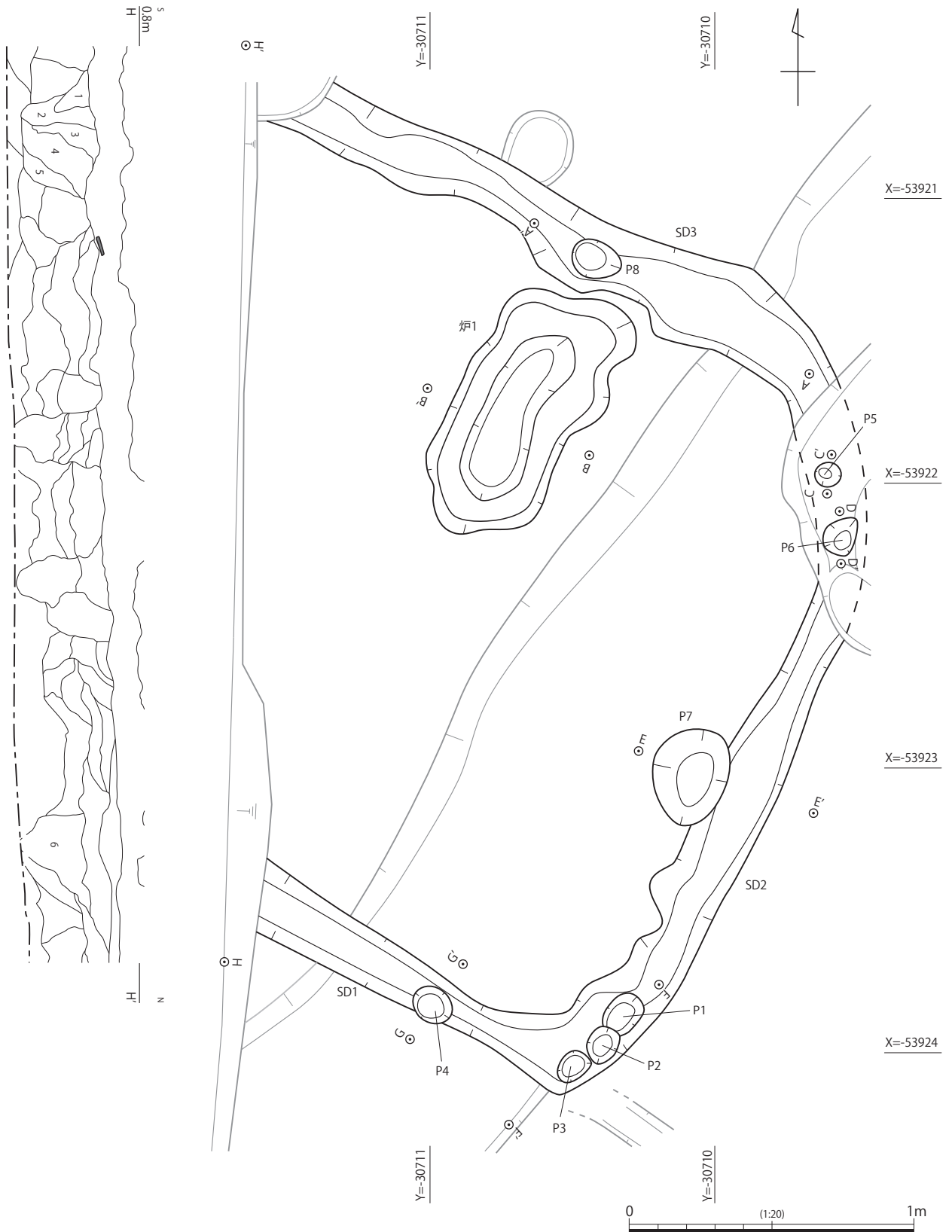
なお、調査区西壁土層断面の当平地建物にあたる箇所（断面H-H'）は黄褐色のブロックを含む複雑な堆積状況を呈している。これは建物の基礎の造成の可能性が考えられる。また、SD1・3以外の掘り込みや柱穴も認められることから、同じ箇所建て替えがなされていた可能性が考えられる。

SD1は検出長1.3m、最大幅0.22mを測る。南東隅から0.56mの位置にピット（P4）を伴う。調査区南壁での最大深は21cmを測る。

SD2は検出長2.7mを測り、これがこの建物の短軸になるとみられる。最大幅0.24mを測る。埋土は黄灰色シルトであり、粘土塊を含む。建物の南東隅にあたる箇所に3基のピット（P1～3）があり複数の柱が建てられたことが窺える。このうち最も深いP3は粘土塊を含む黄灰色シルトと粘性の強い黒褐色シルトで充填されていることが特筆される。SD2のほぼ中央部に位置するP7は他のピットに比べ規模は大きく、より太い柱が立てられていた可能性がある。建物の北東隅にあたる箇所に位置するP5・6は規模は小さいものの、四隅に小規模な柱が複数建てられるこの建物の構造上の特徴を示す。

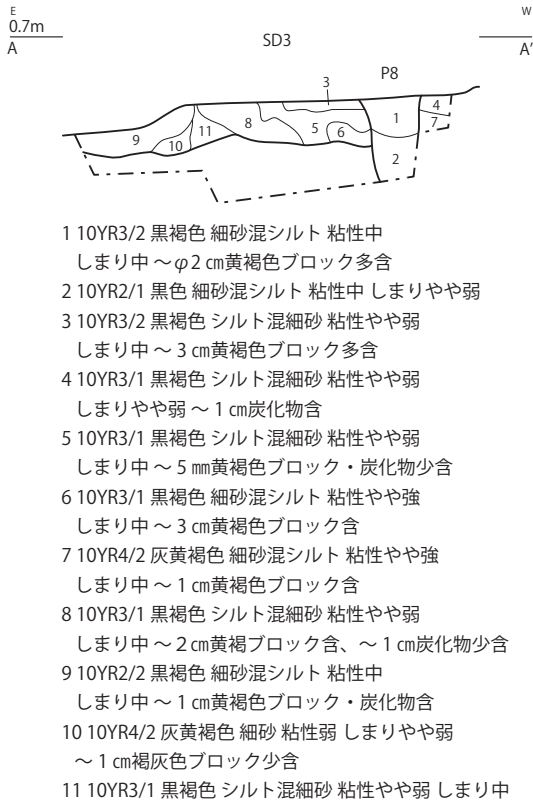
SD3は検出長2.3m、最大幅0.30mを測る。北東隅から0.35mの位置にピット（P8）を伴う。調査区南壁での最大深は27cmを測る。

炉1は、SD3すなわち北壁に近接した位置にあった炉である。長軸0.92m、短軸0.43m、の不整

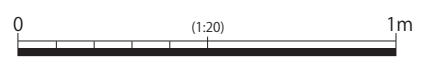
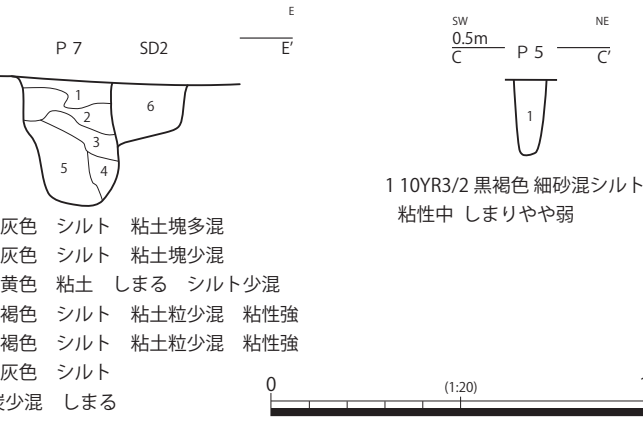
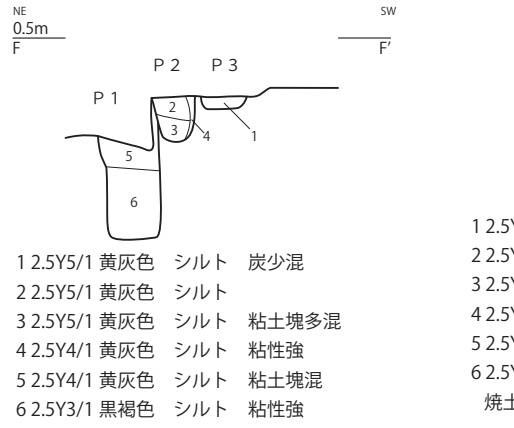
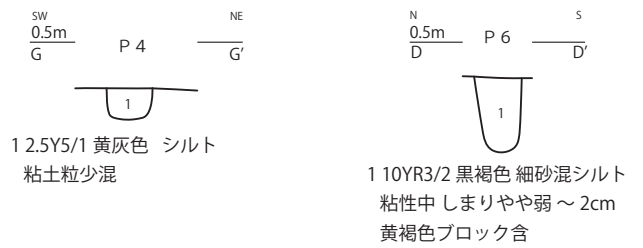


1	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
2	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～2cm黄褐色シルトブロック・褐灰色シルトブロック少含
3	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	～2cm黄褐色シルトブロック少含
4	10YR3/2黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	細礫少含
5	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまり中	
6	10YR3/1黒褐色	シルト混細砂	粘性やや弱	しまりやや弱	～3cm褐灰色シルトブロック・～3cm黄褐色シルトブロック少含

第59-1図 平地建物1 (1)



- 1 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中
～1cm 褐灰色粘質シルトブロック・炭化物含
- 2 2.5Y5/1 黄灰色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中
～1cm 白色ロームブロック・炭化物含
- 3 2.5Y3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱
～1cm 白色ロームブロック少含
- 4 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱
～5mm 炭化物含
- 5 2.5Y5/1 黄灰色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱
～5mm 炭化物含
- 6 2.5Y3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中
～2cm 白色ロームブロック・～5mm 炭化物含
- 7 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱

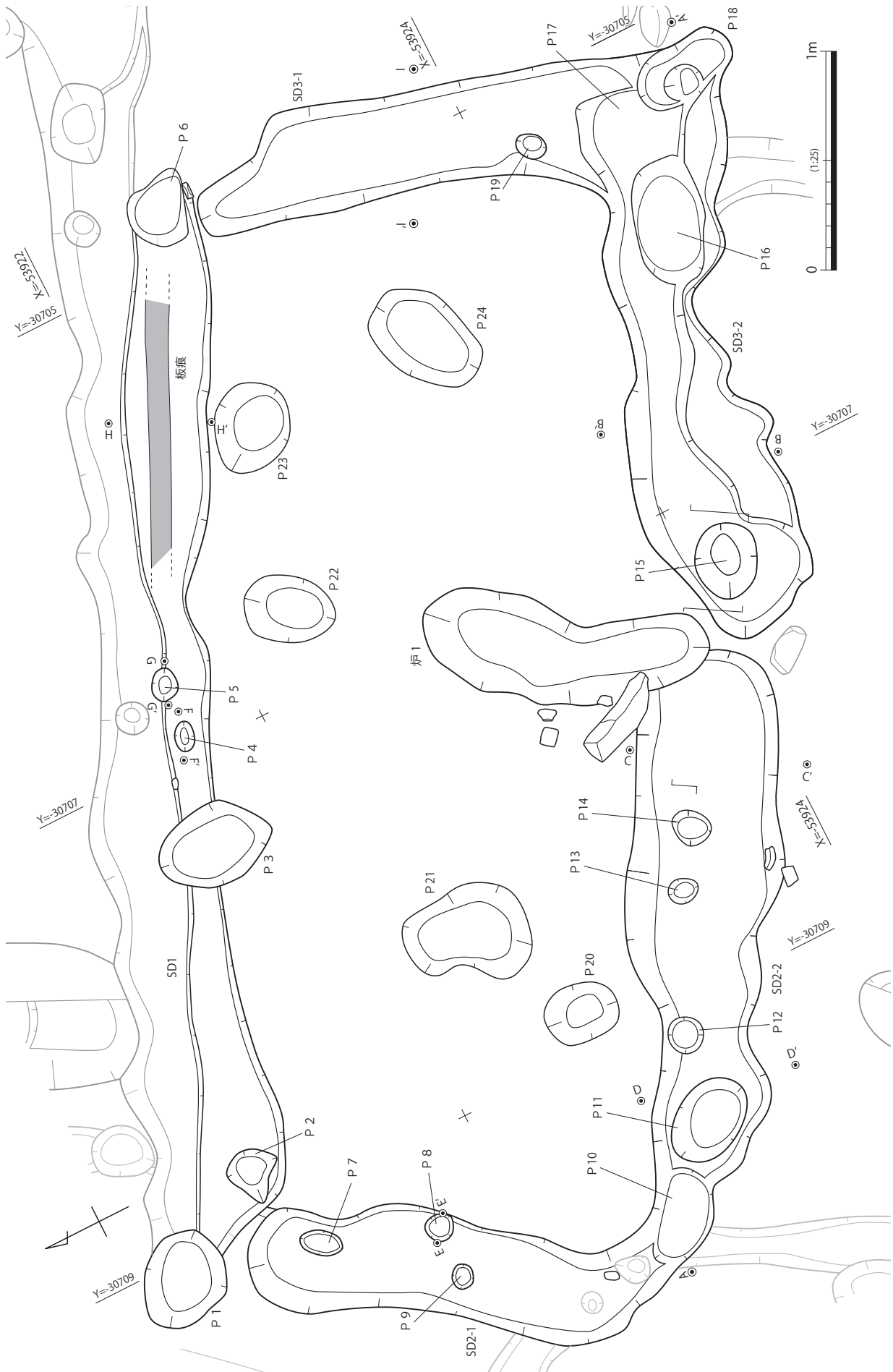


第59-2図 平地建物1(2)

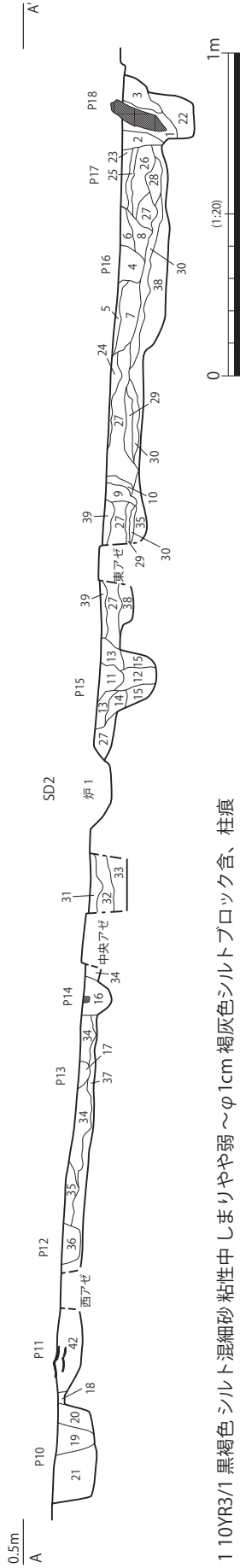
長方形の平面形を呈す。二段掘りとなっており、最大深は14cmを測る。埋土は黄灰色あるいは黒褐色のシルト混細砂であり、7層に分層できる。溝、ピットと異なり埋土には炭化物が多く混じる。炉1から出土したイヌ下顎骨には、解体痕が確認できる。炉1からはその他のイヌの部位は出土していないことからみて、単独で炉1内に埋没したものと考えられるが、著しい被熱の痕跡は認められない。このこと

第2表 平地建物1ピット計測表

	平面規模 (m)	深さ (cm)	備考
P 1	0.13 × 0.1	27	粘土塊含む
P 2	0.14 × 0.1	12	粘土塊含む
P 3	0.15 × 0.14	3	
P 4	0.15 × 0.13	8	
P 5	0.1 × 0.09	20	
P 6	0.15 × 0.11	20	
P 7	0.35 × 0.27	34	
P 8	0.16 × 0.16	20	

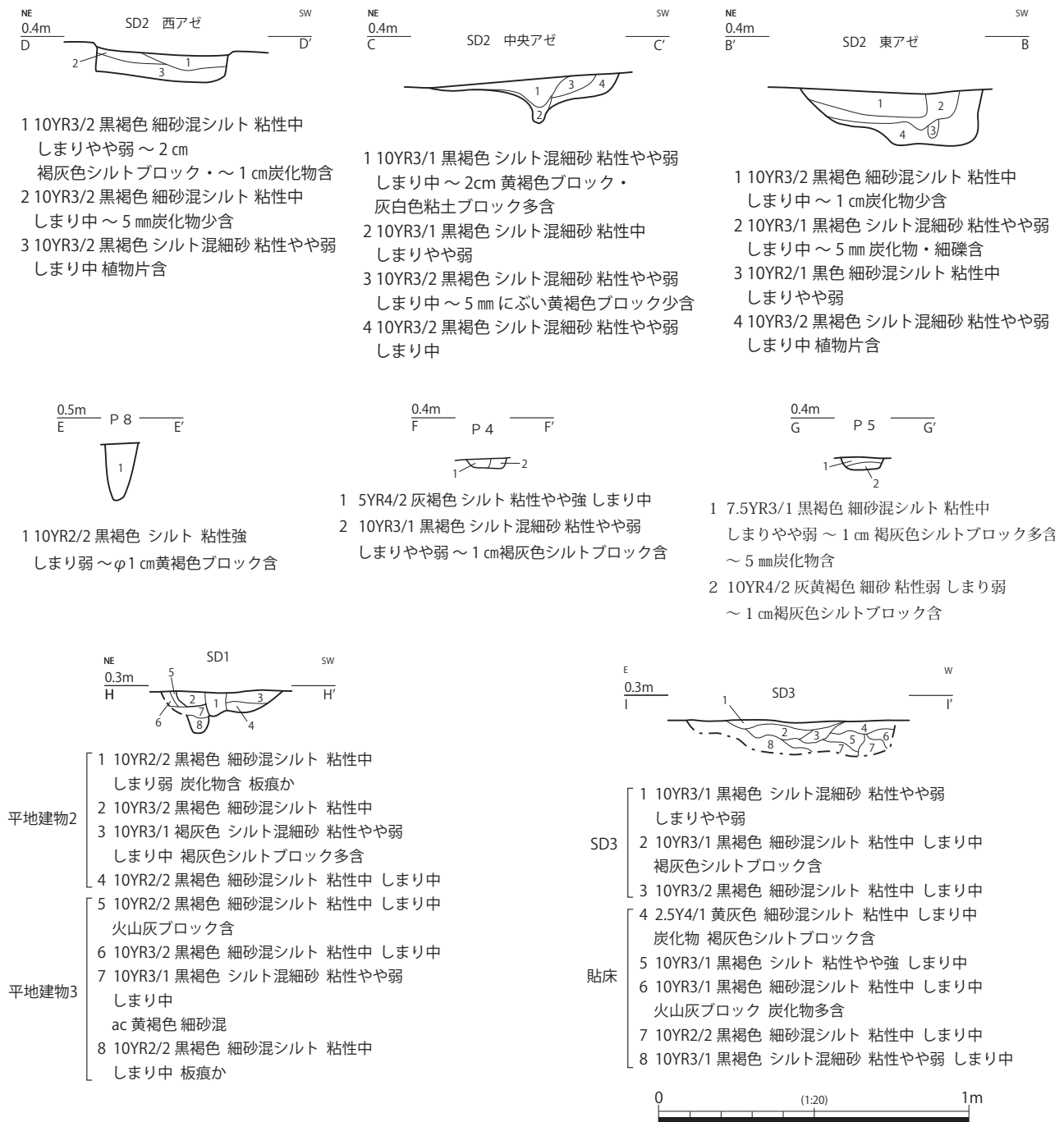


第60-1図 平地建物2 (1)



- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性中 しまりやや弱 ~φ1cm 褐灰色シルトブロック含、柱痕
- 2 10YR2/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中 ~φ5cm 黄褐色ブロック含
- 3 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性やや強 しまり中
- 4 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱
~1cm 黄褐色ブロック・~5mm 褐灰色シルトブロック少含、柱痕
- 5 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 ~5mm 炭化物含、細礫少含
- 6 10YR2/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや強
~1cm 褐灰色シルトブロック・~5mm 炭化物含
- 7 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 ~3mm 炭化物を少含
- 8 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 ~3mm 炭化物を少含
- 9 10YR4/1 褐灰色 細砂 粘性弱 しまりやや弱
~φ5mm 褐灰色シルトブロック・にぶい黄褐色細砂混炭化物含
- 10 10YR2/1 黒色 細砂混シルト 粘性中 しまり中 ~5mm 炭化物少含
- 11 10YR2/1 黒色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや弱 ~φ15mm 黄褐色ブロック・炭化物少含
- 12 10YR2/1 黒色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱
- 13 10YR3/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中
~φ5mm 黄褐色ブロック・炭化物多含、細礫含
- 14 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや強 ~3mm 炭化物少含
- 15 10YR2/1 黒色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱
- 16 10YR4/2 灰黄褐色 細砂 粘性弱 しまり弱
- 17 10YR2/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱
- 18 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中
- 19 10YR2/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性やや強 しまりやや弱
- 20 10YR2/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや弱
- 21 10YR2/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや弱
~2cm 黄褐色ブロック・~5mm 炭化物含
- 22 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中
- 23 10YR2/1 黒色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや弱 ~5mm 炭化物・細礫少含
- 24 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中 ~φ1cm 黄褐色ブロック・炭化物多含
- 25 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中 ~φ5mm 褐灰色シルトブロック含
- 26 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 ~
φ5mm 黄褐色・褐灰色ブロック含、炭化物含
- 27 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中
- 28 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 ~φ2mm 黄褐色ブロックを少含
- 29 10YR2/1 黒色 細砂混シルト 粘性やや強 しまり中
- 30 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘性弱 しまり中 φ1mm 程度の黄褐色ブロック多含、細礫含
- 31 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中 ~1cm 黄褐色ブロック・炭化物多含
- 32 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中
- 33 10YR2/1 黒色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 ~5mm 炭化物少含
- 34 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中
~3cm 黄褐色ブロック・~1cm 炭化物含
- 35 10YR3/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中
- 36 10YR4/2 灰黄褐色 細砂 粘性弱 しまりやや弱
~2cm 黄褐色ブロック・~1cm 褐灰色ブロック・~3mm 炭化物含
- 37 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中
- 38 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中
~φ1cm 褐灰色ブロック・~3mm 炭化物少含
- 39 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中
~φ1cm 黄褐色ブロック・~5mm 炭化物多含
- 42 10YR3/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 土器片多含

第60-2図 平地建物2 (2)

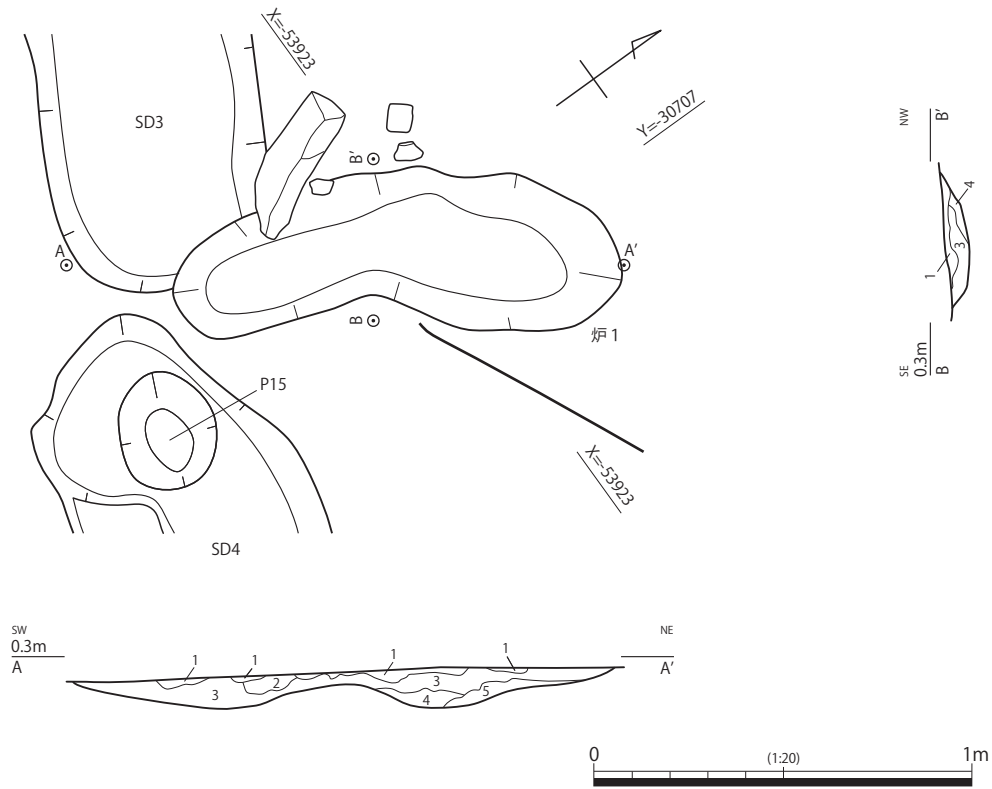


第 60 - 3 図 平地建物 2 (3)

から、炉 1 の廃絶に伴う祭祀に供された可能性がある。

平地建物 2 (第 60 図)

調査区中央部西よりの、標高 0.2 ~ 0.4 m 付近で検出した平地建物跡であり、その他の平地建物跡を全て切る。東西方向に長軸をとる隅丸長方形の平面形をとり、長軸 5.6 m、短軸 3.0 m を測る。南壁が中央部付近で途切れ、その箇所には炉が入り込む構造が特徴的である。中央部当平地建物を構成する主要な遺構は、北辺の SD 1、直角に屈曲して南西隅を形成する SD 2、同じく南東隅を形成する SD 3、南辺の中央付近に位置する炉 1、四隅の柱穴である P 1・6・18・10、床面に掘り込まれた柱穴である P21・24 である。この他、溝内に位置するピット及び柱穴が 15 基、床面に掘り込まれたピット



- 1 10YR1.7/1 黒色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや弱 ～2 cm炭化物含
- 2 10YR2/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中 ～5 mm黄褐色ブロック含 ～3 mm炭化物多含
- 3 10YR2/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 ～1 cm黄褐色ブロック含 ～3 mm炭化物多含
- 4 10YR3/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 細礫含
- 5 10YR2/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中

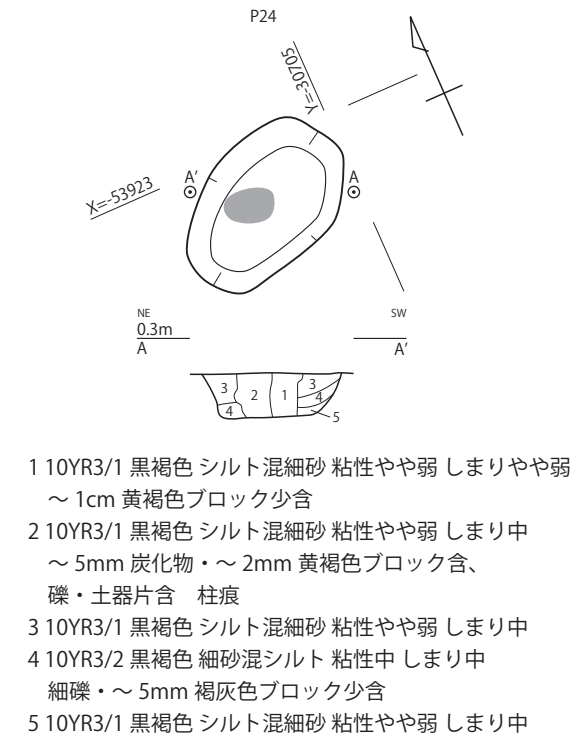
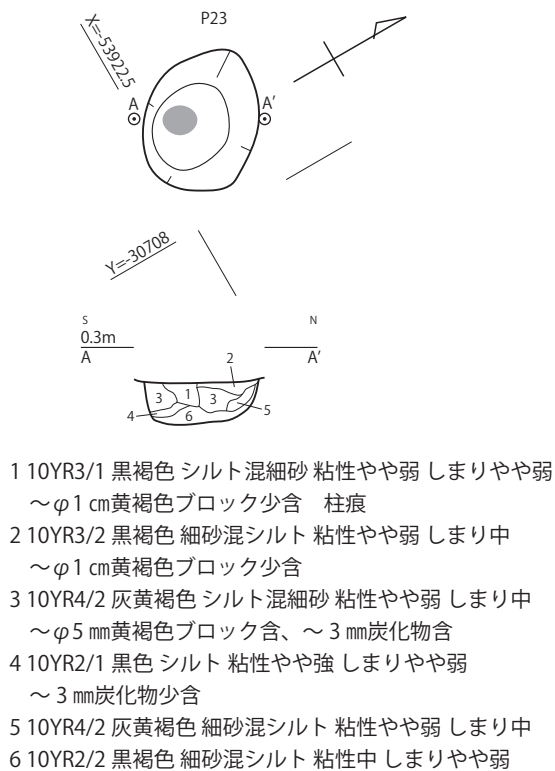
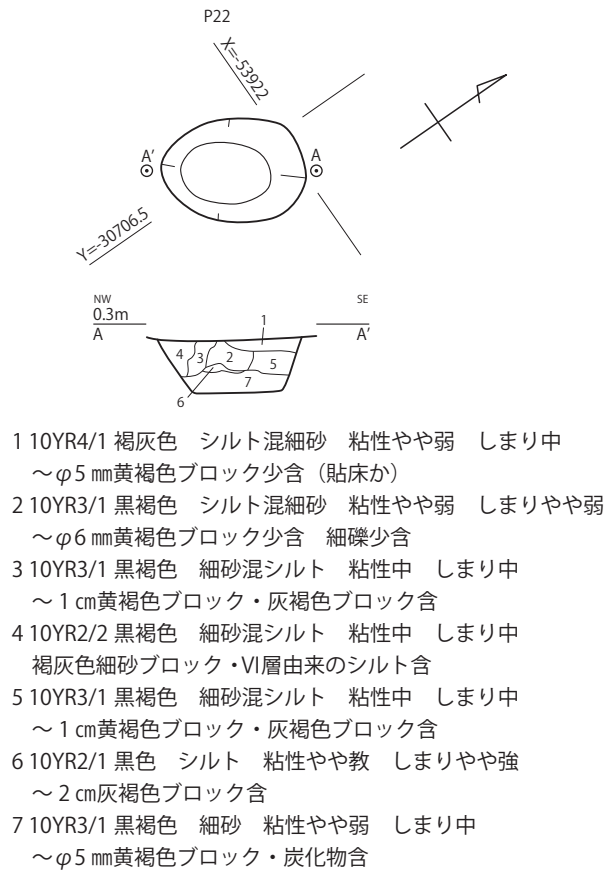
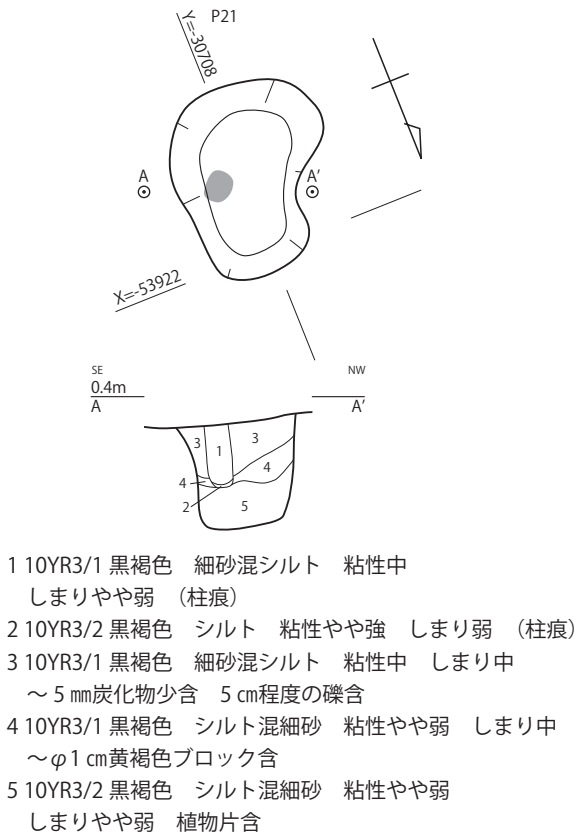
第 60 - 4 図 平地建物 2 (4)

トが3基ある。柱穴およびピットの計測値は第3表に示す。

SD 1は平地建物3の南辺(SD 2)を切る。検出長4.9 m、最大幅0.41 m、検出面から柱穴およびピットを除く底面までの最大深は7 cmを測る。東側の一部では、溝内に建てられた壁の痕跡を平面的に検出した。埋土は黒褐色あるいは褐灰色シルト混細砂を主体とする。溝内に掘り込まれた4基の柱穴およびピットのうち、建物北東隅にあたるP 6では柱根が残存しており、北西隅にあたるP 1では柱痕跡を確認した。P 3は規模が大きいものの、柱痕が確認できなかったため柱穴がどうかは不明である。規模の小さいP 5・4は壁を固定するための補助的な柱を立てたものとみられる。

SD 2は南北方向のSD 2- 1で検出長1.8 m、東西方向のSD 1- 2で検出長2.9 mを測る。幅はSD 2- 2の炉1付近でもっとも広く0.67 mを測る。検出面から柱穴、ピットを除く溝底面までの最大深は12cmを測る。埋土は黒褐色シルト混細砂あるいは細砂混シルトを主体としている。溝内に掘り込まれた8基の柱穴のうち、建物の南西隅にあたるP10では、DKP とみられる黄褐色ブロックを含む埋土(断面 A-A' : 20層)で固定した柱の痕跡(同: 19層)を確認できる。P11からはPo86が出土した。それ以外のピットの規模が小さいのは、壁を固定するための補助的なものであるためか。

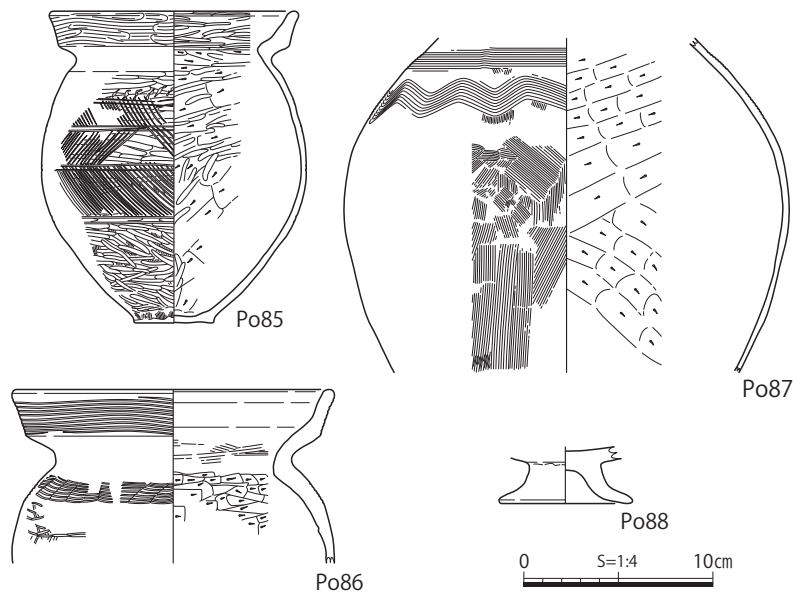
SD 3は南北方向のSD 3- 1で検出長2.4 m、東西方向のSD 3- 2で検出長2.7 mを測る。SD 2と同様、幅はSD 3- 2の13 炉付近でもっとも広く0.70 mを測る。検出面から柱穴、ピットを除く溝底面までの最大深は15cmを測る。埋土はSD 2と同様、黒褐色シルト混細砂及び細砂混シルトを主



第60-5図 平地建物2 (5)

第3表 平地建物2ピット計測表

	平面規模 (m)	深さ (cm)	備考		平面規模 (m)	深さ (cm)	備考
P 1	0.46 × 0.38	18	柱痕あり	P13	0.14 × 0.11	5	
P 2	0.25 × 0.25	-		P14	0.18 × 0.16	9	
P 3	0.54 × 0.38	-		P15	0.35 × 0.29	18	柱痕あり
P 4	0.15 × 0.10	4		P16	0.59 × 0.34	15	
P 5	0.15 × 0.13	4		P17	0.50 × 0.40	14	
P 6	0.48 × 0.28	-		P18	0.48 × 0.25	23	柱根残存
P 7	0.20 × 0.11	-		P19	0.15 × 0.11	-	
P 8	0.14 × 0.14	18		P20	0.34 × 0.26	-	
P 9	0.13 × 0.10	-		P21	0.54 × 0.38	28	柱痕あり
P10	0.45 × 0.28	13	柱痕あり	P22	0.38 × 0.28	14	
P11	0.43 × 0.29	8	土器出土	P23	0.40 × 0.30	11	柱痕あり
P12	0.18 × 0.16	7		P24	0.50 × 0.33	12	柱痕あり



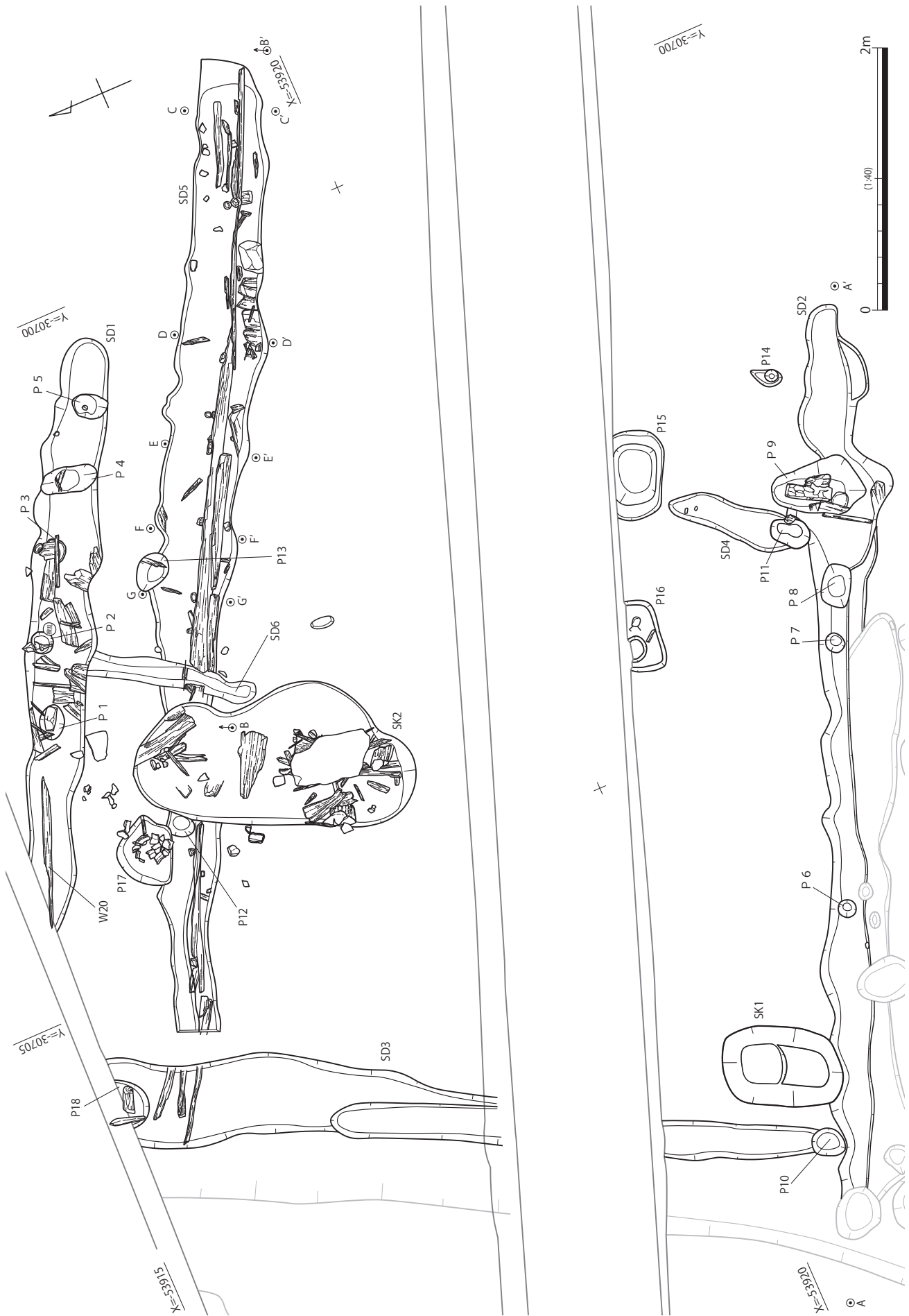
第61図 平地建物2出土土器

体とするが、にぶい黄褐色あるいは灰黄褐色の細砂層を挟むのが特徴的である。SD 3-1では、灰黄褐色シルトを特徴的に含む。溝内に掘り込まれた柱穴およびピットは5基あり、建物の南東隅にあたるP18には柱根が残存している。P15・16には柱痕跡が認められる。

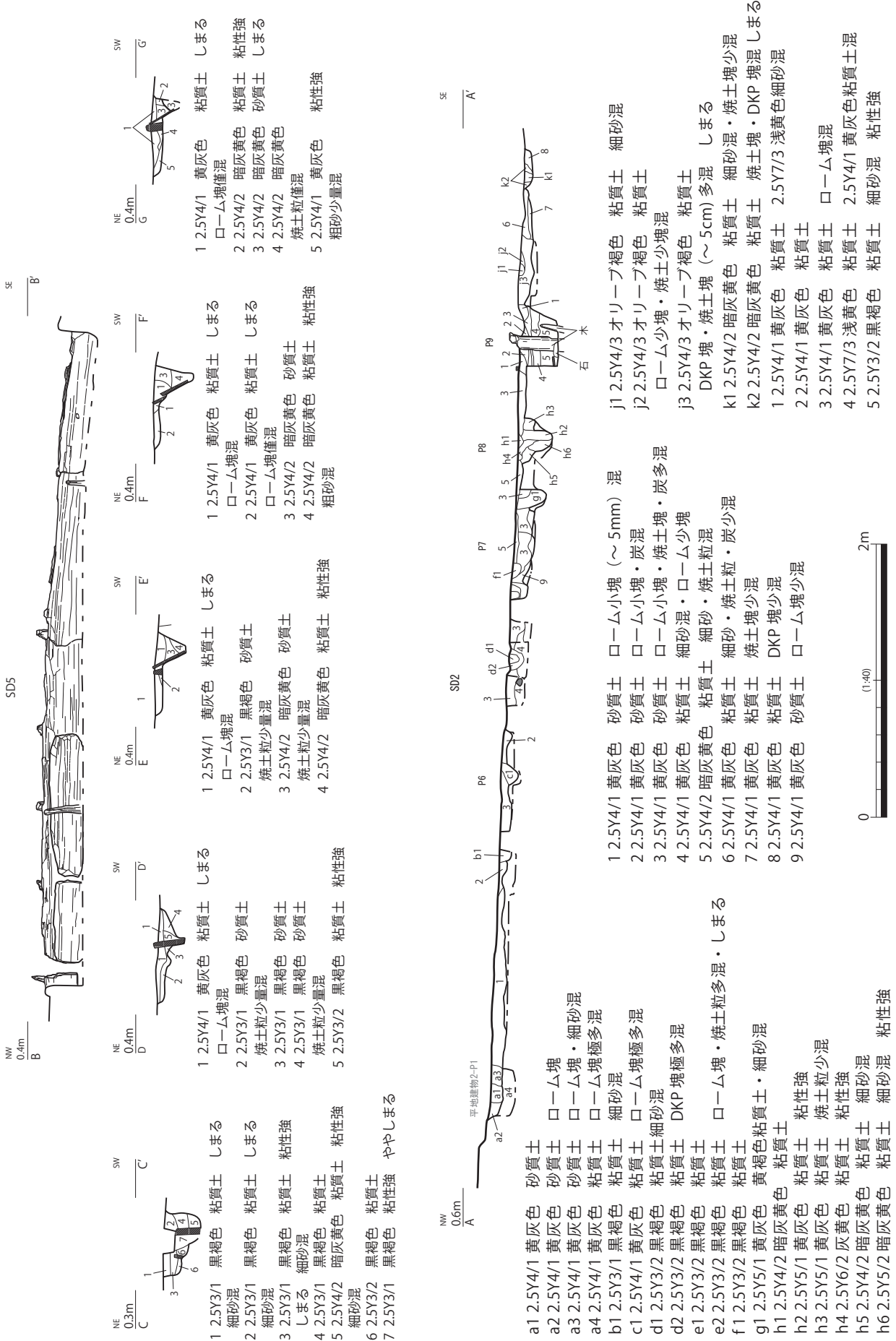
第60-4図に示した炉1は長軸1.18 m、短軸0.42 mを測る不整楕円形の平面形を呈す。西肩中央付近では、長軸40cmを測る角礫が入り込んでいる。底面はたわみ、南北2か所の落ち込みがある。検出面からの最大深は、南側で8cm、北側で11cmを測る。埋土は黒色細砂混シルトと、黒褐色の細砂混シルトおよびシルト混細砂で5層に分層できる。底面付近を除き、埋土には炭化物が顕著に含まれる。

床面に掘り込まれた柱穴を第60-5図に示す。いずれも土層断面において柱痕が確認されている。このうちP21・24は、建物の南北辺間の中間部分に位置し、炉1を挟んでほぼ対照な位置にあることから、当平地建物の主要な柱穴とみられる。建物の北辺に近い位置にあるP22・23には補助的な柱を立てられた可能性があろう。

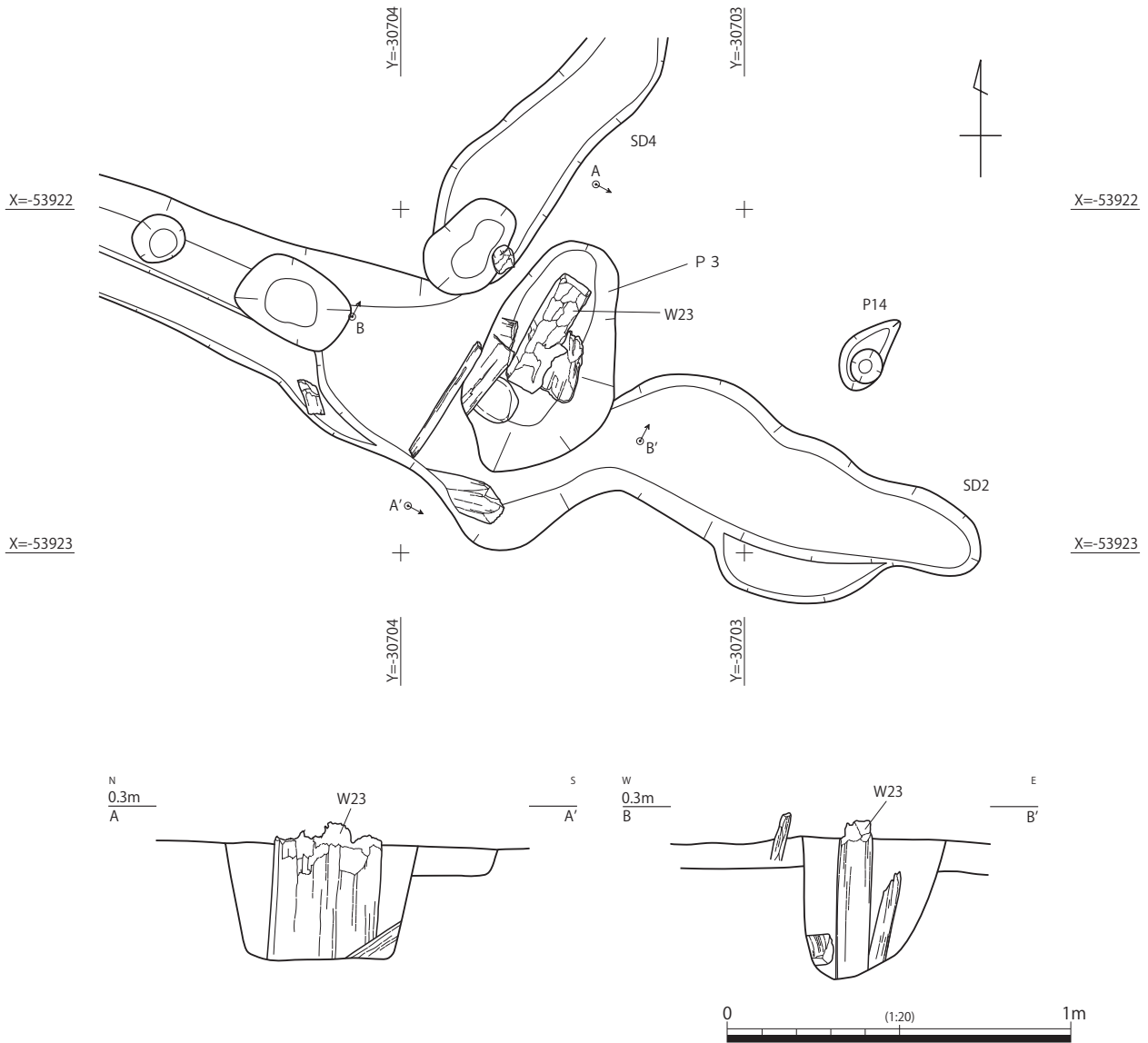
第61図は平地建物2から出土した土器である。Po85～87は甕である。Po85は平行沈線が巡る複合口縁と平坦な底部をもつ。外面全体がミガキによって調整されており、その上から胴部中位には綾



第62-1図 平地建物3 (1)



第62-2図 平地建物3 (2)



第 62 - 3 図 平地建物 3 (3)

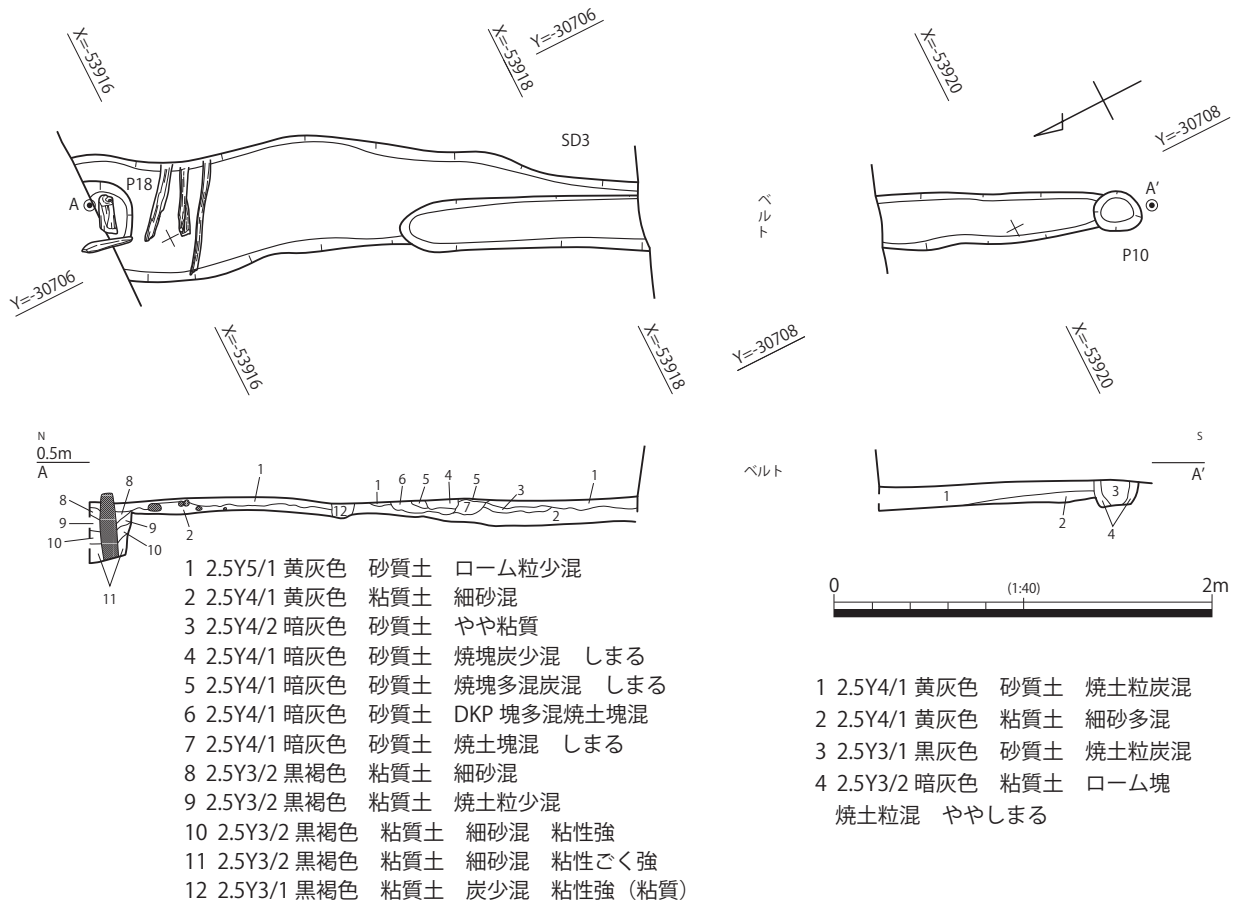
杉文が施される。内面もミガキによる調整が顕著であるが、胴部は右方向を主体とするケズリの痕跡を残す。Po86 は内面は頸部がハケメ、胴部が左方向のケズリで調整される。Po85・86 は弥生時代後期後葉の特徴を示す。

Po87 は胴部片であり器壁が薄い。肩部には平行沈線とややピッチの緩い波状文が施される。胴部下半外面のハケメは縦方向を主体とする。内面のケズリは、脚部上半が右方向、下半が左方向である。古墳時代前期初頭から前葉に属するものとみられる。Po88 は低脚坏であり、脚裾部が外方にのびる。

平地建物 3 (第 62 図)

調査区北半部に位置する平地建物であり、検出面の標高は 0.2～0.5m を測る。南辺を平地建物 2 に切られる。東西辺 5.4m、南北辺 5.4m を測る方形の平面形を呈す身舎の東側に 1.2m、西側に 0.7m の庇をもつものとみられる。

柱と壁が建てられた北辺の SD 1、南辺の SD 2、西辺の SD 3、東辺の SD 4、溝外に位置する柱穴である SK 1、P14～16、身舎内の土間に掘り込まれた土坑 SK 2 とピット P 17、間仕切りを設



第 62-4 図 平地建物 3 (4)

置した溝である SD 6、造成の土留めを設置した溝である SD 5 より構成される。柱穴およびピットの計測値は第 4 表に示す。

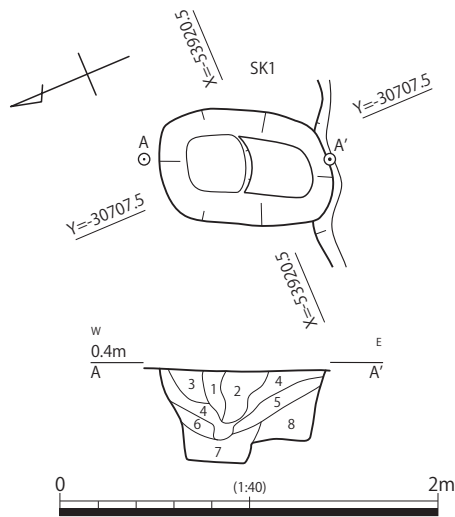
建物北辺である SD 1 は西側が調査区外にまで伸びるため、全体の規模は不明であるが、検出長 4.5 m、最大幅 0.5 m、検出面からの最大深 30cm を測る。埋土は黄灰色シルトを主体としている。溝内には 4 基の柱穴があり、そのうち P 1 には柱根が残存している。この柱根は幅 18cm、厚さ 9 cm を測る、また、調査区北壁付近には壁板 W20 が残存していることが特筆される。

南辺である SD 2 は南側が平地建物 2 の北辺（平地建物 2-SD 1）に、西端が同じく平地建物 2 の柱穴（平地建物 2-P 1）に切られるため、全体の規模は不明であるが、検出長 6.7 m、最大幅 0.6 m、検出面から柱穴を除いた底面までの最大深 14cm を測る。溝内には 4 基の柱穴が掘り込まれており、身舎の南東隅にあたる P 9 には、幅 34cm、厚さ 10cm を測る柱根（W23）が残存する（第 62-3 図）。SD 2 はこの P 9 からさらに 1.2 m 東側に延長する。身舎外のこの延長部は、底を支える壁が立てられていたとみられる。

第 62-4 図に示した西辺の SD 3 は検出長 5.4 m、最大幅 0.6 m、最大深 13cm を測る。南端で柱穴 P10 を確認した。北側が調査区外まで伸びるが、これは身舎北西隅の柱穴とみられる P18 を検出した。P18 には、幅 21cm、厚さ 8 cm を測る柱根が残存する。

SD 4 は身舎南東隅から北側に伸びる溝で、検出長 1.1 m、最大幅 0.31 m、検出面から最大深 8 cm を測る。東側の壁を立てた溝とみられる。

SD 6 は北側の壁を立てたとみられる SD 1 から身舎内に向け直角に伸びる溝で、SD 5 を切る。検出



- 1 2.5Y4/1 黄灰色砂質土しまるローム小塊混、炭少混
- 2 2.5Y4/1 黄灰色砂質土しまるローム塊多混、炭少混
- 3 2.5Y4/1 黄灰色砂質土ローム小塊・炭少混
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土ローム小塊少混
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土ローム小塊ラミナ状混、細砂混
- 6 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土粘性強ローム粒混
- 7 2.5Y4/1 黄灰色砂質土しまるローム塊多混
- 8 2.5Y3/1 黒褐色粘質土粘性強ローム粒・細砂混

第62-5図 平地建物3 (5)

第4表 平地建物3ピット計測表

	平面規模 (m)	深さ (cm)	備考
P 1	0.26 × 0.2	-	柱根残存
P 2	0.18 × 0.16	-	
P 3	0.18 × 0.16	-	
P 4	0.44 × 0.18	-	
P 5	0.26 × 0.18	-	
P 6	0.14 × 0.14	15	
P 7	0.16 × 0.15	15	
P 8	0.32 × 0.22	25	柱痕あり
P 9	0.72 × 0.41	41	柱痕あり
P10	0.28 × 0.2	14	柱痕あり
P11	0.31 × 0.21	-	
P12	0.21 × 0.16	-	
P13	0.32 × 0.22	-	
P14	0.25 × 0.14	5	柱痕あり
P15	0.69 × 0.39	26	柱痕あり
P16	0.54 × 0.27	-	
P17	0.57 × 0.46	10	土器出土
P18	-	30	柱根残存

長 1.3 m、最大幅 0.2 m、検出面からの最大深 30cm を測る。建物の主たる壁を立てた溝ではないことは明らかであり、間仕切りを設置していたと考えられる。

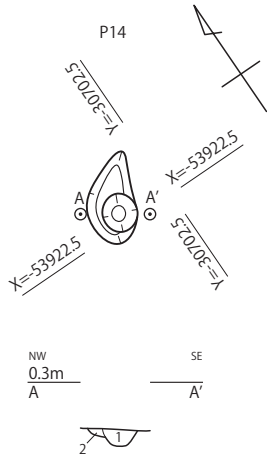
SD 5は検出長 8.2 m、最大幅 0.68 m、検出面からの最大深 28cmを測る。溝内には、壁板の転用材とみられる横板を南北両側に打設した杭で固定した木製構造物が設置されている。同方向で並べられた7枚のうち、3枚は端を重ねられている。横板の長さは0.6～2.4 mと幅があるが、南側に補助的に立てられたもの2枚を除き、これらの上端は段差が生じないように揃えられている。上端の標高は を測る。SD 5と木製構造物は、平地建物3を構成する他の遺構に切られるが、西側は身舎西辺であるSD 3下まで及んでおり、東側はSD 1・2で想定される建物の東端を超えている。一方で、木製構造物は建物の間仕切りが立てられたとみられるSD 6がかかる箇所で途切れており、建物の設計にあわせて設置されたことが見て取れる。このような特徴から、当遺構は建物の基礎を造成する際の土留めとみることができよう。

第62-5図には溝外の柱孔であるSK 1を示した。SK 1は建物の身舎の南西隅に位置し、SD 3南端のP10に近接する。長軸0.91 m、短軸0.68 mを測る隅丸長方形の平面形を呈す。身舎南東隅を支えるP 9に残存する柱根の規模からみて、身舎北西隅を支える主たる柱は当遺構に立てられていた可能性がある。二段掘状の底面は太い柱を立てるための造作とみることができよう。検出面からの深さは、南側の底面で37cm、北側の底面で48cmを測る。黄灰色細砂を主体しながら、暗灰黄色あるいは黒褐色の粘質土が混じる埋土は7層に分層でき、1・2層は柱痕の可能性はある。

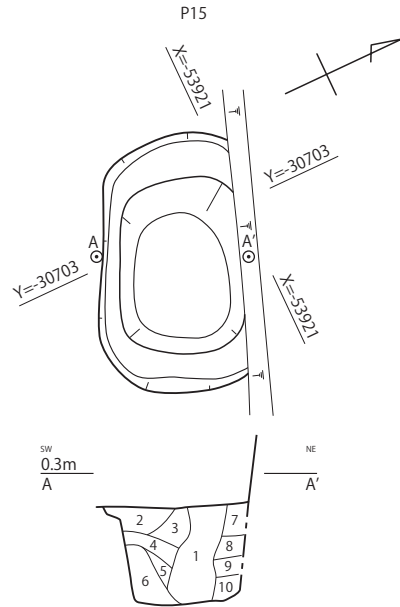
第62-6図には、同じく溝外の柱穴であるP14～17を示した。

P14はSD 2の0.16 m北側に位置する。小規模であり、補助的な柱が立てられていた可能性がある。

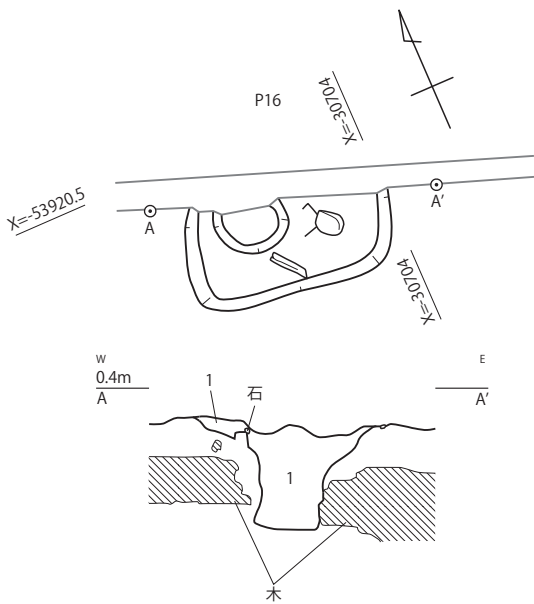
P15は、P 9の北側0.8 mの位置にあり、SD 4に建てられた壁を北側で支える柱が立てられていたと



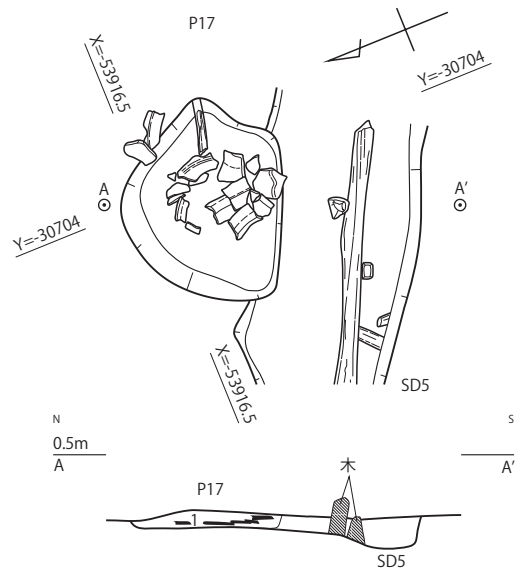
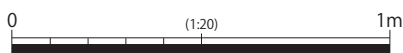
- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘質土 極細砂混
- 2 2.5Y4/1 黄灰色 粘質土 しまる
口一ム塊・焼土塊極多混



- 1 2.5Y4/1 黄灰色 砂質土 焼土粒・炭少混
- 2 2.5Y8/4 淡黄色 粘質土塊極多混、
2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土炭混
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質土 口一ム小塊混
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質土 口一ム小塊少混
- 5 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質土 口一ム塊少混
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質土 やや粘質
- 7 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘質土 細砂混
- 8 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質土 口一ム小塊少混
- 9 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質土 焼土粒少混
- 10 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘質土 焼土塊少混

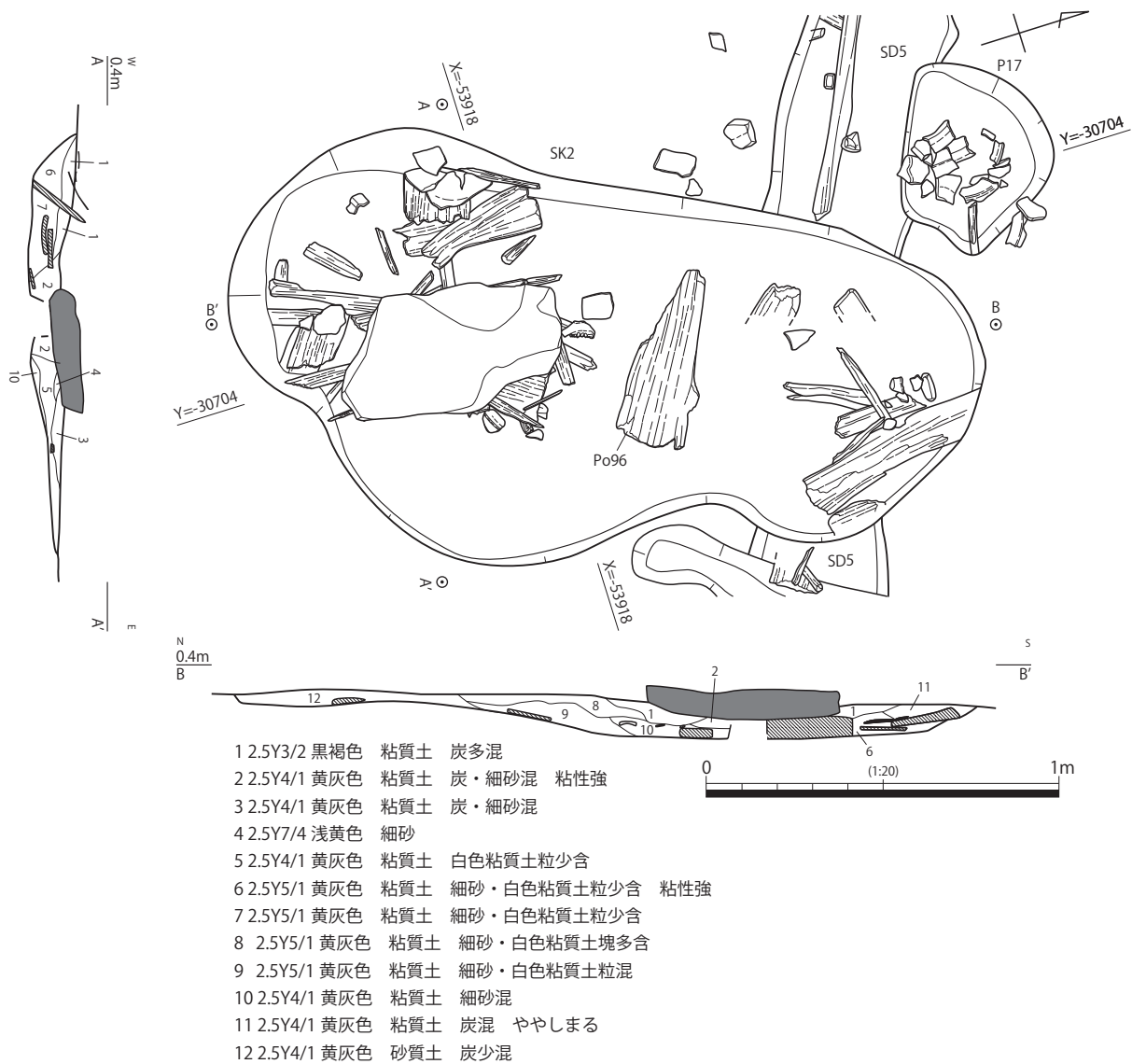


- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質土 口一ム小塊少混



- 1 2.5Y4/1 黄灰色 細砂含
口一ム粒少混

第 62 - 6 図 平地建物 3 (6)



第 62 - 7 図 平地建物 3 (7)

みられる。壁が設けられていない当遺構と SD 1 の間が入口だったのだろう。北側が東西ベルトにかかるため、全体の規模は不明であるが、隅丸長方形の平面形を、方形の断面形を呈す。明確な柱痕跡である 1 層を含め暗灰黄色砂質土を主体する埋土は 10 層に分層できる。

P16 は、P15 の西側 1.0 m の位置にある、北側が東西ベルトにかかるため、全体の規模は不明であるが、方形の平面形を呈すとみられる。逆台形の断面形を呈し、埋土は暗灰黄色砂質土である。柱痕跡は確認できないが、底面で検出したピット状の落ち込みから、身舎内に建てられた補助的な柱を立てた柱穴の可能性が考えられる。

P17 は SK2 の西 0.12 m の位置に近接し、SD 5 を切る。不整形の平面形を、浅い皿状の断面形を呈す。埋土は黄灰色粘質土の単層である。土器片が多く出土している。

第 62-7 図に示した SK 2 は身舎中央北よりに位置し、SD 5 を切る。長軸 2.17 m、短軸 1.12 m を測る不整形の平面形を呈す。断面形は浅い皿状の断面形を呈し、検出面からの最大深は 10cm である。当遺構内南よりの検出面付近では、長軸 65cm、短軸 36cm、厚さ 9cm を測る大型で扁平な礫が複数の板材の上に据えられた状態で出土している。この礫直下の層 (1 層) は炭化物を多く含むが、

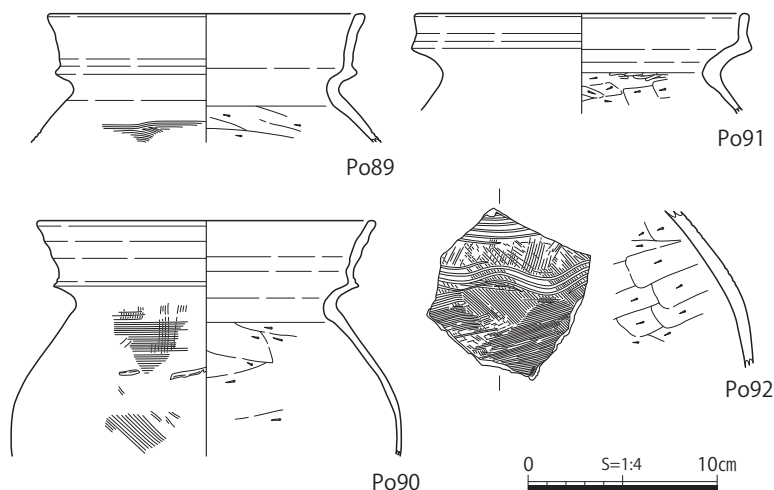
礫や板材に被熱した痕跡は認められず、当遺構が炉であることを支持するものではない。それより下層は、黄灰色粘質土を主体としており、埋土は12層に分層できる。当遺構からは多数の遺物が出土しており、土器ではPo93～100、動物骨ではイノシシ下顎骨、ネコザメ科背鰭棘、アカエイ尾棘などがある。

当平地建物は、溝内に柱だけでなく壁板も残存しており、これまで想定していた当遺跡の平地建物の基本的な構造が妥当であることを確認できる事例となった。また、SD 2が身舎の東西辺の外側まで伸びていることから、この建物は身舎の西側と東側に外壁で支えられた庇をもっていたことが想定される。身舎内に間仕切りをもつことも特異であり、この平地建物が他とは異なる用途のものであったことが窺える。SD 1～4で区画される1辺5.4 mの身舎は、面積でいえば平地建物2の約2倍であり、強固な柱や、基礎の造成はこのような大型の建物を建てるにあたって必要だったのだろう。

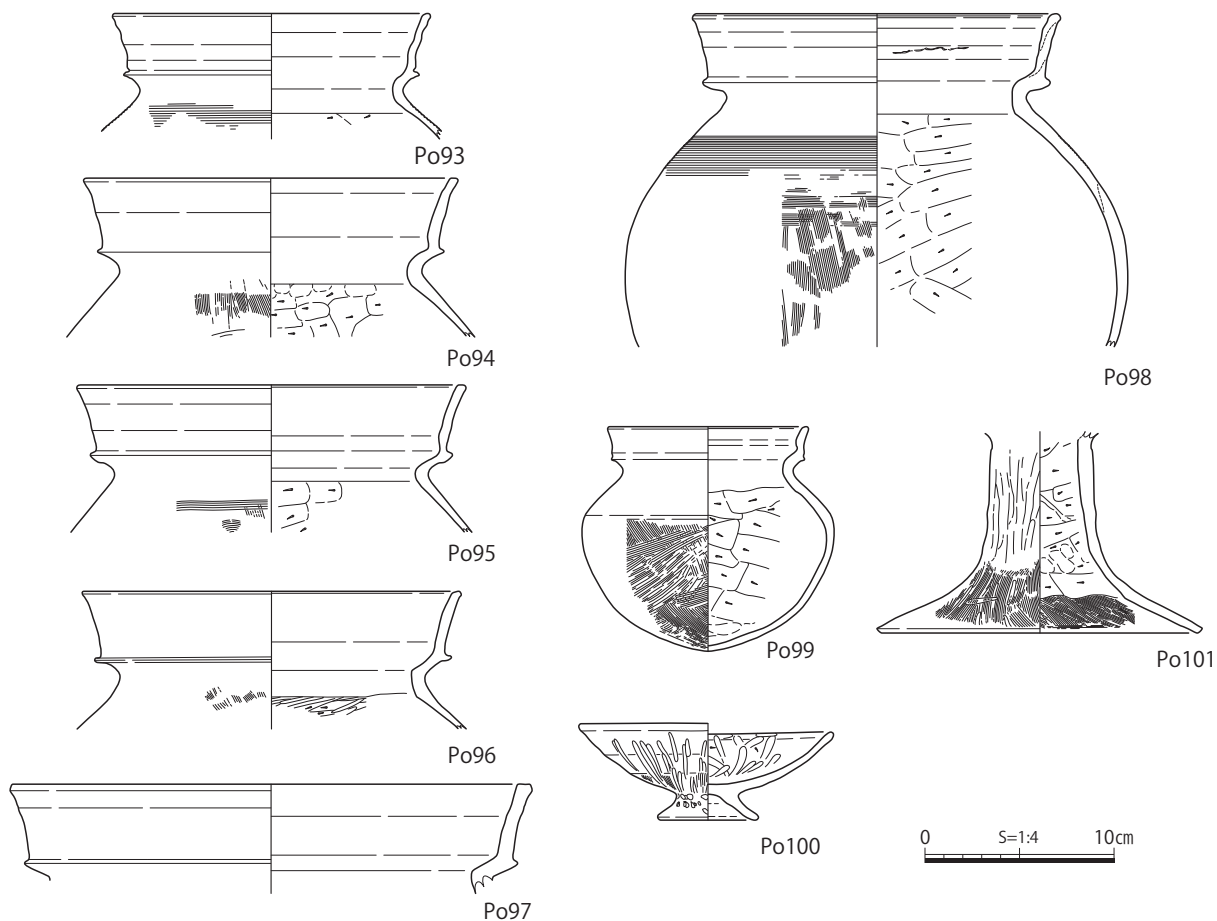
第63図には平地建物3から出土した土器を示した。Po89～92はいずれも甕で胴部内面のケズリは右方向である。Po89の口唇部は面取りによってやや肥厚する。肩部には平行沈線と波状文が施される。Po90は器壁が薄く、口縁部にはヨコナデによる段が生じている。肩部には粗雑な刺突文が施される。Po91は短く内傾して立ち上がる複合口縁をもつ。Po92は肩部に平行沈線とピッチの緩い波状文が施される、胴部のハケメは不定方向である。

第64図には平地建物3のうちSK 2から出土した土器を示した。Po93～99は甕である。Po93～98は口唇部が面取りされ、胴部内面のケズリは右方向が主体である。Po93は器壁が薄く、口縁部はヨコナデによって段が生じている。肩部には平行沈線が施される。Po95は肩部に平行沈線と波状文が施される。Po96は口縁下端の突出が鋭い。内面の頸部下がミガキで調整される。Po98は器壁がやや厚く、口縁下端の突出は鈍い。肩部には平行沈線が施される。胴部下半のハケメは縦方向である。Po99は小型かつ器高が低いもので、丸底である。複合口縁の立ち上がりも短い。胴部下半は不定方向のハケメで調整される。Po100は低脚坏である。坏部は内外面とも縦方向を主体としたミガキで調整される。Po101は高坏である。大型のものであり、内外面とも脚裾部のハケメが顕著である。

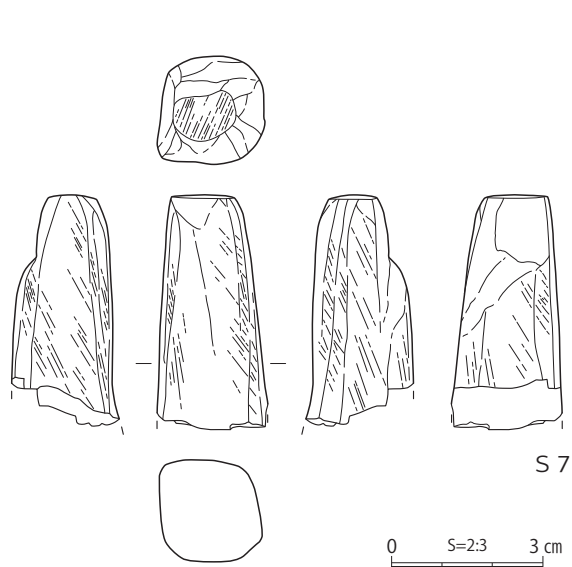
第65図に示したS 7は不明石器である。角礫を素材としており、研削によって断面を歪な方形に、上面を平坦に加工している。



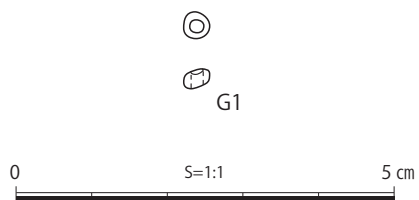
第63図 平地建物3出土土器(1)



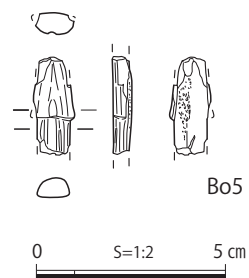
第64図 平地建物3出土土器(2)



第65図 平地建物3出土石器



第66図 平地建物3出土玉類

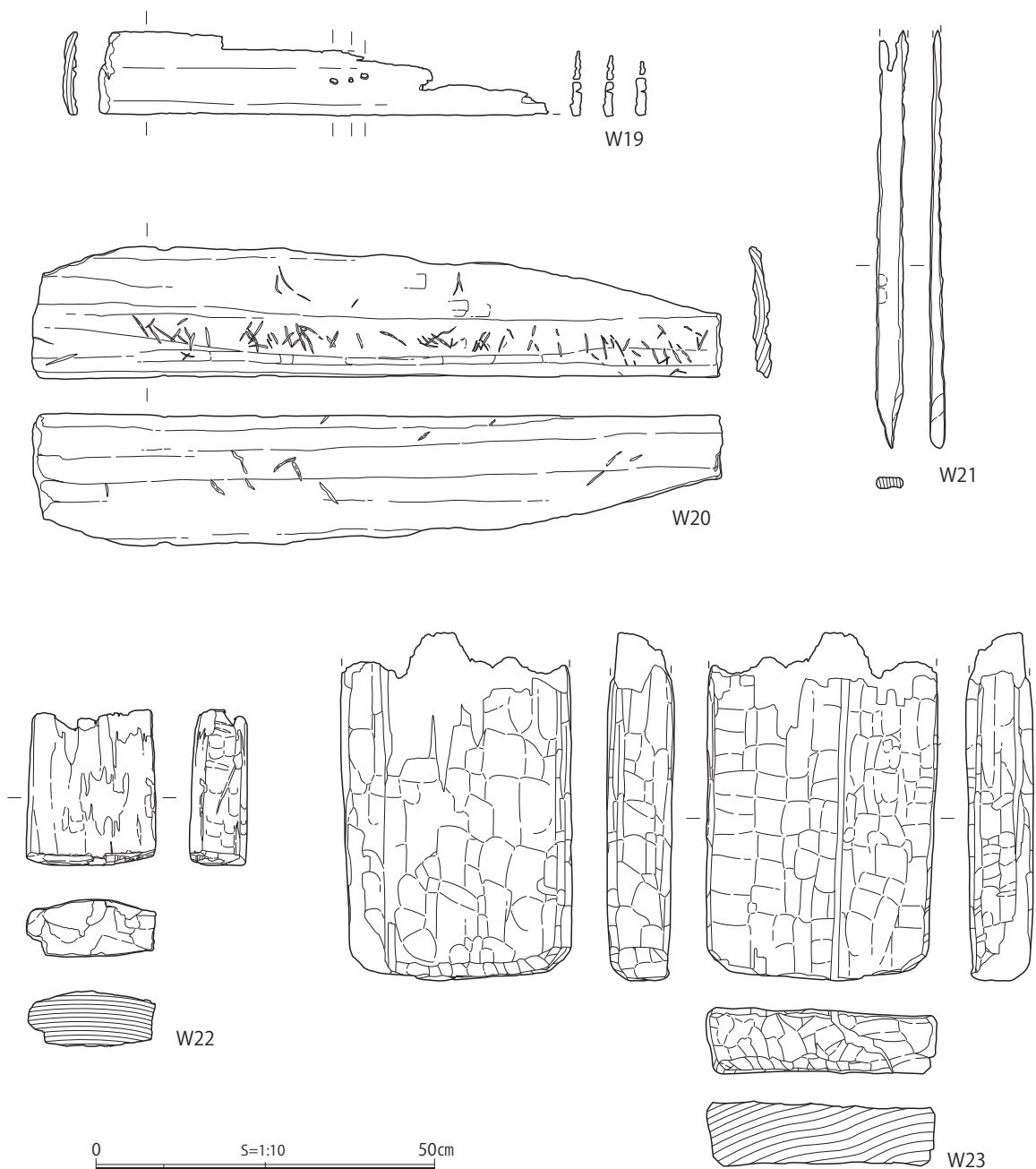


第67図 平地建物3出土骨角器

第66図に示したG 1は、ガラス玉であり淡青色を呈す。

第67図に示したBo 5は不明骨角器である。鹿角を素材としており、切削によって正面中央部に段を作出している。

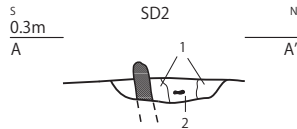
第68図は平地建物3から出土した木器である。W19・21はSK 2から出土した。W20はSD 1に残存していた壁板である。壁板W19は中央部にほぼ等間隔の孔が並ぶ。W20の表面には多数の圧痕が残るが、何によるものかは不明である。W21は矢板である。W22は身舎北西隅のP10に残存していた柱である。針葉樹の芯去材を素材とし、中央部がやや膨らむ長方形の断面形に、下端は平坦に加工される。身舎南東隅の柱穴P 9に残存していた柱W23も針葉樹の芯去材を素材とし、長方形の断面形を呈す。下端は平坦だが、面取りされている。ハツリ痕が全面に残る。



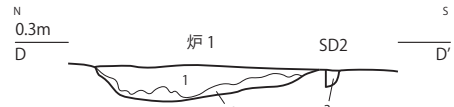
第68図 平地建物3出土木器



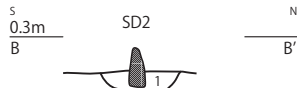
第69-1図 平地建物4 (1)



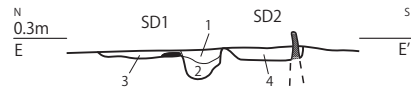
- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 ~ 3 mm黄褐色ブロック・~ 5 mm炭化物含
- 2 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中
~ 5 mm黄褐色ブロック少含



- 1 10YR2/1 黒色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや弱
~ 1 cm炭化物・貝殻片含
- 2 10YR3/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱
~ 5 mm黄褐色ブロック少含
- 3 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中



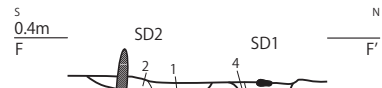
- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 ~ 3 mm黄褐色ブロック・~ 5 mm炭化物含



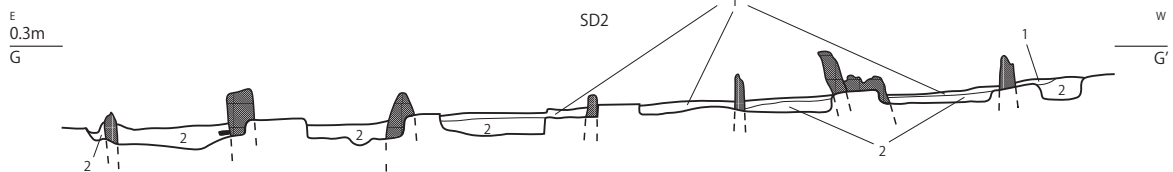
- 1 10YR3/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや弱
- 2 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや弱
細礫・~ 3 mm黄褐色ブロック少含
- 3 10YR2/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや弱
~ 1 cm黄褐色ブロック・褐灰色シルトブロック・炭化物含
- 4 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱



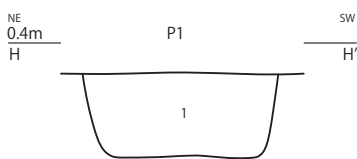
- 1 10YR3/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや弱
- 2 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや弱
細礫・~ 3 mm黄褐色ブロック少含
- 3 10YR3/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱
~ 2 mm黄褐色ブロック含
- 4 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱
~ 2 mm黄褐色ブロック多含
- 5 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱



- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 ~ 2 cm褐灰色シルトブロック含
- 2 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性やや強
しまりやや弱
- 3 10YR3/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 ~ 2 mm黄褐色ブロック含
- 4 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 ~ 2 mm黄褐色ブロック多含



- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 ~ 5 mm黄褐色ブロック少含
- 2 10YR3/2 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまりやや弱



- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中
~ 1 cm黄褐色パミスブロック少含



第 69 - 2 図 平地建物 4 (2)

平地建物4 (第69図)

調査区中央部南西より、標高0.2～0.3mで検出した3条の溝(SD 1～3)と1基の炉(炉1)、1基のピット(P 1)はそれぞれの位置関係や方向性から、平地建物の構成遺構の可能性はある。平地建物としてみた場合、長軸4.6m以上、短軸2.3m以上の隅丸長方形の平面形を呈し、北側を平地建物2、西側を平地建物1に切られるものとなる。

北西-南東方向のSD 1・2は個別の溝として検出したものの、切り合いを明確に捉えることができず、いずれも東側の北東-南西方向の溝SD 3と接続すると想定される。したがって、これら3条の溝は、本来直角に曲がり平地建物の東辺と南辺となる同一の溝である可能性がある。屈曲部の内側、すなわち身舎と想定される範囲の東側約0.90mまでの範囲が著しく硬化していることは、これが床面であるとすれば理解しやすい。また、SD 2の断面A-A'の1層のように板を立てた痕跡(2層)とみられる箇所も散見される。

ただし炉1がSD 1・2を切っていること、SD 2内には杭あるいは矢板は打設されているものの明確な柱がないこと、P 1に柱痕が認められないことは、建物として捉えるには否定的な根拠となるものである。

SD 1～3の埋土はいずれも黒褐色シルト～細砂を主体とし、ローム由来とみられる黄褐色ブロックを含むのが特徴である。SD 2内には杭あるいは矢板が0.3～0.5m間隔で打設されている(断面G-G')。一連の溝としてみた場合、建物の南辺の中央付近と想定される箇所を外側に膨らみ、かつ幅も広くなり、検出長6.1m(北西-南東方向4.6m、北東-南西方向1.5m)、幅0.65m、検出面からの最大深7cmを測る。

炉1は長軸0.70m、短軸0.61mを測る不整形の平面形を呈す。断面形は皿状を呈し、最大深8cmを測る。黒色細砂混シルトを主体とする埋土は2層に分層でき、埋土には炭化物や貝類を含む。

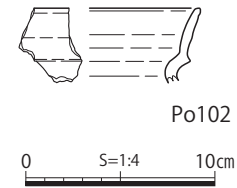
P 1は長軸0.52m、短軸0.31mを測る不整形の平面形を呈す。断面形は長方形を呈し、最大深22cmを測る。埋土は黒褐色シルト混細砂の単層である。

第70図に示したPo102は平地建物4から出土した甕の口縁部片である。無文であり端部はナデによって面取りされている。古墳時代前期に属す。

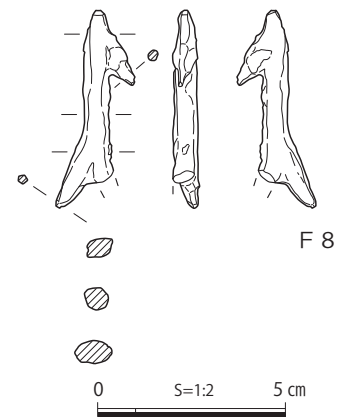
第71図に示したF 8は平地建物4のうちSD 1から出土した鉄製のヤスである。両側縁に互い違いに1つずつ逆刺をもつ。身部は方形に近い断面形を呈すが、返し先端部は大きく厚みを減じ尖らせている。欠損している基部は身部からやや屈曲して伸びるとみられるため、単独で着柄するものではなく、組み合わせ式のものである可能性がある。

(2) 炉 (第72図)

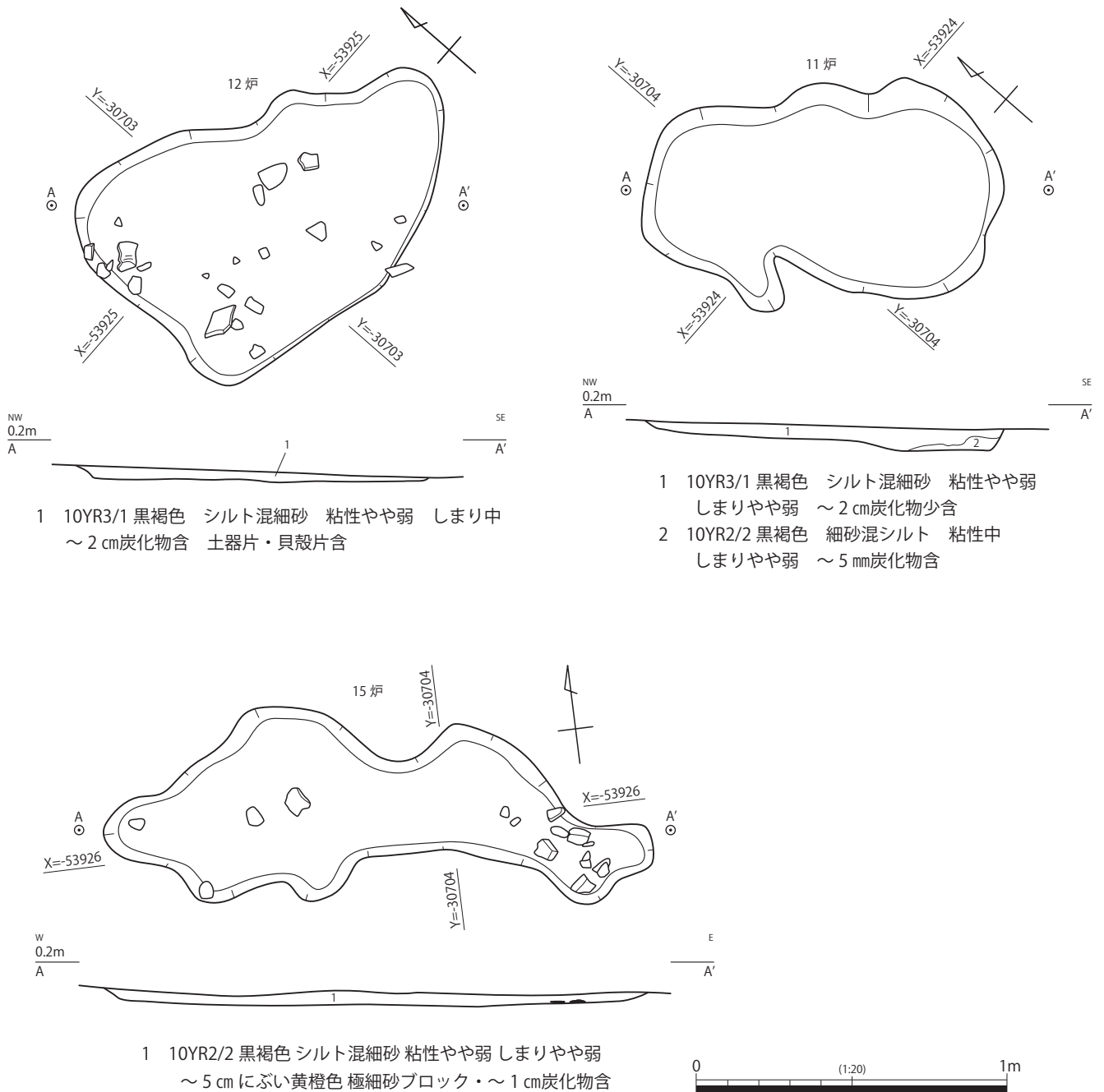
調査区中央やや南東より、平地建物2・4の東側0.4～1.7mの位置において、3基の炉跡(11・12・15炉)を検出した。いずれも平面形は不整形で皿状の断面を呈す浅い遺構であり、黒褐色シル



第70図 平地建物4出土土器



第71図 平地建物4出土金属器



第72図 11・12・15 炉

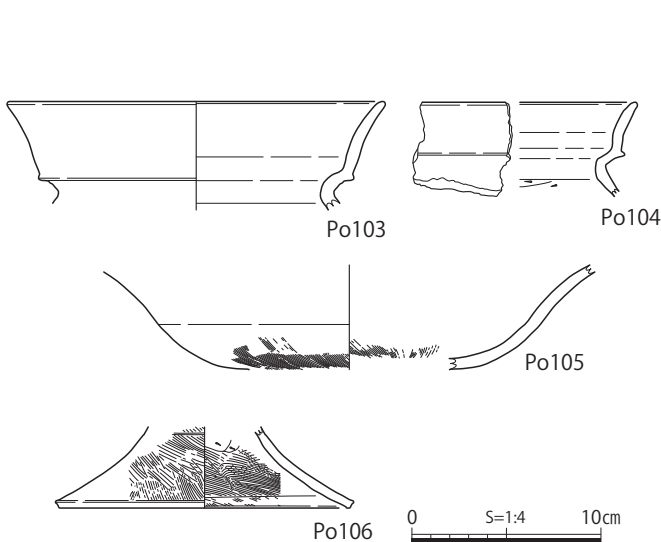
ト混細砂の埋土は炭化物を特徴的に含む。

11 炉は長軸 1.16 m、短軸 0.71 m、最大深 8 cmを測る。

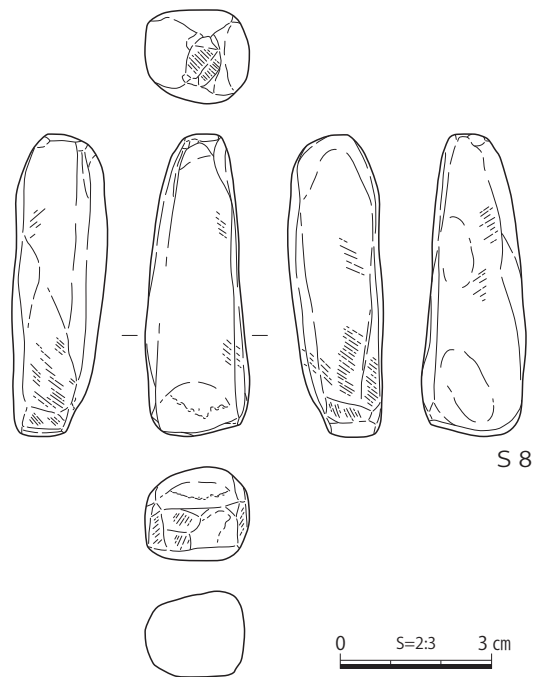
12 炉は長軸 1.15 m、短軸 0.83 m、最大深 4 cmを測る。埋土には、土器片に加え、カキの貝殻片が含まれているのが特徴的である。

15 炉は長軸 1.78 m、短軸 0.61 m、最大深 5 cmを測る。東端の底面において土器片を検出した。

第73図に示した Po103 は 15 炉から、Po104 ～ 106 は 12 炉から出土した土器である。Po103・104 は無文の複合口縁をもつ甕である。Po103 は弥生時代終末期後半に属す。Po104 は口縁端部にあまい面をもち、胴部内面のケズリは右方向である。古墳時代前期前葉に属す。Po105・106 は高坏である。Po105 は口径 26cm以上となる大型のものであり、坏部内外面はハケメで調整される。Po106 のハの字



第73図 11・15 炉出土土器



第74図 15 炉出土石器

に開く脚部の内外面はハケメで調整される。いずれも古墳時代前期前葉の範疇で捉えられるものであるが、Po105は古相を示す。

第74図に示したS8は15炉から出土した不明石器である。角礫を素材とし、研削によって上端がややすぼまる直方体状に成形されている。

(3) 土坑 (第75図)

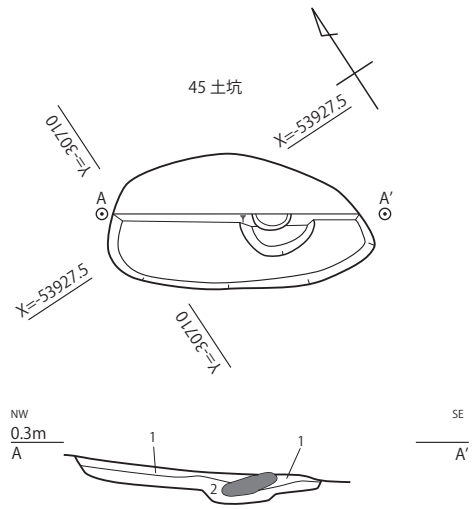
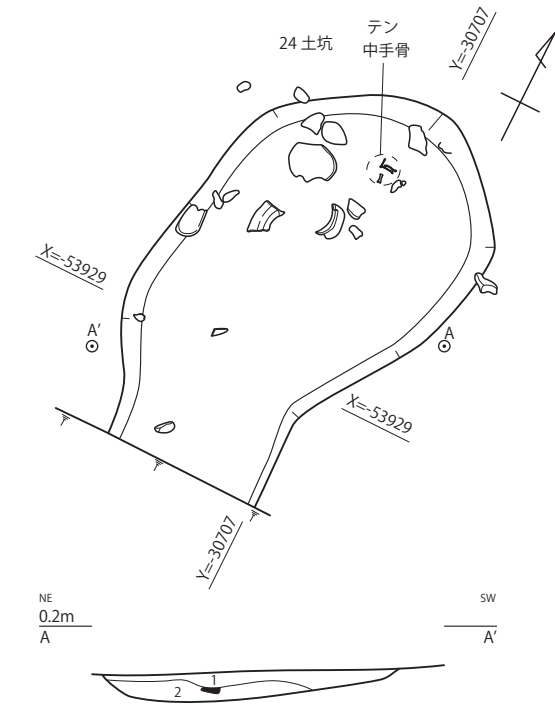
平地建物のプラン外で、4基の土坑を検出した。24・45土坑は調査区南西部、62・63土坑は調査区北西部に位置する。いずれも浅い遺構であり、先述の炉跡に類似するが、埋土に含まれる炭化物は少ない。

24土坑は、標高0.10m付近で検出された。遺構の南側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、長軸は1.18m以上であり、短軸は0.74mを測る。検出面からの深さは最大で8cmである。埋土は黒色あるいは黒褐色シルト混じり細砂の2層に分層できる。他の土坑に比べ遺物が多く土器、解剖学的位置を保持したテノの中手骨が出土した。

45土坑は、標高0.27m付近で検出された。長軸0.70m、短軸0.35mを測る不整楕円形の断面形を呈す。検出面から底面までの深さは最大8cmで、底面中央やや東よりに径0.20m、底面からの深さ4cm程度のピット状の落ち込みがある。この箇所では長軸15cm程の楕円形の礫を検出した。埋土は黒褐色シルト混細砂であり、2層に分層できる。

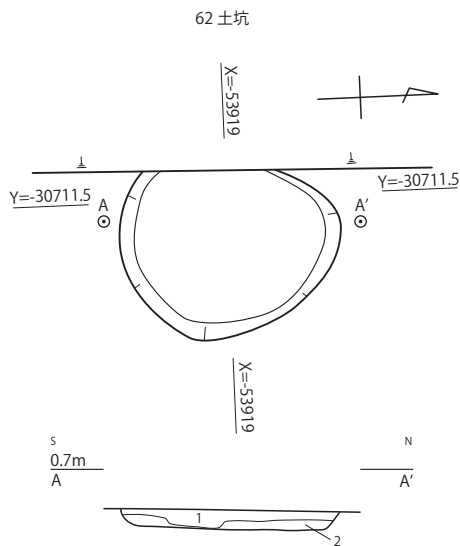
62土坑は西側が調査区外となるものの、長軸0.59m、短軸0.45mを測る不整円形の平面形を呈すものとみられる。検出面からの深さは最大で8cmを測る。埋土は黄灰色及び黒褐色のシルト混細砂の2層に分層できる。

63土坑は北側が東西ベルトにかかるが、隅丸三角形の平面形を呈すものとみられ、長軸0.27mを測る。二段掘状の底面の中央やや南よりにさらに長軸0.19mの深さ5cmほどのピット状の落ち込み

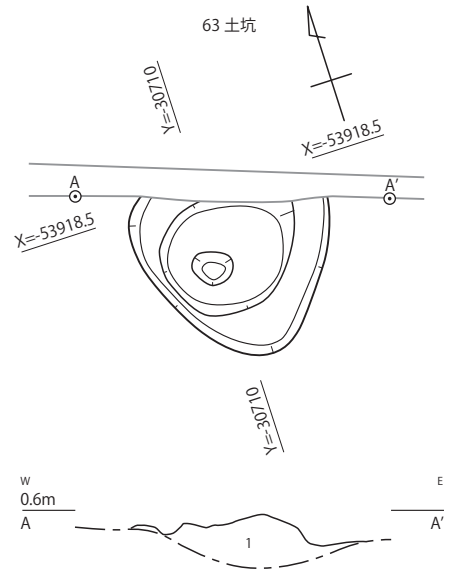


- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト混細砂 やや弱 中
～2cm 褐灰色シルトブロック・～1cm炭化物含
- 2 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 やや弱 やや弱

- 1 10YR2/1 黒色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中
～2cm 炭化物含
- 2 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱
～5mm 炭化物含



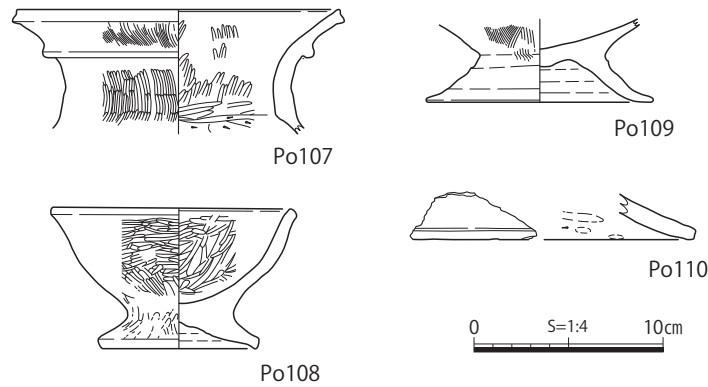
- 1 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 細礫少含
- 2 2.5Y3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 細礫少含



- 1 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混細砂 炭混



第75図 24・45・62・63土坑 平面図・断面図



第76図 24・62土坑出土土器

がある。埋土は黄灰色シルト混細砂である。

第76図に示したPo107・108は24土坑から、Po109・110は62土坑から出土した土器である。Po107は複合口縁をもつ壺である。口縁部は外方に大きく傾き、端部はナデによって段が生じている。外面の調整は口縁部がハケメ、頸部がミガキである。調整は口縁部から頸部内面はミガキで調整される。頸部下内面のケズリは左方向である。Po108・109は脚付埴である。外面全体、埴部内面はミガキによる調整が顕著である。Po109はシャープな作りで脚部がハの字状に大きく開く。Po110は高坏の脚部片である。裾部が大きく広がる器形とみられる。Po107・108は古墳時代前期前半の範疇で捉えられるものである。

(4) 溝

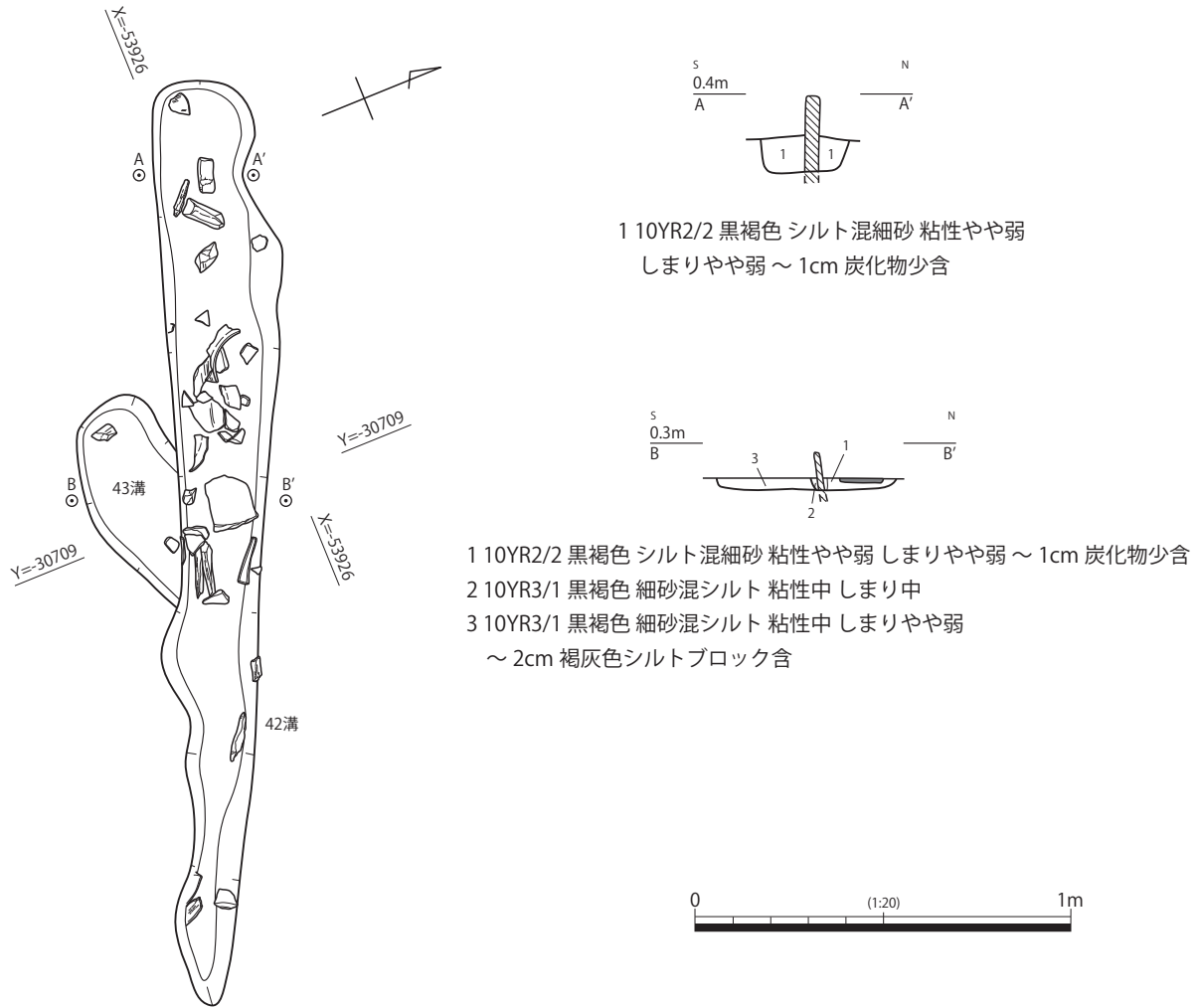
①平地建物群の長軸に平行する溝を3条（42・44・23溝）、②短軸に平行する溝を2条（34・16溝）、③大きく湾曲する溝を2条（14溝・22溝）を検出した。

①平地建物群の長軸に平行する溝はいずれも調査区南西部、平地建物4の南側で近接した位置関係にある。いずれも底面に打設された杭あるいは矢板が残存しており、これらで横板を固定していたとみられる。実際、令和4年度の確認調査箇所では、これら遺構を認識できず掘削しており、44溝の東側延長部分で、横板を杭で固定した木製構造物を検出している。平地建物3-SD5との構造の類似性から、これらの溝群は平地建物を建てるための造成に伴う土留めを設置するものであったと考えられる。これらの溝の南側には、平地建物群が展開しない点もこれを支持する。

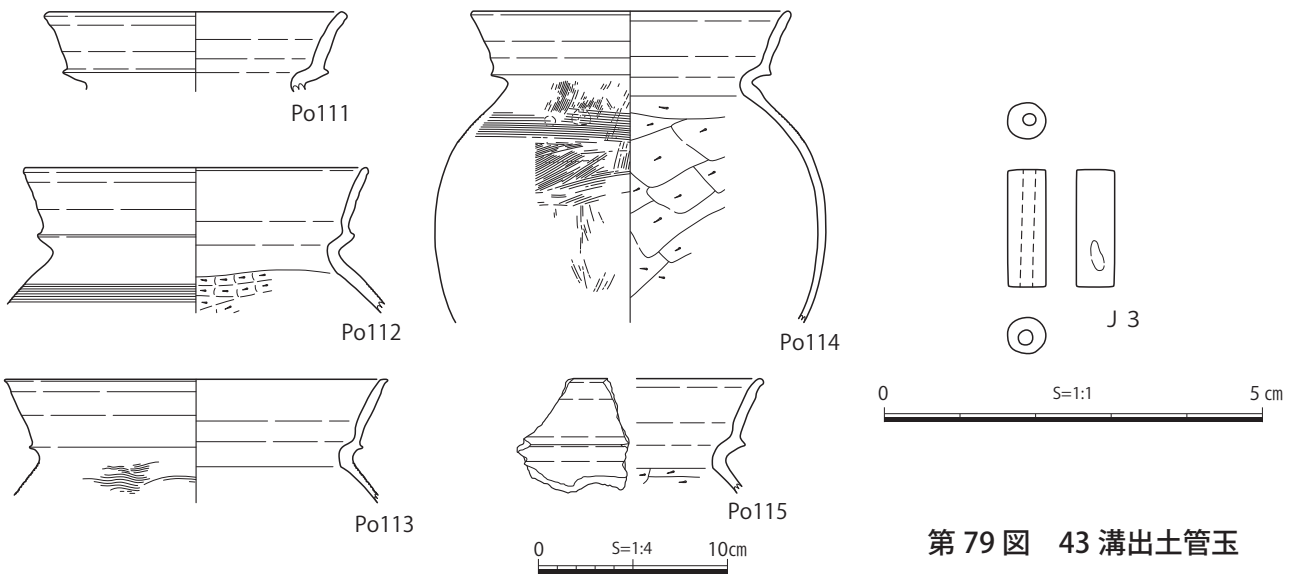
42溝・43溝（第77図）

42溝は標高0.28m付近で検出した、西北西－東南東方向（N-68°-W）に走る溝であり、43溝を切る。検出長2.47m、最大幅0.32m、検出面からの深さは最大で10cmを測る。底面に打設された杭あるいは矢板が8本残存しており、断面A-A'にかかる杭は幅10cm、厚さ4cm、断面B-B'にかかる杭は幅3～5cmを測る。埋土は黒褐色のシルト混細砂あるいは細砂混シルトである。当遺構からは多数の土器片が出土している。43土坑は最大幅0.46m、検出面からの最大深3cmを測り、埋土は黒褐色細砂混シルトの単層である。

第78図は42溝から出土した土器でいずれも古墳時代前期初頭～前葉の特徴を示す。Po111は壺ま

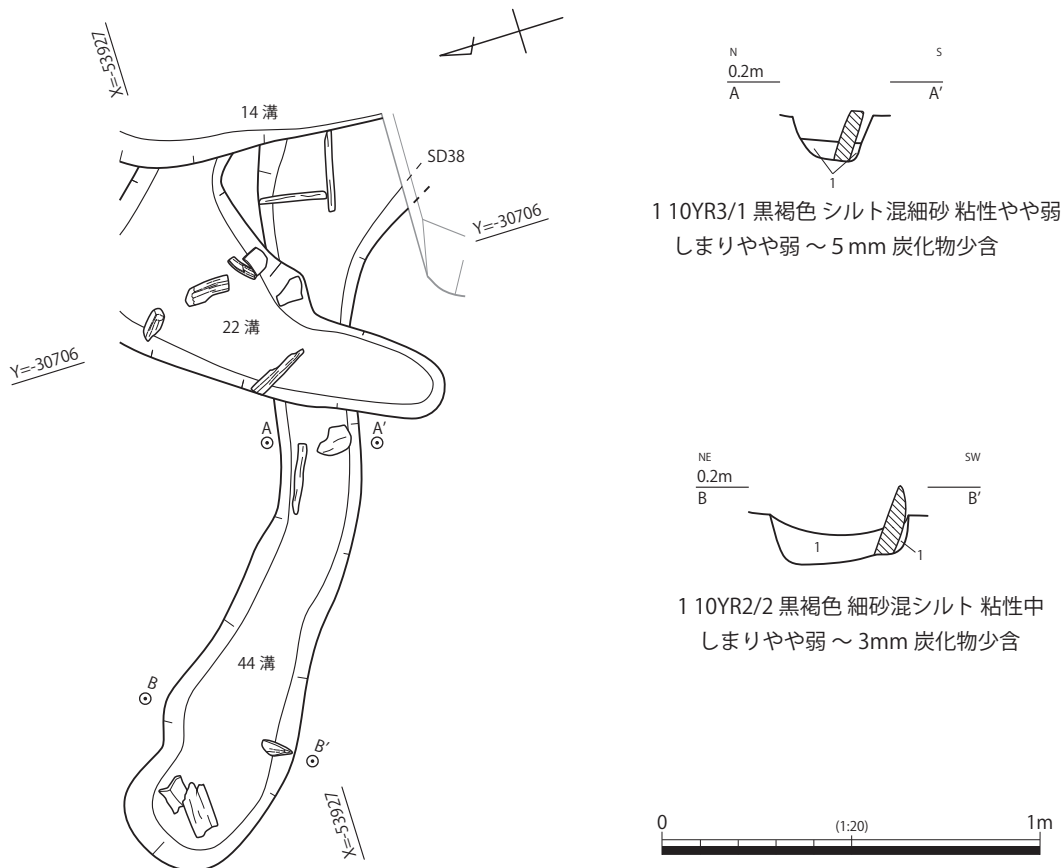


第77図 42・43溝 平面図・断面図



第79図 43溝出土管玉

第78図 42溝出土土器



第80図 44溝 平面図・断面図

たは甕であり、やや外反する複合口縁の器壁は厚い。Po112 ~ 115は甕であり、いずれも無文の複合口縁をもつ。Po112・115は口縁端部がヨコナデによって玉縁状となる。口縁下端の突出はやや鈍い。内面のケズリは右方向である。Po113は器壁が薄く、口縁端部は面取りのナデによってやや外方に折れ曲がる。肩部には波状文が施される。Po114は肩部に平行沈線が施され、胴部のハケメは不定方向である。内面のケズリは右方向である。Po115は口縁端部が丸く収められ、胴部内面のケズリは右方向である。

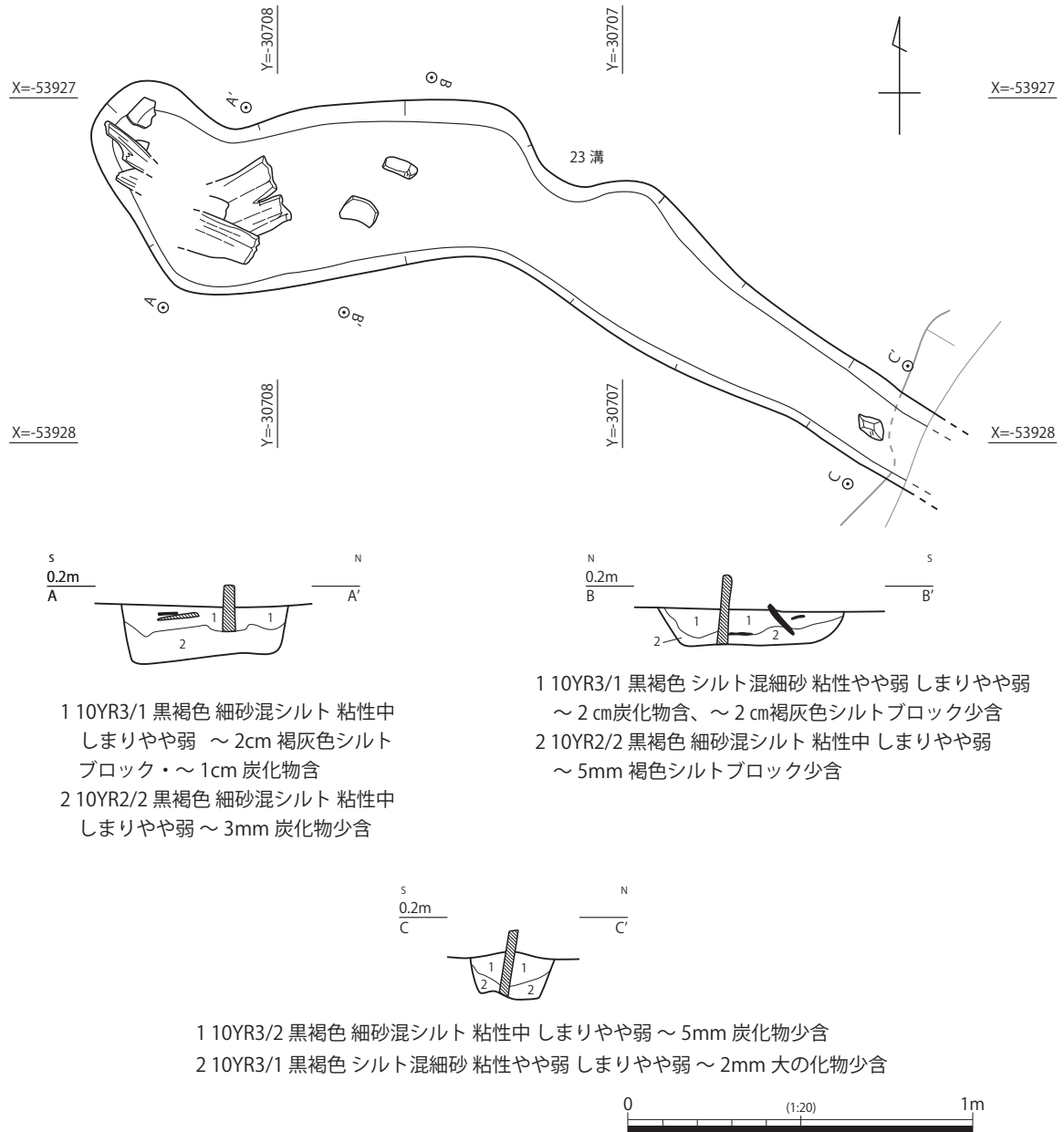
第79図は43土坑から出土した管玉である。碧玉を素材とし、径5mmを測る、当遺跡の管玉としては太いものであり、古墳時代前期に属するものとみられる。

44溝 (第80図)

44溝はやや蛇行するものの、42溝の0.35m北側をほぼ同様の方向で走る。22溝・14溝に東側を切られる。検出長1.30m、最大幅0.36m、検出面からの最大深13cmを測る。底部に打設された杭と矢板が1本ずつ残存している。埋土は黒褐色のシルト混細砂あるいは細砂混シルトである。

23溝 (第81図)

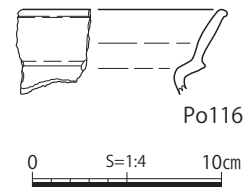
23溝も、やや蛇行するものの、42溝の0.29m南側をほぼ同様の方向で走る。SD38-Aから東側は令和4年度の確認調査時に認識できなかったため全体の規模は不明であるが、検出長2.62m、最大幅0.50m、検出面からの最大深17cmを測る。底面に打設された杭が2本残存しており、断面A-A'



第 81 図 23 溝 平面図・断面図

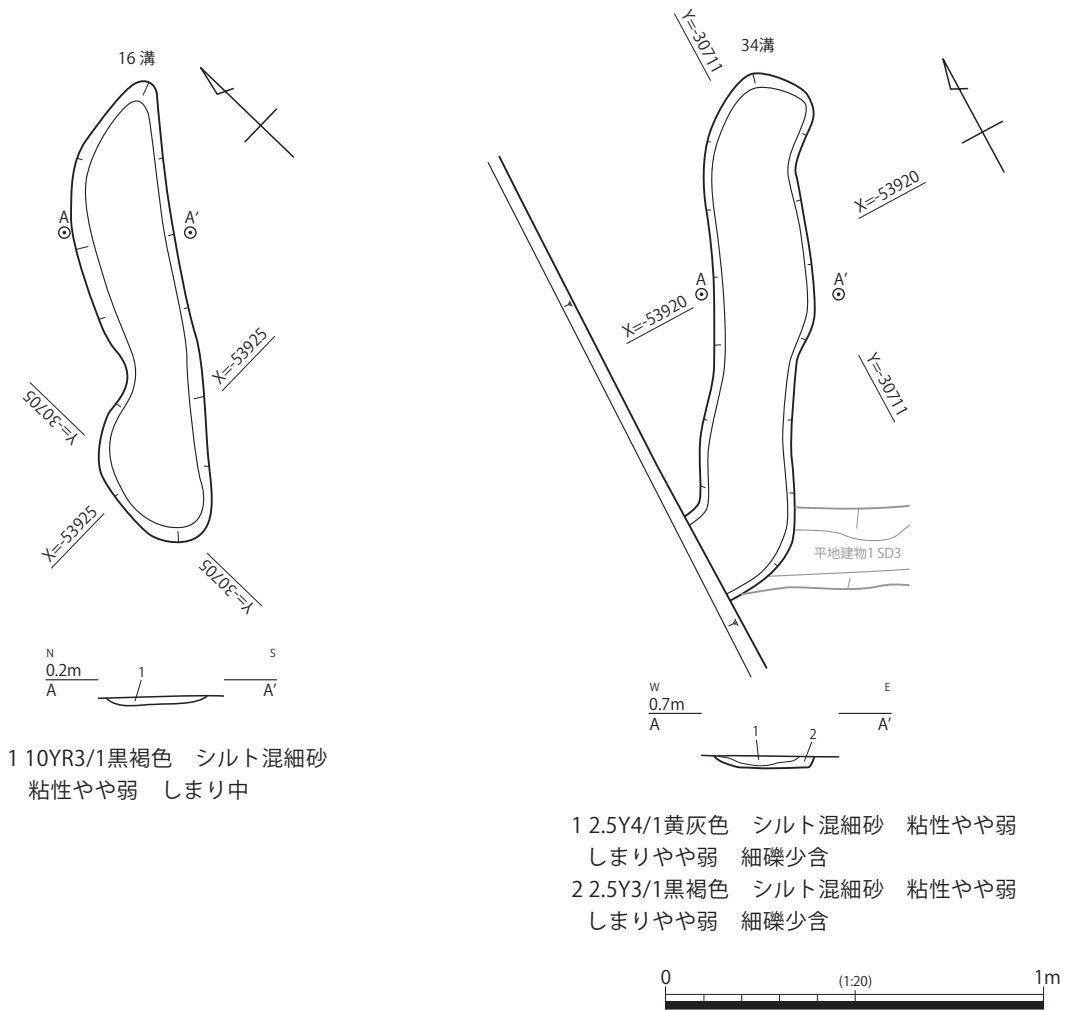
にかかるものは幅 12cm、厚さ 4 cm、断面 B-B' にかかるものは幅 10cm、厚さ 3 cmを測る。埋土は黒褐色のシルト混細砂あるいは細砂混シルトであり、いずれも断面でも 2 層に分層できる。

第 82 図に示した Po116 は 23 溝から出土した甕である、口縁端部はヨコナデによって玉縁状を呈す。古墳時代前期前葉の特徴を示す。



第 82 図 23 溝出土土器

②平地建物群の短軸に平行する溝も平地建物群との関連が考えられるが、いずれも浅く、木製構造物の痕跡も認められないため、具体的な性格は不明である。



第 83 図 16・34 溝 平面図・断面図

16・34 溝 (第 83 図)

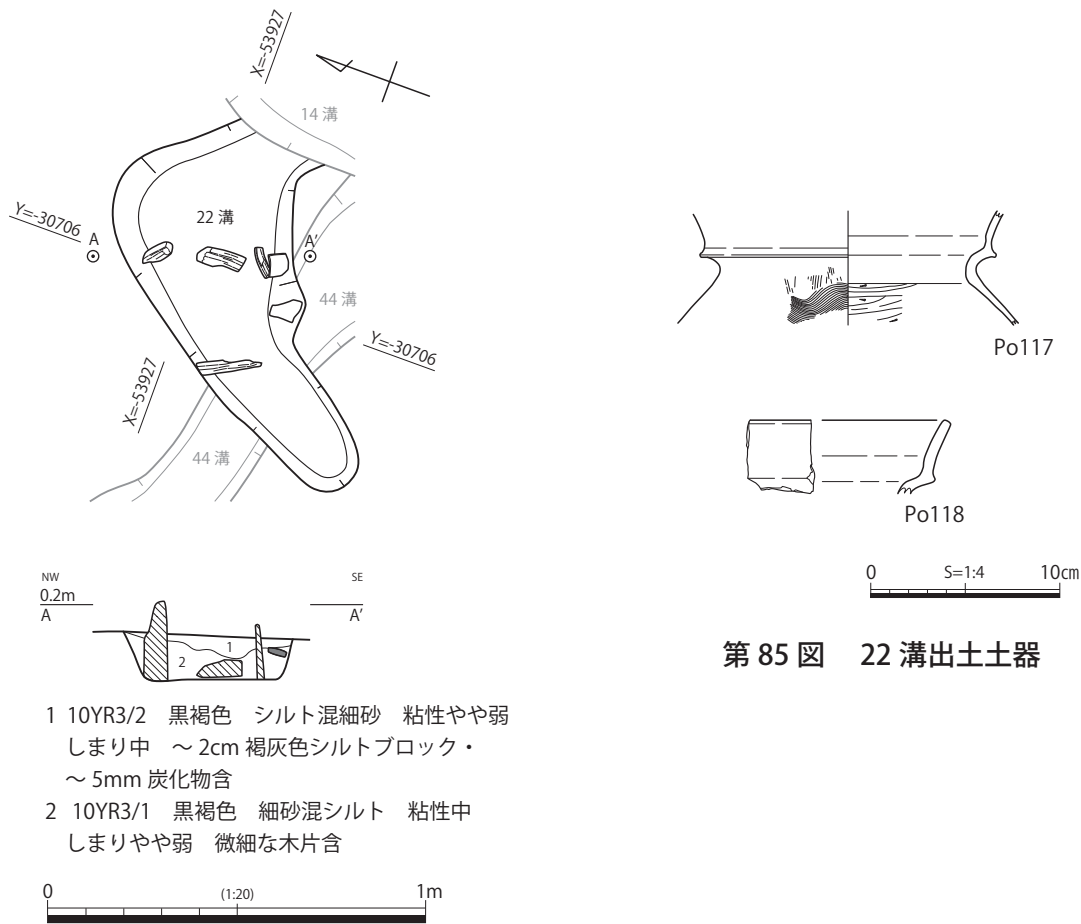
16 溝は平地建物 2SD 2 から 0.41 m 離れた位置でこれとほぼ平行する。検出面の標高は 0.16 m である。検出長 1.23 m、最大幅 0.29 m、検出面からの最大深 2 cm を測る。埋土は黒褐色シルト混細砂の単層である。

34 溝は平地建物 2SD 2 から 2.09 m 離れた位置でこれと平行し、平地建物 1SD 3 を切る。検出面の標高は 0.59 m である。調査区西端で西側に屈曲する可能性があるが、西壁の土層断面では確認されないため、規模は小さい遺構と判断できる。検出長 1.40 m、最大幅 0.27 m、検出面からの最大深 3 cm を測る。埋土は黄灰色および黒褐色のシルト混細砂の 2 層に分層できる。

③大きく湾曲する溝は①と同様、いずれも底面に打設された杭あるいは矢板が残存している。特に検出面において完存度の高い壺が出土した 14 溝については、平地建物の可能性は考えられるものの、断片的な検出に留まっており、これらに伴う柱穴や炉も確認できないため、溝として記載する。

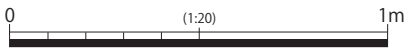
22 溝 (第 84 図)

調査区南側、標高 0.13 m 付近で検出した。ほぼ直角に屈曲する溝で、44 溝を切る。検出長 1.10 m、最大幅 0.50 m、検出面からの最大深 12 cm を測る。断面形は逆台形を呈し、黒褐色のシルトあるいは



第 85 図 22 溝出土土器

- 1 10YR3/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまり中 ～2cm 褐灰色シルトブロック・
～5mm 炭化物含
- 2 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性中
しまりやや弱 微細な木片含



第 84 図 22 溝 平面図・断面図

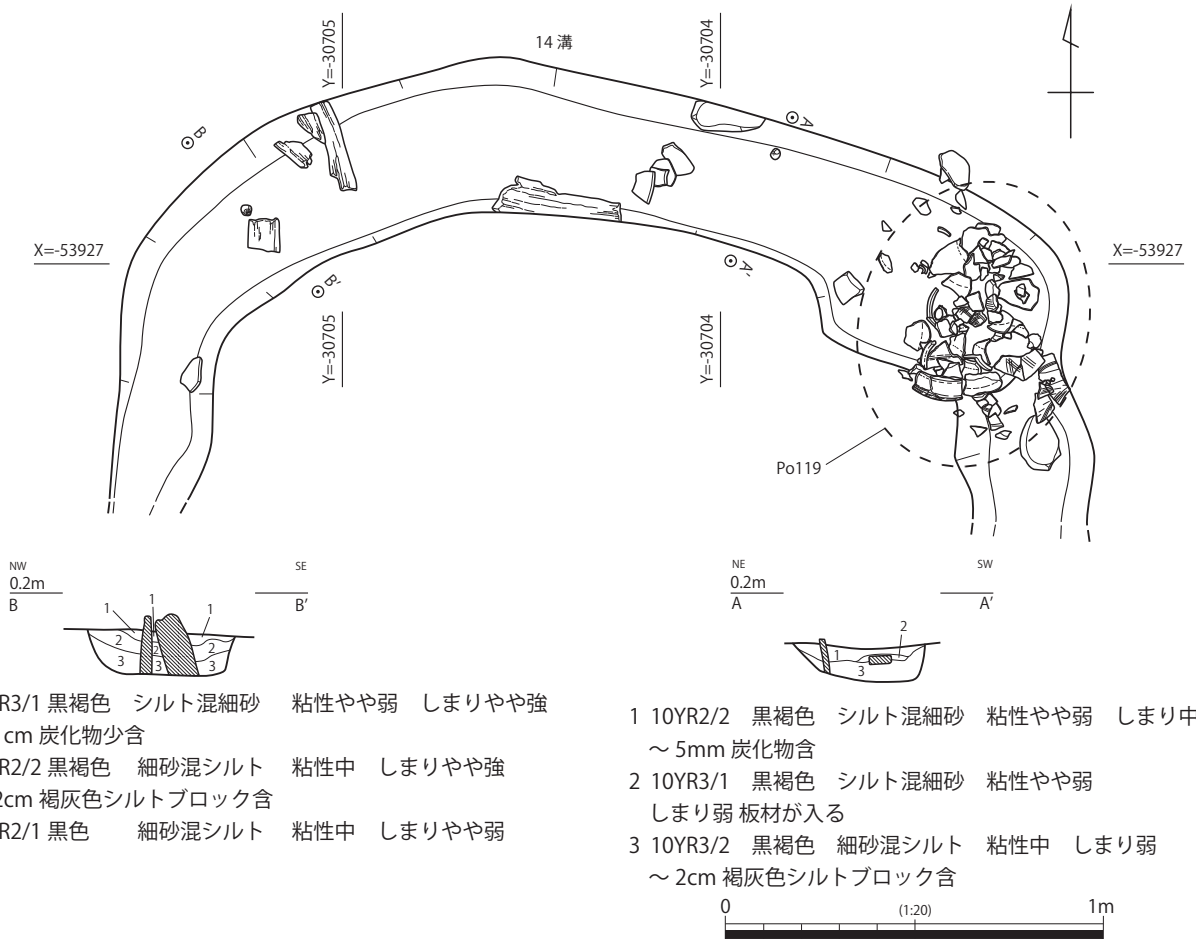
細砂を主体とする埋土は2層に分層できる。屈曲部の両肩付近に幅10cm程度の角材を素材とした杭が2本打設されている。

第85図は22溝から出土した土器である。Po117・118は甕である。Po117は器壁が薄く、複合口縁下端の突出は鋭い。肩部には波状文が巡る。古墳時代前期初頭～前葉に属するものとみられるがPo118はこれに比べ器壁が厚く、シャープさを欠く。これらは古墳時代前期前葉に属するとみられるが、Po117はやや古相を示す。

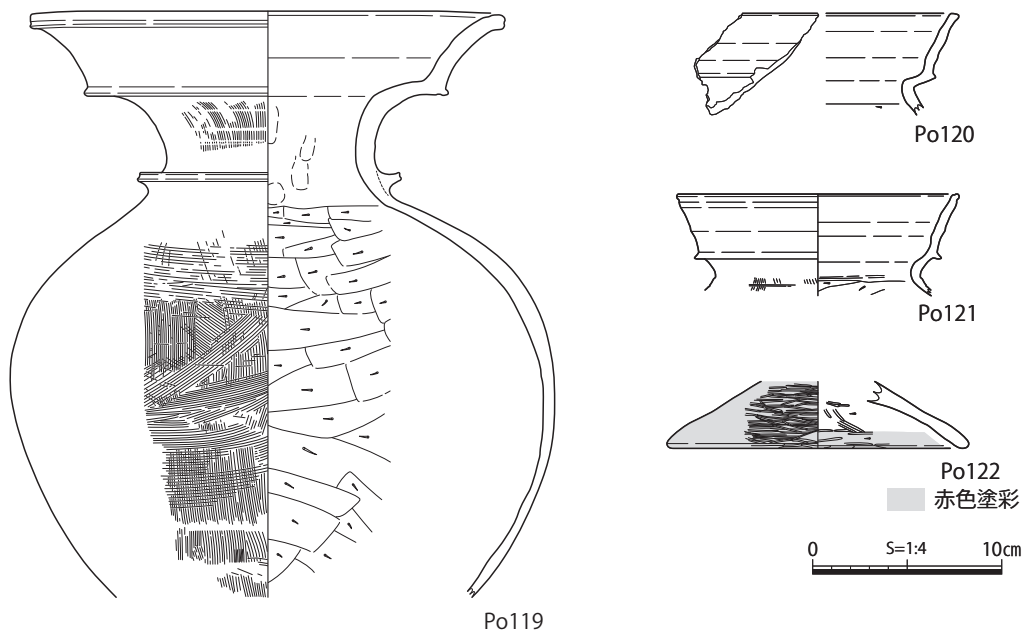
14 溝 (第 86 図)

調査区南側に位置し、標高0.10m付近で検出した。大きく湾曲する溝で、22溝、44溝を切る。検出長3.50m、最大幅0.51m、検出面からの最大深12cmを測る。断面形は逆台形を呈し、黒褐色シルト混細砂を主体とする埋土は3層に分層できる。西側の屈曲部付近には、幅3cmの棒材と、幅8cmの角材を用いた杭が近接して打設されている。また、それより1.41m東側には幅2cmの棒材を用いた杭が打設されている。東側の屈曲部の検出面では、残存度の高い壺Po119を検出した。

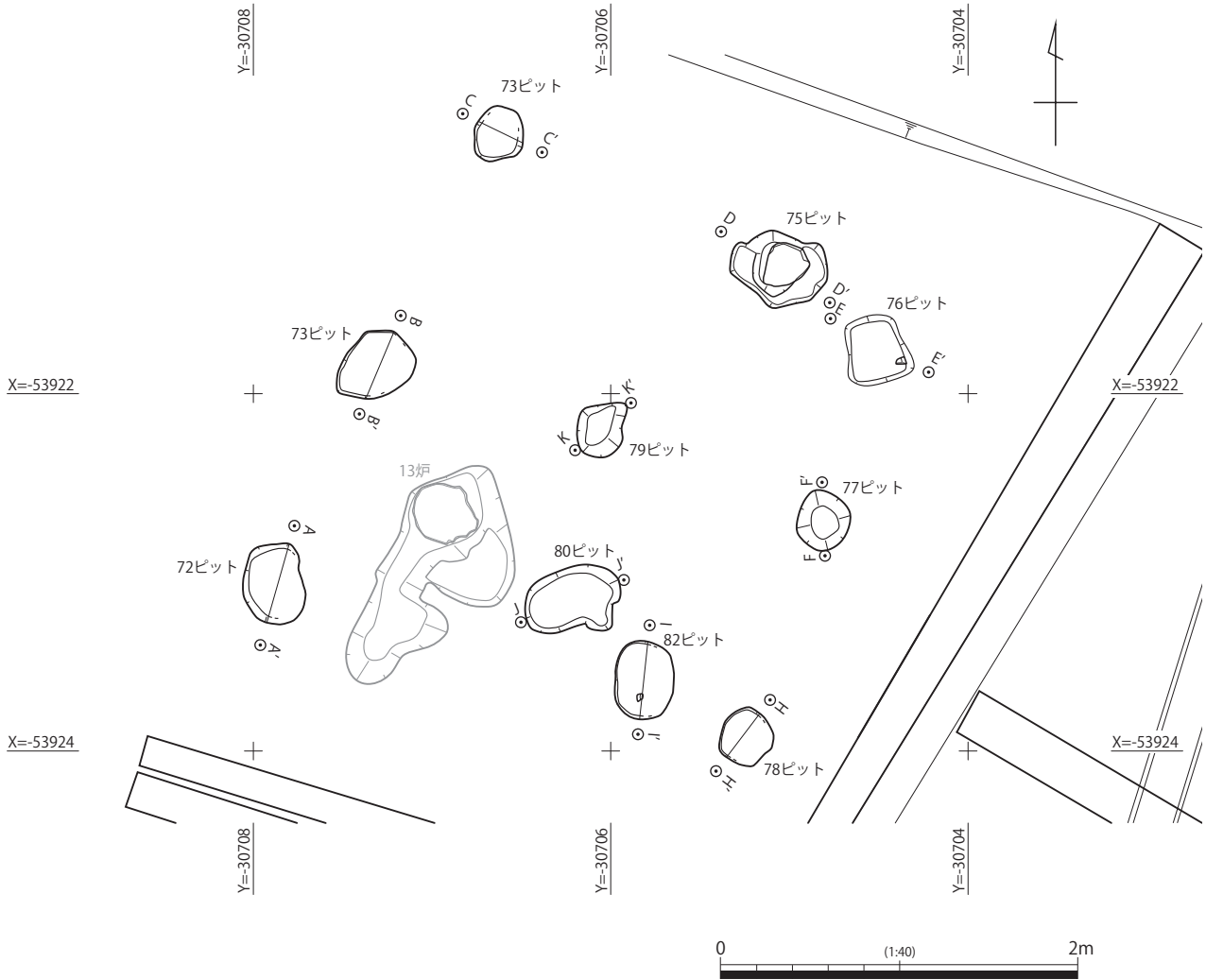
第87図は14溝から出土した土器である。Po119は壺である。大きく外反する複合口縁と、頸部下の突帯をもち、胴部は倒卵形を呈す。頸部および胴部はハケメで調整され、胴部のものは不定方向である。古墳時代前期前葉に属するものである。Po120・121は甕であり、いずれも口縁端部に平坦面をもつ。古墳時代前期初頭から前葉に属するものとみられる。Po122は弥生土器の蓋である。外面はミガキが頸



第86図 14溝 平面図・断面図



第87図 14溝出土土器



第88図 72～79・80・82ピット 平面図

著であり。外面全体及び内面裾部まで赤彩される。

(5) ピット (第88～91図)

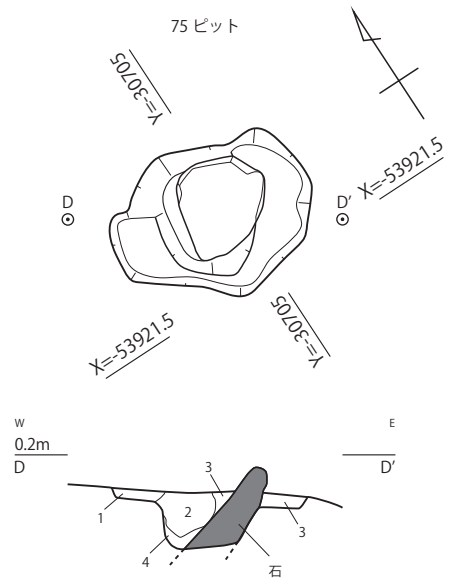
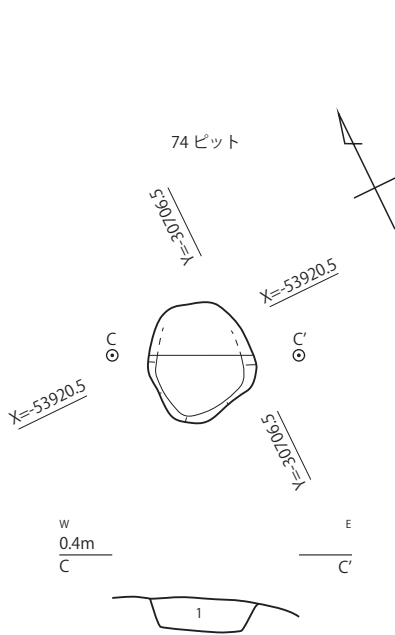
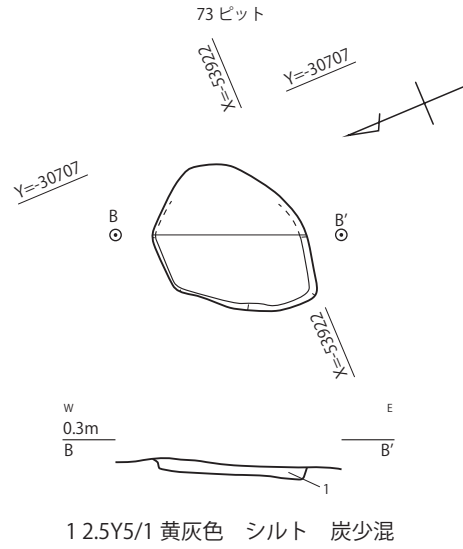
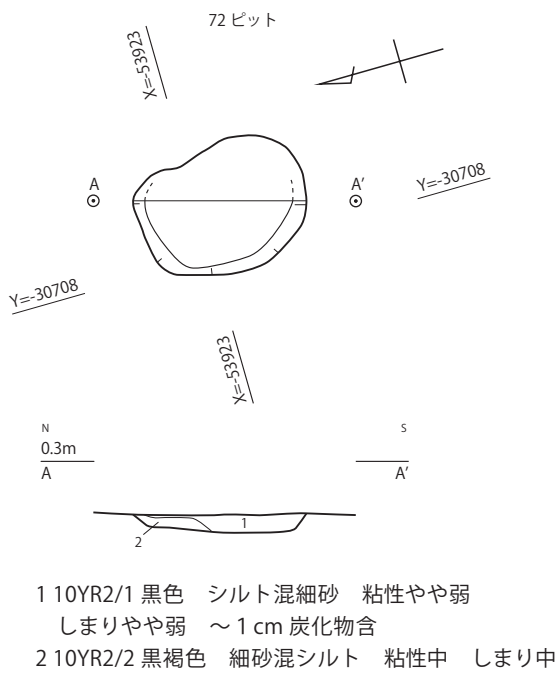
平地建物2の床面下で、10基のピット(72～80・82ピット)を検出した。これらの標高、計測値、特徴は第5表に示す。

72～74ピットの並びと76～78ピットの並びはほぼ同一方向(N-23°E)であるが、各ピットの間隔が前者は約1.3mであるのに対し、後者は約1.1mと差があり、側柱建物を構成する考えると考えるには配置が歪である。

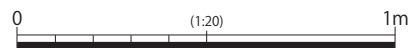
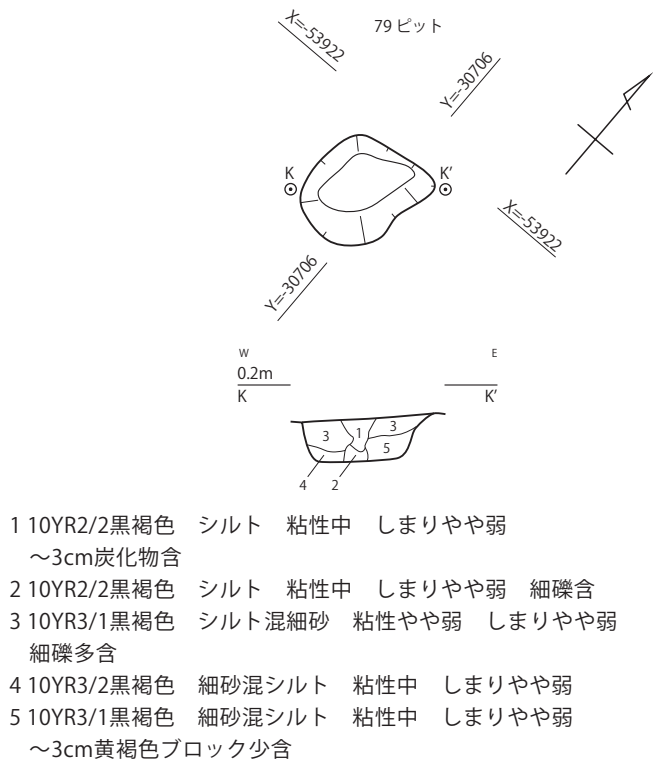
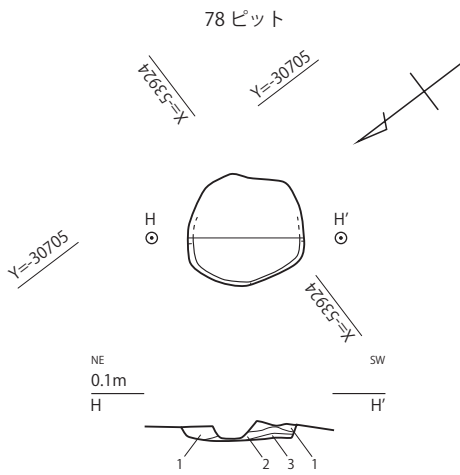
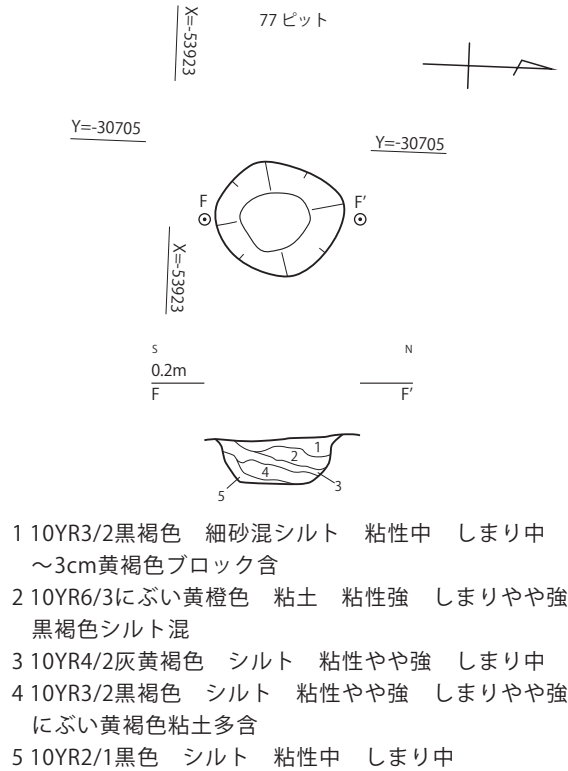
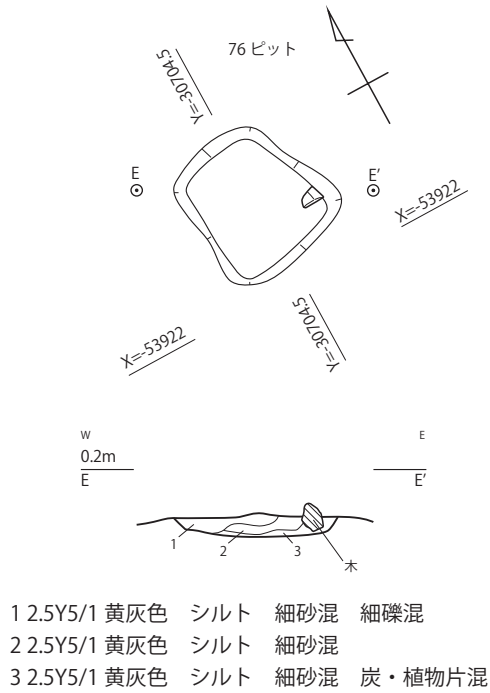
73ピットと77ピットのほぼ中間部分に79ピットが位置する点は注目されるが、75・80ピットは総柱建物を構成する位置にはない。75ピットで幅24cmを

第5表 ピット計測表

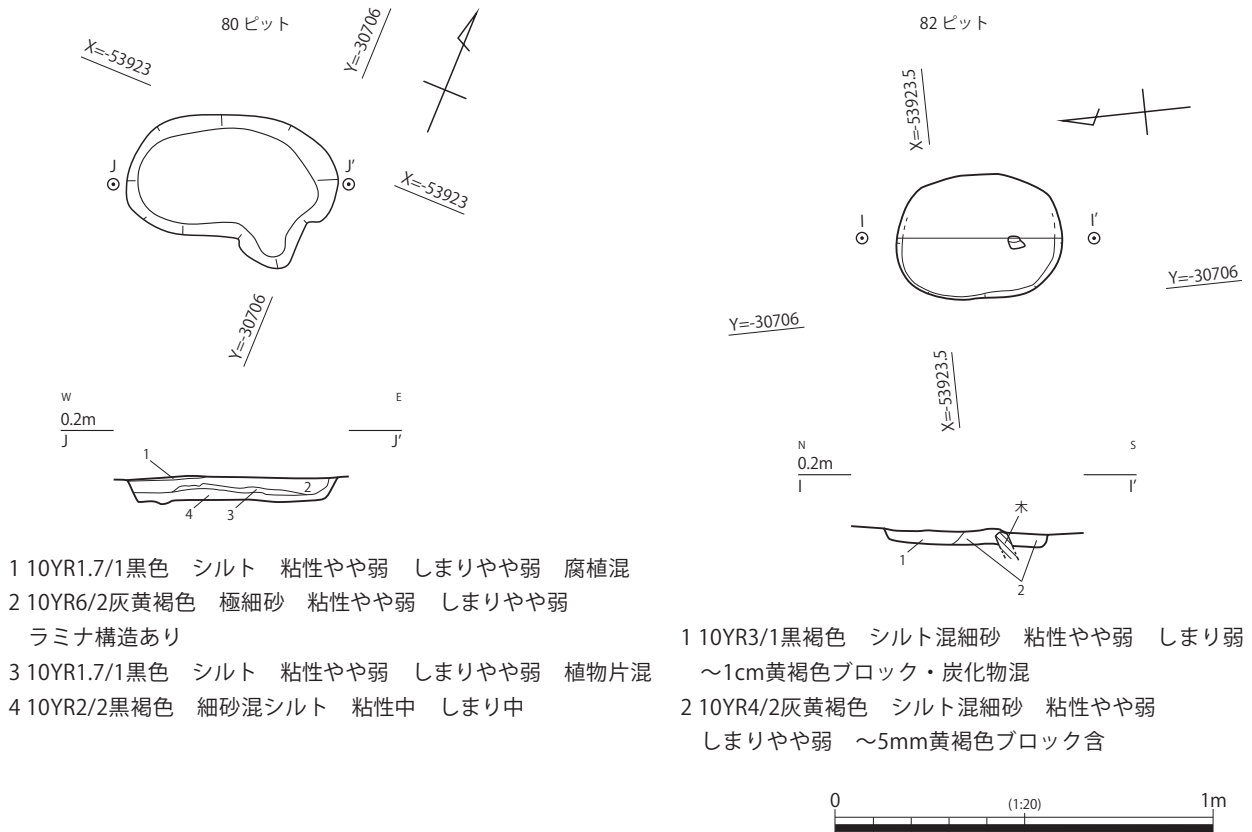
	平面規模 (m)	深さ (cm)	備考
72ピット	0.46 × 0.37	5	
73ピット	0.47 × 0.36	4	
74ピット	0.33 × 0.29	9	
75ピット	0.54 × 0.44	15	礫出土
76ピット	0.39 × 0.37	6	
77ピット	0.34 × 0.31	12	
78ピット	0.31 × 0.3	5	
79ピット	0.36 × 0.3	11	柱痕あり
80ピット	0.56 × 0.4	6	
82ピット	0.44 × 0.33	4	



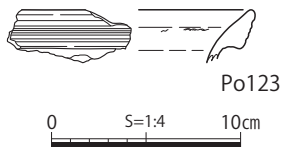
第 89 図 72 ~ 75 ピット



第90図 76~79ピット



第91図 80・82ピット



第92図 82ピット出土土器

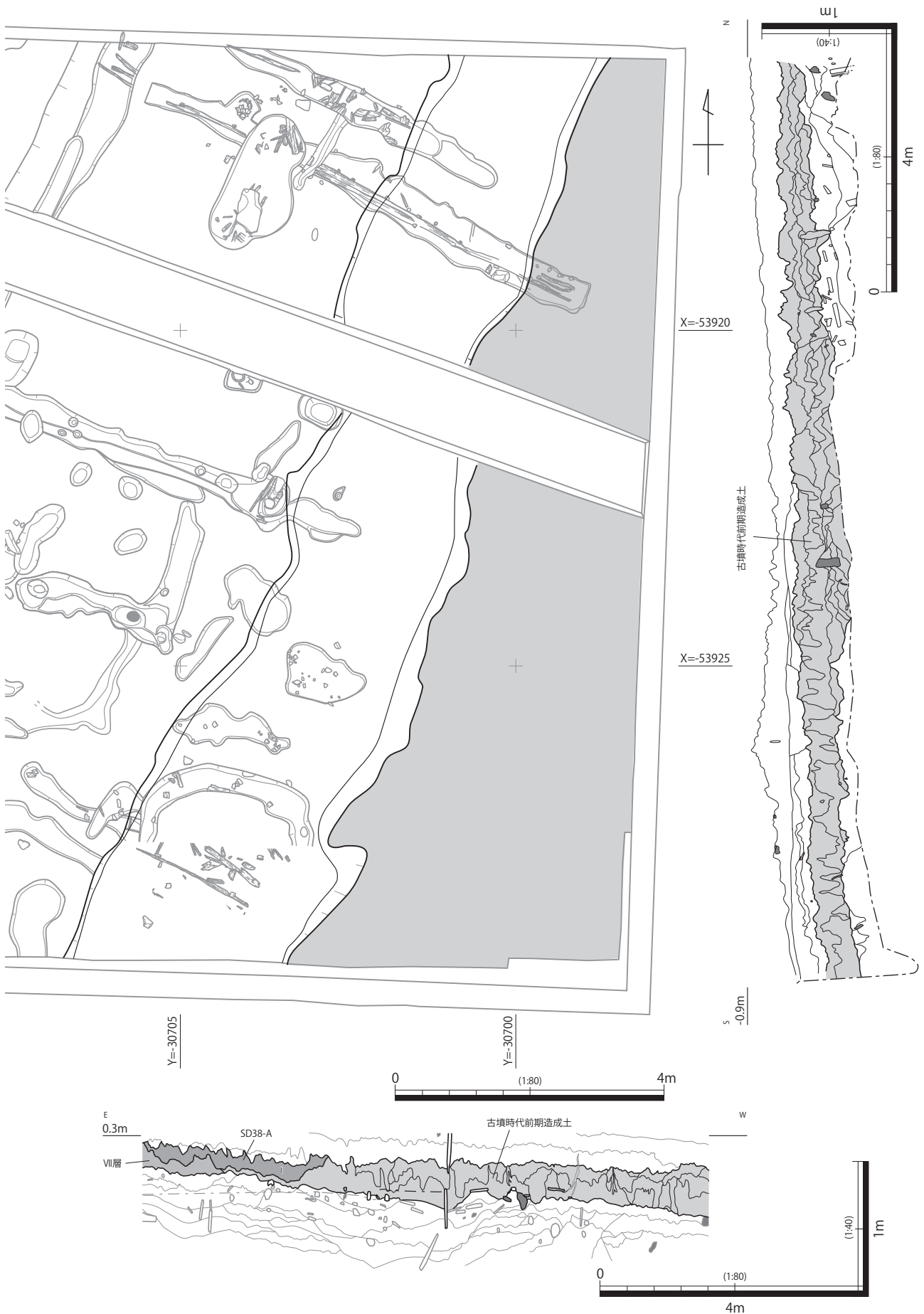
測る礫を検出したこと、79ピットの土層断面で柱痕が認められる点は特筆されるが、これらのピットは上記のような配置から建物跡と評価しがたい。

第92図に示したのは82ピットから出土した土器である。弥生時代後期前葉の特徴を示す甕の口縁部片であるが、Ⅶ層を掘り込む検出状況から、82ピットはじめ、これらの遺構は古墳時代前期前葉に属すものと考えられる。

(6) SD38-A・古墳時代前期造成土 (第93図)

SD38-Aは、調査区南壁中央付近から北壁東よりにかけて、南北方向(N-20°-E)に走る溝として検出した。Ⅶ層下面で検出した平地建物を中心とする遺構群に切られる。検出面の標高は0.1~0.3mである。検出長14.4m、最大幅3.48を測る。護岸等は設置されておらず、断面は浅い皿状を呈す。検出面からの最大深12cmを測る。埋土は黒褐色細砂混シルトを主体とする。

古墳時代前期造成土は、SD38-Aから東側において面的に捉えられた褐灰色粘質シルトを特徴的に



第93図 SD38-A、古墳時代前期造成土

含む造成土を遺構として記載するものである。調査区東壁においては土手状堆積を含む、複雑な堆積状況を呈しており、これが調査区東側をかさ上げた造成土であることが見て取れる。さらに、調査区南壁土層断面では、Ⅶ層→古墳時代前期造成土→SD38-A という堆積の順序を確認した。Ⅶ層は基本層序における大別層として記載しているものの、古墳時代前期初頭～前葉の造成土であり、調査区西側を中心とする堆積範囲から中心域の拡張を意図したものであることが明らかである。SD38-A はこの東西の造成によって生じた窪地を埋め平坦な土地とした最終工程の造成土を平面的に捉えたものと考えられる。Ⅶ層、古墳時代前期造成土、SD38-A といった記載が、一連の造成の工程を捉えたものに過ぎないことは、出土する土器に時期差がないこと、平地建物をはじめとする古墳時代前期前葉の遺構群に、SD38-A あるいは古墳時代造成土の堆積前に掘りこまれたものがないことから裏付けられる。

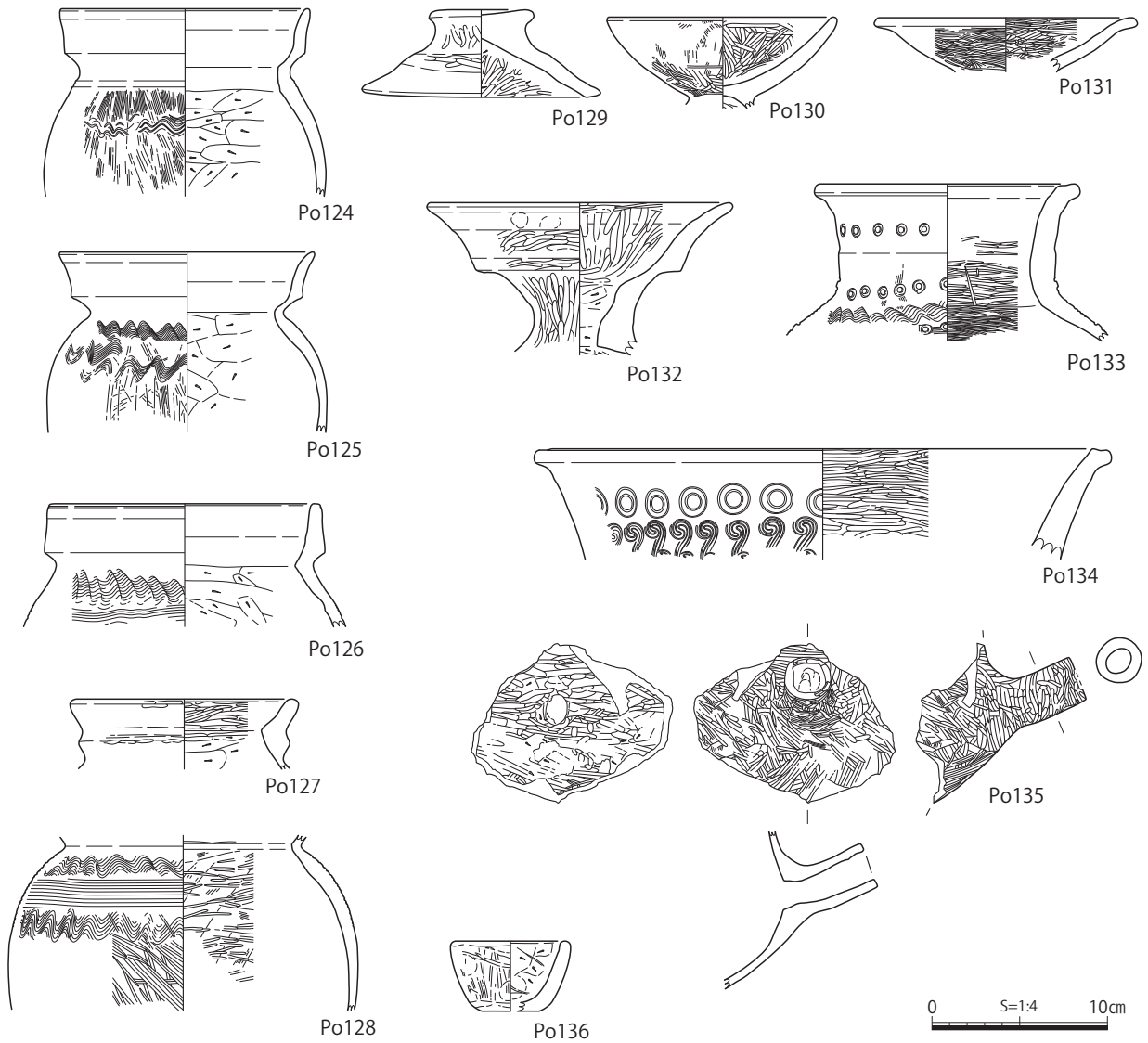
このように盛土によって生じた窪みを埋めて平坦な土地を造成する工法は、中心域北側を対象とした第18次発掘調査においても確認されており、当遺跡の古墳時代前期の段階において普遍的な造成工法であったことが窺える。

第94・95図はSD38-A から出土した土器である。

第94図はそのうち、弥生時代後期～終末期に属するものである。Po124～128は甕である。Po124・125は外反する無文の複合口縁をもつものである。Po124は肩部に1単位の波状文が巡り、胴部は縦方向のハケメで調整される。胴部内面のケズリは左方向を主体とする。Po125は肩部に3単位の波状文が巡る。頸部下内面のケズリは右方向である。Po126は器壁がやや厚く内傾する複合口縁をもち、肩部には押引文と平行沈線が巡る。胴部内面のケズリは左方向である。Po127は口縁部は器壁が厚く、短く外傾して立ち上がる。口縁部内面はミガキで調整される。胴部内面のケズリは右方向である。Po128は肩部に平行沈線を挟んで2単位の波状文が巡る。胴部内外面ともミガキで調整されるが、内面はハケメの痕跡を残す。Po129は蓋である。幅広のつまみ部をもち体部は直線的に広がる。内外面ともミガキで調整される。Po130・131は低脚坏である。Po130はやや内湾して立ち上がる坏部の内外面はミガキで調整されるが、外面はハケメを残す。Po131は坏部の立ち上がりは緩く、口縁部はさらに外反して外方に伸びる。内外面ともミガキで調整される。Po132は器台である。外面全体と受部内面はミガキで調整される。Po133・134は直口壺である。Po133は口縁端部は外側に折れ曲がり、頸部は2列の竹管文が、肩部は波状文、平行沈線後竹管文で加飾される。頸部内面は横方向のミガキで調整される。Po134は大型のもので 頸部は同心円文、渦巻き文で加飾される。内面はミガキで調整される。Po135は注口土器である。内外面ともミガキで調整され、内面にはケズリの痕跡を残す。Po136は鉢である。小型のもので、台形の側面観を呈す。外面はハケメ、内面はケズリで調整される。

第95図はSD38-A から出土した土器のうち、古墳時代前期初頭～前葉に属するものである。Po137～143は甕でいずれも口縁部外面は無文である。また、口縁端部の平坦面が明瞭であるものが多く、Po137を除き、胴部内面のケズリは方向を主体とする。

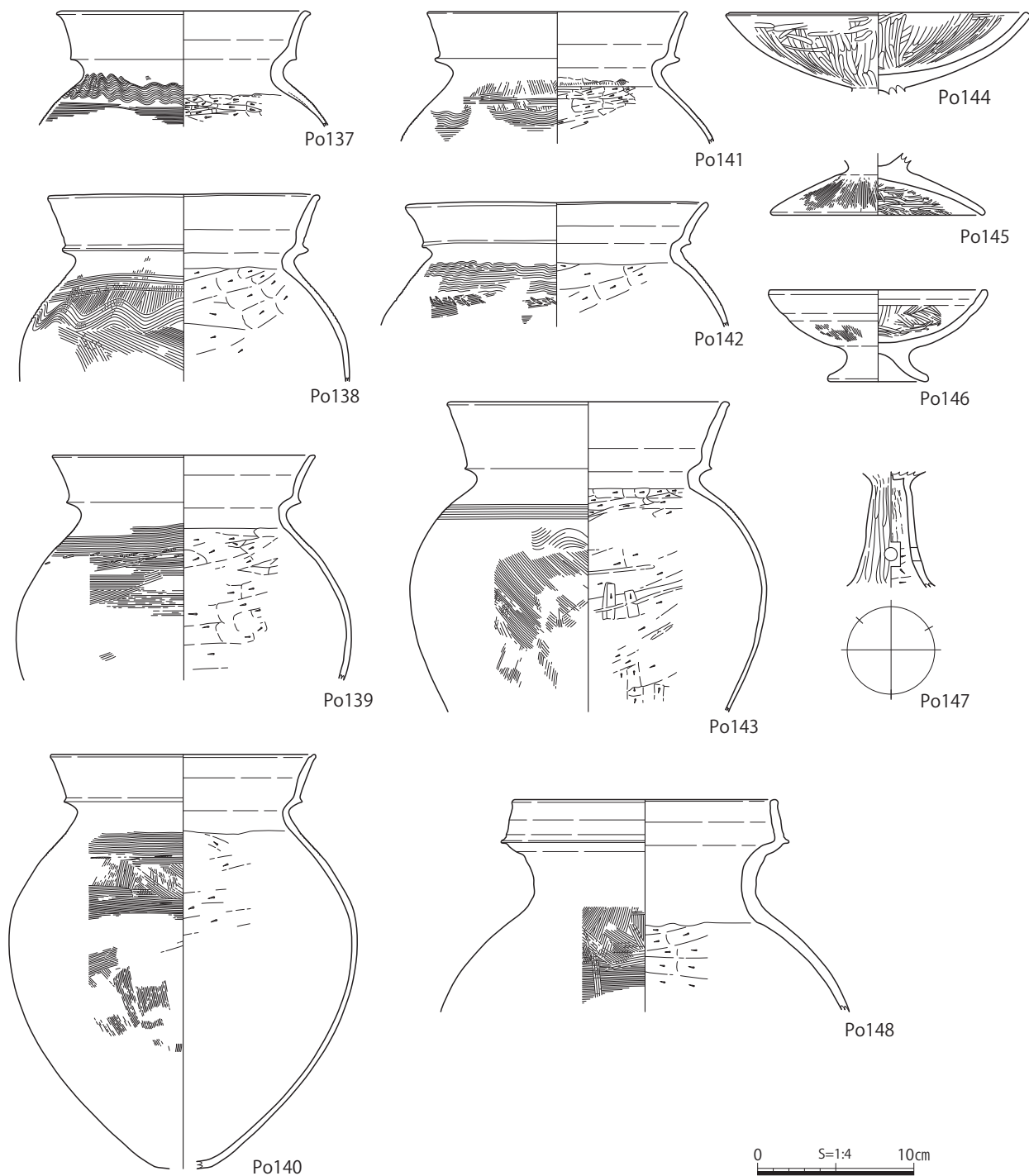
Po137の口縁端部はナデによって外方に折れ曲がる。頸部から肩部外面は櫛状工具による波状文と平行沈線が施される。胴部内面のケズリは左方向である。Po138の口縁部は端部がナデによって玉縁状を呈し、下端の突出は明瞭である。肩部には櫛状工具による平行沈線と波状文が施される。外面のハケメは肩部で縦方向、胴部で斜め方向である。Po139は口縁端部の平坦面が明瞭である。肩部に横



第94図 SD38 - A 出土土器 (1)

方向のハケメと刺突文が施される。Po140 の口縁端部はナデにより段状となる。胴部は最大径を中位よりやや上にもつ倒卵形を呈し、底部は痕跡的である。肩部外面には2単位の横ハケと、1列の刺突文によって加飾される。胴部下半のハケメは縦方向を主体とする。Po141 は口縁部下端の突出が鋭い。胴部外面にいずれも櫛状工具による平行沈線とピッチの緩い波状文が施される。Po142 の口縁部は傾きが大きく、立ち上がりが低い。肩部外面には複数単位の波状文と1列の刺突文が施されるが、波状文のピッチは非常に緩い。Po143 は肩部に櫛状工具による平行沈線と波状文が施される。

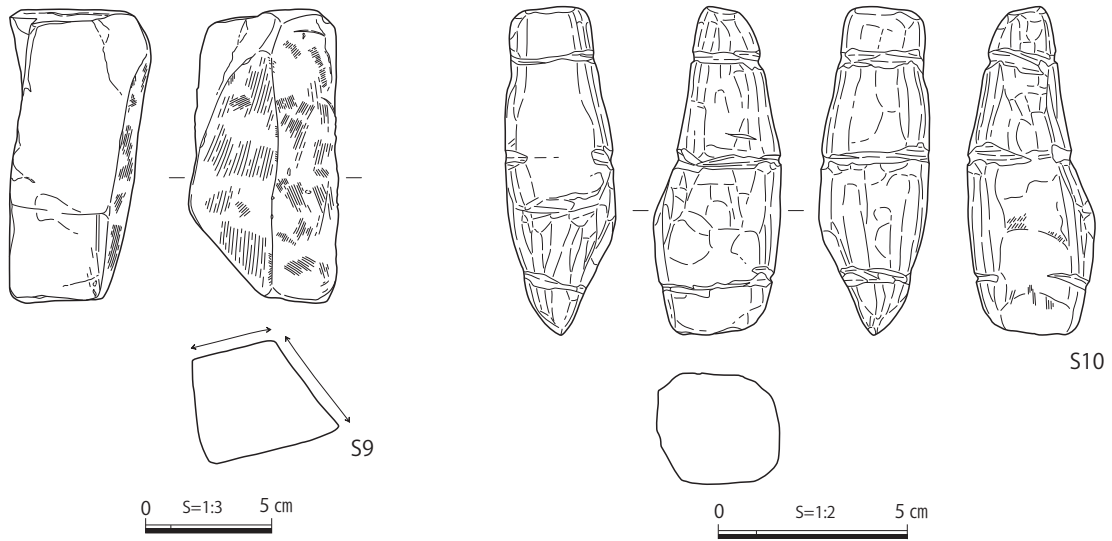
Po144 ~ 146 は低脚坏である。Po144 は大型のもので坏部内外面とも縦方向を主体とするミガキで調整される。Po145 の坏部は直線的に立ち上がり、外面は縦方向のハケメ、内面はハケメのち横方向のミガキで調整される。Po146 の坏部は塊状であり、外面は縦方向のハケメ、内面は不定方向のミガキで調整される。Po147 は高坏の脚柱部であり、3方向の円孔が穿たれる。外面は縦方向のミガキで調整される。Po148 は内傾する複合口縁をもつ壺である。口縁部下端の突出は鋭く、胴部外面のハケメは不定方向である。



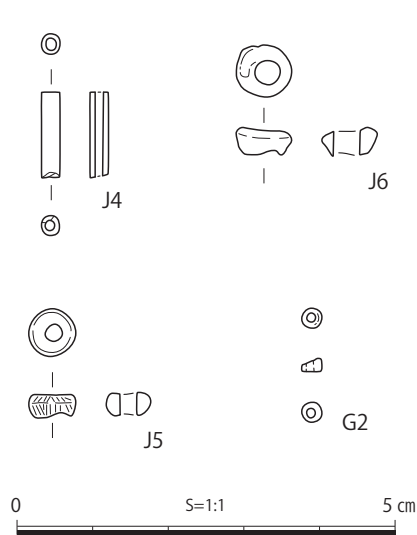
第95図 SD38-A 出土土器（2）

第96図はSD38-Aから出土した石器である。S9は砥石である。断面台形に成形され、2面に使用痕を残す。S10は石錘である。横方向に3条の溝が巡り、一部に成形時の擦痕が残る。

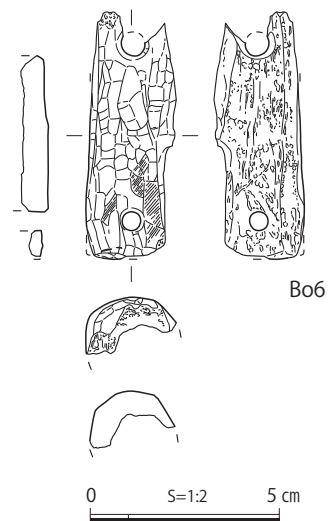
第97図にはSD38-Aから出土した玉類を示した。J4は長幅比5：1となる碧玉製の管玉である。J5・6は滑石性の白玉で、研削によって側面に稜を作出する。G2はガラス玉で、濃青色を呈す。



第 96 図 SD38 - A 出土石器



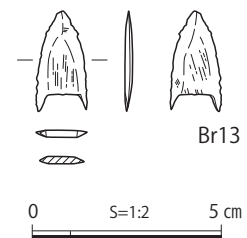
第 97 図 SD38 - A 出土玉類



第 98 図 SD38 - A 出土骨角器

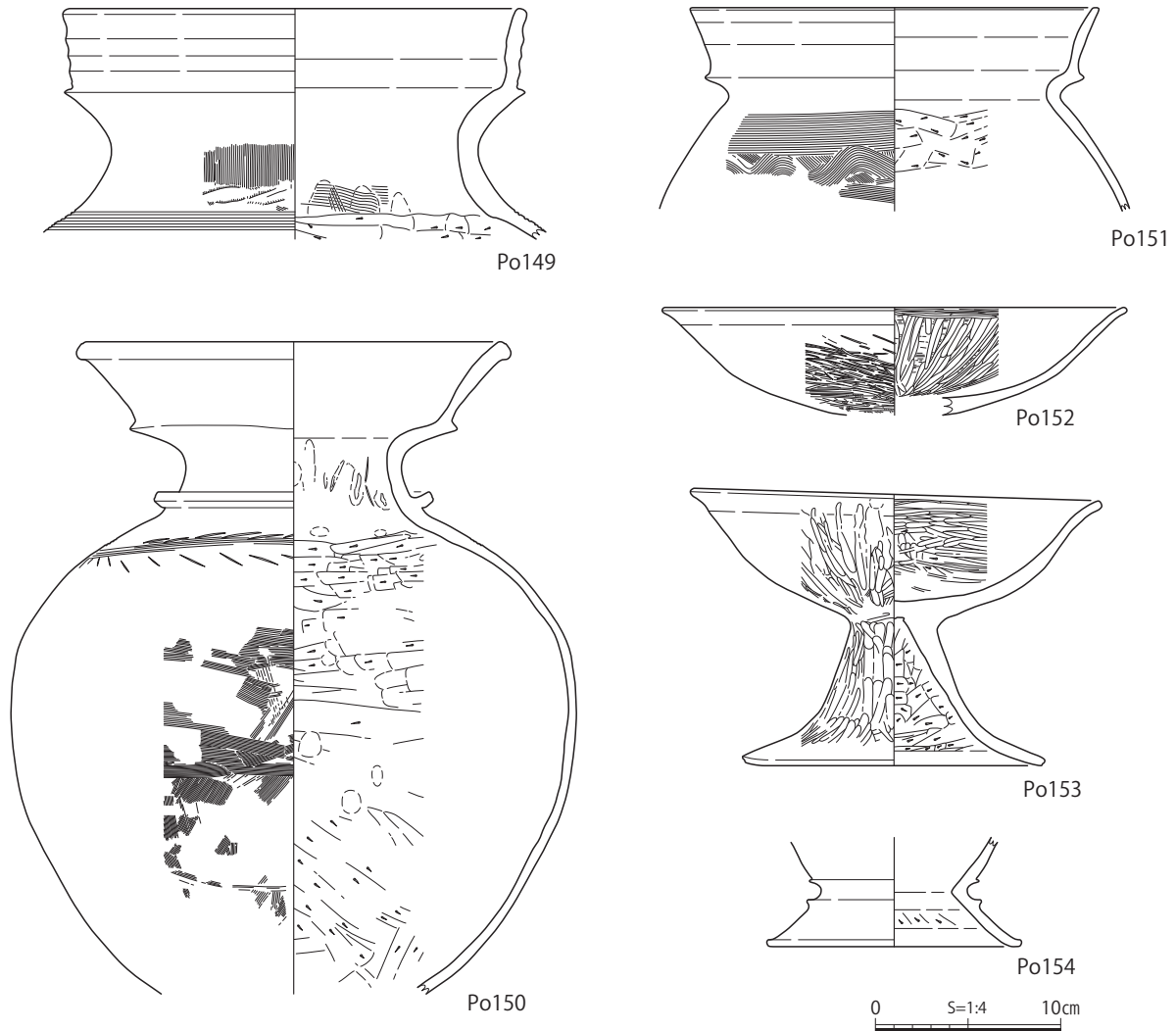
第 98 図には SD38-A から出土した骨角器 Bo 6 を示した。鹿角を素材としており、主に切削によって表面を成形し、上下端付近に円孔を穿つ。柄の可能性はある。

第 99 図に示した Br13 は SD38-A から出土した銅鏃である。凹基式の無茎鏃である



第 99 図 SD38 - A 出土金属器

第 100 図は古墳時代前期造成土から出土した土器である。Po149・150 は壺である Po149 はほぼ直立して立ちあがる



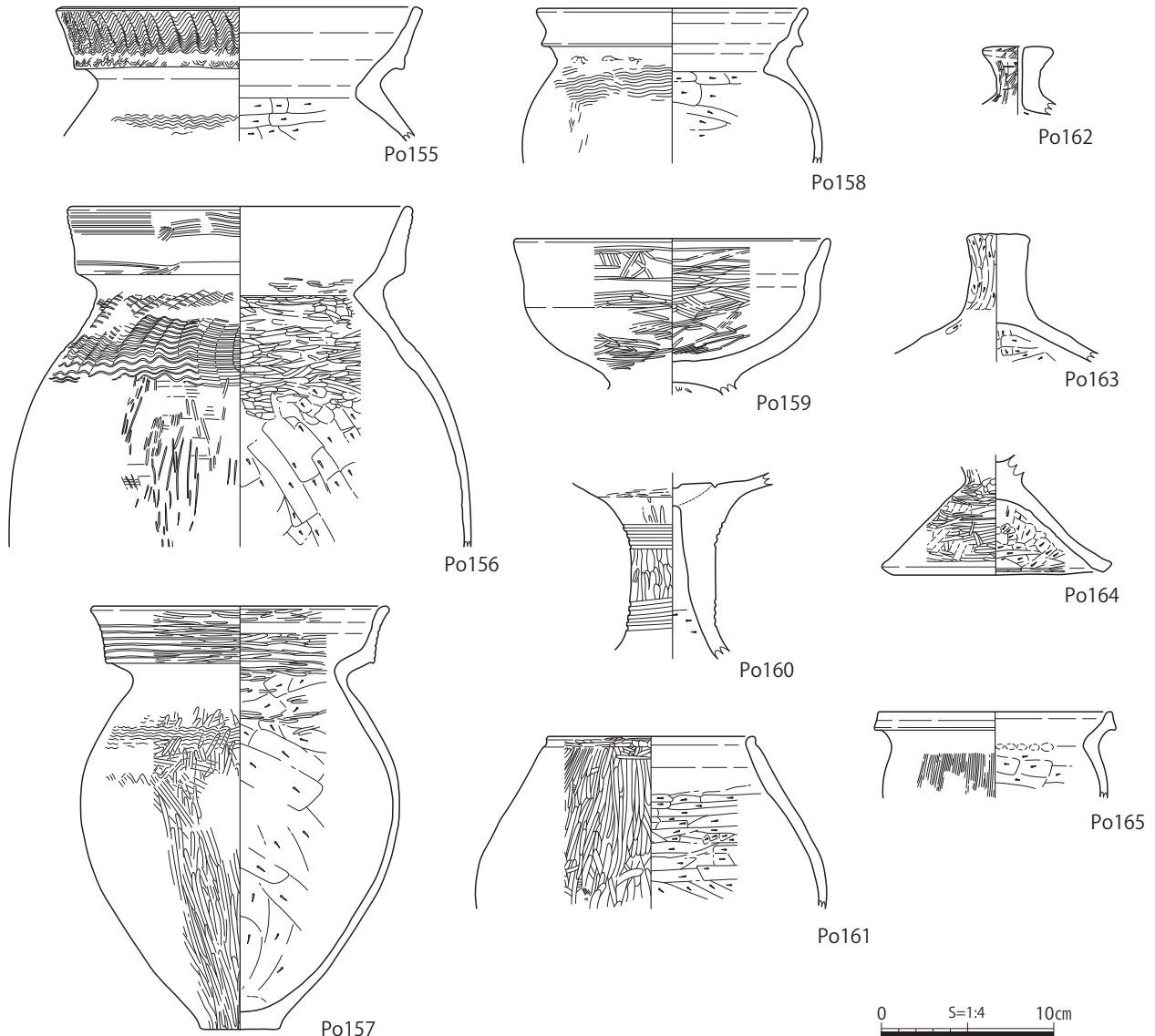
第100図 古墳時代前期造成土出土土器

複合口縁をもち、肩部には平行沈線が巡る。Po150は頸部に突帯をもつ。肩部外面には沈線と刺突文による羽状文が施される。胴部外面のハケメは不定方向である。頸部内面には絞りの痕跡を残し、胴部上半内面のケズリは右方向である。

Po151は甕である。複合口縁の端部は面取りされ、肩部には平行沈線と波状文が施される。胴部内面のケズリは右方向である。Po152・153は高坏でやや外反する口縁部をもつ。Po152は口径24.8cmを測る大型のものであり、器壁は薄い。坏部外面は細かい横方向のミガキで、内面は縦方向のミガキで調整される。Po153は口径21.8cmを測り、Po112よりも坏部の器高が高く、器壁がやや厚い。ハの字に開く脚部をもつ。外面全体が縦方向のミガキで調整される。脚部内面のケズリは左方向である。

Po154は鼓形器台である。受部に比べ脚部が低い器形とみられる。

Po152が古墳時代前期初頭に属すほかは、これらの土器は古墳時代前期前葉の範疇で捉えられるものである。



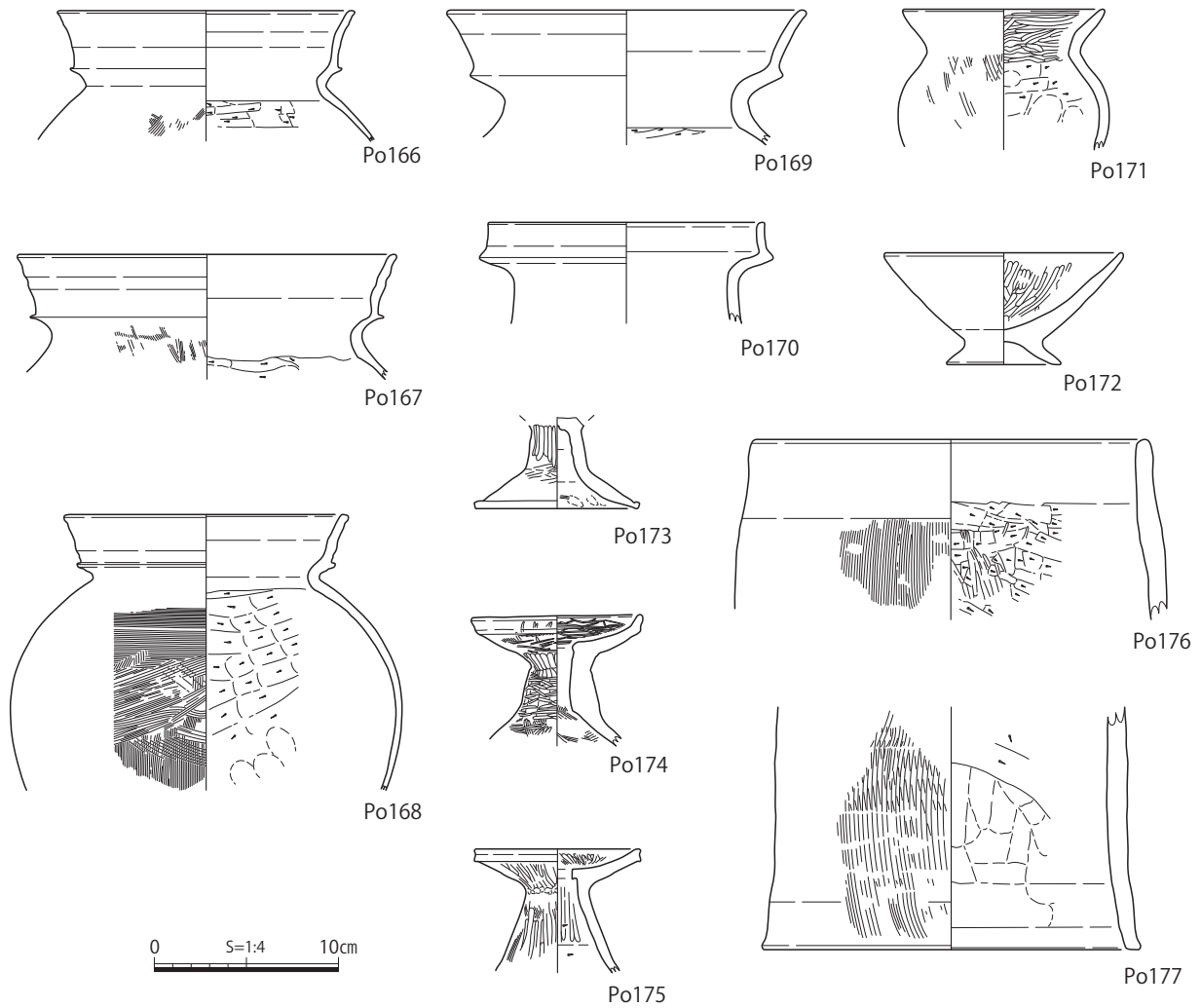
第 101 図 VII層出土土器

第9項 VII層出土遺物（第 101～107 図）

第 101・102 図には土器を示した。

第 101 図は、弥生時代に属するものである。Po155～158 は複合口縁をもつ甕である。Po155 は口縁部および肩部の外面に波状文が施され、胴部内面のケズリは右方向である。Po156 は口縁部外面の平行沈線が一部ナデ消されている。頸部から肩部外面には押引文が施される。胴部外面はハケメのち縦方向のミガキによって調整される。内面の調整は胴部下半は左斜方向のケズリであるが、胴部上半から頸部は横方向のミガキである。Po157 は倒卵形を呈す胴部と明瞭な底部をもつ。口縁部に平行沈線、肩部に上下幅の狭い波状文が巡る。胴部外面は全体的にミガキで調整されており、胴部内面はケズリによって調整されているが、口縁部以下のミガキが上半まで及ぶ。Po155～157 は弥生時代後期後葉に属す。

Po158 の複合口縁は立ち上がりが低く、無文である。肩部外面にはピッチの緩い波状文が巡る。胴

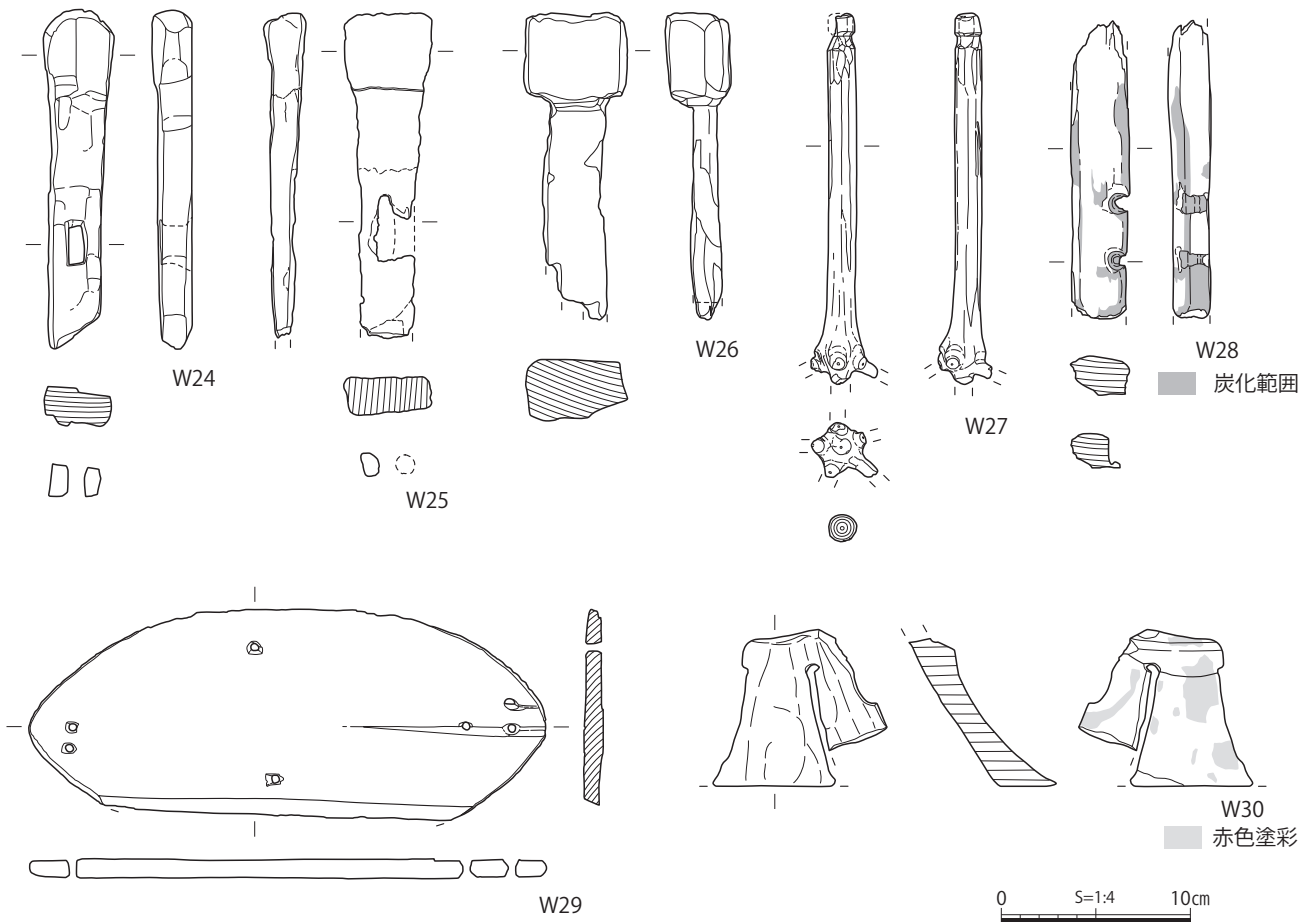


第 102 図 VII層出土土器

部内面のケズリは左方向である。Po159・160は高坏である。Po159は塊状の坏部をもつ北近畿系の高坏である。内外面ともミガキで調整される。Po160は坏部底面を円盤充填によって作出する。脚柱部には4条1単位の平行沈線が2単位巡る。Po161は無頸壺である。胴部上半は内傾し、口縁端部はナデによって玉縁状を呈す。外面は縦方向のミガキ、内面は右方向のケズリで調整される。Po162～164は蓋である。Po162は断面逆台形を呈すつまみ部の上下を円孔が貫通する。棒を通して成形されたとみられる。Po163は円柱状のつまみ部をもつ。つまみ部外面と体部内面はケズリで調整される。Po164はつまみ部を欠損する。天井部から直線状に開く体部をもつ。外面はミガキ、内面はケズリで調整される。Po165は甕である。内傾して短く立ち上がる複合口縁と肩の張らない胴部をもつ。

第102図は、古墳時代前期初頭～前葉に属するものである。

Po166～168は甕であり、いずれも口縁端部に平坦面をもち、胴部内面のケズリは右方向である。Po166は口縁部下端の突出が鋭い。Po167は口縁部下端の突出が明瞭である。Po168は肩部に横方向のハケメが施される一方、胴部のハケメは不定方向である。胴部下半内面には指頭圧痕が残る。Po169・Po170は壺である。Po169は外反する複合口縁をもち、胴部内面のケズリは右方向である。Po170は短く内傾する複合口縁をもつものである。Po171は単純口縁をもつ小型の壺で、胴部外



第 103 図 VII層出土木器

面はハケメ、口縁部内面はミガキで調整される。Po172 は低脚坏である。直線的に立ち上がる坏部をもち、器高は高い。坏部内面は縦方向を主体とするミガキで調整される。Po173 は高坏である。円柱状を呈す脚柱部から屈曲してハの字状に開く脚裾部をもつ。Po174・175 は小型器台であり、いずれも皿状の受部をもつ。Po174 は器壁が厚く、受部から短く立ち上がる口縁部をもつ。外面全体と受部内面はミガキで、脚裾部内面はハケメで調整される。Po175 は受部の立ち上がりは直線的で、明確な口縁部をもたない。脚部はハの字状に開くとみられる。受部と脚部の接合箇所内面に段をもつ。ほぼ全面がミガキで調整されるが、脚部にケズリの痕跡を残す。Po176・177 は山陰型甌形土器である。Po176 の体部は外面が縦方向のハケメで、内面が左方向を主体とする細かい単位のケズリで調整される。Po177 の外面は縦方向の粗雑なハケメで調整される。内面はナデによる調整が優勢であるが、一部ケズリの痕跡を残す。

第 103 図には木器を示した。

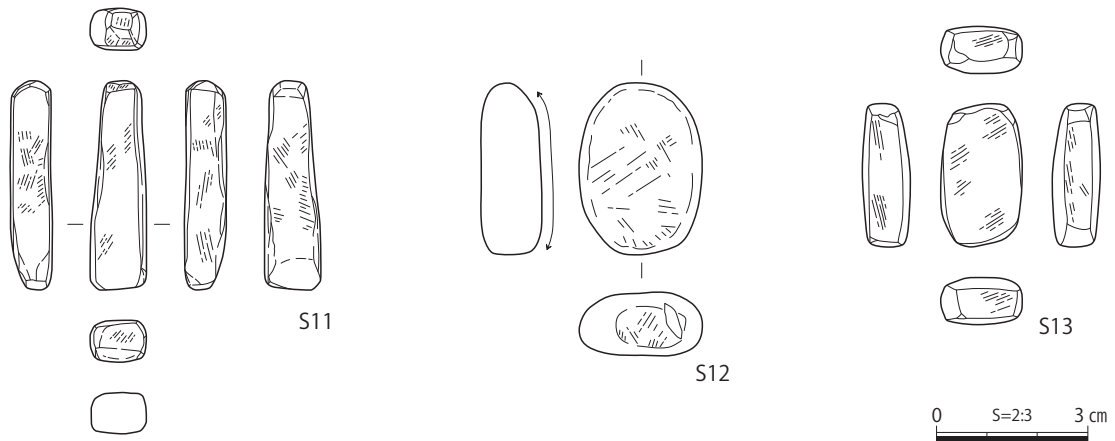
W24～26 は栓である。いずれも軸部に穿孔がなされる。W24・25 は上端部と軸部との境に明瞭な段をもたない。W24 の平面形は上端部が半円形に、軸部下端は斜め成形されている。W26 の上端部は平面方形を呈し、段によって軸部と画される。W27 は不明木器である。自在鉤に類似するが、下端で分岐する枝は下方に向け放射状に広がっており、物を吊り下げることができなかったと思われる。

W28 は火鑽臼である。右側辺に2か所の座が残存する。この座と中心に被熱による黒化が認められる。

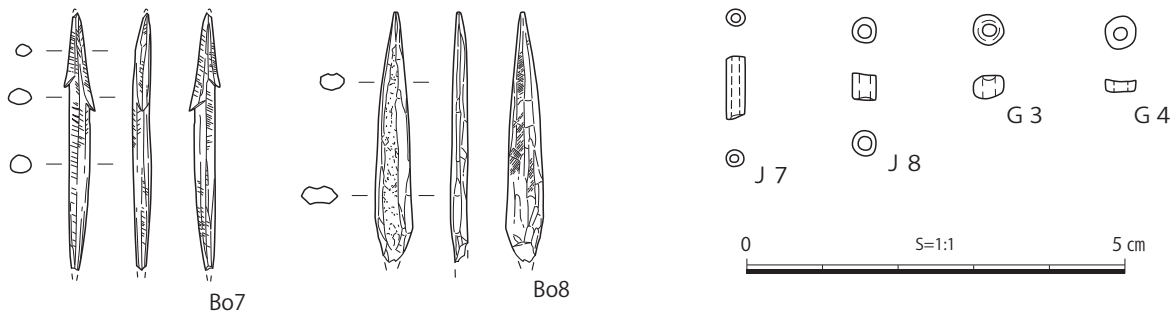
W29は蓋である。杏仁型の平面形を呈す。当遺跡でこれまで出土している同形の蓋とは異なり、稜は持たない。長軸方向の側縁付近には対になる穿孔が、短軸方向の側縁には単独の穿孔がなされる。

W30は高杯の脚部である。ハの字状に広がる裾部をもつものとみられ、1条のスリットが残存する。外面の一部に赤彩が残存する。

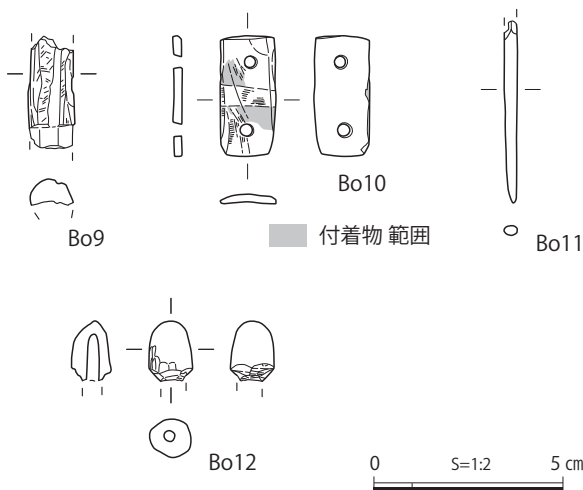
第104図は不明石器である。S11は角礫を素材とし、研削によって断面方形を呈す棒状に成形される。S12は楕円礫を素材とし、正面と下面に擦痕が残る。S13は砂岩の円礫を研削により平・断面とも隅丸長方形に成形している。



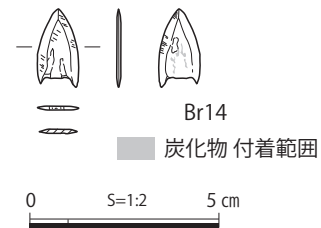
第104図 VII層出土石器



第105図 VII層出土骨角器



第106図 VII層出土玉類



第107図 VII層出土金属器

第105図には骨角器を示した。Bo 7はヤスである。やや反りのある体部の両側縁にカエシを1つずつもち、基部は先細りになる。断面は楕円形を呈し、表面には整形時の研削痕を多く残す。Bo 8は大型獣の長管骨を素材とした骨鏃である。基部付近に最大幅をもつ柳葉形を呈す。Bo 9は不明骨角器である。断面不整円形の棒状に成形されているとみられ、残存部下端付近に段をもつ。Bo10は有孔骨製品であり、素材を長方形の板状に加工し、上下2か所に円孔を穿つ。中央付近を横断して緊縛していたとみられ、表面に残された黒色の付着物がその部分だけ抜けている。Bo11は簪とみられる。先細りの形状で、断面は楕円形を呈す。Bo12は不明骨角器である。上端は丸く成形されており、下方から貫通しない円孔が穿たれている。ソケット状のものだった可能性があるが、側面からの切り込みによって破断されている。

第106図には玉類を示した。J 7・8は管玉である。J 8碧玉製であり、J 7は緑色凝灰岩製の短いものである。G 3・4はガラス製の小玉である。いずれも淡青色を呈す。

第107図に示したBr14は銅鏃である。凹基式の無茎鏃であり鏃身は平面三角形を呈す。先端と両側縁に鑄をもち、断面形は偏六角形を呈す。基部側面には湯道が確認できる。両面とも大きな鬆が入っており、鑄造状態の悪さがうかがえる。裏面の鏃身には付着する炭化物は柄の装着に用いた接着剤によるものか。

第10項 VII層下面（第6面：弥生時代後期後葉～終末期後半）の遺構と遺物

南側溝では、弥生時代後期後葉段階の東側区画溝（SD38-C）の西肩に伴うとみられる矢板を確認しており、これが北東-南西方向に伸びることが想定された。SD38と出土人骨の再評価に資する情報を得るといふ、本調査の目的を最小限の掘削で調査目的を達成するため、以後の掘削は、基本的にこの矢板列の東側のみ行うこととした。VII層および古墳時代前期造成土の掘削によって、掘削範囲の標高は-0.2～0.0 mとなった。

VII層および古墳時代前期造成土の下面では、弥生時代後期後葉から終末期後半にかけて繰り返し行われた造成によって改変された中心域東側縁辺部の地形と、それを区画する溝（SD38-B～E）をはじめとする遺構が、明確な土壤層や自然堆積層などの間層を挟まず重複しており、矢板列や土留めといった木製構造物や杭の多くは同一面で検出されている（第108図）。そのため、まず、遺構の変遷の基軸となる中心域から東側に張り出す地形（以降、中心域張出部と呼称する）の構造と変遷についておさえたのち、各段階に帰属する遺構の記載を行うこととする。

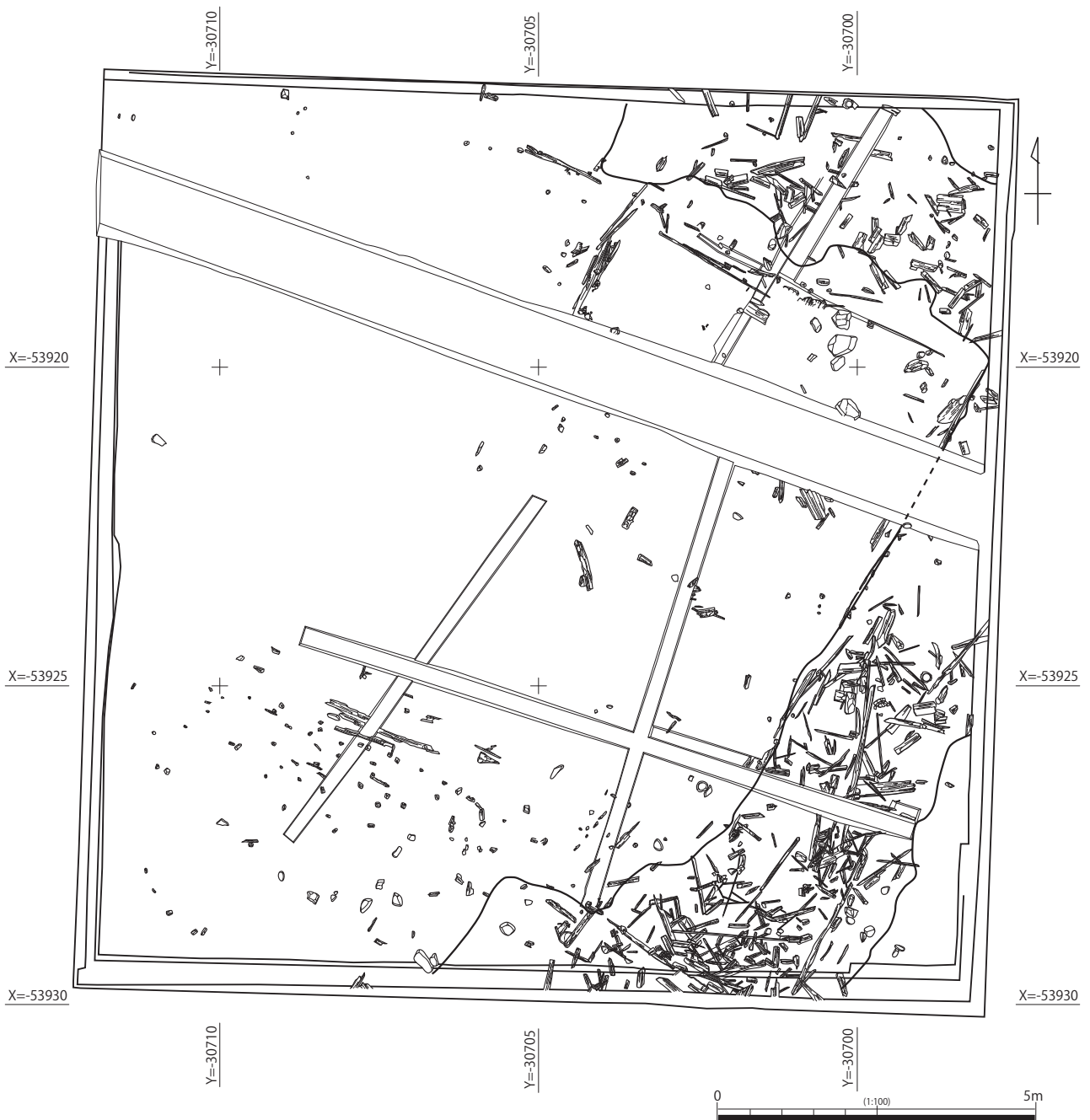
(1) 中心域張出部

(ア) 構造と段階（第109図）

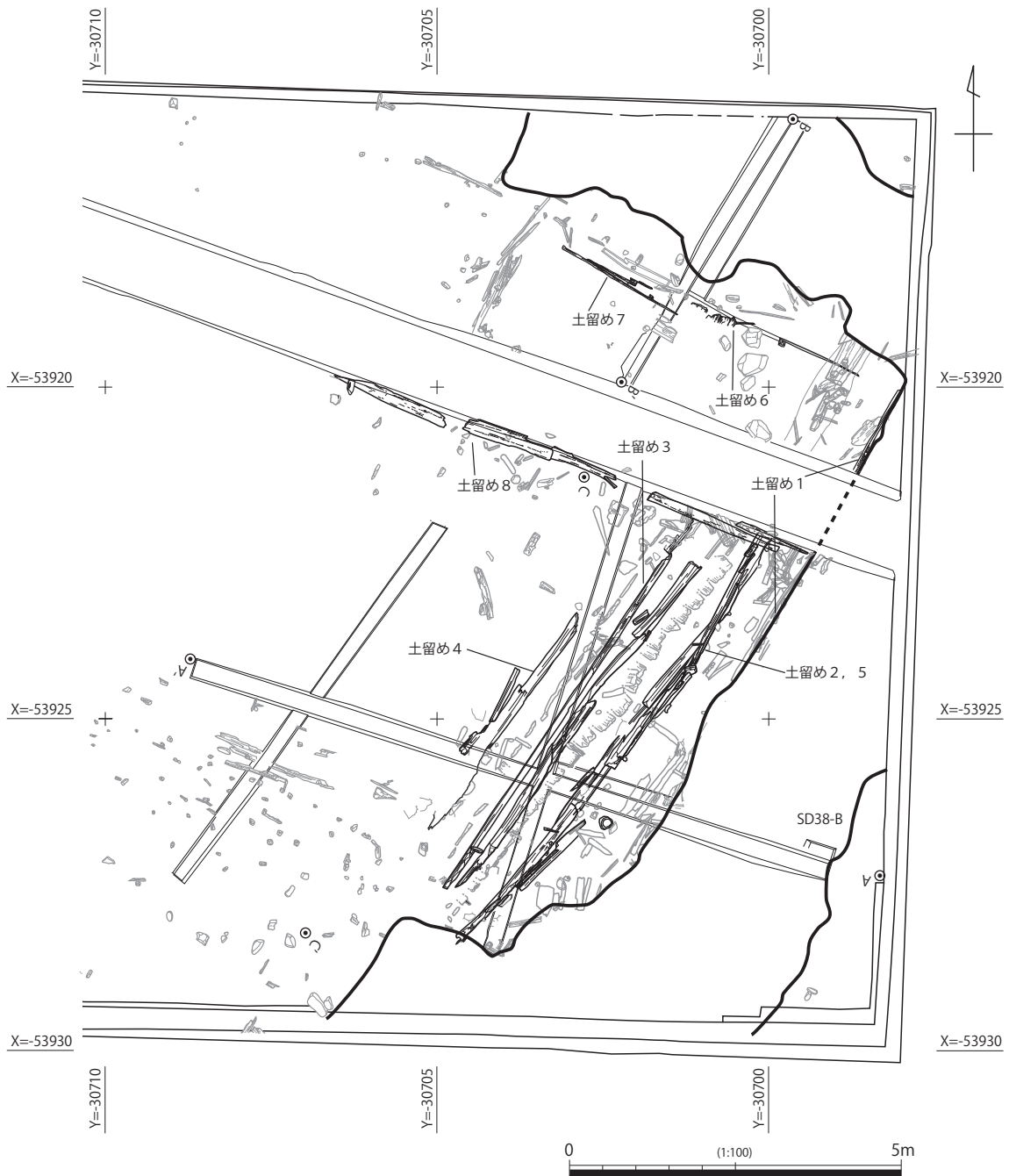
VII層下面において、中心域から東側に張り出す北辺6.1 m、東辺10.6 m、南辺1.6 mを測る方形の地形として検出した。この張出部内で、列をなす複数の木製構造物の上端を確認した。これら木製構造物には、張出部南側を中心に南北方向に平行して走るものが5条、北側を中心に東西方向に平行するものが3条ある（第109-1図）。トレンチ1・3・4の土層断面（第109-2～4図）の検討によって、これら木製構造物が、いずれも造成の足がかりとして設置した土留めであることが判明した。

南北方向の土留めは、東側に位置するものから順に土留め1～4、土留め2の下で検出したものを土留め5とする。トレンチ1の土層断面では、造成土はこれらの土留めとの対応関係によって造成土①～⑤に大別できる（第109-2図）。下層の造成土⑤を除いて、造成土④から造成土①の順に、西側から東側へ向け構築されていることが確認でき、中心域を拡張する意図が窺える。

この東側への拡張は、それに伴う区画溝あるいは水路との関係によって新旧2つの段階で捉えることが可能である。古段階は土留め4・5、造成土④・⑤で構成される段階であり、矢板で護岸された水路であるSD38-D（第158図）と、さらにその全面を走る素掘りの区画溝SD38-E（第163図）が



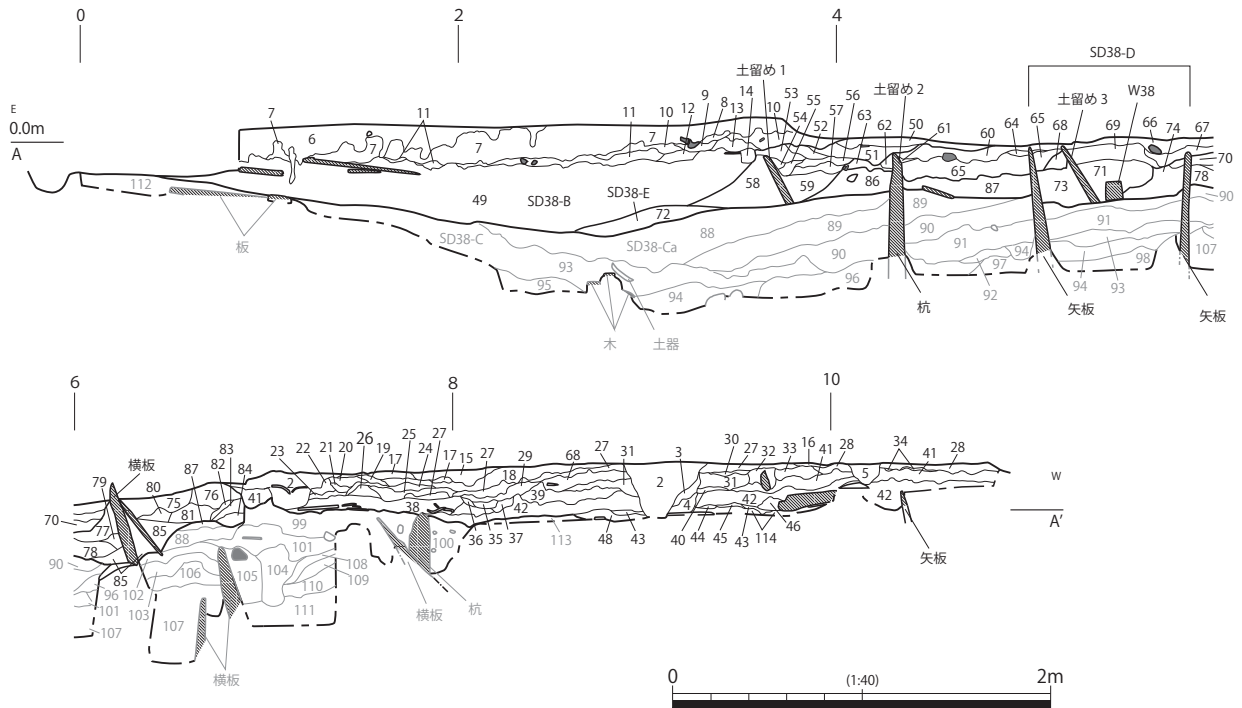
第108図 VII層下面検出状況



第 109 - 1 図 中心域張出部 (1)

伴う。中心域張出部全体の変遷に位置づけるため、これを段階2とする。この段階2は、造成土④、SD38-D 出土土器から弥生時代終末期前半～後半とみられる。

これをより東側に拡張した新段階は土留め1～3、造成土①～③で構成され、区画溝 SD38-B (第136 図) を伴う (段階3)。この段階3は段階2の張出部をさらにかさ上げするものでもあり、構成する土留めのうち、土留め3はSD38-D内、土留め2は土留め5上に設置されており、造成土③はSD38-Dを、造成土①とSD38-BはSD38-Dを埋めている。造成土①・②、SD38-B 出土土器から、段階3の時期は弥生時代終末期後半と判断できる。検出面で捉えた張出部の規模はこの段階3のもので

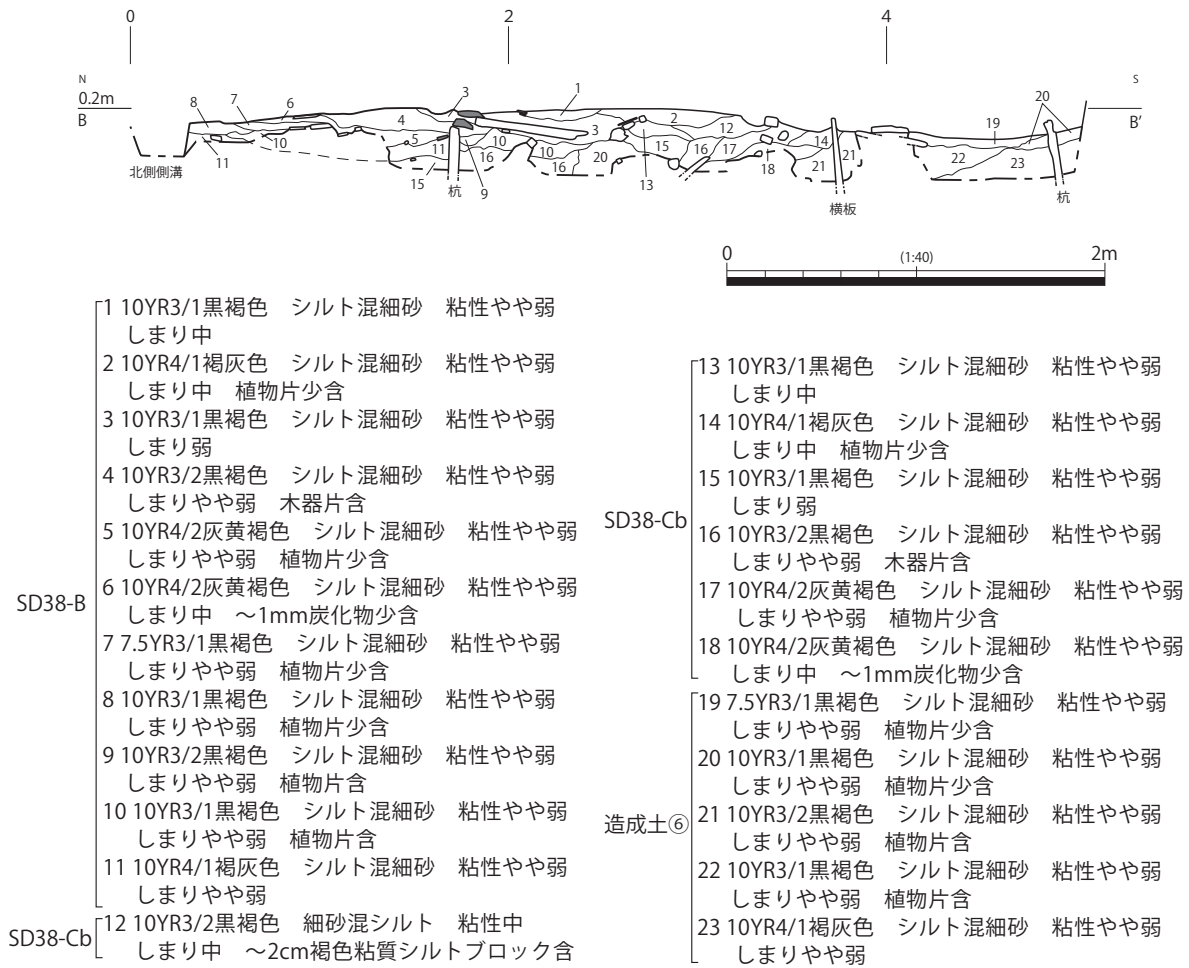


- | | |
|------------------------------------|---|
| 造成土① | 50 2.5Y5/1 黄灰色 シルト 粗砂少混 |
| | 51 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 ~1cm 炭化物少混 |
| | 52 10YR4/1 褐灰色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 |
| | 53 2.5Y6/1 黄灰色 シルト 粘土塊混 しまる |
| | 54 2.5Y8/4 淡黄色 砂 しまる |
| | 55 10YR4/1 褐灰色 シルト 黄灰色砂多混 |
| | 56 2.5Y8/4 淡黄色 細砂 黄灰色砂少混 |
| | 57 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 |
| | 58 10YR2/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 |
| 59 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性やや弱
しまりやや弱 | |
| 造成土② | 60 2.5YR4/1 黄灰色 シルト混 細砂 |
| | 61 2.5Y8/4 淡黄色 細砂 黄灰色砂少混 |
| | 62 2.5Y4/1 黄灰色 シルト |
| | 63 2.5Y4/1 黄灰色 シルト 粘土塊僅混 |
| | 64 2.5Y4/1 黄灰色 シルト |
| 造成土③ | 65 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混細砂 |
| | 66 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性やや弱 しまり弱 |
| | 67 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト マンガン沈着 |
| | 68 10YR3/1 黒褐色 細砂 しまる |
| | 69 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 ~1cm 炭化物少混 |
| | 70 2.5Y6/1 黄灰色 シルト 細砂混 |
| | 71 10YR5/1 褐灰色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 |

- | | |
|------|---------------------------------|
| 造成土④ | 74 2.5Y6/1 黄灰色 シルト |
| | 75 10YR3/1 黒褐色 細砂 しまる |
| | 76 2.5Y5/1 黄灰色 シルト |
| | 77 2.5Y6/1 黄灰色 シルト 粘性やや強 |
| | 78 2.5Y6/1 黄灰色 シルト 細砂多混 |
| | 79 2.5Y4/1 黄灰色 シルト |
| | 80 2.5Y6/1 黄灰色 シルト |
| | 81 2.5Y6/1 黄灰色 シルト 細砂混 |
| | 82 2.5Y5/1 黄灰色 シルト 粘土塊僅混 |
| | 83 2.5Y5/1 黄灰色 シルト 粘土粒混 |
| 造成土⑤ | 84 2.5Y5/1 黄灰色 シルト |
| | 85 2.5Y6/1 黄灰色 シルト 細砂混 |
| 造成土⑥ | 86 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 |
| | 87 2.5Y5/1 黄灰色 シルト |

- 1~5: 古墳時代前期前葉遺構
 6~14: VII層
 15~48: VII層
 49: SD38-E
 73: SD38-D
 88: SD38-Ca
 89~98: SD38-C
 99~111: SD38-C 護岸?
 112: IX層

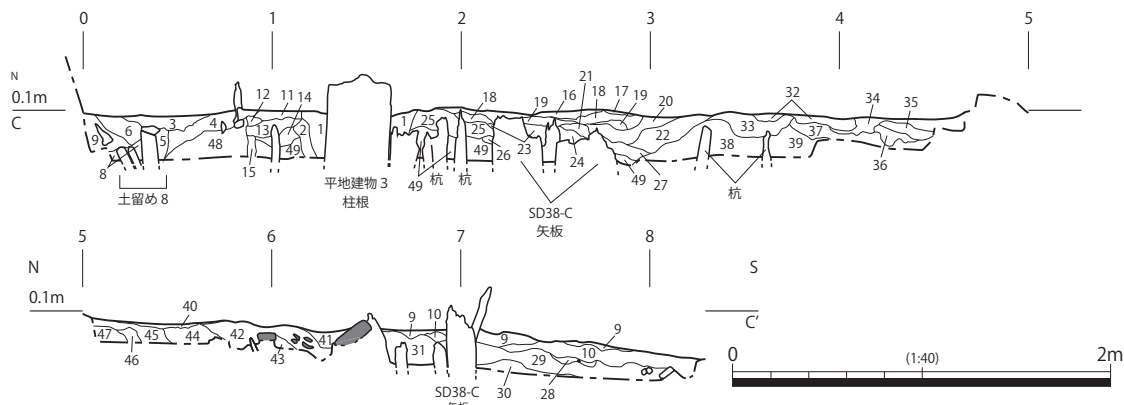
第109-2図 中心域張出部(2)



第109-3図 中心域張出部（3）

ある。

次に東西方向の土留めについて述べる。これらは、北側のものから順に土留め6～8とする。そのうち、土留め6は段階3の中心域張出部の北東隅付近に位置するためこの段階のものである可能性が高い。これに対し、土留め7・8は南北方向の土留め1～5よりも中心域側に位置する。土留め7はトレンチ3の土層断面（第109-3図）では、造成土（造成土⑥）の北側の足がかりとなっていると同時に、溝（SD38-Cb）の南肩となっていることが確認できる。この造成土⑥からは、弥生時代後期後葉の土器は出土しているものの、弥生時代終末期の土器は出土していない。このSD38-Cb（第168図）は、重複するSD38-Bによる攪乱もあり、残存状況はよくないものの、直交するSD38-Ca（第167図）と方形区画を形成していたとみられる。このSD38-Ca・bで区画される中心域張出部を段階1とする。出土土器から考えられるSD38-Ca・bの存続時期から段階1は弥生時代後期後葉～終末期前半とみられる。土留め7の2.6m南側を平行して走る土留め8の南側には同方向の土留めは認められないが、Ⅶ層下面の調査区南側では、東西方向の土留めとほぼ同方向に並ぶ複数の杭列が確認されている点は注目される（第108図）。トレンチ4の土層断面（第109-4図）では、平面的な検出に至らなかったこれらと一連の杭列と、その杭のある箇所を中心とした土手状の堆積が確認できる。このような堆積状況は第18次発掘調査で確認した造成遺構と類似しており、一連の造成が土留め8の南側、調査区南側付近にまで及んでいたことが想定できる。



- | | | | | | |
|----|-------------|--------|-------|--------|--|
| 1 | 2.5Y6/1黄灰色 | 細砂 | 粘性弱 | しまり弱 | |
| 2 | 2.5Y4/1黄灰色 | 細砂 | 粘性弱 | しまりやや弱 | |
| 3 | 10YR3/1黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | |
| 4 | 10YR4/1褐灰色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | 灰白色細砂混 |
| 5 | 10YR3/1黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり弱 | |
| 6 | 10YR3/2黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | 木片少含 |
| 7 | 10YR3/1黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | |
| 8 | 10YR4/2灰黄褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | 木片少含 |
| 9 | 10YR3/1黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | ~1cm炭化物少 |
| 10 | 10YR4/2灰黄褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | 黒褐色細砂混合 |
| 11 | 10YR3/1黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | |
| 12 | 10YR3/2黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり中 | |
| 13 | 10YR3/2黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり中 | ~1cmにぶい黄褐色細砂ブロック少含 |
| 14 | 10YR3/1黒褐色 | 細砂混シルト | 粘性中 | しまり中 | |
| 15 | 10YR2/2黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり弱 | |
| 16 | 10YR3/1黒褐色 | 細砂混シルト | 粘性中 | しまりやや弱 | ~2cm褐灰色粘質シルトブロック・炭化物含 |
| 17 | 10YR3/2黒褐色 | 細砂 | 粘性やや強 | しまりやや弱 | 植物片混 |
| 18 | 10YR4/2灰黄褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | にぶい黄褐色細砂混 |
| 19 | 10YR4/1褐灰色 | 細砂 | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | にぶい黄褐色細砂混 15 10YR2/2黒褐色 シルト混細砂
粘性やや弱 しまり弱 |
| 20 | 10YR3/2黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり中 | ~1cm炭化物少含 |
| 21 | 10YR3/2黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり中 | ~2cmにぶい黄褐色細砂少含 |
| 22 | 10YR3/1黒褐色 | 細砂混シルト | 粘性やや弱 | しまり中 | ~1cmにぶい黄褐色細砂ブロック少含 |
| 23 | 10YR3/3暗褐色 | 細砂 | 粘性弱 | しまりやや弱 | 黒褐色細砂混 |
| 24 | 10YR3/1黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | ~1cmにぶい黄褐色細砂ブロック少含 |
| 25 | 10YR2/1黒色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまりやや強 | ~2cm黄褐色ブロック少含 |
| 26 | 10YR3/2黒褐色 | シルト | 粘性やや強 | しまり中 | ~2mm黄褐色ブロック少含・腐植混 |
| 27 | 10YR3/2黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | ~2cmにぶい黄褐色細砂ブロック含 |
| 28 | 10YR4/2灰黄褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり弱 | |
| 29 | 10YR3/2黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | 貝殻細片少含 |
| 30 | 10YR3/1黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり中 | 貝殻少含 |
| 31 | 10YR3/2黒褐色 | 細砂混シルト | 粘性中 | しまり中 | ~3mm炭化物少含 |
| 32 | 10YR3/2黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり弱 | |
| 33 | 10YR3/2黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | ~1cmにぶい黄褐色細砂ブロック少含 |
| 34 | 10YR3/2黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり中 | |
| 35 | 10YR4/2灰黄褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | |
| 36 | 10YR3/2黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | |
| 37 | 10YR3/1黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり中 | |
| 38 | 10YR2/1黒色 | 細砂混シルト | 粘性中 | しまり中 | にぶい黄褐色細砂混 |
| 39 | 10YR2/1黒色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | |
| 40 | 10YR3/2黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり弱 | ~1cm炭化物少含 |
| 41 | 10YR3/1黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり弱 | |
| 42 | 10YR3/2黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり弱 | ~1cmにぶい黄褐色細砂ブロック・炭化物少含 |
| 43 | 10YR2/2黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり中 | |
| 44 | 10YR4/2灰黄褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり中 | |
| 45 | 10YR3/2黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり中 | |
| 46 | 10YR3/2黒褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり中 | ~1cm炭化物少含 |
| 47 | 10YR4/2灰黄褐色 | シルト混細砂 | 粘性やや弱 | しまり中 | |
| 48 | 10YR3/2黒褐色 | 細砂混シルト | 粘性中 | しまり中 | 腐植混 |
| 49 | 10YR3/2黒褐色 | シルト | 粘性やや強 | しまり中 | 貝殻碎片少含 |

第109-4図 中心域張出部(4)

(イ) 土留め、造成土の特徴とこれを構成する転用材

中心域張出部の土留めは、いずれも壁板や妻壁板といった建築材を転用した横板を立てる構造を基

本としている。ここでは、各土留めの構造とそれを足がかりとする造成土の特徴、図化した建築材について記載する。

南北方向の土留め（第110図）

土留め1

中心域張出部の最前面に設置された土留めである。検出長は東西ベルトの北側で1.5 m、南側で2.3 m、全体で4.7 mを測る。北側は2枚の横板を東側2本の杭で、南側は3枚の横板を東側6本、西側3本の杭で固定している。

土留め1を足がかりとして盛土された造成土①は、最大厚22cmを測る。褐灰色～黒褐色のシルト～細砂で構成される多様な層相のなかに、淘汰が良く海砂とみられる淡黄色細砂層を挟むのが特徴的である。このように造成土に海砂を用いる例は、第18次発掘調査区における古墳時代前期前葉の造成遺構で確認しており、当遺跡において普遍的な造成の手法であったことが窺える。

土留め1を構成する転用材のうち、W31を第111図に示した。斜辺の角度55°を測る。斜辺側には緊縛のためと見られる1対の円孔が穿たれる。短辺側には小屋束に固定するためとみられる方形穿孔をもつ。

土留め2

土留め1の0.7 m西側に位置する。土留め5の上に横板を設置した土留めであり、間隙があるものの検出長7.6 mを測る。頂部が横板の上端を超える高さの杭が、東側に9本、西側に1本確認でき、東側を中心に打設した杭で支える構造であることが分かる。

土留め2を足がかりとして盛土された造成土②は層厚は最大で15cmを測り、黄灰色～灰黄褐色シルト混細砂を主体とする。

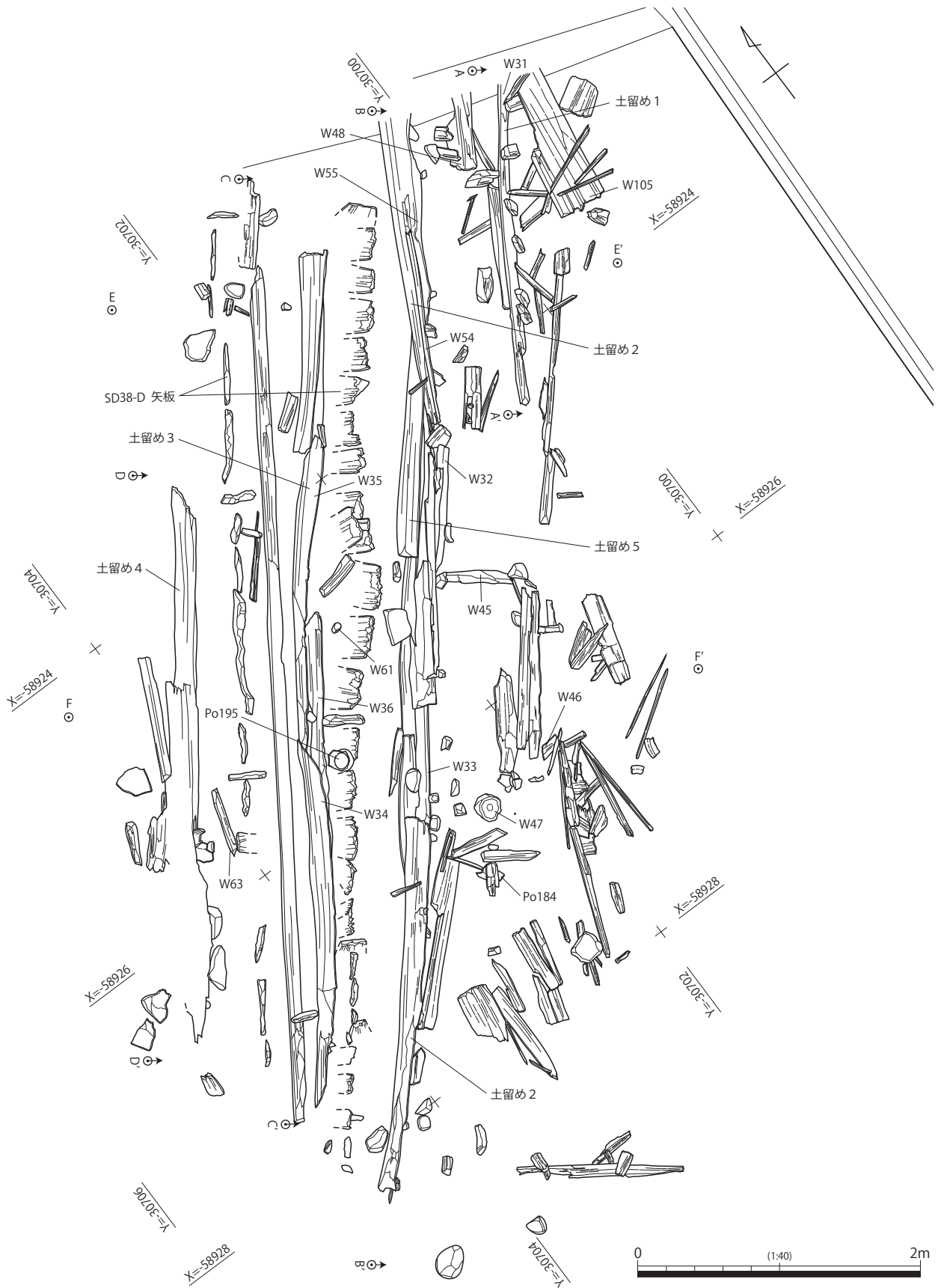
土留め2を構成する転用材のうち、W32・33を第112図に示した。いずれも壁板であり、両面ともハツリの痕跡が明瞭である。W32は長辺の中央付近に台形の欠込みをもつ。水平材を通すためのものか。W33は中央やや右寄りに緊縛のためとみられる1対の円孔をもつ。

土留め3

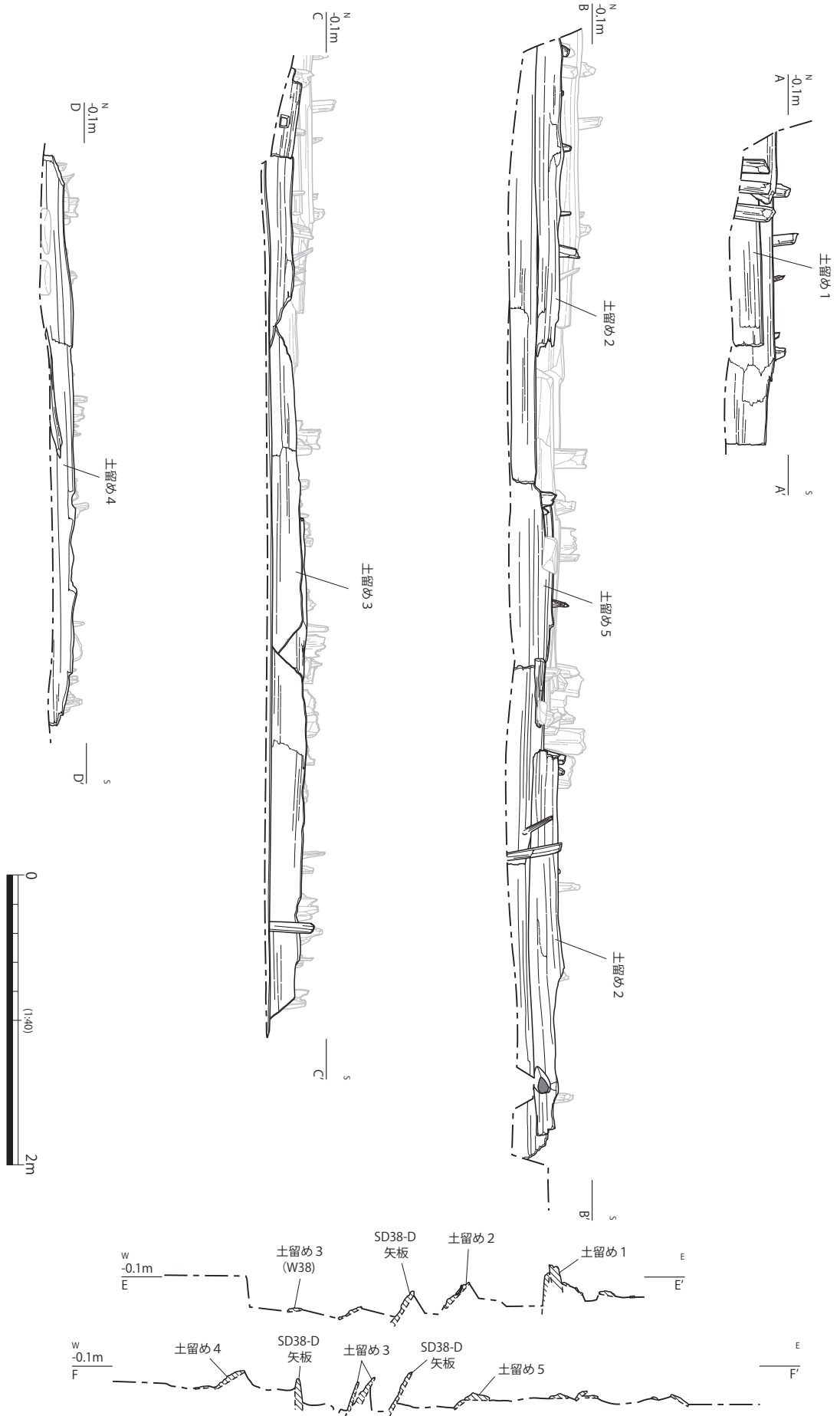
土留め2の0.8 m西側に位置する。矢板を護岸とする水路SD38-D内に設置されたものであり、検出長6.2 m測る。転用した4枚の妻壁板の端を重ねるようにして立てており、これを支えるための杭は西側に1か所打設されるのみである。他の土留めと異なり、東側に固定する杭がないのは、SD38-Dの東側護岸である矢板列を支えにしたためとみられる。また、また立てられた妻壁板の西側裾には長さ605cmの不明建築材が据えられ、これらを支える構造となっている。

土留め3を足がかりとして盛土された造成土③の層厚は最大で33cmを測る。灰黄褐～褐灰色シルト混細砂を主体とし水路であるSD38-Dを埋めている。

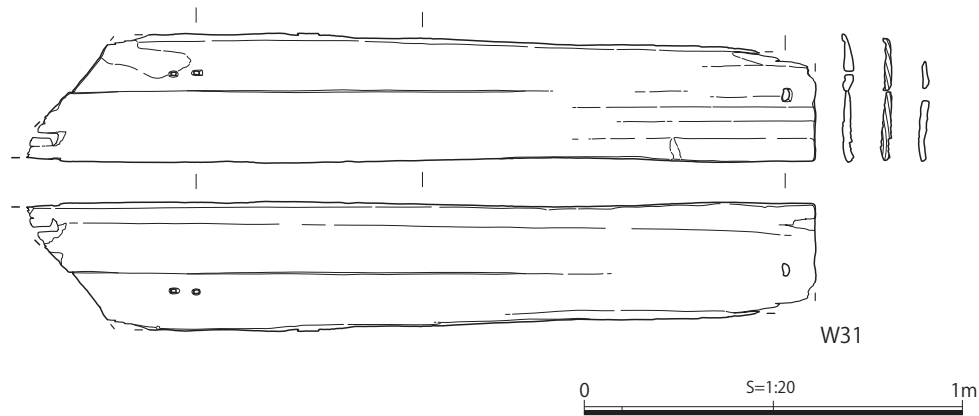
第113図に土留め3を構成する木器を示した。W34～36は妻壁板である。いずれも木取は板目であり、両面とも平行切削の痕跡が顕著である。同じ土留を構成する転用材であるが、斜辺の角度はW34が53°、W35が46°、W36が55°であり、少なくともW35については別の建物部材であることが明かである。W35は斜辺下に水平材を通すためとみられる直角の欠込みをもつ。



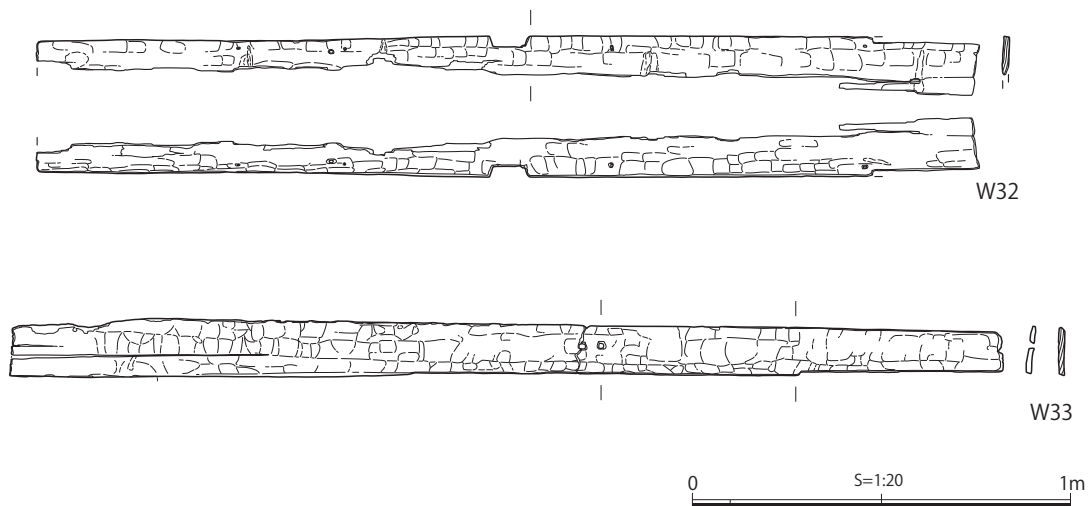
第110-1図 土留め1~5 (1)



第110-2図 土留め1～5 (2)



第 111 図 土留め 1 構成木器

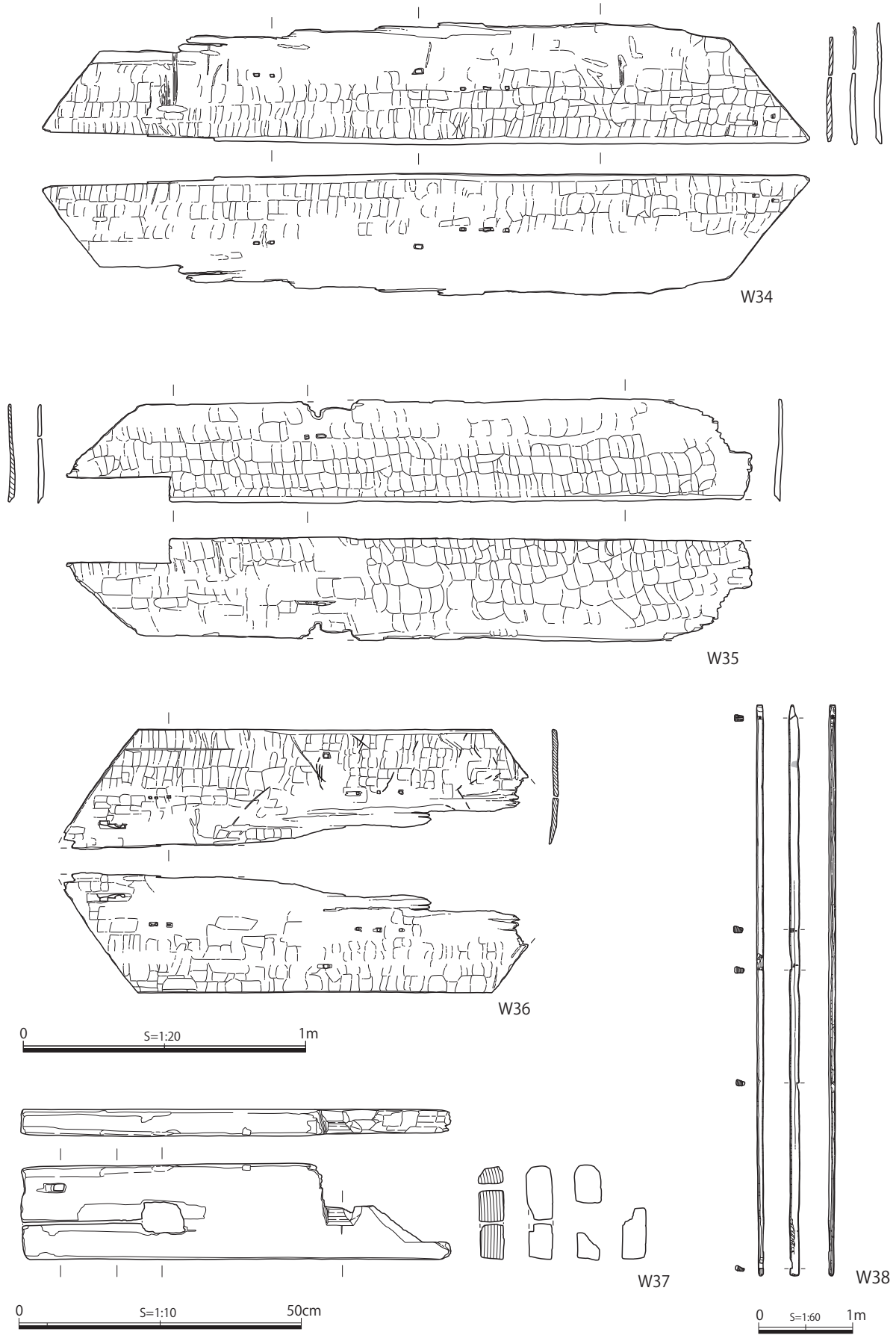


第 112 図 土留め 2 構成木器

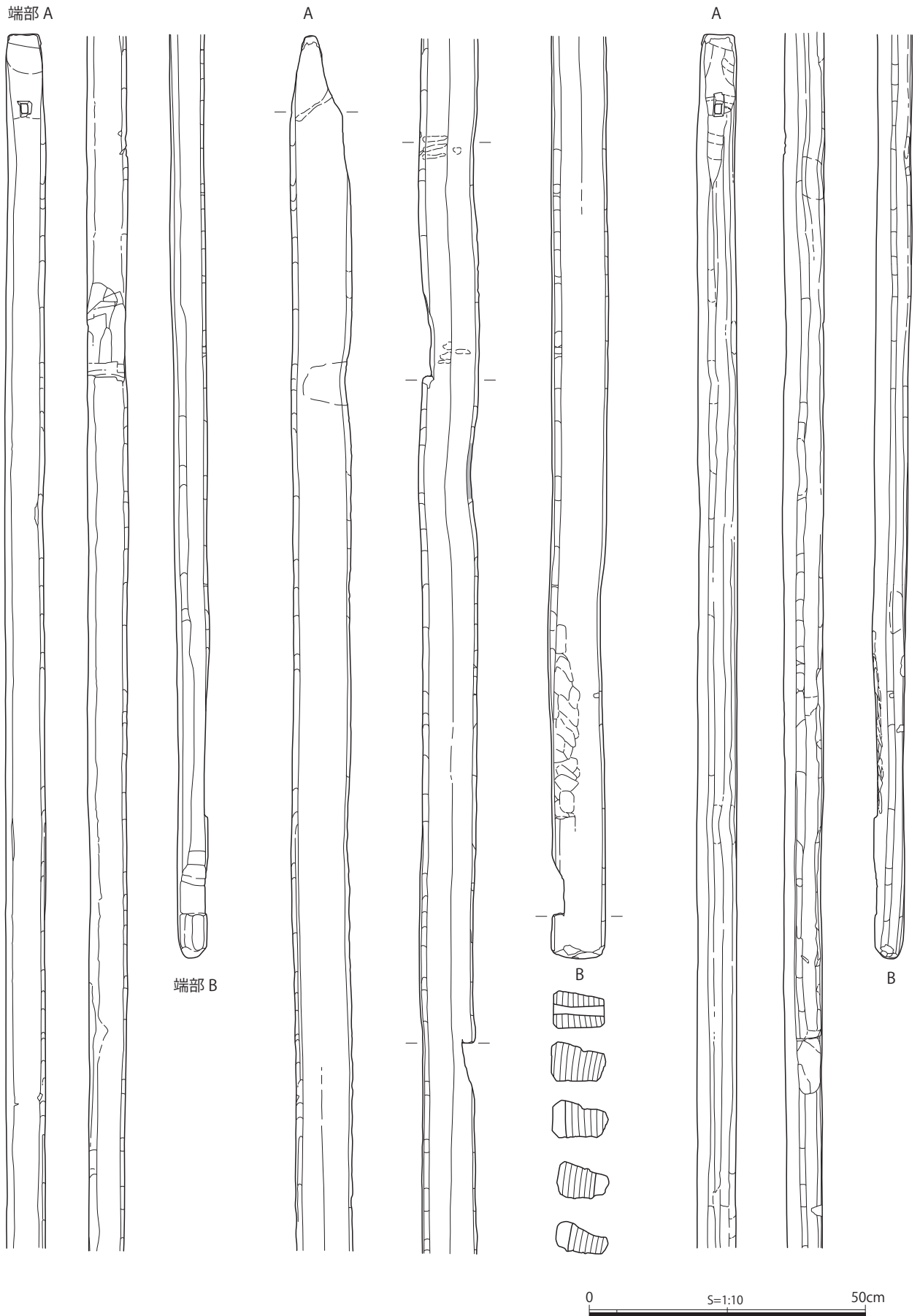
W37 は、厚い板目材を素材としており、端部上辺付近に小型の、中央部に大型の方形穿孔をもつ。建築材とみられるが部位は不明である。

第 114 図に拡大した W38 は長さ 605cm を測る長大な建築材である。端部 A は上下面からの削ぎによってやや反り返り、上下を貫く方形穿孔をもつ。端部 B は面取りによってやや丸みを帯びた形状に加工されており、下面に斜めの欠込をもつ。これ以外に、下面には中央からやや端部 A 寄りにひとつ、上面には中央より端部 B よりの位置に欠込をひとつずつもつ。上面には顕著でないものをふくめ、5 か所に荷重によるたわみが生じている。この荷重による圧痕は上面において左右互い違いに認められる。右側面には中央付近の欠込み箇所と、それより端部 A よりのたわみ付近に緊縛痕とみられる平行する圧痕が認められる。断面は全体的に下面側が僅かに広がる台形を呈す。下面は上面および側面と比べ平滑であり、かつ風化の度合いが小さい。

端部 B の形態は垂木に似るが、これまで当遺跡において出土した垂木よりはるかに長い。垂木とすれば梁行 6m 以上となり、当時の建物の構造上成り立たないため、棟木あるいは棟押さえの可能性はある（奈良文化財研究所 鈴木 智大室長、畿央大学前川 歩准教授の御教示による）。



第113図 土留め3構成木器



第114図 W38 拡大

樹種同定の結果 W38 はスギ製であることが判明した（第4章 第4節）

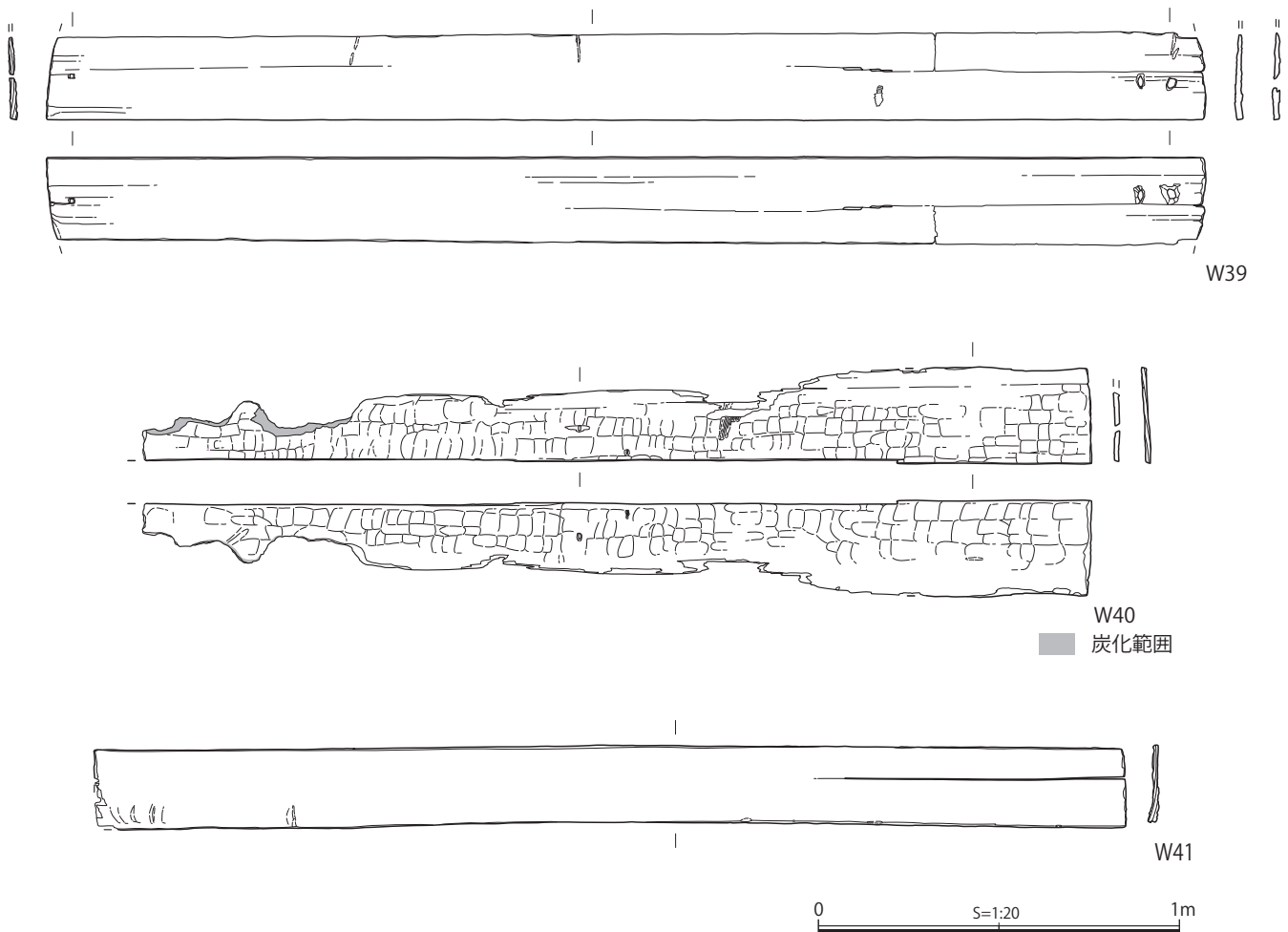
土留め4

土留め3の0.6 m西側に位置し、検出長 3.9 mを測る。転用した2枚の壁板を立てるもので、これを支える矢板が東側にのみ打設されているのは、西側すなわち中心域側からの土圧に耐える構造であることを示している。土留め4を足がかりとして盛土された造成土④の層厚は最大で 32cmを測る。黄灰色シルトを主体とする。

第115図に土留め4を構成する壁板 W39～41を示した。W39は右側の端部付近には緊縛のためと見られる1対の孔を、左側の端部付近には単独で穿たれた小規模な孔をもつ。W40は火災によるものか一部が消失しているが、下辺にわずかな段差が設けられている。中央付近と下辺際に小規模な孔をもつ。両面ともハツリ痕が明瞭である。W41は表面にハツリ痕をわずかに残す。

土留め5

土留め2に先行するものであり、検出長 7.7 mを測る。4枚の横板を東側に打設した杭で支える構造である。土留め5を足がかりとする造成土⑤の層厚は最大で 13cmを測る。黒褐色あるいは黄灰色



第115図 土留め4構成木器

シルトで構成される。

東西方向の土留め

土留め6 (第116図)

段階3の張出部の北東隅に位置し、検出長1.3mを測る。1枚の横板を南側に打設した2本の杭で支える構造である。

土留め7 (第117図)

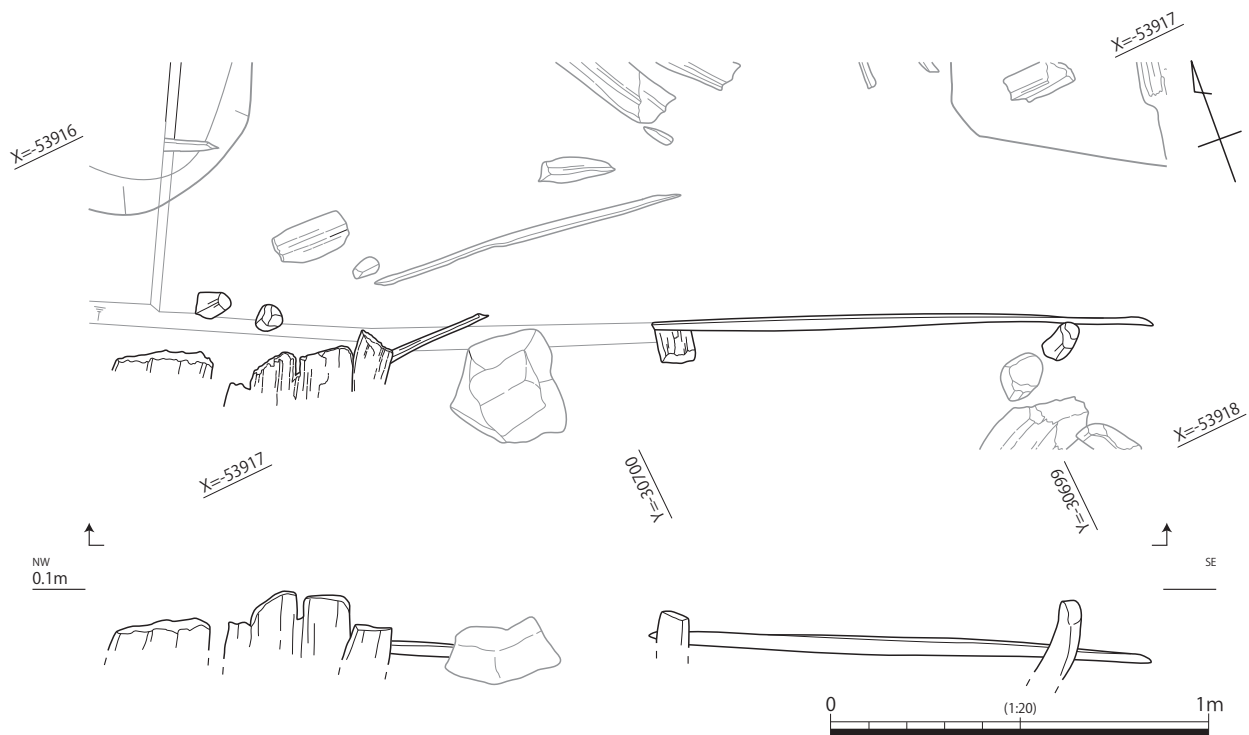
土留め6から1.6m西側、土留め6よりやや中心域張出部に入り込んだ位置にある。段階1の中心域張出部に伴うものである。検出長2.0mを測る。1枚の横板を北側に打設した1本の杭で支えている。先に述べたようにトレンチ3の土層断面(第109-3図)では、造成土⑥の足がかりとなっていることが確認でき、SD38-Cbの護岸となるとみられる。当遺構に沿って同一個体の人骨(頸椎~胸椎)が出土している点が特筆される。

土留め8 (第118図)

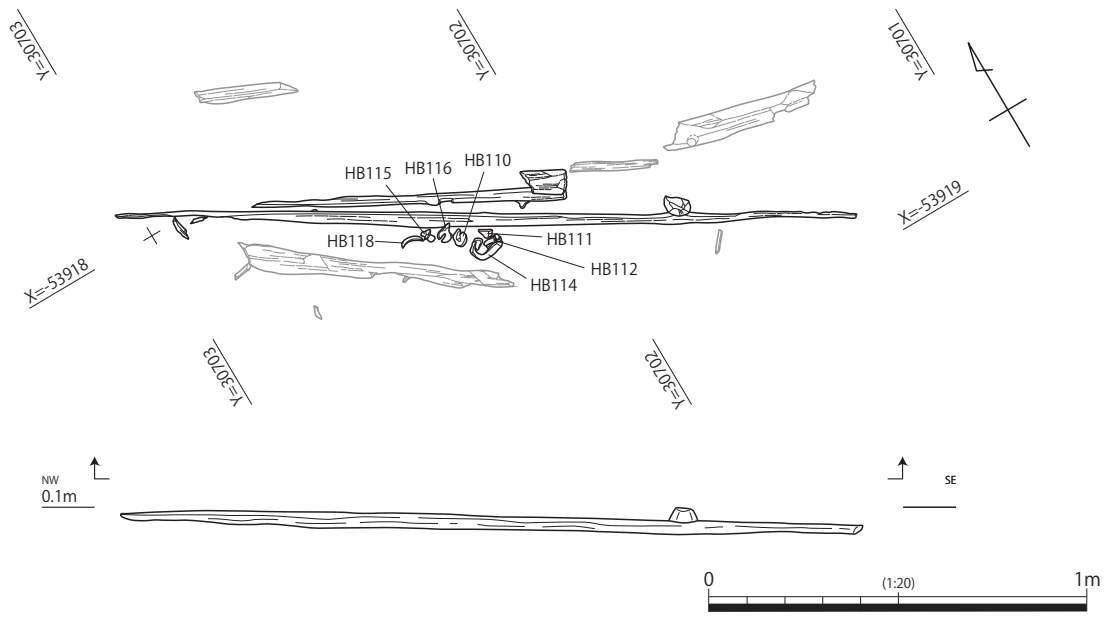
土留め7の2.6m南側に位置する。段階1の中心域張出部に伴うものである。東西ベルトに入り込んでいるため、全体の規模は不明であるが、検出長4.6mを測る。重複する平地建物3によって一部失われているが、横板を南北両側に打設した杭で固定する構造であることが分かる。

(ウ) 造成土出土遺物

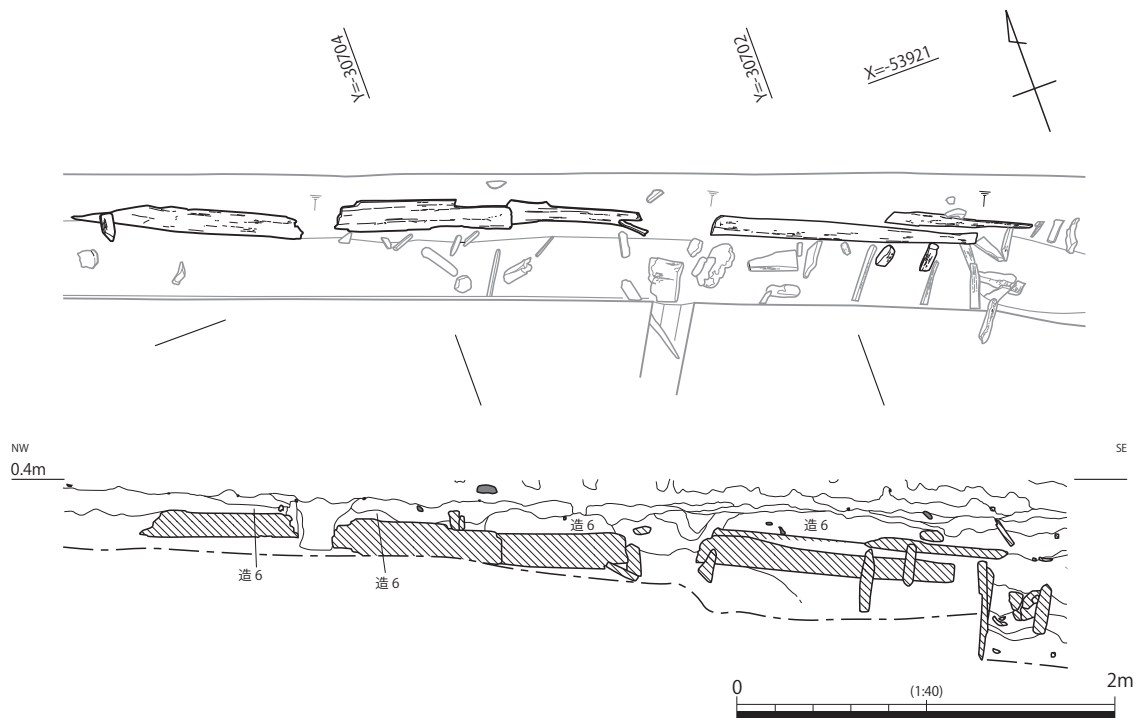
以下、各造成土からの出土遺物について述べる。



第116図 土留め6



第 117 図 土留め7



第 118 図 土留め8

造成土①出土遺物（第119～121図）

第119図には土器を示した。Po178は蓋である。天井部から外方に屈曲して立ち上がるつまみ部をもち、体部は直線的に広がる。体部外面はハケメ、内面はケズリで調整される。

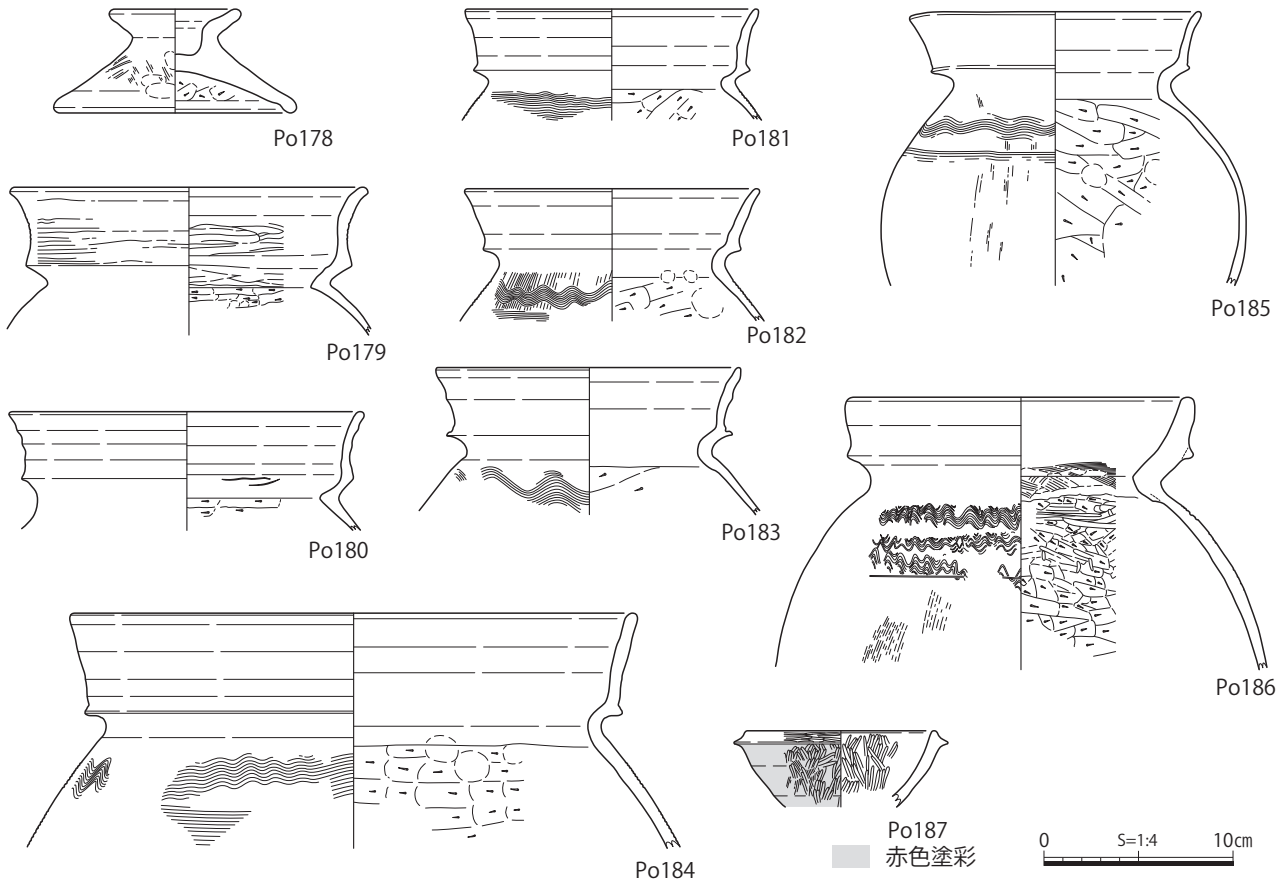
Po179～185は甕であり、いずれも無文の複合口縁をもつ。Po179～183、185は器壁が薄く、外反する複合口縁をもつ。胴部内面の削りは右方向である。Po179の口縁部は、擦り消された平行沈線がわずかに残る。Po180は口縁部のヨコナデにより生じた段が明瞭である。頸部付近に粘土つなぎの痕跡を残す。Po181は肩部に緩い波状文が巡る。Po182は肩部に波状文と平行沈線が巡る。Po183は口縁部下端の突出が鋭い。Po184は大型のもので、やや外傾して直線的に立ち上がる複合口縁をもつ。肩部には波状と平行沈線が巡る。Po179が古相を示すが、その他のものは弥生時代終末期後半の特徴を示す。

Po186は甕である。器壁の厚い口縁部をもち、肩部には3単位の波状文が巡る。内面は頸部がハケメ、胴部内面が左方向のケズリで調整される。

Po187は鉢である。内外面ともミガキで調整され、外面は赤彩される。

第120図には木器を示した。

W42は栓である。方形の頂部と短い軸部をもつ。軸部には穿孔がなされない。W43は火鑽臼である。右側縁の欠込によって3か所の座が設けられており、そのうち1か所が使用によって円形に抉れ炭化している。W44は蓋である。円形の置蓋とみられ、裾部外面には1条の圈線が巡る。外面内外面とも赤彩される。樹種同定の結果、W44はクワ属製であることが判明した（第4章 第4節）。W45は



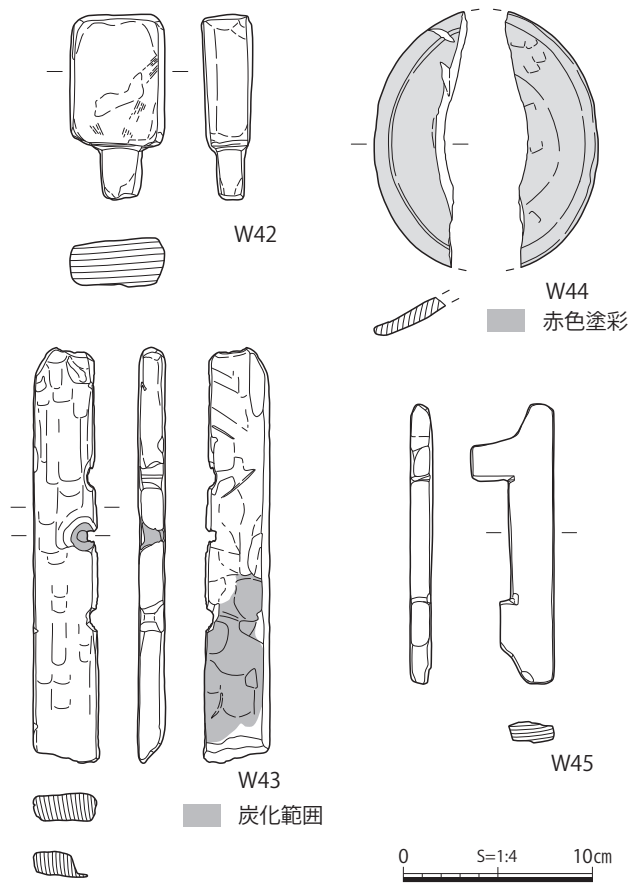
第119図 造成土①出土土器

把手である。板材を素材として成形し、横方向の突起を2か所設けている。

W46 は田下駄である。長方形の板材を素材とし、上下辺にそれぞれ2か所山形の欠込みをもつ。

第121図には建築材を示した。W47・48は柱である。W47は、針葉樹の芯持材を素材としており、下端は平坦で、断面形は円形に近い。下端から14cm付近の側面に1か所の欠込をもち、36cm付近に設けられたほぞ穴の位置で欠損している。W48は針葉樹の芯去材を素材としており、下端は平坦で、断面形は歪な三角形を呈す。下端から35cmの箇所で、側面の稜に直交して欠込みをもつ。

W49は妻壁板である。幅は14.2cmと狭く、角度は45°を測る。斜辺に横方向の短い切込をもつ。



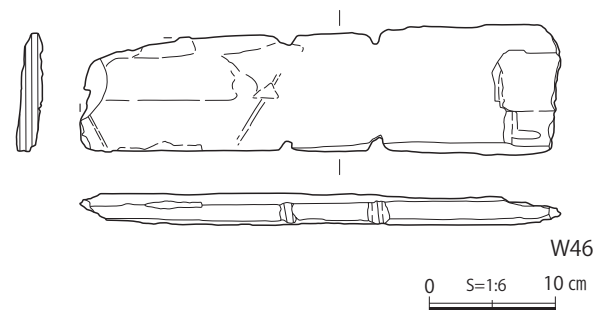
造成土②出土遺物（第122～124図）

第122図には土器を示した。Po188～Po191は甕である。Po189・190は外反して立ち上がる無文の複合口縁をもち、胴部内面のケズリは右方向である。肩部への施文は、Po189が波状文と刺突文、Po190が平行沈線と刺突文である。これらは弥生時代終末期後半の特徴を示す。

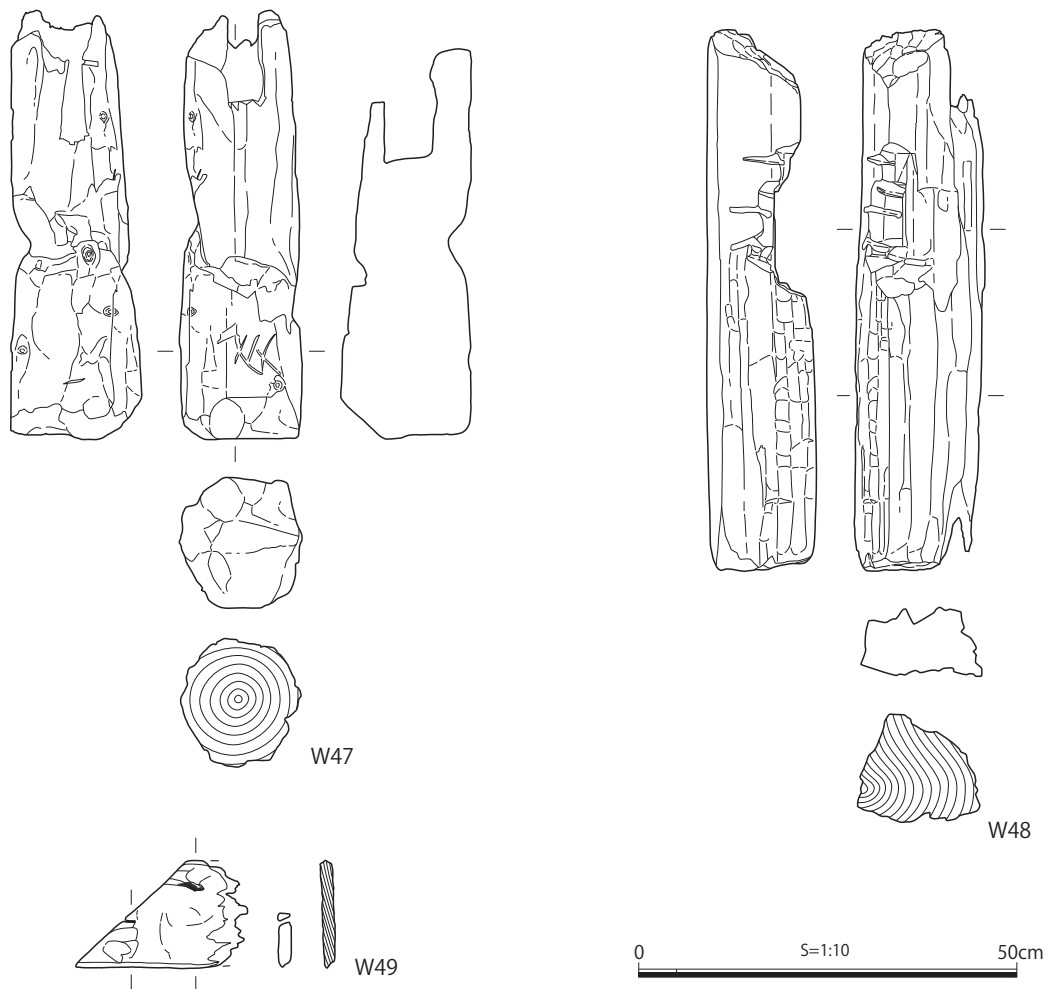
Po191は短く内傾する複合口縁を持つもので胴部内面上半までハケメの調整が及ぶ。弥生時代中期後葉に属す。Po192は壺で複合口縁に波状文が巡る。内面は頸部がミガキ、胴部が左方向のケズリで調整される。弥生時代後期後葉の特徴を示す。Po193は鼓形器台である。受部と脚部の傾きに大きな差はなく、脚部には波状文が巡る。弥生時代終末期後半に属す。

第123図には木器を示した。W50は杓子である。丸底で楕円形の上面観を呈す。欠損しているものの長軸側の口縁部の一端に柄をもつとみられ、その基部が肥厚し突起状に隆起している。樹種同定の結果 W50はクワ属製であることが判明した（第4章 第4節）

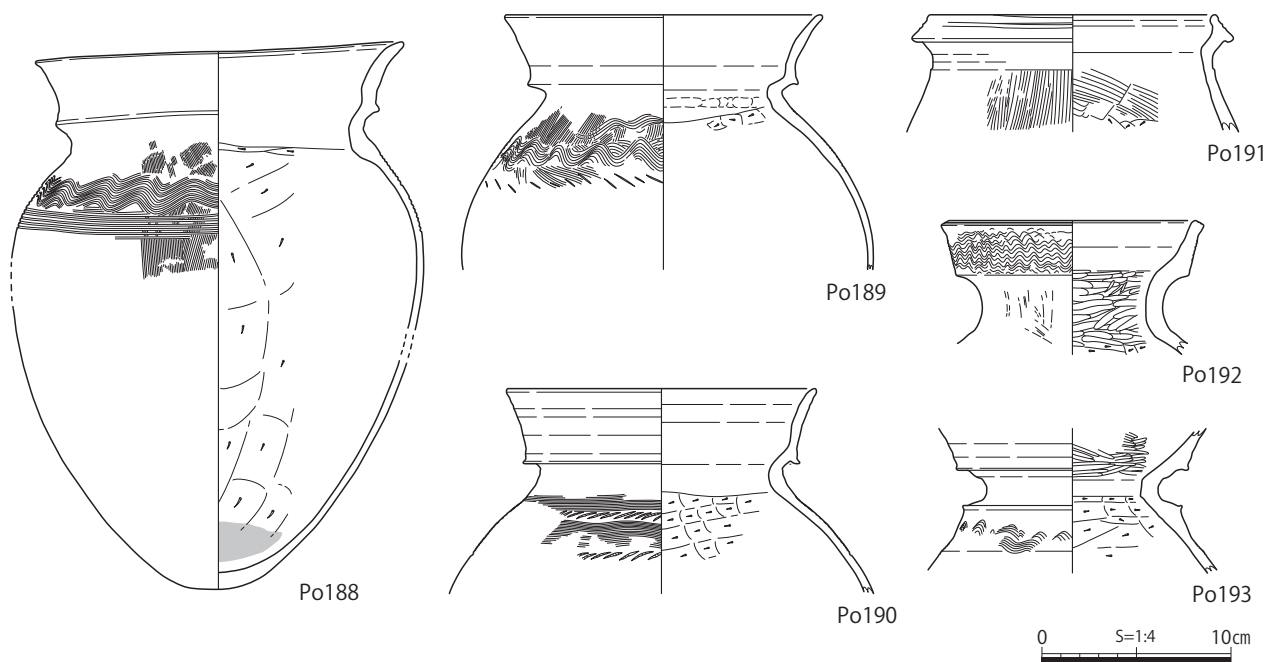
W51は不明木器である。右側縁には方形の欠込がなされ、左側縁付近には円孔が穿たれる。中央部やや下端寄りに1対の円孔をもつ。W52は栓である。寄棟状の頂部をもち、両側縁からの斜めの切込によって軸部を作出する。この軸部は先細りで孔をもたない。W53は容器の未成品とみられる。



第120図 造成土①出土木器（1）



第 121 図 造成土①出土木器 (2)



第 122 図 造成土②出土土器

上面は平坦に、下面は半円形の断面になるよう荒く成形されている。上面全体が被熱により炭化しているのは、加工の工程によるものか。

第124図には矢板と杭を示した。W54は厚い板材を素材とした矢板である。両側縁からの切込みによって先端を成形する。W55・56は杭である。W55は側面に残された斜めの欠込から、垂木を転用したものとみられる。角材を四隅から切込むことで先端を成形する。上部は腐朽によって表面が剥落しているが、上端は打ち込みによって潰れていることが確認できる。W56は断面上端付近が一部被熱黒化している。

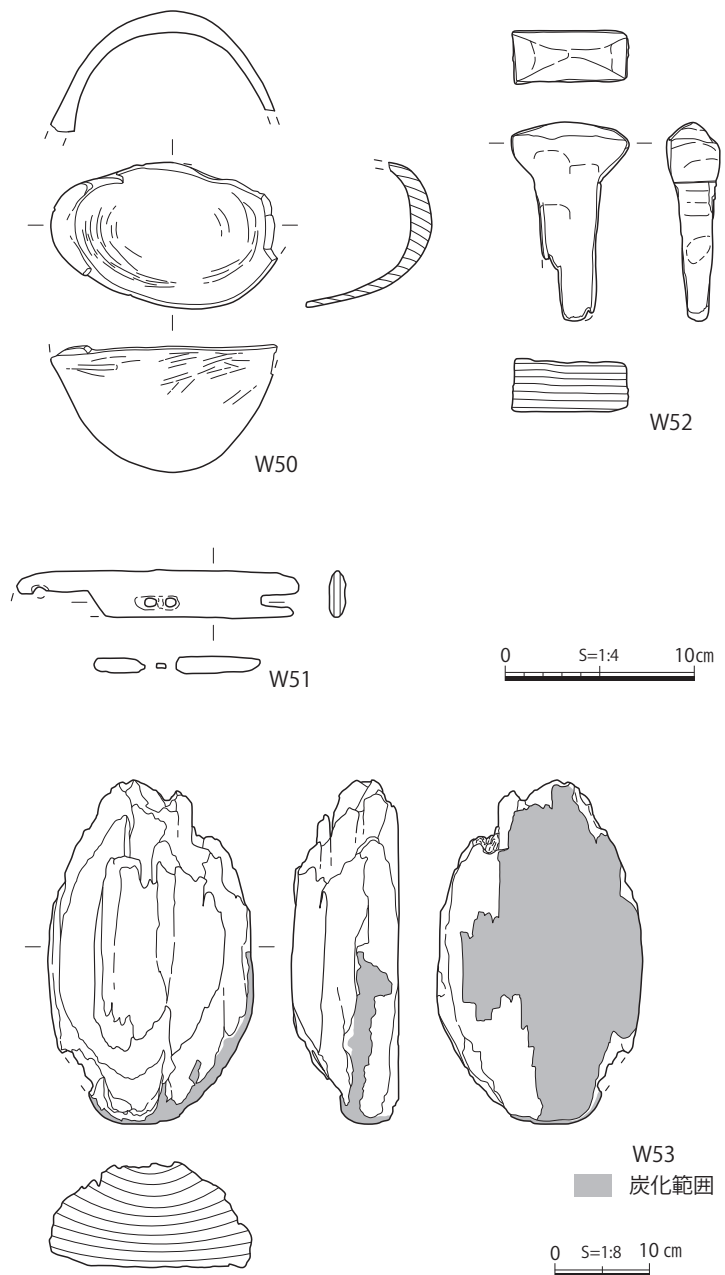
造成土③出土遺物（第125～127図）

第125図には土器を示した。Po194は蓋である。器高は高く、天井部から直線的に外傾して立ち上がるつまみ部をもち、口縁部にむけ直線的に広がる口縁部の端部は外方に折れ曲がる。内外面ともミガキで調整される。

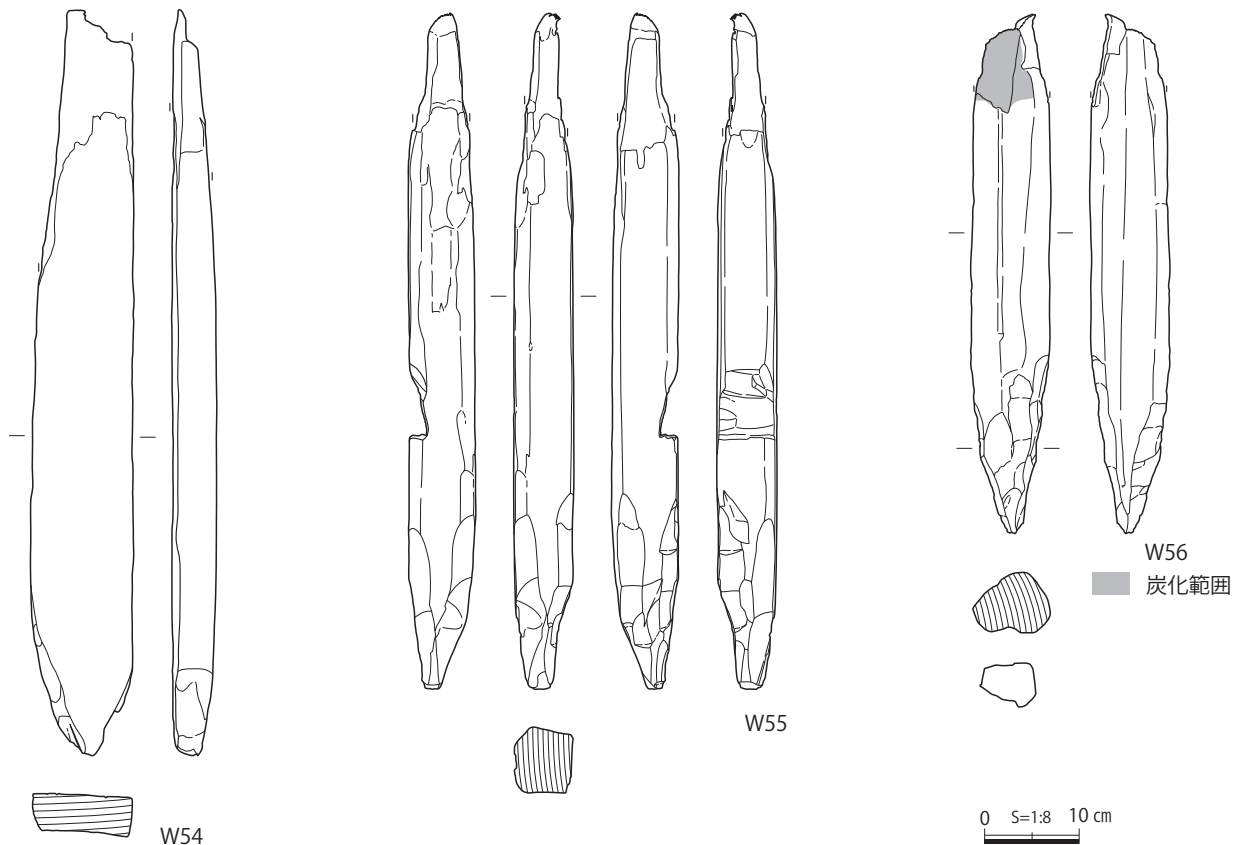
Po195は甕である。僅かに外傾して立ち上がる器壁の厚い複合口縁をもつ。外面全体に及ぶミガキ調整の後に、口縁部には平行沈線、肩部には波状文が巡る。Po196は壺である。短く内傾する複合口縁に粗雑な平行沈線が巡る。頸部には板状工具による刺突文が施される。口縁部内面はミガキで調整され、胴部内面のケズリは左方向である。Po195・196は弥生時代後期後葉に属す。Po197は北近畿系の無頸壺である。内湾する体部とそこからやや外反して短く立ち上がる口縁部をもつ。内外面ともミガキで調整されるが、内面には右方向のケズリの痕跡を残す。

第126図に示したS14は砥石である。直方体に成形されており、全面に使用痕を残す。

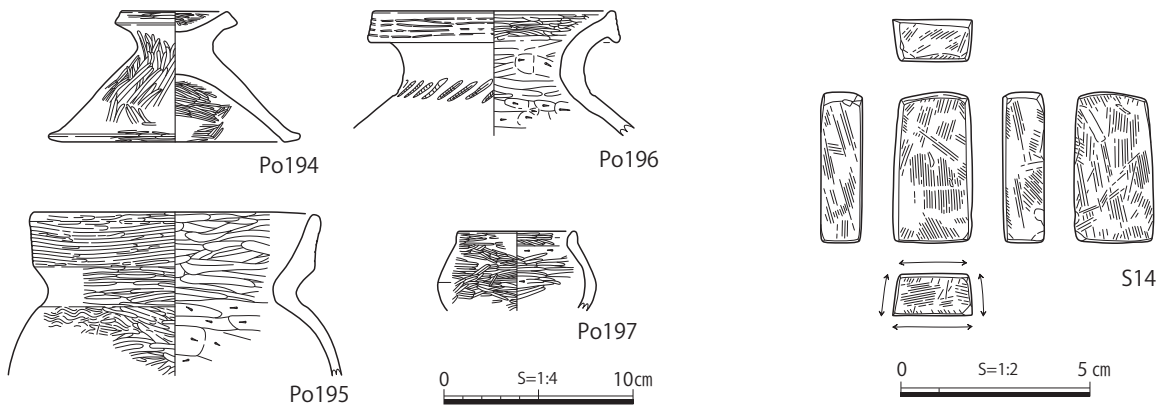
第127図には木器を示した。W57・58は木庖丁である。いずれも孔の位置で破



第123図 造成土②出土木器（1）



第124図 造成土②出土木器(2)



第125図 造成土③出土土器

第126図 造成土③出土石器

折しているため、溝の有無は確認できない。

W59は桶の底板である。ほぼ円形の平面形を呈すとみられる。

W60は壁板である。側縁付近で上縁から直角に欠込まれる。この欠込付近と、下縁に1か所ずつ他部材と接合するための方形穿孔がなされる。また、上辺側の方形穿孔に近接して小規模な穿孔をもつが、その役割は不明である。

W61は杭である。体部、先端部とも断面円形に成形されている。

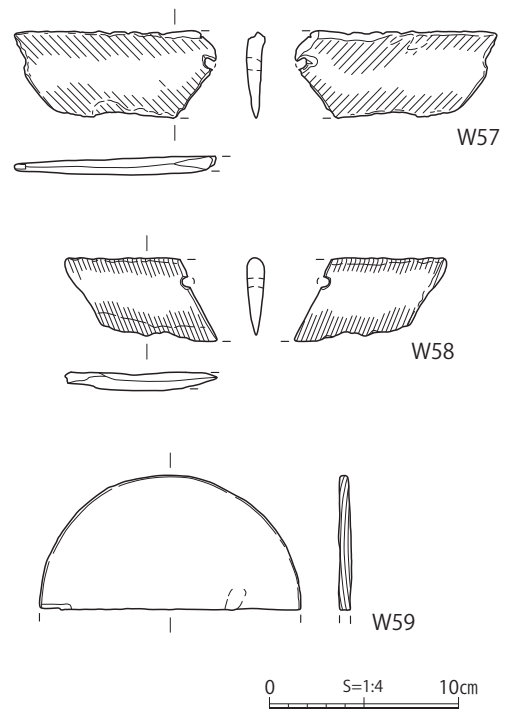
造成土④出土遺物（第128・129図）

第128図には土器を示した。Po198・199は装飾壺である。いずれも貝殻腹縁による連続刺突文で加飾される。内外面ともミガキで調整されるが、内面には左方向のケズリの痕跡を残す。Po198は胴部が球形を呈し丸底であることが確認できる。Po199の胴部は4条一単位の平行沈線が文様帯を区画する。これらは弥生時代後期後葉に属す。

Po200は高坏である。坏部上半は弱い稜を境として外反して立ち上がる。弥生時代終末期の特徴を示す。

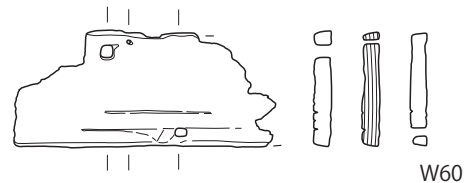
第129図には木器を示した。

W62は匙である。粗雑な加工痕を残し、粗成形の段階で破損した未成品とみられる。柄の中央部にひとつの円孔が穿たれる。W63は杭である。正面に稜をもち、三角形の断面形を呈す。



造成土⑥出土土器（第130図）

第130図には器台Po201を示した。器壁は厚く、円柱状の脚柱部、複合口縁状の脚裾部をもつ。外面はミガキで調整される。弥生時代後期後葉の特徴を示す。

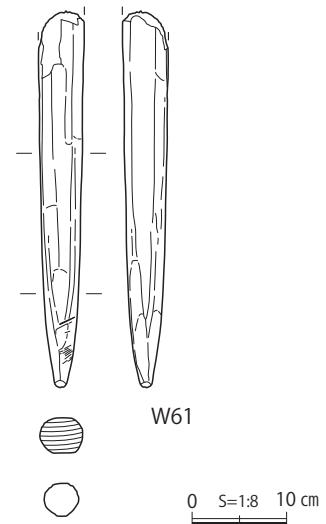


造成土出土遺物（第131～134図）

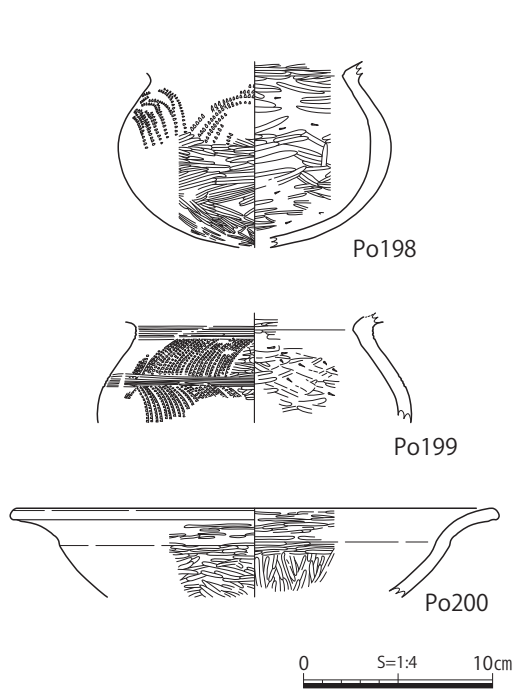
ここでは、中心域張出部から出土した遺物のうち、帰属する造成土の判別ができなかったものを一括して提示する。

第131図には土器を示した。Po202・203は甕である。内面は頸部がミガキ、胴部は左方向を中心とするケズリで調整される。Po202は短く直立する複合口縁をもち肩部には波状文が巡る。Po203の複合口縁は外反し、下端は下垂する。胴部は中位に最大径をもち、底部は明瞭である。

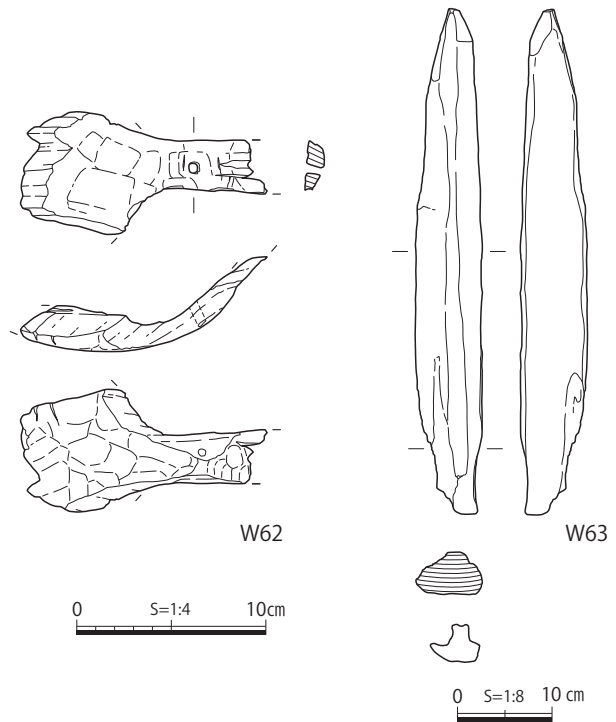
Po204は広口壺である。扁球状を呈す胴部から、外反してやや器壁の厚い頸部が立ち上がる。外面全体、頸部内面はミガキで調整される。胴部内面のケズリはナデによって不明瞭である。底部は僅かに上げ底状である。頸部の中位には、円孔が穿たれているが貫通していない。Po205・206は直口壺であり、いずれもやや内傾して短く立ち上がる頸部をもち、外面はミガキで調整される。また頸部には円孔が設けられている。Po205は胴部上半を平行沈線と貝殻腹縁による刺突文による羽状文で加飾する。胴部内面はミガキで調整される。Po206はハの字状に開く脚部をもつ。内面はハケメで調整される。Po207は壺である。球形を呈すとみられる胴部から底部が突き出す。



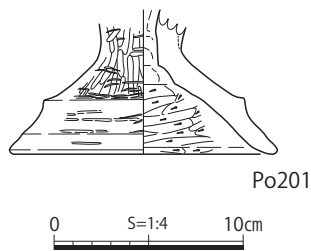
第127図 造成土③出土木器



第128図 造成土④出土土器



第129図 造成土④出土木器

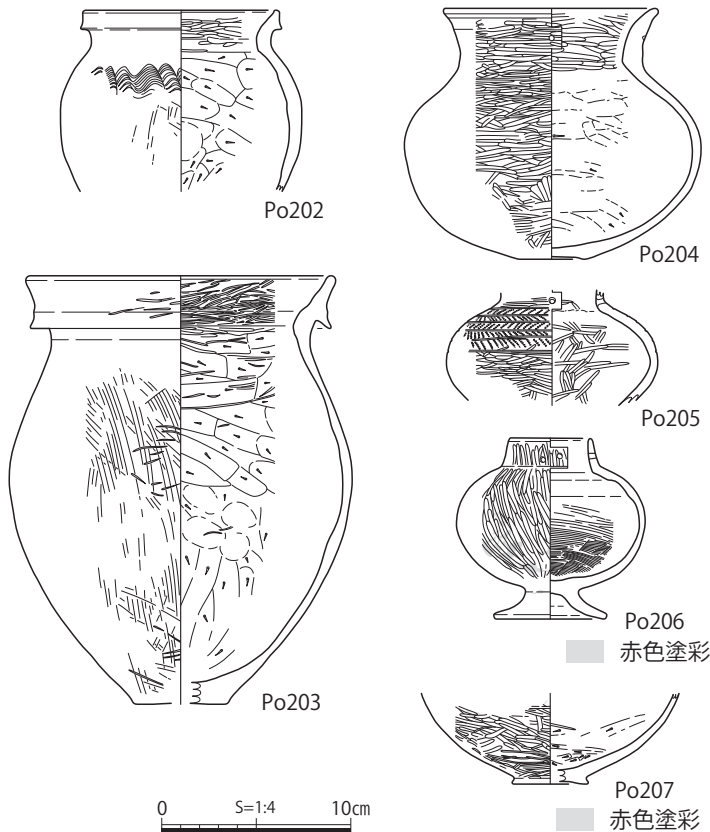


第130図 造成土⑥出土土器

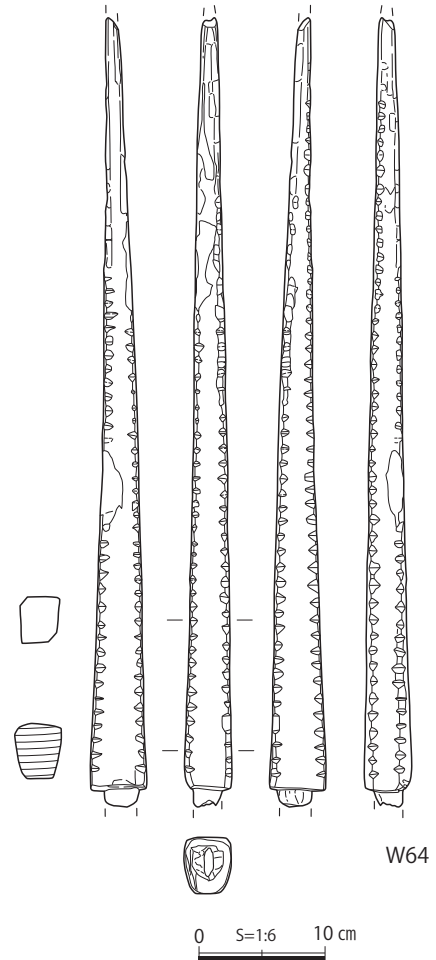
外面はミガキで調整される。

第132・133図には木器を示した。

W64は觔状木製品である。断面方形を呈す先細りの体部の四隅に連続した欠込が施される。第13次発掘調査区からも同様のものが出土しているが、本資料は基部に段を設け、他の部材と接合するためとみられるほぞ状の加工がされていることが確認できる。大きさや造作からみて建物の装飾を目的とした建築部材の可能性が考えられる。W65は腰かけであり、左右にそりあがった座部をもつ。正面の脚部間に設けた側板には方形穿孔が穿たれる。樹種同定の結果、W65はスギ製であることが判明した。出土状況を第135図に示す。W66は木包丁である。断片的な資料だが、紐孔結ぶ溝を片面に、左側縁に切り欠きをもつ、当遺跡で典型的なものであることが分かる。W67は桶である。内面に底板を留める段をもつ。底部外側からの抉り込みによって、下端部の突出が造り出されている。口縁部付近に穿たれた小孔は補修孔の可能性はある。



第 131 図 造成土出土土器



第 132 図 造成土出土木器（1）

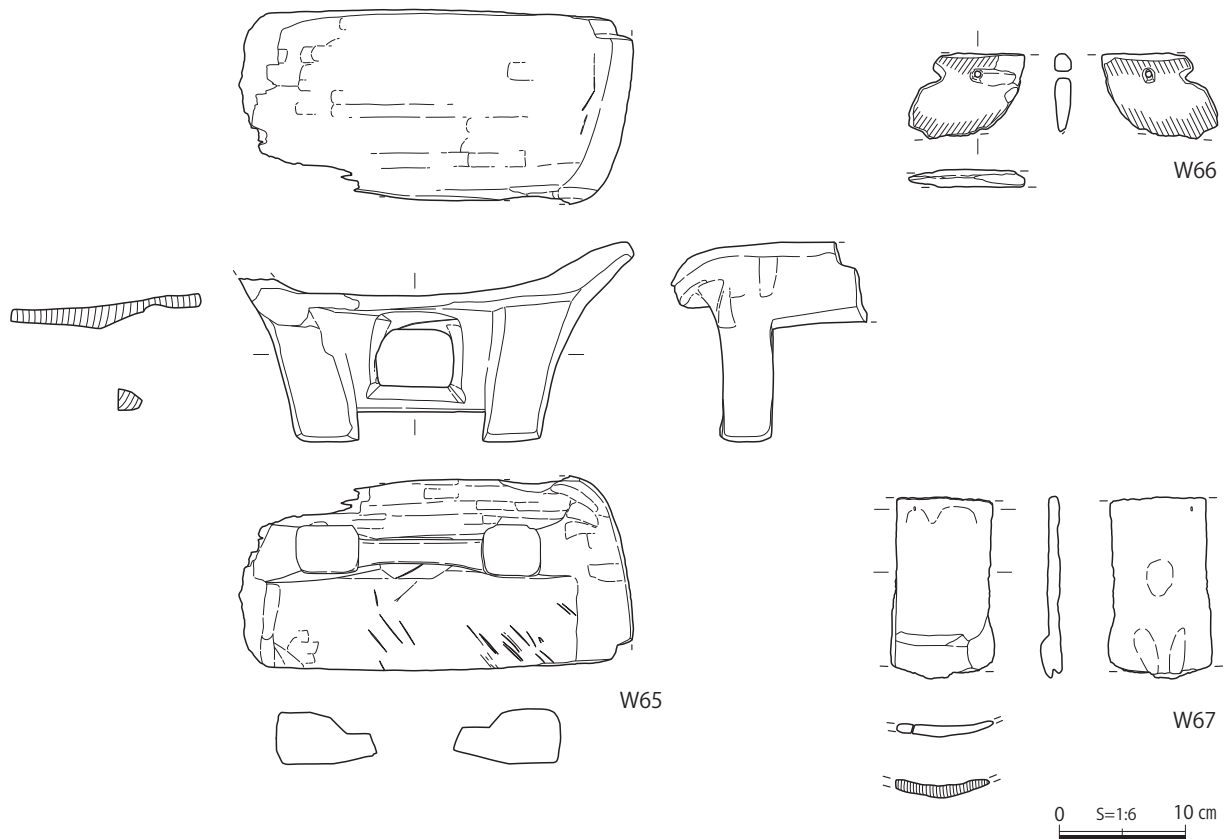
第 134 図に示した Ba 1 は縄である。折りたたむような状態でまとめた状態で埋没したものとみられる。組方は、1 次調査県道 7 区で出土した「5 本組み」で組まれたものと類似している。樹種同定の結果、イネを素材としていることが判明した（第 4 章 第 4 節）。

（2）段階 3 の中心域張出部に伴う遺構と遺物

段階 3 の中心域張部は、造成土①～③出土土器の時期的な下限から弥生時代終末期後半とみられる。この段階 3 に属す遺構はこの東側を区画する SD38-B と、84 柱穴である。中心域張出部を補強する土留めのうち最も東側に位置する土留め 1 は、SD38-B の護岸ともなっている。また、中心域張出部の北東隅に位置する土留め 6 もこの段階に伴う可能性が高い。段階 3 の検出状況はⅦ面下面検出状況（第 108 図）と共通するため、遺構の配置は SD38-B の平面図（第 136- 1 図）にあわせて示すこととする。

SD38-B（第 136 図）

第 3 段階の張出部の東側に沿ってコの字状に屈曲して走る区画溝である。検出面の標高は -0.2 ～ 0.2 m を測る。Ⅶ層および古墳時代前期造成土の下面において、当遺構に集積された多数の木器が面的に検出された。調査区北壁付近では北西 - 南東方向（N-61°-W）に、調査区東壁付近ではここからほ



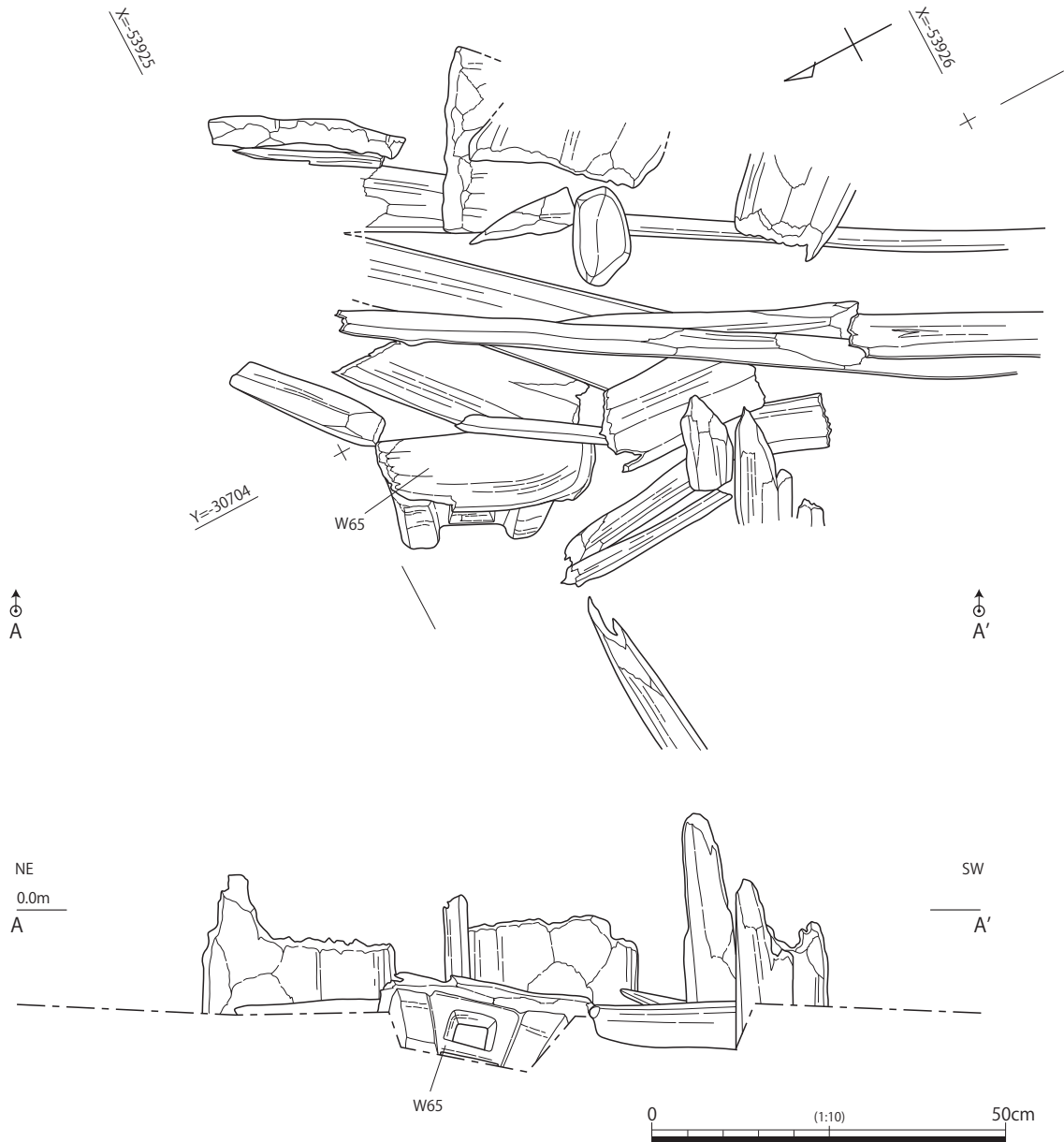
第133図 造成土出土木器（2）

ほぼ直角に曲がり北東-南東方向（N-30°-E）に軸をとる。調査区南壁付近での屈曲は北側のそれと比べやや緩やかである。全体の検出長 24.3 m、最大幅 3.1 m を測る。一部中心域張出部の土留めが護岸となるが、中心域外側の肩には一切護岸をもたない点が特徴的である。底面から肩部までの立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状を呈す。断面 A-A' では最大深 35cm を測り、埋土は黒褐色細砂シルトである。東西ベルトでの土層断面 B-B' では、土留め 1 が護岸となっていることが確認できる。ここでは最大深 44cm とやや深く、暗灰黄色シルトを等体とする埋土は 5 層に分層できる。調査区北側の北西 - 南東方向に走る部分の土層断面 C-C' では、最大深 24cm を測り、黒褐色～褐色のシルト混細砂を主体とする埋土は 5 層に分層



第134図 造成土出土編組製品

できる。いずれの土層断面においても確認できるように、当遺構は人骨を包含する SD38-Ca・b と重複している。点数は少ないながらも当遺構から散発的に人骨が出土するのは、溝の掘削や護岸の造成、あるいは埋積の過程で SD38-Ca・b を攪乱しているためとみられる。当遺構からは、多数の木器が出土しており、第137図に示した範囲の出土状況を第138図に示した。木器の大部分を占める板材はい

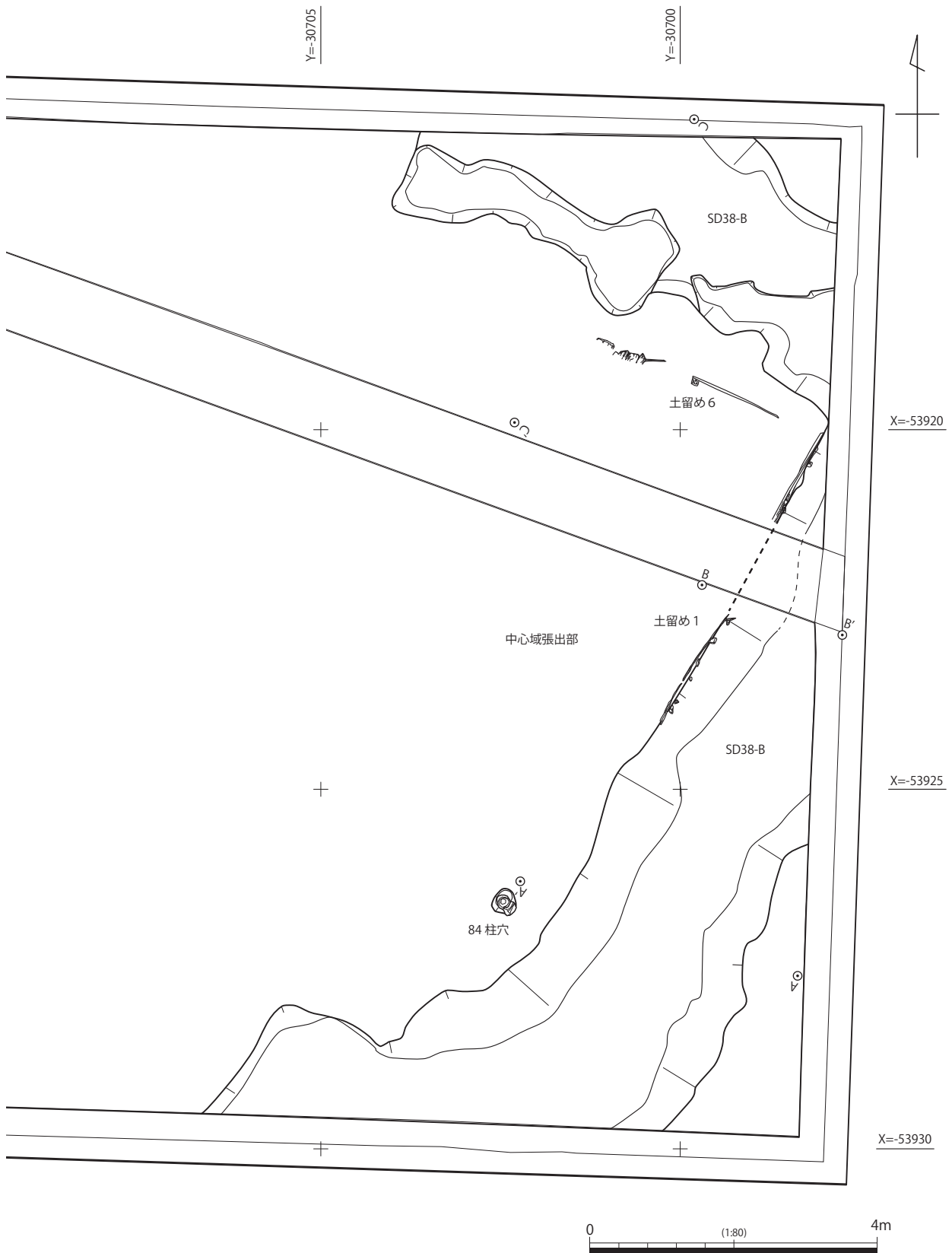


第 135 図 造成土遺物出土状況

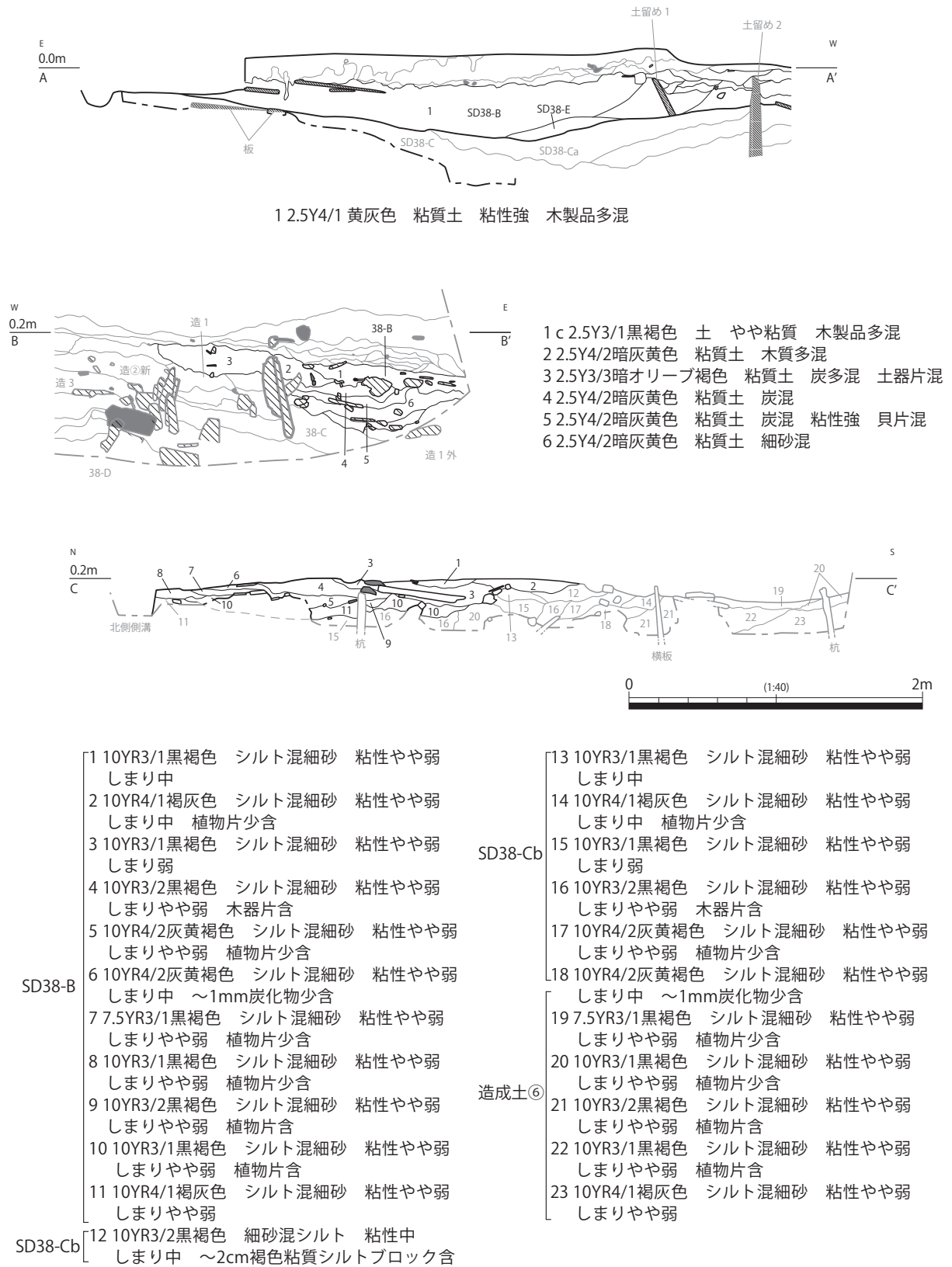
ずれの箇所においても面をなして折り重なって埋没していた。板材の他には、不明木器 W68、高杯 W75、杓子 W74 のような精製品や、衣笠 W93 など含まれるが、その出土状況に器種や機能などによるまとまりや、意図的な配置は見いだせず、板材と渾然一体となって埋没した様子が見て取れる。一方で、未加工の自然木はほとんど含まれないことも特筆される。黒褐色から灰黄褐色細砂混シルトを主体とする埋土には、加工屑とみられる木片が大量に含まれており、近辺に工房があったことをうかがわせる。

出土した土器の帰属時期は、弥生時代終末期後半を下限としている。区画溝としての存続期間は、複数の土器様式にまたがるほどではないものの、埋土の層相解析で示された土壌化の影響（第4章第1節）を受けるほどの長さはあったとみられる。この点は、幾層にも折り重なる板材の堆積と整合的といえるだろう。

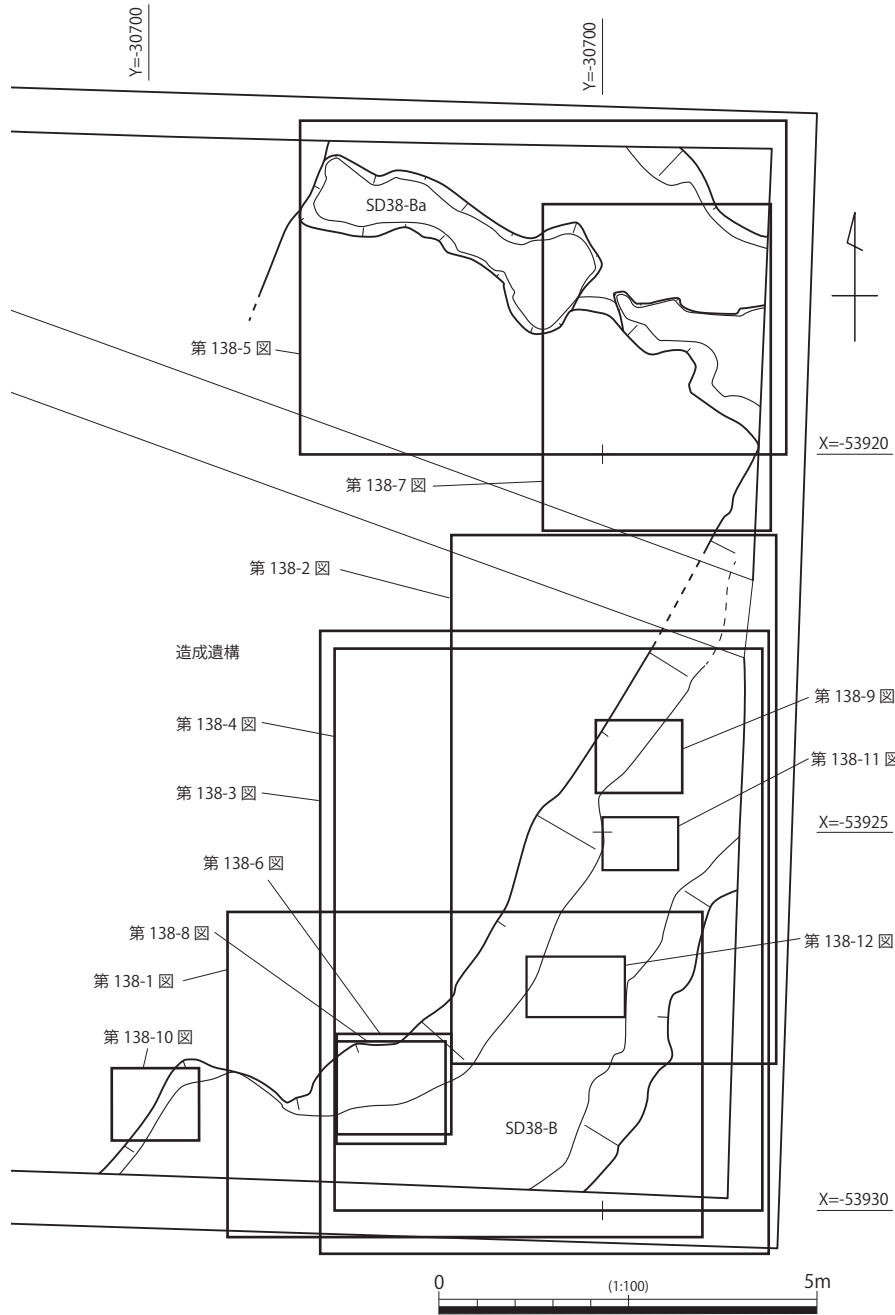
第 137 図に示した範囲の遺物出土状況を第 138 図に示す。



第136-1図 SD38-B 平面図



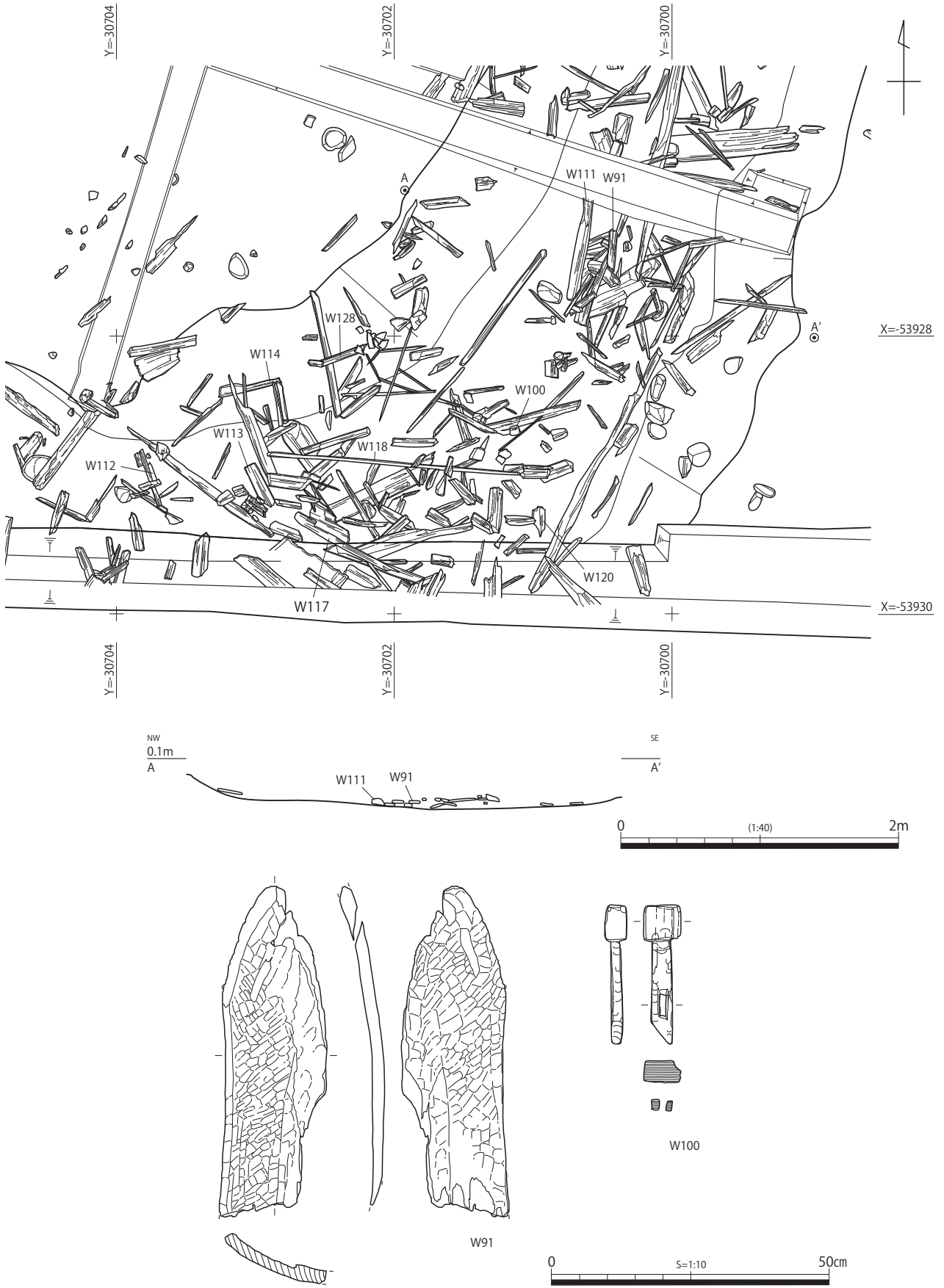
第136-2図 SD38-B 断面図



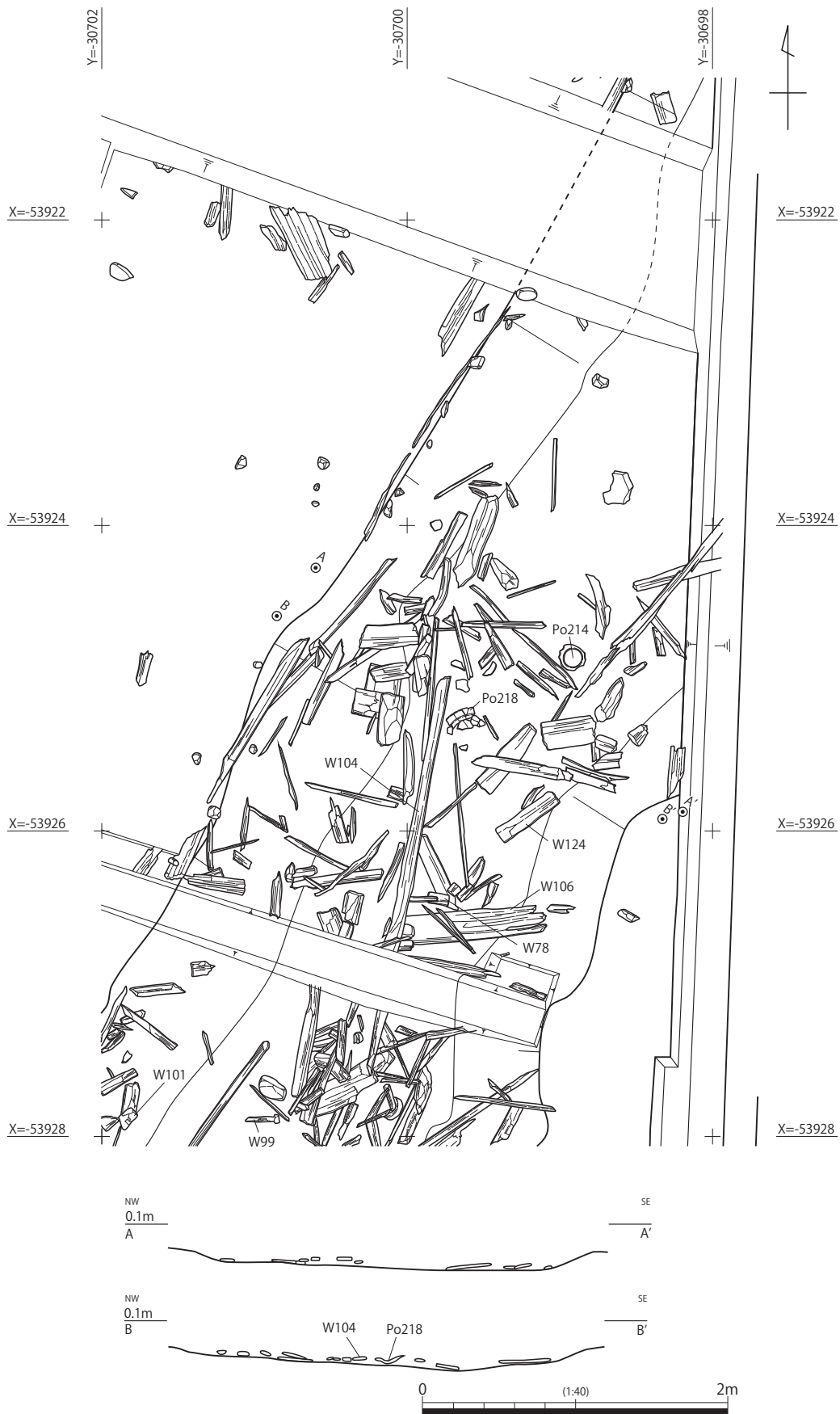
第137図 SD38-B 遺物出土状況拡大範囲

第139図にはSD38-Bから出土した土器を示した。Po208・209は蓋である。Po208は外反して立ち上がるつまみ部をもつもので、大きく広がる体部をもつ。Po209は半球状のもので内外面とも丁寧なミガキで調整される。紐を通すためとみられる一対の孔が2単位設けられている。

Po210～212は弥生時代後期に属す甕であり、いずれも加飾された複合口縁をもつ。Po210の口縁部はやや外反して短く立ち上がり、平行沈線が巡る。肩部には刺突文が施される。Po211の口縁部には上下2単位の平行沈線によって画された範囲に櫛状工具による押引文が巡る。内面は口縁部から頸部にかけてミガキで調整され、胴部のケズリは左方向である。内面は口縁部から頸部がミガキ、胴部が左方向のケズリで調整される。



第138-1図 SD38-B 遺物出土状況図(1)



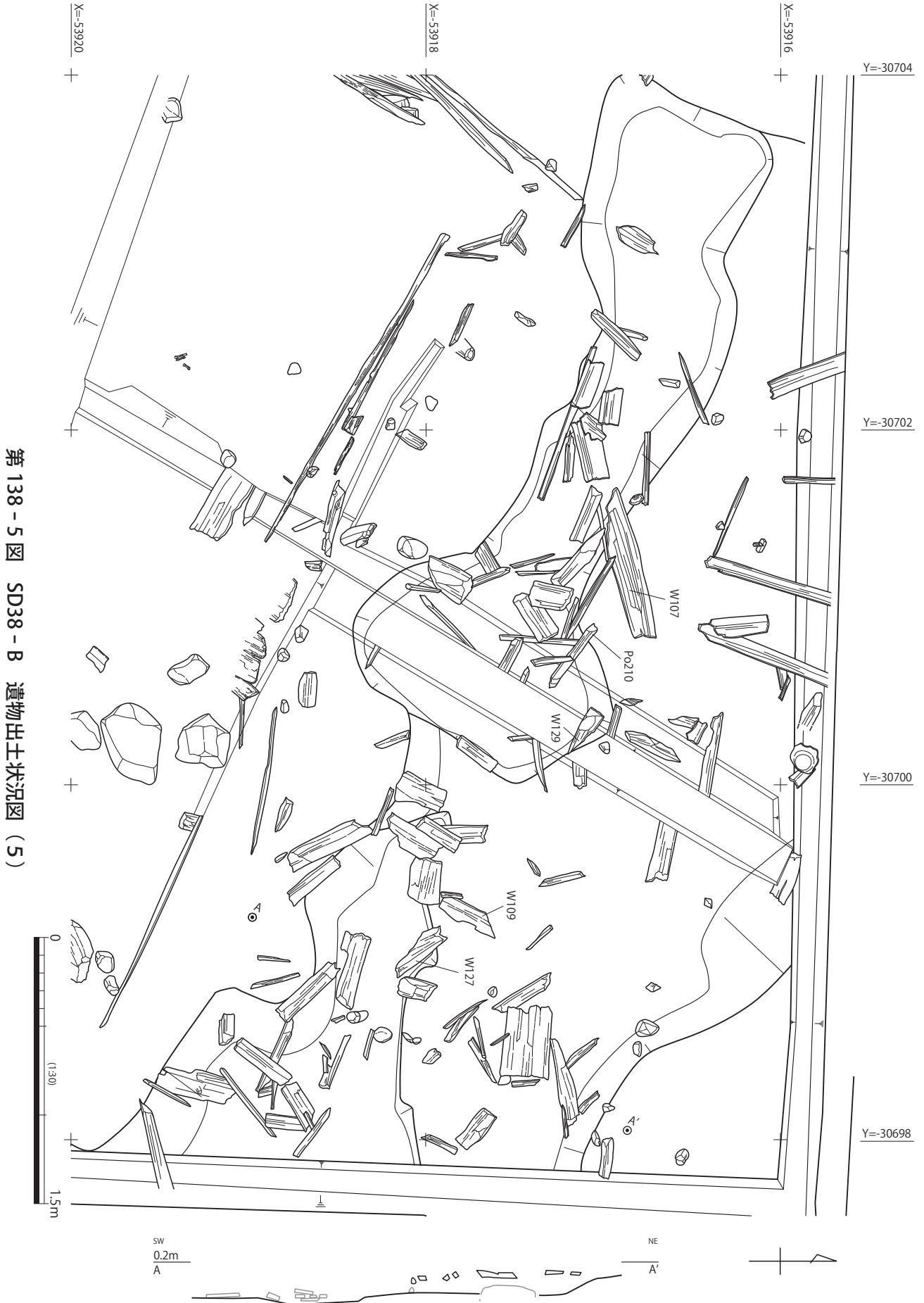
第 138 - 2 図 SD38 - B 遺物出土状況図 (2)



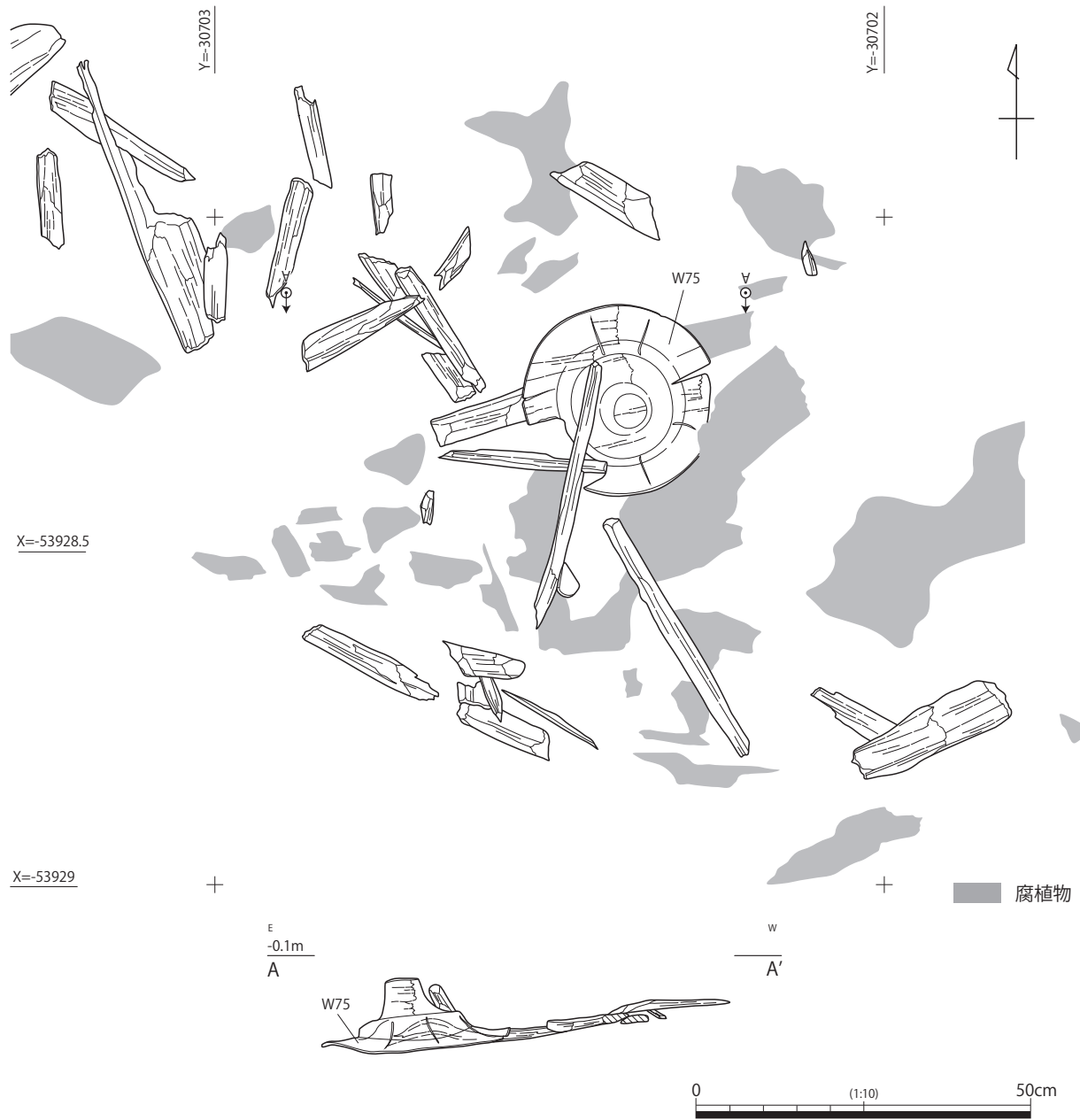
第138-3図 SD38-B 遺物出土状況図(3)



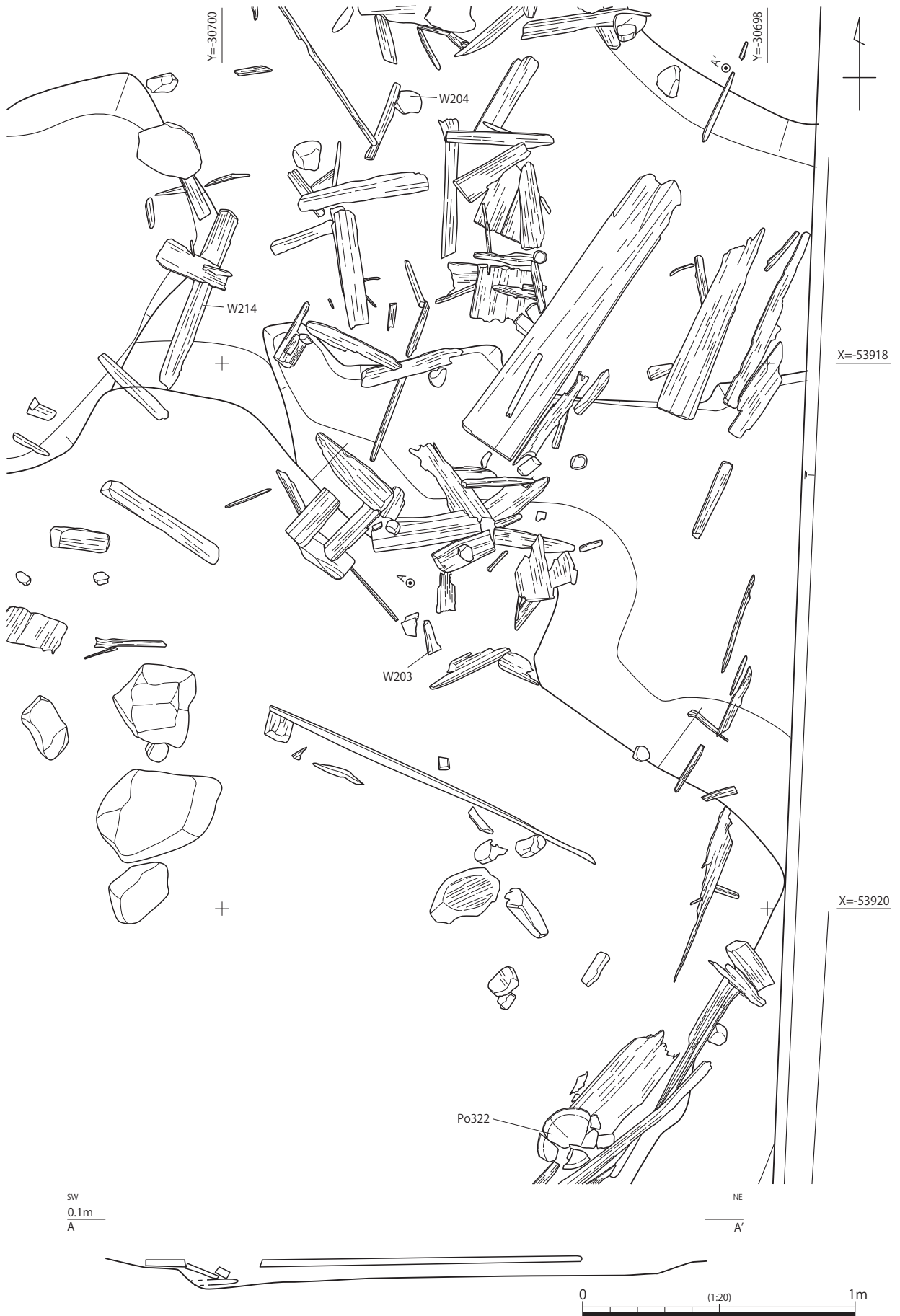
第138-4図 SD38-B 遺物出土状況図(4)



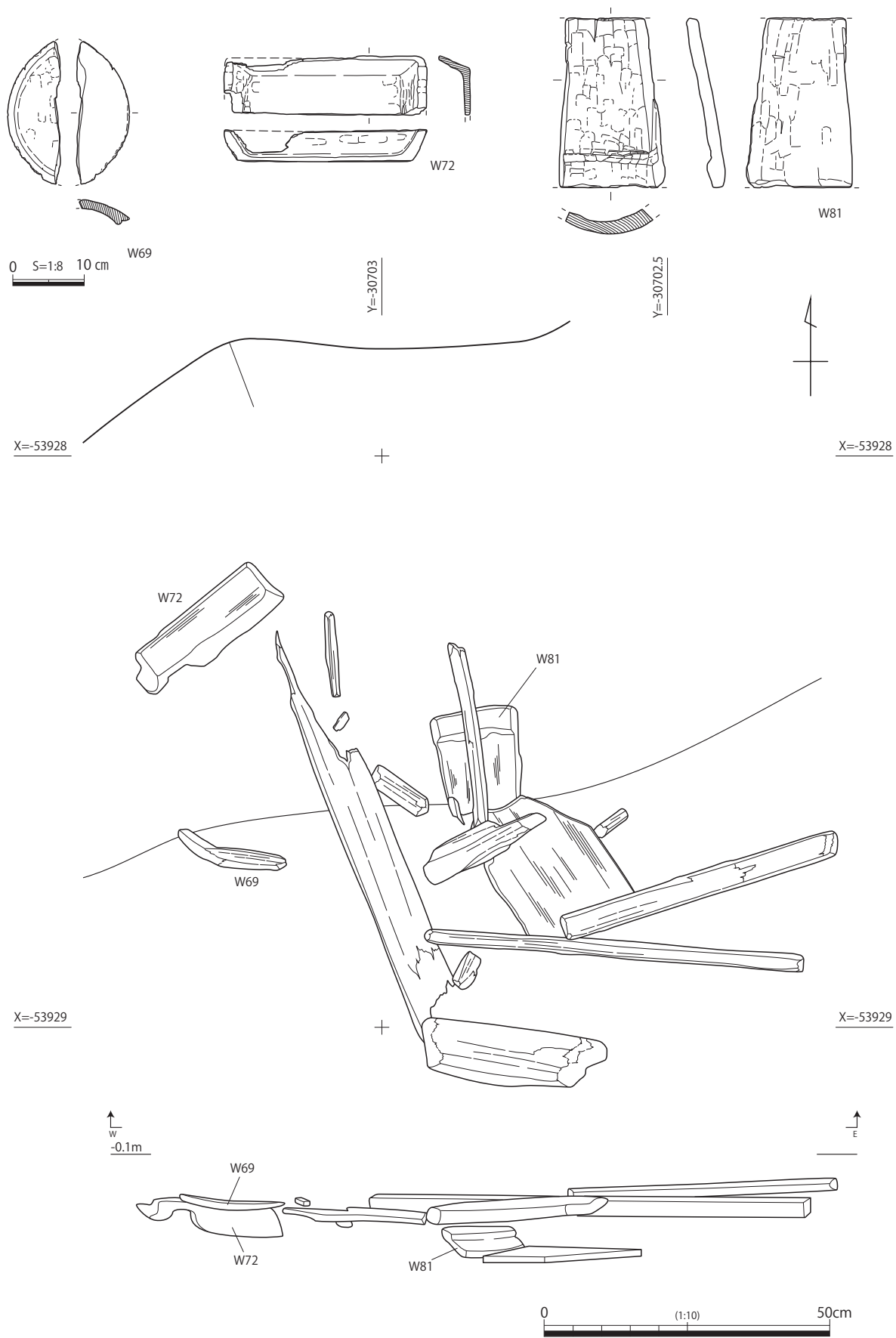
第138-5図 SD38-B 遺物出土状況図(5)



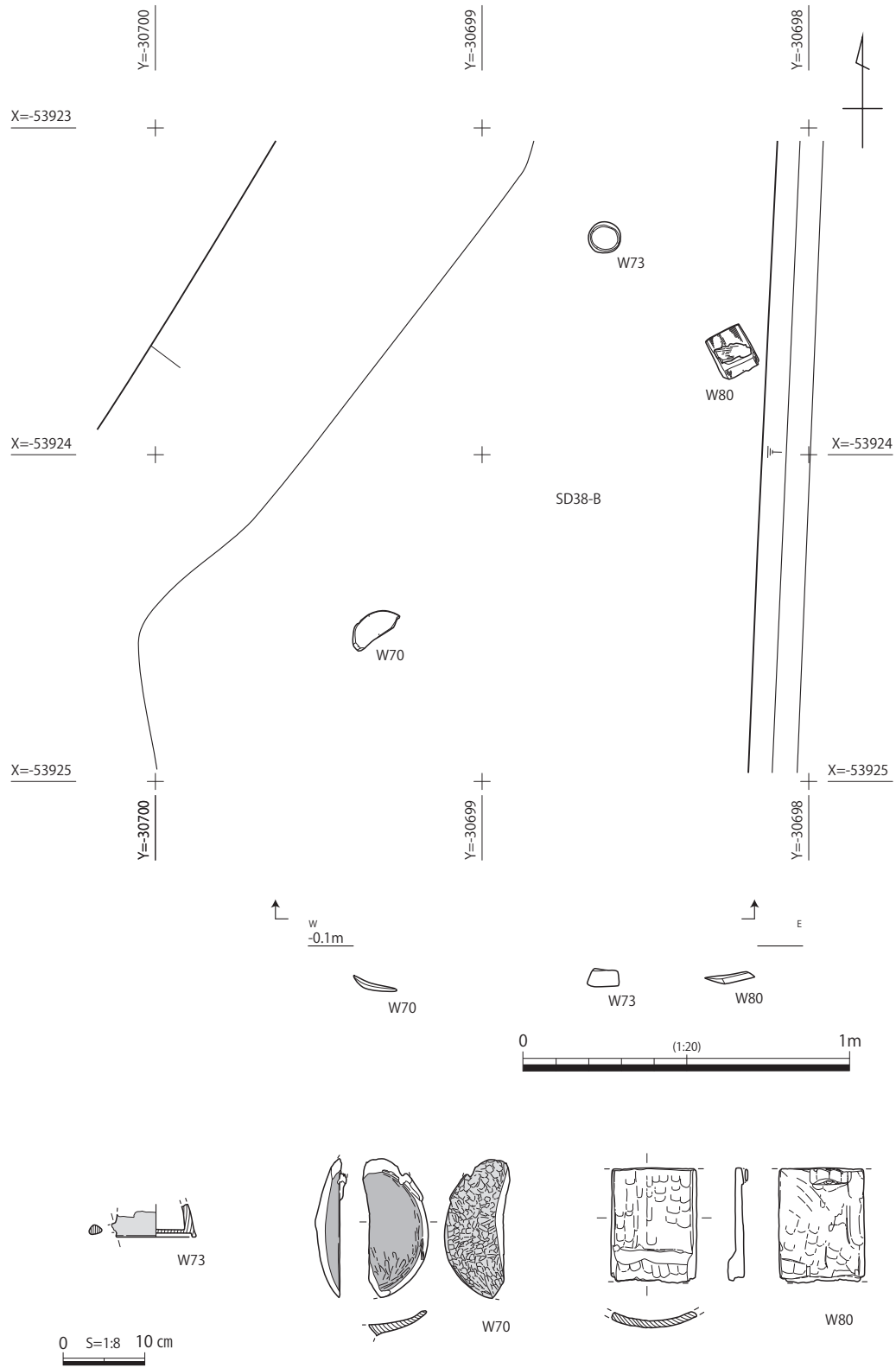
第138-6図 SD38-B 遺物出土状況図(6)



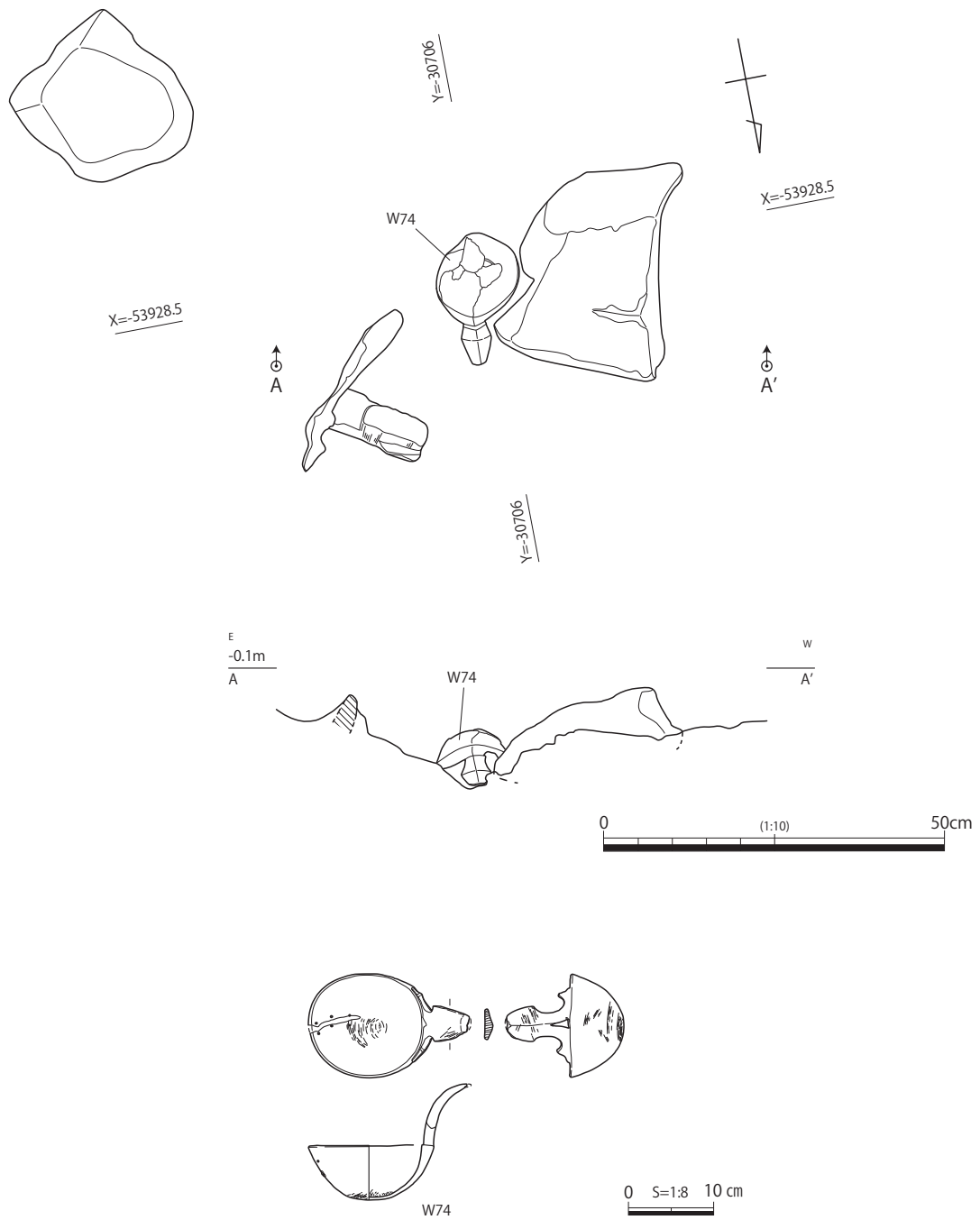
第138-7図 SD38-B 遺物出土状況図(7)



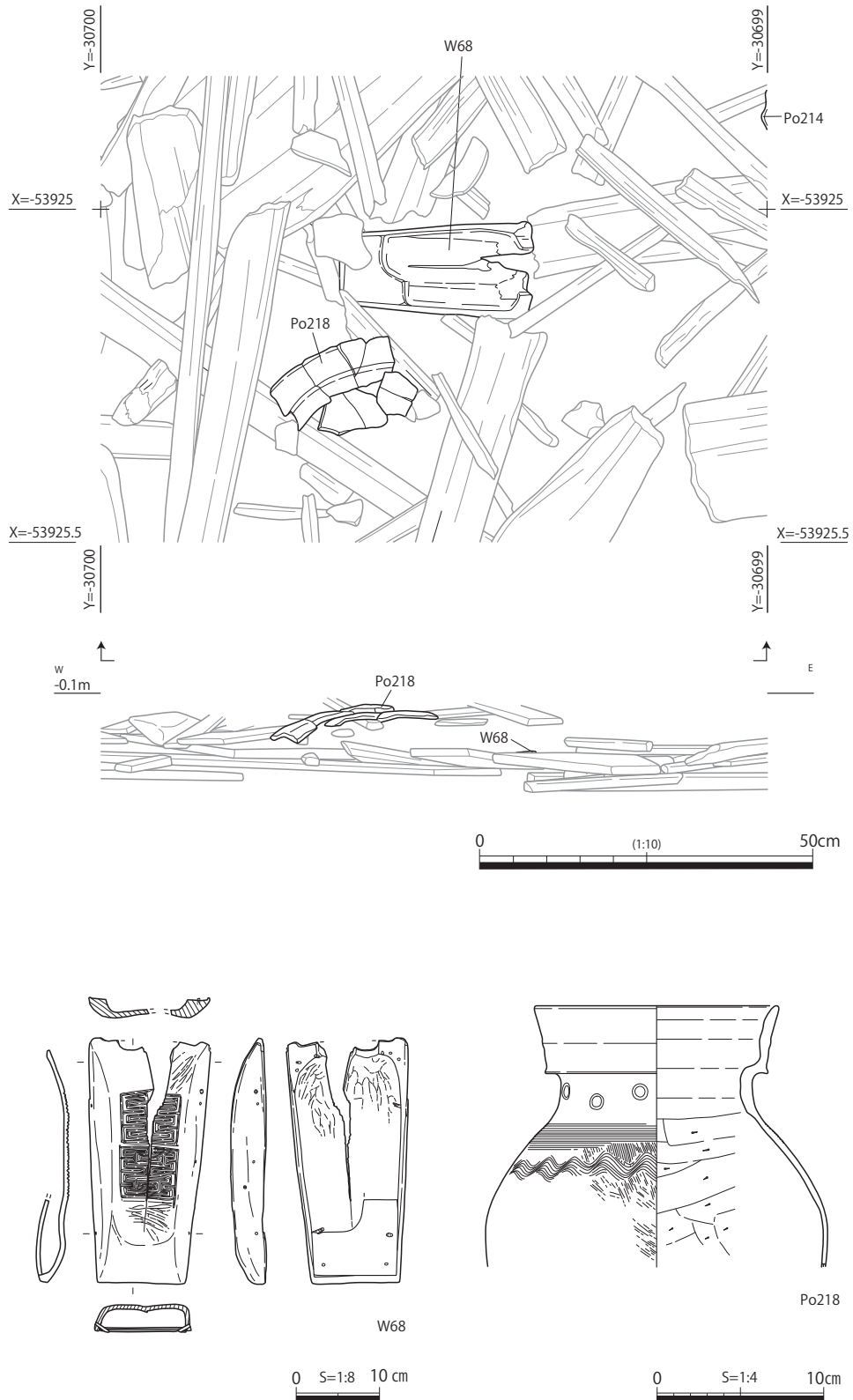
第138-8図 SD38-B 遺物出土状況図(8)



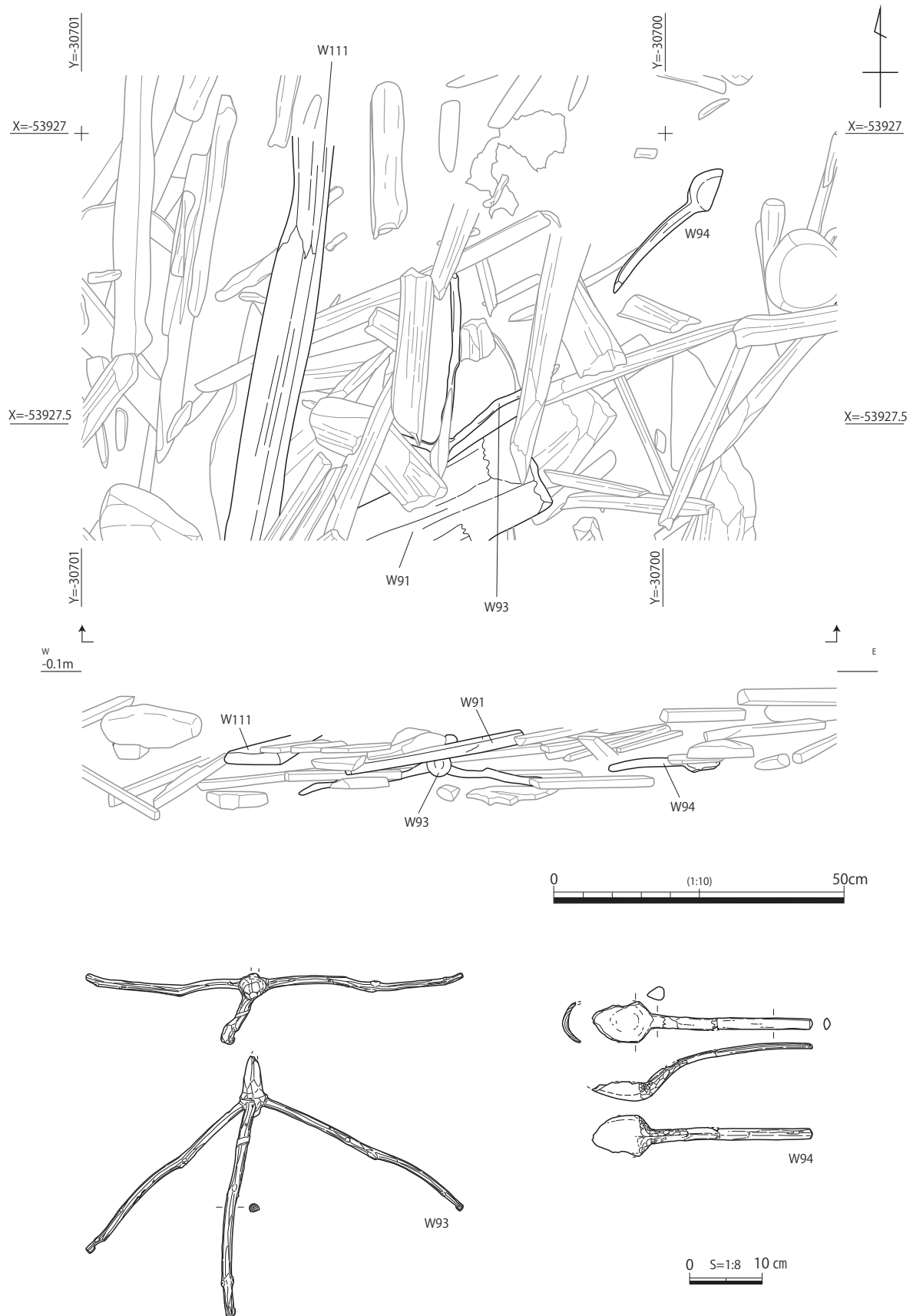
第138-9図 SD38-B 遺物出土状況図(9)



第 138 - 10 図 SD38 - B 遺物出土状況図 (10)



第 138 - 11 図 SD38 - B 遺物出土状況図 (11)



第 138 - 12 図 SD38 - B 遺物出土状況図 (12)

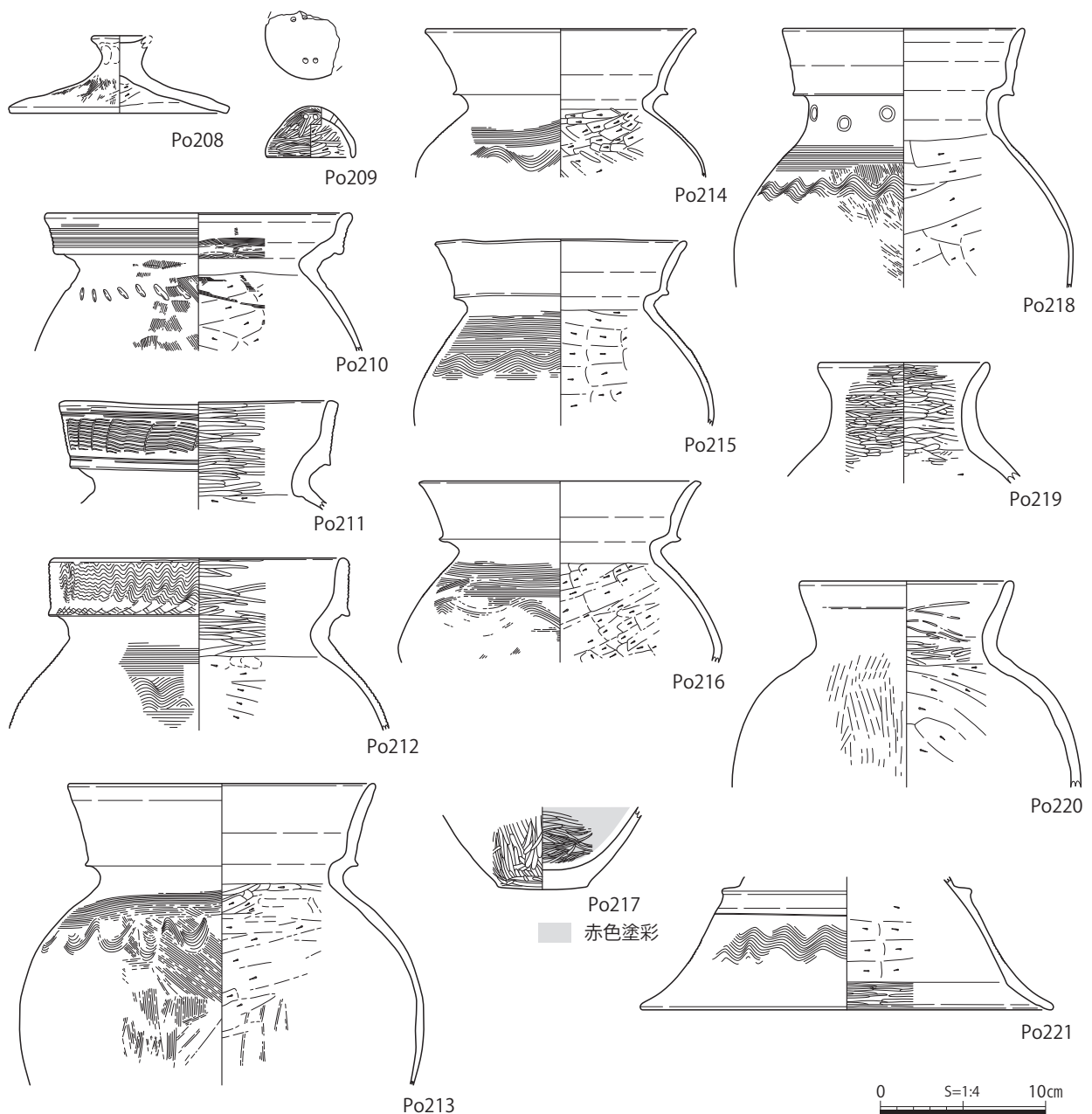
Po213～216は、弥生時代終末期に属す甕である。いずれも外反して立ち上がる無文の複合口縁をもち、肩部には平行沈線と波状文が巡る。胴部内面のケズリは右方向である。

Po217は甕の底部とみられる。内外面ともミガキで調整され、内面には赤色の塗料が残る。

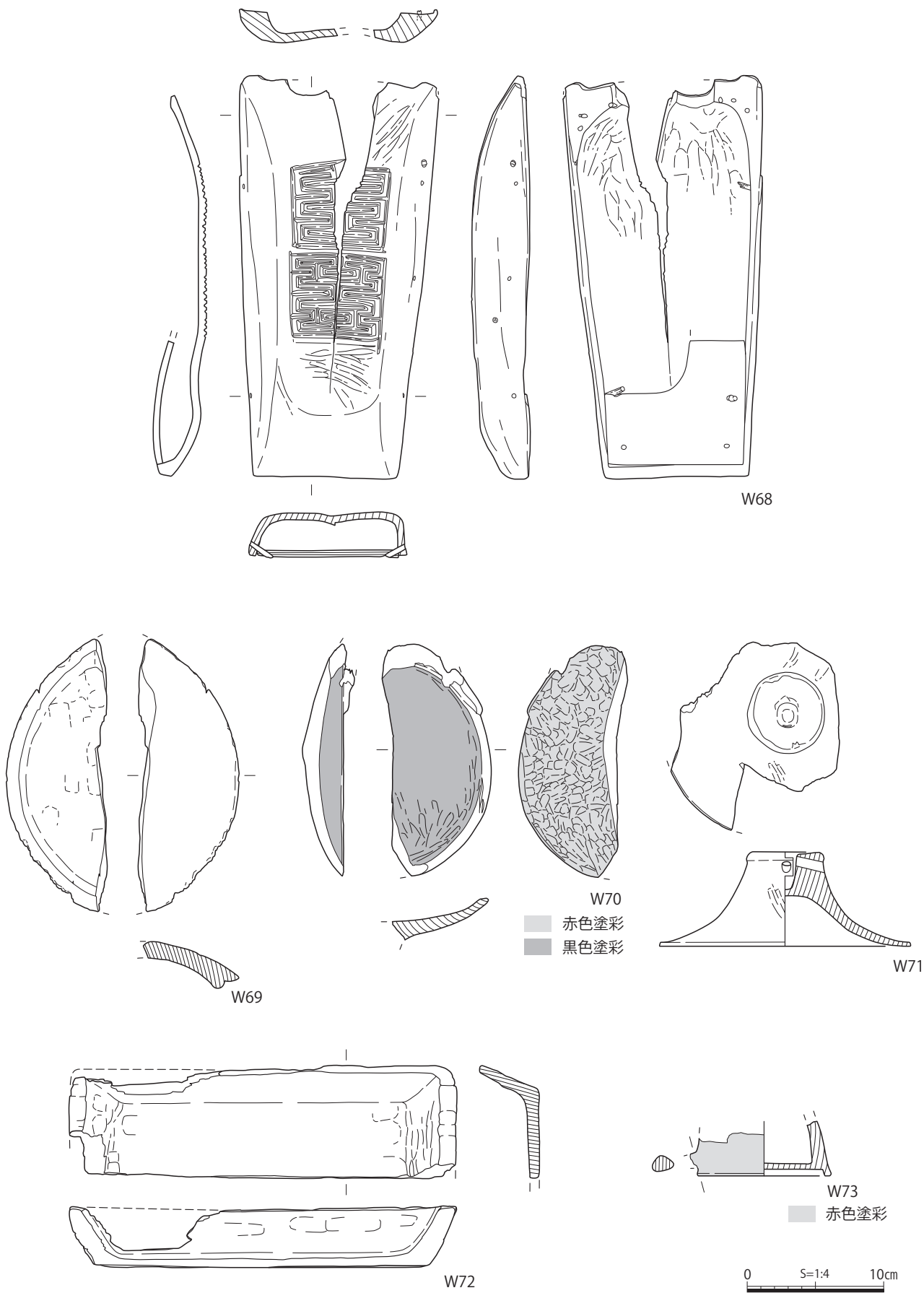
Po218は複合口縁をもつ壺である。頸部には竹管文、頸部には平行沈線と波状文が巡る。Po219・220は単純口縁の壺である。Po219の頸部から口縁部は外反して立ち上がり、内外面ともミガキで調整される。Po220は直線的に立ち上がる口縁をもち、胴部は粗雑なハケメで調整される。Po221は鼓形器台である。器壁は薄く、脚部には波状文がめぐる、脚裾部の内面はミガキで調整される。

第140～153図はSD38-Bから出土した木器である。

第140図に示したW68～72は容器あるいはその可能性があるものである。W68は身と蓋からなり、



第139図 SD38-B出土土器



第140図 SD38-B 出土木器 (1)

斜めに打ち込まれた目釘によって接合されている。身は外面の切削と内面の削り込みによって、縦断面は弓状、横断面は逆台形状に成形されている。上端には、左右にそれぞれ短い突起を1つずつもち、中央に半円状の削り込みがなされる。蓋を接合する身の表面の縁には蓋を嵌め込むための段が設けられている。蓋は左側縁がアーチ状に大きく削り込まれている。残存する目釘の位置からは、この蓋が右側縁と上端部付近は覆っていたものの、左側縁では大きく開いていたと推定される。このような木器は類似する出土例がなく、器種および用途は不明である。

もうひとつの大きな特徴は身部の裏面は複雑な文様の陽刻によって加飾される点である。この文様は方形の区画内を充填しており、上下2単位が認められる。いずれも流水文に類似するが、上下の単位でそのパターンは異なる。

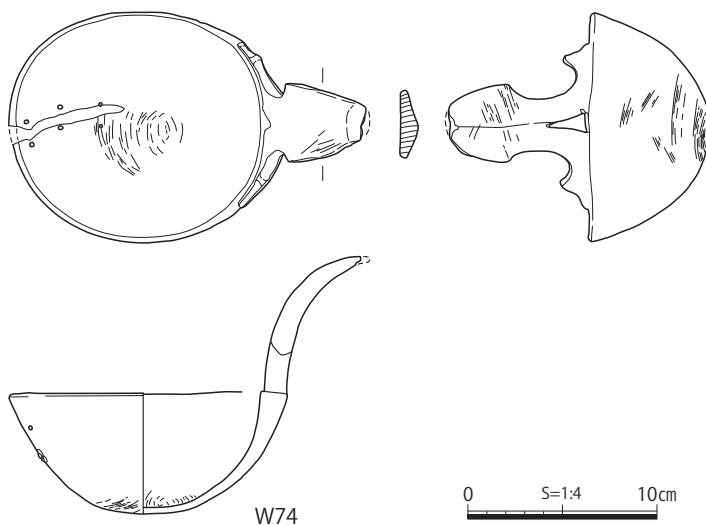
W69は蓋で、円形の平面形を呈すとみられる。裾部内側に巡る鈍い突帯から栓蓋とみられる。W70は高杯である。杯部片側の口縁部に飾り耳の一部とみられる突起が残存する。外面は赤彩、内面が黒彩される。W71は高杯の脚部でありハの字状に広がる裾部をもつ。平坦な上端部には脚柱部を接合するための貫通しない円孔が、側面からはこの円孔に接続するダボ孔が設けられている。

W72は槽・盤類である。底部に脚をもたないもので、平面形は長方形、断面形は逆台形を呈すとみられる。

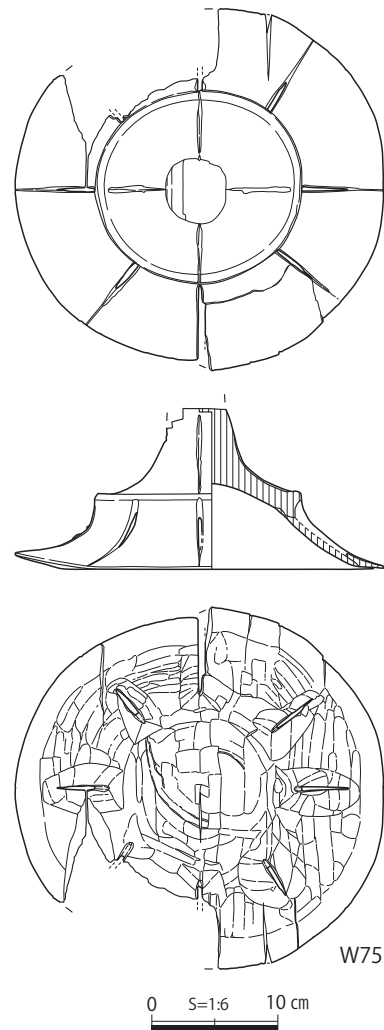
W73は椀・杯形容器である。内傾する体部に高台が続き、上げ底となる。体部片側には把手をもつ。外面全体が赤彩される。

樹種同定の結果、W68はスギ製、W70はカヤ製、W71・73はクワ属製であることが判明した（第4章第4節）。

第141図に示した杓子W74は半球状の体部をもつもので口縁部から外反して立ち上がる飾り耳をもつ。柄の基部中央部には三角形の透かしが設けられる。柄とその基部の左右に設けられた山形の突起は一連の削り込みで成形され



第141図 SD38 - B 出土木器 (2)

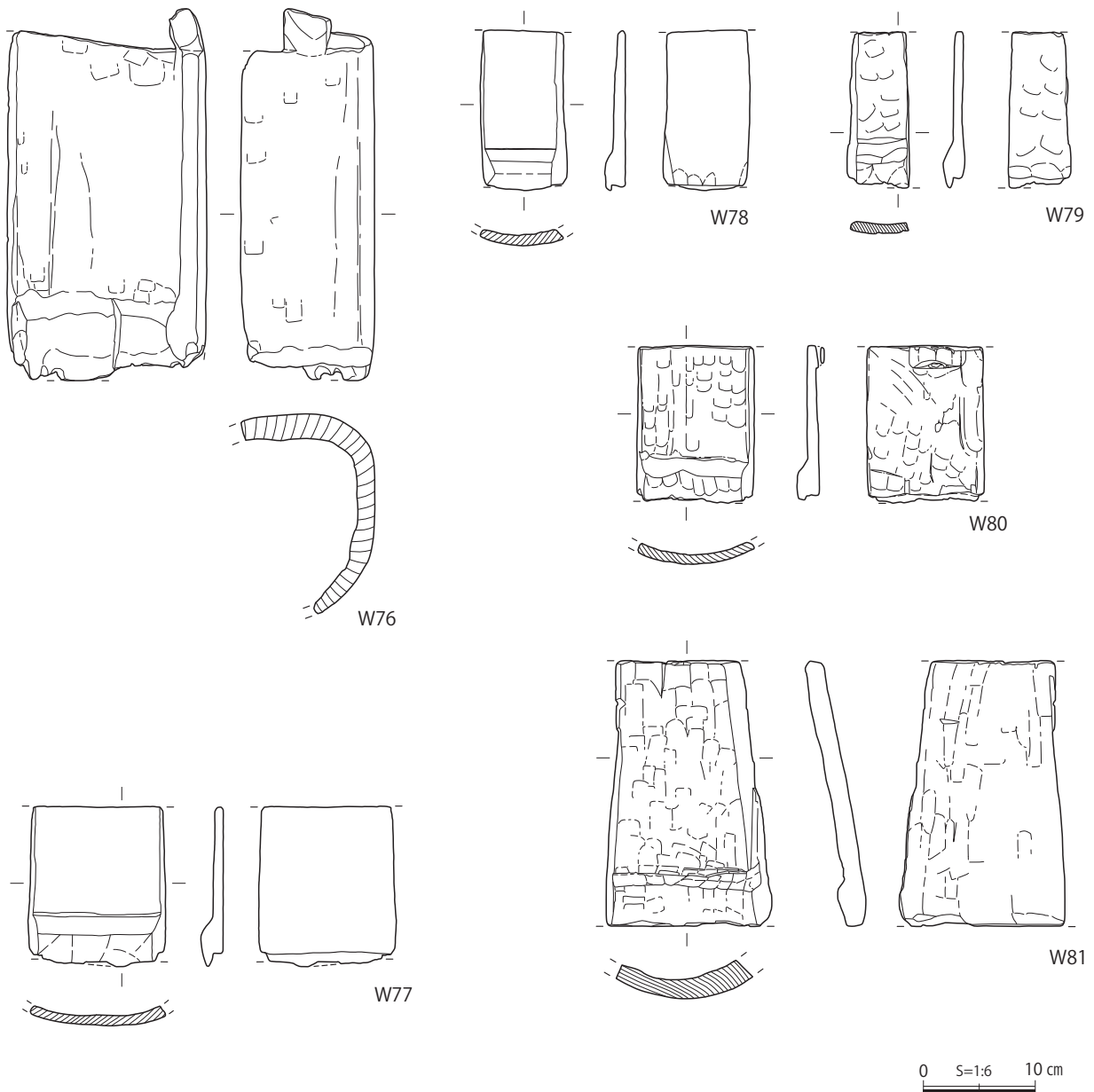


第142図 SD38 - B 出土木器 (3)

る。体部には3対の補修孔が認められる。樹種同定の結果、当資料はエノキ属製と判明した（第4章第4節）。

第142図に示したW75はいわゆる花卉高杯の脚部である。脚柱部と脚裾部を段で区画し、ハの字状に開く脚裾部にスリットを施す意匠は典型的なものといえる。脚柱部を均等に4分割する形で、縦方向の線刻がなされる。さらに、脚裾部には、この線刻の延長部と、その中間の位置、すなわち脚裾部を8分割する形で縦方向のスリットをもつ。荒く成形された痕を残す脚裾部内面では、このスリットにあたる箇所を抉り込み、厚を減じていることが分かる。当遺跡の花卉高杯はヤマゲワ製のものが多く、当資料は樹種同定の結果、カヤ製と判明した（第4章第4節）。

第143図には桶を示した。いずれも針葉樹を縦木取りしたもので、底部付近が肥厚し、内面に段をもつ。W76の胴部は平面が小判形、立面が筒形を呈すとみられる。直線形の把手をもつとみられ、



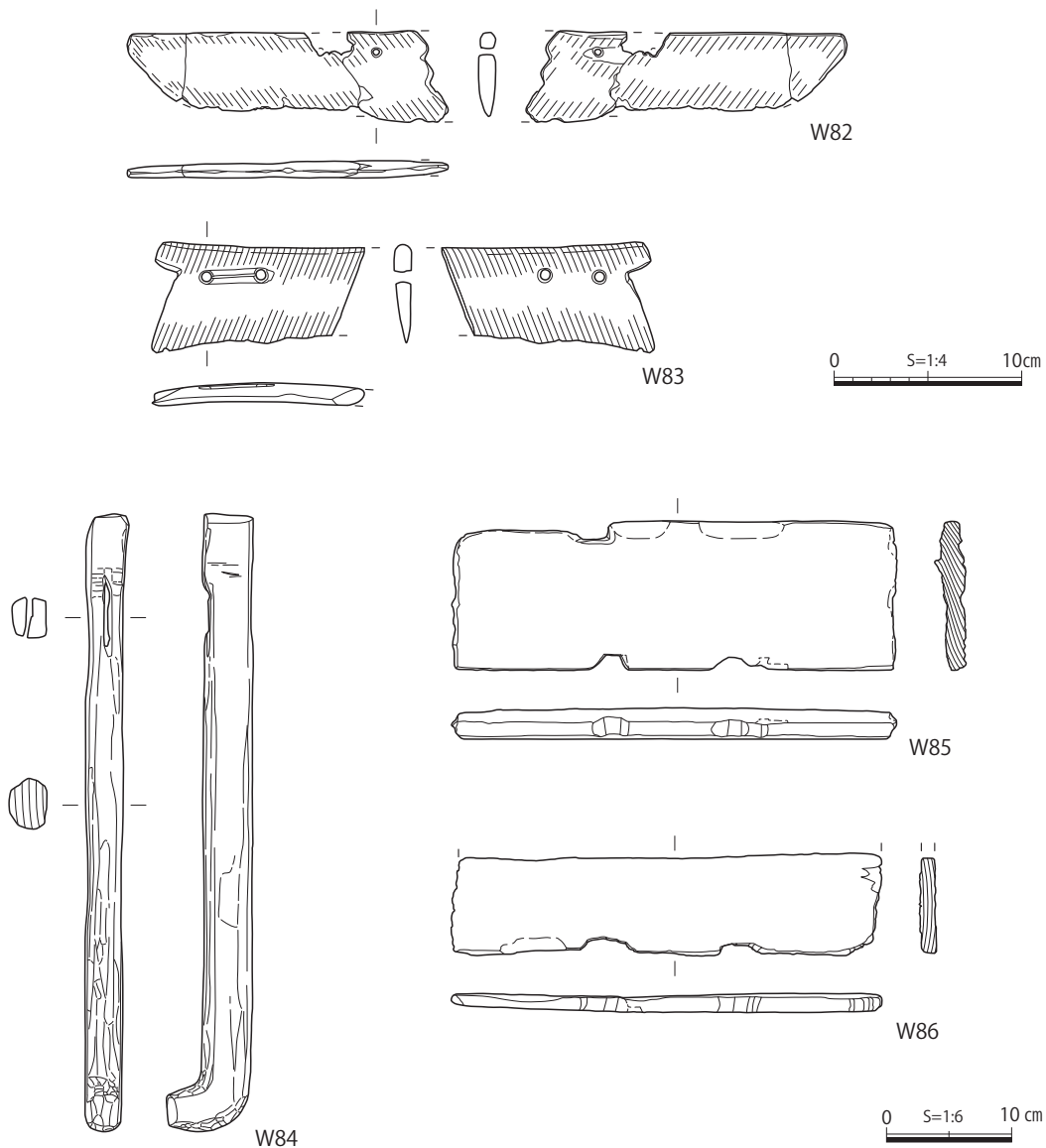
第143図 SD38 - B 出土木器 (4)

口縁部の長辺側にその一部が残存している。W77～79は残存度が低く、平面形は明らかではないが、いずれも直立する胴部をもつものであり、底部外側からの抉り込みによって、下端部の突出が造り出されている。W80は口縁部外側に平面半円形の紐孔突起をもつ。

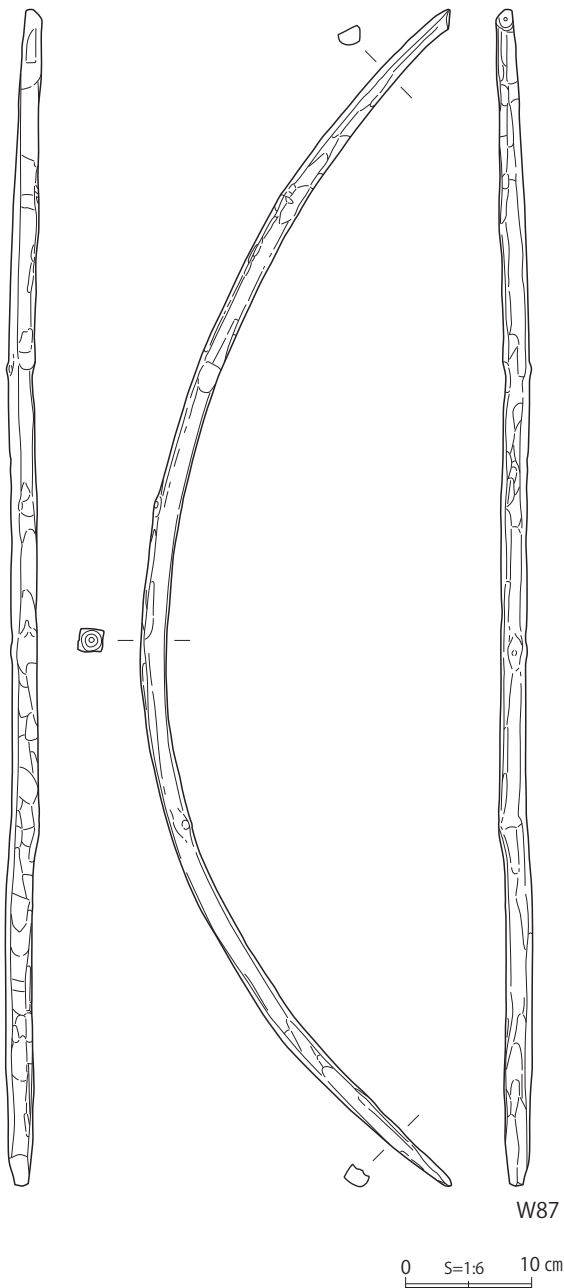
W81は他のものより大型で、内傾する胴部をもつ。

第144図には農具を示した。W82・83は木庖丁である。いずれも平行四辺形の器形を呈すとみられ、2孔1対の紐孔を結ぶ溝を片面のみにもつ。W83は横断面がやや湾曲し、左側縁に切り欠き状の屈曲が確認できる。W84は柄である。上端付近に設けられた刃部の装着孔は細くスリット状で、直線的な柄に対し直角であることから、本資料は金属製鎌の柄の可能性が高い。滑り止めとみられる下端の屈曲は、本遺跡から出土している木鎌にも認められるものである。ヤマグワとみられる芯去材を素材としており、刃部付近は方形、握り部分は不整形の断面形を呈す。

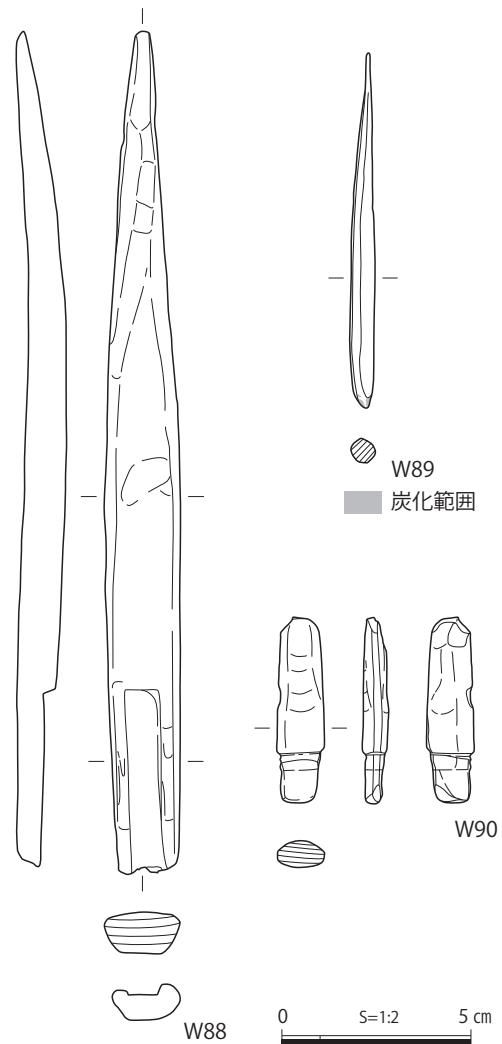
W85・86は田下駄である。いずれも長軸方向の側縁に台形の抉りをもつ、当遺跡において典型的



第144図 SD38-B 出土木器 (5)



第145図 SD38-B 出土木器 (6)

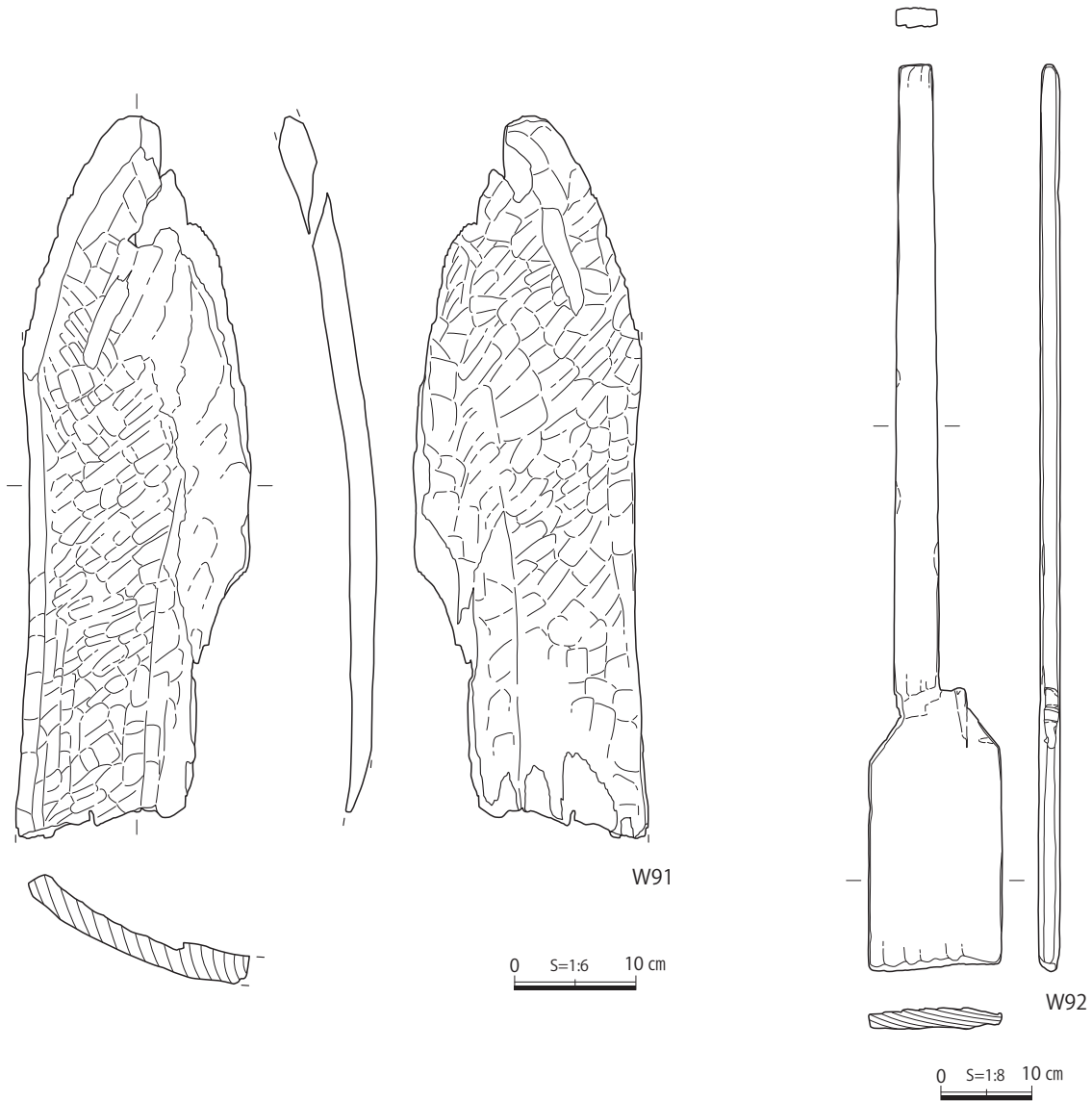


第146図 SD38-B 出土木器 (7)

な類型のものである。

第145図に示したW87は弓である。正面の切削を中心に整形しており、側面と裏面には枝の痕を残す。握りは方形の断面形を呈す。端部には弦をかけるための袢りはないが、正面を平坦に整形している。

第146図にはヤスと不明木器を示した。W89はヤスである。先端と基部の整形により、不整六角形の断面形を呈す。基部の一部に炭化が認められる。大きさ、形状ともに当遺跡で出土する木製ヤスとしては典型的なものである。W88は刺突具とみられるが、これとは隔絶した大きさである。またこのように扁平で全体が反り返る形状のものは、骨角製の組み合わせヤスにも認められるが、基部に



第 147 図 SD38 - B 出土木器 (8)

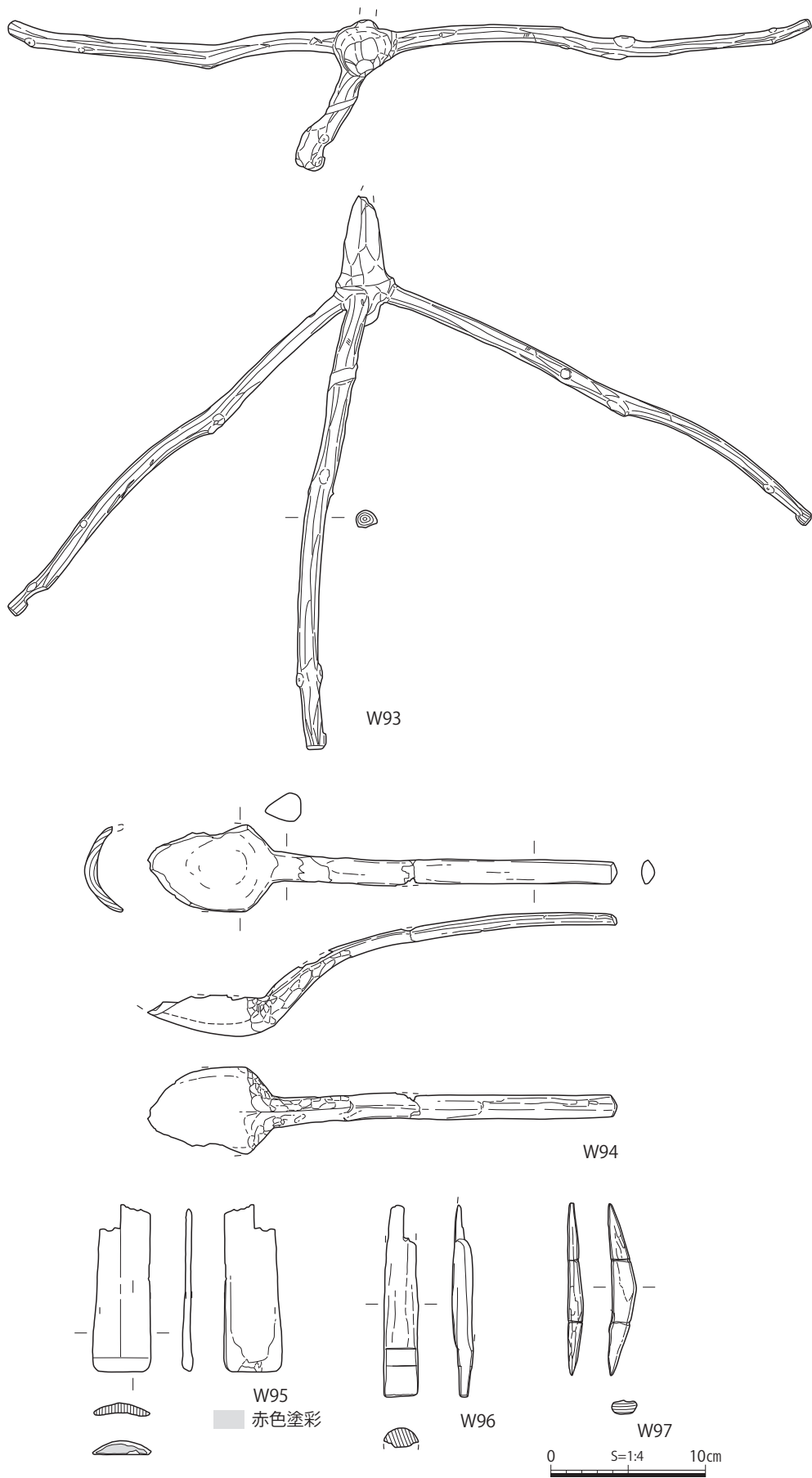
設けられた長方形の溝は、それらの基部にはみられない造作である。W90 は不明木器である。段を設けて基部を作出する点は木鍬に類似するが、全体的に扁平な形状で、先端は丸みをもつ。

第 147 図には船と櫂を示した。W91 は船である。断片的な資料であるが船首先端には平坦面をもたないものとみられる。船首には前方に向け斜めに粗雑な孔が穿たれる。船体がそれほど厚くないことから田舟の可能性もある。W92 は櫂である。身と柄は一体で成形され、柄からなで肩状に平面長方形を呈す身に移行する。ただし、本資料は柄と身の中心軸がずれており、実際に使用されたものとするには疑問が残る

第 148 図には衣笠、匙、不明木器を示した。

W93 は衣笠である。幹を軸木とし、放射状に分岐する枝を腕木とするものである。軸木の上端は尖らせ、残存する 3 本の腕木はいずれも先端付近に抉りをもつ。

W94 は匙である。柄は身から緩やかに外反しながら伸び、裏面には長軸方向の弱い稜をもつ。樹



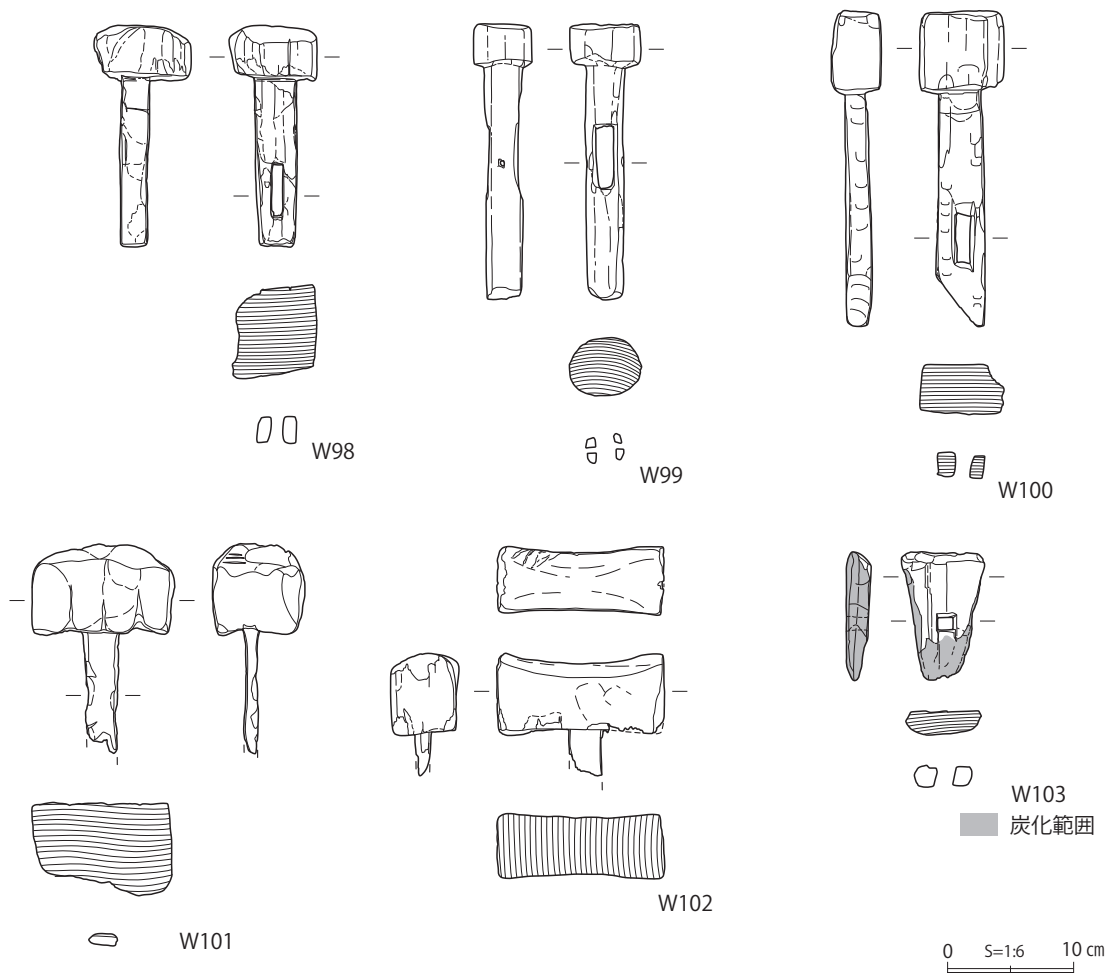
第148図 SD38-B 出土木器 (10)

種同定の結果、当資料はイヌガヤ製と判明した（第4章 第4節）。

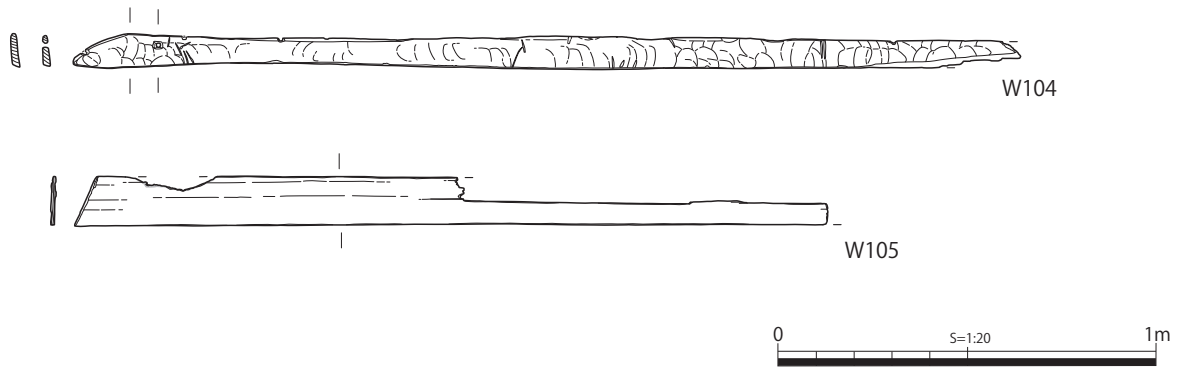
W95～97は不明木器である。W95は扁平なへら状のものであるが、横中央付近に長軸方向の弱い稜をもち、横断面は僅かに湾曲する。下端は赤彩される。W96は横断面が楕円形を呈す棒状のものとみられるが、下端は正面を面的に削ることによって厚みを減じ、方形に加工されている。W97は上下段と上下に1条ずつ線刻が巡る。方形穿孔をもたないタイプの栓に似るが、両端とも尖る。

第149図には栓を示した。W98～100は、軸部の長方形穿孔が残存している。W98は上端部は断面方形を呈し、方形穿孔は下端近くに位置する。W99は上端部が断面円形を呈し、軸部中央部の方形穿孔に直交して目釘孔とみられる穿孔がなされる。W100は断面長方形の上端部をもち、下端部は斜めに削られる。W101・102は断面長方形を呈す幅広の上端部に対し、厚みの薄い軸部をもつ。W103は板状素材を逆三角形に成形したもので、上端部と軸部の境がない。中央に正方形の穿孔が設けられる。

第150図に示したW104・105は妻壁板である。ただしW104の斜辺は直線的ではなく、角度も小さい。斜辺付近に方形の穿孔をもつ。W105は斜辺の角度が65°と大きい。



第149図 SD38-B 出土木器 (11)



第 150 図 SD38 - B 出土木器 (12)

第 151 図には建築材とその可能性があるものを示した。

W106～109 は壁板である。W106・107 は上辺の端部付近に水平材を通すためとみられる直角の浅い欠込みをもつ。W106 は上辺付近に 1 か所穿孔が設けられていたことが確認できる。W108 は上辺がわずかに膨らむ。その膨らみのピークをはさむように対となる孔が穿たれている。W109 は妻壁板である。火災のためか大部分が焼失している。斜辺は 50° を測る。W110・118 はいずれも芯去材を断面楕円形に成形して側面に圧痕が認められる。特に W118 は同一面に圧痕が連測しており、小舞を思わせる。ただし、当遺跡でこれまで確認されている小舞はいずれも断面が方形のものであるため可能性を示すに留めたい。W111 は芯去の角材の端部を両側縁からの切込みによって鈍く尖らせる。正面から右側面にかけて大きな圧痕が 1 か所あり、大きな加重を受けていたとみられる。W112 は端部に半円状の欠込みと円孔をもつ。W113 はみかん割材を切削によって断面半円形に成形している。下端は鈍く尖り、そこから 42cm の位置で欠込みによって段を作出する。W114 は断面不整形を呈し、右側縁に鈍い抉り込みをもつ。W115・116 は芯去の角材を端部を直角に欠込み、方形のほぞ穴を穿つ。W117 は細長い板材を鍵状の形に成形したものである。

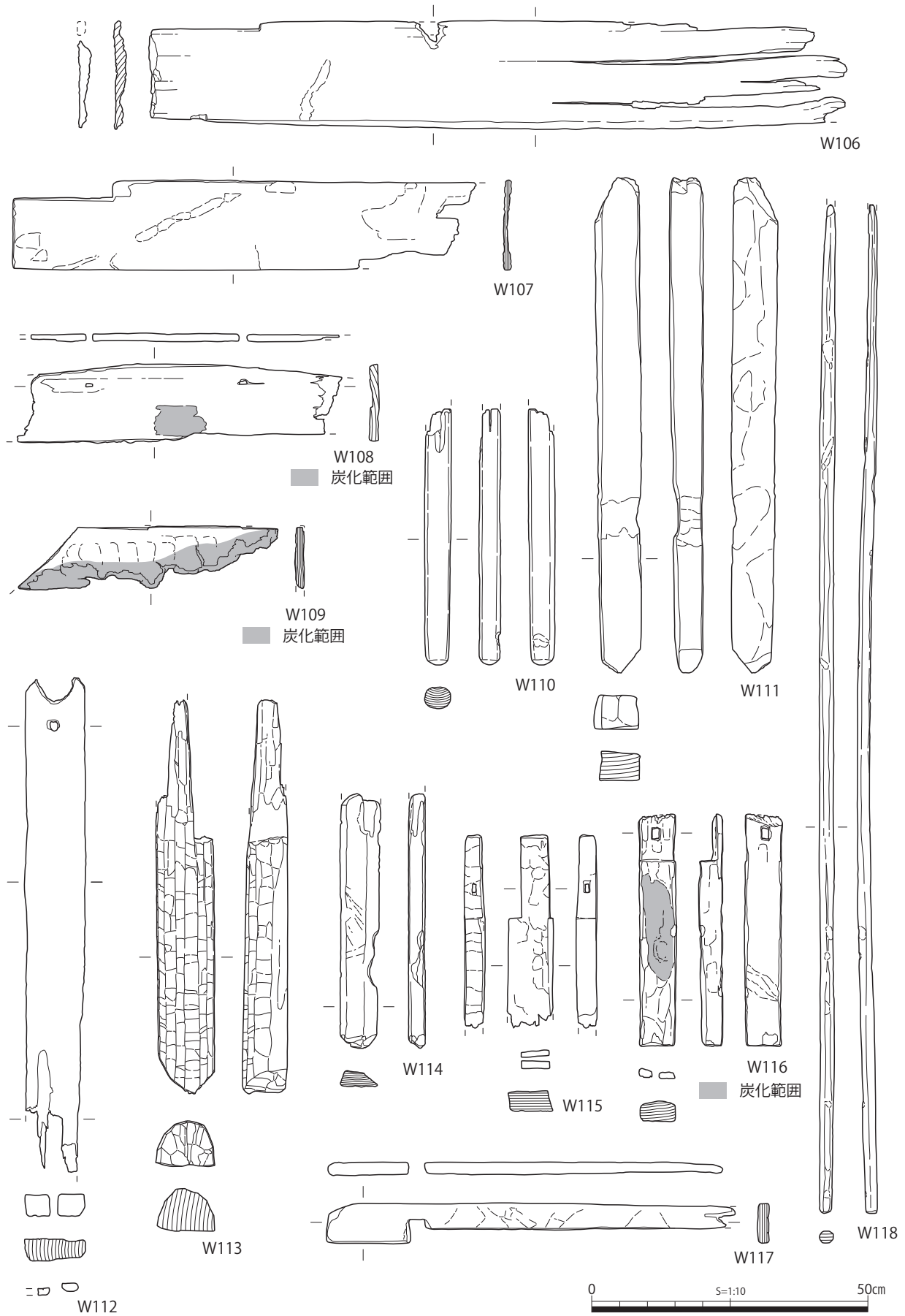
第 152 図には不明木器を示した。W119 は先端を鈍く尖らせ、下端付近は段を儲け莖状に成形している。W120 は荒い切削により、正面に稜を作出する。また下端は斜めに削がれている。W121 は角材に不整形の孔を 5 か所穿つ。上下端付近の 2 孔は中央付近の 3 孔よりも広い間隔をとって穿たれている。

W122 は平面形を呈し、右側縁の下端付近には方形の抉り込みが施される。また左側縁下端付近には微細な穿孔をもつ。W123・124 は穿孔をもつ板材で建築材の可能性が考えられる。W125 は左側縁がアーチ状に浅く抉りこまれている。また、下端付近には対になる円孔をもつ。

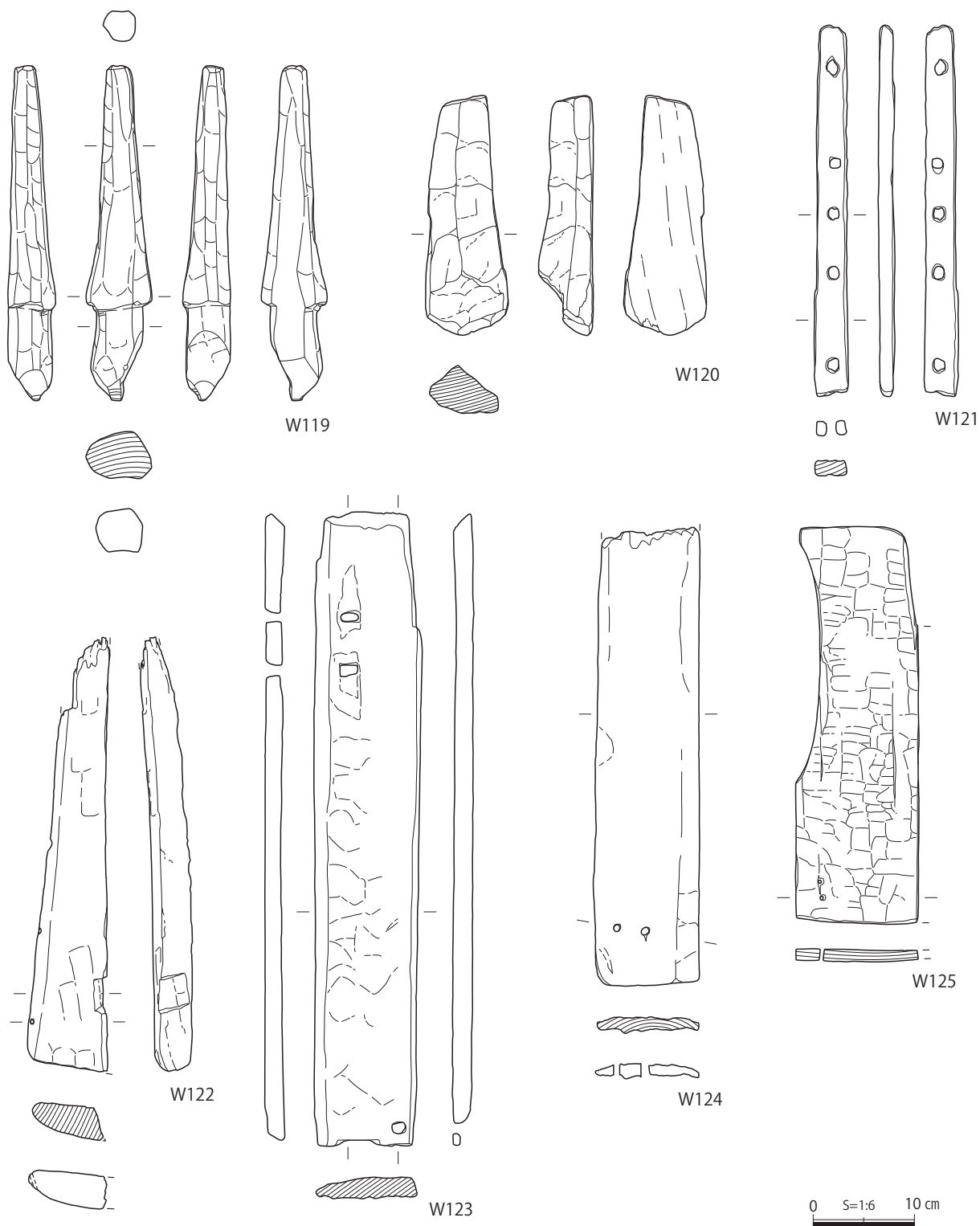
第 153 図には矢板を示した。

W126 は船を転用したものである。全体的に湾曲し、舷側が残存する。W127 は壁板の転用とみられる。左側縁と下端の切削により成形される。転用前の方角穿孔が残存する。W129 は厚い材を素材とするもので上端が炭化している。

第 154 図には編組製品を示した。



第 151 図 SD38 - B 出土木器 (13)

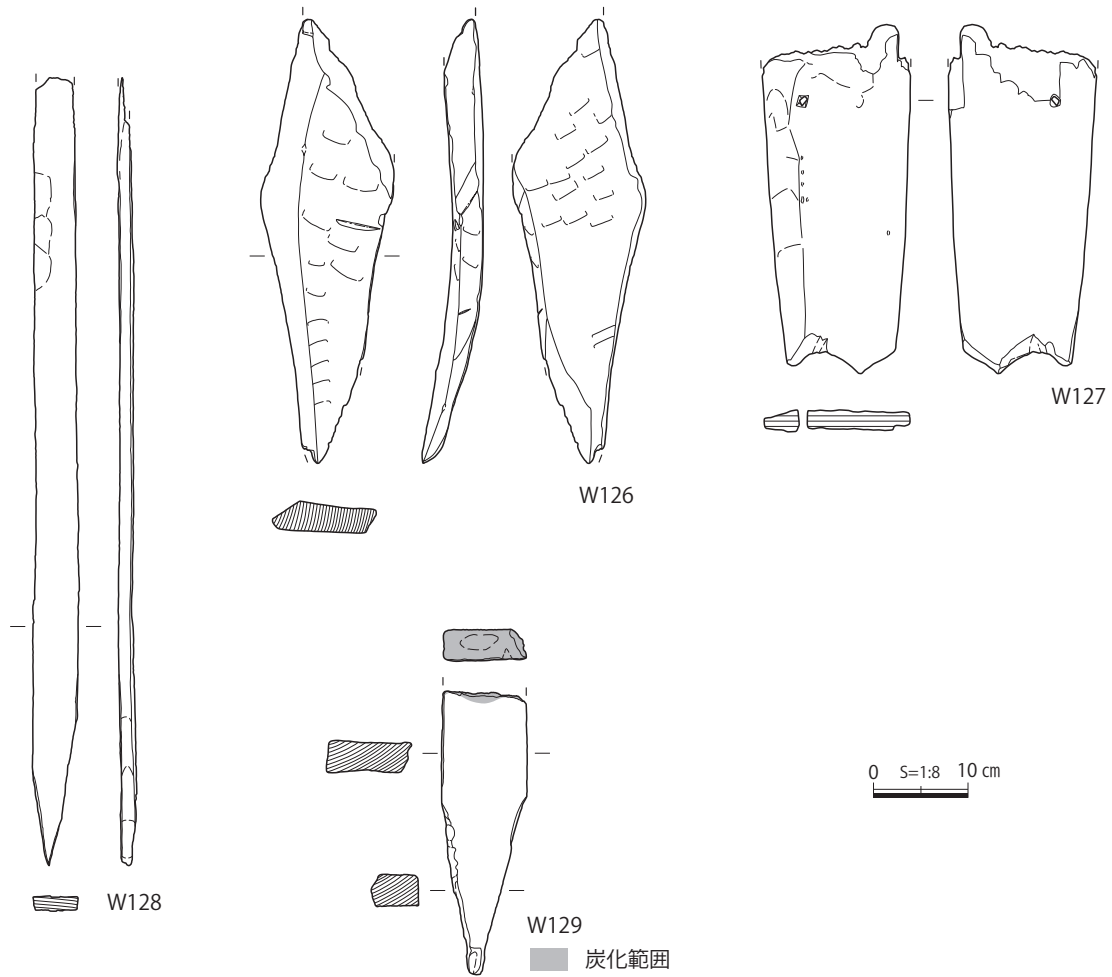


第152図 SD38 - B 出土木器 (14)

Ba 2・4は縄である。Ba 2の組方は、1次調査県道7区で出土した「5本組み」で組まれたものと類似している。折り返し二重にした状態で結ぶことで先端に作出した輪に根本を通した状態で出土した。Ba 4は粗雑な作りの縄で残存状況が悪い。

Ba 3はかごである。2本超2本7潜1本送を基本に編まれている。

樹種同定の結果 Ba 2・4はイネ、Ba 3はタケ亜科であることが判明した（第4章 第4節）



第153図 SD38 - B 出土木器 (15)

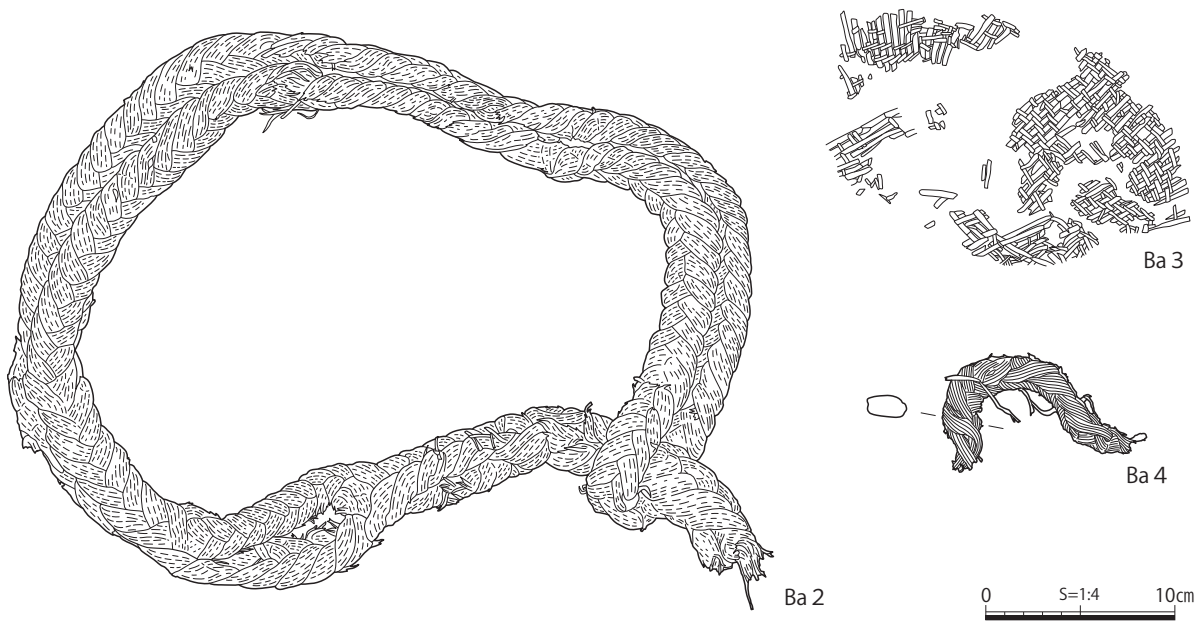
第155図には骨角器を示した。

Bo13はクジラ類の椎骨である。作業台に利用したものとみられ、上面には複数の刃物痕が認められ、その一部には強く刃物を叩きつけたことによる剥落が生じている。Bo14は有孔骨製品である。長方形の平面形を呈し上端付近に対となる円孔をもつ。緩やかなアーチ状の横断面は素材の形状を反映したもののか。

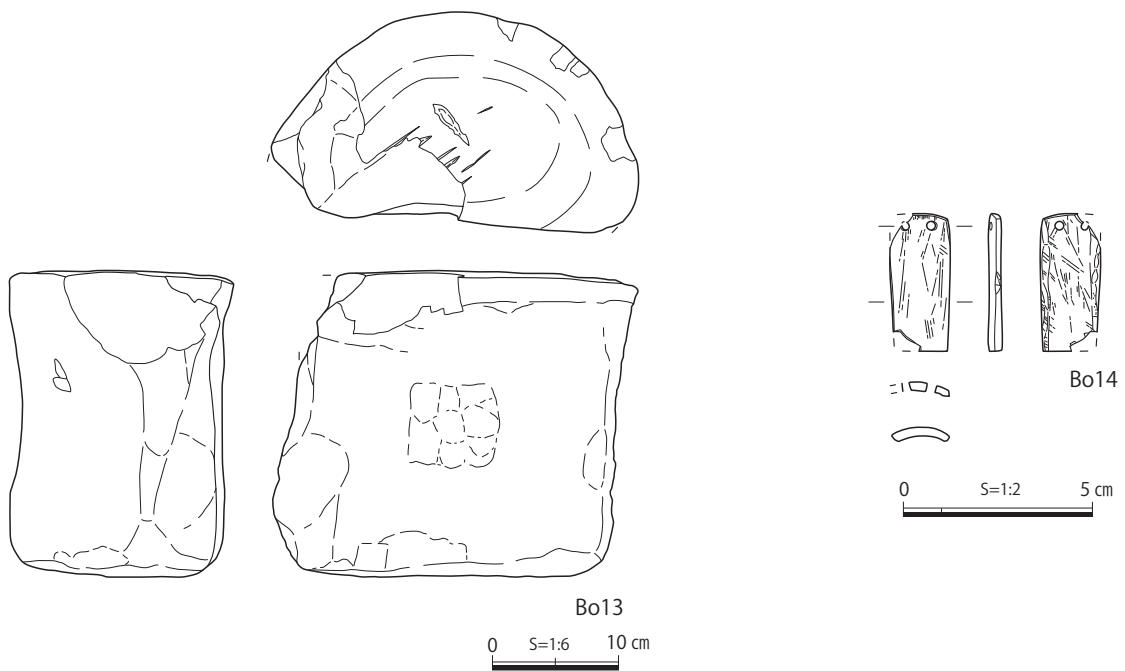
このほか、特筆すべき遺物として、ササとみられる葉の圧痕が残された炭化米ブロックがある。この炭化米ブロックの分析結果は第4章第3節に掲載している。

84 柱穴 (第156図)

調査区南西部、第3段階の中心域張出部南東隅付近において、Ⅶ層下面で検出した。掘り込み面は標高 -0.05 m付近で確認したが、柱を固定していたとみられる角礫が、検出状況のように露出していた状態で立っていたとは考えづらいため、本来の掘り込み面は礫の上端である0.05 m付近であったのではないと思われる。SD38-Bの0.48 m西側に位置する。隅丸三角形の平面形を呈し、長軸0.34m、短軸0.33 mを測る。検出面から0.22mの深さまで掘削したが、遺構底面底まで達しておらず、最大



第 154 図 SD38 - B 編組製品



第 155 図 SD38 - B 出土骨角器

深は不明である。遺構中央部に建てられた柱は最大幅 16.2cm、これを固定する角礫は最大幅 18.0cm を測る。

黒色～黒褐色の細砂～シルトを主体とする埋土は 3 層に分層できる。

(3) 段階 2 に伴う遺構と遺物

段階 2 の中心域張出部は、造成土③～⑤出土土器から弥生時代終末期前半から後半とみられる。段

階2に伴う遺構は、水路であるSD38-Dと、区画溝のSD38-Eである(第157図)。

SD38-D (第158・159図)

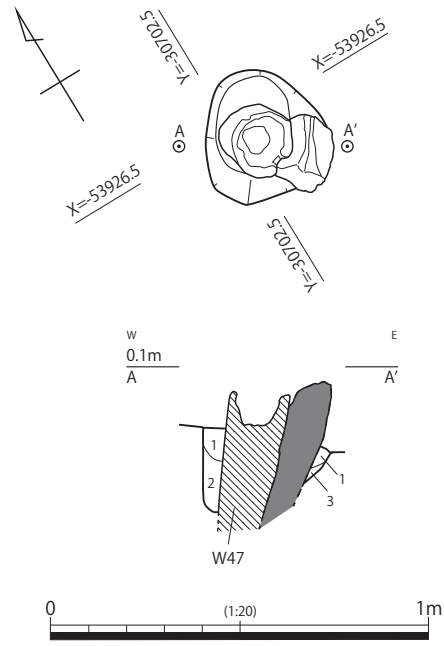
中心域張出部の前面に沿って北東-南西方向(N-35°-E)に直線的に走る。全体の検出長は12.8mであるが、東西ベルトの南側と北側で形態を異にする。東西ベルトの南側は、両肩をそれぞれ1列の矢板で護岸した水路とみられる(第158図)。東肩の矢板列は幅20~30cm程度の矢板を中心としている一方、西肩の矢板列は50cmを超えるものも含む。また、西側の列では2.0m間隔で、東側の列では1.5m間隔で、直交方向に1枚の矢板が打設されているのが特徴的であるが、その役割は不明である。南壁まで至らず途切れており、最大幅6.6m、最大幅1.00m、最大深34cmを測る。土留め3の設置のため掘り返されたとみられ、部分的にしか残されていないが、埋土は暗灰黄色と黄灰色細砂の互層で、ラミナ構造が顕著で、生息していた可能性のあるドブガイの貝殻が出土しており、当遺構が水路であったことを裏付ける。

一方、東西ベルト北側では、護岸はなく、転用された建築材(壁板W132、妻壁板W133)で蓋をされた暗渠となる(第159図)。検出長4.2m、最大幅0.50m、最大22cmを測る。埋土は黒褐色シルト混細砂の単層である。蓋の東側にはこれを固定するために打設された杭が1本確認できる。位置と走行からみて、この北側のSD38-Dは、本来この箇所まで延長していたSD38-Ca・bを切っているとみられる。蓋の上で検出した尺骨HB163はじめ周辺で散発的に出土した人骨は、当遺構の掘削によってSD38-Cbから遊離したものであろう。

第160図にはSD38-Dから出土した土器を示した。

Po222は甕である。内外面のミガキによる調整が顕著であるが、口縁部には平行沈線が巡り、内面のケズリは口縁部まで及んでいたことが確認できる。弥生時代後期後葉に属す。Po223は蓋である。方形の側面観を呈すつまみ部の底面の成形は円盤充填によって成形されたとみられる。裾部内外面ともミガキで調整される。Po224は低脚坏である。坏部内外面にハケメを残す。弥生時代終末期に属す。Po225は長頸壺である。直線的に立ち上がる頸部からさらに外傾して口縁部がつく。頸部下半には刺突文が巡る。

第161図にはSD38-Dから出土した木器を示した。W130は櫂である。全体的に扁平な作りであり、平面六角形を呈す身をもつ。W131は不明木器である。全体の形状は不明であるが、方形の穿孔をも

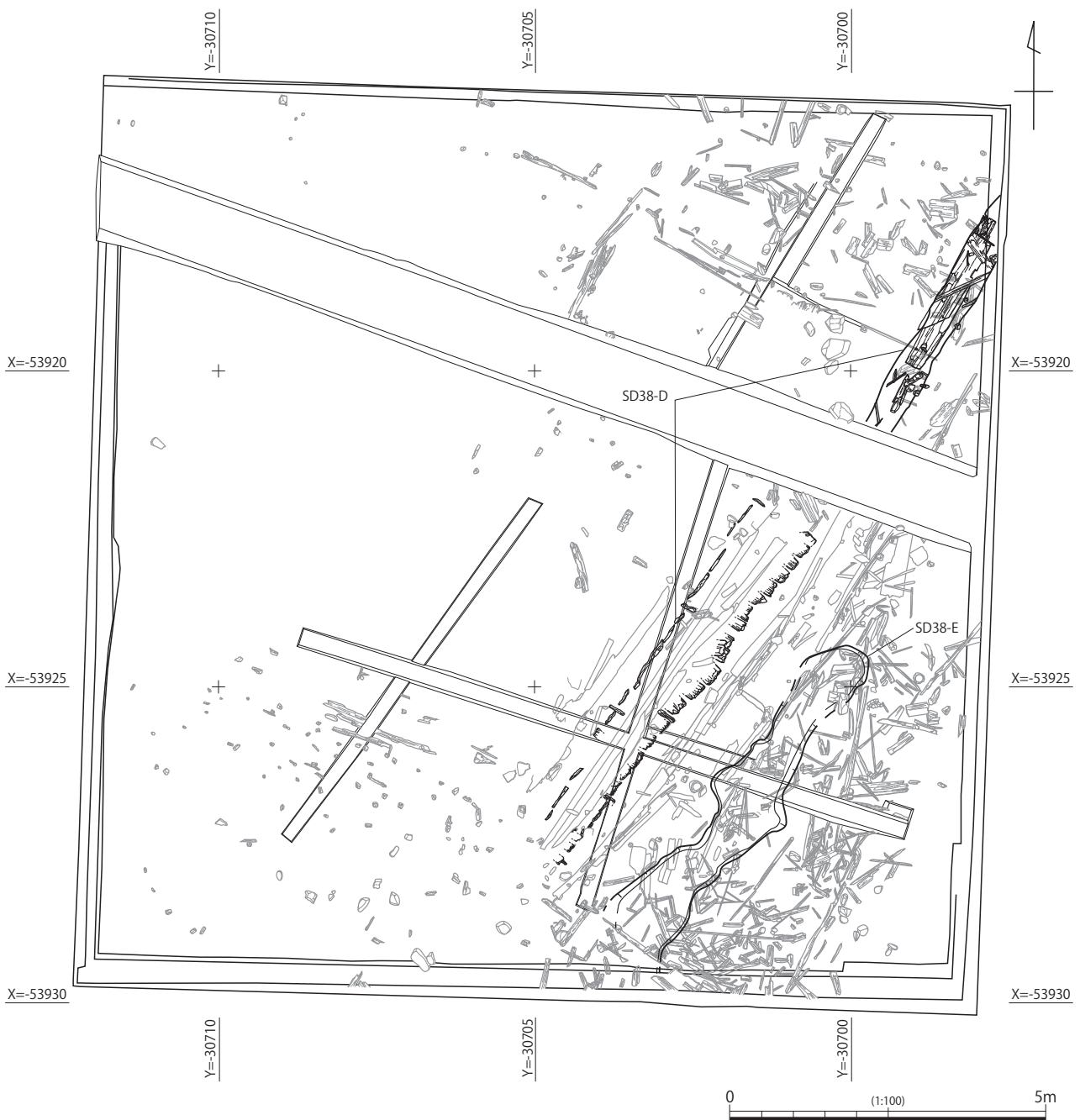


- 1 10YR3/1黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまり弱 にぶい黄褐色細砂混
- 2 10YR2/1黒色 細砂混シルト 粘性中
しまりやや弱
- 3 10YR3/1黒褐色 細砂混シルト 粘性やや弱
しまりやや弱

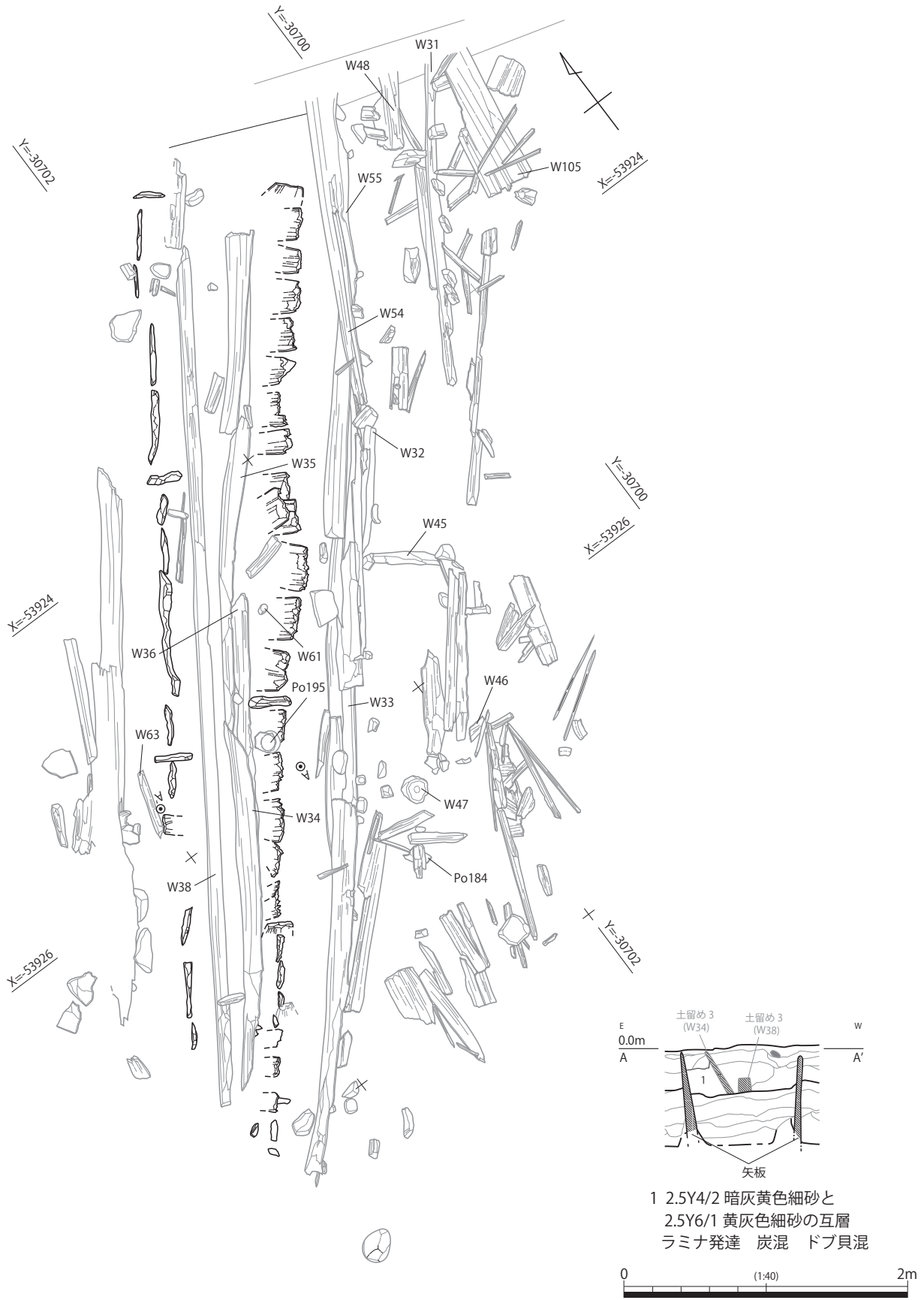
第156図 84柱穴

つものとみられる。丸みを帯びた側縁の2か所に小さい切込みが施されるほか、長軸方向に並ぶ2つの孔が確認できる。

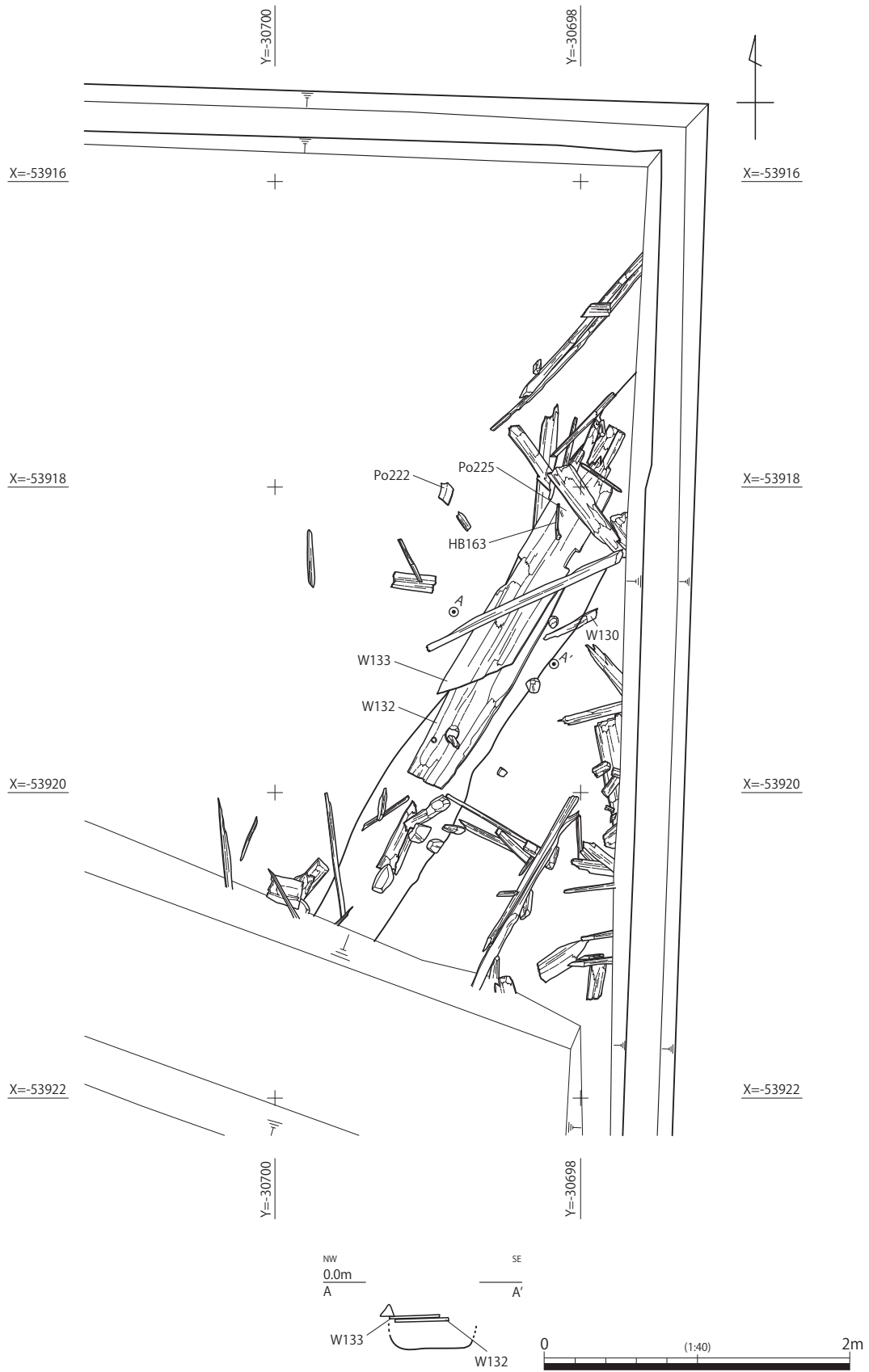
第162図は暗渠となっていたSD38-D北側の蓋に転用されていた壁板と妻壁板である。壁板 W132 は、下辺中央付近から右側短辺にかけて緩やかな抉込みをもつ。左側短軸付近と、中央右よりの高さを離れた位置に、長方形の孔を1つずつもつ。後者に近接して、対をなす小さい方形穿孔と微細な円孔が穿たれる。内外面ともハツリ痕が顕著である。妻壁板 W133 は斜辺40°を測り、上辺に2か所、下辺に1か所、互い違いの位置に方形あるいは長方形の欠込みをもつ。斜辺付近には2つ1組となる方形穿孔が2組並ぶ。



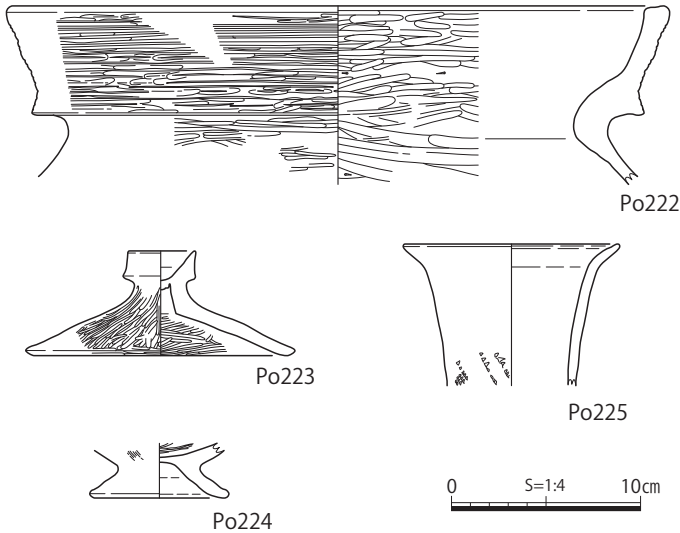
第157図 VII層下面（第2段階）平面図



第158図 SD38 - D (南側)



第159図 SD38-D (北側)



第 160 図 SD38 - D 出土土器

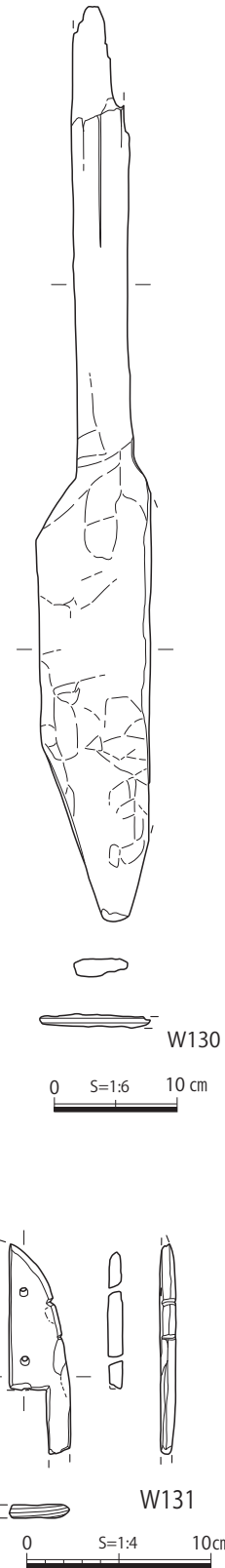
SD38-E (第 163 図)

造成土①と SD38-B の下面、標高 -0.3 ~ -0.2 m で検出した溝である。SD38-D の東側 1.2 m を北東 - 南西方向 (N-26-E) 走る浅い溝であり、護岸はもたない。検出長 5.76 m、最大幅 1.36 m、検出面からの最大深 12cm を測る。埋土は灰黄褐色シルト混細砂の単層である。

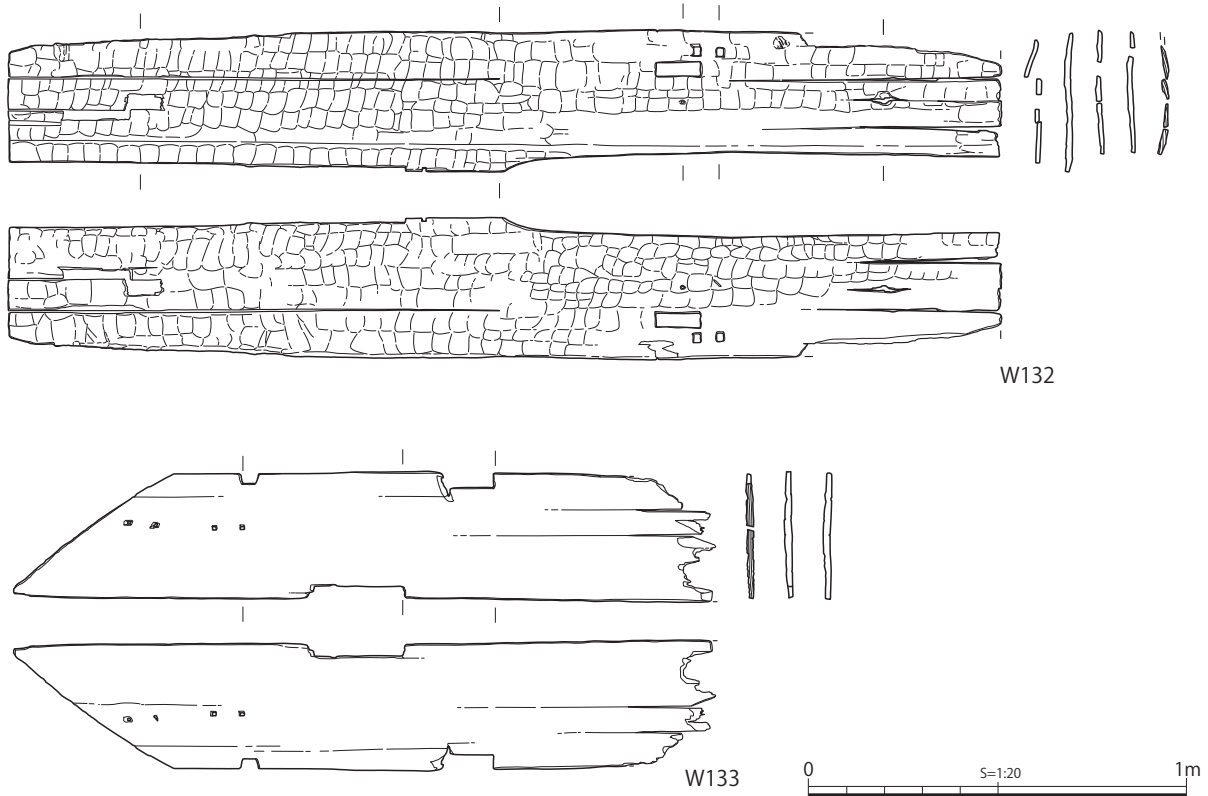
位置と走向からみて、段階 2 の中心域張出張出部の前面を区画していたものとみられる。出土した土器から、弥生時代終末期後半に属す遺構とみられる。

第 164 図には SD38-E から出土した土器を示した。Po226・227 は無文の複合口縁をもつ甕である。Po226 の複合口縁は直線的に短く立ち上がるもので、器壁は厚い。胴部内面のケズリは左方向である。Po227 の口縁部は外反して立ち上がり、器壁は薄い。肩部には波状文が施され、胴部内面のケズリは右方向である。弥生時代終末期後半の特徴を示す。Po228 は鉢である。砲弾状の器形であり、内外面とも指頭圧痕を残す。

第 165 図に示した W134 は SD38-E から出土した琴である。これまで当遺跡で出土している琴は、いずれも弥生時代中期中葉から後葉のものであり、弥生時代終末期に属す琴が初めて確認された点は特筆される。天板琴尾側の残片であり、7.2cm を測る幅は琴としては小型のものである。共鳴槽と組合せるための目釘や緊縛孔は認められないため、「板作り」の琴と



第 161 図 SD38 - D 出土木器 (1)



第 162 図 SD38 - D 出土木器 (2)

分類される。

琴尾には山形の切り込みによって作出された5つの突起をもつ。また、この突起の基部に沿って、半円形の断面形を呈す雲角が、天板まで貫通する2本の目釘によって固定されている。琴尾側で弦を天板から浮かせる役割の雲角は、当遺跡はじめとするいくつかの出土琴にみられる痕跡によって存在が想定されてはいたものの、実際に雲角が装着された状態で出土した例は全国的にみても当資料が初めてであり、この点においても稀有な出土例といえる。樹種同定の結果、当資料は天板、雲角ともスギ製と判明した（第4章 第4節）

(4) 段階1に伴う遺構と遺物

段階1の中心域張出部の時期は、造成土⑥出土土器から弥生時代後期後葉とみられる。段階1に伴う遺構として、SD38-Ca・bと、85・87土坑、88柱穴がある（第166図）。SD38-Caは、Ⅶ層下面において西肩に伴う矢板列の頂部を検出した、弥生時代後期後葉の区画溝SD38-Cの埋没最終段階であり、これと直行するSD38-Cbと中心域張出部を区画していたものとみられる。

SD38-Cについては基本的に第11項で記述するが、SD38-Caとの連続性を示すため、トレンチ①・②で記録したSD38-Cの土層断面（第167-2・3図）については、SD38-Caとあわせ本項において掲載する。

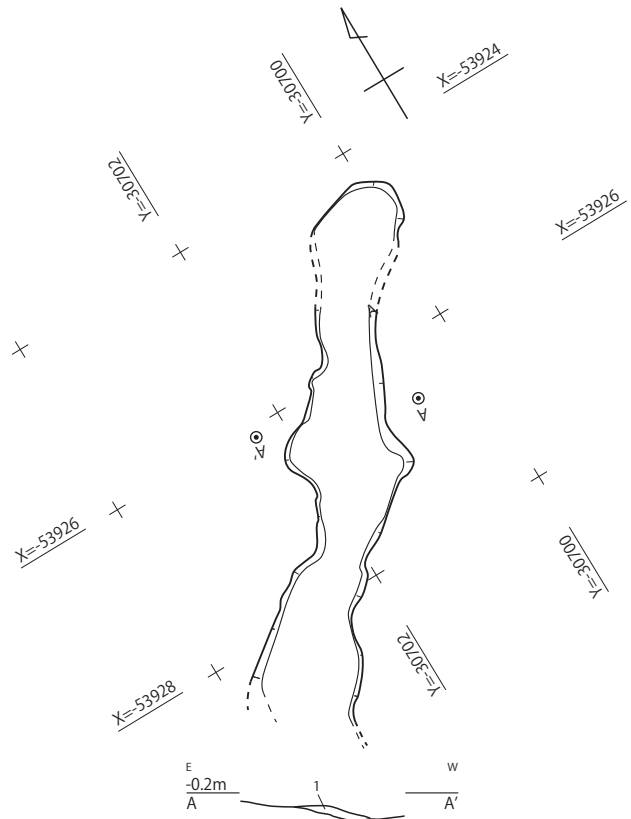
また、SD38-Ca・bでは、1次調査区出土のものと一連の人骨群を検出した。これらの人骨の出土状況については第5章 第1項で詳述する。

SD38-Ca・b (第167・168図)

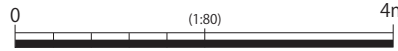
SD38-Ca (第167図) は、後述する弥生時代後期後葉段階の区画溝 SD38-C の埋積が進行し、その東肩付近において、最大幅6.1mから1.9mへ、76cm以上の最大深が25cmまで規模が縮小した段階である (SD38-C の規模は西肩の矢板列を基準としている)。護岸をもたず、また下層を切り込んで掘削した状況もみられないため、溝というよりはその痕跡の窪地のような状態であったとみられる。

走向はSD38-Cと同様、北東-南西方向 (N-30°E) であるが、調査区南壁付近でやや西側に振れる。これは方形区画の南辺を区画しているためとみられる。埋土は黒色シルト混細砂を主体とする。この埋土には、肉眼では明確なラミナ構造は認められず、層相解析によって植物が繁茂する湿地状の堆積環境であったと推定されている (第4章 第1項)。当遺構においては、人骨が底面を中心に分布していることを確認した。

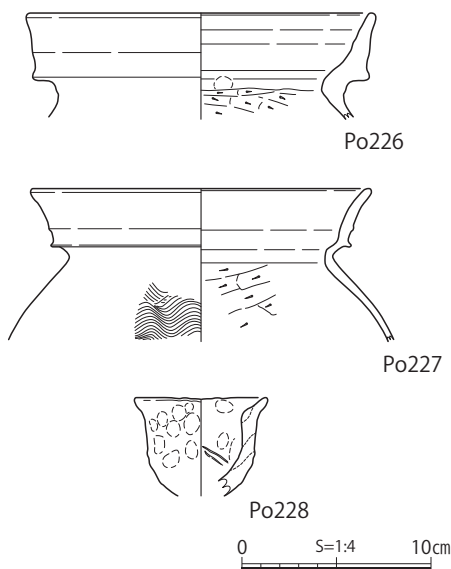
SD38-Cb (第168図) は、調査区北側で検出したSD38-Caとほぼ直行する北西-南



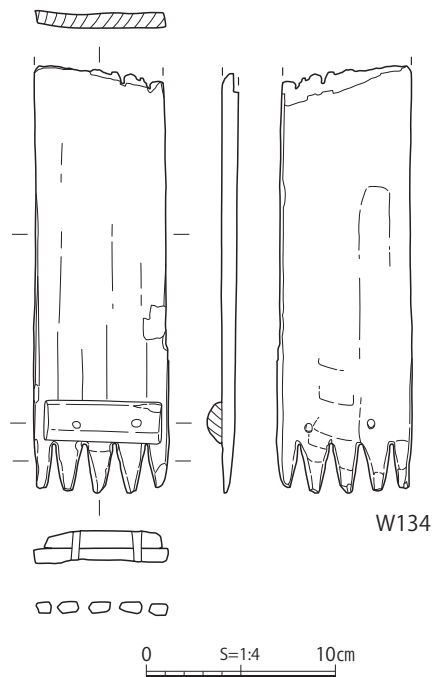
1 10YR4/1 褐灰色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり弱



第163図 SD38-E



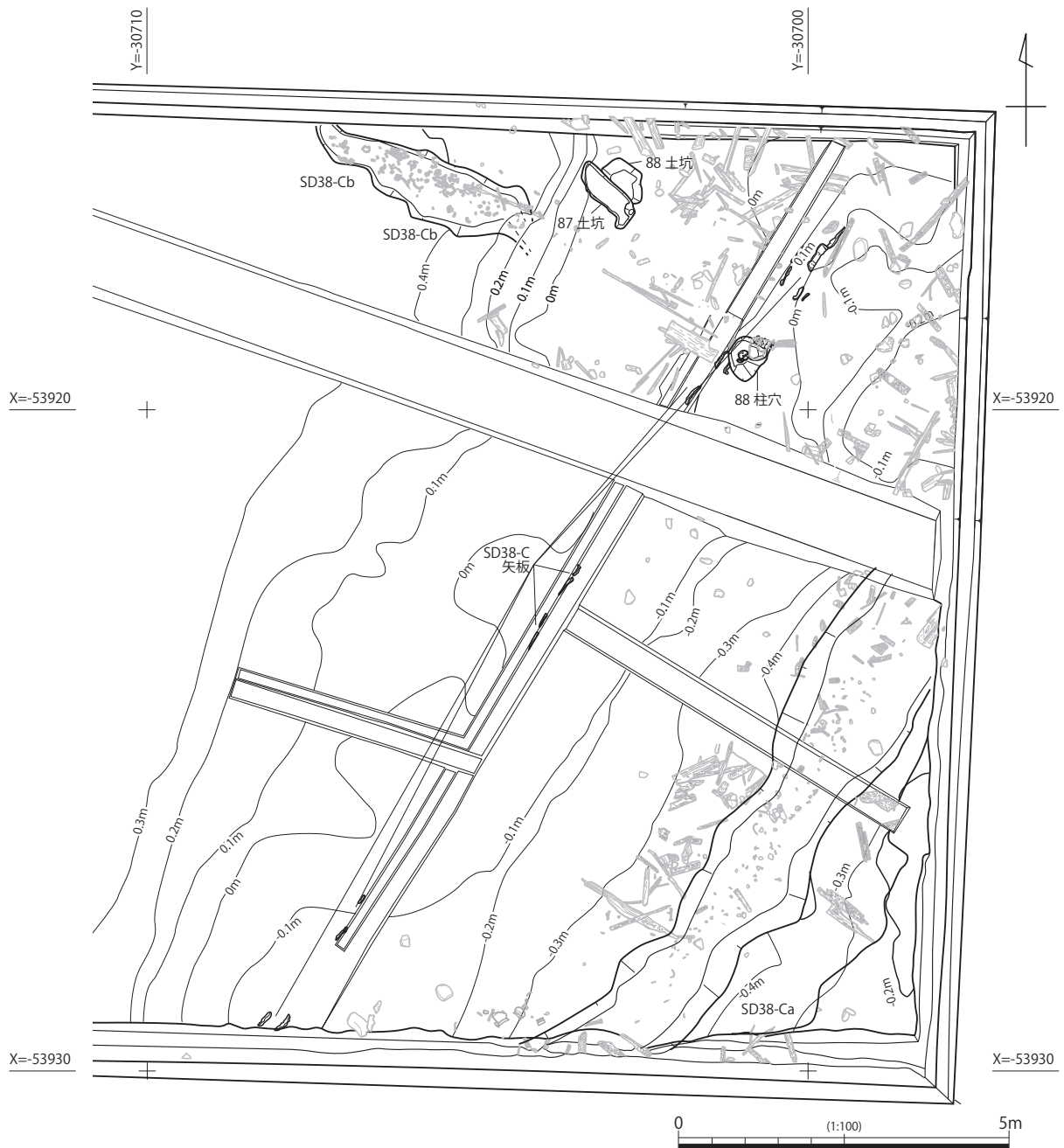
第164図 SD38-E 出土土器



第165図 SD38-E 出土木器

東方向 (N-65°-W) に走る溝である。SD38-B が重複していたこともあり、平面的に検出できたのは 3.6 m 程度であるが、本来はより東側に延長していたことが、トレンチ 3 における土層断面、および SD38-C 西側護岸の矢板列に認められる欠損箇所から確認できる (第 168- 2 図)。したがって、当遺構は本来 SD38-Ca に接続し、直角の区画を形成していたとみられる。

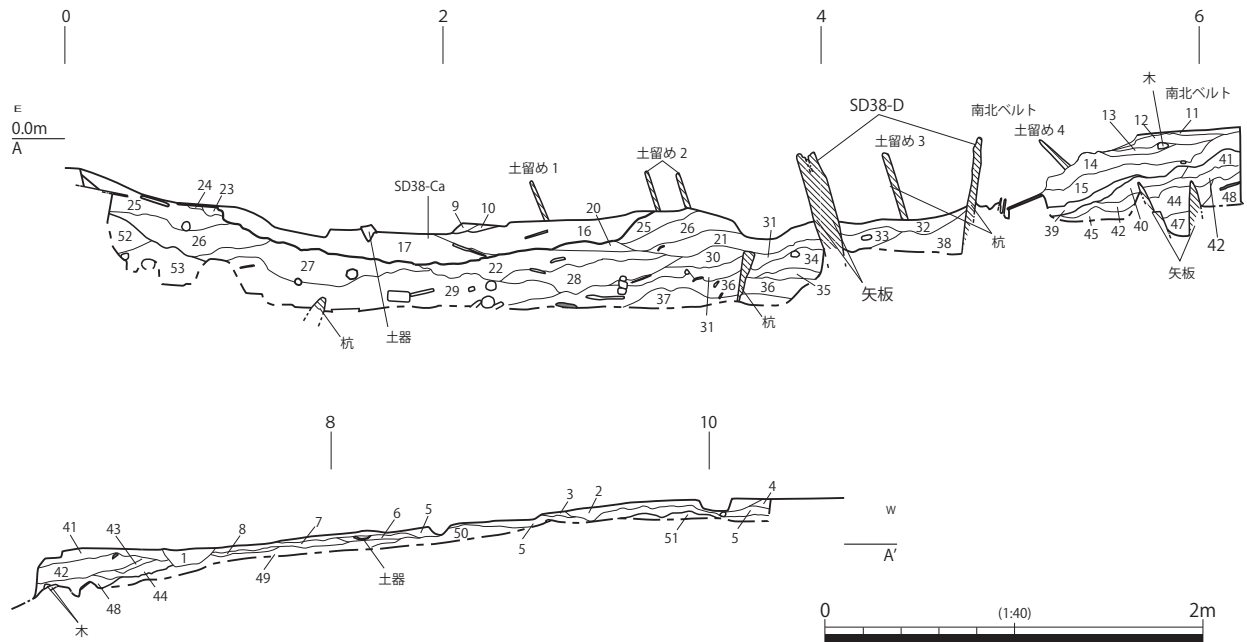
トレンチ 3 の土層断面 (第 168- 2 図) では、SD38-Cb の肩部が土留め 7 とそれを足がかりとする造成土⑥で形成されていることが見てとれる。SD38-Cb は基本的に素掘りの溝であるが、このように一部造成の土留めが護岸となっていたことが確認できる。段階 1 中心域張出部は、北側の一部を土留めによって補強したうえで造成し、その裾に設けた溝である SD38-Cb を、埋積が進行し窪地状となっ



第 166 図 VII層下面 (第 1 段階) 検出状況



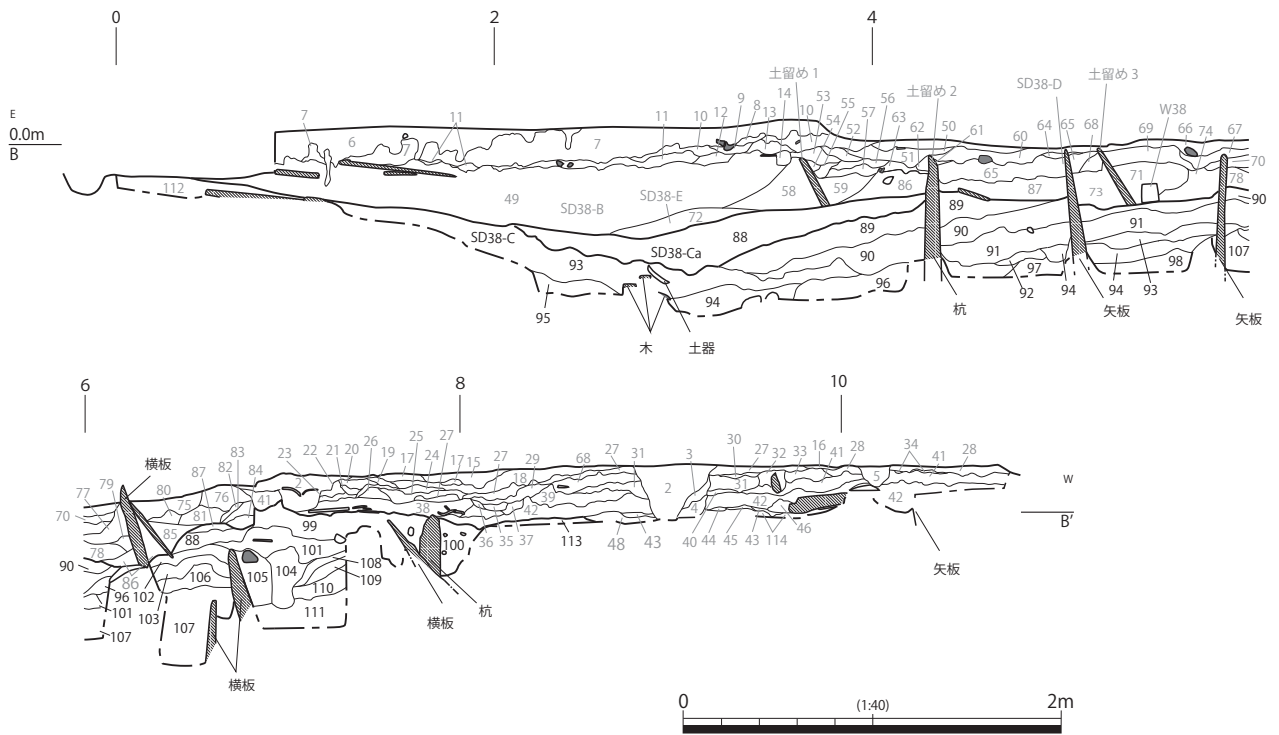
第167-1図 SD38-Ca (1)



- | | |
|--|--|
| 1 10YR4/2 灰黄褐色 シルト | 33 10YR4/1 褐灰色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 |
| 2 2.5Y6/1 黄灰色 シルト 炭混 | 34 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 |
| 3 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト | 35 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 |
| 4 10YR6/2 灰黄褐色 シルト しまる | 36 10YR3/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり弱
植物片少混 |
| 5 10YR5/1 黄灰色 シルト 粘土塊混 | 37 10YR4/1 褐灰色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 |
| 6 2.5Y6/1 黄灰色 シルト | 38 10YR2/1 黒色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 |
| 7 2.5Y5/1 黄灰色 シルト しまる | 39 2.5Y3/1 黒褐色 細砂混シルト 粘性中 しまり中
貝殻片少混 |
| 8 2.5Y5/1 黄灰色 シルト しまる | 40 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 灰白色細砂混 |
| 9 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 | 41 2.5Y3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱
灰白色細砂混 |
| 10 10YR4/1 褐灰色 シルト混細砂 | 42 10YR4/1 褐灰色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 ~2cm 黄褐色パミスブロック含 |
| 11 2.5Y7/1 灰白色 細砂 粘性弱 しまり強 褐灰色細砂混 | 43 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 ~1cm にぶい黄褐色シルトブロック含 |
| 12 10YR6/1 褐灰色 細砂 粘性弱 しまり弱 | 44 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 |
| 13 2.5YR6/1 黄灰色 シルト 細砂多混 | 45 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 ~2cm 黄褐色パミスブロック少含 |
| 14 10YR3/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 | 46 2.5Y3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 |
| 15 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中
~1cm 灰白色細砂ブロック少含 | 47 10YR3/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 |
| 16 10YR4/1 褐灰色 シルト混細砂 灰白色細砂混 細砂少混 | 48 2.5Y4/1 黄灰色 細砂 粘性弱 しまりやや弱 |
| 17 2.5Y2/1 黒色 シルト混細砂 細礫 植物片少混 | 49 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 |
| 18 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混細砂 植物片少含 | 50 10YR4/1 褐灰色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 |
| 19 10YR3/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱
~2cm 灰白色細砂ブロック少含 | 51 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中
~1cm にぶい黄褐色シルトブロック少含 |
| 20 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱
植物片少混 | 52 10YR4/1 褐灰色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 |
| 21 10YR4/2 灰黄褐色 シルト ~1cm 灰白色細砂ブロック少含 | 53 2.5Y3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 |
| 22 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 貝殻片少混 | |
| 23 10YR4/1 褐灰色 シルト混細砂 木器含 | |
| 24 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 | |
| 25 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混細砂 植物片少含 | |
| 26 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 | |
| 27 10YR5/2 灰黄褐色 細砂 粘性弱 しまり弱 灰白色細砂混 | |
| 28 10YR3/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱
貝殻片・植物片少混 | |
| 29 10YR4/1 褐灰色 シルト混細砂 粘性中 しまりやや弱 | |
| 30 10YR3/2 黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱
貝殻片少混 | |
| 31 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 | |
| 32 10YR3/2 黒褐色 シルト 混細砂 | |

1 : 古墳時代前期前葉遺構 18 ~ 39 : SD38-C
 2 ~ 8 : VII層 40 ~ 48 : SD38-C 護岸
 9,10 : SD38-B 49 ~ 51 : VIII層
 11 ~ 15 : 造成土④ 52,53 : IX層
 16,17 : SD38-Ca

第167-2図 SD38-Ca (2)



SD38-Ca	88	2.5Y2/1	黒色	シルト混細砂	細礫・植物片含 (人骨包含層)	SD38-Ca	104	2.5Y5/1	黄灰色	細砂	細砂混
	89	2.5Y2/1	黒色	シルト	貝片少混		105	2.5Y5/1	黄灰色	細砂	細砂・カキ混
	90	2.5Y2/1	黒色	シルト	貝片わずかに混		106	2.5Y5/1	黄灰色	シルト	粗砂・炭混
	91	2.5Y2/1	黒色	シルト	細礫混		107	2.5Y5/1	黄灰色	細砂	細砂・カキ混
	92	2.5Y4/1	黄灰色	シルト	粗砂混		108	2.5Y5/1	黄灰色	細砂	炭・細砂混
SD38-C	93	2.5Y2/1	黒色	シルト	貝片根	109	2.5Y4/1	黄灰色	細砂	二枚貝少混	
	94	2.5Y2/1	黒色	シルト	細礫混	110	2.5Y5/1	黄灰色	細砂	貝片混	
	95	2.5Y2/1	黒色	シルト	粗砂混	111	2.5YR5/1	黄灰色	シルト混	細砂	
	96	2.5Y2/1	黒色	シルト	細礫混	貝片混					
	97	2.5Y2/1	黒色	シルト	細礫混	貝片混					
SD38-Ca	98	2.5Y2/1	黒色	細砂							
	99	2.5Y5/1	黄灰色	細砂	焼土粒・炭混	しまる					
	100	2.5Y3/1	黒褐色	粘質土	細砂混						
	101	2.5Y5/1	黄灰色	シルト	粗砂・炭混						
護岸?	102	2.5Y2/1	黒色	シルト	貝片少混						
	103	2.5Y2/1	黒色	シルト	細礫混						

1 ~ 5 : 古墳時代前期前葉遺構	66 ~ 71 : 造成土③
6 ~ 14 : VII層	72 : SD38-E
15 ~ 48 : VII層	73,74 : SD38-D
49 : SD38-B	75 ~ 85 : 造成土④
50 ~ 59 : 造成土①	86,87 : 造成土⑤
60 ~ 65 : 造成土②	112 : IX層

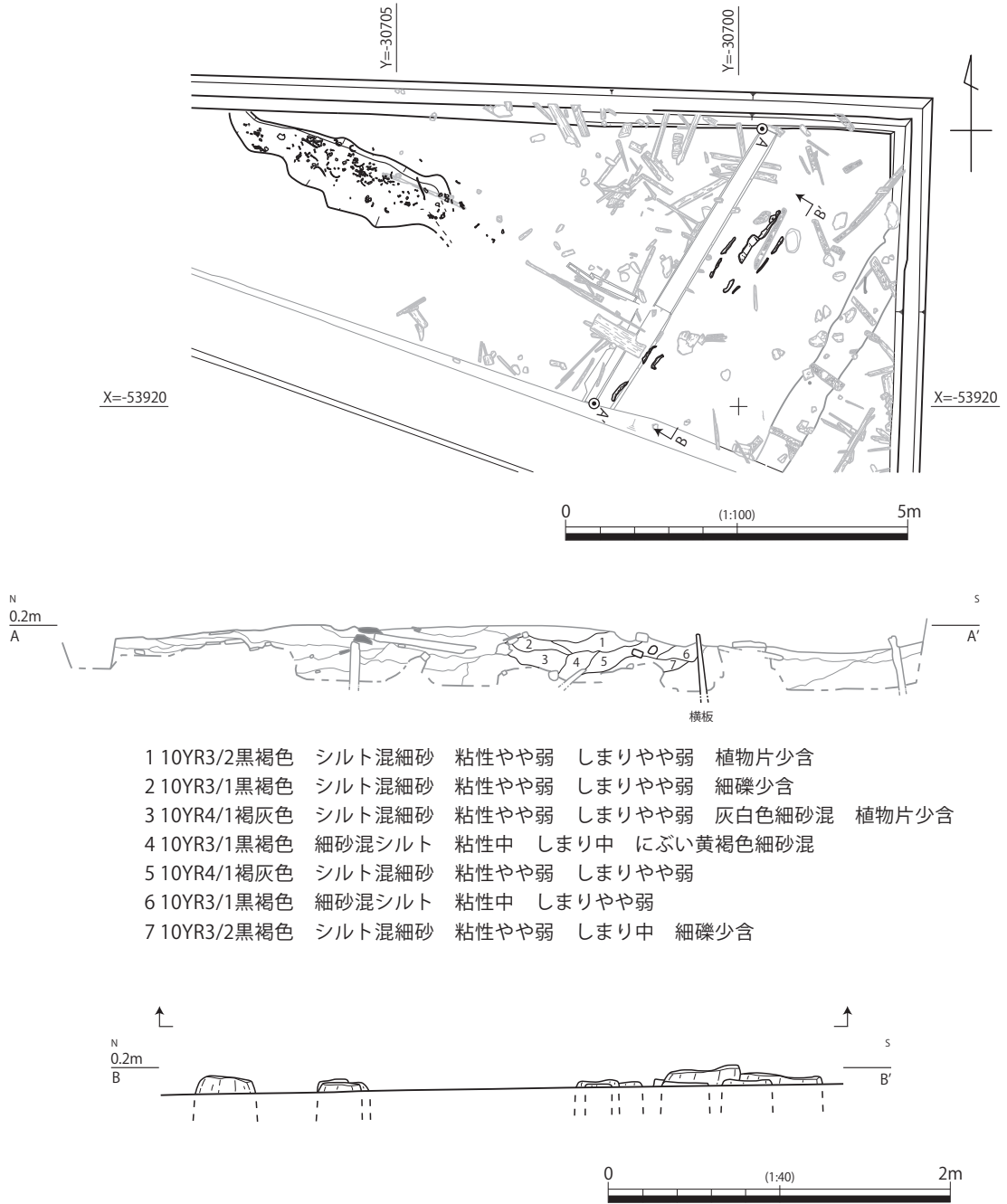
第167-3図 SD38-Ca (3)

たSD38-C (SD38-Ca) に接続させることで形成されたのであろう。段階2、段階3の造成はこの区画のなかでも標高の低い南側をかさ上げするためのものだったと考えられる。SD38-Cbでは、SD38-Caと同様、底面を中心に多数の人骨の出土をみた。またその東側延長部ではこれらと一連の多数の人骨を検出した。

SD38-Ca・bから出土した土器には、第169図に掲載したPo242のように弥生時代終末期後半のものが少数含まれる。しかし、Po242の出土状況を精査した結果、これらがSD38-Bと同様、多数の木材片と混在して出土していることを確認した。SD38-Ca・bの大部分にはSD38-Bが重複しており、また東西ベルト付近など、SD38-Caの堆積が薄くなっている箇所もある。弥生時代終末期後半に属す土器が少数混在するのは、SD38-Bの埋土が入り込んでいる箇所を発掘調査時に認識できなかった



第168-1図 SD38 - Cb (1)



第168-2図 SD38-Cb (2)

めである可能性が高く、中心域張出部の変遷の状況も勘案すれば、SD38-Ca・bは弥生時代後期後葉から終末期前半にかけて埋積したものと考えるのが妥当であろう。ただし、人骨群については、底面に集中して分布しており、相伴している土器がいずれも弥生時代後期後葉の範疇で捉えられるものであることから、1次調査区の人骨と同様、当該期に帰属すると考える。

第169・170図はSD38-Ca・bから出土した土器である。Po229～235・237～239・241～243・245～249・252・253はSD38-Ca埋土、Po240・250はSD38-Ca検出面、Po236・244・251・254・255はSD38-Cb埋土から出土した。

第169図に示したPo229～242は甕であり、いずれも複合口縁をもつ。

Po229～234は口縁部に平行沈線が施されるものである。Po229・230は直線的に外傾する口縁部をもち、肩部外面には波状文と平行沈線が施される。口縁部から頸部内面はミガキ、胴部内面は左方向のケズリで調整される。Po231は器壁が厚く、胴部内面のケズリは右方向である。Po232はやや外反する口縁部をもつ。頸部から肩部外面の波状文は、ナデによって不明瞭であり、胴部外面は縦方向のハケメで調整される。胴部内面のケズリは最大径より上が左方向、それより下は上方向である。Po234は直線的に外傾して立ち上がる口縁部をもち、外面の平行沈線は一部ナデ消される。肩部外面は波状文と平行沈線が施され、胴部は不定方向のハケメに加え、ミガキで調整される。口縁部から頸部内面はミガキで調整され、胴部内面のケズリは左方向を主体とする。これらは弥生時代後期後葉の典型的な特徴を示す。

Po235・236・240は複合口縁に波状文が施されるものである。Po235は直線的に外傾する口縁部をもつ。外面全体と口縁部から頸部の内面はミガキによる調整が顕著である。胴部内面のケズリは左方向である。Po236は口縁部の器壁が厚く、胴部最大径の小さいなで肩の器形とみられる。口縁部に一部に竹管文が施される。胴部内面のケズリは左方向である。Po240はやや外反する口縁部をもち、外面全体、口縁部から頸部内面のミガキが顕著である。口縁部外面にはそれに加え、波状文と押引文が施される。胴部内面のケズリは右方向を主体とし、その上から一部ミガキによる調整がなされる。これらは、新相を呈すものの、弥生時代後期後葉の範疇で捉えられるものである。

Po237～242は無文の複合口縁をもつものである。口縁部内外面の調整は、Po237・242はヨコナデ、Po238・239はミガキである。Po237は器壁が厚い口縁部をもち、胴部最大径が小さく肩の張らない器形とみられる。頸部下の内面のケズリは左方向である。Po238・Po239は口縁部の器壁が厚く、器形にシャープさを欠く。口縁部内外面ともミガキで調整される。

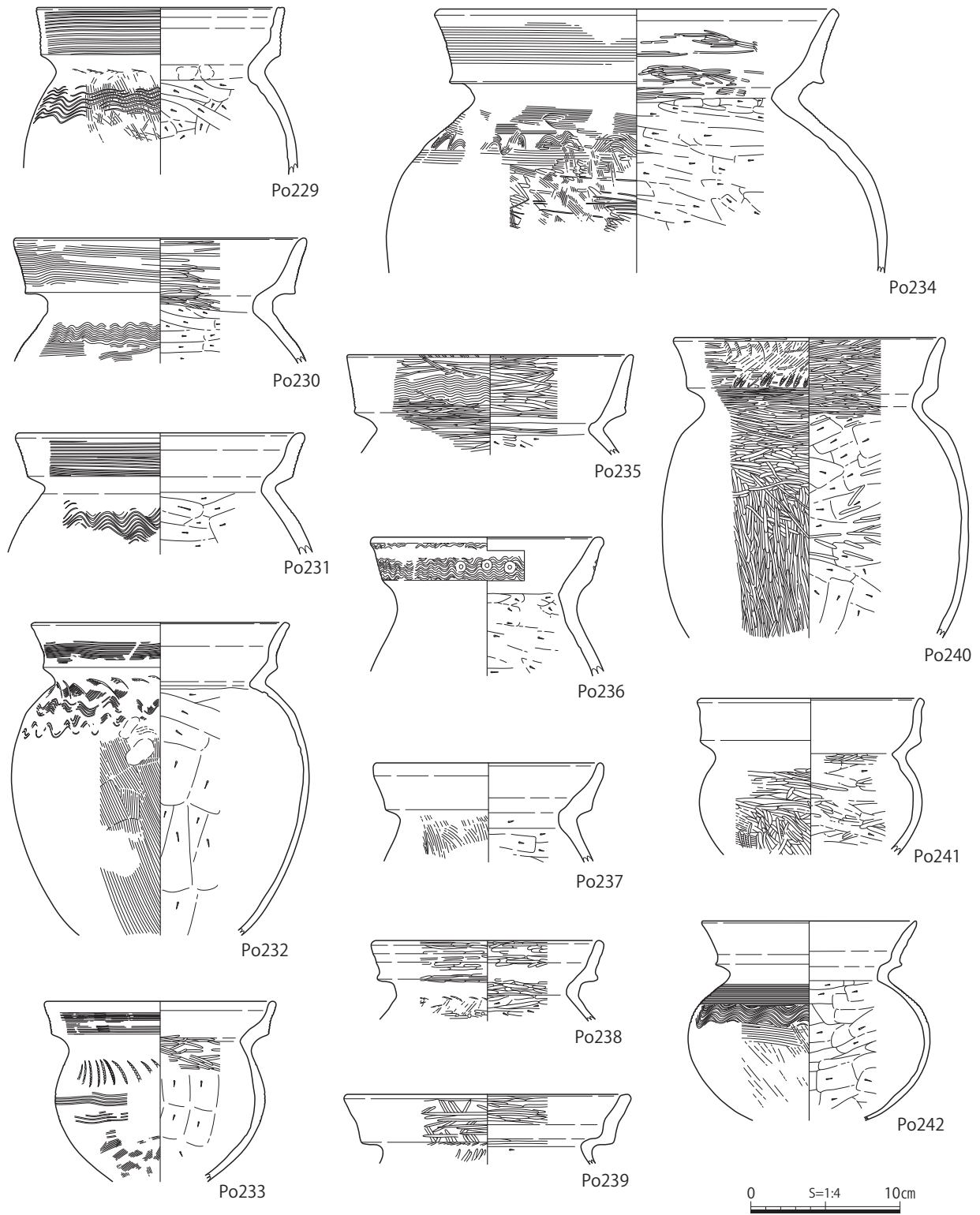
Po241は僅かに外反する口縁部をもつ。胴部は外面のハケメや内面のケズリののち、内外面ともミガキで調整されている。胴部内面のケズリは左方向である。弥生時代終末期前半に属す。Po242は外反する口縁部と、上下につぶれた球状の胴部をもつ。全体的にシャープな作りで、肩部外面に施された平行沈線と波状文は多条である。胴部内面のケズリは上半は右方向、下半は左方向である。弥生時代終末期後半に属す。

第170図には甕以外の器種を示した。これらはいずれも弥生時代後期後葉の範疇で捉えられるものである。Po243は台付直口壺であり、短く内傾して立ち上がる頸部、球形の胴部、短くハの字状に広がる脚部をもつ。胴部は3状1単位の平行沈線による区画内を、竹管文、半裁竹管文、連続斜行弧状文で加飾する。胴部内面のケズリは、ナデによって単位が不明瞭であるが、左方向であることが確認できる。口縁部には1対の円孔が設けられている。

Po244は台付装飾壺である。算盤玉状の胴部をもち、屈曲部には突帯が貼り付けられていたとみられる。2ないし3条1単位の平行沈線による区画内を渦巻き文、半裁竹管文、貝殻腹縁による連続刺突文で加飾する。内面は丁寧なミガキで調整される。

Po245はやや外反して伸びる単純口縁をもつ。脚部を除く外面と口縁端部付近の内面はミガキで調整される。内面のケズリは、口縁部で右方向、胴部で左方向を主体とする。

Po246は、装飾壺の胴部片である。胴部は球形を呈すとみられ、3条1単位の平行沈線によって区

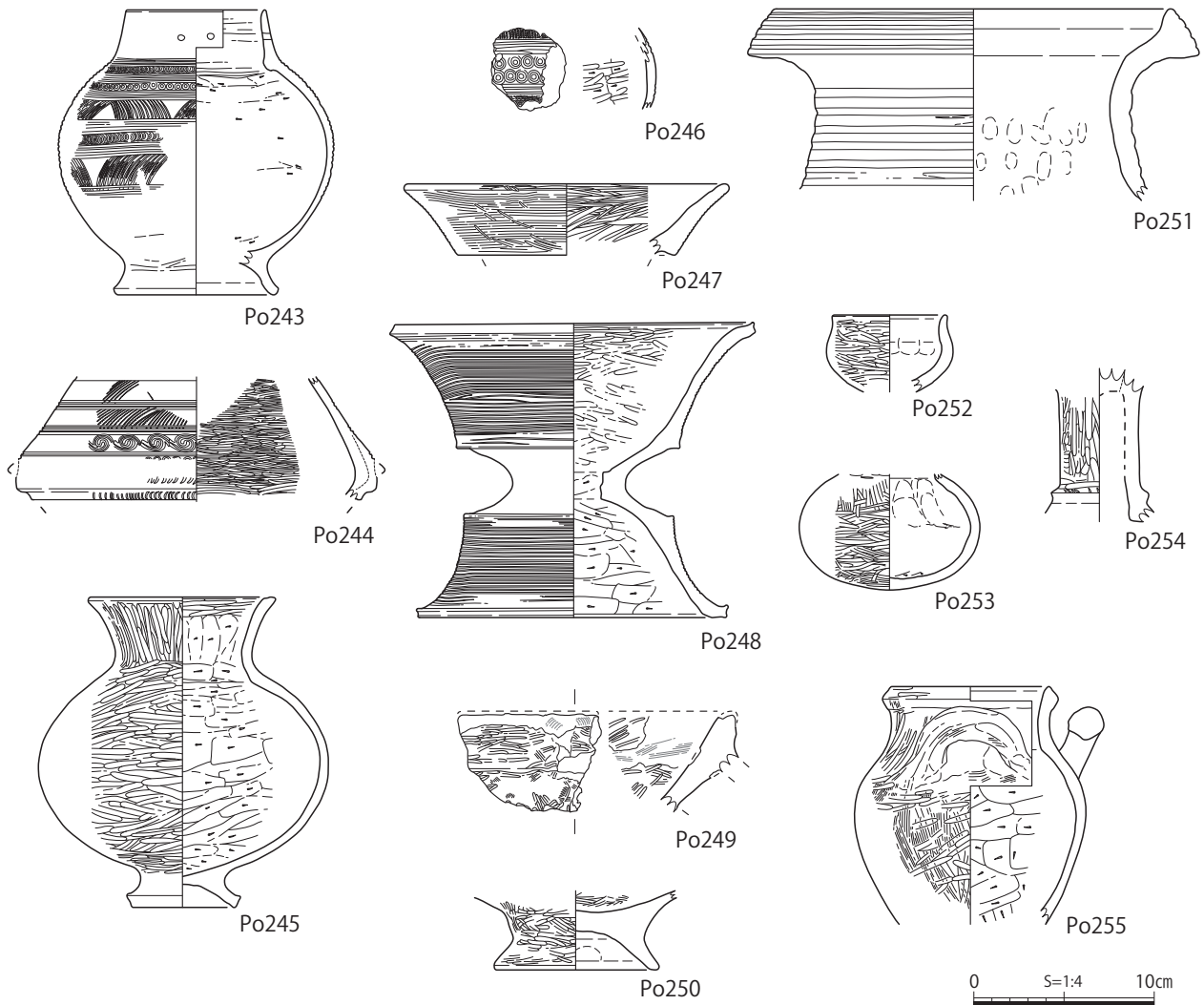


第169図 SD38 - Ca・b 出土土器 (1)

画し、スタンプ文、貝殻腹縁による連続刺突文で加飾する。

Po247・248は器台・鼓形器台である。いずれも複合口縁状の受部には多条の平行沈線が巡り、内面はミガキで調整される。Po248は鼓形器台であり、受部と脚裾部が大きく外反する。

Po249は器台の可能性のあるもの残存度が低く、また典型的な山陰地方の土器ではないため、器形



第170図 SD38 - Ca・b 出土土器 (2)

および器種は不明である。口縁下端から下方に突出する箇所があったとみられる。全面に化粧土がされており、その上はミガキで調整されているが、剥落した箇所では、その下に施されたハケメが露出する。Po250は脚台付坏とみられる。外面全体と坏部内面がミガキで調整される。Po251～254は外来系あるいはその可能性がある土器である。Po251は長頸壺であり、内傾する口縁部とハの字状に開く頸部に平行沈線が巡る。Po253は扁球状の胴部に直立する頸部をもつとみられる。外面はミガキによる調整が顕著である。これらは吉備地方のものと類似する。Po252は北近畿の脚台付無頸壺に類似する。Po254は高杯で円柱状の脚柱部と脚裾部の境に段をもつ。脚柱部外面はミガキで調整される。坏部の底部は円盤充填によって成形される。北近畿の高坏に類似する。Po255は水差形土器である。口縁端部は外側に肥厚し、肩部には横方向の把手をもつ。外面は頸部が縦方向、胴部が横方向を主体とするミガキによって調整されるが、全体的にハケメを残す。胴部内面のケズリは右方向を主体とする。

第171～179図はSD38-Ca・bから出土した木器である。

第171図には容器を示した。W135・136・139～142はSD38-Ca、W137・138はSD38-Cbから出土した。W135は蓋である。小判型の平面形を呈し、長軸の両端には2孔1対の穿孔が施される。平坦な頂

部と斜めに削がれた縁辺部の境に稜をもつ。

W136・137は椀・杯形容器で高台状の脚部をもつものである。W136は脚部を等間隔に8等分する位置にスリットが施される。W137の体部は平坦な底部からわずかに内湾して立ち上がり、外面には耳状のつまみをもつ。脚部は短く直線的に開く。全面に加工痕を残す。W138は高杯の口縁部片とみられる。内外面ともわずかな段が巡り、内面は赤彩される。

W139は杓子である。土圧のため潰れてるが、本来ほぼ円形の上面観を呈すとみられる。W50・141と類似するものである。

W140はハの字状に大きく開く高杯の脚部である。脚裾部にかけて器壁は薄くなるが、上部との段は明瞭ではない。頂部には杯部を接合するための円孔が穿たれる。

W141は高杯である。口縁端部には断面三角形の縁が巡る。杯部には円形と三角形の透かし文で加飾される。北陸系の花卉高杯に類似する。

W142は把手である。アーチ状のもので接合部分は平坦に加工されている、先端に設けられた僅かな段は、蓋などに緊縛するためのものとみられる。

樹種同定の結果、W137・139はクワ属製と判明した（第4章第4節）。

第172図には槽・盤類を示した。

W143は破損により平面形は明らかではないが、底部に短く削り出された円形の脚が側縁付近に位置するとすれば、隅丸方形であったと考えられる。断面形は逆台形を呈す。内面のみが炭化しているのは、使用による腐食を防ぐための処理であろう。W144・145は、隅丸方形あるいは隅丸長方形の平面形、浅い皿状の断面形を呈すものとみられる。

第173図には紡織具・農具ほかを示した。W146～148・150はSD38-Ca、W149・151・152はSD38-Cbから出土した。

W146・147は紡錘車である。ほぼ正円形を呈し、中央に円孔がひとつ施される。W146は中央部が肥厚する。

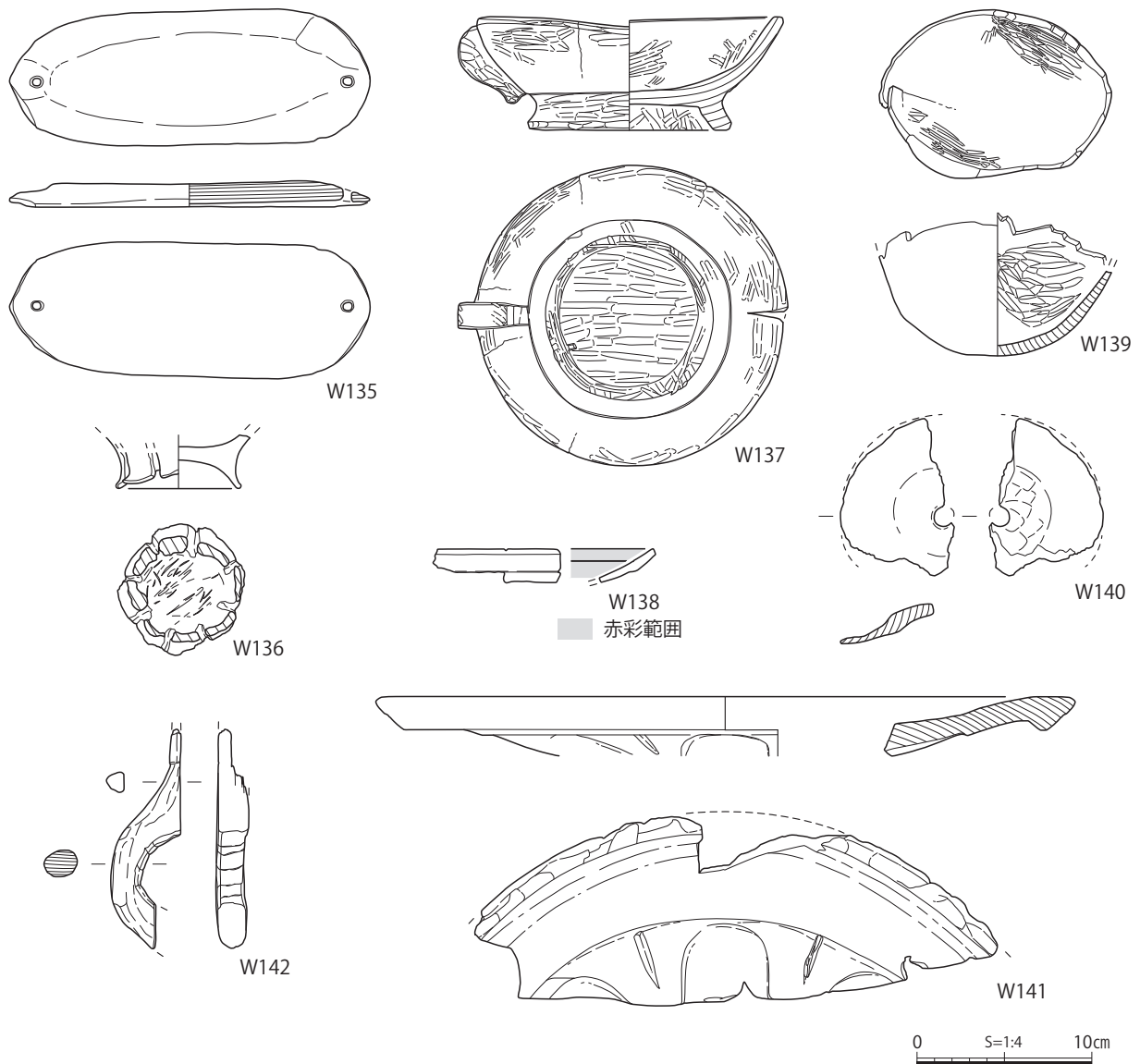
W148は火鑽臼である。右側辺の座の下に広がる張出状の部分は火種を受けるためのものか。全面が炭化している。

W149～151は木庖丁である。いずれも、刃縁が木目に斜行し、正面のみに2孔1対の紐孔をつなぐ溝をもつ。W149・150は正面左側に抉りもち、側縁を木目に平行させていることが確認できる。樹種同定の結果、W149はクワ属製と判明した（第4章第4節）。

W152は匙である。平面楕円形を呈す身は浅い。柄は身の立ち上がりから直線的に伸びる。内外面とも加工痕を顕著に残す。

第174図に示したW153はSD38-Caから出土した木鏃である。段を設けて断面円形の基部を作出する栓状鏃である、先端は3方向からの切り込みによって断面三角形を呈す。

第175図には桶を示した。W154・156・157はSD38-Ca、W155はSD38-Cbから出土した。W154はやや内傾して立ちあがるものである。内面の段に施された貫通しない小孔は底板を固定する目釘痕



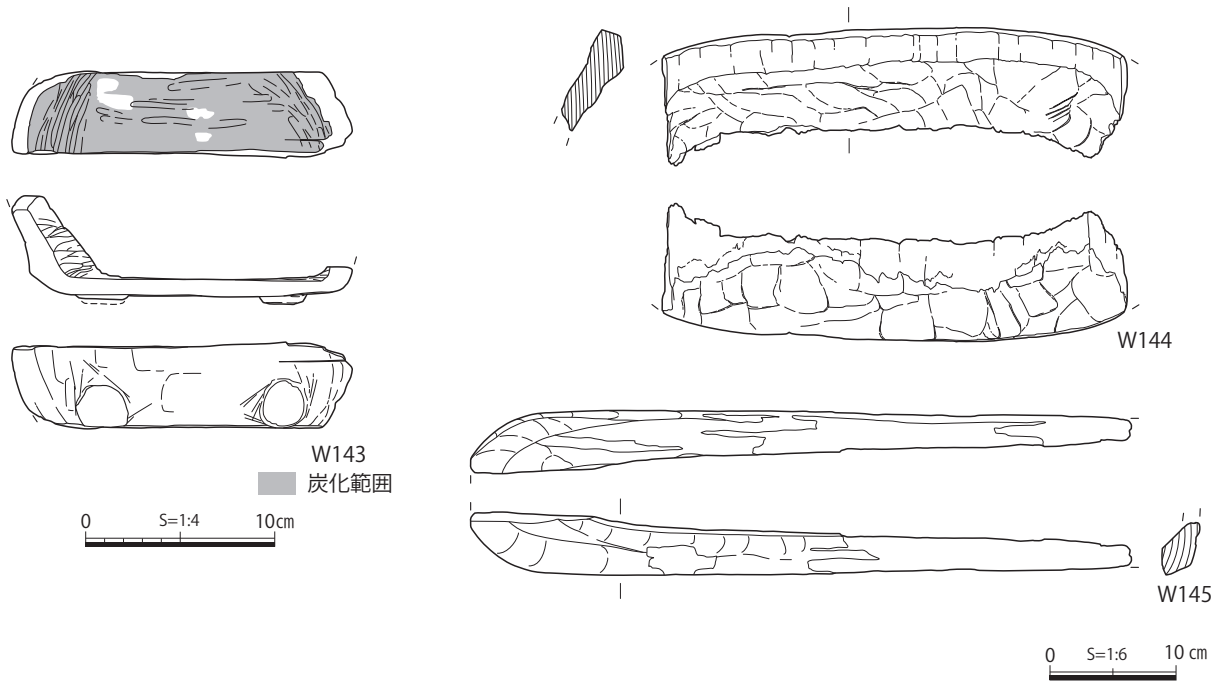
第171図 SD38 - Ca・b 出土木器（1）

とみられる。W155 はやや内傾して短く立ち上がるもので、内外面とも上半部が被熱黒化している。W156 は小判形の、W157 は円形の平面形を呈す桶の底板である。

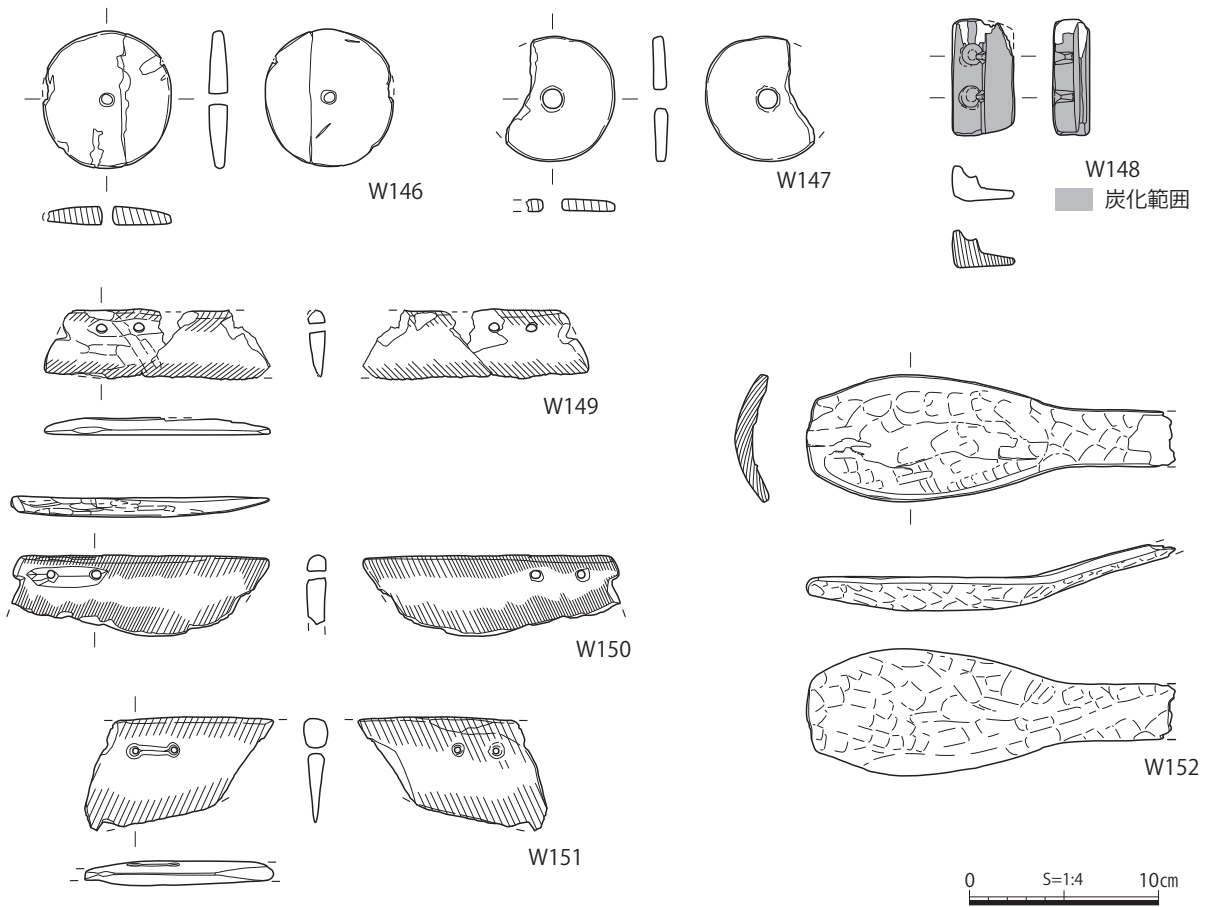
第176図には指物箱ほかを示した。

W158 は不明木器である。細長い直角三角形の平面形を呈し、右側縁の下部には方形の抉り込みが施される。大きさは違えどSD38-B から出土した W122 と類似する形態であり、同じ性格のものとみられる。

W159・160 は指物箱の部材である。左側辺付近は段を設け厚みを減じており、4か所の目釘孔が穿たれる。そのうちの1孔には目釘が残存している。下辺にはアーチ状の削り込みが2か所確認でき、その中間付近にやはり目釘痕の可能性のある円孔が穿たれる。W160 は長方形を呈す板材の両側編上部に半円状の張出をもつものである。この箇所を他の部材に設けた孔に差し込み、目釘を打つことで井桁状に組んだものとみられる。



第 172 図 SD38 - Ca・b 出土木器 (2)

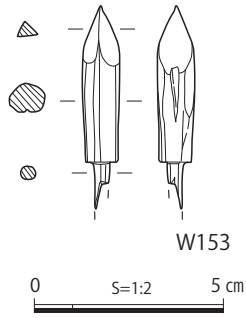


第 173 図 SD38 - Ca・b 出土木器 (3)

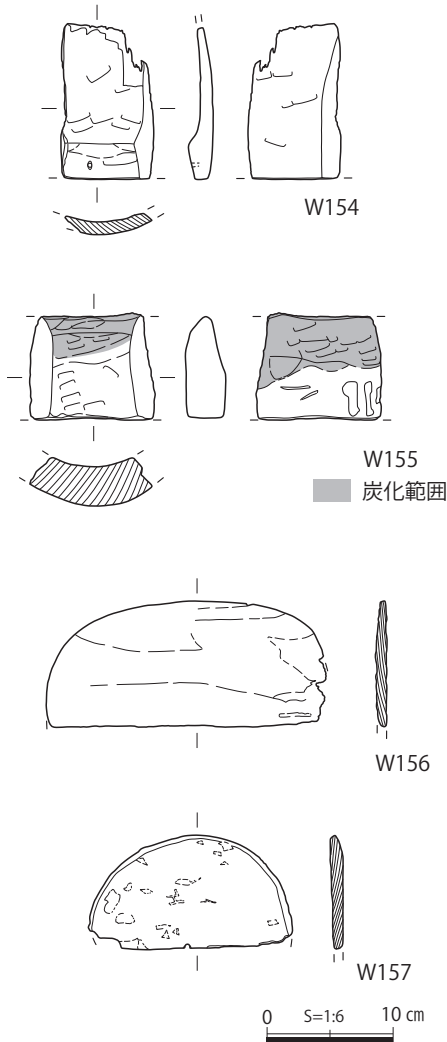
W161は不明木製品である。厚みのある材をコの字に成形する。断面は長方形を呈す。一部が炭化している。

第177図には火鑽臼ほかを示した。

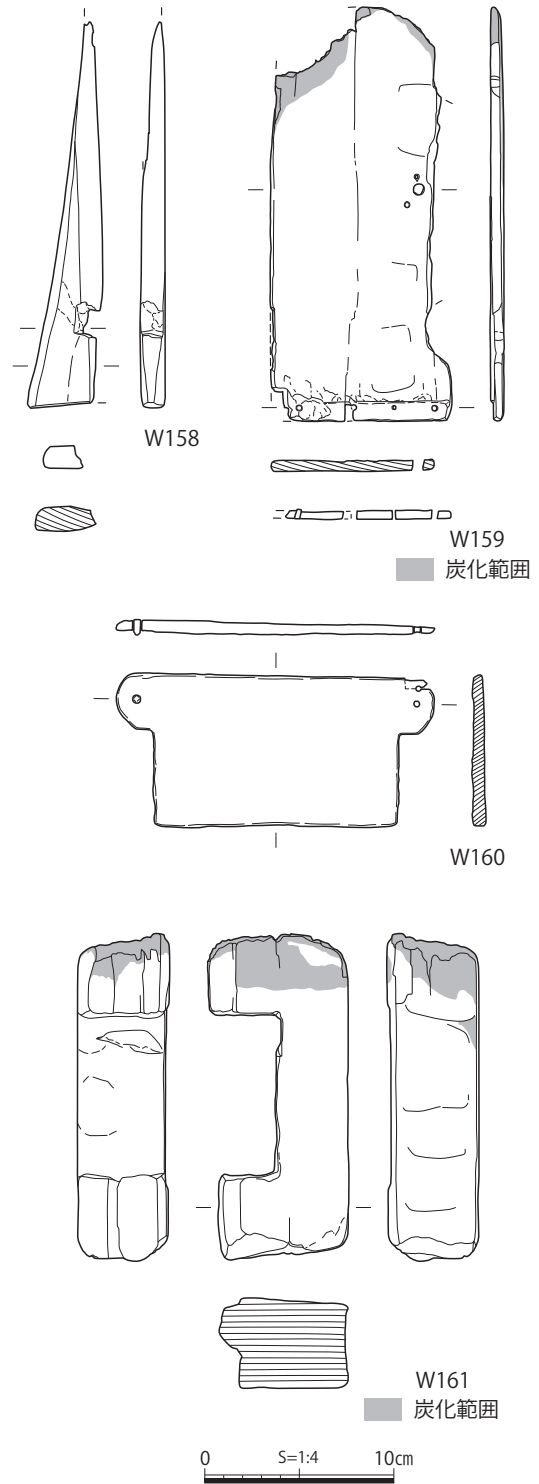
W162・163は火鑽臼である。W162は右側縁に使用後の座が2か所、使用前の座が1か所残存する。W163は杭を転用したものである。右側縁に1か所の座が残存するほか、上端と右側縁の一部が被熱



第174図 SD38 - Ca・b 出土木器 (4)



第175図 SD38 - Ca・b 出土木器 (5)



第176図 SD38 - Ca・b 出土木器 (6)

により欠損している。W164 は基部付近を抉り込み柄状に成形しており、刀形の可能性がある。上端部は被熱により欠損している。W165 は不明木製品である。

第 178 図には建築材あるいはその可能性があるものを示した。

W166 ~ 168・171 ~ 176 は SD38-Ca、W169・170 は SD38-Cb から出土した。

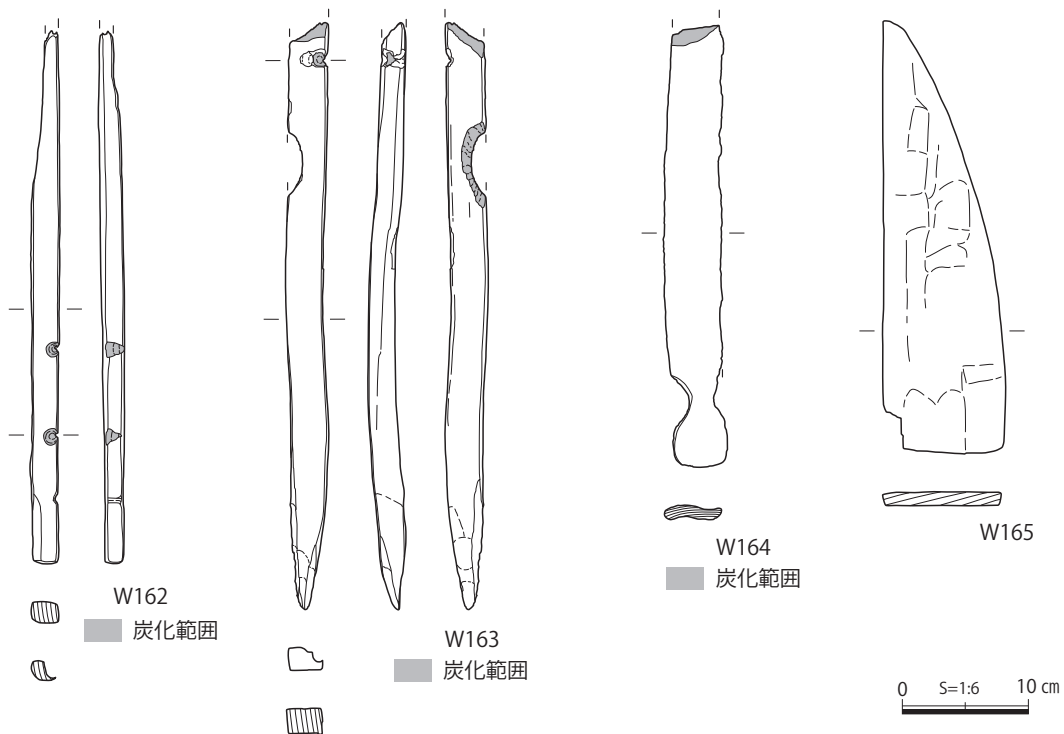
W166 ~ 170 は栓である。W166 ~ 168 は上端部と軸部を段によって明確に区分するもので、軸部の残存度が高い W168 は縦長の方形穿孔をもつことが確認できる。W169 は上端部と軸部の境は明瞭ではないが、切削によって下端部に向け厚みを減じている。軸部には方形穿孔が設けられる。W170 は断面六角形を呈す幅広の上端部をもつが軸部は細い。

W171 の杭は、面取りされ断面方形の刳込みをもつ上端部の形状から、転用前は建築材であったとみられる。部位は不明である。

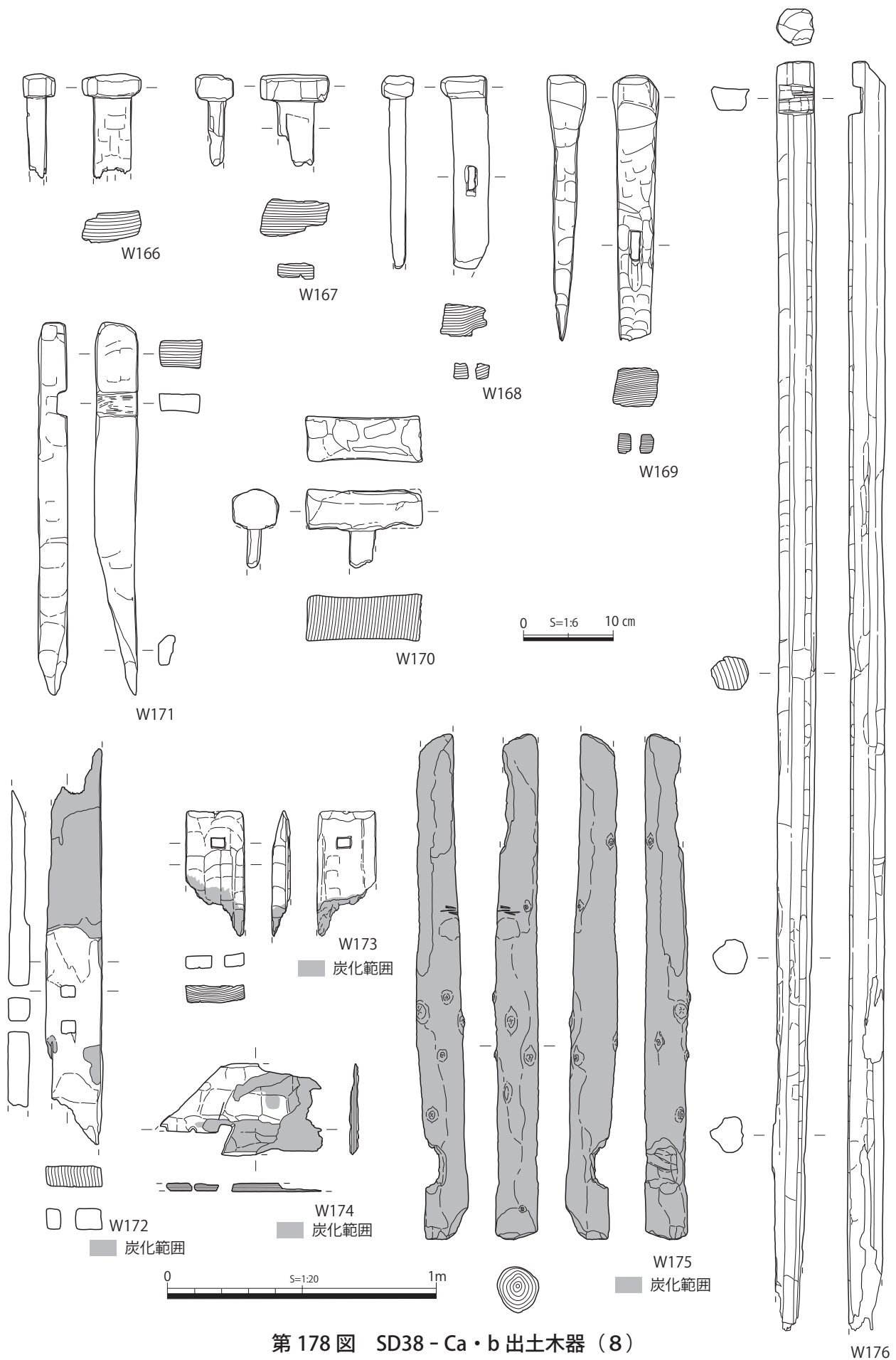
W172・173 は方形穿孔をもつ板材であるが、壁板としては厚く、どの部材であるかは不明である。W172 は 2 孔 1 対の方形穿孔が設けられる。被熱によって表面が剥落している。W173 は端部付近に 1 つ方形穿孔が設けられる。両面からの切削によって端部は厚みを減じている。

W174 は妻壁板である。被熱によって大部分が欠損しているが、下辺に他の部材を通すためとみられる鍵状の欠込みが入る。斜辺の角度は 48° を測る。

W175・176 は垂木である。W175 は芯持材を素材とし、表面には枝の痕跡を残す。端部の成形は斜めの切り落とし、欠込みともに粗雑である。全面が被熱により炭化している。W176 は芯去材を素材とする、表面は加工によって面をなし、断面は六角形から不整円形を呈す。端部の上面は斜めに切り落とされ、下面には断面方形の欠込みが施される。



第 177 図 SD38 - Ca・b 出土木器 (7)



第178図 SD38 - Ca・b 出土木器 (8)

W176

第179図には矢板、杭を示した。

W177～179は矢板である。W177は、厚く逆台形の断面を呈す材を成形したものであり、建築材の転用品とみられる。W178は上端が被熱によって欠損している。

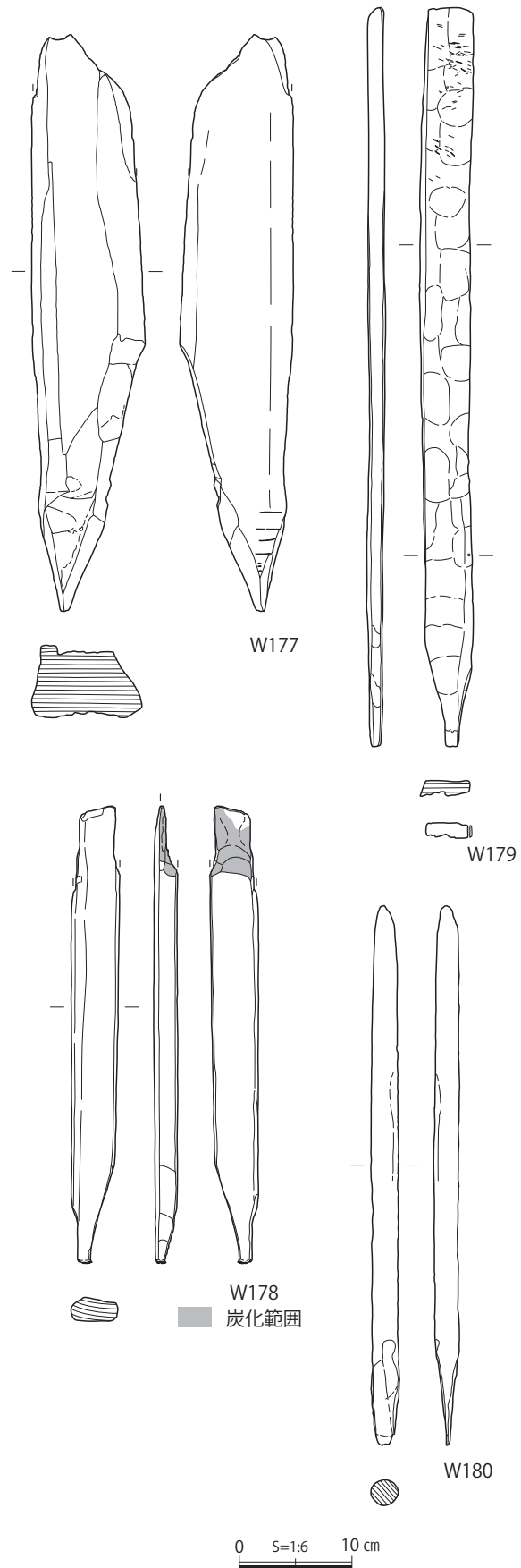
W180は杭である。円形の断面を呈す材を表裏両面から切削して、先端部を成形する。

第180図には骨角器を示した。

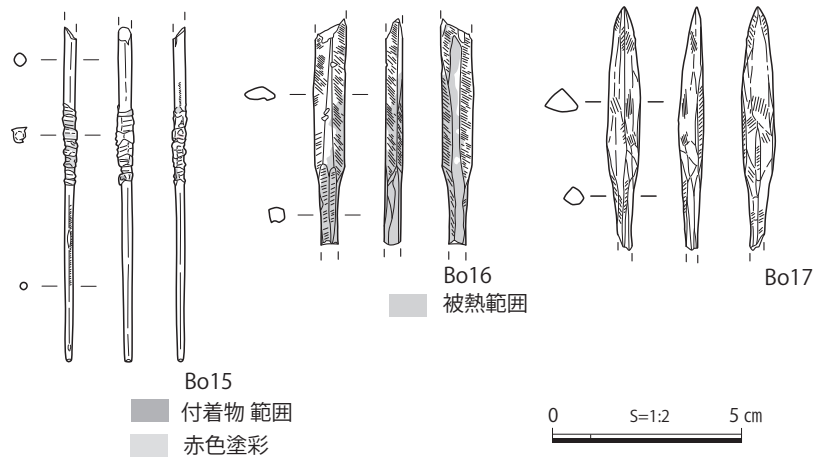
Bo15は簪である。横断面は円形を呈す。糸状のものを巻いたうえで漆で接着しており、一部に赤彩が認められる。Bo16・17は骨鏃である。Bo16は柳葉形に分類されるものとみられる。大型獣の長管骨を素材とし、鏃身は扁平に、茎は断面方形に成形されている。基部と裏面を中心に被熱による黒化が認められる。Bo17は柳葉形の平面形を呈すが、鏃身、茎ともに横断面三角形に成形されている。

第181図にはSD38-Cbから出土した銅鏃を示した。Br15・16とも三角形の平面形を呈する無茎鏃である。先端と両側縁に鑄をもち、偏六角形の横断面形を呈す。また、両面に接着材の痕跡の可能性のある付着物がみられる。Br15は長幅比2:1の逆刺をもたない平基式である。人骨を多数含む土壌サンプルから検出されたことが特筆される。Br16は長幅比3:2の逆刺をもつ凹基式である。

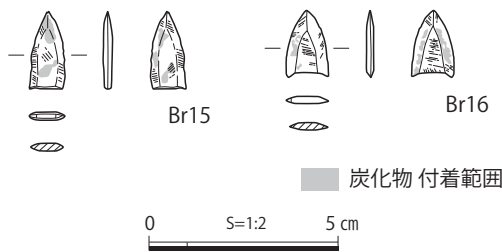
第182図にはSD38-Ca・bから出土した玉類を示した。J9は長幅比1:1の短い管玉であり緑色凝灰岩を素材とする。J10は蛇紋岩製の勾玉である。成形時の稜を残すが、全面が丁寧に研がれる。G5はガラス小玉である。淡青色を呈す。



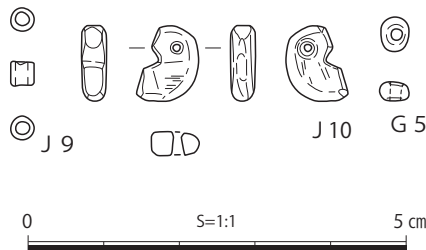
第179図 SD38 - Ca・b 出土木器 (9)



第180図 SD38 - Ca 出土骨角器



第181図 SD38 - Cb 出土金属器



第182図 SD38 - Cb 出土玉類

85・87土坑（第183図）

調査区北側において、SD38-Bの下面、標高約0.0m付近で検出した土坑であり、85土坑が87土坑を切る。SD38-Cbの1.0m東側に位置する。

85土坑は不整楕円の平面形を呈し、長軸1.10m、短軸0.37mを測る。皿状の断面形を呈すが、南東隅がピット状に掘り込まれている。

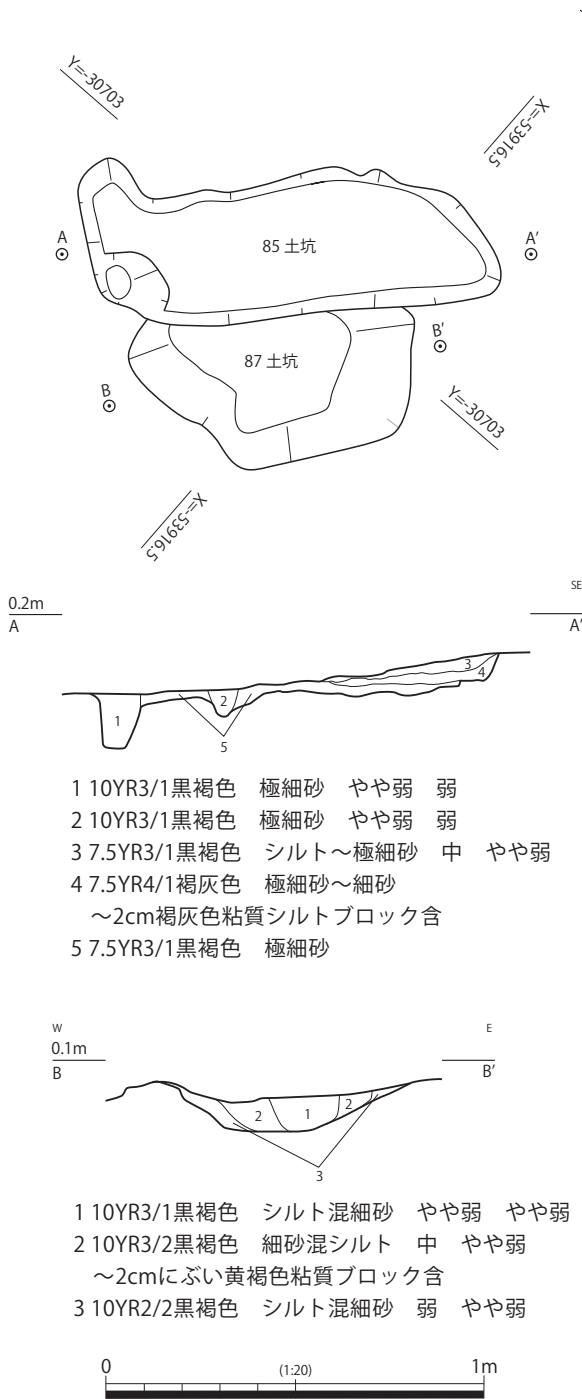
87土坑は全体の規模は不明であるが、不整円形の平面形を呈し、長軸0.73mを測る。皿状の断面形を呈し、検出面からの深さは最大で9cmを測る。黒褐色のシルト混細砂あるいは細砂痕シルトを主体とする埋土は3層に分層できる。

第184図には85・87土坑から出土した土器を示した。Po256は広口壺であり、外反する口縁部をもつ。内外面とも丁寧なミガキで調整される。Po257は甕である。内傾する短い複合口縁の外面に、幅の

広い平行沈線が施される。弥生時代後期前葉のものとみられる。

88柱穴（第185図）

調査区北東部において検出した、造成土⑥を掘り込む柱穴である。Ⅶ層下面では確認されず、SD38-Ca・bと同一の面で検出した。検出面の標高は0.0mを測る。位置的にみて、本来はSD38-Ca・bが区画する張出部の北辺付近にあったものとみられる。不整円形の平面形を呈し、長軸0.68m、短軸0.67mを測る。検出面からの深さは84cm以上である。中央部に立てられた柱W181は、南西側の杭、北東側の礫と矢板で根本を補強されている。埋土は10層に分層でき、黒褐色あるいは灰黄褐色の粘質土を主体とし、一部褐灰色細砂層が混じる。

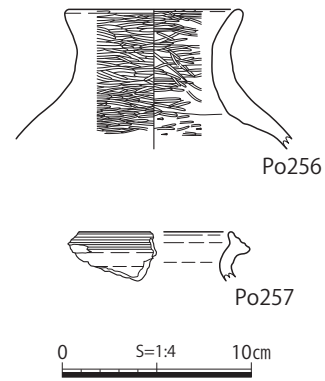


第183図 85・87土坑

溝とトレンチでのみ掘削を行った。これによって、断片的にはあるが、弥生時代後期後葉以前の遺構を確認し、区画溝変遷や構造についての情報を得ることができた（第188図）。

SD38全体の土層断面を記録するため2.5m幅で掘削を行った調査区南側壁面際では、弥生時代後期後葉の区画溝SD38-Cと、弥生時代後期前葉の区画溝SD38-Fの西側護岸、さらに下層の造成土であるⅨ層の土留めを確認することができた。

また、西側測溝ではⅧ層中に弥生時代後期前葉の造成に伴う木製構造物を確認した。



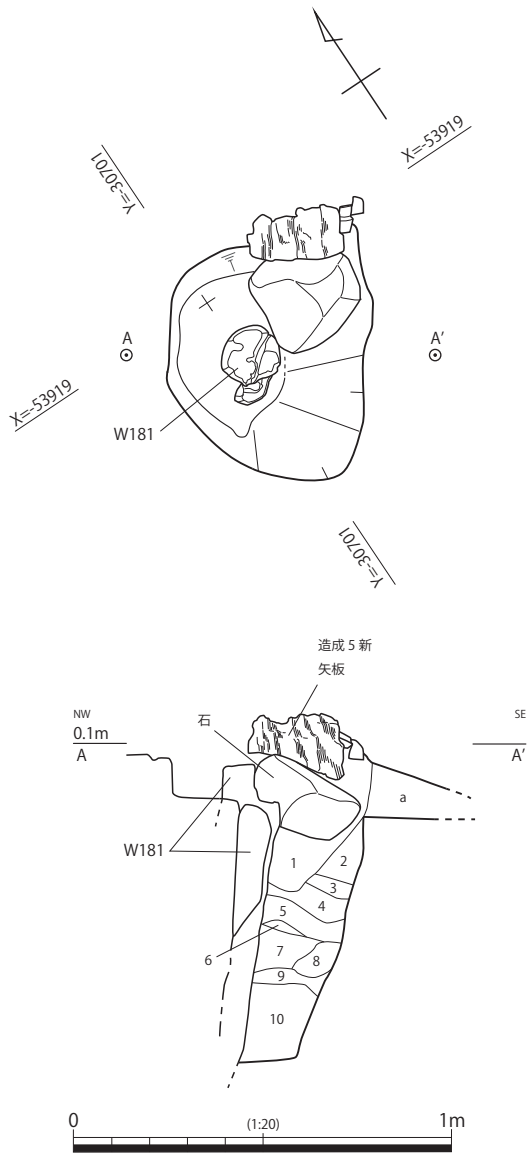
第184図 85・87土坑出土土器

第186図に柱W181を示した。針葉樹の芯持材の全面をはつることで先端をとがらせている。

第187図は88柱穴から出土した土器である。Po258・259は甕である。Po258は、外傾する複合口縁に波状文が施される。胴部内面のケズリは左方向であり、粘土つなぎの痕跡を残す。弥生時代後期後葉に属す。Po259は短く外傾して立ち上がる複合口縁をもつもので、胴部は球形を呈すとみられる。肩部には板状工具による刺突文が施される。胴部内面はミガキが顕著であり、一部に右方向のケズリを残す。

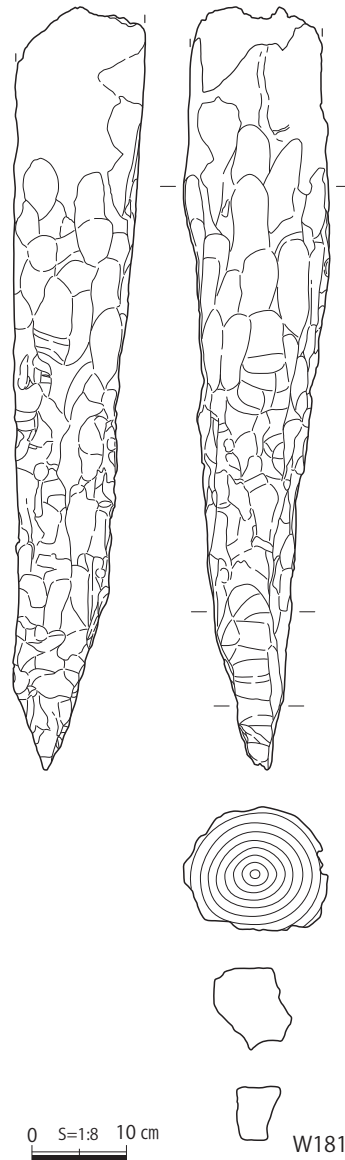
第11項 弥生時代後期前葉から後葉の遺構と出土遺物

本調査においては、人骨を包含するSD38-Ca・bをもって平面的な調査を終了しており、それより下層については、調査区四周の排水

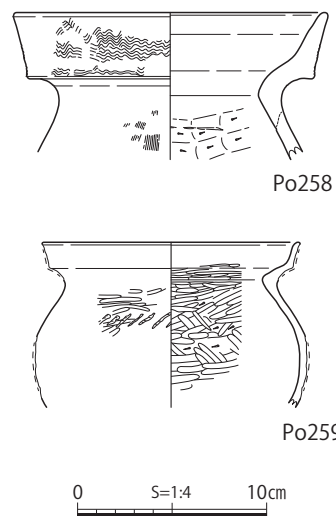


- 1 2.5Y3/2黒褐色 粘質土
- 2 2.5Y3/2黒褐色 粘質土
- 3 2.5Y3/2黒褐色 砂質土
- 4 10YR5/1褐灰色 細砂
- 5 2.5Y3/2黒褐色 粘質土
- 6 10YR5/1褐灰色 細砂
- 7 10YR4/1褐灰色 細砂
- 8 2.5Y5/3黄褐色 粘質土 細砂混
- 9 2.5Y5/1黄灰色 粘質土 貝片混
- 10 2.5Y4/1黄灰色 粘質土
炭・カキ・ドブ貝・シジミ多混
- a 2.5Y3/2黒褐色 粘質土 細砂縞状に混 (造成6)

第185図 88柱穴 平面図・断面図



第186図 88柱穴出土木器

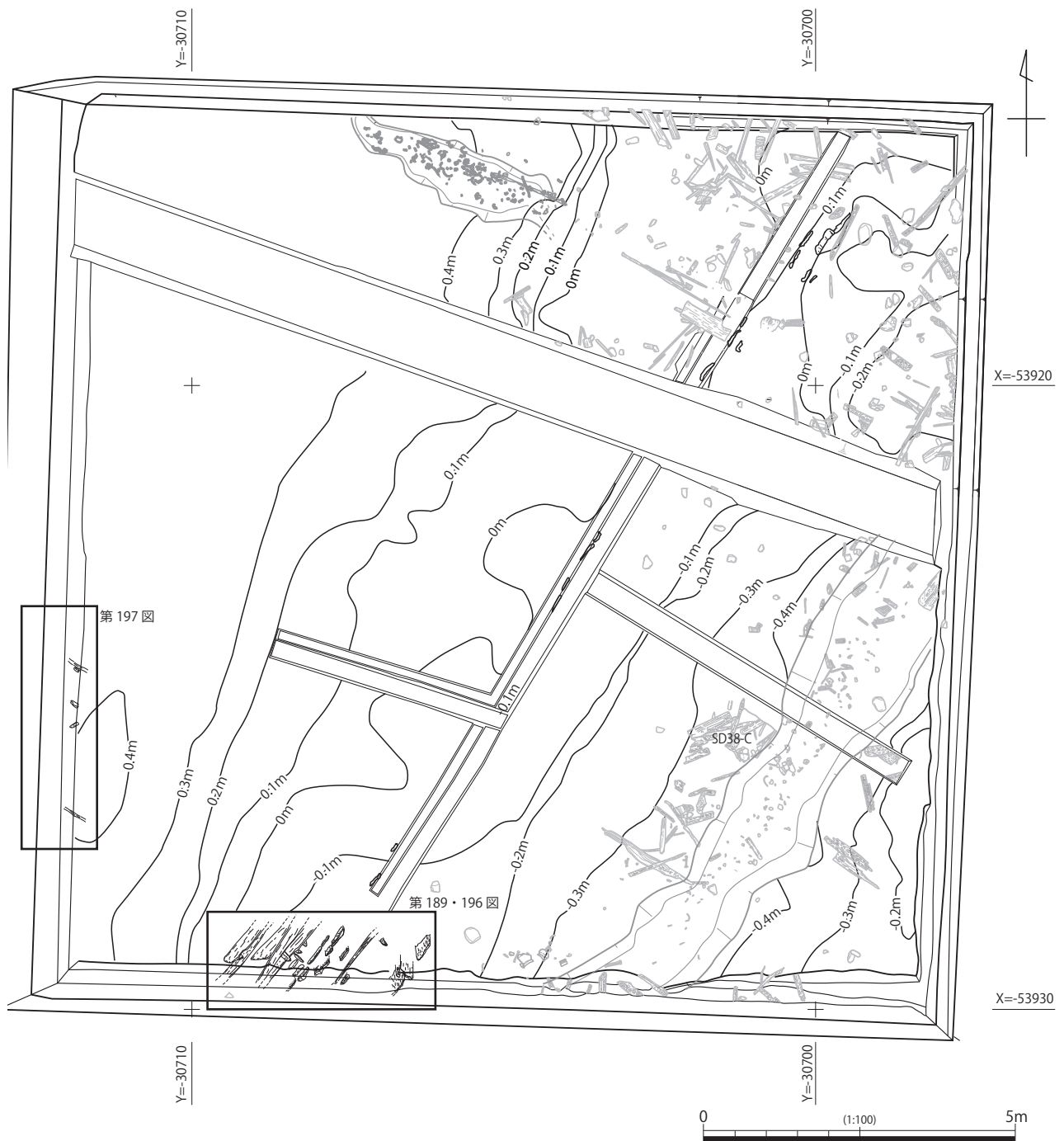


第187図 88柱穴出土土器

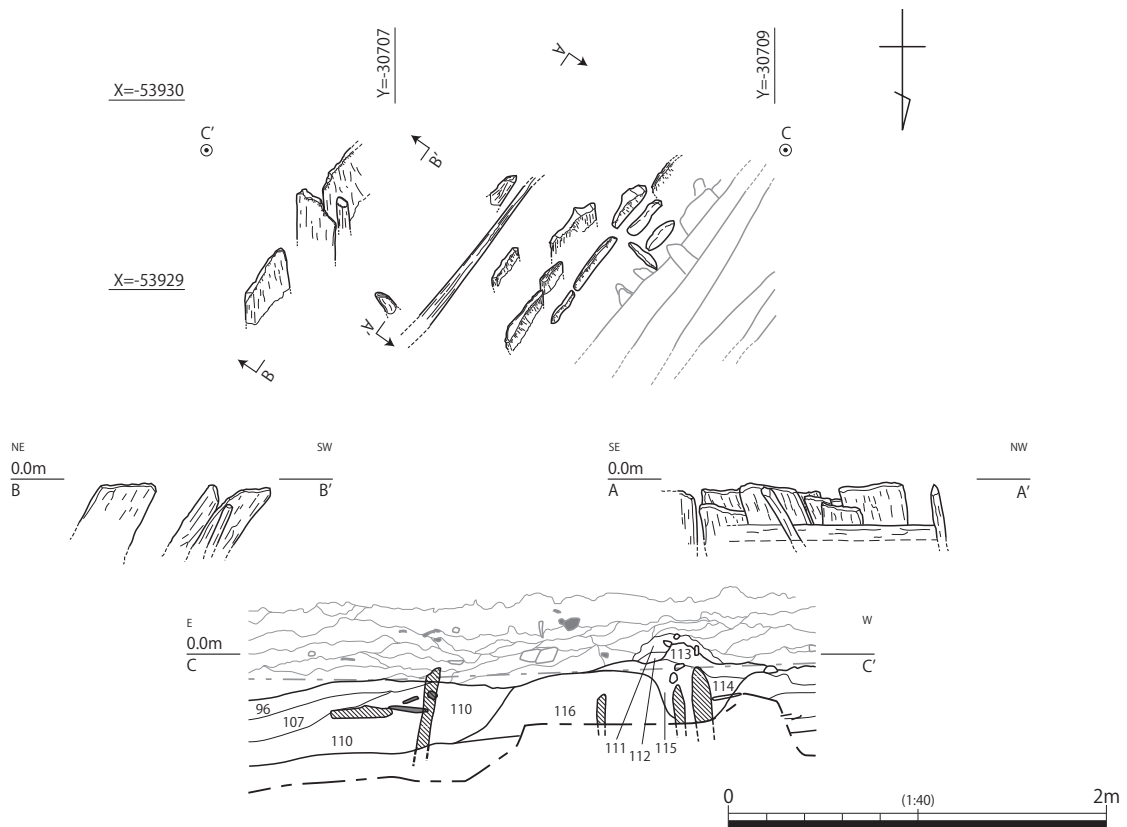
SD38-C (第189図)

Ⅶ層下面において、調査区南壁中央部から調査区北壁にかけて北東-南西方向(N-30°E)に走る矢板列の上端を部分的に検出した。位置と方向性、調査区南壁土層断面の検討からこれが第1次発掘調査県道8区で確認されていた弥生時代後期後葉段階の区画溝SD38-2の延長部分であることを確認した。調査区南壁土層断面(第8図)に加え、トレンチ1・2(第167-2・3図)においても両肩を確認し、東肩は矢板等の護岸をもたないことを確認した。

重複するSD38-Bと異なり、屈曲せず、東肩から西肩の矢板までの最大幅は6.1m、南壁での最大



第188図 弥生後期の区画溝と造成遺構



- | | |
|---|---|
| 96 10YR5/2灰黄褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまり中 | 114 7.5YR2/2黒褐色 シルト 粘性やや強 しまり中
腐植混 |
| 107 10YR5/1褐灰色 細砂混シルト 粘性やや弱
しまりやや弱 貝殻片含 | 115 10YR3/1黒褐色 シルト混細砂 粘性中
しまりやや弱 |
| 110 10YR5/2灰黄褐色 シルト混細砂 粘性やや弱
しまりやや弱 | 116 10YR5/2灰黄褐色 細砂混シルト 粘性やや弱
しまりやや弱 細礫少混 |
| 111 10YR3/2黒褐色 細砂混シルト 粘性やや弱
しまりやや弱 ~1cm炭化物少含 | |
| 112 10YR4/1褐灰色 細砂混シルト 粘性やや弱
しまりやや弱 ~5mm炭化物少含 | |
| 113 10YR3/1黒褐色 細砂混シルト 粘性やや弱
しまりやや弱 | |

※土層番号、注記は第8図 調査区南壁土層断面と同様

第189図 SD38-C

深は76cmを測る。埋土は多様であるが、中層は黒色～褐灰色の細砂を主体としている。全体の断面が記録できた南側溝においては、褐灰色シルト～細砂を主体とし貝殻片を含む下層の特徴が確認できる。下層は灰黄褐色細砂を主体とする。また、土層断面においても埋土中に明確なラミナ構造は一部にしか認められない。

平面的には一部の矢板の頂部のみを検出にとどまっていたが深掘りを行った南側溝付近では、同方向に走る複数の矢板列と横板を杭で固定する木製構造物を確認した。このような構造は、第1次発掘調査県道8区で確認されていたSD38-2の西肩で確認されていたものと共通するもので、SD38-CとSD38-2が同一の区画溝であることを裏付ける。

南側溝の土層断面では、これら矢板と木製構造物が入り込む箇所の堆積が土手状を呈しており、あたかも矢板や木製構造物を芯材や土留めとした土手が護岸となっていたように見える。トレンチ1の

土層断面（第167-3図）においても横板を杭で固定した木製構造物2条が土手状の堆積に被覆されていることが確認できる。

第1次発掘調査の報告はじめ、これまでSD38の西肩では矢板や木製構造物自体が護岸となっていたと捉えられてきた。今回の調査ではSD38-C全体を対象とした平面的な調査を行っていないため、可能性を指摘するにとどめたいが、このような土層断面の状況から、SD38-C、すなわちSD38-2の西肩については、木製構造物で補強した土手が護岸となっていたことが考えられる。SD38の変遷が、弥生時代後期前葉から古墳時代前期前葉にかけて、繰り返し行われた造成に伴っていることを踏まえれば、このような護岸のあり方も首肯されるものではなかろうか。

掘削箇所は少ないながら、SD38-Cからは、土器や木器をはじめとする多量の遺物が出土した（第190～195図）。SD38-Cから出土した土器は、弥生時代後期後葉のものが殆どであり、これより新しいものは認められない。

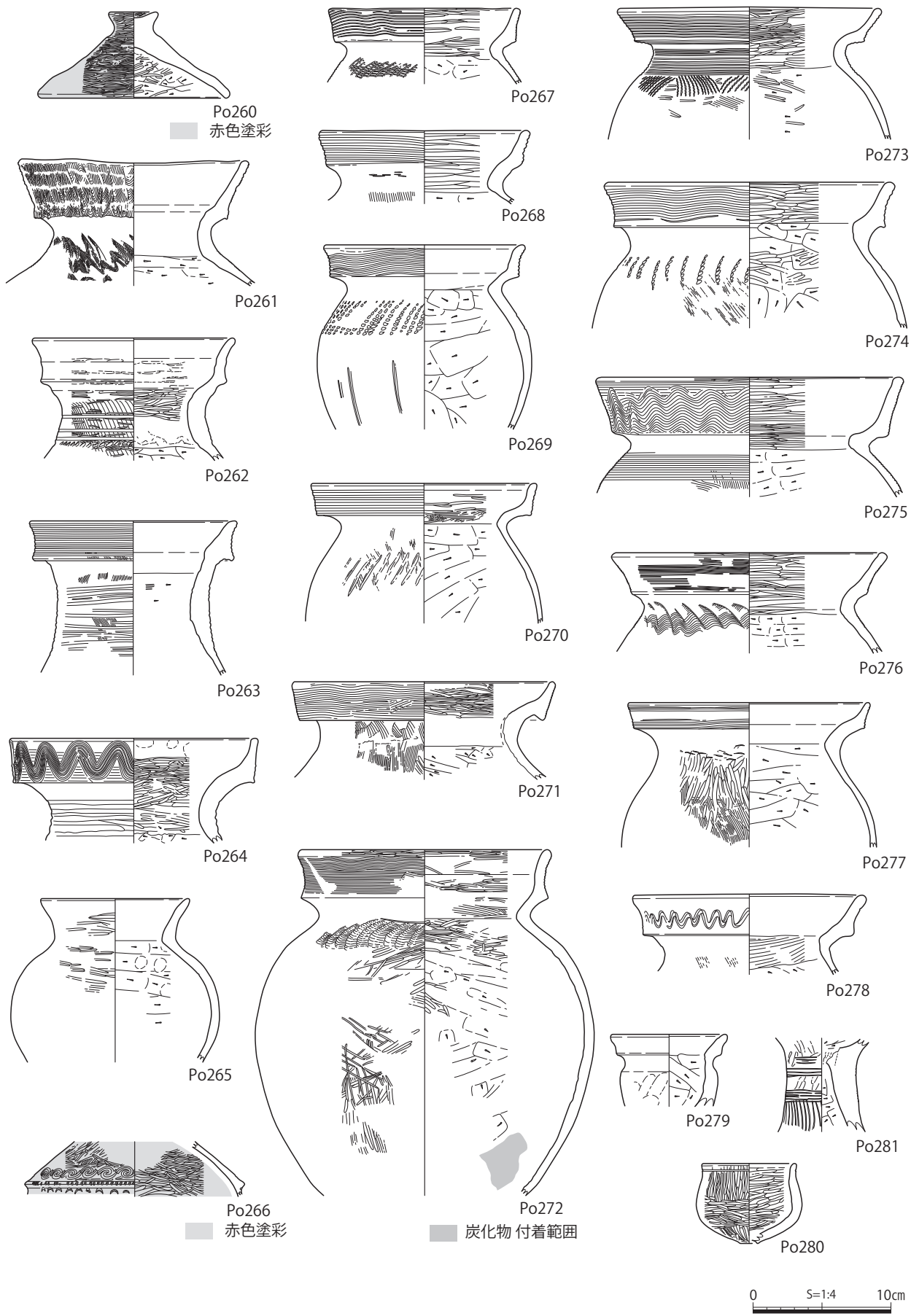
第190図にはSD38-Cから出土した土器を示した。

Po260は蓋である。外傾して短く立ち上がるつまみ部をもち、体部は直線的に広がる。内外面ともミガキで調整されるが体部内面にはケズリの痕跡が残る。外面全体が赤彩される。

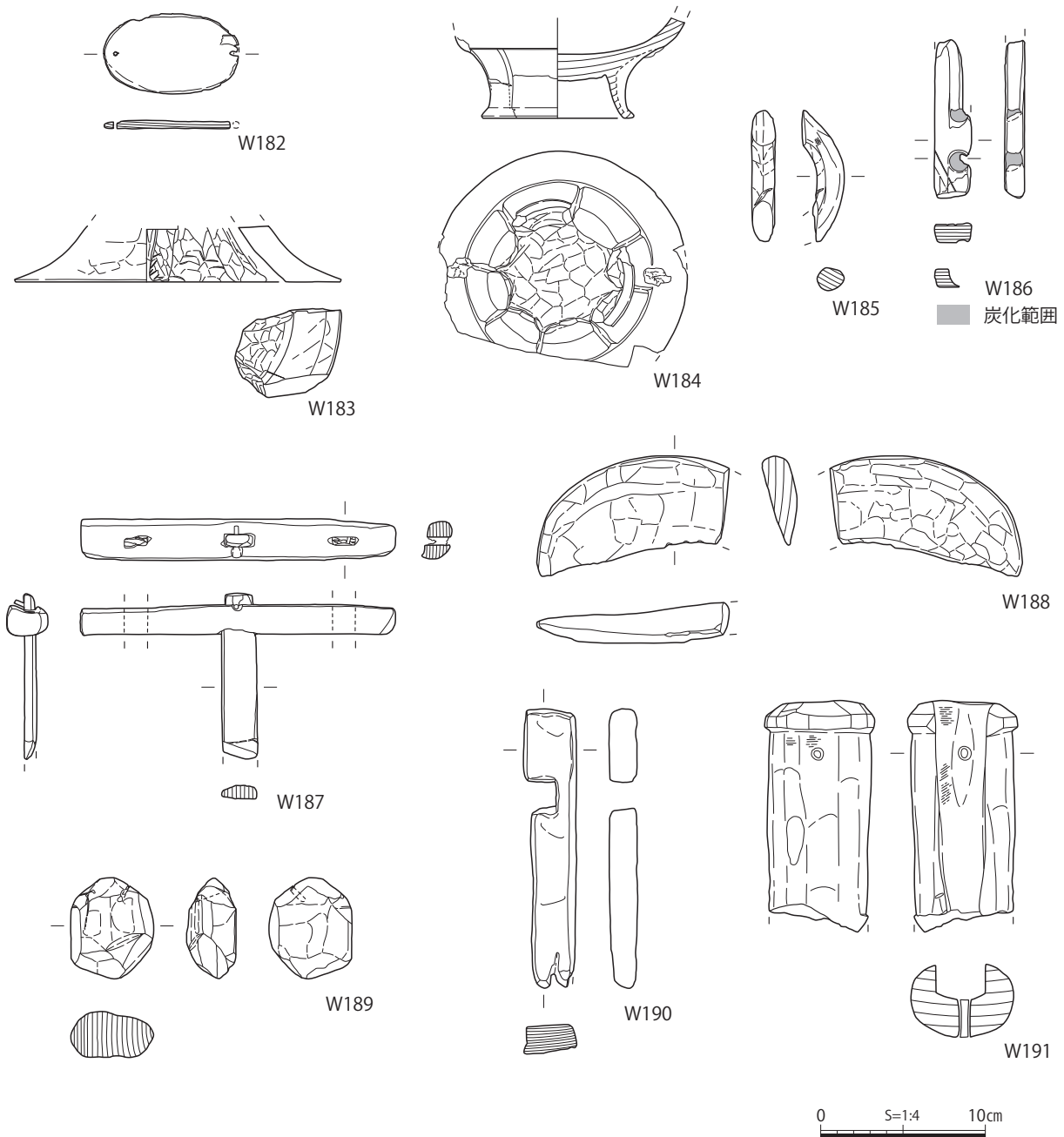
Po261～264は複合口縁をもつ壺である。Po261は、直線的に外傾する複合口縁をもつもので、頸部は短い。口縁部、頸部から肩部にピッチの急な波状文が施される。胴部内面のケズリは左方向である。Po262は外反する複合口縁をもち頸部には3条の沈線が巡る。内外面とも口縁部から頸部にかけてのミガキによって光沢をもつ。胴部内面のケズリは左方向である。Po263は短く外反して立ち上がる複合口縁と長い頸部をもつ。口縁部には櫛状工具による多条の平行沈線が巡る。頸部には14条の沈線が巡る。Po264の直立して立ち上がる口縁部には平行沈線の後波状文が施される。頸部には粗雑な沈線が5条巡る。口縁部から頸部内面はミガキで調整される。胴部内面のケズリは左方向である。Po265は単口縁をもつ壺である。外面がミガキで調整され、胴部内面のケズリは右方向である。

Po266は台付装飾壺である。刻みのつく突帯によって上下に区画される算盤玉状の胴部はスタンプ文で加飾される。内外面ともミガキで調整され、赤彩される。

Po267～278は複合口縁をもつ甕である。Po278を除き、口縁部には平行沈線が巡る。口縁部内面は横方向のミガキで調整されるものが多い。Po267は肩部に押引文が巡る。胴部内面のケズリは左方向である。Po269は肩部に貝殻腹縁による刺突文が巡る。胴部内面のケズリは右方向である。Po270は肩の張りが弱い器形であり、肩部には板状工具による刺突文が巡る。Po271は頸部以下の縦方向のハケメ調整が顕著である。Po272は肩部に押引文が巡る。倒卵形を呈す胴部はミガキによって調整される。上半部内面のケズリは左方向を主体とする。胴部内面の一部には炭化物が面的に付着している。Po273は頸部に平行沈線、肩部に貝殻腹縁による連即刺突文が巡る。胴部内面のケズリは左方向だが、ミガキによって単位は不明瞭である。Po274は口縁部から頸部の器壁がやや厚い。肩部には貝殻腹縁による刺突文が巡る。Po275の口縁部は平行沈線の上から波状文が巡る。肩部には平行沈線が巡る。口縁部から頸部内面はミガキで調整され、胴部内面のケズリは右方向である。Po276は大きく外傾する複合口縁をもつ。口縁部の平行沈線は一部ナデ消され、肩部には押引文が巡る。口縁部から頸部内面はミガキで調整され、胴部内面のケズリは右方向である。Po277は短く外傾して立ち上がる複合口縁をもつ。口縁部平行沈線は一部ナデ消される。胴部はハケメ後縦方向のミガキで調整される。胴部内面のケズリは不定方向である。Po278はやや器壁の厚い口縁部に粗雑な波状文が巡る。頸部内面は



第190図 SD38-C 出土土器



第 191 図 SD38 - C 出土木器 (1)

横方向のハケメで調整される。胴部内面のケズリは左方向である。

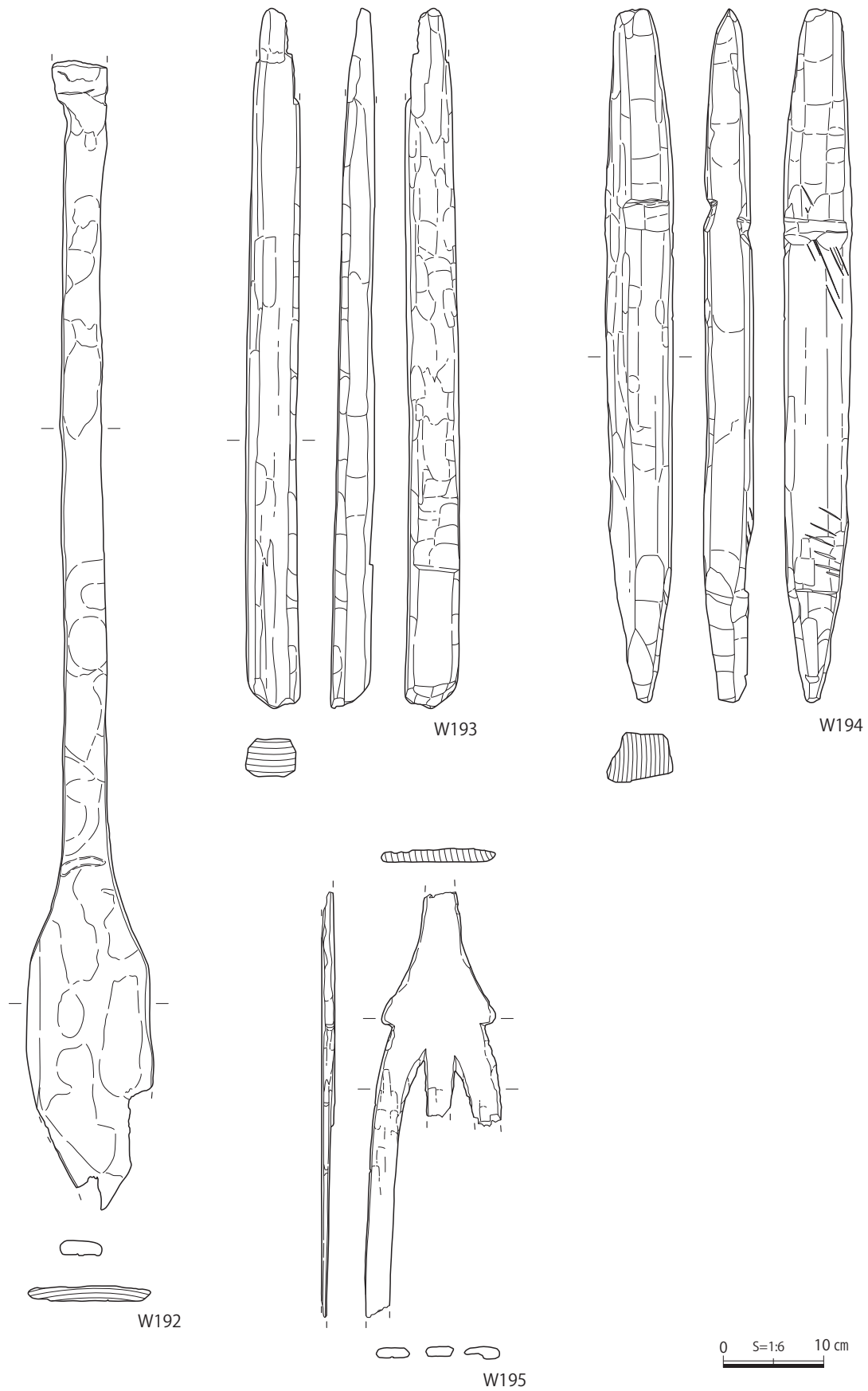
Po279 は鉢である。口縁部と胴部の間にくびれをもたせ、甕状の器形に成形する。胴部外面にはナデの痕跡を残し、胴部内面はケズリによって調整される。

Po280 は北近畿系の無頸壺である。口縁端部下に 1 条の沈線が巡る。坏部内外面ともミガキによる調整が顕著である。

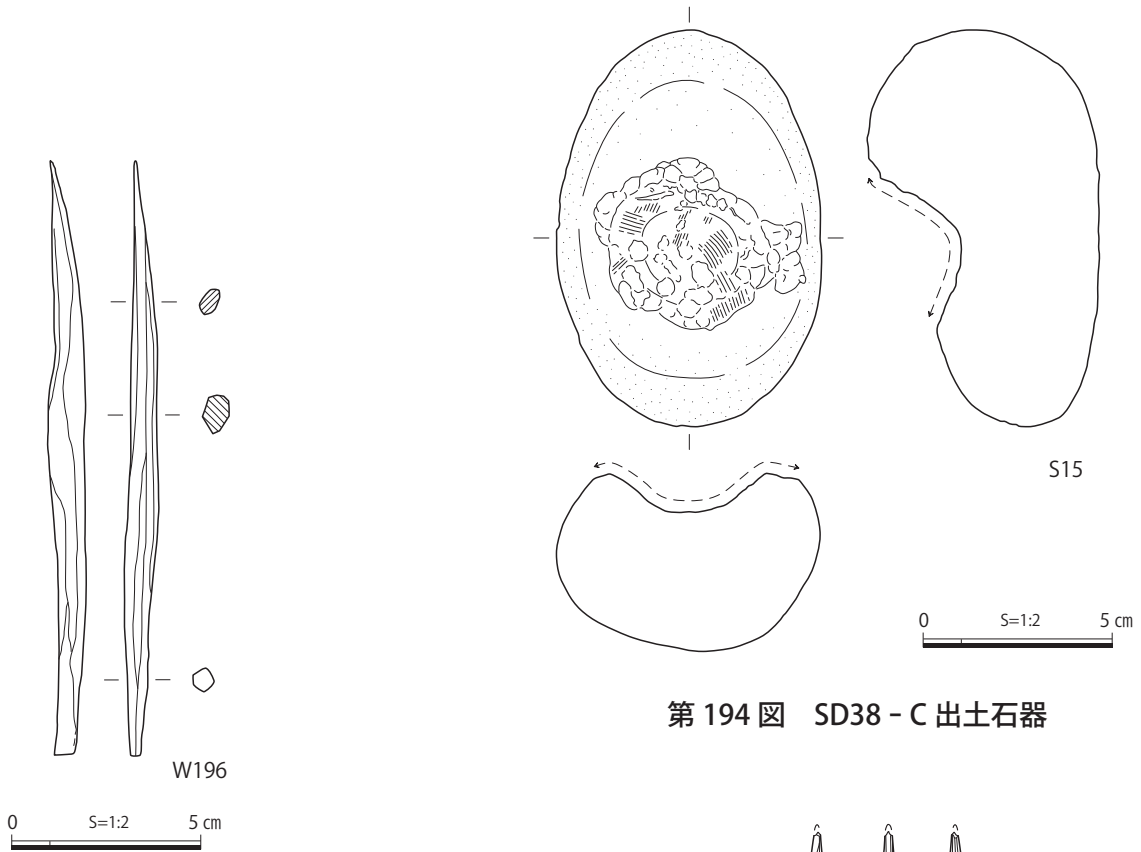
Po281 は器台である。器壁の厚い脚柱部を横方向のシャープな沈線で加飾する。

第 191 ～ 193 図は SD38-C から出土した木器である。

第 191 図には容器ほかを示した。W182 は蓋である。楕円形を呈し、長軸方向の両端に孔を施す。



第 192 図 SD38 - C 出土木器 (2)



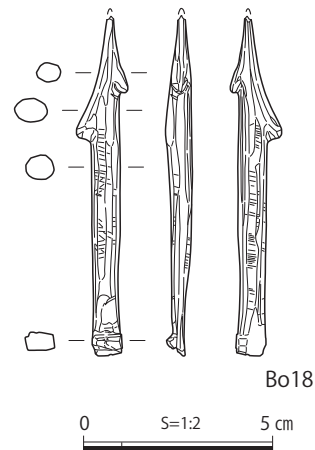
第 194 図 SD38 - C 出土石器

第 193 図 SD38 - C 出土木器 (3)

W183 は高坏である。ハの字状に開く脚部にスリットを施す。脚部設置面には設計時の圏線が残る。W184 は椀・坏形容器である。椀部は平坦な底部から内湾して立ち上がる。脚部にはほぼ均等に割り付けられた8か所のスリットを施す。樹種同定の結果、当資料はケンボナシ製と判明した(第4章 第4節)。W185 は把手である。アーチ状で、断面は楕円形を呈す。接合部は平坦である。W186 は火鑽臼である。右側縁に2か所の座が残る。W187 は杵である。腕木の中央の方形穿孔に支え木を差し込み目釘で固定している。

W188 は木鎌の刃部である。厚みがあり、側面観がやや湾曲することから、容器の転用品の可能性はある。W189・190 は不明木器である。W189 は潰れた球状に成形されており。貫通しない孔が1か所穿たれる。W190 は左側縁から方形の欠込がなされる。W191 は柄である。断面楕円形を呈す握り部の片側は方形に欠込まれており、ここに利器を嵌め込み、目釘で固定したものとみられる。上端部が外側に張り出すのは、滑り止めのための造作であろう。

第 192 図には、櫂、鋏ほかを示した。W192 は櫂である。身は柳葉形を呈し、破損しているものの



第 195 図 SD38 - C 出土骨角器

把手をもつとみられる。平坦な一木の板材を成形したもので、全体的に厚みに差はなく、身も稜をもたない。

W193は建築材である。断面は面取りした方形を呈す。端部側に浅い欠込みを1か所施す。垂木に似るが、端部の成形は典型的なものではない。W194は杭である。建築材の転用品とみられ。正面と裏面に浅い欠込みを残す。W195は曲柄又鋏である。軸部と刃部との境に山形の突起をもつ「なすび形」のもので、刃部は三又に分岐する。樹種同定の結果、本資料はアカガシ亜属製と判明した（第4章 第4節）。

第193図に示したW196はヤスである。やや湾曲するもので、先端は尖らせ基部は平坦に成形している。表面には切削による稜を残すため、断面は多角形を呈す。

第194図に示したS15は凹石である。軽石の扁平な円礫を素材とし、平坦部分に平面円形の凹みを作成するための敲打、研削の痕跡を残す。

第195図はSD38-Cから出土した骨角器である。Bo18はヤスである。両側縁に1つずつ、互い違いの位置となるアグをもつ。身は直線的であるが基部にかけて厚みを減じる。先端、身の横断面は楕円形を呈す一方、基部に設けられた突起は断面方形を呈し、その下端は斜めに削られる。これは、複数のヤスを組み合わせて柄に装着するための造作とみられる。

SD38-F（第196図）

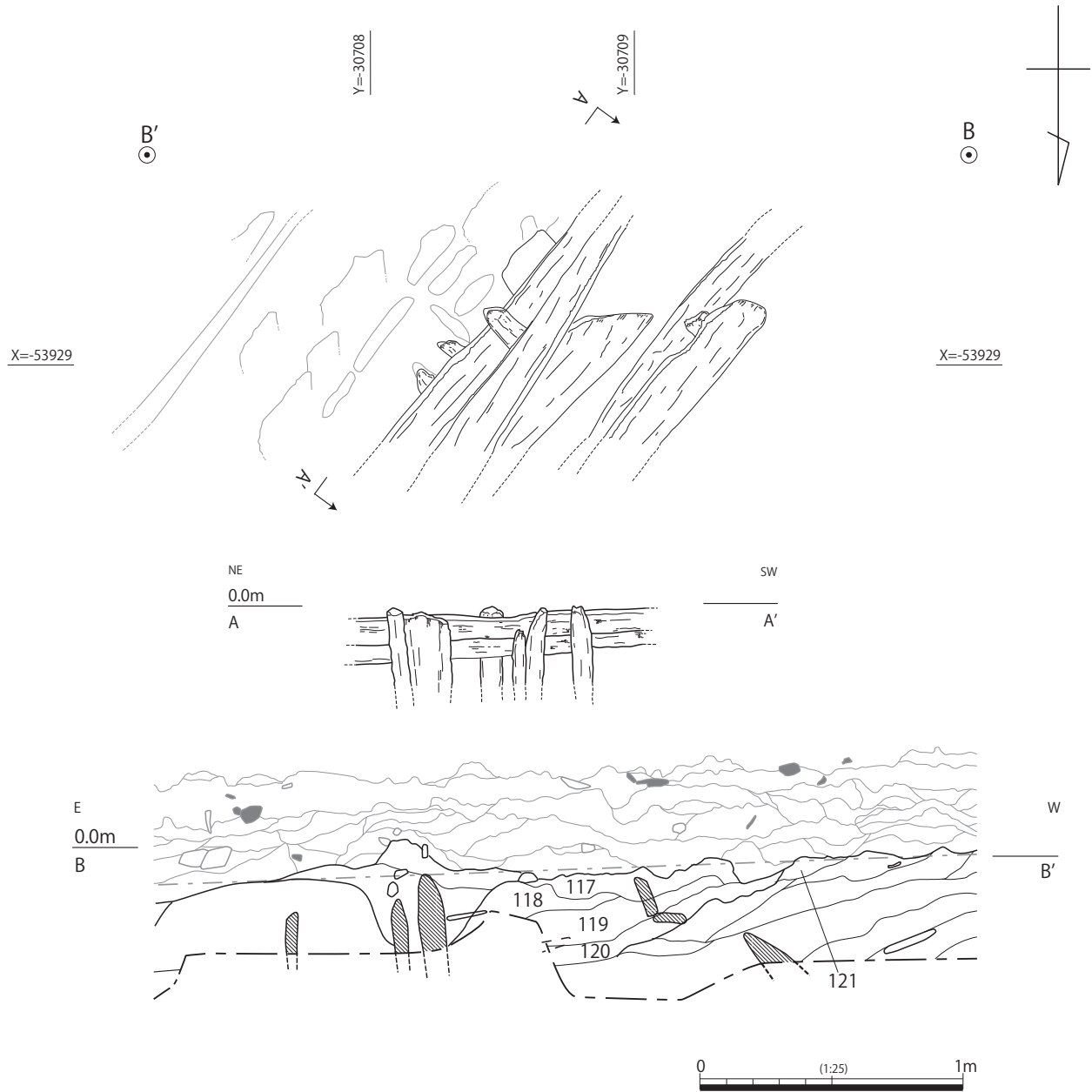
調査区南壁土層断面と拡張した南側溝で西肩を確認した区画溝である。Ⅷ層及びⅨ層を基盤とし、Ⅷ層上に打設した横板を杭で固定する木製構造物を護岸とする。この護岸はSD38-C西肩に伴う矢板列の0.4～0.7m西側を同方向に走る。褐灰色～黄灰色細砂シルトを主体とする埋土は5層に分層でき最大深は36cmを測る。土層断面では、当区画溝がⅧ層を掘り込んだ形跡が認められず、当大別層を形成した弥生時代後期前葉の造成の裾部を区画溝にしたものとみられる。従って当遺構の帰属時期は、Ⅷ層と同様、弥生時代後期前葉と考えられる。

なお、当遺構の護岸の西側0.5mの位置では、より低い位置に設置された同方向に走る木製構造物を確認した。土層断面からこの木製構造物はⅨ層の土留めと見られる。Ⅸ層の時期は明らかではないが、中心域東側縁辺部では、造成が繰り返し行われたことが見て取れる。

弥生時代後期前葉造成遺構（第197図）

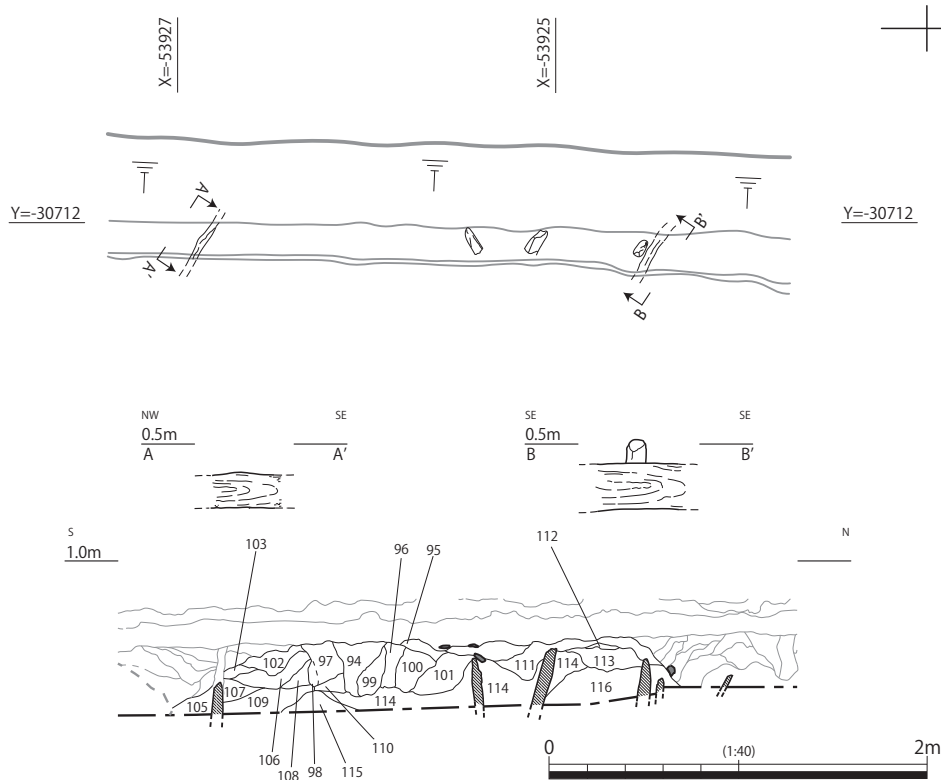
西側溝の南側では、杭列や横板、また横板を杭で固定した木製構造物を確認した。調査区西壁土層断面では、これらを被覆するⅧ層が土手状の堆積状況を示しており、これらの木製構造物が一連の土手状盛土の芯材や土留めであることが分かる。これら木製構造物については、被覆するⅧ層とともに遺構として記載する。このように、木製構造物を伴った状況を明確に捉えることができなかったため、基本層序として記載したが、Ⅷ層全体が当遺構と一連の造成土とみられる。

第198図にはⅧ層およびSD38-Fから出土した土器を示す。Ⅷ層から出土したPo282・283は同一



- 117 10YR4/2灰黄褐色 細砂混シルト 粘性やや弱
しまりやや弱
- 118 10YR4/1褐灰色 細砂混シルト 粘性やや弱
しまり中
- 119 10YR5/1褐灰色 細砂混シルト 粘性やや弱
しまりやや弱 ~1cm炭化物・細礫少含
- 120 10YR4/1褐灰色 細砂混シルト 粘性やや弱
しまりやや弱 ~1cm炭化物・貝殻片少含
- 121 10YR5/2灰黄褐色 細砂混シルト 粘性やや弱
しまりやや弱 細礫少含

第196図 SD38-F 護岸



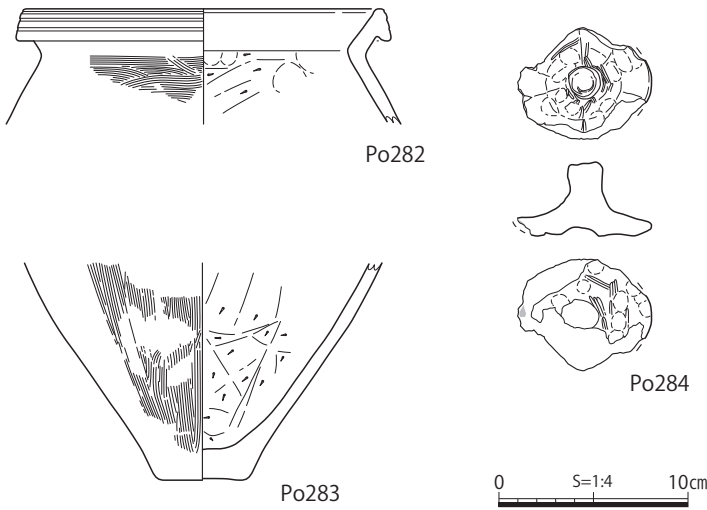
- | | |
|--|---|
| 95 2.5Y3/2黒褐色 シルト混細砂 粘性中 しまり中 | 107 10YR3/2黒褐色 シルト混細砂 粘性中 しまりやや弱 ~1cm黄褐色シルトブロック含 |
| 96 10YR3/1黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 | 108 10YR3/1黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 細礫混 |
| 97 10YR3/1黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 ~1cm炭化物少含 | 109 10YR3/2黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 ~1cm炭化物少含 |
| 98 10YR3/2黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり弱 | 110 10YR2/1黒色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 腐植混 |
| 99 10YR3/2黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 | 111 10YR2/2黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 ~1cm炭化物少含 |
| 100 10YR2/2黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 | 112 2.5Y2/1黒色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 細礫少含 |
| 101 10YR3/2黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 ~1cm炭化物少含 | 113 10YR3/1黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 ~3mm黄褐色シルトブロック少含 |
| 102 10YR2/2黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 | 114 10YR3/2黒褐色 細砂混シルト 粘性中 粘性やや弱 にぶい黄褐色細砂混 ~1cm黄褐色シルトブロック含 |
| 103 10YR3/1黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 | 115 10YR4/1褐灰色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 |
| 104 10YR2/1黒色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 植物片含 | 116 2.5Y3/1黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 |
| 105 10YR2/2黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまりやや弱 | |
| 106 10YR3/1黒褐色 シルト混細砂 粘性やや弱 しまり中 ~1cm炭化物少含 | |

第197図 弥生時代後期前葉の造成遺構

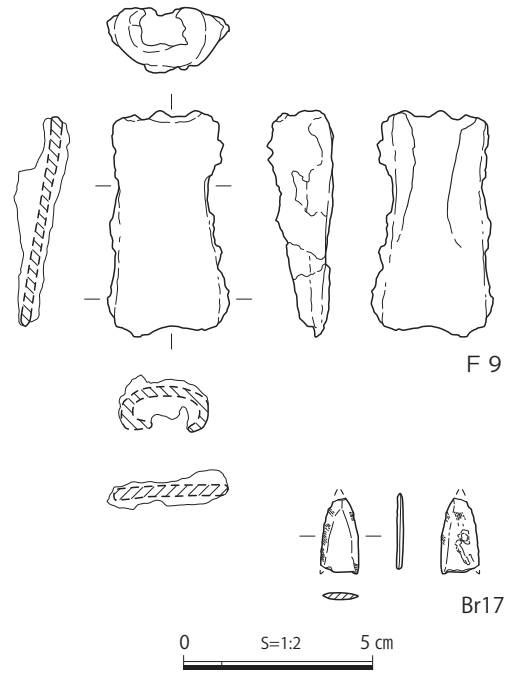
個体の可能性が高い甕の口縁部と胴部下半である。短く内傾する複合口縁には3条の平行沈線が巡る。胴部は最大径を倒卵形を呈し、明確な平底をもつ。胴部内面のケズリは頸部まで達する。弥生時代後期前葉の特徴を示す。

SD38-F から出土した Po284 は蓋である。棒状のつまみ部、ほぼ真横に広がる体部をもつ。内外面とも指頭圧痕を残す。

第199図にはⅧ層から出土した金属器を示した。F 9は袋状鉄斧である。袋部から身部がわずかにくびれ、刃部に向かって幅を広げる。袋部横断面は略楕円形を呈す。Br17は銅鏃である。無茎鏃で



第198図 VIII層・SD38-F 出土土器



第199図 VIII層出土金属器

両側縁下につく逆刺は小さい。先端と両側縁に鋸をもち。断面は偏六角形を呈す。

第12項 SD38 出土遺物

第200～211図は、SD38の変遷を捉える前に出土した遺物である。弥生時代後期から古墳時代前期前葉のものを含む。

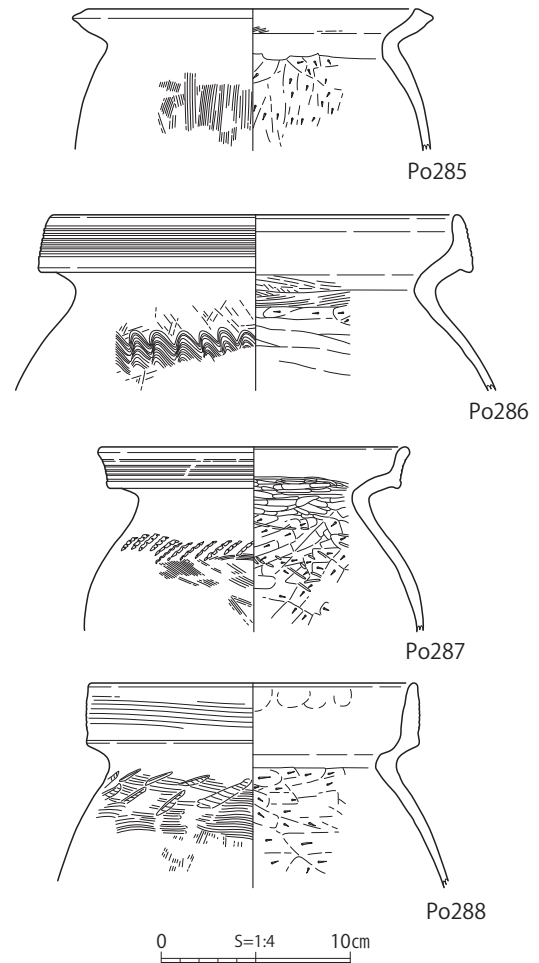
第200～205図は土器である。

第200図に示したPo285～288は甕である。

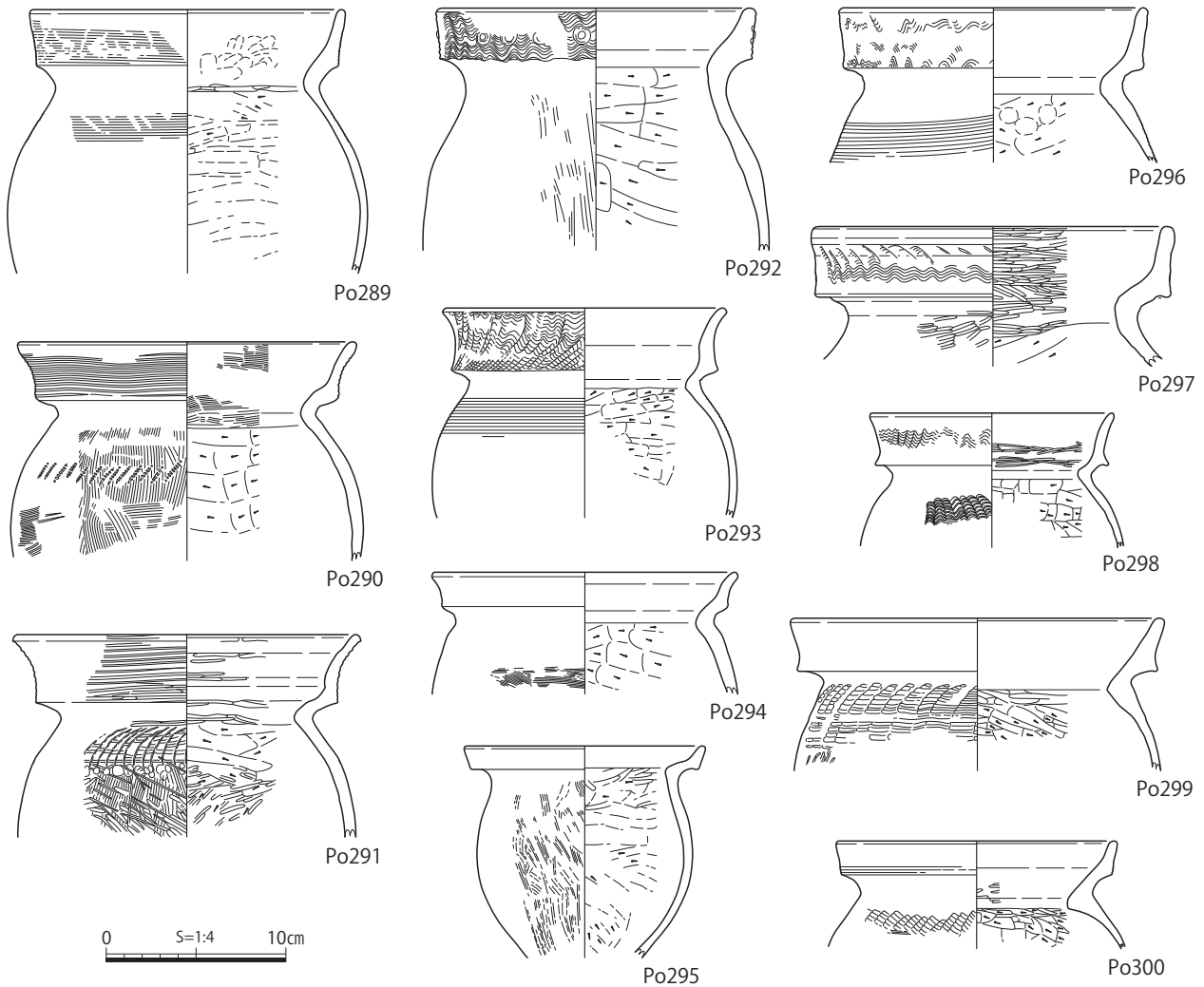
Po285の口縁部は上下の拡張が殆ど認められない。胴部内面のケズリは上方向で頸部下まで達する。弥生時代後期前葉に属す。

Po286～288は平行沈線が巡る複合口縁をもつものである。

Po286は内傾する複合口縁をもち、肩部には波状文が施される。内面は頸部がハケメ、胴部が右方向のケズリで調整される。Po287の短く外傾して立ち上がる複合口縁をもつ。肩部には貝殻腹縁による刺突文が巡る。頸部内面はミガキで調整され、胴部内面のケズリは不定方向である。Po288は直立して立ち上がる複合口縁をもつ。肩部には平行沈線と板状工具による刺突



第200図 SD38 出土土器 (1)



第201図 SD38出土土器(2)

文が施される。胴部内面のケズリは左方向である。Po287・288は弥生時代後期中葉、Po286は口縁部の形態に古相を残すものの弥生時代後期後葉に属す。

第201図は複合口縁をもつ甕で、弥生時代後期後葉～終末期前半に属すものである。

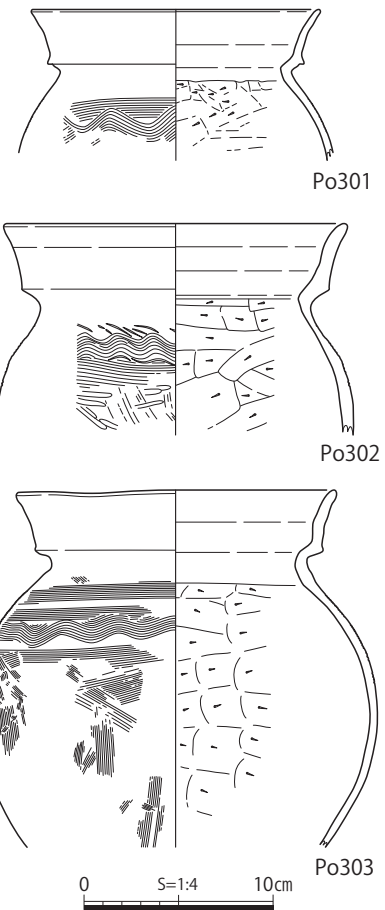
Po289～291は口縁部外面に平行沈線が施されるものである。Po289は直線的に外傾する口縁部をもち、肩部に平行沈線が巡る。Po290は肩部に櫛状工具による刺突文が巡る。口縁部内面はハケメで調整される。Po291は外反して立ち上がる口縁部をもち、肩部の平行沈線上に連続斜行弧状文が巡る。胴部はハケメのちミガキで調整される。内面もミガキで調整され、胴部下半ではケズリを切る。Po289～291は弥生時代後期後葉に属す。

Po292・293・296～298は口縁部に波状文あるいは押引文が巡るものである。Po292は器壁が厚く、肩の張りが弱い。口縁部には一部に竹管文が施される。Po293は外反する口縁部に押引文が巡る。肩部には平行沈線が施される。Po296の口縁部を巡る波状文は一部ナデ消される。肩部には平行沈線が巡る。胴部内面のケズリは右方向を主体とする。Po297の口縁部には押引文と波状文が巡る。口縁部から頸部内面はミガキで調整される。胴部内面のケズリは右方向である。Po298の口縁部及び肩部に

は波状文が巡り、口縁部のものは一部ナデ消される。胴部内面のケズリは左方向である。これらは弥生時代後期後葉に属すが、新相を呈すものである。

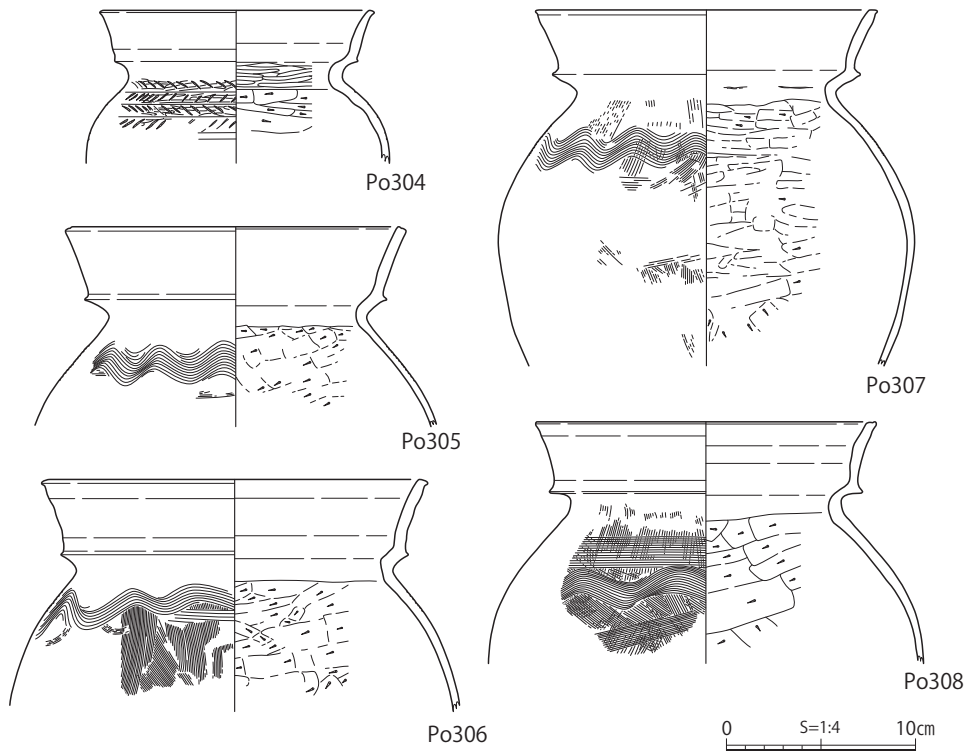
Po294・295・299・300は無文の複合口縁をもつものである。いずれも口縁部の立ち上がりは短い。Po294の複合口縁は外反し、胴部内面のケズリは右方向である。Po295の胴部は肩の張りが弱く、縦方向を主体とするハケメで調整される。Po299とPo300の肩部には押引文が巡る。胴部内面上半のケズリは左方向である。Po299の口縁部は器壁が厚い。これらは弥生時代終末期前半のものともみられるが、器形に古相を残す。

第202図は弥生時代終末期後半に属す甕である。いずれも複合口縁は端部のつまみ上げによって外反し、無文である。肩部には平行沈線と波状文が巡る。Po301は器壁が薄く、胴部内面のケズリは右方向である。Po302は口縁部の器壁がやや厚い。Po303は肩部に3単位の平行沈線と1単位の波状文が巡る。胴部内面のケズリは左方向である。

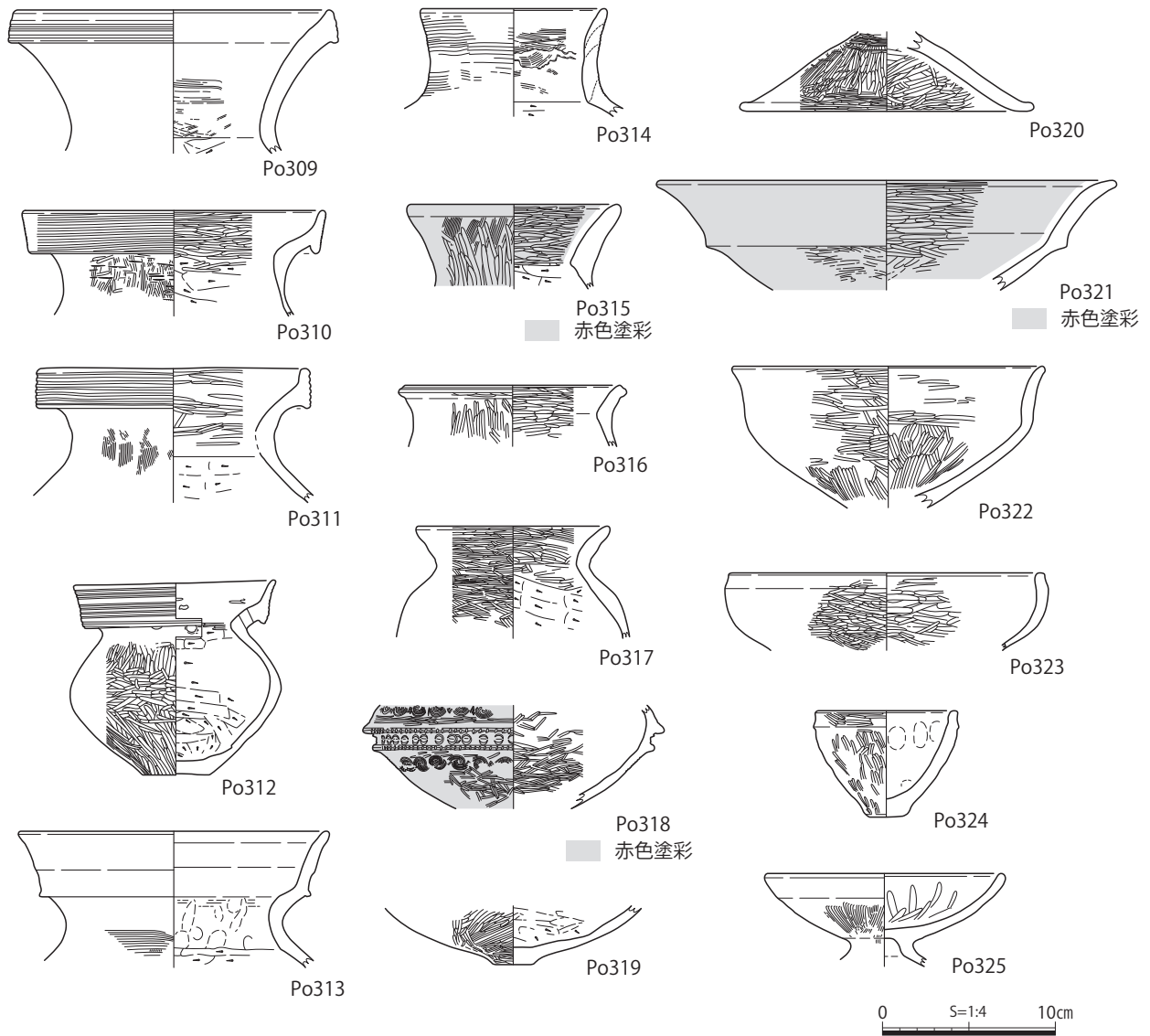


第202図 SD38 出土土器 (3)

第203図に示した甕 Po304～306は、いずれも端部に



第203図 SD38 出土土器 (4)



第204図 SD38 出土土器 (5)

平坦面をもち、内外面とも無文の複合口縁をもつもので、古墳時代前期初頭～前葉に属す甕である。Po308 除き、胴部内面のケズリは右方向が主体である。

Po304 は肩部外面に沈線と刺突文による羽状文が施される。頸部内面は横方向のミガキで調整される。Po305 は肩部外面に波状文が施される。Po306 の口縁端部は強いナデによって外方にやや肥厚する。口縁下端の突出は鈍い。肩部外面は2単位の波状文と平行沈線が切り合っている。胴部外面にハケメは縦方向を主体とする。Po307 の胴部は最大径を中位よりやや上にもつ倒卵形を呈すとみられ、外面のハケメは不定方向である。肩部外面には波状文が施される。Po308 の口縁端部はナデによって沈線状の窪みが生じている。胴部外面には回転横ハケとピッチの緩い波状文が施される。ハケメによる調整は不定方向である。

第204図には甕、器台以外の器種を示した。弥生時代後期から終末期に属すものである。

Po309～313は複合口縁をもつ壺である。

Po309～312は口縁部に平行沈線が巡り、胴部内面のケズリは左方向である。Po309は緩やかに外

反して立ち上がる頸部をもち、複合口縁は短く内傾する。弥生時代後期中葉に属す。Po310の複合口縁はやや外傾し、多条の平行沈線が巡る。頸部はハケメ、口縁部内面はミガキで調整される。内面のケズリは頸部上端まで及ぶ。Po311は直立して立ち上がる複合口縁に多条の平行沈線が巡る。口縁部から頸部内面ミガキで調整される。Po310・311は弥生時代後期後葉に属す。Po312は小型の壺であり、口縁部下に蓋を接続するためとみられる1対の円孔が設けられている。胴部全体が丁寧なミガキによって調整される。弥生時代後期後葉に属す。

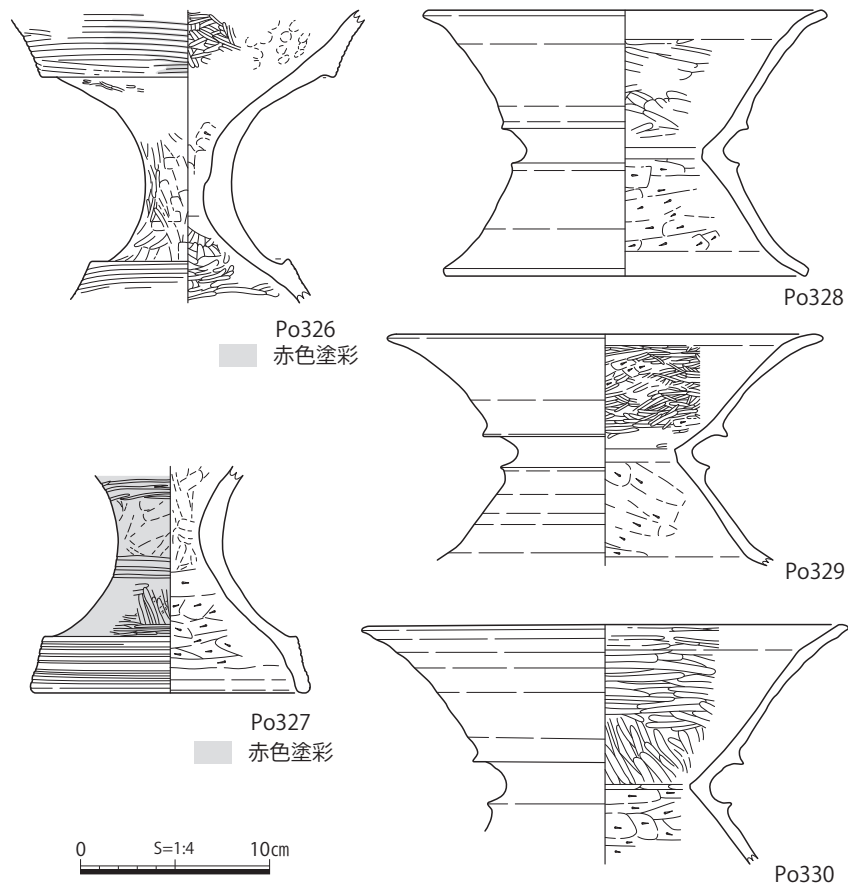
Po313の複合口縁は無文であり、端部のつまみ上げによってやや外反する。頸部には平行沈線が施される。胴部内面のケズリは右方向である。弥生時代終末期に属す。

Po314は直口壺である。頸部は内外面ともハケメで調整されるが、粘土つなぎの痕跡を残す。胴部のケズリは左方向である。

Po315・317は単純口縁の壺である。Po315は、頸部の器壁は厚いが、胴部は内面のケズリによって大きく厚みを減じる。頸部内外面ともミガキで調整され、外面にはハケメを残す。外面全体になさみられる赤彩は頸部内面まで及ぶ。Po317は胴部内面左方向のケズリで調整されるほかは、横方向を主体としたミガキで調整される。

Po316は壺とみられる。短く立ちあがる口縁の端部には1条の沈線が巡る。外面は縦方向、内面は横方向のミガキで調整される。

Po318は台付装飾壺である。刻みを施した2条の突帯によって上下に区画される算盤玉状の胴部は、



第205図 SD38出土土器(6)

スタンプ文で加飾される。内外面ともミガキで調整され、外面は赤彩される。

Po319 は壺である。胴部は上下に潰れた球形を呈すとみられ、底部はこの胴部からわずかに突出する。外面はミガキで調整される。

Po320 は蓋である。欠損しているが器形から本来はつまみ部をもつものとみられる。内外面ともミガキで調整される。

Po321 ~ 323 は高坏であり、いずれも内外ともミガキで調整される。Po321 の坏部は明瞭な段をもち、上半部は外反して立ち上がる。内外面ともミガキで調整され、赤彩される。弥生時代終末期に属す。Po322 は北近畿系の高坏である。Po323 は内湾する坏部が特徴的である。

Po324 は鉢である。底部からやや内湾して立ちあがる体部をもつコップ状の器形である。外面はミガキで調整され、内面は指頭圧痕を残す。

Po325 は低脚坏である。外面はハケメ、内面はミガキで調整される。

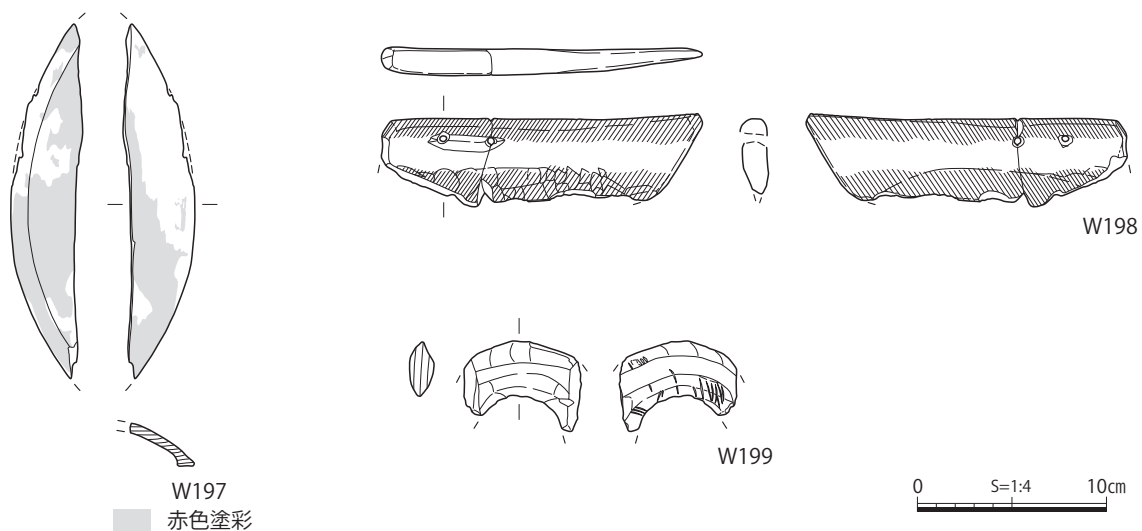
第205図は器台と鼓形器台である。

Po326・327 は器台で、口縁部と脚裾部の外面には櫛状工具による平行沈線が施される。Po326 は脚注部外面と口縁部・脚裾部内面がミガキで調整されているが、口縁部内面には指押さへの痕跡を残す。Po327 の脚柱部は赤彩されており、3条1単位の横方向の沈線が2単位確認できる。脚柱部内面の下半は右方向を主とするケズリの痕跡を残す。これらはいずれも弥生時代後期後葉に属す。

Po328 ~ 330 は鼓形器台であり、いずれも外面は施文されず、ヨコナデによって調整される。また、受部内面はミガキ、脚部内面はケズリで調整される点も共通している。Po328 は口径と底径の差が小さく、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭の特徴を示す。これに対し、Po329・330 は受部の傾きが脚部に比べ大きく、口径が底径よりも大きい器形とみられる。これらは、古墳時代前期前葉に属す。

第206 ~ 208図はSD38から出土した木器である。

第206図には蓋と農具を示した。

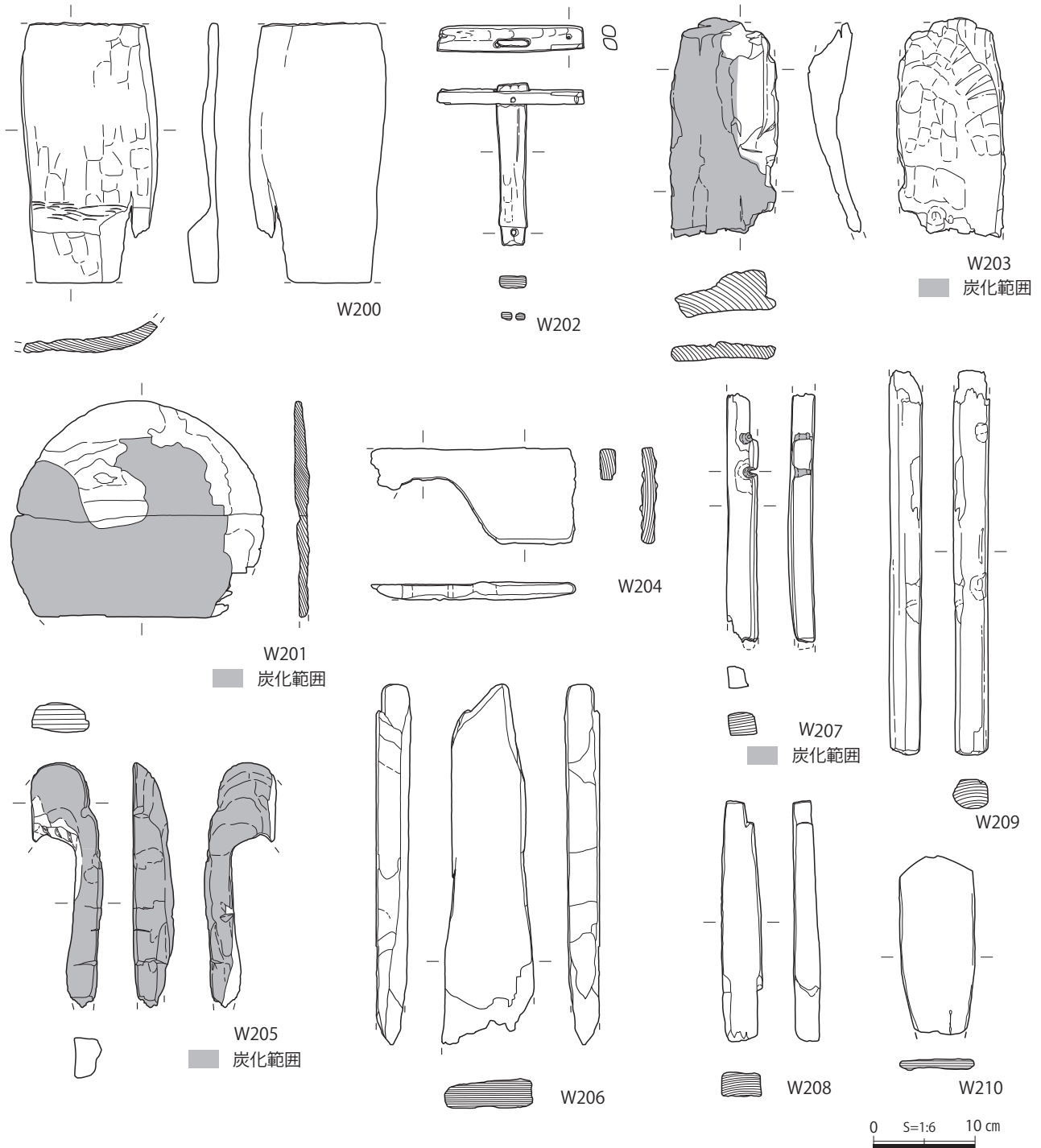


第206図 SD38出土木器(1)

第 W197 は蓋である。細片のため全体の形状は不明であるが、裾部の形状から置き蓋と考えられる。内外とも赤彩される。

W198 は木包丁である。正面のみに2孔1対の紐孔をつなぐ溝をもつ。正面には刃部成形時の加工痕が顕著である。

W199 は木鎌である。湾曲する刃部の断面は杏仁形を呈す。

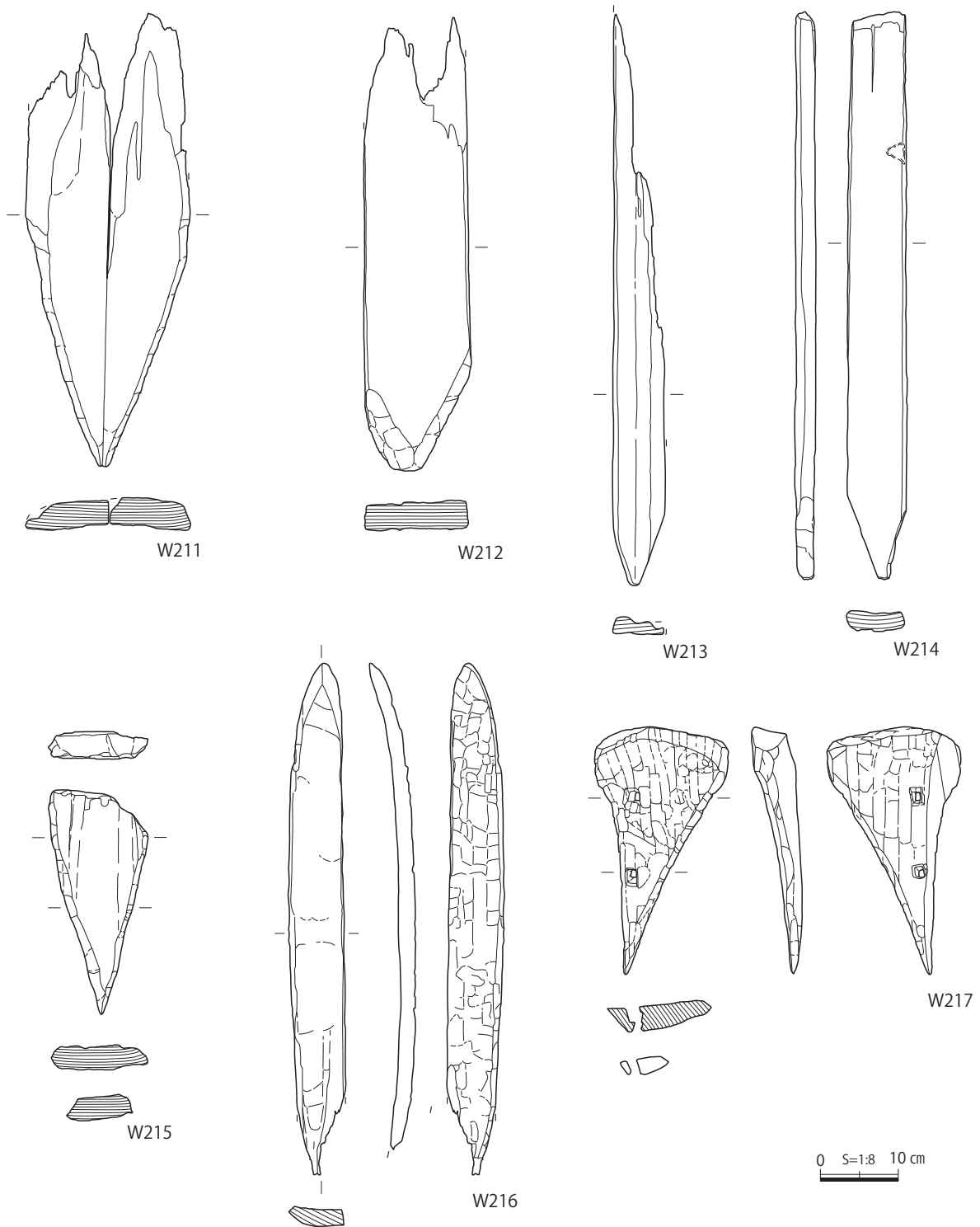


第 207 図 SD38 出土木器 (2)

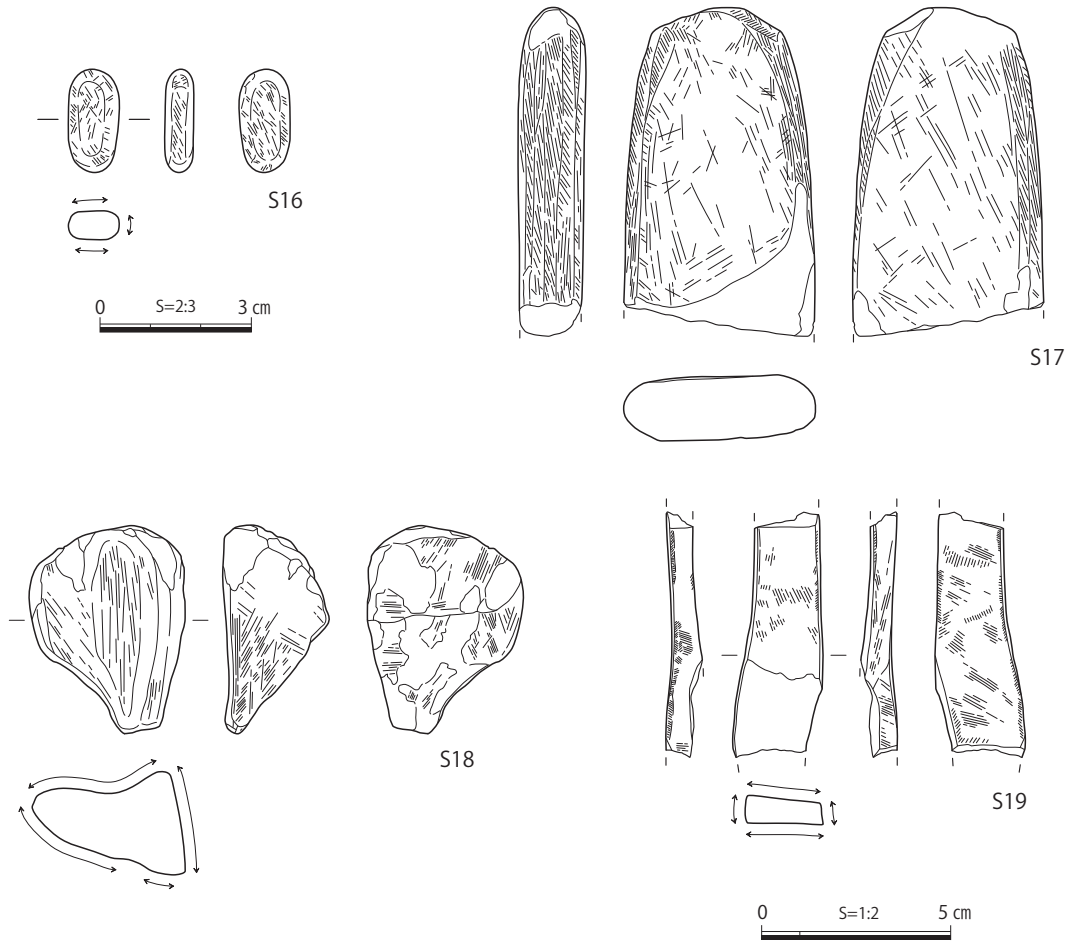
第207図には桶、杵ほかを示した。W200・201は桶である。W200は小判形の平面形で、胴部は直立するものとみられる。W201は円形を呈す底板で、本来は全体が被熱黒化していたとみられる。

W202は杵である。支え木の両端にはほぞを、腕木の中央にはほぞ穴を設け、腕木と支え木とも目釘を貫通させる形でほぞ接ぎを行う。

W203は平鍬の未成品である。柄孔をあける直前まで加工されたものであり湾曲した身の全面に隆



第208図 SD38 出土木器 (3)



第 209 図 SD38 出土石器

起をもつ。全面の大部分は被熱によって炭化し後面には加工痕が顕著である。

W204 は板材の下端を大きく抉り込んだもので、机の脚部とみられる。

W207 は火鑽臼である。右側縁の2か所に使用された座を残す。

W205・206・208～210 は不明木器である。W209 は正面の2か所に圧痕が認められる。小舞の可能性はある。W206 は両側縁の切り込みでも緩やかにカーブし、不均衡な切込みにより先端を尖らせている。W208 は角材の先端に直角の欠込みを施す。

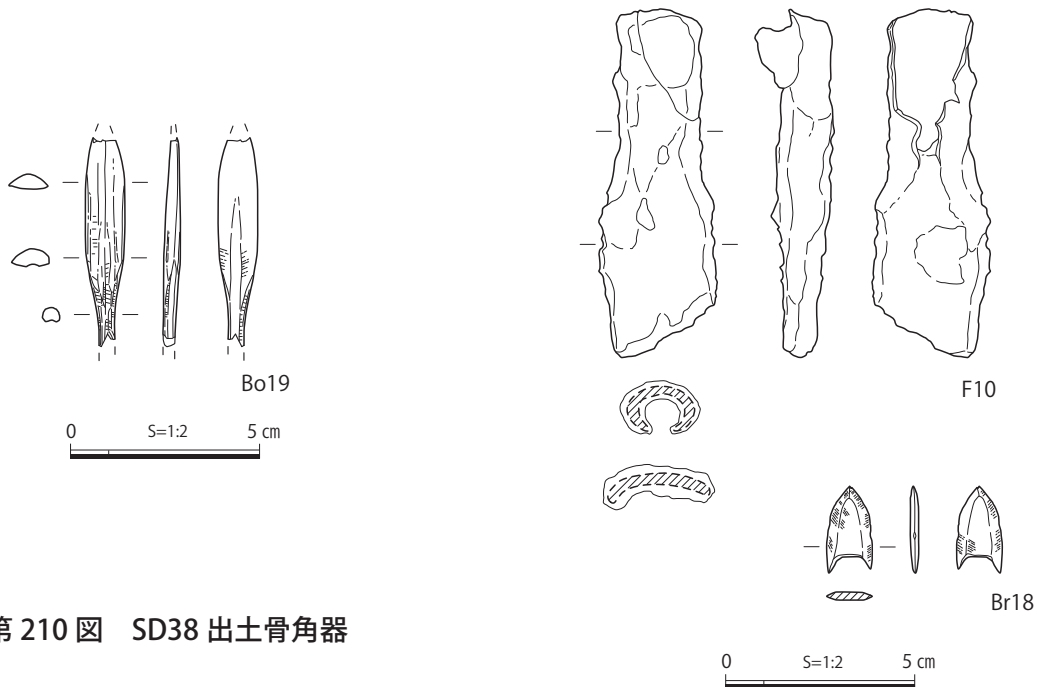
第 208 図に示した W211～217 は矢板である。W211・212・215 は厚い板材を、W213・214 は薄い板材を素材としており、W216・217 は転用品であるが、いずれも両側縁からの切り込みによって先端を成形する。W215・217 のように短いものは他のものと用途が異なっていた可能性がある。

W211 は幅も広く、SD38 の護岸として打設されたものである。

W216 は上下端付近が反り上がり、横断面も僅かに湾曲する。田舟の転用品の可能性はある。

W217 は船の転用とみられる。緩やかに湾曲する側面観を呈し、舳先であったとみられる上端付近の表面に船体の割り込みによって形成された稜を残す。長軸方向に並ぶ方形穿孔をもつ。

第 209 図には石器を示した。S16 は不明石器である。扁平な楕円礫を素材としており、前面を研削



第 210 図 SD38 出土骨角器

第 211 図 SD38 出土金属器

によって整形している。S17 は石斧である。基部は丸味を帯び、刃部に向かってやや幅を広げる。両側縁は研削による面取りが顕著であり、断面形は隅丸長方形を呈す。破折により刃部の形状は不明である。

S18・19 は砥石である。S18 はいわゆる有溝砥石とみられ、浅い U 字状の断面形を呈す砥面をもつ。S19 は凝灰岩製の砥石である。断面形は長方形を呈し、全面に使用痕を残す。破折しているものの主な砥面の使用により中央付近が厚みを減じていることが見て取れる。

第 210 図に示した Bo19 は骨鏃である。いわゆる柳葉形に分類されるものであり、大型獣の長管骨を研削して成形しており、断面形は扁平な半円状を呈す。

第 211 図には金属器を示した。F10 は袋状鉄斧である。袋部は腰にむかってわずかにくびれ、断面は略楕円形を呈す。身部は完全に平坦とはならず、袋部に連なる湾曲が認められる。

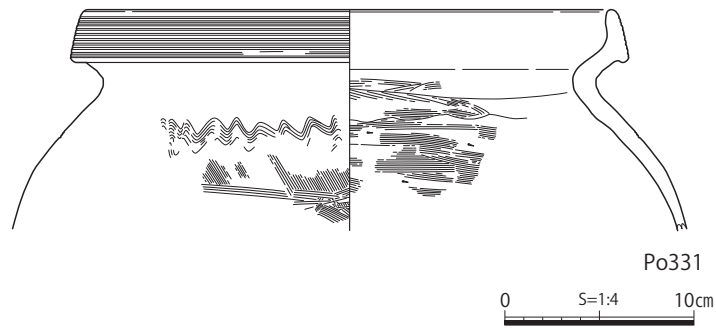
Br18 は銅鏃である。凹基式の無茎鏃であり、平面五角形状の鏃身に逆刺をもつ。先端と両側縁に鑄をもち、断面形は偏六角形を呈す。

第 13 項 調査区内出土遺物

ここでは、調査区内から出土した遺構や層位を特定できない遺物について一括して記載する。また、土玉については形態を俯瞰するためここに記載した。

第 212 ～ 215 図は調査区内出土土器である。

第 212 図に示した甕 Po331 は甕である。複合口縁は内傾して立ち上がり、下端は僅かに下方に突出する。複合口縁には多条の平行沈線、肩部には波状文が施される。胴部内面は左方向のケズリのち



第212図 調査区内出土土器(1)

横方向のハケメで調整される。口縁の形態および胴部内面の調整に古相を残すが、弥生時代後期後葉に属すものとみられる。

第213図に示した Po332～347 は弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉に属すものである。

Po332～339 は甕である。Po332～335 は横位の平行沈線によって区画された胴部への加飾が顕著である。いずれも複合口縁と上下につぶれた球状の胴部をもつ。Po332 の複合口縁は外反して高く立ち上り、平行沈線が施される。胴部は連続弧状文と半裁竹管文で加飾される。Po333 の複合口縁に施された平行沈線は一部ナゲ消しがみられる。胴部は櫛状工具によるとみられる羽状文で加飾される。Po334 の複合口縁は下端が下垂し平行沈線が巡る。肩部には平行沈線と貝殻腹縁による刺突文が羽状に施される。Po335 の複合口縁は下端が僅かに下垂し無文である。平行沈線で区画された胴部は貝殻腹縁による羽状文で加飾される。これらはいずれも弥生時代後期後葉に属すものである。

Po336・337 はいずれも端部が面取りされた無文の複合口縁をもち、肩部には平行沈線と波状文が巡る。胴部のケズリは右方向である。Po336 は口縁部内面に粘土つなぎの痕跡が認められる。古墳時代前期前葉に属す。Po337 は器壁が薄く口縁部下端の突出が鋭い。古墳時代前期初頭の特徴を示す。

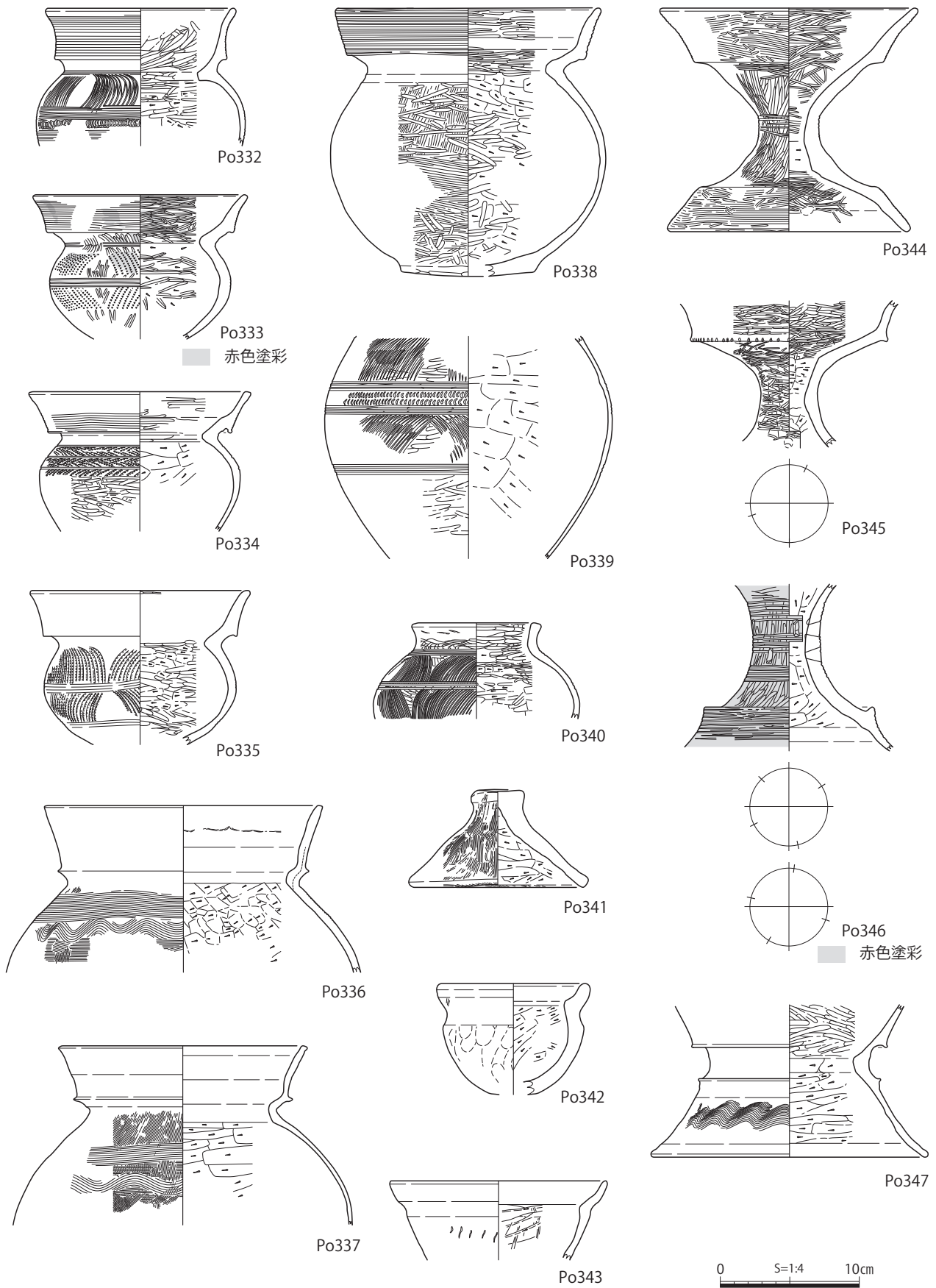
Po338 は多条の平行沈線が施された複合口縁と広い底部をもつ。胴部の外面はハケメ、内面は左方向のケズリで調整されるが、いずれもその後ミガキを施している。Po339 は甕もしくは壺の胴部である。3条1単位の横位の平行沈線で形成された区画に連続弧状文と、2列の半裁竹管文が施される。外面はミガキで、内面は左方向のケズリで調整される。これらは、弥生時代後期後葉に属す。

Po340 は短く直立する単純口縁をもつ壺で、3条1単位の平行沈線で区画された胴部は、連続弧状文で加飾される。内外面とも丁寧なミガキで調整されるが、胴部内面は左方向のケズリが残る。弥生時代後期後葉に属す。

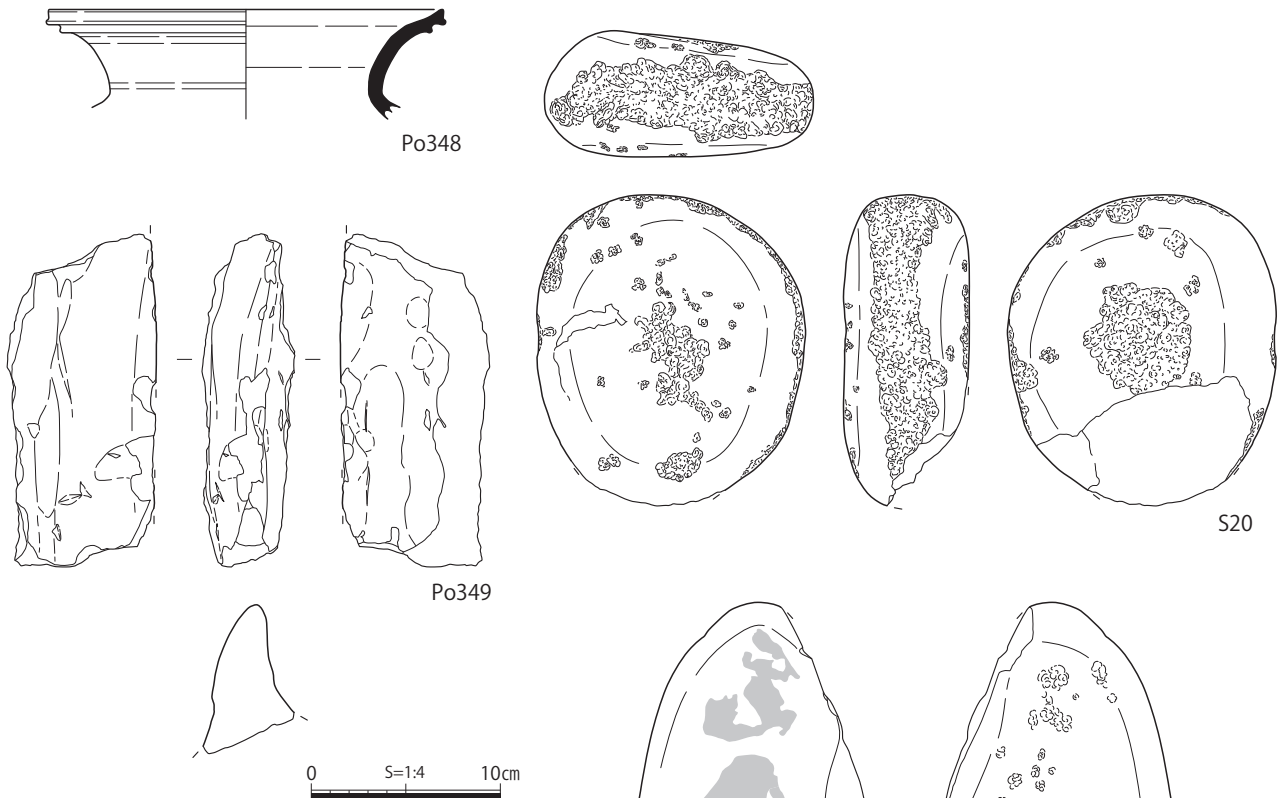
Po341 は蓋である。笠状の器形でつまみは明瞭でない。外面はハケメ、内面はケズリで調整される。

Po342・343 は鉢である。いずれも内湾して立ち上がる口縁部をもち、肩部には稜が巡る。Po342 は器壁が厚く、胴部外面には指頭圧痕が顕著である。内面はケズリで調整される。Po343 は胴部に粗雑な刺突文が施される。胴部内面には工具の痕跡が残る。

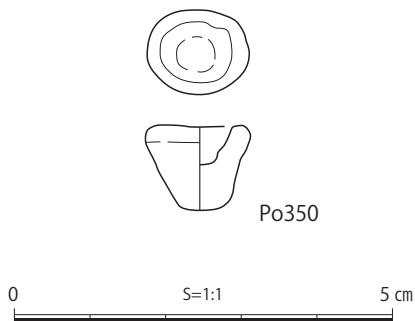
Po344～346 は器台である。Po344 は口縁部、脚裾部には平行沈線が巡る。脚柱部、脚柱部を除き全面が丁寧なミガキで調整される。Po345 は口縁部下端に刺突文が巡る。脚柱部下には3方向からの



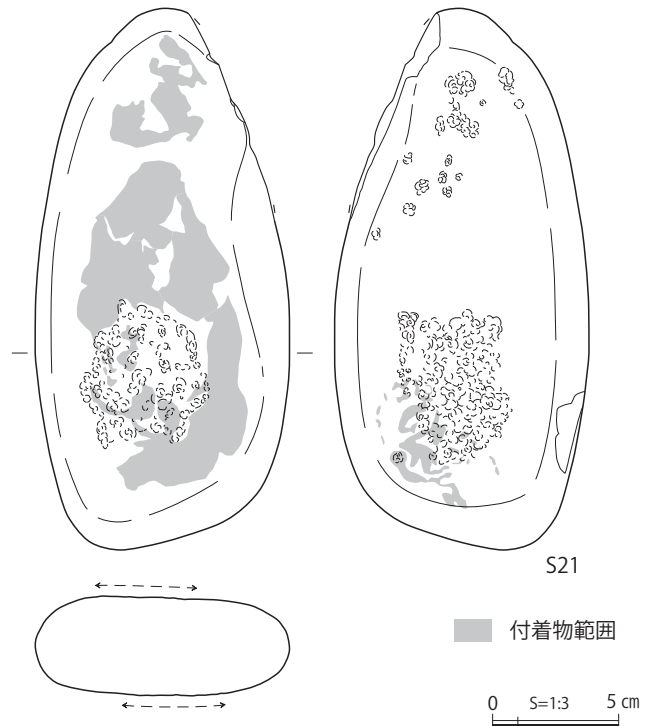
第 213 図 調査区内出土土器 (2)



第 214 図 調査区内出土土器 (3)



第 215 図 調査区内出土土器 (4)

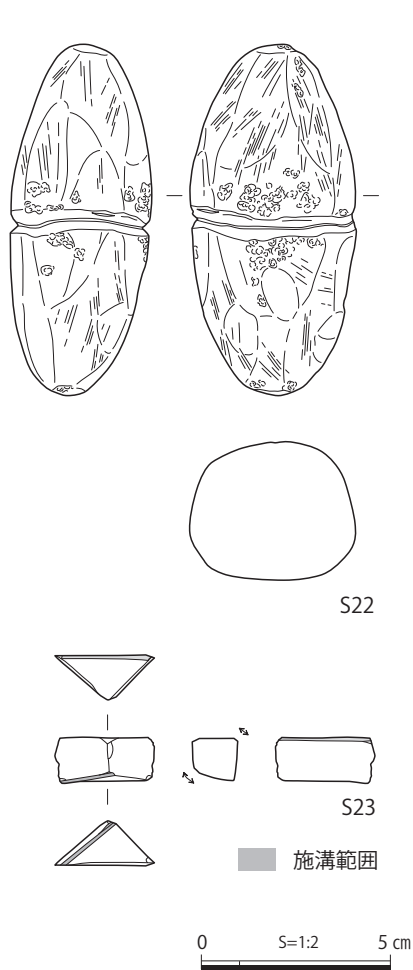


第 216 図 調査区内出土石器 (1)

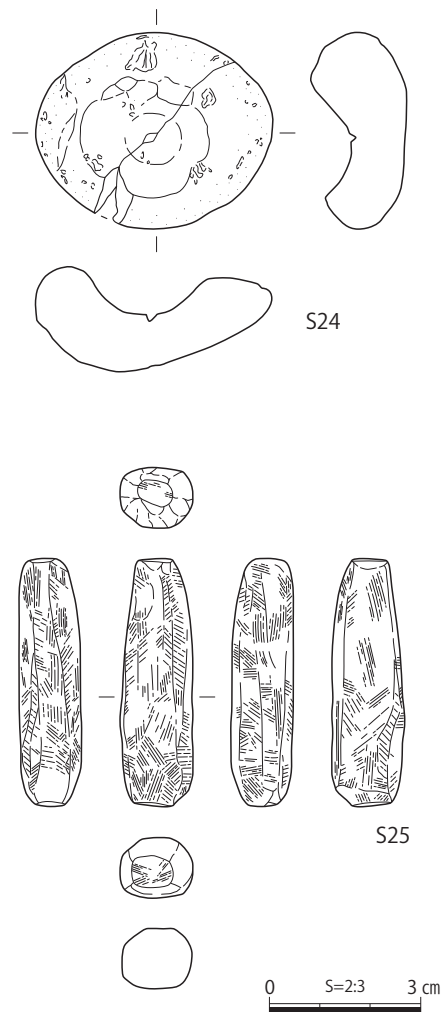
円孔が設けられる。脚柱部内面を除きミガキでの調整が顕著である。Po346の脚柱部には5条1単位の平行沈線による上下の区画に、それぞれ4方向からの長方形透かしが互い違いに設けられる。脚裾部には多条の平行沈線が巡る。外面はミガキ、内面はケズリで調整される。外面全体が赤彩される。これらはいずれも弥生時代後期後葉に属す。

Po347は鼓形器台である。器壁は薄く、受部と脚部の傾きに大きな差はない。脚部には波状文が巡る。弥生時代終末期後半の特徴を示す。

第214図には古墳時代後期以降のものを示した。Po348は須恵器の甕である。口縁部下に横位の横



第 217 図 調査区内出土石器 (2)



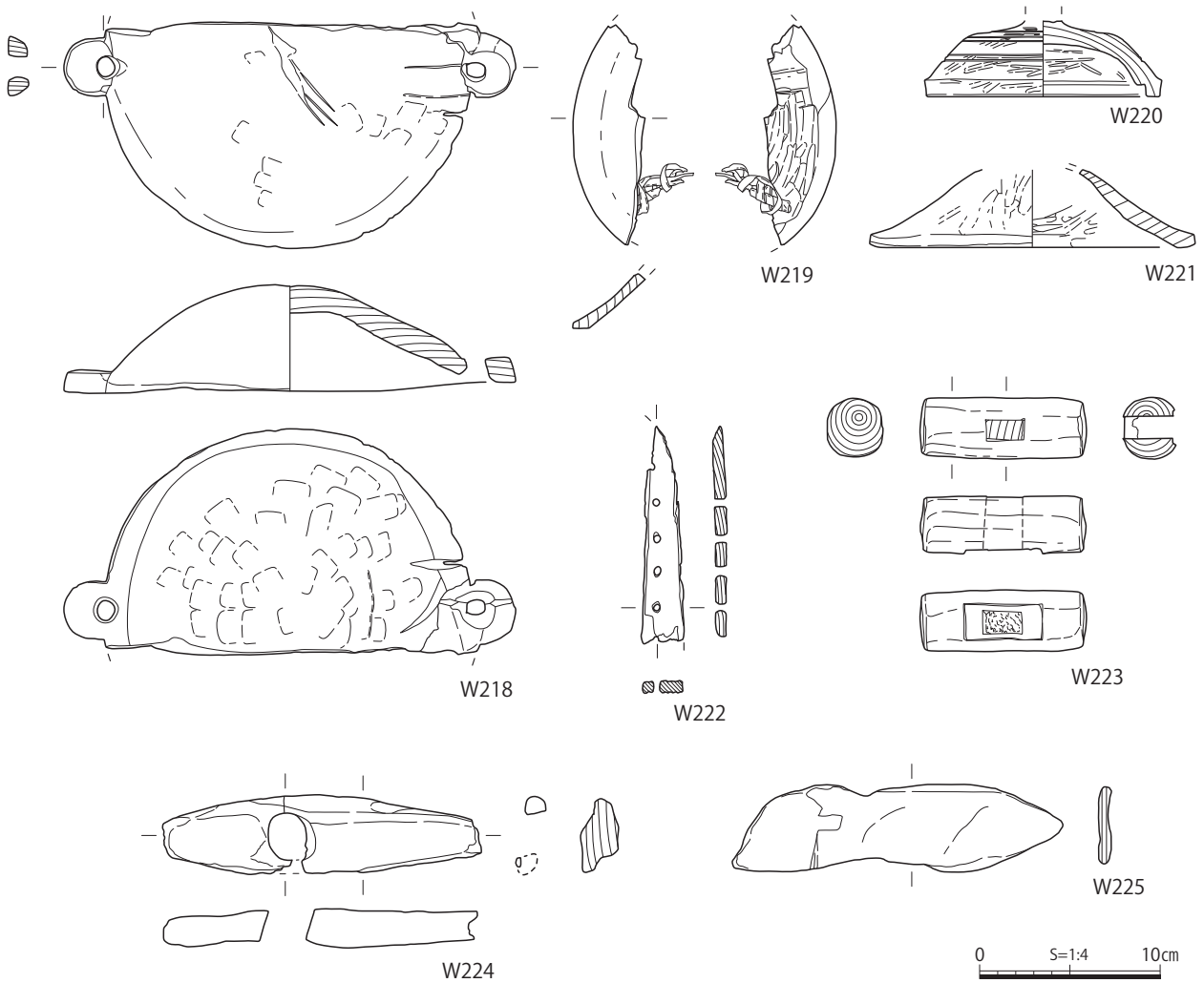
第 218 図 調査区内出土石器 (3)

位の突帯が巡る。Po349 は移動式竈の底部である。全面がナデによって整形される。

第 215 図に示した Po350 はミニチュア土器である。逆台形の側面観を呈すことから、鉢を模した可能性がある。

第 216 ～ 218 図には石器を示した。

S20 は敲石である。扁平な円礫の両面中央部と、側面全体に使用痕を留める。S21 は台石である。扁平な楕円礫であり、幅を広げる下半部の両面に使用痕を留める。この使用痕周辺を中心に黒褐色の付着物が残る。S22 は楕円礫を素材とした石錘で、横方向の溝が1条巡る。全面に整形時の擦痕を、中央部に敲打痕を残す。九州型石錘の範疇で捉えられるものである。S23 は碧玉の玉素材である。全面が平坦で三角形の側面観を呈す。2側縁に石鋸によるとみられる擦り切り溝が確認できる。S24 は軽石を素材とした凹石である。中央に半球状の表面平滑な凹みをもつ。S25 は不明石器である。楕円礫を全面の研削によって棒状に成形しており、断面は不整な八角形を呈す。



第 219 図 調査区内出土木器（1）

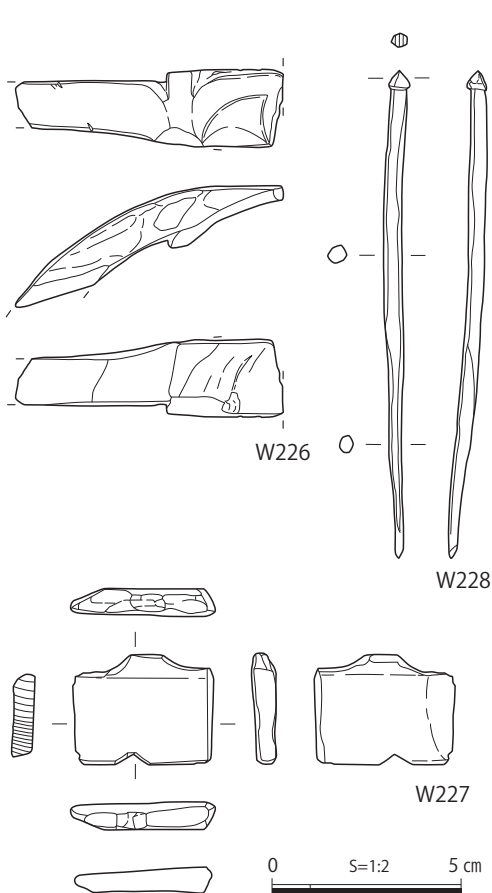
第 219 ～ 223 図は調査区内出土木器である。

W218 ～ 221 は蓋である。W218 は緩やかな膨らみをもつ置蓋で、裾口縁部の平坦面に紐通しの輪が1対設けられる。内面には放射状に加工痕を残す。W219 は口縁部がハの字状に開く置き蓋で、身との緊縛に用いた樹皮が残存する。内面に加工痕を明瞭に残す。W220 の平坦な天井部には本来つまみがついていたとみられる。口縁部は内面に段を設け、断面方形に成形されている。外面には2条1単位の圏線が2単位巡る。内外面とも細かい単位の加工痕が残る。W221 は裾部がハの字状に開く置き蓋である。

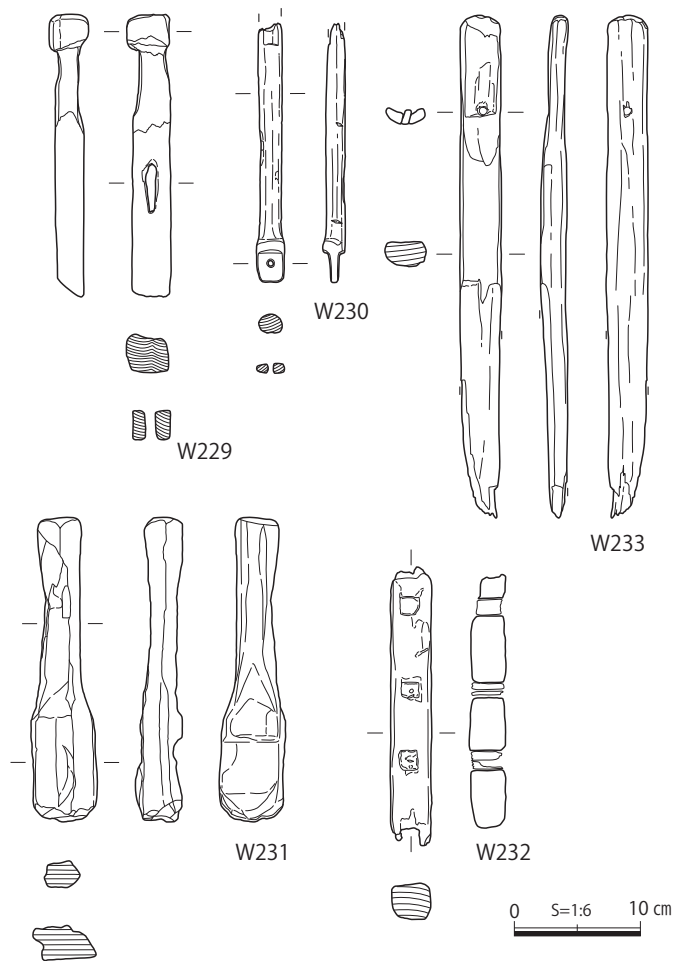
W222 は桶である。縁辺部の残片とみられ、右側縁上部が緩やかにカーブする。紐通しの孔が4つ残存している。

W223 は把手であり、鋤の柄につけられたものの可能性がある。芯持材を素材とし、円柱状を呈す。中央に設けられた方形穿孔内には指しこまれた柄の一部が残存している。

W224・225 は不明木器である。W224 は杏仁形に成形した材に円孔が穿たれるが、その位置は中央からずれており把手としては不自然である。W225 は鳥形としては成形が粗雑である。



第 220 図 調査区内出土木器 (2)



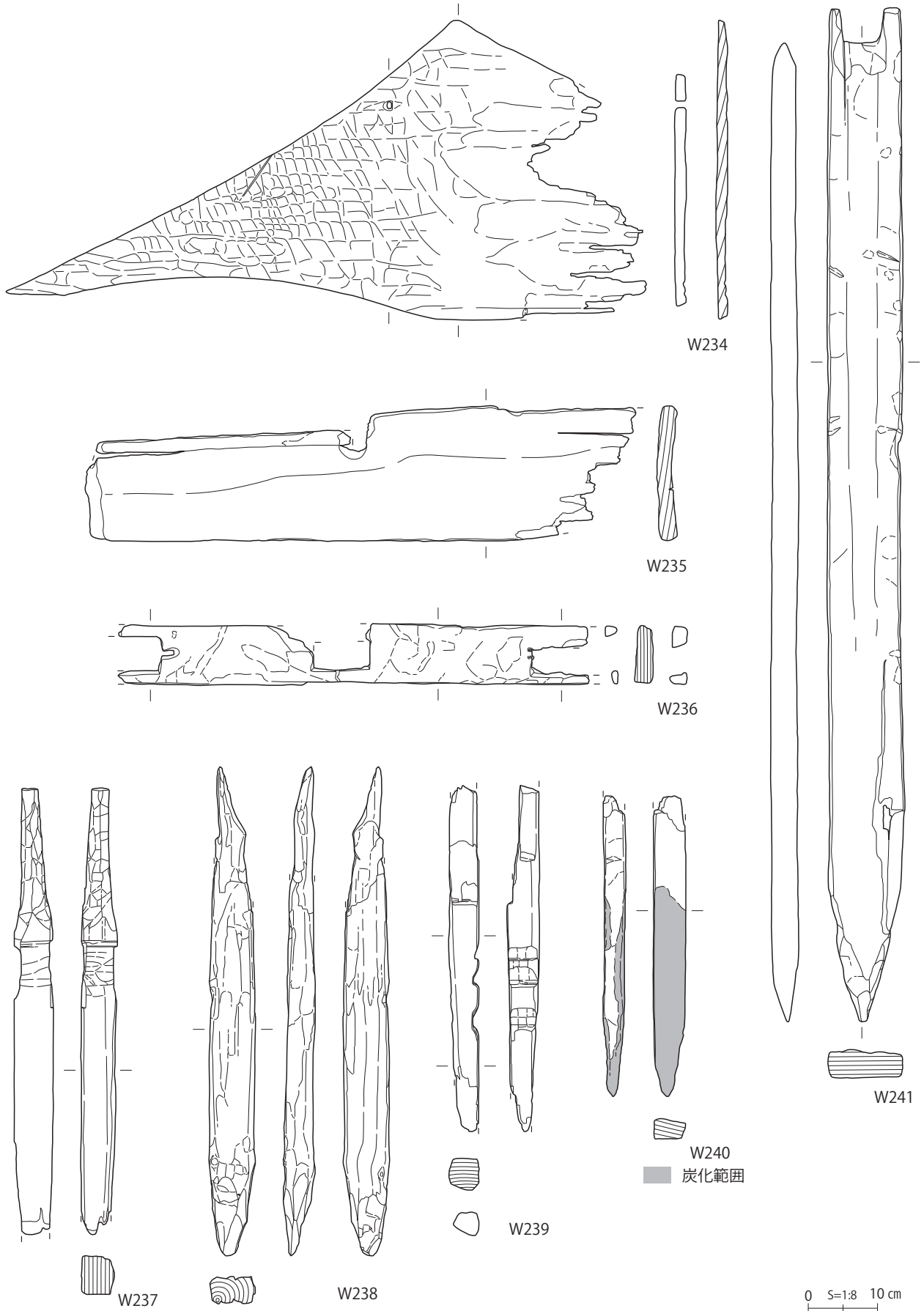
第 221 図 調査区内出土木器 (3)

樹種同定の結果、W218 はスギ製、W219・220 はクワ属製と判明した (第4章 第4節)。

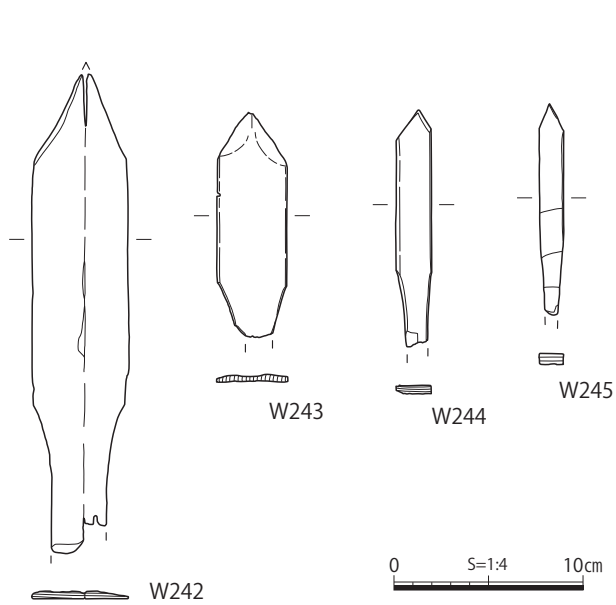
W226 は容器の飾耳である。T 字状のスリットをもち、上面にはπ字状の陽刻がなされていたとみられる。W227 は琴柱である。方形の板材を下辺中央付近の山形の切込、上辺両端の緩やかな抉込によって成形している。上端には弦を受けるための溝がないため、未成品の可能性もある。W228 は簪である。段で区画した円錐状の上端部を作出し下端は細らせている。

W229 は栓である。角材を素材としており、頂部と軸部との境を抉込みによって区画する。軸部には縦長の孔が穿たれる。W230 は杵の軸部である。扁平に成形された方形の下端部に円孔が穿たれる。W231～233 は不明木器である。W231 は横槌に似るが、下端部に平坦面を作出している。W232 は細長い角材にほぼ等間隔に方形穿孔を穿つもので、その中に目釘を撃たれた指しこまれた材が残存する。W233 は棒材の片面をそぎ厚みを減じた箇所が目釘が打たれている。

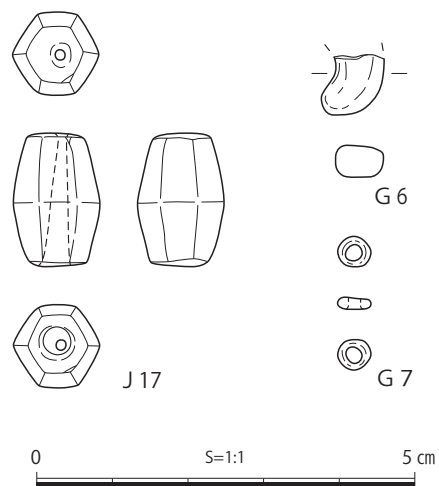
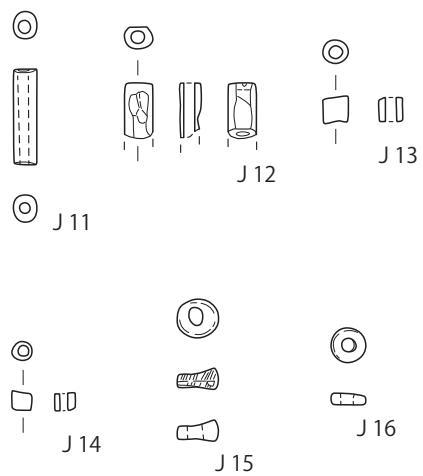
第 222 図には建築材と杭、矢板を示した。W234 は妻壁板である。最大幅 43.2cm を測る大型のもので、上辺は水平ではなく斜めに切り込まれ、下辺は緩やかに抉り込まれる。斜辺付近に方形穿孔をもつ。表面にはハツリ痕を明瞭に残す。W235 は壁板である。上辺の段差部分に抉り込みをもつ。W236 は



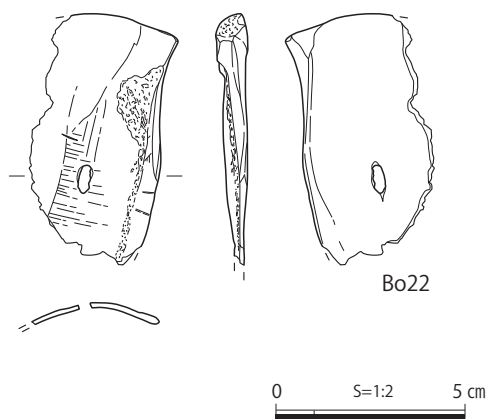
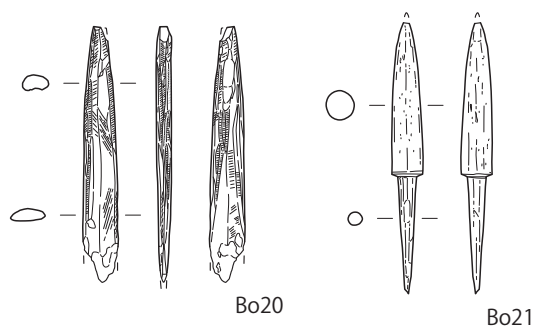
第 222 図 調査区内出土木器（4）



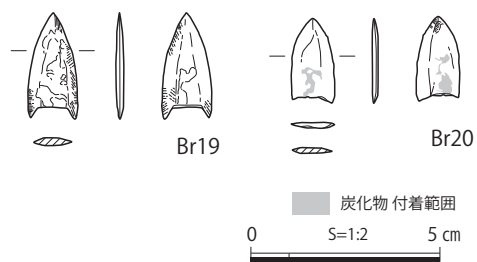
第 223 図 調査区内出土木器 (5)



第 225 図 調査区内出土玉類



第 224 図 調査区内出土骨角器



第 226 図 調査区内出土金属器

方形穿孔がほぼ等間隔に連続する。建築材とみられるが部位は不明である。W237は角材を加工し、先細りの先端部を設けたものである。建築材の可能性はあるが、部位は不明である。

W238・239は杭である。W238は針葉樹の芯持材を加工したもので、断面は長方形を呈す。建築材を転用した可能性がある。W239は正面に1か所、右側面に3か所の欠込みをもつ。垂木を転用したものとみられる。W240・241は矢板である。W240は表面の大部分が炭化している。W241は最大長146.5cmを測る大型のもので、上端には方形の抉込をもつ。

第223図に示したW242～245は人形である。いずれも頭頂部の形状は山形である。W242・243のように幅広のものと、W244・245のように細身のものがある。

第224図は骨角器である。Bo20はヤスとして記載するが、基部を欠損した柳葉形の骨鏃の可能性もある。アグをもたず直線状のもので、大型獣の長管骨を、研削によって扁平に成形している。Bo21は骨鏃である。鏃身と茎の境に段を設けたいわゆる栓状鏃である。鏃身、茎とも断面円形で先細りとなる。Bo22はイノシシ右肩甲骨を素材としたト骨である。焼灼痕は認められないが、楕円形の欠落がある。裏面のケズリはこの欠落周辺になされており、焼灼による熱の伝導の促す意図がうかがえる。

第225図は玉類である。J11～14は管玉である。長幅比4:1程度のJ11とJ12が碧玉を素材としているのに対し、長幅比約1:1と短いJ13・14は緑色凝灰岩を素材としている。J12は正面、裏面とも表面が剥落している。J15・16は滑石製の白玉である。J15は研削によって側面の稜を作出する。

J17はナツメ玉である。透明度の高い水晶を素材とし、側面観は六角形、断面は正六角形を呈す。上下を貫く穿孔は円錐状を呈す。

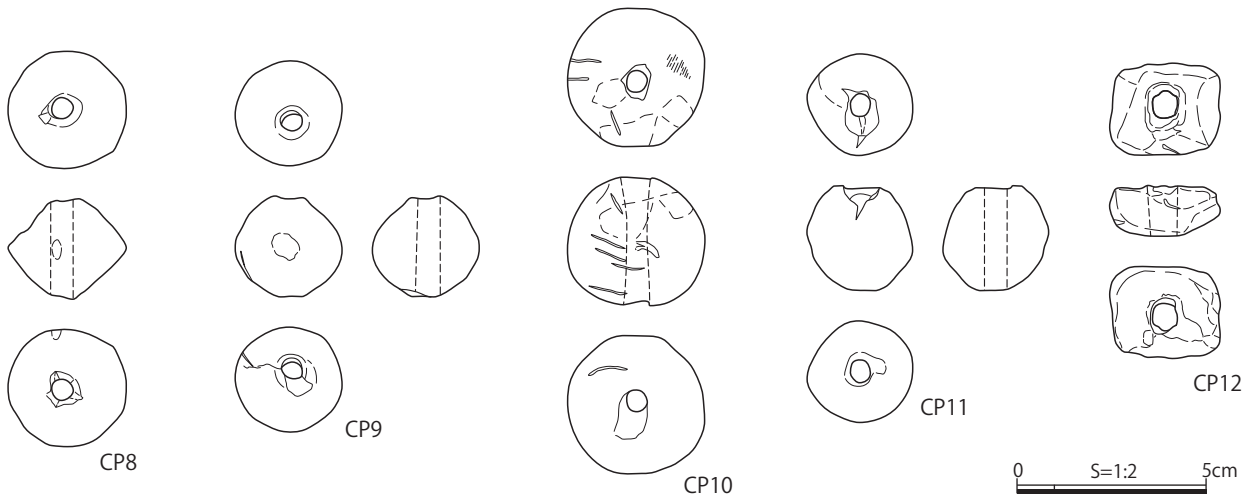
G6はガラス製の勾玉であり、緑色を呈す。G7はガラス小玉であり、濃青色と呈す。

第226図に示したBr19・20は銅鏃である。いずれも凹基型の無茎鏃で、先端と両側縁に鎬をもち偏六角形の断面形を呈す。Br19は平面三角形の鏃身に鋭い逆刺をもつ。Br20の鏃身は平面五角形状を呈し、逆刺は鈍く基部の抉りは明瞭ではない。両面に付着する炭化物は、柄の装着に用いた接着剤の痕跡か。

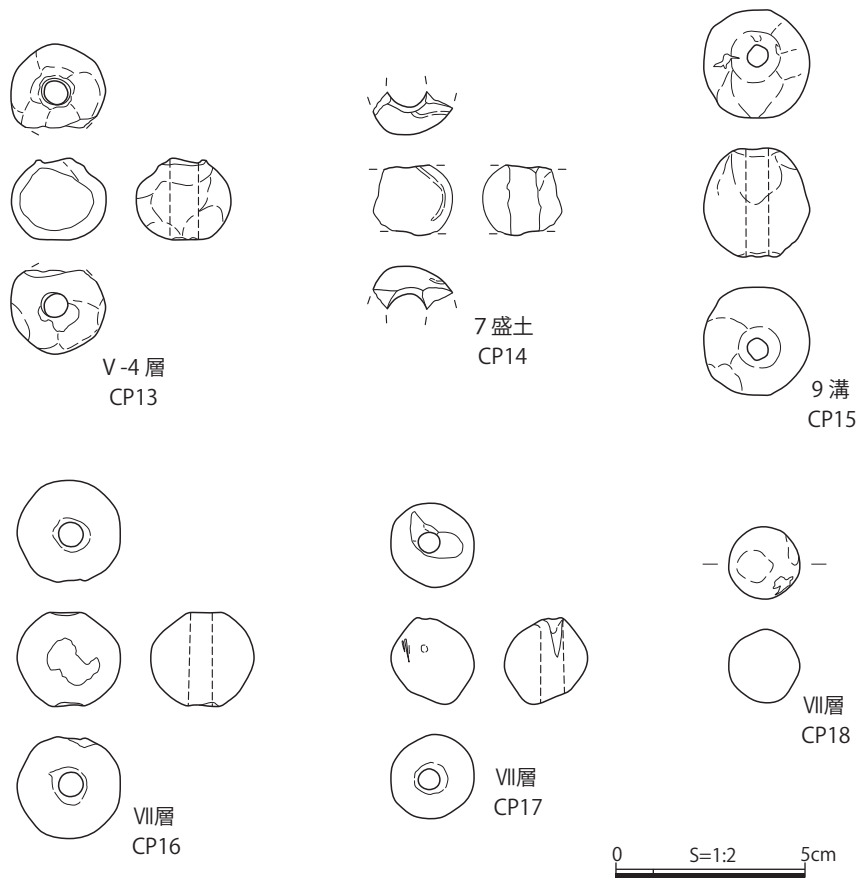
第227～230図に土玉を示す。第227図は調査区内、第228図は古墳時代後期以降の層と遺構およびⅦ層、第229図は古墳時代前期前葉の遺構群とSD38-A、第230図はSD38から出土したものである。特に第227図のものについては本来の帰属層、遺構から遊離している可能性が高いが、形状やサイズ、孔径に時期的な傾向は認められず、最大径が高さを僅かに上回る球状を呈すものが中心となる。

一方でわずかながら、CP12のように歪な直方体状を呈すものや、CP18・33のように孔をもたないものもある。これらについては、用途が異なった可能性も考えられよう。当遺跡の出土例から、土玉はヒノキの輪が通された状態で使用されたことが明らかになっているが、今回出土した土玉には孔の周囲に剥落や磨滅が認められるものが散見される。また、CP34のように、側面に連続した敲打痕が認められるものもある。用途の解明に向けて、今後このような使用の状況を示す痕跡の検討も必要

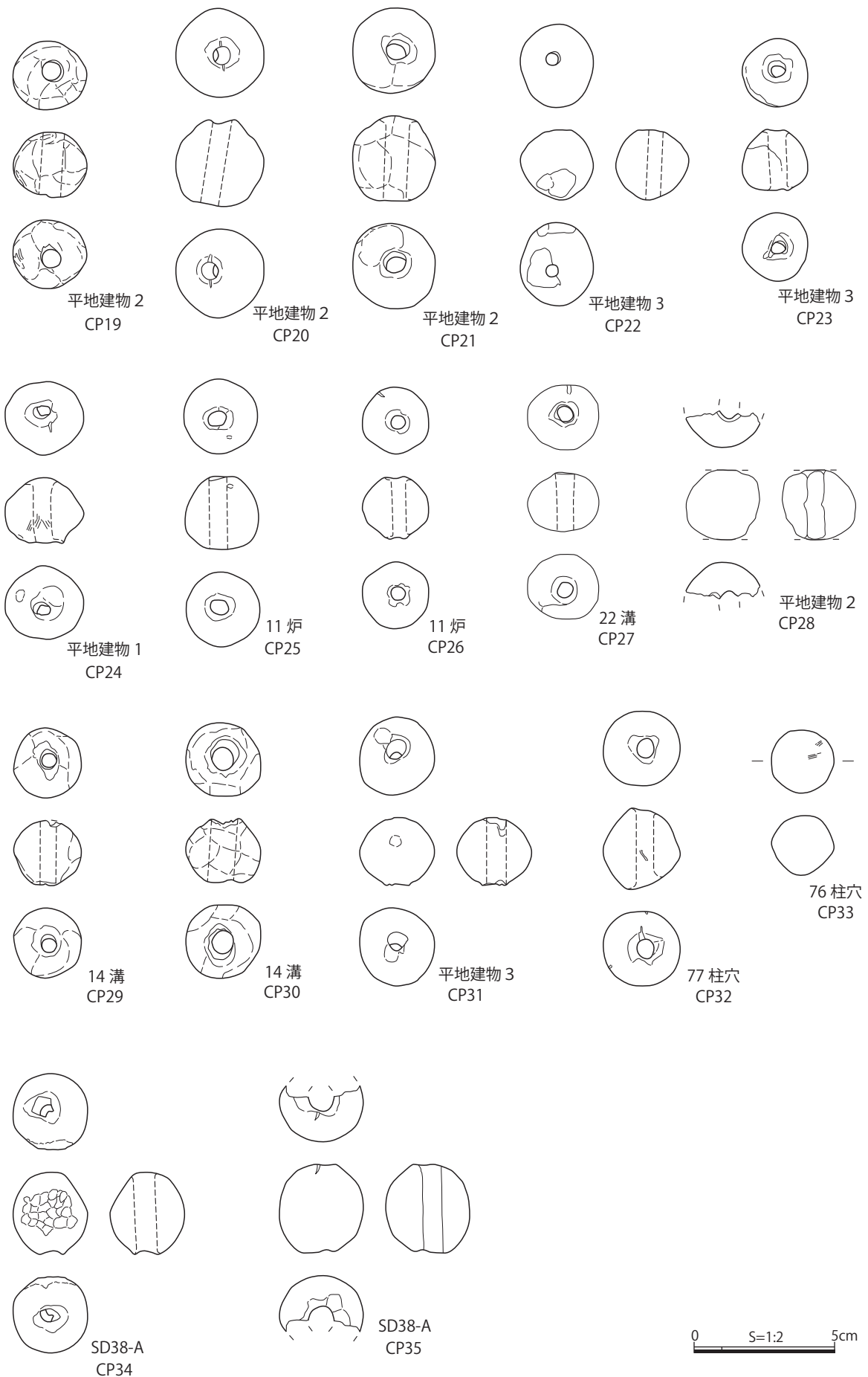
となるであろう。



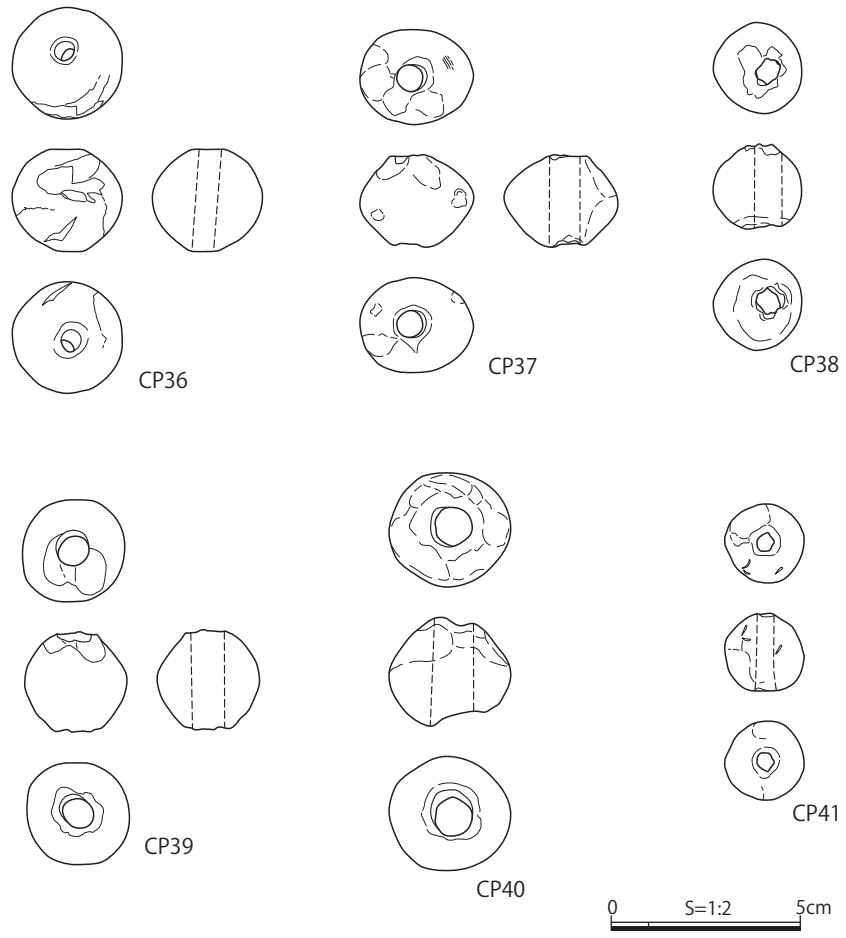
第 227 図 調査区内出土土玉



第 228 図 VII層出土土玉



第 229 図 古墳時代前期遺構群、SD38-A 出土土玉



第 230 図 SD38 出土土玉

第6-1表 土器観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	取上 番号	地区	遺構 層位	種別	法量 (cm)		残存部位 残存率	胎土	焼成	色調		備考
						口径	器高				上段：外面	下段：内面	
第14図	Po 1	1	-	II・III層	陶器 高台付坏	-	△ 1.7	底部 1/5	密	良好	灰オリーブ色		
第14図	Po 2	30	WH36	II・III層	陶器 碗	-	△ 1.2	底部 1/2	密	良好	にぶい黄橙色		
第14図	Po 3	10	-	II・III層	陶器 皿	-	△ 2.5	1/8 以下	密	良好	灰オリーブ色		
第15図	Po 4	45	WH35	IV -1 層	土師器皿	※ 6.6	△ 0.9	口縁部 1/6	密	良好	にぶい黄橙色		
第15図	Po 5	103	WH36	IV -1 層	土師器坏	-	△ 2.3	底部 1/4	密	普通	にぶい黄橙色		
第15図	Po 6	66	WH36	IV -1 層	白磁碗	-	△ 1.8	1/8 以下	密	良好	灰白色		
第15図	Po 7	89	WI36	IV -1 層	青磁 碗	-	△ 3.2	1/8 以下	密	良好	胎土：明青灰色 釉：オリーブ灰色		
第15図	Po 8	42	WH36	IV -1 層	備前焼 播鉢	-	△ 4.8	口縁部 1/8 以下	密	良好	灰褐～にぶい赤褐色 にぶい赤褐色		備前焼
第15図	Po 9	42	WH36	IV -1 層	土師器羽釜	-	△ 5.4	1/8 以下	普通	良好	灰白～灰黄褐色		外面煤・炭化物 付着
第15図	Po10	82	WH36	IV -1 層	須恵器坏	-	△ 1.5	底部 1/2	密	普通	灰白色		底部側面に煤付 着
第21図	Po11	114	WH36	4 土手	土師器坏	-	△ 0.9	底部完存	普通	良好	灰白色		
第21図	Po12	114	WH36	4 土手	土師器坏	-	△ 2.7	底部 1/4	密	良好	灰黄褐～にぶい黄褐色 灰黄褐色		
第21図	Po13	114	WH36	4 土手	土師器 高台付坏	-	△ 2.6	底部 1/5	普通	良好	にぶい橙色		
第30図	Po14	162	WH36	V -1 上面	土師器 高台付坏	-	△ 4.6	坏部～脚部 2/3	密	良好	にぶい橙色		
第31図	Po15	1161	WI36	V 層	弥生土器 器台	-	△ 6.6	口縁部 1/5	普通	良好	明赤褐色 にぶい橙色		
第31図	Po16	452	WH35	V 層	土師器 高坏	※ 16.6	△ 4.7	口縁部～胴部 1/8	普通	良好	明褐色 橙色		
第31図	Po17	1077	WI36・37	V 層	土師器 脚付埴	※ 11.8	3.8	口縁部 1/5	密	良好	黄灰～暗灰黄色 黄灰色		
第31図	Po18	613	WH36	V 層	土師器 坏	※ 13.6	△ 2.5	口縁部 1/8、胴部 1/4	密	良好	にぶい橙～明褐灰色 橙～明褐灰色		
第31図	Po19	1177	WI36	V 層	須恵器 坏蓋	10.0	3.9	1/3 端部無し	密	良好	灰色		
第31図	Po20	1177	WI36	V 層	須恵器 坏身	※ 9.0	△ 4.8	口縁部 1/8、受部 1/2	普通	やや良好	灰～にぶい赤褐色 灰色		
第31図	Po21	717	-	V 層	須恵器 坏身	9.8	5.3	口縁部～底部 3/4	やや 粗	良好	灰色		
第31図	Po22	209	WH35	V 層	須恵器 高坏	※ 10.0	△ 5.1	受部 1/4	密	良好	青灰色		
第31図	Po23	2369	WH37	V 層	須恵器 坏蓋	※ 12.2	△ 3.9	口縁部～底部 1/2	密	良好	暗灰色 灰色		
第31図	Po24	1077	WI36・37	V 層	須恵器 坏身	※ 11.4	△ 3.8	受部 1/4	密	良好	灰色		
第31図	Po25	1186	WH36	V 層	須恵器 坏	※ 12.4	△ 4.7	口縁部 1/4	普通	普通	橙色		
第41図	Po26	1181	WI36	VI -1 層	土師器 甕	※ 19.6	△ 4.7	口縁部 2/5	密	良好	浅黄褐色 にぶい橙色		
第41図	Po27	232	WH35	VI -1 層	土師器 甕	※ 16.0	△ 6.8	口縁部 1/4、肩部 1/8	密	良好	明褐灰色		
第41図	Po28	461	WH36	VI -1 層	土師器 小型壺	※ 7.0	△ 6.8	口縁部～底部	密	良好	淡橙～浅黄褐色 浅黄橙～にぶい橙色		
第41図	Po29	851	WH36	VI -1 層	土師器 小型壺	※ 6.6	△ 6.9	口縁部～胴部	密	良好	浅黄橙～にぶい黄褐色 明褐灰～にぶい黄褐色		
第41図	Po30	234	WH35	VI -1 層	土師器 埴	※ 12.2	5.3	口縁部 1/8、底部 1/2	密	良好	灰白色		外面一部赤彩有
第41図	Po31	364	WH36	VI -1 層	土師器 埴	※ 12.4	△ 4.2	口縁部～体部 1/2	密	良好	灰褐～橙色 褐灰～橙色		

第6-2表 土器観察表(2)

挿図 番号	遺物 番号	取上 番号	地区	遺構 層位	種別	法量 (cm)		残存部位 残存率	胎土	焼成	色調		備考
						口径	器高				上段：外面	下段：内面	
第41図	Po32	1181	WI36	VI-1層	土師器 高坏	※14.9	△11.0	坏部端部1/4、脚 部完存、脚部端部 1/4	普通	良好	にぶい黄橙色		
第41図	Po33	230	WH35	VI-1層	土師器 高坏	※15.6	△5.2	口縁部ほぼ完存	普通	良好	にぶい褐色		
第41図	Po34	244	WH35	VI-1層	土師器 高坏	※13.6	△6.3	坏部3/4	密	良好	橙～灰白～黒褐色 橙～灰白色		
第41図	Po35	256	WH35	VI-1層	土師器 高坏	※14.7	△10.2	坏部1/2、坏端部 1/9	やや 密	良好	灰白色		内外面全面赤彩 外面一部黒班有
第41図	Po36	461	WH36	VI-1層	土師器 高坏	-	△7.1	脚部～底部1/8	密	良好	橙～明褐灰色 明褐灰色		外面脚部赤彩
第41図	Po37	229	WH35	VI-1層	土師器 高坏	-	△5.3	脚部完存	普通	普通	橙色		
第41図	Po38	235	WH35	VI-1層	須恵器 高坏	※12.0	△3.0	受部1/6、口縁無 し	密	良好	灰色		
第41図	Po39	1088	WH36	VI-1層	須恵器 坏身	※11.0	△3.0	1/8以下	密	良好	灰～暗灰色 灰色		
第41図	Po40	1588	WI36	VI-1層	須恵器 坏身	-	△4.1	坏身4/5 口縁端部は無し	密	やや不良	灰褐～灰白色 灰白色		
第41図	Po41	1588	WI36	VI-1層	須恵器 坏身	※12.6	△3.6	口縁部1/6	密	良好	褐灰色		
第41図	Po42	333	WH35	VI-1層	須恵器 甗	-	△7.5	胴部1/2	普通	良好	灰白色		
第42図	Po43	1289	WI36	VI-2層	土師器 甗	※14.4	△9.4	口縁部1/6	普通	良好	にぶい橙色 にぶい黄橙色		
第42図	Po44	1243	WH36	VI-2層	土師器 甗	※17.0	△10.7	頸部1/4 口縁端部はわずか	密	良好	にぶい赤橙～赤、にぶ い黄橙～褐色 にぶい黄橙～にぶい黄 褐色		
第42図	Po45	1200	WH37	VI-2層	土師器 甗	※17.4	△6.0	口縁部1/2	普通	良好	黒色 褐灰色		
第42図	Po46	1351	WI36	VI-2層	土師器 甗	※20.0	△8.8	口縁部1/4	密	良好	褐灰色 明褐灰色		
第42図	Po47	1204	WH36	VI-2層	土師器 直口壺	※10.0	△6.4	口縁端部1/8	普通	良好	橙色 にぶい橙色		
第42図	Po48	1277	WH36	VI-2層	土師器 直口壺	※9.4	△8.0	口縁～胴部1/4 口縁端部は1/8以 下	密	良好	灰白～褐灰色 にぶい黄橙色		外・内面に赤彩
第42図	Po49	1204	WI36	VI-2層	土師器 脚付埴	※11.7	△3.9	口縁部1/2	密	良好	灰白～浅黄橙色		
第42図	Po50	1243	WH36	VI-2層	土師器 脚付埴	※15.4	△6.1	埴部1/2	普通	良好	浅黄橙～にぶい橙色		
第42図	Po51	1367	WI36	VI-2層	土師器 脚付埴	-	△5.6	脚部1/2	密	良好	にぶい橙～赤褐色 明褐灰～橙色		
第42図	Po52	1286	WH36	VI-2層	土師器 鉢	※18.4	△6.6	埴部1/6	普通	普通	灰白色 浅黄色		
第42図	Po53	1213	WH36	VI-2層	土師器 鉢	※11.6	△5.5	埴部1/8	やや 密	良好	明赤褐色 淡赤褐色		外面全部、内面 口縁 上部赤彩
第42図	Po54	1262	WH36	VI-2層	土師器 高坏	※14.0	△4.6	口縁部1/5	密	良好	明赤褐～橙色 にぶい赤褐～赤褐色		内外面全面赤彩
第42図	Po55	1243	WH36	VI-2層	土師器 高坏	※15.4	△5.4	坏部1/3 口縁端部はわずか	密	良好	橙色		内外面全面赤彩
第42図	Po56	1508	WI37	VI-2層	弥生土器 器台	-	△3.2	口縁部1/6	密	良好	明黄褐～にぶい黄褐色 浅黄橙色		
第42図	Po57	1692	WI36	VI-2層	土師器 移動式竈	-	△9.6	受部	普通	良好	橙色 褐灰色		

第6-3表 土器観察表(3)

挿図 番号	遺物 番号	取上 番号	地区	遺構 層位	種別	法量 (cm)		残存部位 残存率	胎土	焼成	色調 上段：外面 下段：内面	備考
						口径	器高					
第43図	Po58	1243	WH36	VI-2層	須恵器 坏蓋	※12.0	△4.7	1/4	密	良好	灰色	
第43図	Po59	1320	WH36	VI-2層	須恵器 坏身	※11.2	△3.7	口縁部1/6	密	良好	灰色	
第43図	Po60	1508	WI37	VI-2層	須恵器 坏身	※11.0	△3.2	口縁部1/4	密	良好	灰色	
第43図	Po61	1264	WH36	VI-2層	須恵器 坏身	12.0	3.8	口縁部～受部1/3	普通	良好	暗灰黄色 黄灰色	
第43図	Po62	1287	WH36	VI-2層	須恵器 坏身	-	△3.4	底部1/4	やや 密	良好	灰色	
第43図	Po63	1394	WI36	VI-2層	須恵器 高坏	※10.8	13.2	坏部～脚底部1/3 口縁端部はわずか	密	良好	黒色	2方向の2段透 かし
第43図	Po64	1744	WI36	VI-2層	須恵器 高坏	-	△9.0	脚柱部1/4	やや 密	良好	灰色	
第43図	Po65	1681	WH37	VI-2層	須恵器 高坏	※15.6	△17.1	口縁部1/4、脚柱 部完存、脚部1/2	密	良好	オリーブ黒～黒色 オリーブ黒～暗青灰色	
第43図	Po66	1380	WI36	VI-2層	須恵器 高坏	-	△10.9	受部～脚部1/4 端部無し	密	やや不良	灰白色 にぶい黄～灰白色	
第43図	Po67	1532	WI36	VI-2層	須恵器 甕	-	△8.9	底部2/3	普通	良好	灰色	
第43図	Po68	1744	WI36	VI-2層	須恵器 甕	※10.6	△13.2	口縁部～肩部2/3	密	良好	灰白色	
第52図	Po69	1612	WI36	7土器 溜り	土師器 甕	※22.2	△6.5	口縁端部1/18、 胴部1/6	普通	良好	明褐灰～にぶい橙色 明褐灰色	
第52図	Po70	1673	WI36	7土器 溜り	土師器 埴	※13.2	△4.2	口縁部1/4	密	良好	褐灰～橙色 明褐灰～褐色	
第53図	Po71	1629	WI36	7土器 溜り	須恵器 甕	※39.8	△18.7	口縁部1/4、肩部 1/8	密	良好	暗青灰～青灰色	
第53図	Po72	1652	WI36	7土器 溜り	須恵器 甕	※12.5	△6.3	口縁部7/8	密	良好	灰色	
第53図	Po73	969	WI36	7土器 溜り	須恵器 甕	※21.0	△7.9	口縁部1/3	普通	良好	灰色	
第53図	Po74	1745	WH35	7土器 溜り	須恵器 坏身	※11.0	△4.5	口縁部1/8、受部 1/6	密	良好	灰色	
第53図	Po75	1632	WI36	7土器 溜り	須恵器 高坏	-	△7.4	坏端部、脚のほと んど欠く。坏部 1/2	密	良好	灰色 灰白色	3方向の透かし
第55図	Po76	1796	WH36	9溝	土師器 埴	※10.4	4.3	口縁部1/8、底 部1/4	密	良好	灰白～褐灰色 浅黄橙～褐灰色	内外面に赤彩
第55図	Po77	1801	WH36	9溝	土師器 埴	※11.8	△2.9	口縁部1/8、底 部1/4	密	良好	橙～にぶい橙色 にぶい橙色	
第55図	Po78	1796	WH36	9溝	土師器 高坏	-	△7.7	裾端部3/4、筒 部完形	普通	良好	橙色	
第55図	Po79	1795	WI36	9溝	土師器 甕形土器	-	△7.7	1/5	普通	良好	灰白色	山陰型
第55図	Po80	1795	WI36	9溝	土師器 甕	-	△5.8	把手のみ	普通	良好	灰褐色	
第55図	Po81	1799	WI36	9溝	土師器 移動式甕	※27.5	△10.6	口縁部2/3	普通	良好	明褐灰～橙色 にぶい橙色	内面煤付着
第55図	Po82	1795	WI36	9溝	土師器 移動式甕	-	△9.7	袖？部、端部残存 わずか	密	良好	橙～灰黄褐色 褐灰色	
第55図	Po83	1795	WI36	9溝	土師器 移動式甕	-	△16.3	？底部	普通	良好	にぶい橙～褐灰色 にぶい橙色	
第55図	Po84	2253	WH35	9溝	須恵器 高坏	-	△5.8	脚端部1/2	密	良好	灰色	3方向の透かし
第61図	Po85	2239	WH35	平地建物 2	弥生土器 甕	※12.9	16.5	口縁部4/5、底部 1/2、脚部2/3	普通	良好	にぶい黄橙～胴部褐灰 色 にぶい黄橙色	

第6-4表 土器観察表(4)

挿図 番号	遺物 番号	取上 番号	地区	遺構 層位	種別	法量 (cm)		残存部位 残存率	胎土	焼成	色調 上段：外面 下段：内面	備考
						口径	器高					
第61図	Po86	2239	WH35	平地建物 2	弥生土器 甕	16.6	△ 9.2	口縁部ほぼ完存、 胴部 1/3	密	良好	にぶい橙～黒褐色 橙～にぶい褐色	
第61図	Po87	2428	WH36	平地建物 2	土師器 甕	-	△ 17.7	胴部のみ 1/7～ 3/8	普通	良好	にぶい黄橙色	外面胴部下半煤 付着
第61図	Po88	2143	WH36	平地建物 2	土師器 低脚坏	-	△ 3.0	底部完存	普通	良好	黄色 灰白色	
第63図	Po89	2401	WH36	平地建物 3	土師器 甕	※ 15.8	△ 6.8	口縁部 1/4	普通	良好	浅黄褐色 灰白色	
第63図	Po90	2407	WH36	平地建物 3	土師器 甕	※ 17.5	△ 12.3	口縁部 1/5	普通	良好	にぶい黄橙色 浅黄色	
第63図	Po91	2401	WH36	平地建物 3	土師器 甕	※ 17.2	△ 5.3	口縁下部 1/4	普通	良好	にぶい黄橙色	
第63図	Po92	2401	WH36	平地建物 3	土師器 甕	-	△ 9.1	肩～胴部の小片	普通	良好	にぶい黄橙色	外面一部煤付着
第64図	Po93	2210	WI36	平地建物3 SK2	土師器 甕	※ 16.4	△ 6.6	口縁部 1/5	普通	良好	オリーブ黒色 灰黄褐色	
第64図	Po94	2054	WI36	平地建物3 SK2	土師器 甕	※ 19.0	△ 8.4	口縁部 2/3	密	良好	明褐灰色	
第64図	Po95	2410	WH36	平地建物3 SK2	土師器 甕	※ 19.8	△ 7.8	口縁部 1/5	密	良好	黄褐色 にぶい黄褐色	外面一部煤付着
第64図	Po96	2067	WI36	平地建物3 SK2	土師器 甕	※ 19.8	△ 7.3	口縁部 1/2、頸部 1/2、肩部 1/16	密	良好	浅黄橙～褐灰色 明褐灰～にぶい橙色	
第64図	Po97	2062	WI36	平地建物3 SK2	土師器 甕	※ 26.0	△ 5.8	口縁部 1/6	普通	普通	褐灰～にぶい黄褐色 褐灰～明黄褐色	
第64図	Po98	2134	WH36	平地建物3 SK2	土師器 甕	※ 19.1	△ 17.7	口縁部 7/8、頸部 3/4、胴部 1/4	普通	良好	にぶい黄褐色	外面全体に煤付 着
第64図	Po99	1915	WI36	平地建物3 SK2	土師器 甕	※ 10.4	11.9	口縁部 2/3、体部 1/2	普通	良好	にぶい橙～褐灰色	
第64図	Po100	2095	WI36	平地建物3 SK2	土師器 低脚坏	13.2	5.1	坏部 4/5、脚完形	密	良好	灰白色	
第64図	Po101	2072	WI36	平地建物3 SK2	土師器 高坏	-	△ 10.7	裾部 2/3、筒部 2/5	普通	良好	にぶい黄褐色	
第70図	Po102	1912	WH36	平地建物 4	土師器 甕	-	△ 4.0	1/8 以下	普通	良好	にぶい橙色 灰褐色	外面煤付着
第73図	Po103	2294	WH37	15 炉	弥生土器 甕	※ 19.7	△ 5.7	口縁部 1/12～ 1/7、頸部 1/7	普通	良好	にぶい黄褐色	
第73図	Po104	2287	WH36	12 炉	土師器 甕	-	△ 5.0	1/8 以下	普通	良好	にぶい橙色	外面煤付着
第73図	Po105	2287	WH36	12 炉	土師器 高坏	-	△ 5.6	受部 1/8	密	良好	灰白～にぶい黄褐色	
第73図	Po106	2287	WH36	12 炉	土師器 高坏	-	△ 4.3	端部 1/4	普通	良好	褐灰～にぶい橙色	
第76図	Po107	2108	WH36	24 土抗	土師器 壺	※ 17.0	△ 6.6	口縁部 1/8～1/4 弱、頸部・胴部 1/4 弱	普通	良好	灰白色	
第76図	Po108	2107	WH36	24 土抗	土師器 脚付埴	12.6	7.5	口縁部 1/2、脚底 部 1/2	密	良好	橙～褐灰色 にぶい橙～褐灰色	
第76図	Po109	2177	WH35	62 土抗	土師器 脚付埴	-	△ 4.3	脚部 1/2	普通	良好	黄褐色 黄灰色	
第76図	Po110	2170	WH35	62 土抗	土師器 高坏脚部片	-	△ 2.5	1/8 以下	普通	良好	灰白色	外内面赤彩 (化粧土と思わ れる)
第78図	Po111	2384	WH35	42 溝	土師器 甕	※ 15.5	△ 4.2	口縁部 1/8、頸部 1/6	普通	良好	灰白色	
第78図	Po112	2306	WH35	42 溝	土師器 壺 or 甕	※ 18.0	△ 7.7	口縁部 1/6、胴部 1/8 以下	普通	良好	灰白色	
第78図	Po113	2395	WH35	42 溝	土師器 甕	※ 19.5	△ 6.6	口縁部 1/5	密	良好	褐灰～灰白色 明黄褐～灰白色	

第6-5表 土器観察表(5)

挿図 番号	遺物 番号	取上 番号	地区	遺構 層位	種別	法量 (cm)		残存部位 残存率	胎土	焼成	色調 上段：外面 下段：内面	備考
						口径	器高					
第78図	Po114	2376	WH35	42溝	土師器 甕	16.7	△16.5	口縁部1/2強、頸 部ほぼ完存	普通	良好	にぶい黄橙色	肩から下は煤・ 炭化物付着
第78図	Po115	2373	WH35	42溝	土師器 甕	-	△6.1	口縁部1/8	普通	良好	にぶい黄橙色	口縁外面煤付着
第82図	Po116	1902	WH36	23溝	土師器 甕	-	△4.5	1/8以下	普通	良好	灰白色	
第85図	Po117	2028	WH36	22溝	土師器 甕	-	△6.0	口縁部1/6	普通	良好	にぶい黄橙色	口縁外面煤付着
第85図	Po118	1905	WH36	22溝	土師器 甕	-	△3.9	口縁部1/8以下	密	良好	灰白～明褐色 明褐色～明褐色	
第87図	Po119	851	WH36	14溝	土師器 壺	24.8	△31.0	口縁部2/3、胴部 2/3	普通	良好	灰白色	外面胴部煤付着
第87図	Po120	2021	WH36	14溝	土師器 甕	-	△5.4	1/8以下	普通	良好	灰白色	
第87図	Po121	1888	WH36	14溝	土師器 甕	※14.8	△5.4	口縁部1/8	普通	良好	明褐色	口縁外面煤付着
第87図	Po122	2021	WH36	14溝	弥生土器 蓋	※15.3	△3.5	口縁部1/8、胴部 1/4	普通	良好	橙色 灰白～橙色	外面赤彩 内は口に近い方 に赤彩
第92図	Po123	2582	WH36	82ピット	弥生土器 甕	-	△2.8	1/8以下	普通	良好	黒色 明褐色～にぶい橙色	外面全体煤付着
第94図	Po124	2309	WH36	SD38-A	弥生土器 甕	※14.0	△10.7	口縁部1/8 頸～肩部1/5	密	良好	灰褐色	外面全面煤付着
第94図	Po125	934	WH36	SD38-A	弥生土器 甕	※14.4	△10.3	口縁部1/8強、胴 部1/4	普通	良好	褐色 黄褐色	胴部下半は黒 斑・煤付着
第94図	Po126	2307	WH36	SD38-A	弥生土器 甕	※14.7	△7.0	口縁～肩部1/6	普通	良好	にぶい黄橙色	外面 僅かに煤 付着
第94図	Po127	2309	WH36	SD38-A	弥生土器 甕	※12.3	△4.0	接合すると1/2強	普通	良好	黒色 褐色	外面煤付着
第94図	Po128	2356	WI36	SD38-A	弥生土器 甕	-	△10.0	頸～胴部3/8	普通	良好	にぶい黄橙～灰黄褐色 灰白色	
第94図	Po129	2356	WI36	SD38-A	弥生土器 蓋	13.6	5.0	つまみ部 完存 体部2/3	普通	良好	明褐色 灰褐色	
第94図	Po130	2309	WH36	SD38-A	弥生土器 低脚杯	12.9	△5.2	坏部3/4 脚端部欠損	密	良好	褐色 にぶい黄橙～褐色	
第94図	Po131	2309	WH36	SD38-A	弥生土器 低脚杯	※14.6	△3.1	坏部1/4	密	良好	にぶい黄橙～灰黄褐色 にぶい褐～灰褐色	
第94図	Po132	2330	WI36	SD38-A	弥生土器 器台	※17.0	△8.7	受部3/4 筒部完存	密	良好	褐色	
第94図	Po133	2309	WH36	SD38-A	弥生土器 直口壺	※14.5	△9.0	口縁～頸部1/3 肩部1/8	普通	良好	灰白色	
第94図	Po134	2356	WI36	SD38-A	弥生土器 直口壺	※30.8	△6.3	口縁部1/6	普通	良好	にぶい黄橙色	
第94図	Po135	2309	WH36	SD38-A	弥生土器 注口土器	-	△9.0	注口部完存	密	良好	灰白～灰黄褐色 褐色～灰黄褐色	
第94図	Po136	2309	WH36	SD38-A	弥生土器 鉢	※6.2	4.0	口縁～底部1/5	普通	良好	にぶい黄褐色	
第95図	Po137	2309	WH36	SD38-A	土師器 甕	※15.6	△7.4	口縁～肩部3/8	密	良好	明褐色～にぶい褐色 明褐色～褐色	
第95図	Po138	898	WH36	SD38-A	土師器 甕	17.2	△12.0	口縁頸部完存 胴部1/2	普通	良好	灰白色	外面煤付着
第95図	Po139	846	WH36	SD38-A	土師器 甕	※16.6	△14.4	口縁部3/4、胴部 1/2	密	良好	にぶい黄橙～灰白色 褐色	
第95図	Po140	1086	WH36	SD38-A	土師器 甕	※16.8	△26.6	口縁～底部1/4	密	良好	明褐色～灰黄褐色 褐色～灰黄褐色	外面一部こげ付 着
第95図	Po141	2399	WH37	SD38-A	土師器 甕	※16.4	△8.4	口縁～肩部1/6	密	良好	明褐色～にぶい橙色 灰白～褐色	外面煤付着

第6-6表 土器観察表(6)

挿図 番号	遺物 番号	取上 番号	地区	遺構 層位	種別	法量 (cm)		残存部位 残存率	胎土	焼成	色調 上段：外面 下段：内面	備考
						口径	器高					
第95図	Po142	2307	WH36	SD38-A	土師器 甕	19.2	△ 8.0	口縁、頸部完存 肩部 1/8	普通	良好	灰白色	外面煤付着
第95図	Po143	871	WH36	SD38-A	土師器 甕	17.2	△ 19.9	口縁部完存 胴部 1/4	密	良好	灰白～明赤褐色 灰白～灰黄褐色	外面煤付着
第95図	Po144	1047	WH36	SD38-A	土師器 低脚坏	※ 18.8	△ 5.3	坏部 1/3	普通	良好	灰白色	
第95図	Po145	2399	WH37	SD38-A	土師器 低脚坏	※ 13.4	△ 4.0	つまみ～体部 2/3	普通	良好	にぶい黄褐色	
第95図	Po146	2307	WH36	SD38-A	土師器 低脚坏	※ 13.8	5.9	坏部 1/2 脚部 1/8 以下	密	良好	明褐灰～灰白色 淡黄褐～褐灰色	
第95図	Po147	2399	WH37	SD38-A	土師器 高坏脚柱部	-	△ 7.3	脚柱部 完存 坏部、端部 欠損	普通	良好	浅黄褐色	
第95図	Po148	2309	WH36	SD38-A	土師器 壺	※ 16.6	△ 13.6	口縁～頸部 1/4 肩部 1/8	普通	良好	褐灰～にぶい橙色 褐灰色	外面煤付着
第100図	Po149	2369	WH37	古墳時代 前期造成 土	土師器 壺	※ 24.2	△ 12.5	口縁部 1/8	普通	良好	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	
第100図	Po150	2369	WH37	古墳時代 前期造成 土	土師器 壺	※ 22.2	△ 35.2	口縁部 1/2、頸部 完存、胴底部 1/4	密	良好	灰白色	
第100図	Po151	2369	WH37	古墳時代 前期造成 土	土師器 甕	※ 21.4	△ 11.0	口縁部 1/6	密	良好	にぶい黄褐色 灰黄褐色	
第100図	Po152	2369	WH37	古墳時代 前期造成 土	土師器 高坏	※ 24.8	△ 5.9	坏部のみ、全体の 1/2	密	良好	明褐灰色	
第100図	Po153	2369	WH37	古墳時代 前期造成 土	土師器 高坏	21.8	15.0	口縁部 2/3、脚柱 部完存、胴底部 2/3	密	良好	淡橙～灰白色 灰白色	
第100図	Po154	2369	WH37	古墳時代 前期造成 土	土師器 鼓形器台	-	△ 5.9	脚部 1/4	密	良好	橙～にぶい橙色 明褐灰色	
第101図	Po155	2424	WH36	VII層	弥生土器 甕	※ 20.4	△ 7.8	口縁部 9/10	普通	良好	にぶい黄褐色	
第101図	Po156	2415	WH36	VII層	弥生土器 甕	※ 19.2	△ 19.8	口縁部 1/2、胴部 1/3	密	良好	橙～明褐灰色 明赤褐～明褐灰色	
第101図	Po157	2415	WH36	VII層	弥生土器 甕	※ 17.0	24.6	口縁部 2/3～底部 完存	普通	良好	にぶい褐色	外面煤・炭化物 付着
第101図	Po158	2424	WH36	VII層	弥生土器 甕	※ 15.3	△ 9.0	口縁端部極わずか 残存、頸は 4/5	普通	良好	褐灰色 にぶい橙色	
第101図	Po159	2424	WH36	VII層	弥生土器 高坏	※ 18.0	△ 9.1	口縁端部 1/6、坏 皿部 1/2、脚付根 完存	普通	良好	明褐灰色 褐灰色	外面煤付着
第101図	Po160	1894	WH36	VII層	弥生土器 高坏	-	△ 10.8	脚柱部完存	普通	良好	にぶい橙～にぶい褐色 にぶい橙色	
第101図	Po161	2415	WH36	VII層	弥生土器 無頸壺	※ 11.8	△ 10.0	口縁部 3/8、胴部 1/4	密	良好	浅黄橙～明褐灰色 浅黄橙～褐灰色	
第101図	Po162	2415	WH36	VII層	弥生土器 蓋	※ 4.1	△ 4.0	つまみ上部は完 存、下部はほとん ど無し	普通	良好	褐灰～灰白色 褐灰色	
第101図	Po163	2424	WH36	VII層	弥生土器 蓋	-	△ 7.5	つまみ上部は完 存、下部 1/4	普通	良好	褐灰色 黒色	
第101図	Po164	1832	WH36	VII層	弥生土器 蓋	-	△ 7.0	つまみ端部なし、 底部完存	密	良好	明褐灰～灰白色 灰黄褐～褐灰色	内外面黒斑
第101図	Po165	2424	WH36	VII層	弥生土器 甕	※ 13.0	△ 5.0	口縁部 1/4	密	良好	にぶい橙色 灰白色	

第6-7表 土器観察表(7)

挿図 番号	遺物 番号	取上 番号	地区	遺構 層位	種別	法量 (cm)		残存部位 残存率	胎土	焼成	色調 上段：外面 下段：内面	備考
						口径	器高					
第102図	Po166	2415	WH36	VII層	土師器 甕	※15.6	△7.1	口縁部 1/5	密	良好	褐灰～黄橙色 にぶい褐～明褐色	
第102図	Po167	1745	WH35	VII層	土師器 甕	※20.3	△6.8	口縁部 1/6	普通	良好	にぶい橙色 黄灰色	
第102図	Po168	2415	WH36	VII層	土師器 甕	※14.8	△15.0	口縁・頸部 1/3、 胴部 1/4	普通	良好	灰白色	
第102図	Po169	2415	WH36	VII層	土師器 壺	※19.0	△7.3	口縁部 1/8	密	良好	灰白～浅黄～浅橙～ にぶい橙色 灰白～明黄褐～灰褐～ にぶい橙色	
第102図	Po170	1772	WI35	VII層	土師器 壺	※14.4	△5.5	口縁部 1/4	やや 密	良好	灰白色 灰黄色	
第102図	Po171	2424	WH36	VII層	土師器 小型壺	※10.6	△7.6	口縁～胴部 1/8	やや 密	良好	オリーブ黒色 灰色	外面煤付着
第102図	Po172	2280	WI36	VII層	土師器 低脚坏	※12.6	△6.1	口縁～底部 1/3 口縁端部わずか	普通	普通	灰白～淡橙色 明褐灰～にぶい橙色	
第102図	Po173	1881	WH35	VII層	土師器 高坏	-	△4.5	脚部 3/4	普通	良好	にぶい黄褐色	
第102図	Po174	1913	WH37	VII層	土師器 小型器台	9.1	△7.1	口縁・坏部 1/3、 脚部完存、脚袖部 ほぼ0	普通	良好	灰白～灰褐色	
第102図	Po175	1884	WH36	VII層	土師器 小型器台	※8.4	△6.7	受部～脚部 3/4 口縁端部無し	やや 密	良好	明黄褐～にぶい黄褐色 にぶい黄褐～明黄褐色	
第102図	Po176	2248	WH35	VII層	土師器 甕形土器	※21.0	△9.8	口縁部～体部 1/8	密	良好	にぶい橙～褐色 にぶい橙～にぶい褐色	
第102図	Po177	1914	WH36	VII層	土師器 甕形土器	-	△13.2	1/8	普通	良好	にぶい黄褐色 にぶい橙色	
第119図	Po178	3447	WI36	造成土①	弥生土器 蓋	-	5.5	端部 1/5	普通	良好	黒褐色 灰黄褐色	
第119図	Po179	3562	WH36	造成土①	弥生土器 甕	18.0	△6.3	口縁部 4/5	密	良好	灰黄褐～浅黄橙色 灰黄褐～灰白色	
第119図	Po180	3653	WH36	造成土①	弥生土器 甕	※18.1	△7.8	口縁部 1/2	密	良好	褐灰～にぶい橙色 明褐灰～明褐色	
第119図	Po181	3526	WH36	造成土①	弥生土器 甕	※15.2	△5.9	口縁部 1/5	やや 密	良好	黒褐色 にぶい褐色	
第119図	Po182	3464	WH36	造成土①	弥生土器 甕	※15.0	△7.0	口縁部 1/8	密	良好	灰黄褐色 にぶい黄褐色	
第119図	Po183	3433	WH36	造成土①	弥生土器 甕	※15.8	△7.8	口縁部 1/5	普通	良好	黒褐色～暗灰黄色 暗灰黄色	
第119図	Po184	3617	WH36	造成土①	弥生土器 甕	※29.4	△12.5	口縁、頸、胴部 3/8	普通	良好	灰黄褐色	外面一部煤付着
第119図	Po185	3552	WH36	造成土①	弥生土器 甕	15.2	△14.5	口縁部 3/4	普通	良好	炭化物付着により不明 にぶい褐色	外面全体炭化物 付着
第119図	Po186	3653	WH36	造成土①	弥生土器 甕?	17.6	△14.4	口縁部完形、胴部 1/8	密	良好	浅黄橙～にぶい黄橙色 にぶい橙～にぶい黄橙 色	外面黒斑有
第119図	Po187	2795	WI37	造成土①	弥生土器 鉢	※10.0	△4.0	口縁部 1/7	普通	良好	灰白色 灰白～にぶい黄褐色	外面赤彩有
第122図	Po188	4309	WH36	造成土②	弥生土器 甕	19.3	29.1	口縁部ほぼ完存、 胴部 3/4、底部完 存	普通	良好	褐灰～灰黄褐色	外面炭化物付着
第122図	Po189	3510	WH36	造成土②	弥生土器 甕	16.6	△13.5	口縁部 1/2、胴部 1/3	密	良好	灰黄褐色 にぶい黄橙～灰黄褐色	
第122図	Po190	3457	WH36	造成土②	弥生土器 甕	※16.2	△10.8	口縁部 1/8、頸部 1/4、胴部 1/4～ 1/25	普通	良好	褐灰色 にぶい黄褐色	
第122図	Po191	3510	WH36	造成土②	弥生土器 甕	※15.0	△6.2	口縁部 1/5	普通	良好	褐灰色 灰黄褐色	外面煤付着

第6-8表 土器観察表(8)

挿図 番号	遺物 番号	取上 番号	地区	遺構 層位	種別	法量 (cm)		残存部位 残存率	胎土	焼成	色調 上段：外面 下段：内面	備考
						口径	器高					
第122図	Po192	3457	WH36	造成土②	弥生土器 壺	※13.0	△7.1	口縁部 1/4	普通	良好	にぶい黄橙色	
第122図	Po193	3534	WI37	造成土②	弥生土器 鼓形器台	-	△7.7	約1/4、上下とも 端部無し	普通	良好	浅黄橙～淡橙色 浅黄橙～橙色	外面一部黒斑
第125図	Po194	3441	WH36	造成土③	弥生土器 蓋	-	△6.9	胴部 1/4、底部端 1/14	普通	良好	灰黄褐色	
第125図	Po195	3638	WH36	造成土③	弥生土器 甕	14.7	△8.6	口縁部完存	普通	良好	にぶい橙色	口縁外面一部黒斑
第125図	Po196	3500	WH36	造成土③	弥生土器 壺	※12.4	△6.6	口縁部 3/8、肩部 1/8	密	良好	にぶい赤褐～明褐灰色 にぶい橙～にぶい赤褐色	
第125図	Po197	3441	WH36	造成土③	弥生土器 無頸壺	※6.0	△4.2	口縁部 1/8、胴部 1/5	普通	良好	灰白色	
第128図	Po198	3643	WH36	造成土④	弥生土器 裝飾壺	-	△9.9	頸部 1/4、胴部 1/3、端部無し	普通	良好	にぶい橙～明黄褐色 にぶい橙～橙色	外内面煤付着
第128図	Po199	3449	WH36	造成土④	弥生土器 裝飾壺	-	△5.8	頸部 1/16、胴部 3/8	密	良好	にぶい褐～にぶい橙色 灰黄褐～黒褐色	
第128図	Po200	3464	WH36	造成土④	弥生土器 高杯	※25.1	△4.7	坏部 1/6 周	普通	良好	灰黄褐～黒褐色 灰黄褐色	
第130図	Po201	3660	WI36	造成土⑥	弥生土器 器台	-	△7.6	脚部 1/2	普通	良好	灰黄褐色	
第131図	Po202	3746	WI36	造成土	弥生土器 甕	※10.0	△9.6	頸～胴部 1/4	普通	良好	灰褐色	外面煤・炭化物 付着
第131図	Po203	1863	WH36	造成土	弥生土器 甕	※16.0	△22.6	口縁～底部 1/2	普通	良好	明褐灰色	外面 1/2 以下に 炭化物付着及び 黒斑
第131図	Po204	3551	WH36	造成土	弥生土器 広口壺	※11.2	13.3	口縁部 1/4、胴部 2/3	密	良好	明褐灰～橙色 明褐灰～灰褐色	
第131図	Po205	3582	WH36	造成土	弥生土器 直口壺	-	△6.1	頸部 1/7、胴部 1/6	普通	良好	灰白色	
第131図	Po206	3535	WH36	造成土	弥生土器 直口壺	4.2	9.6	口縁部 1/2、胴部 2/3、底部 2/3	普通	良好	にぶい黄橙色	胴部下部に一部 赤彩 外面黒斑？
第131図	Po207	3550	WH36	造成土	弥生土器 壺	-	△4.8	体部 1/4、脚底部 1/3	密	良好	明褐灰～灰白色 褐灰色	外面一部赤彩
第139図	Po208	3865	WH36	SD38-B	弥生土器 蓋	13.0	4.7	つまみ部 ほぼ完 存 体部 1/3	普通	良好	褐灰色	
第139図	Po209	3651	WH36	SD38-B	弥生土器 蓋	※5.2	3.1	体部 3/5 端部 1/3	普通	良好	灰黄褐色	外面一部赤彩残 る
第139図	Po210	3094	WI36	SD38-B	弥生土器 甕	※18.2	△8.4	口縁～頸部 1/5 肩部 1/4	普通	良好	明灰褐色 灰褐色	外面煤付着
第139図	Po211	2949	WH36	SD38-B	弥生土器 甕	16.0	△6.6	口縁～頸部 ほぼ 完存	普通	良好	褐灰～にぶい黄褐色 褐灰～灰白色	
第139図	Po212	3865	WH36	SD38-B	弥生土器 甕	※17.5	△10.4	口縁～頸部 1/4 肩部 1/8	普通	良好	灰黄褐色	外面煤付着
第139図	Po213	3042	WH36	SD38-B	弥生土器 甕	18.4	△18.3	口縁～頸部 ほぼ 完存 胴部 1/3	密	良好	明褐灰～灰褐色 明褐灰～黒褐色	外面煤付着
第139図	Po214	2978	WH36	SD38-B	弥生土器 甕	※16.2	△9.0	口縁～頸部 1/3 肩部 1/4	密	良好	明褐灰～灰黄褐色	外面一部煤付着
第139図	Po215	2817	WH36	SD38-B	弥生土器 甕	15.0	△11.3	口縁～頸部 ほぼ 完存 胴部 1/4	普通	良好	灰白色	内外面煤付着
第139図	Po216	2817	WH36	SD38-B	弥生土器 甕	※16.4	△11.0	口縁～頸部 1/2 胴部 1/4	密	良好	灰白～褐灰色 にぶい黄橙～灰黄褐色	外面煤付着
第139図	Po217	3081	WI36	SD38-B	弥生土器 甕	-	△5.0	底部 完存	密	良好	灰白～灰褐色 灰白～明褐灰色	内面赤彩

第6-9表 土器観察表(9)

挿図 番号	遺物 番号	取上 番号	地区	遺構 層位	種別	法量 (cm)		残存部位 残存率	胎土	焼成	色調 上段：外面 下段：内面	備考
						口径	器高					
第139図	Po218	2969	WH36	SD38-B	弥生土器 壺	14.4	△15.7	口縁～胴部 完存	普通	良好	にぶい黄橙色	
第139図	Po219	3263	WI36	SD38-B	弥生土器 壺	※9.8	△7.3	口縁～頸部 1/8 肩部 1/4	密	良好	にぶい褐～にぶい橙色 にぶい橙～褐灰色	内面黒斑
第139図	Po220	3352	WH36	SD38-B	弥生土器 壺	※12.6	△12.5	口縁～頸部 1/2 胴部 1/4	普通	良好	灰黄褐色	外面胴部炭化物 付着
第139図	Po221	3352	WH36	SD38-B	弥生土器 鼓形器台	-	△8.1	脚部 1/6	普通	良好	灰白～にぶい黄橙色	
第160図	Po222	4084	WI37	SD38-D	弥生土器 甕	※34.6	△9.5	口縁部 1/4	普通	良好	黒褐色 灰褐～褐灰色	外面煤付着
第160図	Po223	3960	WI36	SD38-D	弥生土器 蓋	-	5.5	ツマミ部完存、体 部 1/2	普通	良好	灰黄褐色 黒褐色	外内面一部黒斑
第160図	Po224	3717	WI36	SD38-D	弥生土器 低脚坏	-	△2.9	脚部 2/3	普通	良好	にぶい褐色 にぶい橙色	
第160図	Po225	4094	WI37	SD38-D	弥生土器 長頸壺	※11.2	△7.5	頸部 1/5 周弱	普通	良好	黄灰色	
第164図	Po226	3757	WH36	SD38-E	弥生土器 甕	※18.0	△5.6	口縁頸部 3/8	普通	良好	灰白～にぶい黄橙色	
第164図	Po227	3757	WH36	SD38-E	弥生土器 甕	17.8	△8.1	口縁部 3/5	普通	良好	にぶい褐色 にぶい黄褐色	外面煤付着
第164図	Po228	3757	WH36	SD38-E	弥生土器 鉢	※6.9	△5.2	口縁部 1/8	普通	良好	褐灰色	外面煤付着
第169図	Po229	4308	WH36	SD38-Ca	弥生土器 甕	※16.4	△11.2	口縁部 1/2	密	良好	にぶい橙色 灰白色	
第169図	Po230	4310	WH36	SD38-Ca	弥生土器 甕	※19.3	△8.4	口縁部 1/4	普通	良好	明褐灰～橙色 褐灰色	
第169図	Po231	4422	WH36	SD38-Ca	弥生土器 甕	※18.8	△8.1	口縁～肩部 1/5	普通	良好	黒色 灰黄褐色	外面炭化物付着
第169図	Po232	4301	WH36	SD38-Ca	弥生土器 甕	※16.7	△21.0	口縁～胴部 3/4	普通	良好	にぶい黄橙色 灰黄褐色	外面炭化物付着
第169図	Po233	4124	WI36	SD38-Ca	弥生土器 甕	※15.1	△12.1	口縁～頸部 1/7、 胴部 1/4	普通	良好	にぶい黄橙色	外面煤付着 内面炭化物付着
第169図	Po234	4300	WH36	SD38-Ca	弥生土器 甕	※26.2	△17.7	口縁～胴部 1/2	密	良好	灰白～黒色 明褐灰～黒褐色	
第169図	Po235	4552	WH36	SD38-Ca	弥生土器 甕	※19.0	△6.7	口縁部 1/8	普通	良好	黒褐色 にぶい褐色	外面全体煤付着
第169図	Po236	3955	WI36	SD38-Cb	弥生土器 甕	※15.2	△9.3	口縁～肩部 1/2	密	良好	灰黄褐色 灰褐～灰黄褐色	
第169図	Po237	4422	WH36	SD38-Ca	弥生土器 甕	※15.0	△6.6	口縁～肩部 1/4	普通	良好	褐灰色 灰黄褐色	
第169図	Po238	4552	WH36	SD38-Ca	弥生土器 甕	※14.9	△5.4	口縁部 1/8	普通	良好	黒褐色 褐灰色	外面煤付着
第169図	Po239	4552	WH36	SD38-Ca	弥生土器 甕	※18.8	△4.7	口縁部 1/8	普通	良好	にぶい褐色 灰白色	外面煤付着
第169図	Po240	4312	WH36	SD38-Ca	弥生土器 甕	17.8	△20.2	口縁 4/5、肩部 2/3	普通	良好	灰黄褐～黒褐色	
第169図	Po241	4005	WH36	SD38-Ca	弥生土器 甕	※14.6	△10.5	口縁部 1/8 頸部～胴部 1/4	密	良好	灰黄褐色 黒褐色	
第169図	Po242	4053	WH37	SD38-Ca	弥生土器 甕	14.2	△13.4	口縁～頸部 ほぼ 完存 胴部 2/5	普通	良好	灰褐色	
第170図	Po243	3770	WH36	SD38-Ca	弥生土器 台付直口壺	7.6	15.8	口縁 3/4、底部 2/3	普通	良好	灰黄～黄灰色	外面体部、内面 口縁部 赤彩の痕跡
第170図	Po244	3692	WI36	SD38-Cb	弥生土器 台付裝飾壺	-	△6.8	肩～体部 1/7	密	良好	明褐灰～にぶい褐色 褐灰～にぶい橙色	
第170図	Po245	4337	WH36	SD38-Ca	弥生土器 台付壺	10.0	17.2	一部を欠く 9/10	普通	良好	褐灰～にぶい黄橙色	

第6-10表 土器観察表(10)

挿図 番号	遺物 番号	取上 番号	地区	遺構 層位	種別	法量 (cm)		残存部位 残存率	胎土	焼成	色調 上段：外面 下段：内面	備考
						口径	器高					
第170図	Po246	4311	WH36	SD38-Ca	弥生土器 裝飾壺	-	△ 4.5	胴部のみ 1/8 以下	普通	良好	褐灰色	
第170図	Po247	4552	WH36	SD38-Ca	弥生土器 器台	※ 17.7	△ 4.0	口縁部 1/6	普通	良好	にぶい橙色	外内面煤付着
第170図	Po248	4351	WH36	SD38-Ca	弥生土器 鼓形器台	19.8	16.4	全体の 7/10	密	良好	明褐灰色	
第170図	Po249	4360	WH36	SD38-Ca	弥生土器 器台?	-	△ 5.5	口縁部 1/8 以下	普通	良好	明赤褐色	
第170図	Po250	3550	WH36	SD38-Ca	弥生土器 脚台付坏?	-	△ 4.4	坏受部わずか、脚 底部完存	密	良好	橙～にぶい黄橙色 にぶい橙～灰褐色	外面黒斑有
第170図	Po251	4031	WI36	SD38-Cb	弥生土器 長頸壺	※ 21.8	△ 10.6	口縁～頸部 1/2	密	良好	明赤褐～にぶい橙色	
第170図	Po252	4315	WH36	SD38-Ca	弥生土器 脚台付無頸 壺?	※ 6.1	△ 4.3	口縁～体部 2/5	普通	良好	灰褐色 灰黄褐色	
第170図	Po253	4027	WH36	SD38-Ca	弥生土器 壺	-	△ 6.4	頸～底部 1/2	密	良好	灰白～褐灰色 褐灰～黒褐色	
第170図	Po254	3955	WI36	SD38-Cb	弥生土器 高坏	-	△ 8.5	脚柱部 完存	密	良好	明褐灰～にぶい橙色 灰白色	
第170図	Po255	3963	WI36	SD38-Cb	弥生土器 水差形土器	※ 8.7	△ 13.2	口縁部 1/4	普通	良好	黒褐色	
第184図	Po256	4035	WI36	87 土抗	弥生土器 広口壺	※ 9.0	△ 7.4	口縁・頸部 1/8、 胴部 1/5	普通	良好	灰黄褐色	内外面一部黒斑
第184図	Po257	3963	WI36	85 土抗	弥生土器 甕	-	△ 2.6	小片	普通	良好	黒色 褐灰色	
第187図	Po258	4607	WI36	88 柱穴	弥生土器 甕	※ 16.4	△ 7.8	口縁下部、頸部、 胴部 1/6	普通	良好	灰白色	
第187図	Po259	4606	WI36	88 柱穴	弥生土器 甕	※ 13.4	△ 8.7	口縁端部 1/6	普通	良好	黒色 黒～明褐灰色	外面煤・炭化物 付着
第190図	Po260	4353	WH36	SD38-C	弥生土器 蓋	※ 13.4	6.3	つまみ部 完存 体部 1/3	普通	良好	褐色 灰褐色	外面赤彩
第190図	Po261	4325	WH36	SD38-C	弥生土器 壺	16.2	△ 9.0	口縁～頸部 4/5、 肩部 1/4	普通	良好	にぶい黄橙～褐灰色 にぶい黄橙色	
第190図	Po262	4353	WH36	SD38-C	弥生土器 壺	※ 14.4	△ 8.9	口縁部 1/8 頸部 1/4	普通	良好	にぶい赤褐色	
第190図	Po263	4339	WH36	SD38-C	弥生土器 壺	※ 14.8	△ 11.2	口縁部 1/4 胴部 7/9	普通	良好	にぶい黄橙～橙色 にぶい黄橙	
第190図	Po264	4207	WH36	SD38-C	弥生土器 壺	※ 17.6	△ 7.6	口縁～頸部 1/4	密	良好	褐～灰黄褐色 褐～暗褐色	内外面一部黒斑
第190図	Po265	4326	WH36	SD38-C	弥生土器 壺	※ 10.6	△ 11.9	口縁～胴部 1/4	普通	良好	灰黄褐色	外面煤付着
第190図	Po266	4326	WH36	SD38-C	弥生土器 台付裝飾壺	-	△ 4.0	肩部 1/4	密	良好	にぶい橙～灰褐色 黄灰色	外面一部赤彩残 る
第190図	Po267	4353	WH36	SD38-C	弥生土器 甕	13.3	△ 5.5	口縁～頸部 完存	普通	良好	灰褐色	外面煤・炭化物 / 付着 内面煤付着
第190図	Po268	4326	WH36	SD38-C	弥生土器 甕	14.8	△ 5.3	口縁～頸部 3/4	普通	良好	明赤褐色	
第190図	Po269	4142	WH36	SD38-C	弥生土器 甕	※ 14.2	△ 13.4	口縁～胴部 1/3	密	良好	黒褐色 灰黄褐色	
第190図	Po270	4371	WH36	SD38-C	弥生土器 甕	※ 16.0	△ 10.2	口縁～肩部 1/3	普通	良好	赤黒色	外面煤・炭化物 付着
第190図	Po271	4326	WH36	SD39-C	弥生土器 甕	18.7	△ 7.1	口縁～頸部 完存	密	良好	明褐灰～褐色 褐灰～にぶい赤褐色	
第190図	Po272	4196	WH36	SD38-C	弥生土器 甕	※ 17.8	△ 25.1	口縁～肩部 1/2 胴部 1/4	密	良好	灰黄褐～褐灰色 明褐灰～灰褐色	外面煤付着 内面一部炭化物 付着

第6-11表 土器観察表(11)

挿図 番号	遺物 番号	取上 番号	地区	遺構 層位	種別	法量 (cm)		残存部位 残存率	胎土	焼成	色調 上段：外面 下段：内面	備考
						口径	器高					
第190図	Po273	4192	WH36	SD38-C	弥生土器 甕	※ 18.7	△ 9.6	口縁～肩部 1/4	普通	良好	灰褐～にぶい黄褐色 灰褐色	
第190図	Po274	4339	WH36	SD38-C	弥生土器 甕	※ 20.4	△ 10.6	口縁～頸部 1/3 肩部 1/4	やや粗	良好	灰黄褐～黒色	
第190図	Po275	4325	WH36	SD38-C	弥生土器 甕	21.5	△ 8.6	口縁～肩部 7/8	普通	良好	灰黄褐色	外面煤・炭化物 付着 内面煤付着
第190図	Po276	4375	WH36	SD38-C	弥生土器 甕	※ 19.2	△ 7.3	口縁～頸部 1/6	普通	良好	にぶい黄褐色	外面煤・炭化物 付着 内面煤付着
第190図	Po277	4326	WH36	SD38-C	弥生土器 甕	※ 17.2	△ 10.5	口縁～頸部 完存 肩部 1/5	普通	良好	黒褐～黒色	
第190図	Po278	1139	WH36	SD38-C	弥生土器 甕	16.5	△ 5.8	口縁～頸部 7/8	普通	良好	にぶい橙色	
第190図	Po279	4375	WH36	SD38-C	弥生土器 鉢	※ 8.0	△ 5.2	口縁～胴部 1/4	普通	良好	灰黄褐色	
第190図	Po280	4353	WH36	SD38-C	弥生土器 無頸壺	※ 6.6	5.8	口縁部 1/3 胴～底部 1/2	密	良好	灰黄褐色	
第190図	Po281	4375	WH36	SD38-C	弥生土器 器台	-	△ 6.8	脚柱部 完存	普通	良好	灰褐色	
第198図	Po282	1721	WH35	VIII層	弥生土器 甕	※ 18.4	△ 6.1	(底部は別図)	普通	良好	灰褐～橙色 にぶい橙～橙色	
第198図	Po283	1721	WH35	VIII層	弥生土器 甕	-	△ 11.5	(口縁部は別図)	普通	良好	褐灰色 灰褐色	
第198図	Po284	4191	WH36	SD38-F	弥生土器 蓋	-	3.9	ツマミ部完存、端 部 1/8	普通	良好	灰白色	内面煤付着
第200図	Po285	1857	WH36	SD38	弥生土器 甕	※ 17.2	△ 7.5	口縁～胴部 1/4	密	良好	褐灰～灰褐色 にぶい褐～黒褐色	
第200図	Po286	2521	WH36	SD38	弥生土器 甕	※ 21.2	△ 9.3	頸～口縁下部 1/5	普通	良好	にぶい黄褐色	
第200図	Po287	2801	WI36	SD38	弥生土器 甕	※ 16.0	△ 9.8	口縁～胴部 1/4	密	良好	明褐灰～灰黄褐色 浅黄橙～灰黄褐色	
第200図	Po288	2658	WH36	SD38	弥生土器 甕	※ 17.0	△ 10.8	口縁部 1/3、胴部 1/4	密	良好	にぶい橙色 灰褐～にぶい褐色	
第201図	Po289	2576	WH36	SD38	弥生土器 甕	※ 17.2	△ 14.7	口縁部 1/6、胴部 1/4	密	良好	にぶい橙～褐灰色 灰褐～黒褐色	
第201図	Po290	2528	WH36	SD38	弥生土器 甕	※ 18.5	△ 12.2	口縁、頸、胴部 1/6	普通	良好	褐灰色	外面煤付着
第201図	Po291	2485	WH36	SD38	弥生土器 甕	※ 18.8	△ 11.3	頸部 1/8、胴部 1/6	普通	良好	にぶい褐色 褐灰色	外面煤付着
第201図	Po292	2528	WH36	SD38	弥生土器 甕	※ 17.2	△ 13.5	口縁、端部 3/4	普通	良好	灰褐色	外面全体煤付着
第201図	Po293	1073	WH36	SD38	弥生土器 甕	※ 15.4	△ 11.7	口縁部 3/4、胴部 1/8	密	良好	明褐灰～灰白色 褐灰～にぶい褐色	外面全体煤・こ げ付着
第201図	Po294	2451	WH36	SD38	弥生土器 甕	※ 16.8	△ 6.8	口縁～胴部 1/4	普通	良好	にぶい黄褐色 浅黄褐色	
第201図	Po295	1857	WH36	SD38	弥生土器 甕	※ 13.2	△ 11.8	口縁部 1/2、胴部 1/4	密	良好	明褐灰～褐灰色 浅黄橙～灰黄褐色	外面全体こげ付 着
第201図	Po296	2485	WH36	SD38	弥生土器 甕	※ 16.6	△ 8.6	口縁～胴部 1/4	普通	良好	橙～赤色 橙～褐灰色	
第201図	Po297	1139	WH36	SD38	弥生土器 甕	※ 19.2	△ 7.8	口縁～頸部 1/3	普通	良好	にぶい橙色 にぶい橙～灰褐色	外面煤付着
第201図	Po298	2451	WH36	SD38	弥生土器 甕	※ 13.4	△ 7.5	口縁部 1/4、胴部 1/8	密	良好	黒褐色 褐灰色	外面全体煤・こ げ付着 内面全体黒斑有
第201図	Po299	2521	WH36	SD38	弥生土器 甕	※ 20.2	△ 8.5	口縁～胴部 1/4	密	良好	にぶい橙～褐灰色 明褐灰～にぶい橙色	外面全体煤付着

第6-12表 土器観察表(12)

挿図 番号	遺物 番号	取上 番号	地区	遺構 層位	種別	法量 (cm)		残存部位 残存率	胎土	焼成	色調 上段：外面 下段：内面	備考
						口径	器高					
第201図	Po300	2562	WH36	SD38	弥生土器 甕	※15.4	△6.0	口縁部1/3、肩部 1/2	密	良好	明褐色～褐色	
第202図	Po301	2552	WI36	SD38	弥生土器 甕	※15.2	△8.0	口縁端部1/8、胴 部1/4	密	良好	灰黄褐色～褐色 にぶい黄褐色～灰白色	
第202図	Po302	2646	WH36	SD38	弥生土器 甕	※17.8	△11.2	口縁部2/5	密	良好	にぶい橙色	一部黒斑有
第202図	Po303	2530	WI36	SD38	弥生土器 甕	16.7	△18.9	口縁部5/8、頸部 完存、胴部1/2	普通	良好	にぶい黄褐色	内外面煤付着
第203図	Po304	2801	WI36	SD38	土師器 甕	14.1	△8.1	口縁部2/3	普通	良好	灰黄褐色	外面口縁・胴部 煤・炭化物付着
第203図	Po305	2451	WH36	SD38	土師器 甕	※17.2	△10.6	口縁部3/4、胴部 1/3	密	良好	明褐色～にぶい褐色 明褐色～にぶい黄褐色	外面煤付着
第203図	Po306	2604	WH36	SD38	土師器 甕	※19.4	△12.3	口縁部1/2、胴部 1/3	密	良好	橙～灰褐色 橙～灰黄褐色	
第203図	Po307	2508	WI37	SD38	土師器 甕	※17.8	△18.8	口縁部3/8、胴部 1/4	密	良好	灰白～にぶい褐色 にぶい黄褐色～暗褐色	外面全体煤・こ げ付着
第203図	Po308	2451	WH36	SD38	土師器 甕	※17.8	△12.8	口縁部1/2	普通	良好	にぶい黄褐色	外面胴部煤付着
第204図	Po309	2485	WH36	SD38	弥生土器 壺	※18.1	△8.3	口縁～頸部1/4	普通	良好	にぶい黄褐色 黒褐色	外面黒斑有
第204図	Po310	1857	WH36	SD38	弥生土器 壺	※17.2	△6.1	口縁～頸部1/4	普通	良好	褐色	
第204図	Po311	2562	WH36	SD38	弥生土器 壺	※15.3	△7.8	口縁部5/8、頸部 3/4、胴部1/8	普通	良好	橙色 黄褐色	
第204図	Po312	2510	WH36	SD38	弥生土器 小型壺	11.3	11.3	口縁端部1/2、他 はほぼ完存	密	良好	赤～にぶい橙色 橙～にぶい黄褐色	
第204図	Po313	2701	WI36	SD38	弥生土器 壺	17.6	△7.9	口縁端部欠くが頸 にかけて一周残存	普通	良好	明褐色	口縁部一部黒斑
第204図	Po314	2660	WI36	SD38	弥生土器 直口壺	※10.5	△6.2	約1/4	普通	良好	褐色	
第204図	Po315	2658	WH36	SD38	弥生土器 壺	※12.0	△4.9	口縁部1/4一周	密	良好	にぶい橙色	内外面赤彩有
第204図	Po316	2658	WH36	SD38	弥生土器 壺?	※12.4	△3.6	口縁・頸部1/4	普通	良好	灰白色	外面煤付着
第204図	Po317	2485	WH36	SD38	弥生土器 壺	※10.9	△6.5	口縁部1/4	普通	良好	灰白色	外面黒斑有
第204図	Po318	2492	WH36	SD38	弥生土器 台付裝飾壺	-	△6.0	約1/4	普通	良好	にぶい橙～灰白色 褐色	外面赤彩溝に少 し残存 内面全体煤付着
第204図	Po319	2550	WH36	SD38	弥生土器 壺?	-	△3.4	胴底部1/8、底端 部完存	密	良好	橙～明褐色 灰白～褐色	
第204図	Po320	2528	WH36	SD38	弥生土器 蓋	-	△4.6	1/4	密	良好	灰褐色～にぶい褐色 褐～褐色	
第204図	Po321	2801	WI36	SD38	弥生土器 高坏	※26.2	△6.4	端部1/6	普通	良好	赤褐色 (胎土…褐色)	内外面全面赤彩
第204図	Po322	2745	WI36	SD38	弥生土器 高坏	17.8	△8.2	坏部ほぼ全存	普通	良好	浅黄褐色 明褐色	外面口縁の一部 黒斑有 赤彩ほとんど消 えている
第204図	Po323	2562	WH36	SD38	弥生土器 高坏	※18.0	△4.5	口縁～胴部1/8	密	良好	にぶい黄褐色～黒褐色 灰黄褐色～黒褐色	外面一部黒斑有
第204図	Po324	1857	WI36	SD38	弥生土器 鉢	※7.8	6.1	口縁胴部1/4、底 ほぼ完存	普通	良好	灰褐色	外面全面煤付着 内面一部煤付着
第204図	Po325	2451	WH36	SD38	弥生土器 低脚坏	13.5	△5.4	坏部1/2	普通	良好	にぶい黄褐色	
第205図	Po326	2490	WH36	SD38	弥生土器 器台	※18cm 以上	△15.5	口縁部3/8、脚底 部3/4	密	良好	赤褐色～にぶい褐色 にぶい褐色	外面脚底部溝赤 彩有

第6-13表 土器観察表 (13)

挿図 番号	遺物 番号	取上 番号	地区	遺構 層位	種別	法量 (cm)		残存部位 残存率	胎土	焼成	色調 上段：外面 下段：内面	備考
						口径	器高					
第205図	Po327	1860	WH36	SD38	弥生土器 器台	-	△ 12.0	脚端部 1/6、筒部 完存	普通	良好	灰褐色 黒褐色	外面赤彩、外面 脚部煤・炭化物 付着
第205図	Po328	2530	WI36	SD38	弥生土器 鼓形器台	※ 20.8	14.1	口縁部 1/3、脚底 部 9/10	密	良好	灰白～明褐色 明褐色～にぶい褐色	
第205図	Po329	2451	WH36	SD38	土師器 鼓形器台	※ 22.0	△ 12.3	口縁部 1/4、脚底 部 1/8	密	良好	明褐色～褐色 灰白～褐色	
第205図	Po330	2597	WH36	SD38	土師器 鼓形器台	25.2	△ 12.7	受部 2/3	普通	良好	にぶい黄褐色	外面一部黒斑有
第212図	Po331	4389	WH36	調査区内	弥生土器 甕	※ 27.6	△ 11.7	口縁・頸部 1/8、 胴部 1/6	普通	良好	明褐色	
第213図	Po332	179	WH37	調査区内	弥生土器 甕	※ 13.4	△ 9.9	口縁部 1/8、胴部 1/4	密	良好	浅黄橙～褐色 浅黄橙～灰白色	
第213図	Po333	2284	WH37	調査区内	弥生土器 甕	※ 15.0	△ 10.4	1/3	普通	良好	明褐色	内外面赤彩有
第213図	Po334	433	WH35	調査区内	弥生土器 甕	※ 15.0	△ 10.0	口縁～胴部 1/6 端部わずか	普通	良好	黒褐色 褐色～にぶい橙～黒褐 色	内面下部炭化物 付着
第213図	Po335	3743	WH36	調査区内	弥生土器 甕	※ 15.6	△ 11.1	口縁部 1/2、胴部 1/3	密	良好	明褐色～黒褐色 褐色～黒褐色	外面炭化物付着
第213図	Po336	2697	WH37	調査区内	弥生土器 甕	※ 19.8	△ 12.0	口縁部 1/2、胴部 1/4	密	良好	にぶい黄橙～灰黄褐色 明褐色～にぶい黄褐色	
第213図	Po337	2819	WH36	調査区内	弥生土器 甕	17.3	△ 12.9	口縁部完形	普通	良好	浅黄褐色 にぶい黄褐色	
第213図	Po338	1142	WI37	調査区内	弥生土器 甕	18.8	19.3	口縁～胴部 1/6 端部わずか	普通	良好	灰褐～黒色	外面煤付着
第213図	Po339	187	WH36	調査区内	弥生土器 甕	-	△ 16.0	胴部 1/3 端部無し	普通	良好	にぶい褐～黒色 褐色	外面煤付着
第213図	Po340	4210	WH36	調査区内	弥生土器 壺	※ 8.2	△ 6.9	口縁部 1/4、胴部 1/4	密	良好	明赤褐～灰黄褐色 橙～褐色	
第213図	Po341	433	WH35	調査区内	弥生土器 蓋	-	7.0	4/5	密	良好	灰黄褐色	
第213図	Po342	185	WH35	調査区内	弥生土器 鉢	※ 15.4	△ 5.7	口縁部 1/8	密	良好	黒褐～黒色 赤褐～黒褐色	
第213図	Po343	4140	WH36	調査区内	弥生土器 鉢	※ 10.2	△ 8.0	口縁～胴部 1/3	普通	普通	にぶい黄褐色 褐色	
第213図	Po344	4205	WH36	調査区内	弥生土器 器台	※ 18.0	16.1	下部口縁部 1/5、 上部口縁部 1/8、 筒部完存	普通	良好	明褐～にぶい褐色 灰褐～にぶい褐色	
第213図	Po345	2284	WH37	調査区内	弥生土器 器台	-	△ 10.5	口縁部 1/2、端部 なし、脚柱部完存	密	良好	にぶい橙色 灰白～橙色	内面一部黒斑有
第213図	Po346	3735	WH36	調査区内	弥生土器 器台	-	△ 12.0	脚柱部完存、脚部 3/4、端部無し	密	良好	赤色 明褐色	外面全体赤彩
第213図	Po347	3958	WH36	調査区内	弥生土器 鼓形器台	-	△ 11.0	脚台部 1/2	密	良好	にぶい黄橙～褐色	
第214図	Po348	961	WH36	調査区内	須恵器 甕	※ 20.8	△ 5.8	口縁部 1/4	密	良好	褐色	
第214図	Po349	27	WI36	調査区内	土師器 竈	-	△ 17.6	底部？	普通	良好	にぶい橙色 明褐色	内面一部煤付着
第215図	Po350	水洗 選別	WH36	調査区内	ミニチュア 土器	0.9	1.1	完存	密	良好	灰白色	

第7表 土製品観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	地区	遺構・層位	種別	法量 (cm)			特徴	胎土	焼成	色調	重量 (g)
						高さ	最大径	孔径					
第16図	CP 1	99	WH35	IV-2層	輪羽口	3.5	3.7	-		普通	良好	にぶい橙	29.1
第16図	CP 2	74	WH36	IV層	土錘	3.1	0.8	0.3	欠損有	普通	良好	褐灰色	1.9
第16図	CP 3	42	WH36	IV層	土錘	3.8	1.2	0.3		密	良好	灰黄褐色	3.0
第33図	CP 4	808	WH36	V-3層	土錘	△3.3	1.5	0.3		密	良好	にぶい黄橙	5.5
第33図	CP 5	209	WH35	V-4層	土錘	△2.7	1.1	-	孔無し	密	良好	にぶい黄橙	3.0
第44図	CP 6	454	WH35・36	VI層	不明	0.9	0.9	-		密	良好	にぶい黄橙	0.6
第56図	CP 7	1801	WH36	9溝	粘土質 溶解物	最大長 52	最大幅 54.5	-					35.6
第227図	CP 8	4142	WH36	調査区	土玉	3.1	3.1	0.6		密	良好	褐灰色	18.9
第227図	CP 9	2546	WI35	調査区	土玉	2.8	2.9	0.6	衝撃痕有	密	良好	浅黄橙色	16.8
第227図	CP 10	4504	WH36	調査区	土玉	3.7	3.7	0.7		密	良好	黄灰～黒褐色	43.8
第227図	CP 11	4210	WH36	調査区	土玉	2.7	2.8	0.6		密	良好	灰白～ にぶい黄橙色	18.0
第227図	CP 12	4504	WH36	調査区	土玉	2.5	3	0.8		密	良好	褐灰～ 明黄褐色	12.5
第228図	CP 13	1177	WI36	V-4層	土玉	△2.2	2.5	0.8	剥離有	普通	良好	にぶい黄褐色	10.8
第228図	CP 14	1682	WI36	7盛土	土玉	1.9	2.1	0.8		密	良好	黄灰～灰黄色	2.7
第228図	CP 15	1796	WH36	9溝	土玉	2.9	2.8	0.6		密	良好	褐灰～黒色	23.8
第228図	CP 16	2424	WH36	VII層	土玉	△2.5	2.7	0.6	剥離有	普通	良好	灰黄～ にぶい褐色	18.6
第228図	CP 17	2415	WH36	VII層	土玉	2.3	2.2	0.6		密	良好	浅黄橙色、 灰白～褐灰色	9.1
第228図	CP 18	1745	WH35	VII層	土玉	1.9	1.9	-	孔無し	普通	やや不良	褐灰～黒褐色	7.3
第229図	CP 19	2027	WH36	平地建物2	土玉	2.3	2.6	0.8		普通	良好	灰黄褐色	15.1
第229図	CP 20	2027	WH36	平地建物2	土玉	3.1	3.2	0.7		密	良好	明褐灰色 にぶい橙色	26.9
第229図	CP 21	2120	WH36	平地建物2	土玉	3.1	3	0.8		密	良好	褐灰～灰褐色	25.0
第229図	CP 22	2268	WH36	平地建物3	土玉	3.0	2.5	0.5		密	良好	灰白～黄灰色	17.0
第229図	CP 23	2262	WI36	平地建物3	土玉	2.5	2.3	0.6		密	良好	灰白色	11.5
第229図	CP 24	2160	WH35	平地建物1	土玉	2.8	2.7	0.7	黒斑有	密	良好	にぶい橙～ 橙色	15.8
第229図	CP 25	2221	WH36	11炉	土玉	2.6	2.7	0.7		密	良好	褐灰～ 明黄褐色	17.5
第229図	CP 26	2301	WH36	11炉	土玉	2.4	2.4	0.5		密	良好	明褐灰色 黒色	11.7
第229図	CP 27	2014	WH36	22溝	土玉	2.1	2.5	0.7		密	良好	明黄褐～ にぶい黄褐色	12.1
第229図	CP 28	1898	WH36	平地建物2	土玉	2.5	2.7	0.7	欠損有	密	良好	にぶい褐	6.7
第229図	CP 29	2021	WH36	14溝	土玉	△2.4	2.4	0.6		普通	良好	灰黄褐色	12.6
第229図	CP 30	1969	WH36	14溝	土玉	△2.3	2.7	0.9		普通	良好	灰黄褐色	14.8
第229図	CP 31	2404	WH36	平地建物3	土玉	2.8	2.7	0.7		密	良好	褐灰色	14.7
第229図	CP 32	2579	WH36	77柱穴	土玉	2.7	2.8	0.6		密	良好	灰白～ 黄灰色	16.4
第229図	CP 33	2577	WH36	76柱穴	土玉	2.2	2.2	-	孔無し	密	良好	にぶい褐	9.2
第229図	CP 34	936	WH36	SD38-A	土玉	2.7	2.7	0.8	衝突痕有	密	良好	褐灰色	18.6
第229図	CP 35	961	WH36	SD38-A	土玉	3.2	3.0	0.7	欠損有	密	良好	灰白色	15.5
第230図	CP 36	1132	WH36	SD38	土玉	3.0	2.9	0.6		密	良好	灰白～黒褐色 にぶい黄橙	21.2
第230図	CP 37	4007	WI36	SD38	土玉	△2.4	3.0	0.8		普通	良好	褐灰色	15.7
第230図	CP 38	3530	WI37	SD38	土玉	2.3	2.4	0.7	剥離有	普通	良好	灰黄褐色	11.1
第230図	CP 39	4103	WH36	SD38	土玉	2.7	2.7	0.9		密	良好	褐灰色	16.3
第230図	CP 40	3560	WI37	SD38	土玉	△2.8	3.2	1.1	剥離有	普通	良好	灰褐色 黒褐色	23.0
第230図	CP 41	4103	WH36	SD38	土玉	2.1	2.1	0.5		密	良好	灰黄褐～ 黄褐色	7.7

第8表 石器・石製品観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	地区	遺構・層位	器種	法量 (cm・g)				石材	備考
						長	幅	厚	重量		
第32図	S 1	114	WH36	V層	砥石	6.0	4.4	1.0	29.2	紅簾片岩	
第32図	S 2	168	WH35	V層	石庖丁	5.1	4.1	0.7	13.4		
第47図	S 3	1584	WI36	VI-2層	不明	4.9	1.9	1.5	16.4		
第47図	S 4	1284	WH36	VI-2層	不明	3.6	1.9	2.3	14.8		
第47図	S 5	1251	WH36	VI-2層	有孔石製円盤	2.1	2.3	0.4	2.1	滑石	
第47図	S 6	1760	WI36	VI-2層	有孔石製円盤	△2.9	△3.7	0.6	8.3	滑石	
第65図	S 7	2064	WI36	平地建物3	不明	△4.6	△2.2	△2.2	29.1		
第74図	S 8	1925	WH36	15炉	不明	6.0	2.1	1.9	33.5		
第96図	S 9	865	WH36	SD38-A	砥石	11.7	6.0	5.6	439.3		
第96図	S 10	2309	-	SD38-A	石錘	8.7	3.3	2.8	101.0		
第104図	S 11	1884	WH36	VII層	不明	4.2	1.1	0.8	6.7		
第104図	S 12	1775	WH36	VII層	不明	3.4	2.5	1.3	12.3		
第104図	S 13	2424	WH36	VII層	不明	2.4	1.6	1.0	5.2	砂岩	
第126図	S 14	3441	WH36	造成土③	砥石	4.0	2.3	1.1	14.3	砂岩?	
第194図	S 15	4196	WH36	SD38-C	凹石	10.5	7.0	6.1	371.6		
第209図	S 16	-	-	SD38	不明	2.1	1.0	0.6	1.8		
第209図	S 17	2545	WH36	SD38	石斧	7.7	5.1	1.8	140.8		
第209図	S 18	1861	WI36	SD38	砥石	5.5	4.1	2.8	49.5	緑色凝灰岩?	
第209図	S 19	2521	WH36	SD38	砥石	6.5	2.4	0.9	14.7	凝灰岩	
第216図	S 20	9	WH37	調査区内	敲石	12.4	10.6	5.0	1046.6		
第216図	S 21	1737	WI36	調査区内	台石	21.5	10.0	3.9	1436.4		付着物あり
第217図	S 22	382	WH35	調査区内	石錘	9.3	4.4	3.7	169.0		
第217図	S 23	144	WH36	調査区内	玉素材	1.2	2.7	1.2	4.0	碧玉	
第218図	S 24	1868	WH36	調査区内	凹石	3.9	4.7	2.1	7.6	軽石	
第218図	S 25	1149	WI36	調査区内	不明	4.9	1.4	1.2	12.2		

第9表 石製玉類観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	地区	遺構・層位	器種	法量 (mm・g)				石材	備考
						長	幅	厚	重量		
第36図	J 1	478	WH36	V-1層	白玉	4.2	4.0	2.5	0.07	滑石	
第45図	J 2	339	WH36	VI層	勾玉	20.1	12.5	5.5	1.6	蛇紋岩	
第79図	J 3	2233	WH36	43溝	管玉	15.5	5.0	4.9	0.65	碧玉	
第97図	J 4	2022	WH36	SD38-A	管玉	11.3	2.6	2.5	0.10	碧玉	
第97図	J 5	水洗選別	WH36	SD38-A	白玉	7.0	7.4	3.9	0.31	滑石	
第97図	J 6	水洗選別	WH36	SD38-A	白玉	6.0	6.0	3.1	0.20	滑石	
第106図	J 7	水洗選別	WH36	VII層	管玉	2.3	2.3	8.3	0.08	碧玉	
第106図	J 8	水洗選別	WH36	VII層	管玉	3.3	3.4	3.4	0.05	緑色凝灰岩	
第182図	J 9	水洗選別	WI36	SD38-Cb	管玉	3.1	2.9	3.3	0.05	緑色凝灰岩	
第182図	J 10	水洗選別	-	SD38-Cb	勾玉	10.2	7.0	3.1	0.37	蛇紋岩	
第225図	J 11	水洗選別	WH36	調査区内	管玉	13.5	3.5	3.8	0.26	碧玉	
第225図	J 12	水洗選別	WH35	調査区内	管玉	2.7	3.1	7.47	0.08	碧玉	
第225図	J 13	水洗選別	WH36	調査区内	管玉	3.1	3.3	3.6	0.07	緑色凝灰岩	
第225図	J 14	水洗選別	WH35	調査区内	管玉	2.5	2.4	2.7	0.02	緑色凝灰岩	
第225図	J 15	18	WH36	調査区内	白玉	5.3	5.2	2.7	0.08	滑石	
第225図	J 16	水洗選別	WH35	調査区内	白玉	4.8	4.7	1.6	0.05	滑石	
第225図	J 17	2535	WH35	調査区内	ナツメ玉	17.8	11.5	11.0	3.09	水晶	

第10表 ガラス製玉類観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	地区	遺構・層位	器種	法量 (mm・g)				色調	備考
						長	幅	厚	重量		
第66図	G 1	水洗選別	WI36	平地建物3	ガラス小玉	3.3	3.5	2.4	0.03	淡青色	
第97図	G 2	964	WH36	SD38-A	ガラス小玉	2.7	2.7	1.8	0.01	濃青色	
第106図	G 3	水洗選別	WH36	VII層	ガラス小玉	4.0	4.1	2.9	0.06	淡青色	
第106図	G 4	水洗選別	WH36	VII層	ガラス小玉	4.1	4.0	1.8	0.03	淡青色	
第182図	G 5	水洗選別	-	SD38-Cb	ガラス小玉	7.5	6.4	4.2	0.7	緑色	
第225図	G 6	水洗選別	WI36	調査区内	ガラス小玉	4.5	4.0	2.4	0.5	淡青色	
第225図	G 7	水洗選別	WH36	調査区内	ガラス小玉	4.4	4.1	1.6	0.03	濃青色	

第11表 鉄器観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	地区	遺構・層位	器種	法量 (mm・g)				備考
						長	幅	厚	重量	
第17図	F 1	44	WH36	IV層-1層	鉄釘?	35.5	12	6		
第35図	F 2	152	WH35	V層	刀子	135	14	4		
第35図	F 3	125	WH36	V層	カセ?	47	14	16	21.2	
第49図	F 4	1308	WI37	VI-2層	鉄鍬	△31	18	5	5.3	
第49図	F 5	1287	WH36	VI-2層	鉄鍬	38	27	6	6.5	
第49図	F 6	37	WI35	VI層	板状鉄斧	54	19	11		
第49図	F 7	1314	WH36	VI-2層	袋状鉄斧	△76	54	19	35.6	
第71図	F 8	1909	WH36	平地建物4 SD3	ヤス	△53	△21	△16.5	7.5	
第199図	F 9	1775	WH36	VIII層	袋状鉄斧	60	32	17	38.1	
第211図	F 10	2699	WH36	SD38	袋状鉄斧	92	31	8		

第12表 青銅器(古銭)観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	地区	遺構・層位	器種	法量 (cm・g)			備考
						径	厚	重量	
第25図	Br 1	94	WI36	2畦畔(古)	古銭	2.4	0.1	3.0	開元通宝
第25図	Br 2	50	WI37	2畦畔(古)	古銭	2.5	0.1	3.1	皇宋通寶
第25図	Br 3	88	WI38	2畦畔(古)	古銭	2.6	0.2	3.9	天聖元寶
第25図	Br 4	56	WI39	1畦畔	古銭	2.4	0.2	3.6	熙寧元寶
第25図	Br 5	61	WI40	IV層-1層	古銭	2.5	0.1	3.8	元祐通寶
第25図	Br 6	113	WI41	4土手	古銭	2.5	0.2	4.0	元祐通寶
第25図	Br 7	59	WI42	2畦畔(古)	古銭	2.5	0.1	3.8	元祐通寶
第25図	Br 8	72	WI43	IV層	古銭	2.4	0.2	4.4	紹聖元寶
第25図	Br 9	60	WI44	1畦畔	古銭	2.5	0.1	3.0	天聖元寶
第25図	Br 10	95	WI45	2畦畔(古)	古銭	2.5	0.1	3.4	聖宋元寶

第13表 青銅器観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	地区	遺構・層位	器種	法量 (mm・g)				備考
						長	幅	厚	重量	
第35図	Br 11	203	WH36	V-4層	銅鍬	45	14	4	5.0	
第35図	Br 12	967	WI35	V-1層	銅鈴	11	8	8	1.0	
第99図	Br 13	925	WH36	SD38-A	銅鍬	21.5	13.5	2	2.3	
第107図	Br 14	1082	WH36	VII層	銅鍬	25	11	1	1.3	炭化物付着
第181図	Br 15	水洗選別	WH36	SD38-Cb	銅鍬	20	9.1	2.4		
第181図	Br 16	水洗選別	WH36	SD38-Cb	銅鍬	17.5	11	2	1.5	
第199図	Br 17	1806	WI36	VIII層	銅鍬	20	10	2	1.4	
第211図	Br 18	水洗選別	WI36	SD38	銅鍬	23	12	2.1	2.1	
第226図	Br 19	水洗選別	WH36	調査区内	銅鍬	28	13	2	2.6	
第226図	Br 20	水洗選別	WH36	調査区内	銅鍬	22.5	11.2	1.5	1.9	炭化物付着

第14-1表 木器観察表(1)

※ 樹種欄の括弧付きは目視による判別

挿図番号	遺物番号	取上番号	地区	遺構・層位	器種	法量 (cm)			樹種	木取り	備考
						長	幅	厚			
第26図	W 1	96	WI36	2 畦畔(新)	横槌	47.8	6.1	5.5	(広葉樹)	芯持材	
第34図	W 2	163	WH36	V層	人形	△ 9.7	2.4	0.3	(針葉樹)	柁目	
第34図	W 3	217	WH36	V-4層	人形	△ 12.0	2.2	0.7	(針葉樹)	板目	
第34図	W 4	159	WH36	V層	人形	9.1	2.3	1.1	(針葉樹)	板目	
第34図	W 5	174	WH36・37	V層	人形脚?	△ 19.8	1.4	0.7	(針葉樹)	板目	
第34図	W 6	810	WH36	V-3層	斎串	18.4	2.4	0.7	(針葉樹)	板目	
第34図	W 7	174	WH36・37	V層	斎串	△ 6.8	1.4	0.5	(針葉樹)	板目	
第34図	W 8	1191	WH36	V-4層	斎串	△ 8.0	1.3	0.6	(針葉樹)	板目	
第34図	W 9	174	WH36・37	V層	斎串	△ 11.1	0.9	0.6	(針葉樹)	板目	
第34図	W 10	827	WI36・37	V-1層	椀	口径-	器高△ 2.9	底径※ 5.4	(針葉樹)	横木取り	
第34図	W 11	208	WH35	V-4層	火鑽臼	47	2.8	1.5	(針葉樹)	板目	
第36図	W 12	214	-	V-4層	木玉	6.4	6.2	5.9	(針葉樹)		重さ 0.2g
第38図	W 13	178	WH37	6 流路	人形	△ 31.5	3.4	1.1	(針葉樹)	柁目	
第46図	W 14	365	WH35	VI層	不明	22.7	2.5	1.9	(針葉樹)	板目	
第46図	W 15	1205	WH36	VI-2層	不明	12	3.1	2.4	(針葉樹)	柁目	
第46図	W 16	266	WH35	VI層	壁板?	△ 101.6	12.1	2.6	(針葉樹)	柁目	
第46図	W 17	272	WH35	VI層	建築材?	△ 67.9	8	3.5	(針葉樹)	板目	
第57図	W 18	1800	WI36	9 溝	斎串?	△ 21.9	2.2	0.5	(針葉樹)	板目	
第68図	W 19	2207	WI36	平地建物3 SK2	壁板	△ 61.7	4.1	2.2	(針葉樹)	板目	
第68図	W 20	2349	WI36	平地建物3	壁板	19.4	102.1	3	(針葉樹)	板目	
第68図	W 21	2654	WI36	平地建物3 SK2	矢板	△ 66.3	12.3	2.1	(針葉樹)	柁目	
第68図	W 22	2653	WI36	平地建物3	柱	23	19.1	8.5	(針葉樹)	芯去材	
第68図	W 23	4603	-	平地建物3	柱	51.4	34	9.8	(針葉樹)	芯去材	
第103図	W 24	2425	WH36	VII層	栓	17.9	3.7	2.1	(針葉樹)	板目	
第103図	W 25	2415	WH36	VII層	栓	△ 17.1	4.6	2.5	(針葉樹)	柁目	
第103図	W 26	2424	WH36	VII層	栓	16.2	5.5	3.5	(針葉樹)	芯去材	
第103図	W 27	1762	WH36	VII層	不明木器	△ 19.6	3.5	2.9	(針葉樹)	芯持材	
第103図	W 28	1823	WH36	VII層	火鑽臼	△ 15.7	3.1	2.2	(針葉樹)	板目	
第103図	W 29	1785	WH35	VII層	蓋	△ 11.1	△ 27.3	1	(針葉樹)	板目	
第103図	W 30	2419	WH35	VII層	高杯脚部	8.3	9.2	3.2	(ヤマグワ?)	縦木取り	
第111図	W 31	3683	WH36	土留め1	妻壁板	200.9	34.3	3	(針葉樹)	板目	
第112図	W 32	3701	WH36	土留め2	壁板	249.7	15.6	2	(針葉樹)	板目	
第112図	W 33	3681	WH36	土留め2	壁板	262.8	15.3	1.7	(針葉樹)	板目	
第113図	W 34	3670	WH36	土留め3	妻壁板	272	43.2	3	(針葉樹)	板目	
第113図	W 35	3675	WH36	土留め3	妻壁板	242.8	36.2	2.4	(針葉樹)	板目	
第113図	W 36	3676	WH36	土留め3	妻壁板	164.5	41.5	3.2	(針葉樹)	板目	
第113図	W 37	3631	WH36	土留め3	建築材	76.2	16.9	4.8	(針葉樹)	板目	
第113図	W 38	3733	WH36	土留め3	建築材	607.1	10.9	7.5	スギ	去	
第115図	W 39	3730	WH36	土留め4	壁板	320.5	24.3	2.3	(針葉樹)	板目	
第115図	W 40	3732	WH36	土留め4	壁板	263	26.8	1.5	(針葉樹)	板目	
第115図	W 41	3722	WH36	土留め4	壁板	286.2	22.2	2.7	(針葉樹)	板目	
第120図	W 42	3553	WH36	造成土①	栓	9.8	5	2.7	(針葉樹)	芯去材	

第14-2表 木器観察表(2)

挿図番号	遺物番号	取上番号	地区	遺構・層位	器種	法量 (cm)			樹種	木取り	備考
						長	幅	厚			
第120図	W 43	3656	WI36	造成土①	火鑪臼	21.9	3.5	1.5	(針葉樹)	芯去材	
第120図	W 44	3553	WH36	造成土①	蓋	13.5	4.9	0.8	クワ属	横木取り	表面に赤彩有
第120図	W 45	3695	WH36	造成土①	把手	14.8	4.4	1.2	(針葉樹)	板目	
第120図	W 46	3611	WH36	造成土①	田下駄	10.4	38.5	2.5	(針葉樹)	板目	
第121図	W 47	3623	WH36	造成土①	柱	△ 56.8	16.2	17.3	(針葉樹)	芯持材	
第121図	W 48	3698	WH36	造成土①	柱	71.6	17	14.3	(針葉樹)	みかん割り材	
第121図	W 49	3553	WH36	造成土①	妻壁板	△ 22.6	14.2	1.7	(針葉樹)	板目	
第123図	W 50	3694	WH36	造成土②	杓子	残存高 6.7	外径※ 12.0		クワ属	縦木取り	
第123図	W 51	3438	WH36	造成土②	不明	△ 14.9	2.5	0.9	(針葉樹)	板目	
第123図	W 52	3964	—	造成土②	栓	10.5	6.2	2.8	(針葉樹)	芯去材	
第123図	W 53	3966	WI36	造成土②	容器未成品	34.5	20.5	10.7	(針葉樹)	芯去材	
第124図	W 54	3703	WH36	造成土②	矢板	78.9	10.9	4.7	(針葉樹)	板目	
第124図	W 55	3705	WH36	造成土②	杭	72.2	6.4	7.1	(針葉樹)	芯去材	
第124図	W 56	3726	WH36	造成土②	杭	△ 55.5	8.5	6.4	(針葉樹)	芯去材	炭化箇所有
第127図	W 57	3442	WH36	造成土③	木庖丁	4.6	10.7	1	(ヤマグワ)	柁目	
第127図	W 58	3442	WH36	造成土③	木庖丁	4.4	8	1	(ヤマグワ)	柁目	
第127図	W 59	3501	WH36	造成土③	桶底	△ 7.1	13.8	0.7	(針葉樹)	板目	
第127図	W 60	3442	WH36	造成土③	壁板	△ 27.9	12.5	2	(針葉樹)	板目	
第127図	W 61	3678	WH36	造成土③	転用?杭	△ 40.2	4.9	3.8	(針葉樹)	芯去材	
第129図	W 62	3450	WH36	造成土④	匙	13.1	6.5	5	(針葉樹)		未成品
第129図	W 63	3650	WH36	造成土④	杭	54	7.1	4.6	(針葉樹)	板目	
第132図	W 64	4605	—	造成土	簾状木器	63.3	3.8	4.5	(針葉樹)	柁目	
第133図	W 65	4336	WH36	造成土	腰掛	15.2	31.6	16	スギ	横木取り	
第133図	W 66	3551	WH36	造成土	木庖丁	6.1	4.5	0.9	(ヤマグワ)	柁目	
第133図	W 67	2805	WH37	造成土	桶	14.5	△ 8.2	1.7	(針葉樹)	縦木取り	だ円貫通孔有(3mm)
第140図	W 68	3129	WH36	SD38-B	不明	29.6	不明	4.7	スギ	縦木取り	柁目(裏の板-板目)
第140図	W 69	2816	WH37	SD38-B	蓋	△ 19.9	△ 7.4	1.8	(針葉樹)	横木取り	
第140図	W 70	3269	WH36	SD38-B	高杯	残存高△ 4.3	最大長△ 17.0		カヤ	横木取り	内画面に赤黒の彩色有
第140図	W 71	3131	WH36	SD38-B	高杯脚部	残存高 6.9	底径※ 18.4		クワ属	横木取り	
第140図	W 72	2815	WH37	SD38-B	槽	△ 8.3	28.3	4.5	(針葉樹)	横木取り	
第140図	W 73	3270	WH36	SD38-B	椀・杯形容器	器高△ 4.0	器径※ 9.6		クワ属	縦木取り	
第141図	W 74	3731	WH36	SD38-B	杓子	12.2~ 14.2	6.4		エノキ属	横木取り	全面黒色彩色の痕跡 4つの円孔有
第142図	W 75	2656	WH36	SD38-B	高杯	28.6	29.2	12.8	カヤ	縦木取り	
第143図	W 76	3663	WH36	SD38-B	桶	33.5	18	2.2	(針葉樹)	縦木取り	
第143図	W 77	3256	WH36	SD38-B	桶	14.4	12.3	2	(針葉樹)	縦木取り	
第143図	W 78	2961	WH36	SD38-B	桶	14.4	△ 7.7	1.8	(針葉樹)	縦木取り	
第143図	W 79	2960	WH36	SD38-B	桶	13.9	5.6	1.9	(針葉樹)	縦木取り	
第143図	W 80	3232	WH36	SD38-B	桶	14.1	△ 10.5	2	(針葉樹)	縦木取り	
第143図	W 81	2814	WH37	SD38-B	桶	23.7	△ 14.8	3.4	(針葉樹)	縦木取り	
第144図	W 82	3264	WI36	SD38-B	木庖丁	17.1	4.9	0.9	(ヤマグワ)	柁目	
第144図	W 83	3328	WI36	SD38-B	木庖丁	△ 5.9	△ 11.3	△ 1.0	(ヤマグワ)	柁目	
第144図	W 84	3665	WH36	SD38-B	鎌柄?	32.9	4.6	2.3	(ヤマグワ)	芯去材	

第14-3表 木器観察表(3)

挿図番号	遺物番号	取上番号	地区	遺構・層位	器種	法量 (cm)			樹種	木取り	備考
						長	幅	厚			
第144図	W 85	3148	WH36	SD38-B	田下駄	11.9	35.5	2.5	(針葉樹)	板目	
第144図	W 86	3048	WI36	SD38-B	田下駄	△ 8.2	34.5	1.5	(針葉樹)	板目	
第145図	W 87	3254	WH36	SD38-B	弓	93.2	2.2	2.2	(針葉樹)	芯持材	湾曲幅 24.5 c m
第146図	W 88	2830	WH36	SD38-B	刺穿具?	22.3	2	1.2	(針葉樹)	芯去材	
第146図	W 89	3238	WH36	SD38-B	ヤス	9.4	0.7	0.6	(針葉樹)	芯去材	
第146図	W 90	3043	WH36	SD38-B	不明	4.9	1.2	0.7	(広葉樹)	芯去材	
第147図	W 91	2938	WH36	SD38-B	船	△ 60.2	△ 19.6	9.3	(針葉樹)		
第147図	W 92	3224	WH36	SD38-B	櫂	99.8	14.7	2.3	(針葉樹)	板目	
第148図	W 93	3170	WH36	SD38-B	衣笠	35.8	52	3.9	(広葉樹)	芯持材	
第148図	W 94	3130	WH36	SD38-B	匙	30.3	5.6	8	(広葉樹)	横木取り	
第148図	W 95	3262	WH36	SD38-B	不明	△ 10.8	3.8	0.9	(針葉樹)	柁目	
第148図	W 96	3013	WH36	SD38-B	不明	△ 12.4	2.2	△ 1.4	(針葉樹)	芯去材	
第148図	W 97	3353	WH36	SD38-B	不明	11.1	1.7	1	(広葉樹?)	板目	
第149図	W 98	4508	WI36	SD38-B	栓	17.5	6.9	7.7	(針葉樹)	芯去材	
第149図	W 99	2844	WH36	SD38-B	栓	21.8	5.6	4.6	(針葉樹)	芯去材	
第149図	W100	2870	WH36	SD38-B	栓	25	6.7	4	(針葉樹)	芯去材	
第149図	W101	2853	WH36	SD38-B	栓	△ 16.6	11.4	7.3	(針葉樹)	芯去材	
第149図	W102	3664	WH36	SD38-B	栓	9.7	13.3	5.4	(針葉樹)	柁目	
第149図	W103	3013	WH36	SD38-B	栓	10.2	6.6	2	(針葉樹)	板目	
第150図	W104	3008	WH36	SD38-B	妻壁板	250.7	8.9	1.9	(針葉樹)	追板目	
第150図	W105	3696	WH36	SD38-B	妻壁板	199.4	13	1.9	(針葉樹)	板目	
第151図	W106	3033	WH36	SD38-B	壁板	126.4	19.6	2.5	(針葉樹)	板目	
第151図	W107	3093	WI36	SD38-B	壁板	△ 84.0	16.3	1.5	(針葉樹)	板目	
第151図	W108	3248	WH36	SD38-B	壁板	△ 59.3	14.6	1.9	(針葉樹)	板目	炭化箇所
第151図	W109	3055	WI36	SD38-B	妻壁板	△ 11.5	△ 47.0	1.7	(針葉樹)	板目	炭化箇所
第151図	W110	3252	WH36	SD38-B	建築材	△ 46.2	4.8	3.9	(針葉樹)	芯去材	
第151図	W111	2936	WH36	SD38-B	建築材?	89.7	8.2	6.2	(針葉樹)	芯去材	
第151図	W112	3026	WH36	SD38-B	建築材	△ 89.5	11	4.1	(針葉樹)	柁目	
第151図	W113	2935	WH36	SD38-B	建築材	72	10.8	8.3	(針葉樹)	柁目	
第151図	W114	2878	WH36	SD38-B	建築材?	△ 46.0	7.2	3	(針葉樹)	板目	
第151図	W115	3133	WH36	SD38-B	建築材	△ 35.3	8.4	3.8	(針葉樹)	芯去材	
第151図	W116	3159	WH36	SD38-B	建築材	42.5	7	4.3	(針葉樹)	芯去材	
第151図	W117	2864	WH36	SD38-B	建築材?	△ 74.4	7.3	2.1	(針葉樹)	板目	
第151図	W118	2861	WH36	SD38-B	小舞?	182.4	3.9	3.6	(針葉樹)	芯去材	
第152図	W119	3308	WI36	SD38-B	不明	33.4	6.6	4.8	(針葉樹)	芯去材	
第152図	W120	2882	WH36	SD38-B	不明	23.7	8.2	5.4	(針葉樹)	芯去材	
第152図	W121	3125	WI36	SD38-B	不明	37.1	3.4	1.6	(針葉樹)	板目	
第152図	W122	3864	WH36	SD38-B	不明	△ 42.8	△ 7.9	△ 3.7	(針葉樹)	芯去材	
第152図	W123	3246	WH36	SD38-B	建築材?	63.3	10.6	2.2	(針葉樹)	板目	
第152図	W124	2963	WH36	SD38-B	建築材?	△ 45.3	10.5	1.6	(針葉樹)	板目	
第152図	W125	3179	WH36	SD38-B	不明	39.7	△ 12.3	1.3	(針葉樹)	板目	
第153図	W126	3247	WH36	SD38-B	矢板	46.9	14.1	3.9	(針葉樹)	追柁	舟転用
第153図	W127	3065	WI36	SD38-B	矢板	△ 36.9	15.6	2.3	(針葉樹)	板目	
第153図	W128	2922	WH36	SD38-B	矢板	△ 85.2	4.8	1.8	(針葉樹)	板目	
第153図	W129	3119	WI36	SD38-B	矢板	29.9	9	3.4	(針葉樹)	板目	炭化箇所
第161図	W130	4086	WI37	SD38-D	櫂	△ 75.3	9.5	1.5	(針葉樹)	板目	
第161図	W131	3716	WH36	SD38-D	不明	△ 11.4	△ 3.4	0.9	(広葉樹)	板目	

第14-4表 木器観察表(4)

挿図番号	遺物番号	取上番号	地区	遺構・層位	器種	法量 (cm)			樹種	木取り	備考
						長	幅	厚			
第162図	W132	4096	WI37	SD38-D	壁板	262.8	37	17	(針葉樹)	板目	
第162図	W133	4095	WI37	SD38-D	妻壁板	185.8	33.7	2.1	(針葉樹)	板目	
第165図	W134	3760	WH36	SD38-E	琴	22.6	7.2	1.5	スギ	追柁目	
第171図	W135	3983	WH36	SD38-Ca	蓋	7.8	20.6	1.5	(針葉樹)	板目	
第171図	W136	4105	WH36	SD38-Ca	椀・杯形容器	残存高 3.0	底径6.8	-	(ヤマグワ?)	縦木取り	
第171図	W137	3872	WI36	SD38-Cb	椀・杯形容器	18.8	17.2	1.5	クワ属	横木取り	最大高7.5cm
第171図	W138	3955	WI36	SD38-Cb	高杯?	△1.9	-	0.6	(ヤマグワ?)	横木取り?	内部赤彩有(全面)
第171図	W139	3827	WH36	SD38-Ca	杓子	13.3	9.4	1	クワ属	横木取り	柄は欠損
第171図	W140	4112	WH36	SD38-Ca	高杯	△9.1	△6.5	2.2	(針葉樹)	横木取り	
第171図	W141	3959	WH36	SD38-Ca	高杯	器高△ 3.4	底径※ 40	1.9	(針葉樹)	横木取り	
第171図	W142	3731	WH36	SD38-Ca	把手	12.6	4	1.9	(針葉樹)	芯去材	
第172図	W143	水洗選別	-	SD38-Ca	槽・盤類	4.6	18	5.7	(針葉樹)	横木取り	内面に黒採色
第172図	W144	3754	WH36	SD38-Ca	槽・盤類	△10.9	△36.9	5.7	(針葉樹)	横木取り	
第172図	W145	3754	WH36	SD38-Ca	槽・盤類	53	5	5.7	(針葉樹)	横木取り	
第173図	W146	3762	WH36	SD38-Ca	紡錘車	7.3	6.8	5.7	(針葉樹)	柁目	
第173図	W147	3832	WH36	SD38-Ca	紡錘車	6.6	5.8	5.7	(針葉樹)	柁目	
第173図	W148	4028	WH36	SD38-Ca	火鑪臼	6.2	3.3	5.7	(針葉樹)	芯去材	
第173図	W149	3870	WI36	SD38-Cb	木庖丁	3.7	△11.9	5.7	クワ属	柁目	
第173図	W150	4555	-	SD38-Ca	木庖丁	4.3	13.6	5.7	(ヤマグワ)	柁目	
第173図	W151	3834	WI36	SD38-Cb	木庖丁	10	6	5.7	(ヤマグワ)	柁目	
第173図	W152	3707	WI36	SD38-Cb	匙	△19.5	6.7	5.7	(針葉樹)	横木取り	
第174図	W153	4552	-	SD38-Ca	木鏝	△5.4	1	5.7	(針葉樹)	芯去材	
第175図	W154	4104	WH36	SD38-Ca	桶	△11.0	△6.6	5.7	(針葉樹)	縦木取り	
第175図	W155	4386	WI36	SD38-Cb	桶	7.6	△8.8	5.7	(針葉樹)	縦木取り	表面一部炭化
第175図	W156	3810	WH36	SD38-Ca	桶底	22.2	10.1	5.7	(針葉樹)	板目	
第175図	W157	4006	WH36	SD38-Ca	桶底	△9.0	16.2	5.7	(針葉樹)	板目	
第176図	W158	4104	WH36	SD38-Ca	不明	20.4	4	5.7	(針葉樹)	板目	
第176図	W159	4045	WH37	SD38-Ca	指物箱の部材	21.9	9.6	5.7	(針葉樹)	板目	
第176図	W160	3832	WH36	SD38-Ca	指物箱の側板	16.8	8.1	5.7	(針葉樹)	追柁目	孔に木片挿入有
第176図	W161	3832	WH36	SD38-Ca	不明	17.3	7.4	5.7	(針葉樹)	芯去材	
第177図	W162	4041	WH37	SD38-Ca	火鑪臼	△42.2	2.2	5.7	(針葉樹)	芯去材	
第177図	W163	4077	WH37	SD38-Ca	火鑪臼	46.5	3.4	5.7	(針葉樹)	芯去材	杭の転用
第177図	W164	3754	WH36	SD38-Ca	刀形?	34.9	4.9	5.7	(針葉樹)	板目	炭化箇所有
第177図	W165	3771	WH36	SD38-Ca	不明	34.8	9.8	5.7	(針葉樹)	板目	
第178図	W166	3844	WH36	SD38-Ca	栓	△11.6	6.6	5.7	(針葉樹)	芯去材	
第178図	W167	3819	WH36	SD38-Ca	栓	△10.2	7.7	5.7	(針葉樹)	芯去材	
第178図	W168	4104	WH36	SD38-Ca	栓	21.5	5.2	5.7	(針葉樹)	芯去材	
第178図	W169	3956	WI36	SD38-Cb	栓	29.7	5.1	5.7	(針葉樹)	芯去材	
第178図	W170	3956	WI36	SD38-Cb	栓	△8.8	13	5.7	(針葉樹)	芯去材	
第178図	W171	3768	WH36	SD38-Ca	杭	41.5	4.8	5.7	(針葉樹)	芯去材	
第178図	W172	3976	WH36	SD38-Ca	建築材	△74.3	10.7	5.7	(針葉樹)	柁目	炭化箇所有
第178図	W173	3754	WH36	SD38-Ca	建築材	23.3	11	5.7	(針葉樹)	板目	

第14-5表 木器観察表(5)

挿図番号	遺物番号	取上番号	地区	遺構・層位	器種	法量 (cm)			樹種	木取り	備考
						長	幅	厚			
第178図	W174	3987	WH36	SD38-Ca	妻壁板	17.2	30.1	5.7	(針葉樹)	板目	
第178図	W175	4555	—	SD38-Ca	垂木	94	8.5	5.7	(針葉樹)	芯持材	全面炭化
第178図	W176	3824	WH36	SD38-Ca	垂木	236.3	7.1	5.7	(針葉樹)	芯去材	
第179図	W177	3825	WH36	SD38-Ca	矢板	△ 51.1	10	5.7	(針葉樹)	柁目	
第179図	W178	3754	WH36	SD38-Ca	矢板	54.7	5.8	5.7	(針葉樹)	芯去材	炭化箇所有
第179図	W179	3828	WH36	SD38-Ca	矢板	87.4	5.9	5.7	(針葉樹)	板目	
第179図	W180	4059	WH37	SD38-Ca	杭	47.9	2.5	5.7	(針葉樹)	芯去材	
第186図	W181	4513	WI36	88柱穴	柱	△ 80.7	15.3	5.7	(広葉樹)	芯持材	
第191図	W182	4197	WH36	SD38-C	蓋	4.8	8.1	5.7	(針葉樹)	板目	貫通部に詰め物(木片)有
第191図	W183	4207	WH36	SD38-C	高杯	残存高 3.4	底径※ 19.8	—	(広葉樹)		透かし有、脚底面に印付け
第191図	W184	4370	WH36	SD38-C	椀・杯形容器	残存高△ 6.1	脚径※ 9.1	—	ケンボナン	横木	脚部に8方向の透かし有
第191図	W185	4340	WH36	SD38-C	把手	8	2.6	1.5	(広葉樹)	芯去材	
第191図	W186	4340	WH36	SD38-C	火鑕臼	9.6	2.3	1.2	(針葉樹)	板目	
第191図	W187	4343	WH36	SD38-C	棹	△ 10.15	19.1	2.5	(針葉樹)	柁目	
第191図	W188	4340	WH36	SD38-C	木鎌	6	12	1.7	(針葉樹)	板目	
第191図	W189	4354	WH36	SD38-C	不明	6.1	5	3	(針葉樹)	柁目	
第191図	W190	4372	WH36	SD38-C	不明	17	3.2	1.8	(針葉樹)	芯去材(板目)	
第191図	W191	4342	WH36	SD38-C	柄	7	3.3	3.2	(広葉樹)	芯去材	
第192図	W192	4314	WH36	SD38-C	椀	△ 115.7	12.7	1.6	(針葉樹)	板目	
第192図	W193	4340	WH36	SD38-C	建築材	△ 70.5	5.5	4.4	(針葉樹)	芯去材	
第192図	W194	4342	WH36	SD38-C	杭	69.8	6.9	5	(針葉樹)	芯去材	
第192図	W195	4362	WH36	SD38-C	曲柄又鉞(ナスビ)	42.2	13.5	1.3	アカガン亜属	柁目	
第193図	W196	4354	WH36	SD38-C	ヤス	15.7	0.9	1	(針葉樹)	柁目	
第206図	W197	2700	WI36	SD38	蓋	△ 18.7	△ 3.8	2.2	(針葉樹)	横木取り	全面赤彩(一部欠落)
第206図	W198	1872	WH36	SD38	木庖丁	4.7	17	1.5	(ヤマグワ)	柁目	
第206図	W199	1856	WH36	SD38	木鎌?	6.2	4.8	1.3	(広葉樹)	板目	
第207図	W200	2768	WI36	SD38	桶	25.6	△ 13.5	3	(針葉樹)	縦木取り	
第207図	W201	2655	WI36	SD38	桶底	△ 21.2	24.9	1.5	(針葉樹)	板目	
第207図	W202	2563	WI37	SD38	棹	16	14.5	2.6	(針葉樹)	板目	
第207図	W203	2736	WI36	SD38	平鉞(未成品)	△ 21.6	△ 10.8	4	(広葉樹)	追柁目	
第207図	W204	2753	WI36	SD38	机脚部	△ 20.1	9.6	1.8	(針葉樹)	板目	
第207図	W205	2591	WH36	SD38	不明	24.4	7.2	4.1	(針葉樹)	板目	炭化箇所有
第207図	W206	2827	WH36	SD38	不明	△ 35.5	8.8	3.5	(針葉樹)	板目	
第207図	W207	4199	WH36	SD38	火鑕臼	△ 21.7	2.7	2.2	(針葉樹)	芯去材	
第207図	W208	2788	WI36	SD38	不明	23.7	4.1	2.7	(針葉樹)	板目	
第207図	W209	2645	WH36	SD38	小舞?	△ 37.8	3.5	3.3	(針葉樹)	芯去材	
第207図	W210	2601	WH36	SD38	不明	△ 15.6	6.6	0.9	(針葉樹)	板目	
第208図	W211	1958	WH36	SD38	矢板	△ 58.1	21.1	4.1	(針葉樹)	板目	
第208図	W212	1958	WH36	SD38	矢板	58.2	13.8	3.9	(針葉樹)	板目	
第208図	W213	2488	WH36	SD38	矢板	△ 74.1	6.8	2.2	(針葉樹)	板目	
第208図	W214	2723	WI36	SD38	矢板	73.6	7.8	2.7	(針葉樹)	板目	
第208図	W215	1944	WH36	SD38	矢板	28.8	12.7	3.5	(針葉樹)	板目	

第14-6表 木器観察表(6)

挿図番号	遺物番号	取上番号	地区	遺構・層位	器種	法量 (cm)			樹種	木取り	備考
						長	幅	厚			
第208図	W216	2766	WI36	SD38	矢板	66.3	7.2	6	(針葉樹)	板目	舟転用?
第208図	W217	2537	WH36	SD38	矢板	31.6	17.2	5.3	(針葉樹)	柱目	舟転用材
第219図	W218	4507	WI36	調査区内	蓋	25	12.5	1.6	スギ	横木取り	
第219図	W219	3736	WH36	調査区内	蓋	12.2	4	0.7	クワ属	横木取り	
第219図	W220	3744	WH36	調査区内	蓋	13.1	13.1	1.1	クワ属	横木取り	最大高 4.2cm
第219図	W221	3010	WI36	調査区内	蓋	器高△ 4.3	底径※ 18.0	1	(ヤマグワ?)	横木取り	
第219図	W222	4193	WH36	調査区内	盾	△ 12.0	△ 2.4	0.7	(針葉樹)	柱目	
第219図	W223	4350	WH36	調査区内	把手	3.2	9.2	3.4	(広葉樹)	芯持材	
第219図	W224	1805	WI36	調査区内	不明	△ 17.6	4.4	2.1	(針葉樹)	縦木取り	2個体接合
第219図	W225	3744	WH36	調査区内	不明	18.3	4.9	0.7	(針葉樹)	板目	
第220図	W226	3579	WH36	調査区内	飾耳	△ 7.1	△ 2.1	3.2	(ヤマグワ)		
第220図	W227	1717	WI36	調査区内	琴柱	2.7	3.7	0.6	(針葉樹)	柱目	
第220図	W228	4352	WH36	調査区内	簪	12.9	0.5	0.5	(針葉樹)	柱目	
第221図	W229	4350	WH36	調査区内	栓	22.4	3.4	3.1	(針葉樹)	柱目	
第221図	W230	1741	WH36	調査区内	杵	△ 20.6	2.2	1.8	(針葉樹)	芯去材	
第221図	W231	3579	WH36	調査区内	横槌?	24.1	5.3	3.7	(針葉樹)	板目	
第221図	W232	1726	WH35	調査区内	不明	22.3	3.3	2.9	(針葉樹)	板目	貫通部に詰め物(木片)有
第221図	W233	4322	WH36	調査区内	不明木器 (目釘あり)	△ 35.4	3	1.9	(針葉樹)	芯去材	
第222図	W234	4604	—	調査区内	妻壁板	△ 92.5	43.2	1.7	(針葉樹)	板目	
第222図	W235	1932	WH36	調査区内	壁板	△ 80.4	19.7	3.6	(針葉樹)	板目	
第222図	W236	1942	WH36	調査区内	建築材	△ 68.7	8.7	2.7	(針葉樹)	板目	
第222図	W237	4004	WI36	調査区内	不明	△ 65.1	5.2	5.7	(針葉樹)	柱目	
第222図	W238	3736	WH36	調査区内	杭	71.3	6.8	4.5	(針葉樹)	芯持材	
第222図	W239	3736	WH36	調査区内	杭	50.4	4.5	4.7	(針葉樹)	芯去材	建築材転用
第222図	W240	3736	WH36	調査区内	矢板	△ 43.8	4.7	3.3	(針葉樹)	板目	
第222図	W241	4334	WH36	調査区内	矢板	146.5	10.9	4.2	(針葉樹)	板目	建築材転用
第223図	W242	2557	WH36	調査区内	人形	△ 25.3	5.1	0.6	(針葉樹)	板目	
第223図	W243	281	WH35	調査区内	人形	11.9	3.7	0.4	(針葉樹)	柱目	
第223図	W244	1762	WH36	調査区内	人形	△ 12.5	1.9	0.5	(針葉樹)	板目	
第223図	W245	1278	WH36	調査区内	人形	△ 11.2	1.3	0.6	(針葉樹)	板目	

第15表 編組製品観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	地区	遺構・層位	器種	法量 (cm)			樹種	備考
						長	幅	厚		
第134図	Ba 1	2830	WI36	造成土	縄	51.3	2.3	—	イネ	
第154図	Ba 2	3293	WI36	SD38-B	縄	40.5	29.5	3.5	イネ	
第154図	Ba 3	3358	WH36	SD38-B	かご	18.4	13.2	—	タケ亜科	
第154図	Ba 4	3064	WI36	SD38-B	縄	15.5	2.1	1.5	イネ	炭化箇所有

第16表 骨角器観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	地区	遺構・層位	器種	法量 (cm)			備考
						長	幅	厚	
第48図	Bo 1	1234	WH35	VI-2層	骨鏃	3.1	0.9	0.4	
第48図	Bo 2	38	WI35	VI層	不明	5.1	0.9	0.7	
第48図	Bo 3	456	WH35・36	VI層	根挟み	△4.1	△0.9	1.0	
第48図	Bo 4	1512	WH35	VI-2層	卜骨	5.6	3.2	0.7	
第67図	Bo 5	2117	WH36	平地建物3	不明	2.6	1.1	0.6	
第98図	Bo 6	2355	WI36	SD38-A	柄?	△6.6	2.5	△1.5	
第105図	Bo 7	2450	WH36	VII層	ヤス	△6.8	0.8	0.5	
第105図	Bo 8	2441	WI36	VII層	骨鏃	△6.6	1.0	0.4	
第105図	Bo 9	1778	WH36	VII層	不明	3.0	1.2	0.7	
第105図	Bo 10	2420	WH35	VII層	有孔骨製品	3.2	1.5	0.3	
第105図	Bo 11	水洗選別	-	VII層	簪	△4.8	3.1	2.9	
第105図	Bo 12	1772	WI35	VII層	不明	1.6	1.2	1.1	
第155図	Bo 13	3120	WI36	SD38-B	鯨骨	24.6	29.3	17.2	
第155図	Bo 14	2813	WH37	SD38-B	有孔骨製品	4.7	1.6	0.4	
第180図	Bo 15	3957	WI36	SD38-Ca	簪	8.9	0.5	0.5	
第180図	Bo 16	3871	WI36	SD38-Ca	骨鏃	6.0	0.9	0.5	
第180図	Bo 17	3832	WH36	SD38-Ca	骨鏃	6.4	0.9	0.7	
第195図	Bo 18	4358	WH36	SD38-C	ヤス	△9.0	1.4	0.7	
第210図	Bo 19	2558	WI36	SD38	骨鏃	△5.5	1.1	0.5	
第224図	Bo 20	3584	WH36	調査区	ヤス	△6.9	1.0	0.4	
第224図	Bo 21	2540	WH36	調査区	骨鏃	△7.2	0.8	0.8	
第224図	Bo 22	3740	WH36	調査区	卜骨	△6.7	△3.9	△0.8	

第4章 自然科学分析

第1節 土壌サンプル等自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

青谷上寺地遺跡（鳥取県鳥取市青谷町所在）は、弥生時代を中心とする遺跡で、当時の水田跡をはじめとする遺構や、多量の遺物が得られている。今回は、南壁から採取した柱状土壌サンプルについて、層相微細構造解析、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施し、遺構の埋没過程や古環境に関する情報を得る。また、検出された種実の年代測定を実施する。

1. 土壌の分析

1. 試料

分析に用いた試料は、南壁から採取されたブロック試料4点である（南壁①～④、第8図）。いずれの試料もブロック状で、プラスチックケースを南壁断面に連続的に被せて採取されている。層相解析試料は、試料を観察後、軟X線が透過しやすいよう1cm厚に削ってプラスチックケースに納める。珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析試料は、1cm厚に削る際に、該当する層位から取り分けた土壌を用いる。

2. 分析方法

(1) 層相微細構造解析

ブロック試料を観察し、写真撮影を行う。観察した面（採取時の表面）が残るように、厚さ1cm程度になるまで削り、プラスチックケースの蓋に納め、軟X線写真撮影用試料とする。軟X線の撮影条件は、電圧：70kV、電流：5.0mA、照射時間：30S、照射距離：100cm、フィルター：無、である。

(2) 珪藻分析

湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリユラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が産出した後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot et al. (2000)、Hustedt (1930-1966)、Krammer and Lange-Bertalot (1985～1991)、Desikachary (1987)などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡

水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し表に示す。なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群であるため、これも図表に示す。

(3) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman (1952,1957)、Faegri and Iversen (1989)などの花粉形態に関する文献や、島倉 (1973)、中村 (1980)、藤木・小澤 (2007)等の邦産植物の花粉写真集などを参考に用いる。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

(4) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤 (2010) の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸めている（100単位にする）。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

3. 結果

(1) 層相微細構造解析

観察結果をPL109に示す。以下各層ごとの観察結果を述べる。

・161層（IX層）

161層は、黒褐色の淘汰の悪い粗粒砂層で、植物遺体、貝、種実等を含む。

・110層（SD38-C）

110層は、黒色の淘汰の悪い粗粒砂層で、植物遺体、貝、種実等を含む。「サンドパイプ」とみら

れる生痕があるほか、擾乱によると思われる団粒状の組織が確認される。

・105層 (SD38-C)

105層は、黒褐色の淘汰の悪い粗粒砂層で、植物遺体、貝、種実等を含む。105層、110層、161層は層相の構造が似る。

・100層 (SD38-C)

100層は黒色の砂混じり腐植質シルトで、材片などの植物遺体を含む。平行葉理がみられるが、部分的に破壊される。旧根がみられるほか、擾乱と考えられる団粒状の組織がある。

・99層 (SD38-Ca)

99層は黒色の砂混じり腐植質シルトで、材片などの植物遺体を含む。構造は100層と類似する。

・84層 (SD38-B)

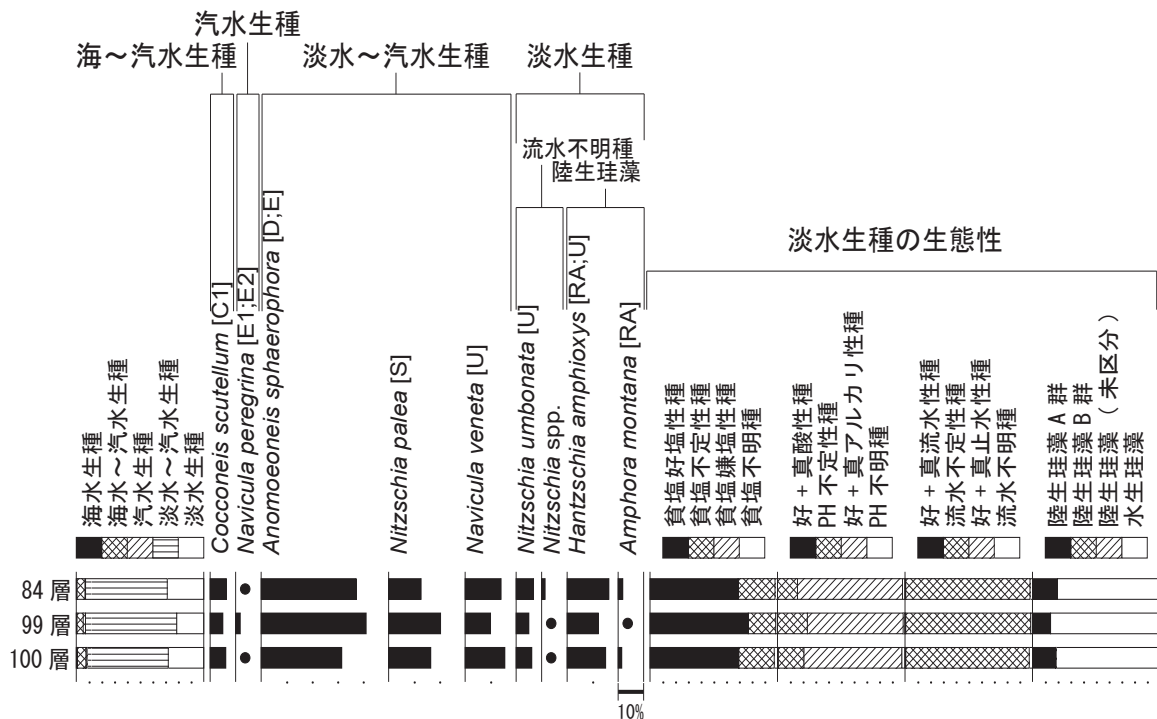
84層は黒色の腐植質砂質シルトで、99層・100層より砂分が多い。平行葉理がみられるが、部分的に破壊される。旧根がみられるほか、擾乱と考えられる団粒状の組織がある。99層・100層より擾乱や旧根の密度が多く、土壌化の影響を強く受けていると考えられる。

・81層 (SD38-B)

81層は黒色の腐植質砂質シルトである。旧根がみられるほか、擾乱と考えられる団粒状の組織がある。84層と同様、擾乱や旧根の密度が多く、土壌化の影響を強く受けていると考えられる。

・43層 (古墳時代前期造成土)

43層は黒褐色粘土質シルトで、酸化鉄に置換した比較的太いものから糸根状の旧根が多い。耕耘



海水～汽水～淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

環境指標種

C1: 海洋藻場指標種 D1: 海水砂質干潟指標種 D2: 汽水砂質干潟指標種 E1: 海水泥質干潟指標種 E2: 汽水泥質干潟指標種 (以上は小杉, 1988)
S: 好汚濁性種 T: 好清水性種 U: 広適応性種 (以上はAsai & Watanabe, 1995) RI: 陸生珪藻 (RA: A群, RB: B群; 伊藤・堀内, 1991)

第231図 主要珪藻化石群集

第17表 植物珪酸体群集

種 類	生態性			環境 指標種	南壁		
	塩分	pH	流水		84層	99層	100層
<i>Paralia sulcata</i> (Ehr.) Cleve	Euh			A, B	1	1	2
<i>Cocconeis scutellum</i> Ehrenberg	Euh-Meh			C1	14	11	13
<i>Diploneis</i> spp.	Euh-Meh				-	-	1
<i>Navicula peregrina</i> (Ehr.) Kuetzing	Meh			E1, E2	1	4	2
<i>Anomoeoneis sphaerophora</i> (Kuetz.) Pfitzer	Ogh-Meh	al-bi	ind	D, E	82	91	67
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	31	22	33
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.) W. Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	28	45	35
<i>Achnanthes</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-
<i>Achnantheidium minutissimum</i> (Kuetz.) Czarn	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	1
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	4	2	3
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>lineata</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	1	1
<i>Cocconeis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-
<i>Cymbella tumida</i> (Breb. ex Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1	-
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O, U	-	-	1
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	36	27	32
<i>Navicula radiosia</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	1
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	2	1	1
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	2	2
<i>Nitzschia umbonata</i> (Ehr.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	U	15	11	13
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB, S	-	-	1
海水生種					1	1	2
海水～汽水生種					14	11	14
汽水生種					1	4	2
淡水～汽水生種					141	158	135
淡水生種					63	47	59
珪藻化石総数					220	221	212

凡例

塩分:塩分濃度に対する適応性	pH:水素イオン濃度に対する適応性	流水:流水に対する適応性
Euh :海水生種	al-bi:真アルカリ性種	l-bi:真止水性種
Euh-Meh:海水生種-汽水生種	al-il:好アルカリ性種	l-ph:好止水性種
Meh :汽水生種	ind :pH不定性種	ind :流水不定性種
Ogh-Meh:淡水生種-汽水生種	ac-il:好酸性種	r-ph:好流水性種
Ogh-hil:貧塩好塩性種	ac-bi:真酸性種	r-bi:真流水性種
Ogh-ind:貧塩不定性種	unk :pH不明種	unk :流水不明種
Ogh-hob:貧塩嫌塩性種		
Ogh-unk:貧塩不明種		

環境指標種

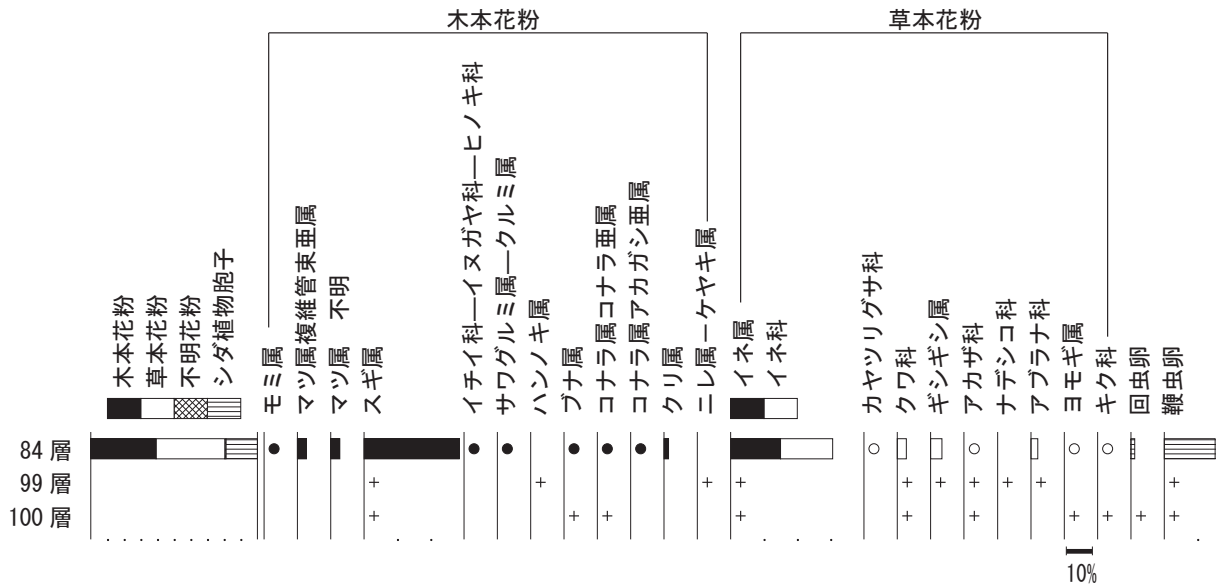
- A:外洋指標種 B:内湾指標種 C1:海水藻場指標種 C2:汽水藻場指標種
- D1:海水砂質干潟指標種 D2:汽水砂質干潟指標種
- E1:海水泥質干潟指標種 E2:汽水泥質干潟指標種 F:淡水底生種群(以上は小杉,1988)
- G:淡水浮遊性種群 H:河口浮遊性種群 J:上流性河川指標種 K:中～下流性河川指標種
- L:最下流性河川指標種群 M:湖沼浮遊性種 N:湖沼沼沢湿地指標種 O:沼沢湿地付着生種
- P:高層湿原指標種群 Q:陸域指標種群(以上は安藤,1990)
- S:好汚濁性種 U:広適応性種 T:好清水性種(以上はAsai and Watanabe,1995)
- R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内,1991)

による擾乱に類似する団粒状の組織がみられる。腐植に富み、粘土化していることから土壌化の影響を強く受けていると考えられる。また、34層との層界も乱れている。

・34層 (古墳時代前期造成土)

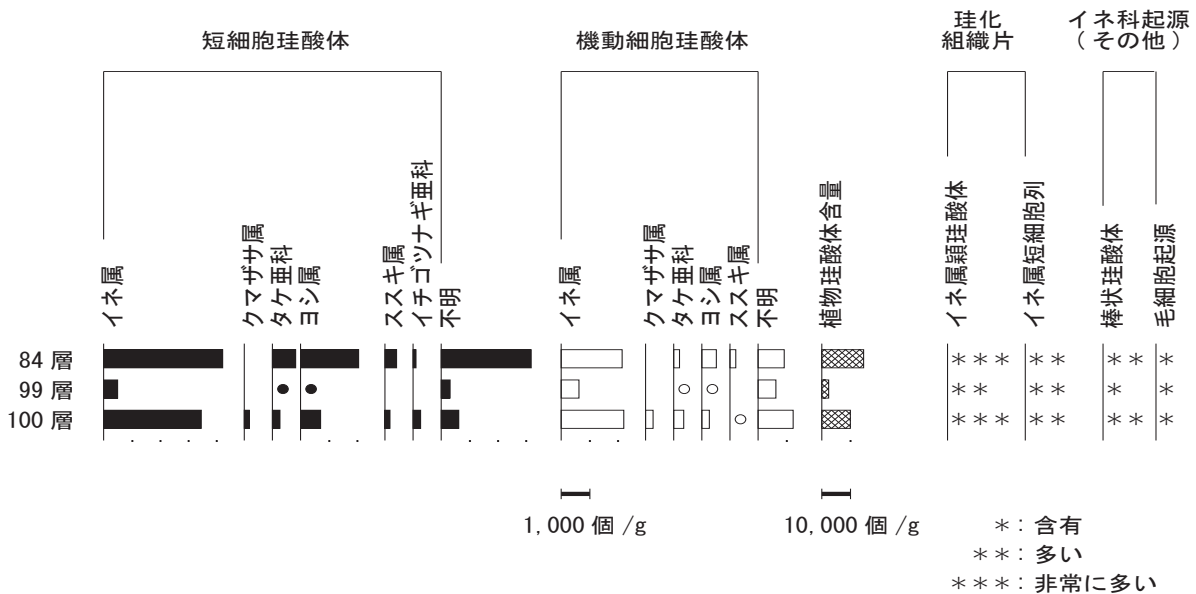
34層は暗褐色粘土質シルトで、43層に似るが、耕耘による擾乱に類似する団粒状の組織が43層より目立つ。腐植に富み、粘土化していることから土壌化の影響を強く受けていると考えられる。

(2) 珪藻分析



出現率は、総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は基数が100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第232図 花粉化石群集



乾土1gあたりの個数で示す。●○は100個未満を定性的に示す。

第233図 植物珪酸体群集

分析結果を第17表、第231図に示した。分析した3試料から珪藻化石は産出した。全体的に保存状態は、完形殻もあるが一部の殻は壊れており、普通～不良である。84層・99層・100層からは200個体以上産出した。産出した分類群は、淡水～汽水生種を主として、淡水生種、低率に海水生種、汽水生種、淡水～汽水生種を伴う種群で構成される。産出した種は、海水生種の *Paralia sulcata*、海水～汽水生種の *Cocconeis scutellum*、汽水生種の *Navicula peregrina*、淡水～汽水生種の *Anomooneis sphaerophora*、*Navicula veneta*、*Nitzschia palea*、淡水生種で流水不定性種の *Nitzschia umbonata*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys* 等である。

第18表 花粉分析結果

	南壁		
	84層	99層	100層
木本花粉			
モミ属	1	-	-
マツ属複雑管束亜属	4	-	-
マツ属 不明	4	-	-
スギ属	42	7	8
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	1	-	-
サワグルミ属—クルミ属	1	-	-
ハンノキ属	-	2	-
フナ属	1	-	1
コナラ属コナラ亜属	1	-	3
コナラ属アカガシ亜属	1	-	-
クリ属	2	-	-
ニレ属—ケヤキ属	-	4	-
草本花粉			
イネ属	22	-	-
イネ科	23	11	1
カヤツリグサ科	1	-	-
クワ科	4	1	1
ギンギン属	5	3	-
アカザ科	1	2	1
ナデシコ科	-	2	-
アブラナ科	3	4	-
ヨモギ属	1	-	1
キク科	1	-	1
不明花粉			
不明花粉	1	-	1
シダ植物胞子			
他のシダ植物胞子	28	15	13
合計			
木本花粉	58	13	12
草本花粉	61	23	5
不明花粉	1	0	1
シダ植物胞子	28	15	13
総花粉・胞子	147	51	30
寄生虫卵			
回虫卵	2	-	1
鞭虫卵	27	28	4

第19表 植物珪酸体含量

種類	南壁		
	84層	99層	100層
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ属	4,200	500	3,500
クマザサ属	-	-	200
タケ亜科	800	<100	300
ヨシ属	2,100	<100	700
ススキ属	400	-	200
イチゴツナギ亜科	100	-	300
不明	3,200	300	600
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ属	2,200	600	2,200
クマザサ属	-	-	300
タケ亜科	200	<100	400
ヨシ属	500	<100	300
ススキ属	200	-	<100
不明	900	600	1,200
合計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	10,800	1,000	5,700
イネ科葉身機動細胞珪酸体	4,000	1,400	4,500
植物珪酸体含量	14,800	2,400	10,200
珪化組織片			
イネ属穎珪酸体	***	**	***
イネ属短細胞列	**	**	**
イネ科起源(その他)			
棒状珪酸体	**	*	**
毛細胞起源	*	*	*

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)

<100:100個/g未満

—:未検出,* :含有,** :多い,*** :非常に多い

(3) 花粉分析

結果を第18表、第232図に示す。99層と100層は、花粉化石の産出が少ない。木本花粉ではスギ属、草本花粉ではイネ科などが検出される。84層では、木本花粉ではスギ属、草本花粉ではイネ属を含むイネ科が多い。この他、全ての層位から鞭虫卵が、84層では回虫卵が検出される。

(4) 植物珪酸体分析

結果を第19表、第233図に示す。植物珪酸体はいずれの試料からも検出され、保存状態も良い。100層では、栽培植物であるイネ属の産出が目立つ。イネ属には、珪化組織片として籾殻に形成される穎珪酸体や葉部の短細胞列も見られ、特に穎珪酸体が非常に多く検出され、短細胞列も多い。この他には、ヨシ属をはじめとして、クマザサ属を含むタケ亜科、ススキ属、イチゴツナギ亜科なども見られる。99層では植物珪酸体含量が少なく、イネ属の産出が目立つものの、ヨシ属やタケ亜科などが僅かに見られるに過ぎない。

84層では、100層と組成が類似する。すなわち、イネ属の産出が目立ち、特に穎珪酸体が非常に多く検出され、短細胞列も多い。この他に、ヨシ属、クマザサ属を含むタケ亜科、ススキ属、イチゴツナギ亜科なども見られる。

4. 考察

110層、105層は、弥生時代後期後葉の溝と考えられている。貝、木材、種実等を含む淘汰の悪い砂である。一方、生痕や擾乱といった堆積後の活動による痕跡もみられる。この時期の青谷上寺地遺跡は、地形的には氾濫低地や三角州であったと考えられる。陸化は弥生時代前期までにほぼ完了しており、後期にはいわゆる「弥生の小海退」による寒冷化の影響でさらに海水準が下がったことから、浅谷が形成されたと考えられている（安 2015）。110層、105層はこの時期の谷埋堆積物に類似する。溝内の埋積物には砂に混じって植物遺体や貝などが含まれることから、溝付近に生育していたものが流下して堆積したと思われる。さらに、二次的な擾乱による痕跡が認められることから、常に地下水位が高い嫌氣的な環境下に置かれていたわけではなく、乾湿を繰り返すような状態であったと考えられる。

100層ならびに99層の堆積構造は類似する。下位よりも粒径が細かく、腐植に富み、旧根もみられることから、表層を植物が被覆するような環境であったと思われる。また、平行葉理がみられ、材片なども検出される一方、旧根や擾乱がみられることから、常時水が存在していたわけではなく、乾湿を繰り返すような状況であったと思われる。珪藻分析の結果をみると、海水生種の *Paralia sulcata* は、内湾指標種群（小杉 1988）とされ、内湾水中を浮遊生活する種群である。また、本種の多産は、暖かい低鹹水を指標すると考えられている（Tanimura 1981）。海水～汽水生種の *Cocconeis scutellum* は、塩分濃度が12パーミル以上の水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群とされ、海水藻場指標種群（小杉 1988）と呼ばれている。汽水生種の *Navicula peregrina* は、中塩性（≒汽水性）およびアルカリ性であり、海域の沿岸部の潟湖や後背湿地などに多く認められる。淡水～汽水生種の *Anomoeoneis sphaerophora* は、電解質の豊富な電気伝導度の高い水域に生育する種として知られる。淡水～汽水生種の *Navicula veneta* は、広温性、電解質多い水域または汽水域、富栄養化の著しい水域で強腐水域まで耐えられるとされる。電解質の乏しい水域には生育できない（Lange-Bertalot 2001）とされる。電解質物質の豊富な水域から汽水域に普通にみられるほか、強度に富栄養化した時にもみられることから、汚濁に対する適応性が強い種とされている（Witkowski & Lange-Bertalot & Metzeltin 2000）。淡水～汽水生種とした *Nitzschia palea* は、好汚濁性種（Asai & Watanabe 1995）とされ、特に人為的な影響で汚濁した水域に特徴的に認められる種である。淡水生種で流水不定性種の *Nitzschia umbonata* は、強い汚濁域から貧腐水性水域まで広く分布する広適応性種である（渡辺ほか 2005）。*Hantzschia amphioxys* 等の陸生珪藻とは、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群（小杉 1986）である。珪藻分析の結果からみると、淡水～汽水生種の産出は、河口付近に近いことから、海水の影響を受けていたことが考えられる。また、汚濁性珪藻が特徴的に複数種産出していることから、人間を含む生物活動の影響によって、汚濁が進んだと思われる。また、陸生珪藻も産出することから、乾湿をくりかえすような状態が推定され、堆積構造や他の微化石の結果と調和的である。

植物珪酸体では、イネ属の産出が目立った。穎珪酸体も非常に多く検出され、短細胞列も多かった。この産状を見る限り、これらの溝が埋積する過程で稲籾殻や稲藁が混入しやすい状態にあったことが推定される。稲籾殻や稲藁は、稲作に伴って耕土に混入する場合が多い。また、これらは製品の材料や燃料材など生活資材として利用される場合もある。そのため、これらの溝の集水域に耕作域が存在していたか、あるいは生活資材として使われた稲籾殻や稲藁が存在した可能性がある。花粉化石でも

イネ科が検出されるが、量が少なく、保存状態が悪いことから、イネ属かどうかの判別は難しい。この時期は溝から人骨が検出されており、汚染の範囲内ではあるが鞭虫卵や回虫卵もみられ、珪藻は汚濁性種が多く、植物珪酸体から稲籾殻や稲藁の流入も推測される。このことから、溝をとりまく環境は人間活動に関連していたと思われる。

81層と84層は、弥生時代終末期後半の溝埋土と考えられている。基本的には99層、100層と変わらないが、大型の木材を含むことから、植物遺体の流入が多い状態であったと思われる。花粉化石をみると、木本花粉ではスギ属が多い。なお、スギ属花粉は、花粉生産量が多く、広葉樹の花粉より腐蝕に対する抵抗性が強い。このことから、実際の周辺植生よりもスギ属花粉の割合が高くなっている可能性が高い。なお、スギは、現在では山間部にその分布が限られているが、富山県入善町には低地にスギの天然林が存在しており、富山県魚津市の海底からはスギの埋没林が検出されている。また、北陸地方の遺跡からはスギの木製品や自然木が多数検出されていることから、以前は、日本海側を中心に、低地周辺にもスギが多く生育していたと考えられている（鈴木2002など）。珪藻分析の状況や花粉分析と植物珪酸体分析でイネ属亜が多い点、寄生虫卵が検出される点など100層・99層と類似点が多く、類似した環境であったと思われる、このような既存の青谷上寺地遺跡の古環境変遷（安2015）とも類似する。

43層、34層は、酸化鉄が多く、糸根状の旧根が多く、団粒状のシルトブロックがみられることから、耕耘が行われていた可能性が高く、人為的な土地改変や耕作が行われていたと考えられる。

II. 放射性炭素年代測定

1. 試料

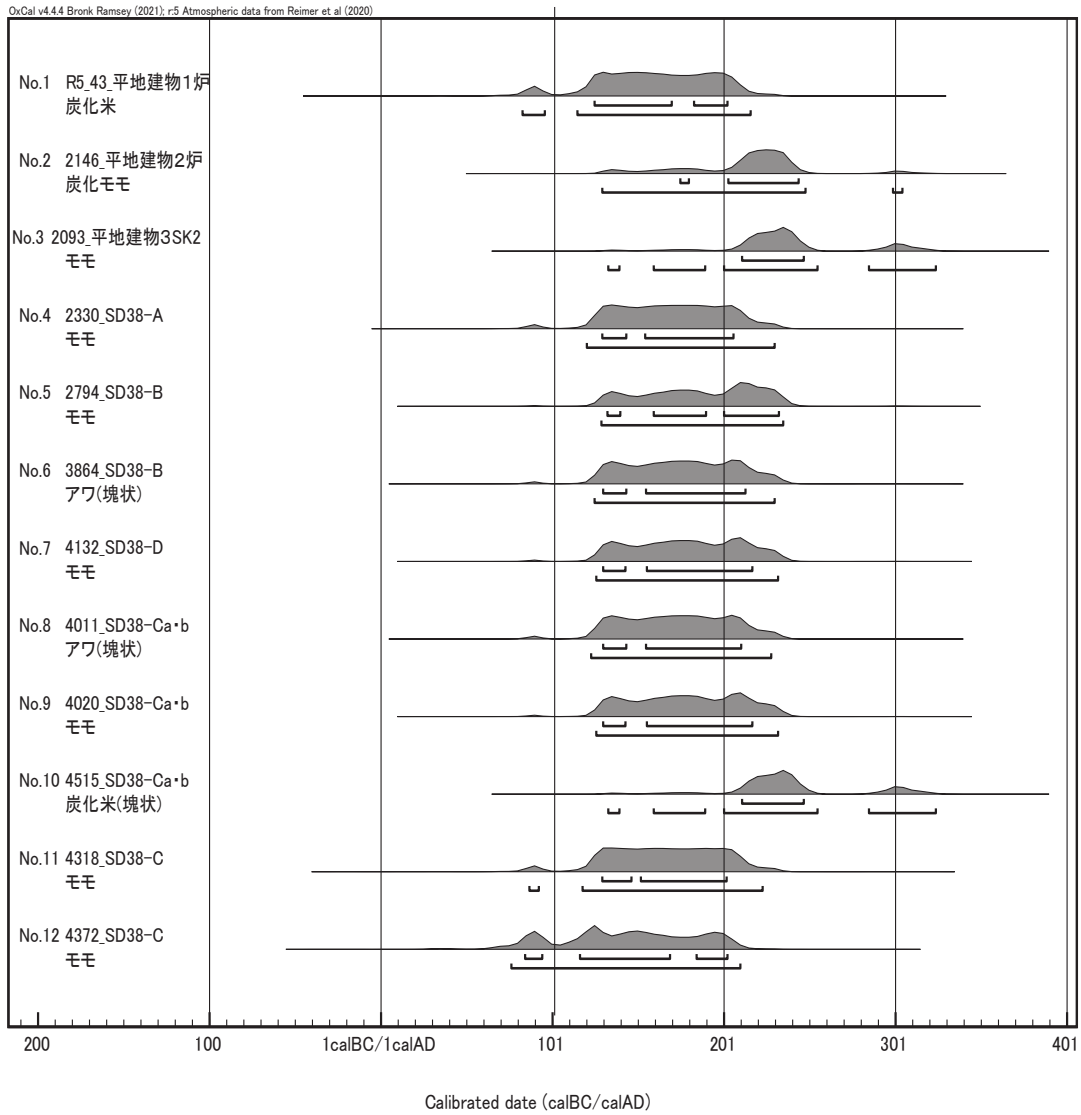
試料は、遺跡から出土した種実遺体12点である。試料の詳細は結果と合わせて第20表に示す。

2. 分析方法

モモの核ならびに炭化米および炭化した塊状のアワやイネは試料を必要量切り取り、さらに周囲の不純物を削り落とす。分析重量は乾燥重量で50mgを目安とする。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1 mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge 3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-II）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C 6等）、バックグラウンド試料（IAEA-C 1）の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver



第 234 図 暦年較正結果

& Polach 1977)。また、暦年較正用に一行目まで表した値も記す。暦年較正に用いる較正曲線は IntCal20 (Reimer et al.,2020) である。

3. 結果

結果を第 20 表、第 234 図に示す。いずれの試料も保存状態はよく、定法での処理 (AAA) を行うことができた。同位体補正を行った値は、R5_43_平地建物 1 炉が $1890 \pm 20BP$ 、2146_平地建物 2 炉が $1835 \pm 20BP$ 、2093_平地建物 3 SK 2 が $1820 \pm 20BP$ 、2330_SD38-A が $1875 \pm 20BP$ 、2794_SD38-B が $1855 \pm 20BP$ 、3864_SD38-B が $1865 \pm 20BP$ 、4132_SD38-D が $1865 \pm 20BP$ 、4011_SD38-Ca・b が $1870 \pm 20BP$ 、4020_SD38-Ca・b が $1865 \pm 20BP$ 、4515_SD38-Ca・b が $1820 \pm 20BP$ 、4318_SD38-C が $1880 \pm 20BP$ 、4372_SD38-C が $1905 \pm 20BP$ である。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期 (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。ソフトウェアは、Oxcal4.4

第20表 放射性炭素年代測定結果

No.	試料名	性状	方法	補正年代 BP (暦年較正用)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代							
						年代値					確率%	Code No.	
						σ	calAD	-	calAD	1825 - 1780			calBP
1	R5_43_平地建物1炉	炭化米	AAA	1890±20 (1889±20)	-27.94 ±0.28	σ	calAD 125	-	calAD 170	1825 - 1780	calBP	47.8	pal-15456 YU-21650
							calAD 183	-	calAD 203	1767 - 1748	calBP	20.5	
							calAD 83	-	calAD 96	1867 - 1854	calBP	4.1	
							calAD 115	-	calAD 216	1835 - 1734	calBP	91.3	
2	2146_平地建物2炉	炭化モモ	AAA	1835±20 (1833±20)	-26.22 ±0.27	σ	calAD 175	-	calAD 180	1775 - 1770	calBP	2.3	pal-15457 YU-21651
							calAD 203	-	calAD 244	1747 - 1706	calBP	66.0	
							calAD 130	-	calAD 248	1821 - 1702	calBP	94.2	
							calAD 299	-	calAD 305	1651 - 1646	calBP	1.2	
3	2093_平地建物3SK2	モモ	AAA	1820±20 (1819±20)	-29.32 ±0.22	σ	calAD 211	-	calAD 247	1739 - 1703	calBP	68.3	pal-15458 YU-21652
							calAD 133	-	calAD 140	1817 - 1811	calBP	0.7	
							calAD 160	-	calAD 190	1791 - 1761	calBP	4.3	
							calAD 201	-	calAD 255	1750 - 1695	calBP	74.2	
							calAD 285	-	calAD 324	1665 - 1626	calBP	16.3	
4	2330_SD38-A	モモ	AAA	1875±20 (1876±20)	-28.54 ±0.23	σ	calAD 130	-	calAD 144	1821 - 1807	calBP	14.7	pal-15459 YU-21653
							calAD 155	-	calAD 206	1796 - 1744	calBP	53.5	
							calAD 121	-	calAD 230	1830 - 1720	calBP	95.4	
							calAD 133	-	calAD 140	1818 - 1810	calBP	6.0	
5	2794_SD38-B	モモ	AAA	1855±20 (1854±20)	-28.37 ±0.26	σ	calAD 160	-	calAD 190	1791 - 1760	calBP	26.7	pal-15460 YU-21654
							calAD 201	-	calAD 233	1750 - 1718	calBP	35.6	
							calAD 129	-	calAD 235	1821 - 1715	calBP	95.4	
							calAD 130	-	calAD 144	1820 - 1807	calBP	12.8	
6	3864_SD38-B	アワ (塊状)	AAA	1865±20 (1867±20)	-28.95 ±0.3	σ	calAD 155	-	calAD 213	1795 - 1737	calBP	55.5	pal-15461 YU-21655
							calAD 125	-	calAD 230	1825 - 1720	calBP	95.4	
							calAD 130	-	calAD 143	1820 - 1807	calBP	11.6	
							calAD 156	-	calAD 217	1795 - 1733	calBP	56.6	
7	4132_SD38-D	モモ	AAA	1865±20 (1863±20)	-26.04 ±0.37	σ	calAD 126	-	calAD 232	1824 - 1718	calBP	95.4	pal-15462 YU-21656
							calAD 130	-	calAD 144	1820 - 1807	calBP	13.6	
							calAD 155	-	calAD 211	1795 - 1740	calBP	54.7	
							calAD 123	-	calAD 228	1827 - 1722	calBP	95.4	
8	4011_SD38-Ca*b	アワ (塊状)	AAA	1870±20 (1871±20)	-10.91 ±0.28	σ	calAD 130	-	calAD 143	1820 - 1807	calBP	11.6	pal-15463 YU-21657
							calAD 156	-	calAD 217	1795 - 1733	calBP	56.6	
							calAD 126	-	calAD 232	1824 - 1718	calBP	95.4	
							calAD 130	-	calAD 143	1820 - 1807	calBP	11.6	
9	4020_SD38-Ca*b	モモ	AAA	1865±20 (1863±20)	-26.14 ±0.32	σ	calAD 156	-	calAD 217	1795 - 1733	calBP	56.6	pal-15464 YU-21658
							calAD 126	-	calAD 232	1824 - 1718	calBP	95.4	
							calAD 211	-	calAD 247	1739 - 1703	calBP	68.3	
							calAD 133	-	calAD 140	1817 - 1811	calBP	0.7	
10	4515_SD38-Ca*b	炭化米 (塊状)	AAA	1820±20 (1819±20)	-31.09 ±0.27	σ	calAD 160	-	calAD 190	1791 - 1761	calBP	4.3	pal-15465 YU-21659
							calAD 201	-	calAD 255	1750 - 1695	calBP	74.2	
							calAD 285	-	calAD 324	1665 - 1626	calBP	16.3	
							calAD 130	-	calAD 147	1821 - 1804	calBP	17.6	
							calAD 152	-	calAD 202	1798 - 1748	calBP	50.6	
11	4318_SD38-C	モモ	AAA	1880±20 (1881±20)	-26.98 ±0.32	σ	calAD 87	-	calAD 93	1863 - 1858	calBP	1.3	pal-15466 YU-21660
							calAD 118	-	calAD 223	1832 - 1727	calBP	94.2	
							calAD 85	-	calAD 95	1866 - 1856	calBP	8.1	
							calAD 117	-	calAD 169	1834 - 1781	calBP	45.7	
12	4372_SD38-C	モモ	AAA	1905±20 (1904±20)	-26.63 ±0.30	σ	calAD 185	-	calAD 203	1766 - 1748	calBP	14.5	pal-15467 YU-21661
							calAD 77	-	calAD 210	1874 - 1740	calBP	95.4	
							calAD 185	-	calAD 203	1766 - 1748	calBP	14.5	
							calAD 185	-	calAD 203	1766 - 1748	calBP	14.5	

- 1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4)AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAはアルカリ濃度を薄めて処理したことを示す。
- 5)暦年の計算には、Oxcal v4.4を使用。
- 6)暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
- 7)較正データセットはIntcal20を使用。
- 8)較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9)統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である。

(Bronk,2009)を用いる。2 σ の値は、R5_43_平地建物1炉が calAD83～216、2146_平地建物2炉が calAD130～305、2093_平地建物3SK 2が calAD133～324、2330_SD38-A が calAD121～230、2794_SD38-B が calAD129～235、3864_SD38-B が calAD125～230、4132_SD38-D が calAD126～232、4011_SD38-Ca・b が calAD123～228、4020_SD38-Ca・b が calAD126～232、4515_SD38-Ca・b が calAD133～324、4318_SD38-C が calAD87～223、4372_SD38-C が calAD77～210である。

4. 考察

年代測定結果の暦年較正年代をみると、全ての試料が2～3世紀の年代を示す。なお、この時代の暦年較正曲線は、IntCal20とそれ以前の較正曲線の間はずれが生じているので、過去の分析した暦年代と比較する場合に注意が必要である。この差は、IntCal20では、新たに日本の弥生時代～古墳時代のデーターを採用したためである(Reimer et al.,2020)。当該期では、IntCal20で行った値が、それ以前の暦年較正曲線を使った場合に比べ最大100年ほどずれる場合があり、過去の測定結果と比較するためには、IntCal20で較正しなおすことが必要となる。

引用文献

- 安 昭炫,2015,青谷上寺地遺跡と周辺域の弥生時代の景観史.第四紀研究,54,311-321.
- Asai, K. and Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa.Diatom,10,35 – 47.
- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.
- 千木良 雅弘,1995,風化と崩壊.近未来社,204p.
- Desikachary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation,1-13, Plates,401-621.
- Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I),Almqvist&Wiksell,539p.
- Erdtman G.,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteridophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II),Almqvist&Wiksell,147p.
- Feagri K. and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.
- 藤木 利之・小澤 智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑.アクアコーラル企画,155p.
- Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.
- Hustedt, F., 1937-1938, Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I～III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.
- Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.
- Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von

- Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.
- 伊藤 良永・堀内 誠示,1989,古環境解析からみた陸生珪藻の検討－陸生珪藻の細分－.日本珪藻学会第10回大会講演要旨集,17.
- 伊藤 良永・堀内 誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.日本珪藻学誌,6,23-44.
- 小杉 正人,1986,陸生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望－.植生史研究,1,9-44.
- 小杉 正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用.第四紀研究,27,1-20.
- 小林 弘・出井 雅彦・真山 茂樹・南雲 保・長田 啓五,2006,小林弘珪藻図鑑.第1巻,(株)内田老鶴圃,531p.
- 近藤 鍊三,2010,プラント・オパール図譜.北海道大学出版会,387p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1985,Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica,9,250p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1986,Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(1): 876p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1988,Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(2): 596p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1990,Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3): 576p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1991,Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4): 437p.
- Lange-Bertalot, H., Witowski, A., and Metzeltin, D., 2000,ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA Annotated diatom micrographs. Diatom Flora of Marine Coasts,1,925p.
- 三好 教夫・藤木 利之・木村 裕子,2011,日本産花粉図鑑.北海道大学出版会,824p.
- 中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk R. C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grottes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon J., Turney C., Wacker L., Adolphi F., Büntgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Köhler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A. and Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), p.725-757.
- 島倉 巳三郎,1973,日本植物の花粉末形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.
- 鈴木 三男,2002,日本人と木の文化.八坂書房,255p.
- Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ^{14}C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- Tanimura, Y., 1981, Late Quaternary Diatoms of the Sea of Japan, Tohoku Univ. Sci. Rep. 2nd ser. (Geol.), 51, 1-36.
- 渡辺 仁治・浅井 一視・大塚 泰介・辻 彰洋・伯耆 晶子,2005,渡辺仁治(編)淡水珪藻生態図鑑.784pp.内田老鶴圃,東京.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

第2節 青谷上寺地遺跡出土材の酸素同位体比年輪年代測定

佐野 雅規（国立歴史民俗博物館）、濱田 竜彦（鳥取県）

青谷上寺地遺跡のSD38-Ca・bから出土した木材の年代を酸素同位体比年輪年代法で測定した。酸素同位体比年輪年代法は、従来年輪幅を用いて行われていた年代既知試料群による年輪データ（標準年輪曲線）と年代未知試料の年輪データの比較照合作業を、年輪に含まれるセルロースの酸素同位体比を対象にして行う。従来の年輪幅に基づく方法は、ヒノキやスギといった特定の樹種からなる、年輪数が100年を超えるような木材にしか適用できなかったが、本方法は年輪数が50年程度あれば広葉樹を含むあらゆる樹種に適用できる（Sano et al. 2022）。

本研究では、試料に含まれる年輪数が50年を超える3点（TTAO 04361、TTAO 04307、TTAO 04307）を分析の対象とした。これらは、いずれも建築材の細片とみられる木材である。まず、ダイヤモンドホイールソーを用いて木材を1mm厚の薄板に切り分けた。次いで、薄板の形状を保ったまま各種の化学処理を施しセルロースを抽出した（Kagawa et al., 2015）。処理後のセルロース板を顕微鏡で観察しながら、1年層ずつ重量が100～300マイクログラムになるように年輪を切り分け銀箔に封入した。なお、分析対象とした3点について、セルロース板の収縮による年輪判別の難しい部位については切り分けせず、代わりに木材の状態的年輪数を数え、酸素同位体比による年代照合の結果と組み合わせて試料の末端年代を決定した。サンプルの酸素同位体比（ $\delta^{18}\text{O}$ ）は、熱分解式の元素分析計（EA IsoLink HO, Thermo Fisher Scientific）を連結した同位体比質量分析計（Delta Q, Thermo Fisher Scientific）を用いて測定した。標準物質の繰り返し測定から得た分析精度（標準偏差）は0.2%以下であった。

各サンプルの酸素同位体比の時系列データに含まれる長周期の変動パターンは年代照合の障壁となるので、11年の移動平均を当てはめて実測値からの偏差を求め、短周期の成分を抽出した。年代照合には、公表済みのデータを紀元前1085年まで延長させた最新の標準年輪曲線を使用した（Sano et al. 2022, Nakatsuka et al. 2020）。この標準曲線は、西日本各地から採取した木材の酸素同位体比を元に構成されており、西日本の出土材の年代決定に適している。この標準曲線についても長周期の変動成分が取り除かれており、サンプルと同じ短周期の成分が保持されている。青谷上寺地遺跡の年代観は、弥生時代前期の終わり頃から古墳時代前期に限定されているので、年代照合の探索範囲を紀元前700年から紀元500年までの1200年間に絞った。年代決定の評価には、1階の自己相関を補正したt値（ t_{adj} ）、1/p値（ボンフェローニ法で多重比較補正したp値の逆数）、IF値（isolation factor: 1番目と2番目に高い照合結果が得られた年代でのp値の比）を用いた。いずれの数値も大きいほど年代照合の確度が高まるが、パターンマッチングの性質上、年代決定の成否を峻別する値は定義できない。そこで、先行研究で使用されている $1/p > 100$ 、 $IF > 10$ を年代決定の成否の基準とし（Loader et al. 2019）、これを満たした場合、高い信頼度で年代決定に至ったと便宜的に判断した。

第21表に年代照合の結果を示す。3個体とも（TTAO4307, TTAO4361, TTAO3727）先に設けた統計基準を上回り年代決定に至った。年代照合に成功した各個体のt値の分布（上段）、および標準曲線との変動パターンの比較（下段）を第235図に示す。年代決定に成功した場合、ただ1つの年代においてt値の明瞭なピークが出現する。この年代が、酸素同位体比データの末端年代に一致する。

第21表 酸素同位体比による年輪年代照合の結果

ID	年輪番号	$\delta^{18}\text{O}$ 測定年輪	n	r	t_{adj}	1/p	IF	$\delta^{18}\text{O}$ 年代	サンプル 末端年代
TTAO4361	1-145	95-145	51	0.648	5.58	1161	41	30	124
TTAO4307	1-135	4-135	132	0.553	7.12	>1M	>1000	81	84
TTAO3727	1-59	4-59	56	0.591	4.86	114	121	30	33

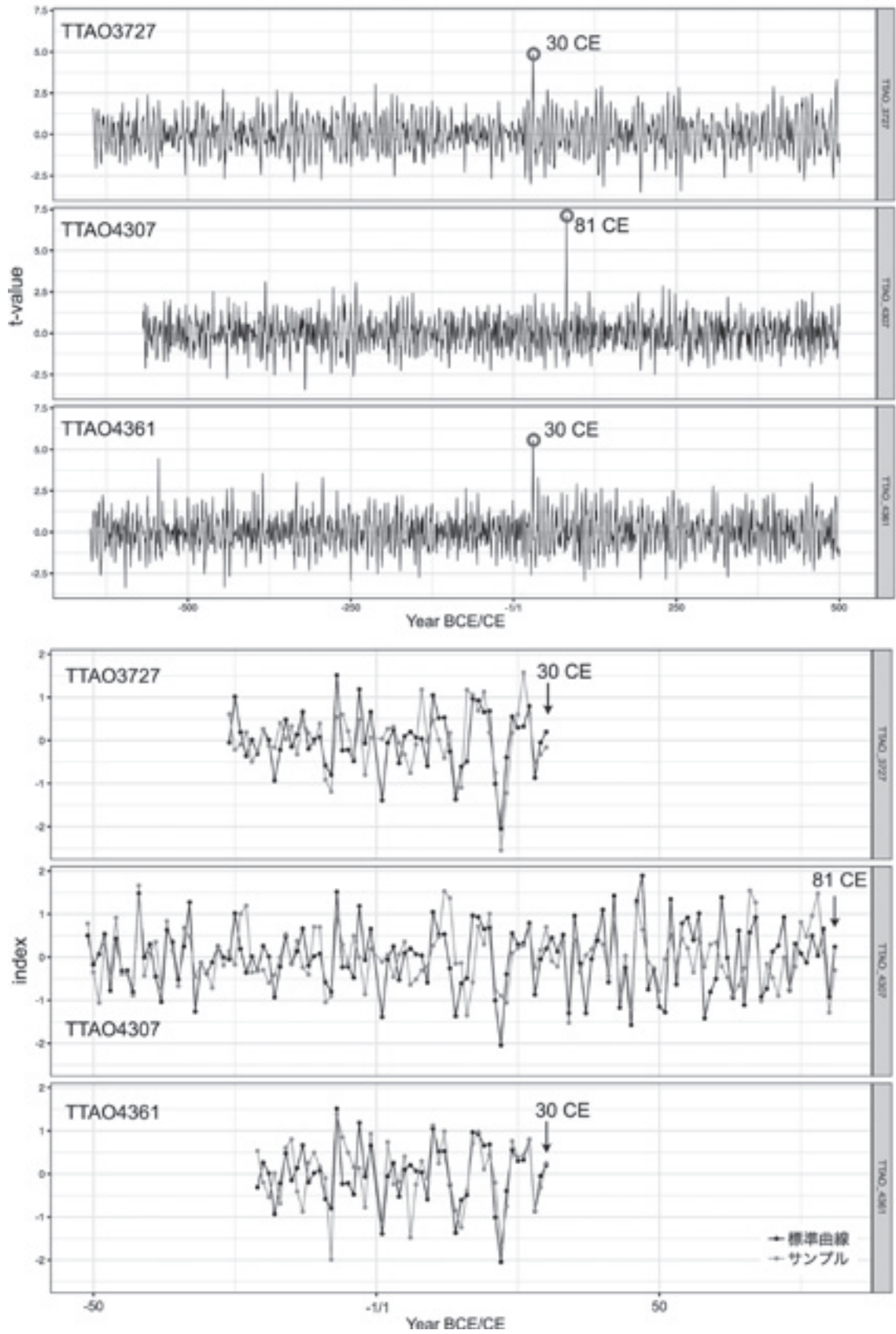
注：酸素同位体比を測定した年輪数 (n), 標準曲線とサンプルの相関係数 (r), 自己相関を補正した t 値 (t_{adj}), ボンフェローニ法で多重比較補正した p 値の逆数 (1/p), 1 番目と 2 番目に高い照合結果が得られた年代の p 値の比 (IF), 酸素同位体比を測定した年輪の一番外側の年代 ($\delta^{18}\text{O}$ 年代), 酸素同位体比を測定しなかった年輪を加味したサンプルの最終的な年輪年代 (サンプル末端年代). いずれのサンプルも樹皮を含まないため枯死年は不明.

本研究では、木材の劣化のため、全ての年輪について酸素同位体比を測定できていない。したがって、実際のサンプルの末端年代は、第21表に示したように、TTAO4361は弥生時代後期中葉末頃の年代となる124年、TTAO4307は同前葉末頃の年代となる西暦48年、TTAO3727は同前葉初期頃の年代となる西暦33年となった。なお、いずれのサンプルも樹皮が確認できなかったことから、樹木としての枯死年は、これらの年代よりも後になる。

以上の結果をまとめると、分析に用いた3個体について設定した統計基準を上回り、年輪年代を決定することができた。これらサンプルの最外年輪は弥生時代後期前葉から中葉の年代となる西暦33～124年を示しているが、いずれのサンプルも樹皮を含んでいなかったため、樹木が枯死した年代は、これらの年代に数年から数十年を追加する必要がある。よって、最外年輪が弥生時代後期中葉末頃の年代を示すTTAO4361は同後期後葉、同前葉末頃の年代を示すTTAO4307は同中葉、同前葉初頭の年代を示すTTAO3727は同前葉に伐採されたものと考えられる。

引用文献

- Kagawa, A., Sano, M., Nakatsuka, T., Ikeda, T., Kubo, S., 2015. An optimized method for stable isotope analysis of tree rings by extracting cellulose directly from cross-sectional laths, *Chemical Geology* 393–394, 16–25.
- Sano, M., Li, Z., Murakami, Y., Jinno, M., Ura, Y., Kaneda, A., Nakatsuka, T., 2022. Tree ring oxygen isotope dating of wood recovered from a canal in the ancient capital of Japan, *Journal of Archaeological Science: Reports* 45, 103626.
- Nakatsuka, T., Sano, M., Li, Z., Xu, C., Tsushima, A., Shigeoka, Y., Sho, K., Ohnishi, K., Sakamoto, M., Ozaki, H., Higami, N., Nakao, N., Yokoyama, M., Mitsutani, T., 2020. A 2600-year summer climate reconstruction in central Japan by integrating tree-ring stable oxygen and hydrogen isotopes, *Clim. Past* 16, 2153–2172.
- Loader, N.J., Mccarroll, D., Miles, D., Young, G.H.F., Davies, D., Ramsey, C.B., 2019. Tree ring dating using oxygen isotopes: a master chronology for central England, *Journal of Quaternary Science* 34, 475–490.



設定した統計基準を上周り年代決定に成功した3個体（TTA04361, TTA04307, TTA03727）
 上段：t 値の分布，下段：標準曲線とサンプルの酸素同位体比変動パターンとの比較

第 235 図 酸素同位体比年輪年代法による年代照合の結果

第3節 青谷上寺地遺跡第20次発掘調査炭化米ブロックに係る自然科学分析

第1項 構造分析

株式会社パレオ・ラボ

三谷 智広・森 将志・バンダリ スダルシャン・米田 恭子

1. はじめに

鳥取市青谷町青谷に所在する青谷上寺地遺跡は、青谷平野のほぼ中央部に位置する。遺跡では、主に弥生時代前期～後期の遺構が検出されている。ここでは、青谷上寺地遺跡から出土した炭化種実塊について、X線CT撮影により内部構造を観察した。なお、同一試料に対して放射性炭素年代測定、種実同定、プラント・オパール分析も行われている（別項参照）。

2. 試料と方法

試料は、溝SD38-Bの最上層から出土した、炭化種実塊1試料である（試料No. 1）。放射性炭素年代測定の結果、弥生時代後期前半～末に相当する暦年代が得られている。X線CTは、奈良文化財研究所が有するマイクロフォーカスX線CT（SMX-100CT-D：島津製作所製）を用いて撮像した。撮像条件は第22表の通りである。撮像にあたっては、被検体が炭化物であり、全体の密度構成が低いと予想されたため、炭化種実塊が可能な限り低密度物質に干渉されず、かつ安定して設置できるように専用の治具をウレタンフォームで作成した。撮像後は、通常の再構成と3次元（バインド）構成を行ったのち、ExFact ver.2.1を用いて3次元レンダリングを行い、内部構造の観察を行った。

3. 結果

以下、X線CT撮影を行った試料について記載し、PL112・113に画像を示す。なお、表面観察で同定された種子は、いずれもイネ炭化種子（穎果）であった（第2項参照）。種実塊の写真や詳細な大きさについては、種実同定の項に掲載している。試料表面には、わずかに湾曲する平滑な面が確認された。この平滑面には、イネ科とみられる平行脈のある葉が2枚付着している。外部形態は、この植物の葉が付着する最も広い面を基準に、Z軸のプラス方向に向かって少しずつすぼまるような形態となり、XZ断面は三角形状を呈する。植物の葉は、ササのような幅広の葉と考えられ、こうした植物の葉の上に炭化種子塊が置かれていたか、あるいは何らかの理由で葉が押し当てられる状況になったと推察される。また、わずかに湾曲する形状を考えると、容器の内面に接していた可能性も考えられる。内部構造の観察の結果、種子間に空隙はほぼなく、種子が互いに変形しながら密着している状況が確認された。植物の葉のある面の種子の粒は潰れており、形状を保っていない（PL112- 2d、PL113- 4dなど）。内部の種子も、外面で観察できるイネ炭化種子（穎果）と同様の大きさと形態であり、明らかに異なる形態を示す箇所はなかった。なお、内部が空洞になっている種子が多く見受けられた。

第22表 X線CT撮影対象試料および撮像条件

試料 No.	試料	出土遺構	層位	推定時期	長軸 (mm)	短軸 (mm)	厚さ (mm)	X線管電圧 (kV)	X線管電流 (μ A)	ボクセルサイズ (mm/voxel)	備考
1	炭化種実塊	溝SD-38B	最上層	弥生時代終末期	52.8	33.4	37.0	70	60	0.025	葉痕あり

4. 考察

遺跡から出土した炭化米塊の構造については、炊飯された米が容器に入れられたり、握られたりした場合、塊の表面付近の米粒同士は糊着して変形し、密度が高くなるのに対し、炭化米塊の内部の種子は比較的粒の形状を保つとされている（佐々木ほか 2009）。今回の炭化種実塊で種子が糊着し、密着している様子が確認され、植物の葉のある面では種子が潰れて形状を保っていなかった。

また、外面観察による種実同定の結果、同定可能な残存状態の種実すべてが栽培植物のイネ炭化種子（穎果）であった（第2項参照）。内部観察でも、イネと類似する形態の楕円体のみが確認され、明らかに異なる種類と考えられる形態は見られなかった。観察できる範囲では糊や糊殻はなく、種子のみで、膨張し、やや丸みを帯びている。イネ種子は、炊飯など調理された状態であった可能性がある。また、種子と種子が互いに密着して変形している様子からも、やわらかい状態でくっついて塊になったと推測される。本来の形状は不明であるが、わずかに湾曲する平滑な面が認められるため、やわらかく調理された米が、ササのような植物の葉の上に置かれ、さらに何らかの容器に入れられた、もしくは置かれた可能性がある。また、調理後～炭化までの段階で、ご飯が植物や何らかの平坦面に押し当てられる状況になった可能性や、手などで成形された可能性など様々な状況が想定されるが、現段階では不明である。

弥生時代において、穀類が炭化した塊の状態出土した類例としては、奈良県唐古・鍵遺跡や新潟県千種遺跡、神奈川県砂田台遺跡、久門寺遺跡、真田北金目遺跡、石川県杉谷チャノバタケ遺跡などの例がある。唐古・鍵遺跡のように土器内で炭化した例や、真田北金目遺跡のようにかごの痕跡が残るものなどがあり、調理された状態の炭化米の出土事例も多い（横浜市歴史博物館 2019）。

なお、各種子の内部が空洞になっている理由については現段階で不明であるが、米の品種とその炊飯方法によっては、米内部が空洞となる可能性が考えられる。例えば、米を炊飯する民族事例を分析した小林（2014）によれば、「米品種の粘り気度が低くなるほど（中略）、米に対する水量が増し、かつ茹で時間が長くなる傾向が見出され」、「粘り気の弱い米品種ほど、多めに水を入れて長時間茹でることにより大きく膨張させ、その分、内部をスカスカに炊き上げる」、といった報告がある。弥生時代の炊飯方法は湯取り法と考えられており、粘り気の少ない米品種の炊飯方法として用いられる（小林 2017）。弥生時代の米の品種が粘り気の少ない米であったとすれば、米の内部が空洞になった理由は、多めの水で長時間茹でたためとも考えられよう。

最後に、奈良文化財研究所の村田 泰輔氏には、マイクロフォーカス X 線 CT 分析装置による撮影から解析にかけて、多大なご指導とご教示をいただいた。末筆ながら、ここに感謝申し上げます。

引用・参考文献

小林 正史（2014）ススコゲ観察による弥生・古墳時代の炊飯方法と米タイプの復元

—米品種交代仮説の提唱—。古代文化, 66-1, 17-38.

小林 正史（2017）鍋の形・作りの変化。小林正史編「モノと技術の古代史 陶芸編」：9-55, 吉川弘文館。

佐々木 由香・バンダリ スダルシャン・米田 恭子・村田 健太郎・小石川 篤（2009）北川表の上遺跡出土炭化種実同

定および炭化種実塊の X 線 CT 画像解析による検討。財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編「港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 42 北川表の上遺跡」：423-435, 横浜市教育委員会。

横浜市歴史博物館（2019）おにぎりの文化史。127p, 河出書房新社。

第2項 種実同定

株式会社パレオ・ラボ バンダリ スタルシャン

1. はじめに

鳥取市青谷町青谷に所在する青谷上寺地遺跡は、青谷平野のほぼ中央部に位置する弥生時代前期～後期の集落跡である。ここでは、遺跡から出土した炭化種実塊の同定結果を報告する。なお、同一試料に対して放射性炭素年代測定、X線CT画像解析、プラント・オパール分析も行われている（別項参照）。

2. 試料と方法

試料は、溝 SD38-B の最上層において、肉眼で確認され、採取された炭化種実塊 1 試料である。なお、この炭化種実塊から一粒の炭化種実を取り出し、放射性炭素年代測定を行った。その結果、試料 No. 1 (PLD-54117) は弥生時代終末期に相当する暦年代を示した。放射性炭素年代測定試料の採取位置および一粒の炭化種実の写真は PL114 に示した。

炭化種実塊および炭化種実の同定と観察は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。同定された試料は、鳥取県立青谷かみじち史跡公園に保管されている。

3. 結果

同定した結果、炭化種実塊からは草本植物のイネ炭化種子（穎果）（塊を含む）のみが確認できた。

次に、得られた分類群の記載を行い、PL114 に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠する。

(1) イネ *Oryza sativa* L. 炭化種子（穎果）塊 イネ科

種子は、やや変形しており、完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は長楕円形。表面に縦方向の2本の浅い溝がわずかに見られる。一端に胚があるが、残存していない。図版に掲載した炭化種子塊の大きさは、長軸 52.8mm、短軸 37.0mm、厚さ 33.4mm。

4. 考察

溝 SD38-B の最上層から出土した炭化種実塊を同定した結果、同定できたのは栽培植物のイネ炭化種子のみであった。イネ炭化種子塊のイネ種子は、いわゆる炭化米の状態、塊では種子同士が糊着しており、多くの種子は、粒の形状がはっきりとは確認できなかった。観察可能な種子の一端には胚が脱落した凹みがあり、精米されたコメの可能性もある。膨張や潰れなどにより著しく変形している種子も含まれていたため、調理中ないし調理後のご飯と判断された。イネ炭化種子塊は、一面が平らで、葉が付着しており、調理後のご飯が葉の入った容器に入れられたり、葉で包まれたりしていた可能性がある。プラント・オパール分析によると、葉はネザサ節型のササ類の可能性もある（第3項参照）。

引用文献

米倉 浩司・梶田 忠（2003-）BG Plants 和名-学名インデックス (YList), <http://ylist.info>

第3項 付着した葉の植物珪酸体分析

株式会社パレオ・ラボ 米田 恭子・森 将志

1. はじめに

青谷上寺地遺跡で取り上げられた炭化種実塊の一面には、イネ科とみられる平行脈のある葉が2枚付着していた。以下では、葉の種類を調べる目的で、植物珪酸体分析を行った。なお、炭化種実塊については、放射性炭素年代測定とX線CT画像解析、種実同定も行われており、炭化種実塊はイネと同定され、弥生時代終末期に相当する年代値が得られている（第4項参照）。

2. 試料と方法

炭化種実塊に付着していた葉は2枚あり、1枚の残存幅が32mm、平行脈が18条観察される。もう1枚は、残存幅が30mmで、平行脈が14条観察される。なお、平行脈の幅は、最大2.3mmほどである。このうち1枚の葉を採取し、分析に供した。試料採取位置を写真PL115-1に示す。植物珪酸体の抽出は、以下の手順で行った。まず、任意の箇所をメスで剥離し、次に、電気炉を用いて灰化した。灰化する工程は、藤原（1976）を参考にした。はじめは毎分5℃のペースで温度を上げ、100℃において15分ほどその温度を保ち、その後毎分2℃のペースで550℃まで温度を上げ、6時間温度を保持し、灰化を行った。灰化した試料は、グリセリンで封入して、生物顕微鏡で検鏡した。

3. 観察の結果

観察された植物珪酸体を第23表およびPL115-2～5に示した。

連結した状態のネザサ節型の機動細胞珪酸体が観察された。また、単体の状態のイネ機動細胞珪酸体とヨシ属機動細胞珪酸体も含まれていた。このほかに、棒状型植物珪酸体が観察された。棒状型珪酸体については、すべてのイネ科植物に類似した形態の植物珪酸体が出現するため（近藤2010）、形状からの同定は困難である。

4. 考察

青谷上寺地遺跡の炭化種実塊に付着した葉について植物珪酸体分析を行った結果、イネとネザサ節型、ヨシ属の機動細胞珪酸体が観察された。

通常、堆積物から検出される機動細胞珪酸体は単体の状態である。よって、今回観察されたイネとヨシ属の機動細胞珪酸体については、葉に付着した堆積物由来と考えられる。

一方、ネザサ節型の機動細胞珪酸体は連結した状態を保っており、炭化種実塊に付着した葉そのものから得られたと考えられる。炭化種実塊の一面に付着していた葉は、ケネザサやゴキタケなどのネザサ節型のササ類である可能性がある。

第23表 分析試料と植物珪酸体の検出状況

分析No.	遺跡	試料	時期	機動細胞珪酸体						棒状型珪酸体
				イネ		ネザサ節型		ヨシ属		
				単体	連結	単体	連結	単体	連結	
1	青谷上寺地遺跡	炭化種実塊付着葉	弥生時代終末期	○	-	-	○	○	-	○

引用文献

藤原 宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—, 考古学と自然科学, 9, 15-29.
 近藤 鍊三 (2010) プラント・オパール図譜. 387p, 北海道大学出版会.

第4項 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・加藤 和浩・佐藤 正教・廣田 正史・山形 秀樹・Zaur Lomtadze・三谷 智広

1. はじめに

青谷上寺地遺跡第20次調査で出土した試料について、加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、炭化種実塊から採取した炭化種実1点 (PLD-54117) である。

測定試料の情報、調製データは第24表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

第25表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ¹⁴C年代、第236図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。¹⁴C年代は AD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代 (yrBP) の算出には、¹⁴Cの半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また、付記した ¹⁴C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ¹⁴C年代がその ¹⁴C年代誤差内に入る確率が 68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ¹⁴C濃度が一定で半減期が 5568年として算出された ¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い (¹⁴Cの半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正には OxCal4.4 (較正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲

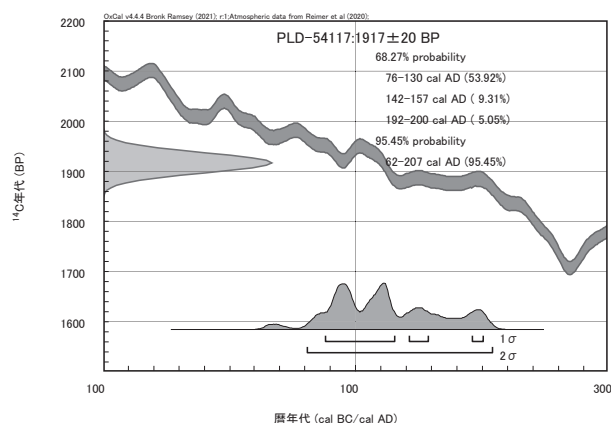
第24表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-54117	遺跡名: 青谷上寺地遺跡	種類: 炭化種実 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)

第25表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年較正した年代範囲	
				1 σ 暦年較正範囲	2 σ 暦年較正範囲
PLD-54117	-25.88 \pm 0.22	1917 \pm 20	1915 \pm 20	76-130 cal AD (53.92%) 142-157 cal AD (9.31%) 192-200 cal AD (5.05%)	62-207 cal AD (95.45%)

は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年較正範囲であり、同様に2 σ 暦年較正範囲は95.45%信頼限界の暦年較正範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年較正が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。



第236図 暦年較正結果

4. 考察

測定結果を2 σ 暦年較正範囲(確率95.45%)に着目してみると、炭化種実塊の炭化種実1点(PLD-54117)は62-207 cal AD (95.45%)で、1世紀後半～3世紀初頭の暦年較正を示した。弥生時代の暦年較正について、藤尾(2013)を参照すると、弥生時代後期前半～末に相当する。

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

藤尾 慎一郎 (2013) 弥生文化像の新構築. 275p, 吉川弘文館.

中村 俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

第4節 青谷上寺地遺跡出土木製品の樹種調査結果

(株) 吉田生物研究所

1. 試料

試料は青谷上寺地遺跡から出土した木製品 22 点、編組製品 2 点の計 24 点である (第 26 表)。

2. 観察方法

No. 1～7, 9～24 は、剃刀で木口 (横断面)、柁目 (放射断面)、板目 (接線断面) の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した後、顕微鏡下での観察により同定した。No. 8: 縄は、資料から長さ数 mm の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、横断面の薄片プレパラートを作製した後、顕微鏡下及び目視での観察により同定した。なお No.12: 琴は、本体と部材の 2 箇所採取しており、また遺物の状態により No.10,12 部材は木口の採取が出来なかった。

3. 結果

樹種同定結果 (針葉樹 3 種、広葉樹 4 種、イネ類 2 種) を第 26 表と顕微鏡写真 PL116～123 を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) イチイ科カヤ属カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.)

遺物 No.10 (W75), 17 (W70)、写真 No.10 (PL119), 17 (PL121)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。晩材部は狭く年輪界は比較的不明瞭である。軸方向柔細胞を欠く。柁目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で 1 分野に 1～4 個ある。仮道管の壁には対になった螺旋肥厚が存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。カヤは本州 (中・南部)、四国、九州に分布する。

2) イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ (*Cephalotaxus Harringtonia* K. Koch f. *drupacea* Kitamura)

遺物 No.15 (W94)、写真 No.15 (PL121)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は漸進的で、晩材の幅は非常に狭く、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柁目では放射組織の分野壁孔はトウヒ型で 1 分野に 1～2 個ある。仮道管内部には螺旋肥厚が見られる。短冊形をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続 (ストランド) して存在する。板目では放射組織はほぼ単列であった。イヌガヤは本州 (岩手以南)、四国、九州に分布する。

3) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

遺物 No. 7 (W65), 12 本体 (W134), 12 部材 (W134), 13 (W68), 14 (W38), 22 (W218)

写真 No. 7 (PL117), 12 本体 (PL119), 12 部材 (PL120), 13 (PL120), 14 (PL120), 22 (PL123)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柁目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で 1 分野に 1～3 個ある。板目では放射

組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

4) ブナ科コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*)

遺物 No. 6 (W195)、写真 No. 6 (PL117)

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管 ($\sim 200 \mu\text{m}$) が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1～3細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州 (宮城、新潟以南)、四国、九州、琉球に分布する。

5) ニレ科エノキ属 (*Celtis sp.*)

遺物 No. 2 (W 4)、写真 No. 2 (PL116)

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管 ($\sim 230 \mu\text{m}$) が数列で孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が多数集まって円形、斜線状の集団管孔を形成し、花綵状に配列している。放射組織は1～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏型のものとして8～10細胞列の大型のものがある。大型の放射組織は周囲を軸方向に長くやや大型の細胞 (鞘細胞) に取り囲まれている。エノキ属はエノキ、エゾエノキ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

6) クワ科クワ属 (*Morus sp.*)

遺物 No. 3 (W220), 4 (W139), 9 (W73), 11 (W137), 16 (W71), 18～21 (W44・50・219・149)

写真 No. 3 (PL116), 4 (PL117), 9 (PL118), 11 (PL119), 16 (PL121), 18～21 (PL122・123)

環孔材である。木口では大道管 ($\sim 280 \mu\text{m}$) が年輪界にそって1～5列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が2～6個、斜線状ないし接線状、集合状に不規則に複合して散在している。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。小道管には螺旋肥厚もある。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管内には充填物 (チロース) が見られる。板目では放射組織は1～6細胞列、高さ $\sim 1.1\text{mm}$ からなる。単列放射組織はあまり見られない。クワ属はヤマグワ、ケグワ、マグワなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

7) クロウメモドキ科ケンボナシ属ケンボナシ (*Hovenia dulcis Thunb.*)

遺物 No. 5 (W184)、写真 No. 5 (PL122)

環孔材である。木口ではやや大きい道管 ($\sim 300 \mu\text{m}$) が2～3列でやや疎に孔圏部を形成する。孔圏外では厚壁の小道管が2～数個複合して散在している。軸方向柔細胞は道管のまわりにあつまっている (周囲状柔細胞)。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1～6細胞列、高さ $\sim 950 \mu\text{m}$ からなる。ケンボナ

シは本州、四国、九州に分布する。

8) イネ科タケ亜科 (Subfam. Bambusoideae)

遺物 No. 1 (Ba 3)、写真 No. 1 (PL116)

横断面では維管束がみられる。放射断面、接線断面では厚壁繊維の組織やその他の基本組織の細胞が稈軸方向に配列している。タケ亜科は熱帯から暖帯、一部温帯に分布する。

9) イネ科イネ属イネ (*Oryza sativa*)

遺物 No. 8 (Ba 2), 23 (Ba 1), 3 (W220), 24 (Ba 4)、写真 No. 8 (PL118), 23 (PL123), 24 (PL123)

横断面では撚られている為、細胞の配列が判る断面は確認出来ないが草本類と思われる細胞の連なりが二つ確認できる。また、実体顕微鏡下での表面観察から、直径約 3, 4 mmの茎の表面に畝状の隆起が縦方向に多数観察された。以上から遺物はイネ亜科の植物と考えられ、茎の太さからイネが使用されたと推察される。

参考文献

- 林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所 (1991)
 伊東 隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I ~ V」京都大学木質科学研究所 (1999)
 島地 謙・伊東 隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版 (1988)
 北村 二郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編 I・II」保育社 (1979)
 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)
 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-Fi1

第 26 表 樹種同定の結果

No.	種類	掲載番号	樹種	No.	種類	掲載番号	樹種
1	かご	Ba3	イネ科タケ亜科	12	琴 (本体)	W134	スギ科スギ属スギ
2	椀・杯形容器	W 4	ニレ科エノキ属		琴 (部材)		スギ科スギ属スギ
3	蓋	W220	クワ科クワ属	13	不明木製品	W68	スギ科スギ属スギ
4	椀・杯形容器	W139	クワ科クワ属	14	建築材	W38	スギ科スギ属スギ
5	杯	W184	クロウメモドキ科	15	匙	W94	イヌガヤ科イヌガヤ
			ケンボナシ属				属イヌガヤ
6	鉢	W195	ケンボナシ	16	高杯	W71	クワ科クワ属
			ブナ科コナラ属	17	高杯	W70	イチイ科カヤ属カヤ
7	腰掛	W65	アカガシ亜属	18	蓋	W44	クワ科クワ属
			スギ科スギ属スギ	19	容器	W50	クワ科クワ属
8	縄	Ba2	イネ科イネ属イネ	20	蓋	W219	クワ科クワ属
9	容器	W73	クワ科クワ属	21	木庖丁	W149	クワ科クワ属
10	高杯	W75	イチイ科カヤ属カヤ	22	蓋	W218	スギ科スギ属スギ
11	椀・杯形容器	W137	クワ科クワ属	23	縄	Ba1	イネ科イネ属イネ
			クワ科クワ属	24	縄	Ba4	イネ科イネ属イネ

第5節 青谷上寺地遺跡出土木製品の塗膜構造調査

(株)吉田生物研究所

1. はじめに

鳥取県に所在する、青谷上寺地遺跡から出土した木製品1点について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

2. 調査資料

調査した資料は、第27表に示す弥生時代後期後葉～終末期前半の容器1点である。

第27表 調査資料

No.	保存処理 No.	品名	取上 No.	掲載 No.	概要
1	11	椀・杯形容器	3872	W137	体部外面が黒っぽい塗膜のようなものが認められる、低い脚と体部外面に把手のような小振りの突起が削り出された容器。

3. 調査方法

第27表の資料本体の塗膜付着部分から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

4. 断面観察

塗膜断面の観察結果を、第28表と写真図版(PL124-1)、以下の文章に示す。

第28表 断面観察結果

No.	器種	部位	塗膜構造(下層から)			
			下地		漆層構造	顔料
			膠着剤	混和材		
1	杯	外面	—	—	漆?	—

塗膜構造：下層から、木胎、漆?層が観察された。

漆層：木胎の上に直接、茶褐色を呈する塗膜が途切れ途切れに水平方向に続く様子が観察された。

塗膜の上面は平滑である。

5. 摘要

青谷上寺地遺跡から出土した椀・杯形容器の表面について、塗膜構造分析を行った。木胎の上に直接1層の塗膜が見られた。茶褐色の色調や塗膜の上面が平滑であることなどから、この塗膜は漆塗膜の可能性がある。

第6節 青谷上寺地遺跡 SD38 遺構出土イネ籾殻の古代ゲノム解析（予報）

那須 浩郎（岡山理科大学）・寺井 洋平・大田 竜也（総合研究大学院大学）・濱田 竜彦（鳥取県）

1. はじめに

本報告では、青谷上寺地遺跡第20次発掘調査で得られた弥生時代終末期の未炭化イネ籾殻および随伴する植物種実について報告し、イネ籾殻については古代ゲノム解析のための古代DNA抽出および年代測定を行ったので、その結果を予報として報告する。

青谷上寺地遺跡では、これまでも出土炭化米からのPCR法による古代DNA分析が行われており、ジャポニカ米と熱帯ジャポニカ米が報告されているが（上條ほか2020）、この情報以上に当時のイネの特徴をより詳細に知ることはできず、手法に限界があった。一方、近年は、出土人骨や動物骨について次世代シーケンサーを使った古代ゲノム解析が進んでおり、青谷上寺地遺跡でも人骨の形態的特徴が復元され（篠田ほか2020）、「青谷上寺朗」などの復顔が行われている。

報告者らは、こうした次世代シーケンサーを用いた古代ゲノム解析を、植物にも適用すべく、今回、第20次発掘調査で得られたSD38-D遺構（弥生時代終末期の溝跡）の堆積物より、未炭化のイネ籾殻を採取し、古代DNAの抽出と年代測定を行ったので報告する。

2. 試料と方法

2-1. 試料の概要

堆積物試料は、2023年9月13日に、青谷上寺地遺跡第20次発掘調査で発掘された溝状遺構（SD38）から採取した。SD38-B、SD38-C、SD38-Dの三か所から、それぞれ2リットル程度の堆積物を採取した。今回の分析では、SD38-D（弥生時代終末期の溝）から採取した堆積物を分析に使用し、残りの堆積物は岡山理科大学那須研究室の冷蔵庫で保管している。

2-2. 分析方法

SD38-Dの堆積物のうち100ccを0.5mmの篩で水洗選別し、実体顕微鏡下で植物種実を取り出し、種類を同定して計数した。このうち、イネ籾殻については古代DNA抽出のために細かい破片や小穂軸をできるだけ多く拾い上げた。

古代DNA抽出は、総合研究大学院大学統合進化学研究センターの古代DNA専用のクリーンラボにて実施した。複数のイネの籾殻を合わせた試料からQiagen社のDNAeasy Plant mini kitの試薬やAmicon社の限外濾過フィルターなどを組み合わせてDNAを抽出し、次世代シーケンサーによる解析を行った。

放射性炭素年代測定は、同じ堆積物に含まれるイネの籾殻と古代DNA分析を実施した後の残りのイネの籾殻について、それぞれ1点ずつ、株式会社パレオ・ラボに依頼してAMS法で行った。なお、それぞれの試料は、籾殻片1点では年代測定に十分な炭素量が得られなかったため、両方の試料とも、複数点のイネの籾殻片を合わせて1点として測定した。

第29表 SD38-D 遺構から出土した植物種実一覧

分類群	科名	種名	出土部位	個数 /100cc	割合 (%)
栽培植物	イネ科	イネ	小穂軸（炭化含む）	1091	90.5
			炭化米（破片）	1	0.1
		キビ	キビ籾殻（内外穎）	2	0.2
			キビ小穂軸	12	1.0
		アワ	アワ籾殻（内外穎）	29	2.4
			炭化アワ籾（有ふ果）	2	0.2
栽培植物／雑草	イネ科	ヒエ属	ヒエ属籾殻（内外穎）	4	0.3
高木	ブナ科	コナラ属	果皮片	6	0.5
	ミカン科	カラスザンショウ	種子（へそを含む破片）	12	1.0
低木	バラ科	キイチゴ属 A（大）	果実	1	0.1
	バラ科	キイチゴ属 B（小）	果実	5	0.4
つる性木本	ブドウ科	ブドウ属	種子	1	0.1
草本	ナデシコ科	ノミノフスマ	種子	10	0.8
	キンポウゲ科	タガラシ	果実	8	0.7
	タデ科	ギシギシ属	果実	5	0.4
	タデ科	ヤナギタデ近似種	果実破片	1	0.1
	カタバミ科	カタバミ属	種子	4	0.3
	ナス科	ナス属	種子	1	0.1
	イネ科	イネ科	穎果	1	0.1
	カヤツリグサ科	カヤツリグサ科 A（茶大）	果実	1	0.1
	カヤツリグサ科	カヤツリグサ科 B（黄中）	果実	1	0.1
	カヤツリグサ科	カヤツリグサ科 C（茶小）	果実	1	0.1
	カヤツリグサ科	カヤツリグサ科 D（茶網目大）	果実	1	0.1
	カヤツリグサ科	カヤツリグサ科 E（黄小）	果実	1	0.1
不明植物（炭化）				2	0.2
不明植物（未炭化）				3	0.2
合計				1206	100.0

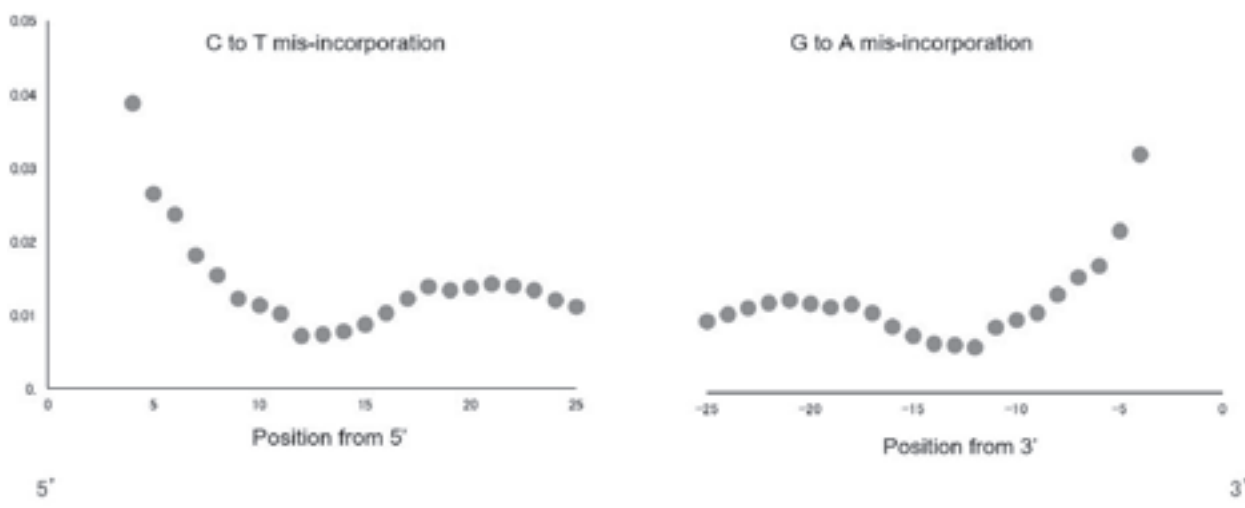
3. 結果と考察

3-1. 出土した植物種実

SD38-D の堆積物100cc から合計21種1206点の種実が得られた（第29表、PL124- 2）。栽培植物ではイネの小穂軸（未炭化/炭化）が1,091点でもっとも多く見つかリ、炭化米の破片も1点見つかリた。また、未炭化の籾殻片（内外穎の破片）も多数見つかリたが、計数はしていない。出土した植物種実の90%以上がイネ籾だった。小穂軸は一粒のイネ籾につき1点しかないのて、100cc中1,091粒のイネ籾が含まれていたことになる。1穂あたりの籾数を100粒とすると約10穂分となり、1株穂数を10穂とすると、約1株のイネに相当する量になる。これらの未炭化の籾殻と小穂軸の一部を古代DNA分析に使用した。

他の栽培植物として、未炭化のキビの内外穎（キビ籾殻）が2点と小穂軸が12点見つかリた。アワも未炭化の内外穎（アワ籾殻）が29点と炭化有ふ果（炭化アワ籾）が2点含まれていた。栽培植物か耕地雑草かが不明なものとして、ヒエ属の内外穎（ヒエ属籾殻）が4点見つかリた。ヒエ属には栽培植物のヒエと水田雑草のイヌビエやタイヌビエがあるが、計測可能な外穎の長さは2.69mm、幅が1.62mmであり、ヒエとイヌビエの両方の変異内に含まれるため、ヒエ属に同定を留めた。

木本植物では、コナラ属の果皮片が6点、カラスザンショウの種子が12点、キイチゴ属の果実が2種類で6点、ブドウ属の種子が1点見つかリた。いずれも利用できる植物であり、遺構の周辺に生育していたか、利用した後に廃棄されたものと考えられる。



第 237 図 古代 DNA に特有のダメージパターン（左：C → T への置換、右：G → A への置換）

SD38-D出土イネ籾の DNA の塩基配列では 5'末端に C→T、3'末端に G→A の置換が増えるパターンがみられることから、古代DNA であることが確認できた。

その他の草本植物では、ノミノフスマの種子が 10 点、タガラシの果実が 8 点、ギシギシ属の果実が 5 点、ヤナギタデ近似種の果実破片が 1 点、カタバミ属の種子が 4 点、ナス属の種子が 1 点、イネ科の果実（穎果）が 1 点、カヤツリグサ科の果実が 5 種類でそれぞれ 1 点ずつ見つかった。これらはいずれも水田畦畔に生育可能な田畑共通雑草である。当時の溝周辺に生育していたものと考えられるが、一部はイネの随伴雑草として混入したものも含まれる可能性がある。

3- 2. 古代 DNA の抽出

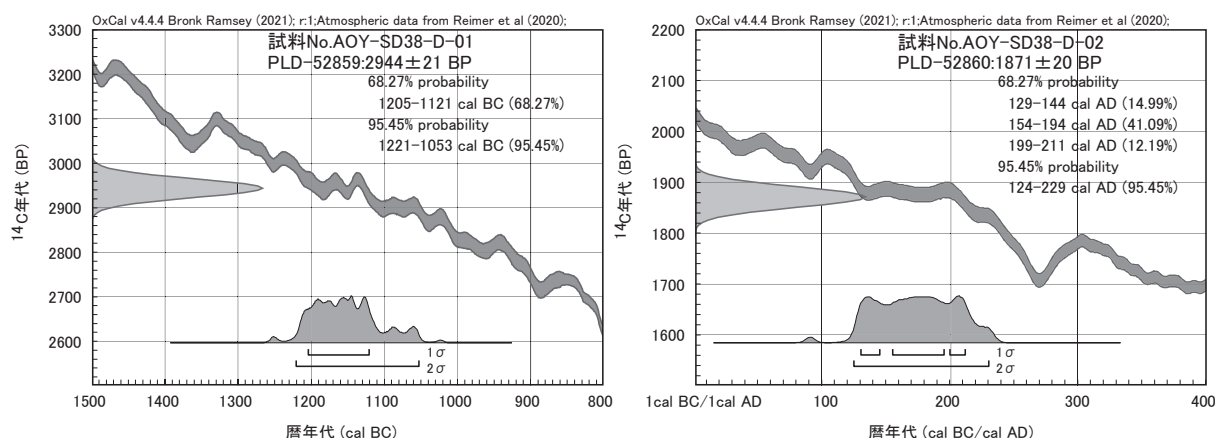
出土した未炭化イネ籾（複数点）の古代 DNA 分析の結果、得られたショートリードの配列がイネの参照ゲノムである日本晴のゲノム配列にマッピングされていることから、得られた配列の一部にイネ由来の配列が存在することが明らかとなった。またそのマッピングパターンからは古代ゲノム由来の配列に特徴的な C → T（または G → A）の変化が多数観察された（第 237 図）。これらのことから、今回の研究で、イネの古代 DNA の次世代シーケンサーによる解析が可能なが示された。現在は、得られたショートリードの配列をさらに解析し、当時のイネの特性を精査しているところである。

3- 3. 放射性炭素年代測定

第30表と第238図に未炭化イネ籾の放射性炭素年代測定結果を示す。古代DNA抽出を行っていない（薬品処理をしていない）未炭化イネ籾の年代（PLD-52860）は、 2σ で 124-229 cal AD となり、弥生時代終末期と考えられる遺構の年代と矛盾しない。一方、古代DNA抽出後の薬品処理を行った後のイネ籾の年代（PLD-52859）は、 2σ で 1221-1053 cal BC（95.45%）となり、縄文時代後期の年代を示し、明らかに古い年代となった。DNA抽出試薬に放射性炭素年代を古くする何らかの作用があった可能性がある。今後、この抽出キット中のどの成分が年代値に影響を及ぼすか、実験をして確認する必要がある。いずれにせよ、古代DNA分析に使用したイネ籾は弥生時代終末期のものであることは確認できた。

第30表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	試料データ	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	14C 年代 yrBP $\pm 1\sigma$ (暦年較正用)	暦年較正年代 (IntCal 20)		
				信頼 限界	cal BC/AD	cal BP
PLD-52859	試料 No.AOY-SD38-D-01 種類：種実（未炭化イネ籾殻片） 状態：dry 備考：DNA 抽出後の未炭化イネ籾殻破片	-28.77 \pm 0.19	2945 \pm 20 (2944 \pm 21)	1 σ	1205-1121 cal BC (68.27%)	3154-3070 cal BP (68.27%)
				2 σ	1221-1053 cal BC (95.45%)	3170-3002 cal BP (95.45%)
PLD-52860	試料 No.AOY-SD38-D-02 種類：種実（未炭化イネ籾殻片） 状態：dry 備考：未炭化イネ籾殻破片	-30.62 \pm 0.20	1870 \pm 20 (1871 \pm 20)	1 σ	129-144 cal AD (14.99%) 154-194 cal AD (41.09%) 199-211 cal AD (12.19%)	1821-1806 cal BP (14.99%) 1796-1756 cal BP (41.09%) 1751-1739 cal BP (12.19%)
				2 σ	124-229 cal AD (95.45%)	1826-1721 cal BP (95.45%)



第238図 暦年較正結果

4. まとめ

今回の分析により、弥生時代終末期の溝跡SD38-Dには高密度でイネの籾殻が廃棄されていたことが明らかになった。ただし、イネだけでなく、アワとキビの雑穀も伴うことから、一部の畑作物の籾殻も一緒に廃棄されていた。このことから、青谷上寺地遺跡の弥生時代終末期には稲作が生業の主体だったが、アワ・キビの畑作も行われていたことが示された。

また、未炭化イネ籾からの古代DNAの抽出が成功したことにより、イネの古代ゲノム解析を進めることが可能となった。現在、当時のイネのいくつかの形質（もち米/うるち米、白米/有色米、脱粒性、耐寒性、耐干性、出穂・開花時期等）について解析を進めているところである。今後の解析により、弥生時代終末期に青谷上寺地遺跡で栽培されていたイネの特性がより詳細に明らかになるだろう。

引用文献

上條 信彦・田中 克典・小泉 翔太・濱田 竜彦 2020 「青谷上寺地遺跡出土イネの粒形質・DNA 分析」『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報 2018』20-28 p.

篠田 謙一・神澤 秀明・角田 恒雄・安達 登 2020 「鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土弥生後期人骨の DNA 分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』219：163-177 p.

第7節 青谷上寺地遺跡第20次調査で出土した大型植物遺体

株式会社 パレオ・ラボ バンダリ スダルシャン

1. はじめに

鳥取県鳥取市青谷町に所在する青谷上寺地遺跡は、弥生時代後期から古墳時代を中心とした集落跡である。ここでは、第20次発掘調査において弥生時代後期から古墳時代前期までの遺構から、遺物抽出の過程で副次的に得られた大型植物遺体を同定し、食用などに利用された当時の植物や栽培状況、周辺の植生について検討する。

2. 試料と方法

試料は、弥生時代後期前葉のⅧ層、弥生時代後期後葉のSD38-C、弥生時代後期後葉～終末期前半のSD38-Ca・b、弥生時代終末期後半のSD38-B、古墳時代前期前葉のSD38-Aと平地建物1～4、これら以外の古墳時代前期前葉の遺構から水洗選別によって得られた種実遺体である。

大型植物遺体の同定、計数は、実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。カラスザンショウ種子やイネ炭化粉・炭化種子については、おおよその数を記号(+)で示した。試料は、鳥取県立青谷かみじち史跡公園に保管されている。

3. 結果

同定した結果、木本植物では針葉樹のアカマツ球果とイヌガヤ種子の2分類群、広葉樹のマツバサ種子とアオツツラフジ核、ブドウ属種子・炭化種子、ゴンズイ種子、モモ核・炭化核、スモモ核・炭化核、サクラ属サクラ節核、キイチゴ属核、エノキ属核、ヒメコウゾ核、クワ属核、クリ果実、コナラ属アカガシ亜属果実、コナラ属-シイ属炭化子葉、オニグルミ核・炭化核、アカメガシワ種子、イイギリ種子、トチノキ種子・未熟種子・未熟炭化種子、ムクロジ炭化種子、カラスザンショウ種子、サンショウ種子、イヌザンショウ種子、クマノミズキ核、カキノキ炭化果実・炭化種子、エゴノキ核、マタタビ属種子、ガマズミ属核の27分類群、草本植物ではオモダカ属果実とツユクサ種子、ウキヤガラ果実、コウキヤガラ果実、サンカクイーフトイ果実、ホタルイ属果実、ヒエ属炭化種子(穎果)、イネ籾殻・炭化籾・炭化籾塊・炭化種子(穎果)・炭化種子塊、キビ炭化有ふ果・炭化種子(穎果)、アワ炭化有ふ果・炭化有ふ果塊・炭化種子(穎果)、オオムギ炭化種子(穎果)、コムギ炭化種子(穎果)、ノブドウ種子、ダイズ属炭化種子、ササゲ属アズキ亜属炭化種子、アサ核、カナムグラ核、トウガン種子、メロン仲間種子、ヒョウタン仲間種子、キカラスウリ種子、スズメウリ種子、エノキグサ属種子、ヤナギタデ果実、サナエタデーオオイヌタデ果実、イヌタデ果実、ギシギシ属炭化果実、ツリフネソウ属種子、ヤエムグラ属種子、ナス種子、エゴマ果実、シソ属果実・炭化果実、タカサブロウ果実、メナモミ属果実、オナモミ属総苞、キク科果実、セリ果実の37分類群の、計66分類群が見いだされた。このほかに、科以上の詳細な同定ができなかった種実を不明A～C炭化種実にタイプ分けした。また、科以上の細分に必要な識別点が残存していない一群を同定不能炭化種実とした。(第31表)。以下に、炭化種実の産出状況を時期ごとに、遺構別に記載する。

第31表 青谷上寺地遺跡第20次発掘調査において出土した大型植物遺体

分類群	遺構・層位 時期	Ⅷ層										その他遺構								
		弥生後期 前葉以前	弥生後期 後葉	弥生後期 後葉～終末期 前半	弥生終末期 後半	古墳前期 前葉	平地建物1 古墳前期 前葉	平地建物2 古墳前期 前葉	平地建物3 古墳前期 前葉	平地建物4? 古墳前期 前葉	古墳前期 前葉									
アカマツ	球果			1																
イヌガヤ	種子	(2)	(3)	2					(2)											
マツブサ	種子	1 (1)	8				3 (1)													
アオツツラフジ	核	1						1												
ブドウ属	種子	14 (1)	56 (2)	1		16 (11)	24 (6)													
ゴズイ	炭化種子	5	1 (1)				3													
	核 (完形)	4	9	171		4	8		6	3	3									
	核 (動物食痕)		1				(1)													
モモ	核 (半割)	(2)	(4)	(47)			(1)			(1)										
	核 (破片)	(6)	(13)	(69)		(4)	(10)		(1)	(1)	(3)		(1)							
	炭化核	(4)	(4)	7 (12)	1 (4)	2 (40)				2 (1)	(2)		(1)		4 (13)					
	核 (動物食痕)						1													
スモモ	核 (破片)						(1)													
	炭化核			1																
サクラ属サクラ節	核	(1)																		
キイチゴ属	核						2 (1)		(1)											
エノキ属	核						(1)													
ヒメコウゾ	核						1	6												
クワ属	核						4 (4)	5												
クリ	果実		(1)	(1)																
コナラ属アカガシ亜属	果実		(1)	(1)																
コナラ属-シイ属	炭化子葉	(1)	1 (2)																	
	核			(1)																(1)
オニグルミ	炭化核																			
アカメガシワ	種子	10 (1)	94 (9)			32 (46)	279 (33)													
イイギリ	種子	1																		
	種子			(2)			(1)													
トチノキ	未熟種子		(1)																	
	未熟炭化種子						(1)													
ムクロジ	炭化種子	(5)	(4)				(1)													
カラスザンショウ	種子	1762 (80)	2627 (62)	1 (1)	572 (++++)	556 (++++)														
サンショウ	種子	132 (7)	139 (8)	5 (2)	119 (35)	506 (20)														
イヌザンショウ	種子					10														
クマノミズキ	核		4			32 (5)														
カキノキ	炭化果実									(1)										
	炭化種子			1			1													
エゴノキ	核			(1)							(1)									
マタタビ属	種子						1 (2)	3												
ガマズミ属	核						3													
オモダカ属	果実						17													
ツエクサ	種子							1												
ウキヤガラ	果実							1												
コウキヤガラ	果実							1												
サンカイイ-フトイ	果実						1	3												
ホタルイ属	果実						2													
ヒエ属	炭化種子		1			2														
	穀粒	1	1 (1)	2		1	1													
	炭化粒	5	7	68 (5)	1	11														
	炭化粒塊			(8)																
イネ	炭化粒・炭化種子						(++++)													
	炭化種子	296 (70)	343 (36)	710 (96)	220 (54)	869 (126)		59 (3)	37 (1)	41 (12)	4 (7)	21 (4)								
	炭化種子塊		(2)	(2)		(18)														
キビ	炭化有ふ果						2													
	炭化種子	2	15			8	22 (1)													
	炭化有ふ果	1			(1)	8 (1)	4													
アワ	炭化有ふ果塊				(2)	27 (2)														
	炭化種子		2			(1)	31													
オオムギ	炭化種子		2				1													
コムギ	炭化種子	1					1													
ノブドウ	種子		1			(1)	11 (1)													
ダイズ属	炭化種子	(1)	4				8 (1)													
ササゲ属アズキ亜属	炭化種子	5 (3)	4 (11)	5	16 (8)	31 (67)		1 (1)		(1)	1									
アサ	核	18 (2)	19 (2)		3 (2)	2														
カナムグラ	核	14 (1)	40 (2)		27 (40)	267 (9)														
トウガン	種子		1			1 (8)														
メロン仲間	種子						1 (2)													
ヒョウタン仲間	種子	1	2			1 (1)	2													
キカラスウリ	種子		1																	
スズメウリ	種子		1			1 (6)	7 (1)													
エノキグサ属	種子	3	1			4	1													
ヤナギタデ	果実	2				2 (2)	21 (12)													
サナエタデ-オオイヌタデ	果実	1	1	62 (5)	2	15 (20)														
イヌタデ	果実		2 (1)		3 (6)	2														
ギシギシ属	炭化果実					1														
ツリフネソウ属	種子						3 (1)													
ヤエムグラ属	種子						1													
ナス	種子																			
エゴマ	果実		1																	
シソ属	炭化果実		4																	
タカサブロウ	果実																			
メナモミ属	果実																			
オナモミ属	総苞						1 (1)													
キタ科	果実						2													
セリ	果実						2													
不明A	炭化種実						1													
不明B	炭化種実						1													
不明C	炭化種実						(1)													
同定不能	炭化種実	(4)	(4)				(2)		(1)											

*1-9, **10-49, ***50-99, ****100以上

括弧内は破片数

[弥生時代後期前葉]

Ⅷ層：カラスザンショウが非常に多く、サンショウとイネが多く、ブドウ属とモモ、アカメガシワ、アサ、カナムグラが少量、イヌガヤとマツブサ、ムクロジ、キビ、ササゲ属アズキ亜属、エノキグサ属、ヤナギタデがわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が各1点であった。

[弥生時代後期後葉]

SD38-C：カラスザンショウが非常に多く、アカメガシワとサンショウ、イネが多く、ブドウ属がやや多く、モモとキビ、ササゲ属アズキ亜属、アサ、カナムグラが少量、イヌガヤとマツブサ、コナラ属-シイ属、ムクロジ、クマノミズキ、アワ、オオムギ、ダイズ属、ヒョウタン仲間、イヌタデ、シソ属がわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が各1点であった。

[弥生時代後期後葉～終末期前半]

SD38-Ca・b：イネが非常に多く、モモが多く、サナエタデーオオイヌタデがやや多く、イヌガヤとクリ、オニグルミ、イイギリ、カラスザンショウ、サンショウ、カキノキ、ヒエ属、アワ、ササゲ属アズキ亜属がわずかに得られた。

[弥生時代終末期]

SD38-B：カラスザンショウが非常に多く、サンショウとイネが多く、アカメガシワがやや多く、ブドウ属とモモ、オモダカ属、アワ、ササゲ属アズキ亜属、カナムグラ、ナスが少量、マツブサとキイチゴ属、クワ属、マタタビ属、ホタルイ属、キビ、アサ、トウガン、ヒョウタン仲間、スズメウリ、エノキグサ属、ヤナギタデ、サナエタデーオオイヌタデ、イヌタデ、シソ属、メナモミ属がわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が各1点であった。

[古墳時代前期前葉]

SD38-A：カラスザンショウとサンショウ、イネが非常に多く、アカメガシワ、カナムグラが多く、ササゲ属アズキ亜属とモモがやや多く、ブドウ属とイヌザンショウ、クマノミズキ、キビ、アワ、ノブドウ、ヤナギタデ、サナエタデーオオイヌタデ、シソ属が少量、ヒメコウゾとクワ属、マタタビ属、ガマズミ属、ダイズ属、メロン仲間、ヒョウタン仲間、スズメウリ、ツリフネソウ属がわずかに得られた。この他の分類群は、3点未満の産出数であった。

平地建物1～4：イネが多く、モモが少量、カキノキ、エゴノキ、ササゲ属アズキ亜属、トウガン、メロン仲間がわずかに得られた。

その他の遺構：イネが多く、モモが少量、オニグルミが少量得られた。

次に、得られた主要な分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠し、APGⅢリストの順とした。

(1) ブドウ属 *Vitis* spp. 種子・炭化種子 ブドウ科

上面観は楕円形、側面観は基部が尖り、倒心形に近い倒卵形。背面の中央もしくは基部寄りに匙状の着点がある。腹面には中央の鈍稜上に1本の縦筋が走り、その両側に細く深い溝孔が2つある。種皮は薄く硬い。長さ3.9mm、幅2.9mm、厚さ2.0mm。

(2) モモ *Prunus persica* (L.) Batsch 核・炭化核 バラ科

黄褐色～茶褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形～紡錘形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面には不規則な深い皺があり、片側の側面には縫合線に沿って深い溝が入る。完形個体

は高さ 24.5mm、幅20.7mm、厚さ 16.9mm、動物食痕のある個体は高さ 21.6mm、残存幅18.2mm、厚さ 15.6mm（図版 1 - 3）、半割の個体は高さ 22.0mm、幅17.8mm、残存厚7.3mm。

(3) スモモ *Prunus salicina* Lindl. 核・炭化核 バラ科

褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観はいびつな楕円形。縫合線に沿ってやや深い溝が入る。表面は平滑だが、臍付近に縦方向の不規則な皺がある。動物食痕のある個体は、高さ 14.8mm、残存幅12.1mm、厚さ 9.0mm。

(4) コナラ属-シイ属 A *Quercus-Castanopsis* A spp. 炭化子葉 ブナ科

長楕円形。規則的で比較的明瞭な縦方向の溝がある一群を、コナラ属-シイ属とした。高さ 10.6mm、幅5.8mm。

(5) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam. 核・炭化核 クルミ科

黄褐色で、完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は広卵形。表面には、浅い溝と凹凸が不規則に入る。内部は二室に分かれる。残存高24.1mm、残存幅20.0mm、残存厚9.8mm。

(6) アカメガシワ *Mallotus japonicus* (L.f.) Müll.Arg. 種子 トウダイグサ科

暗褐色で、基部がやや平たい球形。表面には隆線状突起が密生する。種皮断面の柵状組織は、内側で屈曲する。長さ 3.4mm、幅3.2mm。

(7) カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc. 種子 ミカン科

黒色で、上面観は卵形、側面観は楕円形。表面には大きな網目模様があり、一方の側面には大きな着点がある。着点は、種子の長さとはほぼ同じか、やや短い。種皮は、厚く硬い。長さ 3.5mm、幅3.1mm、厚さ 2.6mm。

(8) サンショウ *Zanthoxylum piperitum* (L.) DC. 種子 ミカン科

黒色で、上面観は卵形、側面観は楕円形ないし倒卵形。縦方向に中央部まで伸びる稜線があり、短い臍が斜め下を向く。網目状隆線は、低く細かい。種皮は、厚く硬い。長さ 4.0mm、幅3.2mm、厚さ 3.0mm。

(9) イヌザンショウ *Zanthoxylum schinifolium* Siebold et Zucc. 種子 ミカン科

黒色で、上面観は卵形、側面観は円形。表面には小さな網目状隆線があり、一方の側面には、大きな着点がある。着点の長さは、種子の長さとはほぼ同じ。長さ 3.7mm、幅3.3mm、厚さ 2.8mm。

(10) カキノキ *Diospyros kaki* Thunb. 炭化果実・炭化種子 カキノキ科

果実は、完形ならば球形。表面は粗く、木質。割れた面から内部の種子がみられる。残存高12.9mm、残存幅14.4mm。種子は、上面観が両凸レンズ形、側面観が倒卵形。基部がやや曲がり、突出する。表面には、ちりめん状のしわが見られる。長さ 8.6mm、幅5.1mm。

(11) ヒエ属 *Echinochloa* sp. 炭化種子 (穎果) イネ科

側面観は倒卵形、断面は片凸レンズ形。厚みは薄く、やや扁平である。胚は幅が広く、長さは全長の 2 / 3 程度と長い。臍は幅が広いうちわ型。長さ 1.6mm、幅1.1mm。

(12) イネ *Oryza sativa* L. 籾殻・炭化籾・炭化籾塊・炭化種子 (穎果)・炭化種子塊 イネ科

籾殻は黄褐色で、上面観は楕円形、側面観は長楕円形。2条の稜があり、表面には四角形の網目状隆線と隆線状の顆粒状突起が規則正しく並ぶ。長さ 7.6mm、幅3.8mm。炭化籾は、長さ 7.5mm、幅3.8mm。炭化種子 (穎果) の上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚があり、両面に縦方向の2本の浅い溝がある。長さ 5.4mm、幅2.9mm。炭化種子塊の破片は、残存長17.6mm、残存幅22.7mm、残存厚14.2mm。

(13) キビ *Panicum miliaceum* L. 炭化有ふ果・炭化種子 (穎果) イネ科

有ふ果は、背腹面観が広倒卵形で、両端が窄まる。外穎が内穎を包み込む部分に段差が見られる。表面は平滑。長さ3.1mm、幅2.2mm。炭化種子(穎果)は、側面観が円形~卵形で、先端がやや窄まる。断面は片凸レンズ形で、厚みがある。胚の長さは全長の1/2程度と短く、幅が広いうちわ型。長さ2.1mm、幅2.0mm。

(14) アワ *Setaria italica* P.Beauv. 炭化有ふ果・炭化有ふ果塊・炭化種子 (穎果) イネ科

有ふ果は楕円体。内穎と外穎に独立した微細な乳頭状突起がある。長さ1.7mm、幅1.7mm。炭化有ふ果塊は、残存長15.4mm、残存幅18.7mm、残存厚10.2mm。炭化種子(穎果)の上面観は楕円形で、側面観は円形に近い。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の胚があり、胚の長さは全長の2/3程度。種子の全長は、長さ1.3mm、幅1.2mm。

(15) オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化種子 (穎果) イネ科

上面観は長楕円形、側面観は楕円形。腹面中央部には上下に走る1本の溝がある。側面観で最も幅の広い部分は、中央付近にある。背面の中央部下端には、三角形の胚がある。長さ4.5mm、幅1.7mm、厚さ1.4mm。

(16) コムギ *Triticum aestivum* L. 炭化種子 (穎果) イネ科

上面観と側面観は楕円形。腹面中央部には上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には、扇形の胚がある。オオムギに比べて長さが短く、幅に対して厚みがあるため、全体的に丸みを帯びている。長さ3.7mm、幅2.7mm、厚さ2.2mm。

(17) ダイズ属 *Glycine* sp. 炭化種子 マメ科

上面観は楕円形、側面観は臍側が直線的な楕円形。臍は全長の1/2未満の長さの長楕円形で、側面のほぼ中央にあったと推定される。長さ5.6mm、幅3.7mm、厚さ2.8mm。

(18) ササゲ属アズキ亜属 *Vigna subgenus Ceratotropis* 炭化種子 マメ科

上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い楕円形。臍は全長の半分から2/3ほどの長さで、片側に寄る。長さ5.1mm、幅3.6mm、厚さ3.4mm

(19) アサ *Cannabis sativa* L. 核 アサ科

黄褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で側面に稜がある。下端には、やや突出した楕円形の大きな着点がある。表面には脈状の模様がある。長さ2.7mm、幅2.6mm、幅2.1mm。

(20) カナムグラ *Humulus scandens* (Lour.) Merr. 核 アサ科

暗赤褐色~暗褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は円形。一端に、黄白色で心形の着点がある。壁は薄く、やや硬い。長さ4.4mm、幅4.2mm、厚さ3.1mm。

(21) トウガン *Benincasa hispida* (Thunb.) Cogn. 種子 ウリ科

赤褐色で、倒卵形。表面は平滑。基部の両側に薄い突出部がある。周囲を縁取る肥厚があり、中央部は窪む。長さ10.9mm、幅6.2mm。

(22) メロン仲間 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科

褐色で、上面観は扁平、側面観は狭卵形で頂部が尖る。幅狭で、やや厚みがある。長さ8.0mm、幅3.4mm。

(23) ヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* (Molina) Standl. 種子 ウリ科

赤褐色で、上面観は扁平、側面観は逆三角形。やや湾曲しており、左右は非対称。先端はW字状で、浅く広い溝2本が基部から先端まで走る。壁は、ややスポンジ質。長さ11.9mm、幅5.3mm。

(24) ナス *Solanum melongena* L. 種子 ナス科

赤褐色で、上面観は長楕円形、側面観は楕円形。着点は明瞭に窪む。表面には、畝状突起が覆瓦状となる細かい網目状隆線がある。長さ2.2mm、幅2.4mm。

(25) エゴマ *Perilla frutescens* (L.) Britton var. *frutescens* 果実 シソ科

暗褐色で、いびつな球形。端部に着点があり、やや突出する。表面には、不規則で多角形の浅い網目状隆線がある。長さ2.6mm、幅2.4mm。

(26) シソ属 *Perilla* spp. 果実・炭化果実 シソ科

暗褐色で、いびつな球形。端部に着点がある。表面には、低い隆起で多角形の網目状隆線がある。長さ2.2mm、幅1.9mm。

(27) 不明 A Unknown A 炭化種実

広倒卵体。表面は平滑で、木質。長さ8.6mm、幅6.8mm、厚さ5.0mm。

(28) 不明 B Unknown B 炭化種実

上面観は扁平、側面観は楕円形。基部がやや曲がってる。表面は平滑。長さ6.8mm、幅4.0mm

(29) 不明 C Unknown C 炭化種実

破片で、全体形は不明。表面は平滑。残存長4.0mm、残存幅3.0mm。

4. 考察

弥生時代後期前葉のⅧ層、弥生時代後期から古墳時代前期前葉のSD38（SD38-C：弥生時代後期後葉、SD38-Ca・b：弥生時代後期後葉～終末期前半、SD38-B：弥生時代終末期後葉、SD38-A：古墳時代前期前葉）からは、多量かつ多種類の大型植物遺体が得られた。

Ⅷ層とSD38-C、SD38-Ca・b、SD38-B、SD38-Aからは、栽培植物で果樹のモモやスモモ、カキノキ、水田作物のイネ、畑作物のアワ、キビ、オオムギ、コムギ、アサ、トウガン、メロン仲間、ヒョウタン仲間、ナスが得られている。モモやスモモ、カキノキは、果肉を食べた後に、食用にならない核や種子が廃棄された可能性がある。モモやスモモでは、ネズミ類によるとみられる動物食痕のある個体が確認された。イネは、籾殻や炭化籾、炭化籾塊、炭化種子、炭化種子塊が産出しており、食用とするために保管されていた種実が火災などによって炭化し、溝に堆積した可能性などが考えられる。イネ炭化種子塊のイネは、いわゆる炭化米の状態、種子同士が糊着していた。ほとんどのイネ種子は変形した状態であり、調理中ないし調理後のご飯と判断した。キビは炭化有ふ果と炭化種子、アワは炭化有ふ果、炭化有ふ果塊、炭化種子が、オオムギとコムギは炭化種子が出土しており、保管されていた穀類がなんらかの要因で炭化し、堆積した可能性がある。マメ類のダイズ属やササゲ属アズキ亜属も得られており、利用された可能性がある。

木本植物では、高木のアカマツ、イヌガヤ、サクラ属サクラ節、クワ属、クリ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属-シイ属、オニグルミ、アカメガシワ、トチノキ、ムクロジ、カラスザンショウ、クマノミズキ、低木のキイチゴ属、ヒメコウゾ、サンショウ、イヌザンショウ、ガマズミ属、つる植物のマツブサ、アオツヅラフジ、ブドウ属、マタタビ属などが産出しており、これらの樹木が溝の周辺に生育していた可能性がある。イヌガヤやブドウ属、サクラ属サクラ節、キイチゴ属、ヒメコウゾ、クリ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属-シイ属、トチノキ、ムクロジ、サンショウ、マタタビ属などの種について、利用された可能性がある。オニグルミの核は、食用となる子葉が取り出された後に、食用になら

ない不要な部位が廃棄されたと考えられる。ムクロジにはアクの成分であるサポニンが含まれているが、種子を煎って食べることもでき、近現代の民俗例では洗剤や薬用としても用いられている（長沢2012）。カラスザンショウやサンショウ、イヌザンショウなどのサンショウ類は、油や香辛料、薬用などに利用された可能性がある。カラスザンショウは、第10次調査（辻・辻2010；辻ほか2011）の古墳時代前期前葉のC層およびその下部の15層や、第14次調査（佐々木・バンダリ2014）のSD119、第17次調査の土坑でも多産している。

草本植物では、抽水植物のオモダカ属、湿地性植物のウキヤガラやコウキヤガラ、サンカクイーフトイ、ホタルイ属、ヒエ属、スズメウリ、ヤナギタデ、やや湿った道端に生育するツリフネソウ属やタカサブロウが産出した。また、乾いた場所を好むツユクサやカナムグラ、エノキグサ属、サナエタデ、オオイヌタデ、イヌタデ、ギシギシ属、シソ属、メナモミ属なども産出しており、これらの草本類が周辺に生育していたと考えられる。さらに、林縁に生育するノブドウも得られている。

古墳時代前期前葉の平地建物1～4からは、栽培植物のモモ、カキノキ、イネ、トウガン、メロン仲間が得られた。モモの核は、果肉を食べた後に、食用にならない核の部分が廃棄され、堆積した可能性がある。また、モモは食利用以外にも、観賞用や薬用、呪術用、祭祀用など、さまざまな目的で利用されていたと考えられ（那須2015）、食用以外の何らかの用途に用いられた可能性もある。イネは炭化種子（穎果）が産出しており、調理の過程で炭化したものが堆積した可能性や、周辺で保管されていた種実が火災などにより炭化し、堆積した可能性などが考えられる。また、トウガンやメロン仲間、ササゲ属アズキ亜属が得られており、周辺で利用された後に、種実が流れ込んだり廃棄されたりした可能性が考えられる。食用などとして利用可能な野生植物のオニグルミと得られており、利用された可能性がある。なお、その他の古墳時代前期前葉の遺構からも、炭化したモモの核、オニグルミの核、イネの種子が出土しており、これらについても上記と同様の形成過程が推定される。

引用文献

- 那須 浩郎（2015）古代のモモ. *BIOSTORY*, 22, 58-61.
- 長沢 武（2012）野外植物民俗事苑. 443p, ほおずき書籍.
- 佐々木 由香・バンダリ スダルシャン（2014）青谷上寺地遺跡第14次調査で出土した大型植物遺体. 鳥取県埋蔵文化財センター編「青谷上寺地遺跡13」: 276-287, 鳥取県埋蔵文化財センター.
- 辻 圭子・辻 誠一郎（2010）種実遺体群の検討. 鳥取県埋蔵文化財センター編「青谷上寺地遺跡11」: 121-130, 鳥取県埋蔵文化財センター.
- 辻 圭子・辻 誠一郎・野中 理加（2011）種実遺体群からみた植物資源利用と陸域環境. 鳥取県埋蔵文化財センター編「青谷上寺地遺跡景観復元調査研究報告書」: 129-160, 鳥取県埋蔵文化財センター.
- 米倉 浩司・梶田 忠（2003-）BG Plants 和名-学名インデックス (YList), <http://ylist.info>

第8節 動物遺存体

第20次発掘調査では、現場での取り上げ、土壌の水洗選別によって多数の動物遺存体を得た。時間的な制約と紙幅の都合上、これらの資料についての定量的分析結果を記載することはできないが、写真図版PL127～131に現段階で確認している分類群を示すことで定性的な記載とし、以下に記す所見を加えたい。

資料の帰属時期として、古墳時代前期前葉の遺構面であるⅦ層上面から多くの資料を得た点の特筆される。造成土というⅦ層の性格上、これらの資料のなかには当層が形成された以前のもものも含まれているとみられるが、これまで定量的な分析に耐えるほどの点数が得られていない当該期の資料が多く得られたことは、当遺跡におけるより長期にわたる動物利用の解明につながるものである。

ただし、出土した動物遺存体の様相は、これまでの調査で確認されているものとはほぼ共通しており、当遺跡の動物利用が集落を取り巻く環境によって規定されていたことが見て取れる。獣骨では、イノシシ類、ニホンジカを主体としながら、中型の野生獣としてはムササビの点数が多い。鳥骨は、カモ科、ウ科、ウミスズメ科、アホウドリ科といった水辺を生息域とするものが目立つ。魚骨は、現場での目視取り上げではクロマグロとみられるマグロ属の椎骨が多数得られた一方、水洗選別で得られた資料はクロダイ属、スズキ属の幼魚が大きな割合を占める。これは、専門的な外洋性漁労と、簡易な内海での漁労が併存する、弥生時代中期後葉以降の当遺跡の特徴的な漁労（門脇2024）が、古墳時代前期前葉に至っても変容しなかったことを示している。貝類は、遺存状況が悪く量的な把握は難しいがマガキが多いことが明らかである。マガキには、Ⅸ層に顕著なように、造成土の補強として貝殻が混ぜ込まれているとみられるものもある。その他、ヤマトシジミやサザエも出土しており、内海の砂泥底から外海の沿岸岩礁域にいたる、集落を取り巻く多様な水域での採貝が行われたことが分かる。

出土状況としては、祭祀に供されたとみられるものが特筆される。古墳時代前期前葉に属す平地建物1の炉1から出土したイヌ下顎骨（PL131-10）は、解体痕が認められること、著しい被熱痕がないことから、炉の廃絶に伴う祭祀に単独で供されたのかもしれない。また、2畦畔古段階の基部からやはり単独で出土したウシ頭蓋骨は、周辺から出土した渡来銭を含め水田に関わる祭祀による所産とみられる。牛馬の頭蓋骨を用いた祭祀は鳥取県内では大柵遺跡において9世紀中葉～10世紀代の例を確認している（門脇2018）が、本例はこのような祭祀が13世紀まで下ることを示すものとなった。

現段階では、第20次調査区の遺構埋土の選別作業は完了しておらず、今後の作業の進展によって資料の点数は大幅に増加するはずである。定量的な記載については、これらの資料も含め別の機会に報告することとしたい。

門脇 隆志 2018 「第3節 15 流路出土動物遺存体について」『大柵遺跡Ⅲ』鳥取県教育委員会

門脇 隆志 2024 「Ⅱ 青谷上寺地遺跡における漁労の様相－1次調査出土魚骨の再整理から－」『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報 2022・2023』青谷かみじち史跡公園

謝辞：鳥骨の同定にあたっては北海道大学総合博物館教授 江田 真毅 氏のご教示を得た。深く感謝申し上げたい。

第5章 総括

第1節 出土人骨について

はじめに

第20次発掘調査区（以下、20次調査区と略す）では、SD38-Ca・bを中心として現地調査時に608点の人骨を検出し、現場作業終了後の土壌水洗によって71点の人骨を得た。これら計679点、最小個体数15（成人9、10代前半4、10歳以前2）と算定される人骨は、後述する出土状況や部位組成、接合例の確認から第1次調査区8区（以下、1次調査区と略す）のSD38-2から出土した人骨と一連のものであることが確認できた。したがって、今回出土した人骨資料の精査は、青谷上寺地遺跡を一躍世に知らしめたものでありながら、未だ一定していない第1次調査区出土人骨の位置づけの解明にもつながると考える。

ここでは20次調査区出土人骨の記載を中心としながら、1次調査区出土人骨の研究（井上・松本2002）や、関連諸分野の研究成果を援用することで、青谷上寺地遺跡の人骨群の評価を試みる。

第1項 記載の基準

出土人骨のうち、調査時に目視で取り上げた資料については「HB○（通し番号）」、水洗選別で得られた資料については「hb○（通し番号）」として1点ごとに番号を付して記載した。人骨資料の一覧は、第45表に掲載した。表中の同定及び部位・部分の記載、年齢区分、受傷痕、病変の基準は以下の通りである。

同定及び部位・部分の記載

人骨は形状から同定できるものを報告することとし、部位欄に部位の名称を記載した（註1）。ただし、当調査区では、殆どの人骨が解剖学的位置を保たず出土したため、椎骨、肋骨、指骨の大部分は「第○胸椎」、「第○指中節骨」といった順位の設定が困難であった。したがって、これらの部位については以下の基準で記載した。

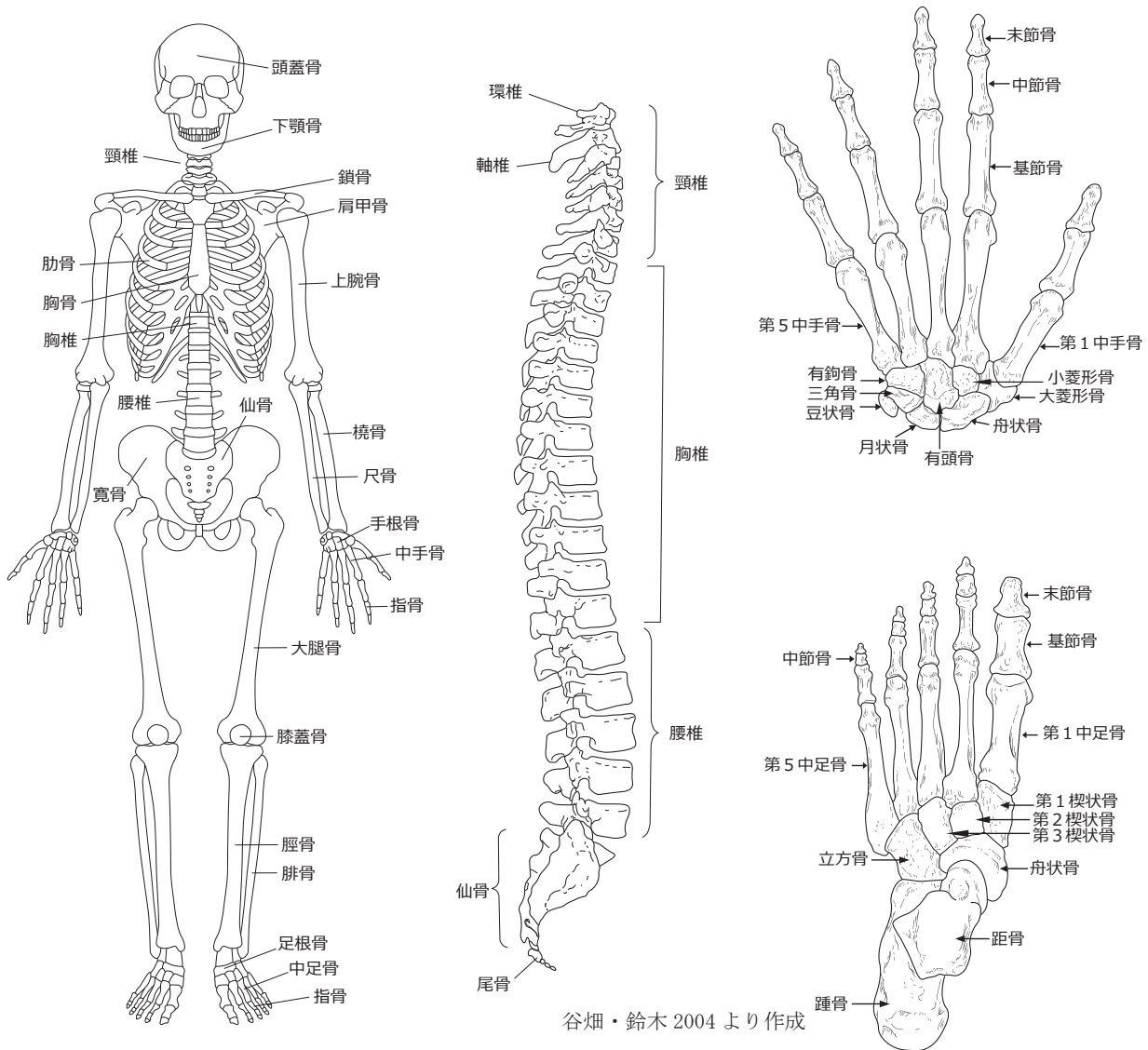
椎骨は、基本的に形態が特徴的な環椎、軸椎、第1・2・12胸椎、さらにこれらの椎骨との接合によって位置関係が確認できたもののみ順位を設定することとした。それ以外の椎骨については頸椎・胸椎・腰椎ごとに上部・下部に分類し記載した。「上部頸椎」は第3～5頸椎、「下部頸椎」は第6・7頸椎、「上部胸椎」は第3～7胸椎、「下部胸椎」は第8～11胸椎、「上部腰椎」は第1～3腰椎、「下部腰椎」は第4・5腰椎の可能性が高いものである。

肋骨は形態が特徴的な第1・2肋骨以外は左右の別のみ記載した。

指骨は、上肢・下肢とも第1指（親指）以外は、基節骨・中節骨・末節骨の別のみ記載し、左右の判別は行わなかった。

このような部位の記載をしたうえで、部分欄には「近位～骨幹」、「下顎枝」のような残存部分、あるいは例えば未癒合の寛骨であれば「上顎骨」、「腸骨」のような構成要素を記載した。

ヒトの骨格図と部位の名称、方向、歯の名称と略号について第239～241図に示すのであわせて参照されたい。



谷畑・鈴木 2004 より作成

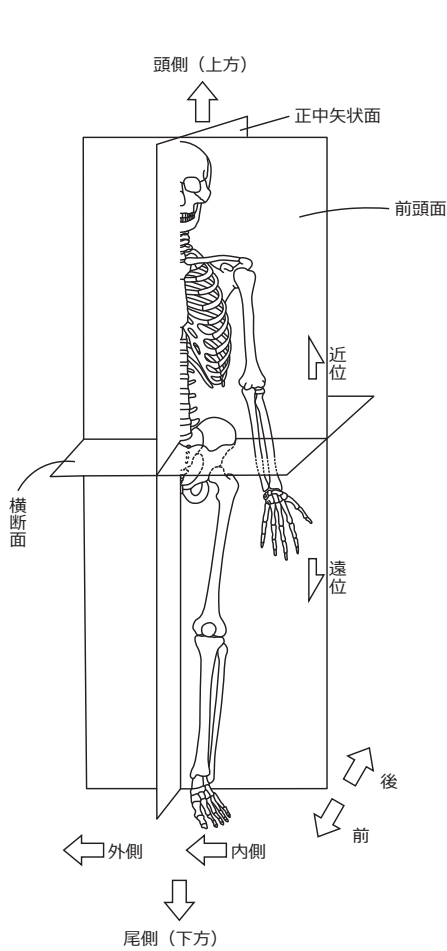
第 239 図 人骨各部位の名称

年齢区分

次に年齢区分の記載の基準について述べる。

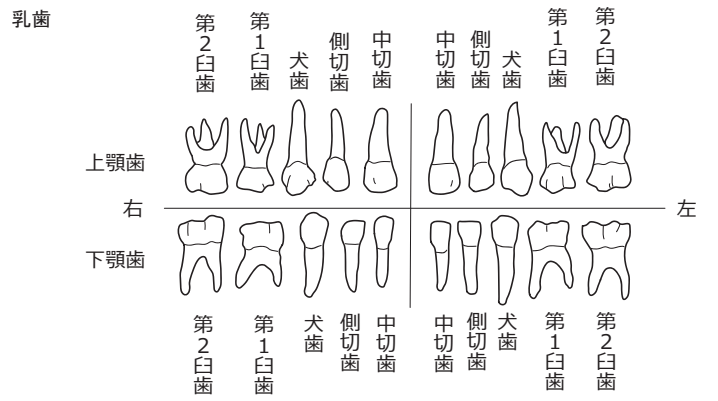
頭蓋骨、下顎骨は、歯の萌出段階（Cornwall1974 など）によって、若年個体については詳細な年齢推定が可能である。歯による年齢推定には、咬耗の進行程度による方法もあり、1次調査区出土人骨の報告ではこれによる区分が記載されている（井上・松本前掲）が、食生活や生業による歯の使用状況が影響することが想定されるため本稿では用いなかった。また、寛骨のうち恥骨結合面の状態が確認できるものについて Katz and Suchey1986 を参考に年齢を推定した。

四肢骨の骨端はじめ骨の癒合状況も年齢区分の基準とした。四肢骨の骨端は、部位と近位端・遠位端による差はあるものの、概ね 20 歳までに癒合し、骨端線が閉鎖する（Cornwall 前掲、谷畑・鈴木 2004）。また、寛骨の 3 要素（腸骨・坐骨・恥骨）の癒合、仙骨の形成すなわち仙椎の癒合は 16 歳ころとされている（谷畑・鈴木前掲）。これらの部位については、未癒合のものは基本的に「10 代前半

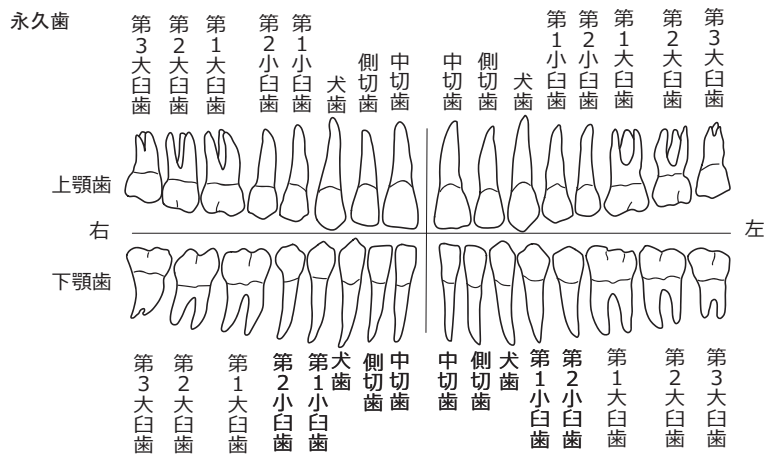


谷畑・鈴木 2004 より作成

第 240 図 骨格の方向



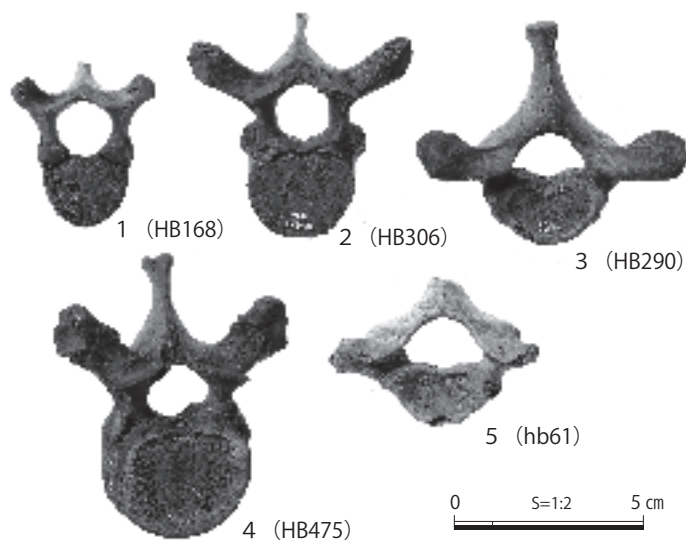
中切歯 : i1、側切歯 : i2、犬歯 : c、第1・2臼歯 : m1・2



中切歯 : I1、側切歯 : I2、犬歯 : C、第1・2小臼歯 : P1・2、
第1～3大臼歯 : M1～3

谷畑・鈴木 2004 より作成

第 241 図 ヒトの歯の名称と略号



1 : 10代前半、2 : 10代後半、3 : 20代、4 : 20～30代、5 : 30代以上

写真 14 椎骨による年齢区分

以前」としたが、明らかにサイズが小さいものについては、「10歳以前」と記載した。この「10歳以前」としたのものには幼児が多く含まれているとみられる。骨端の癒合が確認できるものは「成人」として記載したが、これは10代後半以降の全てを含む年齢区分である。

椎骨については、坂上 2024 による年齢区分を行った。これは、椎弓の癒合状況と骨端輪の形成から消失までの形質的变化を基準とするもので、椎骨の種別によって精度は異なるが、10歳以前、10代前半、10代後半、20代、30代以上といった分類が可能である（写真 14）。

受傷痕

人骨に認められる創痕については、①直線的である、②骨欠損の境界（切縁）が明瞭に認識できる、③平滑な面がある、という3点（坂上 2018）を満たすものを、確実なものとして受傷痕欄に「○」と記載した。なお、上記の3点を満たしてはいないものの、受傷痕の可能性が考えられる資料については同欄に「△」と記載した。

病変

当調査区から出土した人骨には、骨折等の外傷によるもの、加齢によるもの、習慣的な動作によるもの、栄養失調によるものなど様々な要因による病的な変形が認められるものがある。これらの資料については、病変欄に「○」と記載し、備考欄にその内容を記した。

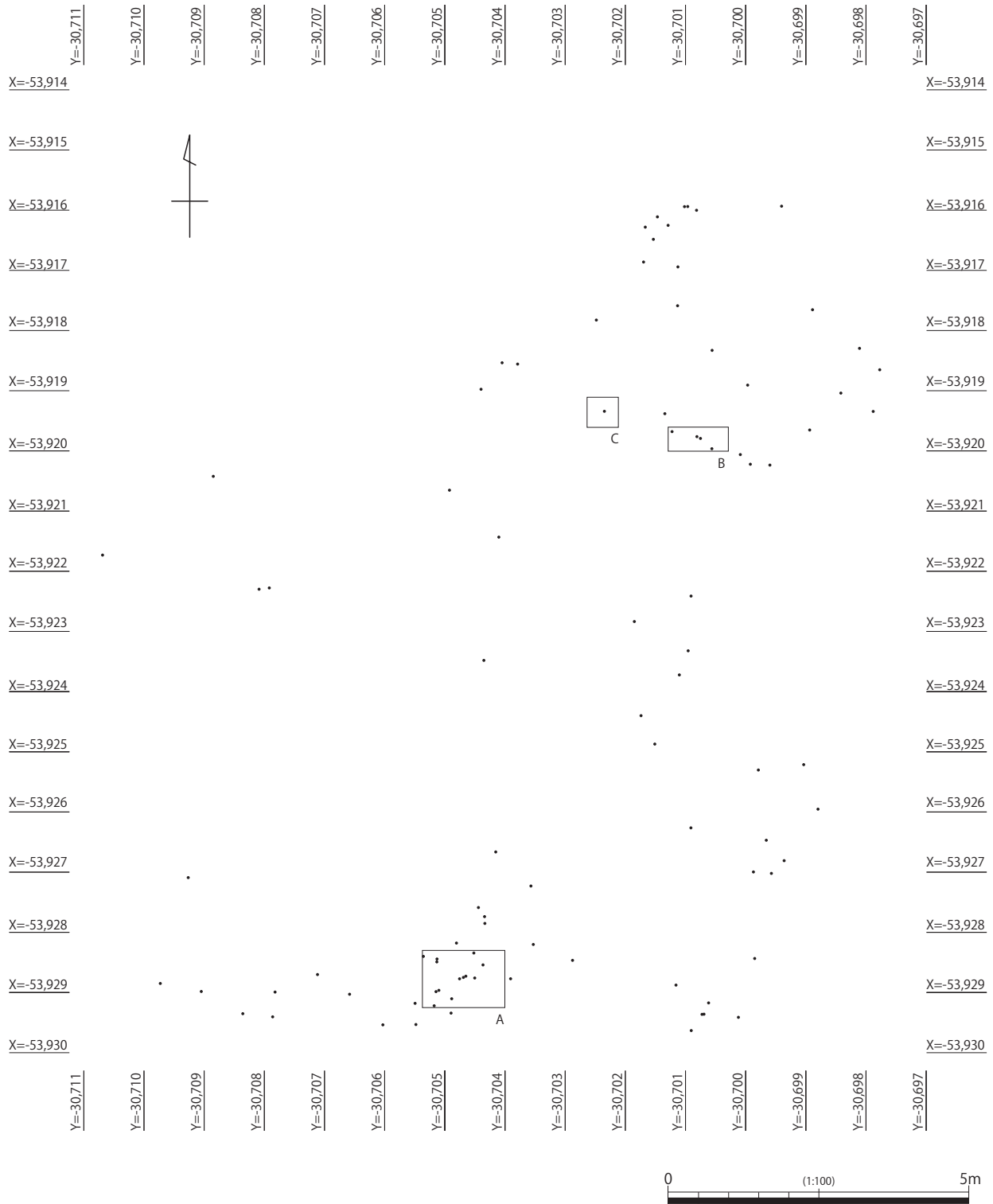
第2項 出土状況

(1) 概要

20次調査区において、人骨の殆どは中心域側から東側に張り出す方形の地形（中心域張出部）を、弥生時代後期後葉から終末期前半に区画していたとみられる SD38-Ca と SD38-Cb から出土している。SD38-Ca より下層から人骨は出土しておらず、これより上層で出土している人骨は少数かつ散発的で本来の位置から遊離したものの可能性が高い。つまり、当調査区において検出した人骨は本来極めて限定的に埋没していたとみることができる。弥生時代後期後葉の区画溝 SD38-C の埋積の最終段階である SD38-Ca に人骨が埋没している状況は、1次調査区における SD38-2 におけるそれと共通しており、両調査区の人骨は一連のものともて間違いあるまい。ただし、5323点にのぼる1次調査区の出土人骨と比べ、20次調査区では SD38 の検出範囲は同程度でありながら出土人骨は水洗選別を含め 679点と少ない。したがって、20次調査区では人骨群の北端付近が検出されたとみることができ、その分布範囲を窺い知れる情報が得られたといえよう。また、密度が低いがゆえに出土状況を検討し易く、以下に述べるように人骨群全体の形成過程の解明につながる知見が得られた点は特筆される。

(2) 上層における出土状況

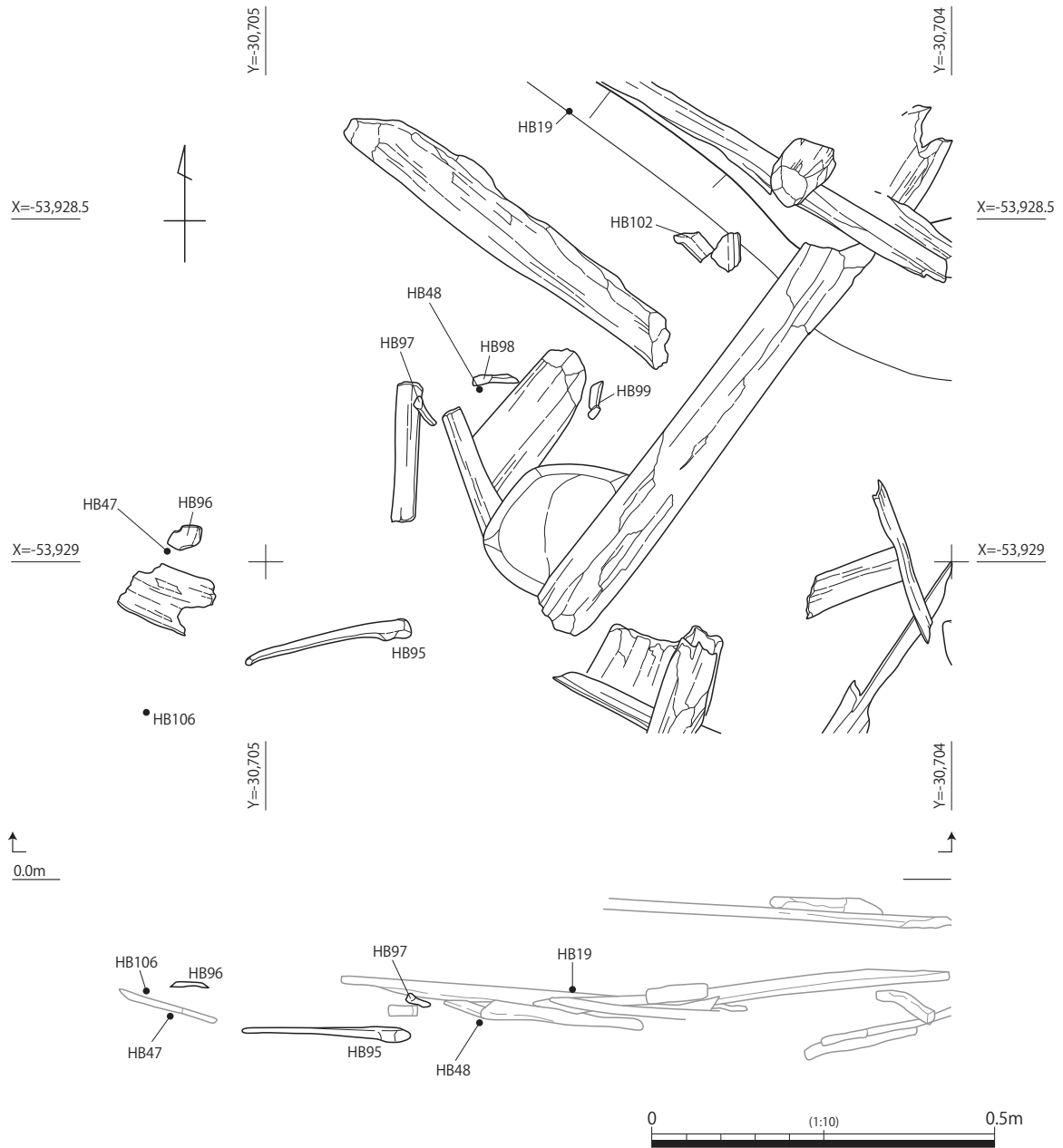
SD38-Ca・b より上層から出土した人骨の位置と、拡大して掲載する範囲を第 242 図に示す。上層から出土した人骨の多くが SD38-A・SD38-B、あるいはそれと重複する箇所から出土していることが見て取れる。拡大範囲 A～C の状況が示すように、上層から出土した人骨の分布は散漫であり、ごく一部を除いて個体や部位のまとまりが認められない。このような出土状況は、これら上層の人骨が後の造成による区画溝の変遷によって遊離したものであることを支持する。



第 242 図 SD38-Ca・b 以外の人骨出土位置と拡大範囲

拡大範囲 A (第 243 図、第 32 表)

SD38-A、SD38-B、SD38 一括で取り上げた 10 点をまとめて示している。ほぼ完形の右尺骨 HB95 を検出しているが、他に腕や手の骨は一切含まれない。肋骨が 4 点含まれているが、いずれも細片であり、部位のまとまりがあるとは言い難い。上層において人骨は概ねこれに類似する散漫な出土状況を呈している。



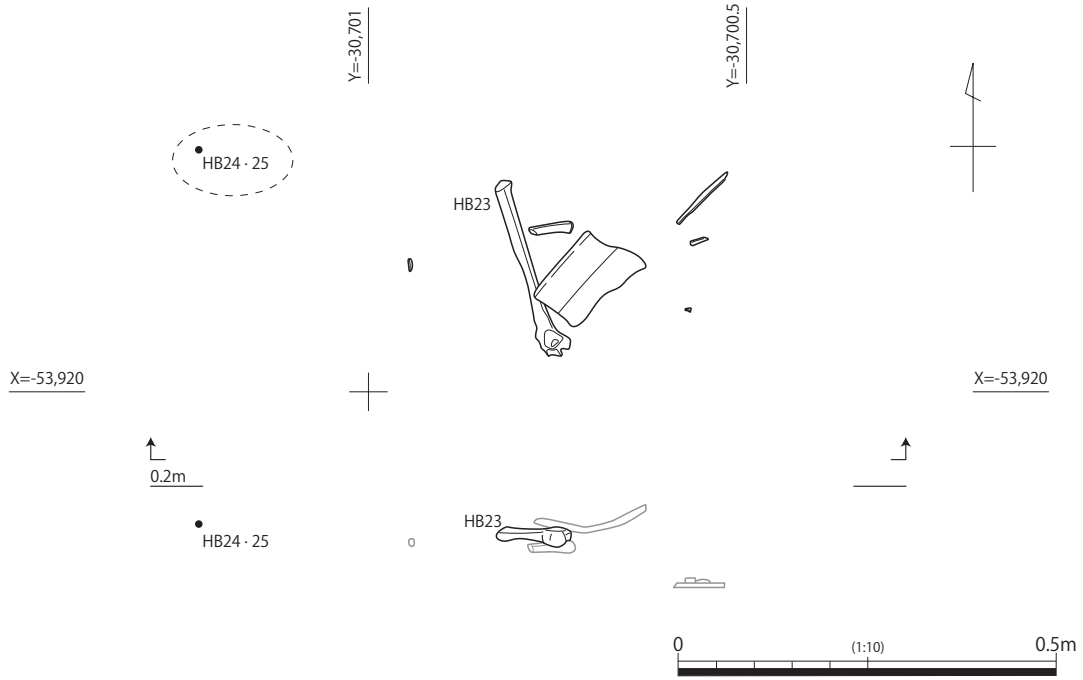
第 243 図 拡大範囲 A 人骨出土状況

拡大範囲 B (第 244 図、第 33 表)

調査区北半部の SD38-A 東肩付近で成人の左上腕骨 HB23 を検出した。この左上腕骨の西側 0.4 m の位置で同一個体の左第 1 中足骨 HB24 と第 1 基節骨 HB25 をごく近接して検出したが、左足を構成するその他の部位は認められない。

拡大範囲 C (第 245 図、第 34 表)

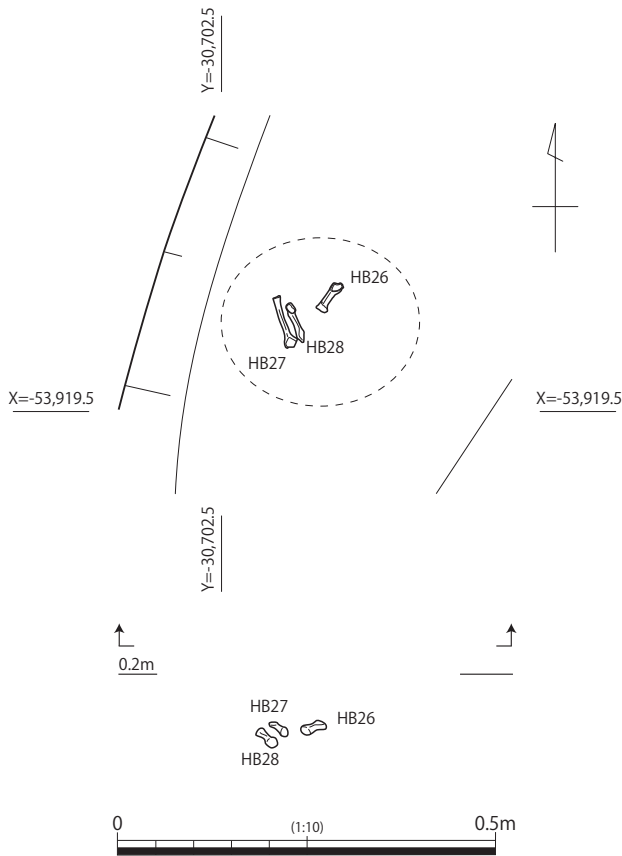
調査区北半部の SD38-A 西肩付近で、成人の同一個体の左第 2～4 中足骨 HB26～28 を検出した。第 2 中足骨 HB26 が僅かに離れているものの、ほぼ解剖学的位置が保たれている。上層において解剖学的位置が保持されている唯一の例である。



第 244 図 拡大範囲 B 人骨出土状況

第 32 表 拡大範囲 A 出土人骨

掲載番号	遺構	部位	部分	左右	年齢区分
HB19	SD38-A	腰椎	椎弓	M	不明
HB47	SD38-B	大腿骨	遠位端	R	10代前半以前
HB48	SD38-B	肋骨	細片	R	-
HB95	SD38	尺骨	一部破損	R	成人
HB96	SD38	距骨	一部破損	R	-
HB97	SD38	肋骨	頭付近	L	-
HB98	SD38	肋骨	一部破損	R	-
HB99	SD38	肋骨	頭付近	R	-
HB102	SD38	腰椎	一部破損	M	20代
HB106	SD38	下顎	一部破損	R	-



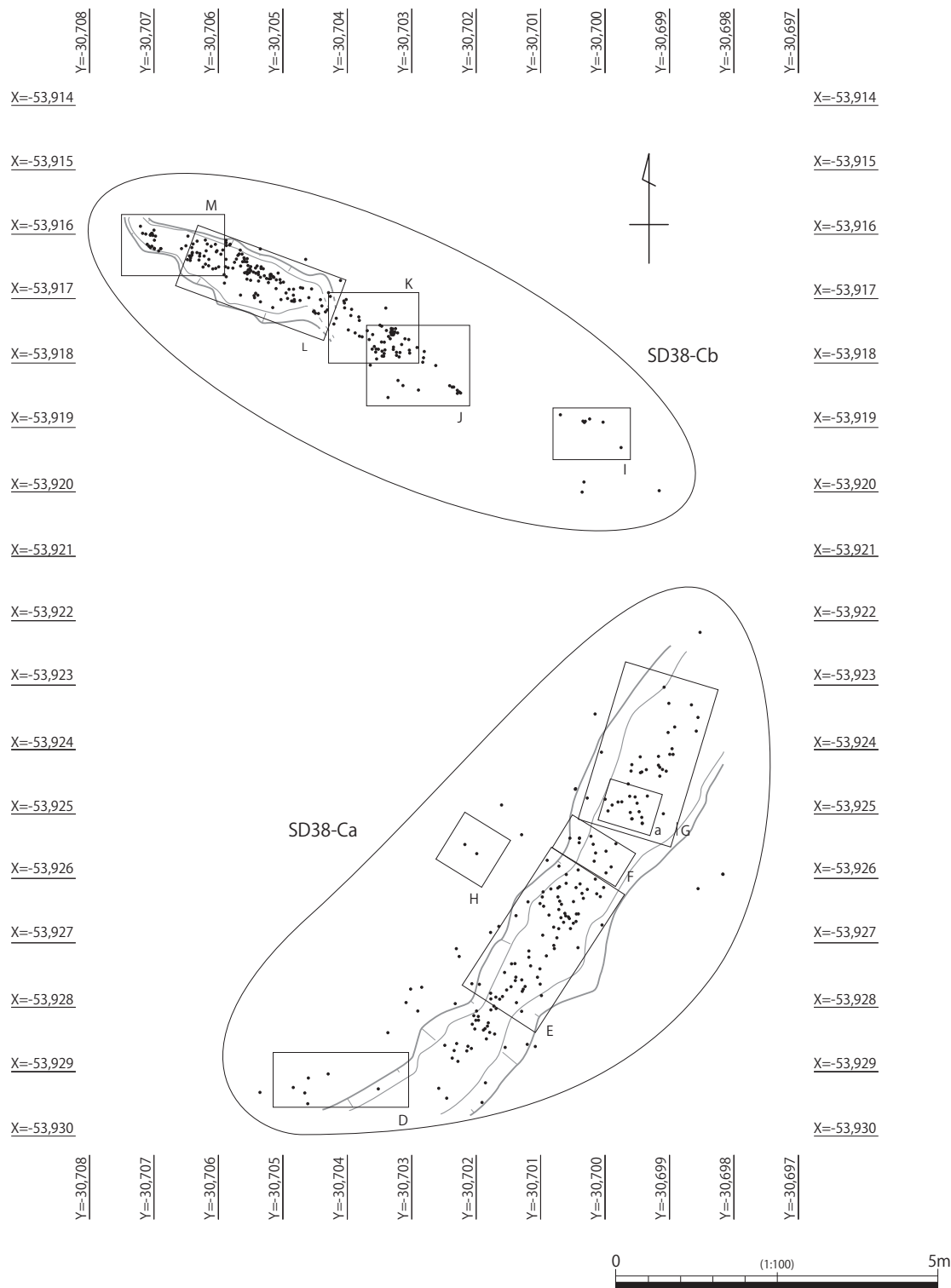
第 245 図 拡大範囲 C 人骨出土状況

第 33 表 拡大範囲 B 出土人骨

掲載番号	部位	部分	左右	年齢区分
HB23	上腕骨	遠位～骨幹	L	成人
HB24	第1中足骨	完形	L	成人
HB25	下肢 第1基節骨	完形	L	-

第 34 表 拡大範囲 C 出土人骨

掲載番号	部位	部分	左右	年齢区分
HB26	第2中足骨	近位～骨幹	L	成人
HB27	第3中足骨	完形	L	成人
HB28	第4中足骨	骨幹	L	成人



第246図 SD38-Ca・b および検出面の人骨出土位置と拡大範囲

(3) SD38-Ca・bにおける出土状況

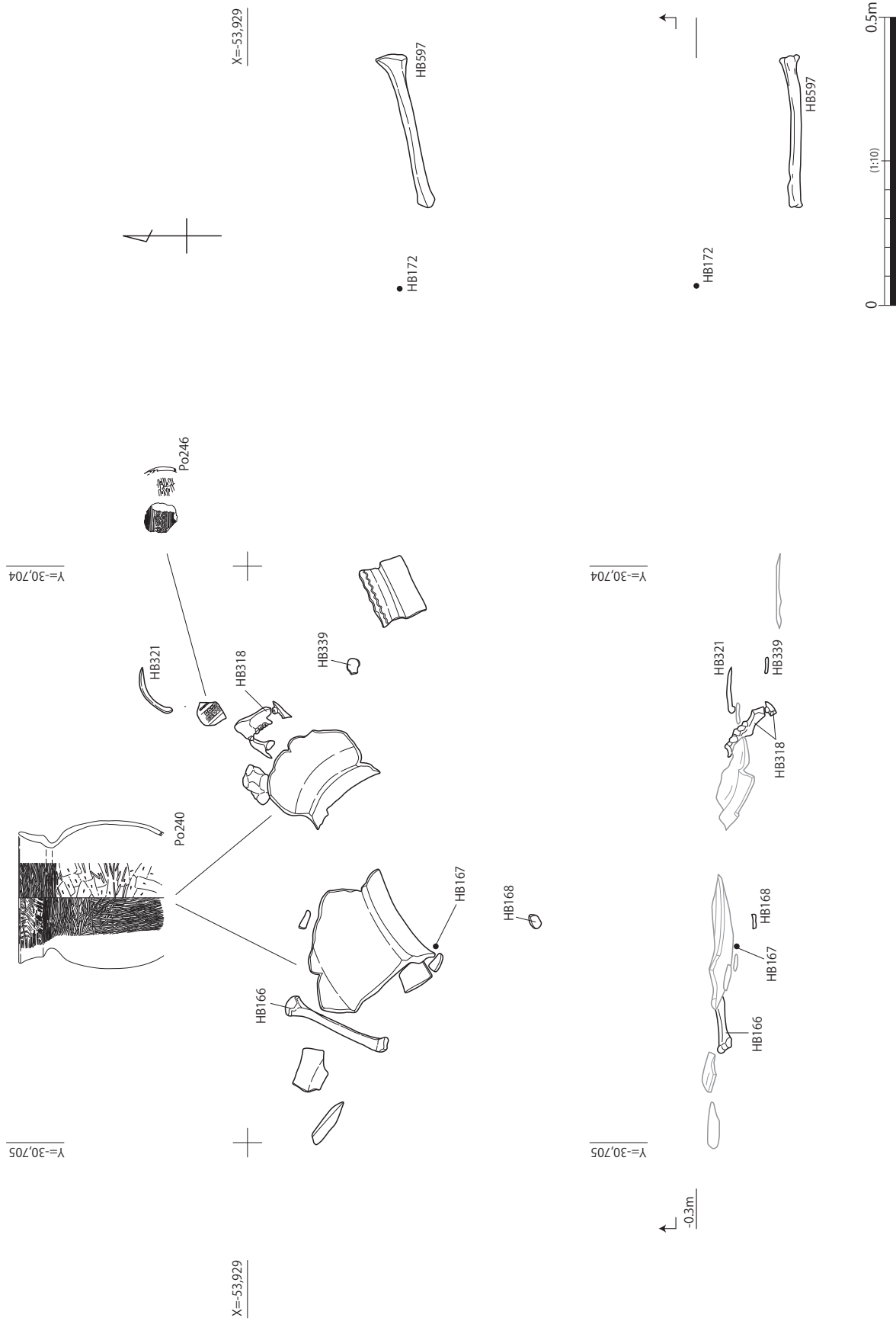
SD38-Ca、SD38-Cbいずれにおいても、人骨は底面を中心に出土しており、攪乱された状況は一部にしか認められない（第246図、写真15・16）。検出した人骨には、椎骨や足根骨をはじめとする短骨が多く、上腕骨や大腿骨といった主要四肢骨は少ない。これら人骨に伴う遺物は少ないが、複数箇所において典型的な弥生時代後期後葉の土器が共伴していることを確認した。また、SD38-Caの検



写真 15 SD38-Ca 人骨出土状況（北東から）



写真 16 SD38-Cb 人骨出土状況（北西から）



第247図 拡大範囲D人骨出土状況



写真 17 拡大範囲 D 人骨出土状況（北西から）

出面では SD38-Ca・b 内からは出土しなかった残存度の高い下顎骨が 2 か所で出土している。以下、第 246 図に示した拡大範囲ごとに、年齢区分を加味した最小個体数の算定を行いながら、出土状況の特徴を記述する。

(ア) SD38-Ca および同検出面

SD38-Ca 埋土からは 129 点の人骨が出土した。人骨は検出長 8.6 m を測る SD38-Ca 中に均質に分布しているわけではなく、南北端付近は極めて希薄である。また、検出面で出土した 36 点の人骨の殆どは SD38-Ca の西側、すなわち中心域側に分布する。以下、SD38-Ca 内の出土状況を拡大範囲 E～G（第 248～251 図、写真 18・19）に、検出面の出土状況を拡大範囲 D・H（第 247・252 図、写真 17・20）に示す。

拡大範囲 D（第 247 図、写真 17、第 35 表）

調査区南壁付近の SD38-Ca 検出面、0.6 m × 1.2 m の範囲で 8 点の人骨を検出した。下顎骨 HB318（PL.132-2）は、第 3 大臼歯が萌出完了している成人のものである。部位の重複はないが、30 代以上を含む成人と、10 代前半以前の部位が含まれることから、2 個体以上の部位が混在していることは

第 35 表 拡大範囲 D 出土人骨

掲載番号	部位	部分	左右	年齢区分
HB166	上腕骨	骨幹	R	10 代前半以前
HB167	胸骨	胸骨体細片	M	-
HB168	胸椎（上部）	完形	M	10 代前半以前
HB172	胸椎（下部）	一部破損	M	30 代以上
HB318	下顎骨		M	成人
HB321	肋骨	一部破損	L	-
HB339	舟状骨（足根骨）	完形	R	-
HB597	上腕骨	骨幹		成人



第 248 図 拡大範囲 E 人骨出土状況

第36表 拡大範囲E 出土人骨

掲載番号	遺構	層位	部位	部分	左右	年齢区分
HB215	SD38-Ca	埋土	第6頸椎	一部破損	M	20代
HB217	SD38-Ca	埋土	頸椎(上部)	一部破損	M	不明
HB218	SD38-Ca	埋土	立方骨	完形	R	-
HB219	SD38-Ca	埋土	第3中足骨	近位~骨幹	L	10代前半以前
HB220	SD38-Ca	埋土	膝蓋骨	一部破損	R	-
HB221	SD38-Ca	埋土	胸椎(上部)	一部破損	M	20代
HB222	SD38-Ca	埋土	胸椎(上部)	完形	M	20代
HB223	SD38-Ca	埋土	寛骨	坐骨	L	10代前半
HB224	SD38-Ca	埋土	仙椎	一部破損	M	10代前半
HB225	SD38-Ca	埋土	舟状骨(足根骨)	一部破損	R	-
HB226	SD38-Ca	埋土	胸椎(上部)	一部破損	M	20代
HB227	SD38-Ca	埋土	第1肋骨	一部破損	R	-
HB228	SD38-Ca	検出面	大腿骨	骨幹	R	10代前半以前
HB230	SD38-Ca	埋土	頭蓋骨	後頭骨	M	30代以前
HB231	SD38-Ca	埋土	胸椎(上部)	一部破損	M	10代前半
HB232	SD38-Ca	埋土	胸椎(上部)	椎体破損	M	20代
HB233	SD38-Ca	埋土	頭蓋骨	右側頭骨ほか細片	M	不明
HB234	SD38-Ca	埋土	踵骨	関節部付近	R	成人
HB235	SD38-Ca	埋土	肋骨	一部破損	L	-
HB236	SD38-Ca	埋土	距骨	完形	R	-
HB237	SD38-Ca	埋土	第1中手骨	完形	L	成人
HB238	SD38-Ca	埋土	腰椎(上部)	完形	M	20代
HB239	SD38-Ca	埋土	頸椎(下部)	一部破損	M	不明
HB240	SD38-Ca	埋土	立方骨	完形	L	-
HB241	SD38-Ca	埋土	胸椎	椎弓細片	M	不明
HB243	SD38-Ca	埋土	第3中足骨	完形	L	成人
HB244	SD38-Ca	埋土	腰椎(上部)	一部破損	M	20代
HB245	SD38-Ca	埋土	胸椎(上部)	一部破損	M	30代以上
HB248	SD38-Ca	埋土	第2胸椎	完形	M	20代
HB249	SD38-Ca	埋土	胸椎(下部)	完形	M	20代
HB250	SD38-Ca	埋土	肩甲骨	関節部付近	L	10代前半以前
HB253	SD38-Ca	埋土	環椎	細片	M	不明
HB255	SD38-Ca	埋土	踵骨	完形	L	成人
HB256	SD38-Ca	埋土	踵骨	内側	L	成人
HB257	SD38-Ca	埋土	肋骨	頭付近	L	-
HB258	SD38-Ca	埋土	肋骨	骨幹	L	-
HB259	SD38-Ca	埋土	胸椎	椎弓細片	M	20代
HB260	SD38-Ca	埋土	第1胸椎	完形	M	10代前半
HB261	SD38-Ca	埋土	第1楔状骨	完形	R	-
HB262	SD38-Ca	埋土	胸椎(下部)	一部破損	M	30代以上
HB263	SD38-Ca	埋土	頸椎	一部破損	M	10代後半~20代
HB264	SD38-Ca	検出面	第1中足骨	一部破損	L	成人
HB265	SD38-Ca	埋土	第2中足骨	近位~骨幹	L	10代前半以前
HB266	SD38-Ca	埋土	寛骨	坐骨	L	10歳以前
HB267	SD38-Ca	埋土	胸椎(下部)	一部破損	M	20代
HB268	SD38-Ca	埋土	頭蓋骨	前頭骨細片	M	不明
HB269	SD38-Ca	埋土	頸椎(上部)	一部破損	M	10歳以前
HB270	SD38-Ca	埋土	胸骨	胸骨柄細片	M	-
HB271	SD38-Ca	埋土	第5中足骨	近位~骨幹	L	10代前半以前
HB272	SD38-Ca	埋土	踵骨	一部破損	L	成人
HB273	SD38-Ca	埋土	胸椎(上部)	完形	M	10代前半
HB274	SD38-Ca	埋土	頭蓋骨	前頭骨	M	不明
HB276	SD38-Ca	埋土	大腿骨	遠位端	R	10代前半以前
HB277	SD38-Ca	埋土	大腿骨	遠位端	R	10代前半以前
HB278	SD38-Ca	埋土	距骨	完形	L	-
HB279	SD38-Ca	埋土	腰椎	椎弓細片	M	不明
HB280	SD38-Ca	埋土	腰椎(下部)	一部破損	M	20代
HB281	SD38-Ca	埋土	頭蓋骨	左側口蓋骨細片	M	成人
HB282	SD38-Ca	埋土	大腿骨	骨頭	不明	10代前半以前
HB283	SD38-Ca	埋土	踵骨	一部破損	L	10代前半以前
HB284	SD38-Ca	埋土	肋骨	一部破損	L	-
HB285	SD38-Ca	埋土	仙骨	一部破損	M	成人
HB286	SD38-Ca	埋土	寛骨	腸骨細片	R	10歳以前
HB287	SD38-Ca	埋土	立方骨	完形	L	-
HB288	SD38-Ca	埋土	肋骨	頭付近	R	-
HB289	SD38-Ca	埋土	上腕骨	近位端	L?	不明
HB290	SD38-Ca	埋土	第1胸椎	完形	M	20代以上
HB291	SD38-Ca	埋土	立方骨	一部破損	L	-
HB292	SD38-Ca	埋土	第4中手骨	完形	R	成人
HB293	SD38-Ca	埋土	腰椎(上部)	一部破損	M	30代以上
HB295	SD38-Ca	埋土	第3中手骨	完形	L	成人
HB296	SD38-Ca	埋土	第2中手骨	完形	L	成人
HB297	SD38-Ca	埋土	上肢基節骨	完形	-	-
HB298	SD38-Ca	検出面	軸椎	完形	M	10代後半
HB427	SD38-Ca	埋土	第12胸椎	完形	M	20代
HB583	SD38-Ca	埋土	寛骨	腸骨	R	-

明らかである。

なお、この箇所からは波状文と押引文が施された複合口縁をもつ甕 Po240 とスタンプ文が施された装飾壺 Po246 が出土している。

拡大範囲E(第248図、写真18、第36表)

SD38-Ca 南側の 2.6 m × 1.5 m の範囲で 76 点の人骨を検出したものの、解剖学的な位置が保たれているものは全くなく、確認できた同一個体も 0.7 m 離れて検出された上部胸椎上部の HB221 と HB222 のみである。短骨を中心とし、大きな骨が殆どないことは SD38-Ca における他の人骨出土箇所

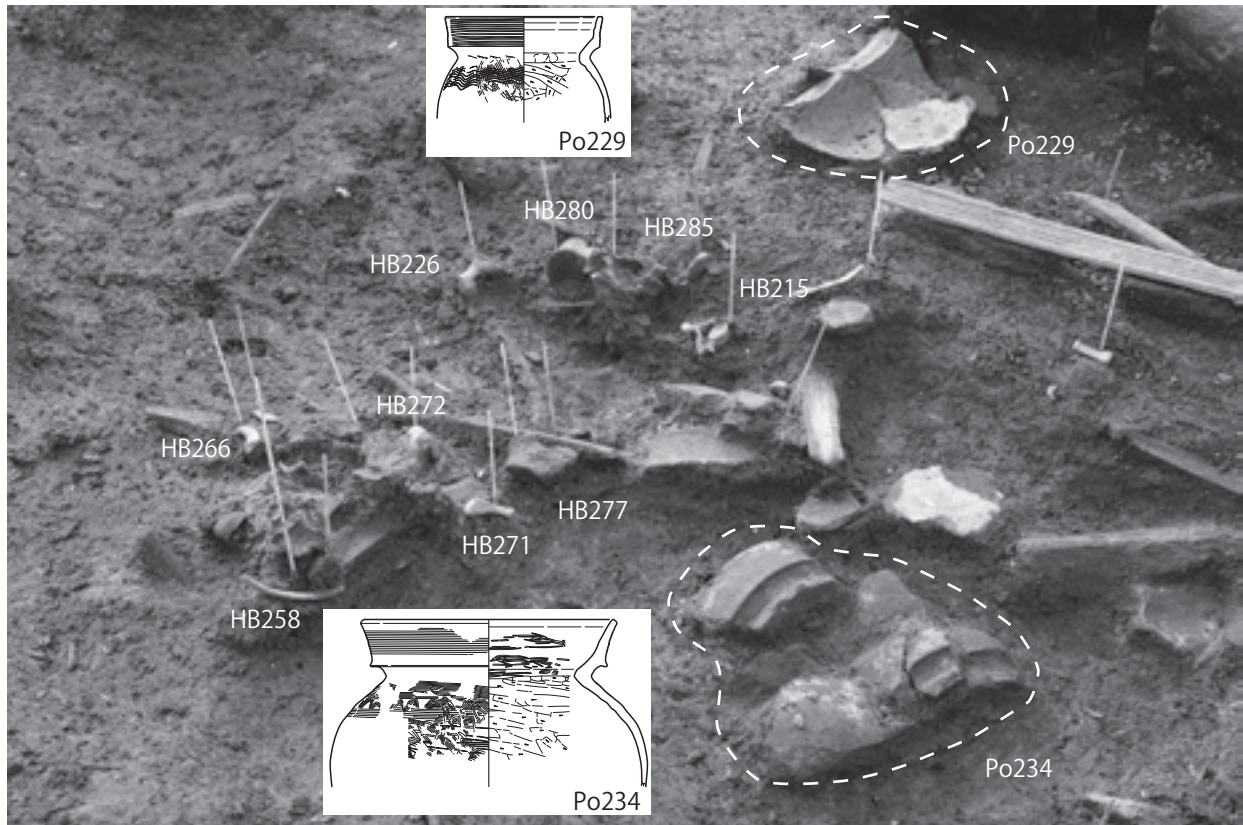


写真 18 拡大範囲 E 人骨出土状況

所と共通している。主要四肢骨は、検出面で出土した10代前半以前の右大腿骨の骨幹部HB228を除き、未癒合の骨端に限られる。いずれも10代前半以前の大腿骨の近位端（骨頭）が1点（HB282）、遠位端が2点（HB276・277）、上腕骨の近位端が1点（HB289）と複数個体が含まれる点の特徴的である。頭蓋骨（HB281）は含まれているものの細片である。

当拡大箇所出土した人骨には、成人の左踵骨が3点（HB255・256・272）、10代前半以前の右大腿骨遠位端2点（HB276・277）、10歳以前の幼児の左右寛骨（坐骨、腸骨）が各1点ずつ（HB266・286）含まれていることから、6個体以上に由来する部位が混在していると判断できる。

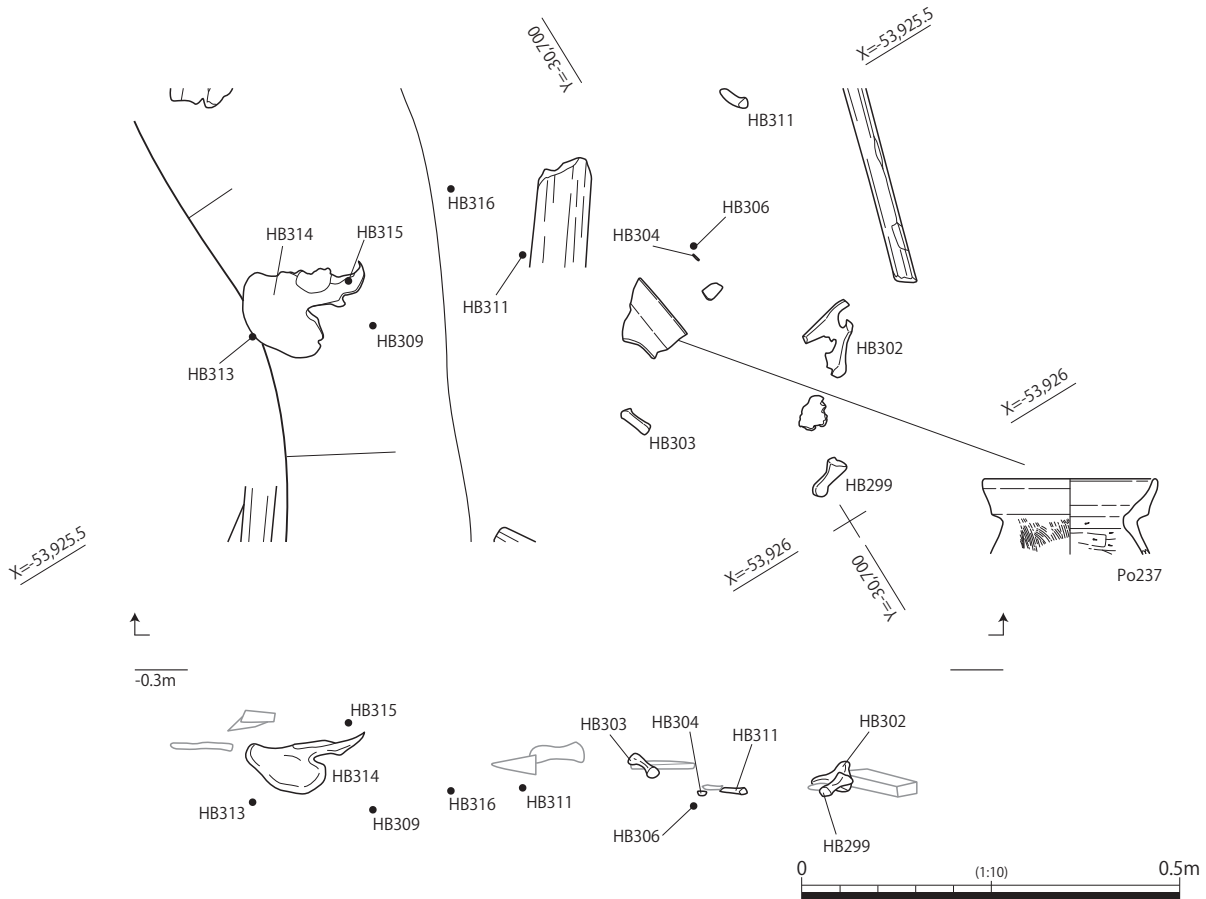
なお、左肋骨HB284に近接してPo231、成人の寛骨HB285の周辺（写真18）では、甕Po229・234が出土している。これらはいずれも弥生時代後期後葉の特徴を示す。

拡大範囲 F（第 249 図、第 37 表）

SD38-Ca 中央部、トレンチ②の周辺 0.6 m × 1.15 m の範囲で 11 点の人骨を検出した。解剖学的位置が保たれている部位はなく、範囲内で同一個体と確認できるものもない。

近接して出土した右寛骨 HB314・315 があるが、HB314 が成人のものであるのに対し、HB315 は 3 要素未癒合の 10 代前半以前の恥骨であり、別個体である。これも含め、30 代以上、10 代後半、10 代前半以前、10 歳以前の部位があることから、点数は少ないものの 4 個体以上の部位が混在していることが分かる。

なお、これら人骨と混在して、弥生時代後期後葉に属す Po237 が出土している。



第 249 図 拡大範囲 F 人骨出土状況

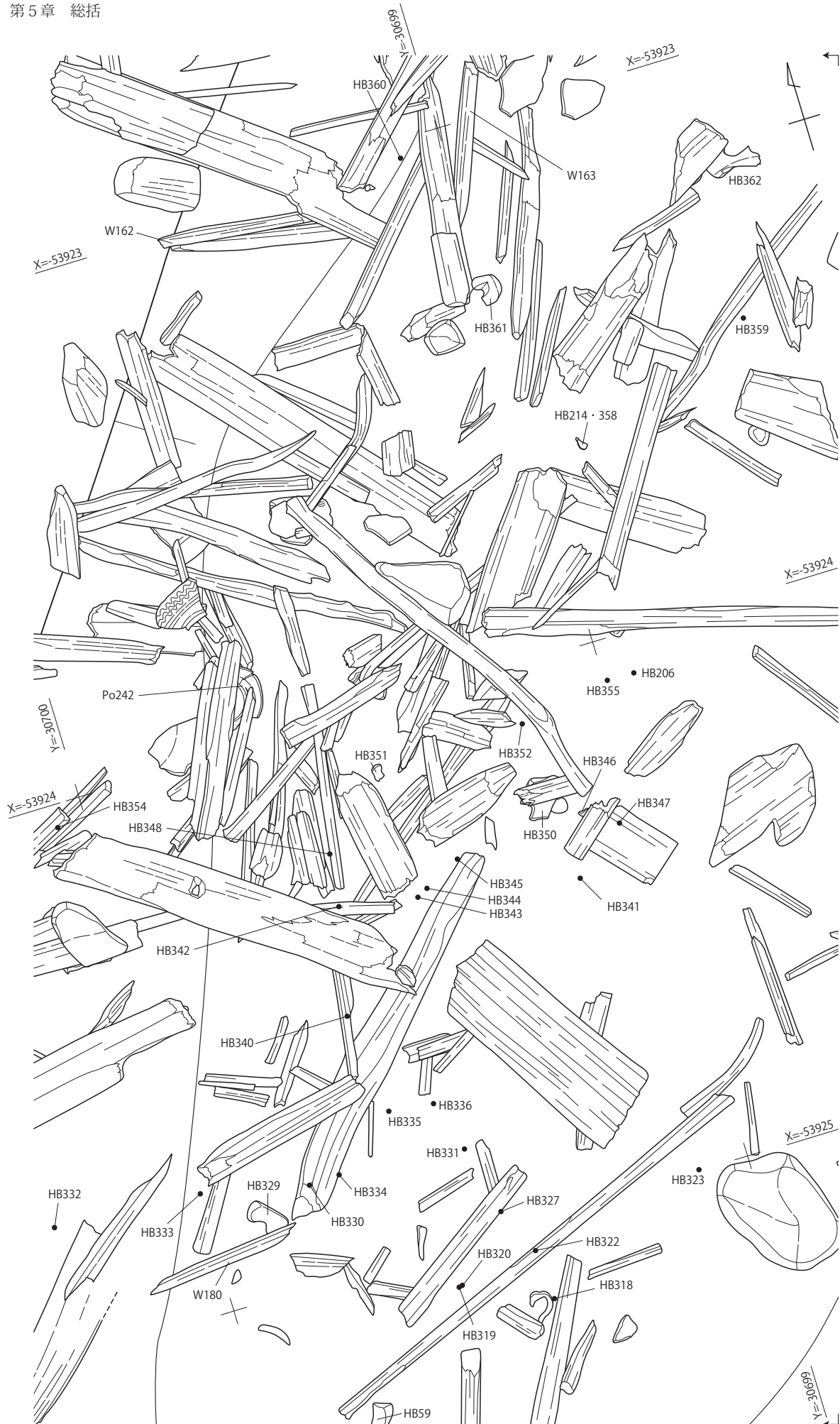
拡大範囲 G (第 250・251 図、写真 19、第 38 表)

SD38-Ca 北側、東西ベルト南側の 2.4 m × 1.5 m の範囲で 43 点の人骨を検出した。人骨の殆どは板材を中心とする多数の木器の下から出土している。このような木器の集積は SD38-Ca に重複する SD38-B 埋土の特徴である。東西ベルトの土層断面 (第 12 図) では、SD38-B 埋土が SD38-Ca の埋土に深く入り込んでいることからみても、当拡大範囲の検出面においては、SD38-B の埋土を除去しきれていない状態であったとみられる。したがって、木器に混じって出土した Po242 はじめ弥生時代終末期後半の土器は、本来 SD38-B に属するものと考えられる。

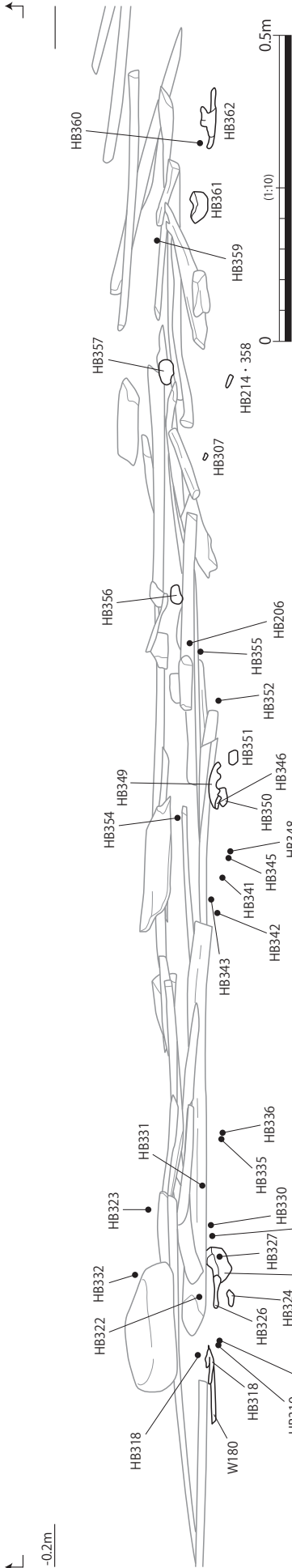
この範囲で出土した人骨には解剖学的位置が保たれているもの、同一個体と確認できたものはなく、散乱した出土状況が顕著である。主要四肢骨についてみれば、大腿骨近位端細片の HB327 を除き成人のものではなく、10 代前半以前の脛骨近位端が 2 点 (HB336・337)、大腿骨遠位端が 1 点 (HB348)、遠位端未癒合の橈骨が 1 点 (HB354) の計 4 点、10 歳以前の脛骨骨幹部 (HB362) が 1 点である。10 代前半以前の左脛骨近位端 (HB333・360) の部位の重複に加え、10 歳以前の右脛骨骨幹部 (HB362)

第 37 表 拡大範囲 F 出土人骨

掲載番号	部位	部分	左右	年齢区分
HB299	第 1 中足骨	完形	R	成人
HB302	肩甲骨	関節部付近	R	10 歳以前
HB303	第 1 中手骨	完形	R	成人
HB304	環椎	細片	M	不明
HB306	胸椎 (下部)	完形	M	10 代後半
HB309	胸椎 (上部)	椎体細片	M	不明
HB311	第 1 中足骨	遠位～骨幹	R	10 代前半以前
HB313	第 2 中手骨	近位～骨幹	R	10 代前半以前
HB314	寛骨	一部破損	R	成人
HB315	寛骨	恥骨	R	10 代前半以前
HB316	第 2 胸骨	一部破損	M	30 代以上



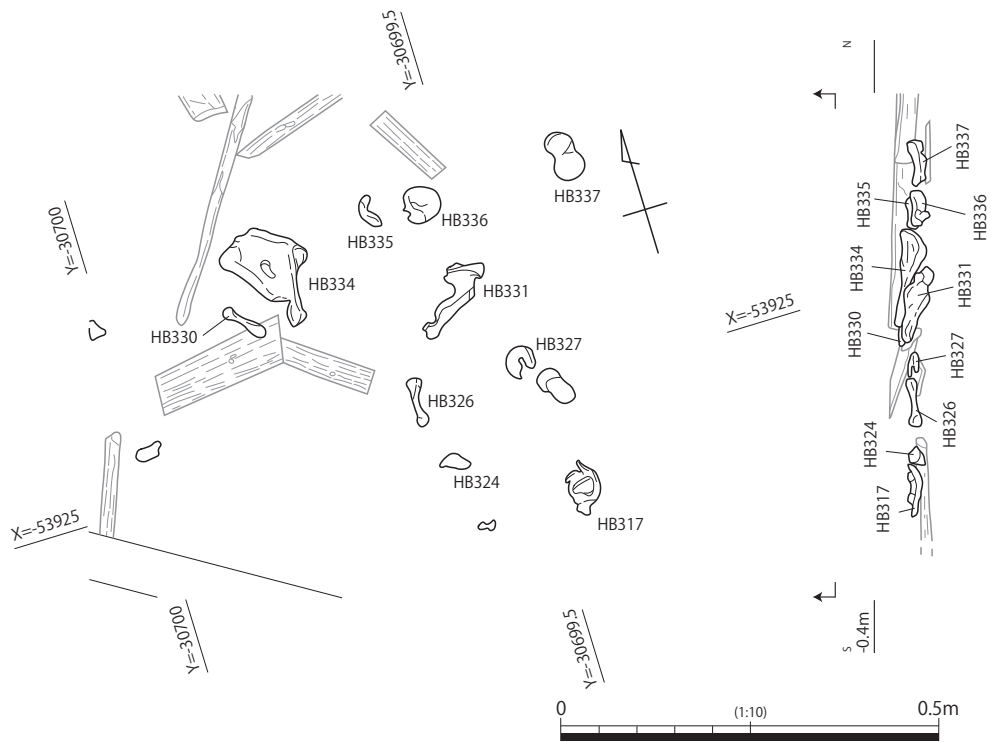
第250-1図 拡大範囲G人骨出土状況(1)



第 250-2 図 拡大範囲 G 人骨出土状況 (2)

第 38 表 拡大範囲 G 出土人骨

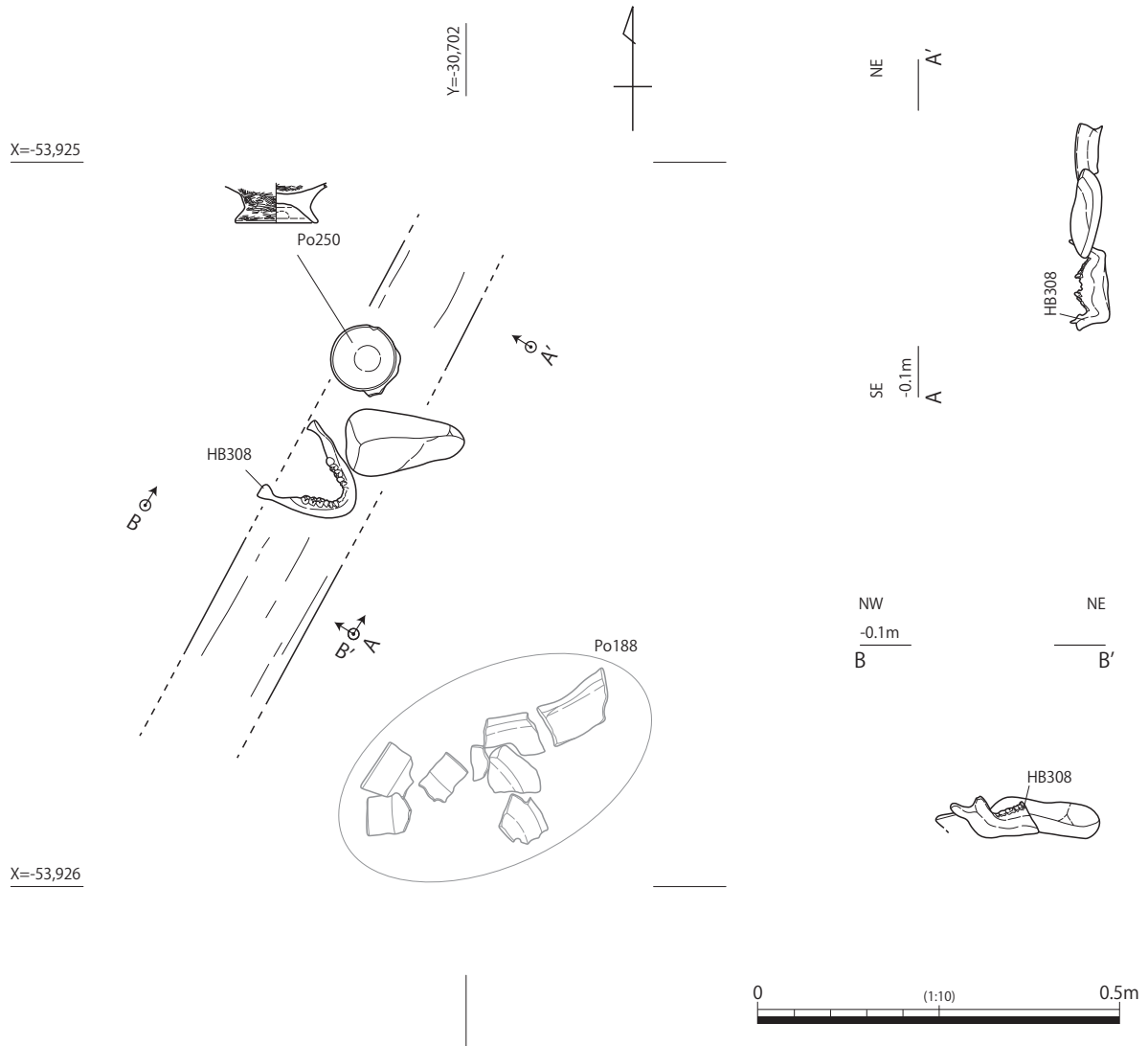
人骨番号	部位	部分	左右	年齢区分
HB206	腰椎	一部破損	M	10 代後半
HB214	胸椎 (下部)	完形	M	10 代前半
HB307	胸椎 (下部)	完形	M	10 代後半
HB317	環椎	一部破損	M	不明
HB318	下顎骨		M	成人
HB319	腰椎	椎弓細片	M	不明
HB320	第 1 胸椎	一部破損	M	20 代
HB322	腰椎 (上部)	一部破損	M	30 代以上
HB323	第 1 中手骨	完形	R	成人
HB324	第 1 楔状骨	一部破損	R	-
HB326	第 3 中足骨	完形	L	成人
HB327	大腿骨	近位端	L?	成人
HB329	踵骨	完形	R	成人
HB330	第 4 中手骨	完形	R	成人
HB331	肩甲骨	関節部付近	R	10 歳以前
HB332	頸椎 (上部)	一部破損	M	不明
HB333	腰椎 (上部)	一部破損	M	10 代後半
HB334	肩甲骨	一部破損	R	成人
HB335	肩甲骨	鳥口突起細片	R	10 代前半以前
HB336	脛骨	近位端	L	10 代前半以前
HB337	脛骨	近位端	L	10 代前半以前
HB340	上肢基節骨	完形	-	-
HB341	第 2 中足骨	近位~骨幹	R	10 代前半以前
HB342	踵骨	一部破損	R	成人
HB343	胸椎 (下部)	一部破損	M	20 代
HB344	中手骨	骨幹	不明	10 代前半以前
HB345	肋骨	一部破損	L	-
HB346	舟状骨 (手根骨)	完形	L	-
HB347	中手骨	骨幹	不明	10 代前半以前
HB348	大腿骨	遠位端	R	10 代前半以前
HB349	寛骨	腸骨	L	10 代以前
HB350	上腕骨 or 大腿骨	近位端	不明	-
HB351	立方骨	完形	L	-
HB352	立方骨	完形	L	-
HB354	橈骨	近位~骨幹	R	10 代前半以前
HB355	距骨	一部破損	R	-
HB356	大腿骨	骨頭	不明	10 代前半以前
HB357	上腕骨	近位端	R?	成人?
HB358	舟状骨 (足根骨)	完形	R	-
HB359	腰椎 (下部)	椎体	M	30 代以上
HB360	腰椎 (上部)	完形	M	10 代後半
HB361	大腿骨	遠位端	L	10 代前半以前
HB362	脛骨	骨幹	R	10 歳以前



第 251 図 拡大範囲 G-a 人骨出土状況



写真 19 拡大範囲 G 人骨出土状況 (南東から)



第 252 図 拡大範囲 H 人骨出土状況

があることから、10代前半以前および10歳以前の3個体以上が含まれていることが分かる。これに加え、椎骨には10代前半のものだけでなく、10代後半（HB206・307・333・360）、20代（HB320・343）、30代以上（HB322・359）のものがあり、さらに3個体以上の部位が含まれていることが分かる（PL.137-2）。このような散漫な出土状況のなかであって、幼児とみられる10歳以前のものを含め6個体以上の部位が混在している点が特筆される。

拡大範囲 H（第 252 図、写真 20）

SD38-Ca 西肩から 1.1 m の位置で、下顎骨 HB308（PL.132-1）を検出した。ほぼ完形の下顎骨で、10代後半の男性のもの可能性が高い。板の上に乗った状態で単独出土したものであり、散乱した出土状況が顕著な 20 次調査区出土人骨のなかであって特異な出土状況を示す。この下顎骨 HB308 には頭蓋骨からの切り離しによるとみられる受傷痕が残されており、下顎骨を個別に取り扱った意図がうかがえる。近接して脚部を上にした状態の脚台付坏 Po250 と長軸 16cm の楕円礫が出土している。下顎骨 HB308 から 0.4 m の位置で弥生時代終末期後半の特徴を示す甕 Po188 が出土しているが、こ



写真 20 拡大範囲 H 人骨出土状況（東から）

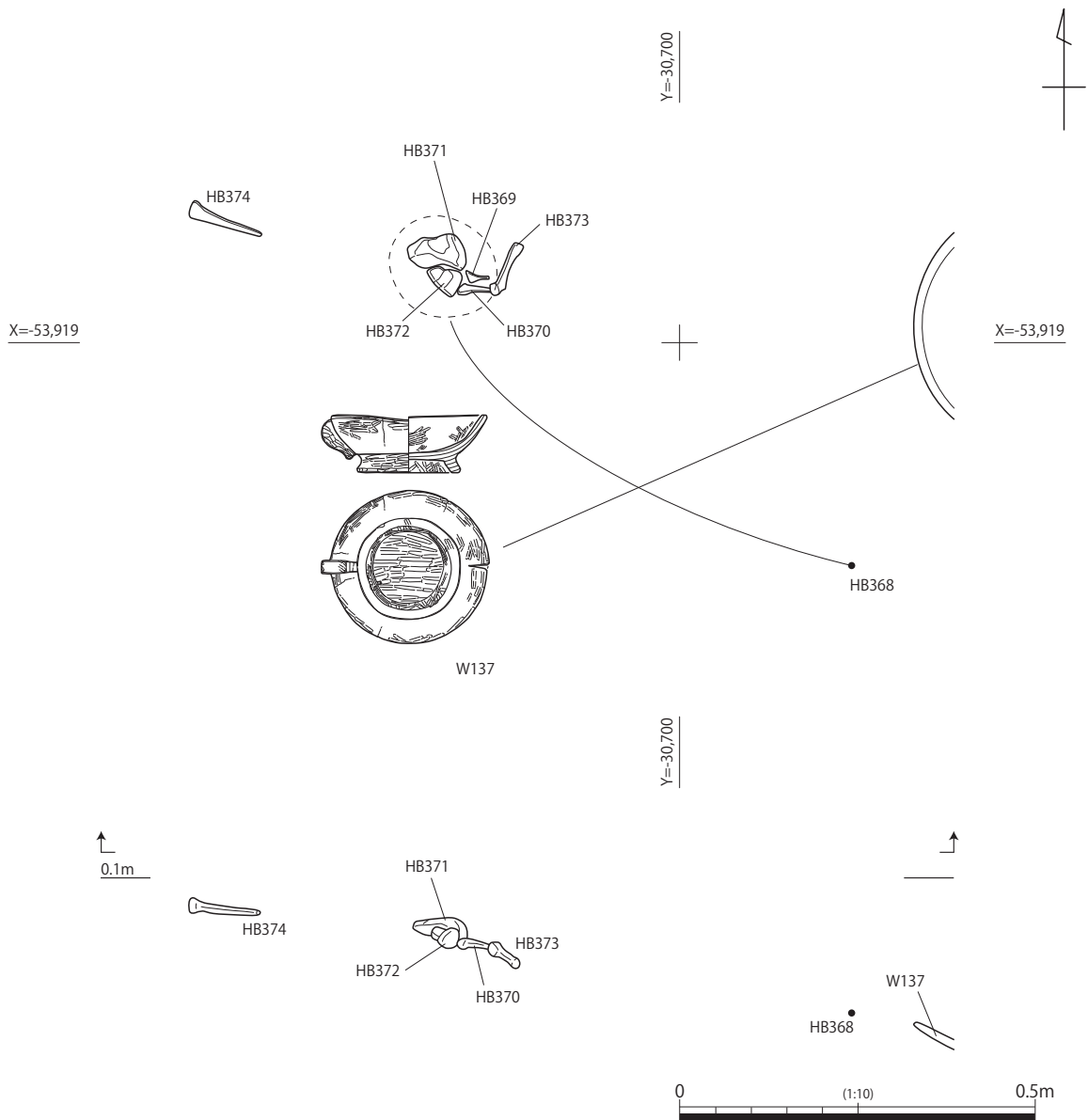
れは下顎骨 HB308 とそれが据えられた板を埋める黒褐色シルト混細砂層の上に堆積する造成土②に属するものである。

(イ) SD38-Cb

SD38-Cb は、トレンチ 3 の土層断面や SD38-C 西肩に伴う矢板の欠損から、検出された範囲より東側に延長し、SD38-Ca と直交していたとみられる。これを裏付けるように、SD38-Cb の底面付近で検出した人骨群は遺構を平面検出した範囲より東側に延長し、SD38-A、SD38-D に切られる箇所です途切れるものの、調査区東壁付近まで概ね帯状の分布状況を呈す。これら検出範囲外のものも含め、SD38-Cb の埋土からは 245 点、検出面からは 3 点の人骨が出土した。以下、SD38-Cb における人骨出土状況を拡大範囲 I～M（第 253～257 図、写真 21・22）に示す。

拡大範囲 I（第 253 図、写真 21、第 39 表）

SD38-C 矢板列の西側 0.8 m × 1.2 m の範囲で 7 点の人骨を検出した。このうち、右踵骨と距骨（HB371・372）は解剖学的位置がほぼ保たれた状態であった。また、右第 2～4 中足骨（HB368～370）は同一個体であり、そのうち右第 2・3 中足骨（HB368・369）は右踵骨・距骨（HB371・372）と極めて近接して出土している。本来その間をつなぐ微小な足根骨は発掘調査時には確認できなかったものの、このような出土状況といずれも成人の骨である点からみて、これらは同一個体の可能性が高い。踵骨・距骨（HB371・372）の上面に認められる一連の面的な受傷痕から、これらの人骨は切り落とされた右足に由来するものとみられる。なお、これらに部位の重複はないが、西側に 0.3 m 離



第 253 図 拡大範囲Ⅰ人骨出土状況

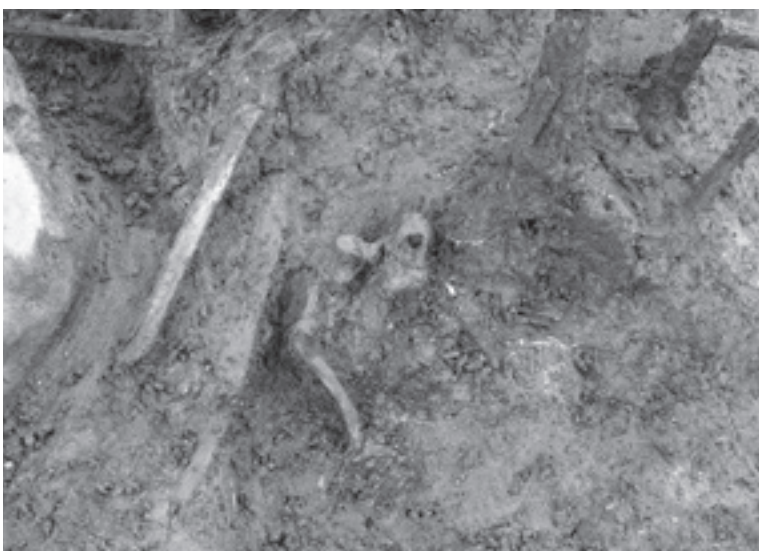
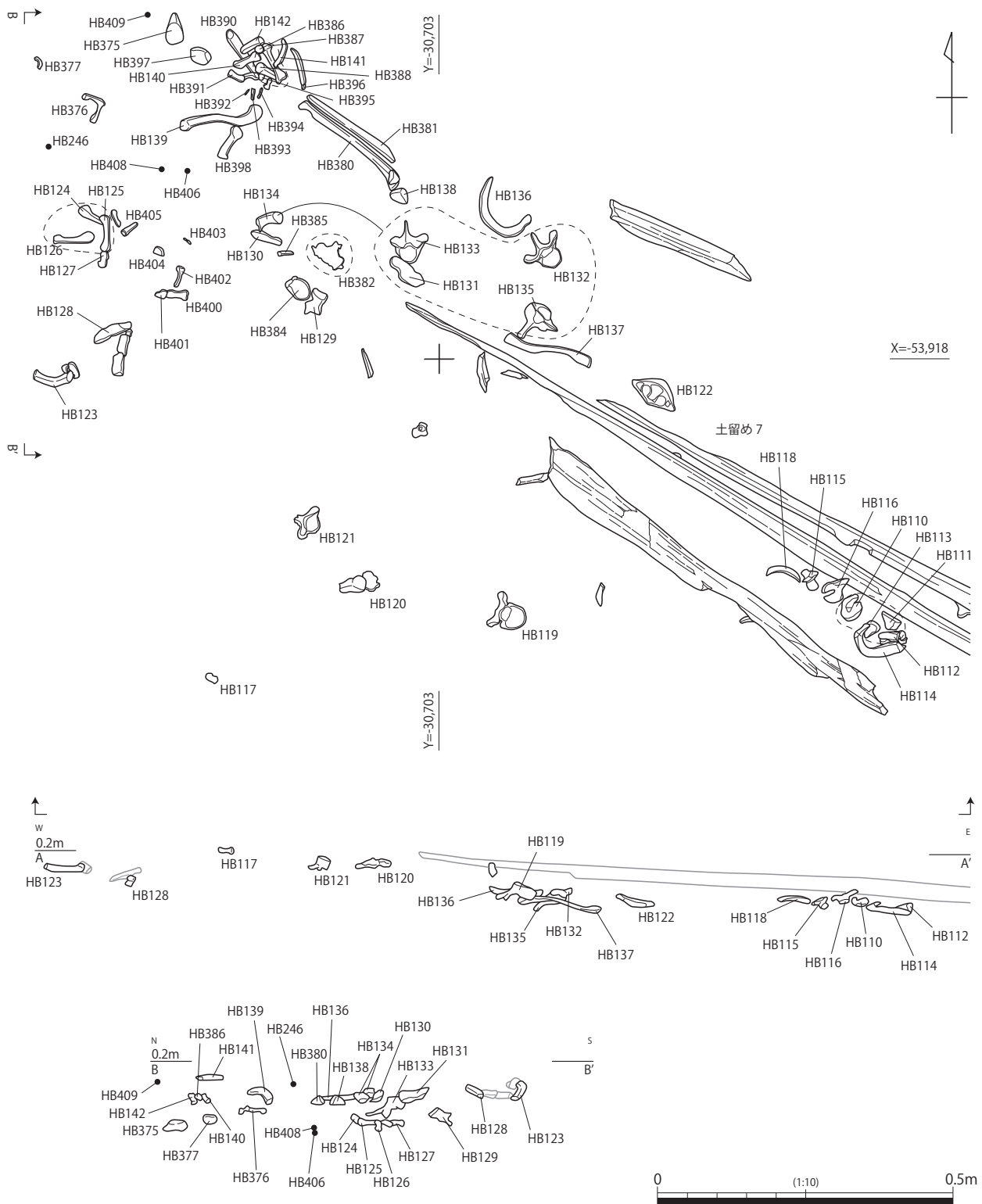


写真 21 拡大範囲Ⅰ人骨出土状況 (北東から)

第 39 表 拡大範囲Ⅰ出土人骨

掲載番号	部位	部分	左右	年齢区分
HB368	第 2 中足骨	近位～骨幹	R	成人
HB369	第 3 中足骨	近位～骨幹	R	成人
HB370	第 4 中足骨	完形	R	成人
HB371	踵骨	一部破損	R	成人
HB372	距骨	一部破損	R	-
HB373	鎖骨	骨幹	R	成人？
HB374	上腕骨	骨幹	R	10 歳以前



第 254 図 拡大範囲 J 人骨出土状況

第40表 拡大範囲J出土人骨

掲載番号	部位	部分	左右	年齢区分	掲載番号	部位	部分	左右	年齢区分
HB110	第5頸椎	一部破損	M	30代以上	HB376	上肢第3基節骨・中節骨	完形	R	-
HB111	第6頸椎	一部破損	M	30代以上	HB377	膝蓋骨	一部破損	L	-
HB112	第4頸椎	一部破損	M	30代以上	HB380	尺骨	完形	R	成人
HB113	第7頸椎	一部破損	M	30代以上	HB381	橈骨	遠位～骨幹	R	成人
HB114	第1肋骨	完形	L	-	HB382	頸椎(上部)	完形	M	30代以上
HB115	胸椎	細片	M	不明	HB383	頸椎(上部)	完形	M	30代以上
HB116	第1胸椎	一部破損	M	20代	HB384	胸椎(上部)	一部破損	M	20代
HB117	上肢第1基節骨	近位～骨幹	L	-	HB385	第1中手骨	完形	L	成人
HB118	肋骨	頭付近	R	-	HB386	第3中手骨	完形	R	成人
HB119	胸椎(下部)	一部破損	M	20代	HB387	第2中手骨	完形	R	成人
HB120	頭蓋骨	右側頭骨細片	M	不明	HB388	第4中手骨	完形	R	成人
HB121	頸椎(上部)	一部破損	M	不明	HB389	第5中手骨	完形	R	成人
HB122	環椎	完形	M	20代	HB390	上肢基節骨	完形	-	-
HB123	第2肋骨	一部破損	L	-	HB391	上肢中節骨	完形	-	-
HB124	第2中手骨	完形	L	成人	HB392	上肢中節骨	完形	-	-
HB125	第4中手骨	完形	L	成人	HB393	上肢末節骨	完形	-	-
HB126	第3中手骨	完形	L	成人	HB394	上肢末節骨	完形	-	-
HB127	上肢中節骨	完形	-	-	HB395	上肢中節骨	完形	-	-
HB128	第1肋骨	一部破損	R	-	HB396	肋骨	一部破損	-	-
HB129	腰椎	椎弓細片	M	不明	HB397	舟状骨(足根骨)	完形	R	-
HB130	肋骨	頭付近	R	-	HB398	第1中足骨	完形	L	成人
HB131	第1胸椎	完形	M	30代以上	HB400	上肢中節骨	完形	-	-
HB132	第2胸椎	完形	M	30代以上	HB401	小菱形骨	完形	L	-
HB133	第3胸椎	一部破損	M	30代以上	HB402	上肢中節骨	完形	-	-
HB134	第4胸椎	一部破損	M	30代以上	HB403	下肢第1基節骨	完形	L	-
HB135	第7頸椎	一部破損	M	30代以上	HB404	豆状骨	完形	R	-
HB136	第2肋骨	一部破損	R	-	HB405	上肢中節骨	完形	-	-
HB137	鎖骨	完形	L	成人	HB406	上肢中節骨	完形	-	-
HB138	第2楔状骨	完形	L	-	HB408	月状骨	完形	L	-
HB139	鎖骨	完形	R	成人	HB409	距骨	一部破損	R	-
HB140	上肢中節骨	完形	-	-					
HB141	肋骨	頭付近	L	-					
HB142	上肢基節骨	完形	-	-					
HB246	胸椎(上部)	完形	M	30代以上					
HB375	踵骨	一部破損	R	成人					

れた位置で検出した右上腕骨(HB374)が10歳以前のものであることから、この範囲では少なくとも2個体に由来する人骨が含まれていることが分かる。また、東側0.6mの位置で検出した椀・杯形容器W137は人骨に伴う遺物が少ない中であって、目を引くものである。

拡大範囲J(第254図、第40表)

土留め7付近の1.25m×1.6mの範囲で63点の人骨を検出した。接合により、30代以上の第4～7頸椎(HB110～113)、第7頸椎～第4胸椎(HB131～135)、上部頸椎(HB382・383)、右尺骨・橈骨(HB380・381)、左第2～4中手骨(HB124～126(PL.136-3))、右第2～5中手骨(HB386～389(PL.136-3))が同一個体であることを確認した。右尺骨・橈骨(HB380・381)が解剖学的位置を保って検出されたことが特筆されるほか、同一個体あるいはその可能性が高い部位が近接して出土していることが見て取れる。

接合により同一個体の部位があることが確認できた椎骨はいずれも30代以上のものである。第4～7頸椎(HB110～113(PL.136-2))は、土留め7の南側で検出したものであり、解剖学的位置は保たれていないものの極めて近接している。破損により、接合関係は確認できないが、このまとまりに含まれる第1胸椎HB116、左第1肋骨HB114も同一個体の可能性が高い(PL.136-1)。土留め7の

北西側で検出した第7頸椎～第4胸椎（HB131～135）は、第4～7頸椎（HB110～113）より明らかに大きく、第7頸椎も重複し別個体であることが分かる。このように椎骨についてみれば、少なくとも2個体のものが混在していることが分かる。なお、上部胸椎 HB246 は SD38-Ca の拡大範囲 E で検出した上部胸椎 HB245 と同一個体と判明した。SD38-Ca と SD38-Cb 間で同一個体と確認された資料はこの1例のみである。

土留め7の北西側で解剖学的位置を保って検出された同一個体の右尺骨・橈骨 HB380・381 の遠位端から 0.1 m 程離れた位置で、同一個体の右第2～5中手骨（HB386～389）だけでなく、上肢中節骨末節骨が検出された。発掘調査時には橈骨・尺骨と中手骨の間をつなぐ手根骨は確認できなかったものの、これらの人骨は、同一人物の肘から先に由来するとみてよいだろう。これらの 0.3 m 南西側で近接した状態で検出された同一個体の左第2～4中手骨（HB124～126）は、この個体の左手に由来する可能性があるだろう。

一方で、当拡大範囲で出土した左右の鎖骨 HB137・139 は大きさや形状が明確に異なることから別個体と判断できる。

椎骨の接合で確認した30代以上の2個体に加え、20代の椎骨（HB116・119・122・384）が含まれるため、当拡大範囲での最小個体数は3と算定される。

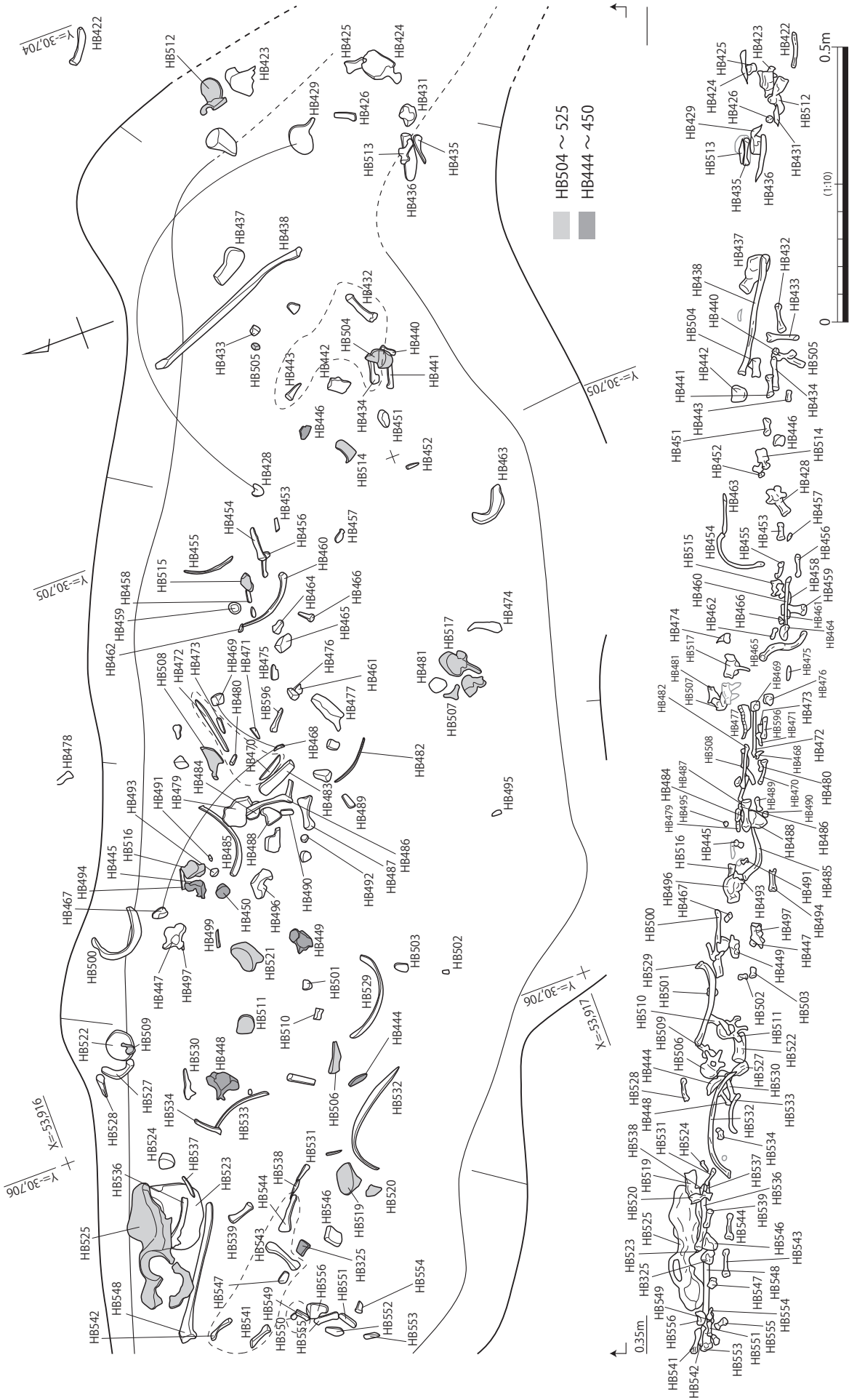
拡大範囲 K（第 255 図、第 41 表）

1.1 m × 1.4 m の範囲で、拡大範囲 J と重複するものを除き、15 点の人骨を検出した。東西の拡大範囲 J・L と比べ、人骨の分布はやや散漫である。15 点の人骨には中足骨が7点含まれる。そのうち右第2中足骨 HB378 は、関節部の接合により右第3中足骨 HB379（図化なし）と同一個体であることが確認できた。なお、左第5中足骨 HB411 と右第5中足骨 HB421 はいずれもこの部位には生じることはまれな跪座小面が認められるものであり、サイズや形状も類似するため、同一個体の可能性が高い。ただし、左第5中足骨 HB411 は左第4中足骨 HB414 と関節部が合わないため別個体であることが明らかであり、この15点の人骨には2個体以上の部位が含まれていると判断できる。

拡大範囲 L（第 256 図、写真 22、第 42 表）

SD38-Cb の検出範囲の大部分を占める 1.0 × 2.45 m の範囲で、130 点の人骨を検出した。20 次調査区のなかで、最も高い密度で人骨が出土した箇所であり、同一個体に由来するものが多く含まれることが特徴的である。このうち、HB504～525 は、第5頸椎以下、尾骨までの脊柱と右寛骨が接合し、20 次調査区出土人骨のなかで最も多くの部位と確認した同一個体となった（PL.135）。これらの部位は右寛骨 HB525 と仙骨 HB523 が重なりあって出土しているほかは、検出範囲内全体に分散していた。頸椎全てが揃った HB444～450 も、検出範囲西側で分散した状態で検出された。この2個体は部位の重複から、別個体であることが分かる。この他、椎骨では第12胸椎～第3腰椎（HB427～430）が同一個体と確認できた（HB430 は拡大範囲 K に掲載）。

椎骨以外では、右第2～5中手骨（HB432～435）、左第2～5中手骨と有鉤骨（HB540～544、HB540 は拡大範囲 M）、左舟状骨と月状骨（HB549・550）といった中手骨・手根骨、第1・2楔形骨（HB324・325、図化は HB325 のみ）、左第2・3中足骨と第2楔状骨（HB467～469）、右第2～5中足骨（HB470～473（PL.137-1））といった中足骨・足根骨がそれぞれ同一個体と確認できた。



第256図 拡大範囲L人骨出土状況

第42表 拡大範囲L出土人骨

掲載番号	部位	部分	年齢		掲載番号	部位	部分	年齢		掲載番号	部位	部分	年齢		掲載番号	部位	部分	年齢		
			左	右				左	右				左	右				左	右	左
HB325	第2楔状骨	完形	R	-	HB457	三角骨	完形	R	-	HB494	上肢基節骨	完形	不	-	HB529	肋骨	完形	L	-	
HB422	肋骨	一部破損	L	-	HB458	上肢末節骨	完形	-	-	HB495	上顎六齒	完形	明	-	HB530	上肢基節骨	完形	-	-	-
HB423	頸椎	一部破損	M	20代	HB459	下肢第1基節骨	完形	R	-	HB496	跖骨	完形	R	-	HB531	上肢中節骨	完形	-	-	-
HB424	胸椎(下部)	完形	M	20代	HB460	肋骨	一部破損	R	-	HB497	胸椎(上部)	椎体	L	-	HB532	肋骨	一部破損	R	-	-
HB425	下肢第1基節骨	完形	L	-	HB461	下肢基節骨	完形	-	-	HB498	胸椎(上部)	椎弓	M	20代	HB533	肋骨	一部破損	R	-	-
HB426	上肢中節骨	完形	-	-	HB462	上肢基節骨	完形	-	-	HB499	胸椎(上部)	完形	M	不明	HB534	第4中足骨	完形	L	-	-
HB428	第1腰椎	完形	M	20代	HB463	第1肋骨	完形	R	-	HB500	下肢基節骨	完形	-	-	HB536	肋骨	頭付近	R	-	-
HB429	第3腰椎	完形	M	20代	HB464	舟状骨(足根骨)	一部破損	R	-	HB501	第2肋骨	一部破損	L	-	HB537	肋骨	骨幹	R	-	-
HB431	舟状骨(足根骨)	完形	L	-	HB465	鎖骨	完形	R	成人	HB502	肋骨	一部破損	L	-	HB538	肋骨	一部破損	R	-	-
HB432	第2中手骨	一部破損	R	成人	HB466	上肢基節骨	完形	-	-	HB503	上肢基節骨	完形	不	-	HB539	第1中手骨	完形	L	成人	-
HB433	第3中手骨	完形	R	成人	HB467	第3中足骨	完形	L	成人	HB504	第3胸椎	一部破損	明	-	HB541	第5中手骨	完形	L	成人	-
HB434	第4中手骨	完形	R	成人	HB468	第2中足骨	完形	L	成人	HB505	第2胸椎	完形	M	20代	HB542	第4中手骨	一部破損	L	成人	-
HB435	第5中手骨	完形	R	成人	HB469	第2楔状骨	完形	L	-	HB506	第2胸椎	完形	M	20代	HB543	第3中手骨	完形	L	成人	-
HB436	胸骨	胸骨体	M	-	HB470	第3中足骨	完形	R	成人	HB507	第9胸椎	一部破損	M	20代	HB544	第2中手骨	完形	L	成人	-
HB437	踵骨	完形	R	成人	HB471	第5中足骨	完形	R	成人	HB508	第4胸椎	椎弓	M	20代	HB546	第1楔状骨	完形	R	-	-
HB438	腓骨	遠位~骨	R	成人	HB472	第4中足骨	完形	R	成人	HB509	第1胸椎	完形	M	20代	HB547	大菱形骨	完形	L	-	-
		幹			HB473	第2中足骨	完形	R	成人	HB510	第5胸椎	一部破損	M	20代	HB548	橈骨	完形	L	成人	-
HB440	上肢中節骨	完形	-	-	HB474	肋骨	頭付近	L	-	HB511	第6胸椎	完形	M	20代	HB549	舟状骨(手根骨)	完形	L	-	-
HB441	上肢基節骨	完形	-	-	HB475	胸椎(下部)	完形	M	20代	HB512	第8胸椎	一部破損	M	20代	HB550	月状骨(手根骨)	完形	L	-	-
HB442	立方骨	完形	L	-	HB476	第3楔状骨	一部破損	R	-	HB513	第10胸椎	一部破損	M	20代	HB551	上肢中節骨	完形	-	-	-
HB443	上肢基節骨	完形	-	-	HB477	胸骨	胸骨体	M	-	HB514	第8胸椎	完形	M	20代	HB552	上肢中節骨	完形	-	-	-
HB444	環椎	完形	M	20代	HB478	上肢基節骨	完形	-	-	HB515	第12胸椎	完形	M	20代	HB553	上肢中節骨	完形	-	-	-
HB445	軸椎	完形	M	20代	HB479	胸骨	胸骨柄	M	-	HB516	第11胸椎	一部破損	M	20代	HB554	上肢末節骨	完形	-	-	-
HB446	第7頸椎	一部破損	M	20代	HB480	下肢第1基節骨	完形	R	-	HB517	第5頸椎	一部破損	M	20代	HB555	上肢基節骨	完形	不	-	-
HB447	第5頸椎	一部破損	M	20代	HB481	胸椎	椎体	M	不明	HB518	第7頸椎	一部破損	M	20代	HB556	舟状骨(足根骨)	完形	明	-	-
HB448	第6頸椎	完形	M	20代	HB482	肋骨	一部破損	R	-	HB519	第6頸椎	一部破損	M	20代	HB596	第1中手骨	完形	R	成人	-
HB449	第6頸椎	一部破損	M	20代	HB483	肋骨	一部破損	L	-	HB520	第4腰椎	一部破損	M	20代						
HB450	第4頸椎	一部破損	M	20代	HB484	舟状骨(足根骨)	完形	L	-	HB521	第3腰椎	一部破損	M	20代						
HB451	環椎	上下関節	M	不明	HB485	肋骨	一部破損	L	-	HB522	第1腰椎	完形	M	20代						
		窩細片			HB486	鎖骨	完形	L	成人	HB523	仙骨	完形	M	20代						
HB452	II(上顎)	完形	R	-	HB487	第1中足骨	完形	L	成人	HB524	尾骨	完形	M	-						
HB453	上肢中節骨	完形	不	-	HB488	第1楔状骨	完形	L	-	HB525	寛骨	一部破損	R	20代						
		完形	明	-	HB489	舟状骨(手根骨)	完形	L	-	HB527	胸椎(上部)	完形	M	20代						
HB454	肋骨	完形	R	-	HB490	上肢中節骨	完形	-	-	HB528	第4中手骨	一部破損	L	成人						
HB455	肋骨	完形	R	-	HB491	下肢第1基節骨	完形	L	-											
HB456	上肢中節骨	完形	-	-	HB492	下肢基節骨	完形	-	-											
		完形			HB493	下肢第1基節骨	完形	L	-											



写真 22 拡大範囲 L 人骨出土状況 (北西から)

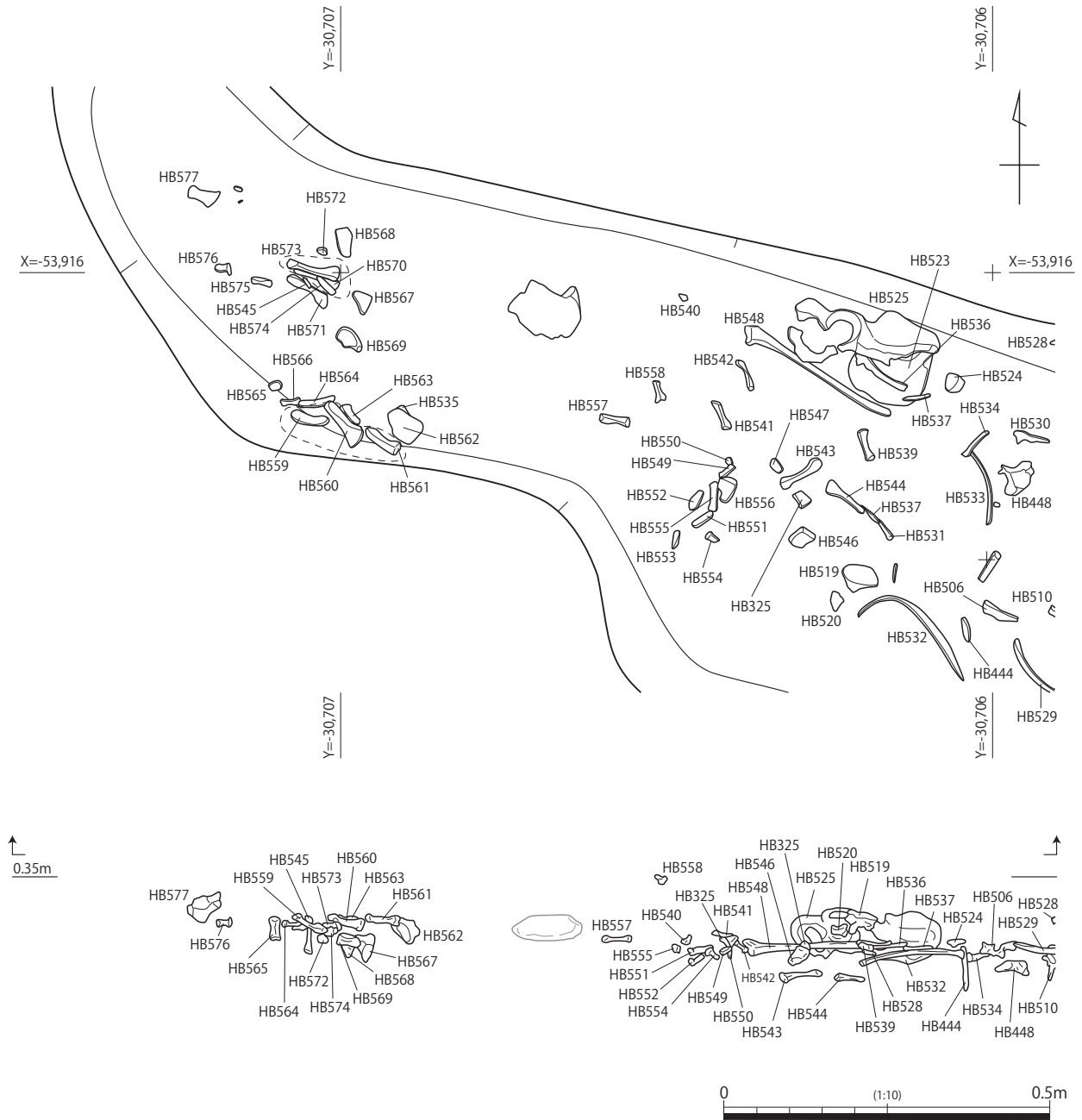
やはり、これらも解剖学的位置が保たれて検出されたものはないが、椎骨に比べ、部位が近接している、あるいは狭い範囲にまとまっている状況が見て取れる。

当拡大範囲内では椎骨以外に複数の部位の重複が認められるものの、2点を超えるものはなく、年齢区分が可能なものは20代あるいは成人のみである。したがって、検出された部位の大部分は、多数の部位が揃った HB504～525 と HB444～450 の2個体（いずれも20代）に由来するものなのかもしれない。

人骨以外の出土遺物は少ないが、人骨包含層には炭化物が多く含まれ、炭化米ブロック、炭化粟ブロックも出土した。顕微鏡下での観察の結果、この炭化粟ブロックは脱穀したものであることが判明した（註2）。

拡大範囲 M (第 257 図、第 43 表)

SD38-Cb の西端付近の 1.0×16.5 m の範囲で、拡大範囲 L と重複するものを除き、24 点の人骨を検出した。左有鉤骨 HB540 を除き、全て左右の足の骨である。それぞれ近接して出土した左第 2～4 中足骨 (HB559～561 (PL.137-2))、右第 2・3 中足骨 (HB573・574) が関節部の接合から同一個体と確認できた。左右の部位にサイズや形状の違いが認められず、足を構成するその他の部位に重複がないことから、当拡大範囲で検出された部位は同一個体の右足と左足に由来する可能性が高い。比較的部位のまとまりを残した状態で検出された点も特筆される。なお、左有鉤骨 HB540 は第 2～5 中手骨 HB541～544、左立方骨 HB535 は第 4 中足骨 HB534 と同一個体であることが確認できた（い



第 257 図 拡大範囲 M 人骨出土状況

第 43 表 拡大範囲 M 出土人骨

掲載番号	部位	部分	左右	年齢区分
HB535	立方骨	完形	L	-
HB540	有鉤骨	完形	L	-
HB545	第 1 中足骨	完形	R	成人
HB557	上肢中節骨	完形	-	-
HB558	下肢基節骨	完形	-	-
HB559	第 4 中足骨	完形	L	成人
HB560	第 3 中足骨	完形	L	成人
HB561	第 2 中足骨	完形	L	成人
HB562	距骨	完形	L	-
HB563	第 1 楔状骨	完形	L	-
HB564	第 5 中足骨	完形	L	成人
HB565	下肢第 1 基節骨	完形	L	-
HB566	下肢基節骨	完形	-	-
HB567	踵骨	完形	R	成人
HB568	踵骨	完形	L	成人
HB569	舟状骨 (足根骨)	完形	L	-
HB570	第 4 中足骨	完形	R	成人
HB571	第 5 中足骨	完形	R	成人
HB572	立方骨	完形	R	-
HB573	第 2 中足骨	完形	R	成人
HB574	第 3 中足骨	完形	R	成人
HB575	下肢基節骨	完形	-	-
HB576	下肢第 1 基節骨	完形	R	-
HB577	距骨	完形	R	-

ずれも拡大範囲Lのもの)。

(5) 小結

ここまでみてきたように、SD38-Ca・bから出土した人骨は、一部に解剖学的位置の保持や個体のまとまりが認められるものの、基本的には散乱した状態で検出された。底面付近を中心とする分布状況は、埋没後の攪乱が少なかったことを示す。また、SD38-Ca埋土を対象とした土壌構造分析では、肉眼では確認できなかった微細なラミナ構造は確認されたものの、植物が繁茂し、乾湿を繰り返す堆積環境であったことが示されており(第4章 第1項)、流水によって人骨が大きく動いたとも考えられない。したがって、人骨は検出された状態で埋没していたとみるべきであり、出土状況からみてそれは一部に腱がつながっている箇所はあるものの基本的に白骨化した状態であったと考えられる。

SD38-CaとSD38-Cbから出土した人骨は、想定される埋没の状況が共通する一方で、両者の間には明確な差異も認められる。SD38-Ca出土人骨は、密度は低いものの、いずれの箇所においても複数の人物に由来する部位の混在が顕著であり、10代前半以前、幼児の可能性が高い10歳以前のものがかなりの割合で含まれている。これに対して、SD38-Cb出土人骨は、密度は高いがより少ない個体数の成人の人骨で構成されているとみられる。また、SD38-Ca検出面ではSD38-Ca・b内からは出土しない完存度の高い下顎骨が出土している。このように出土状況の検討によって抽出できた、出土箇所ごとに異なる人骨の様相は、人骨群の形成に人為的な選択が強く働いている可能性を示すものとして特筆されよう。

第3項 出土人骨の特徴

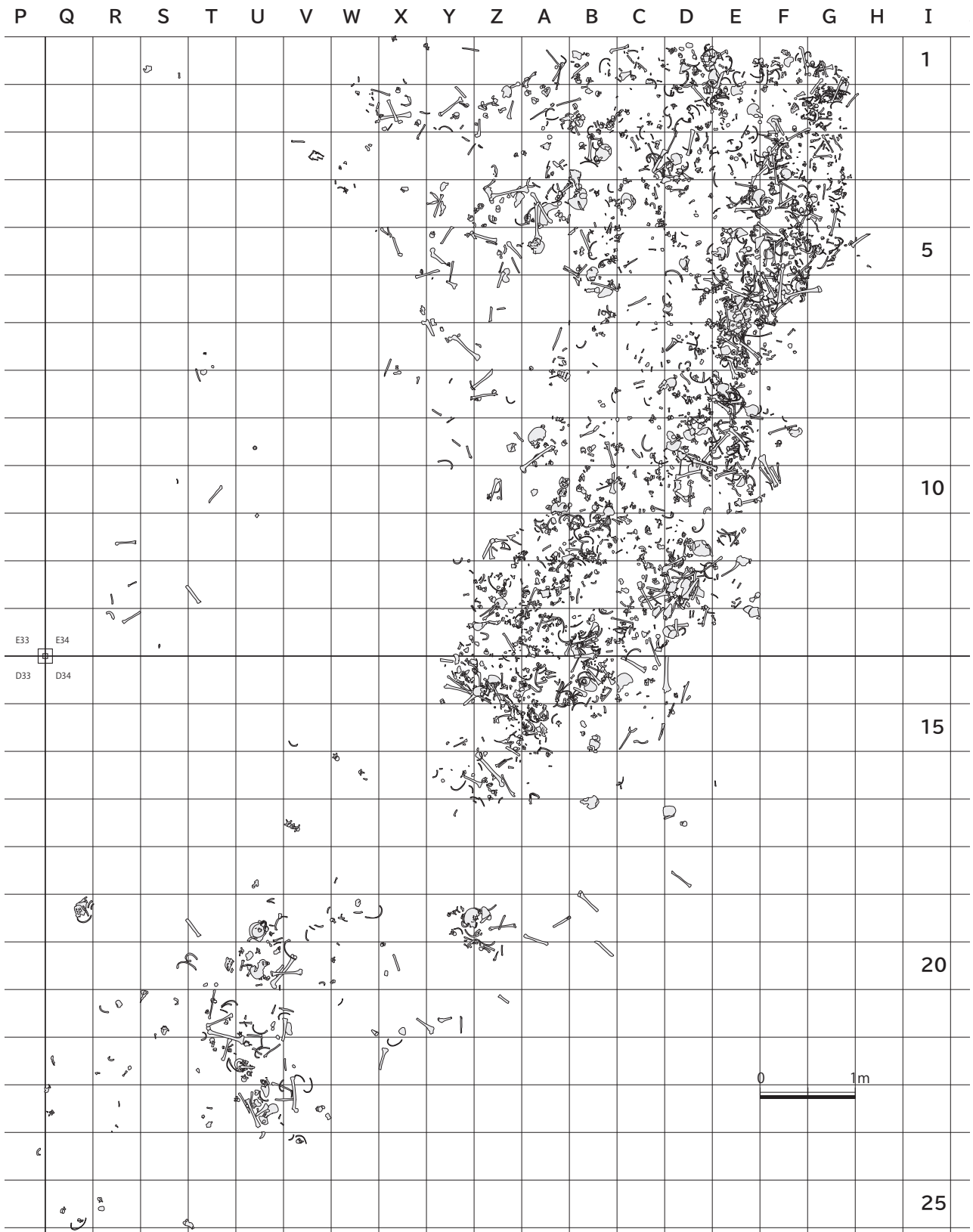
次に、出土人骨の特徴を捉えるため、部位別出土率、年齢構成、性比、病変、受傷痕について検討する。

(1) 部位別出土率

20次調査区から出土した人骨には、距骨や踵骨といった短骨が多く、頭蓋骨や長骨である主要四肢骨が少ない。第258図に1次調査区のSD38-2における人骨出土状況を示す。出土量の違いはあれど、解剖学的位置を失った人骨が散乱しており、分布に疎密が認められる点は20次調査区と共通している。一方で、1次調査区では、20次調査区では殆ど出土しなかった頭蓋骨や主要四肢骨が多数出土していることが見て取れる。

この部位組成における著しい偏りについて検討するため、両調査区出土人骨の部位別出土率を示したのが第259図である。20次調査区出土人骨は10歳以前のものを除いた最小個体数13に対しての、1次調査区出土人骨は左大腿骨から導かれる最小個体数103に対しての各部位の出土率を示している。20次調査区の部位別出土率は、主要四肢骨や寛骨の部分を考慮して算出している。1次調査区出土人骨は、20次調査区出土人骨にはほとんど含まれない頭蓋骨と四肢骨の出土率が高く、両調査区には明瞭なコントラストがあることが確認できる。特に20次調査区では、1次調査区で多数出土した大腿骨および脛骨の骨幹部が極めて少ない。部位別出土率の比較からは、同一個体に由来する人骨が両調査区に分散して埋没していたことが想定された。

さらに、両調査区間にまたがる同一個体の有無について検討するため、20次調査区の四肢骨骨端部と、1次調査区の骨幹部の接合を試みた。その結果、20次調査区から出土した未癒合の右大腿骨

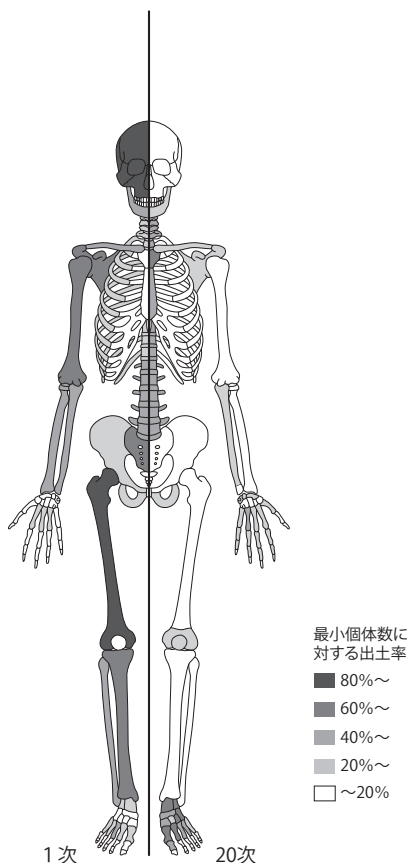


第 258 図 参考：1 次調査県道 8 区人骨出土状況

遠位端 HB47 と 1 次調査区出土の骨幹部 KJA30949 の接合を確認した (写真 23)。大腿骨に限らず、四肢骨骨端の癒合面は骨質が緻密ではなく、破損や摩耗で検討ができないものが多いことを考えれば、両調査区の出土人骨には同一個体がかなりあるとみてよいだろう。これら未癒合の骨端は、白骨化することで骨幹と分離する。したがって、両調査区間の部位別出土率にみるコントラストは、白骨化後の部位の選別によって生じたものであり、人骨群の形成はこれを含めた一連の集積行為の所産とみることができよう。

(2) 年齢構成

まず、頭蓋骨、下顎骨のうち、歯の萌出段階で年齢推定が可能なもの (第 44 表) について述べる。この方法は、第 260 図に示したように高い精度で年齢を推定することができる。頭蓋骨 (上顎骨) HB161 (写真 24-1) は、第 2 乳臼歯 (m2) が萌出途次であることから 2 歳程度と判断できる。下顎骨 HB57 (写真 24-2) は、6 歳ころ萌出する第 1 大臼歯 (M1) の歯冠部が歯根未形成の状態の下顎体内にあることが確認できることから、5 歳程度と判断できる。下顎骨 HB159 (写真 24-3) は、「親知らず」として知られる第 3 大臼歯 (M3) が萌出前であり、15 歳程度と判断できる。下顎骨 HB308 (PL.132-1) は第 3 大臼歯の咬合面が、第 2 大臼歯のそれよりも一段低い。第 3 大臼歯の萌出を第 2 大臼歯が阻害していた可能性はあるが、全体的な歯の咬耗が軽度であることから第 3 後臼歯の萌出途次とみて、10 代後半として記載する。ただし、第 3 後臼歯の萌出年齢は他の歯と比べ個



第 259 図 部位別出土率の比較



写真 23 接合した大腿骨

人差が大きいことを付記しておく。その他、第3大臼歯の萌出完了から、成人であることが明らかなものに、頭蓋骨 HB185・281、下顎骨 HB170・318 (PL.132-2) がある。幼児を含めた若年個体が出土している点が特徴的である。

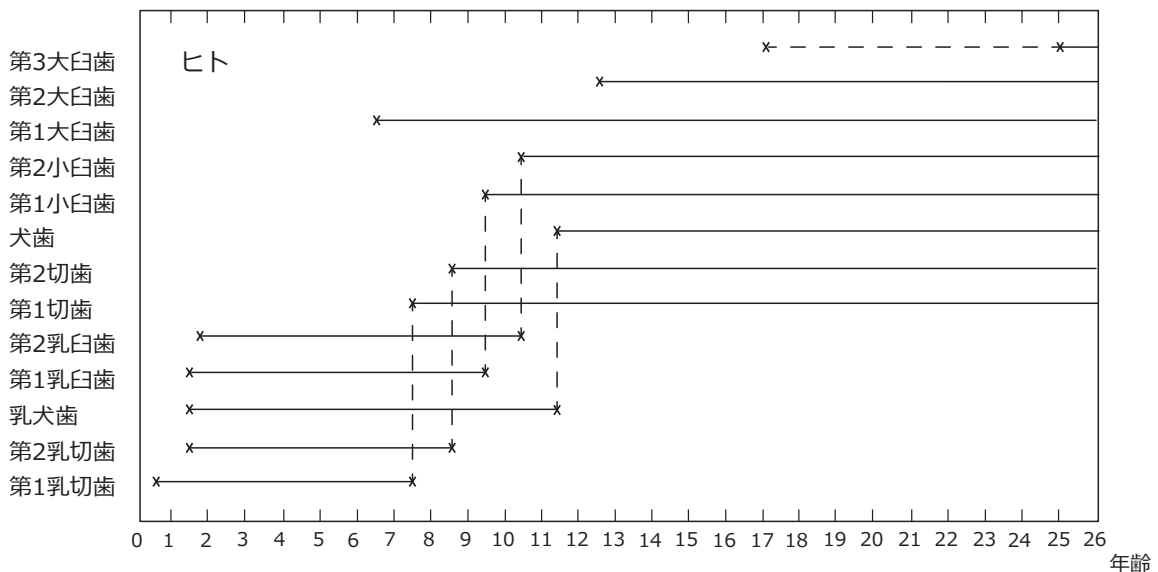
主要四肢骨は点数は少ないものの、10代前半と推定できる骨端未癒合のものや、幼児の可能性が高い10歳以前のもが目立つ(写真25)。骨端の癒合状況が確認できる36点の資料についてみれば、上腕骨では(成人:2、10代前半:3、10歳以前:2、以下括弧内同じ)橈骨では(3、1、0)、尺骨では(4、2、0)大腿骨では(2、10、2)、脛骨では(0、3、2)である。下肢では成人の骨の少なさが顕著であり、碎片を除き、成人の骨幹部は全く出土していない。

椎骨は、年齢推定が可能であった123点のうち、10歳以前が3点(2.4%)、10代前半が10点(8.1%)、10代後半が9点(7.3%)、10代後半~20代が1点(0.8%)、20代が68点(55.3%)、20代以上1点(0.8%)、30代以上31点(25.2%)である。四肢骨では「成人」として記載している「10代後半」以上の年齢区分が89.4%を占めており、先に見た頭蓋骨・下顎骨や四肢骨のそれと様相を異にする点は特筆される。1次調査区出土人骨の報告で示された40点の寛骨からみた年齢構成において、「10~15歳」と

第44表 歯の萌出、咬耗状況

掲載番号	部位	右									左									備考
		M3	M2	M1	P2 m2	P1 m1	C c	I2 i2	I1 i1	I1 i1	I2 i2	C c	P1 m1	P2 m2	M1	M2	M3			
HB161	頭蓋骨				[m2 a]	m1 b	c ×	i2 ×	i1 ×											
HB57	下顎骨			[M1 -]	m2 b	m1 b	c ×	i2 ×										下顎体内のM1歯根部未形成		
HB159	下顎骨												[P2 ×	M1 ×	M2 ×	M3 -	下顎体内にM3			
HB308	下顎骨	M3 a	M2 c	M1 c	P2 c	P1 c	C d	I2 ×	I1 ×	I1 ×	I2 ×	C d	P1 c	P2 c	M1 c	M2 c	M3 a			
HB318	下顎骨				[P2 ×	P1 ×	C c	I2 ×	I1 ×	I1 ×	I2 ×	C ×	P1 ×	P2 ×	M1 c	M2 c	M3 b			

凡例 - : 未萌出、a : 萌出途次、b : 萌出完了、c : 咬耗開始、d : 咬耗進行、× : 脱落歯・破損、[] : 残存箇所、



Cornwall 1974 より作成

第260図 ヒトの歯の萌出段階と年齢

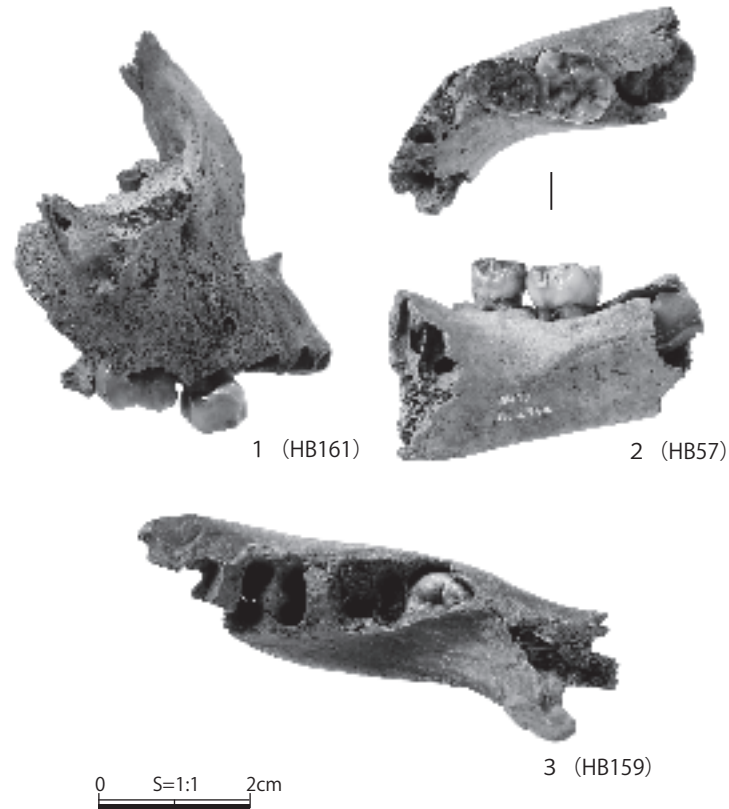


写真 24 幼児、10代前半以前の上顎骨・下顎骨

されるものは極少ない（井上・松本前掲）ことからみても、資料数が格段に多い椎骨による年齢構成が人骨群を形成した集団の本来の年齢構成に近いのではないだろうか。裏を返せば、20次調査区から出土した頭蓋骨や下顎骨、四肢骨にみる、幼年あるいは若年個体に偏った年齢構成が特異であり、先に述べた部位の選別を経た集積が影響していると考えられる。特に、幼児の骨が複数含まれている点は、「1～10歳の子供の骨は全く検出されていない」と報告された1次調査出土人骨の様相（井上・松本前掲）とは明瞭に異なる。これら幼児あるいは小児の骨には、成人の骨には極めて少ない四肢骨骨幹部が含まれていることも特徴的であり、人為的な人骨の選別が年齢構成に強く影響していることを支持する。

（3）性比

寛骨は性差が顕著な部位であり（谷畑・鈴木前掲など）、右寛骨 HB314 と HB525 は大坐骨切痕の角度から男性と判断できる。その他の寛骨については、三要素（腸骨、恥骨、坐骨）が癒合していない10代前半のもので性差が現れていない可能性が高いため性判別は行わなかった。

寛骨ほど確実ではないものの頭蓋骨や下顎骨も性差が現れる部位とされている（谷畑・鈴木前掲など）が、本調査区で出土した頭蓋骨はいずれも細片であるためこれによる性判別は不可能であった。下顎骨については HB308 が形状から男性の可能性が高いことが指摘できる。

このように、当調査区出土人骨には確実に女性と判断できる資料はなかったものの、明らかに成人の骨でありながらサイズが小さいものもあることから、女性が含まれていることは間違いあるまい。



写真 25 10代前半以前・10歳以前の人骨（主要四肢骨）

ただし、性判別できた資料がごく少ないため、性比については積極的に評価することは難しい。

(4) 病変

28点の資料に認められた病変には、外傷によるもの、習慣的な動作に起因するもの、加齢によるもの、栄養失調によるものなどがある（写真26）。骨折痕や栄養失調を示す症例は1次調査区出土人骨でも報告されていたが、20次調査区出土人骨の検討により、動作に支障をきたしていた可能性を示す症例が複数確認された点が特筆される。

外傷によるとみられるもの

右寛骨 HB525（写真26-4、以下枝番号のみ記載）には骨折等によるとみられる変形と骨増殖が認められる。恥骨結合面の状態から20代前半の男性と推定されるが、生前には走ることに困難があった可能性がある。

HB131・132（2・3）は同一個体の第1・2胸椎である。このうち第2胸椎 HB132（3）は棘突起に骨折痕があり右側に曲がっている。第1椎骨 HB131（2）の左肋骨窩には亜脱臼痕が認められる。これと同一個体の第3・4胸椎 HB133・134の腹側の骨棘の形成も、加齢によるものというより病的である。背面を骨折していることからみて、転落など怪我がもとになった一連の病変である可能性が高い。

右上肢第3基節骨・中節骨 HB376（6）はX線撮影によって、骨性の癒合をしていることが確認された。これは、基節骨の遠位が破損したことにより生じたものとみられる。

右肋骨 HB455に認められる軸部の膨れは骨折による変形である。

尺骨 HB380（1）の骨幹部遠位端よりに認められる膨れと骨軸の捻れは骨折痕である。

上部胸椎 HB232（5）の椎弓に認められる頭尾方向の断絶は若年期の怪我がもとになっている成長不全の可能性もある。脊柱が通る箇所であり、最終的に椎弓はつながっていないことからみて、身体に何らかの不自由があったかもしれない。

この他、外傷による変形として左第4中手骨 HB37（7）に陳旧骨折、右第5中手骨 HB389に軽骨折、右第2肋骨 HB136に亜脱臼の痕跡が認められる。

習慣的な動作に起因するもの

右第1中足骨 HB34（15）は、遠位端内側に跪座小面が形成されている。これは、指を強く背屈させることにより生じる変形である。小竹貝塚など縄文人骨ではやはり第1中足骨に多くみられる症例であり（富山県埋蔵文化財センター2020）、日常的に跪く姿勢をとることが要因とされている。左右の第5中足骨 HB411（14）・471は、いずれも遠位端外側に跪座小面が形成されている。この2点は形状、大きさが酷似することかみても同一個体の可能性が高い。跪座小面は先に述べた HB34（15）のように親指に続く第1中足骨に多く確認されるが、これらのように小指に続く第5中足骨に生じる例は珍しい。日常的に小指を大きく背屈させる要因には、足の外側縁をつくような歩き方が可能性として挙げられる。

同一個体の軸椎～第7頸椎 HB444～450のうち、軸椎 HB445（9）の椎弓尾側の左側と、第3頸椎 HB447（10）の椎弓頭側左側、交連状態では接する位置に変形が認められる。これは擬関節の形成を示すものである。第7頸椎 HB446（11）の椎弓頭側の左側に認められる突起も含め、日常的に

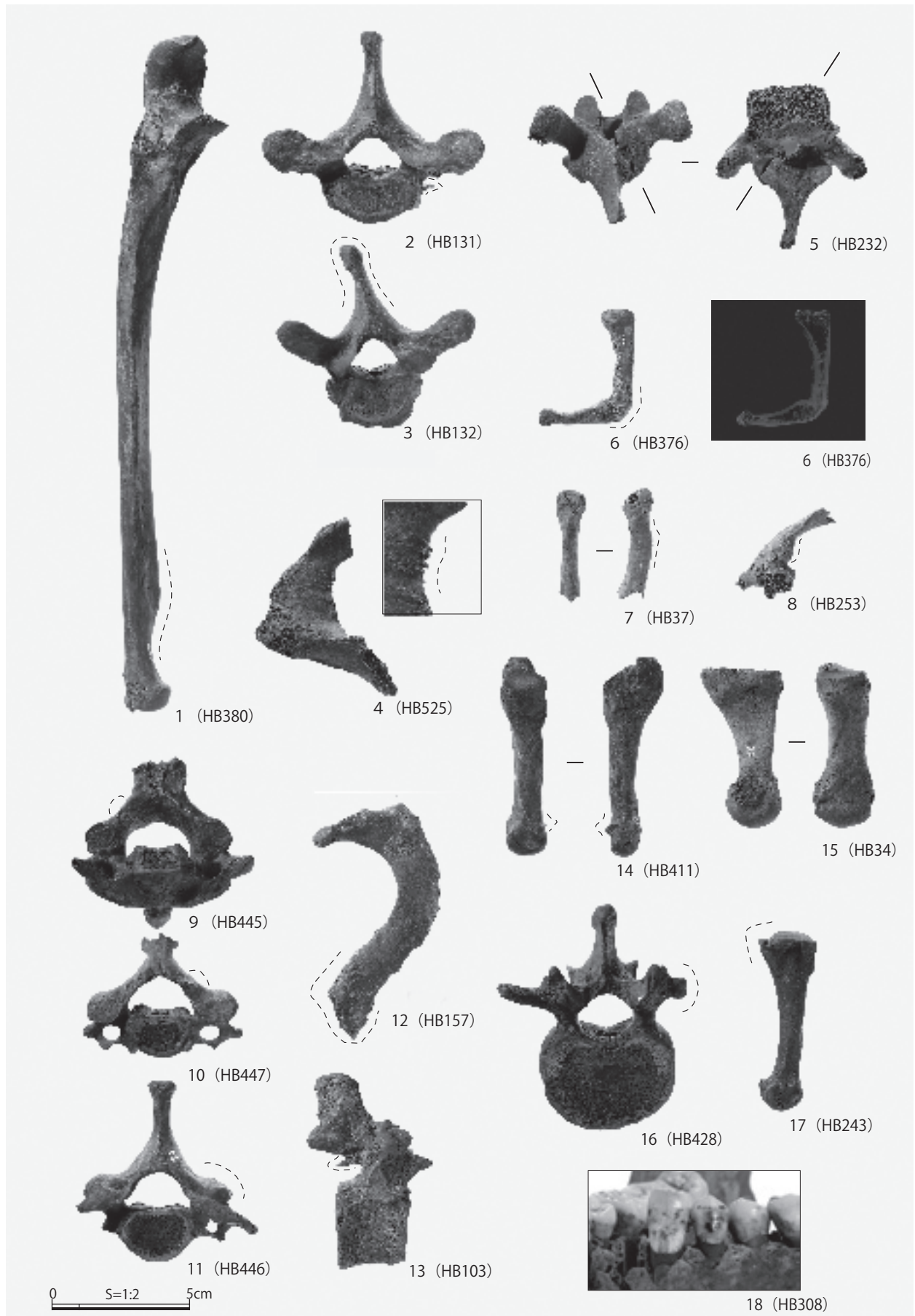


写真 26 病変が認められる人骨

左側に鉛直方向の加重を受けていたことによるものとみられる。

同一個体の第1胸椎～第4腰椎 HB504～522のうち、第1・2胸椎 HB508・505は背面に骨棘が生じており、第8胸椎 HB512は黄色靭帯骨化症が認められる。前者は脊柱管狭窄症を引き起こしていた可能性がある。脊柱管狭窄症、黄色靭帯骨化症は加齢が原因となることが多いが、HB504～522は先に述べた変形と骨増殖が認められる右寛骨 HB525と同一個体の20代前半男性の椎骨(PL.135)であり、この要因となった怪我によって生じた身体運動の不具合が椎骨の病変に関わっている可能性も考えられよう。黄色靭帯骨化症は、30代以上の上部胸椎 HB32、20代の上部腰椎 HB103(13)にも認められる。

栄養失調によるもの

下顎骨 HB308(18)の切歯歯冠部の頰側にみられる小窩状の欠損はエナメル質減形成の症例である。これは、幼少期の栄養失調に起因するストレスマーカーとされる(澤田2018)。

加齢によるもの

左肋骨 HB157(12)は肋軟骨が骨化しており、老年の可能性が高い。

30代以上の上部胸椎 HB246は腹面側の骨棘形成が顕著である。これは加齢により椎体がつぶれることにより生じるものである。

その他

環椎 HB253(8)には上面の関節部付近に骨腫が形成されており、うなずくような動きが出来なかった可能性がある。

第1腰椎 HB428(16)は左側の肋骨突起が殆どない。遊離型肋骨突起の症例とみられる。

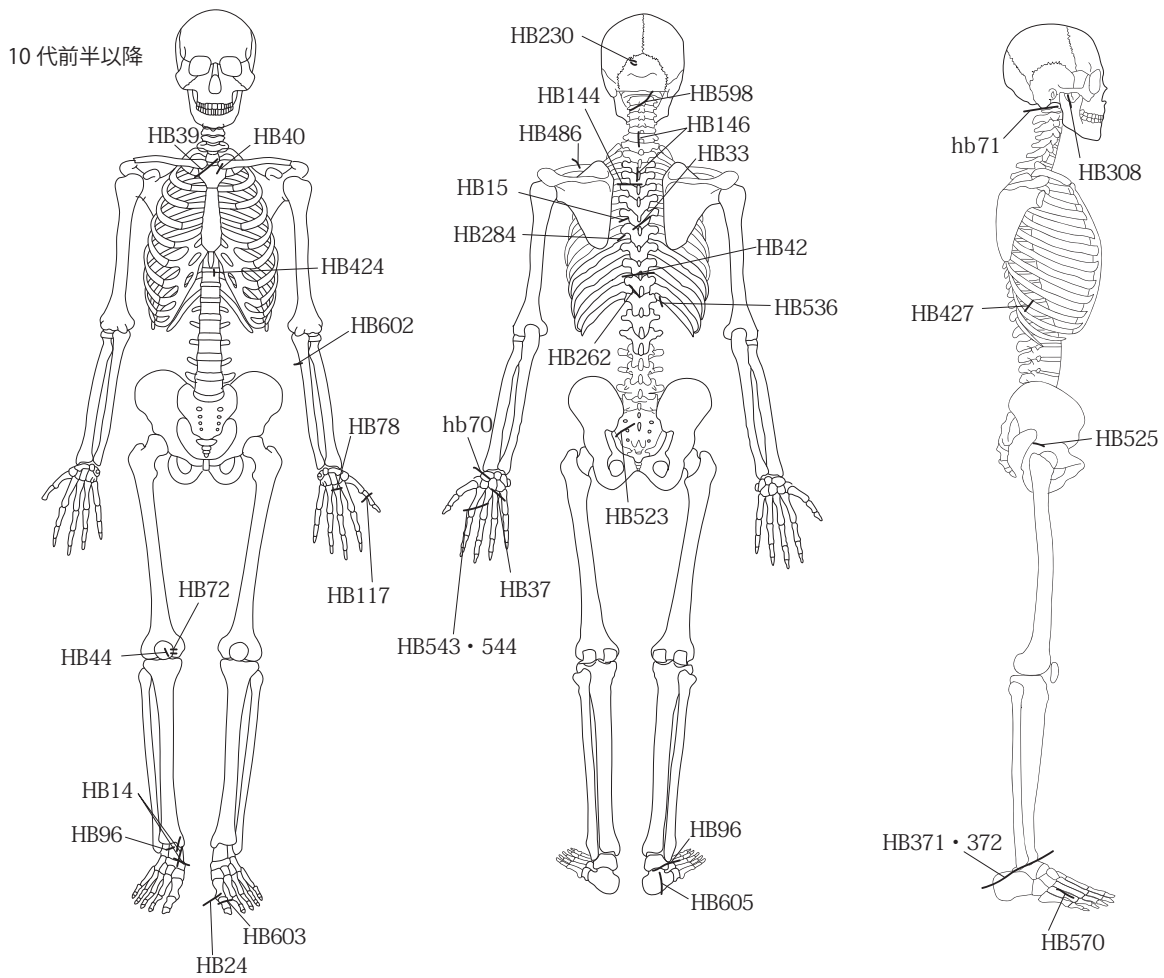
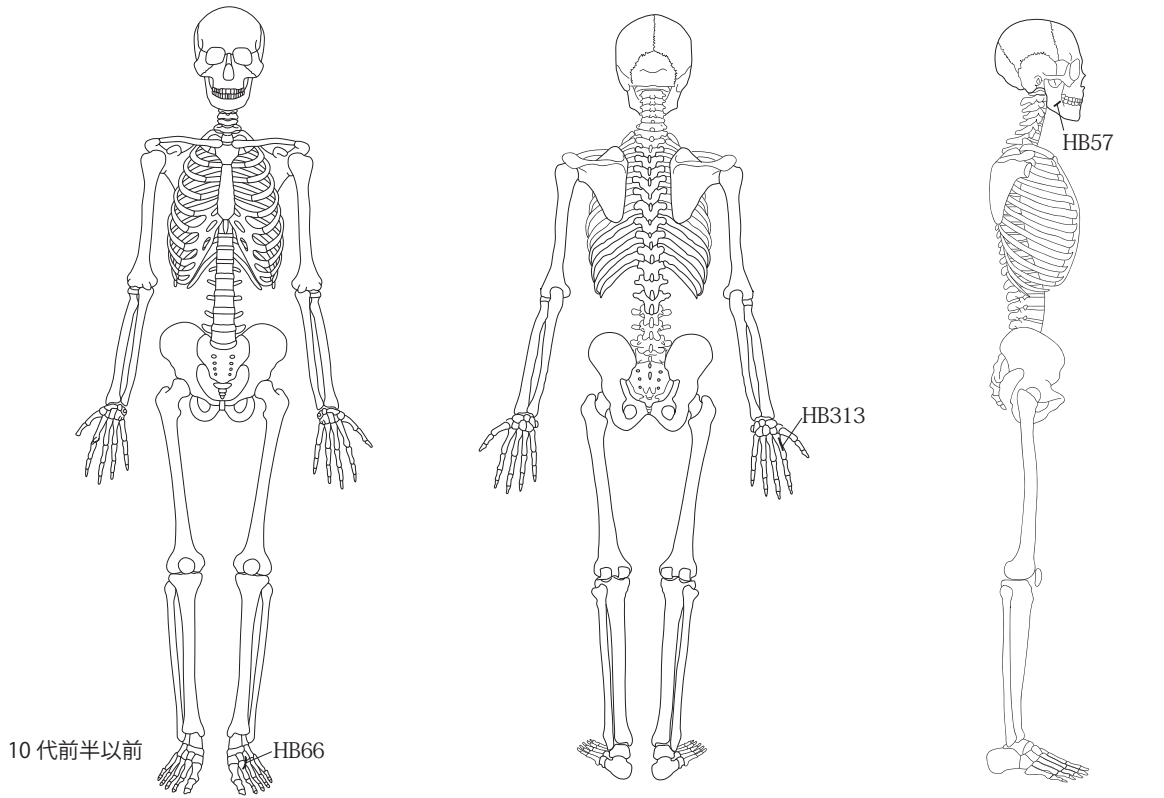
頭蓋骨 HB230は後頭骨付近の細片であり、内面の内後頭隆起周辺に骨増殖が認められる。

(5) 受傷痕

人骨に認められた受傷痕は切り口の平滑さなどから金属製利器によるものとみられ、切断に至らなかったもののなかには、薄い刃部のものが用いられていたことが分かるものもある。また、軟質部が残った状態で付けられたことを示す、交連する部位にまたがる受傷痕も複数例認められる。なお、回復した痕跡が認められるものは1例もなく、受傷後に生きながらえた者はいなかったことが分かる。すなわち、これらの受傷痕は全て、殺害時あるいは死後につけられたものであるということである。

40点の資料で確認した受傷痕の位置と方向を第261図に示す。受傷痕は出土した部位の様々な箇所認められるが、獣骨に残された解体痕のように関節部付近に残されたものが目立つ。したがって、これら受傷痕の大部分は、殺傷痕ではなく遺体の解体や損壊によるものとみるのが自然であろう。一方で、獣骨にはあまり見られない骨ごと断ち切るものがいくつもあることも特筆される。受傷痕は10代後半以降、すなわち成人の骨に多く認められるが、10代前半以前の人骨に認められるものの位置や方向性に成人との違いは見出しづらい。

以下、これらの受傷痕について部位ごとに特徴を記載する。



第 261 図 受傷痕の位置

各部位における受傷痕

頭蓋骨 後頭骨 HB230 の外面に擦裂痕というべき連続した受傷痕が認められる（第262図）。これは頭皮を剥ぐ際についたものとみられる。

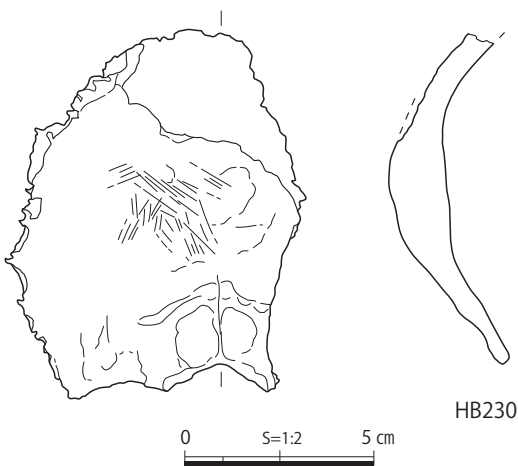
下顎骨 HB308 の下顎枝上縁に認められる受傷痕は下顎を頭蓋から切り離す際についたものとみられる（写真27）。また、幼児の下顎骨 HB57（写真28-13、以下写真28のものに関しては枝番号のみ記載）には、下顎体頰側に斜めの受傷痕が認められる。

軸椎 軸椎 HB598（1）と hb71 は、いずれも歯突起の下部が斜めに切断されている。これは頭部の切り離しに伴うものとみられる。

頸椎 HB146（2）は椎弓を縦断されている。

胸椎 HB33（4）・42（6）・144（3）はいずれも椎弓が横断されている。これらは脊椎の分断に伴う受傷痕とみられる。HB262（5）は椎体の左側面が削ぎ切られている。HB427（7）は椎体右側面に斜めの切創が認められる。

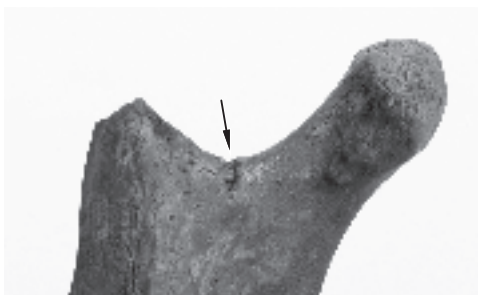
胸骨 H39（12）は胸骨柄上部を斜めに切断するものである。HB40（11）は、やはり胸骨柄を縦方向に切断し



第262図 頭蓋骨 HB230 の受傷痕



頰側



舌側



HB308

写真27 下顎骨 HB308 の受傷痕

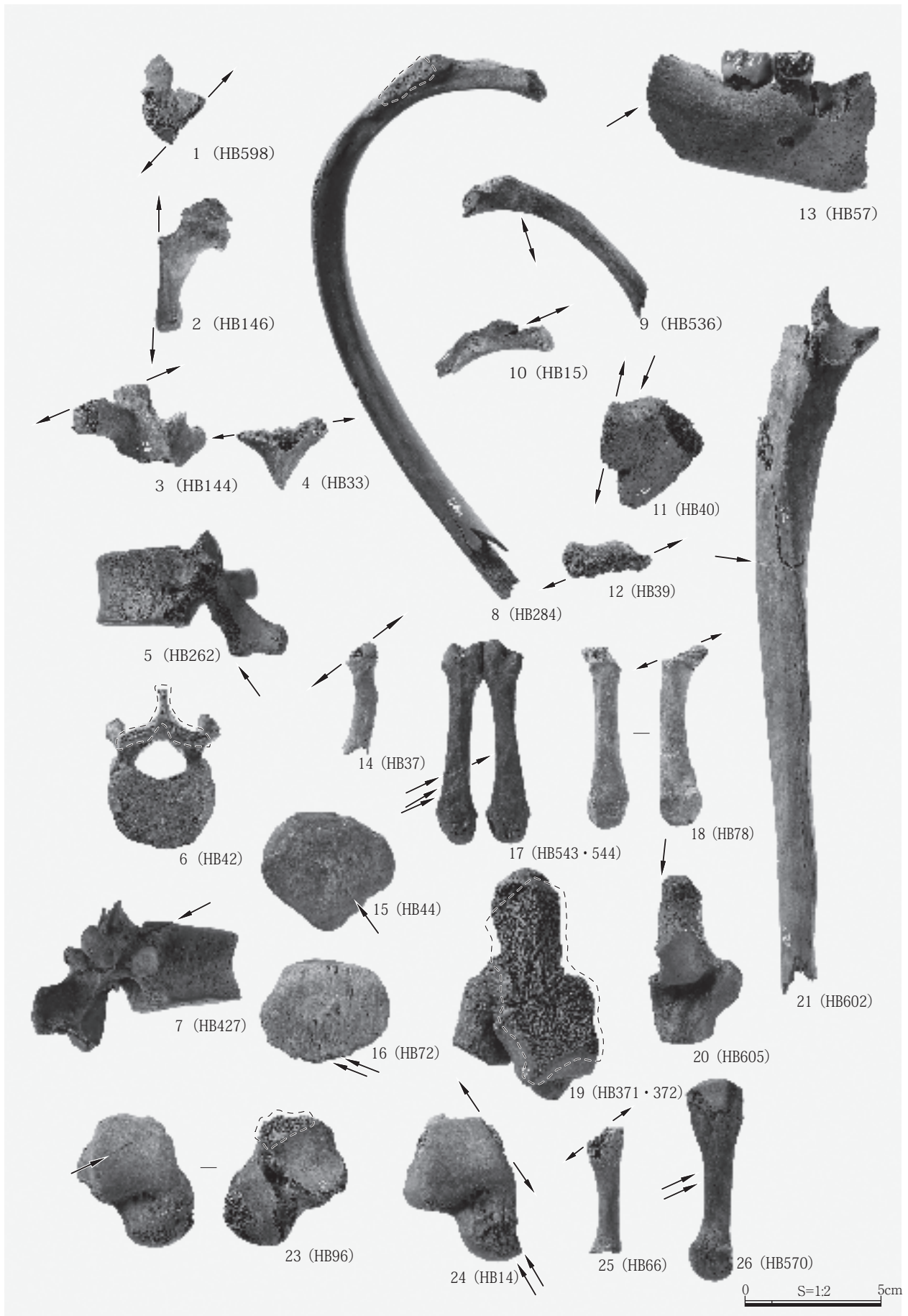


写真 28 受傷痕の認められる人骨

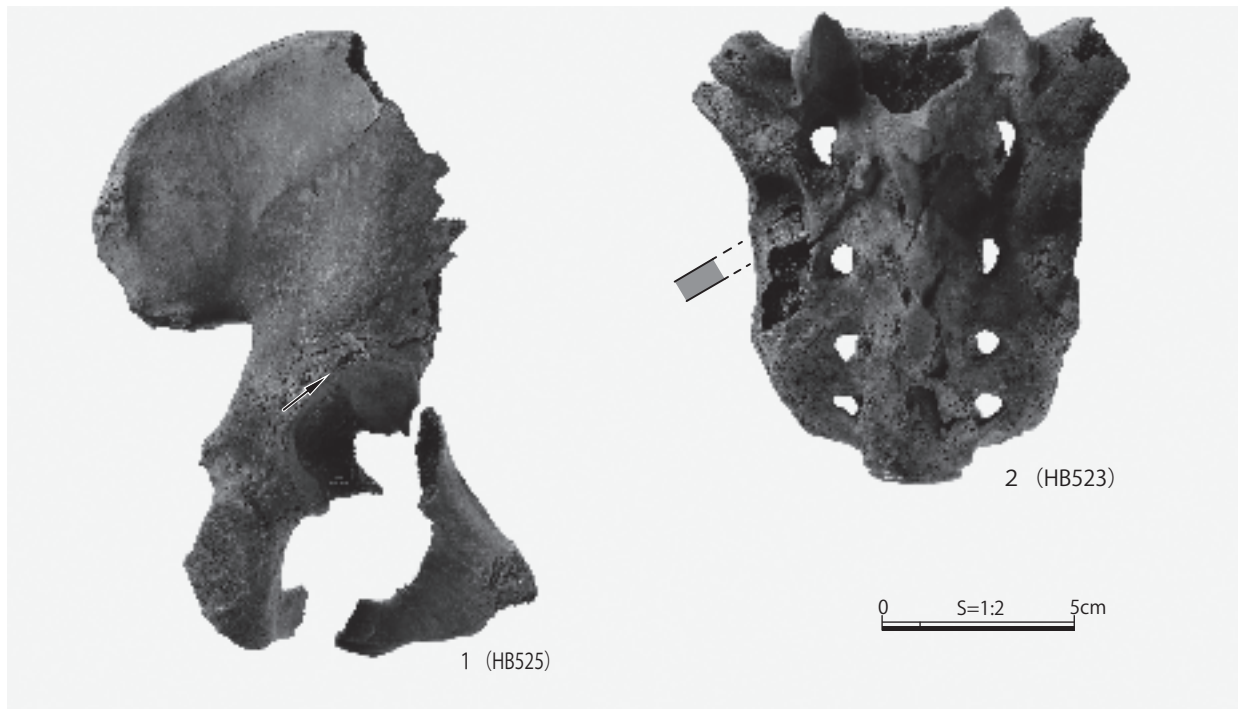


写真 29 同一個体の右寛骨・仙骨 HB525・523 の受傷痕

ており、同方向の切創も認められる。これらの受傷痕は鎖骨との切り離しを意図したものであろう。

肋骨 頭付近に受傷痕が認められるものが3点ある。このうち HB284 (8) は結節付近が削ぎ切られており、胸椎の横突起との関節部に刃物を入れたことが見て取れる。HB15 (10) は胸椎側から刃部が入れられており、やはり胸椎との切り離しを意図したものとみられる。HB536 (9) も頭付近に受傷痕が認められる。骨幹部を切断するものは HB50 のみである。

寛骨・仙骨 寛骨 HB525 (写真 29-1) の寛骨白縁に認められる切創は、右側から刃物を差し込まれたことにより生じたもので、脚の切り離しを意図したものとみられる。同様のものが1次調査出土人骨にも認められており、同じ手順によるものとみられる (註3)。さらに、これと同一個体の仙骨 HB523 (写真 29-2) に認められる、左側から刃物が指しこまれたことによって生じた創痕は右側と同じ行為によるものの可能性が高く、この人物は両脚を切断されていたと考えられる。また、この創痕からは、非常に薄く均質な厚みの刃部が指しこまれたことが見て取れる。

尺骨 HB602 (21) の骨幹部には横方向の切創が認められる。

手根骨 舟状骨 hb70 は斜めに切断されている。これは手首の切断に伴うものとみられる。

中手骨 第3中手骨 HB78 (18) および第4中手骨 HB37 (14) は近位端が斜めに切断されている。これは手の切り離しに伴うものの可能性が高い。同一個体の第2・3中手骨 HB544・543 (17) の甲側には骨軸に対して斜め方向に連続した受傷痕が認められる。受傷痕が認められる。第2中手骨 HB313 の骨幹内側面には斜め方向に連続する受傷痕が認められる。いずれも手の甲を削ぐような行

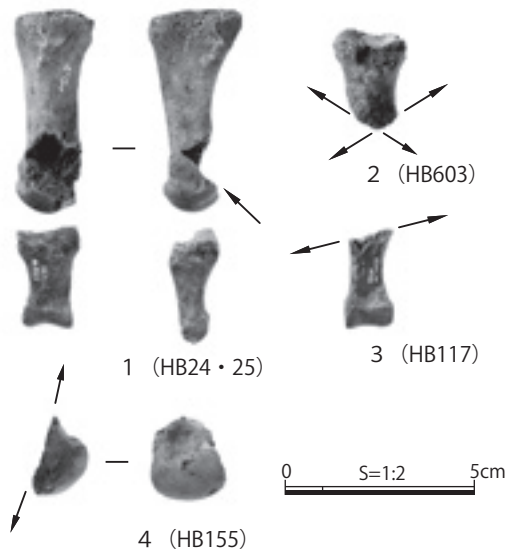


写真 30 親指の切断とその可能性がある
受傷人骨

為に伴うものであるが、意図は不明である。

上肢指骨 第1基節骨 HB117 (写真 30-3) は近位端付近で斜めに切断されている。親指の切り離しによるものである。

膝蓋骨 HB44 (15)・72 (16) には、いずれも前面に受傷痕が認められる。HB72 はほぼ水平方向に複数回切り込まれている。膝関節の切断の際につけられた可能性がある。

距骨・踵骨 距骨に3点、踵骨に2点の受傷痕が認められる。

同一個体の距骨 HB372・踵骨 HB371 (19) の上面は横方向の切断によって削ぎ落されている。これは明らかに足首の切断によるものである。距骨 HB96 (23) の上面に認められる創痕も同様の意図である可能性が高い。

また HB96 は下面、すなわち踵骨との関節面側が削ぎ落とされている。

距骨 HB14 (24) は内側面に縦方向に箇所削切られた痕跡が残る。方向的にみて足首の切断によるものとは思われないが、踵骨 HB605 (20) の縦方向の切断も同じ意図の行為によるものの可能性がある。

中足骨 第1中足骨 HB24 (写真 30-1) の下面の受傷痕とそれに伴う剥離は、足の裏側から刃物を叩きつけることによって生じたものであり、親指の切り離しを意図したものである可能性が高い。ただし、これと関節する下肢第一基節骨 HB25 がほぼ解剖学的位置を保って出土しており、結果的には親指の切り離しはできなかったことが分かる。

第3中足骨 HB66 (25) の遠位端は斜めに切断されている。足の切り離しに伴う可能性がある。

第4中足骨 HB570 (26) には外側面に連続した斜め方向の受傷痕を認めた。足の甲を削ぐような行為が想定されるものの、意図は不明である。

下肢指骨 第1基節骨 HB603 (写真 30-2) は骨幹部で2方向からの切り込みによって切断されている。足の親指の切り離しを示すものである。手・足ともに切断された、あるいはそれを意図した痕跡があるものは親指のみであることは特筆される。

受傷痕の可能性のあるもの

出土人骨には先に述べた受傷痕と認定する基準のすべてを満たしてはいないものの、その可能性があるもの32点がある。その多くは、破断面が平坦なものであり、位置も受傷痕として記載したものと類似するものが多い。そのなかでも、第1中足骨の遠位端 HB155 (写真 30-4)・599 の平坦な破断面は、HB24 (写真 30-1) に残された受傷痕と類似する。すなわち足の親指の切断という行為が複数人物に

なされていた可能性を示すものとして注目される。

殺傷痕

受傷痕には上記のように部位の切り離しに伴うものとみられるものが多数を占める一方、確実な殺傷痕とみられるものが2点ある(写真31)。いずれも動脈の走る位置にあたるもので、肋骨を避けて致命傷を負わせる意図が窺える。

第12胸椎 HB424(写真31-1)の創痕は椎体前面から刃物が差し込まれたことによって生じたものである。肋骨鎖骨 HB486(写真31-2)の鎖骨体後面にみられる創痕は上方から差し込まれた刃物によってつけられたものである。刃物は肺や心臓にまで達した可能性もある。これらは、致命傷になる箇所や方法を熟知した人物による殺害を示すものといえる。

1次調査区出土人骨の受傷痕との比較

1次調査区出土人骨の報告(井上・松本前掲)では「殺傷痕」のある人骨が110点が報告されている(第263図)ものの、肋骨の内側からつけられているものなど、殺傷痕としては不自然なものもある。20次調査区出土人骨同様、胸椎と肋骨の結節部など関節部に残されたものが多く、やはり遺体の切断によるものが多数含まれているとみられる。また、手指の骨のなかで、受傷痕が認められるのが第1中手骨のみである点は、先に述べた親指の切断行為が行われた可能性を示すものである。手足の指のなかで親指に特別な意味づけがなされて、切断の対象とされていたとすれば、受傷痕から想定される遺体の解体は、当時の習俗のなかで行われたものとして捉えるべきであろう。

一方で、武器が陥入しているものが端的に示すように、確実な殺傷骨がいくつも含まれている点は重要であり、これらを過小評価すべきではないだろう。殺害によって必ず骨に痕跡が残るわけではないからである。20次調査区出土人骨の受傷痕のうち殺傷痕とみられる第12胸椎前面、鎖骨上面に残されたものは、1次調査区出土人骨にも確認できる(註4)。これは、複数の人物が同様の手法で殺害されたことを示しており、同一人物による殺害の可能性も考えられる。闘争において、確実に急所

を捉えることは難しい。殺害は相手が抵抗できない状態で行われたのかもしれない。殺傷痕に共通するものが見いだせた点は、殺害の状況や背景を考えるうえで重要な知見と考える。

なお、1次調査区出土人骨の報告では、骨の切断に至っていないものを「殺傷痕」として捉えているように見受けられる一方、これらと平面的に削平されている「削平痕」を区別したとしており、「削平痕」が生じた要因として、埋葬後の掘り返しや整地が想定されている。しかしながら、これら人骨群の形成時期は弥生時代後期後葉であり、その後の造成による攪乱を受けて

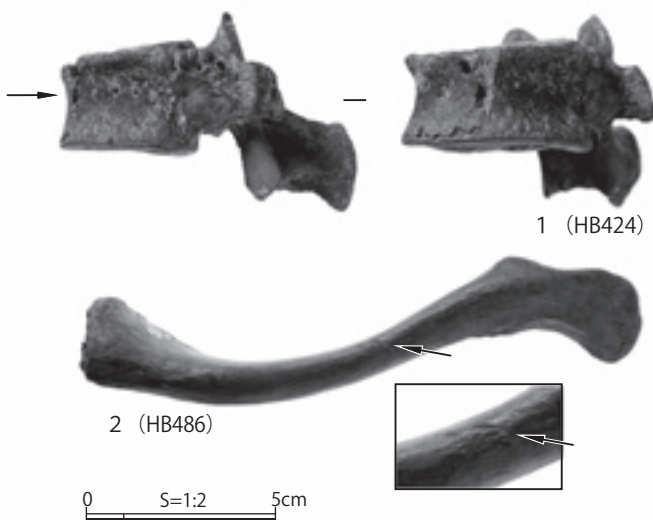
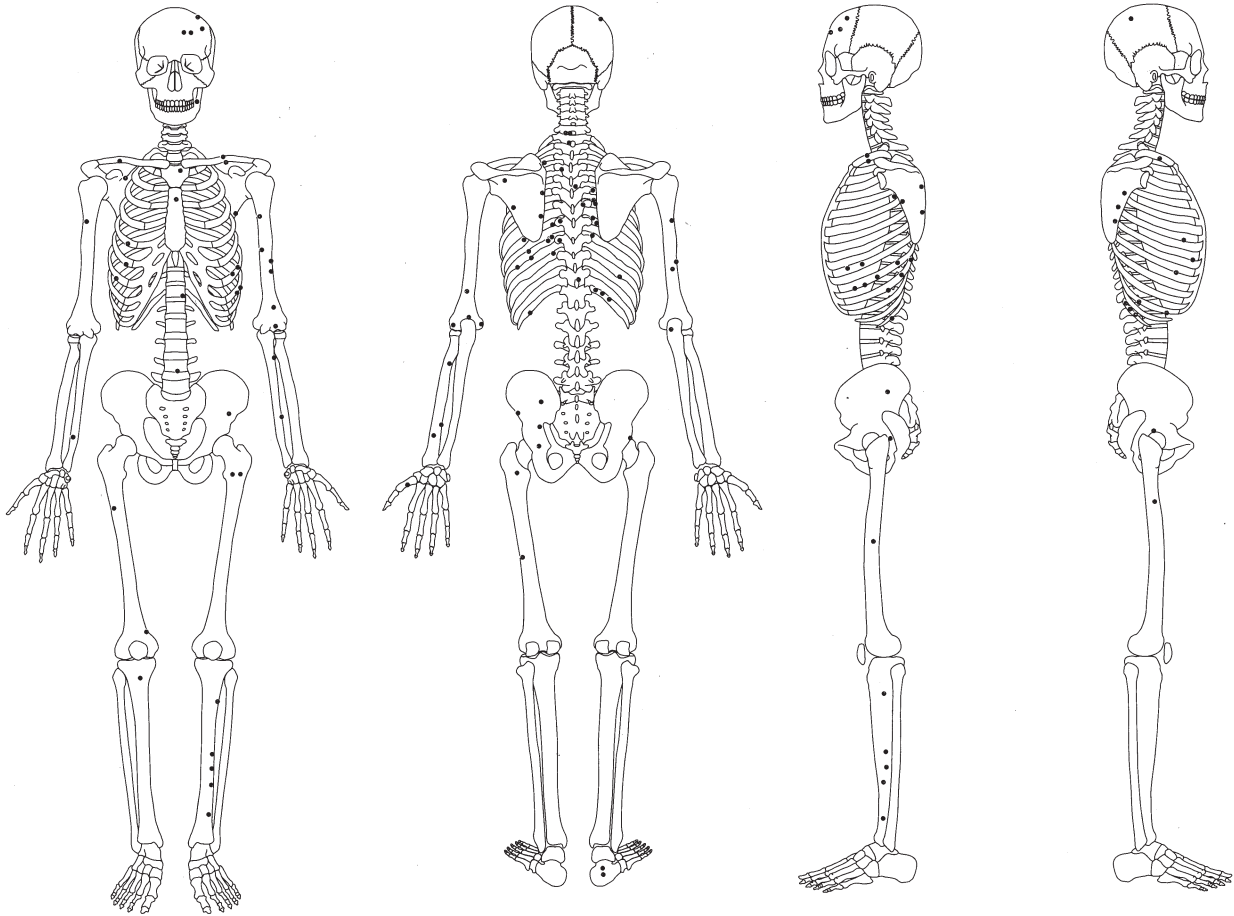


写真31 殺傷痕が認められる人骨



井上・松本 2002 より

第 263 図 参考：1次調査区出土人骨の受傷痕位置

いたとしても、それは弥生時代終末期後半までのことである。土掘具が未だ鉄器化されていない当該期における土木工事によって、20次調査区出土人骨にいくつも認められる平滑な切断面が生じるとは思われない。1次調査区出土人骨では、この「削平痕」については詳細に報告されていないが、20次調査区出土人骨と同様、切断に至った受傷痕がいくつも残されている可能性が高い。

(6) 焼成痕

黒変や、表面のひび割れが生じた焼成痕が認められるものは7点ある。

このうち頭蓋骨（前頭骨）HB274（写真 32-2、以下枝番号のみ）は被熱によって表面が剥落しているものとみられる。頭部の焼成は1次調査区出土頭蓋骨の殆どの個体に認められており、頭部を選択的に焼いていた可能性が指摘されている（篠田・神澤・坂上 2021）。

その他、焼成の痕跡は、下顎骨 HB600（4）、尺骨 HB163（1）、第1中足骨 HB108、肋骨 HB536、第3中足骨 HB560、距骨 HB562（3）に認められる。開放的な状態で火を受けたとすれば、焼成痕は広範囲に残るはずであるが、これらはいずれも骨の一部のみ変質していることが特徴的である。このような痕跡が残る要因として、焼けた炭とともに遺棄されるなどして、一部のみが被熱した、あるいは骨の大部分に軟質部が残った状態で火を受けたことが想定できるが、尺骨 HB163（1）のように関節部（近位端）のみに焼成痕が残るものがあり、後者の可能性が高いとみられる。受傷痕は各部

位の切り離しを支持するものであり、露出した関節部分のみが変質したのではないだろうか。

(7) 動物によるダメージ等

ここでは、動物による遺体の食害の痕跡等が認められる人骨について記載する。これらの痕跡は、少なくとも遺体の一部に、土中に埋められなかったものがあつたことを窺わせるものであり、人骨群の形成過程を考える上で重要な資料と考える。

大腿骨 HB22 (写真 33-2、以下枝番号のみ記載) にはクレーター状に、上肢基節骨 HB338 (3) には筋状に残された複数の窪みは、イヌなどの食肉目の歯列に対応するものであり、これらの噛痕とみられる。食肉目の噛痕は、これまで動物の噛痕はないと報告されていた (井上・松本前掲) 1次調査区出土人骨にも、複数認められるという (註5)。

大腿骨 HB73 (1)、上腕骨 HB30 には、げっ歯目による2条1単位の噛痕が認められる。下部胸椎 HB172 (4) と胸椎 HB31、上部腰椎 HB293 の椎体には貫通しない円孔が認められる。これは、フナクイムシ類による食害の可能性がある (註6)。フナクイムシ類は木を食害することで知られている蠕虫状の貝類であり、内湾など比較的塩分濃度の低い海域の沿岸部に多く生息する。また、出土人骨のなかにはカニによる食害の可能性があるものも少数認められる (註7)。

頸椎 hb40 には、エンマコガネ属の上翅が付着していた (写真 34)。その特徴から、フトカドエンマコガネ、コブマルエンマコガネいずれかであるとみられる。この2種はいずれも、腐肉にたかることもあるとされている (岡島・荒谷 2012) が、地中に潜ることはあるものの、索餌のために地中に潜ることはしないという (註8)。

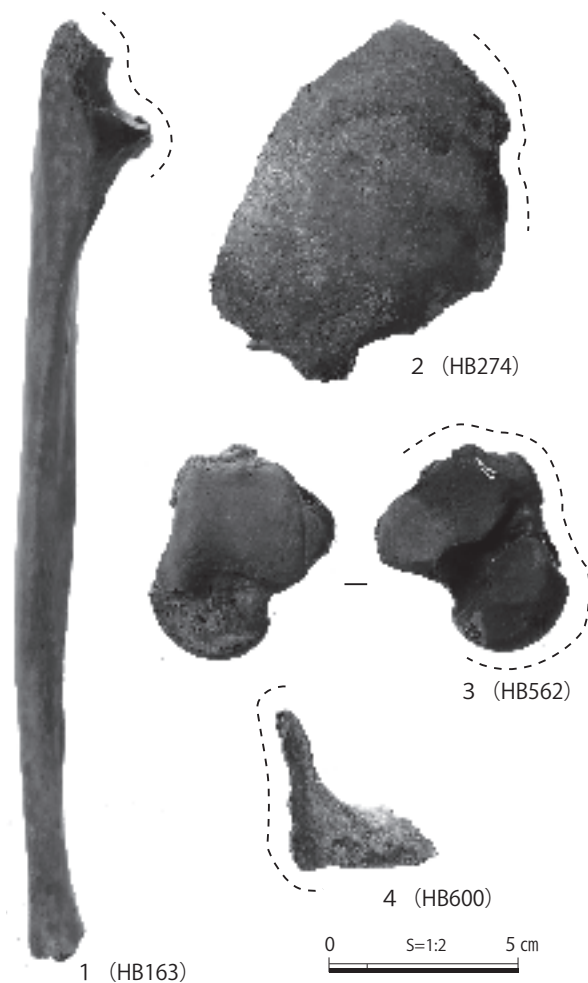


写真 32 焼成痕が認められる人骨

小結

両調査区の部位別組成における頭蓋骨、下顎骨、主要四肢骨の出土率にみる明瞭なコントラストと、大腿骨の接合例から、20次調査区と1次調査区から出土した人骨群は一連のものであるだけでなく、白骨化後の人為的な部位の選別を経た集積の結果形成されたとみることができよう。20次調査区で選別が行われたのち、1次調査区に頭蓋骨、下顎骨、主要四肢骨を中心とする部位が集積されたことは、20次調査区では骨幹から外れた主要四肢骨の骨端部のみがいくつも出土していること、主要四肢骨と椎骨の間の推定年齢にギャップがあることによって支持されよう。SD38-Ca から出土した人骨にみる、点数は少ないながらも複数個体に由来する部位が混じるといった特徴は、この場で多数の人物の骨が選

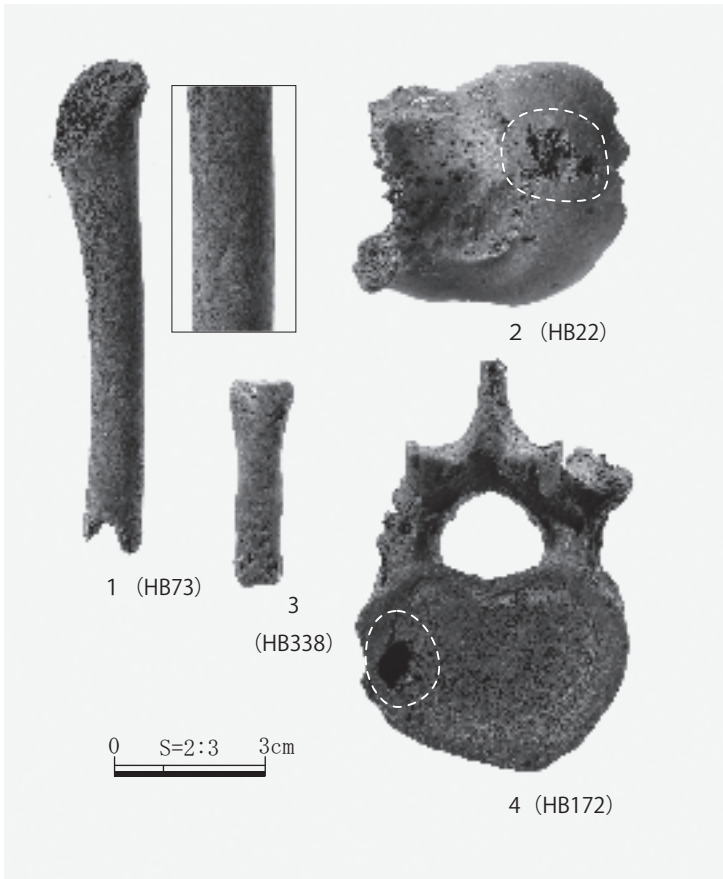


写真 33 動物の噛痕等が認められる人骨



写真 34 エンマコガネ属上翅が
付着した頸椎

別されたことを裏付ける。

受傷痕や被熱痕の精査からは、白骨化前に遺体の切断や損壊、焼成が行われたことも明らかとなった。当時の習俗の中で行われたと考えられるこうした行為は、白骨化後の集積と無関係ではあるまい。また、複数の人物が、同様の手法で殺害されたという事実は、これほど大量の人骨が集積された背景を考えるうえで重要な知見となるかもしれない。

第4項 考察

以下は、これまでの各種の検討によって得られた成果を活用し、SD38 から出土した人骨群の評価を試みる。

(1) 二次葬

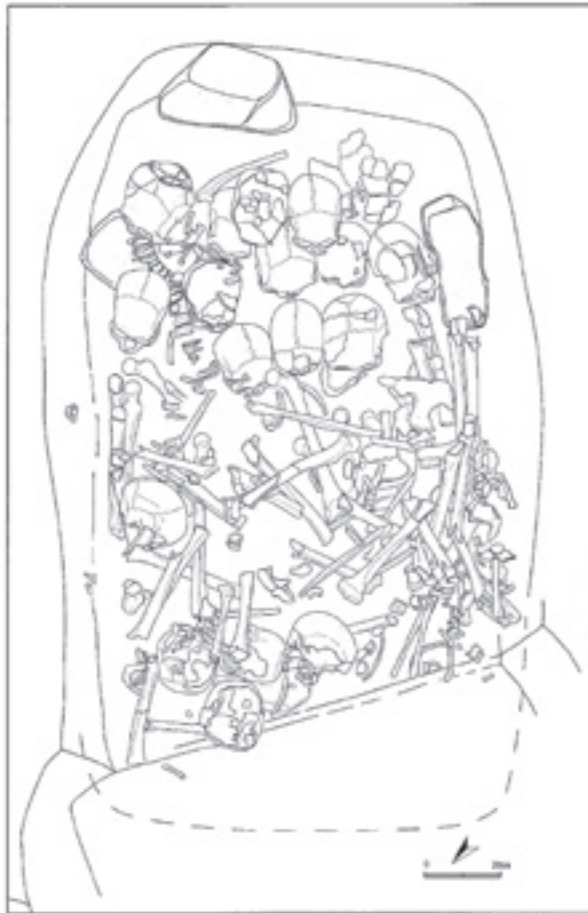
1次調査区 SD38-2 の人骨群の形成過程については、これまでいくつかの仮説が提示されてきたが、近年では、大きな攪乱を受けていないとみられる分布状況、秀麗な木製高杯はじめとして特殊な遺物が共伴している点から「白骨化した人骨の二次的な埋葬行為によって形成された」（清家・濱田 2023）とする見解が示されている。今回行った 20 次調査区出土人骨の検討からは、1次調査区の人骨が部位や年齢による選択を経たのち集積されたものであることが導かれ、一連の人骨群が白骨化後に行われた二次葬によって形成されたことが浮き彫りになったといえる。遺体の埋葬などによる一次葬で白骨化した人骨を改めて葬る二次葬（註9）の例としては、東日本で弥生時代前期から中期前葉に盛行した壺棺に白骨化した人骨を納める壺棺再葬がよく知られており、春成 秀爾による詳細な検討

によって、その始原は縄文時代晩期にまで遡るものであることが示された（春成 1993）。西日本においても当該期の二次葬の痕跡は散見され、特に土井ヶ浜遺跡（山口県下関市）では、単体あるいは複数個体分の人骨を集積した二次葬の土壙墓から出土した個体数が全体の 33.4% を占め（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 2014）、これらが属す弥生時代前期～中期には二次葬が普遍的な葬法のひとつであったことが窺える。山陰地方では弥生時代後期に属する多数の伸展葬の土壙墓が確認されているため、二次葬で形成された SD38 の人骨群は非常に特異な事例にみえる。しかし、土井ヶ浜遺跡の二次葬の事例（第 264 図）をみれば、一次葬者の伸展葬と頭骨の二次葬が複合している土壙墓もあれば、ST1121 のように遺構の形状からはそもそも墓として認識が不可能なものあり、壺棺再葬のように特殊な形態のものでない限り、人骨の残存がなければ二次葬を認識することは非常に難しいことが分かる。なお、壺棺再葬は古墳時代にまで引き継がれた可能性も指摘されており（春成前掲）、全国各地の岩陰・洞窟遺跡においては弥生時代～古墳時代の二次葬例が散見される（清家・濱田前掲）。SD38 の人骨群は、二次葬の習俗が弥生時代後期後葉まで引き継がれたことを追認すると同時に、考古学的には認識できてこなかった葬送の在り方を明確に示すものと評価できよう。

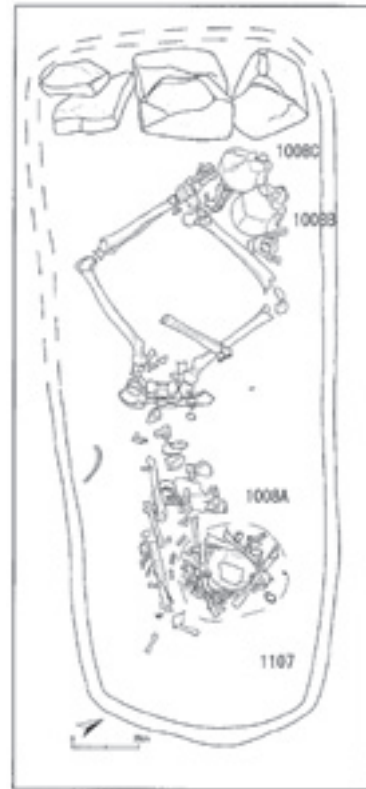
次に、SD38 の人骨群にみる葬送儀礼の特徴について押さえておきたい。20 次調査区 SD38-Ca・b から出土した遺物の多くは埋積過程のものともみられ、1 次調査区 SD38-2 のように明確に人骨に共伴するものは少ない。したがって、1 次調査区の人骨群およびその周辺から出土した遺物群は白骨化したのちに行われた葬送儀礼の状況を示しており、20 次調査区の人骨群はそこに供されなかったものとも考えられる。頭骨は言うまでもなく、長くまっすぐな形状の四肢骨は大型獣類のそれとは大きく形状が異なるため、当時の人々にとっても人骨としてのイメージを持ちやすい部位であったことは想像に難くない。土井ヶ浜遺跡の二次葬（第 264 図）においても、頭骨は多数集積される（ST1112・216 号土坑墓）、単独で一次葬者に合葬される（ST1008）など極めて特別視されたことが明らかであるし、主要四肢骨についても整然とまとめられたり（ST1121）、井桁状に組まれる例（ST1107）もあり、やはり丁寧に処置されたことが見て取れる。これらの部位が集積されていることからみても 1 次調査区が主たる葬送儀礼の場であったことが分かる。

一方で、20 次調査区では 1 次調査区出土人骨には全くみられない幼児の骨が出土しており、これらについては 1 次調査区で行われた葬送儀礼には供されなかったと想定される。弥生時代における子どもの扱いについては、主に葬制の面からの研究がなされており、近畿地方の方形周溝墓にみる子どもと大人の埋葬方法の違いからは、年齢集団によって社会的な位置づけが決まる年齢階梯的な社会の在り様が想定されている（藤井 2001）。また、土井ヶ浜遺跡は、弥生人骨に占める未成人骨の割合が約 19% と、北部九州の埋葬人骨と比べ著しく低いことから、基本的には成人構成員を対象とした墓地であったと評価されている（土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム前掲）。妻木晩田遺跡仙谷墳墓群では、弥生時代後期中葉から後期後葉にかけての墳丘墓の変遷のなかで、子どもの墓の可能性のある小型の埋葬施設が墳丘外に限定されるようになることが確認されている（森藤 2020）。これが端的に示すように、山陰地方においては、弥生時代後期に墳丘墓の区画内に子どもが埋葬されることが殆どなくなっていくことが指摘されている（高田 2020）。このような墓制にみる子どもの取り扱い、青谷上寺地遺跡で確認した、主な葬送儀礼の場に供されない幼児骨の出土状況と整合的であり、人骨の選別、集積が同地域における当該期の年齢階梯的な意識のもので行われたことを示している。

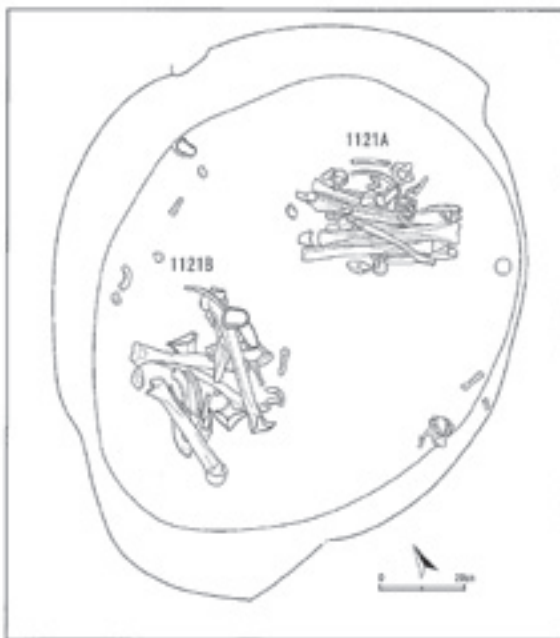
ただし、20 次調査区においても、規模は小さいながらも何らかの葬送儀礼が行われた可能性があ



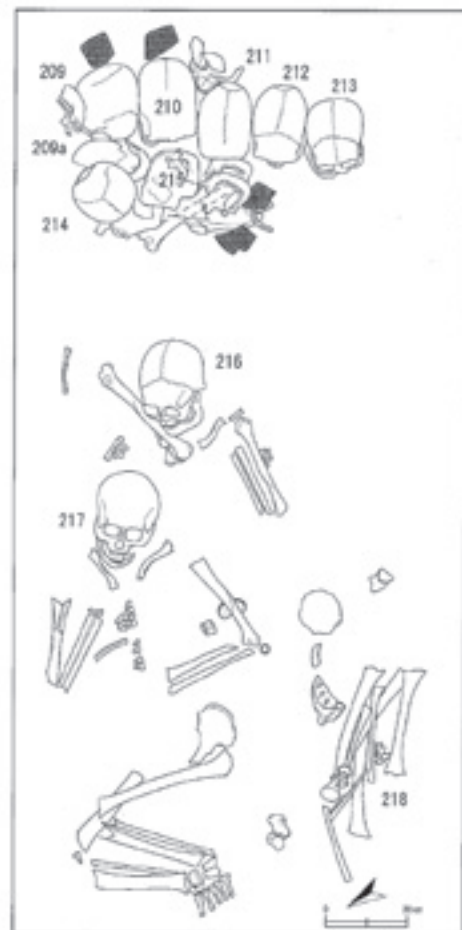
ST1112



ST1107・1008



ST1121



216号土坑墓

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 2014

第264図 土井ヶ浜遺跡の二次葬

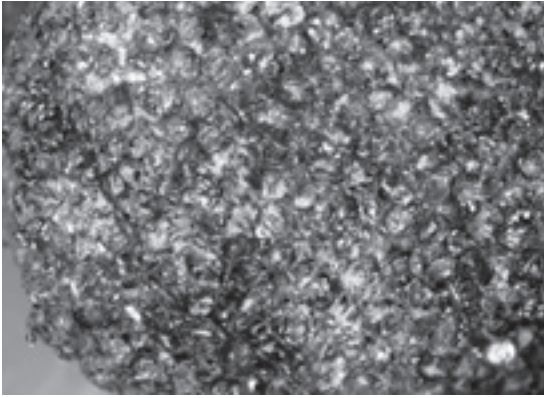


写真 35 SD38-Cb 出土炭化粟ブロック

ることは、20次調査区内各所での出土人骨の様相の違いに表れた年齢や部位に関する強い選択性から窺えるところである。SD38-Ca・bの埋土からは、他の遺構に比べはるかに高い割合で炭化米が含まれており（第4章第7項）、SD38-Cbでは複数の炭化米ブロックや炭化雑穀ブロックも出土している。この炭化雑穀ブロックは、脱穀した粟で構成されるものである（写真35）。1次調査区のSD38-2では人骨群に伴って炭化米が入った状態の桶が出土しており、葬送儀礼において食物供献が行われたことが窺えるが、SD38-Ca・

b出土人骨に対しても同様のことが行われていた可能性がある。また、弥生時代後期後葉の中心域張出部は、区画内に単独で立てられた柱（88柱穴）があるのみであり、特殊な場であった可能性がある。この柱は葬送に関わるシンボリックなものであったのかもしれない。中心域張出部は造成によってかさ上げされながら弥生時代終末期後半まで維持され、当該期には88柱穴と同様、単独の柱（84柱穴）が立てられるが、古墳時代前期初頭～古墳時代前期前葉の造成後には、それが継続されなくなり、平地建物群が展開する。特殊な場としての意識が失われることと、土地利用の変化は軌を一にするものであったのだろう。

ところで、SD38に集積された人骨は、どのような形で白骨化したのだろうか。一次葬の形態が土葬で、白骨化したのちに掘り返したとすれば、手根骨や指骨のような小さい骨には、回収されずに遺構内に残されるものが増えると考えられる。しかし、これほど大量の人骨が集積されているにも関わらず、これまでの発掘調査でそのような一次葬が行われたことを示す散発的に人骨が出土する遺構は確認されていない。SD38-Ca・bが一次葬の場である可能性は、出土した人骨群に攪乱された痕跡が殆ど認められないことから考え難い。何より、1次調査区のSD38-2では手根骨や指骨も多数出土しているため、一次葬に土葬を想定することは難しい。

火葬についても、焼成痕は少数の人骨にしか認められず、その範囲も限定的である。焼成による白色化や収縮を生じている人骨も認められないため、焼成が白骨化のための措置として行われたとは考えられない。だとすれば、一次葬の形態としては曝葬の可能性を考えねばならないのかもしれない。

曝葬は風葬とも呼ばれるように、遺体を埋葬せず、風雨や動植物の力に委ねて風化・分解させる葬法である。海浜部の岩陰・洞窟遺跡において全国的に確認されている葬法であり、山陰地方では猪目洞窟遺跡（島根県出雲市）で弥生時代後期の例が知られている（石橋2019）。また、曝葬はその性質上、骨を片付け集積を行う機会が増えるため、二次葬を伴う場合が多い点も注目される（清家・濱田前掲）。出土した椎体3点に認められるフナクイムシ類等の食害痕や、カニ類による食害痕は白骨化時に海辺にあったことを支持するものであり、岩陰・洞窟遺跡にみるような曝葬が行われたことを思わせる。内海を含め海浜部に一次葬を行う場があったのかもしれないが、その痕跡を残すものは多くないため、全ての遺体がそのようにされたかは疑問である。

出土した人骨に認められる動物の噛痕やエンマコガネ属上翅の付着は、遺体が土中深く埋められてはいなかったことを裏付ける。ただし、20次調査出土人骨のうち、噛痕を確認したものは食肉目によるものが2点（0.29%）、げっ歯目によるものが2点（0.29%）であり、それらが残される頻度は貝

塚出土獣骨における頻度（食肉目：1.5%、げっ歯目：1.0%）（須藤編 1995）に比べ明らかに低い。一次葬が海浜部で行われたとすればそれが影響しているのかもしれないが、白骨化するまで遺体をただ放置したとするには疑問が残る。もし、遺体を埋葬せず、動物に荒らされないような何らかの措置を講じて管理していたとすれば、それはモガリが行われていたとしてよいのではないだろうか。モガリは端的に言えば、死者を埋葬するまでの長い期間にわたって遺体を仮安置し、その腐敗や白骨化によって被葬者の確実な死を確認する葬送儀礼である。モガリが古代日本において普遍的に行われた葬送儀礼であることは、考古学だけでなく文献史学、民俗学、古代文学などの分野から示されてきたところであり、『魏志倭人伝』に「始死停喪十余日」と記された、一定期間遺体を埋葬せずにおく弥生時代の習俗がモガリの萌芽形態であるともされる（和田 1995）。また、本州に残る、遺体や埋葬墓を囲う柵や垣などを「モガリ」、「モンガリ」と呼ぶ事例から、モガリとは本来「カキ（垣）」であるとする意見（中田 1971）は、遺体を荒らす動物を退ける措置を思わせる点で興味深い。近年では、明るい場所ではしか活動しないハエの囲蛹殻が、主に古墳に埋葬された遺体や副葬品に付着している事例が多数確認されてきたことで、モガリが広く行われていたことが証明されている（出雲弥生の森博物館 2023）。ただし、人骨が出土した SD38-Ca・b の埋土を水洗選別してもハエの囲蛹殻は検出されていない（註 10）。一次葬の形態については土葬、火葬について否定的な根拠があることは確かであるが、それが曝葬であるかについては、現状では可能性を示すに留めたい。

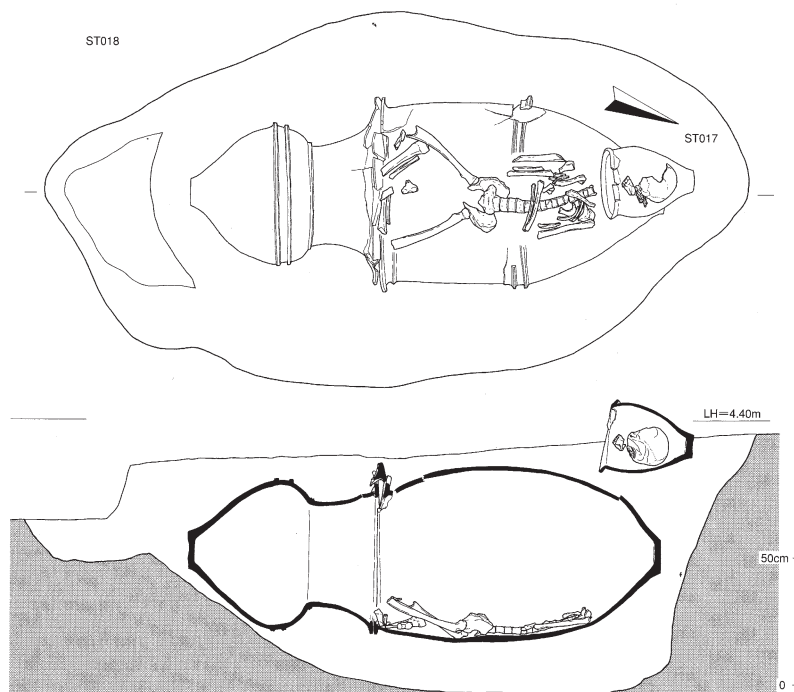
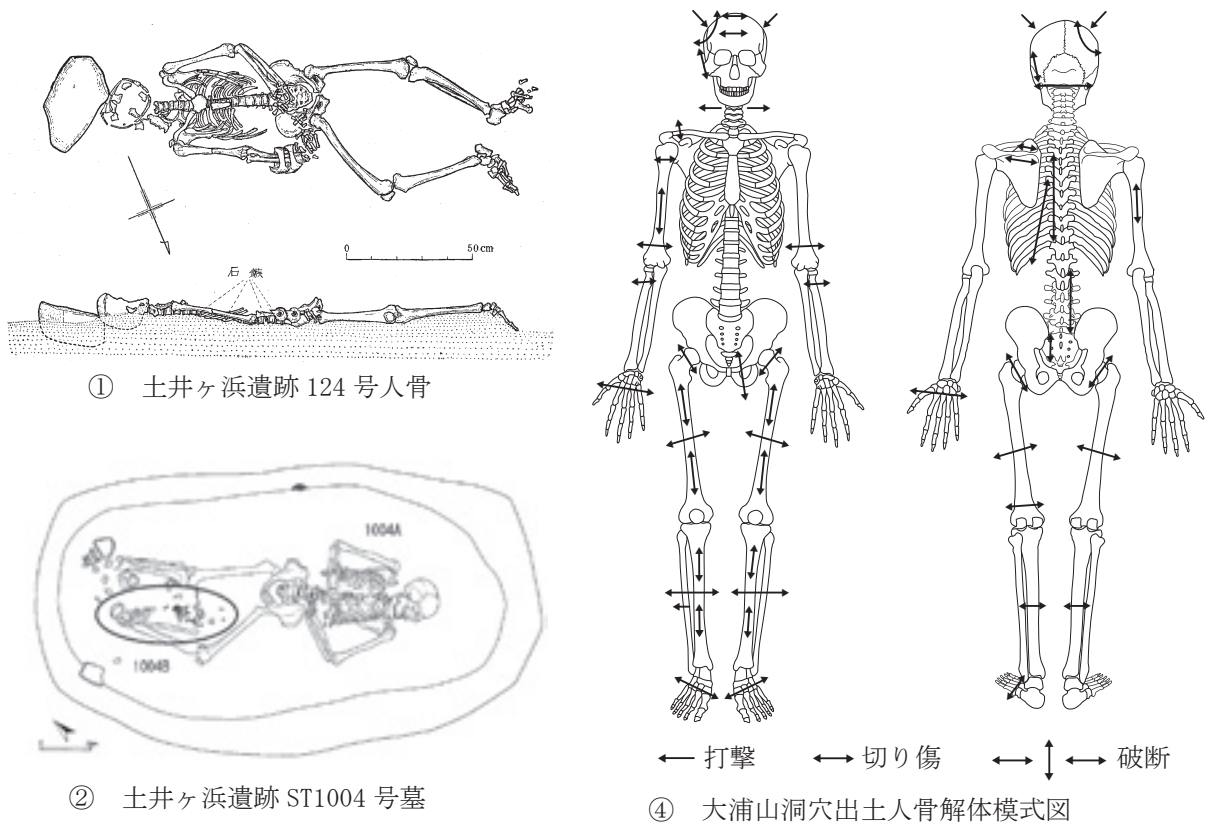
（2）遺体毀損儀礼

第 20 次発掘調査出土人骨に残された受傷痕には、確実に殺傷痕と認められるものがある一方で、遺体の解体や損壊に伴うとみられるものが高い割合を占めることが明らかとなった。この行為は何を目的として行われたのであろうか。人類学者の鈴木尚が、大浦山洞穴遺跡（神奈川県三浦市）から出土した受傷痕や破壊の痕跡がある弥生人骨を食人の痕跡とした（鈴木 1997）ことはよく知られている一方、これについては否定的な見解もある（春成前掲、佐宗ほか 2008）。食人の可能性の検討にあたっては、食料資源として利用された獣骨にみられる解体痕との類似性の有無が判断基準となろうが、当遺跡から出土する獣骨には人骨に多くみられる骨ごと断ち切った痕跡は少ない。また、人骨に残された受傷痕には、親指の切断や、手の甲の肉の無い部分を削ぐものなど、食するための解体としては理解できない行為によるものもある。したがって、人骨に残された受傷痕は積極的に食人の可能性を支持するものとはいえない。

また、東日本の弥生時代遺跡では、ヒトの指骨や中手骨、歯を加工した装身具の出土例が知られている（春成前掲）が、青谷上地寺地遺跡からは装身具を含め、人骨を素材とした骨角器は出土してないため、遺体の解体目的をこれらの素材獲得に求めることはできない。

人骨の出土状況にみる葬送のあり方を踏まえれば、白骨化を促進するために遺体を解体したことも考えられる。しかし、少なくとも今回出土した主要四肢骨には、肉を削ぐ際に残ることが多い四肢骨の長軸に直交あるいは斜めに連続する受傷痕は認められず、部分的な焼成痕のあり方も軟質部の残存を示すものであるため、それが主な目的であったとするには疑問が残る。

このように、受傷痕にみる遺体の解体や損壊については物質面での合理的な目的を見出しづらい。ただし、人骨の中には、これらが葬送儀礼と一連の行為であることを示唆するものもある。例えば、焼成が他部位に卓越して多く、選択的に焼かれたとみられる頭蓋骨や、今回特異な出土状況が確認さ



③ 西新町遺跡 ST107・108 号墓

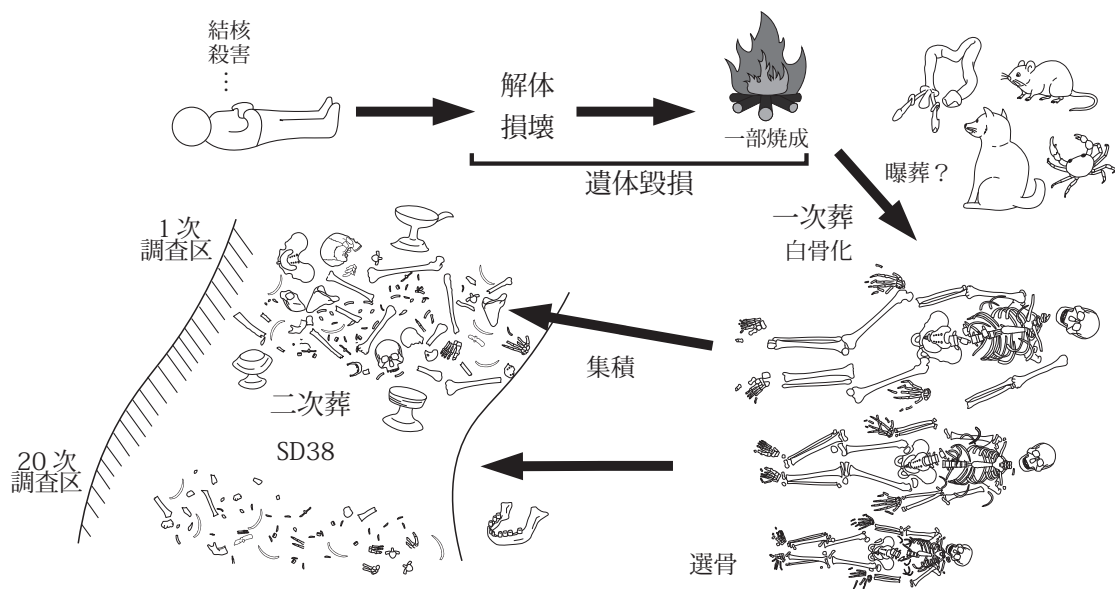
①・②: 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 2014、③: 福岡市教育委員会 2001、④: 鈴木 1997 より作成

第 265 図 弥生時代における「断体儀礼」の類例

れた下顎骨 HB308 は、人間をイメージしやすい特定の部位を葬送儀礼のなかで特別に取り扱ったことを示す事例とみられる。実際、今回出土した人骨のなかには、頭部の切断による受傷痕が残された軸椎が2点あり、下顎骨 HB308 には頭蓋骨との切り離しによる受傷痕が認められることは先に述べたとおりである。

一方で、その他の殆どの部位には、切断後、特別な扱いをされたとはみられないことも確かであり、遺体の解体・損壊という行為そのものに儀礼的な意味合いがあった可能性が高い。例えば、今回確認した手、足ともに親指のみを対象にした指の切断などは、これを支持するものといえよう。このような遺体の切断の意図を考えるうえで、田中 良之の提唱した「断体儀礼」(2008)は示唆に富むものである。これは、縄文時代から古墳時代の出土人骨に散見される遺体の毀損あるいは生前の状態（つまり解剖学的位置）を崩すという行為を、遺体そのものを用いた即物的儀礼行為とするものである。田中が提示した弥生時代の事例（第 265 図-①～③）としては、①多数の矢が撃ち込まれた熟年男性である土井ヶ浜遺跡 124 号人骨にみる頭部破壊と足首離断、②同遺跡の胎児～乳児と合葬された成人女性である ST1004 号墓人骨にみる両足首の離断、③西新町遺跡（福岡県福岡市）ST107・108 号墓人骨にみる男性の頭部離断がある。①は従来「弥生の戦士」とも称されてきた人骨であるが、近年刊行された総括報告書（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム前掲）のなかで、ゴホウラ製貝輪の装着から想定される社会的位置も含め、責任の不履行などに対する集団的制裁とする見方が提示されている。②は、20代という推定年齢から、合葬されている胎児～乳児の出産時のトラブルによって亡くなったと考えられてきたものである。このうち①・②については、「断体儀礼」が死因と関連づけて捉えられており、「遺体の諸機能すなわち人格・心肺機能・運動機能を停止させその再生を阻止する」（田中前掲）ためのものとする論拠となっている。この根底には、諸学より示されてきた死者が害をなしうる存在であるという観念があることは言うまでもない。

ただ、田中の説を青谷上寺地遺跡から出土した受傷人骨を解釈するよすがとするにあたって、田中が提示した埋葬人骨に確実な受傷痕が確認されているものがない点は懸念される点である。しかし、③は環椎、軸椎を伴った頭骨が納められた小児棺が、解剖学的位置を保ったその他の部位が納め



第 266 図 SD38 人骨群の形成過程の模式図

られた甕棺と長軸をそろえて埋葬されていることから、切断した頭部をあえて別々の棺に納め、同時に埋葬したとみて間違いあるまい。先に述べた大浦山洞穴遺跡出土人骨にみる徹底的な遺体の損壊行為（第265図-④）については、「再葬のための解体」（春成前掲）とする意見もあるが、同遺跡出土人骨に関東で盛行した壺棺埋葬されたものはなく、曝葬が行われたことを思わせる散乱した出土状況は青谷上寺地遺跡出土人骨を彷彿とさせる。

これまで示した例はいずれも弥生時代中期に属するものであるが、弥生時代に遺体を損壊する習俗が存在したことを示すものとして特筆される。青谷上寺地遺跡で行われた遺体の解体には、習俗以外の目的が見出しづらく、今回の検討で抽出できた一連の葬送儀礼（第266図）のなかで、具体的には死亡直後、一次葬前の段階で行われたものと考えられる。なお、遺体の一部を焼成する行為は、軟質部の残存を支持する部分的なもので、遺体の解体直後に行われたものとみられる。頭部を選択的に焼成していること、第1次調査出土第8頭蓋のように明らかに顔面部を焼成しているものがあることから、人格を毀損する目的で行われた可能性が窺える。第265図-①をはじめ、土井ヶ浜遺跡では頭部の破壊がいくつもの個体に認められるとされ（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム前掲）、大浦山洞穴遺跡の弥生人骨を含め、海浜部の岩陰・洞窟遺跡では焼成の痕跡を残す人骨が散見される（清家・濱田前掲）。遺体の離断だけでなく、同じ意図でこうした行為も行われていたとすれば、田中 良之がいうように「遺体毀損儀礼」（田中前掲）と呼ぶべきであり、SD38出土人骨にみる受傷痕、焼成痕はまさにこの儀礼が行われた痕跡といえるのではないだろうか。

（3）人骨群が物語るもの

1次調査区のSD38における人骨の分布の検討からは、集中箇所の下層においても人骨が出土していることが確認されており、SD38がある段階から葬送の場として機能するようになった可能性が指摘されている（濱田2021）が、この分布は希薄で、上層の集中部との隔たりは顕著である。最後に検討したいのは、なぜこれほどまでに大量の人骨の集積が形成されたのかについてであるが、これにあたってはまず、人骨から確認できる人々の死因に関わる2つの要素について押さえておきたい。

ひとつは殺傷痕である。今回の調査で出土した人骨には、最小個体数が9と算定される成人の骨のなかに確実な殺傷痕が残されたものが2点ある。1次調査区出土人骨の報告で記載された110点の「殺傷痕」には遺体毀損によるものも含まれるとみられるが、金属製武器が陥入しているものをはじめ、明確に殺傷されたことが分かるものがいくつもあるのは確かである。当遺跡からは、これまでの発掘調査で10,000点以上に及ぶ膨大な獣骨が出土しているものの、狩猟の対象であったにも関わらず、明確な殺傷痕が残されているものは僅かである（註11）。もちろん、対人用の武器を用いた殺傷と、狩猟におけるそれを単純に比較することは出来ないが、殺害されたすべての人物の骨に殺傷痕が残るわけではないことは念頭においておく必要があるだろう。

もうひとつは結核によって引き起こされる脊椎カリエスである。この症例は1次調査区出土人骨の報告時点で2例（井上・松本前掲）知られていたが、そののちの調査で新たに3例が確認された（篠田・神澤・坂上前掲）。脊椎カリエスは結核菌が脊椎に感染して炎症や損傷を引き起こすものであるが、これが生じるのは結核を発症し、慢性化したもののうち僅か3～5%であるという（岡崎2018）。109という最小個体数に対して、5という症例数は極めて多いといえることができる。

このような特徴から、人骨群には殺害された、あるいは結核で死亡した人々のものが多数含まれて

おり、大量の人骨が集積された、つまり多数の人々が死亡した要因となっていることは間違いなさだろう。しかし、この2つの要素の関連の有無、あるいはそれによって死亡した人々が同一、同質の集団であるか否かについて、現段階で確定的な答えを出すのは難しい。それは、白骨化という過程が介在しているがために、集積された人骨がどの程度の期間で死亡した人々に由来するものか判断できないからだ。

弥生時代の葬制において、ある程度の期間にわたって亡くなった人々の骨が集積される場合があることは、土井ヶ浜遺跡における二次葬である集積墓や合葬墓と、一次葬である土壙墓が混在している状況（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム前掲）からも首肯されよう。また、このようなある程度の期間を経たのち行われる二次葬のあり方は、南西諸島に近年まで残っていた洗骨とよばれる葬制を想起させる。洗骨は、一度土葬あるいは曝葬し白骨化した遺体を海水や酒で洗い再度埋葬する二次葬で、その形態からモガリとの類似性が指摘されてきた葬制である。そのうち、久高島においては、12年に1度この洗骨を行う習俗があったことが記録されており（伊波 1927）、長期間にわたって死亡した人骨が一斉に集積されることがあったことが知られる。大部分は散乱した状態でありながら、ごく一部に解剖学的位置が保持されていたり、脳が残存しているものがあるという SD38 の人骨群にみる遺存状況の差は、死亡してから集積されるまでの期間が個体によってまちまちであったとすれば理解しやすい。このように、死亡時期に時間幅があるとした場合、死因は殺害と結核によるものを多数含みながらも一様ではなかったと考えられる。また、当遺跡の出土遺物にみる活発な地域間の交流や、血縁関係が殆ど認められないという DNA 分析の結果（篠田ほか 2021）を踏まえれば、SD38 の人骨群は、ある期間内に当地に流入した複数の集団に由来する可能性も考えられる。人骨の酸素・窒素同位体比分析では、これらの人々が海産資源に遺存しない生活をしていた（瀧上 2024）という、多数の魚骨が出土する当遺跡の状況と合致しない結果が得られているが、人骨群が必ずしも在地の集団に由来しないとすれば、齟齬は生じないのかもしれない。

では、仮にこれらの人骨が極めて短期間に死亡した人々のものであるという前提に立って、つまり、これらの人々が同一集団であるという観点から考えてみたい。いくつも確認できる殺傷痕は、多数の人々が殺害されたことを支持するが、その要因は何であろうか。弥生時代は一般的には戦争が始まった時代として位置づけられており、SD38 出土人骨も、殺傷痕や「倭国大乱」という時代背景から戦争の犠牲者といった文脈で扱われる向きがあった。しかし、出土した人骨は女性や少年以下のものを多数含んでいるため、戦闘行為に参加した人々のものとは思えない。また、集落が攻撃を受けた際の犠牲者という可能性についても、これだけの人々が殺害されてもおお、その後青谷上寺地での人間活動が停滞していないことから考えづらい。これらの人々がごく短期間に殺害されたとみる場合、その要因を戦争に求めるのは難しいと考える。

ここで注目されるのが、現段階で5例確認している脊椎カリエスの症例である。109 という1次調査区出土人骨の最小個体数に対する症例数からみて、この集団には結核が蔓延していたとみるべきである。例えば写真 36



写真 36 脊椎カリエスの症例

に示した脊椎カリエスの進行状況からみて、この人物は背中が突出して変形する亀背の状態になっていたはずである。「亡国病」とも呼ばれるほど人類を脅かしてきたこの病の脅威は、肉体の変形という目に見える形（註12）で、青谷上寺地の人々に強い危機感を抱かせたに違いない。病理についての知識がなく、また医療的な対処のしようがない時代にあっては、ある種の病は祟りの類として捉えられたであろうし、罹患した人々の排除につながったとしても不思議ではない。その排除が殺害という形で行われたことは考えるのではないだろうか。『魏志倭人伝』に記された罪人に対する処置を踏まえれば、その範囲は罹患者の一族すべてに及んだことも想定されよう。そして、このように非業の死を遂げた、いや、遂げさせざるを得なかった人々だったからこそ、彼らが災厄をもたらすものにならないようにするために、呪術的な処置が必要だったのではないだろうか。具体的には、遺体を毀損したうえで、白骨化によって確実な死を見届けなければならなかったということである。あるいは、各部位を散乱した状態にすることも死者の再生を不可能にする意図があったのかもしれない。

一方で、出土した脊椎カリエスの症例は、この人物がこの状態まで生きながらえていたことも示している。集団内で重病者に対する介護的行為が行われていたという事実は重要であり、殺害による排除と相いれないように思えるが、彼らが集落の主たる構成員とは別の集団であったとすれば辻褄が合う。濱田 竜彦は、これらの人々について、結核が蔓延し易い密な環境で暮らさざるを得なかった人々であり、DNA分析の成果を踏まえた上で、中国の歴史書に記された奴隷階級である「生口」であった可能性を指摘した（濱田2024）が、この点については、多数の人々が死亡したとしても集落の衰退につながらなかったという事実と整合的である。また、これらの人々がまとめて区画溝に葬られた一方で、土壙墓に葬られた人々もいた事実からは、やはり社会階層の存在を思わずにはいられない。

炭素14年代の測定結果を踏まえた共伴土器の検討結果から、人骨の年代として2世紀第3四半期が想定されている（濱田ほか2021）。20次調査においても人骨に2世紀第3四半期に位置づけられる弥生時代後期後葉の土器が伴うことを確認した。これによって、SD38から出土した人骨が、『後漢書東夷伝』に記された「倭国大乱」の時期にあたることで改めて確認された。SD38から出土した人骨を、直接的な戦争の被害者とみることは難しいが、これほど多数の人々が死亡した背景に、例えば難民や戦争捕虜による生口の増加に伴う人の流入といった、「倭国大乱」の影響による社会的ストレスがあったことは考え得るのではないだろうか。これまで、当遺跡は他地域との交易など人の移動のプラスの側面から評価されがちであったが、それと同時に、結核の蔓延が端的に示すようなマイナスの側面にもさらされていたはずである。

ここで述べたのは、あくまで人骨が極めて短期間に死亡した集団に由来するものという見方に立ったひとつの仮説にすぎないが、青谷上寺地遺跡から出土した人骨は、このように弥生人の習俗だけでなく、彼らを取り巻く社会情勢までも考え得る極めて重要な資料であることは間違いない。今後、関連する諸分野の研究が進展することで、これについてより確度の高い復元が可能となることが期待されよう。

（註1）出土した骨のなかには、獣骨より緻密さを欠く骨質から人骨の可能性が高い細片もあるが、本報告ではこれらは記載していない。

（註2）那須 浩郎氏の御教示による。

（註3・5・7）坂上 和弘氏の御教示による。

（註4）「鎖骨体の上面に創痕が認められるものが多い」（井上・松本前掲）とされている。

- (註6) これらの穿孔については、坂上 和弘氏による調査指導のおり、「ワーム」による食害との御教示を得ていた。そのうち、鳥取県立博物館 主幹学芸員 一澤 圭 氏、主任学芸員 田邊 佳樹 氏から骨にこのような孔を穿つ可能性があるものとして御提示いただいたカモメガイ、ニオガイ、フナクイムシ類といった貝類のうち「ワーム」に当てはまるものはフナクイムシ類であろう。
- (註8) 鶴 智之氏の御教示による。
- (註9) 二次葬を再葬と呼ぶ例もあるが、再葬は壺棺再葬を指す狭い意味で用いられることもあるため、ここでは二次葬という語を用いる。
- (註10) ただし、ハエの囲蛹殻の検出事例の多くは金属器をはじめとする古墳の副葬品に固着した状態のものであり、人骨に付着していたとしても二次葬や埋没の過程で失われることも想定される（出雲弥生の森博物館 係長 坂本 豊治 氏の御教示による）。
- (註11) 石鏃が陥入しているイノシシ肩甲骨1点のみである。頭蓋骨が破損しているものが多いのは、狩猟によるダメージの可能性はあるが確実ではない。
- (註12) こうした視点に立てば、今回確認した病変人骨で動作に不自由が生じていたとみられるものが複数含まれる点は注目される。しかし、弥生人骨を対象とした古病理学的研究は事例が少なく、現段階ではこのような症例が他の集団に比べ多いかどうかの判断は難しい。

謝辞

人骨の観察にあたっては国立科学博物館人類研究部 人類史研究グループ グループ長 坂上 和弘 氏の御指導を得た。氏の人体に関する圧倒的な知識量と法医学も修めた卓越した観察眼には、ただ驚かされるばかりであり、特に年齢区分、受傷痕、病変等の記載はこの御指導なしには不可能であった。本稿における事実の誤認があるとすれば、それは全て筆者である門脇の責によるものである。岡山理科大学 准教授 那須 浩郎 氏には出土雑穀ブロックの同定と顕微鏡写真の提供を賜った。供献された可能性のある脱穀された状態の粟が形態が明らかになった意義は大きいと考える。鳥取県立博物館 主任学芸員 鶴 智之 氏には昆虫遺体の同定と顕微鏡写真の提供を賜った。これまで青谷上寺地遺跡の報告では昆虫遺体の記載は行われていなかったが、資料の形成過程や古環境の解明に資する様々な可能性を秘めた資料であることが示された。1次調査出土人骨の取り上げ、観察、分析をされた鳥取大学 名誉教授 井上 貴史 氏には人骨の出土状況をご覧いただいて、本調査に有益な御教示を頂いた。岡山大学 教授 清家 章 氏には、人骨群の形成過程の解釈に関する事例の御紹介を頂いた。末筆ながら深く感謝申し上げたい。

参考文献

- 石橋 紘二 2019 「猪目洞窟遺跡の人骨」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第7集
- 出雲弥生の森博物館 2023 『ハエのさなぎから探る古代の葬式パンフレット』
- 伊波 普猷 1927 「南東古代の葬制」『民族』
- 井上 貴史・松本 充香 2002 「青谷上寺地遺跡から検出された人骨」『青谷上寺地遺跡4』第2分冊
- 岡崎 健治 2018 「結核と社会」『季刊 考古学』第143号
- 岡島 秀治・荒谷 邦雄編 2012 『日本産コガネムシ上科標準図巻』学研プラス
- 篠田 謙一・神澤 秀明・角田 恒雄・安達 登 2020 「鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土弥生後期人骨のDNA分析」『国土歴史民俗博物館研究報告』第219集
- 篠田 謙一・神澤 秀明・坂上 和弘 2021 「青谷上寺地出土人骨から何が見えてきたのか」『とっとり弥生の王国

2021 Autumn』

清家 章・濱田 竜彦 2023 「海辺の埋葬遺跡における特異な埋葬属性と交流 和歌山県磯間岩陰遺跡と鳥取県青谷上寺地遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 242 集

坂上 和弘 2018 「人骨に見られる人為損傷」『季刊 考古学』第 143 号、吉川弘文館

坂上 和弘 2024 「椎骨の骨端癒合状況を用いた年齢推定法の予備的研究」『国立科学博物館研究報告 D 類 (人類学)』第 50 巻

佐宗 亜衣子・鈿持 輝久・諏訪 元 2008 「大浦山洞穴の弥生時代人骨」『横須賀考古学会年報』No.42

澤田 純明 2018 「ストレスマーカーから探る過去の人々の健康状態」『季刊 考古学』第 143 号、吉川弘文館

鈴木 尚 1997 「大浦山洞穴の弥生人骨、とくにその人為的損傷について」『大浦山洞穴』

須藤 隆編 1995 『縄文時代晩期貝塚の研究 2 中沢目貝塚Ⅱ』

高田 健一 2020 「特集 3 倭人のつながり」『とっとり弥生の王国 2020 Spring 倭人のつながり』

瀧上 舞 2024 「最先端科学が解き明かす青谷上寺地遺跡の人びとの生活」『とっとり弥生の王国 2024 Spring 特集 続々・倭人の真実 - 見えてきた青谷上寺地遺跡の人びと - 』

谷畑 美帆・鈴木 隆雄 2004 『考古学のための古人骨調査マニュアル』学生社

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 2014 『土井ヶ浜遺跡 第 1 次～ 12 次発掘調査報告書』

富山県埋蔵文化財センター 2020 『令和 2 年度特別展図録 BONE 骨—貝塚で知る生命の証—』

中田 太造 1971 「「殯」・(もがり)における民俗学的考察」『近畿民俗』第 54 号

藤井 整 2001 「近畿地方の弥生土器棺墓」『古代文化』第 56 号第 3 号

濱田 竜彦・坂本 稔・瀧上 舞 2021 「鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土弥生時代中・後期人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 219 集

濱田 竜彦 2021 「青谷上寺地遺跡 SD38 出土弥生時代後期人骨群の年代に関する検討—人骨群の形成時期と期間について—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 229 集

濱田 竜彦 2024 「弥生時代後期の青谷上寺地遺跡に集いし人々」『とっとり弥生の王国 2024 Spring 特集 続々・倭人の真実 - 見えてきた青谷上寺地遺跡の人びと - 』

春成 秀爾 1993 「弥生時代の再葬制」『国立歴史民俗博物館研究報告』49

福岡市教育委員会 2001 『西新町遺跡 7—第 10 次調査報告書—』

田中 良之 2008 「断体儀礼考」『九州と東アジアの考古学 上』

森藤 徳子 2020 「第 1 節 妻木晩田遺跡における墳丘墓群の変遷と評価」『史跡妻木晩田遺跡松尾頭墳丘墓群発掘調査報告書—第 33・34 次発掘調査、墳丘墓群総括報告—』

和田 萃 1995 「殯の基礎的考察」『古代日本の儀礼と祭祀・信仰』上、橘書房

Cornwall,I.W.1974.Bones for the Archaeologist.J.M.Dent & Sons Ltd.London.

D.Katz and J.M.Suchey.1986.Age determination of the male os pubis.American Journal of Physical Anthoropology

第45-1表 出土人骨一覧(1)

掲載番号	取上番号	遺構	層位	部位	部分	左右	分類	受傷痕	病変等	備考
HB1	1174	-	V-4層	距骨	一部破損	R	-	-	-	
HB2	220	-	V-4層	舟状骨 (足根骨)	一部破損	L	-	-	-	
HB3	219	-	V-4層	I2(上顎)	完形	L	-	-	-	
HB4	456	-	VI層	頸椎	関節突起細片	M	不明	-	-	
HB5	252	-	VI層上面	第1中足骨	遠位~骨幹	R	成人	-	-	
HB6	1273	-	VI-2層	第4中足骨	近位端	L	成人	-	-	
HB7	1312	-	VI-2層	胸椎	椎弓	M	不明	-	-	
HB8	373	-	VI層上面	M1(下顎)	一部破損	L	-	-	-	
HB9	1918	23溝	埋土	上肢基節骨	遠位~骨幹	-	-	-	-	
HB10	2033	14溝	埋土	側頭骨	右側頭骨細片	M	不明	-	-	
HB11	2232	35土坑	埋土	胸椎(上部)	一部破損	M	20代	-	-	
HB12	2358	平地建物 3SD5	埋土	下顎大白歯	細片	不明	-	-	-	
HB13	2277	平地建物 3SD3	埋土	肩甲骨	肩甲棘細片	L	不明	-	-	
HB14	1738	-	-	距骨	一部破損	R	-	○	-	南側溝。内側縁削切。舟状骨との関節部削切?
HB15	2216	41土坑	埋土	肋骨	頭付近	L	-	○	-	
HB16	1767	SD38-A	埋土	頸椎(上部)	一部破損	M	20代	-	-	
HB17	1767	SD38-A	埋土	頸椎	椎体	M	不明	-	-	
HB18	873	SD38-A	埋土	頭蓋骨	後頭骨	M	不明	-	-	
HB19	896	SD38-A	埋土	腰椎	椎弓	M	不明	-	-	
HB20	1007	SD38-A	埋土	大腿骨	遠位端	L	成人	-	-	細片
HB21	2318	SD38-A	埋土	腰椎	一部破損	M	20代	-	-	
HB22	2316	SD38-A	埋土	大腿骨	遠位端	L	不明	-	-	食肉目かみ痕。細片
HB23	2341	SD38-A	埋土	上腕骨	遠位~骨幹	L	成人	-	-	
HB24	2363	SD38-A	埋土	第1中足骨	完形	L	成人	○	-	遠位端下方に切創
HB25	2363	SD38-A	埋土	下肢 第1基節骨	完形	L	-	-	-	
HB26	2368	SD38-A	埋土	第2中足骨	近位~骨幹	L	成人	-	-	同一個体
HB27	2368	SD38-A	埋土	第3中足骨	完形	L	成人	-	-	
HB28	2368	SD38-A	埋土	第4中足骨	骨幹	L	成人	-	-	
HB29	2350	SD38-A	埋土	第4中足骨	近位~骨幹	R	成人	-	-	
HB30	2365	SD38-A	埋土	上腕骨	骨幹	L	10歳以前	△	-	
HB31	2348	SD38-A	埋土	胸椎	一部破損	M	30代以上	-	-	ワームによる穿孔
HB32	2328	SD38-A	埋土	胸椎(上部)	一部破損	M	30代以上	-	○	黄色靱帯骨化症
HB33	2325	SD38-A	埋土	胸椎	椎弓細片	M	不明	○	-	横断
HB34	1713	SD38-A	埋土	第1中足骨	完形	R	成人	-	○	跪座小面形成
HB35	1830	-	VII層	I2(上顎)	一部破損	R	-	-	-	
HB36	2020	-	VII層	踵骨	関節部付近	L	成人	△	-	切断?
HB37	2447	-	VII層	第4中手骨	近位~骨幹	L	成人	△	○	近位端切断?陳旧骨折
HB38	2418	-	VII層	腰椎(上部)	一部破損	M	20代	-	-	
HB39	2429	-	VII層	胸骨	胸骨柄細片	M	-	○	-	切断
HB40	2424	-	VII層	胸骨	胸骨柄	M	-	○	-	切創+切断?
HB41	1887	-	VII層	M3(下顎)	歯冠部	L	-	-	-	
HB42	2431	-	VII層	胸椎(下部)	一部破損	M	20代	○	-	下面椎弓横断
HB43	2436	-	VII層	第4中手骨	遠位~骨幹	R	成人	-	-	
HB44	1788	-	VII層	膝蓋骨	完形	R	-	○	-	前面切創
HB45	1836	SD38-B	埋土	胸椎	椎体細片	M	不明	-	-	
HB46	3034	SD38-B	埋土	肋骨	一部破損	L	-	-	-	
HB47	3567	SD38-B	埋土	大腿骨	遠位端	R	10代前半 以前	-	-	骨端未癒合、KJA30949と接合
HB48	3031	SD38-B	埋土	肋骨	細片	R	-	-	-	HB98と同一個体
HB49	3566	SD38-B	埋土	胸椎(下部)	一部破損	M	20代	-	-	
HB50	3378	SD38-B	埋土	肋骨	一部破損	L	-	○	-	
HB51	3361	SD38-B	埋土	肩甲骨	関節部付近	L	成人	-	-	
HB52	3673	SD38-B	埋土	胸椎(下部)	椎体	M	20代	-	-	
HB53	3673	SD38-B	埋土	立方骨	一部破損	R	-	-	-	
HB54	3259	SD38-B	埋土	腰椎(上部)	一部破損	M	30代以上	△	-	

第45-2表 出土人骨一覧(2)

掲載番号	取上番号	遺構	層位	部位	部分	左右	分類	受傷痕	病変等	備考
HB55	2953	SD38-B	埋土	第2中手骨	近位～骨幹	R	成人	-	-	
HB56	3671	SD38-B	埋土	胸骨	胸骨体	M	-	-	-	
HB57	2954	SD38-B	埋土	下顎骨	下顎体	M	10歳以前	○	-	M1未萌出。5歳程度
HB58	3260	SD38-B	埋土	胸椎	椎弓細片	M	不明	-	-	
HB59	3946	SD38-B	埋土	仙椎	一部破損	M	10代前半	-	-	
HB60	3674	SD38-B	埋土	距骨	一部破損	L	-	-	-	
HB61	3292	SD38-B	埋土	胸椎(上部)	一部破損	M	30代以上	-	-	HB245・246と同一個体
HB62	3866	SD38-B	埋土	頸椎(上部)	細片	M	不明	-	-	
HB63	2812	SD38-B	埋土	第1胸椎	一部破損	M	30代以上	-	-	
HB64	2806	SD38-B	埋土	胸椎(下部)	椎体細片	M	30代以上	△	-	切断?
HB65	3651	SD38-B	埋土	舟状骨 (手根骨)	完形	R	-	-	-	
HB66	2809	SD38-B	埋土	第3中足骨	近位～骨幹	L	10代前半以前	○	-	切断。遠位端未癒合
HB67	2807	SD38-B	埋土	第1肋骨	一部破損	L	-	-	-	
HB68	3679	中心域 張出部	造成土④	踵骨	一部破損	R	成人	-	-	
HB69	2293	中心域 張出部	造成土	肋骨	頭付近	L	-	-	-	南側溝
HB70	2292	中心域 張出部	造成土	頸椎(上部)	一部破損	M	不明	-	-	
HB71	2835	中心域 張出部	造成土	下顎骨	右側下顎枝細片	M	不明	-	-	
HB72	3521	中心域 張出部	造成土②	膝蓋骨	一部破損	R	-	○	-	前面下端横方向に複数の切創。
HB73	3542	中心域 張出部	造成土②	大腿骨	骨幹	R	10歳以前	-	-	
HB74	3518	中心域 張出部	造成土②	第5中足骨	近位～骨幹	R	成人?	-	-	
HB75	3568	中心域 張出部	造成土⑤	脛骨	骨幹	L	10歳以前	-	-	両骨端未癒合
HB76	3490	中心域 張出部	造成土⑤	大腿骨	骨幹	R	10歳以前	-	-	幼年
HB77	3839	中心域 張出部	造成土⑤	第2中足骨	完形	L	成人	-	-	
HB78	3840	中心域 張出部	造成土⑤	第3中手骨	遠位～骨幹	R	成人	○	-	近位端斜めに切断、遠位端横方向に削切。
HB79	3523	中心域 張出部	造成土⑤	軸椎	一部破損	M	10代後半	-	-	
HB80	2831	中心域 張出部	造成土	踵骨	一部破損	R	10歳以前	-	-	幼年
HB81	2832	中心域 張出部	造成土	第5中足骨	骨幹	R	成人	-	-	同一個体
HB82	2833	中心域 張出部	造成土	第4中足骨	近位～骨幹	R	成人	-	-	
HB83	2834	中心域 張出部	造成土	上顎犬歯	完形	L	-	-	-	
HB84	1834	-	造成土土下	M2(上顎)	歯冠部	R	-	-	-	砂層上面。歯根未形成
HB85	1835	中心域 張出部	造成土	第4中手骨	骨幹	L	10代前半以前	-	-	幼児か
HB86	4345	中心域 張出部	造成土⑤	寛骨	腸骨細片	L	10歳以前	-	-	未癒合
HB87	3752	中心域 張出部	造成土⑤	胸骨	胸骨柄	M	-	-	-	

第45-3表 出土人骨一覧(3)

掲載番号	取上番号	遺構	層位	部位	部分	左右	分類	受傷痕	病変等	備考
HB88	3573	中心域張出部	造成土①	肋骨	一部破損	L	-	-	-	
HB89	3570	中心域張出部	造成土⑤	頭蓋骨	右側頭骨細片	M	不明	-	-	
HB90	3495	中心域張出部	造成土②	I2(下顎)	完形	L	-	-	-	象牙質露出
HB91	1812	SD38	埋土	上顎犬歯	完形	L	-	-	-	象牙質露出
HB92	1114	SD38	埋土	頸椎	関節突起細片	M	不明	-	-	
HB93	1822	SD38	埋土	肋骨	細片	R	-	-	-	同一個体
HB94	1854	SD38	埋土	肋骨	頭付近	R	-	-	-	
HB95	2461	SD38	埋土	尺骨	一部破損	R	成人	-	-	
HB96	2460	SD38	埋土	距骨	一部破損	R	-	○	-	脛骨との関節面切創。下面切斷?
HB97	2462	SD38	埋土	肋骨	頭付近	L	-	-	-	
HB98	2463	SD38	埋土	肋骨	一部破損	R	-	-	-	HB48と同一個体
HB99	2464	SD38	埋土	肋骨	頭付近	R	-	-	-	
HB100	1118	SD38	埋土	腓骨	近位~骨幹	R	成人	-	-	風化
HB101	1116	SD38	埋土	胸椎	椎弓細片	M	不明	-	-	
HB102	2465	SD38	埋土	腰椎(上部)	一部破損	M	20代	-	-	同一個体
HB103	2541	SD38	埋土	腰椎(上部)	一部破損	M	20代	-	○	黄色靱帯骨化症
HB104	1133	SD38	埋土	肋骨	頭付近	R	-	-	-	
HB105	1106	-	-	腰椎	椎体	M	30代以上	-	-	
HB106	1108	SD38	埋土	M3(下顎)	一部破損	R	-	-	-	
HB107	2468	SD38	埋土	橈骨	骨幹	L	不明	-	-	
HB108	2476	SD38	埋土	第1中足骨	遠位端	L	成人	-	-	被熱黒化
HB109	2481	SD38	埋土	第5中足骨	近位~骨幹	L	成人	-	-	
HB110	2502	SD38-Cb	埋土	第5頸椎	一部破損	M	30代以上	△	-	棘突起切斷?同一個体
HB111	2504	SD38-Cb	埋土	第6頸椎	一部破損	M	30代以上	△	-	棘突起切斷?同一個体
HB112	2505	SD38-Cb	埋土	第4頸椎	一部破損	M	30代以上	△	-	棘突起切斷?同一個体
HB113	2542	SD38-Cb	埋土	第7頸椎	一部破損	M	30代以上	△	-	椎体下面切斷?同一個体
HB114	2503	SD38-Cb	埋土	第1肋骨	完形	L	-	-	-	
HB115	2500	SD38-Cb	埋土	胸椎	細片	M	不明	△	-	椎弓・横突起切斷?
HB116	2501	SD38-Cb	埋土	第1胸椎	一部破損	M	20代	-	-	
HB117	2679	SD38-Cb	埋土	上肢第1基節骨	近位~骨幹	L	-	○	-	骨軸斜めに切斷
HB118	2499	SD38-Cb	埋土	肋骨	頭付近	R	-	-	-	
HB119	2682	SD38-Cb	埋土	胸椎(下部)	一部破損	M	20代	-	-	
HB120	2681	SD38-Cb	埋土	頭蓋骨	右側頭骨細片	M	不明	-	-	
HB121	2680	SD38-Cb	埋土	頸椎(上部)	一部破損	M	不明	-	-	
HB122	2691	SD38-Cb	埋土	環椎	完形	M	20代	-	-	
HB123	2671	SD38-Cb	埋土	第2肋骨	一部破損	L	-	-	-	
HB124	2667	SD38-Cb	埋土	第2中手骨	完形	L	成人	-	-	同一個体
HB125	2668	SD38-Cb	埋土	第4中手骨	完形	L	成人	-	-	
HB126	2669	SD38-Cb	埋土	第3中手骨	完形	L	成人	-	-	
HB127	2670	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
HB128	2674	SD38-Cb	埋土	第1肋骨	一部破損	R	-	-	-	
HB129	2678	SD38-Cb	埋土	腰椎	椎弓細片	M	不明	-	-	
HB130	2677	SD38-Cb	埋土	肋骨	頭付近	R	-	-	-	
HB131	2686	SD38-Cb	埋土	第1胸椎	完形	M	30代以上	-	○	左肋骨窩亜脱臼痕。同一個体
HB132	2688	SD38-Cb	埋土	第2胸椎	完形	M	30代以上	-	○	骨棘骨折痕。同一個体
HB133	2685	SD38-Cb	埋土	第3胸椎	一部破損	M	30代以上	-	○	腹面骨棘顕著。同一個体
HB134	2676	SD38-Cb	埋土	第4胸椎	一部破損	M	30代以上	△	○	腹面骨棘顕著。同一個体
HB135	2689	SD38-Cb	埋土	第7頸椎	一部破損	M	30代以上	-	-	同一個体
HB136	2687	SD38-Cb	埋土	第2肋骨	一部破損	R	-	-	○	亜脱臼痕
HB137	2690	SD38-Cb	埋土	鎖骨	完形	L	成人	-	-	HB139とは別個体
HB138	2683	SD38-Cb	埋土	第2楔状骨	完形	L	-	-	-	
HB139	2666	SD38-Cb	埋土	鎖骨	完形	R	成人	△	-	骨幹外面縦方向切創?
HB140	2664	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
HB141	2665	SD38-Cb	埋土	肋骨	頭付近	L	-	-	-	
HB142	2662	SD38-Cb	埋土	上肢基節骨	完形	-	-	-	-	

第45-4表 出土人骨一覽(4)

掲載番号	取上番号	遺構	層位	部位	部分	左右	分類	受傷痕	病変等	備考
HB143	2479	SD38	埋土	肋骨	頭付近	L	-	-	-	
HB144	2482	SD38	埋土	胸椎	一部破損	M	20代	○	-	椎弓上面横断
HB145	2473	SD38	埋土	腰椎(下部)	一部破損	M	30代以上	-	-	
HB146	2480	SD38	埋土	頸椎	椎弓細片	M	不明	○	-	椎弓縦断
HB147	2474	SD38	埋土	胸椎(下部)	一部破損	M	30代以上?	△	-	椎体切断?
HB148	2517	SD38	埋土	軸椎	一部破損	M	20代	-	-	
HB149	2453	SD38	埋土	軸椎	齒突起細片	M	不明	-	-	
HB150	2516	SD38	埋土	頸椎(上部)	一部破損	M	不明	-	-	
HB151	2470	SD38	埋土	胸椎(下部)	椎体細片	M	30代以上	-	-	
HB152	1871	SD38	埋土	上肢基節骨	遠位~骨幹	-	-	-	-	第5基節骨(R)か
HB153	1090	SD38	埋土	脛骨	骨幹	L	不明	-	-	風化
HB154	2484	SD38	埋土	腰椎	細片	M	不明	-	-	
HB155	2646	SD38	埋土	第1中足骨	遠位端	R	成人	△	-	骨端切断?
HB156	2515	SD38	埋土	肋骨	頭付近	R	-	-	-	
HB157	2511	SD38	埋土	第1肋骨	一部破損	L	老年?	-	○	肋軟骨骨化
HB158	2455	SD38	埋土	頭蓋骨	後頭骨細片	M	不明	-	-	ラムダ縫合未癒合
HB159	2659	SD38	埋土	下顎骨	左側下顎体細片	M	10代後半	-	-	M3未萌出
HB160	2662	SD38	埋土	上肢基節骨	完形	不明	-	-	-	
HB161	3507	SD38-D	埋土	頭蓋骨	上顎骨	M	10歳以前	-	-	第2乳臼歯萌出途次。2歳程度
HB162	4093	SD38-D	埋土	上腕骨	近位端	R	10代前半以前	△	-	近位端未癒合。小児?
HB163	4092	SD38-D	埋土	尺骨	近位~骨幹	L	成人	-	-	近位被熱黒化
HB164	4134	SD38-D	埋土	上肢基節骨	遠位~骨幹	-	-	-	-	
HB165	4297	SD38-Ca	検出面	鎖骨	一部破損	L	成人	-	-	
HB166	4291	SD38-Ca	検出面	上腕骨	骨幹	R	10代前半以前	-	-	両骨端未癒合
HB167	4292	SD38-Ca	検出面	胸骨	胸骨体細片	M	-	-	-	
HB168	4293	SD38-Ca	検出面	胸椎(上部)	完形	M	10代前半以前	-	-	椎弓根癒合未完了
HB169	4289	SD38-Ca	検出面	第1中手骨	遠位~骨幹	R	10代前半以前	-	-	近位端未癒合
HB170	4286	SD38-Ca	検出面	下顎骨	右側下顎枝	M	成人	-	-	M3萌出済
HB171	4286	SD38-Ca	検出面	上顎犬歯	完形	L	-	-	-	
HB172	3943	SD38-Ca	検出面	胸椎(下部)	一部破損	M	30代以上	-	-	第12胸椎か。ワームによる穿孔
HB173	3942	SD38-Ca	検出面	上腕骨	近位端	R	10代前半以前	-	-	近位端未癒合
HB174	3941	SD38-Ca	検出面	橈骨	近位端	R	成人	-	-	
HB175	4236	SD38-Ca	検出面	肩甲骨	細片	R	成人?	-	-	
HB176	4273	SD38-Ca	検出面	胸椎(下部)	完形	M	20代	-	-	
HB177	4237	SD38-Ca	検出面	下肢第1基節骨	完形	R	-	-	-	
HB178	3939	SD38-Ca・b	埋土	第4中足骨	完形	L	成人	-	-	
HB179	4280	SD38-Ca・b	埋土	腰椎	椎弓細片	M	不明	-	-	
HB180	4413	SD38-Ca	検出面	第1中足骨	完形	L	成人	-	-	
HB181	3940	SD38-Ca	検出面	肋骨	頭付近	R	-	-	-	
HB182	4264	SD38-Ca・b	埋土	肋骨	一部破損	L	-	-	-	
HB183	4277	SD38-Ca・b	埋土	M1(上顎)	完形	R	-	-	-	
HB184	4274	SD38-Ca・b	埋土	第2中足骨	近位~骨幹	L	10代前半以前	-	-	遠位端未癒合
HB185	4275	SD38-Ca・b	埋土	頭蓋骨	右側口蓋骨細片	M	成人	-	-	M3萌出済
HB186	4275	SD38-Ca・b	埋土	M1(上顎)	完形	L	-	-	-	
HB187	4272	SD38-Ca・b	埋土	胸椎(上部)	完形	M	10代前半	-	-	
HB188	4266	SD38-Ca・b	埋土	胸椎(下部)	一部破損	M	20代	-	-	
HB189	4270	SD38-Ca・b	埋土	舟状骨(足根骨)	一部破損	L	-	-	-	

第45-5表 出土人骨一覧(5)

掲載番号	取上番号	遺構	層位	部位	部分	左右	分類	受傷痕	病変等	備考
HB190	3937	SD38-Ca・b	埋土	肋骨	頭付近	R	-	-	-	
HB191	4347	SD38-Ca	検出面	第5中足骨	近位～骨幹	R	10代前半以前	-	-	同一個体 遠位端未癒合
HB192	4412	SD38-Ca	検出面	第4中足骨	近位～骨幹	R	10代前半以前	-	-	
HB193	3362	SD38-Ca	検出面	第2肋骨	一部破損	R	-	-	-	
HB194	4262	SD38-Ca・b	埋土	仙骨	細片	M	成人	-	-	
HB195	3935	SD38-Ca・b	埋土	胸椎(上部)	一部破損	M	10代前半	-	-	
HB196	4261	SD38-Ca・b	埋土	腰椎	一部破損	M	10代後半	-	-	
HB197	4260	SD38-Ca・b	埋土	胸椎	椎弓細片	M	不明	-	-	
HB198	4257	SD38-Ca・b	埋土	第1楔状骨	完形	R	-	-	-	
HB199	4259	SD38-Ca・b	埋土	胸椎(上部)	一部破損	M	10代前半	-	-	
HB200	2657	SD38	埋土	第3中手骨	近位～骨幹	L	10代前半以前	-	-	同一個体 遠位端未癒合
HB201	4255	SD38-Ca・b	埋土	第2中手骨	完形	L	10代前半以前	-	-	
HB202	4258	SD38-Ca・b	埋土	上肢基節骨	遠位～骨幹	-	-	-	-	
HB203	3936	SD38-Ca・b	埋土	第4中手骨?	骨幹	L	成人	-	-	
HB204	4317	SD38-Ca・b	埋土	胸椎(上部)	一部破損	M	10代前半	-	-	
HB205	4254	SD38-Ca・b	埋土	第3中足骨	完形	R	成人	-	-	
HB206	4151	SD38-Ca・b	埋土	腰椎	一部破損	M	10代後半	-	-	同一個体
HB207	4252	SD38-Ca・b	埋土	腰椎	一部破損	M	10代後半	-	-	
HB208	4253	SD38-Ca・b	埋土	腰椎(下部)	一部破損	M	30代以上	-	-	
HB209	4251	SD38-Ca・b	埋土	胸椎(上部)	完形	M	20代	-	-	
HB210	4250	SD38-Ca・b	埋土	胸骨	胸骨柄	M	-	-	-	
HB211	4239	SD38-Ca・b	埋土	胸椎	椎弓細片	M	不明	△	-	椎弓切離?
HB212	3932	SD38-Ca・b	埋土	肋骨	頭付近	R	-	-	-	
HB213	4249	SD38-Ca・b	埋土	胸椎(下部)	一部破損	M	10代前半	-	-	同一個体
HB214	4396	SD38-Ca	埋土	胸椎(下部)	完形	M	10代前半	-	-	
HB215	4214	SD38-Ca	埋土	第6頸椎	一部破損	M	20代	-	-	同一個体
HB216	4246	SD38-Ca・b	埋土	第5頸椎	一部破損	M	20代	-	-	
HB217	3934	SD38-Ca	埋土	頸椎(上部)	一部破損	M	不明	-	-	
HB218	4248	SD38-Ca	埋土	立方骨	完形	R	-	-	-	
HB219	3928	SD38-Ca	埋土	第3中足骨	近位～骨幹	L	10代前半以前	-	-	遠位端未癒合
HB220	3929	SD38-Ca	埋土	膝蓋骨	一部破損	R	-	-	-	小さい
HB221	3912	SD38-Ca	埋土	胸椎(上部)	一部破損	M	20代	-	-	同一個体
HB222	3927	SD38-Ca	埋土	胸椎(上部)	完形	M	20代	-	-	
HB223	3917	SD38-Ca	埋土	寛骨	坐骨	L	10代前半	-	-	未癒合
HB224	4247	SD38-Ca	埋土	仙椎	一部破損	M	10代前半	-	-	
HB225	3923	SD38-Ca	埋土	舟状骨(足根骨)	一部破損	R	-	-	-	
HB226	4244	SD38-Ca	埋土	胸椎(上部)	一部破損	M	20代	-	-	
HB227	3924	SD38-Ca	埋土	第1肋骨	一部破損	R	-	-	-	
HB228	3930	SD38-Ca	検出面	大腿骨	骨幹	R	10代前半以前	-	-	近遠位端未癒合
HB229	3761	SD38-Ca・b	埋土	頭蓋骨	後頭骨細片	M	成人	-	-	一部外板剥落
HB230	3915	SD38-Ca	埋土	頭蓋骨	後頭骨	M	30代以前	○	○	内後頭隆起周辺に骨増殖 外面に擦裂痕
HB231	3922	SD38-Ca	埋土	胸椎(上部)	一部破損	M	10代前半	-	-	
HB232	4243	SD38-Ca	埋土	胸椎(上部)	椎体破損	M	20代	-	○	椎弓分離 背面に骨棘 脊柱間狭窄症の可能性あり
HB233	3916	SD38-Ca	埋土	頭蓋骨	右側頭骨ほか細片	M	不明	-	-	
HB234	4242	SD38-Ca	埋土	踵骨	関節部付近	R	成人	△	-	外側切創?
HB235	3921	SD38-Ca	埋土	肋骨	一部破損	L	-	-	-	
HB236	3918	SD38-Ca	埋土	距骨	完形	R	-	-	-	
HB237	3914	SD38-Ca	埋土	第1中手骨	完形	L	成人	-	-	

第45-6表 出土人骨一覧(6)

掲載番号	取上番号	遺構	層位	部位	部分	左右	分類	受傷痕	病変等	備考
HB238	3926	SD38-Ca	埋土	腰椎(上部)	完形	M	20代	-	-	
HB239	3913	SD38-Ca	埋土	頸椎(下部)	一部破損	M	不明	-	-	
HB240	4240	SD38-Ca	埋土	立方骨	完形	L	-	-	-	
HB241	3919	SD38-Ca	埋土	胸椎	椎弓細片	M	不明	-	-	
HB242	4235	SD38-Ca	検出面	大腿骨	骨幹	R	10代前半以前	-	-	両骨端未癒合
HB243	3911	SD38-Ca	埋土	第3中足骨	完形	L	成人	-	-	近位関節延長面形成
HB244	3910	SD38-Ca	埋土	腰椎(上部)	一部破損	M	20代	-	-	
HB245	4231	SD38-Ca	埋土	胸椎(上部)	一部破損	M	30代以上	-	-	HB61とあわせて同一個体
HB246	3858	SD38-Cb	埋土	胸椎(上部)	完形	M	30代以上	-	○	骨棘形成
HB247	4234	SD38-Ca	検出面	第3楔状骨	一部破損	L	-	-	-	
HB248	3908	SD38-Ca	埋土	第2胸椎	完形	M	20代	-	-	
HB249	3907	SD38-Ca	埋土	胸椎(下部)	完形	M	20代	-	-	
HB250	3909	SD38-Ca	埋土	肩甲骨	関節部付近	L	10代前半以前	-	-	鳥口突起未癒合
HB251	3904	SD38-Ca	埋土	肩甲骨	関節部付近	R	成人	-	-	
HB252	4233	SD38-Ca	検出面	立方骨	完形	L	-	-	-	
HB253	3905	SD38-Ca	埋土	環椎	細片	M	不明	-	○	上面骨腫形成
HB254	4232	SD38-Ca	検出面	上肢第1基節骨	完形	L	-	-	-	
HB255	3902	SD38-Ca	埋土	踵骨	完形	L	成人	-	-	
HB256	3903	SD38-Ca	埋土	踵骨	内側	L	成人	△	-	中央部・内側縦方向切断?
HB257	3896	SD38-Ca	埋土	肋骨	頭付近	L	-	-	-	HB61と同一個体
HB258	4226	SD38-Ca	埋土	肋骨	骨幹	L	-	-	-	
HB259	3898	SD38-Ca	埋土	胸椎	椎弓細片	M	20代	-	-	
HB260	3901	SD38-Ca	埋土	第1胸椎	完形	M	10代前半	-	-	
HB261	3899	SD38-Ca	埋土	第1楔状骨	完形	R	-	-	-	
HB262	4225	SD38-Ca	埋土	胸椎(下部)	一部破損	M	30代以上	○	-	椎弓左側削切
HB263	4227	SD38-Ca	埋土	頸椎	一部破損	M	10代後半~20代	-	-	
HB264	3897	SD38-Ca	検出面	第1中足骨	一部破損	L	成人	-	-	
HB265	3826	SD38-Ca	埋土	第2中足骨	近位~骨幹	L	10代前半以前	-	-	遠位端未癒合
HB266	3891	SD38-Ca	埋土	寛骨	坐骨	L	10歳以前	-	-	幼児
HB267	4228	SD38-Ca	埋土	胸椎(下部)	一部破損	M	20代	-	-	黄色靭帯骨化症
HB268	3884	SD38-Ca	埋土	頭蓋骨	前頭骨細片	M	不明	-	-	
HB269	4223	SD38-Ca	埋土	頸椎(上部)	一部破損	M	10歳以前	-	-	
HB270	3893	SD38-Ca	埋土	胸骨	胸骨柄細片	M	-	△	-	左側切断?
HB271	4221	SD38-Ca	埋土	第5中足骨	近位~骨幹	L	10代前半以前	-	-	遠位端未癒合
HB272	4222	SD38-Ca	埋土	踵骨	一部破損	L	成人	-	-	
HB273	3900	SD38-Ca	埋土	胸椎(上部)	完形	M	10代前半	-	-	
HB274	3895	SD38-Ca	埋土	頭蓋骨	前頭骨	M	不明	-	-	被熱黒化 剝離
HB275	3830	SD38-Ca・b	埋土	頭蓋骨	前頭骨細片	M	不明	-	-	
HB276	4218	SD38-Ca	埋土	大腿骨	遠位端	R	10代前半以前	-	-	骨端未癒合
HB277	4220	SD38-Ca	埋土	大腿骨	遠位端	R	10代前半以前	-	-	骨端未癒合
HB278	3881	SD38-Ca	埋土	距骨	完形	L	-	-	-	
HB279	3882	SD38-Ca	埋土	腰椎	椎弓細片	M	不明	-	-	
HB280	4217	SD38-Ca	埋土	腰椎(下部)	一部破損	M	20代	-	-	第5腰椎か
HB281	4219	SD38-Ca	埋土	頭蓋骨	左側口蓋骨細片	M	成人	-	-	M3萌出済
HB282	3876	SD38-Ca	埋土	大腿骨	骨頭	不明	10代前半以前	-	-	未癒合
HB283	3877	SD38-Ca	埋土	踵骨	一部破損	L	10代前半以前	-	-	骨端部未癒合
HB284	3890	SD38-Ca	埋土	肋骨	一部破損	L	-	○	-	結節付近削切

第45-7表 出土人骨一覧(7)

掲載番号	取上番号	遺構	層位	部位	部分	左右	分類	受傷痕	病変等	備考
HB285	4216	SD38-Ca	埋土	仙骨	一部破損	M	成人	-	-	
HB286	4313	SD38-Ca	埋土	寛骨	腸骨細片	R	10歳以前	-	-	
HB287	3879	SD38-Ca	埋土	立方骨	完形	L	-	-	-	
HB288	3890	SD38-Ca	埋土	肋骨	頭付近	R	-	-	-	
HB289	3875	SD38-Ca	埋土	上腕骨	近位端	L?	不明	-	-	細片
HB290	3874	SD38-Ca	埋土	第1胸椎	完形	M	20代以上	-	-	
HB291	3888	SD38-Ca	埋土	立方骨	一部破損	L	-	-	-	
HB292	3878	SD38-Ca	埋土	第4中手骨	完形	R	成人	-	-	
HB293	4211	SD38-Ca	埋土	腰椎(上部)	一部破損	M	30代以上	-	-	ワームによる穿孔
HB294	3944	SD38-Ca	検出面	胸椎片	椎弓細片	M	不明	-	-	東西トレンチ
HB295	3886	SD38-Ca	埋土	第3中手骨	完形	L	成人	-	-	
HB296	3887	SD38-Ca	埋土	第2中手骨	完形	L	成人	△	-	骨幹部横方向切創?
HB297	4212	SD38-Ca	埋土	上肢基節骨	完形	-	-	-	-	
HB298	4213	SD38-Ca	検出面	軸椎	完形	M	10代後半	-	-	
HB299	4404	SD38-Ca	埋土	第1中足骨	完形	R	成人	-	-	
HB300	4188	SD38-Ca	検出面	肩甲骨	細片	L	成人	△	-	肩甲棘切断?
HB301	4288	SD38-Ca	検出面	P2(下顎)	完形	R	-	-	-	
HB302	4402	SD38-Ca	埋土	肩甲骨	関節部付近	R	10歳以前	-	-	鳥口突起未癒合
HB303	4406	SD38-Ca	埋土	第1中手骨	完形	R	成人	-	-	
HB304	4405	SD38-Ca	埋土	環椎	細片	M	不明	-	-	
HB305	4410	SD38-Ca・b	埋土	大腿骨	骨頭	L?	10代前半以前	-	-	近位端未癒合、8歳程度か
HB306	3948	SD38-Ca	埋土	胸椎(下部)	完形	M	10代後半	-	-	同一個体
HB307	4397	SD38-Ca	埋土	胸椎(下部)	完形	M	10代後半	-	-	
HB308	3494	SD38-Ca	検出面	下顎骨		M	10代後半?	○	○	右筋突起後方に縦方向の切創、左関節突起切断、M3萌出途次、M3カリエス
HB309	4424	SD38-Ca	埋土	胸椎(上部)	椎体細片	M	不明	△	-	椎体斜めに切断?
HB310	3949	SD38-Ca	埋土	第2胸椎	一部破損	M	10代前半以前	-	-	東西トレンチ
HB311	3947	SD38-Ca	埋土	第1中足骨	遠位~骨幹	R	10代前半以前	-	-	東西トレンチ。近位端未癒合
HB312	4409	SD38-Ca	検出面	肋骨	一部破損	L	-	-	-	
HB313	4425	SD38-Ca	埋土	第2中手骨	近位~骨幹	R	10代前半以前	○	-	骨幹内側に同方向の切創多数。遠位端未癒合
HB314	4408	SD38-Ca	埋土	寛骨	一部破損	R	成人	-	-	♂
HB315	3951	SD38-Ca	埋土	寛骨	恥骨	R	10代前半以前	-	-	東西トレンチ
HB316	3950	SD38-Ca	埋土	第2胸椎	一部破損	M	30代以上	-	-	東西トレンチ
HB317	4185	SD38-Ca	埋土	環椎	一部破損	M	不明	-	-	
HB318	4285	SD38-Ca	埋土	下顎骨		M	成人	-	-	M3萌出済、♂か
HB319	4281	SD38-Ca	埋土	腰椎	椎弓細片	M	不明	-	-	
HB320	4181	SD38-Ca	埋土	第1胸椎	一部破損	M	20代	△	-	切断?
HB321	4284	SD38-Ca	埋土	肋骨	一部破損	L	-	-	-	
HB322	4184	SD38-Ca	埋土	腰椎(上部)	一部破損	M	30代以上	△	-	椎体右側切断?
HB323	3988	SD38-Ca	埋土	第1中手骨	完形	R	成人	-	-	
HB324	4178	SD38-Ca	埋土	第1楔状骨	一部破損	R	-	-	-	同一個体
HB325	4470	SD38-Cb	埋土	第2楔状骨	完形	R	-	-	-	
HB326	4180	SD38-Ca	埋土	第3中足骨	完形	L	成人	-	-	
HB327	4183	SD38-Ca	埋土	大腿骨	近位端	L?	成人	-	-	骨頭細片
HB328	3750	SD38-Ca	検出面	尾骨	一部破損	M	-	-	-	東西トレンチ
HB329	4401	SD38-Ca	埋土	踵骨	完形	R	成人	-	-	
HB330	4179	SD38-Ca	埋土	第4中手骨	完形	R	成人	-	-	
HB331	4175	SD38-Ca	埋土	肩甲骨	関節部付近	R	10歳以前	-	-	関節窩未完成
HB332	3953	SD38-Ca	埋土	頸椎(上部)	一部破損	M	不明	-	-	東西トレンチ
HB333	4177	SD38-Ca	埋土	腰椎(上部)	一部破損	M	10代後半	-	-	
HB334	4174	SD38-Ca	埋土	肩甲骨	一部破損	R	成人	-	-	
HB335	4172	SD38-Ca	埋土	肩甲骨	鳥口突起細片	R	10代前半以前	-	-	未癒合

第45-8表 出土人骨一覽(8)

掲載番号	取上番号	遺構	層位	部位	部分	左右	分類	受傷痕	病変等	備考
HB336	4171	SD38-Ca	埋土	脛骨	近位端	L	10代前半以前	-	-	骨端未癒合
HB337	4170	SD38-Ca	埋土	脛骨	近位端	L	10代前半以前	-	-	骨端未癒合
HB338	4187	SD38-Ca	検出面	上肢基節骨	完形	-	-	-	-	食肉目嚙痕。第4基節骨(L)?
HB339	4287	SD38-Ca	検出面	舟状骨(足根骨)	完形	R	-	-	-	
HB340	4169	SD38-Ca	埋土	上肢基節骨	完形	-	-	-	-	
HB341	4161	SD38-Ca	埋土	第2中足骨	近位~骨幹	R	10代前半以前	-	-	遠位端未癒合
HB342	4168	SD38-Ca	埋土	踵骨	一部破損	R	成人	△	-	外側切断?
HB343	4165	SD38-Ca	埋土	胸椎(下部)	一部破損	M	20代	-	-	第11胸椎か
HB344	4163	SD38-Ca	埋土	中手骨	骨幹	不明	10代前半以前	-	-	第4中手骨(L)? 遠位端未癒合。幼児か
HB345	4162	SD38-Ca	埋土	肋骨	一部破損	L	-	-	-	
HB346	4398	SD38-Ca	埋土	舟状骨(手根骨)	完形	L	-	-	-	
HB347	4159	SD38-Ca	埋土	中手骨	骨幹	不明	10代前半以前	-	-	第3中手骨(L)? 両骨端未癒合。幼児か
HB348	4167	SD38-Ca	埋土	大腿骨	遠位端	R	10代前半以前	-	-	骨端未癒合
HB349	4158	SD38-Ca・b	埋土	寛骨	腸骨	L	10歳以前	-	-	未癒合 小児
HB350	4399	SD38-Ca	埋土	上腕骨 or 大腿骨	近位端	不明	-	-	-	骨頭細片
HB351	4400	SD38-Ca	埋土	立方骨	完形	L	-	-	-	
HB352	4155	SD38-Ca	埋土	立方骨	完形	L	-	-	-	
HB353	4156	SD38-Ca	検出面	尺骨	近位~骨幹	R	10代前半以前	-	-	同一個体 遠位端未癒合
HB354	4157	SD38-Ca	埋土	橈骨	近位~骨幹	R	10代前半以前	-	-	
HB355	4152	SD38-Ca	埋土	距骨	一部破損	R	-	-	-	
HB356	4150	SD38-Ca	埋土	大腿骨	骨頭	不明	10代前半以前	-	-	未癒合
HB357	4149	SD38-Ca	埋土	上腕骨	近位端	R?	成人?	-	-	細片
HB358	4396	SD38-Ca	埋土	舟状骨(足根骨)	完形	R	-	-	-	
HB359	4148	SD38-Ca	埋土	腰椎(下部)	椎体	M	30代以上	△	-	椎体切断?
HB360	4147	SD38-Ca	埋土	腰椎(上部)	完形	M	10代後半	-	-	小児
HB361	4146	SD38-Ca	埋土	大腿骨	遠位端	L	10代前半以前	-	-	骨端未癒合
HB362	4417	SD38-Ca	埋土	脛骨	骨幹	R	10歳以前	-	-	
HB363	4348	SD38-Ca	検出面	肩甲骨	一部破損	L	成人	-	-	
HB364	4385	SD38-Cb	検出面	中足骨	骨幹	R?	10代前半以前	-	-	両骨端未癒合。幼年か
HB365	3965	SD38-Cb	検出面	M1(上顎)	完形	R	-	-	-	
HB366	3965	SD38-Ca・b	埋土	M2(上顎)	完形	R	-	-	-	歯根未形成。12~15歳
HB367	4384	SD38-Cb	検出面	仙椎	一部破損	M	10歳以前	-	-	幼児?
HB368	4383	SD38-Cb	埋土	第2中足骨	近位~骨幹	R	成人	-	-	同一個体
HB369	3540	SD38-Cb	埋土	第3中足骨	近位~骨幹	R	成人	-	-	
HB370	3539	SD38-Cb	埋土	第4中足骨	完形	R	成人	-	-	
HB371	3538	SD38-Cb	埋土	踵骨	一部破損	R	成人	○	-	同一個体
HB372	3541	SD38-Cb	埋土	距骨	一部破損	R	-	○	-	上面切断
HB373	3537	SD38-Cb	埋土	鎖骨	骨幹	R	成人?	-	-	
HB374	3542	SD38-Cb	埋土	上腕骨	骨幹	R	10歳以前	-	-	近位端未癒合。小児? 一部被熱黒化?
HB375	4450	SD38-Cb	埋土	踵骨	一部破損	R	成人	-	-	

第45-9表 出土人骨一覧(9)

掲載番号	取上番号	遺構	層位	部位	部分	左右	分類	受傷痕	病変等	備考
HB376	4449	SD38-Cb	埋土	上肢第3基節骨・中節骨	完形	R	-	-	○	関節癒合
HB377	4448	SD38-Cb	埋土	膝蓋骨	一部破損	L	-	-	-	
HB378	4447	SD38-Cb	埋土	第2中足骨	完形	R	成人	-	-	同一個体
HB379	4602	SD38-Cb	埋土	第3中足骨	完形	R	成人	-	-	
HB380	2684	SD38-Cb	埋土	尺骨	完形	R	成人	-	○	骨折痕
HB381	3466	SD38-Cb	埋土	橈骨	遠位~骨幹	R	成人	-	-	
HB382	3478	SD38-Cb	埋土	頸椎(上部)	完形	M	30代以上	-	-	第4頸椎か。同一個体
HB383	4511	SD38-Cb	埋土	頸椎(上部)	完形	M	30代以上	-	-	第3頸椎か。同一個体
HB384	3479	SD38-Cb	埋土	胸椎(上部)	一部破損	M	20代	-	-	
HB385	3480	SD38-Cb	埋土	第1中手骨	完形	L	成人	-	-	
HB386	2663	SD38-Cb	埋土	第3中手骨	完形	R	成人	-	-	同一個体
HB387	3468	SD38-Cb	埋土	第2中手骨	完形	R	成人	-	-	
HB388	3469	SD38-Cb	埋土	第4中手骨	完形	R	成人	-	-	
HB389	3862	SD38-Cb	埋土	第5中手骨	完形	R	成人	-	○	軽骨折
HB390	3470	SD38-Cb	埋土	上肢基節骨	完形	-	-	-	-	
HB391	3471	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
HB392	3472	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
HB393	3473	SD38-Cb	埋土	上肢末節骨	完形	-	-	-	-	
HB394	3474	SD38-Cb	埋土	上肢末節骨	完形	-	-	-	-	
HB395	3475	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	不明	-	-	-	
HB396	3467	SD38-Cb	埋土	肋骨	一部破損	L	-	-	-	
HB397	3476	SD38-Cb	埋土	舟状骨(足根骨)	完形	R	-	-	-	
HB398	3477	SD38-Cb	埋土	第1中足骨	完形	L	成人	-	-	
HB399	3861	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
HB400	3481	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
HB401	3482	SD38-Cb	埋土	小菱形骨	完形	L	-	-	-	
HB402	3483	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
HB403	3484	SD38-Cb	埋土	下肢第1基節骨	完形	L	-	-	-	
HB404	3485	SD38-Cb	埋土	豆状骨	完形	R	-	-	-	
HB405	3486	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
HB406	3859	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
HB407	3852	SD38-Cb	埋土	膝蓋骨	一部破損	L	-	-	-	
HB408	3860	SD38-Cb	埋土	月状骨	完形	L	-	-	-	
HB409	3853	SD38-Cb	埋土	距骨	一部破損	R	-	-	-	
HB410	3853	SD38-Cb	埋土	第2楔状骨	完形	L	-	-	-	
HB411	3857	SD38-Cb	埋土	第5中足骨	完形	L	成人	-	○	跪座小面形成
HB412	3856	SD38-Cb	埋土	第1中足骨	一部破損	R	成人	-	-	
HB413	3855	SD38-Cb	埋土	距骨	完形	L	-	-	-	
HB414	3851	SD38-Cb	埋土	第4中足骨	完形	L	成人	-	-	
HB415	3854	SD38-Cb	埋土	上肢基節骨	完形	-	-	-	-	
HB416	3850	SD38-Cb	埋土	第2中足骨	完形	L	成人	-	-	
HB417	3848	SD38-Cb	埋土	立方骨	完形	R	-	-	-	
HB418	3849	SD38-Cb	埋土	腰椎(上部)	一部破損	M	20代	-	-	
HB419	3863	SD38-Cb	埋土	第4中足骨	一部破損	R	成人	-	-	
HB420	3845	SD38-Cb	埋土	上肢第1基節骨	完形	R	-	-	-	
HB421	4446	SD38-Cb	埋土	第5中足骨	完形	R	成人	-	-	跪座小面形成
HB422	4548	SD38-Cb	埋土	肋骨	一部破損	L	-	-	-	
HB423	4601	SD38-Cb	埋土	頸椎	一部破損	M	20代	-	-	
HB424	4445	SD38-Cb	埋土	第12胸椎	完形	M	20代	○	-	椎体腹面左側切創
HB425	4597	SD38-Cb	埋土	下肢第1基節骨	完形	L	-	-	-	
HB426	4598	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
HB427	3889	SD38-Ca	埋土	第12胸椎	完形	M	20代	○	-	同一個体。椎体右側に切創
HB428	4528	SD38-Cb	埋土	第1腰椎	完形	M	20代	-	○	同一個体。遊離型肋骨突起
HB429	4599	SD38-Cb	埋土	第3腰椎	完形	M	20代	-	-	同一個体
HB430	3846	SD38-Cb	埋土	第2腰椎	完形	M	20代	-	-	同一個体

第45-10表 出土人骨一覧(10)

掲載番号	取上番号	遺構	層位	部位	部分	左右	分類	受傷痕	病変等	備考
HB431	4444	SD38-Cb	埋土	舟状骨 (足根骨)	完形	L	-	-	-	
HB432	4541	SD38-Cb	埋土	第2中手骨	一部破損	R	成人	-	-	同一個体
HB433	4546	SD38-Cb	埋土	第3中手骨	完形	R	成人	-	-	
HB434	4593	SD38-Cb	埋土	第4中手骨	完形	R	成人	-	-	
HB435	4595	SD38-Cb	埋土	第5中手骨	完形	R	成人	-	-	
HB436	4596	SD38-Cb	埋土	胸骨	胸骨体	M	-	-	-	
HB437	4545	SD38-Cb	埋土	踵骨	完形	R	成人	-	-	
HB438	4544	SD38-Cb	埋土	腓骨	遠位~骨幹	R	成人	-	-	
HB439	4549	SD38-Cb	埋土	第3中手骨	骨幹	L	成人	-	-	
HB440	4594	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
HB441	4539	SD38-Cb	埋土	上肢基節骨	完形	-	-	-	-	
HB442	4542	SD38-Cb	埋土	立方骨	完形	L	-	-	-	
HB443	4592	SD38-Cb	埋土	上肢基節骨	完形	-	-	-	-	
HB444	4473	SD38-Cb	埋土	環椎	完形	M	20代	-	-	同一個体
HB445	4492	SD38-Cb	埋土	軸椎	完形	M	20代	-	○	同一個体。擬関節面形成
HB446	4537	SD38-Cb	埋土	第7頸椎	一部破損	M	20代	-	○	同一個体。椎弓前面左側に突起
HB447	4574	SD38-Cb	埋土	第3頸椎	一部破損	M	20代	-	○	同一個体。擬関節面形成
HB448	4481	SD38-Cb	埋土	第5頸椎	完形	M	20代	-	-	同一個体
HB449	4486	SD38-Cb	埋土	第6頸椎	一部破損	M	20代	-	-	同一個体
HB450	4493	SD38-Cb	埋土	第4頸椎	一部破損	M	20代	-	-	同一個体
HB451	4538	SD38-Cb	埋土	環椎	上下関節窩細片	M	不明	-	-	
HB452	4535	SD38-Cb	埋土	II (上顎)	完形	R	-	-	-	象牙質露出
HB453	4527	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	不明	-	-	-	
HB454	4526	SD38-Cb	埋土	肋骨	完形	R	-	-	-	第12肋骨
HB455	4525	SD38-Cb	埋土	肋骨	完形	R	-	△	○	骨折痕
HB456	4590	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
HB457	4591	SD38-Cb	埋土	三角骨	完形	R	-	-	-	
HB458	4589	SD38-Cb	埋土	上肢末節骨	完形	-	-	-	-	
HB459	4587	SD38-Ca・b	埋土	下肢 第1基節骨	完形	R	-	-	-	
HB460	4586	SD38-Cb	埋土	肋骨	一部破損	R	-	-	-	
HB461	4588	SD38-Cb	埋土	下肢基節骨	完形	-	-	-	-	
HB462	4523	SD38-Cb	埋土	上肢基節骨	完形	-	-	-	-	
HB463	4534	SD38-Cb	埋土	第1肋骨	完形	R	-	-	-	
HB464	4522	SD38-Cb	埋土	舟状骨 (足根骨)	一部破損	R	-	-	-	
HB465	4520	SD38-Cb	埋土	鎖骨	完形	R	成人	-	-	HB486とは別個体
HB466	4521	SD38-Cb	埋土	上肢基節骨	完形	-	-	-	-	
HB467	4490	SD38-Cb	埋土	第3中足骨	完形	L	成人	-	-	H467～469同一個体。
HB468	4505	SD38-Cb	埋土	第2中足骨	完形	L	成人	-	○	
HB469	4518	SD38-Cb	埋土	第2楔状骨	完形	L	-	-	-	H468骨幹外側に擬関節状の膨らみ
HB470	4504	SD38-Cb	埋土	第3中足骨	完形	R	成人	-	-	H470～473同一個体。
HB471	4512	SD38-Cb	埋土	第5中足骨	完形	R	成人	-	○	
HB472	4517	SD38-Cb	埋土	第4中足骨	完形	R	成人	-	-	
HB473	4519	SD38-Cb	埋土	第2中足骨	完形	R	成人	-	-	
HB474	4533	SD38-Cb	埋土	肋骨	頭付近	L	-	-	-	
HB475	4585	SD38-Cb	埋土	胸椎(下部)	完形	M	20代	-	-	
HB476	4510	SD38-Cb	埋土	第3楔状骨	一部破損	R	-	-	-	
HB477	4509	SD38-Cb	埋土	胸骨	胸骨体	M	-	-	-	
HB478	4577	SD38-Cb	埋土	上肢基節骨	完形	-	-	-	-	
HB479	4496	SD38-Cb	埋土	胸骨	胸骨柄	M	-	-	-	
HB480	4513	SD38-Cb	埋土	下肢 第1基節骨	完形	R	-	-	-	
HB481	4531	SD38-Cb	埋土	胸椎	椎体	M	不明	△	-	椎体斜めに切断?
HB482	4506	SD38-Cb	埋土	肋骨	一部破損	R	-	-	-	
HB483	4497	SD38-Cb	埋土	肋骨	一部破損	L	-	-	-	

第45-11表 出土人骨一覧(11)

掲載 番号	取上 番号	遺構	層位	部位	部分	左右	分類	受傷痕	病変等	備考
HB484	4578	SD38-Cb	埋土	舟状骨 (足根骨)	完形	L	-	-	-	
HB485	4495	SD38-Cb	埋土	肋骨	一部破損	L	-	-	-	
HB486	4503	SD38-Cb	埋土	鎖骨	完形	L	成人	○	-	内側骨端未癒合。殺傷痕
HB487	4580	SD38-Cb	埋土	第1中足骨	完形	L	成人	-	-	同一個体
HB488	4579	SD38-Cb	埋土	第1楔状骨	完形	L	-	-	-	
HB489	4582	SD38-Cb	埋土	舟状骨 (手根骨)	完形	L	-	-	-	
HB490	4581	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
HB491	4494	SD38-Cb	埋土	下肢 第1基節骨	完形	L	-	-	-	
HB492	4502	SD38-Cb	埋土	下肢基節骨	完形	-	-	-	-	
HB493	4498	SD38-Cb	埋土	下肢 第1基節骨	完形	L	-	-	-	
HB494	4576	SD38-Cb	埋土	上肢基節骨	完形	不明	-	-	-	
HB495	4530	SD38-Cb	埋土	上顎犬歯	完形	R	-	-	-	エナメル質露出
HB496	4499	SD38-Cb	埋土	距骨	完形	L	-	-	-	
HB497	4575	SD38-Cb	埋土	胸椎(上部)	椎体	M	20代	-	-	
HB498	4488	SD38-Cb	埋土	胸椎(上部)	椎弓	M	不明	-	-	
HB499	4488	SD38-Cb	埋土	下肢基節骨	完形	-	-	-	-	
HB500	4489	SD38-Cb	埋土	第2肋骨	一部破損	L	-	-	-	
HB501	4485	SD38-Cb	埋土	肋骨	一部破損	L	-	-	-	
HB502	4529	SD38-Cb	埋土	下肢基節骨	完形	-	-	-	-	
HB503	4571	SD38-Cb	埋土	上肢基節骨	完形	不明	-	-	-	
HB504	4540	SD38-Cb	埋土	第3胸椎	一部破損	M	20代	-	-	HB504 ~ 525 同一個体
HB505	4547	SD38-Cb	埋土	第2胸椎	完形	M	20代	-	-	背面骨棘形成
HB506	4475	SD38-Cb	埋土	第9胸椎	一部破損	M	20代	-	-	
HB507	4532	SD38-Cb	埋土	第4胸椎	椎弓	M	20代	-	-	
HB508	4514	SD38-Cb	埋土	第1胸椎	完形	M	20代	-	-	背面骨棘
HB509	4483	SD38-Cb	埋土	第5胸椎	一部破損	M	20代	-	-	
HB510	4476	SD38-Cb	埋土	第7胸椎	一部破損	M	20代	-	-	
HB511	4484	SD38-Ca・b	埋土	第6胸椎	完形	M	20代	-	-	
HB512	4600	SD38-Cb	埋土	第8胸椎	一部破損	M	20代	-	-	黄色靱帯骨化
HB513	4443	SD38-Ca・b	埋土	第10胸椎	一部破損	M	20代	-	-	
HB514	4536	SD38-Ca・b	埋土	第12胸椎	完形	M	20代	-	-	
HB515	4524	SD38-Ca・b	埋土	第11胸椎	一部破損	M	20代	-	-	
HB516	4491	SD38-Ca・b	埋土	第5頸椎	一部破損	M	20代	-	-	
HB517	4583	SD38-Ca・b	埋土	第7頸椎	一部破損	M	20代	-	-	
HB518	4584	SD38-Cb	埋土	第6頸椎	一部破損	M	20代	-	-	
HB519	4469	SD38-Cb	埋土	第2腰椎	一部破損	M	20代	-	-	
HB520	4472	SD38-Cb	埋土	第4腰椎	一部破損	M	20代	-	○	腹面骨棘形成
HB521	4487	SD38-Ca・b	埋土	第3腰椎	一部破損	M	20代	-	-	
HB522	4573	SD38-Ca・b	埋土	第1腰椎	一部破損	M	30	△	-	副突起切断?
HB523	4570	SD38-Cb	埋土	仙骨	完形	M	20代	○	-	
HB524	4461	SD38-Cb	埋土	尾骨	完形	M	-	-	-	
HB525	4457	SD38-Cb	埋土	寛骨	一部破損	R	20代前半	○	○	♂ 外傷による骨増殖
HB526	4512	SD38-Cb	埋土	上肢基節骨	完形	-	-	-	-	
HB527	4572	SD38-Ca・b	埋土	胸椎(上部)	完形	M	20代	-	-	
HB528	4458	SD38-Cb	埋土	第4中手骨	一部破損	L	成人	-	-	
HB529	4474	SD38-Ca・b	埋土	肋骨	完形	L	-	-	-	
HB530	4482	SD38-Cb	埋土	上肢基節骨	完形	-	-	-	-	
HB531	4567	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
HB532	4471	SD38-Cb	埋土	肋骨	一部破損	R	-	-	-	
HB533	4569	SD38-Cb	埋土	肋骨	一部破損	R	-	-	-	
HB534	4478	SD38-Cb	埋土	第4中足骨	完形	L	-	-	-	同一個体
HB535	4560	SD38-Cb	埋土	立方骨	完形	L	-	-	-	
HB536	4459	SD38-Cb	埋土	肋骨	頭付近	R	-	○	-	被熱黒化
HB537	4460	SD38-Cb	埋土	肋骨	骨幹	R	-	-	-	
HB538	4477	SD38-Ca・b	埋土	肋骨	一部破損	R	-	-	-	
HB539	4462	SD38-Cb	埋土	第1中手骨	完形	L	成人	-	-	

第45-12表 出土人骨一覧(12)

掲載番号	取上番号	遺構	層位	部位	部分	左右	分類	受傷痕	病変等	備考
HB540	4453	SD38-Cb	埋土	有鉤骨	完形	L	-	-	-	HB540 ~ 544 同一個体
HB541	4454	SD38-Cb	埋土	第5中手骨	完形	L	成人	-	-	
HB542	4455	SD38-Cb	埋土	第4中手骨	一部破損	L	成人	-	-	
HB543	4565	SD38-Cb	埋土	第3中手骨	完形	L	成人	○	-	
HB544	4566	SD38-Cb	埋土	第2中手骨	完形	L	成人	○	-	
HB545	4429	SD38-Cb	埋土	第1中足骨	完形	R	成人	-	-	HB543・544 骨軸斜めに切創 同一個体
HB546	4468	SD38-Cb	埋土	第1楔状骨	完形	R	-	-	-	
HB547	4564	SD38-Cb	埋土	大菱形骨	完形	L	-	-	-	
HB548	4456	SD38-Cb	埋土	橈骨	完形	L	成人	-	-	
HB549	4562	SD38-Cb	埋土	舟状骨 (手根骨)	完形	L	-	-	-	
HB550	4563	SD38-Cb	埋土	月状骨	完形	L	-	-	-	
HB551	4464	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
HB552	4465	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
HB553	4466	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
HB554	4467	SD38-Cb	埋土	上肢末節骨	完形	-	-	-	-	
HB555	4561	SD38-Cb	埋土	上肢基節骨	完形	不明	-	-	-	
HB556	4463	SD38-Cb	埋土	舟状骨 (足根骨)	完形	R	-	-	-	
HB557	4451	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
HB558	4452	SD38-Cb	埋土	下肢基節骨	完形	-	-	-	-	
HB559	4438	SD38-Cb	埋土	第4中足骨	完形	L	成人	-	-	HB559 ~ 561 同一個体
HB560	4439	SD38-Cb	埋土	第3中足骨	完形	L	成人	-	-	HB560 被熱黒化
HB561	4441	SD38-Cb	埋土	第2中足骨	完形	L	成人	-	-	
HB562	4442	SD38-Cb	埋土	距骨	完形	L	-	-	-	被熱黒化
HB563	4440	SD38-Cb	埋土	第1楔状骨	完形	L	-	-	-	一部被熱黒化?
HB564	4437	SD38-Cb	埋土	第5中足骨	完形	L	成人	-	-	一部被熱黒化
HB565	4435	SD38-Cb	埋土	下肢 第1基節骨	完形	L	-	-	-	
HB566	4436	SD38-Cb	埋土	下肢基節骨	完形	-	-	-	○?	第5(R)か。骨幹部側面の膨れ
HB567	4433	SD38-Cb	埋土	踵骨	完形	R	成人	-	-	
HB568	4431	SD38-Cb	埋土	踵骨	完形	L	成人	-	-	
HB569	4434	SD38-Cb	埋土	舟状骨 (足根骨)	完形	L	-	-	-	
HB570	4559	SD38-Cb	埋土	第4中足骨	完形	R	成人	○	-	
HB571	4558	SD38-Cb	埋土	第5中足骨	完形	R	成人	-	-	
HB572	4430	SD38-Cb	埋土	立方骨	完形	R	-	-	-	
HB573	4428	SD38-Cb	埋土	第2中足骨	完形	R	成人	-	-	同一個体
HB574	4432	SD38-Cb	埋土	第3中足骨	完形	R	成人	-	-	
HB575	4557	SD38-Cb	埋土	下肢基節骨	完形	-	-	-	-	
HB576	4427	SD38-Cb	埋土	下肢 第1基節骨	完形	R	-	-	-	
HB577	4426	SD38-Cb	埋土	距骨	完形	R	-	-	-	
HB578	3829	SD38-Ca・b	埋土	胸椎	椎弓	M	不明	-	-	
HB579	3832	SD38-Ca・b	埋土	第1楔状骨	一部破損	R	-	-	-	
HB580	3818	SD38-Ca・b	埋土	立方骨	完形	L	-	-	-	
HB581	3832	SD38-Ca・b	埋土	舟状骨 (足根骨)	一部破損	L	-	△	-	外側切断?
HB582	4351	SD38-Ca・b	埋土	脛骨	遠位端	R	10代前半以前	-	-	骨端未癒合。東西トレンチ
HB583	3873	SD38-Ca	埋土	寛骨	腸骨	R	10代前半	-	-	未癒合。小児
HB584	3565	SD38-Ca・b	埋土	第1中足骨	完形	R	成人	-	-	
HB585	4034	SD38-Ca・b	埋土	第2中足骨	完形	R	10代前半以前	-	-	遠位端未癒合
HB586	4344	SD38-Ca・b	埋土	第2中足骨	近位~骨幹	L	10代前半以前	-	-	遠位端未癒合
HB587	3830	SD38-Ca・b	埋土	胸骨	胸骨柄	M	-	-	-	
HB588	3830	SD38-Ca・b	埋土	胸骨	胸骨体細片	M	-	-	-	

第45-13表 出土人骨一覧(13)

掲載番号	取上番号	遺構	層位	部位	部分	左右	分類	受傷痕	病変等	備考
HB589	3770	SD38-Ca・b	埋土	胸骨	胸骨体細片	M	-	-	-	
HB590	3766	SD38-Ca・b	埋土	頭蓋骨	右側頭骨細片	M	不明	-	-	
HB591	3818	SD38-Ca・b	埋土	頭蓋骨	前頭骨細片	M	不明	-	-	
HB592	4115	SD38-Ca・b	埋土	I2(上顎)	完形	L	-	-	-	
HB593	4115	SD38-Ca・b	埋土	I1(下顎)	完形	R	-	-	-	象牙質露出
HB594	3736	SD38-Ca・b	埋土	胸骨	一部破損	M	-	-	-	
HB595	4324	SD38-Ca・b	埋土	第1肋骨	完形	L	-	-	-	
HB596	4511	SD38-Cb	埋土	第1中手骨	完形	L	成人	-	-	
HB597	4283	SD38-Ca	検出面	上腕骨	骨幹	R	成人	-	-	
HB598	1142	-	-	軸椎	歯突起細片	M	不明	○	-	東側溝。斜めに切断
HB599	1688	-	-	第1中足骨	遠位端	R	成人	△	-	東側溝。骨端切断? 東側溝。被熱黒化
HB600	1142	-	-	下顎骨	右側下顎枝細片	M	不明	-	-	東側溝
HB601	1144	-	-	下顎骨	右側下顎枝細片	M	不明	-	-	東側溝
HB602	1715	-	-	尺骨	骨幹	L	成人	○	-	東側溝。骨幹横方向切創 南側溝。斜めに切断
HB603	187	-	-	下肢第1基節骨	一部破損	L	-	○	-	南側溝。斜めに切断
HB604	187	-	-	頭蓋骨	前頭骨細片	M	不明	-	-	南側溝。斜めに切断
HB605	2303	-	-	踵骨	一部破損	R	成人	○	-	縦方向切断
HB606	4207	-	-	胸骨	胸骨体細片	M	-	-	-	深掘トレンチ
HB607	716	SD38	埋土	上顎犬歯	細片	L	-	-	-	
HB608	4567	SD38-Cb	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
hb1	32R5	平地建物 2SD1	埋土	舟状骨(手根骨)	完形	L	-	-	-	
hb2	98R5	平地建物3 北溝	埋土	舟状骨(手根骨)	一部破損	R	-	-	-	
hb3	29R4	SD38-A	埋土	頸椎	関節突起	M	不明	-	-	
hb4	35R4	SD38-A	埋土	胸椎	椎弓細片	M	不明	-	-	
hb5	29R4	SD38-A	埋土	腰椎	椎弓	M	不明	-	-	
hb6	18R4	SD38-A	埋土	P2(上顎)	完形	R	-	-	-	象牙質露出
hb7	42R4	SD38-A	埋土	上顎犬歯	完形	R	-	-	-	象牙質露出
hb8	20R4	SD38-A	埋土	I2(上顎)	歯冠部	L	-	-	-	
hb9	26/56 袋R4	-	VII層	M1(上顎)	完形	R	-	-	-	
hb10	26/56 袋R4	-	VII層	頸椎	関節突起細片	M	不明	-	-	
hb11	126R5	-	VII層	I2(下顎)	完形	R	-	-	-	エナメル質咬、下顎
hb12	158R5	SD38-Ca・b	埋土	有鈎骨	完形	L	-	-	-	
hb13	165R5	SD38-Ca・b	埋土	舟状骨(足根骨)	一部破損	L	-	-	-	
hb14	140R5	SD38-Ca・b	埋土	下肢中節骨	完形	-	-	-	-	
hb15	140R5	SD38-Ca・b	埋土	下肢第1末節骨	完形	R	-	-	-	
hb16	167R5	SD38-Ca・b	埋土	上肢中節骨	遠位~骨幹	-	-	-	-	
hb17	167R5	SD38-Ca・b	埋土	豆状骨	完形	R	-	-	-	
hb18	161R5	SD38-Ca・b	埋土	上肢基節骨	完形	-	-	-	-	
hb19	167R5	SD38-Ca・b	埋土	第3楔状骨	細片	R	-	-	-	
hb20	143R5	SD38-Ca・b	埋土	下肢基節骨	完形	-	-	-	-	
hb21	167R5	SD38-Ca・b	埋土	上肢基節骨	一部破損	-	-	-	-	第5(R)か
hb22	167R5	SD38-Ca・b	埋土	第5中手骨	完形	R	成人	-	-	
hb23	141R5	SD38-Ca・b	埋土	豆状骨	完形	L	-	-	-	
hb24	161R5	SD38-Ca・b	埋土	下肢中節骨	完形	-	-	-	-	
hb25	143R5	SD38-Ca・b	埋土	小菱形骨	完形	L	-	-	-	
hb26	147R5	SD38-Ca・b	埋土	胸椎	細片	M	不明	-	-	
hb27	65R5	SD38-Ca・b	埋土	下肢末節骨	完形	-	-	-	-	
hb28	158R5	SD38-Ca・b	埋土	豆状骨	完形	R	-	-	-	
hb29	158R5	SD38-Ca・b	埋土	膝蓋骨	完形	R	-	-	-	

第45-14表 出土人骨一覧(14)

掲載番号	取上番号	遺構	層位	部位	部分	左右	分類	受傷痕	病変等	備考
hb30	158R5	SD38-Ca・b	埋土	上肢第1基節骨	完形	R	-	-	○?	側縁変形?
hb31	133R5	SD38-Ca・b	埋土	第2楔状骨	一部破損	R	-	-	-	
hb32	156R5	SD38-Ca・b	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	
hb33	169R5	SD38-Ca・b	埋土	大菱形骨	一部破損	R	-	-	-	
hb34	167R5	SD38-Ca・b	埋土	第2楔状骨	一部破損	R	-	-	-	
hb35	141R5	SD38-Ca・b	埋土	腰椎	細片	M	不明	-	-	
hb36	167R5	SD38-Ca・b	埋土	月状骨	完形	L	-	-	-	
hb37	166R5	SD38-Ca・b	埋土	上肢末節骨	完形	-	-	-	-	
hb38	159R5	SD38-Ca・b	埋土	上肢末節骨	完形	-	-	-	-	風化
hb39	166R5	SD38-Ca・b	埋土	下肢末節骨	完形	-	-	-	-	
hb40	166R5	SD38-Ca・b	埋土	頸椎	細片	M	不明	-	-	第4 or 5か、エンマコガネ属 上翅貼付
hb41	R5 水洗	SD38-Ca・b	埋土	尺骨	遠位端	L	10代前半 以前	-	-	未癒合
hb42	147R5	SD38-Ca・b	埋土	尺骨	遠位端細片	L	不明	-	-	
hb43	166R5	SD38-Ca・b	埋土	寛骨	座骨細片	L	10歳以前	-	-	
hb44	143R5	SD38-Ca・b	埋土	寛骨	恥骨細片	L	10代前半 以前	-	-	未癒合
hb45	167R5	SD38-Ca・b	埋土	胸椎	一部破損	M	10代前半	-	-	
hb46	149R5	SD38-Ca・b	埋土	中手骨	近位~骨幹	R	成人	-	-	風化顕著
hb47	166R5	SD38-Ca・b	埋土	第4中手骨	近位~骨幹	L	10代前半 以前	-	-	遠位端未癒合
hb48	155R5	SD38-Ca・b	埋土	上顎P2	一部破損	L	-	-	-	風化顕著
hb49	155R5	SD38-Ca・b	埋土	上顎C	完形	R	-	-	-	風化顕著
hb50	155R5	SD38-Ca・b	埋土	下肢基節骨	完形	-	-	-	-	第5(R)か
hb51	155R5	SD38-Ca・b	埋土	上顎P2	完形	R	-	-	-	
hb52	155R5	SD38-Ca・b	埋土	上肢末節骨	一部破損	-	-	-	-	風化顕著
hb53	155R5	SD38-Ca・b	埋土	上肢中節骨	完形	-	-	-	-	風化顕著
hb54	155R5	SD38-Ca・b	埋土	下肢末節骨	完形	-	-	-	-	
hb55	155R5	SD38-Ca・b	埋土	下肢中節骨	完形	-	-	-	-	
hb56	155R5	SD38-Ca・b	埋土	下肢基節骨	完形	-	-	-	-	
hb57	155R5	SD38-Ca・b	埋土	下肢基節骨	完形	-	-	-	-	第5(L)か
hb58	155R5	SD38-Ca・b	埋土	第1中手骨	完形	-	-	-	-	
hb59	9R4	SD38	埋土	上顎犬歯	完形	L	-	-	-	北側溝
hb60	3・4R4	SD38	埋土	環椎	上下関節窩細片	M	不明	-	-	
hb61	4R5	SD38	埋土	第2胸椎	一部破損	M	30代以上	△	-	棘突起切断?
hb62	4R5	SD38	埋土	第1肋骨	一部破損	R	-	-	-	
hb63	2R5	SD38	埋土	第3楔状骨	一部破損	L	-	-	-	
hb64	163R5	SD38	埋土	大菱形骨	完形	L	-	-	-	
hb65	R5 水洗	南側溝	埋土	第3中足骨	一部破損	R	成人	-	-	
hb66	10R5	-	-	第1楔状骨	完形	R	-	-	-	南側溝
hb67	4R4	-	-	P2(上顎)	完形	L	-	-	-	南側溝
hb68	-	-	排土	寛骨	座骨	R	10代前半	-	-	未癒合
hb69	-	-	排土	寛骨	座骨	R	10代前半 以前	-	-	未癒合。小児?
hb70	R6	SD38-Ca・b	埋土	月状骨	一部破損	L	-	○	-	
hb71	R6	SD38-Ca・b	埋土	軸椎	一部破損	M	-	○	-	

第2節 調査成果の評価と課題

第20次発掘調査で得られた成果について本節で総括する。本調査は東エリアを対象とした史跡等内容確認調査として実施したものであり、弥生時代後期から近世に至る土地利用の状況を確認した。特に、弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉にかけての造成と区画溝SD38を軸とする中心域東側縁辺部の変遷を確認し、各時期における中心域の構造に係る知見が得られた点は特筆される。また、検出遺構と出土遺物には、当遺跡における人間活動の特徴を、多様な側面から捉えることができるものがいくつもある。

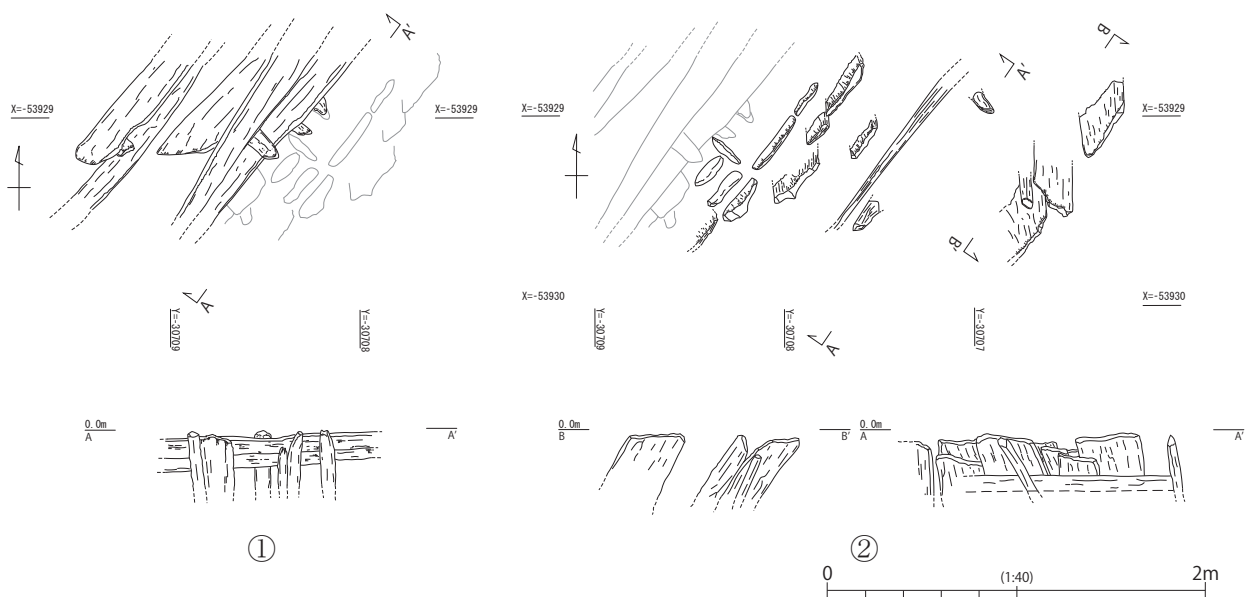
以下は、そうした成果について、既往調査の成果を援用しながら評価することとしたい。

第1項 中心域東側縁辺部の変遷と集落像のなかでの位置づけ

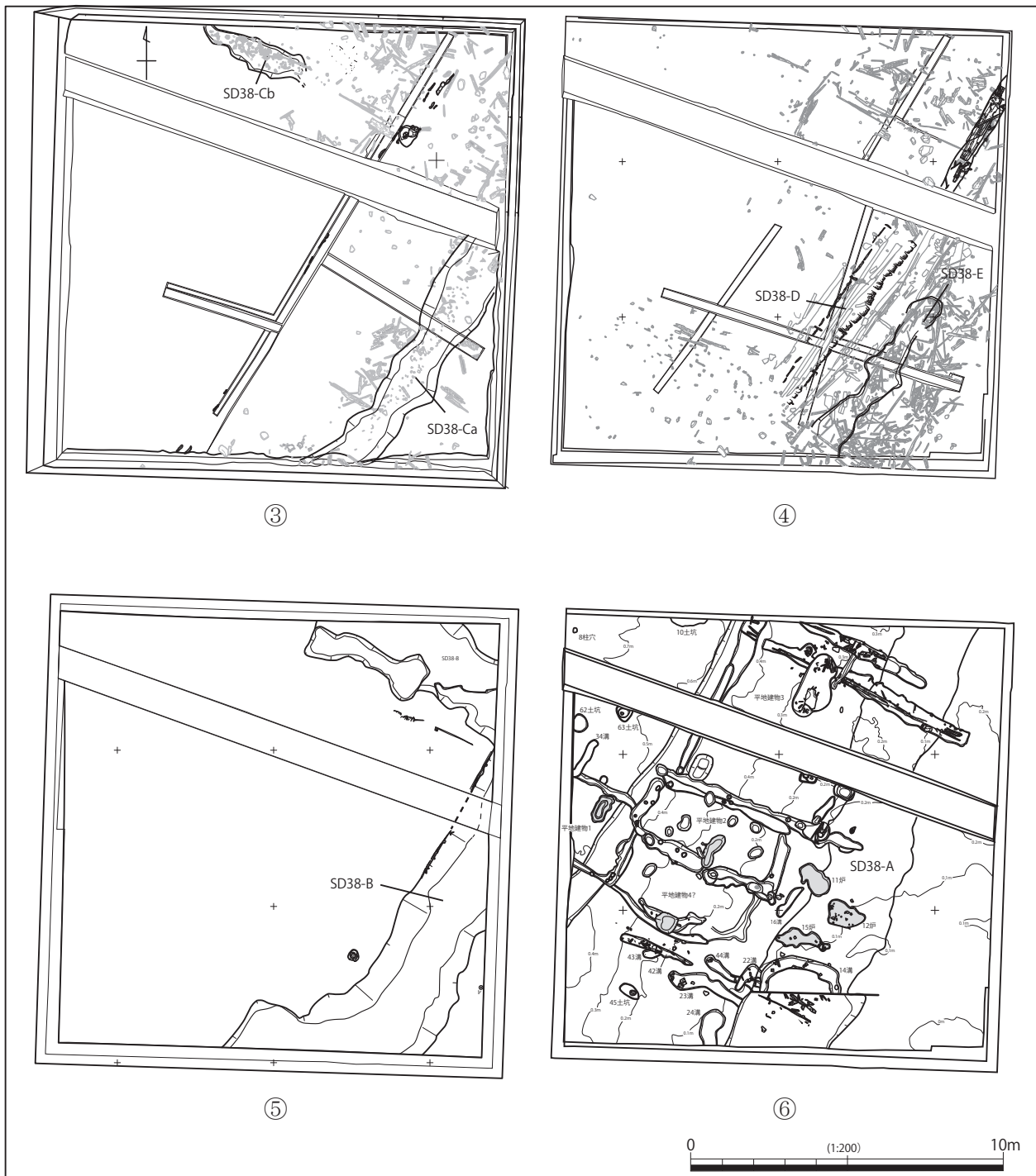
(1) SD38の変遷

今回の調査では、中心域東側縁辺部の区画溝の遺構名を、1次調査で確認されていたものの延長部分であるという想定からこれと同じSD38とし、確認した各段階をアルファベットの枝番号を付すことで管理した。このSD38について、次の①～⑥にわたる変遷を確認した(第267図)。

- ① 弥生時代後期前葉段階の西肩に横板を杭で固定する木製構造物をもつ区画溝 (SD38-F)
- ② 弥生時代後期後葉段階の西肩に矢板列を中心としながら一部に横板を杭で固定する木製構造物をもつ区画溝 (SD38-C)
- ③ SD38-Cの埋没最終段階 (SD38-Ca) とそれに直交する形で設置された、中心域側の南肩に横板を杭で固定する木製構造物をもつ小規模な区画溝 (SD38-Cb)。弥生時代後期後葉から終末期前半にかけて埋没。
- ④ 弥生時代終末期前半から後半段階の両肩を矢板列で護岸した水路 (SD38-D) と小規模な素掘りの区画溝 (SD38-E)
- ⑤ 弥生時代終末期後半の中心域側の一部の肩に横板を杭で固定する木製構造物をもつ SD38-B。



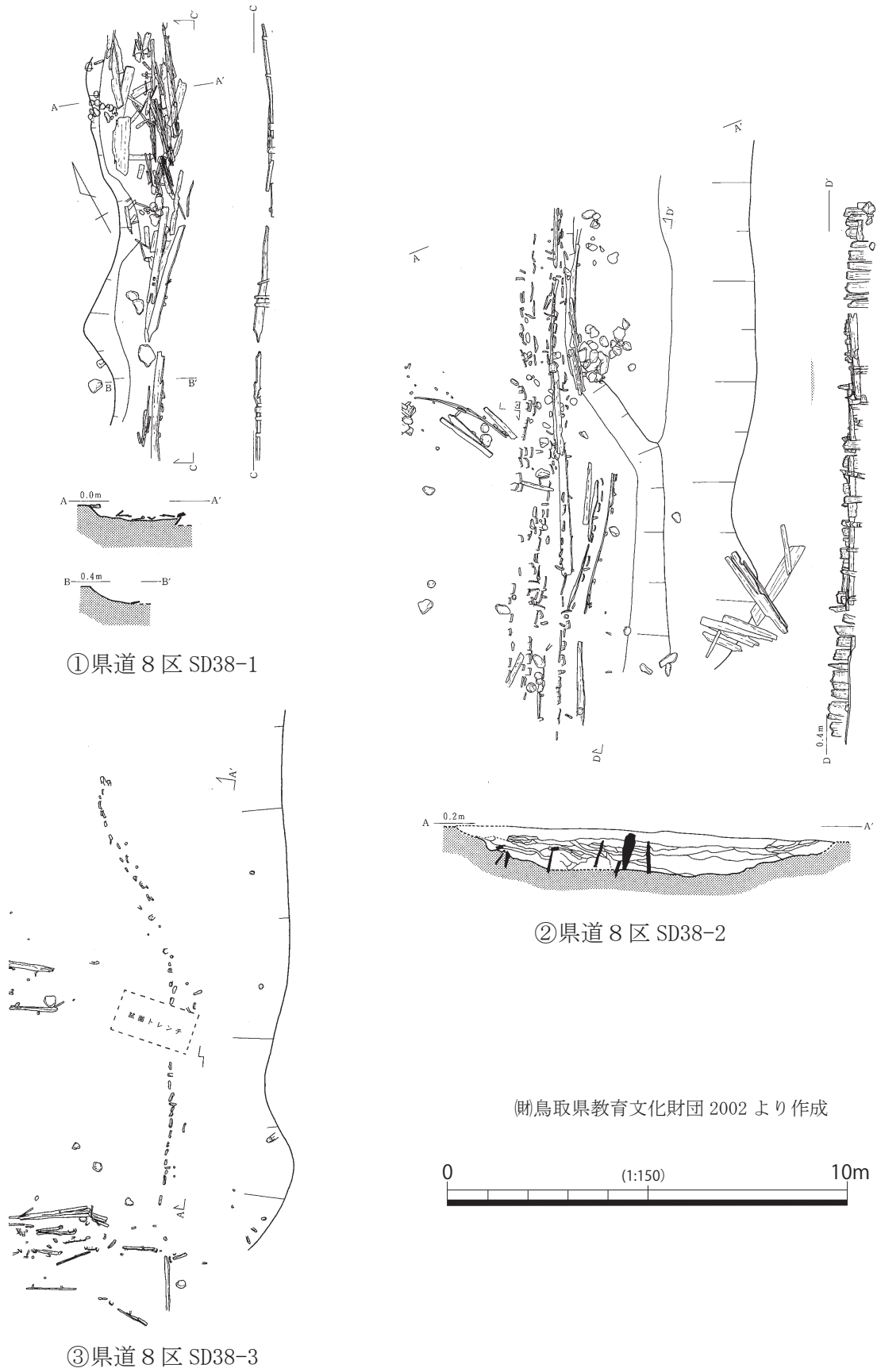
第267-1図 SD38の変遷(1)



第 267- 2 図 SD38 の変遷 (2)

⑥ 古墳時代前期初頭から前葉に、埋没した区画溝上に中心域を拡張する造成がなされる段階。この造成の最終工程が、検出した当初は区画溝として認識した SD38-A である。

①の SD38-F は、南側溝の深堀トレンチでのみ確認したものであるが、検出した木製構造物の方向性から、他の段階と同様、北東-南西方向に走向するものとみられる。③以降の段階では、中心域から東側に張り出す方形区画が造成され、水路である SD38-D を除き、⑤にいたる各段階の区画溝はその外側を巡る。またいずれの段階においても、区画溝は造成による中心域の拡張に伴って変遷しているのが特徴である。



第 268 図 1 次調査県道 8 区の SD38

第46表 各調査区におけるSD38の特徴

	遺構名	時期・出土土器	肩部の構造	備考
20次調査区	SD38-F	弥生時代後期前葉	西肩木製構造物が護岸	
	SD38-C	弥生時代後期後葉	西肩矢板列+木製構造物（土手か）	
	SD38-Ca	弥生時代後期後葉～ 終末期前半	護岸なし	人骨出土
	SD38-E	弥生時代終末期前半 ～後半	護岸なし	
	SD38-B	弥生時代終末期後半	中心域側の一部木製構造物が護岸	木器多数
県道8区	SD38-1	弥生時代後期初頭 ～前葉	西肩木製構造物が護岸	
	SD38-2	弥生時代後期後葉	西肩矢板列+木製構造物	最上層人骨出土
	SD38-3	弥生時代後期～ 古墳時代前期初頭	西肩矢板列	
国道4区	SD38-1	弥生時代中期後半	西方矢板列	
	SD38-2	弥生時代後期	西方矢板列+木製構造物	
	SD38-3	弥生時代後期～ 古墳時代前期初頭	矢板列+木製構造物	

(2) 県道8区、国道4区のSD38との対比

次に、1次調査の県道8区、国道4区で確認されたSD38各段階との対応関係について検討する（第268図、第46表）。20次調査区からそれぞれ南東に23m離れた県道8区、60m離れた国道4区では中心域東側縁辺部を区画する一連の区画溝SD38が確認されており、それぞれの調査区で変遷が捉えられている。20次調査区で確認した区画溝のうち、これらの調査区に伸びる可能性があるものとしてSD38-F、SD38-C、SD38-Bが挙げられる。

県道8区では、SD38-1～3とした3段階の変遷が確認されている。SD38-1は最も中心域側に位置する溝で、西肩に横板を杭で固定する木製構造物が並ぶもので、出土土器から時期は弥生時代後期初頭～前葉とみられる。SD38-2は東側に移った西肩に、複数の矢板列と、横板を杭で固定する木製構造物をもち、弥生時代後期中葉から後葉の土器が出土している。SD38-3は溝としてはほとんど埋没した段階のものであり、さらに東側に移った西肩に矢板列をもつ。弥生時代後期から古墳時代前期初頭の土器が出土している。

国道4区では、県道8区と同様、SD38-1～3とした3段階の変遷が確認されており、やはり西肩が東に移っていく変遷過程は共通している。一方、時期的な対応関係についてみれば、SD38-2は弥生時代後期、SD38-3は弥生時代後期～古墳時代前期初頭の土器を包含し県道8区と同様の状況であるが、SD38-1に関しては出土する土器は弥生時代中期後半のものであり時期的な齟齬がある。西肩の構造についても、国道4区のSD38-1が矢板を伴うのに対し、県道8区のSD38-1に伴うのは横板を杭で固定する木製構造物であり、この点においても同一の区画溝とみるのは慎重にならざるを得ない。SD38-2は、横板を杭で固定する木製構造物と矢板列を伴う点も共通しており、国道4区と県道

8区での対応を確実に視できる。SD38-3については、国道4区では横板を杭で固定する木製構造物と複数の矢板列を伴う一方、県道8区では矢板列を1条件うのみであるが、これについては、箇所による構造の差である可能性も考えられる。

出土土器から想定される時期と、西肩付近の構造の対応関係からみて、SD38-Fは県道8区のSD38-1に、SD38-Cは県道8区、国道4区のSD38-2に対応するとみて間違いなからう。SD38-CaとSD38-3については、弥生時代後期後葉段階の区画溝が埋没する最終段階である点、東側に西肩が移り幅が狭くなっていることは共通している。ただし、SD38-Caの埋没時期は弥生時代後期後葉から終末期前半であり、古墳時代前期初頭までの土器を包含するSD38-3とは時期的に対応しない。また、SD38-Caの上に重複するSD38-Bの時期が弥生時代終末期後半であることから、SD38-CaとSD38-3が同一の区画溝であるとは考えづらい。

なお、県道8区ではSD38の東側に近接する溝として新旧2段階が認められるSD69が検出されている。新段階のSD69-2は、比較的浅い溝であること、板材を主体とする木器が集積されていることがSD38-Bと酷似している。SD69-2は、出土土器にやや新相の土器が含まれる点、東肩に杭と横板による護岸をもつ点が異なるが、SD38-Bと同一の区画溝である可能性を指摘しておきたい。

(3) SD38の構造上の特徴

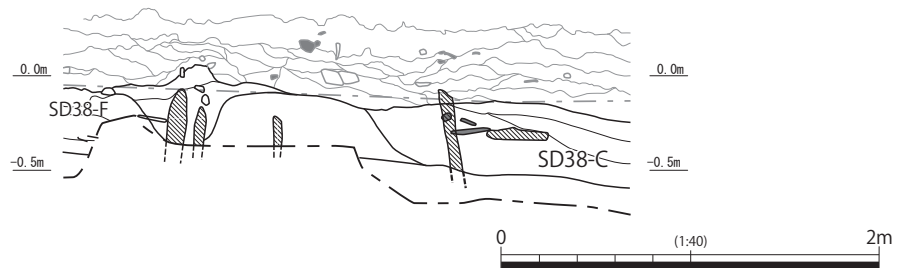
各調査区におけるSD38と、西側区画溝SD11、南側区画溝SD33の土層断面を第269図に示す。今回の調査で確認した各段階の中心域東側区画溝SD38は、明確に下層や前段階の埋土を掘削した痕跡が認めづらく、中心域側の造成によって変遷している状況が見て取れる。特に平面的な調査を行ったSD38-Bでは、中心域側が造成によってかさ上げされることで、その裾部が結果的に溝の肩になっていることを明確に捉えることができた。中心域を拡張する造成に伴う土留めのうち、最も外側のものが護岸状になる状況は、SD38の構造を捉えるうえで重要な知見とみられる。

SD38-Cについていえば、調査区南壁の土層断面から、前段階のSD38-Fの埋積が進行した段階で、横板を杭で固定する木製構造物と矢板によって補強した土手状盛土によって西肩が形成されているようにみえる(第269図-①)。今回の調査では、SD38-Cは側溝やトレンチを中心とした断片的な調査にとどまっており、護岸となった土手を平面的に検出しているわけではない。しかし、1次調査の県道8区、国道4区で確認したSD38-2の土層断面においてほぼ同様の状況が認められる点は注目される。

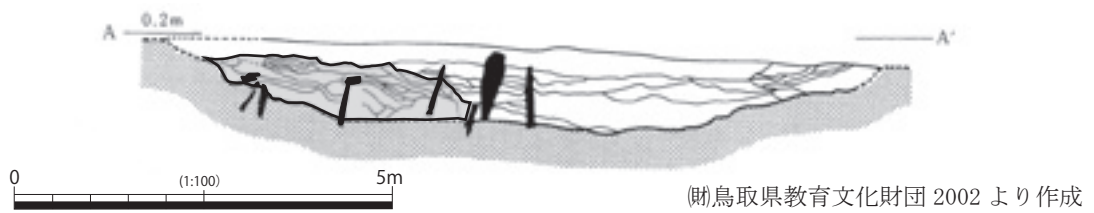
県道8区のSD38-2では、底面西よりに、矢板あるいは木製構造物が入った複数単位の土手状の堆積が認められる(第269図-②)。国道4区のSD38-2の埋土はBa層、Bb層に大別されているが、混貝土層であるBb層は、西側の立ちあがり付近のSD38-1上で、矢板が入った土手状の堆積状況を呈している(第269図-③)。これは、20次調査区南壁にみる、SD38-F上の木製構造物が入った土手状盛土の堆積状況と似通っている。

20次調査区から国道4区にかけて、弥生時代後期後葉段階のSD38について約40m離れた箇所での堆積状況が確認できるなかで、西肩に関して共通した状況が認められるのは特筆される。これまで、区画溝の肩付近の矢板列や木製構造物はそれ自体が護岸として捉えられてきたが、少なくともSD38-C、SD38-2においては土手の護岸を構築するための土留めあるいは芯材であった可能性がある。

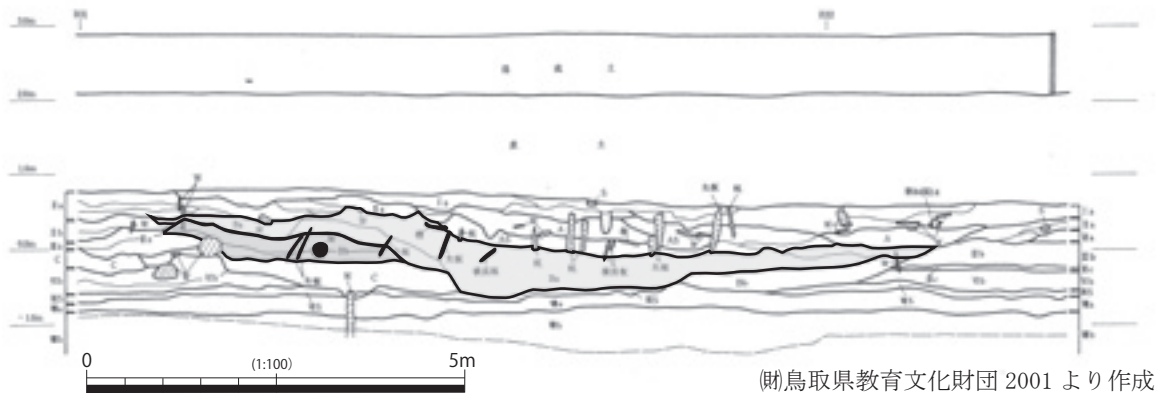
また、20次調査区の南壁断面では、弥生時代後期前葉段階のSD38-F西肩もまた、木製構造物で補強した造成土(IX層)で形成されていることが見て取れる。IX層中に特徴的に含まれるカキの貝殻片



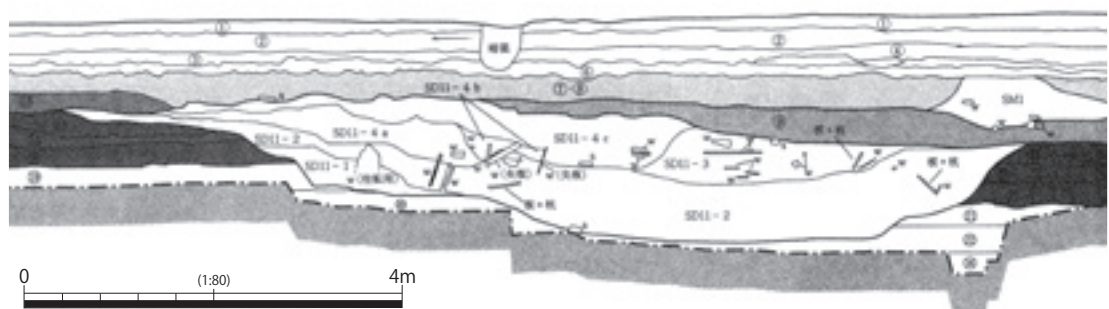
① 20次調査区 SD38-C



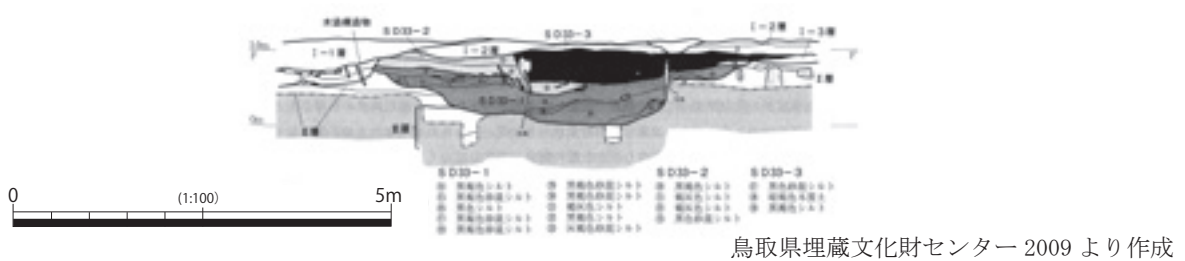
② 1次調査区道8区 SD38



③ 1次調査国道4区 SD38



④ 13次調査区 SD11 鳥取県埋蔵文化財センター 2014 より作成



⑤ 9次調査区 SD33

第269図 区画溝の断面

は、護岸となる造成を補強するために混入したものとの見方もできるだろう。

このように、SD38は、いずれの段階においても中心域側の肩（多くは西肩）を造成によって構築している可能性が高い。これは、これまで確認されている西側区画溝SD11（第269図④）、南側区画溝SD33（第269図⑤）と大きく異なる点である。SD11、SD38とも、基盤となる堆積および、前段階の埋土を大きく掘削して変遷しており、その変遷のなかに造成の介在は確認されていない。中心域側の造成によって形成され、変遷していることがSD38の特徴といえよう。

このように、中心域東側縁辺部が盛んに造成されたのは、各区画溝の検出面の標高（SD11：約1.0～1.4m、SD33：約1.0～1.5m、SD38：約0.6～1.0m）が示す通り、西側、南側縁辺部と比べ、地形的に低いためであろう。また、西側及び南側が平野部に面しているのに対し、東側が内海側に面しているといった地勢的な要因や、東側の基盤層が三角洲の堆積上にある（鳥取県埋蔵文化財センター 2011）ことによる地盤の脆弱さも影響しているかもしれない。

（4）区画溝埋没後の集落構造

本調査区では、上記のような変遷を繰り返しながら維持されてきたSD38が弥生時代終末期後半に維持されなくなり、古墳時代前期初頭～前葉には、その上に中心域を拡張する造成がなされ、平地建物群が展開したことを確認した。

これまでの調査で、確認されている当該期の中心域周辺の状況を第270図に示した。中心域の西・南・東側を区画するいずれの区画溝（SD11・33・38）も古墳時代前期初頭までに埋没することが判明している。古墳時代前期前葉の中心域西側の10次調査区、北側の18・19次調査区では、区画溝埋没後の古墳時代前期初頭～前期前葉に中心域を拡張する意図で行われた造成遺構が確認されていた。今回の調査で確認したⅦ層、古墳時代前期造成遺構、SD38-Aといった造成遺構は、これと同時期の造成が中心域東側縁辺部にも及んでいたことを裏付けるものである。県道8区の調査区南壁土層断面では、SD38埋土上に打設された木製構造物とそれを被覆する古墳時代以降とされるC層が記録されている（第271図）。このC層の複雑な堆積状況はⅦ層と類似しており、ここにも一連の造成が及んでいた可能性が高い。

この造成土上に展開した古墳時代前期前葉の建物群は、中心域北側縁辺部を対象とした19次調査区でも確認されており、中心域拡張後に同様の土地利用が広い範囲に及んでいたことを示すものである。今回の調査で確認した古墳時代前期初頭～前葉の状況は、当該期が集落構造の転換期であったことを追認するものであるといえよう。

そののちの土地利用を示す遺構として、いずれも古墳時代中期後葉～末葉に属す7土器溜り（第51図）や9溝（第54図）がある。またこれらの遺構を被覆するⅥ層に含まれる土器の下限から、中心域での人間活動の下限は古墳時代後期とみられる。これは、中心域西側縁辺部を対象とした17次調査においても、柱穴を含む古墳時代後期の遺構が確認されている（鳥取県2020）ことと整合的である。ただし、これらの遺構、遺物が弥生時代以来の集落の継続を示すものか否かについては、平地建物群との時期的な断絶もあり現段階では慎重にならざるを得ない。

（5）集落廃絶後の土地利用

中心域西側の周辺域を対象とした13～16次調査区においては、律令期の道状遺構と、それに取り

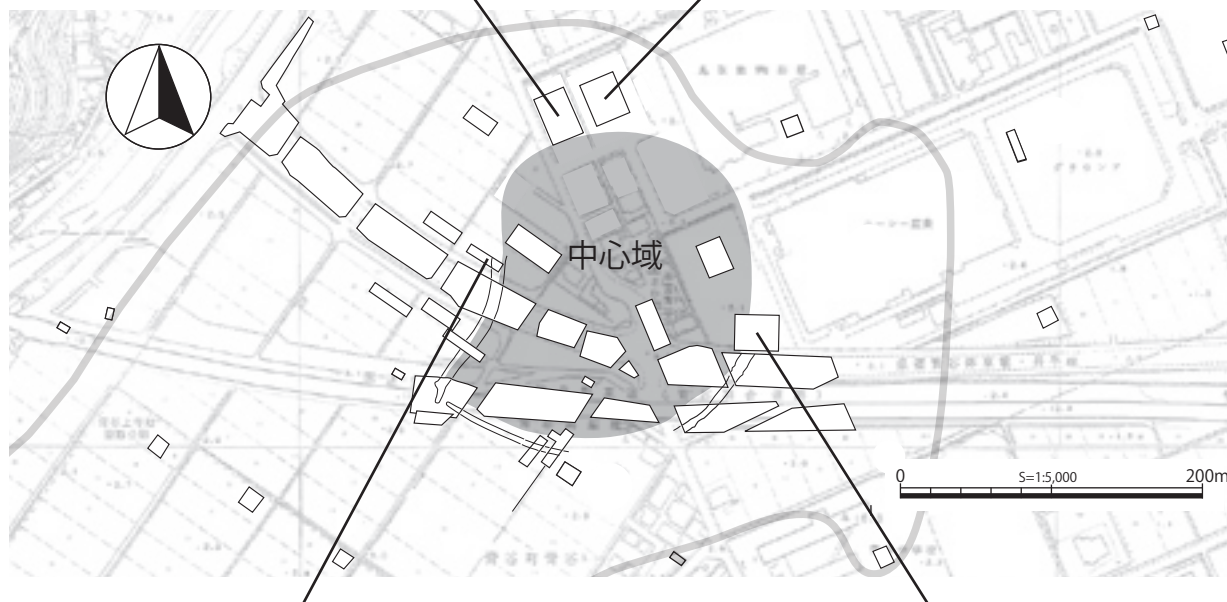
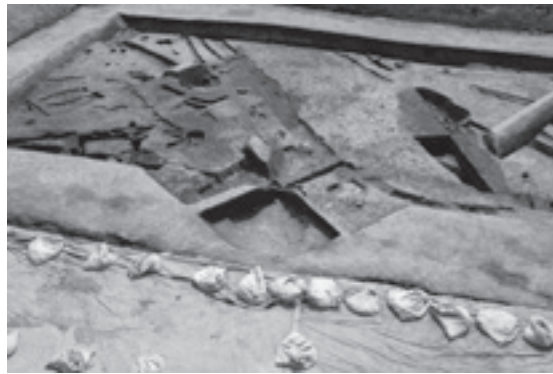
①18次調査区

木製構造物を土留めや芯材とした土手状盛土を基軸とする造成遺構を確認。



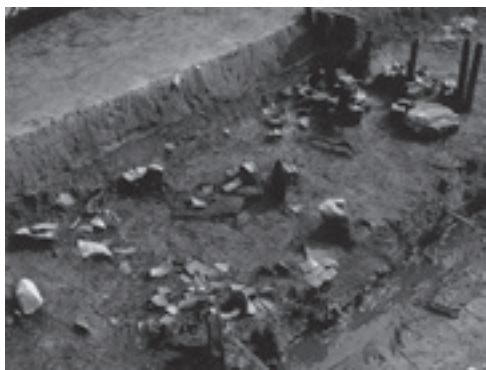
②19次調査区

白色ローム、細砂、DKPを重ねた造成土上に、布掘建物、竪穴建物、平地建物を確認。



③10次調査区

SD11 埋没後に行われた、木製構造物を土留とした造成を確認。



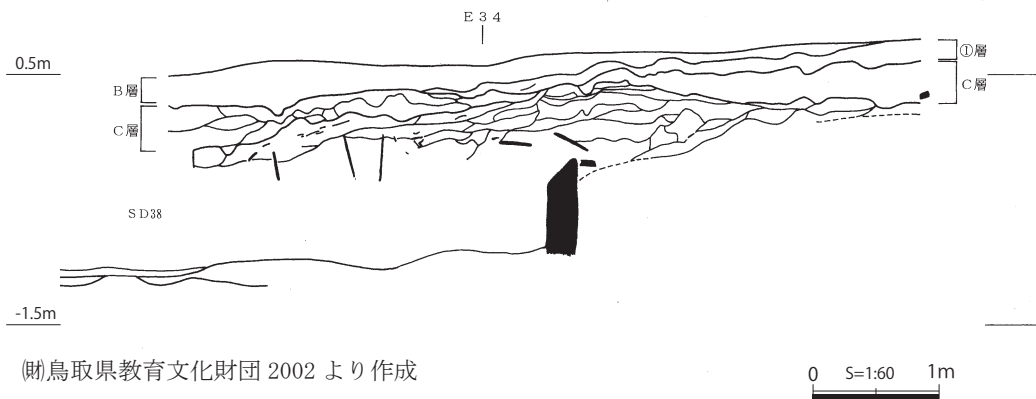
④20次調査区

SD38 埋没後の造成土上で平地建物群を中心とする遺構群を確認。



①鳥取県 2023、②鳥取県立青谷かみじち史跡公園 2025、③鳥取県埋蔵文化財センター 2010 より

第 270 図 古墳時代前期における中心域周辺の状況



第 271 図 県道 8 区調査区南壁土層断面

付く土手状遺構を確認しており、古代山陰道を基線とする条里区画が広がっていたことが確認されている。

一方で、第20次発掘調査では、当該期の遺構としては自然流路（6流路（第39図））を確認したのみであり、水田や耕作に関連する遺構は認められなかった。したがって条里区画は、古代山陰道を検出した13・14次調査区から約200m東側に位置する当調査区までは及んでおらず、当該期の堆積であるⅤ層の層相から想定される湿地状の景観が広がっていたとみられる。当調査区周辺の水田利用は水田区画を形成する道（5土手（第29図））、畔（3畦畔（第28図））の検出によって11世紀まで降ることが確認された。また13世紀の水田区画の基軸となった大畔（4土手（第20図））が、近世末まで引き継がれ、字境となっていたことが判明した。同様の字境は17次調査区においても確認されており、近世の水田区画が広い範囲で残存している可能性が考えられる。

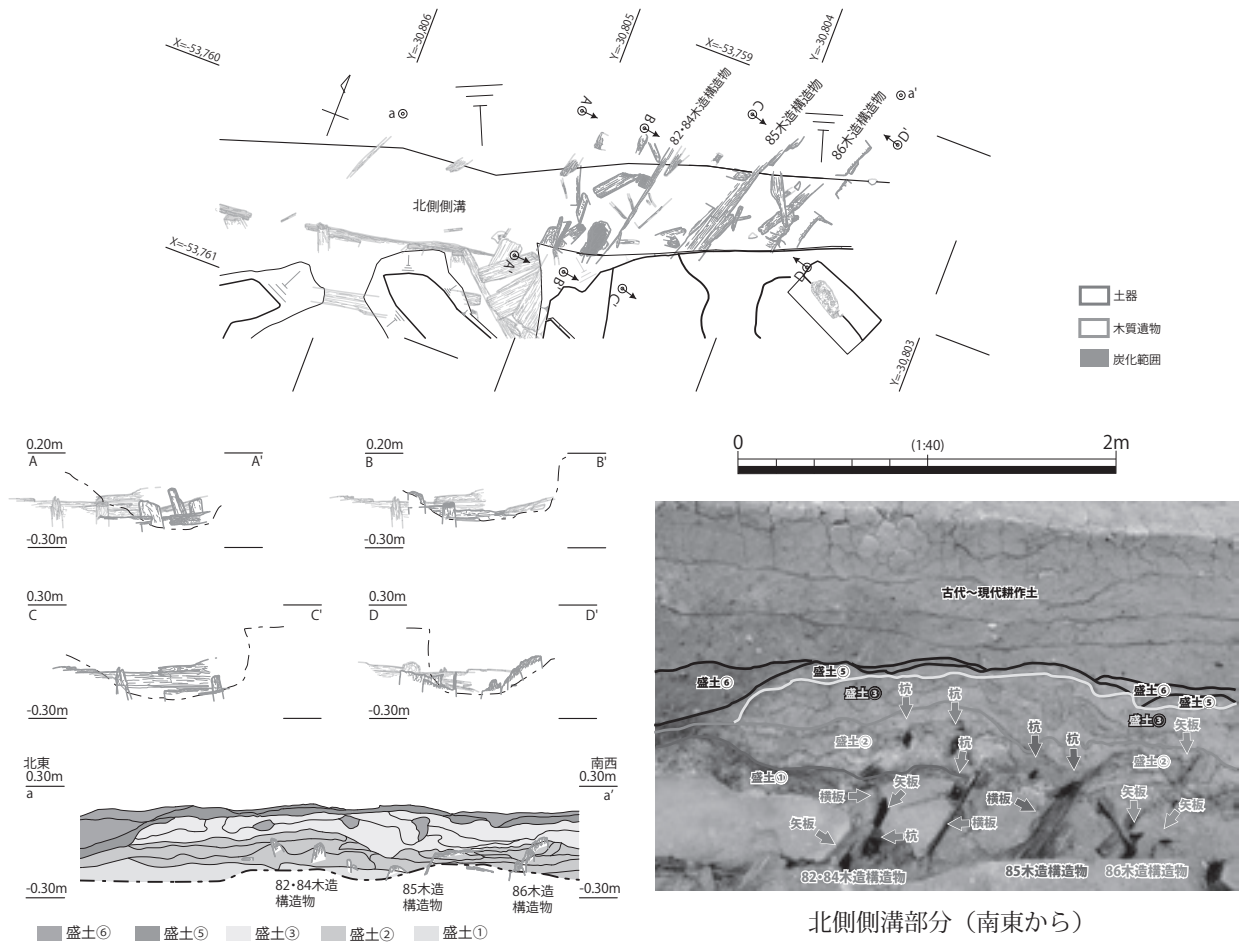
第2項 検出遺構および出土遺物

次に検出遺構、出土遺物のうち特筆されるものについて記述する。

(1) 造成遺構

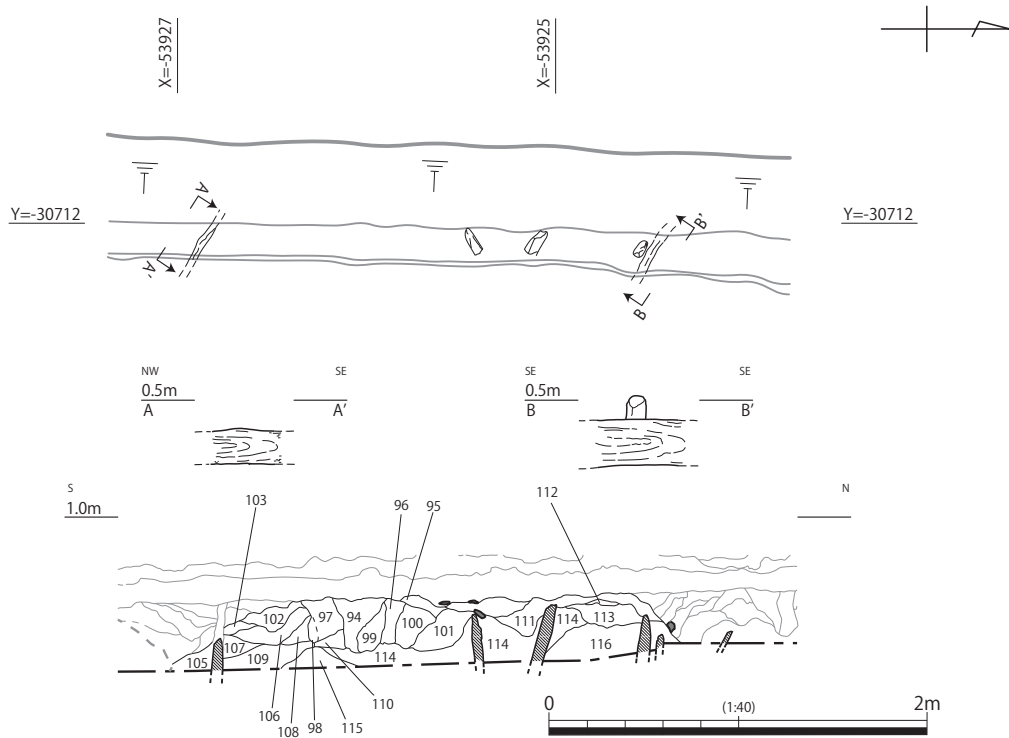
当調査区で確認した大別層のうち、古墳時代前期初頭～前葉の堆積であるⅦ層以下は、全て造成土である。最下層のⅨ層の時期は不明であるが、Ⅷ層が属す弥生時代後期前葉以降、集落が営まれている間、当調査区とその周辺では造成が繰り返されてきたことになる。基本層序以外でも、遺構として記載した古墳前期造成土やSD38-AはⅦ層と、弥生時代後期前葉造成遺構はⅧ層と一連のものである。また、中心域張出部、平地建物3の基礎も造成によって形成されている。これまで当遺跡で明確に捉えられた造成遺構はすべて古墳時代前期初頭から前葉に属するものであった。複数時期にわたる造成遺構を捉えることができた点が、本調査における重要な成果のひとつと考える。そのなかで、当遺跡における造成遺構の特徴を確認することができた。

まず、いずれの時期においても木製構造物を造成の土留めと用いている点が挙げられる。ただし、古墳時代前期前葉には、この土留めを溝内に設置する場合があったことが、平地建物3SD5（第62図）や42・44・23溝（第77・80・81図）から分かる。土留めが土圧で倒れないようにする措置であろう。また、Ⅶ層中に確認した造成遺構からは、第18次発掘調査で確認していた木製構造物で補強した土手



北側側溝部分（南東から）
門脇・大野 2020 より

①第18次発掘調査区の造成遺構（古墳時代前期前葉）



②第20次発掘調査区の造成遺構（弥生時代後期前葉）

第272図 造成遺構

状盛土を連続することで最終的に平坦な土地を造成する工法が、弥生時代後期前葉までさかのぼることを確認した（第272図）。概して地盤の脆弱な当遺跡においては普遍的な造成工法だったことが窺える。

造成土の層相については、18・19次調査区ほど顕著でないもののいずれの時期においても、本来丘陵上に堆積する火山灰を母材とする黄褐色系のブロックや、海砂とみられる淘汰のよい細砂、洪水性懸濁物質とみられる褐灰色粘質シルトが混入する、また、Ⅸ層に特徴的に含まれるカキとみられる貝殻片は、造成遺構の可能性が指摘される1次調査県道7区の「貝塚」と同様、造成の補強のために混入したものとみられる。造成土に適した母材が集落存続期間を通じて意識されていたとみられる。

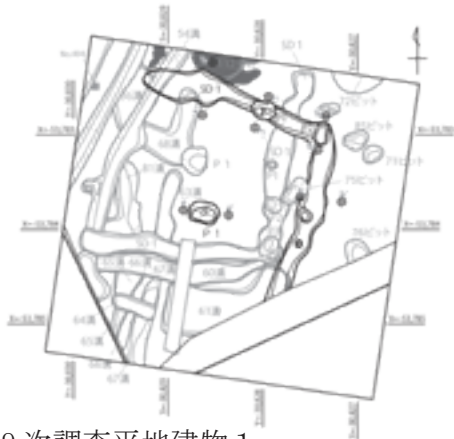
（2）平地建物跡、建築材

青谷上寺地遺跡では、6,000点を超える大量の建築材が出土していながらも、遺構としての検出例は少なく、建物の実態は不明な点が多かった。それまで竪穴建物の検出例がなく、建築材の中にも竪穴建物の部材と考えられるものが僅かであることから、当遺跡の建物の形態としては掘立柱建物あるいは平地建物が主体ではないかと想定されていた（鳥取県埋蔵文化財センター 2009）。19次発掘調査では、古墳時代前期前葉に属する竪穴建物、布掘建物、平地建物を検出した（鳥取県立青谷かみじち史跡公園2025）。特に平地建物（第273図-①・②）は同一箇所重複しており、複数回の建替が行われたとみられる。さらに今回の発掘調査では、同じく古墳時代前期前葉に属する平地建物群が検出されたことで、少なくとも中心域縁辺部においては同種の建物が主体であった可能性が高くなったといえよう。これらの平地建物は、方形に掘り込んだ溝内に柱や壁を立てる土間床の構造が共通している。しかし、壁が一部途切れ炉が外まで伸びる平地建物2（第273図-③・④）、大型で前後に壁で支える底をもつ平地建物3（第273図-⑤・⑥）の検出によって、当遺跡の平地建物にその規模や構造にはバリエーションがあることが示された。

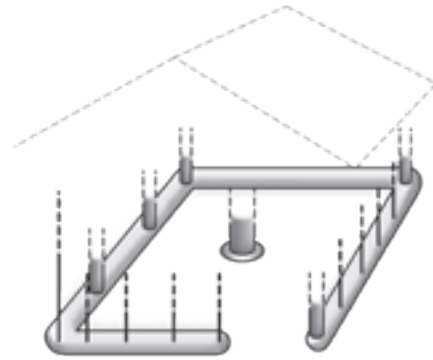
また、弥生時代終末期の造成を補強する土留めを構成する転用材としてのものを含め、多数出土した建築材には、やはり竪穴建物の部材は含まれないものの、当遺跡の建物形態について新たな知見をもたらすものがあつた（第274図）。弥生時代終末期前半～後半に属す土留め3（第110図）に転用されていた建築材W38は形態的には垂木に類似するものの、これまで当遺跡で出土した最長の角垂木KJB13813（397cm）よりはるかに長く、独立棟持柱建物（第274図-①～③）の棟木、あるいは梁行12mを超える大型建物（第274図-④）の棟押さえの可能性があったことが分かった。

弥生時代終末期後半の造成土①から出土した柱W47・48は下端付近の側面に欠込みをもつ。松原田中遺跡（鳥取市）で検出された古墳時代前期に属す布掘建物1の柱根には、やはり下端付近に地中梁を嵌め込んだと推定される欠込みが設けられている（浅川ほか 2018）。W47・48は建物遺構に伴って出土したものではなく、欠込みも松原田中遺跡のものと比べると粗雑であるため、地中梁をもつ布掘建物の柱であることを確実視できないが、19次調査で検出した布掘建物1が地中梁をもたない構造であることが確認されているため、布掘建物のバリエーションを示す可能性があるものとして注目される。

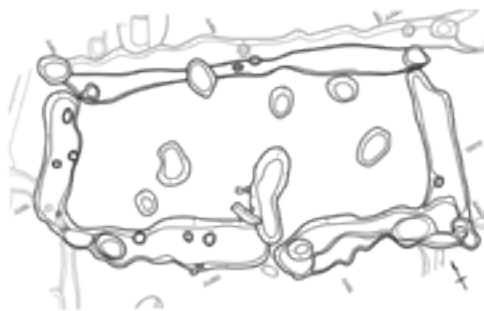
このように、今回の調査で確認した建築材には、これまで確認されてこなかった形態の建物が存在した可能性と、当遺跡における建物の多様性を示すものが含まれている点が特筆される。



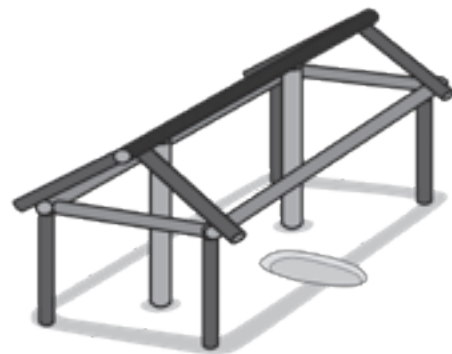
① 19次調査平地建物1



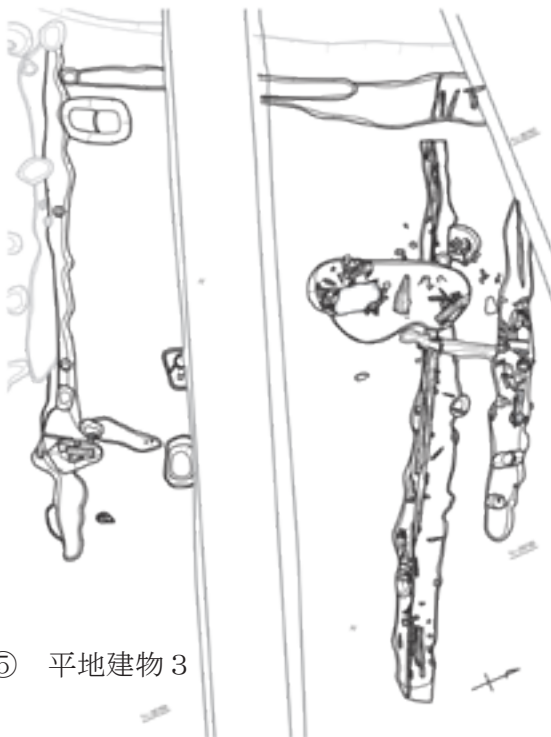
② 19次調査平地建物1復元



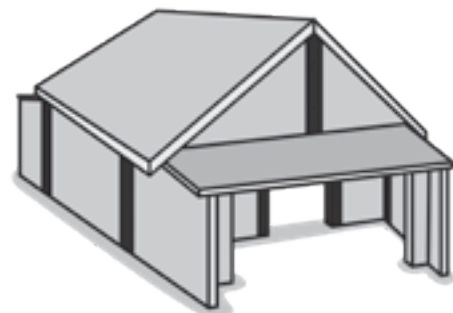
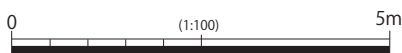
③ 平地建物2



④ 平地建物2復元



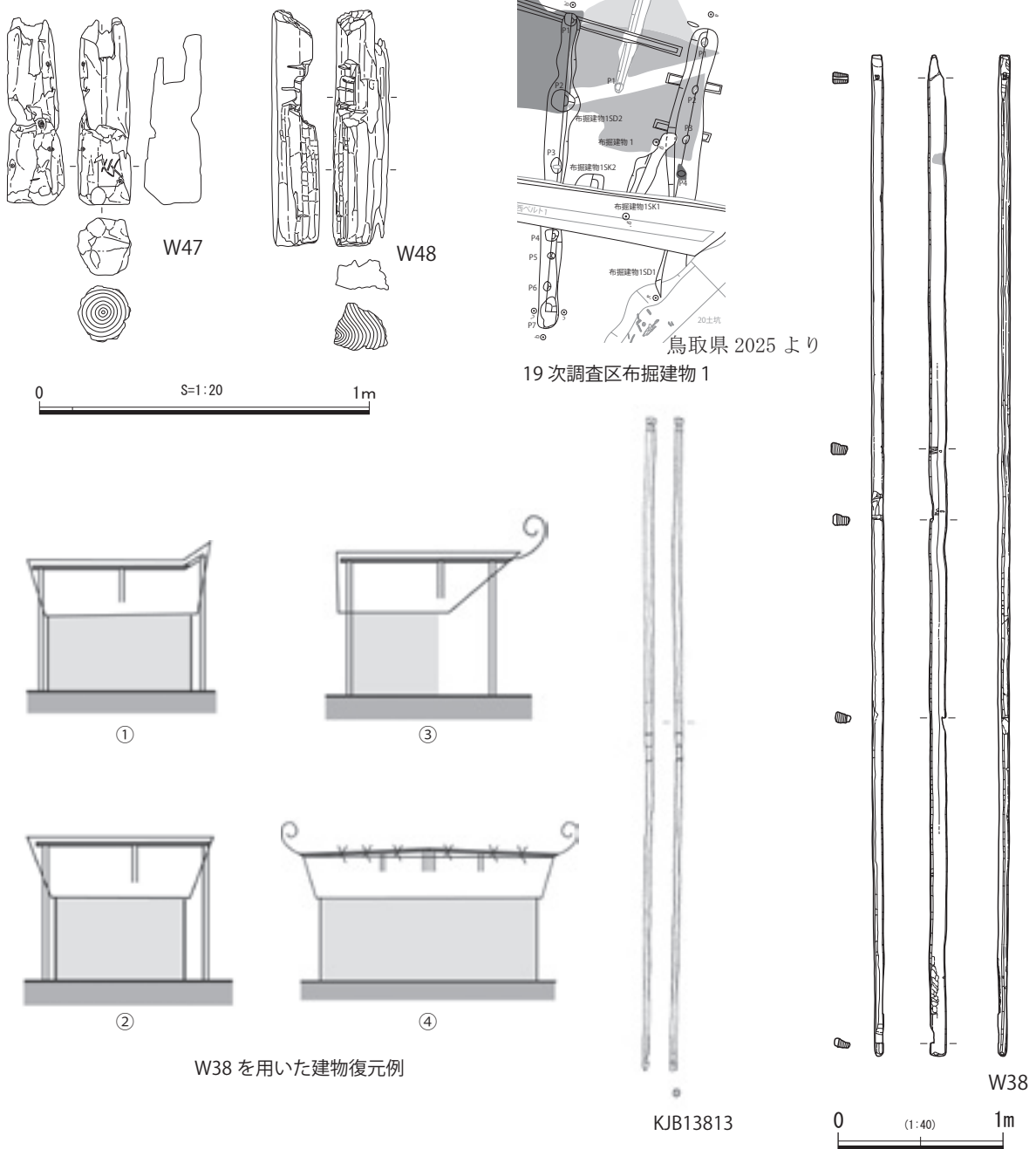
⑤ 平地建物3



⑥ 平地建物3復元

①鳥取県立青谷かみじち史跡公園 2025 より

第273図 平地建物の復元



第274図 建築材と建物の復元

(3) 精製木器

SD38-B から出土した木器の中には特筆すべき精製木器が含まれる（第275図）。不明木器W68は形態から容器の可能性が考えられるものの、全国的にみても類例がない。底面に陽刻された流水文に類する文様からも特殊な木器であることがうかがえるものであり、類例の発見や機能の解明が望まれる。杓子W74は花卉高杯の飾り耳に類似する柄をもつ。既往の発掘調査においても同様の身部をもつ杓子は出土していたものの、このような柄をもつものは初出となる。当調査区では、破損しているものの、同様の形態とみられる杓子W50が造成土②から出土しており、場の機能に関わる可能性を思わせるものである。

(4) 生業

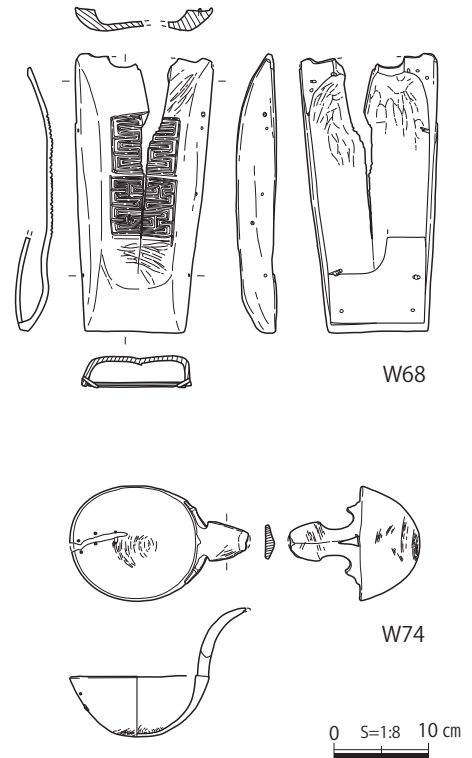
生業に関わる資料として、農具や漁労具といった人工遺物と、動植物遺存体が挙げられる。木庖丁や鍬の農具、ヤスのような漁労具ともに、基本的にこれまで当遺跡で出土してきたものと同様のものである。点数の多い農具についていえば、木庖丁を主体とする穂摘具のあり方、長辺に欠込みを設ける特徴的な田下駄の形態は、これまで出土遺物の調査研究で把握されてきた当遺跡の特徴をよく示している。

出土種実の分析では、炭化米とカラスザンショウが多数を占めるなか、アワ、キビ、オオムギ、コムギ、トウガン、メロン仲間、ヒョウタン仲間、ナス等の栽培種、豆類のダイズ属、アズキ亜属などが含まれていることが判明し、遺構としては確認していない畑作の状況の一端がうかがえる。このほかモモやスモモ、カキノキといった果樹も得られており、多様な植物栽培が行われていたことが分かった。

動物遺存体については、これまで定量的な把握に足るほどの資料数が得られていなかった古墳時代前期前葉のものが多く得られた点が特筆されるが、確認した分類群とその比率からみえる動物利用の状況は、既往調査で確認されてきた弥生時代後期を中心とした状況を追認するものといえる。これは、当遺跡における活発な動物利用を可能とした、集落を取り巻く環境が大きく変容しなかったためとみられる。また、弥生時代中期後葉以降盛んになった外洋性漁労が古墳時代前期前葉まで引き継がれたことを示している。このことは一方で、外洋に繰り出す航海技術は引き継がれていながらも、当遺跡が当該期に交易拠点としての地位を失っていった（君嶋2021）ことを示しており、その要因が社会の変容であることを裏付けている。

(5) 炭化米ブロック

SD38-B から出土した、ササ類の葉の圧痕を残す炭化米ブロックは、分析の結果、調理された米であることが確認された（第4章 第3節）。本資料は、明らかに葉で包まれている点、米同士が圧着している点がちまきに類似していることが注目される。「ちまき状炭化米塊」とされる出土例としては、チャノバタケ遺跡（石川県鹿島郡中能登町）から出土した弥生時代中期後半のものがよく知られている。全体的に二等辺三角形の平面形状に成形されているこの資料は、一部に葉の圧痕を残し、米粒の分析からもち米を蒸したものであると推定されている。SD38-B から出土した炭化米ブロックは、チャノバタケ遺跡の資料よりも葉の圧痕が明確で明らかに包んでいることが確認できる点が特筆される。少なくとも本資料が属する弥生時代終末期の山陰地方の土器には蒸し器に相当するものはないが、土器とかごを組み合わせるなどすれば食材を蒸すことは可能かもしれない。また、現在でも北陸地方や会津地方に残るちまきの調理法は本資料のような圧痕が残る形で葉で包んだ米を水で煮るものであり、実験の結果、出土資料に類似するちまきが作れること、出土資料にみるような米粒が圧着した状態になることを確認した（写真37）。



第 275 図 SD38-B 出土精製木器

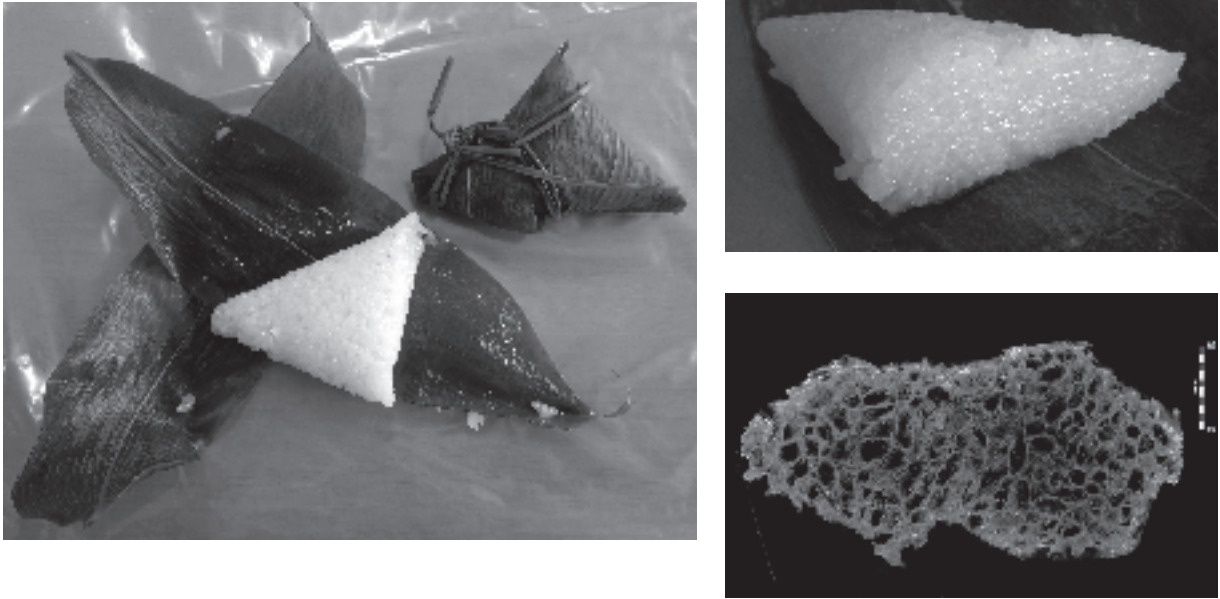


写真37 実験作製したちまきと出土炭化米ブロック断面

ただし、今回実施したイネのDNA分析（第4章 第6項）は、ちまきに適したもち米の存在の確認までには至っていない。本資料がちまきか否かの判断には、DNA分析の進展に加え、構造によっておにぎりとしまきの峻別が可能かといった検討を経たのちに判断すべきと考える。また、米粒の内部の空洞化の要因とされる長時間の加熱は、蒸す調理や、先に述べた煮る方法でのちまきの調理によるものとも思えない。どのような状況で葉脈の痕跡を明瞭に残して炭化したのかといった形成過程とあわせて検討が必要であろう。

第3項 まとめと今後の課題

これまで述べてきたように、今回の発掘調査で得られた成果には、既往の調査成果を追認するものがいくつも認められる。このことは、少なくとも史跡指定地内における集落様相や変遷の解明については、これまでの発掘調査によって一定の成果が得られていることを示しているといえよう。これに加え、本調査で出土した人骨の検討から、SD38の人骨群が当時の葬送儀礼のなかで集積されたものであることが導かれたのは前節で述べたとおりである。

史跡指定地の北半部は今後、これらの調査成果をもとに史跡公園として整備される予定である。これによって、地下の遺構の保護が図られるとともに、既に整備を終え公開している南半部とあわせ、史跡公園は今以上に青谷上寺地遺跡の調査研究成果を土台とした様々な活用事業の拠点となるはずである。その意味において、当遺跡の発掘調査はひとつの区切りを終えたといえるだろう。

しかしながら、これほど高い密度の遺構と、質・量とも豊富な出土遺物を残した拠点的な集落が、現在の史跡指定地内に納まるとは思えない。これまでの発掘調査で明確な居住域や墓域が確認されていないことからみても、人間活動の範囲は周辺の丘陵部や、内海の沿岸部、砂丘域にまで及んでいたと考えるべきであり、今後はこうしたエリアを対象とした調査を実施していくことが必要である。今後も、課題に即した発掘調査を継続していくことで、より立体的に集落像を把握できるようになり、

当地域の弥生集落の特徴を描き出すことができるだろう。

それと併せて、既往の調査成果の再検討も行うべきである。近年実施した史跡等内容確認調査では、盛んに行われた造成工事や、平地建物を主体とする建物の実態が明らかになってきている。これまで多数検出されいながら性格不明とされてきた木製構造物には造成を補強するための土留めや芯材が多く含まれていることが想定される。また、複数確認されている方形に巡る溝には平地建物の可能性があるものも見受けられる。新たな知見を踏まえた遺構の検討が、中心域の景観や利用状況を書き換えることにつながるかもしれない。1次調査で出土した大量の人骨についても、集団の構成や古病理、受傷痕の再検討などによって、より当時の社会情勢に迫る成果が得られることが期待できよう。人骨に限らず、大量の未整理、未報告資料を含めた出土遺物を対象とした研究もまた重要であることは言うまでもない。

今後、当面の間は史跡指定地内の発掘調査を行うことはないため、これまでのように耳目を集める資料が新たに出土することは少なくなるだろう。しかし、上記のような調査研究を重ね、弥生時代研究に資する成果や新たな視座を提示していくことで、青谷上寺地遺跡の価値はさらに高まり、地域の財産であり続けるのではないだろうか。

謝辞

建築材 W38 の評価にあたっては、奈良文化財研究所 室長 鈴木 智弘 氏と畿央大学 准教授 前川 歩 氏に資料を実見のうえ御指導を賜った。炭化米ブロックの評価にあたっては、鳥取短期大学地域コミュニケーション学科 准教授 板倉 一枝 氏に、ちまきに関する文献の提供をいただいた。末筆ながら深く感謝申し上げたい。

参考文献

- 浅川 滋男・宮本 正崇・中田 優人 2018 「第3節 松原田中遺跡の布掘建物と地中梁に関する復元的考察」『松原田中遺跡Ⅲ』
- 門脇 隆志・大野 哲二 2020 「I 青谷上寺地遺跡第18次発掘調査概要報告」『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報 2019』
- 君嶋 俊行 2021 「港湾集落・青谷上寺地遺跡の終焉」『古墳出現期 土器研究』第8号
- Ⓒ鳥取県教育文化財団 2001 『青谷上寺地遺跡3』
- Ⓒ鳥取県教育文化財団 2002 『青谷上寺地遺跡4』
- 鳥取県 2020 『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報 2019』
- 鳥取県 2020 『青谷上寺地遺跡 15』
- 鳥取県 2023 『青谷上寺地遺跡 16』
- 鳥取県立青谷かみじち史跡公園 2025 『青谷上寺地遺跡 17』
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2009 『青谷上寺地遺跡 10』
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2011 『青谷上寺地遺跡景観復元調査報告書』
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2010 『青谷上寺地遺跡 11』
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2014 『青谷上寺地遺跡 13』



写真図版



1 調査区南壁土層断面（北西から）



2 調査区南壁土層断面（北東から）



1 調査区西壁土層断面（南東から）



2 調査区北壁土層断面（南東から）



1 調査区東壁土層断面（北西から）



2 東西ベルト土層断面（南東から）



1 1溝調査状況（南東から）



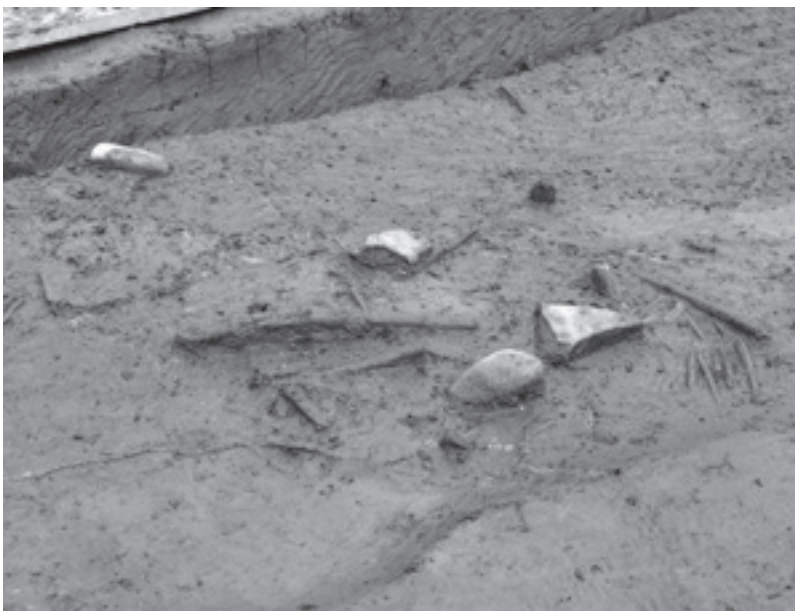
2 2畦畔新段階遺物出土状況
（南東から）



3 2畦畔土層断面（南西から）



1 2 哇畔古段階ウシ頭蓋骨
出土状況（下段北半部、東から）



2 2 哇畔古段階遺物出土状況
（南西から）



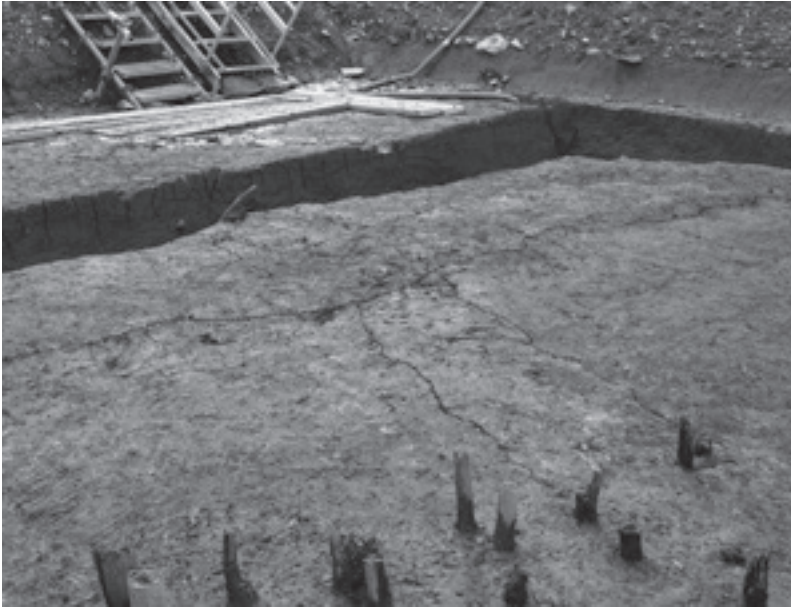
3 4 土手土層断面（南壁、北から）



1 IV - 1 層下面調査状況（北東から）



2 V 層上面調査状況（北西から）



1 3畦畔、5土手検出状況
(北西から)

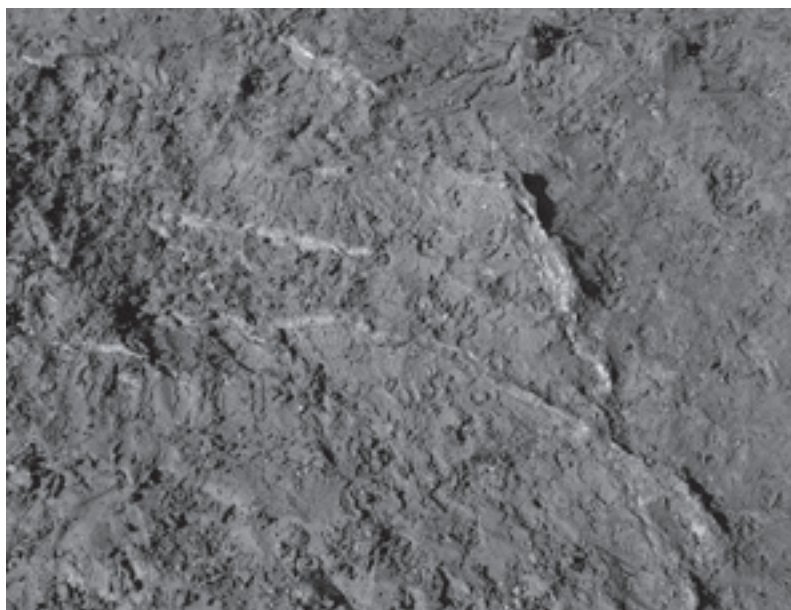


2 5土手検出状況 (南から)

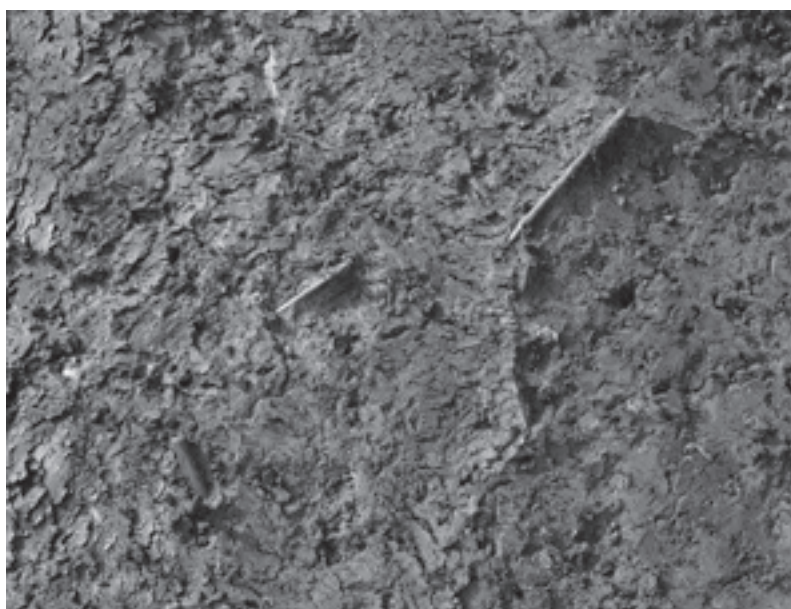


3 V - 4層上面検出状況 (西から)

1 V - 2層の層相 (接写)



2 V - 3層の層相 (接写)



3 V - 4層の層相 (接写)





1 6流路調査状況（西から）



2 6流路人形出土状況（西から）



3 VI層上面遺物出土状況
（北東から）



1 7土器溜り検出状況(南東から)



2 9溝検出状況(北東から)



3 9溝調査状況(北東から)



1 VI層下面検出状況（南西から）



2 VI層下面調査状況（南西から）



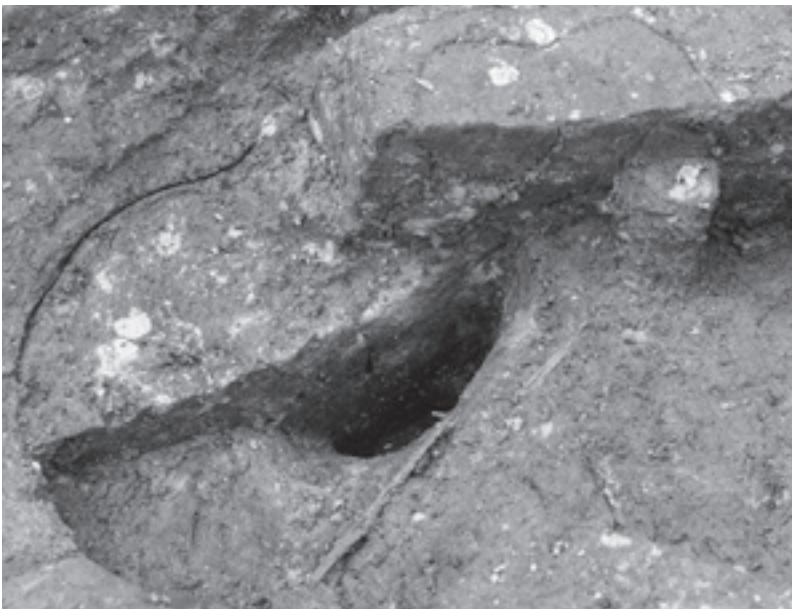
1 平地建物1 検出状況 (北から)



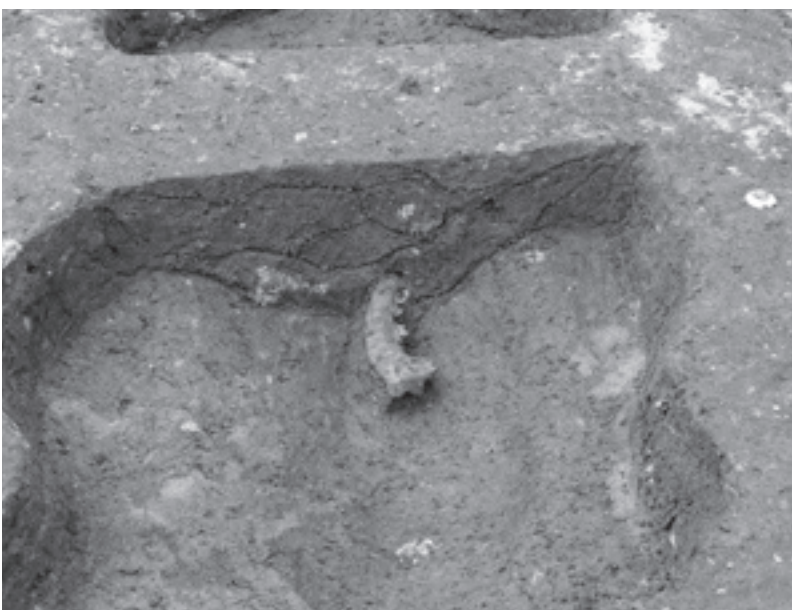
2 平地建物1 土層断面 (西壁土層断面、北東から)



1 平地建物1 P7土層断面
(南西から)



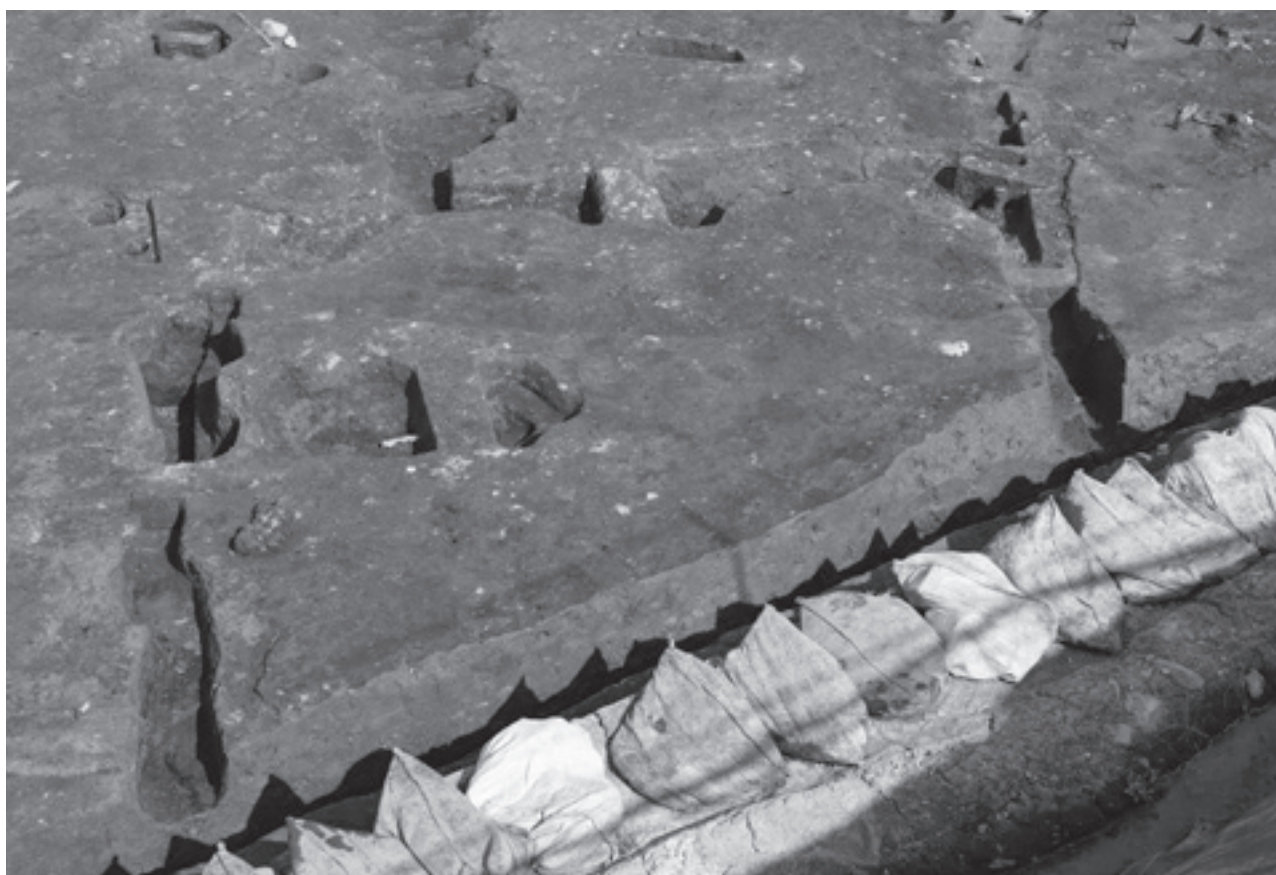
2 平地建物1 P1・2土層断面
(北西から)



3 平地建物1 炉土層断面および
イヌ下顎骨出土状況(北東から)



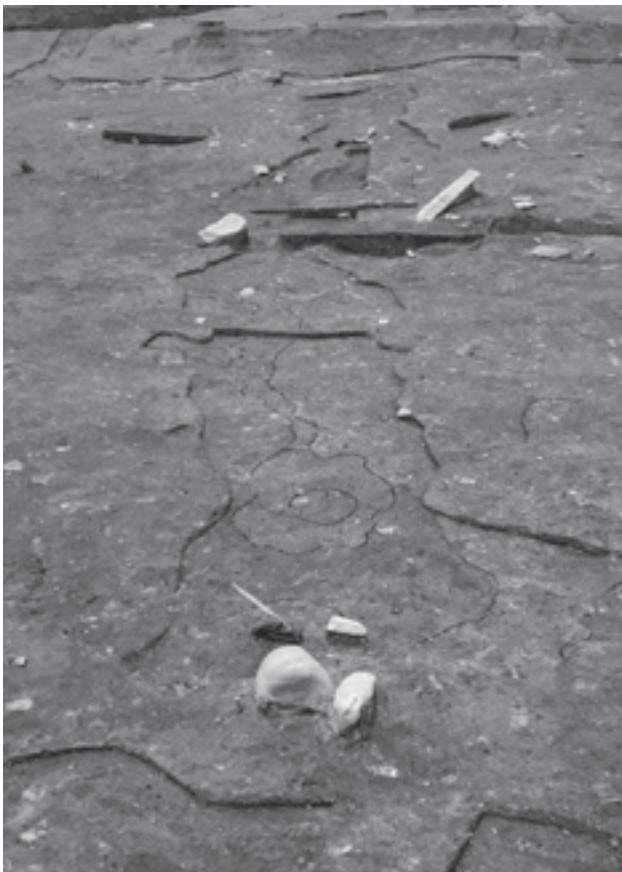
1 平地建物1 SD 3土層断面（北東から）



2 平地建物1 調査状況（北西から）



1 平地建物2検出状況（北東から）



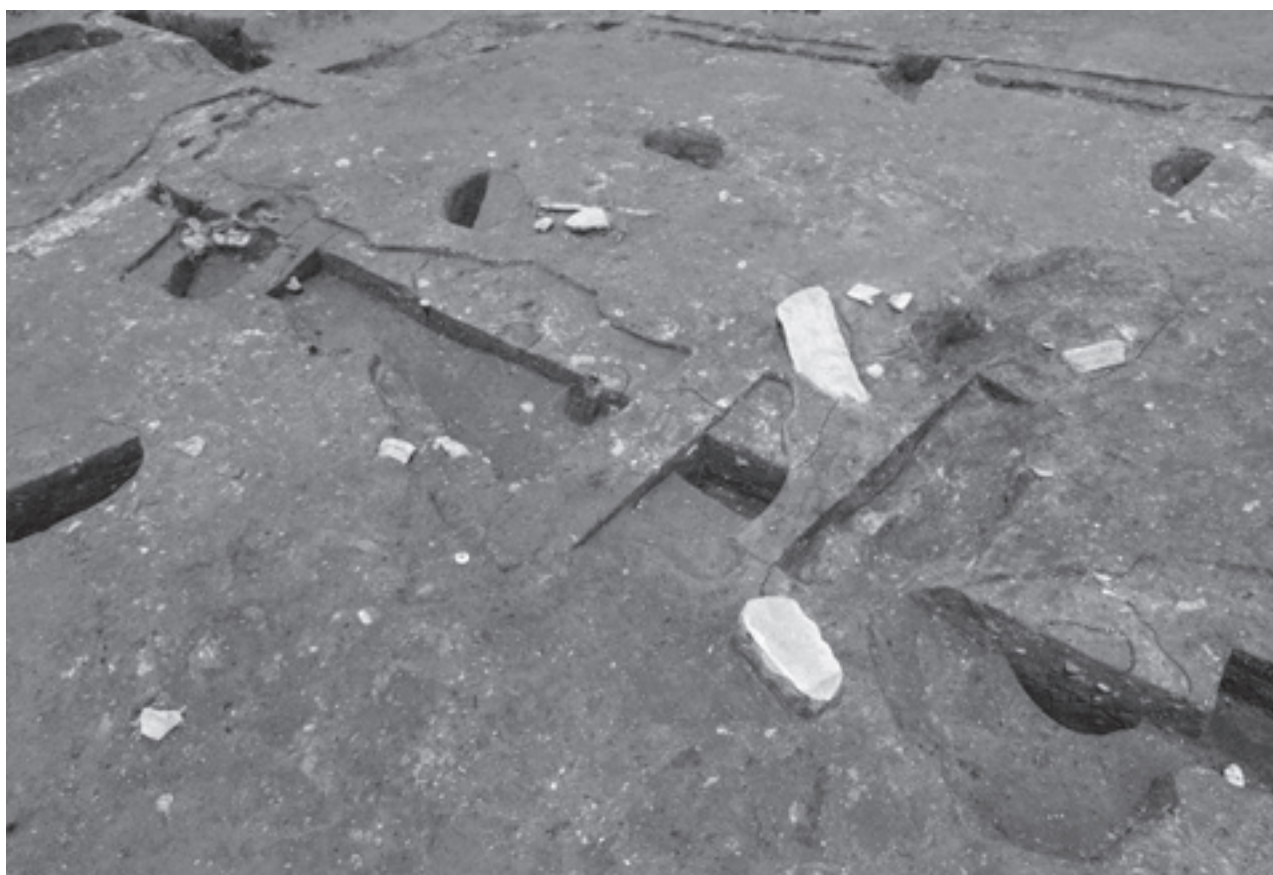
2 平地建物2 SD 3- 2検出状況（南東から）



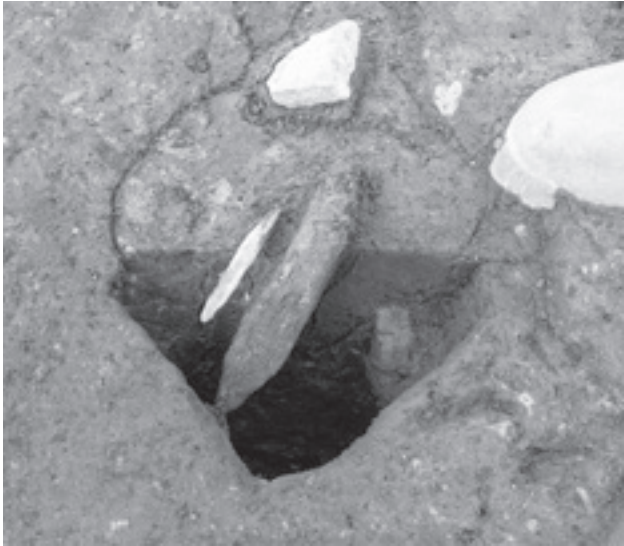
3 平地建物2 SD 3- 2土層断面（南東から）



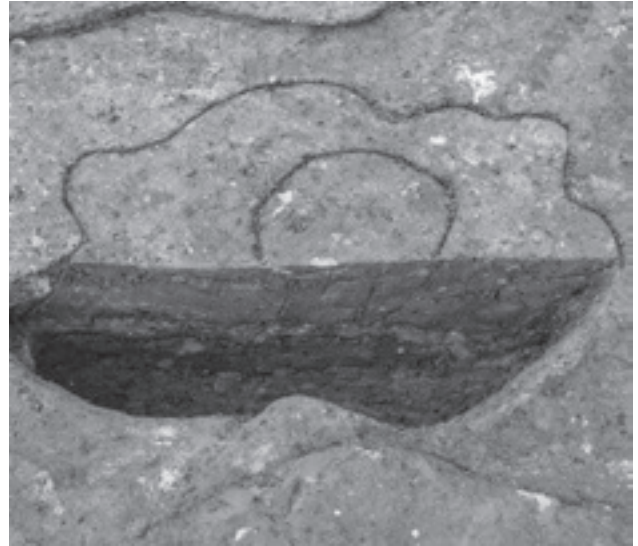
1 平地建物2 SD 3- 2土層断面 (南から)



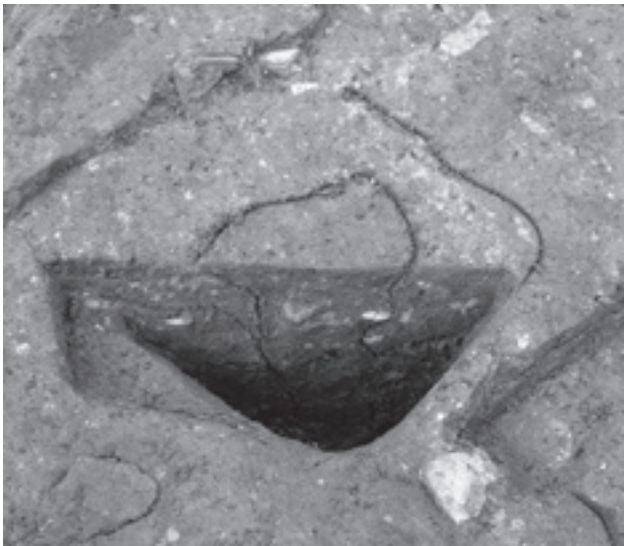
2 平地建物2 SD 2- 2土層断面 (南から)



1 平地建物2 P18 土層断面 (南から)



2 平地建物2 P16 土層断面 (南から)



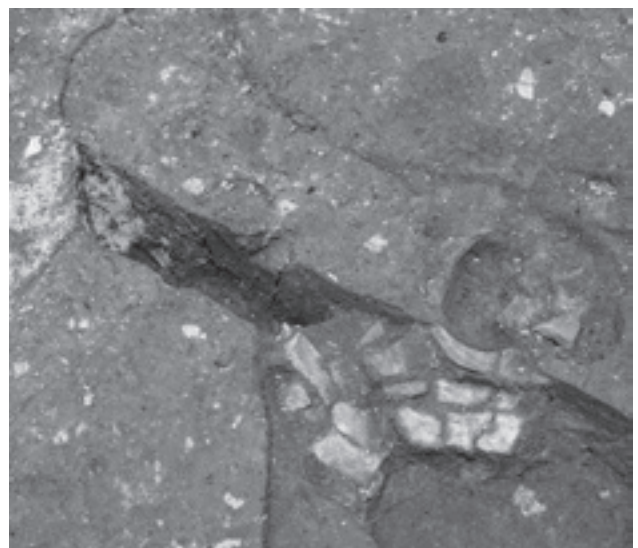
3 平地建物2 P15 土層断面 (南から)



4 平地建物2 P12 土層断面 (南から)

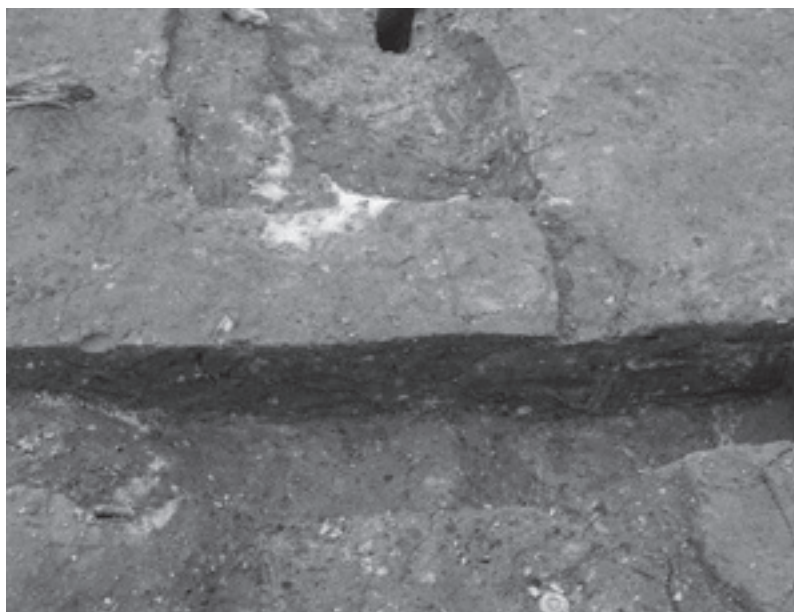


5 平地建物2 P13・14 土層断面 (南から)

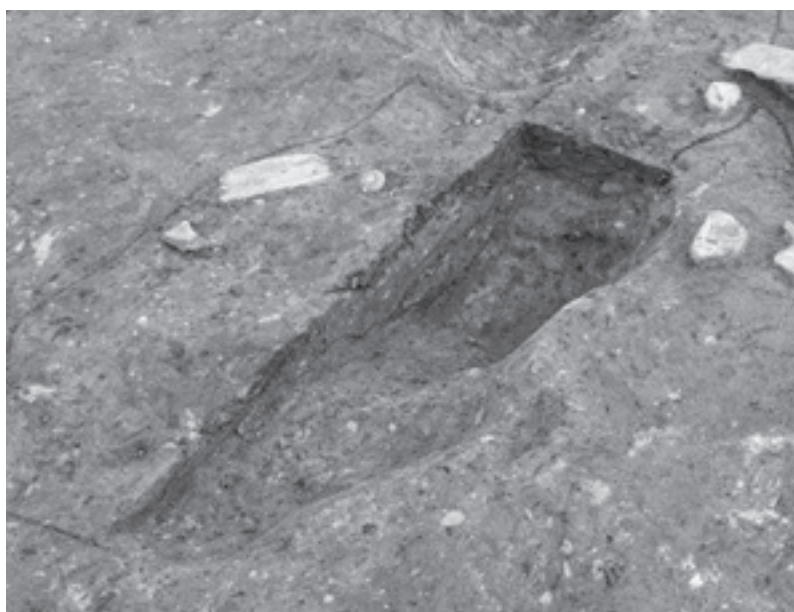


6 平地建物2 P10 土層断面 (南から)

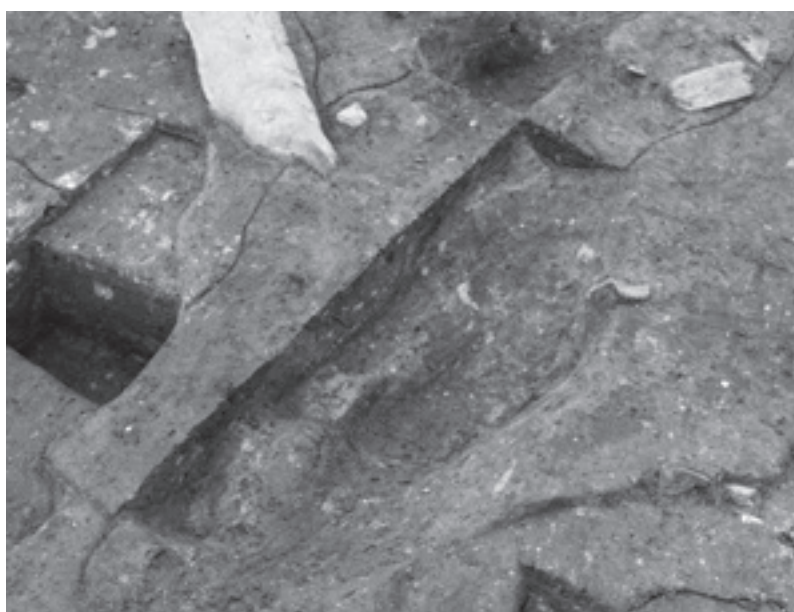
1 平地建物2 SD 3- 1 土層断面
(北から)



2 平地建物2 炉 1 土層断面
(北西から)



3 平地建物2 炉 1 土層断面
(南東から)

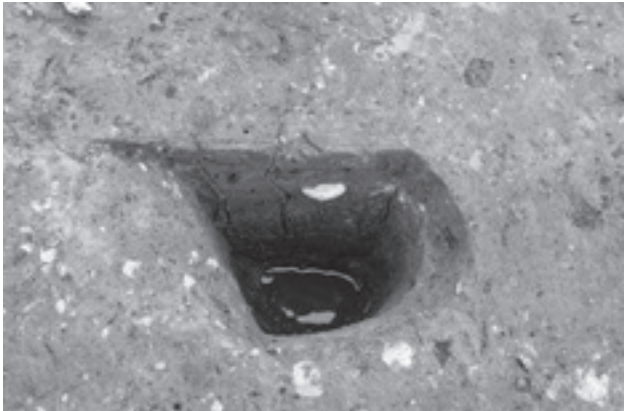




1 平地建物2 P 4・5土層断面（北から）



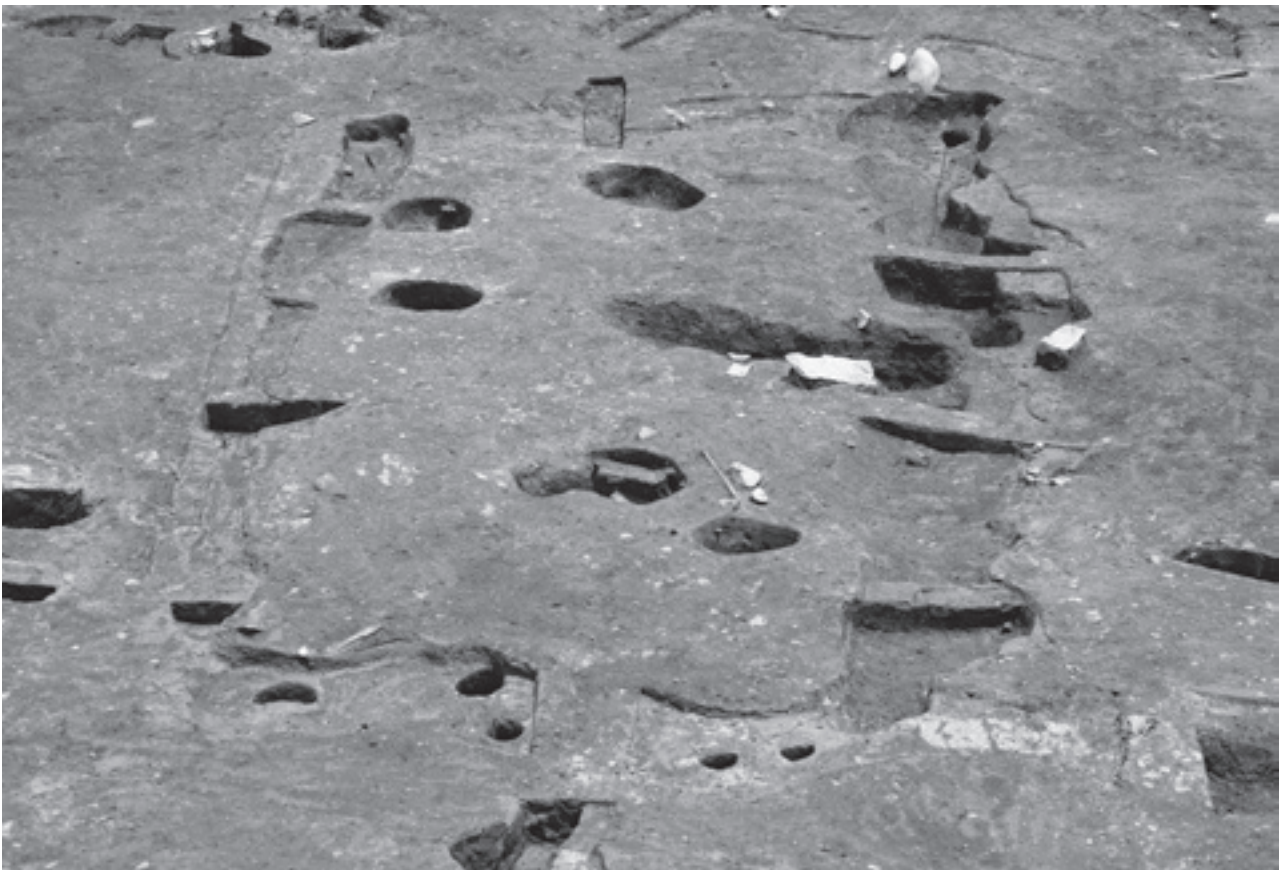
2 平地建物2 SD 1土層断面（西から）



3 平地建物2 P21土層断面（北から）



4 平地建物2 P22土層断面（南東から）



5 平地建物2調査状況（北西から）



1 平地建物3検出状況（南東から）



2 平地建物3調査状況（南東から）



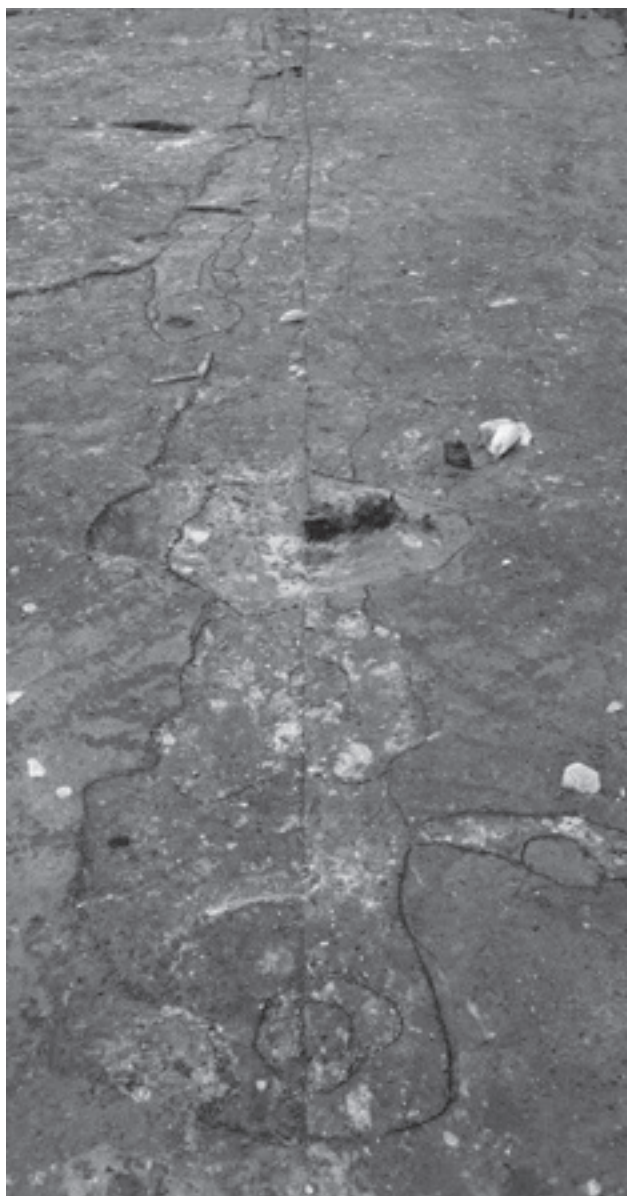
1 平地建物3 SD 2土層断面
(南東から)



2 平地建物3 SD 3調査状況
(北から)



3 平地建物3 SD 1・5調査状況
(南東から)



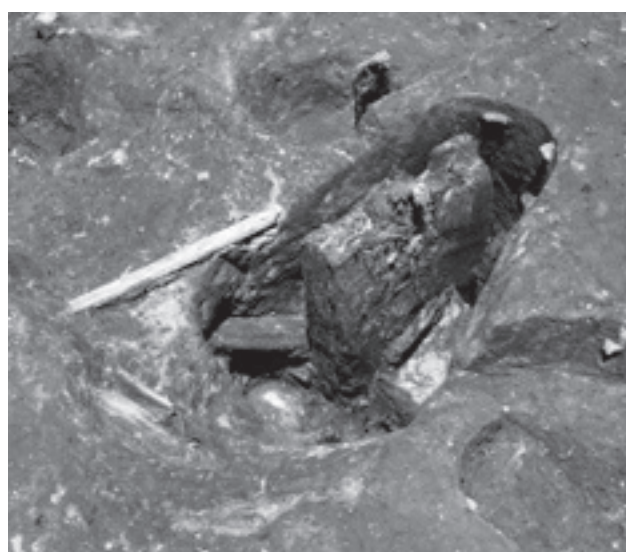
1 平地建物2 SD 2検出状況（南東から）



2 平地建物2 SD 1検出状況（南東から）



3 平地建物2 P 9土層断面（南から）



4 平地建物2 P 9掘削状況（南西から）



1 平地建物2 SD 1 壁材出土状況
(南東から)



2 平地建物2 SD 5 掘削状況
(南東から)



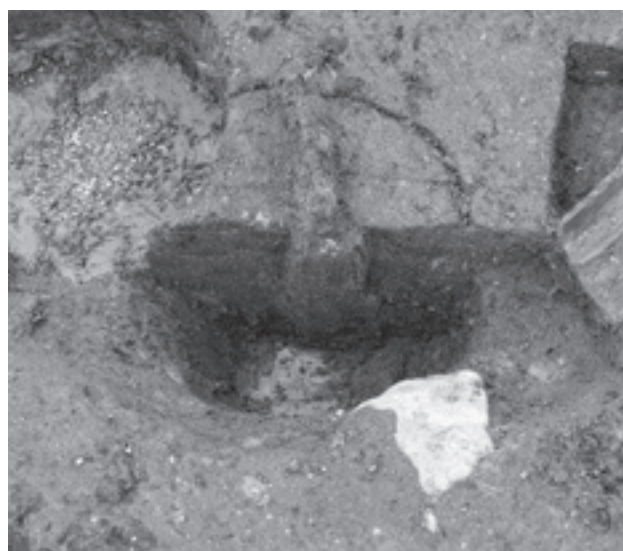
3 平地建物2 SD 6 検出状況
(南西から)



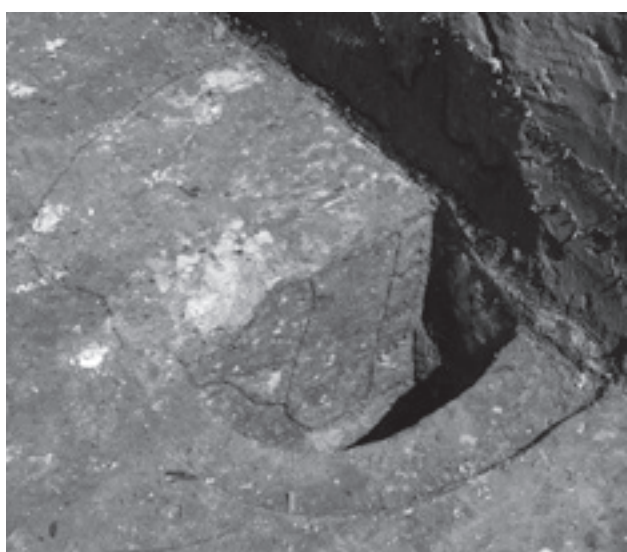
1 平地建物3 SD 6掘削状況 (南西から)



2 平地建物3 P11掘削状況 (南西から)



3 平地建物3 P 2掘削状況 (北から)



4 平地建物3 P15土層断面状況 (南東から)



5 平地建物3 SD 5木製構造物検出状況 (南東から)



1 平地建物3 SK 2土層断面 (西から)



2 平地建物3 SK 2遺物出土状況 (北西から)



3 平地建物3 SK2イノシシ下顎骨出土状況(北西から)



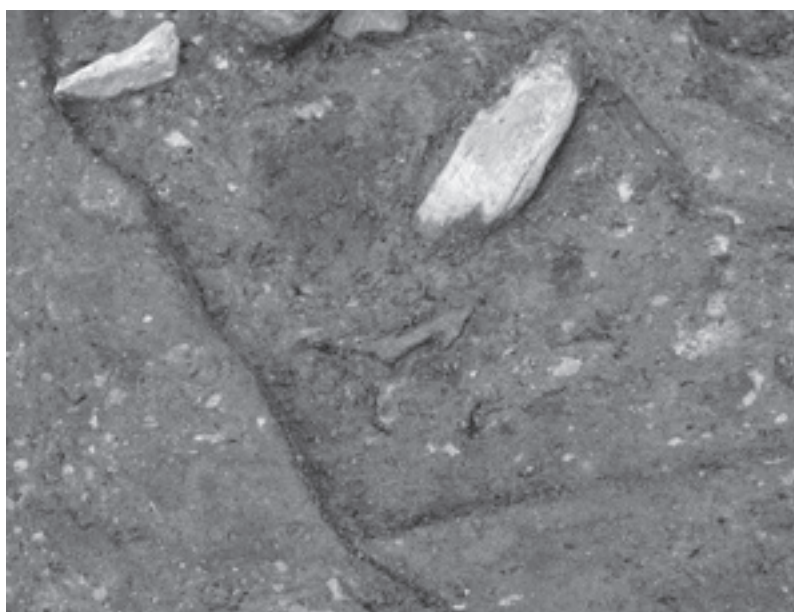
4 平地建物3 SK 2エイ尾棘出土状況 (北西から)



5 平地建物3 SK 2・P17 検出状況 (南東から)



1 平地建物4 調査状況
(南西から)



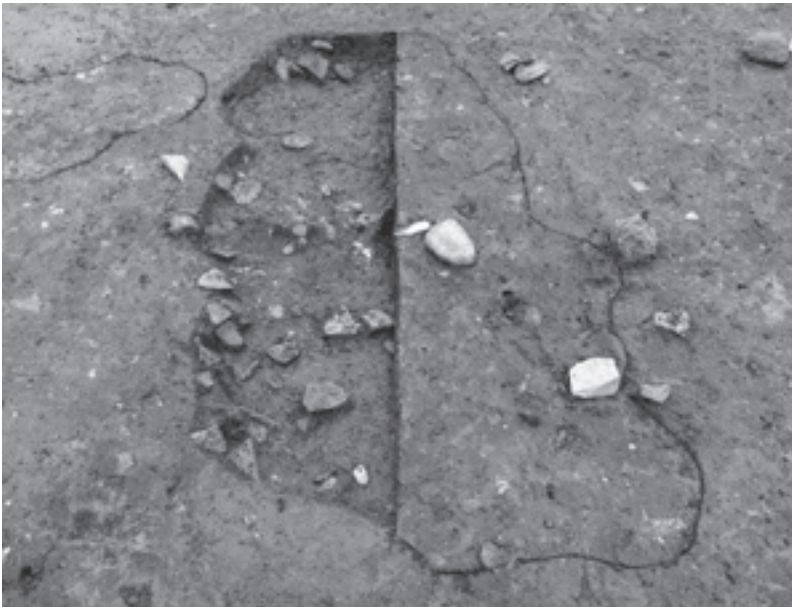
2 平地建物4 SD 1 鉄器出土状況
(東から)



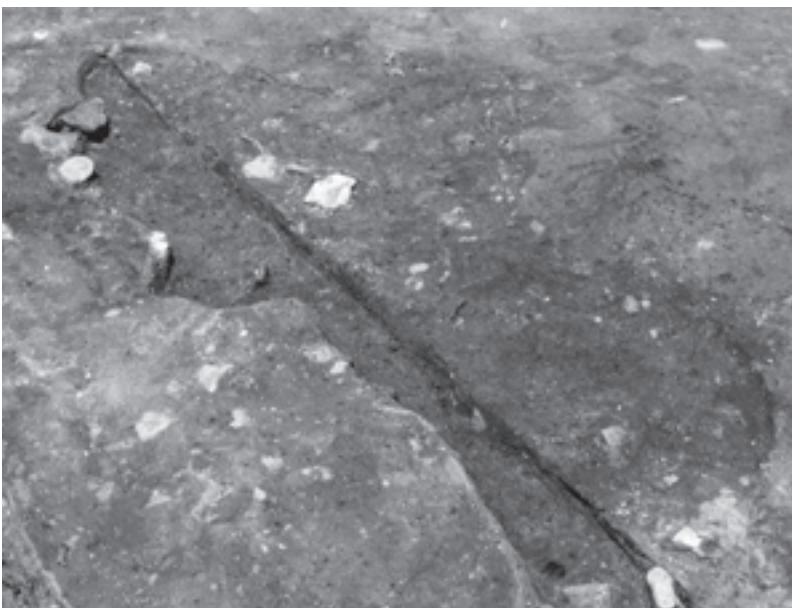
3 平地建物4 SD 2 土層断面
(南西から)



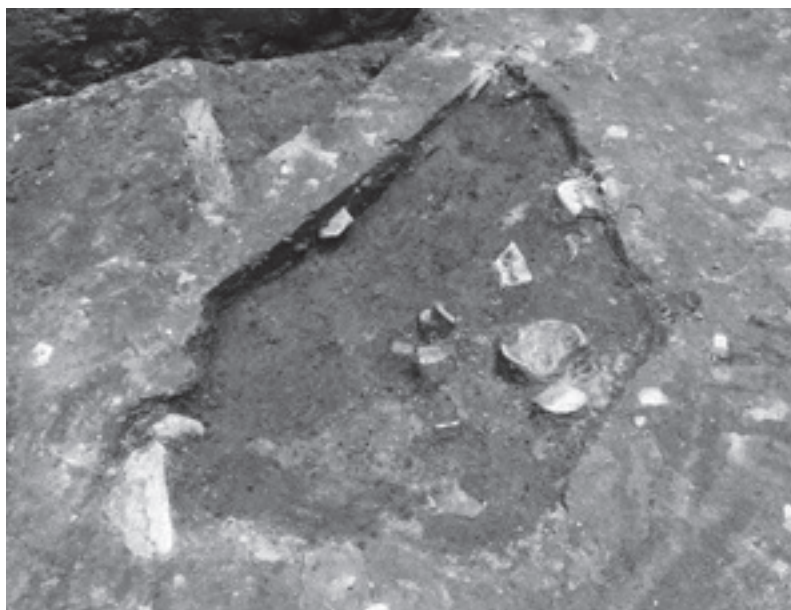
1 11 炉土層断面 (南から)



2 12 炉遺物出土状況 (南東から)



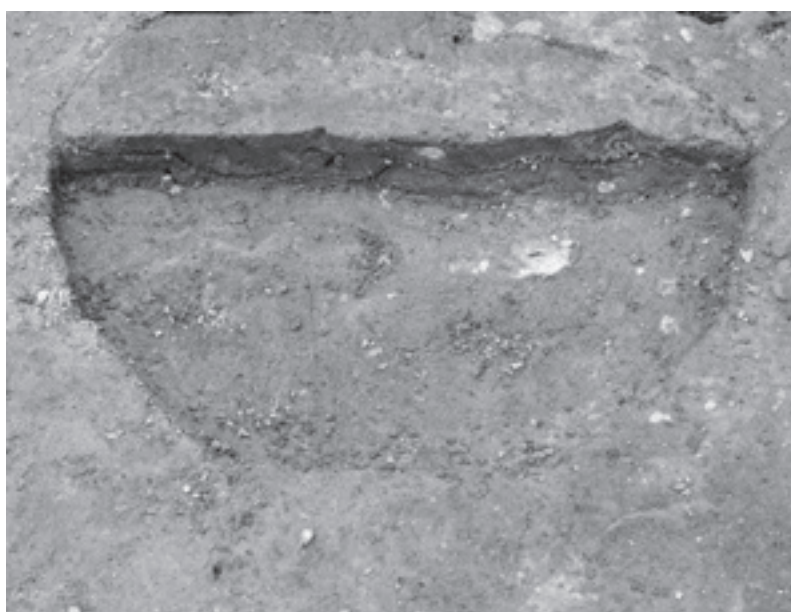
3 15 炉土層断面 (南東から)



1 24 土坑遺物出土状況（北東から）



2 63 土坑掘削状況（南から）



3 62 土坑土層断面（東から）



1 42 溝土層断面 (南東から)



2 42・43 溝土層断面 (南東から)



3 22 溝土層断面 (南西から)



4 14 溝土層断面 (南西から)



5 令和4年度深掘箇所木製構造物検出状況 (北東から)



1 SD38-A 掘削状況 (北東から)



2 SD38-A キツネ下顎骨出土状況 (北から)



3 84 柱穴土層断面 (南から)



1 VII層下面検出状況（南東から）



2 土留め1~4検出状況（東から）



1 土留め1～4検出状況（北西から）



2 土留め3検出状況（北から）



3 土留め5検出状況（北から）



1 土留め6・7、SD38-B 北側
検出状況（北東から）



2 土留め6・7、SD38-B 北側
検出状況（東から）



3 土留め8 検出状況（南西から）



1 中心域張出部土層断面
(北西から)



2 中心域張出部土層断面
(北から)



3 造成土腰かけ W65 出土状況
(北西から)

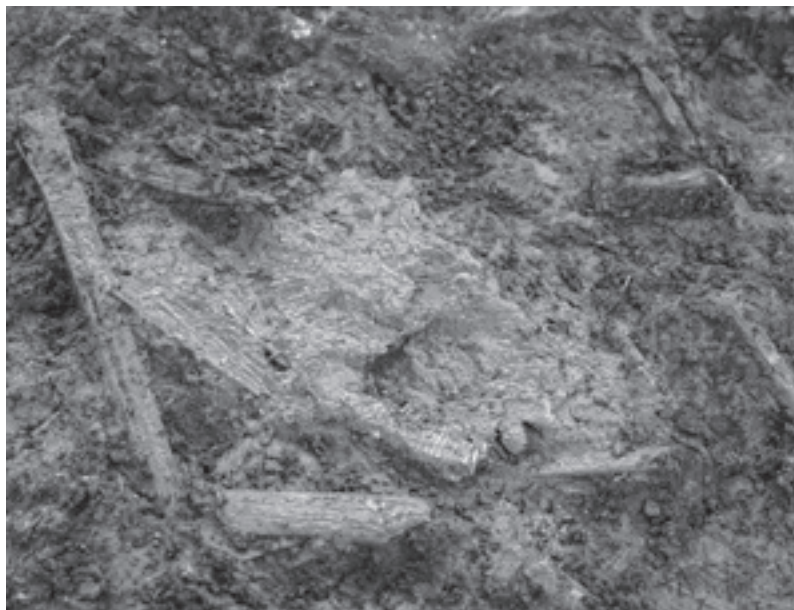


1 SD38-B 南側遺物出土状況（北東から）



2 SD38-B 北側遺物出土状況（北西から）

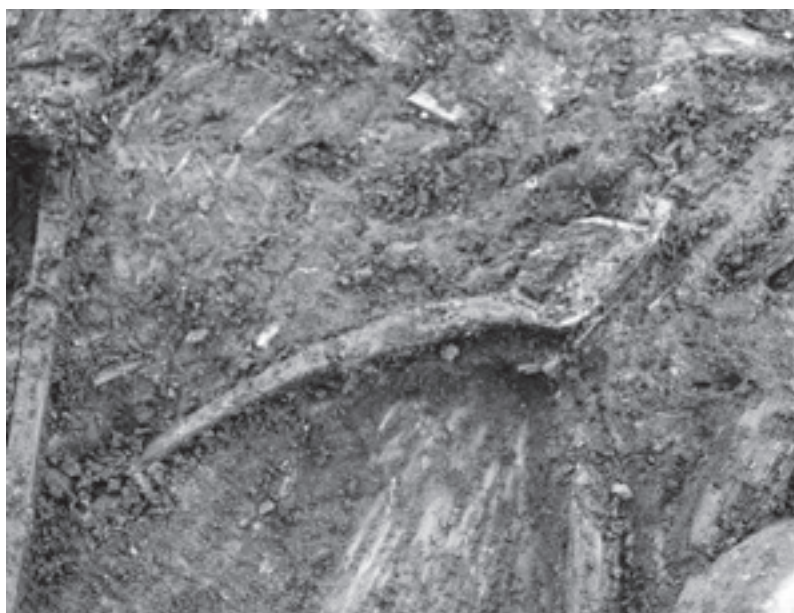
1 SD38-B かご Ba 3 出土状況
(西から)



2 SD38-B 容器 W73・
桶 W70 出土状況
(北西から)



3 SD38-B 匙 W94 出土状況
(南東から)





1 SD38-B 杓子 W74 出土状況
(北西から)



2 SD38-B 不明木器 W68 出土状況
(南から)



3 SD38-E 琴 W134 出土状況
(北西から)

1 SD38-D 調査状況
(北東から)



2 SD38-D 北側検出状況
(南西から)



3 SD38-D 北側出土状況
(北東から)





1 SD38-Ca 検出状況 (北東から)



2 SD38-Cb 検出状況 (北東から)



1 SD38-Ca 検出面 (拡大範囲 H) 人骨出土状況 (北から)



2 SD38-Ca 検出面 (拡大範囲 D) 人骨出土状況 (北西から)



1 SD38-Ca 人骨出土状況（北東から）



1 SD38-Ca 土層断面 (北東から)



2 SD38-Ca (拡大範囲 G) 人骨出土状況 (南東から)



1 SD38-Ca (拡大範囲 E 北側) 人骨出土状況 (東から)



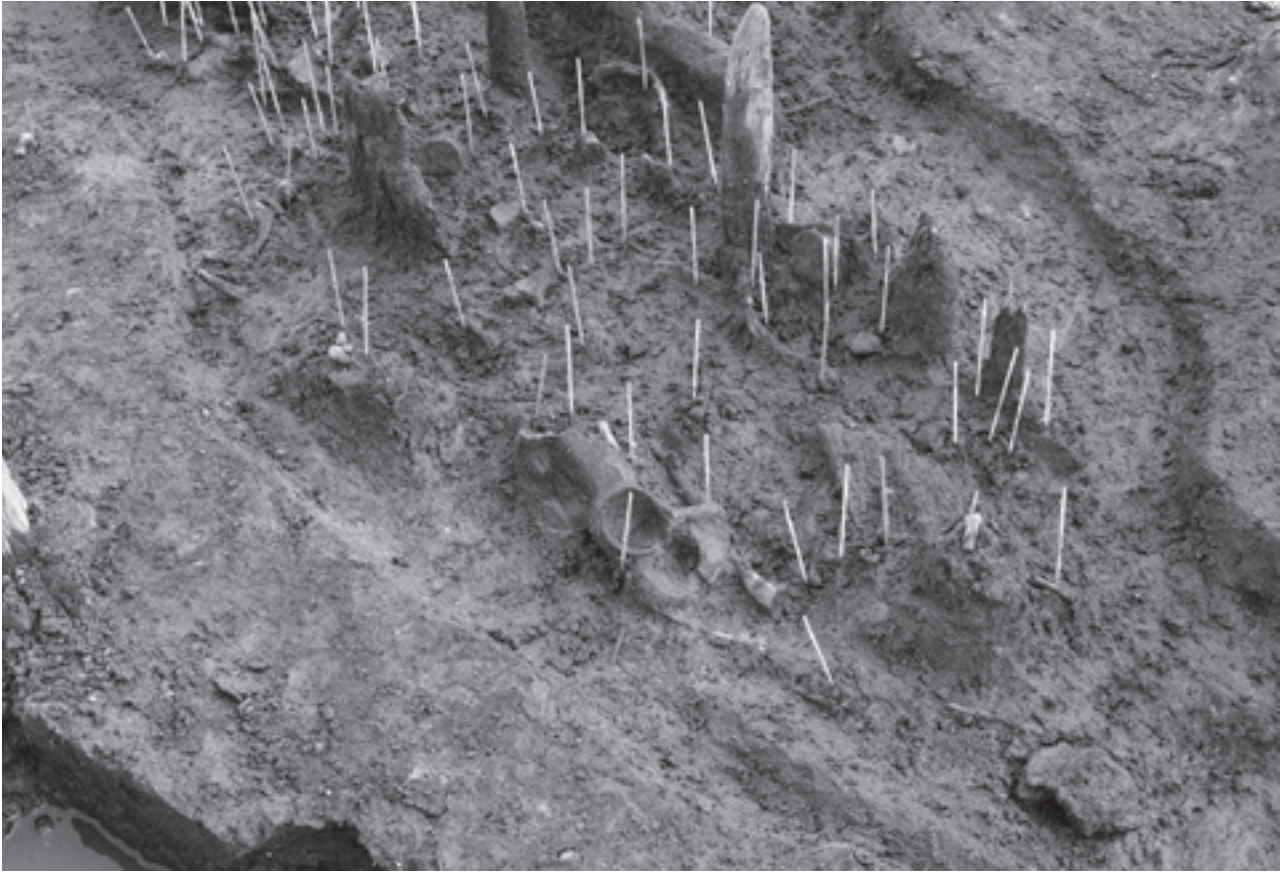
2 SD38-Ca (拡大範囲 E 南側) 人骨出土状況 (北東から)



1 SD38-Cb (拡大範囲 J) 人骨出土状況 (南西から)



2 SD38-Cb (拡大範囲 J) 人骨出土状況 (北西から)



1 SD38-Cb (拡大範囲 L) 人骨出土状況 (北西から)



2 SD38-Cb (拡大範囲 M) 人骨出土状況 (北東から)



1 88 柱穴土層断面 (南西から)



2 SD38-C 護岸 (南側溝)
(北東から)



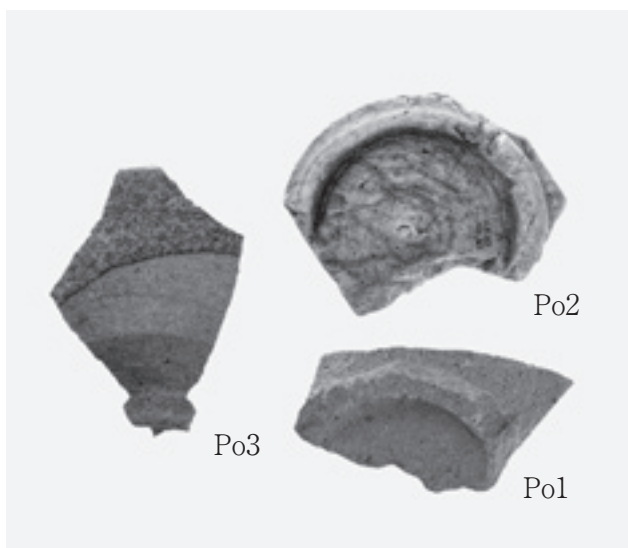
3 SD38-C 護岸 (南側溝)
(北西から)



1 調査完了状況（南西から）



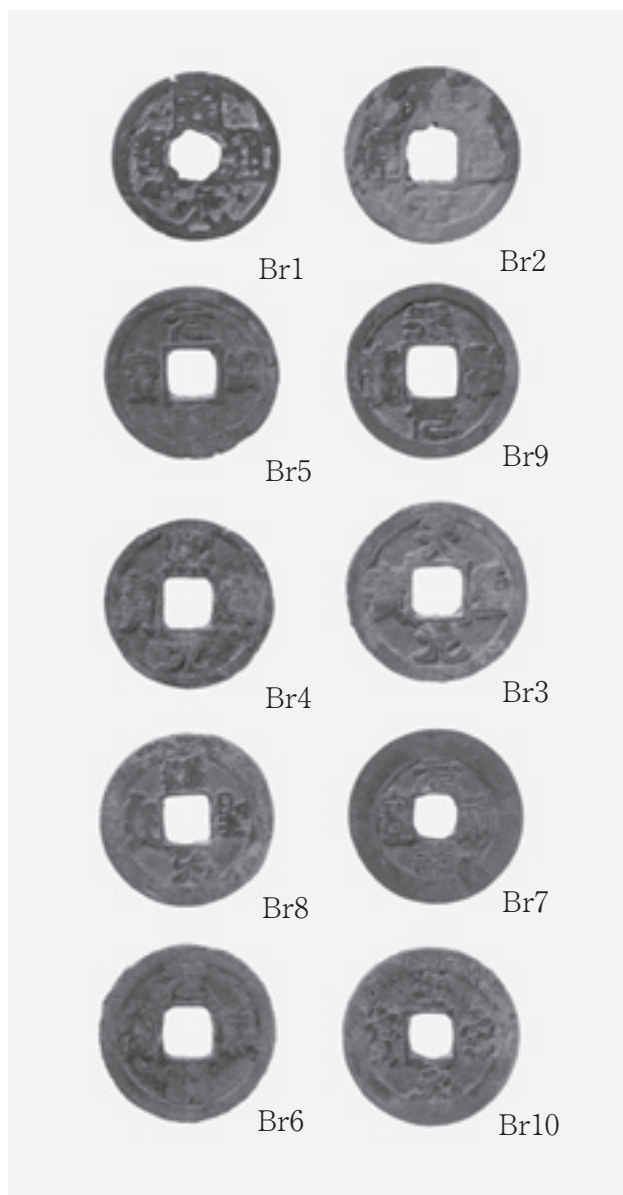
2 調査完了状況（北東から）



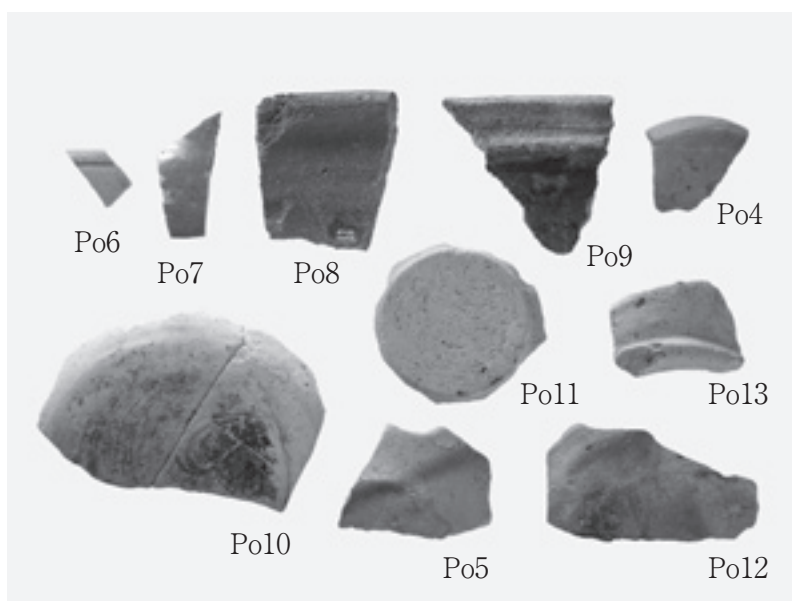
1 I・II層出土土器



2 2畦畔出土木器



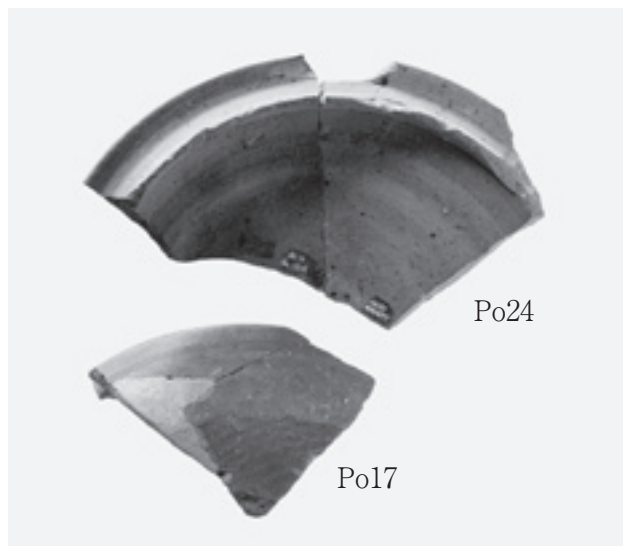
3 2畦畔周辺出土渡来銭



4 IV層・4土手出土土器



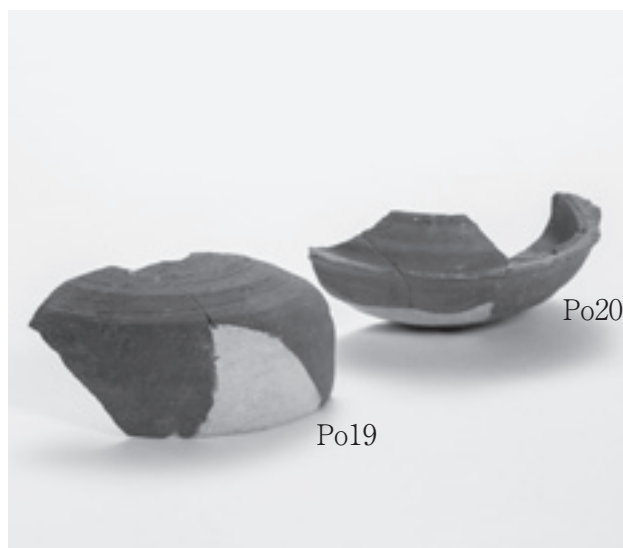
1 V層上面出土土器



2 V - 1層出土土器 (1)



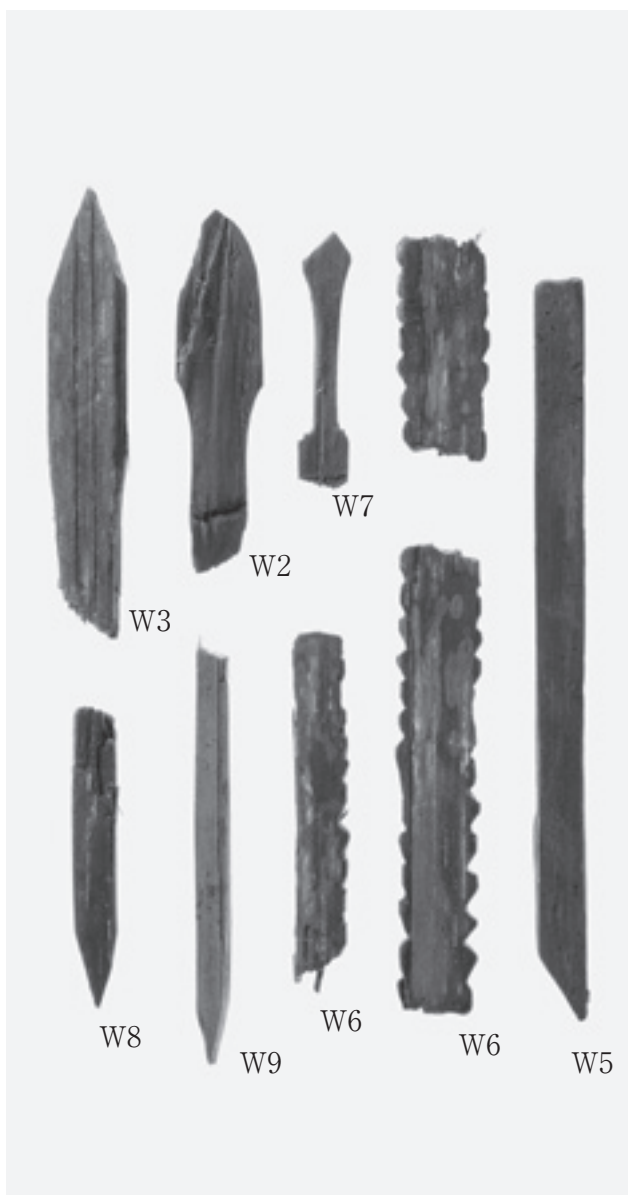
3 V - 1層出土土器 (2)



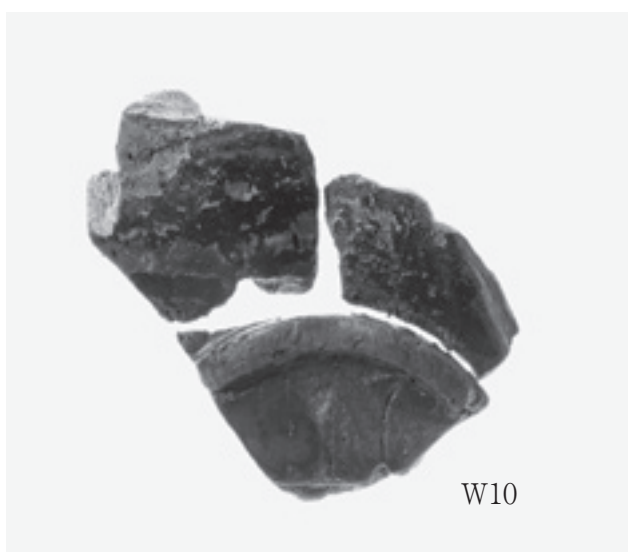
4 V - 4層出土土器



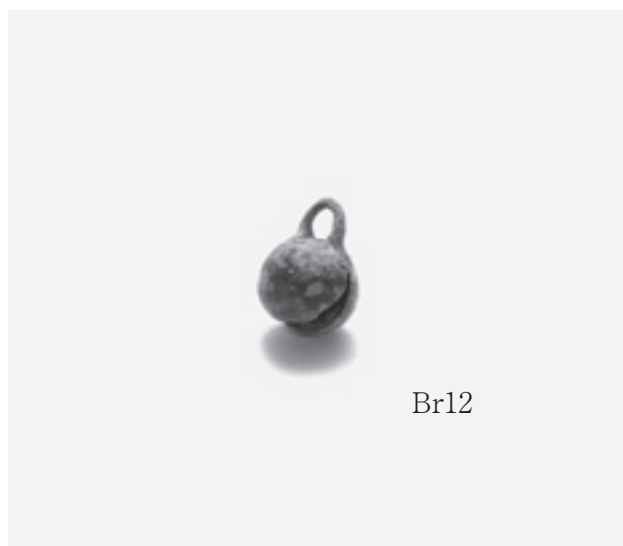
5 VI層上面出土土器



1 V層出土木器 (祭祀具)



2 V層出土木器 (椀)



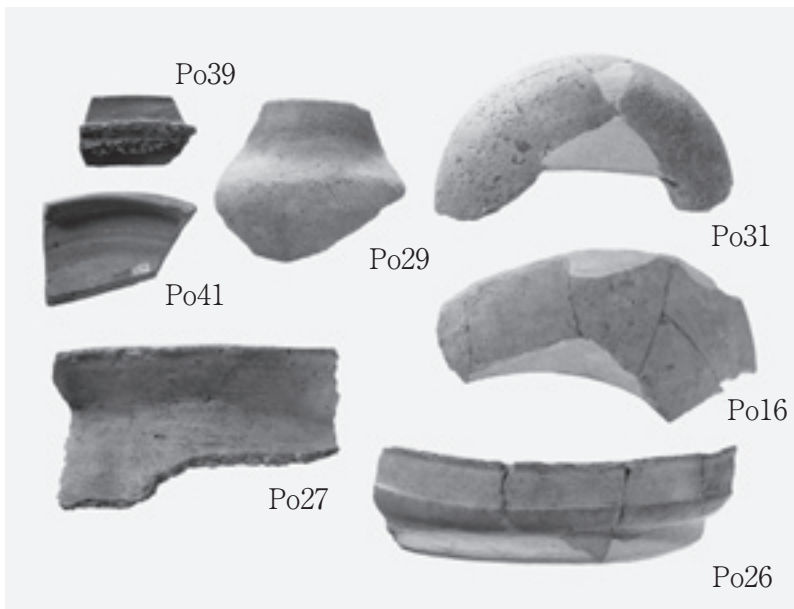
3 V層出土金属器 (銅鈴)



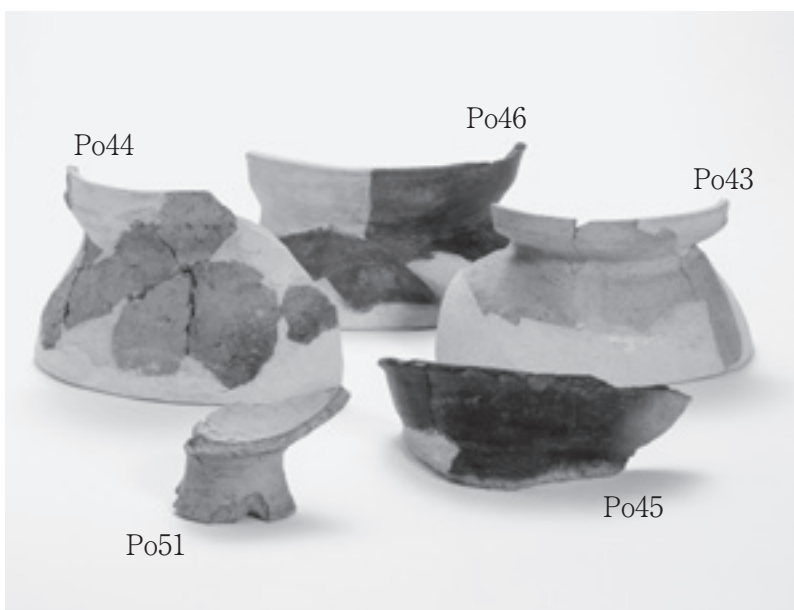
4 6流路・9溝出土木器 (祭祀具)



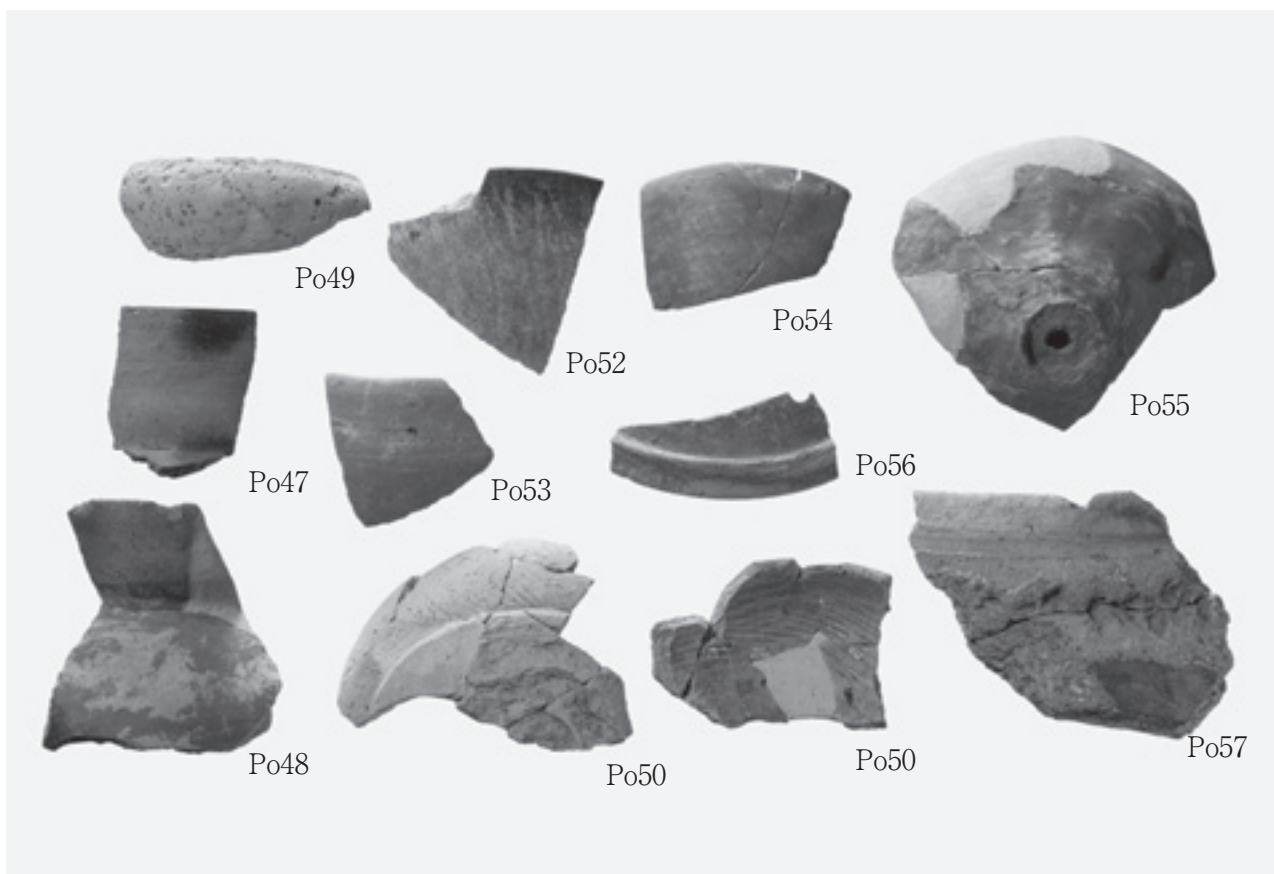
1 VI - 1層出土土器 (1)



2 VI - 1層出土土器 (2)



3 VI - 2層出土土器



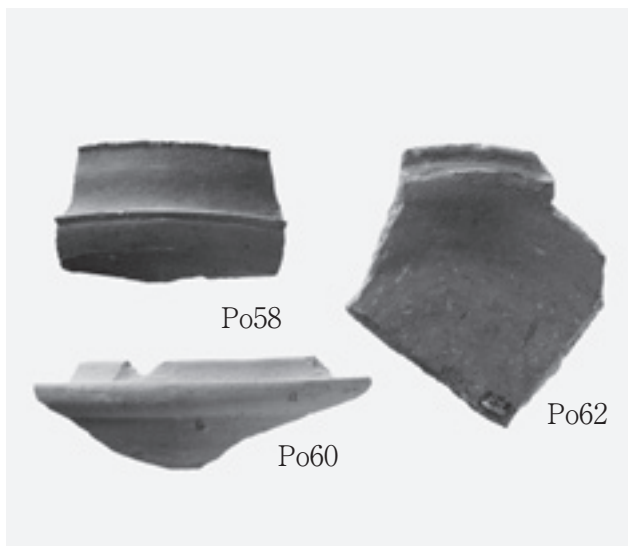
1 VI - 2層出土土器



2 VI - 2層出土土器 (須恵器)



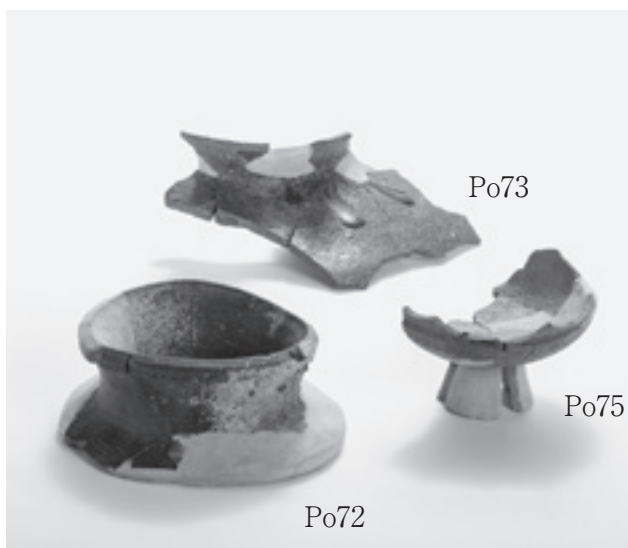
3 VI層出土木器 (建築材)



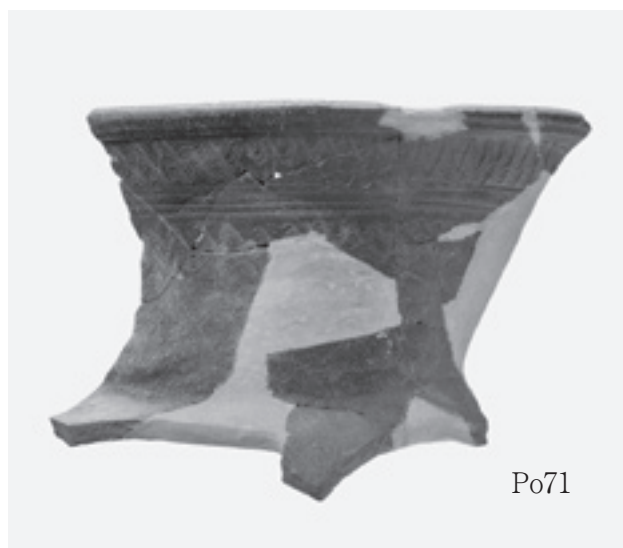
1 VI - 2層出土土器 (須恵器)



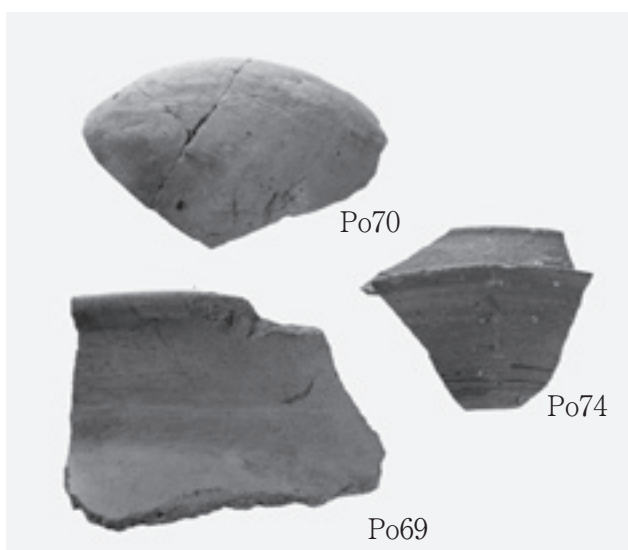
2 VI層出土木器



3 7盛土出土土器 (1)



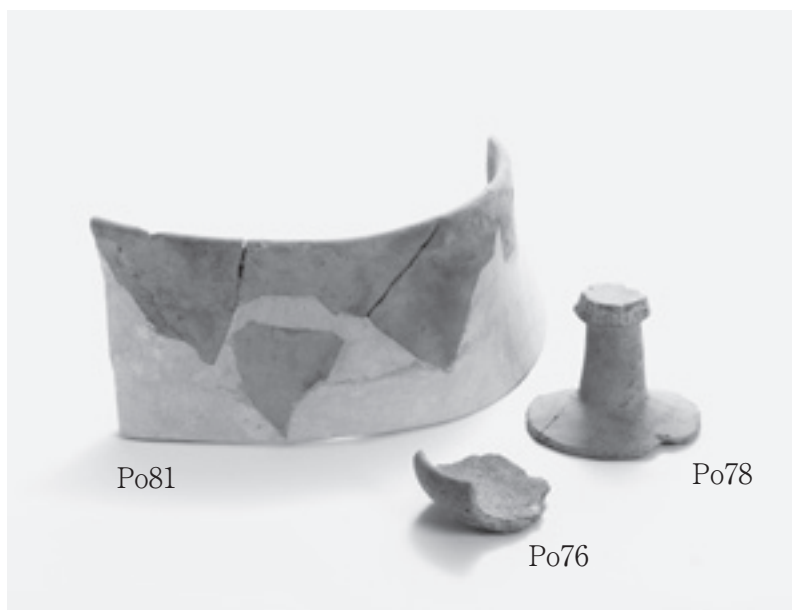
4 7盛土出土土器 (2)



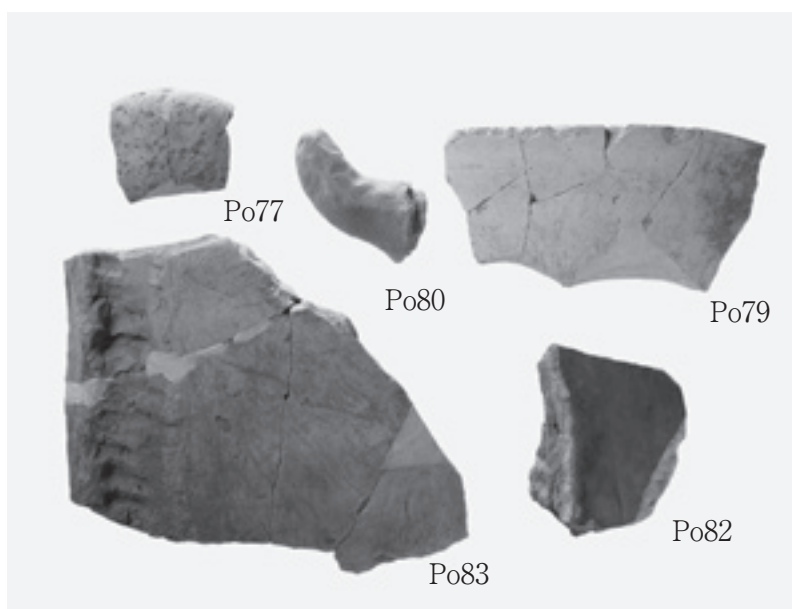
5 7盛土出土土器 (3)



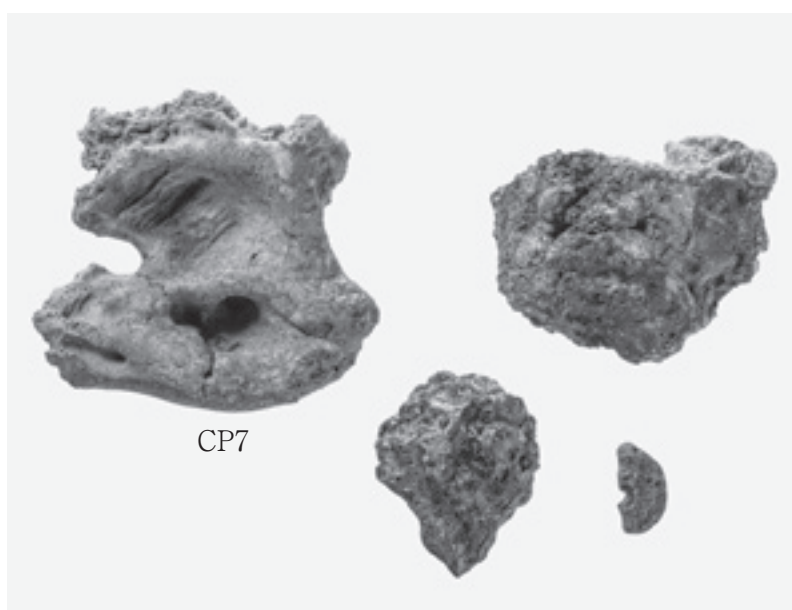
6 9溝出土土器 (1)



1 9溝出土土器 (2)



2 9溝出土土器 (3)



3 金属精錬関連溶解物

※遺物番号が無いものは写真のみ



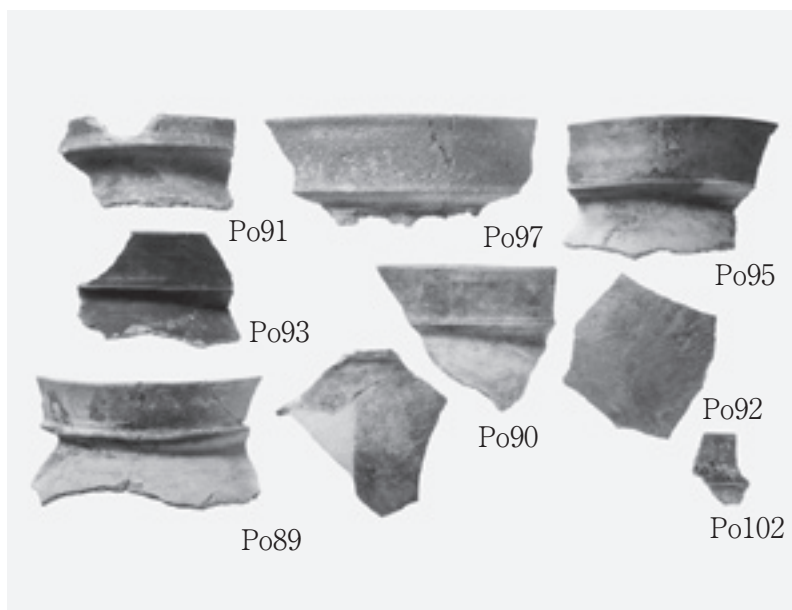
1 平地建物2出土土器



2 平地建物3出土土器 (1)



3 平地建物3出土土器 (2)



1 平地建物3・4出土土器



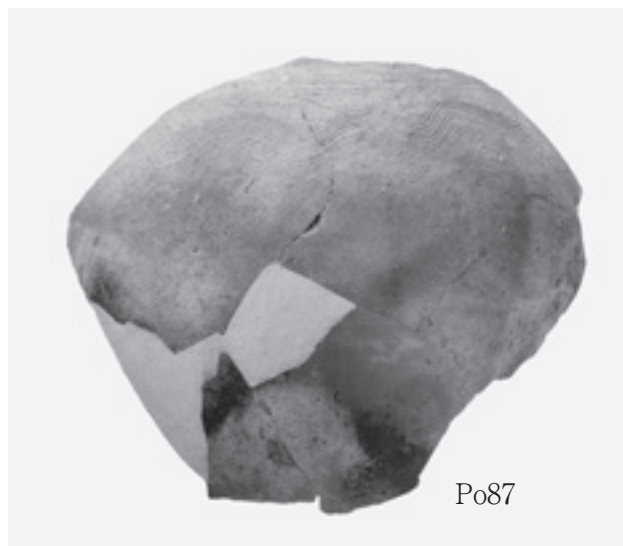
2 平地建物3出土木器（柱根）



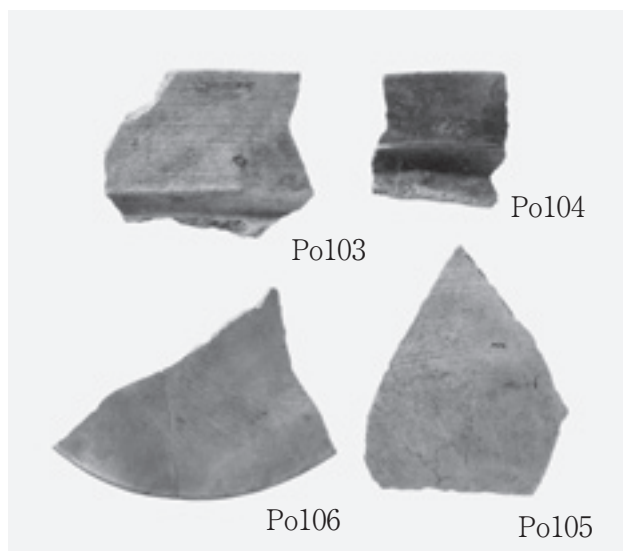
3 平地建物3出土木器（壁板）



1 平地建物3出土木器



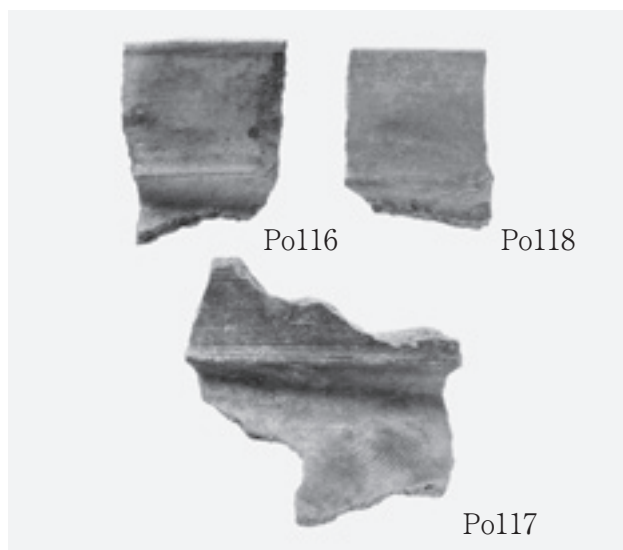
2 平地建物2出土土器



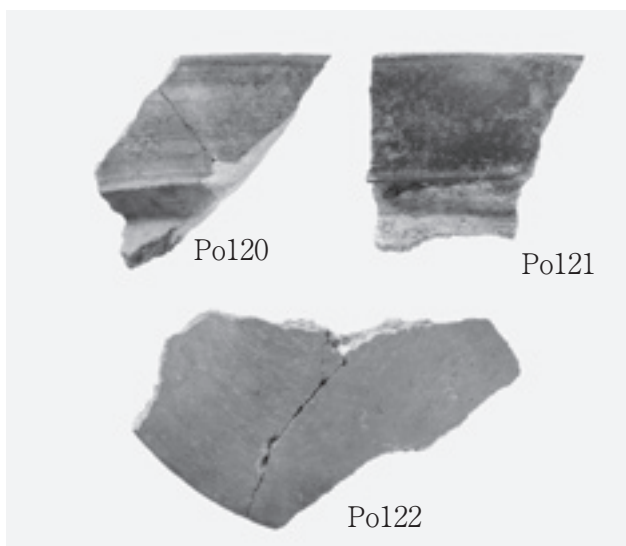
3 11・15炉出土土器



4 24土坑出土土器



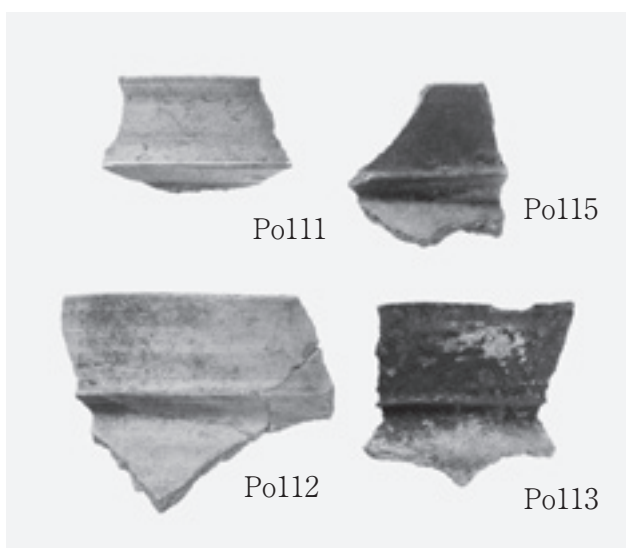
5 22・23溝出土土器



1 14 溝出土土器



2 VII層上面出土土器



3 42 溝出土土器 (1)



4 42 溝出土土器 (2)



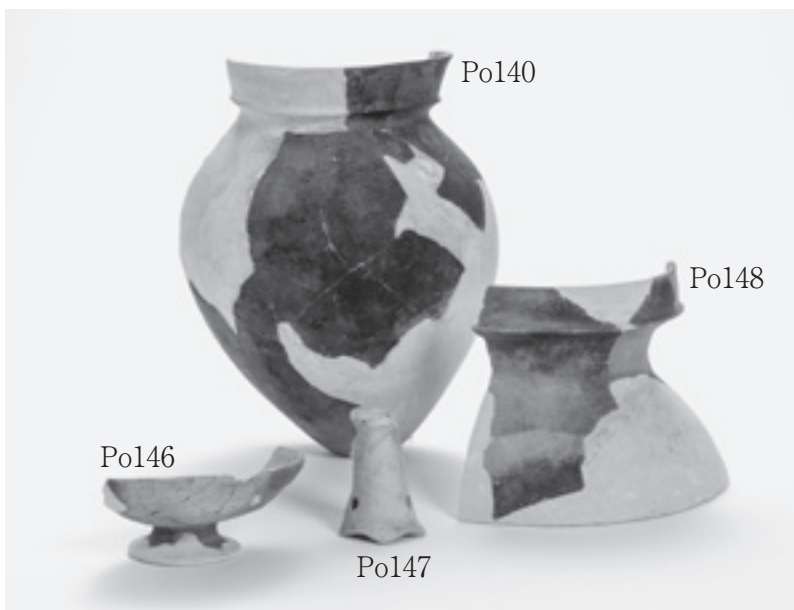
5 SD38-A 出土土器 (1)



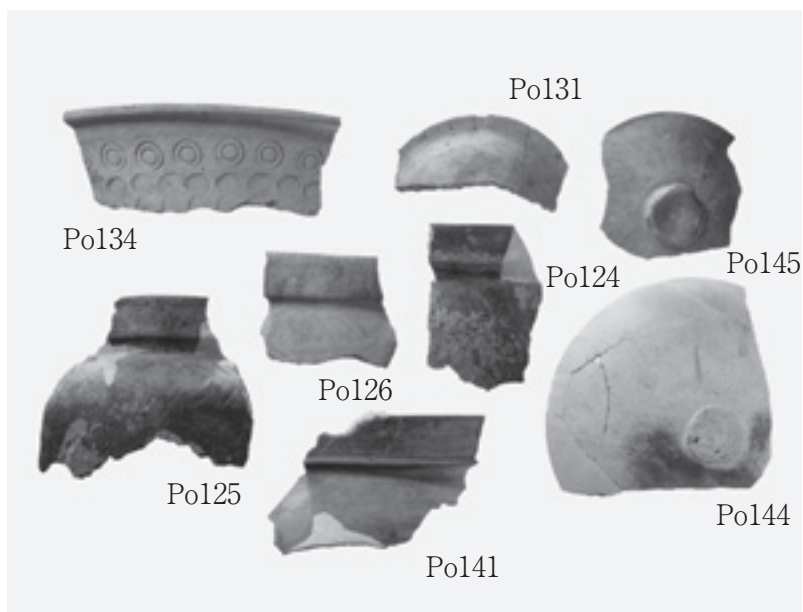
1 SD38-A 出土土器 (2)



2 SD38-A 出土土器 (3)



3 SD38-A 出土土器 (4)



1 SD38-A 出土土器 (5)



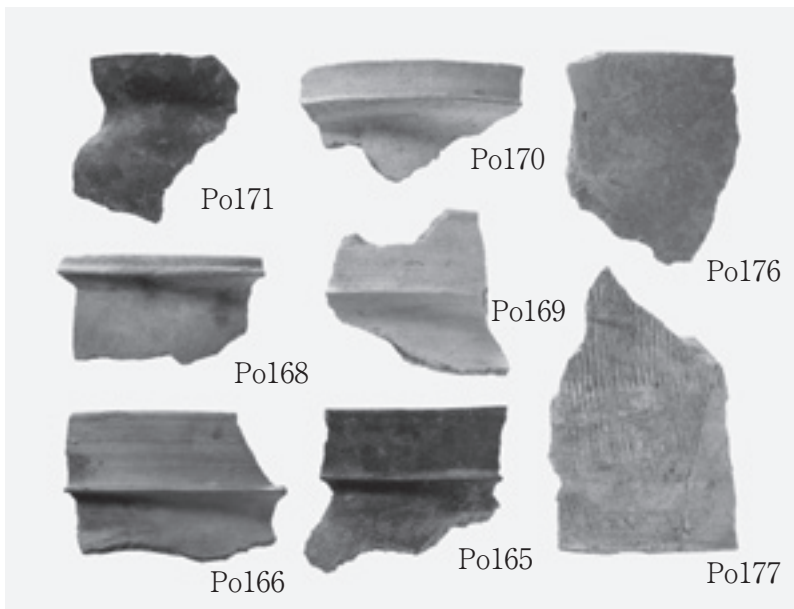
2 古墳時代前期造成土出土土器



3 VII層出土土器 (1)



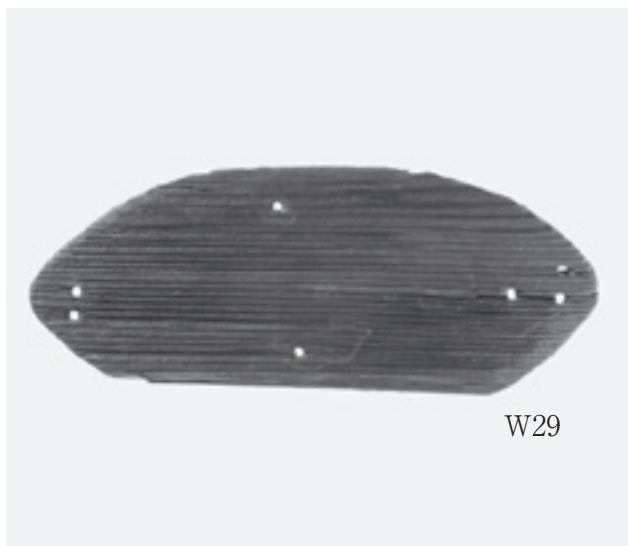
1 Ⅶ層出土土器 (2)



2 Ⅶ層出土土器 (3)

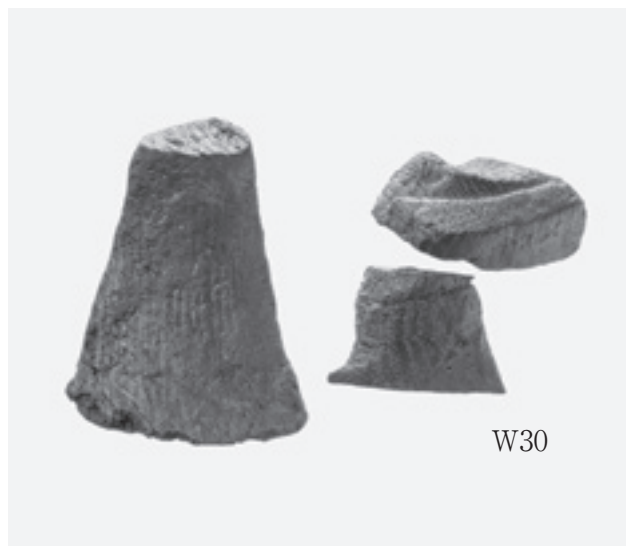


3 Ⅶ層出土木器 (1)



W29

1 Ⅶ層出土木器 (2)



W30

2 Ⅶ層出土木器 (3)



W36

W31

W34

W35

3 土留1・3構成木器 (妻壁板)



1 土留2構成木器 (1)



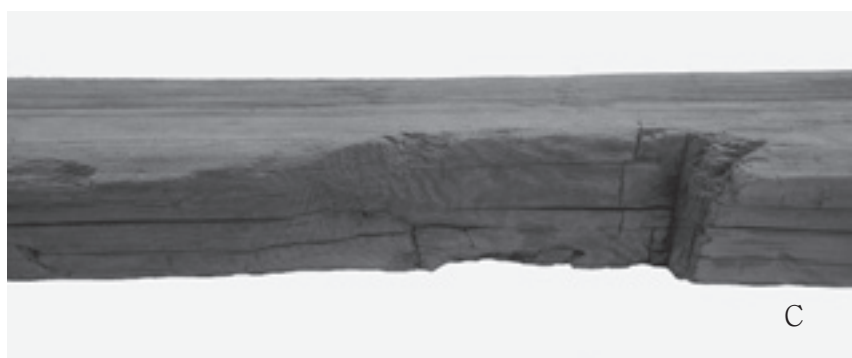
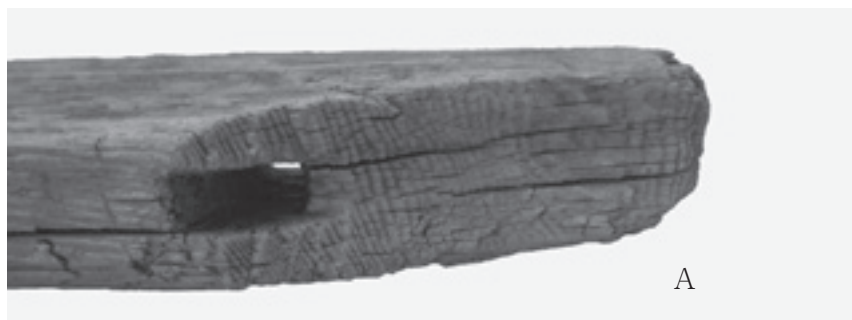
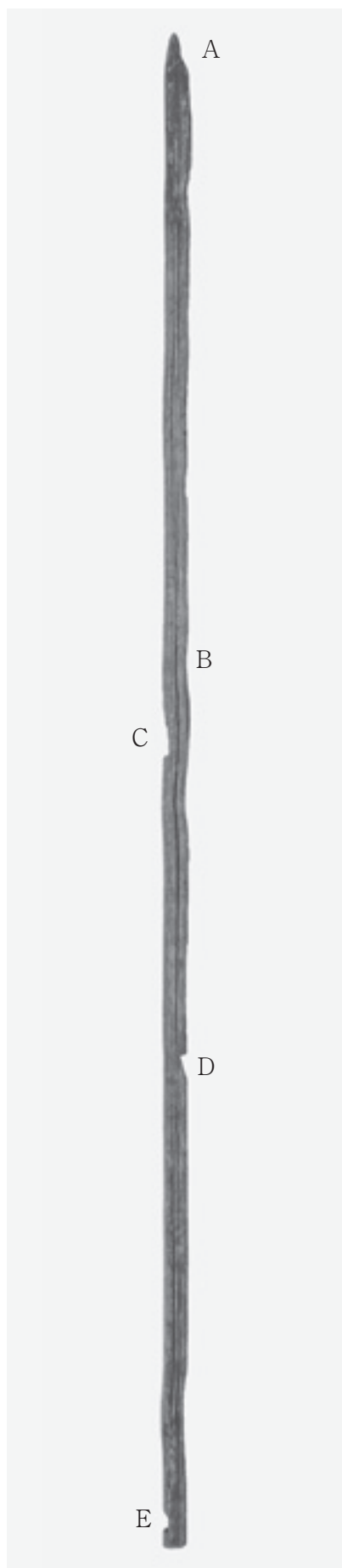
2 土留2構成木器 (2)



3 土留3構成木器



4 土留4構成木器 (1)



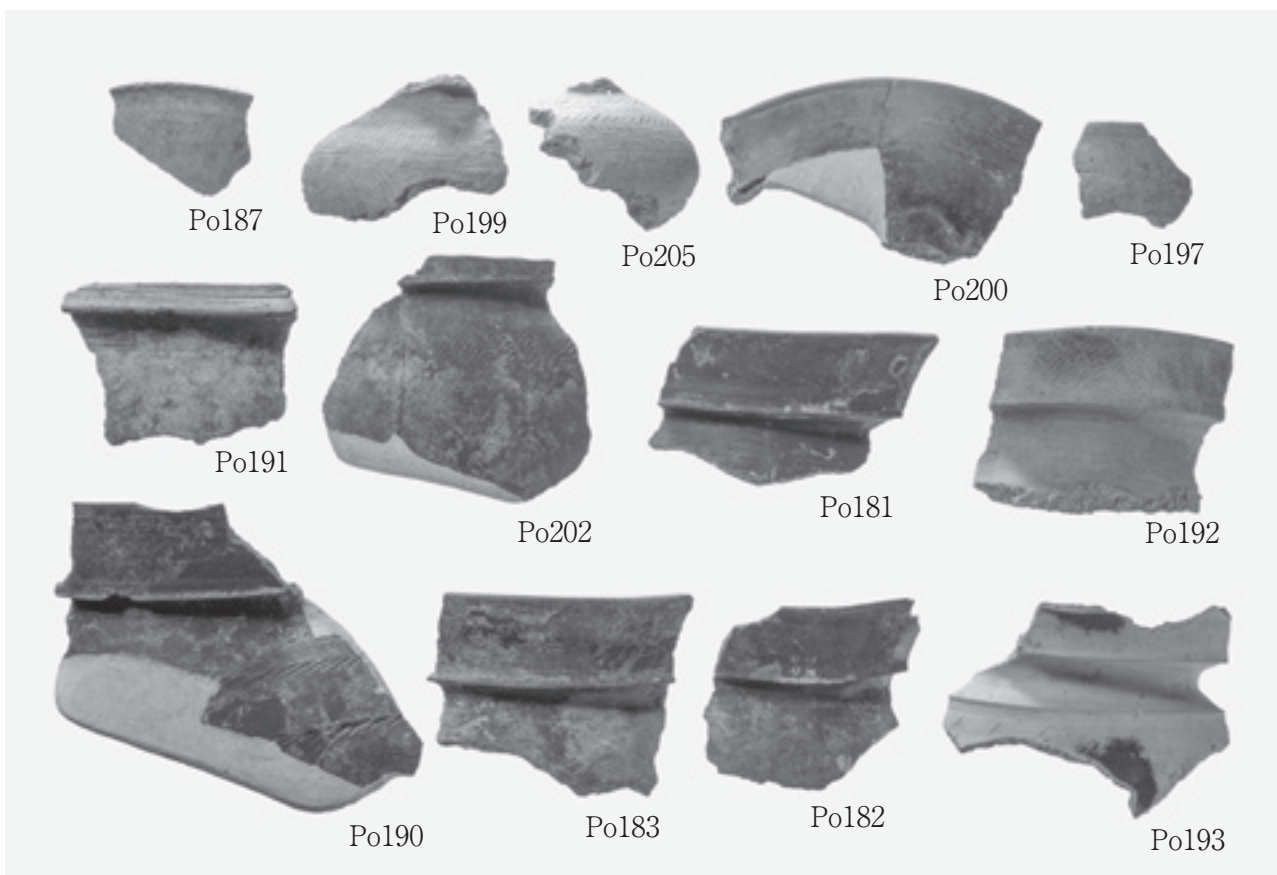
1 土留3構成木器 (W38)



1 土留4構成木器 (2)



2 土留4構成木器 (3)



3 中心域張出部出土土器



1 造成土①出土土器



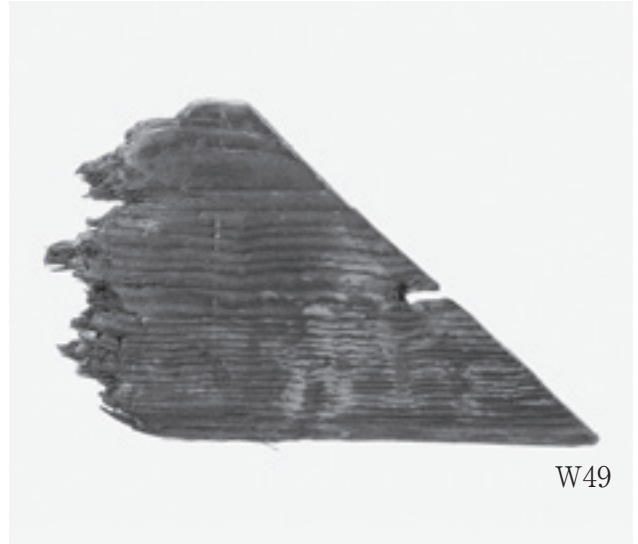
2 造成土②～⑤出土土器



3 造成土出土土器



1 造成土①出土木器 (1)



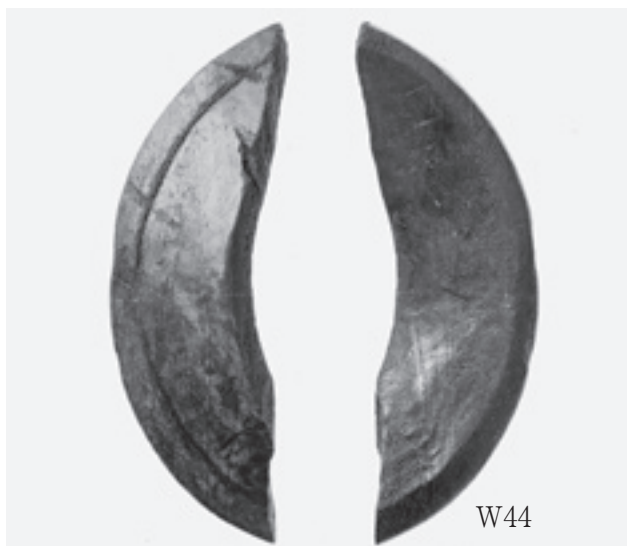
2 造成土①出土木器 (2)



3 造成土①出土木器 (3)

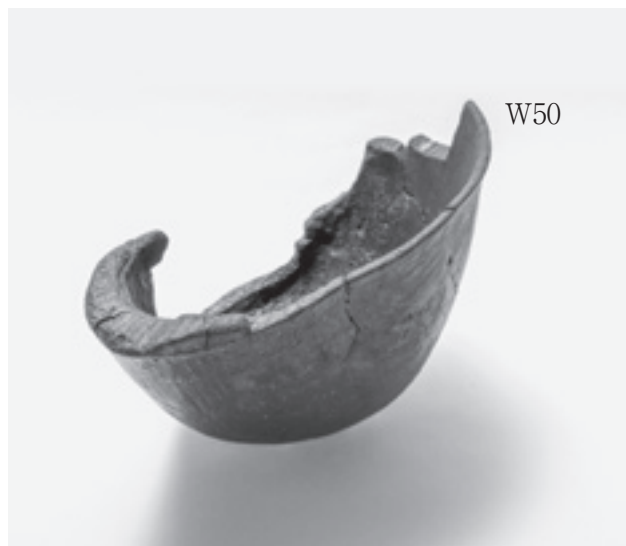


4 造成土①出土木器 (4)



W44

1 造成土①出土木器 (5)



W50

2 造成土②出土木器 (1)



W52

W51

3 造成土②出土木器 (2)

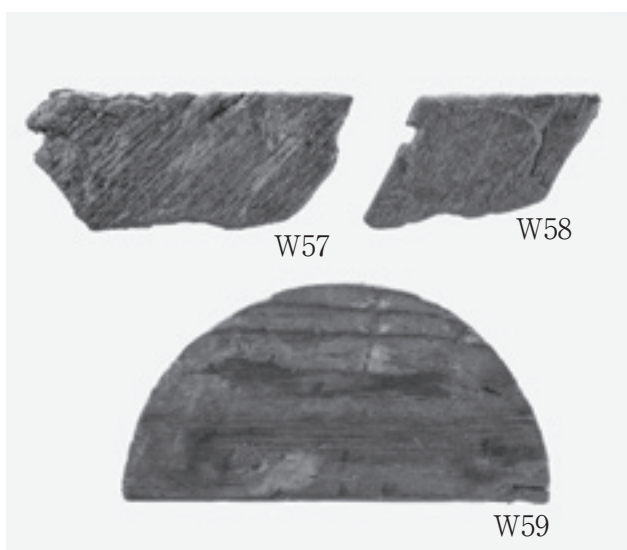


W54

W55

W56

4 造成土②出土木器 (3)



W57

W58

W59

5 造成土③出土木器 (1)



W60

6 造成土③出土木器 (2)



1 造成土④出土木器



2 造成土出土木器 (1)



3 造成土出土木器 (2)



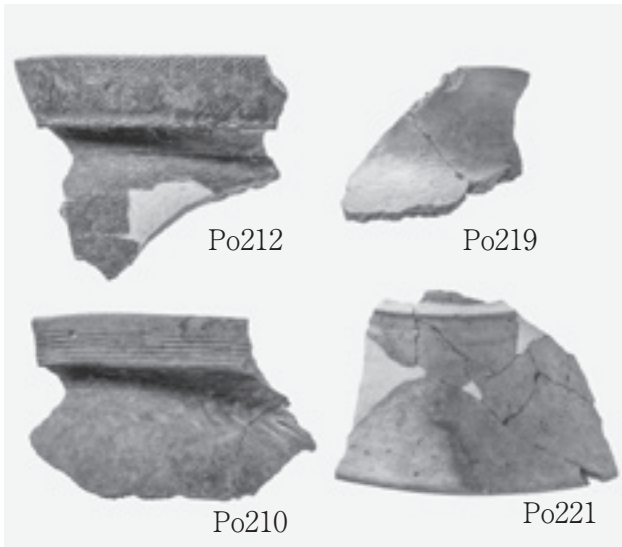
4 造成土出土編組製品



1 造成土出土木器 (3)



2 SD38-B 出土土器 (1)



1 SD38-B 出土土器 (2)



2 SD38-B 出土土器 (3)



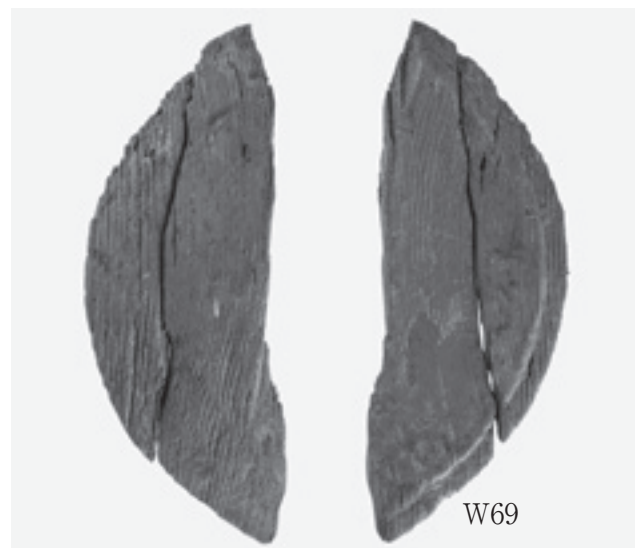
3 SD38-B 出土木器 (1)



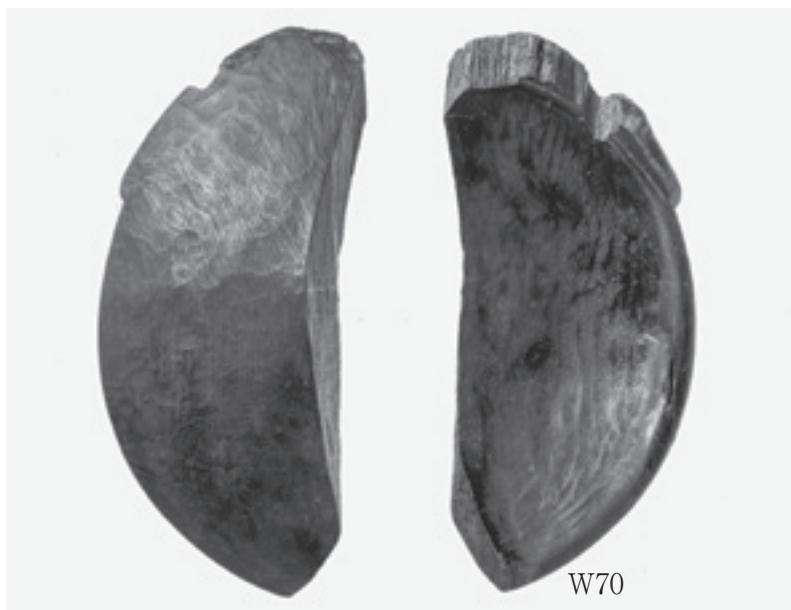
4 SD38-B 出土木器 (2)



5 SD38-B 出土木器 (3)



6 SD38-B 出土木器 (4)



1 SD38-B 出土木器 (5)



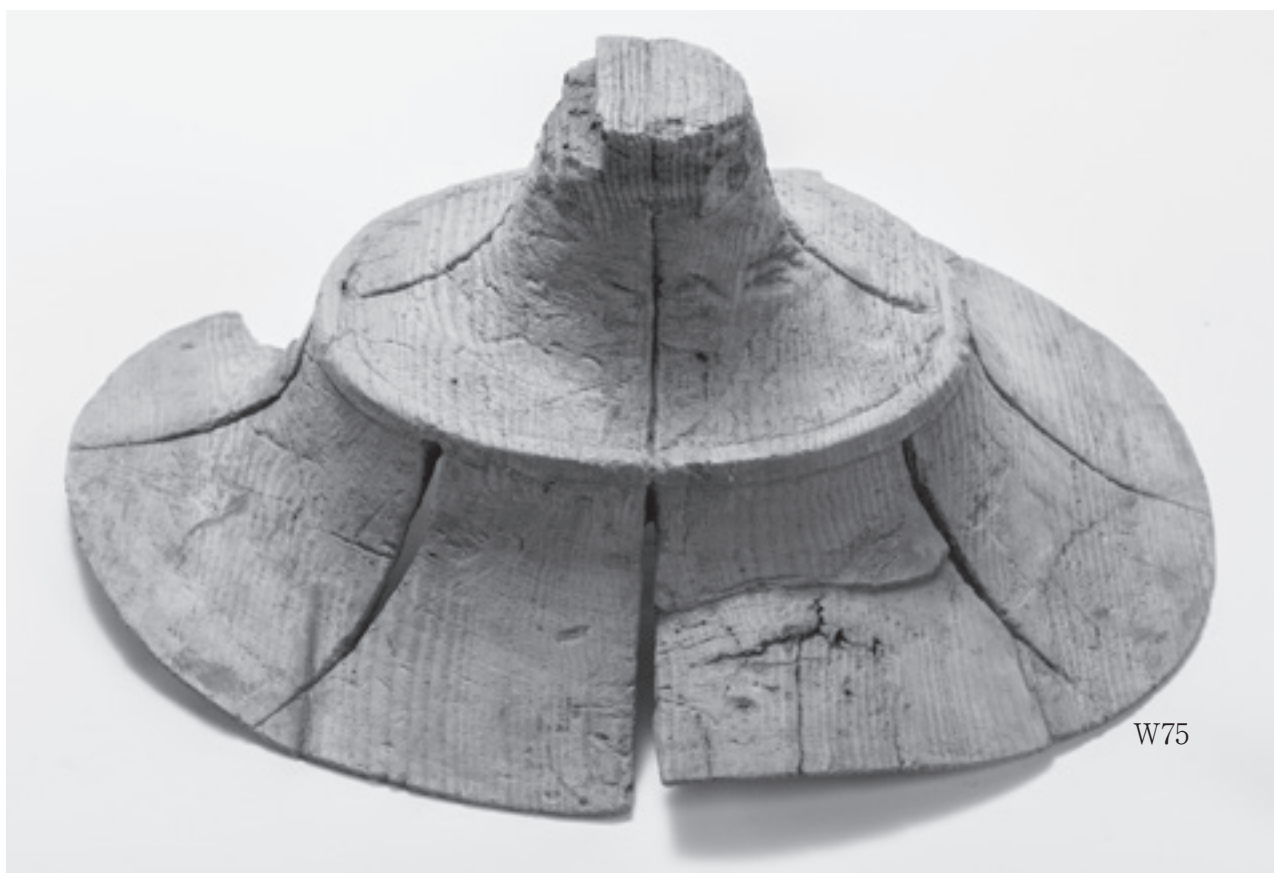
2 SD38-B 出土木器 (6)



3 SD38-B 出土木器 (7)



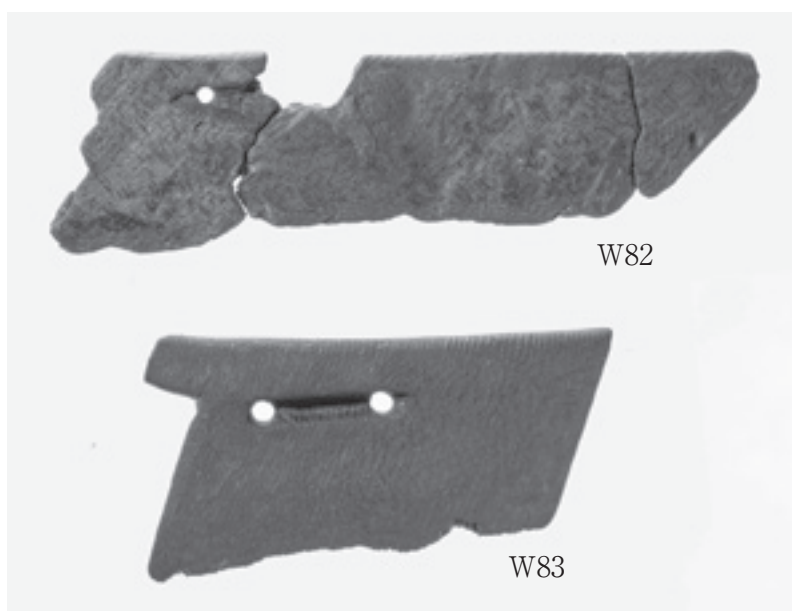
1 SD38-B 出土木器 (8)



2 SD38-B 出土木器 (9)



1 SD38-B 出土木器 (10)



2 SD38-B 出土木器 (11)



3 SD38-B 出土木器 (12)



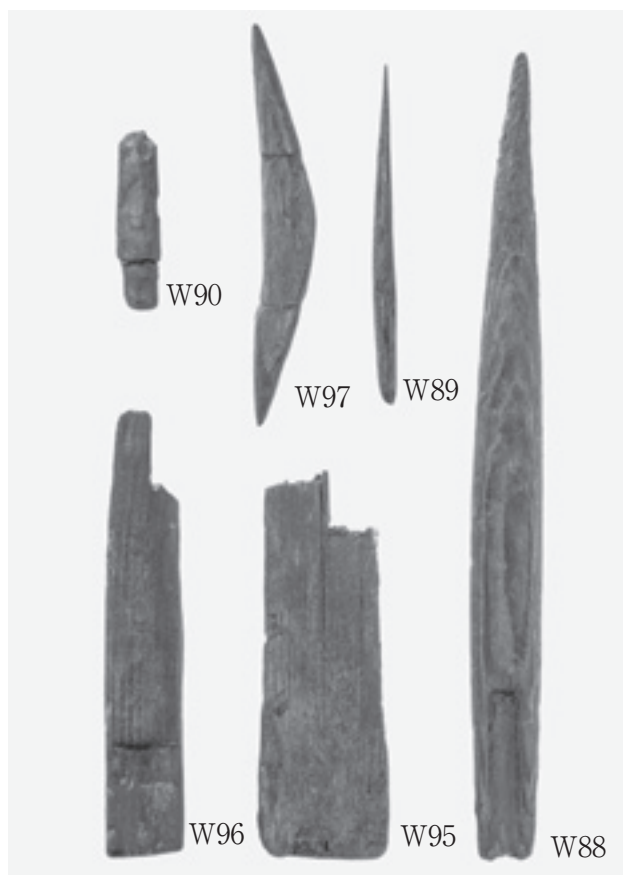
1 SD38-B 出土木器 (13)



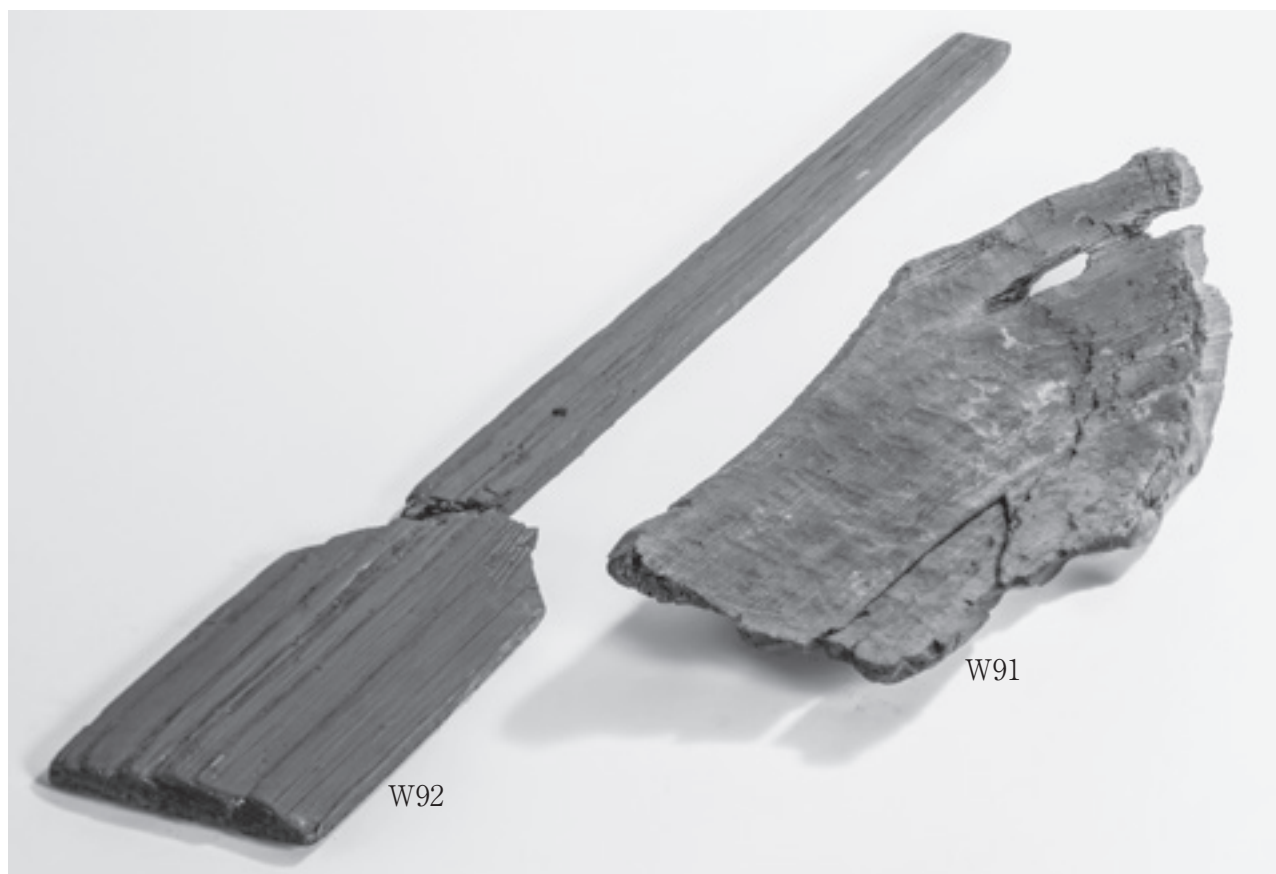
2 SD38-B 出土木器 (14)



3 SD38-B 出土木器 (15)



4 SD38-B 出土木器 (16)



1 SD38-B 出土木器 (17)



2 SD38-B 出土木器 (18)



1 SD38-B 出土木器 (19)

※遺物番号が無いものは写真のみ



2 SD38-B 出土木器 (20)



3 SD38-B 出土木器 (21)



W104

1 SD38-B 出土木器 (22)



W105

W118

2 SD38-B 出土木器 (23)



W125

W117

3 SD38-B 出土木器 (24)



W99

W100

W98

W102

W103

4 SD38-B 出土木器 (25)



1 SD38-B 出土木器 (26)



2 SD38-B 出土木器 (27)



1 SD38-B 出土木器 (28)



2 SD38-B 出土編組製品 (1)



3 SD38-B 出土編組製品 (2)



Ba2

1 SD38-B 出土編組製品 (3)



Po222

Po226

Po227

Po223

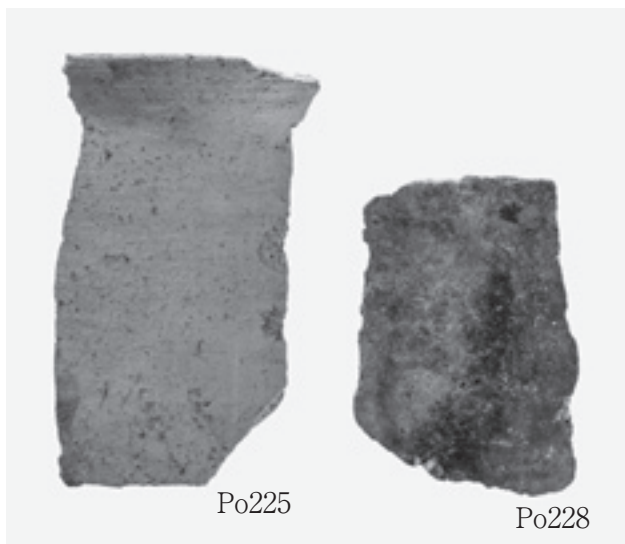
Po224

2 SD38-D 出土土器



W132

3 SD38-D 出土木器 (1)



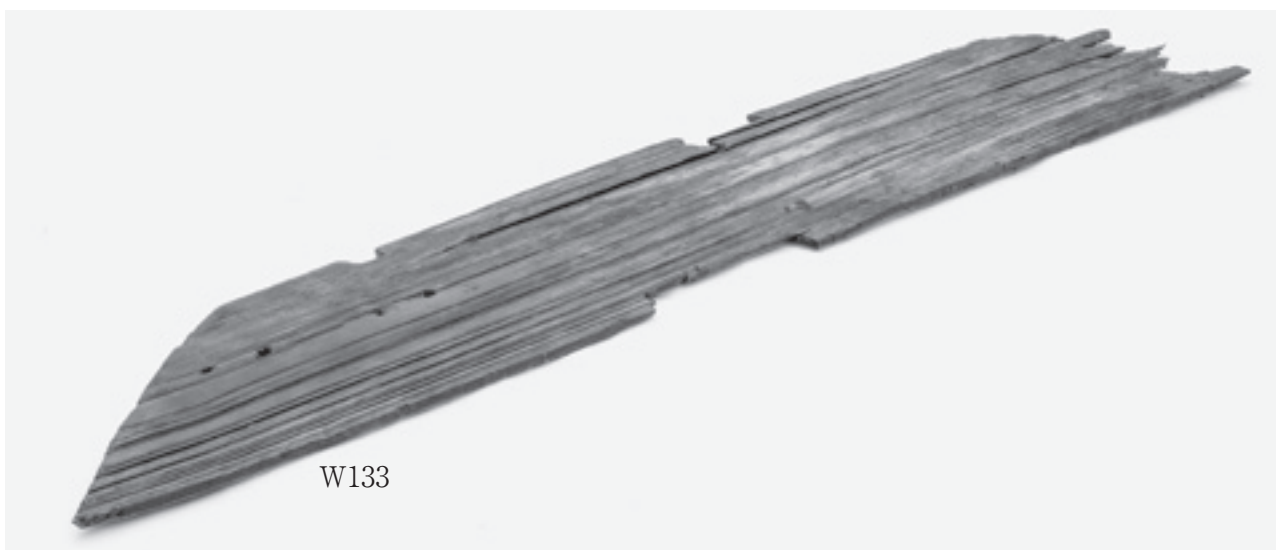
1 SD38-D・E 出土土器



2 SD38-D 出土木器 (2)



3 SD38-D 出土木器 (3)

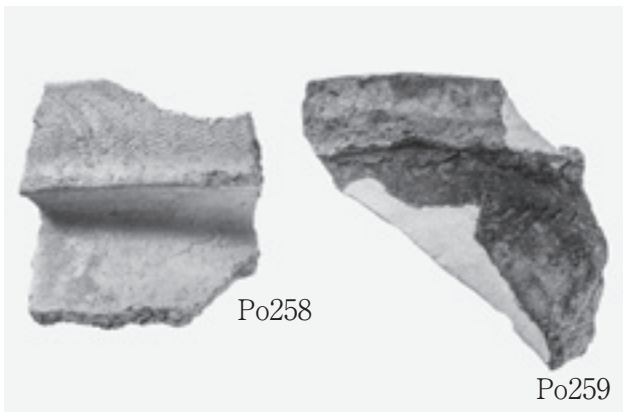


4 SD38-D 出土木器 (4)

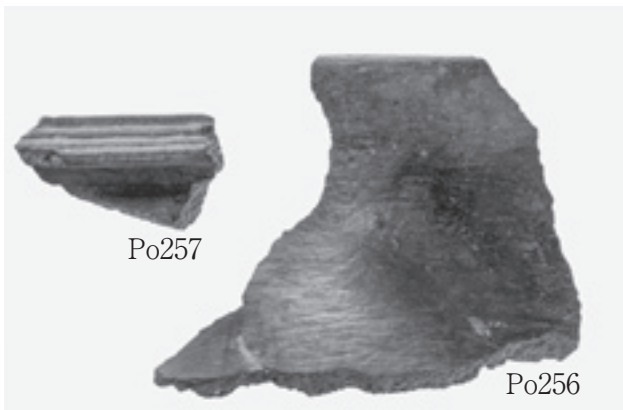


W134

1 SD38-E 出土木器



2 88 柱穴出土土器



3 85·87 土坑出土土器



W181

4 88 柱穴出土木器



1 SD38-Ca・b 出土土器および人骨共伴土器



2 SD38-Ca・b 出土土器 (1)



3 SD38-Ca・b 出土土器 (2)



1 SD38-Ca · b 出土土器 (3)



2 SD38-Ca · b 出土土器 (4)



3 SD38-Ca · b 出土土器 (5)



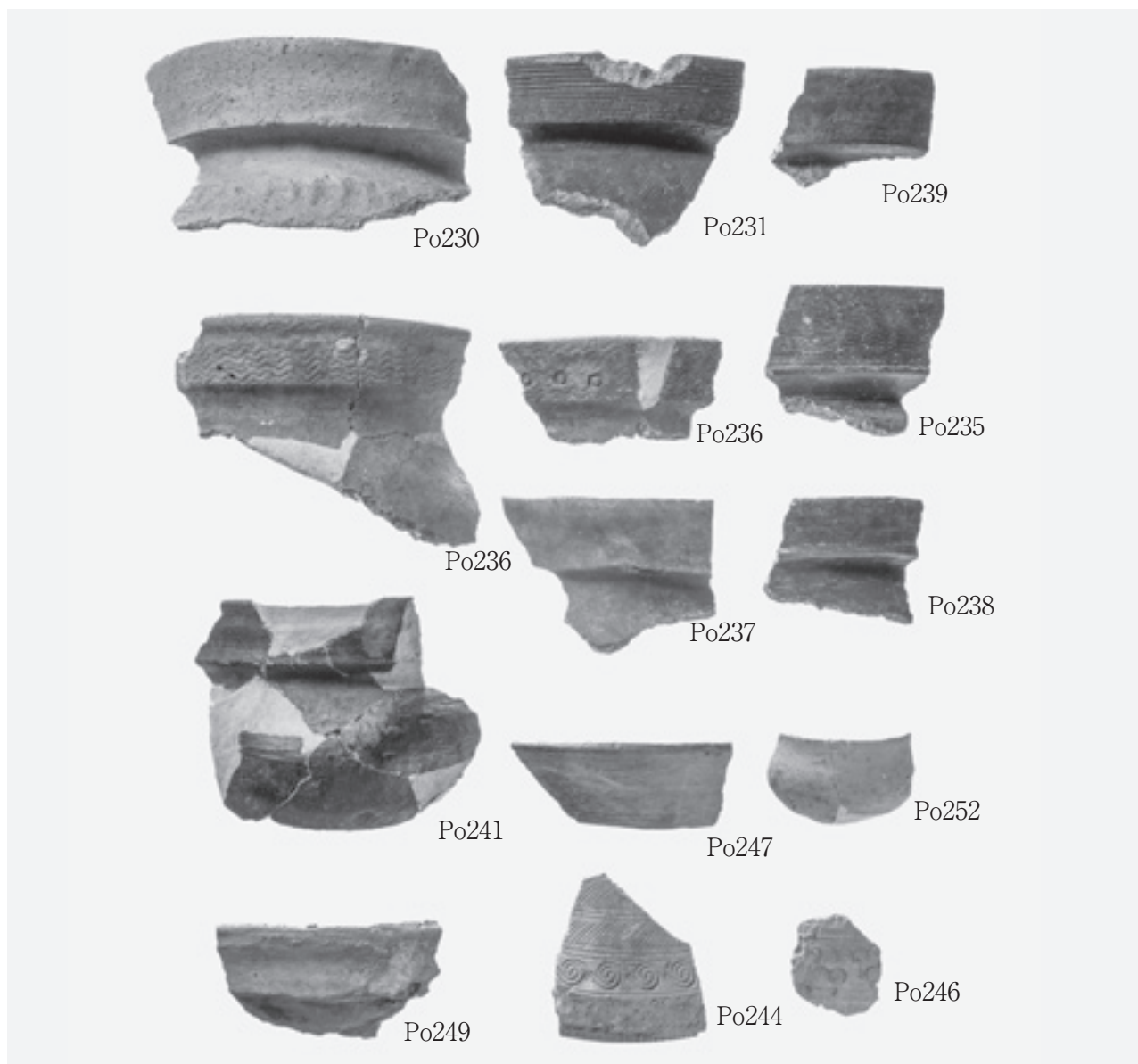
4 SD38-Ca · b 出土土器 (6)



5 SD38 - Ca · b 出土土器 (7)



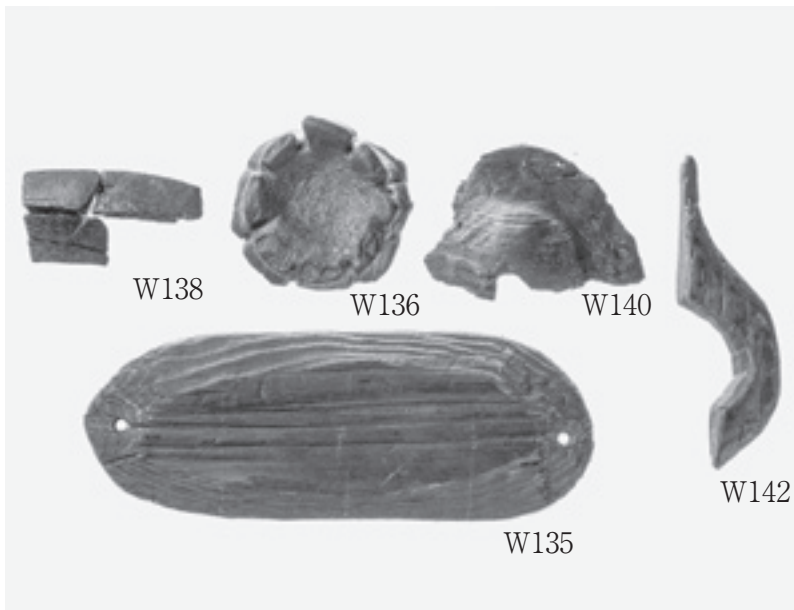
6 SD38 - Ca · b 出土土器 (8)



1 SD38-Ca・b 出土土器および人骨共伴土器



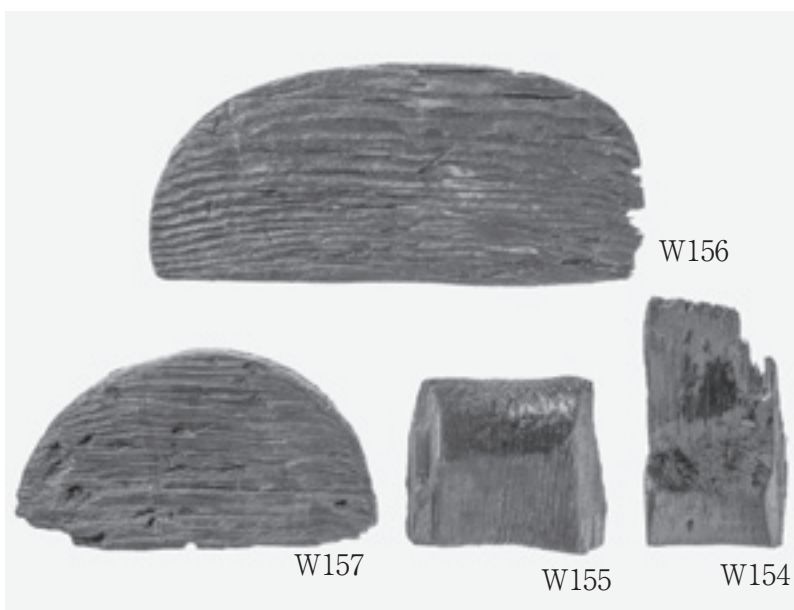
2 SD38-Ca・b 出土木器 (1)



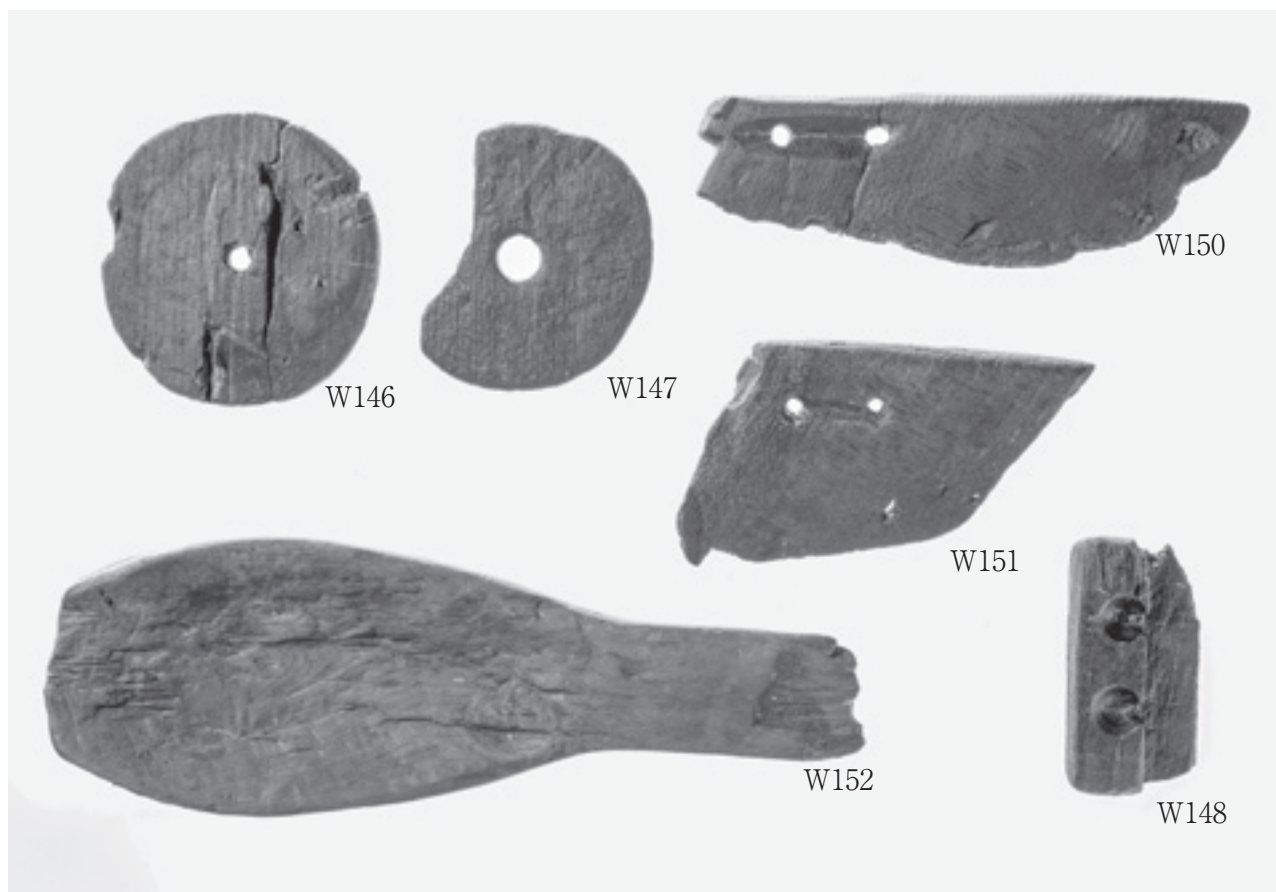
1 SD38-Ca・b 出土木器 (2)



2 SD38-Ca・b 出土木器 (3)



3 SD38-Ca・b 出土木器 (4)



1 SD38-Ca・b 出土木器 (5)



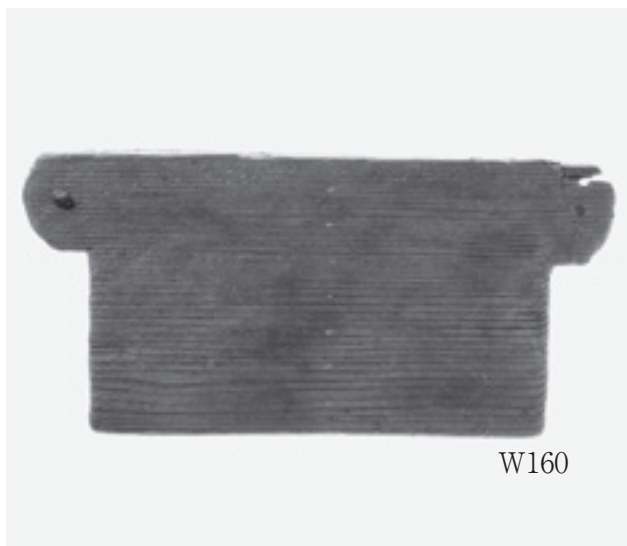
2 SD38-Ca・b 出土木器 (6)



3 SD38-Ca・b 出土木器 (7)



4 SD38-Ca・b 出土木器 (8)



1 SD38-Ca · b 出土木器 (9)



2 SD38-Ca · b 出土木器 (10)



3 SD38-Ca · b 出土木器 (11)



4 SD38-Ca · b 出土木器 (12)



5 SD38-Ca · b 出土木器 (13)



6 SD38-Ca · b 出土木器 (14)



1 SD38-Ca · b 出土木器 (15)



2 SD38-Ca · b 出土木器 (16)



3 SD38-Ca · b 出土木器 (17)



4 SD38-Ca · b 出土木器 (18)



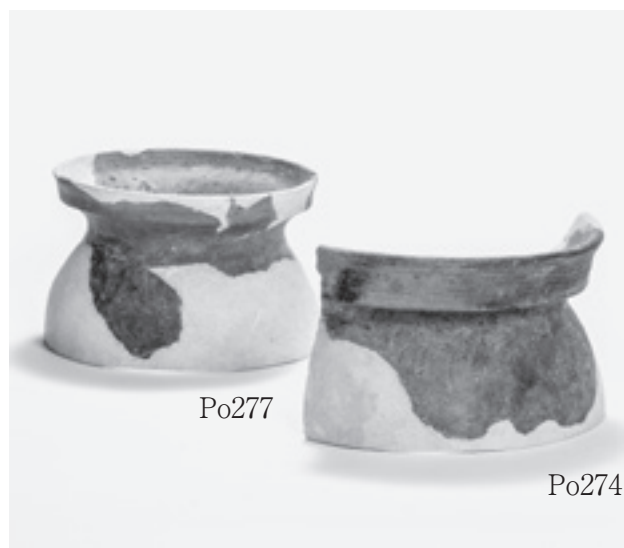
1 SD38-C 中・下層出土土器 (1)



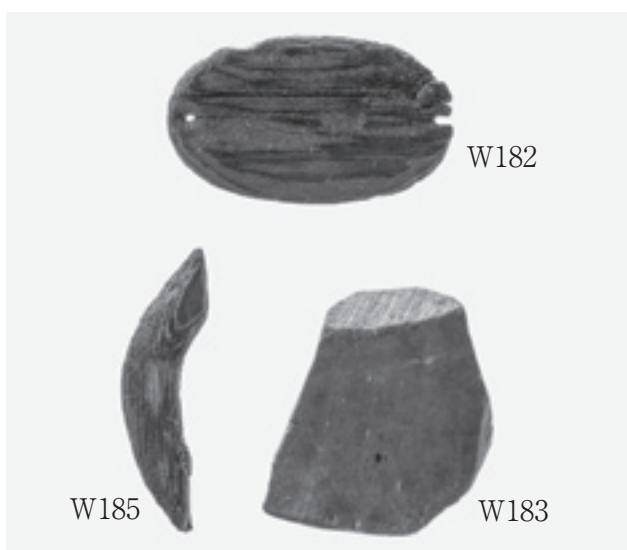
2 SD38-C 中・下層出土土器 (2)



3 SD38-C 中・下層出土土器 (3)



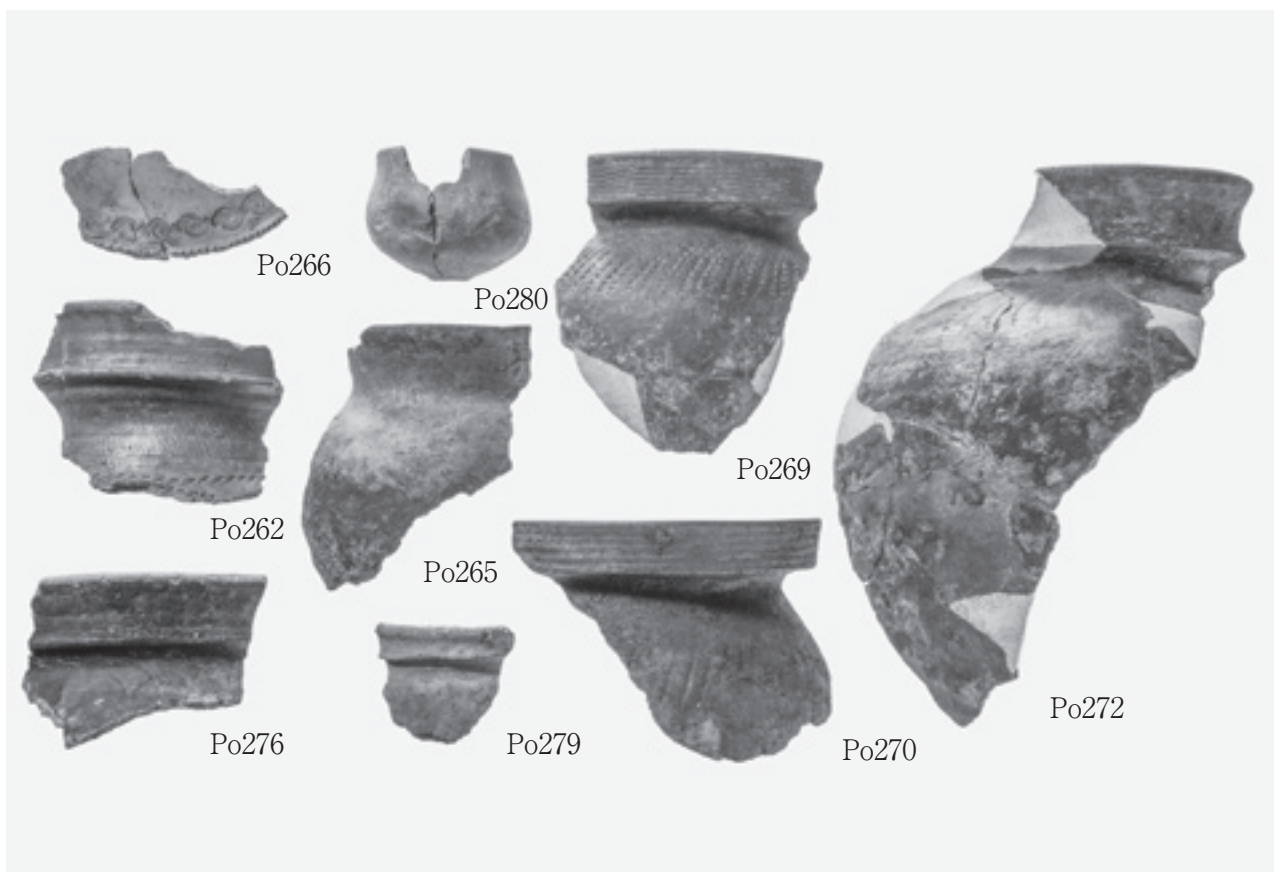
4 SD38-C 中・下層出土土器 (4)



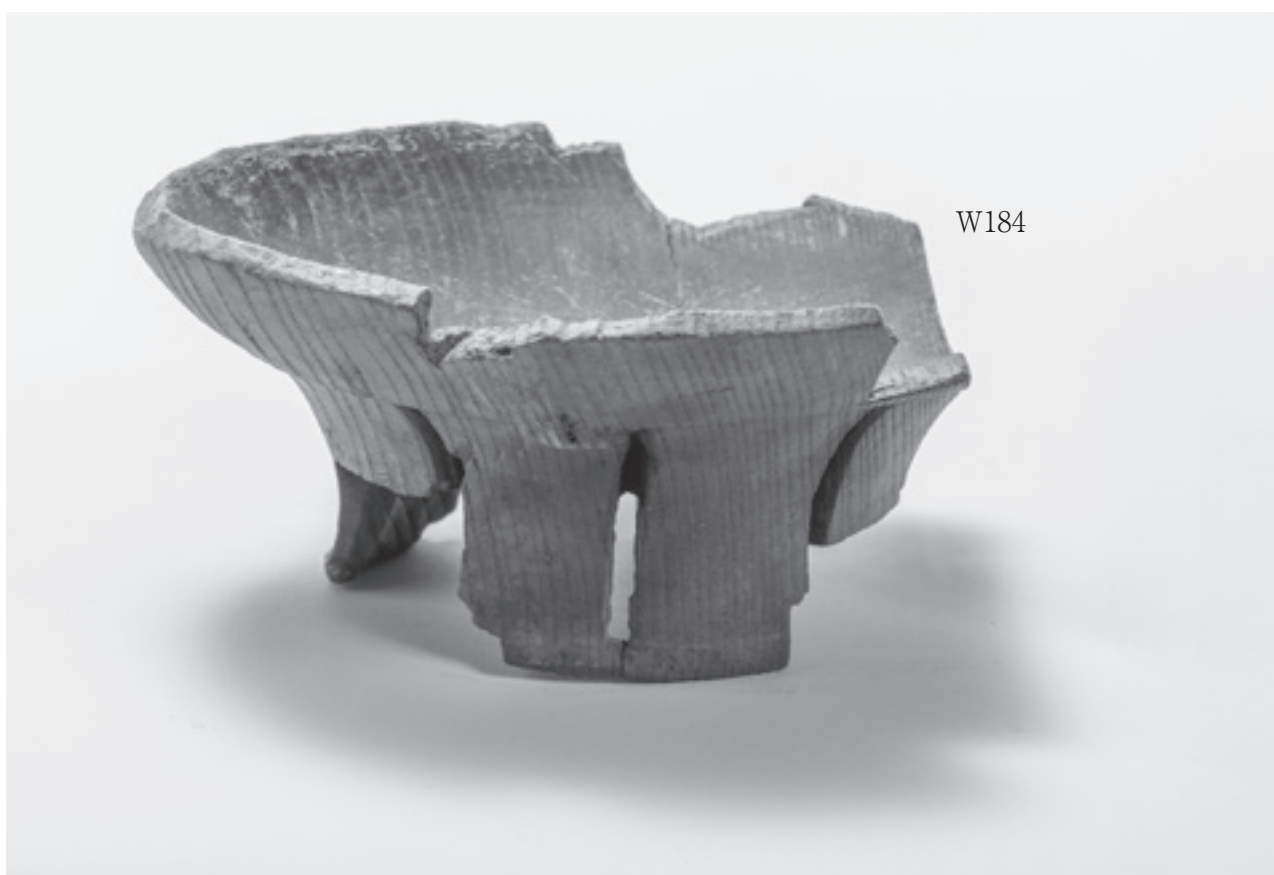
5 SD38-C 中・下層出土木器 (1)



6 SD38-C 中・下層出土木器 (2)



1 SD38-C 中・下層出土土器 (5)



2 SD38-C 中・下層出土木器 (3)



1 SD38-C 中・下層出土木器 (4)



2 SD38-C 中・下層出土木器 (5)



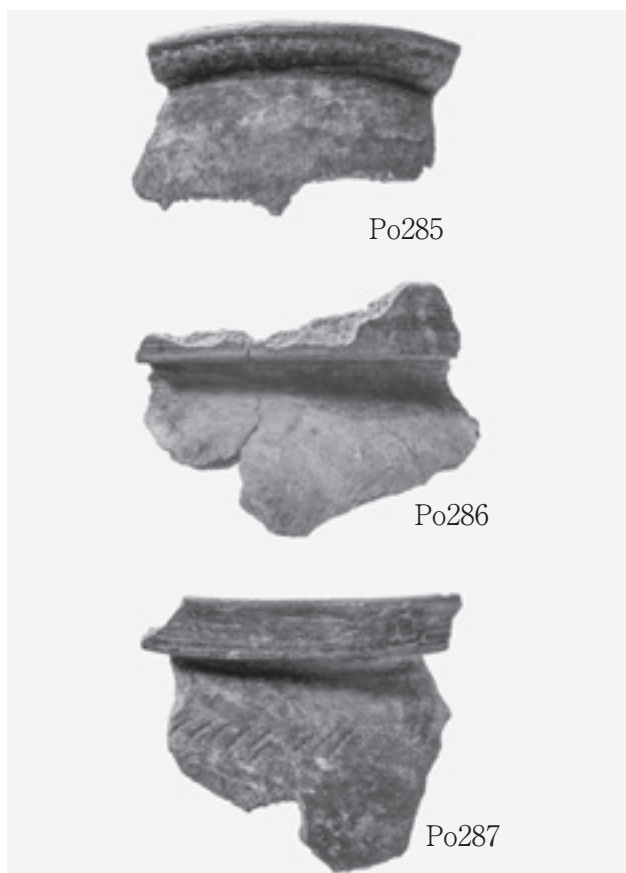
3 SD38-C 中・下層出土木器 (6)



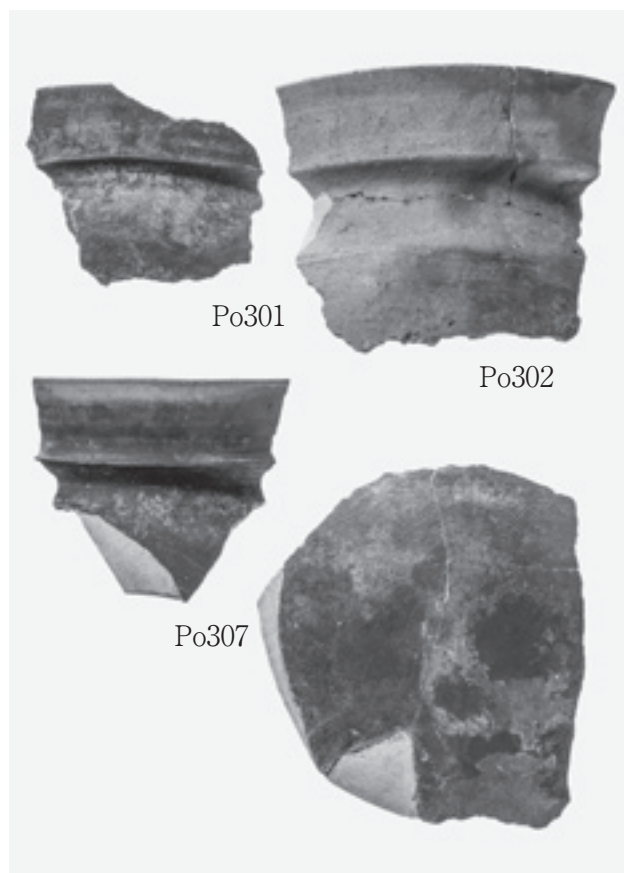
1 SD38-C 中・下層出土木器 (7)



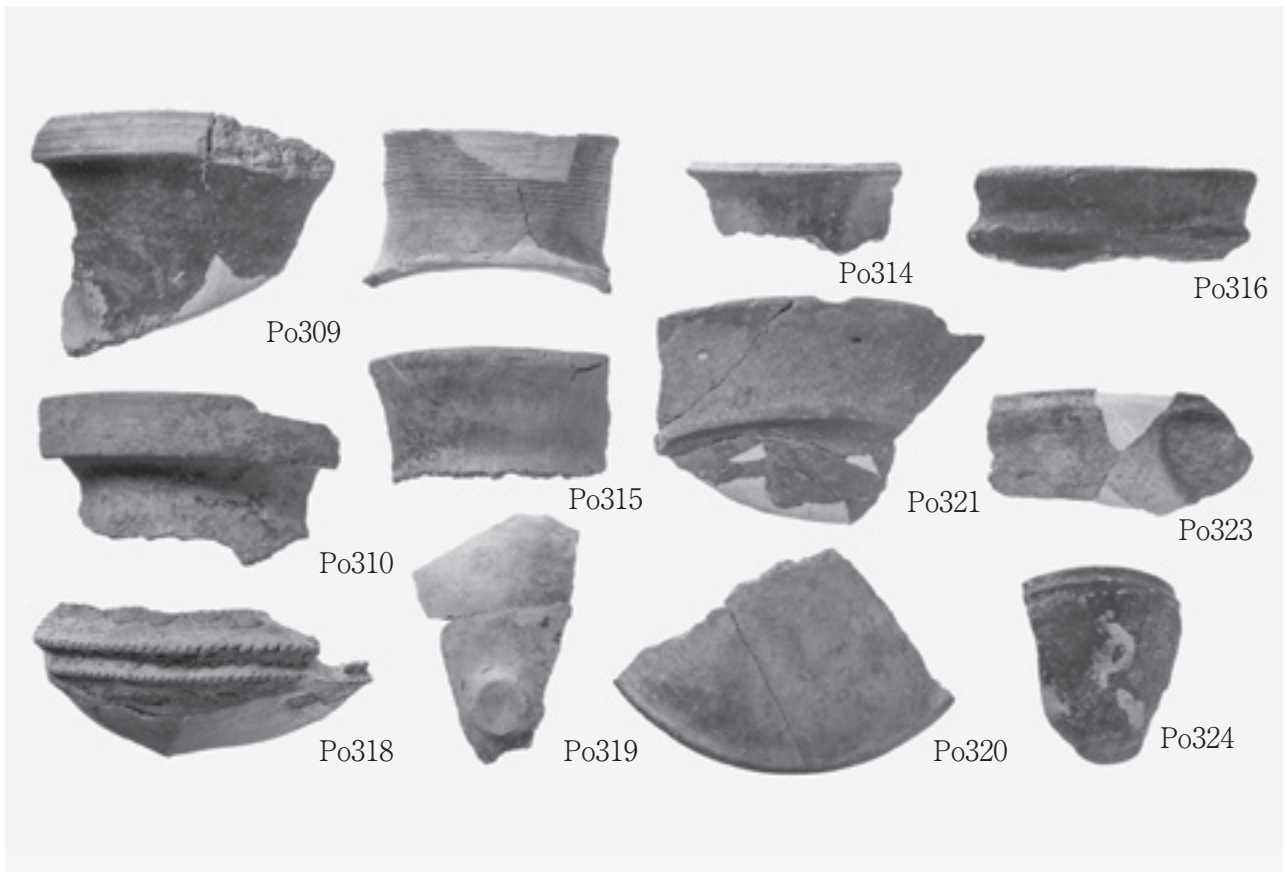
2 SD38-C 中・下層出土木器 (8)



3 SD38 出土土器 (1)



4 SD38 出土土器 (2)



1 SD38 出土土器 (3)



2 SD38 出土土器 (4)



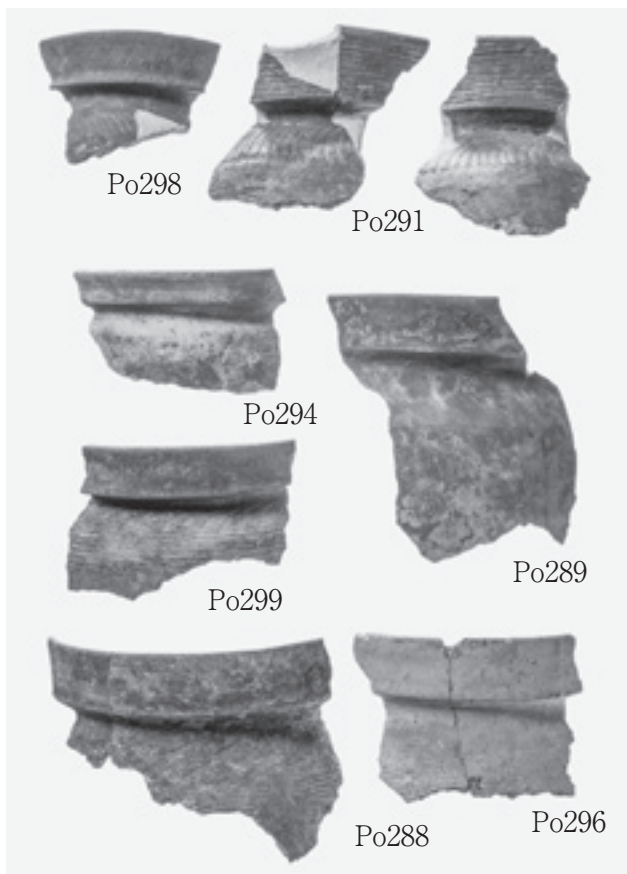
1 SD38 出土土器 (5)



2 SD38 出土土器 (6)



3 SD38 出土土器 (7)



1 SD38 出土土器 (8)



2 SD38 出土木器 (1)



3 SD38 出土木器 (2)



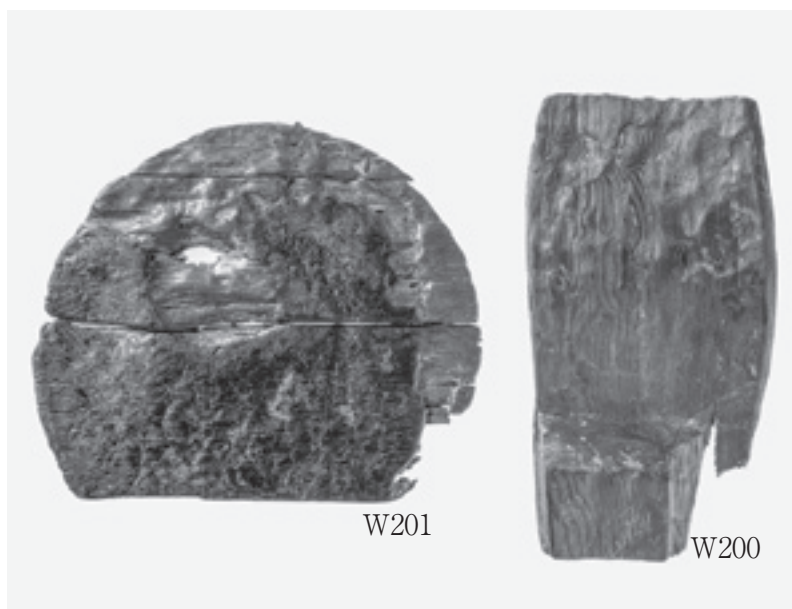
4 SD38 出土木器 (3)



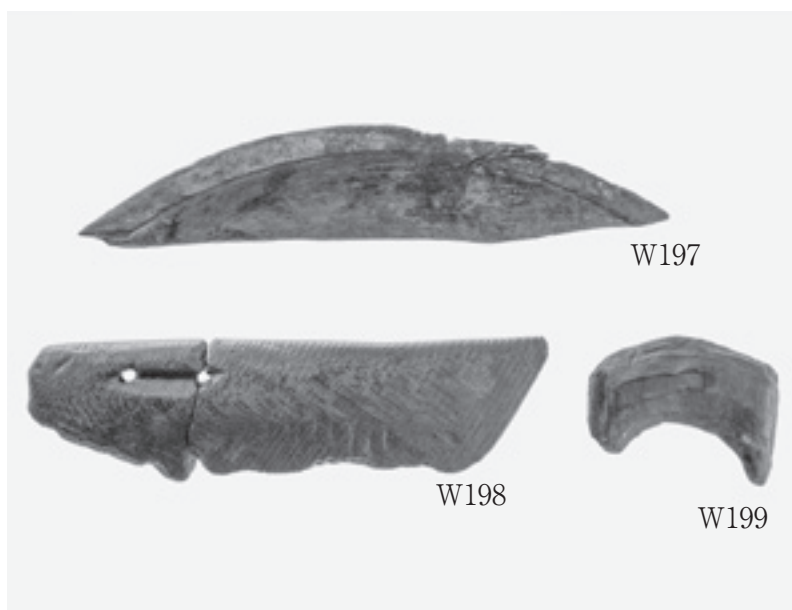
1 SD38 出土木器 (4)



2 SD38 出土木器 (5)



3 SD38 出土木器 (6)



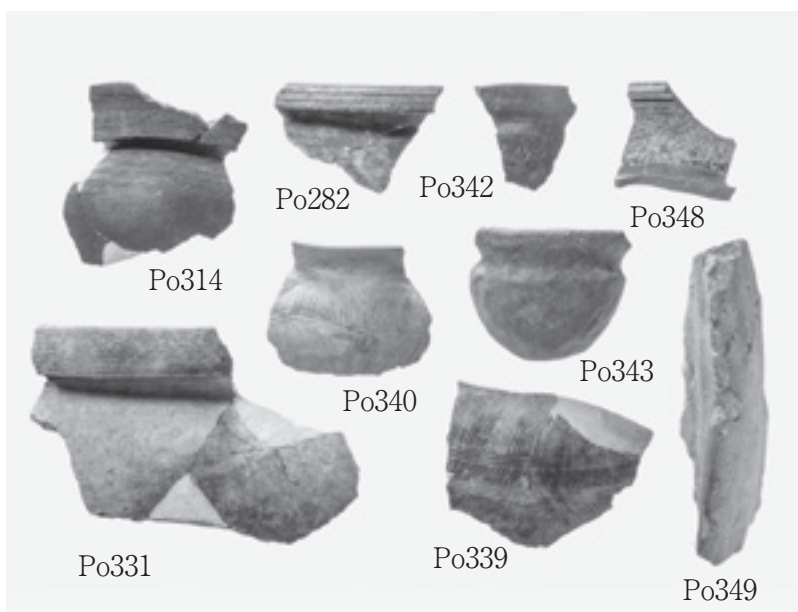
4 SD38 出土木器 (7)



1 調査区内出土土器 (1)



2 調査区内出土土器 (2)



3 調査区内出土土器 (3)



1 調査区内出土土器 (4)



2 調査区内出土土器 (5)



3 調査区内出土土器 (6)



4 調査区内出土土器 (7)



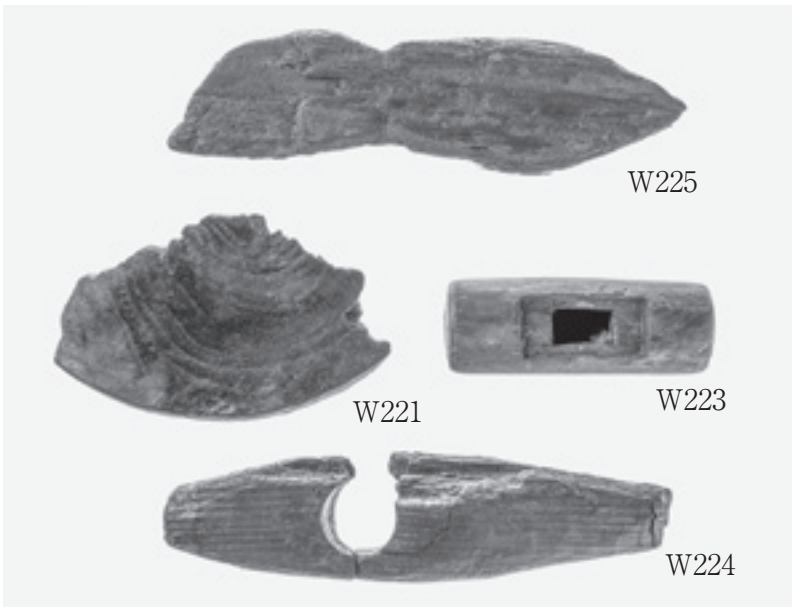
5 調査区内出土木器 (1)



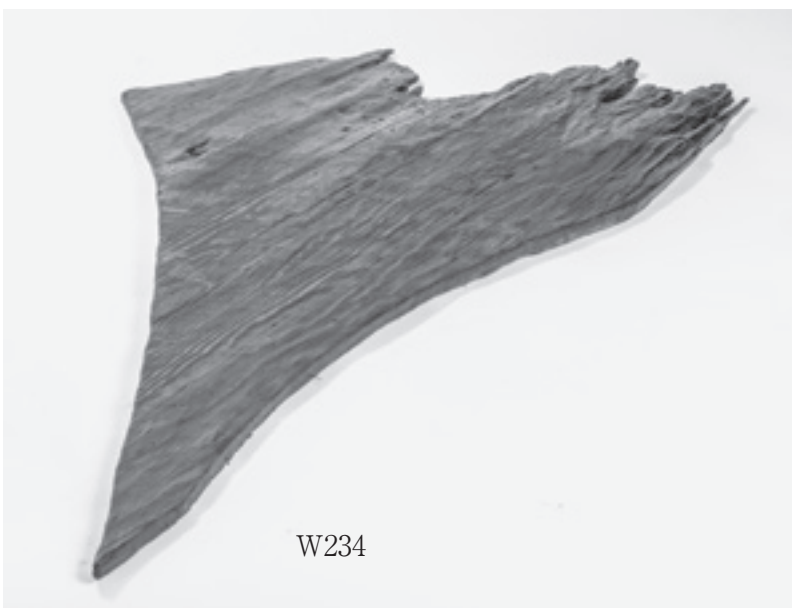
6 調査区内出土木器 (2)



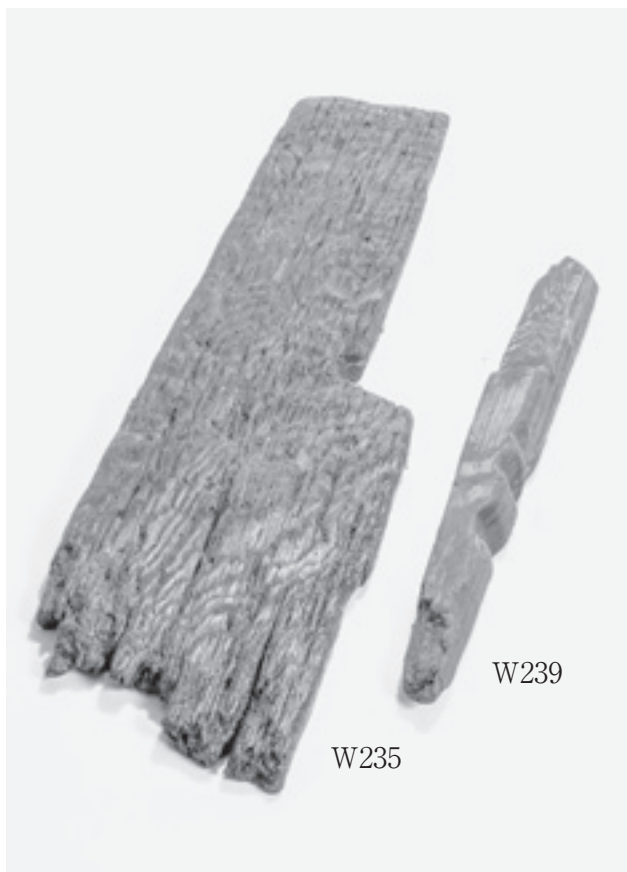
1 調査区内出土木器 (3)



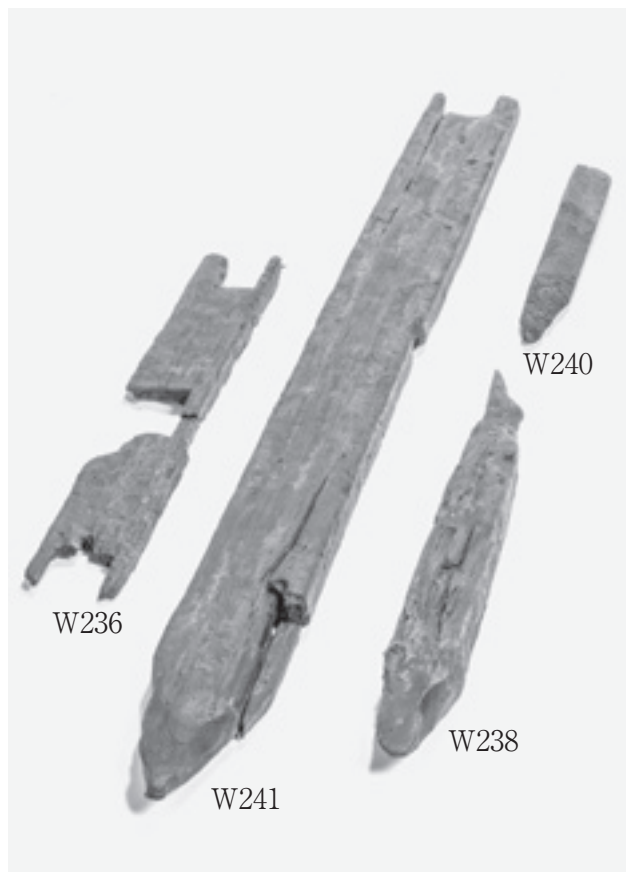
2 調査区内出土木器 (4)



3 調査区内出土木器 (5)



1 調査区内出土木器 (6)



2 調査区内出土木器 (7)



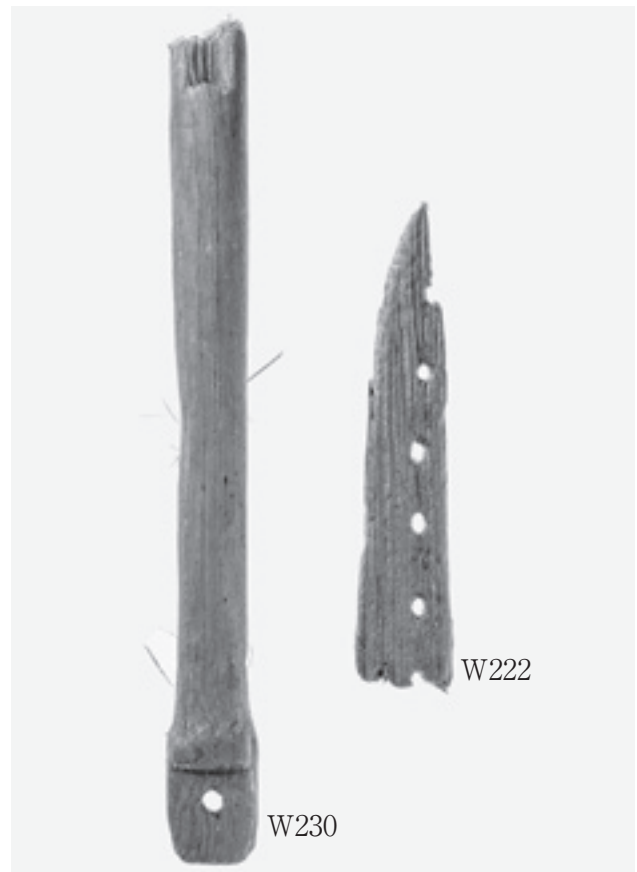
3 調査区内出土木器 (8)



4 調査区内出土木器 (9)



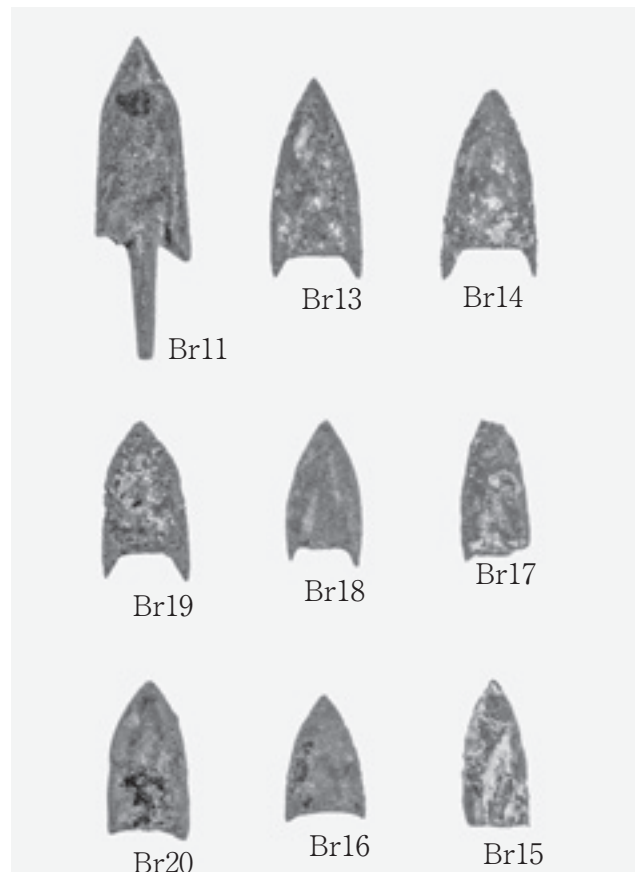
1 調査区内出土木器 (10)



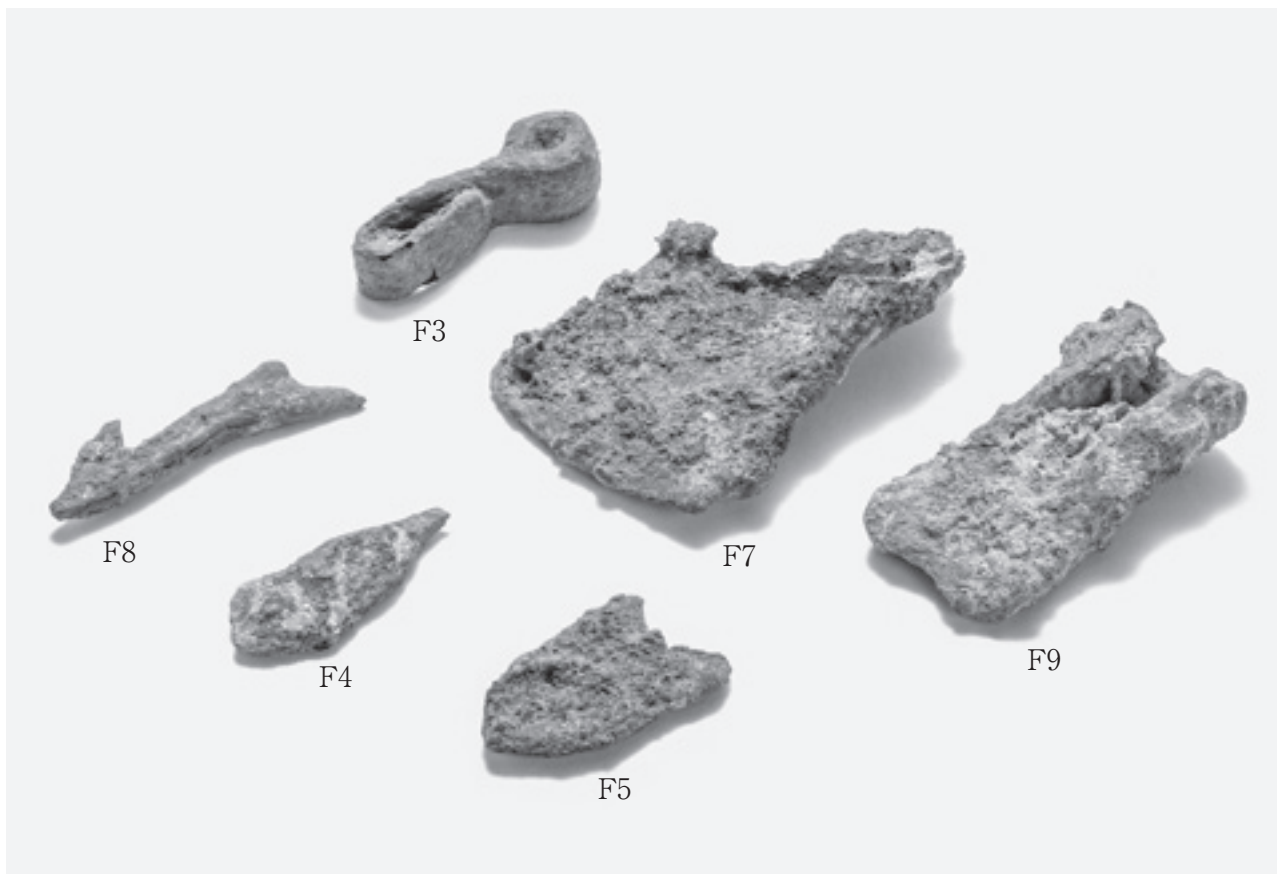
2 調査区内出土木器 (11)



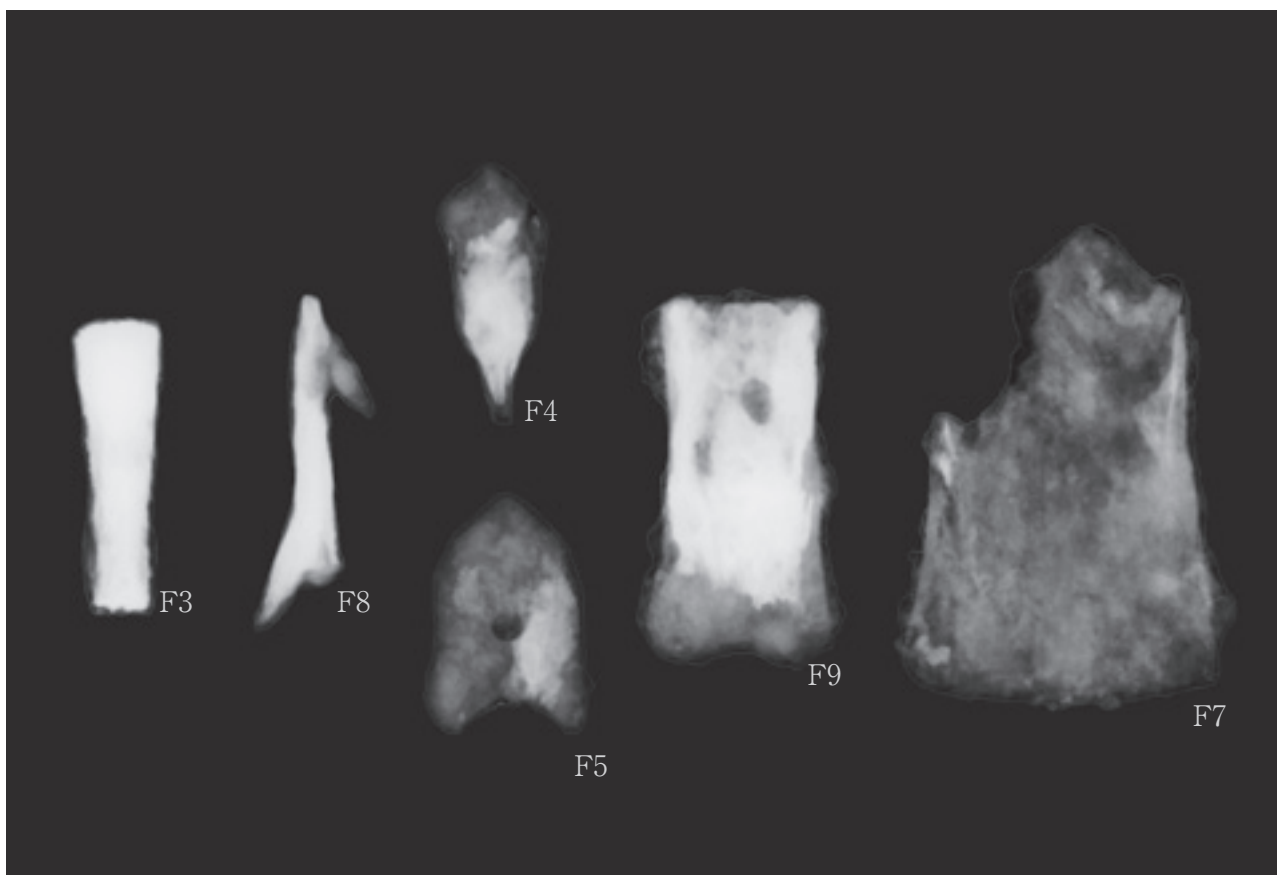
3 調査区内出土木器 (12)



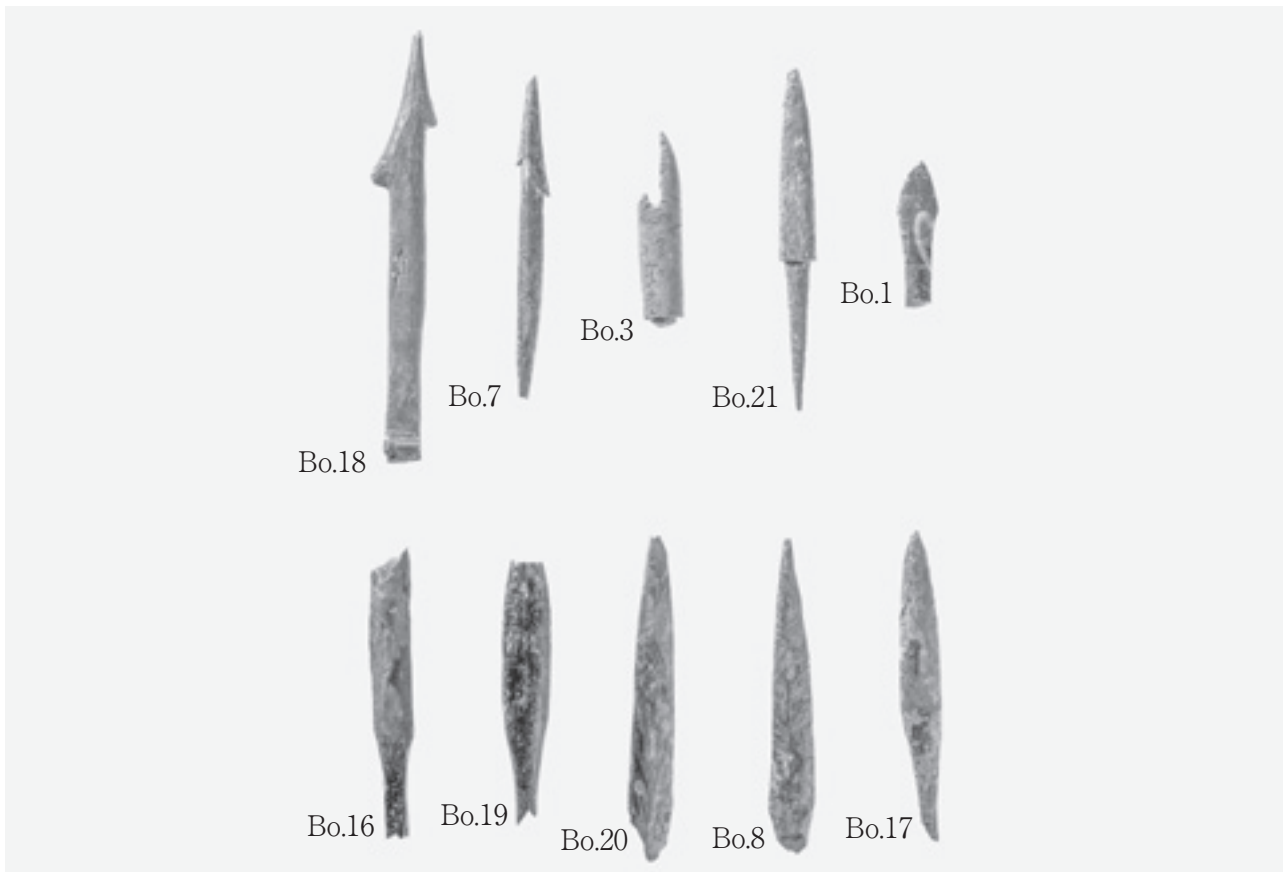
4 銅鏃



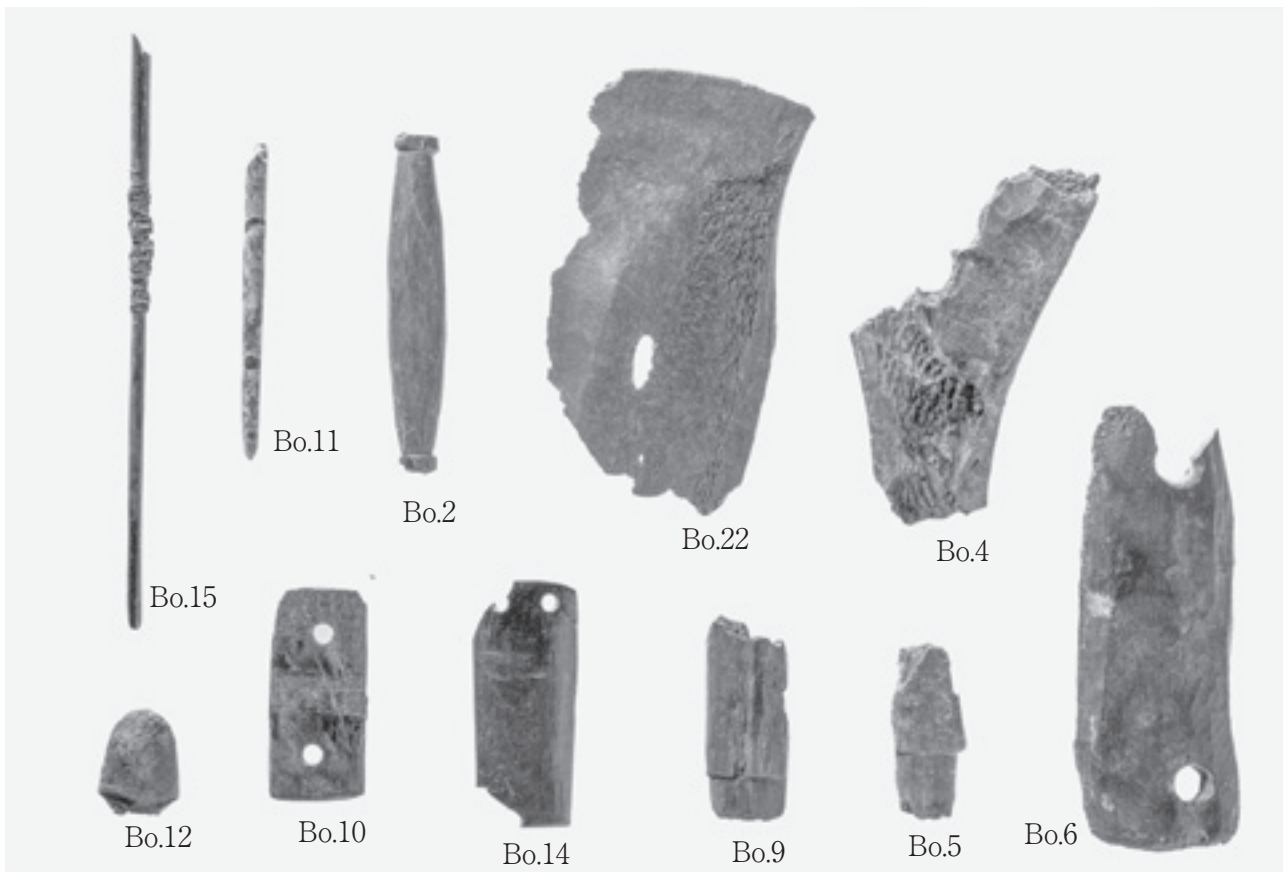
1 鉄器



2 鉄器 (X線)



1 骨角器 (ヤス、根ばさみ、骨鏃)



2 骨角器 (卜骨、装身具ほか)



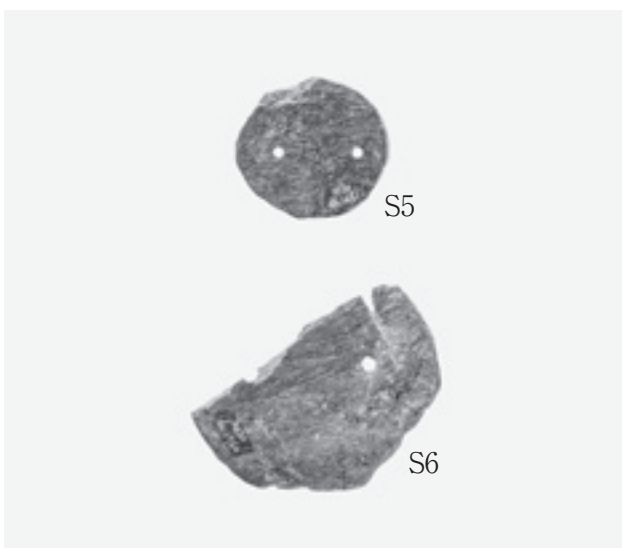
1 クジラ類椎骨



2 石斧、石包丁



3 砥石



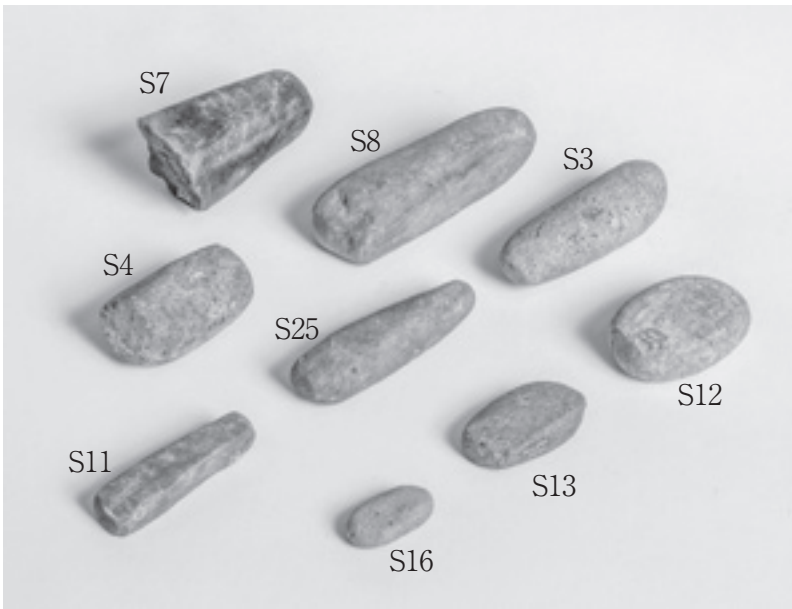
4 滑石製模造品



5 石錘



1 石器 (玉作関連)

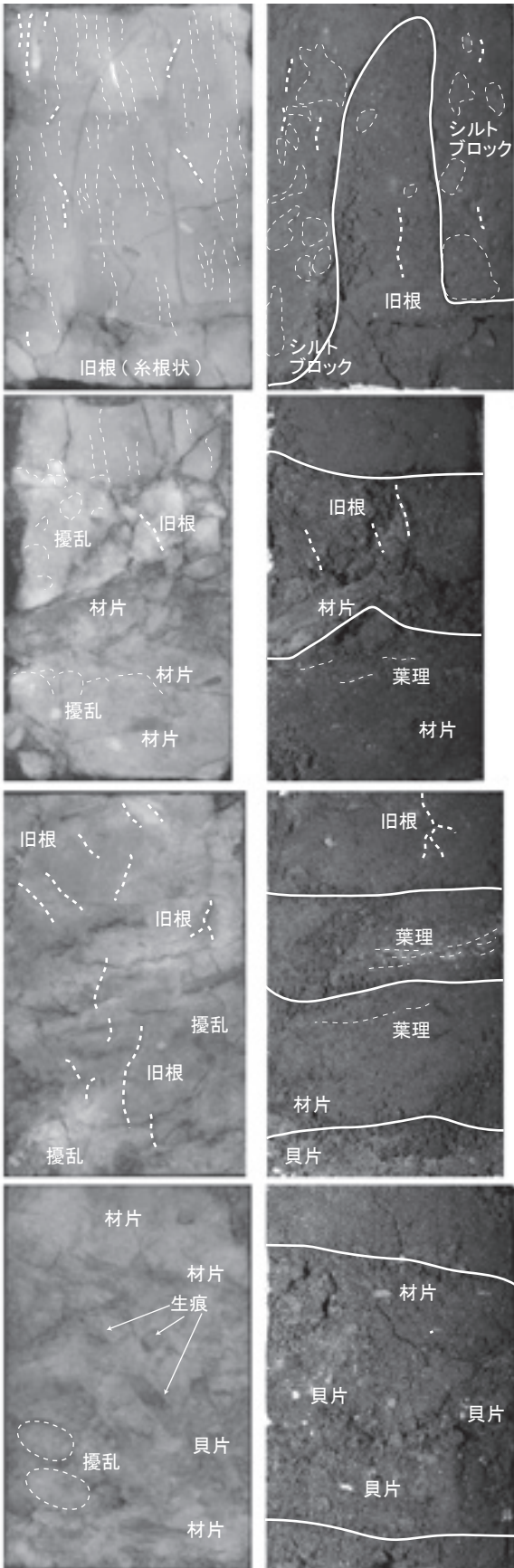


2 石器 (不明石器)



3 石器 (敲石、凹石)





34 層 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト
酸化鉄、旧根、糸根状旧根含む
耕作痕?とみられる擾乱(団粒状の
シルトブロック)が多数みられる

43 層 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト
酸化鉄、旧根、糸根状旧根含む
耕作痕?とみられる擾乱(団粒状の
シルトブロック)がみられる

81 層 10YR2/1 黒色腐植質砂質シルト
(植物遺体、木材含む)
旧根、擾乱がみられる。

84 層 2.5Y2/1 黒色腐植質砂質シルト
(植物遺体、木材含む)
旧根、擾乱がみられる。
平行葉理が部分的に破壊される。

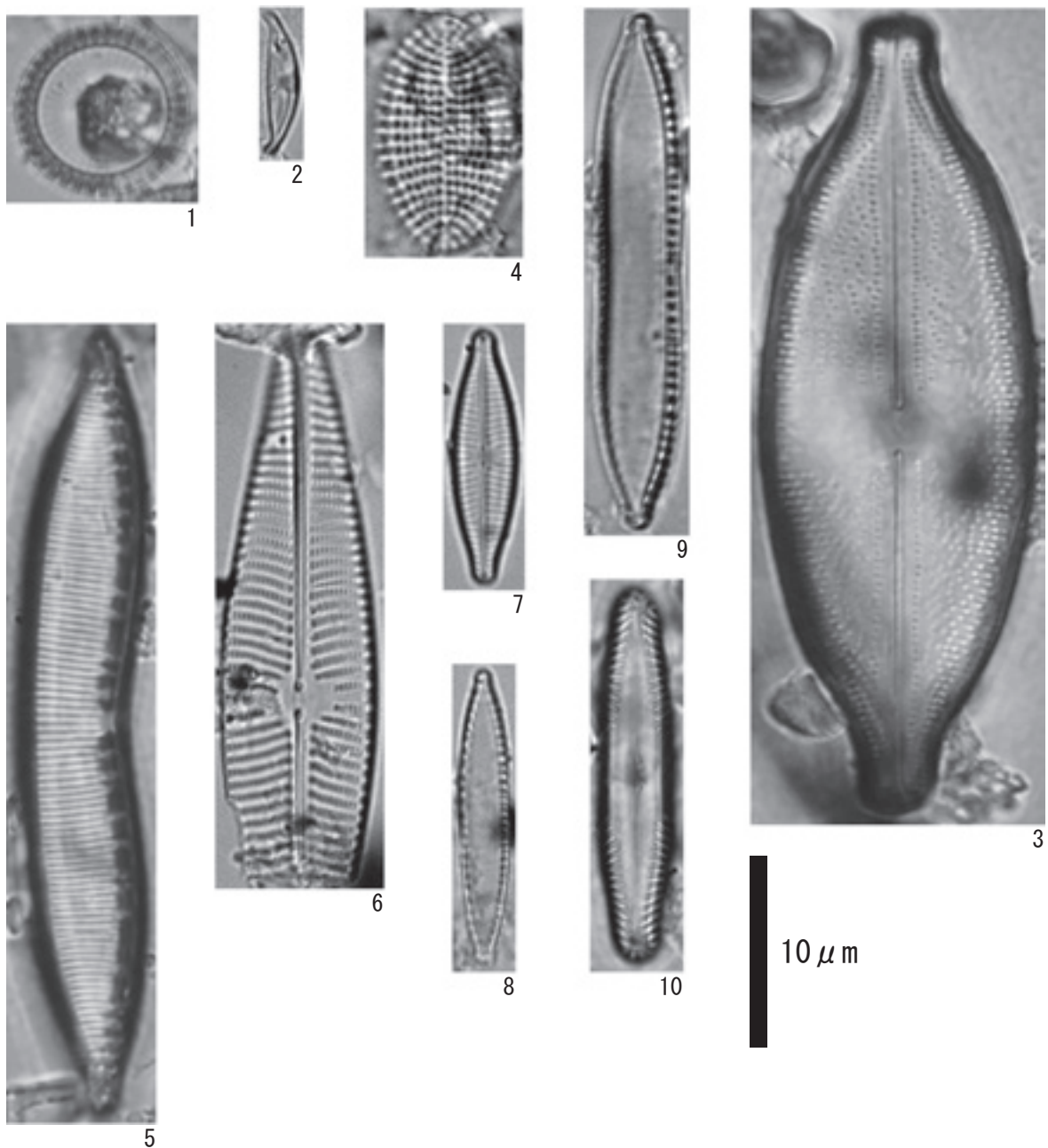
99 層 10YR2/1 黒色砂混じり腐植質シルト
84 層に似るが、砂分が多い。

100 層 10YR2/1 黒色砂混じり腐植質シルト
(植物遺体、木材含む)
旧根、擾乱がみられる。
平行葉理が、擾乱により部分的に破壊される。

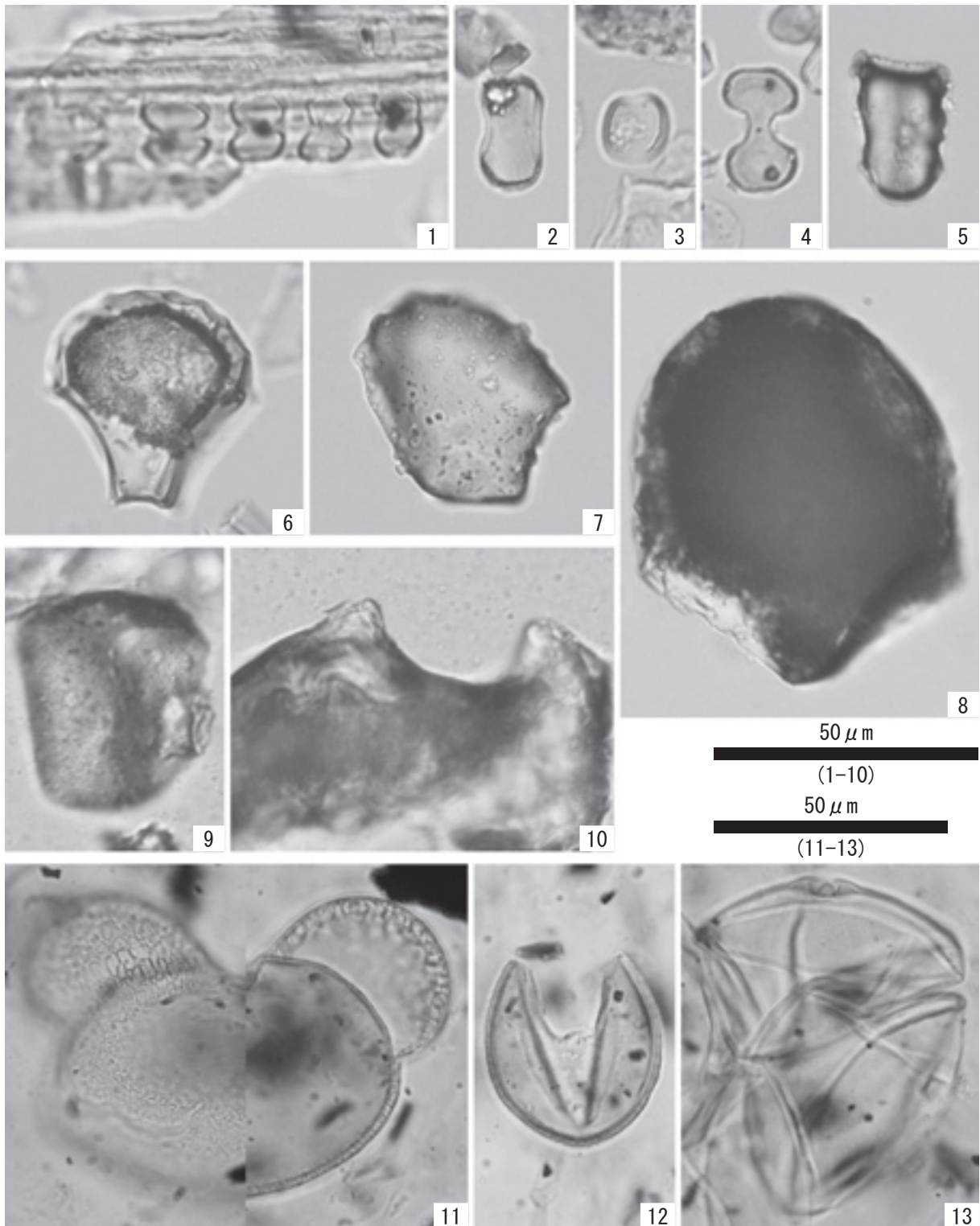
105 層 10YR3/1 黒褐色淘汰の悪い粗粒砂
(植物遺体、貝、種実等含む)

110 層 10YR2/1 黒色淘汰の悪い粗粒砂
(植物遺体、貝、種実等含む)
生痕、擾乱がみられる。

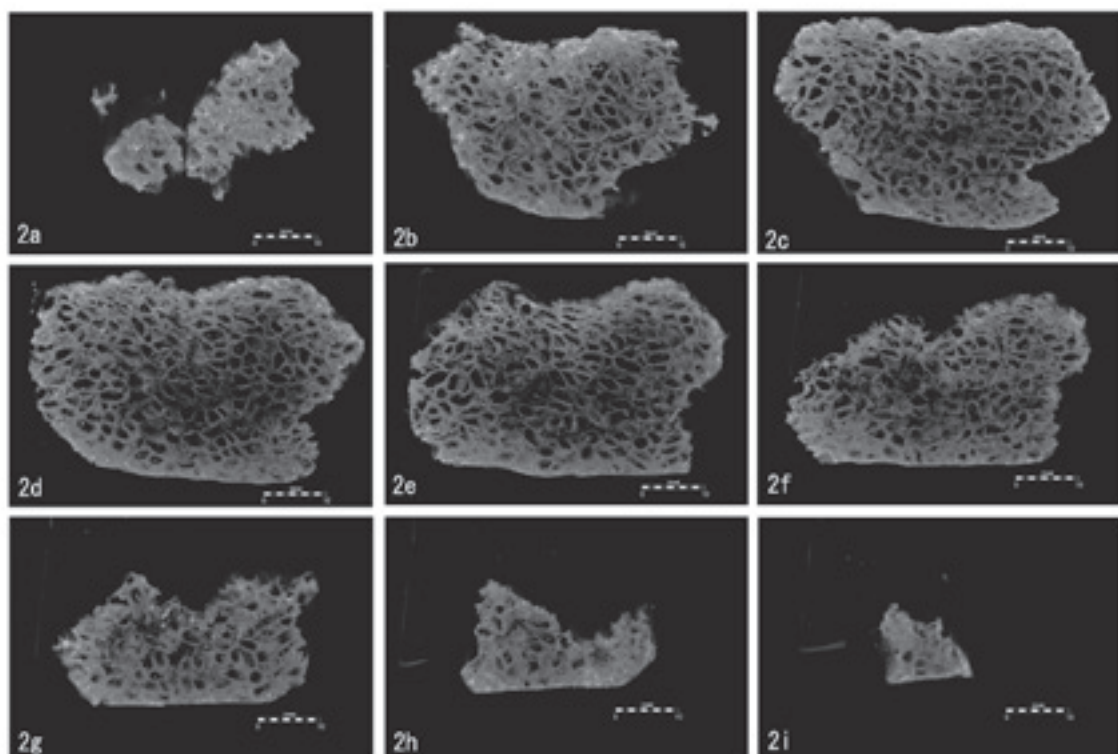
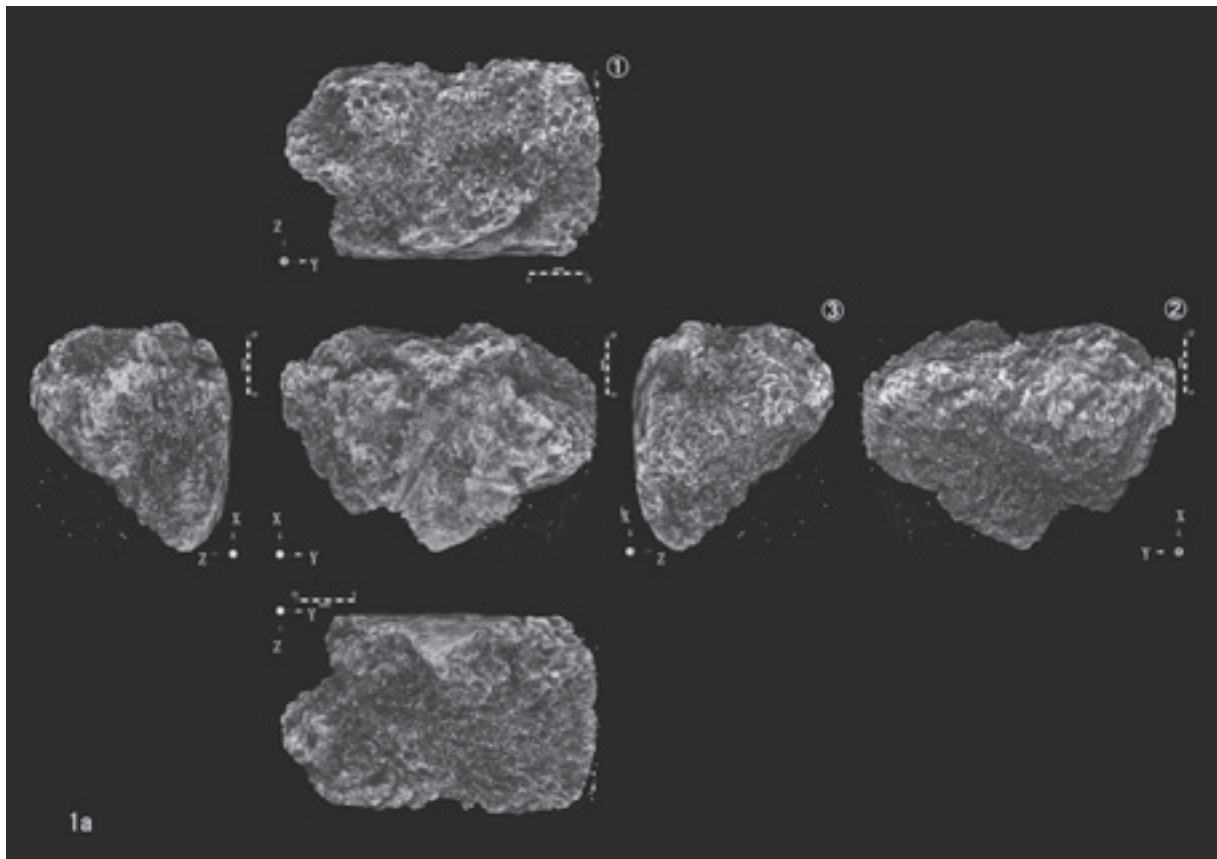
5cm 161 層 10YR3/1 黒褐色淘汰の悪い粗粒砂
(植物遺体、貝、種実等含む)



1. *Paralia sulcata* (Ehr.) Cleve (南壁③;58層)
2. *Amphora montana* Krasske (南壁③;58層)
3. *Anomoeoneis sphaerophora* (Kuetz.) Pfitzer (南壁③;58層)
4. *Cocconeis scutellum* Ehrenberg (南壁③;58層)
5. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (南壁③;58層)
6. *Navicula peregrina* (Ehr.) Kuetzing (南壁③;58層)
7. *Navicula veneta* Kuetzing (南壁③;58層)
8. *Nitzschia palea* (Kuetz.) W. Smith (南壁③;58層)
9. *Nitzschia umbonata* (Ehr.) Lange-Bertalot (南壁③;58層)
10. *Pinnularia subcapitata* Gregory (南壁③;58層)

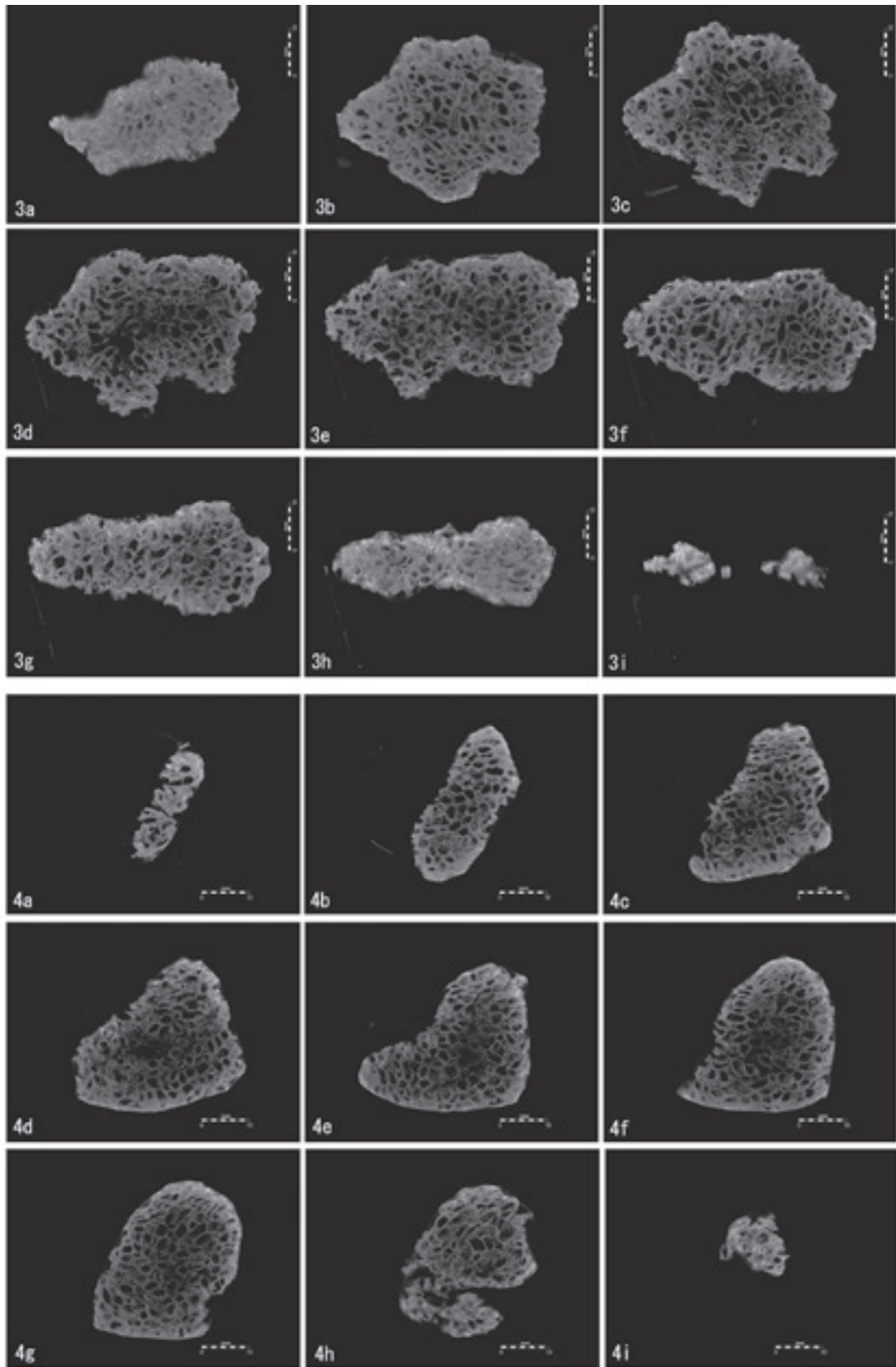


- | | |
|------------------------------|---------------------------|
| 1. イネ属短細胞列 (南壁③; 95層) | 2. クマザサ属短細胞珪酸体 (南壁③; 95層) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体 (南壁③; 58層) | 4. ススキ属短細胞珪酸体 (南壁③; 58層) |
| 5. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (南壁③; 95層) | 6. イネ属機動細胞珪酸体 (南壁③; 58層) |
| 7. クマザサ属機動細胞珪酸体 (南壁③; 95層) | 8. ヨシ属機動細胞珪酸体 (南壁③; 58層) |
| 9. ススキ属機動細胞珪酸体 (南壁③; 58層) | 10. イネ属穎珪酸体 (南壁③; 58層) |
| 11. マツ属複維管束亜属 (南壁③; 58層) | 12. スギ属 (南壁③; 58層) |
| 13. イネ属 (南壁③; 58層) | |



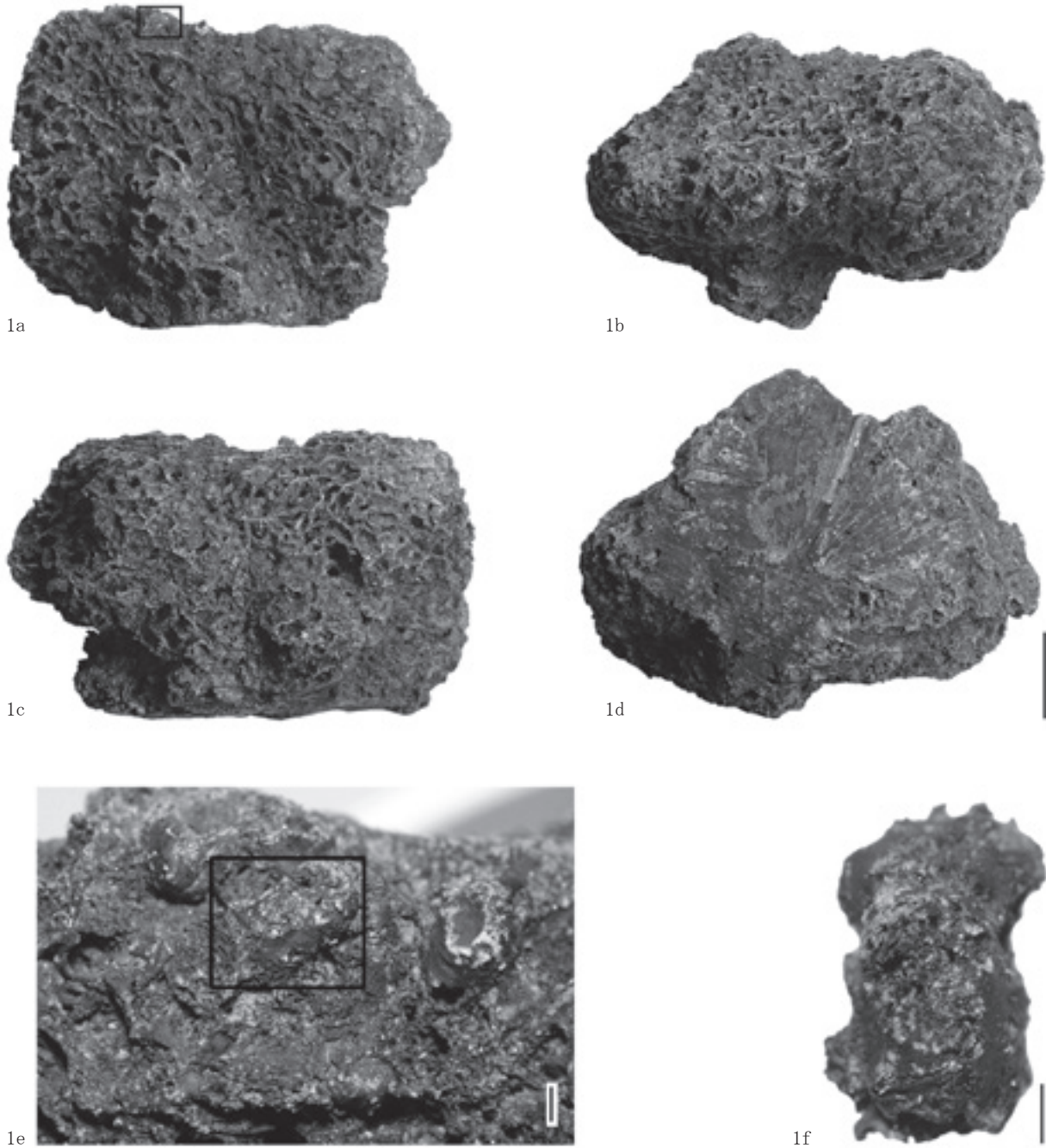
1. 試料 No. 1 全体
2. 試料 No. 1 YZ 断面 X軸マイナス方向 (1a 展開図①手前～奥方向へ) a-i: スライス画像

1 青谷上寺地遺跡出土の炭化種実塊の X 線 CT 画像 (1)



3. 試料 No. 1 XY 断面 Z 軸プラス方向 (1a 展開図②奥～手前方向へ) a-i: スライス画像
 4. 試料 No. 1 XZ 断面 Y 軸プラス方向 (1a 展開図③手前～奥方向へ) a-i: スライス画像

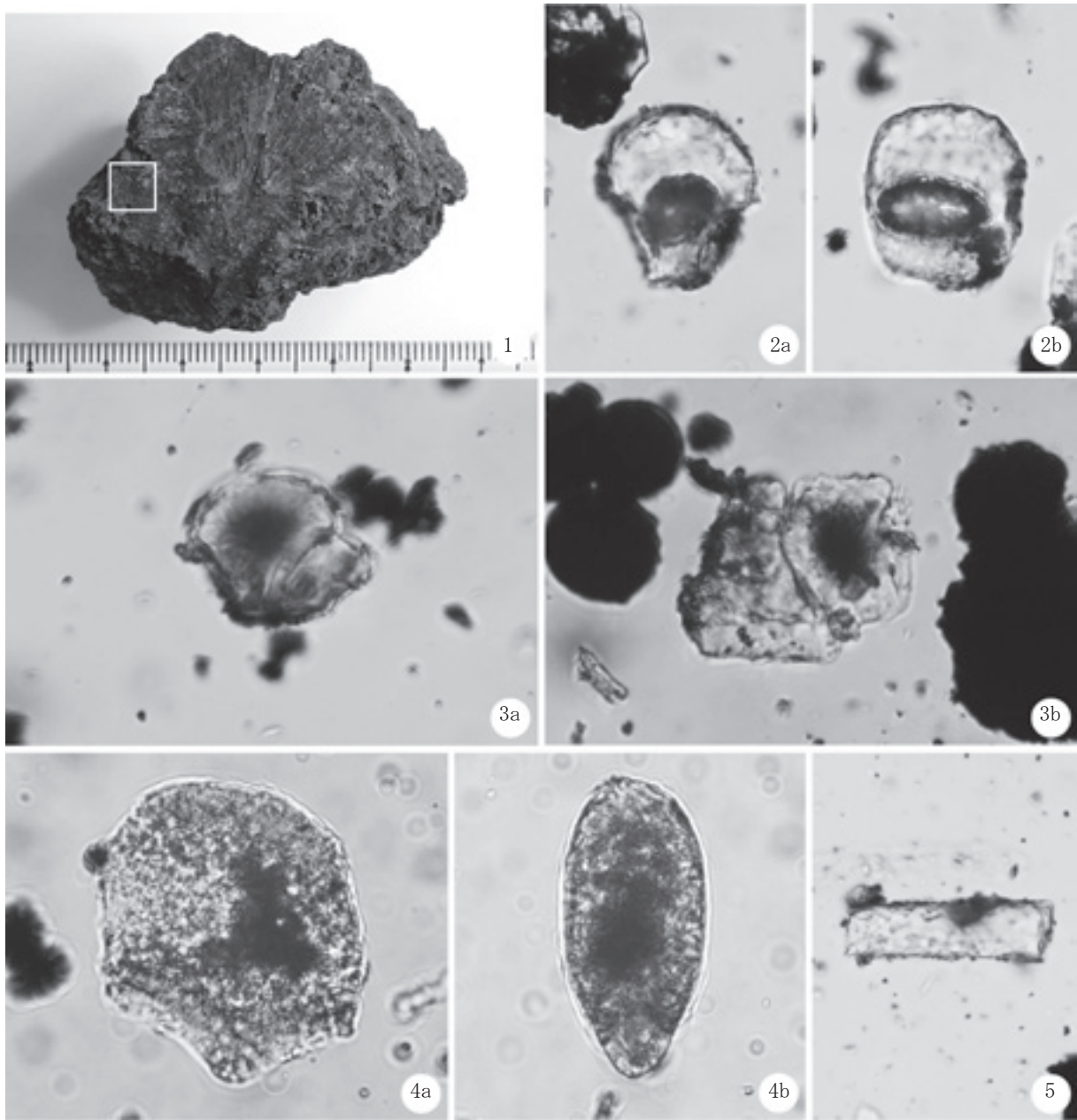
1 青谷上寺地遺跡出土の炭化種実塊の X 線 CT 画像 (2)



スケール 1a-d:10mm, 1e, 1f:1mm

1a-e. イネ炭化種子塊（放射性炭素年代測定用に採取した部分を口で囲った）
 1f. イネ炭化種子（PLD-54117）

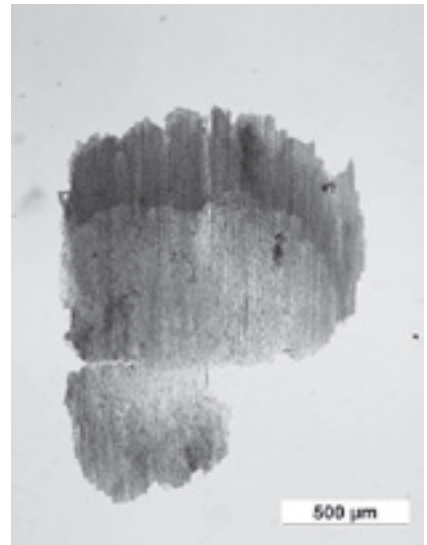
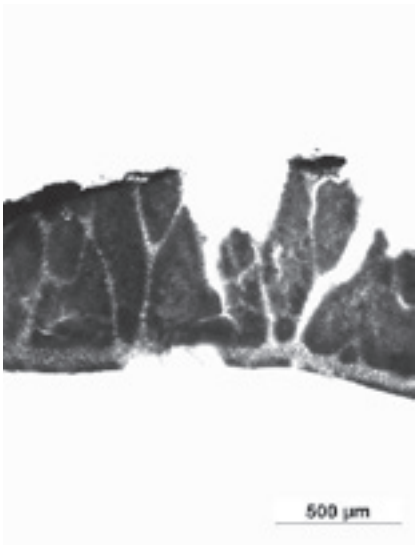
1 炭化種実塊と検出された機動細胞珪酸体の写真



2 ~ 5: 0.03mm

- | | | |
|---------------|--------------|-----------------|
| 1. 試料採取位置 | 2. イネ機動細胞珪酸体 | 3. ネザサ節型機動細胞珪酸体 |
| 4. ヨシ属機動細胞珪酸体 | 5. 棒状型珪酸体 | |
| a: 断面 b: 側面 | | |

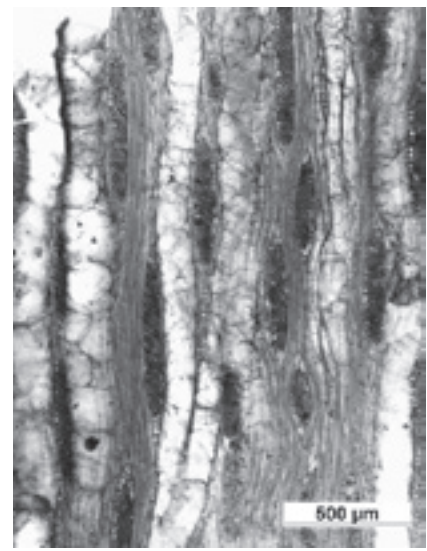
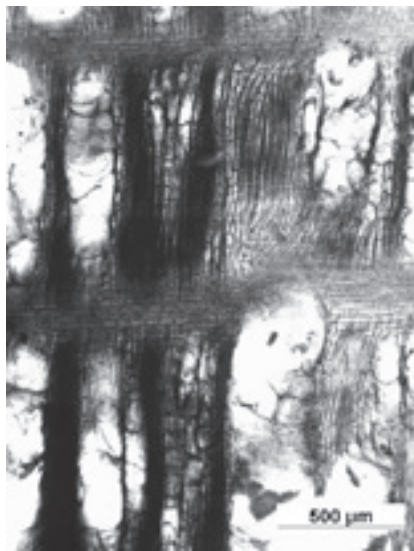
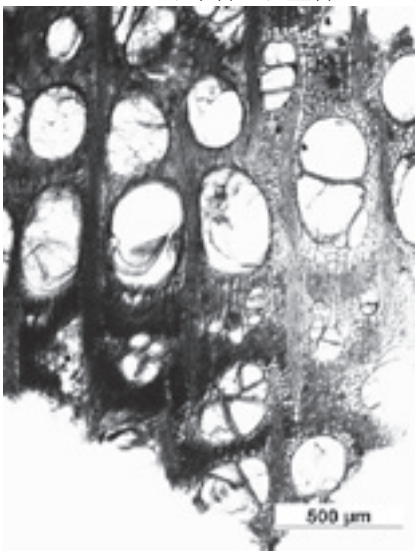
1 炭化種実塊と検出された機動細胞珪酸体の写真



横断面
No-1 イネ科タケ亜科

放射断面

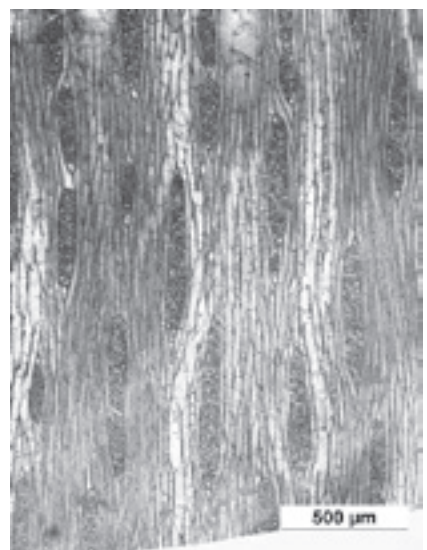
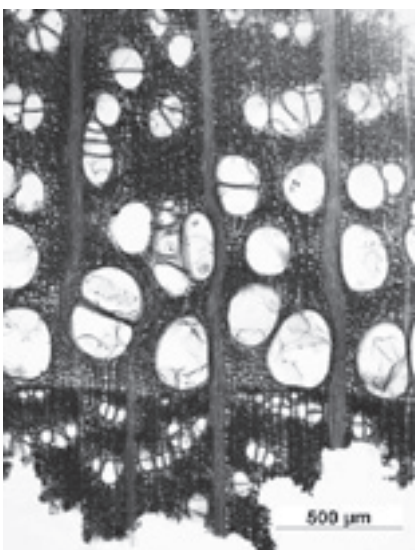
接線断面



木口
No-2 ニレ科エノキ属

沓目

板目

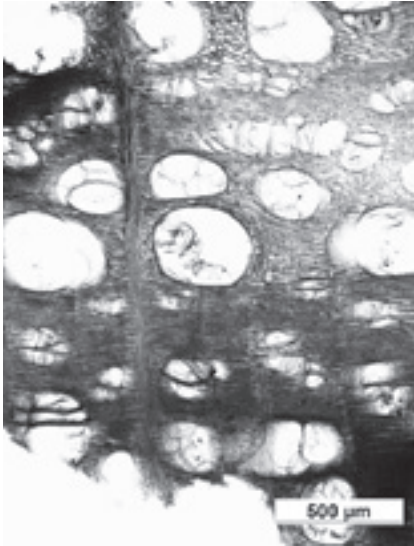


木口
No-3 クワ科クワ属

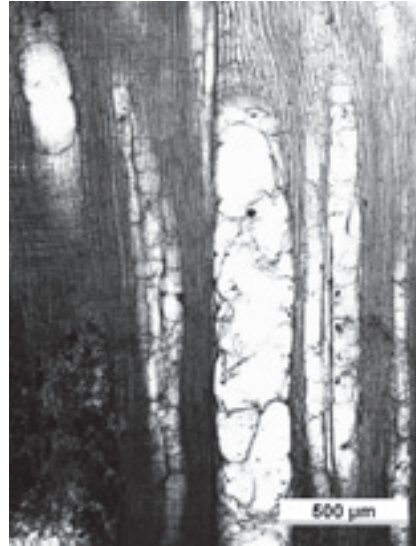
沓目

板目

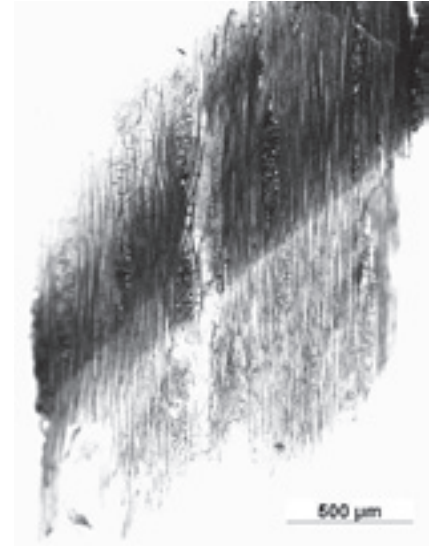
1 樹種同定 (1)



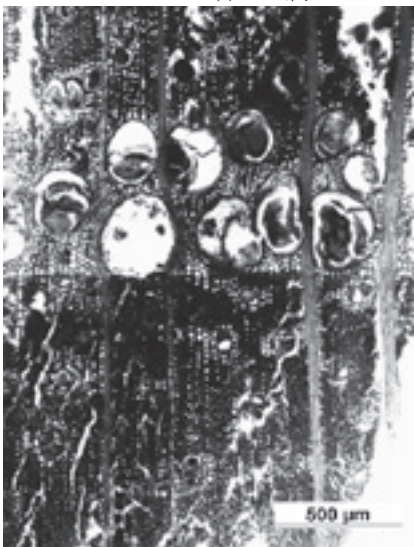
No-4 木口
クワ科クワ属



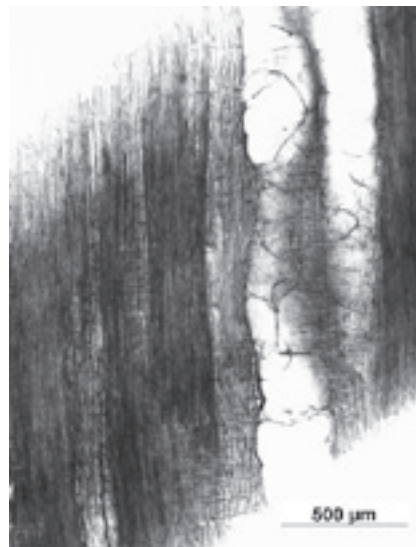
柁目



板目



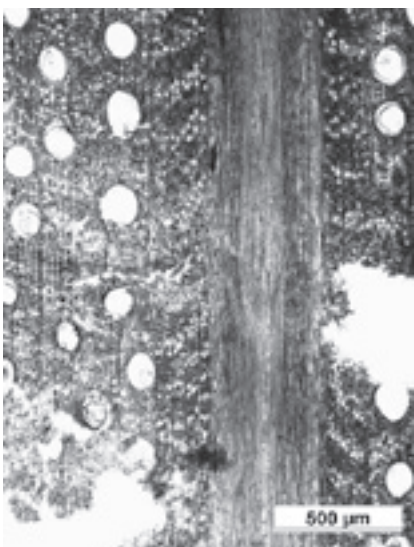
No-5 木口
クロウメモドキ科ケンボナシ属ケンボナシ



柁目



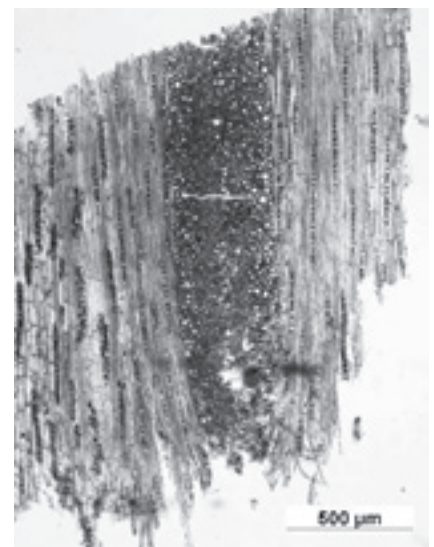
板目



No-6 木口
ブナ科コナラ属アカガシ亜属

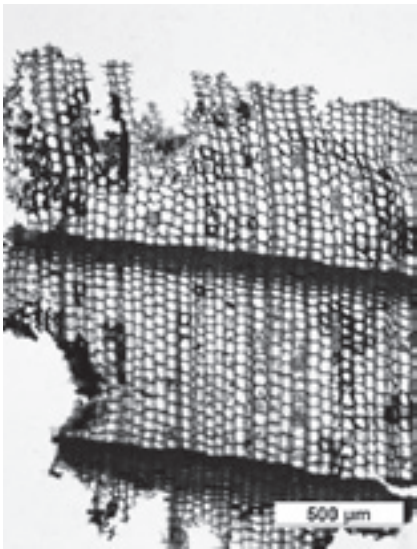


柁目

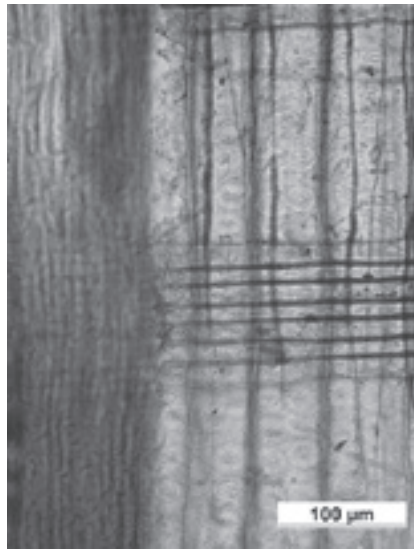


板目

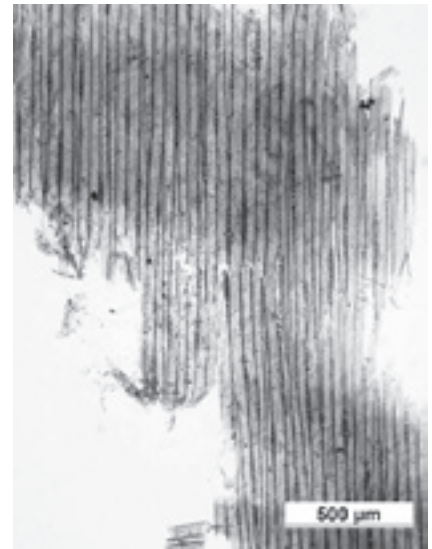
1 樹種同定 (2)



No-7 木口
スギ科スギ属スギ



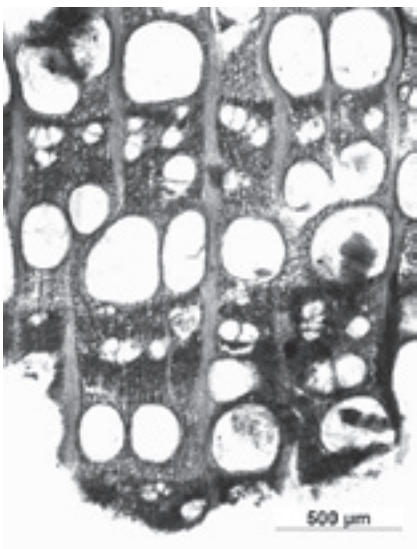
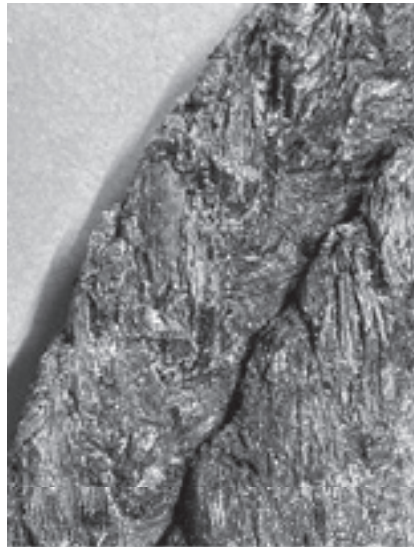
沓目



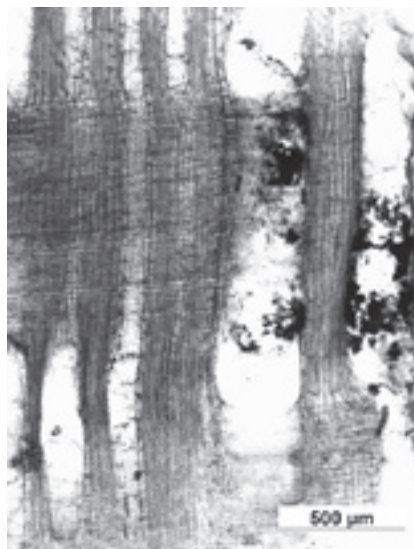
板目



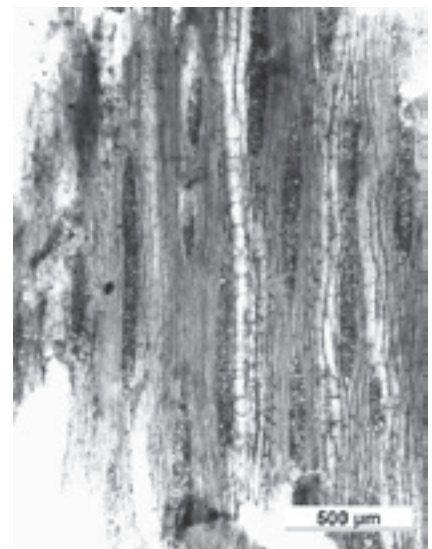
No-8 横断面
イネ科イネ属イネ



No-6 木口
クワ科クワ属

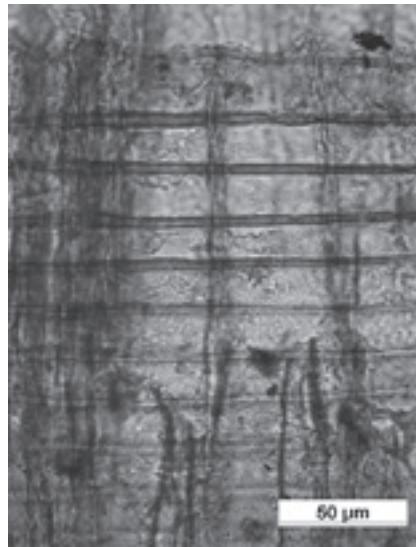


沓目



板目

1 樹種同定 (3)



柁目

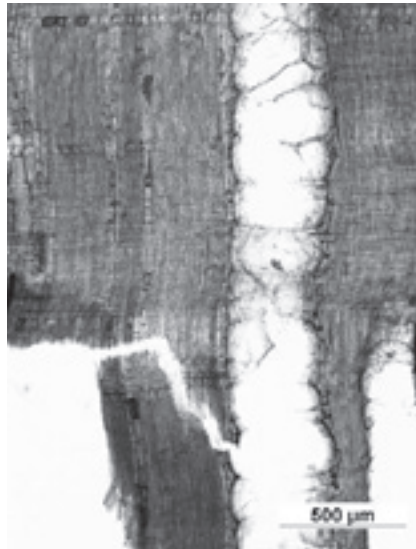


板目

No-10 イチイ科カヤ属カヤ



木口

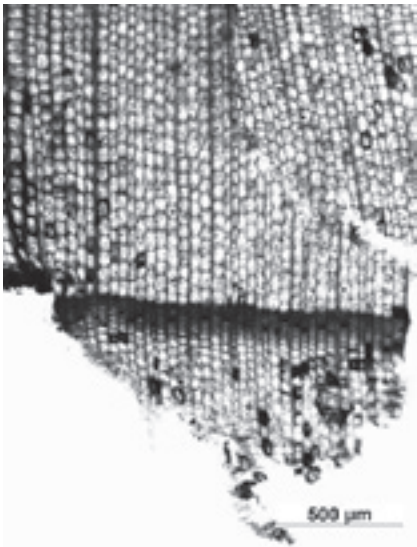


柁目

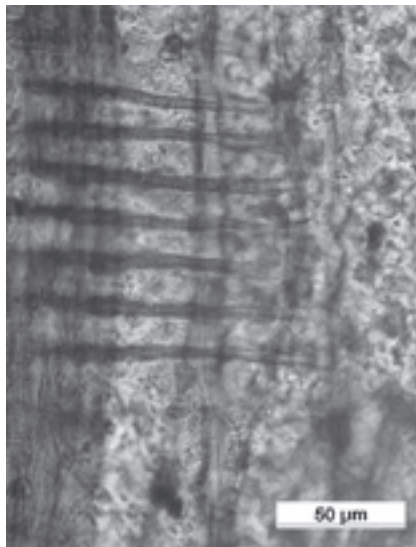


板目

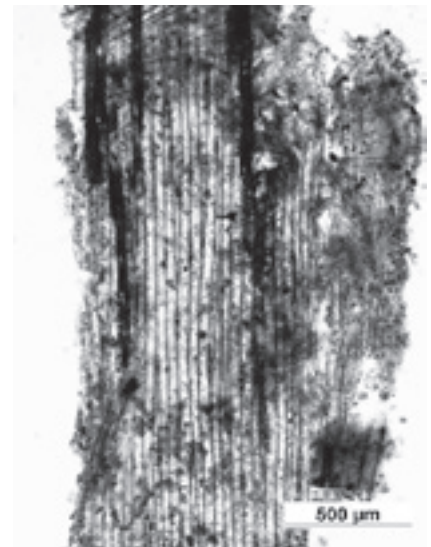
No-11 クワ科クワ属



木口



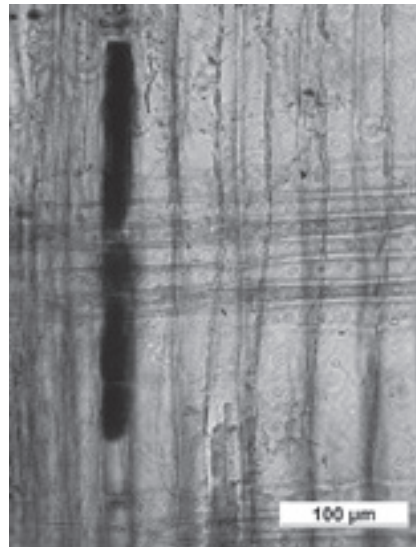
柁目



板目

No-12 スギ科スギ属スギ

1 樹種同定 (4)

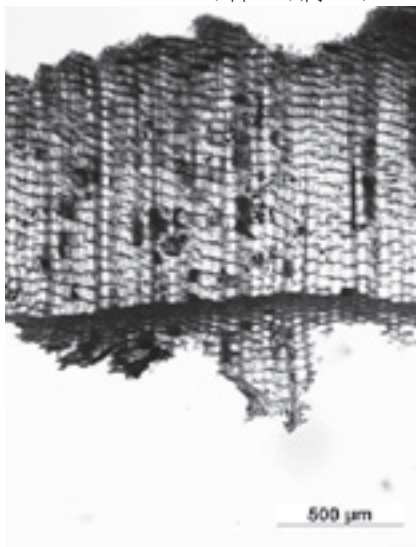


柁目



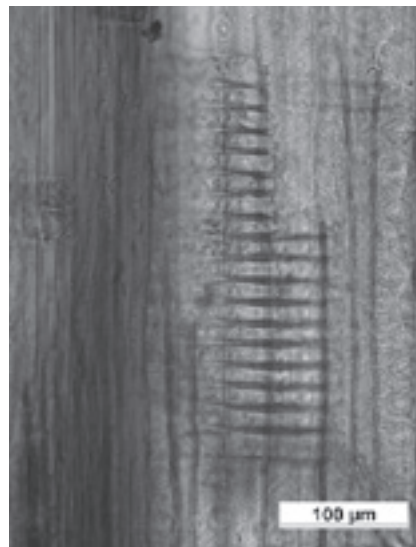
板目

No-12 スギ科スギ属スギ

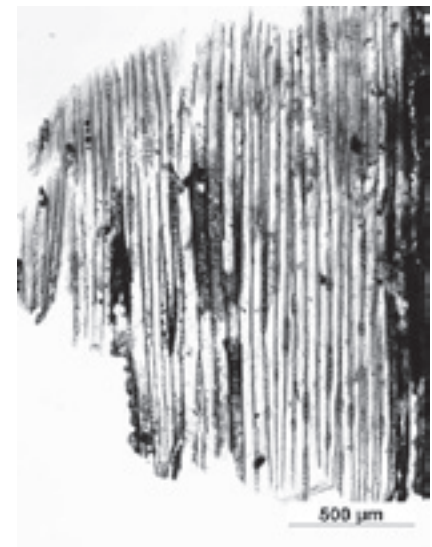


木口

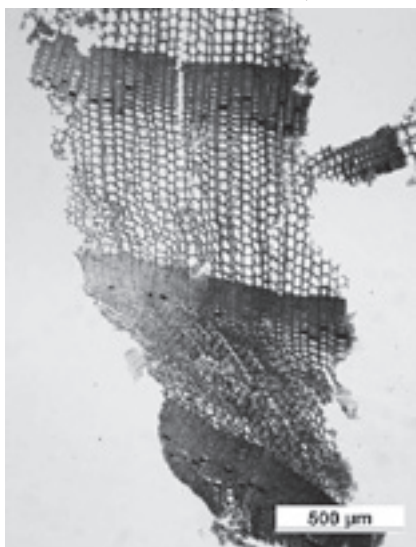
No-13 スギ科スギ属スギ



柁目

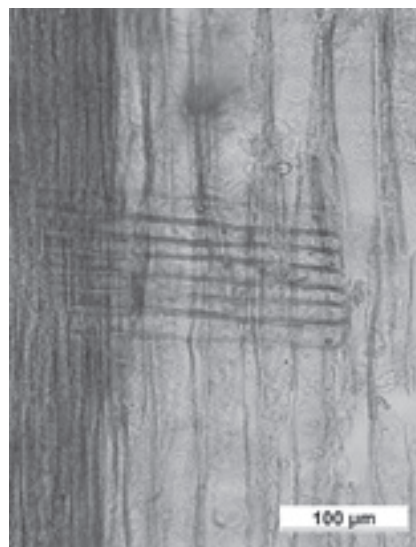


板目



木口

No-14 スギ科スギ属スギ

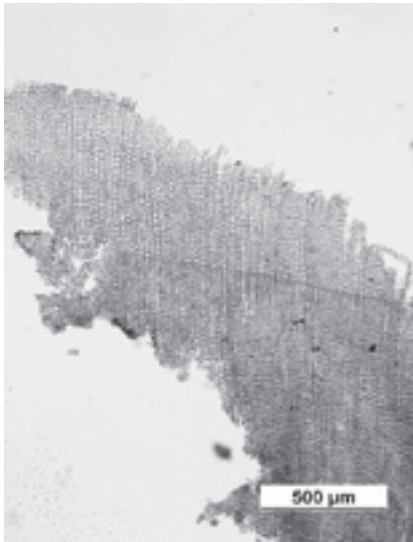


柁目



板目

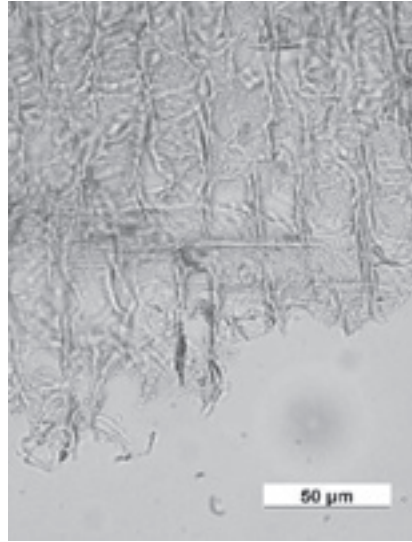
1 樹種同定 (5)



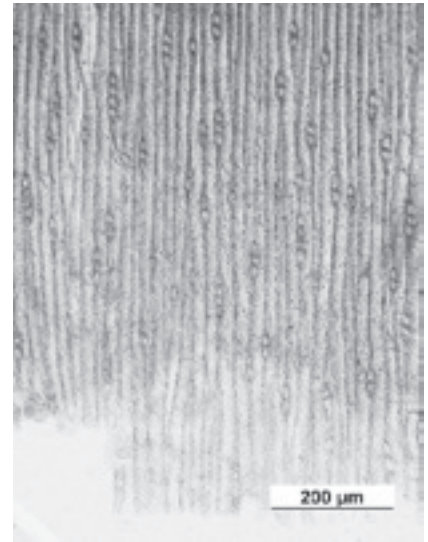
木口

No-1

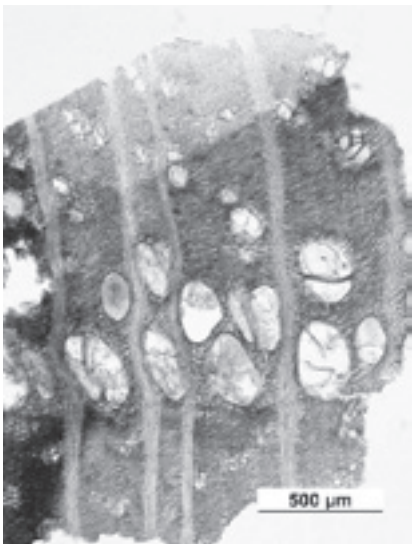
イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ



柁目



板目



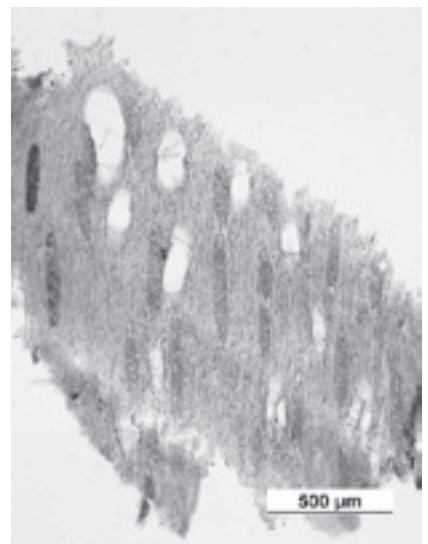
木口

No-2

クワ科クワ属



柁目



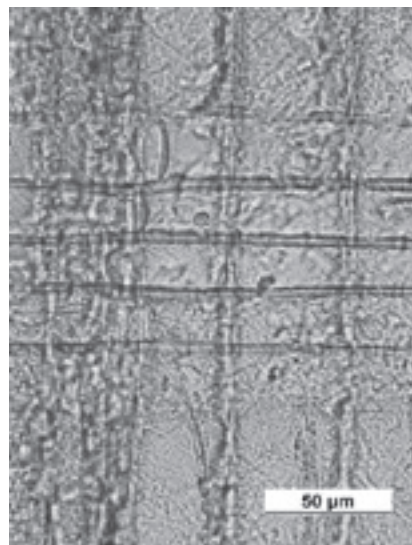
板目



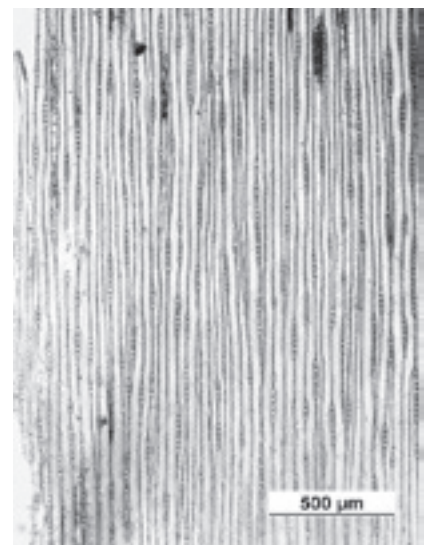
木口

No-3

イチイ科カヤ属カヤ

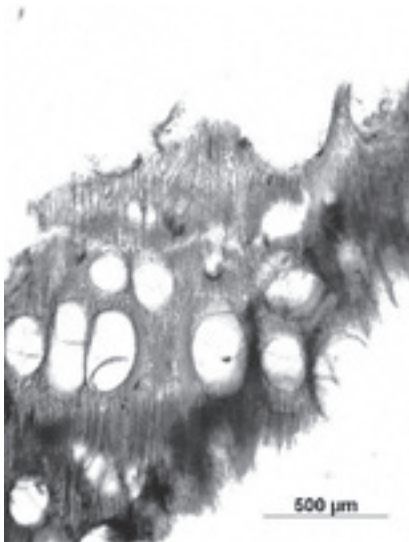


柁目



板目

1 樹種同定 (6)



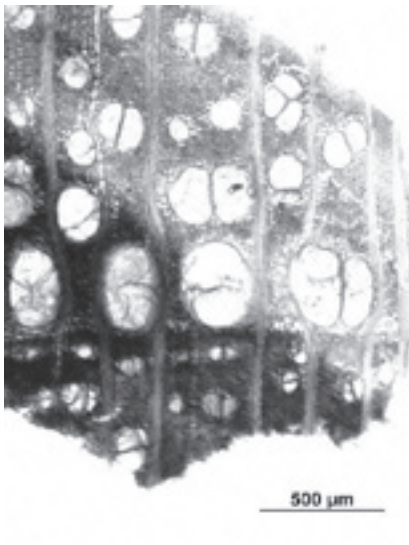
No-4 木口
クワ科クワ属



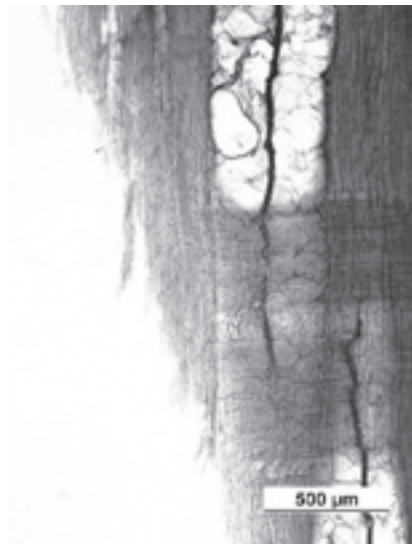
柁目



板目



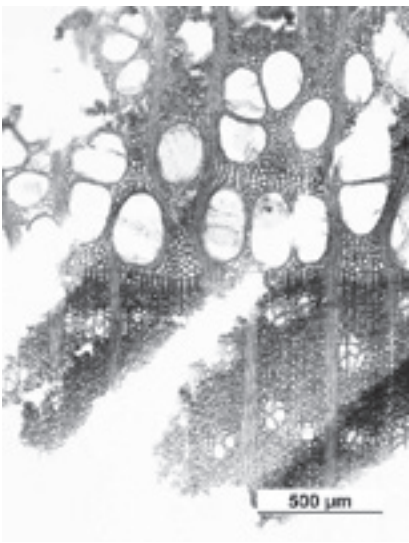
No-5 木口
クワ科クワ属



柁目



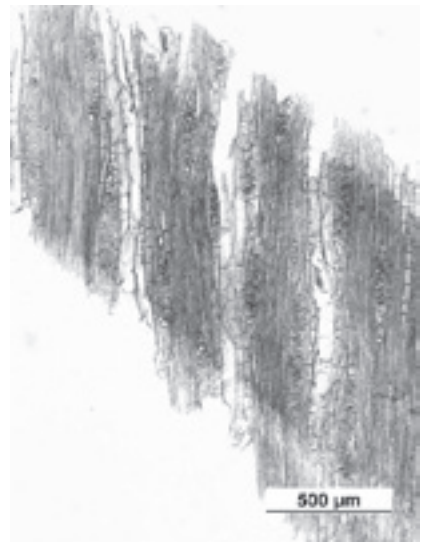
板目



No-6 木口
クワ科クワ属

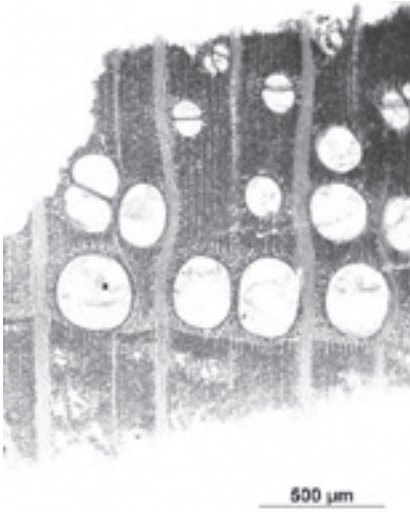


柁目

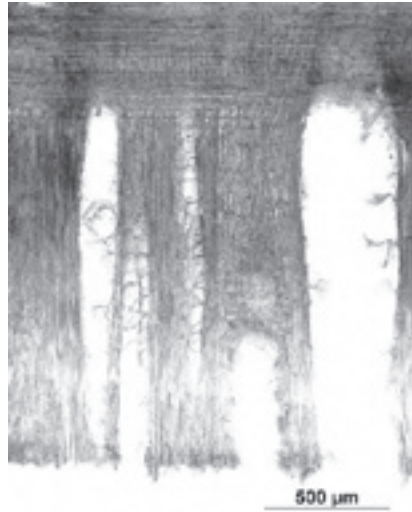


板目

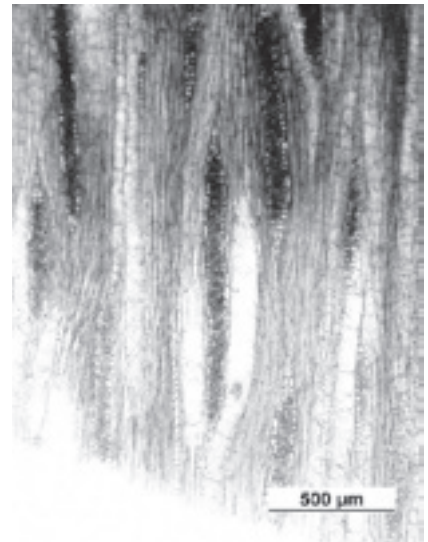
1 樹種同定 (7)



No-7 木口
クワ科クワ属



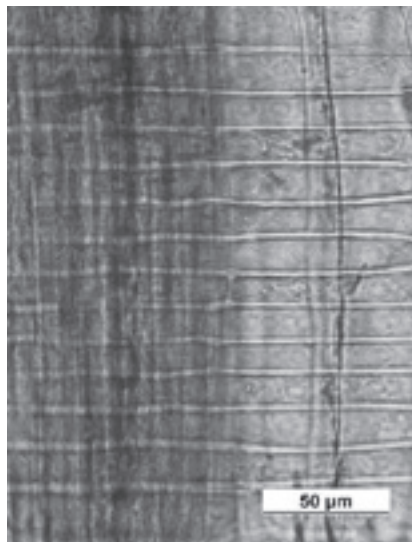
柱目



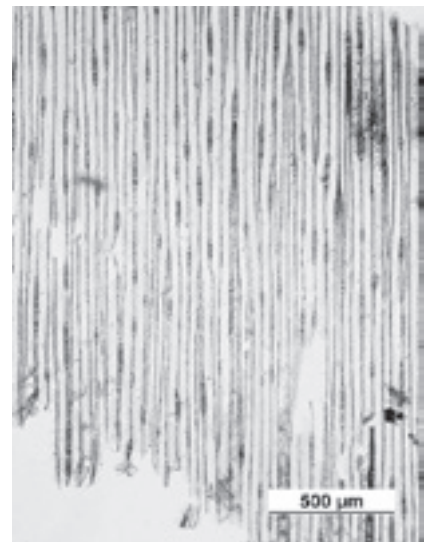
板目



No-8 木口
スギ科スギ属スギ



柱目



板目

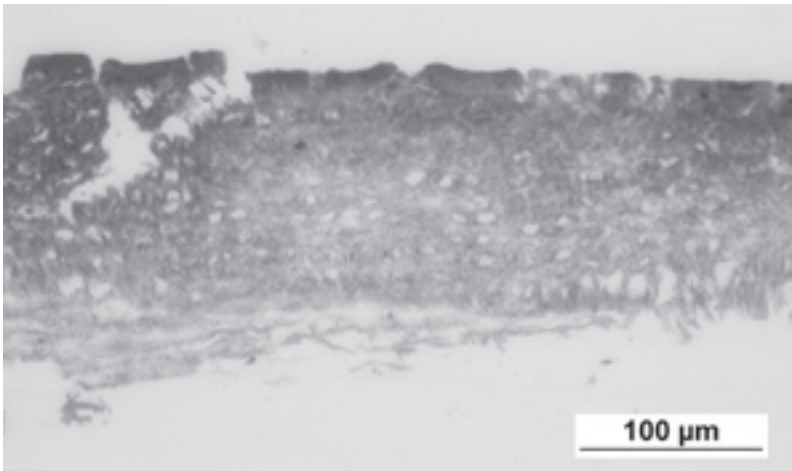


No-9 横断面
イネ科イネ属イネ

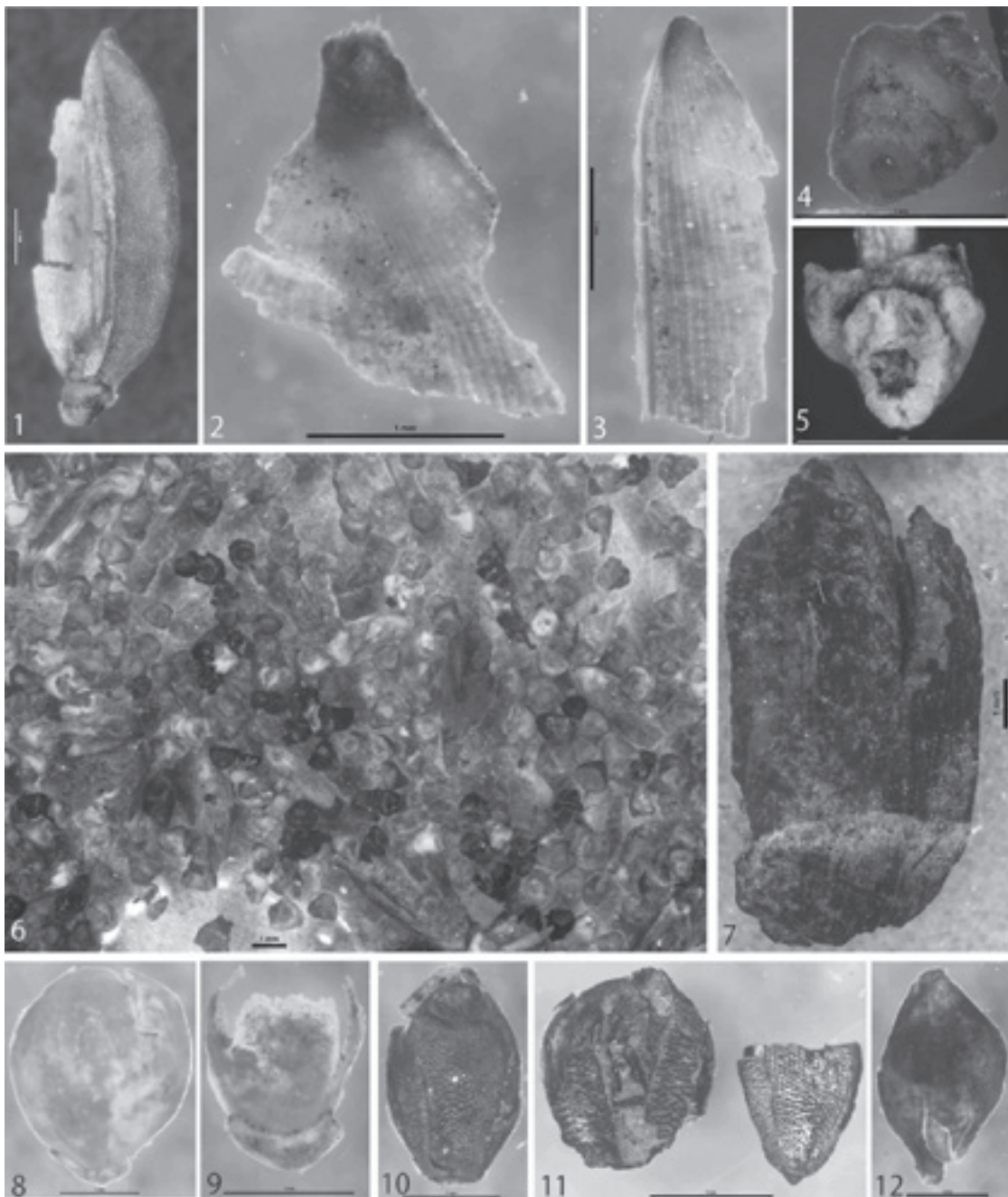


No-10 横断面
イネ科イネ属イネ

1 樹種同定 (8)



1 W 137 塗膜構造



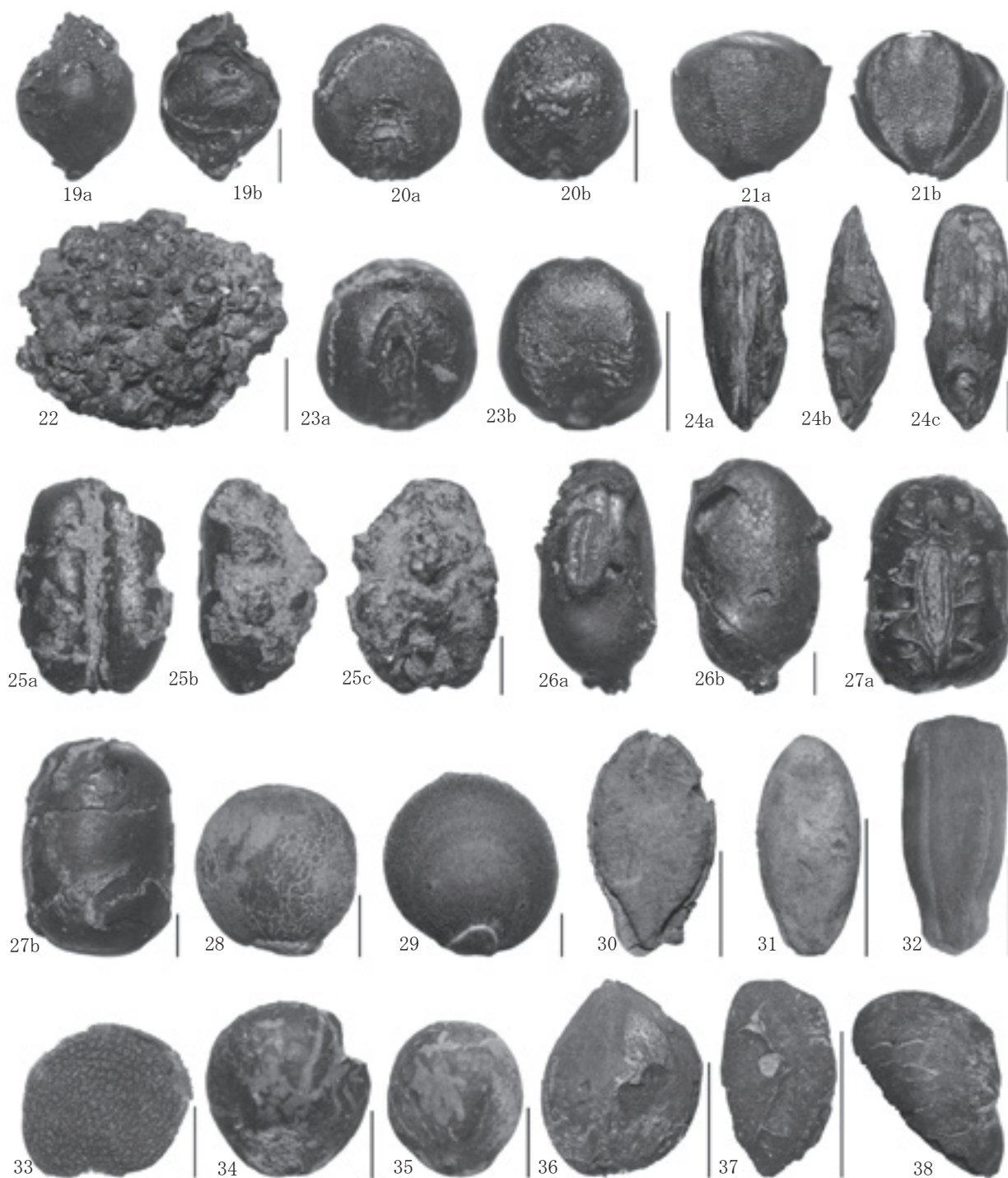
2 DNA 分析対象試料



スケール 1, 8-11, 14, 16, 17: 1mm, 2-7, 12, 13, 15, 18: 5mm

1. ブドウ属種子 (SD38-C, No. 20)、2. モモ核 (完形) (SD38-C, No. 167)、3. モモ核 (動物食痕) (SD38-C, No. 165)、4. モモ核 (半割) (SD38-C, No. 160)、5. スモモ核 (動物食痕) (SD38-A, No. 24)、6. コナラ属-シイ属炭化子葉 (SD38-C, No. 12)、7. オニグルミ核 (SD38-C, No. 142)、8. アカメガシワ種子 (SD38-A, No. 38)、9. カラスザンショウ種子 (SD38-A, No. 34)、10. サンショウ種子 (SD38-A, No. 38)、11. イヌザンショウ種子 (SD38-C, No. 28)、12. カキノキ炭化果実 (平地建物 2, No. 34)、13. カキノキ炭化種子 (SD38-A, No. 30)、14. ヒエ属炭化種子 (SD38-C, No. 22)、15. イネ籾殻 (SD38-A, No. 41)、16. イネ炭化籾 (SD38-C, No. 148)、17. イネ炭化種子 (SD38-C, No. 63)、18. イネ炭化種子塊 (SD38-A, No. 25)

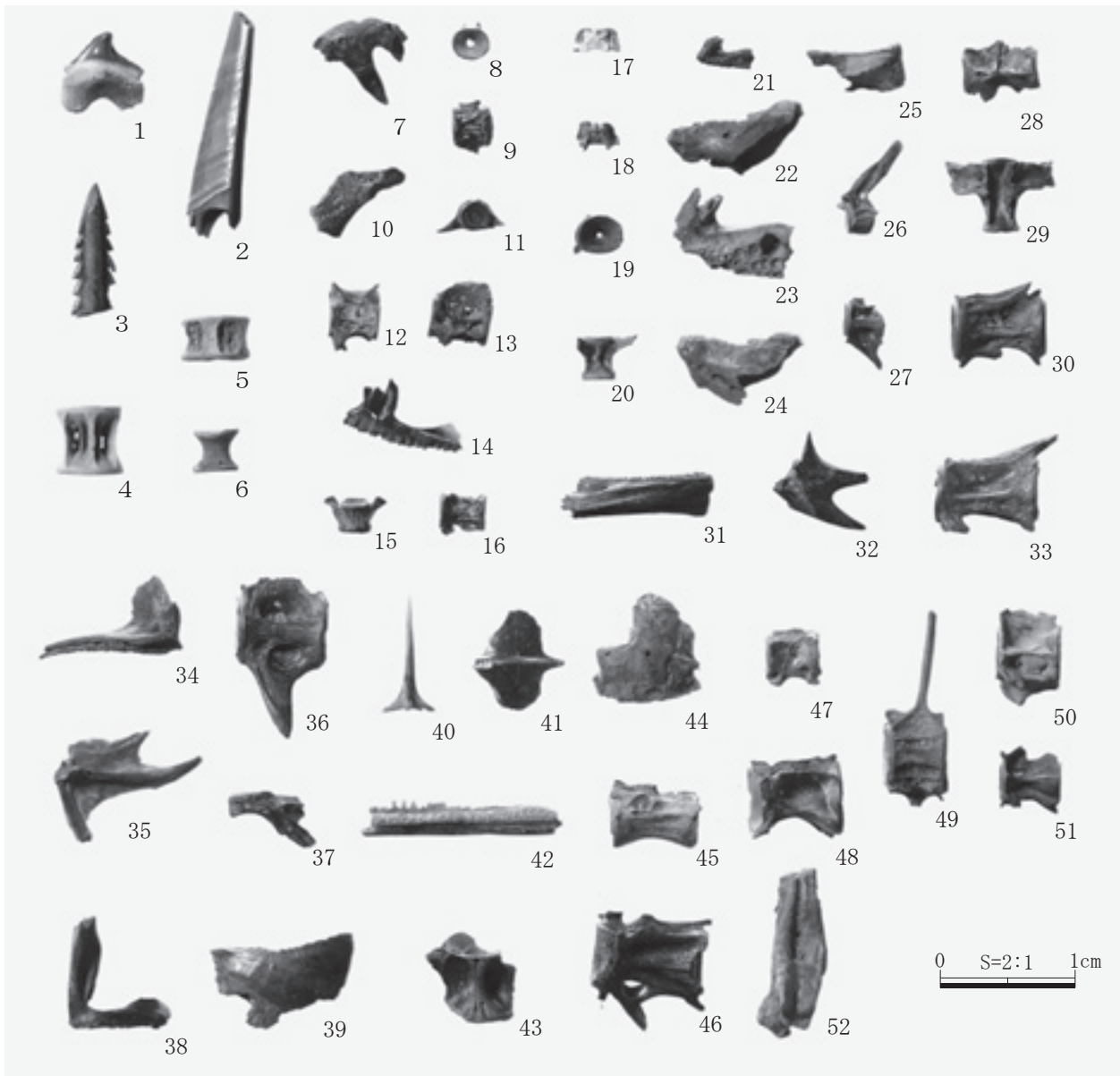
1 大型植物遺体 (1)



スケール 19-21, 23-29, 33-35, 38:1mm, 22, 30-32, 36, 37:5mm

19. キビ炭化有ふ果 (SD38-A, No. 32)、20. キビ炭化種子 (SD38-A, No. 38)、21. アワ炭化有ふ果 (SD38-C, No. 20)、22. アワ炭化有ふ果塊 (SD38-B, No. 13)、23. アワ炭化種子 (SD38-A, No. 22)、24. オオムギ炭化種子 (SD38-C, No. 7)、25. コムギ炭化種子 (SD38-A, No. 14)、26. ダイズ属炭化種子 (SD38-A, No. 16)、27. ササゲ属アズキ亜属炭化種子 (SD38-A, No. 8)、28. アサ核 (SD38-C, No. 6)、29. カナムグラ核 (SD38-A, No. 32)、30. トウガン種子 (平地建物1~3ほか28土坑, No. 91)、31. メロン仲間種子 (平地建物2, No. 32)、32. ヒョウタン仲間種子 (SD38-C, No. 12)、33. ナス種子 (SD38-C, No. 21)、34. エゴマ果実 (SD38-C, No. 12)、35. シソ属果実 (SD38-C, No. 1)、36. 不明A炭化種実 (SD38-A, No. 28)、37. 不明B炭化種実 (SD38-A, No. 1)、38. 不明C炭化種実 (SD38-A, No. 10)

1 大型植物遺体 (2)



1. サメ類 (歯)、2. ネコザメ科 (背鰭棘)、3. アカエイ (尾棘)、4. サメ類 (ホシザメ型) (椎骨)、5. サメ類 (メジロザメ型) (椎骨)、6. サメ類 (ツノザメ型) (椎骨)、7. サケ属 (前上顎骨 (L))、8・9. アユ (8. 腹椎、9. 尾椎)、10. フナ (主鰓蓋骨 (L))、11. コイ科 (第2椎骨)、12・13. ウナギ属 (腹椎)、14～16. ハゼ科 (14. 前上顎骨 (L)、15. 第1椎骨、16. 尾椎)、17・18. コノシロ (17. 第1椎骨、18. 第2椎骨)、19. ニシン科 (腹椎)、20. サヨリ属 (腹椎)、21. クロダイ属 (前上顎骨 (R))、22. マダイ亜科 (歯骨 (R))、23・24. ヘダイ (23. 前上顎骨 (R)、歯骨 (L))、25～27. スズキ属 (25. 歯骨 (R)、26. 腹椎、27. 尾椎)、28～30. ボラ科 (28・29. 腹椎、30. 尾椎)、31～33. コチ科 (31. 歯骨 (R)、32. 前鰓蓋骨 (L)、33. 尾椎)、34・35. メバル科 (34. 前上顎骨 (R)、35. 主鰓蓋骨 (R))、36. ハタ科 (尾椎)、37. アイナメ属 (歯骨 (L))、38. タカノハダイ科 (前上顎骨 (L))、39. フグ科 (歯骨 (R))、40. ハリセンボン科 (棘)、41. マアジ類 (稜鱗)、42・43. ダツ科 (42. 歯骨 (L)、43. 腹椎)、44～46. サバ属 (44. 前上顎骨 (右)、45. 腹椎、46. 尾椎)、47. トビウオ科 (腹椎)、48. ソウダガツオ属 (腹椎)、49. ヒラメ科 (尾椎)、50. カレイ科 (尾椎)、51. ウシノシタ科 (尾椎)、カワハギ科 (背鰭棘)

1 魚骨 (1)



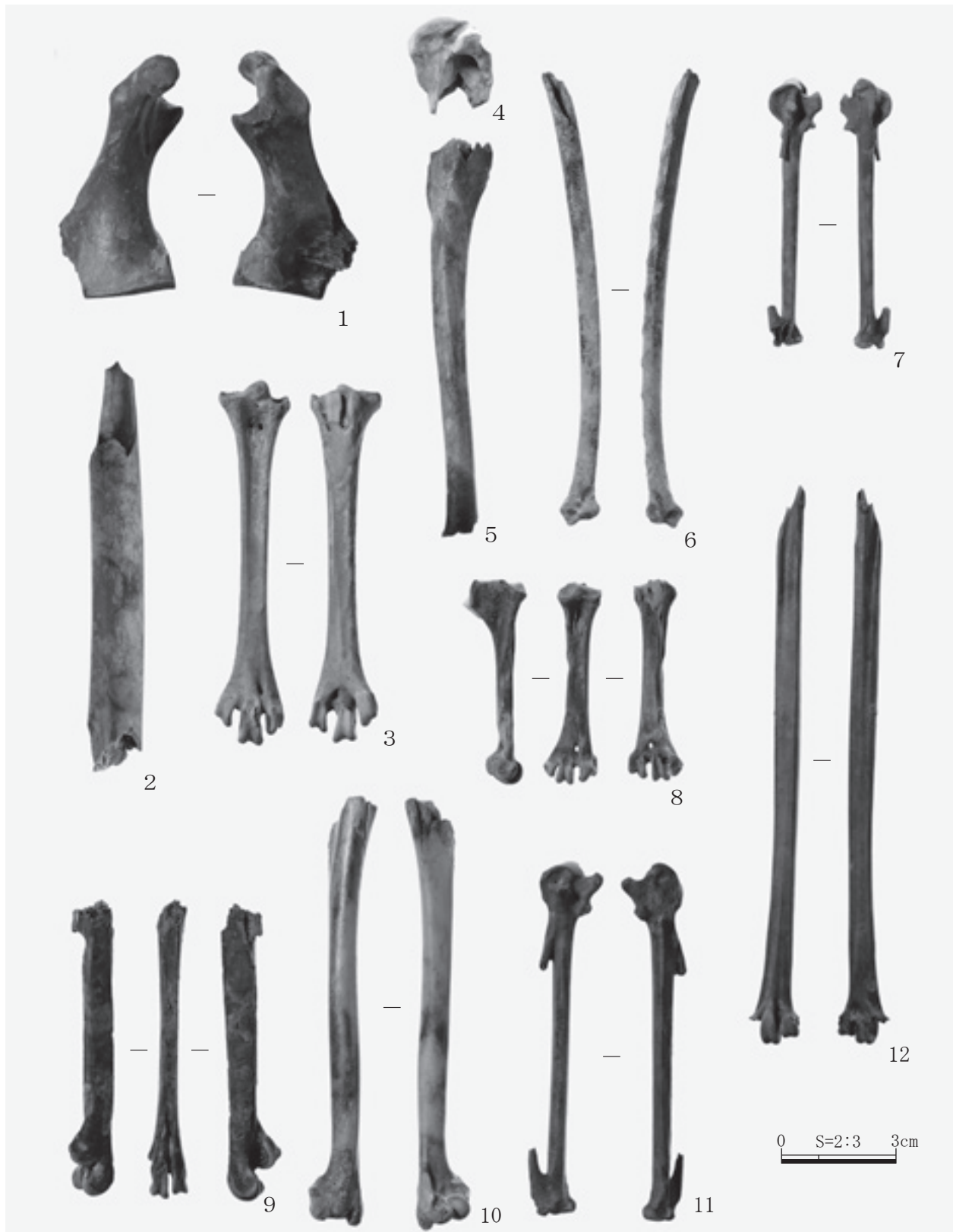
1～8. クロダイ属 (1. 前上顎骨 (L)、2・3. (主上顎骨 (L)、4. 口蓋骨 (L)、5. 前上顎骨 (R)、6. 舌顎骨 (L)、7. 歯骨 (L)、8. 主鰓蓋骨 (R))、9. ブリ属 (腹椎)、10. ボラ科 (主鰓蓋骨 (R))、11・12. スズキ属 (11. 前上顎骨 (R)、12. 角骨 (R))、13・14. マダイ亜科 (13. 前上顎骨 (L)、角骨 (L))、15. コチ科 (歯骨 (L))、16. フグ科 (歯骨 (L))、17・18. ハタ科 (17. 主上顎骨 (R)、舌顎骨 (L))、19～21. コブダイ (19. 前上顎骨 (L)、20. 上咽頭骨 (R)、21. 下咽頭骨)、22. ネコザメ科 (背鰭棘)、23. アカエイ (尾棘)、24～26. クロマグロ (椎骨)

1 魚骨 (2)



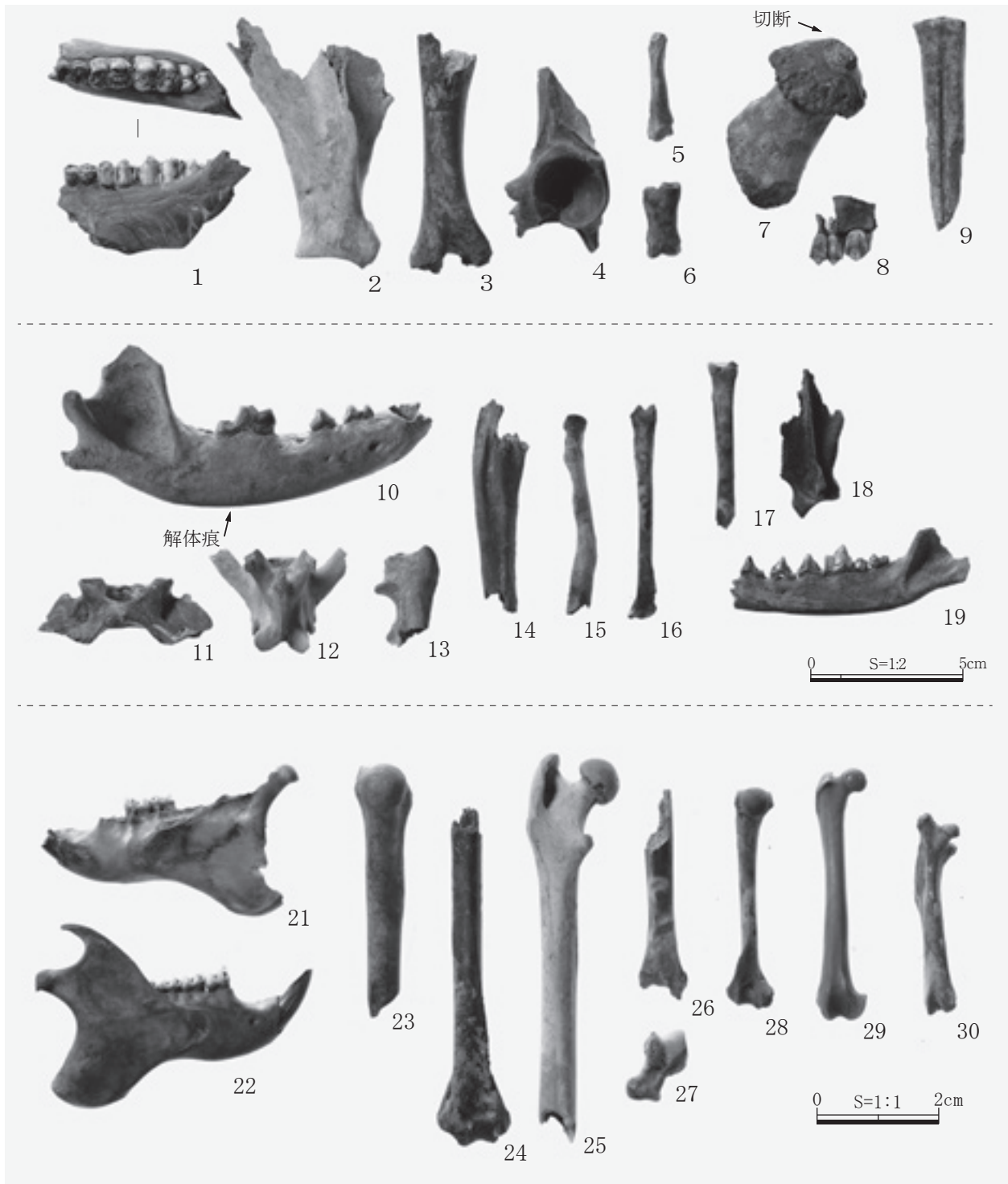
1～9. カモ科 (1. 上腕骨 (R)、2. 鳥口骨 (R)、3. 肩甲骨 (R)、4. 胸骨、5. 橈骨 (R)、6. 尺骨 (L)、7. 脛足根骨 (R)、8. 大腿骨 (L)、足根中足骨 (R))、10～13. カイツブリ科 (10. 鳥口骨 (R)、11. 橈骨 (L)、12. 足根中足骨 (L))、13. カモメ科 (手根中手骨 (L))、14～16. ウミスズメ科 (14. 上腕骨 (L)、15. 尺骨 (R)、16. 胸骨)、17～19. ハト科 (17. 上腕骨 (R)、18. 鳥口骨 (R)、19. 大腿骨 (L))、20. チドリ目 (脛足根骨 (L))、21. ミズナギドリ科 (足根中足骨 (R))、22. キジ科 (上腕骨 (R))

1 鳥骨 (1)



1～3. アホウドリ科 (1. 烏口骨 (R)、2. 上腕骨 (R)、3. 足根中足骨 (L))、4～8. ウ科 (4・5. 上腕骨 (L)、6. 尺骨 (R)、7. 手根中手骨 (L)、8. 足根中足骨 (L))、9・10. アビ科 (9. 足根中足骨 (L)、10. 上腕骨 (L))、11・12. サギ科 (11. 手根中手骨 (L)、12. 足根中足骨 (L))

1 鳥骨 (2)



1～5. イノシシ (1. 下顎骨. 2. 肩甲骨 (R)、3. 上腕骨 (R)、4. 寛骨 (L)、5. 第2中手骨 (R)、6. 基節骨)、7～9. ニホンジカ (7. 頭蓋骨 (角座部分 (L)、8. 上顎骨 (R) 9. 中足骨 (R))、10～13. イヌ (10. 下顎骨 (R)、11. 環椎、12. 腰椎、13. 尺骨 (L))、14. ニホンザル (尺骨 (R))、15. アナグマ (橈骨 (R))、16. テン (上腕骨 (R))、17・18. タヌキ (橈骨 (L)、肩甲骨 (L))、19. キツネ (下顎骨 (L))、21～27. ムササビ (21. 下顎骨 (L)、22. 下顎骨 (R)、23. 上腕骨 (L) 24. 上腕骨 (R)、25. 大腿骨 (L)、26. 脛骨 (L)、27. 距骨 (L))、28・29. イタチ (28. 上腕骨 (L)、29. 大腿骨 (R))、30. ネズミ科 (大腿骨 (R))

1 獣骨



1 人骨 (1) 下顎骨 HB308



2 人骨 (2) 下顎骨 HB318



1. 環椎、2. 軸椎、3. 第1肋骨 (R)、4. 第2肋骨 (R)、5. 胸骨柄、6·7. 胸骨體、
8·9. 鎖骨 (L)、10. 鎖骨 (R)、11·12. 肩甲骨 (R)、13. 橈骨 (R)、14. 大腿骨
15. 寬骨 (R)、16. 仙骨、17. 膝蓋骨 (R)、18. 膝蓋骨 (L)、19. 踵骨 (R)、20. 踵骨 (L)、
21. 距骨 (R)、22. 距骨 (L)、23. 上腕骨 (L)、24. 尺骨 (R)、25. 腓骨 (L)

1. HB122、2. HB148、3. hb62、4. HB193、5. HB87、6. HB594、7. HB436、
8. HB165、9. HB137、10. HB139、11. HB251、12. HB334、13. HB174、14. HB327、
15. HB314、16. HB285、17. HB407、18. HB377、19. HB329、20. HB568、21. HB562、
22. HB577、23. HB23、24. HB95、25. HB548

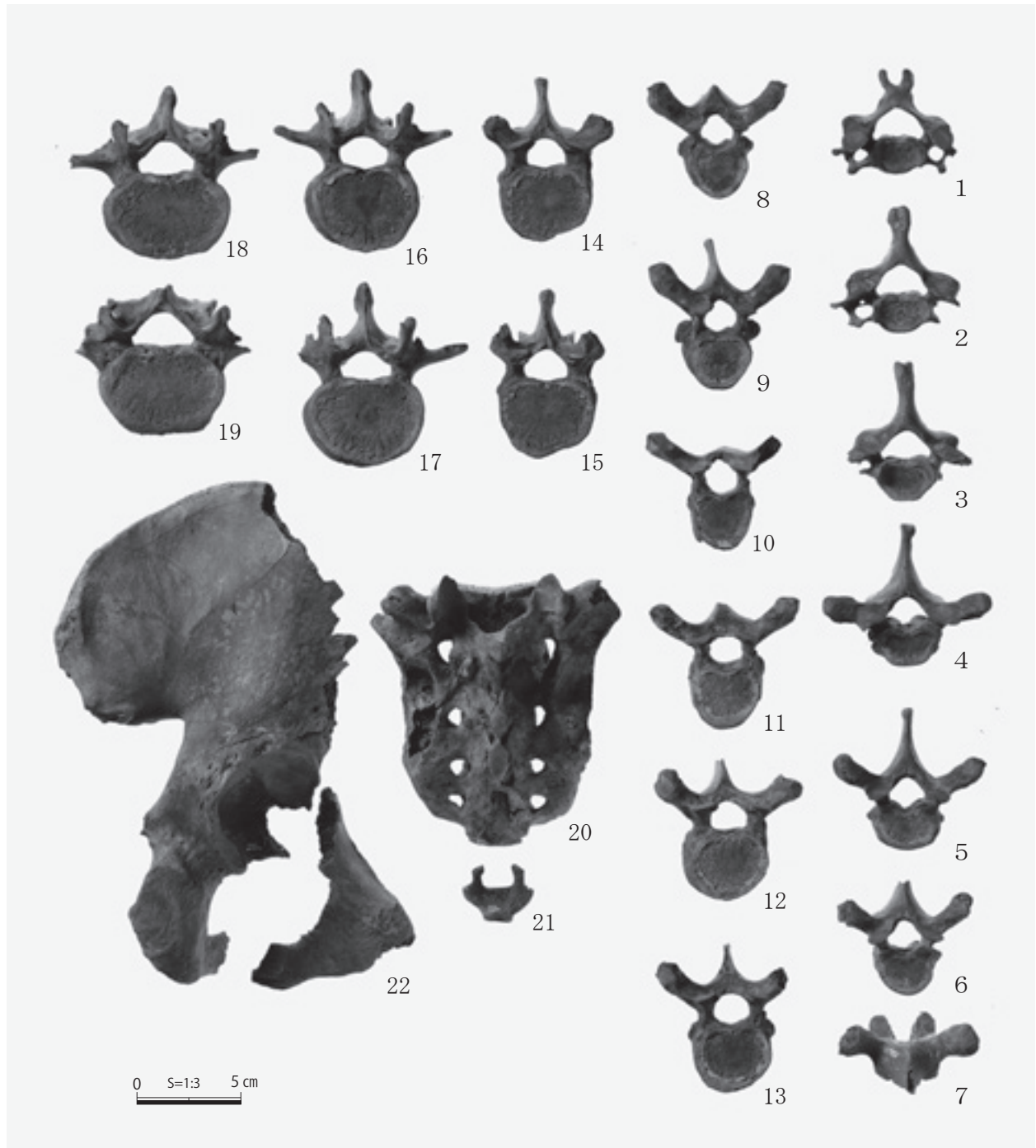
1 人骨 (3) 成人



1. 頭蓋骨、2. 下顎骨、3. 仙椎、4. 寬骨 (R)、5. 寬骨 (L)、6. 上腕骨 (L)、
7. 脛骨 (L)、8. 大腿骨 (R)、9. 踵骨 (R)、10. 肩甲骨 (R)、11. 上腕骨 (R)、
12. 大腿骨 (R)

1. HB161、2. HB57、3. HB367、4. HB286、5. HB266、6. HB30、7. HB75、8. HB73、
9. HB80、10. HB302、11. HB166、12. HB242

1 人骨 (4) 10 歲以前、10 代前半以前



1～3. 第5～7頸椎、4～15. 第1～12胸椎、16～19. 第1～4腰椎、
20. 仙骨、21尾骨、22. 寛骨 (R)

(1. HB516、2.HB518、3.HB517、4.HB508、5. HB505、6. HB504、7. HB507、
8. HB509、9. HB511、10. HB510、11. HB512、12. HB506、13. HB513、14. HB515、
15. HB514、16. HB522、17. HB519、18. HB521、19. HB520、20. HB523、21. HB524、
22. HB525)



1 人骨(6) 同一個体の椎骨・第1肋骨



HB135. 第7頸椎、HB131. 第1胸椎、HB132. 第2胸椎、HB133. 第3胸椎、HB134. 第4胸椎

2 人骨(7) 同一個体の椎骨

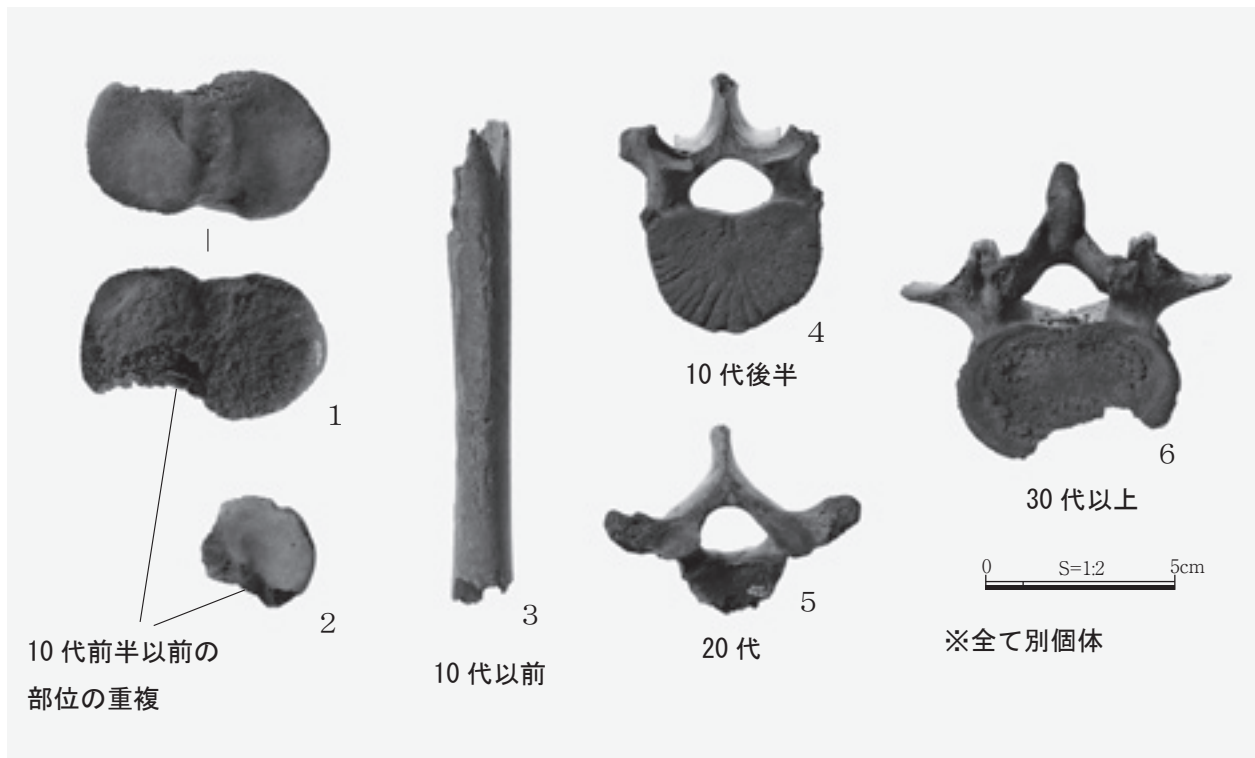


3 人骨(8) 同一個体の中手骨



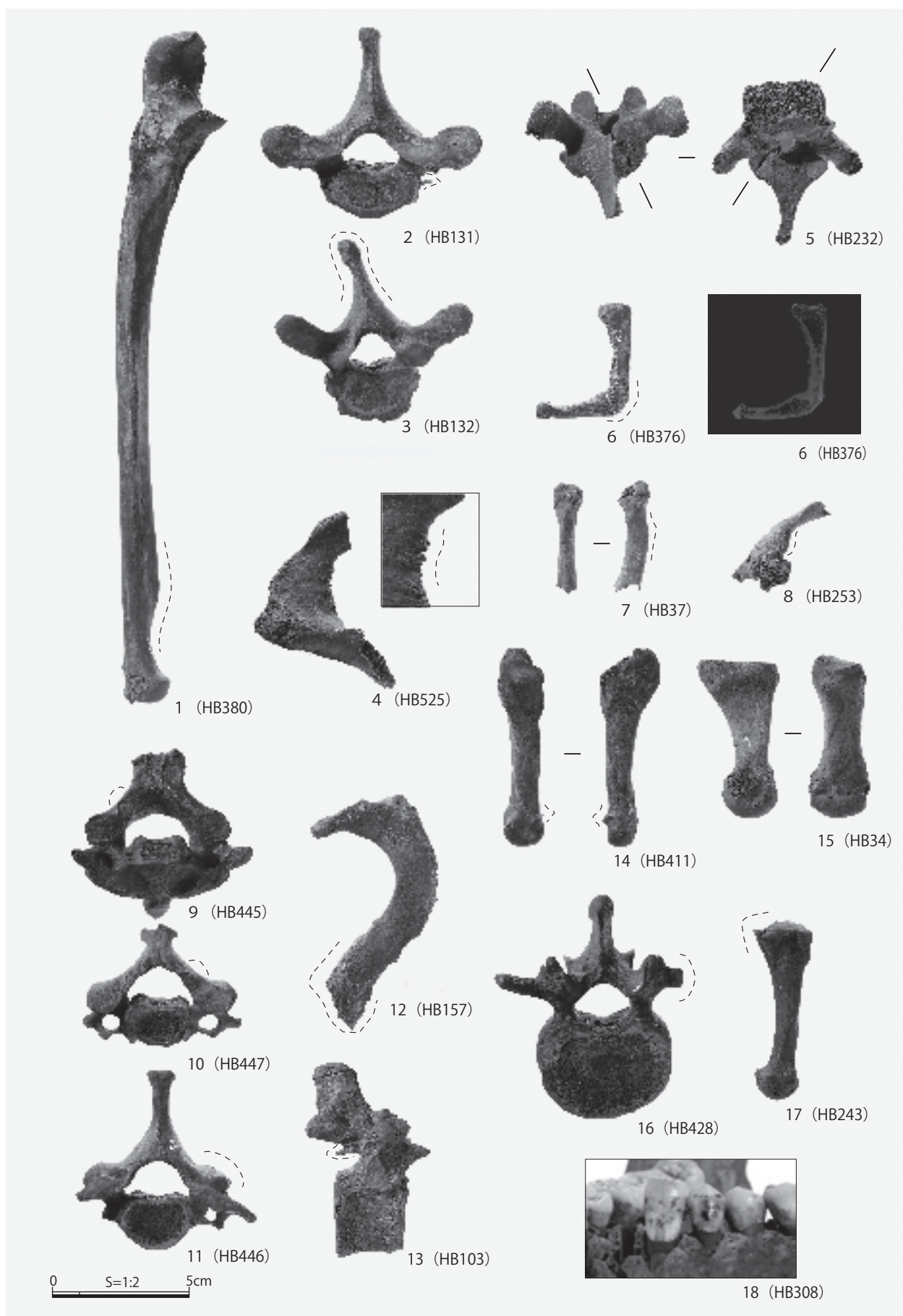
HB473・470・472・471. 第2～5中足骨（R）、HB561・560・559. 第2～4中足骨（L）、
HB534・535. 第2中足骨・立方骨（L）

1 人骨（9）同一個体の中足骨ほか

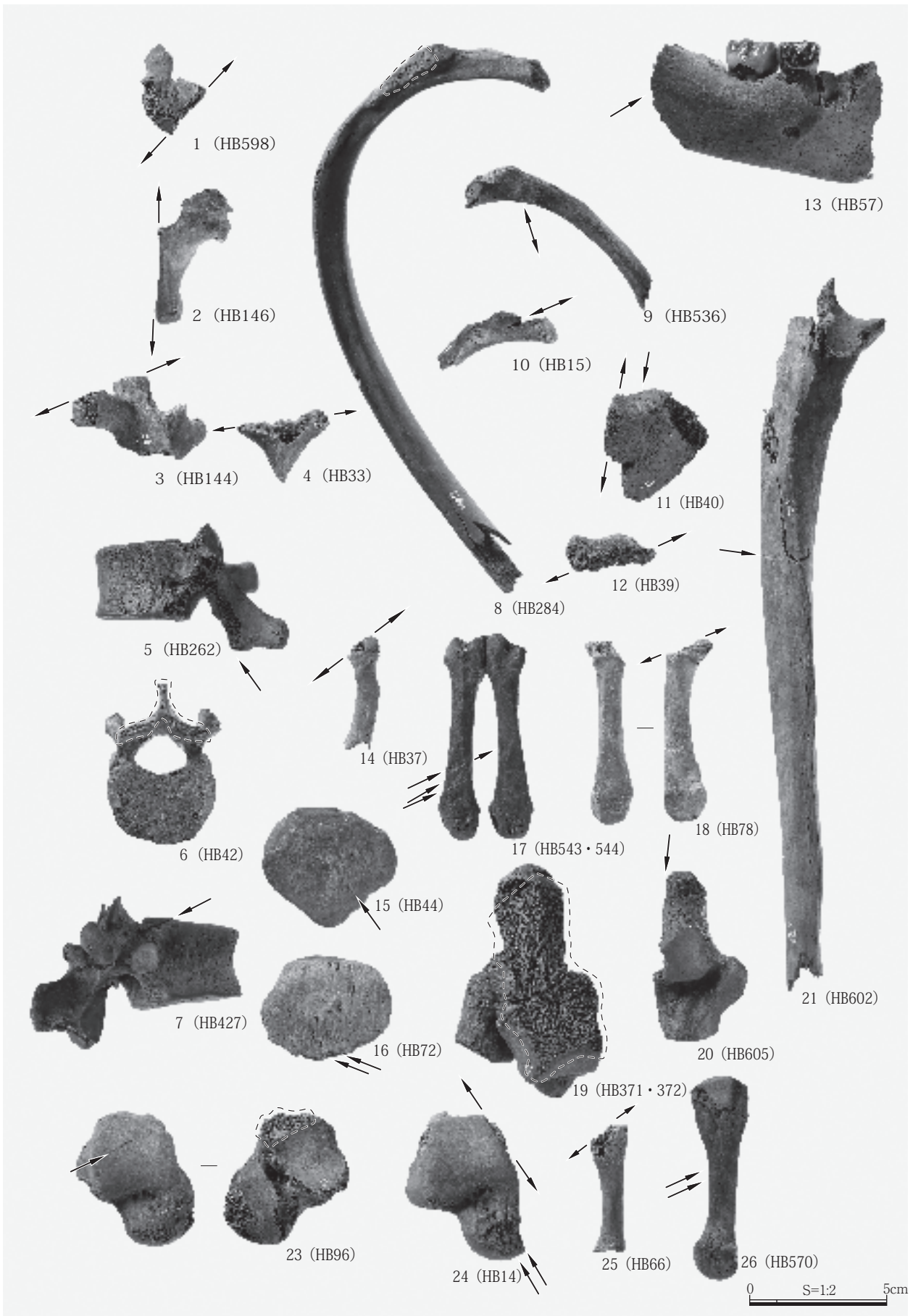


1・2. 脛骨（L）、3. 脛骨（R）、4. 腰椎、5. 第1胸椎、6. 腰椎
1. HB337、2. HB336、3. HB362、4. HB333、5. HB320、6. HB322

2 人骨（10）拡大範囲Gの最小個体数算定



1 人骨 (11) 病变人骨



1 人骨 (12) 受傷人骨

報告書抄録

ふりがな	あおやかみじちいせき じゅうはち								
書名	青谷上寺地遺跡 18								
副書名	第20次発掘調査報告書								
巻次	-								
シリーズ名	-								
シリーズ番号	-								
編著者名	門脇隆志、大田竜也、佐野雅規、寺井洋平、那須浩郎、濱田竜彦								
編集機関	鳥取県立青谷かみじち史跡公園								
所在地	〒689-0534 鳥取県鳥取市青谷町吉川17 Tel.0857-30-4110								
発行年月日	西暦2026年(令和8年)3月26日								
ふりがな	調査区名	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名		所在地	市町村	遺跡番号					
あおやかみじちいせき 青谷上寺地遺跡	第20次 発掘調査区	とっとりしあおやちようあおや 鳥取市青谷町青谷 4172-3、4180-5	31201	18-82	35° 30' 54"	133° 59' 37"	20220905 ~ 20231026	調査面 225㎡	遺跡中心域 東側縁辺部 の内容確認 調査
所収遺跡名	調査区名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
青谷上寺地遺跡	第20次 発掘調査区	集落跡	弥生時代後期～ 古墳時代前期前葉		区画溝、造成遺構、平地建物		弥生土器、土師器、木器、骨角器、 金属器、石器、人骨、動植物遺存体		
要旨	<p>第20次発掘調査は、集落東エリアの様相解明を主目的とした内容確認調査である。調査の結果、弥生時代後期以降、中心域のかさ上げや拡張を意図した造成が繰り返し行われたこと、古墳時代初頭までに区画溝が廃絶され、古墳時代前期前葉にはその上を拡張した造成土上に平地建物群が展開したことを確認した。これによって、弥生時代後期から古墳時代前期前葉に至る、造成と区画溝SD38を軸とした中心域東側縁辺部の変遷を捉えることができた。また、1次調査県道8区で見つかった弥生時代後期後葉に属する人骨群の北側延長部分を検出した。これら人骨の検討によって、これまで評価が定まっていなかった散乱した大量の人骨が、当時の葬送儀礼の結果形成されたことが明らかとなった。</p>								

青谷上寺地遺跡 18

第 20 次発掘調査報告書

発 行 令和 8 (2026) 年 3 月 26 日

編 集 鳥取県立青谷かみじち史跡公園

〒 689-0534 鳥取県鳥取市青谷町吉川 17

電話 (0857) 30-4110

印 刷 山本印刷株式会社